

---

**【コミカライズ発売！】ポーション工場に左遷された俺  
、エルフに拉致され砂漠の国の錬金術師となる～今さら  
戻れと言われても、美人姉妹（エルフ）が離してくれま  
せん～**

---

ふつうのにーちゃん@コミック・ポーション工場発売中

## 注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

### 【作品タイトル】

【コミカライズ発売！】ポーション工場に左遷された俺、エルフに拉致され砂漠の国の錬金術師となる〜今さら戻れと言われても、美人姉妹エルフが離してくれません〜

### 【Nコード】

N8992GT

### 【作者名】

ふつうのにーちゃん@コミック・ポーション工場発売中

### 【あらすじ】

【トーハン主催・新人発掘コンテスト 銀賞受賞作！】  
宮廷魔術師のユリウスは、平然と転移魔法を連発する天才中の天才だった。  
しかし戦争で濡れ衣を着せられて以来、現在はポーション工場の仕込みを手伝わされている。

そんな彼を、とあるエルフの姉妹が拉致したことで物語が動き出す。

「ククク……残念だったな、俺は錬金術師じゃない。ただの超エリート魔術師だ！」

「別に間違えてない……。これで、あの国のポーションは、ジ・エンド……」

彼女たちは言う。この国のポーションはユリウスあつての品質で、それを失った今や終わり。ユリウスこそが最も優れた錬金術師。だから拉致した。

どうかお願い、私たちを助けて、と。

かくして、砂漠の国シャンバラでの新生活が始まった。

エルフの長が嫁をくれると言うので、断り文句で選んだはずの、姉妹たちと共に。

2

仕込みの経験しかないというのに、ユリウスが作ったポーションはなんと試作早々に、完全回復薬エリクサーとなった。

その一方で母国では、ポーションが急激に劣化し、彼を冷遇した者たちにピンチが訪れようとしていた。

国への忠誠心は尽き果てた。オアシスと嫁が眩しくて、帰る気なんでもう起きない。

489万PV達成しました。 完結しました。 3日1回更新でこれからゆっくり続けてゆきます。

書籍化決定につき、最終章完結後も続いてゆきます。 書籍化によりタイトルを少し変更しました。この名前でお店に並びます。

双葉社アプリ、マンガがうがうで本作のコミカライズ版の連載が始まりました。

作画は「とだかづき」先生。丁寧に作られた良作コミカライズになっていますので、よければ読みに来て下さい。

2024・01・15 コミカライズ1巻発売！

・冤罪から始まる転落人生

順風満帆だった俺の人生に、冷たい向かい風が吹き荒れ始めたのは、あの虚飾と浪費を塗り固めた天幕での一件が発端だった。

外では将兵が秋風と止まない小雨に震えているというのに、將軍の天幕では魔術師のローブを脱ぎ捨てたくなるほどに薪たきぎが焚かれていて、今にして思えば、それが祖国の暗い運命を予言していた。

「後退しろだと!? 宮廷魔術師の分際で、王族の俺に意見するか  
!?!」

「立場は弁えているつもりです。ですがアリ王子、これは」

「黙れ、貴様の意見など聞いていない! 俺が追撃と言ったら、追撃なのだ!」

「いえ、我々が追っている部隊はまず間違はなく囿こまです。加えてここは夜の森、状況があまりに悪すぎます。もしこれ以上深追こまいすれば我々は」

「黙れと言っている! お前ら薄汚い魔術師どもは、コウモリみたいに偵察だけしていればいいのだ!」

俺の名前はユリウス、宮廷お抱えのエリート魔術師だ。

そして彼はアリ將軍。現国王の三男で、現在はツワイク王国第二軍を指揮する血の氣の多いヒステリー野郎だった。

「お言葉ですが、勝てる戦を台無しにするおつもりですか?」

「黙れ、王族である俺に意見するな!」

「聞いて下さい。今の貴方が見ているものは、敵が作り出した見せかけの功績です。この森の奥にあるものは、手柄ではなく、王族である貴方を狙った罠です」

「ええいつ、黙れ黙れ黙れっ！ お前がいるといたずらに士気が下がるではないか！ これは罠ではない、チャンスだ！」

彼の言葉に賛同して、取り巻きの佐官たちが『魔術師風情が……』と口々に陰口を漏らした。

宮廷で俺たち魔術師が嫌われているのは知っている。

だがこれは、俺たちがこの戦で生きるか死ぬかの瀬戸際だった。後になって考えればアリ王子に進言したのは大失敗だったとも思うが、かと言って、他に選択肢はなかったとも思っている。

「すみません、私は犬死にしたくないから言っているだけで、決して貴方の人格を否定するつもりは」

よっぽど気に入らなかったのか、アリ王子は怒り任せに黒檀のテーブルに拳を叩き付けた。

それでも怒りが収まらないのか、駒と地図まで弾き飛ばして、まるで蛮族のように歯茎をむき出しにする。

「もう辛抱ならんっ、宮廷魔術師ユリウス、貴様に帰国命令を下すっ！ さっさとこの戦場から消えろっ、うさん臭いコウモリ野郎がっ！」

その言葉に心より失望した。どうやら俺は王族をまだ買いかぶっていたらしい。

こちらが冷たい目で見つめ返すと、ヤツの剣が冷たい音を立てて

引き抜かれた。……戦場で味方に刃を向けるなんて、愚かにも限度がある。

「わかりました、そこまで言うなら仕方ありません。しかし、この後どうなっても知りませんよ……？ 敵は戦後の交渉のために、貴方の身柄を狙っていることを、どうかお忘れなく」

古くよりこの国では、魔術師が偏見の目で見られている。

それでも俺たちがいなければ立ち行かない局面があるからこそ、宮廷魔術師という崇高な役職がある。

偵察、伝令、破壊工作。今日まで俺がこの軍団の尻を拭ってきた。それを追い出すだなんて自殺行為だ。

「さつさと消える……。国に帰ったら、貴様を軍法会議にかけてやる！ せいぜい首を洗って待っているっ、クソ野郎ッ！」

「さて、その法廷ではどちらが被告側に立つのでしょうかね」

「思い上がるなよユリウスッ、王族であるこの俺に！ 二度と意見をするな！」

「だからこそです。貴方が本当に王族であると言っならば、敵に捕縛される前に、必ず自害なさって下さい」

「貴様アアツツ！！ ここで死ぬのはっ、貴様の方だっ！！」

「失礼、もう貴方には付き合い切れません」

あの天幕にあれ以上残れば、先にこっちの気がおかしくなっていたらだろっ。

戦争が始まってより、付きっきりで軍を支えていた宮廷魔術師は、天幕を飛び出すと星すら届かない寒空を見上げて、王都行きの中空

間を開いた。

これで汚れ仕事とはオサラバだ。

一緒に戦った将兵たちが心配にもなったが、そのときはまだ解放感の方が勝っていた。

・

その数刻後、ツワイク王国第2軍は、無謀な追撃のツケを支払わされることになった。

敵が使ったのは、数に劣る側がよくやる古典的戦術だ。

敗走をする味方を使って敵を深追いさせ、孤立したところを仕込んでおいた伏兵で包囲して叩く。

俺の忠告を聞いておけばよかったというのに、彼らはつまらないプライドと慎重さを秤はかりにかけた。

「あの壊滅は俺のせいだけではない！ あのコウモリ野郎が、宮廷魔術師ユリウスが敵前逃亡したせいだ！ 偵察役を失ったせいで、俺たちは敵の伏兵に気づけなかったんだ！ アイツが全部悪いんだ！ アイツのせいで俺は捕まったんだ！」  
「嘘吐けよ……」

しかし、勝手に自滅してくれるだけならまだよかったが、よりもよってアリ第三王子は戦後の軍法会議にて、責任を俺におっかぶせた。

証拠不足で有罪にはされなかったが、俺は出世の花道である正規



軍付から解任されてしまった。

そして左遷先というのが、このポジション工場だ……。俺はあの戦争から3年間、宮廷付のエリート魔術師様だったといふのに、今は錬金術師たちのために仕込みを手伝わされていた……。

【名前】 ユリウス・カサエル

【職業】 宮廷魔術師（左遷）

【スキル】

・魔法 LV 57 / 99

・転移術 LV 9 / 10

・錬金術 LV 80 / 99

調合効果 100倍

・処世術 ない

・冤罪から始まる転落人生（後書き）

宣伝

本日7/29！ 書籍版1巻発売します！

活動報告でも触れましたが、Kindleを除く主要な配信サイトでも、予約はかないままですが、発売日からの配信が間に合うことになりました！

どうか応援して下さい。

よりよい条件でコミカライズ化を獲得するためにも、皆様のご支援が必要です。

税込み1430円は安い品物とは言えませんが、だからこそそれだけの労力、190時間の改稿と、納得の書き下ろしをご用意しました。

1巻の売り上げが今後の展開に繋がります。応援して下さい！ もしよろしければ、購入をご検討下さい！

宣伝失礼しました！

### ・3 交代制ポーション工場

「ん、なんか倉庫の方にいるな……」

ぼんやりと胸くそ悪い過去に心を囚われていると、ふいに魔物素材の保管庫から『トトト……』と物音が響いた。

だが今は調合中だ。俺は目前のオーブに手をかけたまま、眼下で燐光する液体に集中した。

十数年前までは釜と杖で調合していたそうだが、今では錬金術の工業化が進んでいる。

杖はオーブに、釜は巨大な水槽となり、錬金術師は巨大工場の雇われ労働者に成り下がった。

「あーいる、絶対いるわ……。はあ、めんどくせー……」

ネズミが魔物素材を食い荒らしていつて、もしそれが際限なく成長していったらどうなるのだろうか。

安っぽいホラー小説みたいなことになる可能性も、まあなくもなさそうだった。

ああ、ここは何もかもが杜撰ちんせでたまらない……。不注意と杜撰こそが、全ての災難の源だというのに……。

「おい、ユリウスツ、いつまでかけてるんだよ、お前！」

「早くこっちに回せよ！ 定時に仕事が終わんねーだろがっ！」

ポーションの材料は水。そして強い生命力を持った迷宮由来の魔

物素材が原料だ。

それらをこの水槽に入れて、魔力でドロドロに溶かしたエッセンスを作る。それだけが今の俺の仕事だ。

「聞いてんのかよっ、ユリウスッ！」

「無視すんじゃねーよっ、出向のくせによー！」

それをこの錬金術師たちが、ある種の薬草などを添加して、回復薬としての指向性を与えて反応させた物がポーションだ。

ここでは200名を超える錬金術師が集められ、24時間の交代で工業的にポーションを作っていた。

「バカ言え、こりやまだ半生だ。こんなもん材料に使ったら、金をドブに捨てるようなもんだろ」

「ぶっ……おめー何言ってるんだよ？」

「バカじゃん。お前錬金術師でもないのによー、わかったような口利くんじゃねーよ、バカ」

「いちいち口の減らない連中だな……」

「いいから早くしろよっ、こっちはお前のせいで残業なんてお断りだからな！」

あまりの次元の低さに怒る気さえ起きなかった。

この手合いに反論しても帰ってくるのは屁理屈で、まともな会話にならないことを俺は知っている。

「断る。問題が起きたら俺の責任にされる」

そもそも工場全体の仕込みを、俺1人だけに押し付けるのが間違

いだろう。

俺がもし病欠でもしたら、こいつらはどうするつもりなのだろうか……。

「そんなことするわけねーだろ！」

「そうだそうだ、それにちよつとくらい回復量が低かったくらいで、バレやしないって！」

「バレるバレないの問題じゃないし、こっちはお前らに譲歩する気もない」

「クソツ……融通利かねーにもほどがあるぞ、おめーっ！」

この国には『グアンタ迷宮群』と呼ばれる富の坩堝くわんごがある。

一攫千金を夢見る冒険者たちがその迷宮を下り、このツワイク王国に財宝や資源をもたらす。

しかしそれは全滅せずに戻って来たらの話だ。

このポーションは言わば、迷宮探索という国家事業の歩留まり高めるための戦略物資だった。

要するに、少しの手抜きが方々の人間を困らせることになる。

「ちんたらやってんなつ、早くしろっ！」

「ダメだ。お前らこそ少しはプロ意識を持て。ポーションに粗悪品が混じったら、人が死ぬぞ」

「で、お前は錬金術師なのか？ 違うよなあ、ただの、左遷されてきたへボ魔術師だろ！」

無視だ、無視。

そこに触れられると本気でムカついてくるが、同じ土俵に立てば

もっとムカつくことを言われることになる。

多少落ちぶれようと、今だって俺は超スーパーエリートだ。  
こいつらとは絶対に同じ土俵には立ってやらん。

「へーぼっへーぼっ、宮廷から追い出されたへっぼこ野郎ーっ」

「アリ王子が言ってたぜ、あの戦争はお前のせいであっ、工場長！ 聞いて下さいよっ、ユリウスのやつが！」

いつから錬金術師は初等学校以下のアホになったのだろう……。そこにヘンリー工場長が見回りにやってきて、やつらは告げ口を始めた。

「ユリウスくん、今どれくらいだね？」

「進捗としては80%ほどです」

「では渡したまえ、工場長命令だ」

「正気ですか……」

「早くしろよっ、お前のせいでお前のラインが止まってんだよっ！」

工場長がその言葉に眉をひそめた。

それもそのはずだ。俺1人が仕込みを担当するこの配置は、この工場長が決めたことだった。

俺はヘンリー工場長の命令に従って、効果2割ダウンの約束されたエッセンスを完成させることにした。

水槽に大きなガラス瓶を次々と投げ入れて、オーブに強い魔力をかけて反応させた。

光と白い蒸気が発生して、頭上の換気扇がすぐにそれを巻き上げた。

錬金術師たちは水槽に土足で降りて、ガラス瓶を拾い上げる。

エッセンスの輝きはいつもよりも鈍く、ため息が出るほどに中途半端で雑な仕事だった。

「責任、取れませんかからね……」

「はっ、お前そればっかだよな」

「あばよ、へボ魔術師！」

彼らはそれぞれガラス瓶を抱えて去っていった。

仕事が終わったら女遊びをしようと、バカなことを語り合いながら……。

「あいつら、いつかへマしますよ……」

「かもしれない。だがユリウス、お前も正規軍や宮廷に戻りたいなら、もう少し賢くなることだ」

「そんなこと、言われなくとも自分が一番よくわかってますよ……」

口は災いの元だ。融通を利かせて、妥協を覚えることは必須の処世術だ。

あの日、アリ王子に進言をしなかったら、俺は彼の弱みを握る形で出世していたかもしれない。

「もし粗悪品だとクレームが来たら、どうするつもりですか？」

「そんなものどうとでもなる。お前は量産にだけ集中しろ」

「しかし、それでは冒険者たちの命が」

「ふむ……？ クズどもの代わりなど、掃いて捨てるほどいるだろう。我々が気にすることはない」

いや、クズはどっちだよ……。

少なくとも、ポーション工場の長が言っている言葉ではない。やはりこいつらは腐っていた。

「賢くなれ、ユリウス。仕込みしか能のないお前を使ってやっている恩を忘れるな」

「善処します」

そう素っ気なく答えると、でっぴりと太った彼がのしかかるように俺の肩を抱いた。

「ユリウス、私は君を助けたい」

「……どういう意味です」

「私の気持ち一つで、君が上に戻れるかどうかが決まるのだよ。立場と態度をよく考えておくことだ。……まあ、第2軍を半壊させた無能者を、他の現場が認めるかは、私にもわからんがね」

「ヘンリーさん、貴方は『一言も一言も余計』と言われたりはしませんか？」

「フフフ……せいぜいがんばりたまえ」

工場長はノルマのことしか眼中になく、錬金術師たちはいかに楽をして定時に帰るかしか考えていない。

近い将来、この工場で不祥事が発生するのがもっ見えていた。



・3交代制ポーション工場（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。執筆は精神的消耗が大きいので、皆様の評価が頑張りに変わります。

・ネズミだと思ったら……

材料が尽きたので、俺はカビ臭い保管庫を訪れた。

やはりネズミがいるようだ。人気はないが、俺が入室するなり微かな物音が聞こえた。

「ネズミの方が、人間様より良い生活してるんじゃないかな……」

ここのネズミは都市に住み着き、人から食べ物を盗むという進化をとげた生き物だ。言わば生まれながらの盗賊だ。

だからと言ってそれが悪かと言えば、きつとそうではないのだから。

栄えた街道に盗賊が根付くように、生きるすがすがそこに存在するからこそ、ネズミも盗賊もその地を荒らす。

「おいおい、勘弁してくれよ……」

しかしずいぶんとデカイネズミがいるようだ。

奥にある棚の1つがガタガタと揺れている。

ここでネズミを見逃したら、管理不行き届きとして、また責任をおつかぶされかねない。

ネズミは善でも悪でもないが、俺の仕事を妨害するお邪魔虫だ。可哀想だが消すしかない。

「悪く思つなよ、ネズミちゃん」

盗賊もネズミも、人の物をかすめ取る生き方を選んだ以上は恨みっこなしだ。

俺は片手で小さな亜空間を開いて、もう片手で棚を開いた。

「ちゅーちゅー……」

ところがそこにネズミはいなかった。

ネズミよりも遙かにでっかい女の子が、狭い棚の中になぜか住み着いていた。

「……へ？」

肌は健康的な褐色で、人間にしてはやけに長い耳が左右に伸びていて、おまけに

「パラライズ……!!」

「グハアツツ?!」

抱き抱えていた銀の杖をこちらに突き付けて、不意打ちの麻痺魔法を俺に放っていた。

何が起きたのかわからない。

このエリート魔術師ユリウスを一撃で麻痺させるなんて、この小娘はただ者ではない。

断じて、3年間のブランクに戦いの牙を抜かれたわけではない。

「たあいがない……。またつまらぬ者を、ピリピリさせて、しまった

……」  
「つま、ら……て、め……」

小さな彼女は俺を麻痺させるなり、どこから取り出したのやら大きな麻袋を開いた。

「あ、姉さん、ほら、大成功……。見た目通り、ちよろかった……」  
「ぐ、ぬ……」

そこに姉さんと呼ばれる女がやってきた。

2人は俺を麻袋へと押し込む。それはもう軽々と俺は梱包されてしまっていた。

「こつちも一通り確保出来たわ、撤収しましょ。隠密ハイドの術をお願い」  
「かしこまり」

……え？ これって、あれっ？ まさかこれって……拉致、拉致なのか！？

実行犯がのほほんとしているので、実感が持てなかったけれど、状況的にこれは拉致だよなっ！？

「だ、へ……や、め……」  
「拉致って……本当に、いいものですね……」  
「バカなこと言っていないで急ぎましょ」

麻袋に入れられた俺は、軽々と台車に乗せられて外へと運ばれた。それから馬車か何かに移されて

やがて麻痺が解けた頃には、既に国境の外に運ばれていたようだった……。

麻痺が解けてからはすぐに動かずに様子をつかがった。

姉の方が御者となり、妹の方が暗い馬車の中で俺を監視している。

「姉さん。意外と、異常耐性、高い……」

「あら、もう解けたの？」

「そうみたい……」

「ふふ、あたしたちがターゲットに選んだだけのことはあるわね」

ところがすぐに見破られていた……。

まずい。麻の繊維というのは粗いが強靱で、それに詰められては抜け出す方法がない。

得意の亜空間を開いて逃げようにも、俺をターゲットに選んだだけあって対策されてしまっているようだった。

「それにしても不思議ね。あの国の人はなんでこれほどの人材を、あんな微妙な現場になんか配置していたのかしら……」

「そうだね……。あ、それより、どうする、コレ……?」

コレとかゆーな。

どうものん気なので自信がなくなってきたが、こいつらは拉致の実行犯のはずだ。

しかしどうもわからないのだが、彼女たちから敵意や悪意を全くと言って感じられない。

今すぐパラライズの魔法をかけ直せばいいのに、彼女たちは平然

としていた。

そろそろ俺も動けない振りを止めて、まずは抗議から始めてみよう。

「俺はエリートだぞっ、何が目的か知らんがここから出せ!」

どうやっても計算上は出れないことくらいわかっていたが、それでも暴れてみた。

亜空間の扉も、炎の魔法も謎の力にキャンセルされていた。

「どうする、姉さん……?」

「そうね、馬車を止めるから制圧しておいて」

「りょー」

「え、ちよつと待てっ、制圧って何をする気　ウゴアツツ?!」

麻袋の中で暴れていると、腹に女が飛び乗った。

妹の方はやはり小柄で軽く、だが腹筋を絞めていない腹部には十分な破壊力だった。

「暴れない、騒がないと約束して……。でないと、私はマウントからの一方的な、暴行に出ます……」

「ゲホツゲホツ……こ、この野郎……。俺は超スーパーエリート宮廷魔術師なんだぞっ!」

「違う。ただの、左遷された、惨めな男、ユリウス……」  
「ゲハツ!」

魔力をとまわらない精神攻撃に、俺は抵抗のすべを失った……。

「今や、エリートとは、ほど遠い……。それでも、過去の栄光にすがれるしかない、あなたの姿は……。フ、フフ、素敵……。芸術的価値を感じるくらい、素敵……。」

俺を拉致した小さい方は、俺に馬乗りになつたまま、声を上擦らせて人の不幸に愉悦の声を上げた。

これはだいぶ、独特の感性をお持ちのようだ……。

「止めなさい、メイプル、そういうのは可哀想でしょ」  
「だって……。」

「だってじゃありません。人の不幸に興奮するなんて、そんなのはしたくないですよ」

「違う……。私はただ、人の苦しそうな顔を見るのが、大好きなだけ……。」

つまり、真性のサディストってことじゃね……？

俺はとんでもない相手に捕まってしまったようだ。

まさか趣味で拷問とか始めたりしないよな、この変な女……？

・ネズミだと思ったら……（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。



・美人エルフ姉妹に拉致された

「いいわ、出してあげましょ」  
「うん」

心の傷に塩を塗られて我を失っていると、馬車が止まっっていて、相次いで俺を覆っていた麻袋が取り外されることになった。

知らないうちに、俺の腕に銀色のブレスレットがはめられている。知っている。これは魔法を封じる沈黙の腕輪で、囚人が付けるやつだった。

続いて腕から顔を上げると、ホロ馬車の車内にエルフ族が2人いた。

どちらも褐色の肌だ。妹の方はプラチナ、姉の方はブロンドで、一般的に知られる白いエルフとはどうやら別物だった。

姉の方は凜としていて、妹の方はぼんやりとしている雰囲気だ。

「質問、ある……?」

それと姉は腰に細剣を吊している。

その剣には手をかけていなかったが、いつでも抜けるように直立していた。

「お前ら誰? これってまさか拉致? てか、なんで俺なんか攫うんだよつ、狙う相手おかしいだろ!? それにだな! 俺はまだエリートだつ、まだ気持ちの上では落ちぶれてねーからっ!!」

姉妹は少し距離を取ってから、互いに向かい合ってこそこそと密談を始めた。

どちらも全身を覆うマントを身に付けていて、その下はツワイク王国の人間から見るとかなりの薄着だ。

肉感的なふとももがチラチラと見えた……。

「この子はメイプル。あたしはシエラハゾ。ざっくり言えば産業スパイよ」

「これは、拉致です。ユリウスの大正解、パチパチパチ……」

ポーション工場に現れて、そこに勤める人間をさらった時点でそんなことはわかっていた。

しかしこれまで抱いてきたスパイのイメージと、あまりにかけ離れていたのも、やはり実感というものに欠けていた。

「あなた信じてないでしょ……。ほら、これが証拠よ」

「証拠？ う、うわっ、よりもよってそれを盗んだのか……。工場長もこりゃ、可哀想に……」

姉のシエラハゾが紙の資料と共に、工場で使うオーブを2つも見せてくれた。

あのオーブ一つで、でかい家が3軒建つと聞いたことがあるぞ……。

「あのね……ユリウスを苛めた、あの悪い同僚さんから……盗んどいた……」

「マジかよ、お前かわいい見た目してやるじゃん」

「お前じゃない、メイプルだよ……?」

「メイプルか。メイプルって割に、口がとんでもなく辛口だな」

「はぁ……。腐るほど、同じこと、言われる……」

普通ならば、身勝手な所行の数々に怒るところなのかもしれない。けれど俺は笑ってしまった。人の不幸は蜜の味だと、これは認める他にない。

「それにしても産業スパイか……。外見からはそうは見えないな」  
「当然よ。スパイとわかる姿で動くスパイがいるわけないでしょ」

しかしそのスパイは詰めが甘い。

「まあとにかくお前らは、ツワイク王国のポーション技術を盗もつとしたと」

「そう……」

「ククク……これはお笑い草だ！」

「なんで……?」

「なんでも何も残念だったな、俺は錬金術師じゃない！ ただの超  
スーパーエリート宮廷魔術師様だっ！」

こっちが勝ち誇ってやったのに、メイプルは綺麗な銀髪を揺らし  
て首を傾げるだけだった。

さらに姉の方を見上げて、『しまった、間違った人間を拉致して  
しまった!』みたいな様子は全く見て取れない。

「別に間違えてない、よ……?」

「そうよ。あたしたちは1ヶ月前からみっちりあの工場に張り付いて、一番優秀な錬金術師が誰か探ったの。それがユリウス・カサエル、あなただったのよ」

「フフフ……　これで、あの国のポーション事業は、ジ・エンド……」

想像するだけで愉悦が抑えきれないらしく、メープルは苦しげに己の胸を押さえた。

ホント、変なやつ……。

「いやだから、その判断はおかしいだろ。俺は仕込みしかしてない下っ端だぞ……」

「ええ、私たちも最初はそう思ったわ。ただのミソツカスかと思ってたもの」

「ひ、酷いこと言うなよ……。ミソツカスじゃねーし、エ、エリートだし……」

「フフ……いい顔……」

「よしなさい、メープル」

姉は座り込んでいる妹の肩に、やさしく手のひらを置いた。

そうやって甘やかすから、歪んだ性癖そのままに突っ走るのではないのだろうか……。

「……だけど本当よ。あの工場を支えていたのは本当にあなたなの。あなたのあまりにハイレベル過ぎる力が、あの工場を陰から支えていたの」

「話が噛み合わねーな……。まあ一旦そこはいい。それで、俺はどこに連れて行かれるんだ？」

魔法を封じられた現状では、抵抗は無意味だ。従う他にない。  
というよりもだ、こいつらの破壊工作（窃盗）で、あのクソムカ  
つく工場は大打撃を受けるとなると　むしろもつと応援してやり  
たくなってきた。

「行き先は、デザート・ウオーカー砂漠エルフの国、シャンバラ……。オアシスがね、綺  
麗……。ユリウスに、オアシスのキラキラ、早く見せたい……」  
「強引な手を使ったのは謝るわ。でも決して悪いようにはしないか  
ら、信じてくれないかしら……？」

俺がちよっと大げさに考える素振りを見せると、2人は緊張した  
面持ちでこちらをうかがった。

やっぱりスパイらしくない。スパイってというのは、もっと手段を  
選ばないだろう。

「さて、どうするかな」

「聞いて。シャンバラの都市長は、あなたのために錬金術の工房と、  
貴方を補佐するエルフを妻として与えると言っているわ。あたしか  
ら言わせると、あんな安月給の工場で働くより、ずっと良い暮らし  
よー」

シエラハゾは俺の境遇に憤慨してくれた。

それも計算のうちなのかもしれないが、だとしても悪い気はしな  
い。

「ずっと、見てた……。元エリートとは思えない……。悲しき、没落  
人生……」

妹の方は、その……方向性はともあれ、ずっと注目してくれてい

たのは間違いない……。

「だから止めるよ、そういうのっ!? 俺は確かに落ちぶれたが、心はまだ超スーパーエリートだっ! あのどん底から、フェニックスの如く這い上がる予定だったんだよっ!」

「フフ……」

「てめっ、笑うなよっ?!」

身体は小さいのに姉より妹の方が妖艶だった。

人間から見ると、砂漠デザート・ウオーカーエルフとやらはあまりに美しく、そして笑顔が愛らしかった。

……まあ、コイツに限っては美的感覚がやや歪んでいたが。

「メープルが引っかけ回してごめんなさい。詳しい話は都市長がしてくれるわ」

「そして断るにしても……、応じるにしても……、シャンバラまでは、ソレの中……」

メープルの細い腕、細い指が麻袋に向けられた。

和気あいあいと話していたのに、俺は横暴な処遇に固まってしまった。

「ぷ、ぷじゃけるなあっ! スーパーエリートはあんな物には入ら

んっ! 全力でお断りしま あ……?」

「おやすみ、ユリウス……」

どうやらこの銀の腕輪は、魔術師の魔法耐性すらも奪うものだった。

俺は美少女産業スパイ（コテコテ感）にスリープの魔法をかけられ、その長く美しい稜線を描く耳を見つめながら、耐え難い誘惑に屈服して、甘き眠りへと落ちていった。

・美人エルフ姉妹に拉致された（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。  
ハイファンタジージャンルは、支援がないとなかなか浮上できないので、切実です！



・ シャンバラへようこそ

それからどれだけ果てのない夢を見続けただろうか。

強制的な眠りは対象の覚醒を許さず、俺は長い長い夢の牢獄に囚われていた。

メープルとシエラハズはシャンバラという名前を出していたが、ツウィク王国の近辺にそんな地名はない。

隣国のそのまた隣国の隣国くらいになると、ほとんど知る必要もない別世界で、砂漠で暮らしているエルフがいることすら俺は今まで知らなかった。

砂漠は砂で覆われた灼熱の土地で、オアシスはそこに存在する湖を指す。

俺は夢の中で、実物をこの目で見る日を楽しみにしていた。

・

「起きて……起きないと、酷いこと、するよ……？ お嬢さんに、なれなくなるくらい、酷いことしても、いい……？」

起きなければならぬ。

起きなければ非常に危険だと、俺は覚めるはずのない意識を覚醒させて、目を見開いた。

すると俺は、とんでもなくかわいい女の子に頬をぺちぺちと叩かれていた。

その肌は健康的な小麦色で、耳は長く尖り、表情はどうしてか残念そうだった。

「あれ、ここは……」

「残念……。これから、尊厳の破壊と、蹂躪が始まるどころ、だったのに……」

ふかふかのベッドと枕が俺をやさしく受け止めている。

寒冷なツワイク王国とは別世界のカラッとした陽気と、必要もないのにマウントポジションを取るメープルさえいなければ、爽やかな目覚めだっただろう。

「お前、夢じゃなかったんだな……」

「残念、これは現実です……。都市長、ユリウス起きた……」

ベッドから身を起こすと、俺は白い部屋の中にいた。

しかもこれはとんでもなく上等なベッドだ。

都市長と呼ばれた男はこれもエルフで、しかしエルフなのに初老の風貌を持っていた。

姉のシエラハゾと言葉を交わしていた彼が、ベッドサイドに立つ。

「ああそのまま構いません。ようこそ、シャンバラへ。旅は楽しめましたかな？」

「楽しむも何も、ずだ袋の中でずっと寝かされてたつての……」

「それは手荒なことをしてしまい、申し訳ありません。……これ、ダメでしょう、シエラハゾ」

「だってもし逃げられたら困るもの。本気の彼とぶつかったら、あたしたちじゃ手に負えないわ」

その言葉に自分の腕を確認すると、あの銀のブレスレットが消えていた。

その気になれば俺は亜空間を開いて、今すぐここから逃亡することが出来る。

だが、逃げるにしたってどこに行けばいい。

本国ではきつと、俺が産業スパイと結託して盗みを働いて逃げたと思われる。

「お前らはやってることと、言ってることが矛盾しているような気もするが……。ま、今はまともな待遇にホッとしている」

俺は手首を撫でて、魔封じからの開放感に息を吐いた。

「私は、あのまま、ユリウスを監禁したかった……。自由と栄光を求めて、苦しむ姿が、見たい……」

「お前は何を言っているんだ……。ほらどけ、人前ではしたないぞ」

そうしていると、都市長がパンパンと手を叩く。

すると部屋の扉が開かれて、次から次へとエルフの女性たちがなだれ込んできた。

そこまではまだよしとして、女性たちがベッドの俺を取り囲んだのがいただけない。

その全てが美女、美少女、人目を引く魅力を持っていた点もなお悪かった。

「どの子がよろしいですか？」

「……はっ？」

「おや、聞かされていませんでしたか？」

「話した……ユリウスが、寝ぼけてるだけ……」

離れようとしないお子ちゃまのパージを諦めて、俺は新たな異常事態に渋い顔を固定させた。

「ユリウスさん」

「あ、はい……？」

エルフのお爺さんに手を取られて、真摯な目を送られた。

「貴方に錬金術工房と、恵まれた生活と、エルフの中でも取り分け賢く、美しい者を妻として差し上げます。さ、どうぞ好きな娘を選んで下さい」

「真顔で何言ってるんですか、都市長さん。これって、人身売買スレスレの案件じゃないですか……」

「おや、気にされますか？」

「気にするに決まっていますよっ！？」

呼び出されたエルフたちは言葉を発さない。

中には白い肌のエルフも混じっていて、眺めているだけでついつい浮ついた気分にもなってくる。

しかしその中には人間との婚姻をマジで嫌がっているような、不快そうな素振りの子もちらほらといたので、俺は正気に戻った。

「……あのさ」  
「ッッ……！」

メーブルをひっくり返してベッドサイドに立ち上がり、俺は気まぐれの不意打ちで都市長へと詰め寄った。

その途端にメーブルとシエラハゾが間に飛び込んで来て、自分たちのリーダーに何をするんだと必死の形相で俺を睨んだ。

これで向こうのペースを少しはかき乱せたらろう。

「悪いですが都市長、俺は錬金術師じゃない、宮廷魔術師です。確かにあの工場で仕込みは手伝っていましたが、ポジションなんて1本も作ったことがない」

「存じております。ですがこの姉妹がしくじるはずがありません」

「それはまた、ずいぶんとこの2人を信頼しているようですね」

「へへ……」

都市長はメーブルにまるで父親のようにやさしく微笑んだ。

しかしすぐにその顔色からやわらかさが消え、鋭く真剣な面持ちがこちらに振り返る。

「私たちは今、優秀な錬金術師を欲しております」

「そうみたいだな」

「ユリウスさん、私はこれからとても大切なことを伝えます。実は、ここシャンバラの、地下に　新……たな巨大迷宮群が発見されました」

その一言が彼の切り札であり本題だった。

否応なしに俺は絶句させられて、その言葉がもしも真実だった場

合の可能性を想像した。

「へえ、それが本当なら、巨大金山を掘り当てたようなものですね……。いや金山どころじゃない、とんでもないことです。事実上これは、ツワイク王国の独占事業に、殴り込みをかけるようなものですね」

「おお……さすがはユリウスさん、わかって下さいますか」

俺が失脚するきっかけになったあの戦争も、元はといえば東西の隣国同士が手を結んで、俺たちから迷宮を奪い取るうとしたのが始まりだった。

国家が戦争を辞さないほどの、とてつもない価値が迷宮にはある。

……まあ、そこは迷宮群の質と規模にもよるが。

「わかります。それが事実ならば、シャンバラには適切な対処が必要です。俺の祖国は3年前に戦争をふっかけられましたが、原因は迷宮がもたらす富でした」

姉妹が緊張に口を横に引き結んだ。

産業スパイを放つても、ポーシヨンの技術を盗もうとした彼らの内情がそれだけでわかった。

「はい……。そこで私たちは、貴方をお願いがあるのです。ユリウスさん、どうか貴方のお力で、ポーシヨンを極秘裏に製造してはくれないでしょうか？」

迷宮にはポーシヨンが必須だ。回復魔法を頼るという手段もあるが、それだけでは長期の探索は不可能だ。

より深い階層に眠る、黄金にも等しい財宝を得るには、ポーシヨ

ンという消耗品が要る。

死傷者が大量に出るようでは採算が合わない。

幸い、ポーシオンは迷宮からドロップした素材から作ることが出来る。

だからこいつらは錬金術師を手に入れようとした。

この地に迷宮があるとツワイク王国がもしも知れば、ポーシオンの輸出を制限するに決まっているからだ。

「お願い、ユリウス……。私たちは……。もっと、力が必要な……」

「乱暴な方法に出たことは謝るわ。けどお願い、あたしたちに、どうかユリウスの力を貸して……。お願い……」

「私からもお願いします。我らデザート・ウォーカーにチャンスを下さい。この中から、何人選んでも構いませんので」

それは将来への希望に満ちた、大事業への誘いだっただ。

これからこの国にゴールドラッシュならぬ、ラビリンスラッシュが訪れる。大きな変革の始まりだ。

「ポーシオンを一本も作ったことのない男に、お前たちは未来を託すのか？」

頼る相手を間違えている、という一点はやはり揺るがなかったが……。

「はい。私の目から見ても、貴方は極めて高い魔力を持った優秀な男です。報告通りならば頭も良い。それに善良で、とても仕事に対して誠実です。貴方は目先の富よりも大切な物があることを、よく知っておられます」

メーブルとシエラハゾに流し目を向けると、小さい方は微笑んで、大きい方は信頼するようにお堅くうなずいた。

俺がたびたび工場長や錬金術師ともめていたのを、彼女たちはどこから見ていたのかもしれない。

俺はたまたま選ばれたのではなく、彼女たちに信頼されたからこそ、今ここにいるようだった。

「……だつたら嫁はいらない」

「貰っていたきます。どちらにしろ、貴方を補佐する人間が必要です」

「……そうか、それだつたらこの2人をくれ」

やられっぱなしはムカつくので、俺は彼の貴重な手駒を指さした。シエラハゾは目を見開いて驚き、メーブルは思春期の少女みたいに声を上げて、恥じらいと動揺に視線をそらした。

「えっ……？ え、えええーっ?!」

「そ、それは……こま、困る……。超……。困りまくりの、超展開、キタコレ……。あ、あうう……」

俺に渡せない人材なのはわかってる。

都市長と彼女たちが深い絆で結ばれているのは、さっき俺の前を塞いだ時点で答えが出ていた。

「そういうことで嫁はいらん。それよりも工房とやらに案内してくれ。俺は錬金術師ではないが、エリートだ。超スーパーエリートに出来ないことはない!」



気づけば敬語を忘れていたが、まあこの流れならいいだろう。すると彼らは3人して俺から距離を取って、ヒソヒソ話を始めたようだった。

エルフというのは、こういうヒソヒソ話が好きなのか……？

「決心が付いたら、私の元に来なさい」

「お、お姉ちゃんなら、わかる……。でも、私まで、選ぶなんて……信じがたい、ロリコン野郎……」

「し、姉妹ともども、かかか、覚悟が付いたら……かな、必ず……」

こいつら正気か……？

自分の人生がかかっているのに、なぜそっとう判断になる……？

「ああ、ユリウスさん。この期に及んで発言の撤回には応じられませんが。もう冗談では済みません。貴方は2人の女性にプロポーズをしたのです。今さらなかっただなんて、言わせません」

「んなのムチャクチャだろ！？ こっちは手伝うって言うてんだろっ、いちいち重いわお前らっ！」

「これは必要な手続きです。貴方ほどの実力者を、私たちは逃がす気などありません。最も重い契約が必要なのです」

「ツツ」

「これは、新感覚……。あ……私、今、ドキドキ、してる……」

目が合うだけで姉妹は別人のように恥じらい、生娘という言葉が脳裏に浮かび上がった。

2人が魅力的な女性なのは認める。

夢にまで見たエルフ、しかも姉妹、それがまとめて俺の嫁になるとか、訳の分からんことを言っている。

「その話は後だな。先に工房へと案内してくれ」

「メープル、シエラハゾ。以降の任は解きます。お嫌でなければ、今日からは彼を補佐してやって下さい」

「よ、ロリコン……」

「お前、姉より肝が据わってるな……」

恥じらいに下がる2対のエルフ耳は、勝手な婚姻に満更でもない感情を抱いてることを代弁していた。

もちろん、突然のことに戸惑っているだろうし、出会ったばかりの俺に恋愛感情を持つわけもない。

片方は愛らしく、もう片方は美しい砂漠エルフの姉妹が、そわそわと流し目を送ってくるこの状況は、まるでレモンの砂糖漬けのように甘かった。

・シャンバラへようこそ（後書き）

明日も2回更新する予定です。

もし気に入って下さったら、評価をいただけると嬉しいです。

またTwitter上で、姉妹のミニキャラを使った宣伝を行っています。

もし興味が出たら見に来て下さい。

## ・シャンバラという名の交易国家

都市長にはやり込められてしまったが、それを抜きにしてもこれは男の胸を熱くさせる大プロジェクトだった。

戦争の原因は迷宮で、俺を工場に3年も封じ込めたのはポーション産業だ。

ポーションの量産化と、ツワイク王国の独占事業である迷宮産業を、もしもこの地で興せれば、世界が大きく変わることになる。

俺がこれからすることは祖国への裏切りそのものだが、しかしその祖国は俺を守ってはくれなかった。

だったら俺には技術を売る権利がある。

祖国の利益なんてもう知ったことか。これから俺は、お前らの経済をぶっ壊してやる。と決めた。

「すみません、ユリウスさん。夕方まで工房に行くのは待っていただけですかな？」

そう密かに歪んだ情熱を燃え上がらせていると、都市長の隣に賢そうな男エルフが報告に現れて、俺のやる気に水を差した。

「なんでだ？」

「その、お恥ずかしい話なのですが……。先ほど、改装工事の手抜きが見つかったと……。」

「別にそんなもの気にしないぞ。壁や天井に穴でも空いていない限りな」

「……はい、突貫工事で補修させております」

「ちょっと待ってくれ、本当に空いてたのか……？」

いや大丈夫か、その工房……？」

嫁さん押し付けるよりも先に、やるべきことがあるだろう。と言  
うのはさすがに嫌みだろうな。

「先にシャンバラの視察をされてはどうでしょうか」

「……隙を突いて逃げるかもしれないぞ？」

「いいえ、その心配は全くしておりません。……メープル、町案内  
をお願いします」

「いいけど……お姉ちゃんは……？」

「シエラハズは工房の方をお願いします」

「了解したわ。メープル、あんまりユリウスをいじめちゃダメよ？」

「ん……」

イエスでもノーでもない返答に一抹の不安を覚えた。

なんでこの娘は、俺なんかをチクチクと突っついては反応に喜ぶ  
のだろうか……。

全くわからん……。

主導権を握るのもかねて、俺は足早に部屋から廊下に出た。

「え……何、ここ……」

「シャンバラ。これが、私たちの国……シャンバラだよ」

市長邸のエントランスを抜けるとそこは異世界だった。

文化の違いは邸宅の様式で既に感じていたが、外の自然までもがあまりに異質で、俺は驚きに立ち尽くしてしまっていた。

「どうかしたの……?」

「どっ、ここ……」

「シャンバラってもう言った。ユリウスは、ボケ老人……?」

「いちいち毒舌を吐くなよ……」

祖国では冬に入ると雪が積もる。

彼方を見れば青い山々が見え、町や開拓地を離れると森と草原に覆われていた。

しかしシャンバラは暑く乾燥している。

どの方角を見回しても山が一つも見あたらず、左手には青く輝くオアシスが広がっていた。

しかもその青色はまるでアクアマリンのように澄んでいて、キラキラと強烈な日差しを受けて輝き、乾いた世界に湿った水の匂いを甘く香らせる。……その世界は美しかった。

「ね、綺麗……? 私たちのシャンバラ、気に入った……?」

「気に入ったというより、驚いた……」

世界が乾いているせい、雲が少なく空が高い。

彼方までクツキリと世界が見えるのは、明るい日差しもあるが水

蒸気が少ないせいだろうか。

いや、というよりも

「熱っ、なんだよこの日差しっ!？」

「だって、そんな格好してるから……」

宮廷魔術師のローブは真っ黒に染められている。

これは隠密行動にもってこいの色なのだが、このシャンバラではポータブル蒸し風呂装置だった。

「あ、それ……脱がない方がいいよ……。この時間、日差し強いから……」

「すげーところで暮らしてるな、お前ら……」

「もう少ししたら、ちょうどよくなる……。じゃ、まずは服、探す……?」

「頼む。このままじゃ錬金術師に転職する前に、エリートの蒸し焼きになる……」

「……暑い?」

「暑いっていうか熱いよ……!」

「……苦しい? どれくらい、苦しい? ハアハア……」

銀色で小麦色のロリエルフが甘く呼吸を乱しながら人の顔を見上げてくるので、こっちは彼女をすり抜けて歩き出した。

なんでもいいから早く着替えたい。

「ユリウス……やっぱり、バザー行くの、止めて、マラソンしない

「……？」

「死ぬっての！」

「フフ……。ユリウスって、やっぱり面白いね……」

「いや、お前には負けるよ……」

2人で並んで、俺たちはオアシスを離れて街の奥へと進んでいった。



・シャンバラという名の交易国家（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。

・金貨11枚の買い物

オアシスを離れたのに、砂漠を進むと別のオアシスが現れて、その周囲にバザー街がひしめいているのが見えた。

「オアシスって1つじゃないんだな……」  
「いくつもあるよ……」

「具体的にいくつだ？」  
「ん……いっぱい」

「そうか、いっぱいか」  
「うん、いっぱい……。これからは、いっぱい、苦しい顔、見せてね……？」

コイツには会話の脈絡つてものがないらしい。  
後ろ歩きになって、彼女は天使の笑顔を浮かべながら甘えるように首をかしげた。

「お前さ、歳いくつ？」  
「17……だっけ？」

そうは見えない。てっきり14歳くらいかと思っていた。

「自分の年齢だろがっ！ あー、俺は23だ」  
「あ……。つまり、客観的に見て……ユリウスは、真正正銘の、口リコン……？」

「それよか早く服屋に案内してくれ……。マジで死んじゃう……」  
「死んだら困る……」

しばらく飛びがちな会話をラリーさせると、バザー街に到着した。ゴミゴミとしているが、明るく陽気で活気のあるバザーだ。

奥を見やればどこまでも店が続いて、それは交易都市と名乗るだけはある光景だった。

「いつもこんなに人が集まるのか？」

「へへ……凄い……？」

「ああ、凄い。それに面白そうな街だ」

「えへへへ……そう言われると、嬉しい、かも……」

地元に誇りを持てるのは良いことだ。

素直にメープルへと笑い返して、俺は往来を歩きながら露店を見て回った。

「あんだ、ヒューマンか？」

「へー、珍しい。どこから来たんだよ？」

すると露店の店主2人から声をかけられた。

周囲の連中も俺が気になっていたようで、注目が集まった。

「ツワイク王国だ」

「おおつ、あのポジションと迷宮素材の国か！」

「あんな遠くからよく来たなあ……。そうだ、これ持ってけ、これから鼻屑にしてくれな！」

「あ、ああ……落ち着いたらまた来るよ」

見たこともない真っ赤な果実を貰った。  
リンゴよりやわらかく熟していて、爽やかな甘い匂いがする。

かじってみると、酸味が強かったが、それが気にならなくなるほどに甘かった。

店を見回せば見たことのない果実ばかりだ。

「半分食うか？」

「え……？」

「いらぬならいいぞ」

「あ……えと、でも……。いる……食べる……」

食べかけの実を渡すと、メープルはしばらくおとなしくなった。  
感激に言葉を失うほどだったようだ。

「何見てるニヤ？」

「何って、猫……？」

「猫じゃないニヤ。僕たちはネコヒトニヤ、ヒューマンさん」

砂漠エルフの中に、直立歩行をするでかい猫がいた。

彼らはやわらかな体毛に覆われていて、背丈は俺の胸くらいまでしかない。

「へー……初めて見た。あ、それ買うよ。ツワイクの銀貨って使えるか？」

「ほんとは困るけど、しょうがないニヤ。それで勘弁してやるニヤ」

「悪いな」

「ツワイクのヒューマンと会ったって、自慢に使わせてもらつニヤ」  
ツワイク銀貨と引き替えて、豚串を2本受け取って店を離れる。  
ところがメーブルはまだあの果実に口を付けていなかった。

「嫌いなのか？」

「え……あ……違う……。まだ、勇気が、出なくて……」

「だったらこの肉と交換するか？」

「貰うけど、絶対返さない……。んっ……」

メーブルの小さな口が果実をがつついた。

酸っぱいのによくあんな勢いで食べられるものだ。

最後に彼女は種を吐き出して、俺と一緒に豚串をほおばった。  
美味い。香ばしい肉にがつくと元気が出てくる。

「なあ、アレなんだ？」

「有角種。とても賢い……。あむあむ……」

エルフが8割、獣人ネコヒトが2割、額に角のある種族も今一人  
見つけた。

ますます別世界に迷い込んだような気分になっていた。

「あ、そこ曲がって、すぐ……」

「やっとか……」

案内通りに道を曲がると、バザーではなく土壁で作られた店舗が

あつた。

扱う物の性質上、屋根や保管場所が必要なのだろう。

「わかつちやいたが、だいぶ異国風オリエンタルだな……」

「男なら、トーガとマントが無難……。ちなみに、トーガは、パンツをはかない……」

「マ、マジか……」

「うん、ウソぴよん……」

「外国人からかって楽しいかよ、お前っ!？」

「すごく、楽しい……」

幸せの匂いのする笑顔が返ってきたので目をそらして、俺は気になった服に手をかけてゆく。

トーガはともかく、マントはどれもいい感じだ。

見てゆくとどうやら、生地が白ければ白いほど高級なようだ。

染料でオリーブ色や、茜色に染めたものもあり、それは普通のヤツの倍くらいした。

「おっ、見るよメーブル、こんなの誰が着るんだろな」

店の奥には一際目立つ服があつた。

純白の生地に金糸が縫い込まれたもので、マントが金貨5枚、トーガが金貨6枚という狂った値段設定だった。

「ユリウス」

「……は？」

「あの、すみません……この服、下さい……」

「ちよつ、ちよまつ、お前いい加減にしるよっ!? 金貨11枚だぞ、これっ!?!」

「都市長が払ってくれるから、気にしないで、おけ……」

「いや、でも、それなら俺はもうちよつと、普通のやつがいいんだが……」

「ダメ……。服で人を見分ける人種は、ユリウスが思っているより、ずっと多い……」

「そりゃそうだけどっ、こんなの目立つだろっ!?!」

「その格好の方が目立つ……」

言われてみればそうである。

とっさに反論が喉から出てこなくなると、メーブルの店主の間で売買契約が決まっていた。

あの都市長、とんでもない金持ちの上に信頼まであるみたいだ……。  
なし崩し的に俺は白トীগとマントを抱えて、更衣室にこもることになった。

「お……? これは、なかなか……」

ローブと下に着込んだチュニックとズボンを脱ぎ捨てて、純白のトীগを身体に巻き付けた。

いざ着てみるとなかなかこれは捨てがたい。

金貨11枚というバカみたいな値段相応に、それは涼しく肌触り

のいい上等な生地だった。

マントも身に付けて更衣室を出る。

「あ、似合う……」

「お前、ずっとそこにいたのか……？」

「のぞいて、ないよ……？」

「聞いてもいないのに、なんでわざわざほめかすんだよ……」

「のぞいたから……？」

「のぞくなよっ！？」

先ほどまで俺は、蒸れたパンツを脱ぐかどうかの葛藤を強いられていたが、脱がなくてよかった……。  
っていつか、さすがに冗談だよな。

「似合う……」

「いや、何回言うんだよ」

「だって、まるで別人みたいに、見えたから……」

「そ、そうか……？」

「うん……。これで、カラスみたいな人生は、もう終わり……」

彼女にとっては何気ない一言だったのかもしれない。

しかし俺の方は言葉の魔術に引き込まれて、男のくせに服を褒められて本気で喜んでいた。

心機一転という言葉が適当だ。

装いを黒から白へと変えて、これから新しい人生が始まる予感が



した。

カラスみたいな人生はもう終わりだ。これからは堂々と生きてみよう。

・金貨11枚の買い物（後書き）

明日から1日1回更新に変更する予定です。

皆様のおかげで日間に上がれました。ありがとうございます！

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。

・せっかくだから無許可で迷宮も視察しよう

黒いローブは売ってしまえとメーブルは言うが、ちょっとそいう気にはなれなかった。

未練がましいと言われても、こればかりは捨てられない。

そこで邪魔なローブその他を預かってもらおうと、市長邸に1度引き返すことになった。

ところがメーブルが案内してくれた最短ルートは、スラム街のド真ん中を横断するものだった。

「お前は自由だな……。ああ、どこまでも自由だ……」

やさしく彼女の頭を叩いて、きっと悪気はないのだろうと一人で納得した。

「よくわかんないけど、ポンポンは、大歓迎……」

「一応聞くが、ここって通っても安全なんだよな？」

「え、全然？」

「んな道に客人を案内すんじゃないよっ！？」

俺たちの陽気なやり取りに、スラム街の連中の暗い目線が集まっていた。

バザー街とは一変して、全く歓迎されていない感じがひしひしとする。

「いいキャラ、してるね、ユリウス……」

「お前にだけは言われたくねーよ……。いやしかし、エルフの国にもスラム街ってあるんだな……」

「うん……」

スラム街は行けども行けどもスラム街だった。

俺が思っていた以上に大きく、じわじわとシャンバラの問題を実感させられた。

「なあ、もしかしてこの国、不景気なのか……？」

そう問いかけても返事は返ってこなかった。

なぜ俺がこの地に招かれたのか。その疑問の1つが氷解してゆくのを感じた。

・

服を市長邸に預けて、俺たちは再び外に出た。

オレンジの香り付けをした冷たい水を貰って、それをテラスですりながら町並みを眺める。

「なあ、迷宮ってどこにあるんだ？」

「あちこち……」

「近場にあるなら案内してくれないか？」

「わかった……。じゃあ、お姉ちゃんか、都市長に……」

「それは無しで頼む。実物を見るならアポ無しが最適だ。連れて行

「つてくれ」

「え……。でも、そういうのは、困る……」

この変わり者にも攻められると困るラインがあるようだ。

しかしこつちだつて、活動を始める前に実物を見たい。それはモチベーションにも直結するからだ。

「秘密にするだけだ。命令違反じゃない。……それに任を解くと、あのとき都市長に言われただろ？」

「でも、絶対、怒られるよ……？」

「そのときは俺がかばうから頼むよ」

「はぁ……。わかった……」

そういうことになったので、俺たちは市長邸の敷地を出ると今度は砂漠の方角に進んだ。

砂漠に出てみると、ずっと向こうに川と広い畑があるのを見つけた。

砂漠と一概に言っても、全てが砂で埋まっているわけではないよ  
うだった。

オアシスを離れて熱い砂の上をしばらく歩くと、そこに記念すべきシャンバラ第1号迷宮が隠されていた。

表向きは軍の詰め所だ。だがその建物の中には、地下へと続く石の道があり、その先には淡い光を放つ扉があった。

「本当に2人だけで行くつもりミヤ？」

「私は3人が」

「単なる様子見だから十分だ」

ネコヒト族の女戦士が同行を志願してくれたが、気を使いそうなので突っぱねた。

メイプルの反応が面白かったのもある。

「でも、強い敵が出るけど、平気かミヤ……？」

「平気じゃ」

「余裕だ。行くぞ、メイプル」

「えええ……っ!？」

彼女を引きずって、俺は迷宮へと進入した。

少し意外なことに、入ってみるとここはツウィク王国の迷宮に似ている。

曲がりくねった広い道が奥へ奥へと続き、そして俺の隣で少女がこちらにジト目を向けていた。

「まさか、このまま進むの……？」

「当然だ。実際に戦わないと視察にならないだろ」

「でも……私は弱体系デバフで、こういうのは、苦手だから……」

「そっぴゃ、出会って一言目がパラライズだったな……」

「違う……。ちゅーちゅーって、言った覚えある……」

「まさかそのでかいネズミに拉致られるとか、予想してなかったぞ」

ここに来るまでに聞き取った限りでは、彼女は状態異常魔法を得意としている。

攻撃魔法もそれなりに使えるが、回復魔法は苦手だそうだ。適性がメーブルの性格そのまんまで少し笑えた。

「じゃ、後ろは頼む」

「え、前に立つの……？ 一応、私たちの未来が、あなたに……」

「見くびるな。これでも3年前までは軍にいたんだ」

「そんなの知ってる……。あ、待って……」

前衛としてパーティを引っ張って前進した。

道は緩やかな下りを描きながら、やがて1つ目のフロアへと行き着く。

目の前の扉を開くと、定番のゴブリンたちが8体ほどひしめいていて、こちらに敵意の目を向けた。

「標的にサインを刻むから、メーブルは印のないヤツを狙ってくれ」

「そういうことっ、先に言って……っ！ あっ……！？」

エルフの魔法と、人間が生み出した魔法は、同じようで系統が異なる。

ツウィク王国・宮廷魔術師が得意とする亜空間転移の力で、俺が姿を消し、ほんの少しの後にゴブリンの背にナイフを突き刺す光景を見ると、メーブルは二重に驚愕することになった。

「え……っ、え……ええっ……！？」

メーブルがアイスボルトで倒したのは、最後の1体だけだ。残りの全てを、俺は転移と強襲だけで全滅させた。

一通り片付けると、敵が光と共に消えてドロップが生じた。ゴブリンの牙に、爪に、魔石に、小さな鉄鉱石も混じっている。鉄鉱石をのぞけば、これは錬金術で使う魔物素材だ。

「い、今の……何……？」

「亜空間転移だが、見たことないのか？」

この力は瞬間移動ではない。ただ亜空間という裏道を通って、通常より素早く移動する力だ。

戦闘に応用すれば、神出鬼没のアサシンにもなれる。

「それは、知ってる……。でも、そんな連発出来る人なんて……見たことも、聞いたこともない……」

「外では常識だ」

「ウ、ウン……」

「ウンだ。師匠には、そういう使い方をするとよく怒られた」

彼女と話しながら、ドロップを袋詰めして前進した。

そこから先はまあ、さっきまでとだいたい同じだ。

道を阻むモンスターがあれば片付けて、瞬く間に地下2階にやって来た。

「待って……！ それ以上は、ダメ……！」

「いや、まだ始まったばかりだ」

「ダメだったらダメ！ これ以上先は、進んじやいけないって、決ま



「つてる……」  
「なぜ？」

「凄く、強いボスマンスターが現れたから……。だからユリウスのポーションを、待つことになったの……」  
「だったら小手調べといこう」

「ええっ、なんでそうなるの……っ！？ 待ってっ、ダメだったらダメだよ、お姉ちゃんに、怒られる……っ！」  
「大丈夫だ、言わなきゃバレない」

彼女は背中から腰にしがみついて止めようとした。  
しかし小柄なのもあってなんのことはない。

ズルズルと俺は砂漠エルフを引きずって進んだ。  
やがて俺はしばらく進んだ先の大部屋で、巨大なキマイラを発見することになった。

蛇の尾、鷹の翼、ライオンとヤギの双顔を持った強敵だ。

「これならいけるだろ」  
「何言ってるのっ、無理だよっ！？」

「弱体は任せた」  
「私たちだけでは決定打不足 ええっ、こ、こらぁーっ！？」

抜いていたナイフを腰に戻して、俺はキマイラに突っ込んだ。  
転移を使って敵の爪を寸前かわし、ナイフではらちが明かないのでファイアボールを投げ付けた。

ボイスンヴェノム、パラライズ、アームブレイク、ワイークネス、スロウ  
「毒、猛毒、麻痺、筋力低下、守備低下、敏捷性低下っ！！」

さらには後方から、状態異常と弱体魔法の雨あられがキマイラを襲う。

一方で俺は回避困難な攻撃をナイフで受け流し、とにかく避けて避けて避けまくって、炎の弾幕を張った。

キマイラが怒りの咆哮を上げた。

どんなに暴れても倒せない蠅のような魔術師に、炎に巻かれながら執拗な攻撃を仕掛ける。

だがムダだ。転移中の俺は世界に存在しないので、転移先を先読みする知能がない者に、俺を倒すことは出来ない。理論上は。

「あ……や、やつつけちゃった……」

「やつとか……。はあっ、なんてタフなやつだ……討伐を諦めたのも納得だな」

「だから言ったのに……」

数分間の長期戦の末にキマイラが消え、光の中からドロップが現れた。

あまりに小さいので近づくまで見えなかったのだが、黄金色のトパーズと、色のないコランダムに、深い暗色の黒曜石だった。

「ポストドロップにしてはしょっぱいな……。ま、攻略を阻む壁を駆除できたと思うか」

小さな宝石を拾い、俺は疲労にしゃがみ込んでいたメーブルに手渡した。

「あ……これ……」

それは財宝としてはあまりに小さい。

しかし彼女は食い入るようにそれを見て、視線を上げなかった。

「そついうのが好きなのか？」

「別に、それほどでもない……」

「そつは見えないぞ」

「……え、なに？」

「なんでもない。そろそろ夕方だろう、帰ろうか」

「うん……」

「それはお前にやる」

「いいの……？ やった……とっても、嬉しい……っ」

実際に探索してみてもよかった。

やはりこの国の新事業にポジションは必要不可欠だ。

2層目にして、あんな頑丈な怪物が現れるのでは、回復薬の存在は必須と云っていいだろう。

俺たちは市長邸へと引き返した。

「危ない……。ほら、前見て歩け」

「あ……」

「どこでも手に入るような、ただの宝石だぞ。前を見て歩け」

「うん……」

帰り道、宝石に夢中で転びそうになったメーブルを何度も抱き支えた。

それでも彼女は、白と、金と、黒の輝石を見つめて、それを砂漠の美しい西日にかざしていた。

「綺麗……」

「そうかもな」

彼女の心の機微まではわからないが、彼女にとってそれはカストロップではなく、幸せな気持ちをもたらす宝物だったようだった。

・せっかくだから無許可で迷宮も視察しよう（後書き）

予定を変えて本日も2回更新いたします。

皆様のおかげで、ハイファンタジー日間23位に入れました。ありがとうございます。

面白さが長く続くお話を意識してますので、これからもゆっくりと追っていたけると嬉しいです。

## ・小麦色の時間

山のないシャンバラでは、夕空一つにしても異国情緒にあふれている。

砂丘の彼方に浮かぶ太陽は異様に紅く巨大で、その琥珀色の輝きがオアシスの国をいつまでも照らし続けていた。

ツワイクの草原や森林が少しだけ恋しい。

乾いた空気と、夕方の快適な気温に、隣を歩く少女がマントを脱いであられもない姿をさらしてもいた。

一皮むけばまるで酒場の踊り子のようで、小麦色の肌がまぶしく目のやり場に困った。

「ん……発情してる……？」

「するわけないだろ……っ。いいからお子様はマント着ろっ」

「やだ……。へへ……視線が快感……」

「そっという目では見てないってのっ!!」

「これは異なことを……。ユリウス、私のお尻と足と胸と首筋、見てるよ……っ?」

「それは……め、目に入るからだっ!!」

砂漠を抜けて、俺たちは市長邸へとやって来た。

件の錬金術工房は、広大な市長邸の一角にあると今さら教えられたからだ。

場所を知られば俺が勝手に動くと思われて、姉妹も都市長もわざと黙っていたのだろう。

「工房の建設も、都市長のお金……」

「あの爺さん超金持ちだな」

「まあね……。あ、ほら、あれだよ、ユリウス……」

「おお……」

オアシスにそって市長邸の裏に出ると、その先に工房というよりも小さな神殿めいたものが立っていた。

それは美しいオアシスのすぐ隣に立てられており、ヤシ科や背の低い草木にも囲まれた一等地も一等地だった。

「元々は、古い神殿……。お花の種は、私たちがまいたの……」

「年季が入ってるわけだ。いや、期待以上だ」

建物の周囲には白い脊柱が立ち並び、さらには花々が咲き誇っていて非常に優雅だった。

その神殿あらため工房に、真新しい白亜の家が増設されている。

近付いてみると、2階には眺めの良いバルコニーまで用意されており、あまりの好待遇にこっちは臆病風に吹かれかけた。

「お帰りなさい、ずいぶん歩き回っていたみたいね」

神殿 もとい、工房の扉を開いて中に入ると、外で俺たちを見つけて追ってきたのか、姉のシエラハゾが背中に立った。

彼女も昼に身に付けていたマントを脱ぎ捨てて、胸から上と、脚から下が露出するトローガを身に付けていた。

「これは……お姉ちゃんの、おっぱい見てるね……」

「えっ……?!」

「み、見てねーよっ?! いや見たけどっ、そういう目では見てねーってのっ?!」

「フフ……。その動揺が、上の口よりもずっと、素直によく喋る……」

「は、はしたないかしら、この格好……」

マントに覆われた胸部がここまで豊かだったとは思わなかった。恥じらいに身をよじるその姿からは、俺だっ胸の高鳴りを感じており、つまりは全てが都市長の思う壺だった。

このままではジワジワとその気にさせられて、婚姻という最も重い契約を結ぶことになってしまう……。

「人にどんな目で見られようと、本人が快適な格好をするのが一番だと俺は思うぞ」

「むふふ……ユリウス、グツときたって……」

見惚れたのは事実だが、お前は余計なことを言うな……。  
ブロンドの美しいエルフが憤ましくも恥じらう姿は、俺が過去に体験したことない衝撃の一つだった。

つまり意識すると 不覚にも俺は彼女をかわいいと思ってしまった……。

「それより工房を案内してくれるか?」

「そ、そうね……任せて」



シエラハズは小さなライトボールの魔法を使って、まだ照明のない工房を明るく照らした。

壁には修復の痕跡がある。工房としての設備は未完成で、ほとんど何もないも同然だった。

「これは台座と水槽が……。あの工場を模倣するつもりなのか？」

「ええそうよ。後で貴方の意見も聞かせてちょうだい」

「いいぞ、俺の知ってることならなんでも教える。これでも自分で設備をメンテナンスしてたからな」

「ふふ、頼もしいわ。やっぱり貴方を選んで正解だったみたい」

「姉さんとの、相性も……。いい感じ……」

仕事の話に割り込むなど、あの都市長さんに教わらなかったのだろうか。

マセガキの後頭部を軽く叩き、設備途中の設備を俺は物色した。

床に大きな水槽を作り、台座の上にオーブを配置する様式だ。

完全に再現できるかはまだわからないが、俺もこの様式が最も慣れてもいた。

「ところで、今までどこに行ってたの？」

「1号迷宮だ」

「そうだったの、お疲れ様……。えっ、迷宮っ!？」

「姉さん……。この人、とんでもないよ……」

キマイラ討伐はなかなかいいストレス解消になった。

次こそはレアドロップを手に入れたいところでもあるし、また遊

びに行くでしょう。

そうだ、次はソロでもいいな。そうしよう。

「しかしさすがにあのポーション工場を再現するのは、かなりの日数を要するんじゃないか？」

「そうね……。でもそれでも、あたしたちは急いで完成させなければいけないわ」

「昔ながらの方法でいいなら、杖と釜があれば始められるぞ」

一度もポーションを完成させたことのない俺が言うのも変だが、3年も仕込みを手伝わされたんだ。

俺ならばきつと出来る。

「本当？ だったら明日すぐに手配させるわ」

「ああそうそう、1号迷宮のキマイラなら俺とメイプルで片付けておいた」

「あらそう、それは助か ええーっつ?!」

「だから言ったでしょ……この人、とんでもないって……」

満足したので俺は視察を終えて立ち上がり、銀と金の対照的な姉妹と向き合った。

こんな格好をした女の子と一緒にいるだけで、ますます別世界に迷い込んだ気分になってくる。

「あ、姉さん、これ見て……。キマイラ倒したら、これがドロップした……」

「あら綺麗……。あれ、だけど、これって……」

「うん……これ、運命の、巡り合わせかも……。これが私で、これがお姉ちゃん、あとこれが……。それに大きさも、ちょうどいい……」

「そ、そうね……。凄い偶然……」

「なんの話だ？」

「ん、なんでもないよ……」

姉妹は身を寄せ合って、色のないコランダムと、黄金色のトパーズと、微かに透ける黒曜石を囲み見下ろしていた。

それはメープルだけではなく、シェラハゾにとっても意味がある物らしい。

「そっちは倉庫よ。今は何も無いけど……」

「だったら早速使わせてもらおう」

彼女が小さなライトボールをもう一つ作って、こちらに渡してくれた。

俺はそれを受け取って、奥の倉庫の棚に魔物素材を並べた。

後は釜と杖と薬草さえあれば、ポーション作りを始められそうだった。

・小麦色の時間（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。

・オアシスの新居に落ち着こう

「それで……ここが、あの……し、新居よ……」  
「なんで緊張してるんだ？」

「だ、だって……っ」  
「恥ずかしがるお姉ちゃん……ハアハア」

工房を経由して併設された白亜の邸宅に入った。  
メーブルが暖炉に炎を放つと、日没を迎えた室内を暖色の光が照らし出した。

こちらも準備が不十分で家具が少ない。  
それでも居間には白いテーブルとイスがあり、奥には本棚も用意してくれていた。

ふと奥の部屋が気になって入ってみると、そこには一変して誰かの私物がひしめいている。  
もう1つの部屋も同様だった。

「まさか、これってお前らの部屋か……？」  
「あ、私のウサちゃん……」  
「貴方の補佐をするんだから、と、当然でしょ……っ。あ、貴方はっ、あたしたちを選んだんじゃないっ！」

「そっぴやそっぴやだっぴやな」  
「なんで忘れてるのよ……っ！？」

あの時は駆け引きのつもりだったんだよ……。  
だけどもあ、今となってはこの2人が補佐に付いてくれることに、  
心のどこかでホッとしている。

「ユリウスは、そういう人……」

「もう、信じられないわ……」

美人で賢くて知らない女を付けられるより、ずっといい。

メープルは面白いやつで、シエラハズは少しお硬いが誠実でいいやつだ。

「それより、俺の部屋は？」

「そ……その話は、後にしないかしら……？」

「地下に、拷問部屋があつて……ユリウスは、そこで飼う予定……」

「そういう冗談に聞こえない冗談止めるよなっ！？」

「ごめん、願望だった……」

「ますます悪いわっ！」

また頭の後ろを軽く叩くと、メープルの口元から幸せがこぼれ落ちた。  
ちた。

なんかあつという間に、コイツとは打ち解けてしまったな……。

「で、俺の部屋は？ まさかマジで地下じゃないだろな……？」

「違うわよっ、2階よっ2階！ あ……っ」

何か2階にまずいものがあるらしい。

それを聞いてメープルが先んじて飛び出し、俺もその背中を追って階段を上った。

そしたらあつたよ。

俺に見られたら、非常にいたたまれない気分になるやつが……。

「わお……」

「だ、だから後にしてって、言ったじゃない……っ」

俺の部屋はでかかった。そこには書斎机が一つ置かれ、そしてよりにもよって部屋の片隅に、キングサイズのベッド（天幕付き）配置されていた。

しかも枕が3つだ。新品の白い枕が1つと、使い込んだピンクのやつと、ウサギの耳が付いたやつが密着していた。

ベッドはつい飛び込みたくなるほどふっかふかだ。

「これ、都市長の指示だろ……?」

「あたしの意思のわけないでしょっ!」

枕が3つあるということは、今夜はお楽しみ下さいというメッセージだろうか……。

あのジジイ、やっぱり油断できないやつだ……。

「これはもしや……純潔を捧げて、ユリウスを、掌握しろ……というメッセージ……」

「ツツ……。あ、あたしは、そんな……まだ、そんな覚悟、出来てない……っ」

そうやって尻を揺すって恥じらわれると、本気で変な気を起こしたくなるから止める……。

シエラハズはいい女だ。美しく、出るところは出ていて、戦士ら

しく引き締まっている。

「あんま姉を苛めるなよ……。ハニトラ大好き汚職ジジイでもあるまいし、んなもんは要らん。床で寝る」

「それは無謀……。夜は、とても冷える……。温め合つ、必要あり……?」

「だったらお前らだけ家に帰ればいいだろ……」

「あたしたちは戻れないわ」

「私たちにとつて、都市長の命令は、絶対だから……」

俺たちは3人揃いも揃つて、余りに高すぎて踏み出せそうもない大人の階段を見上げた。

生理的にも精神的にも一緒に眠れるわけもない。

「それでいいのかよ、お前ら……」

「いいよ……。？ 恥ずかしくて、頭、変になりそうだけど……。天井の染み、見つめて、我慢する……」

「もつつ、どこで覚えてくるのよそついう言葉っ!」

「……いや、よく考えたら下の暖炉があるじゃないか。俺はあつちで寝るよ」

「えー……つまんない……」

書斎を見れば、預けた黒ローブや私物がそこに置かれていた。

俺は自分の分の枕を拾い上げて、甘いハニートラップ満載のふかふかベッドから離れた。

「姉さんに、ムラムラしてたくせに……」

「えっ、そ、そうなの……っ?!」



「してねーよ……。したとしても、はいと答えるわけがねーだろ……」

これ以上はこっちが色ボケしてしまいそうなので、俺は階段を下りて暖炉の前にしゃがみ込んだ。

しばらく姉妹は上で何かやっていたみたいだが、話が付いたのかしばらくしてから下りて来た。

「晚餐の、お誘いです……。嫁になって、得したかも……」

「ま、まだ決めたわけじゃないでしょっ！」

都市長が夕飯をごちそうしてくれるそうだ。

なんだか雰囲気にも飲まれて、ワクワクと胸が躍り、恋愛小説のようなこの状況に心までときめいた。

「でも、お姉ちゃん……。これ、やっぱり運命、かも……」

「またそんなこと……。でも、もしかしたら、そういう可能性もあるのかしら……？」

姉妹はまたもや、キマイラが落としたりした3つの宝石を見つめていた。ただのカスドロップのはずなのに、偶然手にした3つの宝石が、彼女たちを心変わりさせてゆくのを見た。

「明日から早速動こうと思う。もしお前らの予定が空いてたら手伝ってくれ」

これ以上、何か自己完結されてしまう前に話をこまかそう。

俺は暖炉の前から立ち上がり、砂で炎を消して、それから自発的に玄関へと歩き出した。

「貴方がシャンバラのために尽くしてくれているのだから……あたしたちは、貴方の行為に報いるべきよね……」

「うん……私は、そう思うよ……。恩を着せられっぱなしは、落ちて着かない……。だったら……」

「そうよね。あたしたちがユリウスの人生を勝手に変えたんだから、責任を取らなきゃ……」

「思う……そう思う……。襲っちゃえ……」

「姉を焚き付けんなよっ!? ああもういい、置いてくからな、じやあな!」

一方的に玄関を飛び出すと、明るい声を上げてエルフの姉妹が背中を追って来た。

状況に飲まれてしまっているのだろうけど、ツワイクで独身暮らしをしていたあの頃と比べると、なんだか幸せでいっぱい気分になれた。

・オアシスの新居に落ち着こう（後書き）

今夜もう一度更新します。

宣伝等、たくさんのご支援感謝しております。

## ・一方ツワイク王国では

俺が姉妹との新生活に浮かれていた頃、ツワイク本国のポーシヨン工場では、ヘンリー工場長が真っ白に青ざめていた。

彼は書類とメモ書きとにらみ合い、どう逆立ちしたってどうにもならないこの状況に、心身ともに疲れ果てていたそうだ。

「無理だ……どうやっても来月のノルマに届かん……。それもこれも、くっ……」

ツワイクの工場からオーブが2つ消えた。

つまりラインが2つ稼働停止状態に追い込まれたということであり、工場の稼働率に深刻な悪影響を与えていた。

「盗難されたと今から報告するか……？ いやだが、それでは管理責任を問われてしまう……。産業スパイの潜入を許したなど、もし国王陛下の耳に届けば、私は……」

案の定、下手人はユリウス・カサエルであると決め付けられていた。

あの日、工場の機密資料が大量に消え、ヘンリー工場長はそれ以上に報告出来ずにいた。

「ユリウスウウ……ッ、無能のくせにつ、この私に逆らいおってっ！ 働かせてやっていた恩を……仇で返すなどっ！ クソツクソツクソツ、クソツたれがっつー！」

それは俺を庇っての行動ではなく、ただの自己保身だった。

このままノルマを達成しなければ、王宮に呼び出されて査問を受けることになる。彼は今の地位を失うことになる。

「あの要領の悪い頑固者が、まさか外部の者と手を組むなどっ!?」

そこで彼は思い付いた。

絶対にやってはならない愚策であったが、彼の目には大した問題には映らなかつたのかもしれない。

「ポーションを薄め……いや、工程を1割縮めればいいではないか！ 質は落ちるが、使うのは冒険者どもだっ、何も問題ない！」

とにかく今は約束のノルマを果たさないといけない。

彼は新しい紙に筆を滑らせて、工程の短縮命令を書き記した。

「失礼します！」

ところが工場長室にノックが響いた。それは彼の秘書だった。

「工場長、先ほど王宮からこれが……」

「な……っ。む、むうう、どうにも嫌な予感がする……。すまんが、自分で開く勇気が出ない……私の代わりに読んでくれ……」

「はっ！ ……これは、ううーん……どうやら、増産の命令書のようですね」

「な、なん、だと……」

工場長は再び青ざめた。

ただでさえ生産効率が落ちているのに、増産など出来るわけがな

い。

おまけにユリウスに押し付けていたポーションの仕込み作業に根を上げて、文句を言い出す錬金術師が増えているのだ。

「な、なぜ、なぜこの状況で注文が増えるのだ……!? 国は戦争でも起こすつもりかっ!？」

違う。それは粗悪品を作らせたからだ。

己の命がかかっているのだから、冒険者たちはポーションの劣化を理解しながらも、数を購入するしかなかったからだ。

「工場長……やはり真実を上には伝えるべきなのでは……?」

「今さらそんなことをしたらっ、私の首が飛んでしまうわっ!」

「ですが、無理ですよ……。1割も増やせと上は言ってきていますよ……?」

「工程を2割削減すればいい……。休み無しで錬金術師どもを働かせれば、どうにかなるはずだ!」

もはやメチャクチャだ……。

質を下げれば下げるほど、独占事業であるため消費が増える。その負のサイクルに終わりはない。

秘書を下がらせて、工場長は震えながらウィスキーを注いで、それを一気にあおった。

「は、はあっ、はああっ……。ま、まあいい……。需要が増えるのは、いいことだ……」

己に思い聞かせるように、彼は独り言を次々と漏らす。  
誰かがもしこれを聞いていたら、醜態をあざ笑ったことだろう。

「我が国以外に、ポーションを工業的に生産出来る国はない。だからこれは、いいことだ、いいことなのだ……！」

遙か彼方の砂漠の国で、まさか他国によるポーション製造の工業化が試みられているとは、彼はまだ知るよしもなかった。

粗悪化してゆくツイク産ポーションの前に、交易路を介して他国のポーションが大量に流れて来たら、冒険者がどちらを選ぶかなど考えるまでもない。

そのまた一方、王宮では

「ユリウスが機密を持って国外逃亡か……」

工場長が必死でしいた箝口令もむなしく、裏ルートを紹介してアリ第三王子へと秘密が漏れていた。

彼は補佐官からの報告を受けるなり、顔の半分をひきつらせて喜びに笑ったそうだ。

「気になるところではあるが、消えてくれて助かった……。どこの勢力かは知らないが、今は不届き者に感謝だ。ハハハハ……よかった」

彼は安堵すると、その日の景気付けにポーションとワインを割った。

それをグビツと飲み干すと、彼の顔色が変わった。

「ん……こんなものだったか？」

「そのことなのですが、冒険者たちの噂では、ポーションの質が少しずつ落ちていると」

「ふむ……まあ、そんなものは気のせいだろう」

それが粗悪品だとは、傷を負っていないアリにはわからなかった。

実際に迷宮で傷を負う、冒険者たちだけがポーションの粗悪化に気づきだしていたが、ツワイク上層部は全くその意味を理解してないなかった。

.

翌朝、俺と姉妹はベッドと暖炉から起き出すと、スラム街が拡大するシャンバラの未来のために、ポーションの試作に入った。

その試作ポーションが、世にもとてつもない爆風を引き起こすとは、まだ知らずに



・一方ツワイク王国では (後書き)

もしよろしければ画面下部より【ブックマーク】と【評価

】をいただけると嬉しいです。

皆様のおかげでHF日間19位に入りました。ありがとうございます。

・新しい友情と晚餐とお義父さん

昨日の晚餐は存外に楽しめるものだった。

てつきりお偉方に囲まれるような退屈な席かと思いきや、席にあったのは都市長と眉目秀麗な秘書だけで、そこにあの姉妹が加わると、温かく家庭的な空気がかもし出されていた。

それに加えてここはオアシスの国とは思えないほどに食材が豊かで、特に豆と塩漬け肉と煮込みが、シャンバラ産の冷えた地ビールとよく合った。

後半は市長邸のシェフやメイドまで晚餐に加わって、ずいぶんと食事が賑やかな国だと驚かされた。

「ユリウスさん、もう一杯どうでしょう？」

「い、いや……。なんで年寄りってやつは、若者に酒を勧めるのがそんなに好きなんだろうな……」

「いえいえ、普段の私は節度をわきまえておりますよ」

「ユリウスは……都市長に、気に入られてる……」

「そうなのか……？」

「普段はもつとお堅いわ」

都市長は抜け目のない男だが、話していて気持ちのいい人物でもあった。

彼は姉妹に対して父親のようにやさしく接するので、それが俺の目にはとても好意的に映った。

多分、威張り散らすだけの支配者に嫌気が差していたのもあるだ

ろっ。

少なくとも彼は平等で誠実だった。

「ユリウスさん、さ、もう一杯……もう一杯くらいならいいでしょう？」

「シャンバラの都市長も、酒を飲ませたらただの酔っぱらいなんだな……。ならお返しだっ、アンタも飲めっ！」

俺たちは冷えたビールを酌み交わして、飲んで、また酌み交わして、互いに顔を赤くしてまた飲んだ。

「目指すはポーションの国産化と、迷宮事業の実現だ。俺たちで世界をひっくり返すぞ、都市長！」

「ええっ、頼りにしておりますよ、ユリウスさん！」

俺たちは一晩で打ち解けて、同じ夢を歩むことに決めた。

「しかしそう言うなら、この2人にこれ以上おかしなことを命じるのは止めてくれ」

「はて……？」

「ベッド、枕3つ、アレはアンタの差し金だろう……。ああいう懐柔はいらん……」

「都市長やるね……。あれは、私も、衝撃的だった……。心臓、キョンキョンだったよ……」

「ふふふ……あのことですか。いえ、最初はどうかとも思いましたが、見ていて貴方たちが微笑ましいので、つい差し出がましいことを」

「メーブルといいアンタといい、いい性格しているよ……」

「そこは育ての親ですから」

「いちおー、養父ちちです……」

「あたしたち養女なの。都市長は次から次へと子供を養子に迎える人なのよ。おかげで数え切れないほどの兄弟が出来ちゃったわ」

都市長　　シヤムシエル爺さんはやさしく笑っていた。

「さ、もう一杯……」

「都市長、そろそろ本格的にキツイ……」

「そう言わず祝いましょう！　今日は2つの意味でめでたい日なのですから……！」

「そろそろこの酔っぱらいをどうにかしてくれ……」

その日はビールをたくさん飲んで、いや飲まされて、ふわふわした気分で眠りについた。

もちろん、ベッドではなく暖炉でだ。

ツワイクでの労働環境は、労働の喜びもなければゆとりもない、最低の生活だと今さらになって気づかされた。

魔術師を辞めて、明日から俺は錬金術師になろう。

晚餐で見たあいつらの笑顔のために。

……いや、俺の新たなエリート街道のために、がんばろう。

・新しい友情と晚餐とお義父さん（後書き）

今夜もう1回更新します。

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。

・砂漠の奥地でユリウスは見た 朝日に輝くオアシスの彼方に沐浴に踊る原住民へエルフの姿を

山のないシャンバラの日没は遅く、夜明けは驚くほどに早い。

明け方の冷え込みに目を覚ました俺は、消えていた暖炉に薪を投げ入れて、炎の魔法で着火した。

暖炉の炎と分厚い絨毯が冷えた身体を温めると、俺は再び眠りに落ちていた。

その次に目覚めた頃には、明るく温かな朝日が窓から差し込んでいて、ずっと火に当たっていたせいか、喉がとても乾いていた。

「そついや昨日、あんだだけ飲まされたんだつたか……」

脱水症状の原因は暖炉だけではなく、昨日のビール7杯が主要因だろう。

絨毯から立ち上がり、暖炉の炎をさっと消して、どこかに水瓶はないかと家探しをした。

見つかった。そんな気はしていたが空っぽだった。

たかが水のことです階の姉妹を起こすのもどうかと思い、玄関から外へと出る。

日差しが暖かく気持ちいい。

いざ外に出てみると、家の方がずっと寒いくらいだった。

「いいところだな……」

外に出ると真正面がオアシスだ。  
せせらぎを知らない静かな水面は朝日に白く輝いて、さらに近付いてみると、その透明度の高さが俺を二重に驚かせた。

水底は泥ではなく白く細かな砂で、ちらほらと小さな魚影が確認できた。

「これ、飲めるよな？」

膝を突いてすくつてみると、湖水は少しぬるかった。  
変な匂いもない。だが人の糞尿が混じっていたらどうしようかと、清らかな湖水と見つめ合った。

「ここは都市長を頼るか。……ん？」

ところが左手の方角から何かの水音がした。水鳥か何かだろうか。湖に膝を突いたまま、何げなしに左に振り返る。

「んな……っ?!」

それは水鳥ではなかった。

エルフの長い耳であり、小麦色の肌であり、ひょうたんのようにくびれた女の裸体だった。

一系まとわぬシエラハゾが水辺に立っていて、それがまだ沐浴するには少し冷たいオアシスへと、腰まで身を沈めるのを俺は見てしまった。

「ふふ……」

小麦色の肌が白く輝く水面の上で踊っている。  
冷たい湖水で大きな胸を撫でて、身体にまとわりついた砂埃や汗を流している。

水中にしゃがみ込んで、跳ねるように飛び上がって、シエラハゾはまるでオアシスの妖精のように笑っていた。

「アイツ、なんか……綺麗だな……」

しかし人間の目というのは不思議だ。

集中すると距離感というものが失われ、意識している情景以外が何も見えなくなる。

褐色の長い耳を持った女が胸を揺らしながら、気持ちよさそうにため息を吐く。

俺はそれから目が離せない。

女性をここまで美しいと感じたのは、生まれて初めてのことであった。

「ツイクは過ごしやすかったけど、帰ってこれてよかったわ……。ふふふつ……」

人前では少しお堅い彼女が微笑みを浮かべて、ありのままの素顔を露わにしているせいだ。

オアシスで裸になって、水を浴びて、笑って、素顔を浮かべるその全てが究極の無防備だった。

デザートウォーカー

砂漠エルフはなんて美しい種族なのだろうか。

俺は身動き一つ出来なくなったらまま、彼女が沐浴を済ませてその



場を立ち去るまで、ずっと彼女を見ていた。

朝日に照らされた小麦色の肌は健康的でなまめかしく、水に濡れたブロンドは普段の彼女と雰囲気違ってとても印象的だった。

「うっ……」

激しく心臓が高鳴っている。偶然とはいえ、とんでもないものを見てしまった。

俺は胸を抱えながら乱れる呼吸を整えて、平静を取り返していった。

「俺、何やってんだ……。こんなところ誰かに見られたら、言い訳出来ないだろ……。だけど、あれ……。綺麗だった　フギヤアツツ?!」

「よっ、ロリコン……」

シエラハゾも水を浴びながらそうしていたので、湖水を飲んで気持ちい落ち着かせてから、後ろを振り返ると　なんと、そこにメイプルが立っていた。

「いつからいたよお前っ?!?」

「だいぶ前……?　水、飲もうとしたところから……?」

「いいいい、一部始終じゃねーかっ!」

危うくオアシスにひっくり返るところだったが、どうにか踏みとどまった。

ヤバい、ヤバいぞ、一番ヤバいやつに現場を押さえられたんじゃないか、これは!?

「気持ちわかる……」

「へ……?」

「私が男だったら、あのボデーは、しんぼつたら……しんぼつたら……」

「なんで微妙に親父臭い言い方なんだよ……」

「姉さんは、世界で一番綺麗……ユリウスも、そう思う……?」

「その問いには返答しかねる」

「ふ……」

6つ下の少女に鼻で笑われた。

彼女に魅力を感じていなかったら、凝視の途中で我に返っていただろう。

「このこと、姉さんに教えてあげたら、喜ぶかな……」

「止める……! いや、止めてくれ、止めて下さいお願いします、

メープルさん……。それだけはどうか……」

「姉さん、喜ぶと思う……」

「仮にそうだとしてもっ、それじゃ今日からのポジション作りが気まずくなるだろがっ!」

不思議そうに少女は首をかしげる。

俺がこんなにつらたえる理由がわからない。そんな顔だった。

「それが面白い……」

「俺は面白くねーよっ！？ 頼むから黙っていてくれよっ?!」

「でも、綺麗だったでしょ……?」

「ああ綺麗だったよっ！ 認めるからどうか勘弁してくれ！」

クソ、主導権を奪われてしまった。

今後このカードを出されたら、俺はそのたびに降伏する他にない……。

「姉さん、いつもこの時間に沐浴する。張っていれば、また見れるよ……」

「え……。マジで……?」

「マジで……。ユリウスが、姉さんに見惚れると……私は誇らしい

……ハアハア」

「お前、やっぱ変……」

絶句する俺をそのままにして、メープルは家に帰って行った。

姉は美しく、妹は愛らしいがちょっと変だ。

俺はシエラハゾがいた水辺に振り返って、記憶の中の情景をそこに重ねた。

「また明日、この時間に起きれば……」

スケベ心に打ち勝った頃には、もう辺りに誰もいなかった。

・砂漠の奥地でユリウスは見た 朝日に輝くオアシスの彼方に沐  
浴に踊る原住民へエルフの姿を（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブック  
マーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。

明日も2話更新いたします。

・美人エルフに囲まれながらポーション作ろう 1 / 2

都市長と朝食を共にして工房に戻ってくると、既に錬金釜の手配が済んでいた。

杖はメーブルの物を貸してもらおうことになり、俺たちは早速作業へと着手した。

「どうしたの？」

「べ、別に、なんでもないぞ……」

工房内部では搬入作業などもあるそうなので、今回はオアシスを目の前にした軒先が作業場だ。

ちなみにシエラハゾとはとてもじゃないが、正気の状態で目を合わせられなかった。

ポーションの材料の方は以下の通りだ。

- ・ゴブリン系の爪、牙、魔石（昨日入手した魔物素材）
- ・くみたてのオアシスの水
- ・朝市で姉妹が手配してくれたベースハーブ、アロエ、ナツメヤ

シの実

「あのね、姉さん……ユリウスね……」

「そのことは言わないでくれて言っただろ……っ！？」

「えー、平気なのに……」

「お前は平気基準がズレている……っ！」

「二人してなんの話をしてるのよ……」

メーブルの口の軽さに俺は戦慄した。

ただでさえ意識しまくりでこっちは挙動不審になりかけてるのに『無防備な水浴びの全てを見てました』だなんて言えるか！

「なんでもない。……あのことは絶対に言つなよ、メーブルッ!？」

「ん、今はわかったけど……。将来的には、保証しかねる……」

クラツと頭が揺れて、俺は鍊金釜に突き刺した杖にしがみついた。

「怪しいわ。なんであたしから目をそらすのよ?」

「直視できないからだ。それよりも仕事をするぞ、そろそろ魔物素材を投入してくれ」

工場ではオーブだったものが杖に、水槽が大釜になっただけのことだ。

魔力をかけて沸騰させたオアシスの水に、姉妹の手で1つずつ素材が投入されてゆく。

「姉さん姉さん、これ、面白い……っ!」

「落ち着きなさい、メーブル。……ユリウスはこっち見なさいよ」「それは無理だ……」

溶けないはずの爪や牙が細かな泡を立てながら消えてゆく。

二人はその不思議な光景に目を丸めてのぞき込んでいた。なぜか人の左右を取り囲みながら。

「ねえねえ、次は……次はどうする……?」

「わからない。工場の設備とは勝手が違うからな。だが、想像以上にこれは やりやすい」

「手応えありってことかしら？」

「そんなところだな」

工場では量が量だったので、この工程に1時間弱がかかった。

だが今回は大釜1杯分程度で、直接杖を介して魔力をかけている。これが拍子抜けするほど楽だった。

ところがシエラハゾが釜のふちに手を預けて、俺の顔をのぞき込んできたので、こっちはそっぽを向くしかなかった。

「あたし貴方に何かしたっ！？ こっち見なさいよっ！」

「ユリウス……顔、赤いね……」

「赤くないし、なんでもないっ！ くっ、それよりもう次に行けそうだ、手伝ってくれっ！」

このまま10分ほど待つてくれと言うつもりだったのに、既にポーション工場で言うところのエッセンスが完成していた。

ここから先は工場のように分業にする必要がない。ここから先は、俺にとつて未知の領域だった。

「ごまかした……」

「ベースハーブ、アロエ、ナツメヤシの順に入れてくれ。ナツメヤシは口当たりを改善するための添加物だ」

「おーけー、わくわくしてきた……」

「あっちの工場では、この薬草とリンゴを入れてたわよね？」

「そこはシャンバラ仕様だ。添加物を加えないと口当たりが悪い」

キラキラと輝く無色透明の水溶液に、きつい匂いのするベースハ  
ーブが投入されると、まるで絵の具を溶かしたかのように液体を若  
草色に変えた。

続いてそこにアロエの束が投入されると、宝石のようなエメラル  
ド色に変わり、最後にナツメヤシを添加するとキツイ匂いが消えて、  
甘酸っぱい香りが広がった。

「おおお……これ、なんか、美味しそ……。ジュルリ……」

「なんて甘い匂いなのかしら……。それに間近で見ると、錬金術つ  
て不思議よね……」

姉妹はまた俺の左右という謎の定位置に戻って、甘酸っぱい匂い  
に鼻をスンスンと鳴らした。

少し妙だ。あの工場ではこういった、強烈な香りという現象はな  
かった。

釜と杖で作ると、何かが違うのだろうか。とてもいい匂いだった。



・美人エルフに囲まれながらポーション作ろう 1/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。

「よし、後は仕上げるだけだ。錬金術師どもの見よう見まねだが、どうにか上手くやってみせる」

「がんばって、ユリウス！」

「心配いらない……。あの工場で、ユリウスが一番、上手だった……。テクニシャンだね、おにーさん……」

「大事なときに人を攪乱すんな……」

「てへ……」

ゆっくりと釜を攪拌した。

混ぜれば混ぜるほどに、甘酸っぱい香りが広がって、まるでお菓子でも作っているかのような気分になった。

「うっ……」

シエラハゾが釜に夢中で目を向けている隙を突いて、流し目を彼女に向けて、今朝の沐浴が脳裏に蘇った。

「フフフ……お盛んですな……」

「お前は黙ってる……っ」

頭を振り払って、脳裏に浮かび上がってくる情景を打ち消した。

これは試金石だ。この第一歩は俺たちの未来を決める。

幸先の良いスタートを切るためにも、集中が必要だ。いや、しかし……。

「これ、なんか予定よりかなり濃いな……。なんか、手応えが重くなってきたぞ……?」

「今から水足す……?」

甘い匂いがどんどんと濃くなっている。

だというのに水かさは減らず、輝くエメラルド色の水溶液は粘度を増していった。

「ごめん、マジでミスったかも……。これ、濃いわ、なんかネチャネチャしてきた……」

「やっぱり水足す……?」

「料理じゃないんだからそうもいかないっての!」

「だ、大丈夫なのよね……?」

こういうのは工場では見たことがない。

何か手順を間違えたのだろうか。濃い。恐ろしく濃い。

「わからん! だが安心しろ、俺はスーパーエリートだっ!」

「今それ、関係ない……」

俺がツイイクで担当していたのは、魔物素材を魔力を流し込んだ水に溶かし、エッセンスと呼ばれたベース素材を作るところまでだ。ここから先はド素人も同然で、釜の中の液体は今や、練り飴同然の手応えに変わっている。

「だけどこれ、とつても美味しそうだわ……!」

「飴ちゃんみたい……ハアハア」

そこまでできてやっと、仕上りの手応えが来た。  
本来はここでポーシヨン瓶を投入することで、容器に詰める作業を省略出来る。

だがこのままの粘度の薬が完成すると、逆さにしたって中身が出ないだろう。

「下がれ、完成するぞ！」

「キャツ?!」

「おわぁー……」

釜が輝き、光と破裂音と共に蒸気が空高く上がると、ついにシャンバラ産ポーシヨン第1号が完成していた。

「飴ちゃん……?」

「飴だな」

「飴だわ……」

釜の底に、艶やかに輝く真円のあめ玉がギッシリと積み重なっていた。

いったい俺はどこで何を間違えたのだろう。

これではポーシヨン瓶に詰めることもできない。

「わーい、飴ちゃんだーっ！」

「凄いわユリウス！ 飴がこんなにいっぱいっ、夢みたいだわっ！」

ただ姉妹の方は、落胆する俺とは正反対に興奮しまくっていた。

「お前ら、本来の目的忘れてるだろ？ ん、なんだこれ、この飴、ぶにぶにしてるぞ……?」

試しに1つ拾い上げてみると、弾力がある。

その不思議な物体に目を近付けて観察しながら、どうしたものかと弄んでいると、そこにメーブルの顔が近寄ってきた。

「はむっ……………」

「あっ、こらっ、安全かどうか確かめてもないのに食うなっ、今すぐ吐け！」

「おおおお……………これ、美味しい……………。口の中で、つるつる滑って、グニグニして……………甘酸っぱあい……………」

「ゴクリ……………そ、そんなに美味しいの……………？」

シエラハゾが誘惑に震える手で、釜から金柑の実ほどの球体を拾い上げた。

綺麗なエメラルド色に澄んだそれは、極めて甘い匂いを放っていて、押しつぶすと弾力で彼女の指を押し返す。

「うんっ、姉さんも食べてみなよっ！」

「止めなさい。食べて平気かまだよくわかんないんだから、止め……………あ、ああああ……………?!」

「ん、んん……………っ、お、おお、美味しいわ！ 甘いつ、甘いわっ、

こんな甘いお菓子、あたし初めてっ、うふふふっ」

「ユリウス、天才……………。今日から、あがめるしかない……………。ウーラー、ウラー……………」

長耳の褐色娘たちは感動で瞳を輝かせて、モゴモゴと口を動かしていた。

「そんなに美味かったのか？」

「当然よっ、ユリウスも食べてみなさいよっ！」

「食べないと、一生の損……あーんっ……… して？」

「バカ抜かせ……。んなことしたら、お前らの経過を見るやつがいなくなるだろ……。試すにしても後にするよ」

「じゃあ、もう1つだけいい……？」

「そ、そうね……。何かあったらユリウスが見てくれるなら、いいわよね……ゴクリ………」

「ダメに決まってるだろ……。それ以上は止めとけ………」

こいつら完全に正気を失っている。

それほどまでに人を狂わせる魅惑の甘さなのだろうか。

錬金釜の中にギッシリと詰まった謎のやわらい飴ちゃんは、朝日に照らされてテカテカと透けていた。

色はともかく、確かにちよっと美味そうだった……。

・美人エルフに囲まれながらポーション作ろう 2 / 2 (後書き)

沢山のご支援ありがとうございます。

ご好評につき、+10万字の執筆を決めました。  
どうかこれからも応援して下さい。

「ん、なんだ？」

何かあったのか市長邸の方が騒がしい。

姉妹がこれ以上の盗み食いをしないように警戒しながら、あちらに目を向けると人影がこちらに駆けてきた。

よく見るとそれはシャムシエル都市長だ。彼は背中に白い何かを抱えていて、どうやらそれを小柄なネコヒト族が取り囲んでいた。

「ユリウスくんっ、急患です！ ポーションはもう完成しましたか！？」

「あ……その人、昨日の……」

「そんな、大変……っ！」

市長が抱えていたのは荷物ではなく、ネコヒト族の女戦士だった。それは偶然にも昨日、俺とメープルが迷宮前で出会った白い毛並みのネコヒトだ。

意識が朦朧としているのかその目には力がなく、彼の背でぐったりと弱々しい呼吸をしている。

「助けてくれニヤッ、錬金術師様！」

「モンスターからの傷はポーションが1番って聞いたニヤ！ 早くっ、早く作って！」

結果、彼らの注目が錬金釜に集まるのは必然だった。



そこにギツシリと詰まった丸いぶにぶにの塊に、彼らがいぶかしむのもまた必然だ。

「ユリウスさん、これは……これは一体なんですか？」

釜を中心に集まった構図になる。

誰もが正体不明の甘い香りを放つ物体を不思議がっていた。

「すみません、それは失敗作」

「あ……っ、これ、食べさせて……！」

メーブルがぶにぶにを拾い上げて都市長に突きつける。

「ちよつと待てっ、まだ効果がわからないのに、そんなもの患者に与えたら」

「大丈夫よっ、凄く美味しかったものっ、美味しい物は毒じゃないわっ！」

「いや論理的に話の流れがおかしいからっ！」

「ユリウスの意見、今は聞いている、場合じゃない……。都市長、降ろして……私があげる……」

俺が作るうとした物はポーションだ。材料もポーションのための物だ。

だったら与えないよりも、ダメで元々に賭ける方が確かに勝算がある。

メーブルは釜の中のぶにぶにを1つつかんで、大胆にも自分の口に入れた。

「ん……」

それを噛み砕き、すぐにぐったりしているネコヒト族の唇へと、己の唇を押し付けた。

意識の朦朧とした患者に与えるならば、それが最も早くて確実な方法だ。

唇を重ねることに、全く迷いが無いところが彼女らしかった。

「水を汲んで来たわっ、代わって！」

「姉さん、ナイス……」

姉のシエラハゾがオアシスに駆けてゆき、水をすくって戻って来た。

さすがに彼女の方は迷ったようだが、それでもひと思いに水を己の口に含んで、重体のネコヒトの口腔へと口付けで流し込んだ。

患者の腹には赤黒い血の滲んだ包帯が巻き付けられている。

出血がおびただしく、今にも死んでしまいかねないほどに真っ赤だ。だがしかし

「おお……効いていますよっ、ユリウスさんっ！」

「あ、ああ……」

「フニヤアアツ、姉御おおーっっ!!」

力なく細められていたネコヒトの目が大きく見開かれた。

いやそれだけではない。重傷を負ったというのに、その女戦士は機敏に飛び上がったのだ。

「ア、アタイ……っ、腹をえぐられて……! あ、あれ……痛くな

「いニヤア……」

誰もが回復の喜びよりも驚きに言葉を失った。  
本来あり得ないことが起きたからだ。

どんなに濃縮したポーシオンであっても、与えるなり死にかけの人間が飛び起きるなんて絶対にあり得ない。  
それはもはや回復薬という次元ではなく、神の奇跡と呼んでしまってもいい。

あの平凡な材料で、こんな結果が起きるわけがないのだ。作った俺が最も驚いていた。

「やったニヤアアツ、バンザイッ、バンザイッ！！」

「よかったニヤアア……ツ、ユリウスさんバンザイッ、姉御の命の恩人ニヤアアツ！」

眉をしかめて首を傾げる俺を、ネコヒト族たちが取り囲んで両手を上げて歓喜乱舞した。

彼らはいちるの望みに賭けてやってきたのだろう。喜びが俺の周囲で爆発していた。

「ムフフ……ユリウス褒められると、私も嬉しい……」

「ただと凄いわね、これ……」

どうにも思考が追いつかないのだが　つまり、このぶにぶにしたエメラルド色の玉は、失敗作ではなく、桁外れの回復効果を持った新型ポーシオンそのものだったようだ。

ポーシオン5本分を想定していた調合が、概算で奇跡のぶにぶに50粒分となっていた。

「ア、アタイ……。唇を捧げてまでアンタが助けてくれたこと、アタイ忘れないミヤ……。アンタはアタイの、命の恩人ミヤ……」  
「え……。？ いや、それは……。んむぐつ?!」

なんか大きな誤解があつたので訂正しようとする、メイプルとシエラハゾの手に口をふさがれた。

「そういうことにおきましょ」

「真実を伝えるのは、無粋……。唾棄すべき、クソムーブ……」

「いや、だが……」

「逆の立場で考えてみて……。同性の唇……。ぶちゅっ……」

「うっ……。言われてみれば最悪だな。知らない方が幸せか……」

「そういうことよ」

ところで都市長が何やら静かだ。

彼は深く思慮するようにあごを抱えて、さつきからずっと釜の中のぷにぷにを見つめている。

ようやく俺の視線に気づくと彼が口を開いた。

・失敗作の縁のぶにぶには百倍ポジション 1/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。

「保存性には欠けそうですが、重体の患者をも一瞬で癒す桁外れの効果と、この携行性……実に素晴らしい……。もし可能ならば、量産をお願いできますか？」

「いや、もう一度作れるかは、やってみないとわからない。それと材料があと1回分しかない。もう1度魔物素材を調達しないとだ」

魔物素材は魔力を持っているので、錬金術以外の魔法分野でも用いられる。

ポーションにばかり目が向けられるが、これも魔法科学には必須の戦略資源だ。

もしもこの調査を再び再現出来れば、将来的には魔物素材の消費が抑えられ、その分だけ錬金術以外の分野に素材を供給することが可能になる。

「では予定を早め、今すぐ冒険者ギルドを創設するといたしましよ  
う！」

「今すぐって……。年寄りとは思えないフットワークだな……」

「貴方が私の夢を叶えてくれたからですよっ！ よくやりましたね、シエラハズ、メープル！ 彼は素晴らしい人材です！ よくぞこれだけの才覚を見破ったものです！」

「い、いえ……。こんなに凄いとは、あたしたちも思ってもいませんでした……。本当に、世界経済をひっくりかせるかも……！」

「バンザイだニヤアーツ！！」

再び俺は首を傾げて、静かで美しいオアシスの輝きを眺めた。  
全ての出来事には因果があると師匠に教わったものだが、このぶにぶにとしたポーシヨンは因果律レベルでおかしい。論理的にあり得なかった。

「煽てないでくれ、こんなのマグレだ。再現出来るかもわからんぞ」  
「ふふっ……何よ、急に謙虚になっちゃって」

「俺はエリートだって、言ってたくせに……。ね、姉さん……」

「ねーっ、おかしいわっ、ふふっ」

「ムフフ……」

そう言われても、こっちは状況にまだ納得がいつていない。

けれども左右から美しいエルフの華やかな笑顔に囲まれると、ワクワクするような明るい気持ちがかみ上げて来るから不思議だ。

もしかして俺って、本当に凄いのか……？

だったらツワイクでのあのブラック待遇はなんだったんだ。

結局、流され損だったってことではないか。

「もう1度同じレシピで作ってみよう。喜ぶのはその後だ」

「アタイがお手伝いするミヤ！」

不思議だ。舞い上がるネコヒト族や都市長の姿を見ると、こいつらのためにもっとがんばろうと、大義とはまた異なる自然な善意が胸に沸き起こるから、どうにも不思議だった。

その後、先ほどと同じ緑のぷにぷにの再生産に成功した。  
最高級のポーションが約100粒も供給されたことにより、都市  
長たちは慌ただしく冒険者ギルドの創設に動き出した。

対する俺の方は素材切れで今はやることがない。

日差しが強くなってきたので、家に引き返して茶をすすっていた。

「ユリウス……わがまま、言っていい……？」

「いいぞ。あまりハイレベルな要求は飲めないが」

「安心して……縛らせろ、なんて言わない……」

「そうか、それは未来永劫、ぜってーOKしないから安心しろ」

「残念……。本気で残念……軽く、落ち込むレベル……」

「お前は本当にこじらせてるな……」

しかしコイツはあのネコヒト族の姉御を救った功労者でもある。

いち早くあのぷにぷに型のポーションを与えなければ、あのまま  
息絶えていた可能性だってあった。

「で、どうしたいんだ？」

「じゃあ、服脱いで、目をつぶって……？」

期待にメープルの目が輝いた。

普通なら抑圧することになる歪んだ性癖と、ここまで素直に共存  
しているやつを俺は他に知らない。

「誰が脱ぐかよっ、そっちの話じゃねーよっ！」

「あ……そうだった……。あのね、都市長、忙しそう……。だから



……」

「ああ……いいぞ、こっちはいいからシエラハズと一緒に手伝って  
こい」

「いいの……っ?」

「俺の許可なんていらないだろ。補佐は嬉しいけど、お前らは好き  
に動けばいい」

「ありがとう、ユリウス！ いつか絶対縛る……!」

「怖いから止めるよっ、そういう冗談!?!」

銀色の髪の毛を揺らして、少女が首をかしげる。

ただそれだけで可憐なのだから、若いエルフというのは卑怯だっ  
た。

「……? 本気だよ……?」

「そうか」

「うん……。大好きなユリウスの、哀れで、惨めな、うめき声……  
聞きたい……」

「なんでそんなものが聞きたいんだよ……」

「悲鳴、聞くと、生きている実感……するから……?」

コイツ、都市長の養女だっって言ってたっけ。

そうなるかと拾われる以前があつたわけで、それはきつと幸せなも  
のとは限らなかつただろう。

「……バカなこと言ってないで、早く手伝いに行ったらどうだ。無

理して倒れるかもしれないぞ、あの爺さん」

「あ、そうだった……。ユリウス、ありがとう、行ってきます！」

「いってらっしゃい」

妹が2階の姉を引っ張って出て行くのを見守ると、俺も思い付いたことがあって家を出た。

そうだ。材料切れで動けないのなら、材料をまた自分で取りに行けばいい。

俺はあのシャンバラ1号迷宮に遊びに行った。もとい、素材調達に行った。

「困るにやあつ、そういう独断行動はつ、シャムシエル都市長に怒られるにやあつっ!!」

「ついてくるな、ソロでやりたい」

「バカ抜かすにやっ！ 姉御を救ったくれた恩人をつ、1人で行かせられるわけがないんにやあつっ！」

「怪我をされたら困る」

「アホーッ、それはこっちのセリフにやっ!!」

ソロプレイは叶わなかったが、ネコヒト族の軽戦士と魔法使いのサポートのかいもあって、地下5階を守護していたジャイアントオーガを殲滅して、俺はその日の冒険を終えた。

メープルほどではないが、こいつらは小柄ゆえに機転が利いて使える。

亜空間転移の連発に最初こそ面食らっていたが、最後は見事な連

携を果たしてくれた。

・失敗作の緑のぶにぶには百倍ポーション 2/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。  
しつこいですがどうかご容赦下さい。

私はメイプル。ついこの前まではスパイをやっていたけど、今は新米にして天才錬金術師ユリウスのお手伝いさん。

姉さんさえその気になったら、私はこの状況に流される覚悟がバツチリだから、お嫁さんと名乗るのも別にやぶさかじゃない。

だって、ユリウスを選べば、私と姉さんはずっと一緒にいられる。だから私は今の生活に期待していた。

あ、少し脱線した……。

これは、私と姉さんが冒険者ギルドを創設しようと、都市長を手伝っていた頃の話。

同じ頃、ツワイク王国の工場では、実は縁の下の巨人だったユリウスが消えて、ゾクゾクするくらい、大変なことになっていた……。

あの殺風景なあのポジション工場の冷たい床に、ユリウスの同僚たちがはいつくばっていた。

工場の人々がユリウスに押し付けていた仕込みは作業は、実は大量の魔力と集中が必要な超重労働だった。

「は、はあっはあっ……や、やっぱきつい……。なんでこんなきつ

い仕事、休みなしで……っ」

両膝を突きながら、ユリウスをいじめた悪いやつが息を乱していた。

水に魔力をかけて、魔物素材を溶かす工程を、ユリウスがたった1人で受け持っていたから、それが消えたら大変なことになるに決まってる……。

そこまでは、私たちの想定通りだった……。

「なあ……アイツ、実はメチャクチャ凄かったのかな……」

「そりゃそうだろ……全部1人でやってたんだぜ、怪物かよ……」

今さら気づいてももう遅い……。

あまりに仕込みが大変だから、3人が代わり番こで魔力をかけることになっていた。

「もう無理だっ、交代だ、交代してくれよっ!？」

「ふざけんなっ、さっき交代したばかりだろ!」

「じゃあさ、もうちよい、手抜いちまうか……?」

「ああ……。それもそうだな……」

「いや、そうしようぜ……。じゃないとこっちが続かねーだろ……」

お城から増産の命令が来てからは、工場から休日が消えちゃった。だったらそんな仕事辞めて、逃げちゃえばいいのに。

いずれは私たちが作った新型ポーションが、この人たちの粗悪品を駆逐しちゃうんだから、我慢したって未来なんてないのに。

「ユリウスのやつ、どこに消えたんだろな……」

「戻って来てくれねーかな……」

「嫌だ嫌だ……もうこんな仕事嫌だ……いつか壊れちまう……。ユリウス、笑ったの謝るから、帰ってこいよ……」

無理……。ユリウスはもう、姉さんにメロメロ……。

昨日も姉さんの水浴びをずっとのぞいていたくらい、メロメロのあまーいハニートラップに、カニばさみでガツチリキープだから……。

私は潜伏魔法<sup>ハイド</sup>で身を隠して、そんなユリウスと姉さんを眺める。姉さんは……のぞかれていることに、もう気づいている……。

でも、明日も同じ時間、同じ場所で服を脱いで、オアシスで踊ると思う。

私は美しい姉さんと、ユリウスという危ついピエロを見るのが好き。

2人の情欲<sup>リビドー</sup>を感じて、ドキドキするから……。

・余話 少女メーブルの献身 1 / 2 (後書き)

今夜もう一度投稿いたします。

評価を押し下さりありがとうございます。



で、あちらのことはさておいて、私は今、あの日ユリウスと一緒に歩いたスラム街にやって来ていた。

これは都市長のお手伝い。ついに、昔のコネを活用する日がやって来た……。

「そこなガチムチなおっさん……いい仕事、あるよ……？」

「誰がガチムチだっ、いきなり失礼なガキだな！ ん……ありゃ、お前……まさかメーブルか？」

「久しぶり……おっさん」

「おう、久しぶりだ。いやしかし、全然成長しないな、お前……」

昔ここで暮らしていた頃、悪いこともした……。

お金を手に入れないと、過酷なシャンバラでは生きていけないから、みんなと力を合わせて人から物を盗んだ。

「余計なお世話……。もう未来の、旦那様いる……」

「うわっ……ソイツ、ロリコンかよ」

「うん、そう……」

ユリウスはロリコン。私に向けるやさしい笑顔は下心あり。間違いない……。

「それでね、おっさん……」

「いや、いや待て……。それ、犯罪だろ……？」

「その話はもういい……。それよりね、聞いて、おっさん……。大事な話……」

冒険者志望者を私たちは欲している。

だけど今の段階で外に情報が漏れると、迷宮の富を狙って、悪人や隣国が介入してくる。

……って、よくわからないけど、ユリウスと都市長が言ってた。だからこうして、昔の仲間を呼ぶ口実が出来て

「迷宮に、シャムシエル都市長による、冒険者ギルドの創設だと……」

「やってみない……？ 悪いこととして稼ぐより、ずっと、儲かる……。心も、痛まない……」

私は都市長に拾われたけど、普通の人はスラムから抜け出せない。スラムで生まれたら、ずっとスラムで生きる……。身体を売るか、奴隷になるか、犯罪を犯して生きるかしかない……。

「嬉しいけどよ、俺なんか出来るかな……」

「軍のみんなが、訓練、付けてくれるって……。キツイと思うけど、でも……」

「わかった。やる！」

「あ……。そう言ってくれて、良かった……」

「あ、それならよっ、他の仲間にも声かけてもいいかっ！？ まともなやつに絞るからよ……」

「口の軽い人間以外なら、おけ……。あ、旦那様にはね、口が軽いって、言われる……」

でもそうじゃない。ユリウスが面白いから、つい……。いじめちゃうだけ……。

ユリウスはかわいい。かわいいから、悲鳴を聞きたい……。ギヤーとか、グエーとか、叫んで欲しい……。

「ははは、恋は盲目だな。その彼氏、大事にしてやれよ」「恋……？ これって、恋なの……？」

「鈍いやつだな……。ソイツのこと、気になるんだろ？」

「なんでわかるの……？ うん、凄く、気になる……。何もしてないと、その人のことばかり、考える……」

もっと挑発したい。もっと姉さんに焚きつけたい。可能なら縛りたい。亀甲縛りがいい……。吊したい……。放置プレイも可……。

「それは恋だな。お前はソイツに恋をしてるんだ」

「恋……。性欲とは、別……？ 私、ユリウスの悲鳴を聞きたいだけ……」

「変わんねーな、お前……。なんかソイツが可哀想になってきたわ……」

「うーうん、ユリウスは、幸せ者だよ……？」

これは恋。この気持ちは恋。つまり私はユリウスが好き。出会ってばかりなのに、そんなの変……。

でも、私はユリウスの、うめき声と、悲鳴と、痛がる姿がもっと見たい……。

あと、私に笑いながら、頭を撫でてくれると……もっともっと嬉しい……。

だからたぶん、私はユリウスに恋をしている。その日、私はそう気づいた……。

・余話 少女メーブルの献身 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価

】をいただけると嬉しいです。

皆様のご支援のおかげで、HF月間81位に入れました。ありがとうございます。

1日目、シャンバラに拉致された俺は姉妹と都市長の願いに応じ、錬金術師としての第二の人生を始めた。

2日目、アドリブで作ったポーションが完全回復薬エリクサーの効果を発揮して、それがネコヒト族の女戦士を重傷から救い、都市長の推進する迷宮事業をも加速させた。

3日目、市長邸の図書館を借りてゆっくりと過ごした。何もしい日も大切だ。息抜きに1号迷宮に入ろうとしたら、なぜか見張りに逆ギレされた。

4日目、都市長のプロジェクトを手伝った。どうやらツワイクのポーション工場に匹敵する量産が俺1人で行えるため、これ以上供給しても現状は仕方のないところまで行き着いたようだ。

5日目、それが今日。  
その日も毎朝同じ時間に起きて、俺はヤシの木陰からシエラハゾの水浴びをのぞいていた。

こんなに毎日のぞいていたら、そのうちにバレてしまっただろうに、愚かな俺はどうしてもこの習慣を止められなかった。

美しいエルフがオアシスで身を清め、踊り回るその姿は、まるで古い伝承の世界に迷い込んだかのようなだった。

水浴びをする美しい女神に男が惚れて、事件が起きる。  
どこの神話にもきつとある、お決まりの展開だ。

「何やってるんだろな、俺……。こんなの、止めなきゃいけないのに……」

名誉のために言うが、あくまでのぞきは遠くからだ。

スケベ心がないと言えばウソになるが、それにも増して彼女の姿はただただ美しかった。

俺の知っているどんな女性よりも、清らかな存在に見えてくるのだから不思議だった。

手を出さない代わりに、これくらいならいいだろうと、自分勝手な言い訳を胸に刻んで、毎朝彼女を見つめた。毎日、毎日、毎日、飽きもせず。

「ふう……。そろそろ、行かなきゃ……」

一瞬、彼女の目がこちらに向けられたような気がして、俺は木陰へと頭を引っ込める。

息を殺してやり過ぐすと、彼女は岸边で服を身に着けて家に戻っていった。

バレたら謝罪の1つや2つでは済まない。

やっぱりこんなこと止めるべきだろうか……。だが、止められる自信がなかった。

明日も明後日も、俺はここに来るだろう。

さて、愚かな男の話はここまでだ。

シャンバラの冒険者ギルドは先日、事務員を含めて30名ほどの規模でついに始動した。

今日は訓練済みの精鋭だけがぶにぶにポーションあらためエリクサーを手に2号迷宮を下り、残りは軍と合同で練兵を行う予定になっている。

先日、暇つぶしで練兵を手伝った限りでは、誰もが意欲と希望を持っていて、これから訓練を支援してやりたくなった。

俺が追い風となって彼らの背中を押しつければ、どこまでも飛躍してくれそうで、やりがいがあったからだろう。

「ユリウス、都市長が呼んでる……」

「朝食の誘いか？」

「頼みごとがあるって……。ふふ……」

急にメーブルが表情を華やかせて、鈴の音のように高い声を響かせた。

「なんだよ……」

「姉さんは、世界で1番、綺麗……。クスツ……。ユリウスも、そう思うよね……？」

嬉しそうに甘ったるい笑い声を上げてから、メーブルは市長邸の方に俺の手を引いた。

もしかしてまた見られていたのだろうか……。

彼女の質問にはとても言葉を返せそうもなかった。



「ユリウスさん、貴方を世紀の天才と見込んでお願いがあります」

メーブルとシエラハゾも交えて、パンとチーズとサラダによる健康的な朝食を共にしていると、ようやく本題が切り出された。

俺はいぶかしむ感情そのままに都市長を見つめ返して、山羊の厚く濃厚なチーズをパンにはさんでかじる。

「爺さん、そうやっていきなり煽ててくると、続きの言葉を聞くのが怖くなるんだが……」

「それはすみません」

少しも悪びれずに都市長はほがらかに視線を跳ね返した。

最近は親しみを込めて、彼のことを爺さんと呼ぶ機会が増えていた。

「しかし貴方のそのぶっ飛んだ才覚を、このまま動かさずに寝かせておくのも、大変惜しいと思いまして……」

「だから大げさだ。俺はそんなに」

「全然、大げさじゃない……」

本題が始まってより、ずっとおとなしくしていたメーブルが口をはさんだ。

今朝ののぞき見もあって、シエラハゾの方を直視する勇氣はなかった。

「そうよ、ユリウスのエリクサーのおかげで、昨日は2号迷宮の探

索が大成功だったのよ。早くも地下6層目に到達して、そこでミスリル鉱石まで手に入ったんだから！ ミスリルよっ、あのミスリルッ！」

「はい。そのミスリルを加工して、あの精鋭パーティに支給すれば、さらに輝かしい成果が約束されるようなものです。あのパーティはもっと強くなりますよ」

そう言われても直接自分の目で見たわけではないので、今一つ実感に乏しい。

「やっぱり大げさだ」

「そんなことないわよっ。貴方のエリクサーがあれば、大怪我を負っても傷が治るのよっ!？」

「つまり……シャンバラの冒険者は、死なない……。それは、どこまでも、強くなれる……ってこと」

「それはまあ、確かに。大きなアドバンテージだな」

冒険者は殉職率の高い仕事だ。

いくらポーションがあっても、致命傷を負えば本来は癒し切るこ  
とができない。

エリクサーは冒険者の損耗率を下げ、将来的にはベテランを増  
やしてくれるだろう。

「そうそう、今夜お時間は作れますか？ 貴方に直接感謝の気持ち  
を伝えたいと、2号迷宮を任せた精鋭たちからお願いをされてしま  
いまして」

「それは遠慮する。まだ自分が凄いいことをしたという実感が湧いて

いない」

「そうですか、残念です。貴方がシャンバラの社会に認められてゆく様を見るのが、私の陰ながらの楽しみだったのですが……」

「その期待は嬉しいがあまり気乗りしないな……。しかし、そんな話のために俺を呼んだのか？」

都市長は静かに首を横に振り、パンの残りをほおばった。

ゆつくりと咀嚼して、彼は物静かにこちらに目を向ける。髪は白く色あせていたが、その目は聡明だ。

「いいえ、貴方が私の想像以上の成果を上げて下さるので、欲が生まれて……。よければ別件の依頼も受けてはいただけないでしょうか？」

「俺はまだ未熟者だと思うのだが、まあ先に話だけでも聞いておく」

「はい。では 枯れたマク湖の水を蘇らせて下さい」

口に運びかけたサラダを皿に戻して、シャムシエル都市長と視線をぶつけた。

表情が揺るがないところからして、これは本気で言っているようだ……。

「ムチャクチャな要求をしてくるな……。そういうのは、神様にでも頼めよ……」

「神はまだその時ではないと言っているようです。あなたの助けが必要ですよ」

枯れた水源を復活させる方法なんて、いまだかつて1度も聞いた

ことがない。

空の雲を取ってこいと言われたようなものだった。

だというのにあの姉妹が席を立ち、俺の左右を取り囲む。

シエラハゾなんて豊かな胸の前に両手を組んで、懇願するような  
仕草だった。

・履歴楼へミラーージュ 2 / 3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】をいただけると嬉しいです。

「お願いユリウス。あたしも無理なのはわかってるわ……でも、あなたならもしかしたら……」

「俺は神様じゃない。出来ることと出来ないことの違いは理解しているつもりだ」

「スラムのこと……覚えてる……？」

「覚えている。初日に案内してくれたあそこだな」

「うん……。あれが広がったのは、マク湖オアシスで暮らしていた人たちが……離散したのも、一因……」

「湖が蘇れば彼らも元の家に戻れるわ。お願いユリウス、助けてあげて……！」

「あそこの人たち……薪なしで、夜を過ごす……」

迷宮とポーシヨンによって経済が立ち直れば、そんな彼らに手を差し伸べる余裕も生まれるだろう。

しかしそれがどれだけ先になるかわからない。

助けてやりたいが、やはり方法らしい方法が全く思い付かなかった。

「ユリウスさん、考えてもみて下さい。エリクサーを生み出した貴方が、さらに枯れたオアシスを蘇らせたとしましょう。そうになると、シャンバラの民は貴方をどう思うでしょうか？」

「そりゃ、どうって……感謝するだろうな」

「はい、貴方の名声は鰻登りです」  
「よっ、この超スーパーエリート……」

「民は貴方をシャンバラの英雄と称え、誰もが貴方を憧れと尊敬の眼差しで見つめるでしょう。我が国の歴史書には、ユリウス・カザエルの名が永遠に刻まれることになります」

「……マジで？」

俺はエリートだ。エリートは実力相応に評価されなくてはならない。

俺は金はそのままで好きでもないが、名誉は好きだ。煽てられるのは好かないが、評価は大歓迎だ。

「マジっていうか……当然……？」

「みんなユリウスに感謝してるわ。あたしはもっともっとたくさんの人に、ユリウスの凄さを知ってほしい。だからこの話、受けるべきだと思っの。あたしたちも全身全霊でサポートするから！」

「あっ……ちょ、うっ……」

それはきつと、彼女なりのサービスであり色仕掛けだ。

シエラハゾは俺の右手を熱意のまま握ると、ふいに色仕掛けでも思い付いたのか、胸の上へと抱き寄せて来た。

「お願い、ユリウス……あ、あたしっ、なんでもするわ……。なんでも、するから……」

「あ……足りないなら、私は左手の方を……」

「ああもっ、わかった！ わかったからもういいっ！ 爺さんの前でそういうの止めるよっ?!」

シエラハゾの手をふりほどいて、俺は両手をテーブルの下に隠した。

それから都市長と姉妹の言葉を頭の中で思い返す。

「エリートの、その上の世界か……」

「はい。成果次第では、私の跡を継いで下さっても構いませんよ」

「エリートの中のエリート……。ユリウス都市長……。ばんざーい、ばんざーい……」

3年前、アリ王子のバカのせいで失脚する前は、俺にだって大きな野心があった。

それは宮廷魔術師として実力相応の評価を得ること。つまりは宮廷で最も優秀な魔術師として、ナンバー1の地位に至ることだ。

「いくらなんでも露骨におだてすぎじゃないかしら……」

そうか……。

このままシャンバラの人心を得て、さらに実績を積み重ねてゆけば、俺はエリートの中のエリートになれるわけか……。

そしてユリウス都市長か……。いいな、非常にいい響きだ。

実力をかね揃えた超スーパーエリートである俺は、さらなる高みに上る権利がある。

ククク……。

エリート万歳……。俺、万歳……。

俺は決して権力欲に溺れたのではない。

ツウィク最高峰の元魔術師として、スーパーエリートとして、こ



れから野心と榮譽を取り戻してやるだけだ。よし……！

「その話、乗った！」

「の、乗るのっ!?!」

「ああっ、ここまで来たら金と地位と名譽が欲しいっっ!! なぜなら俺は、エリートだからだっ!!」

開き直るとこれが爽快だった。

称賛されたいと思つて何が悪い。野心はエリートの本能だ。

「清々しいほど真つ直ぐな権力欲ですな……」

「そ、そうね……。上手く煽てられたのはいいけど、いいのかしら、これで……」

「ユリウスのそういうところ、私、好き……。願わくば、煩惱にも、素直になる……。昔の偉い人、言った……。英雄、エロを好む……」

「……で、マク湖というのはどこだ？ 予算はどれくらいあるんだ？」

「スルーされた……」

「そういう話をするからよ」

もしかしてメーブルには、スルーが最も有効なのではないだろうか。

すすごすと姉妹は己のテーブルに戻つて、慌ただしく朝食の残りへと手を付けていった。

「議會を説得して、金貨300枚の予算を確保しました。シエラハ  
ゾ、メーブル、ユリウスさんを案内なさい」

最小限の予算に抑えれば、その分だけの金貨が手元に残る。  
解決の糸口は全くつかめないが、ダメだったらダメで謝ればいい。  
元から無理な話なのだから。

「わかった。だったらその後、ツイイクに一時帰国してもいいか？」  
「それダメ……。今さら、逃がさない……」

「逃げる？ あっちに俺の居場所なんてもうないぞ。お前らのおか  
げでな」

「それもそうだった……。じゃあ、なんで……？」

「王立図書館から、錬金術関連の貴重本をパクツてくる。何、亜空  
間の扉を使えば、行き来も窃盗もどうということはない」

前々からやってみたいと思っていた。

この亜空間転移の力を使って、貴重本の書庫に忍び込む。錬金術  
師として未熟な俺には、先人の知識レシビが必要だ。

「ふむ……。メープル、シエラハゾ、貴女方はこれをどう思いますか  
？」

「大丈夫、だと思う……。だって、ユリウスは……」

意味深に妹は姉の横顔を見る素振りをして、相変わらずのちよっ  
と退廃的な笑みを浮かべた。

「じゃあこうしましよ。ユリウスがもし逃げたら、またあたしたち  
が拉致して連れ返すわ。これだけ優秀な人を、逃がしてたまるもの  
ですか」

「結局最後は実力行使かよ……」

連れ返すと言ってくれたことが嬉しかった。

国は俺を都合のいい奴隷のように扱ったが、こいつらは違う。俺の力を望んでくれている。

「それは名案です。では……あのスラムの皆に、貴方の手を差し伸べてやって下さい。私は都市長として、彼らを助ける義務がありますが、今日まで力及ばずじまいです。お願いします、ユリウスさん、我々にどうかそのお力を……」

「まずはやるだけやってみる。応急手当くらいなら、もしかしたら出来るかもしれないしな」

言われなくとも俺だって都市長と同じ気持ちだ。

こんな優雅なところで暮らしているのに、すぐ近くにスラムがあって、人が飢えて凍えているだなんて、これではいい気分で夜眠れない。

急ぐように朝食を平らげてゆく姉妹をしばらく見守ってから、俺はテーブルから立ち上がって、マク湖とやらの調査に赴くことにした。

「ユリウス……私、見直した……。ユリウス、いい子いい子……」

「ヒューマンのこと見直したわ。あなたは立派よ、ありがとう」

メイプルはよっぱど今回の協力に感謝しているのか、しばらく二の腕に張り付いて離れなかった。

シエラハゾは 迷いながらも俺の手を取って、また胸元へと抱き込んだ。

恥ずかしいなら色仕掛けなんて止めればいいのに、無理をしてい

る姿はどうしようもなく愛らしかった。

シャンバラを豊かにすれば、この姉妹が喜ぶ。

今となっては、それだけでも十分な動機になった。

・履歴楼へミラーージュ 3 / 3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったのなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 【いただけると嬉しいです。

市長邸のラクダを借りて、都から西に1時間ほど進むと大きな町が見えてきた。

家々が円を描きながら立ち並び、その中央には陥没が生まれていった。

「これはまた、綺麗に枯れたもんだな……」

「もう誰も住んでいないはずよ。水がないんじゃ、生活しようがないもの……」

「砂漠は、地獄だぜ……ヒャッハー……」

その陥没がマク湖だった。岸边は砂地だったが、ある程度深いところからは土が堆積していて、それがカラカラに乾いて固まっていた。

「結構でかい町だったんだな。こんなのが丸ごと1つ潰れたら、そりゃ不景気にだってなるだろな」

「どこから、手を付けよ……?」

「わからん。しばらく見て回るっ」

「そうね……」

木も草も何もかもが枯れ果てていた。

無人の町はまるで墓標のようで、屋気楼と消えた幸せな生活が俺たちの目にも恐ろしく映った。

これと同じ現象が都で起きたら、シャンバラは終わりだ。

実際に目にしてみると、これは軽視出来ない危険な兆候だった。

「枯れた原因について、お偉いさんはなんて言ってるんだ？」

「わからない、ですって」

「ま、原因がわかってたらもつと具体的な依頼になるか」

「地下水の流れが変わった可能性がある、ある学者さんが言っていたわ」

「ふーん……」

「もしも水脈の流れが原因ならば、それは人間の力ではどうにもならない。」

「消えた地下水の流れを追った方がまだマシだろう。」

「何か気になる物があったら報告してくれ」

「予定に従って、俺たちはマク湖のあちこちを歩き回り、広い砂漠からたった1つの手がかりを探した。」

・消えたオアシス 1/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】【いただけると嬉しいです】。

各話の分割の都合上、文字数の少ない回が出ます。  
昼夜更新を続けていきますので、その点どうかご容赦下さい。



「ユリウス……氷魔法、私に撃って……」

「もうそろそろ正午を迎えるわ……。日が落ち着くまで建物で休まないよ、あたしたちが干物になっちゃうわ……」

カラカラの太陽の下、俺たちは根気強く調査を続けた。

だがむなしくも何の物証も得られていない。悔しいが状況はシェラハゾの言うとおりであった。

「わかったことと言えば、ここが無人で、水が一滴すらないってことか……」

「悔しい……ムカつく……。ユリウス、つねってもいい……?」

「人に当たるな」

「違う……。ユリウスの悲鳴、聞いたら、がんばれる……」

「この子、昔からこうなのよ……。ねえ建物に入らない? あたしもうクラクラしてきたわ……」

「いてっ……」

不意打ちで手の甲をつねられた。

「違う……。もっと、苦しそうに言って……キャッ?!」

仕返しに腹をつねり返してやると、メーブルが悲鳴を上げてうずくまった。

やるのはいいが、やられるのには弱いようだ。

「何やってるのよ……。頭がゆで卵になっちゃう前に戻りましょ……」  
「ん……。待って。今の、ちょっと、感じた……」  
「んなこと誰も聞いてねーよっ!？」

「あ、じゃなくて……。なんか、この下……。変な魔力、感じない……?」  
「魔力……? お……」

言われて初めて気づいた。確かに系統不明の妙な力が足下から感じられた。

「お前も感じるか?」  
「私はそういうの苦手なの。剣と弓の方が得意かしら……」  
「あのねあのね、ユリウス……。姉さん、おっぱいに、弓の弦が……」

「その話は止めてよっ、メーブル! あれ凄く痛いんだからっ!」  
「私の汚れた心には……。自慢に、聞こえる……」

巨乳は弓手に向かないと、昔からよく言われる。

俺の注目がマント越しの胸に集まると、シエラハゾが隠すように腕で覆って、首をしきりに左右に振って恥じらうのが愛らしかった。

「……バカやってないで離れてくれ。ちょっとぶっ放してみろ」  
「おけ……」  
「ぶっ放すってどうするつもり……? あ、こらメーブルッ、変なところ引っ張らないで……」

話が早くて助かる。メイプルがわざとマントがはだけるように引張ると、すぐにその場を離れてくれた。

一方の俺は息を大きく吸って、意識を集中し、足下の魔力を見下ろす。

ナイフを杖代わりにして、俺は最大出力まで魔力を増幅すると、宣言通りにぶっ放した。

「アースグレイブ!!」

アースグレイブは大地を槍にする魔法だ。

ぶっ放せば地面が隆起して、隆起したやつを吹っ飛ばせばそこに空洞が生まれる。

俺は隆起した土と砂の槍を、算段通りに爆裂魔法で吹き飛ばして、地下へと続く空洞を完成させた。

「あなた……つくづくとんでもないのね……。なんでそんなに魔法が上手いのに、左遷なんてされたのよ……」

「それはこっちが聞きたい。それより見てくれ、地面の下に、空洞がある」

「おお……ビンゴだね……。もしかしなくとも、私のお手柄……?」

「まあな。行ってみよう」

「ま、待って、戻れなくなったらどうするつもり……!?!?」

「そう言えばそうだな……。まあ、そのときは全て吹っ飛ばせばいいだろう」

「へへ、それ、ゾクゾクする……」

不安がるシエラハゾを説得して、俺たちは空洞を滑り下りた。  
するとその空洞の先には、マク湖消滅の答えがあった。

迷宮だ。枯れたオアシスの底に、迷宮が眠っていた。

・消えたオアシス 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】【いただける】と嬉しいです。  
今夜ももう一度更新します。

「なあ、これは仮説だが……これが水涸れの原因なんじゃないか？」

俺たちの目前には今、『樹の迷宮』と系統付けられるものが立ちはだかっていた。

その扉はまるで磨かれていない翡翠のような材質で、触れるとひんやりと冷たかった。

砂漠の地下だというのに、ここでは扉の周囲には壁となって樹木がうねり、その葉は決してしなびれることなく青々と息づいている。

「仮説っていうか……まんま、これが原因だと思う……」

「そうね。この葉なんて憎たらしくくらい瑞々しいもの。中に地下水が流れ込んでるとしか思えないわ」

姉妹が樹木に身を寄せると、エルフという種族ゆえかこの上なく緑の背景に似合った。

俺は2人に見とれかけた頭を振り払って、翡翠色の扉を押し開いて奥をのぞく。

内部は典型的な樹タイプの迷宮で、岩盤と樹木の壁と若草の床で覆われていた。

カラッとした砂漠の気候とは正反対に、中は涼しく湿潤としてい

る。

「では行く」

「えっ……？　ちょ、ちょっと待ってそれは困るわよっ！　だって

あなたが怪我したら、誰がみんなのエリクサーを作るのよっ!？」  
「姉さん……だから言ったでしょ……。この人、とんでもないよ、  
つて……」

腰のナイフに手をかけて1人で迷宮にどンドン入り込むと、姉妹  
が慌てて駆けて来た。

シエラハゾは俺の正面に回り込むと、両手を広げて道を塞ぐ。

「あなた人の話聞いてるっ!？　ここであなたが危険を冒すことな  
いじゃない!」

「これは調査の延長だ。それにここまで突き止めて、手ぶらで帰る  
なんて考えられん」

すり抜けようとすると、頑固にも彼女は俺の突破を阻んだ。

「メーブルツ、手伝って!」

「姉さん……たぶん、無理だと思うよ……。その人、断崖絶壁で、  
平気で片足立ちするような……。危機感とか、そういうの、完全に麻  
痺してる人種……」

酷い言われようだ。

つまらない言い合いで立ち往生する気はないので、俺は一步下が  
ると見せかけてから、素早く亜空間を開き、シエラハゾの背後へと  
転移した。

「行くぞ」

「えっ……な、何、今の……?」

「ただの短距離の亜空間転移だ。ここからは俺の心配より、自分の  
心配をした方がいい。……行くぞ」

「へーき。ユリウス、クソ強いから……大丈夫だよ……」

マク湖を生み出していた地下水が、この迷宮のどこかに流れ込んでいるはずだ。

湖の底に迷宮が生まれたことと、水涸れが無関係とは思えない。

「ちょっとユリウスッ、もうっなんなのよっ、あなたって人はっ！」

「だったらカバーしてくれ。あの扉の向こうに何かいるぞ」

「ドン引き……この人、また前衛する気だ……」

「魔法を撃つより、転移して急所を突いた方が楽だ」

「ダメよっ、都市長に怒られるわ！」

「いいから行くぞ」

「全部よくないわよっ!!」

制止を無視して扉を開き、俺は標的を発見するなり転移した。

動く樹木の怪物トレントが3、後衛に魚男のサハギンアーチャーが4だ。

狙撃を受けるよりも速く、亜空間という裏道を使ってサハギンの背後に回り込むと、俺はナイフで敵の急所を突いた。

シエラハゾが細剣を抜き、こちら目掛けてトレントに突撃するのを見届けると、俺は立て続けにサハギンをもう1体片付けた。

「敏捷性低下！<sup>スロウ</sup> 守備力弱体！<sup>アーマーブレイク</sup> お姉ちゃん、いいよっ!!」

「補佐する側の身にもなりさいよっ、もうっ!!」

トレントの3m近い巨体から繰り出される樹木の槍を、シエラハゾはまるで体重がないかのように軽やかにかわし、その細剣で怪物



の顔面を貫いた。

あつちは大丈夫そうだ。こっちは後ろを突かれて恐慌状態のサハギンを、転移からの奇襲で全て片付けた。

「消し炭になっちゃえ……ファイアーツ！」

片方は焼かれ、もう片方は何度も貫かれて、2体のトレントが動きを止めた。

残る1体は俺が片付けよう。トレントの上空に転移すると、俺はやつらの急所である光る木の実を刃で刈り取った。

たった一撃でトレントが倒れ、少し遅れてフロアの全てのモンスターがドロップへと変わっていた。

「つ、強いわ……。いえ、強いというより……なんなのよっ、あなたっ!？」

「魔法の使い方が、変態的……」

「褒めてるのか、それ？」

「うん……変態は、いいこと……」

「よくないわよ……っ」

姉妹の言葉を軽く聞き流しながらドロップをかき集めた。

トレントの魔石が3、枝が2、サハギンの鱗が4に、水色のプリズンベリルが1だ。

「ここはなかなかドロップ率がいい。さあ行くぞ」

「ユリウス……あなた、全部おかしいわ……。あたし、そんな器用に転移魔法を連発する人なんて、見たことないわよ……」

「同感……。なんで閑職に追われたのか、イミフ……」

「今思えば、凄く性格が悪かったからだろう」

ぐいぐいと前進すると、シエラハゾが隣に並んできた。

メーブルは後衛なので後ろに控えて、俺たちのやり取り眺めている。

「この上なく、納得……」

「そうね、空気が読めないのは知っているわ。だけどあたしたちが調べた限りでは、悪いのはアリ王子の方よ」

「王子がユリウスの提案、聞いていれば……戦争の結果は、違った

……」

「お前ら、そこまで調べ上げていたのか……」

2人の諜報力に驚くまもなく、下り階段の先に新しい扉が現れた。

うなずき合って内部に突入すると、今度はサハギン軍団だ。ソードマン、アーチャー、マジシャン合計13体を、俺たちは前後から一網打尽にした。

やはり妙だ。樹の迷宮だというのに、水の迷宮で現れるような水棲系が現れている。

それは俺たちの仮説を裏付けて、前へ前へと進ませた。

・水涸れの原因 樹の迷宮 1 / 3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 【いただけると嬉しいです。

この迷宮では、地下5階が1つの節目になっているようだ。  
快進撃を続ける俺たちの前に、ハサミを持ち、巨大な殻を背負った怪物が立ちはだかった。

「巨大ヤドカリか、コイツは少し苦手だな……」

「今までで一番、磯臭い……」

「来るわっ、メーブルっ弱体をお願いっ！」

乱暴に言ってしまうえば巨大なヤドカリだ。

そいつがハサミを持ち上げて、見かけに反する敏捷性でこちらに突っ込んできた。

このまま突撃されると少しまずいので、俺はライティングボルトを詠唱し、ハーミットクラブの真上に転移すると落雷を叩き付けた。

動きが鈍り、後衛であるメーブルが退避する時間と、シエラハズの反撃の時間が生まれた。

「メーブルッ、いつものやつよっ！」

「りょー。守備力弱体……っ、3発全弾発射……っ！」

弱体魔法の3段重ねに合わせて、シエラハズが刺突を乱れ打ちした。

だったら俺は最後のトドメを受け持とう。魔法属性の物理攻撃、アースグレイブの増幅に入った。

「当たらないわよっ、そんなのっ！」

反撃のハサミが何度も繰り出されるが、シエラハズはマントをはためかせて全てを回避した。

彼女は火力には恵まれていないものの、前線を維持する能力に秀でていた。

「ユリウスッ、トドメをお願い……!!」  
「追いつきの、<sup>アーマーブレイク</sup>守備力弱体……っ」

俺の補佐として都市長が差し出した姉妹は、一緒に戦ってみれば、恐ろしく使える連中だった。

無防備に背中をさらすハーミットクラブの足下で、俺は過剰増幅したアースグレイブを発動させて、磯臭いヤドカリ野郎を蜂の巣にした。

激しい振動の後に大地の槍が剣山となって敵を貫き、名だたる冒険者たちを苦戦させるハーミットクラブを屠った。

「あ……っ!? もしかして、これが噂の……宝箱？」

「あたし、初めて見たわ……。ふふふっ、何が入っているのかしらっ!?」

巨体が消えて、そこに2つの箱が現れた。

片方はメーブルが入れそうなくらい大きく、もう片方は子猫が限界くらいの小ささだ。

「1体から2つも現れるなんて珍しいな……」

「欲張り……大きい方、開ける……。小さい方が、正解……」

「だったら小さい方から開けましょ」

トランプのたぐいはなさそうだ。

小さな銀色の箱を、エルフの姉妹が瞳を輝かせて開けるのを見守った。

「なんだ、それ……？」

「これって、人形、なのかしら……」

「小さくて、まるくて、不思議なフォルム……。でも、かわいい……おわーっ!？」

箱に入っていたものは、長い腕を持った変なゴーレムだった。

材料不明の白い身体は子猫くらいの大きさしかなく、1つ目と思われた頭部には、いきなり『|』との文字が浮かび上がった。

「ココハ、ドコ……？(？|?)」

「シャンバラだ」

「アナタたちハ、ドナタ……？(・|・)」

「え、ええっ、えええーっっ、喋ってるわよこの子っ!？」

「私はメーブル、こっちは姉さんのシエラハゾ……。それからあれが、ジョン……」

「ジョンって誰だよっ、俺はユリウスだっ!」

「……レグルス様？(||)」

「ユリウスだ。ユリウス・カサエル、錬金術師だ!」

いや、俺はゴーレム相手に何をムキになっているんだ……。

しかしこのゴーレム、不思議だ。人間との意志疎通能力のあるゴ

ーレムなんて、今まで一度も見たことがない。

何より奇妙なのは、のっぺらぼうの顔に光を浮かばせて表情を作るところだ。

「ワタシ、ハ、ニア、デス。……ハジメマシテ、メーブル、シェラハゾ。アト、ジョン（・ー・）」

その白くて腕の長い変なゴーレムは、メーブルの手を借りて箱から這い出すと、兵士たちのように敬礼をした。

「ジョンじゃねーつつてんだろっ、ユリウスだっ!」

「ジョン、ニ、シマス（＝＝）」

「ゴーレムのくせに人に妙なあだ名付けんじゃねーよっ!？」

「ソレデハ、マスター・ジョン。ニア、ニ、ご命令ヲ……」

「だったらこれは最初の命令な……。俺のことは、ユリウスと呼べ……」

「ワカリマシタ。ジョン（@\_@）」

「全然っ、わかってねーじゃねーかよっっ?!」

俺を振り回すなんて、ゴーレムのくせにやるじゃないか、コイツ……。

機械と言い合うのもバカらしくなって、俺はもう片方の宝箱に手をかけた。

「気に入った……私の、妹分に、してやる……」

「ソレハ光荣デス、メーブル姉貴（＝＝）」

「不思議だけど、はあ、確かにちっちゃくてかわいいわ……。なんなのかしら、これ……」

知らん。迷宮は別世界に通じているとも言われているので、たぶんこのゴーレムはこっちの技術ではない。

つまり、考えるだけムダってことだ。

「ニア、ハ、ロボデス。人ヲ、支援スルタメ、ニ、作ラレマシタ。カワイガツテ、下サイネ（・・）」

すっかり姉妹はその変なゴーレムが気に入ってしまったて、ベタベタと手乗りサイズの小さな体を撫で回していた。

それを横目で見ながら、大きな宝箱の方を慎重に開いてゆくと、ずいぶんと意外な物が入っていた。

それは絹だ。光沢のある純白と、薄桃色の生地が箱の中に折り畳まれていた。

「中身、なんだった……？」

「絹だ」

「え……っ」

「あ、本当……綺麗……」

2人はそれを宝箱から拾い上げた。

メープルが気持ちよさそうに頬ずりをすると、シエラハゾもつられて白い生地に顔を埋めた。

「迷宮から加工品がドロップすることは極めて希だ。しかもこんないい布が手に入るなんて、ほとんど奇跡みたいなものだな」



軽い気持ちでそう言うと、姉妹の瞳がこちらに釘付けになった。けれどもそれは無言の凝視だ。どちらもぼんやりとしていて、何を考えているのかわからなかった。

・水涸れの原因 樹の迷宮 2 / 3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 【いただけると嬉しいです。

「なんだよ、何か言えよ……」

「奇跡つて、運命……?」

「そ、そうね……。寶石に加えて、絹まで現れるなんて……。偶然だとしたら、こんなの出来過ぎよね……」

「なんの話だ」

「ニア、モ、キナリマス。後デ、教エテ下サイ(〃〃〃)」

絹は荷物になる上に、他の布と比べて繊細で貴重だ。

下に進むならば、ここに置いて後で回収するべきだろう。

「それより先に進むぞ。それは荷物になるからここに置いて」

「嫌ですっ、これは誰にも渡せませんっ!」

「姉さんに同じ……。これは、運命の証……。誰かに盗まれたら、大変……」

「そうか。よくわからんが、ずいぶんと気に入ったんだ……。だつたら少し下を見てくる」

彼女たちは絹に夢中で、俺の言葉なんてまともに届いていなかった。

欲しいなら売らずにくれてやってもいいな。

そつ心に描きながら下り階段を進むと、行く先から水の流れる音が聞こえてきた。

もしかと思ひ駆け下りると、下り階段の続きが水没していた。

樹木の壁には大きな空洞が出来ており、そこから冷たい地下水が勢いよく吹き出していた。

仮説は現実のものとなった。

地上に湧き上がるはずの水は、地底の彼方で迷宮へと流れ込んでいた。

「やっぱり原因は迷宮だったのね」

「そうみたいだ。絹はもういいのか？」

「メープルとニアちゃんに任せたわ。それよりこれを塞げば、オアシスに水が戻るのよねっ!？」

「ああ、ただどうやってこれを塞ぐかが問題だな。応急手当て氷魔法を放てば、一時的に塞ぐことは可能だが、結局はまた底が抜ける」

水を止めようにも上手い方法が見つからない。

あふれ出す水の量からして、これを塞ごうとするとかなりの水圧がかかる。補修部にはその水圧に耐えられるだけの処置が要る。

「困ったわね……。でも、ユリウスならどうにか出来るのよね……」  
「？」

「いや、なぜそうなる……」

「だってユリウスだもの。ツワイクの工場で見つけたときから、あたしはあなたを天才だと思っているわ」

「そうやっておだてるな」

しかしあの絹といい、ニアといい、このマク湖迷宮には大きな可能性がある。

迷宮は鉱山よりも貴重だ。

そしてこの大穴を塞がなければ、これより下のフロアに挑戦することも出来ない。

「さすがに無理かしら……?」

「いや、今すぐ本国に戻ることにする」

「えっ、ま、待って……っ、せつかく絹と宝石が手に入ったのにつ、帰っちゃダメよ!」

「今朝言ったとおり本をパクッてくるだけだ。必ず戻る」

シエラハゾは不安半分、不満半分といった様子で唇を突き出していた。

美人にそんな顔をされると、悪いことをしているような気分になつてくる。

「だったら、交換条件があるわ! あの絹、あたしたちにちょうだい!」

「いいぞ。ベッドシートにでもなんにでもするといい」

「あ、あなたあたしたちが、あれをベッドシートにすると思ってたの……っ!??」

「違うのか? 頼ずりをしてたじゃないか」

「はあ……もういいわ……。でも必ず戻ってきてね。戻ってこなかったら、連れ戻しに行くんだから、覚悟してなさいよ……?」

「ああ、必ず戻る。昼間ほとんどもない暑さだが、ここはカラッとされていて気持ちいい。俺はシャンバラが気に入ったよ」

出会ってまだほとんど経っていないのに、シエラハゾは微笑みを浮かべて俺を信頼してくれた。

だから俺はそれに笑い返して、彼女と一緒にメーブルとニアと合流して、地上へと出た。

「どれくらいで、戻る……?」

「長くて4、5日。順調なら3日で戻る」

「わかった……寂しいけど、我慢する……。ユリウスも、姉さんの水浴　むぐう」

「口が軽いにもほどがあるって言ってんだろっ、お前っ!?!」

水浴びを見れないのは、ハッキリと本音を言えば、非常に惜しい。シエラハズの無防備な微笑みを見るのが、日々の喜びと言ってもいい。

だがこれはやらなければならないことだ。  
さっそと行って、人知れずパクツて、戻るだけだ。

「マスター、旅立ツ前ニ、ニア、ニ、ゴ命令ヲ……」  
「そう言われてもな。そのちっこい体で、具体的に何が出来るんだ?」

「ナンデモ、デキマス。マスター、ハ、ナニガ、必要デスカ?」  
「?」  
「そうだな……金が欲しい」

「カシコマリマシタ」

「……お前、本当にゴーレムか？」

「ゴーレム、違イマス。ニア、ハ、ロボデス（＝へ＝）」

まあ、そこはどっちでもいい。

俺は亜空間の扉を開いて、もう行くと意思表示をした。

「じゃあな」

「ユリウス、行ってらっしゃい……。絶対、絶対戻ってこなきゃ……ダメだよ……？」

「絶対よっ!!」

「ニア、オ戻リニ、ナルマデ、ガンバリマス（・ー・）」

変な超小型ゴーレムと、エルフの姉妹に微笑み返して俺は扉をくぐった。

これから国に戻って、王立図書館から錬金術関連の書を盗む。

その中にきつと、マク湖とそこで暮らす民を救う糸口があるはずだ。

大切そうに絹布を胸に抱いて、どこか幸せそうにうつとりとする姉妹の姿が、旅立ってもなお頭から離れなかった。

なんだか最近の俺は変だ。毎日、あの2人のことばかり考えている……。

・水涸れの原因 樹の迷宮 3 / 3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】

【いただける】と嬉しいです



・拉致された魔術師 図書館を荒らしに再び国へと戻る

長距離の転移は、長く世界の裏側に身を置くことになる。

こちら側の世界には色彩というものがなく、足下には細い光によりマス目が刻まれていて、空を見上げても星も月も何もない暗闇が広がっている。

ときおり流星のようなものがこの世界を行き交うが、俺たち魔術師はその正体を誰も知らない。

この世界がなんであるか、どうやって亜空間転移の術が編み出されたのか、全く知らずにこの力を使っている。

1つの制約として、他人を連れて転移してはならないと師匠に教わった。

それは非常に危険で、禁忌を破ったがあまりにこちらの世界に戻れなくなったり、あるいは数年後の未来に飛ばされることになったとも聞いた。

反面、移動手段としては最高峰だ。

馬の3倍とも5倍とも言われる速度で、地形を物ともせず移動できる。

だからこそ俺たちは宮廷魔術師は、古くより王族たちに重用されてきた。

妖しい存在だと警戒しながらも、王たちは俺たちを利用する他になかったのだ。

「ツイイクは今どうなってるんだろな。本当にあの工場を支えてい

たのが俺だったとしたら……。見つかったら帰しちゃくれないだろうな」

俺は色のない、世界の裏側を歩いて歩いて歩いて、まずは人気のないツワイク王都の丘へと出た。

ツワイクは春だった。そこには緑にあふれる肌寒い世界があり、遠い山岳の彼方を見れば白い積雪がまだ残っていた。

・

「ユリウス……?! ああよかったよ、無事だったんだね！」

「院長先生、お久しぶりです」

まずは孤児院に寄った。

きっと俺のせいで迷惑がかかっているだろうから、わびを入れたかった。

院長は母親のようにやさしい笑顔で俺を迎えてくれた。

クソみたいな偽善者の多いこの業界で、これだけの真心をくれる人は彼女の他にいない。

孤児院と言えば聞こえはいいが、世の中には寄付目当てで孤児をだしにする偽善者が多い。

金貨を20枚。まともに育ててくれた恩返しに、俺は院長先生のテーブルに積み重ねた。

「そのお金……本当にあんた、国を裏切ったのかい……?」

「ある国に拉致された。だが今は自分の意思で、その国のために働

いている。これは汚い金じゃない、受け取ってくれ」

「そうかい……」

「俺はわびと恩返しに来たんだ。受け取ってくれきゃ困る」

そう伝えると、院長は金貨を受け取ってテーブルの棚へと押し込んだ。  
んだ。

その金が孤児なかものコートや薬になるなら、ちっとも惜しくない。

「あんたが消えてまもなくして、城の連中が来たよ……。裏切り者だつて言つてたけど、違うんだね……？」

「いや、俺は裏切り者だ。自分の意思で、別の国に付くことに決めたんだからな」

「そうかい……」

「だが院長先生、俺に後ろめたい気持ちはない。俺をさらった連中は、俺に助けってくれとすがってきたんだ。立場は変わったが、俺は悪党には堕ちていない」

この寄付は慈善事業じゃない。

ここで何もしなければ、育ててくれた恩を仇で返すことになって、スッキリしないだけだ。

他の国に味方をするのだから、裏切りを寄付で帳消しにしたい。

「よかったよ……。しつかりおやり、ユーリ」

「先生、子供みたいな呼び方は止めてくれ。む……」

その時、院長室に誰かが入って来た。

ノックとかそういった文化はここにはないので、まあ仕方がない

のだが……。その相手が少し問題だった。

「フツ……。誰かと思えば世間を騒がす指名手配犯じゃないか。まだ国内に残ってたなんて、意外とマヌケ野郎だね、君」

「ちよつと戻つて来ただけだ。久しぶりだな、マリウス」

マリウスは孤児院時代の悪友だ。

それでも現在は小さな工房を束ねる親方で、職人たちの中では若き天才とまで呼ばれていた。

「先生、あちらの部屋を借りますね。……来いよユリウス、孤児院のみんな、お前のせいで政府の連中に痛くもない腹を探られて迷惑してたんだぞ！」

「わかつてる。だからわびを入れに来たところだ」

場所を隣の部屋を移して、俺はコート姿の若き工房長とにらみ合った。

「なんで裏切った……?」

「助けてくれと頼まれたんだ。どうせあの工場に残っても、ろくな未来なんて残ってなかったから……。そういうそっちこそ、仕事の方は順調か?」

俺がそう問いかけると、マリウスはとても嫌な顔をした。これは質問を間違えたらしい。

「知らずに言ってるみたいだな。うちの工房なら、半年前に、国に接收されたよ……」

「なんだって……!?!?」

「経営が上手く行き過ぎて、目を付けられたらしい……。フンツ、あいつらは俺たちから搾取することしか考えていない。おかげで、ここに回す金がずいぶん減った……」

「そんな横暴が通るのか……？ お前が作った工房だろ？」

「うるせーなつ、納得出来るわけねーだろつ！ お前がやったことに、俺が腹を立ててるとでも思ったかっ！？ 違うね、聞いて清々したよつ、アハハハハハ！！」

マリウスらしくもないヒステリックな笑いに驚かされた。

国が成功者から事業を奪っていったら、誰も挑戦をしなくなってしまう。

「いや、工場のオーブとかパクツたのは、俺じゃなくて別のやつなだけでな……」

「だったらそいつに礼を言っておいてくれ、おかげで気が晴れたってさ！ ラインが2つも潰れて、あいつら青い顔して働いてるぜ！」

「荒れてんな……」

マリウスの背中を叩いて慰めた。

なんかこの国、あの戦争に勝ってから変な方向に突っ走っている。

「迷路とポーションという国益を他国に譲れないのはわかるが、そのせいでどんどん歪んでいった。」

「持つ者は持たざる者に狙われる。難しい問題だ。」

「だから密告はしない。これから何かやるなら派手にやってくれ！」  
「まさかお前に応援されるとは思わなかったな……」

「お前、今どこにいるんだ？ 俺が助けになつてやってもいいぞ」  
「今さつき戻ったばかりだ」

「危険を冒してまで、なんのためにだ？ お前は指名手配されてるんだぞ、フラフラしてたらとっ捕まるぞ」

「逃げ足には自信があるんだ」

「なんでだよっ、うちの工房で特別に、お前を匿ってやってもいいんだぞ……！」

甲高い彼の声はヒステリックで、だけどそれだけ同じ場所で育った仲間を心配してくれていた。

「その気持ち嬉しいよ。だが、今回はさつと忍び込んで、さつと盗んで逃げる予定だ」

「あっ……」

感謝を込めて、マリウスの胸をトンと叩いた。  
するとオカマみたいな声を上げるのだから、こっちも驚いた。

「へ、変なところ触るなっ！ お、お前はいつもいつも……そもそも盗むって何をするつもりだよっ！？」

「巻き込む気はない。じゃあな、マリウス、がんばれよ」

「待てっ、こらまたその力……っ、ユリウスウツ……！」

あまり金をばらまく趣味はないのだが、悪友のピンチを見捨てられなくてつい、俺は金貨を5枚彼に向けて爪弾いてから、裏側の世界に姿をくりました。

・拉致された魔術師 図書館を荒らしに再び国へと戻る（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマー

ク】と【評価】 】【いただけると嬉しいです。

寝てました……。定時より遅くなってすみません。

今夜更新分、少なめになります。

・一方その頃、姉妹は

一方その頃、姉妹は

「都市長……見て。これ、見て……」

「マク湖の地下に迷宮があったの。あたしたち、そこでこれを手に入れたのよ……！」

「こっちは、ユリウスと2人で、1号迷宮で……」

その夕、2人は話し合った上で、都市長の書齋に押し掛けた。

あの純白と桃色の絹を抱えて、あの3色の宝石も彼に見せたらしい。

「おお……これは、驚きましたね……」

「1度なら偶然……でも、2度なら、必然……。ちっちゃい頃、都市長、言ってた……」

「はい、これは、偶然の一言では片付けられませんね……。運命

あるいは、迷宮に祝福されているのかもしれない……。しかしどうやら、覚悟が付いたようですね？」

「付いたわ。あたしたち、彼のことが嫌いじゃないし……。なんだか、ユリウスって凄くいいやつなのよ……。あたし、もっと支えてあげたいわ……」

「ずっと昔から、知ってたみたいなの……。感じ……。壁を感じない……」

あの樹の迷宮でたまたま手に入れたシルクは、姉妹に決断を促し



た。

それは婚姻の決断だ。

目に見えざる大いなる意思が、ユリウスと結ばれると命じているように彼らには見えたらしい。

「父親として聞きます。貴女たちは、ユリウスさんを愛していますか？」

「わからない……」

「あたしも確信がないわ。でも、そんなに嫌じゃないの……」

「わかる。ユリウスと、一緒に、なったら……絶対、楽しい……」。

ユリウス、好きかも……」

「彼はあたしたちが面倒見るわ。だって、これって運命だもの……仕方がないわ。す、好きかどうかで言えば、こ、好ましいとは思ってるかしら……」

恥じらう姉妹に都市長はニッコリと笑い、彼女たちが落ち着くのを待ってからこう言った。

「では急いでドレスを作りましょう。ユリウスくんをその気にさせませんとね！ 私にお任せを、騙してでも、彼を私のかわいい娘たちと結婚させてみせます」

「都市長……さすが……頼りになる……」

「結婚、オメデトウ。ニア、モ、お手伝い、シマス（^^）」

「えっ、ニアアツ?! い、いつからそこにいたの?!?」

「ごめん、荷物に入ってた……」

俺がツイクで暗躍している間に、こっちのみんなも密かに俺を出し抜こうと準備を進めていた。

俺も2人のことを好ましく思っている。だがこの感情が、恋や愛かどうかは、まだわからない。

断言出来るのは、あのシャンバラにおいて、メーブルとシエラハゾが隣にいない生活はあり得ない。それだけだ。

・一方その頃、姉妹は (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】【いただける】と嬉しいです。  
これからもがんばって続けていきますので、どうか応援して下さい。

「そろそろ行くよ。それと今さらかもしれないけど、育ててくれて感謝してる。ありがとう」

「ほとぼりが冷めたらまたおいで。がんばるんだよ、ユーリ」

「ああ。国の連中が俺のことを忘れた頃にまた来るよ」

院長のベッドを借りて夜まで休むと、別れを告げて夜の王都に出た。

何も考えずにシャンバラから飛んできたが、今思うと魔術師の口ブに着替えておくべきだった。

白と金系のトーガとマントはツイイクでは肌寒く、夜間の隠密性能は皆無だ。

豊かな王都には酔客が集まり、羽振りのいい冒険者たちや職人が下町を闊歩していた。

「なんだ兄ちゃん、ガイジンかと思っただらツイイク人じゃねーか」

「そうだけど……この格好、やっぱ目立つよな？」

歩いていると冒険者風の飲んだくれに声をかけられた。酒臭いってことは、それなりに稼いでいる証拠だ。

「つたりめーだろ。けどお、羽振りよさそうだなあ……一杯奢ってくれよお……？」

「いいぞ、代わりに教えてくれ。最近のポーションはどうだ？」

「ああ……そのことな。頭痛の種だよ、まったくよ……」  
「何か問題でもあるのか？」

「あるに決まってる！ やつら、薄めてやがる……」  
「薄める……。まさか、ポーションをか……？」

続きを聞き出さたくて、酒を売っている出店に小さな銀貨を置いた。

「飲んだくれはそれでウイスキーを注文して、立ち飲みのカウンターで強い酒をあおった。」

「そうとしか考えられねーよ。少しずつ効果が落ちていって、今じやちよつと前の6割くらいしか回復しねえ。やり方があこぎ過ぎるだろ……」

「バカだろ、あの工場長……」

「あ？ おめーポーション工場のクソ野郎と知り合いか？」  
「ちよつと昔な」

これはいいことを聞いた。ツイイクの市場は今、隙だらけだ。粗悪化した国産ポーションのライバルとして、こちらがポーションを流してやれば、案外あっさりと市場を食いつぶせるかもしれない。

「そついや、ポーション工場にスパイが入って、工員が1人消えたつて聞いたな……。ふーん、異国の格好をしたツイイク人……？」  
「そろそろ失礼するよ」

「ま、がんばりな」

「そのつもりだ。……いつになるかはわからないが、もっと質の良

いポーションが異国から流れってくるかもな」

「マジか……？」

「さあな」

俺は下町を離れて、都心にそびえる城壁の前まで移動した。

城の警備はそれなりに厳しい。この国の富を狙う連中が後を絶たないからだ。

しかし味方の魔術師には脆弱だ。

まずはお得意の亜空間転移で、城内の学術区画に忍び込んだ。

俺たち魔術師には城壁などなんの意味もなさない。

いともたやすく王立図書館への潜入に成功していた。

「……ツツ?!」

ただ予定外もあった……。

念のため転移を使わずに建物に入ると、こんな夜中だというのに師匠の姿がそこにあった。

俺は本棚の陰に身を隠し、俺を魔術師にしてくれた男の様子をうかがった。

師匠は宮廷に仕える全ての魔術師の長だ。

しかし身だしなみにはあまり興味のない男で、だらしく足を組んで肘を突き、酒と干し肉をかじりながら本を見下ろしていた。

「不味つ……カビ生えてねーだろな、これ。しょうがね、後でまた厨房行くかぁ……」

師匠は独り言が多く、かつ魔力の反応に敏感だ。

そこで俺は図書館の地をはって、貴重本書庫を目指すことにした。

「おい、何やってんだ、コイツ……！」

「ッ！？」

はいつくばったまま師匠の様子をうかがうと、本にブツブツと文句を言っていた……。

焦った……。さすがの師匠も、国を裏切ったバカ弟子が今、ほんのすぐその床にへばり付いているとは思うまい。

「はあああ……。っ。なんでアレがいるんだよ……。っ」

ともあれ書庫の潜入に成功した。

俺は孤児院から買い取ったバッグに、手当たり次第に錬金術関連の本を詰めていった。

師匠さえいなければ、あちら側にあるはずの、錬金術の初歩をレクチャーした本も盗めたというのに……。

膨大な希書の中から、必要な物をかき集めるのには時間がかかった。

10分ほど作業すると、バッグに20冊ほどが集まった。

そろそろ潮時だ。図書館の冷たい床が恋しくなってきたので、俺は再び地をはって図書館を抜け出した。

「ふう……。師匠を相手にするのだけはお断りだから……」

亜空間を開き、帰国の際に寄ったあの高台へと転移を行うことに

した。

直接シャンバラまで飛べば、痕跡をたどられる可能性もあったからだ。

「ん……おかしいな」

ところが転送先が少し狂っていた。

ここは高台ではない。暗闇でよく見えなかったが、どうやら郊外の草原地帯だった。



・退職金代わりに古巣から本を盗もう 1 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマー  
ク】と【評価】 【いただける】と嬉しいです。

周囲には民家も人影もなく

「よう、バカ弟子」

「ア、アルヴィンスッ?!」

「てめえ、師匠を呼び捨てすんなって言ってんだろが、ポケッ！  
アルヴィンスお師匠様と呼べや！」

「どうでもいいです」

「よくねーよっ！」

「そっちこそなんのつもりですか……? 師匠、俺の転送先を書き  
換えましたね？」

今の俺は裏切り者で、師匠は敵対陣営の責任者だ。  
戦いは避けられないと悟り、短剣を引き抜く。師匠もそれに合  
せて、歴代の魔術師長に与えられる魔法剣を抜いた。

「やんのかよ？」

「そのつもりで俺をここに呼んだんでしょっ」

「ははは、回答次第じゃ見逃してやってもいいぜ? ごめんなし  
ゃい、お師匠たま、魔が差したんですっ!。とかよおー?」

「生憎、もう国に戻る気はありません。これは退職金代わりにいた  
だいていきます」

「だったら……」

やり合うしかない。師匠が炎の力を剣に与え、一薙ぎすると草原が燃え上がった。

こっちはいつもの手口で敵の背後に飛んでみたが、向こうは俺をよく知っている。

背中に目が生えてんのかってくらいに心眼で、師匠はこちらのナイフをかわしやがった。

師匠が魔法の剣を薙ぎ、俺が消え、どの不意打ちもヤツは軽々とかわし、受け流す。

戦闘は膠着状態に陥りながらも止まらなかった。

俺たちは互いに突破口を探り合い、幾度も幾度も激突した。

俺は今、師匠と対等に渡り合っている。その事実を高揚感を覚えた。

「そういう使い方すんなって言うてんだろ……」

「これが俺の取り柄です」

「クソ、やりにきい……。魔術師なら生々堂々とやりやがれっ!!」

「魔術師は辞めました。今は新米錬金術師です」

「アホ抜かすんじゃないやねーっ！ だったら師匠直々にお仕置きだ！

まとめて燃えやがれ、エクスプロージョンッ!!」

その術は詠唱者を中心にして、溶岩の海に飲み込む師匠の禁じ手だ。

ところが術は発動しなかった。

「……まだやります?」

「コイツ……ナイフに沈黙魔法サイレスをかけてやがってたか。クソツ、セコい手ばっか覚えやがって……」

「最近こういう術が得意な子と出会いました。……出会い頭に俺にパラライズをかけて、拉致りにきたやつなんですけどね」

師匠は魔法剣を腰に戻して、延焼していた炎を居合いで吹き消した。

続いて剣を焼け野原に投げ捨てて、バカ弟子の目の前に立った。  
……酒臭い。」

「お師匠たまからのご褒美だ、受け取りやがれ」

師匠が俺に1冊の本を差し出した。

それは俺が最も欲していた、錬金術の初歩を記した教本だ。  
師匠からの思わぬ饒別に、俺は驚いて受け取り損なっていた。

「ちゃんと受け取れや！」

「すみません……。あまりの展開に、驚いてしまって……。貴方がこんなことするなんて、意外です……」

師匠は本を拾い直して、渡して、励ますように肩へと手を置いてくれた。

おかしいな……。こういうことする人だったっけ、この人……。

「すまん……」

「え……?」

「だからっ、守ってやれなくてすまん……って言ってんだよ！ わかったらどこにでも消えやがれ、このバカ弟子が!!」

「師匠……ありがとうございます、恩に着ます」

「ふんっ……。そっちこそ、そんなたまじゃねーだろが……」

師匠に迷惑をかけてしまった。

きっとこの後、図書館に1人残っていた師匠は上に文句を言われる。

どうして盗難に気づかなかったのだと、疑われることになる。

これからかける迷惑を帳消しにしたい。

「師匠。師匠は確か、個人投資もやっていましたよね？」

「おう、商売柄、情報を手に入れやすいからな」

インサイダー取引は、異国では禁止されている。

「ポーションと迷宮関連の銘柄は今のうちに売り払った方がいいですよ」

「へー、なんでだよ？」

「俺たちがこの国の事業を、大混乱に陥れるからです。これを……」

ぶにぶにとしたあの緑の玉、携行していたエリクサーを師匠に手渡した。

師匠は最初こそいぶかしんでいたが、正体を見抜くなり固まり、相次いで乾いた笑いを浮かべる。

「やべえな……。こんな物を流されたら、この国の経済はあつという間に傾いちゃうだろな。……クカカツ、面白れえっ、がんばりなユーリ。やつらがお前にしたことを考えりゃ、文句は言えねえ。せ

めて絶好の舞台から、やつらの醜態を見物させてもらおうわ」

「遠い昔、この師匠が俺に魔術師の道をくれた。

俺の選んだ道は、国の恩人たちに仇なす行為だ。

だからこそ、師匠からの励ましと、饑別にくれたこの本が嬉しかった。

「ありがとうございます。名残惜しいですが、シャンバラに帰ります」

「シャンバラか……。あそこは良い国だな。美人のエルフちゃんがいっぱいで、暖かくて、飯が美味しい。あばよ、ユーリ。また顔を見て良かった」

「師匠も酒はほどほどに……。またお会いしましょう」

俺は師匠に笑い返して、世界の裏側に潜り込んだ。

追跡されないように転移を中距離に止めて、何度も小刻みに飛んで、あの暖かくて美しいシャンバラの姿を追い求めた。

不思議だ。あの姉妹と、オアシスと、乾いた砂漠のことばかり頭に浮かぶ。

早く帰って元の生活に戻りたかった。

シエラハズは朝の水浴びの習慣を続けてくれるだろうか。

それだけが不安だ。光り輝くオアシスで、美しく踊り回るエルフの姿が今はただただ恋しい。

・退職金代わりに古巣から本を盗もう 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

皆様のおかげで、ハイファンタジー月間39位に入れました。じっくりと続けていきますので、応援よろしくお願いいたします。

・俺を拉致したエルフ姉妹の様子がどうもおかしい

その翌日、色彩のない世界から外へと出ると、広大な砂漠とシャンバラの夕日が俺を迎えてくれた。

この土地には数々のオアシスがあり、人はそのコロニーごとに集まって暮らしている。

それらを全てをひっくり返して、砂漠の国シャンバラだ。

短距離の転移を繰り返して、市長邸のある都心を探して、俺はようやく自宅に帰って来た。

今回は行き来と師匠との戦闘で魔力を大きく消耗してしまったので、しばらくの間は休暇を取らなければならないだろう。

要するに疲れに疲れ果てていたので、俺は報告も済まさずに2階のベッドを借りて、夜まで眠ることにした。

「あ、あれ……ここは、あれ……。なんで……あ」

寝て気づいたら朝だった。外気はまだ冷たく、だけど都市長がわざわざ用意してくれただけあって、ベッドはとても温かった。

というより、熱源が己の左右に存在することに気づいて、俺はハッと飛び起きた。



「むにゅ……。おお……。おはー、ユリウス……」

「お、おはよう……。あ、ああっ、あなたがベッドを占領するからっ、け、結果的に、こうなっただけよ……。っ!？」

「ユリウス、まだ寒いから……。温めて……。えいっ」

「な、何をつ、こらっ、くっつくなっ!」

メーブルが二の腕にしがみついて、俺をベッドに引き戻した。

しかし意外だったのはシエラハズの行動だ。妹と結託して、掛け布団で俺を覆うと、同じように二の腕に抱き付いてきた。

「うっ……」

「姉さん、効いてるよ……。有効、有効、クリティカルヒット……」

「も、もう少し、ゆっくりしなさいよ……」

メーブルはともかく、シエラハズの場合はとてもまずい。

とてもとても大きな胸がたぶたと密着して、俺をベッドに縛り付けようとした。

「お前ら、何を考えているんだ……。これまずいだろ、あきらかにまずいだろっ、うっ……。うっ……」

「あたし、ユリウスをからかうメーブルの気持ち……。少しだけわかっただかも……」

「へへへ……。お兄さん、こういうとこ、初めて……?」

お前はそういう言葉をどこで覚えてくるんだ……。

2種類の甘ったるい匂いが俺の鼻孔を攻撃して、メーブルの方は布団の下で足まで絡めて来た。

「俺がない間に何があったんだよ……。離れてくれ、ヤバイ、真

剣にヤバいから……っ」

「ふうー」

「ウヒヤアアツツ?! んなっ、何すんだよっ、お前っ!?!」

「ふー……」

「うがっ……?!」

何かがおかしい。何かがおかしいぞ……。

メーブルが耳の穴に息を吹きかけると、続いてシエラハゾまでひかえめに同じことをして来た。

「姉さん、上手……」

「そ、そうかしら? ふふふ……フーツ」

「あっあふんっ……。ちょおおーっ、止めるって、こらーっ?!」

俺が抗議をすると、姉妹が子供みたいにコロコロと笑った。

これは歓迎されているということなのだろうか。

彼女たちからすれば、信じて送り出した俺がちゃんと戻って来たわけで、それが嬉しいのだろうか。考えても何もわからない……。

「はー……鞭でしばきたい……」

「ないわ。それは聞かなかったことにしておくわ」

再び身を起こして左右を見ると、薄手の寝間着姿に心臓が暴れた。俺はなんていかがわしいことをしていたのだろう。

シエラハゾは俺の凝視を受けて、掛け布団の中へと潜るように身を隠してしまった。

「姉さんって、エロいよね……」

「え、ええっ、何聞いてるのよっ!？」

「同意を求めてくるな……」

ベッドをはい出すと腹の虫が鳴った。

まともに食事を摂ったのは孤児院での滞在時くらいで、以降は飲み物を調達する程度だった。

人の腹の音がそんなに面白いのか、姉妹は布団の中で腹を抱えて笑っている。

「腹が鳴っただけだぞ……?」

「テンション……上がってるから……。わりと、なんでも面白い……」

……

「女の子2人に囲まれて、なんでお腹の方がなるのよ……っ、ふっふっ……」

「お前ら、やっぱりなんか変だぞ……」

「少し早いけど朝食にしましょ。ユリウスは暖炉をお願い。メープルは水をくんで」

「任せて……エルフのおいしい水、水瓶いっぱい、くんでくるね……」

慣れない甘ったるい空気から離れられて、食事が食べられるならなんだっていい。

俺たちは階段を下りて、朝の支度をした。

暖炉の前でしばらく薪を眺めていると、朝食が居間のテーブルに並んだ。

昨晩の食事だったのか、羊肉の煮込み料理と、スープと、パンという朝食らしからぬ豪華さだ。

「食べ終わったら、あの膨大な本から必要な情報だけ拾い集めないと。お、これ美味しいな」

「それなら問題ない……。姉さん、本読むの早いから……」

「見繕っておいたわ。ツイイクでも同じような事件が前にあったみたいで、コンクルっていう補修剤が研究されていたの。砂と混ぜ合わせるると固まる、不思議な土よ」

ジンジャースープは温かく、空きつ腹にパンがガツンときて、羊肉の煮込みは少し癖があったが淡泊で、どれも必要な栄養が詰まっている味がした。

「どの本だ？」

「これ……。あとね、このページ、おすすめ……」

「折ドッグイヤーり目が付いてるな。ん……。巨乳化、薬……。作んねーよっ、こんなっ！」

「えー……」

「こ、これ以上大きくなったら困るわ……」

「姉さん……。それは危険……。ユリウスを、後戻りできない、泥沼に導く行為……」

「人を変態みたいに言うな……」

ドッグイヤーを戻して、コンクルのページを見つめながら腹を満たした。

瞬間的に固まる半液状の石材か。これならば隙間なくふさげるので今回の用途に向いている。

素材を集めて、作ってみることにしよう。

「ユリウス、ユリウス……お願い、一生のお願い……」

「お前な……。一応聞くが、巨乳になって何をするんだ……？」

「ユリウスを誘惑……」

「却下な」

「なんて、無慈悲な……」

「あ、あなたが望むなら……あ、あたしも、別に……う、あう……  
っ」

「本当にお前ら、何があっただよ……」

やっと帰ってきて、やっと疲れが取れたと思ったら、ずっと会いたかった姉妹が完全に色ボケしていた。

・俺を拉致したエルフ姉妹の様子がどうもおかしい(後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】  
【いただける】と嬉しいです。

・休日と買い物 シャンバラに帰国してから姉妹の様子がどうもおかしい 1 / 3

今日は朝から不思議な高揚感があった。

たった3日しかシャンバラを離れていなかったというのに、メルとシエラハズが俺の帰国を心より喜んでくれていて、それがとても嬉しかったからだろうか。

どうやら俺はあの美しい砂漠エルフたちを、早くも家族として感じ始めている。

どうにもおかしな話だ。思えば出会ったときから、俺たちには種族の壁といったものがなかったようにも感じられる。

朝食が済むと俺たちはゆっくりとお茶を交わした。

ガラス張りの窓から外をのぞけば、青みがかった朝日が今は白く姿を変えていたが、外気の方はまだ冷たく冷え込んでいる。

「そつえば、あの白いゴーレムはどうした？」

「ん、たまに見る……」

「昨日、市場の方で見かけたわ。あんなに高度な知能を持ったゴーレム、初めてよ、あたし」

「迷宮はたまに、ああいう異質な存在をこちらの世界にもたらすそつだ。……しかしいけないとしないで、ちょっと寂しいな」

「むふ……ニア、それ聞いたら、喜ぶ……」

「いい子よ。この前なんて、洗濯物をたたんでくれたもの」

あの子猫並みの身体でか……？

それは、少し見てみたいな……。

「ニアの、自発的行動……」

「そうなの、あの子ゴーレムとはとても思えないわ。ふふっ、まるで小さな妖精さんみたい……」

意外と少女趣味なことを言うのだな。

そう口に出しかけて、引っ込めて、気温がもう少し暖かくなるまでゆっくりと過ごした。

・

「あのね、あたし、あなたにあえて聞かないでおいただけど……」

「そういう言い方されると怖いから、ハッキリ言ってくれ」

「あなた今日の予定は……？」

「休む」

2人にとってそれは非常に重要な質問だったのか、窓からオアシスを見つめていたメーブルまでこちらを向いた。

簡潔に即答すると、小麦色の口元が喜びにほころんだ。

「だったら買い物に付き合ってくれないかしら……！」

「付き合って……付き合うべき……付き合わないと、末代まで……たたる……」

メーブルは直情的なのでさておき、シエラハゾの方からこうも力強く誘ってくるとは意外だ。

しかし買い物か。なかなか悪くない休日の過ごし方だ。



「たたられるのは困るな。わかった、付き合おう」

「あ……やった……」

「よかった！　じゃ、今日は丸一日付き合ってもらおうから、そのつもりでねっ！」

「あ、ああ……。お前ら、やっぱり何か変じゃないか？」

「腹、くくったから……。否、くくりまくったと、言い直したい……」

残りのお茶をすすって、外の暖かい陽光を眺めた。  
オアシスの水で肌だけでも拭っておいた方がいいだろうか。

「布とかあるか？　よく考えたら、あの日からろくすっぽ身体を洗ってなかった」

「知ってるわ。ベッドが男臭かったもの……」

「グフフ……」

「悪かったな。……メープル、お前はせっかくなにかわいいんだから、変な笑い方をするな」

「あた……」

メープルの額を小突くと、なぜかシエラハゾまで一緒になって嬉しそうに微笑んだ。

それに不覚にも家族の温かみを感じてしまった。

「待ってて、すぐ用意するわ」

「悪いな。……シエラハゾはまるでお母さんだ」

「そ、そういうのはっ、気が早いわよ……っ?!」

「なんでそうなる……」

「意識し過ぎの姉さん……ハアハア、かわいい……」

そうして布を受け取った俺は、すぐそのオアシスまで行くと服を脱いで、冷たい湖水に膝まで入って汚れを清めた。確かにこれは男臭い。

スツキリするまで全身を一通り拭っていった。

……いやところがだ。だいたい綺麗になったのでトーガを手にかけて身に巻き付けようとすると、右手側のオアシスの陰から、メーブルの顔が生えていた。

「あ、お構いなく……」

「おまつ、のぞくなよっ!？」

「ふ……」

姉さんの水浴びを毎朝のぞいてたくせに。

メーブルは意味深に鼻で笑うと、内股になった俺の隣を素通りして行った。

あの子には弱みを握られっぱなしだ。

のぞきという悪い習慣を止めればいいだけの話だが　あいにく  
その気はまったく起きなかった。

・休日と買い物 シャンバラに帰国してから姉妹の様子がどうも  
おかしい 1/3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマー  
ク】と【評価】 】【いただけると嬉しいです。

・休日と買い物 シャンバラに帰国してから姉妹の様子がどうもおかしい 2 / 3

暖かくなってきたのでメーブルを真ん中にして街に買い物に出た。両手に花みたいなのは困るが、大好きな姉と俺に挟まれて、銀髪のエルフが足取りを弾ませているのをのぞき見るのは……うん、これはなかなか悪くない。

俺たちが暮らすオアシスは行政区画と呼ばれていて、全てのオアシスのほぼ中央に位置しているそうだ。

そこから朝日に白く光る砂漠を抜けて、一帯で1番大きなオアシスに向かった。

都市長はまたラクダを貸してくれると言っていたが、それだと1日がすぐに終わってしまいそうで、歩きを選ぶことにした。

「で、何を買った？ 食料とかか？」

「それは都市長が、回してくれる……。もっと、凄い買い物、だよ……」

「だったら俺もなんか衝動買いしてみるか。……しかし、なんでこっち見ないんだ？」

「えっ！？ べ、別に……な、何も見てないわよっ、みてないからっ、あたしっ！」

「むふ、むふふ…… よきかな……」

今日は特にシエラハズの様子がおかしい。

また何かあったのか俺に視線を合わせてくれなくなって、だがこちらを隙を突いては視線を送ってくるようになった。

よくわからん……。

「メープル、お前何を知っているんだ？」

「ダメよつ、言っちゃダメッ！」

「言わないよ……。姉さんには、そうする権利、あったし……。むぐうつ」

「今の忘れてつ、なんでもないからっ！」

「その様子はなんでもある態度だが、わかった、そうする」

朝の砂漠は白く、昼は黄色くて、夕方になると黄金色になる。

その砂漠の彼方を見つめると、一際目立つ大きなオアシスが見えてきた。

「あつちのバザーとは毛色が違うな。建物が多い」

「職人や労働者が集まる街よ。宿屋も多いわ」

「あと、いかがわしいお店も、ある……。行く？ ぼいんぼいん、だよ……。？」

「行かない。この3人で行ってどうするんだ……」

「おお……。それは盲点……」

メープルのおかげで話題が絶えない。

変な方向に脱線しがちな面はあるものの、俺たちは仲良く言葉を交わしながら大きな街へと入った。

目当ては職人が集まる職人街だそうだ。

最初に入った場所は宿屋がひしめくエリアで、時間帯もあってか慌ただしかった。

「ユリウス……ずっと黙ってる。何考えてる……?」

「え、ああ、すまん……。不覚にも休みなのに仕事のことを考えていたよ。……コンクルの材料調達も出来ることなら、やっておきたくてな」

「そっちはあたしたちがやっておくから、ユリウスが気にすることじゃないわ」

「そうもいかない。俺は新米だからな、一通り自分でやりたいところだ。必要になるのは大地の結晶に、石灰石に、トレントの魔琥珀、あと砂だったな」

「砂ならそこら中、腐るほどある……」

「石灰岩も国内で取れるわ。後であっちのバザーに寄りましたよ」

ならば必要なのは大地の結晶だ。

これは土か岩系の迷宮で主に手に入る。そう師匠がくれた教本に書いてあった。

「大地の結晶は……?」

「そっちはギルドの連中次第だな。既に手に入ってるならこっちの手間が省けるんだが……。そうでなければ、輸入。あるいは土か岩系の迷宮そのものを、新規に掘り当てるしかないか」

「迷宮を新しく発掘って……それが出来たら苦労はないわよ」

マク湖の民を救ってやりたいが、現状は前途多難だ。

場合によっては、別の方法で迷宮の大穴を塞いだ方が早い。

・休日と買い物 シャンバラに帰国してから姉妹の様子がどうも  
おかしい 2 / 3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマー  
ク】と【評価】 【いただけるとう嬉しいです。

・休日と買い物物 シャンバラに帰国してから姉妹の様子がどうもおかしい 3 / 3

「あの店、入る……」

「え、あの店か……?」

「そうよ。付き合ってくれる約束でしょ……。今さら嫌とか言われ  
ても、こっちだって嫌よ……?」

「付き合うよ。あんな店に入る機会なんて、この先2度となさそう  
だしな」

職人街にやってくると、俺たちはとある高級衣料品店に入った。  
時間もあつてか客は俺たちだけで、店内には絹のドレスやトーガ、  
毛皮のコートなどが並んでいる。

やけに着飾った店員は開店準備に慌ただしそうだったが、姉妹を  
見るなり丁重に出迎えてくれた。

「おお、これはシャムシエル様の……。ようこそおいで下さいまし  
た」

「例の物、出来てる……?」

「あちらの方はまだですが、ベールの方は既に。しばしお待ちを」

姉妹は既に何かを注文していた。こんな高級店でだ。

「待て、ベールってなんのことだ?」

「ふふっ……もうすぐわかるわ」

「安心して……ユリウスにはたからない……。これ、都市長のお」



り……」

「お待たせしました。こちらをどうぞ」

店の奥から白と薄桃色のベールが運ばれてきた。

シエラハゾはやたらと慣れた様子で書類へとサインを入れて、注文の品を受け取る。

店の人はお辞儀をして、やはり朝は忙しいのか店の奥へと引っ込んだ。

「ユリウス、どう……似合う……？ 私、そそる……？」

それからメープルは薄桃色を、シエラハゾは白色のベールを頭にかけて、ひかえめにこちらをうかがった。

エルフの持つ清らかな雰囲気と、透ける生地がよく似合っていた。

長い耳がベールからピョコリとかわいらしくはみ出ている、そこがヒューマンの花嫁とはまた異なる印象だ。いや、待て、花……嫁……？

「黙ってないで何か言いなさいよ……っ」

「へへへ……。ユリウス、姉さんに、見とれてる……」

「あ……そ、そう……っ、ならいいのよ……っ」

「勝手に人の気持ちを代弁するな。しかしまあ、恐ろしく似合うな……」

そう答えただけで、目の前の姉妹が舞い上がるのを見た。

興奮すると耳がつり上がるのか、気持ち角度を上げた長い耳がベールを持ち上げて、俺と視線が合うと恥じらい混じりの無垢な笑顔

が浮かび上がった。

「次いつてみよー……」

「まだ次があるのか」

「次は3軒先の宝飾店よ」

「嘘だろ……」

「都市長、ふとつぱら……」

大切なベールを折り畳んで袋に詰めると、姉妹が俺を宝飾店へと連行していった。

宝飾店なんて1度も入ったことがない別世界だ。

引っぱられて中に入るとどこもかしこも宝石、貴金属ばかりで、真剣にもう帰りたくなった……。

さっきのやり取り同様に、店主は姉妹の姿を見るなり店の奥に向かい、今度は宝石がふんだんにあしらわれた銀のティアラが姿を現した。

「どやー……」

「う、嘘でもいいから、似合うつて言つて……」

それが姉妹の額に収まり、再びベールが頭にかかけられると、俺はこの買い物在意図を完全に察した。

いや既に察してはいたが、ここまでされたらもはや認めるしかない。

これは、嫁入り道具の買い物だ……。

こいつらはこれを俺に見せるために誘ったんだ……。

「なんか言え……。あてっ……」

メーブルの額を小突いて質問をごまかした。  
ここで素直に答えたら、見蕩れたと自白するようなものだ。

ベールと銀のティアラを付けた2人の姿は、正気を保てなくなるほどに俺の心臓を鷲掴みにした。

全て、都市長の思う壺ってことだ……。  
気持ちをごまかしようないほどに美しかった……。

「ユリウス、こっち見なさいよ……っ」

「無理だ」

「へーいへーい……ユリウスビビってるー？ 姉さん可愛い過ぎで、顔真っ赤になってるー……？ あてっ……」

「年上をおおるなっ！ こ、こんな……」

2人を直視すると言葉がそこで止まってしまった。

気の迷いにもほどがあるが、この2人が欲しいと思ってしまった……。

この美姬たちを都市長は俺にくれるという。

事実として、返答1つで本当に彼女たちを独占出来てしまえるのだ……。

「神は初めに、こう言われた……獣欲に身を任せろ、ユリウス……」  
「んな神がいるかっ！」

もう一度小突こうとするとメーブルにかわされてしまった。

それも小突かれるのが嬉しそうにニコニコとだ。メーブルの自由

奔放な姿が愛らしかった。

「姉さん、効いてる、超効いてるよ……」

「ふふっそうみたい！ それじゃ、次の買い物に行きましょう！」

「まだ、続くのか……」

一体お前らなんのつもりだ……。

そう叫ぼうにも、答えを聞けば後戻りが出来なくなる。

俺は言葉を飲み込んで、次の店へと連行されていった。

職人街での買い物は、その全てが結婚式と嫁入りに関連した物ばかりで、俺は終始困惑と期待との間を行き来することになったのだ。……。

・

### 余話

その夕方、機械人形のニアが大きな袋を抱えて戻ってきた。いや正しくはとても小さな袋で、ニアの身体よりも大きな袋だ。

「やっと姿を現したな。で、なんだそれ？」

「ジョン（・・）」

「ユリウスだっつってんだろ……」

「ニア、ゴ命令通り、才金ヲ、集メテ来マシタ（・へ・）」

姉妹は都市長のところだ。

ヤシの木陰でぼんやりと夕日を眺めていると、ニアが傍らに袋を置いた。

「……マジで金集めてたのか？」

「ハイ、ゴ命令デシタカラ。早く、開ケテ下サイ（^| ^）」

「あ、ああ……」

まさか黄金や宝石が詰まっていりしないよな……。

一思いに袋を開いて見ると、その中には小銭がギッシリと詰まっていた。

一枚一枚確認してみると、錆び付いた銅貨も混じっていて、その中には見覚えのない銀貨が2枚含まれている。

「ガンバリマシタ（・へ・）」

「これ、どこで手に入れたんだ……？」

「コツコツ、拾イマシタ。放棄サレタ、オ金デス、ゴ安心ヲ（・  
）」

「お前……まさか俺が命令してからずっと、道ばたの小銭をかき集めてたのか……？」

「ハイ（・|・）」

「ウインクも出来るのな、お前……。いや、すげえなお前、すげえまめだな……」

しかし綺麗な銀貨だった。

銀は黒ずみやすいのに、2枚ともピカピカとしている。

「ありがとうニア、この2枚が特に気に入った。小さいのにお前は凄いな」

「本当デスカ？ ソノ才言葉ダケデ、ニア、ハ、ガンバレマス……！ アア、幸せ……（＝＝）」

「お前いいやつだな」

「ジョン、次ノ、ゴ命令ヲ……（・・）」

「次……次か？ あー……それじゃ、今日は歩きまくって疲れたから背中を揉んでくれ」

「喜んで……！（・へ・）」

「ウゲエツ?!」

「ア……（＝＝）」

ニアは小さいが見た目以上に重かった。

横たわった俺の背中にニアが飛び乗ると、鉄球でも落とされたかのような衝撃が走った。とても痛い。

「うつ、くっ……。ニア、次からはやさしく頼む……」

「ゴメンナサイ、ジョン……（T—T）」

「俺はユリウスだ……」

ニアを素材採集に活用出来ると気づいたのは、これからもっと先のことだった。

頼んでみたのはいいが、やはり背中に乗せるにはちょっと重いな……。

・休日と買い物 シャンバラに帰国してから姉妹の様子がどうもおかしい 3/3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 【いただける嬉しいです。

・錬金術で「銀の導き手」を作ろう 前編

こんな習慣、いい加減に止めなければいけないのに、その朝も俺は木陰に身を隠して、彼女の水浴びを密かに見やっていた。止めようとしても、どうしても止められない。

ツイク本国に帰ったきり、ずっとお預けだったのもあって、いっつになくシエラハゾの姿が輝いて見えた。

平行して、ぼんやりと仕事のことも考える。

かっぱらってきた書の数々はゆっくりと崩してゆくしかないが、現状においては『コンクル』というアイテムを作るのがベターだ。

「ふふふっ……自分から戻って来たってことは、そういうことよね……。あたしたちが要らないなら、戻ってくる必要ないもの……ふふ……」

よく聞き取れないが、今日のシエラハゾは機嫌がよかった。

ときおりこちらを横目で見ているような、そんな気もするが……それはきつと気のせいだ。

俺の存在に気づいていたら、この時間にここには来ないからだ。

遠い姿が水浴びを終えて、家に戻ってゆくのを見届けると、俺は一人で街へと出た。

冒険者ギルドはここと同じオアシスに新設された。

活動を公にするわけにはいかないのもまだ看板は立てていないが、中はツイクでよく見る酒場併設型のギルドだ。



「あらん、ユリウスちゃん、んふっ、いらっしやい」  
「出たな、妖怪……」

受付は野太い声をした美形の男エルフだ。

女の格好をしているが長身で、ところ構わずウイंकを飛ばす愛想のいい受付嬢（？）だ。

「あら酷い　好きな子ほどイジメたくなるアレかしらん？」  
「抜かせ。それより倉庫を見せてくれ、作りたい物がある」

「もちろんいいわよ　貴方の緑のタマタマのおかげでうちは絶好調なもの」

「タマタマゆーな……」

「あらまつ、深い意味はないのよお？」

「カマにセクハラされたって都市長に訴えるぞ……」

受付嬢オカマに案内されて倉庫にやってきた。

ここには都市長が俺たち職人のために、様々な素材をプールしてくれている。

必要なときに材料が手には入らないのでは、始まらないからな。

「ところで何を作るのかしらん？」

「マク湖オアシスの底に迷宮が現れたって話は聞いたか？」

「もちろんよ。ユリウスちゃんのお手柄ね」

「見つけたのはメープルだ。で、湖の地下水が迷宮内部に流れていてな、それを塞ぐアイテムを作る」

「新しいタマタマじゃないのね、残念」

「タマタマ言いたいただけだろ、お前は……」

「あらわかつちやう？」

「わかりたくもないな」

冒険者たちはがんばってくれているようだ。

大量の魔物素材がひしめいていたが、しかし大地の欠片はどこにも見つからなかった。

最悪はツイクから素材を輸入することになる。

だがそれでは一月はかかる。待つてなどいられない。

「あら、シヤムシエルお爺さん、いらっしやい。その顔はタマタマ坊やにご用ね」

「変なあだ名付けんなよつ、このカマカマ野郎っ！」

「あらお上手」

「フフ……すっかり打ち解けているようですね」

「このオカマ、メープルといい勝負だ……」

俺の口からメープルの名前が出ると、都市長がやさしげに微笑んだ。

昨日の銀のティアラも絹のベールも都市長の策略で、既に報告が入っているはずだ……。

「アタシ席を外した方がいいかしらん？」

「いえ、構いません。ユリウスくん、素材の供給も安定したところですし、そろそろポーシヨンの輸出を検討しませんか？」

「そのことか。それは俺も考えていた。……これは国に帰ったときに聞いたんだが、ツイイクのポーシヨンの効果が、現在は以前の6割ほどに低下しているそうだ」

「ほう……それは絶好の機会ですね。出所をつかまれないように裏ルートから流せば、ポーシヨンの売り上げでこの国の不景気も改善出来るはずですよ。お力を貸して下さい」

断る理由はない。うなずいた。

さすがにエリクサーの状態で売るわけにはいけないので、アレを薄める試行錯誤が必要になるくらいだろうか。

「後でエリクサーを溶かし直して、薄めて、ポーシヨン瓶に移してみるよ。それよりカマカマ野郎」

「なあに、タマタマ坊や？」

「これと、これと、あれ。作りたい物があるから持ってっていいか？」

「いいわよ。だけど何を作るのかしらん？」

「ダウジングロットだ」

「……はて、なんですか、それは？」

なんだと聞かれても説明しにくい。

「俺もわからん。パクツてきた希書によると、迷宮を発見するアイテムらしい」

「なんとそんなものが！ ぜひ作りましょう！」

「あらまあっ、素敵な棒ねえ」

この受付嬢、チェンジ出来ないかな……。

お下品な意味にしか聞こえない意味深なセリフに、さすがに付き合いかねて素材をかき集めると、俺はギルドを出て行くことにした。

「ユリウスちゃんったら、意外と純粹でかわいいわね　んもう食べちゃいたいくらい」

「フフ……。うちのメープルとシエラハゾと並べると、もっとかわいいですよ。すっかり惚れ込んでいるようで……。まるで、少年少女の初恋を見ているような気分です」

「おっぱい大きいものね、シエラハゾちゃん」

おっぱいゆるなっ！

ああもうやだ、このオカマ……。

チェンジで、チェンジでお願いしたい……。

・錬金術で「銀の導き手」を作ろう 前編（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマー

ク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

ご支援ありがとうございます！

美形のオカマと触れあえる愉快的な冒険者ギルドから帰ると、我が家の肌寒さに肩を抱くことになった。

緑豊かなツワイク王国では家といえば木造で、俺は石造りの家の融通の利かなさにまだ慣れていない。

反面とても気に入っているところもある。

曇りがちな母国の空とは正反対に、シャンバラの空は瑠璃のように青く明るい。

開け放たれた窓からは暖かな日差しが白妙しろたえのカーテンを作って、それが少しずつ居間を暖めてくれていた。

「お帰りなさい、ユリウス。あら、それは……？」

荷物をテーブルに置くと、厨房の入り口からシエラハゾが首から上だけをひょっこりと生やしてこちらをのぞいていた。

水浴びを終えると彼女は必ず髪をとかすのが習慣で、その湿った髪が柳の木のように長くしだれる姿は、否応もなく男の目を奪い取った。

何が彼女の身に起きたのかわからないが、シエラハゾという女は日に日に美しくなっている。

「これは異世界の銀貨だ、冒険者ギルドから拝借してきた」

「ふうん……迷宮って不思議ね。異世界ってどんなところなのかし

ら

彼女は小麦色の細い指で、袋の中の黒ずんだ銀貨を持ち上げるとしげしげと見つめだした。

「俺からすればこのシャンバラもちょっとした異世界だぞ。なんと  
いうか、この国は 平凡な賞賛かもしれないが、キラキラしてい  
てとても綺麗だ」

「ふふ……ユリウスに言われると嬉しいわ」

「ああ、それより手が空いてたら手伝ってくれるか？」

「うんっ、もちろん手伝うわっ！ 調合を始めるのよねっ!？」

「あ、ああ、そうだが……。いやにテンションが高いな」

「あっ……。ふふっ、ごめんなさい、あたしったらっつい……」

銀貨を袋に戻して、エルフの美姫は自然体の笑顔を見せてくれた。  
俺たちの間にあつたはずの壁は、いったいどこに消えてしまった  
のだろう。心を許されている実感を覚えた。

「実はあたしね、あなたの調合を見るのが好きなの。だって見てい  
て不思議で、とっても面白いんだものっ！ あなたの錬金術って素  
敵よ！ あ、そうだわ待ってて、メープルも呼んでくるわ」

綺麗なブロンドをはためかせて、シエラハゾが裏口から外へと駆  
けていった。

初めて出会ったときはちょっとお堅いやつだと思っていたのに、  
本当の彼女は童心も持ち合わせていて、そこに人間的な魅力を感じ  
た。

「人間関係って、どんな方向に転がるかわからないもんだな……」

一足先に工房へと入ると、日当たりのいい窓際に黒光りする錬金釜が置かれていた。

水槽とオーブを用いたツワイク式の設備の方はまだ未完成だ。

というよりも、現状においては釜と杖さえあれば、どういうわけか何もかもが事足りてしまっていた。

姉妹が来る前に一通りの準備を済ませてしまおう。

倉庫から魔物素材の在庫を物色して、作業テーブルに並べてゆく。

サハギンの鱗とゴブリンの爪に牙、あの水色のプリズンベリルも使ってしまったら加えた。

「そつえば」

続いてギルドから調達した異世界の銀貨を並べた。

これがダウジングロッド『銀の導き手』の主材料だ。これは魔力を帯びているため、処理をせずに市場に流すことは出来ない。

持ち主がモンスターに狙われたり、良からぬ現象を引き起こす場合もあるので、ツワイクでも異界銀貨は一般の流通が禁じられてた。

ちなみに面白いことに、この銀貨から魔力を除去して通常の銀貨に加工し直そうとすると、かかる金額は作り出した銀貨と同額になる。

世に流通している銀の多くは、実は異世界からやってきた銀なのだ、一部ではまことしゃかに言われている。



「ニアが拾ってきたこれは、もしかして……」

少し気になることがあって、どこの別世界から漂着してきたか  
すんだ銀貨と、ニアが拾ってきたやけに白い銀貨を並べてみた。  
左右の手で重さを比べてみれば、比重がまるで異なることを発見  
した。

「何やってる……？」

そうしていると工房の入り口が開かれて、そこに白い日差しとオ  
アシスを背にしたメーブルがいた。

細く小柄な身体でバケツを抱えて、よたよたと危なっかしくこち  
らに歩いて来ている。

「それが妙でな……。ニアが拾ってきたこの銀、どうやら銀じゃ  
ないみたいだ」

どうも心配なので片手でバケツを受け取り、もう片手で2種類の  
銀貨を彼女に渡した。

「あ、ホントだ……。こっちの方が重くて、ピカピカしてる……。  
へー、いいね、これ……」

「まるで白い金だな」

「それ、言い得て妙……」

工房は薄暗いので、入り口の扉はそのままにしておこう。  
釜へと水を流し込むと、メーブルが背中の杖を貸してくれた。

「ナイフでかき回すわけにもいかんし、自分の杖も作らなきゃな」  
「それも、錬金術で作ればいい……」

「それ悪くないな。予定に加えておこう」

「そうしよ、そうするべき。……あ、姉さん」

言葉に顔を上げると、工房の入り口にシェラハゾが仏頂づらで立っていた。

探しに行ったはずのメイプルがなぜか俺の隣にいるせいだろう。

彼女は徒労感のため息を吐いて、それから素肌を守るためのマントを脱いでいた。

・錬金術で「銀の導き手」を作ろう 後編 1 / 2 (後書き)

皆様のご支援のおかげで、1万ptの大台に達しました。

ありがとうございます。

もっともっと書いてゆくので、応援して下さい。

「入れ違いになっちゃったみたいね」

「ごめん、姉さん……。もしかして、探してくれてた……？」

「いいのよ。あなたも見たいでしょ、ユリウスの調合」

「もち……」

言うよりも行動というやつで、俺はオアシスの水を釜へと流し込んだ。

それから杖を釜へと立てて魔力を水に流し込む。

すぐに2人はタイミングを察してくれて、机に手配した魔物素材を1つずつ投入していつてくれた。

「以心伝心……ツーと言えばカー……私たち、まるで夫婦みたいだね、姉さん……」

「ふ、ふふふふ、夫婦っ?! な、何言ってるのよっ、もっっ!」

「必要もないのに姉を攪乱するな……」

「必要、あるよ……? 動揺した姉さん、好き。キョン死、不可避

……」

「お前は何を言ってるのかわからん……」

姉妹の手でサハギンの鱗が投入されると、輝く濃紺に液体が染まった。

そこにゴブリン系の素材が入ると、色合いが薄まってゆく。

「姉さんがマント脱いでるところ、凝視してたくせに……」

「ちょ、ちよつとお……っ!？」

「落ち着け、お前はメーブルにからかわれてるんだ」

じつくりと見ていたのは事実だが。ここはそういうことにしておこう。

かましい姉妹のやり取りを横目に、俺はじつくりと魔力をかけて、全てのベースとなるエッセンスを完成させていった。

「でも、本当は見てた、でしょ……?」

「ああ、話をしていれば相手を見るに決まっている。それよりもそろそろいいぞ、銀を入れてくれ」

「あなたも一緒にうるたえてくれてもいいのに……」

「それこそメーブルの思う壺だろう」

「銀入れるね……。あ、手が、滑った……」

メーブルが器用に銀貨を次々と指で弾いて、釜へと投入していった。

ところがその中に、やけに白くて綺麗な物が混じっていたような気がする……。

「ちよつと待て、お前、今のまさか……」

「ニアが拾ってきた白い金……入れちゃった……」

「お前な……。レシピにないもん勝手に入れんなよ……」

「白い金ってなんのこと?」

無事な方の1枚を懐からシェラハゾに手渡して、俺は銀貨の溶けた錬金釜をかき回した。

シエラハゾは不思議そうに俺から受け取った銀貨を日光にかざして、気に入ったのかうっとりとしていた。

「これ、銀じゃないじゃないっ!?!」

「姉さん、気づくの遅っ……………」

「だって綺麗だったんだもの……………」

「そこは、激しく同意……………」

しかしこれは手応えが妙だ。

釜の中の液体は、銀貨の投入により水銀のような輝きに変わっていた。

しかもその水銀もどきは、杖を介して俺の魔力をグングンと吸い上げている。

工場では長いこと仕込みをやらされて来たが、こういったケースは初めてだった。

「ユリウス、平気……………?」

「責任を感じているならカバーしてくれ」

「おけ……………」

「あたしも手伝うわ、魔法は苦手だけど、一応これでもエルフだもの」

メーブルとシエラハゾが同じ杖に手をかけると、少しだけ楽になった。

3人で魔力を掛け合わせて何かを作る。やってみると悪くない一体感だ。

「姉さんの魔力……ハアハア……」

「変な言い方しないでよっ……。でも、何この、ビリビリくる感覚……っ、ん、ん……っ」

シエラハゾのひび割れ1つない唇から、いきなり色っぽい声が上がった。

調査も大詰めだというのに、それはドキリとこちらの胸を高鳴らせて、俺の集中力をかき乱しに来た。

「はっ……姉さんとユリウスの、ドキドキ、感じる……」

「何よこれっ、なんなのよっ、あっああっ!?!」

「あ、あう……っ」

シャンバラの迷宮事業を飛躍させる魔法のアイテムは、甘ったるい姉妹の声と、銀色のまぶしい光と共に生まれていた。

白い金が混入するという予定外こそ起きたが、釜の底に現れたそれはL字型の銀の棒、すなわちダウジングロッドだ。

俺たちの魔力をグングンと吸い上げただけあって、どれもが微弱どころではない魔力を秘めていた。

「すまん、作り過ぎたみたいだ……」

「成功してれば、問題ない……。はあ……えかった……」

失敗していたらそれはメーブルのせいだ。

シエラハゾはそう言いかけて止めた。なぜ俺にわかるかと言えば、俺だって同じことを言いかけたからだ。

釜から1つ1つ拾い上げると、ダウジングロッドは21対も

完成していた。

「銀の導き手　もとい、白銀の導き手の完成だな。早速実験に行くか」

「待って、先に都市長に報告しましょ」

床にへたり込んでいた姉が立ち上がる。

「そんなの成功してからの事後報告でよくないか？」

「よくないわよ。彼があたしたちのパトロンよ」

「お義父さんに、初めての共同作業……出来ました……って、報告しなきゃ……」

お前はまたそういう妙に語弊のある言い方をする……。

ところがシエラハゾまでその言葉に反応して、恥じらいの流し目をこちらに向けて来ていた。

「魔力を吸われたからか少し疲れた。オアシスの前で少し休んでくる。悪いが報告は任せた」

あの甘い声はなんだっただろう。

そんな疑問が頭をよぎったが、また煩悩に飲まれそうになりかけたので思考から追い出した。

そんなことより報告の後に、実験開始だ。

この『白銀の導き手』で、これから俺たちは新しい迷宮を発掘する。

そしてあの廃墟になってしまった町を、オアシスごとよみがえらせるのだ。



あの枯れたオアシスに輝く湖水が戻り、人々に賑わいで包まれれば、さぞやそれは見応えのある光景となるだろう。

・錬金術で「銀の導き手」を作ろう 後編 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

今夜更新分、非常に短くなります。

オアシスの木陰に寝転がり、メープルと一緒に空を見上げていると、報告に向かっていたシエラハゾが帰って来た。

その隣には見覚えのある白いネコヒトが立っていた。

「ユリウス様、都市長に代わって返事を持ってきたミヤ」

「あ、ああ……。ユリウス、様……？」

このネコヒト、こんなキャラだっただろうか……。

部下には姉御と慕われる勝ち気な女だったはずなのに、どういうわけかゴロゴロとその喉が鳴っていた。

「ユリウス、たらしの才能ある……」

「なんだそれは……」

「な、なんでもないミヤ！ それより都市長のお言葉を伝えるミヤ  
！」

身を起こして草地に座り込む。目の前で白いネコヒトの尻尾が左右にルンルンと揺れていた。

「『貴方の仕事の早さには脱帽です、実験の成功を心待ちにしております』とのことだミヤ！ ユリウス様、アタイもお手伝いするミヤ……」  
ゴロゴロ……」

「つまり人員が4人か。……なら二手に分かれるか」

「ミヤ……ッッ！？」

「そうじゃない……。空気読め、バカバカ、アホマヌケ……」

「バカとはなんだ。手分けすれば効率は2倍だぞ」  
「そうだけどそういう問題じゃないのよ……」

ちょうどそこに生えていた<sup>アシ</sup>葦でクジを作り、それぞれに引かせてメンツを決めた。

どうやら俺のペアはシエラハゾのようだ。

「フミヤアアア……。ミヤアアアア……」

「どんまい……。超どんまい……。おお、よしよし……」

「今日ほど、自分の不運を呪った日はないミヤア……」

「ご、ごめんなさい……。交代しましょうか……?」

「アタイに情けはいらないミヤ……！ フミヤアアツ、メープルウーッツ！」

何が不満なのかよくわからないが、嘆く彼女が可哀想で、俺はメーブルの胸にある猫型の頭を撫でた。

ふわふわで癖になる触り心地だった。

「ミヤアアア……。ゴロゴロ……」

「ユリウス……。手つきがやらしい……」

「猫撫でてるだけだろ」

「ネコヒトよ、全然違うわ」

グダグダしていてもしょうがないので、白いネコヒトが落ち着くのを確認すると俺たちは市長邸に移動した。

そこでラクダを借りて、北と南に持ち場を分けて広大な砂漠に出た。

出発するなり、俺たちはとある深刻な問題に気づいた。

俺たちの潤滑油となっていたのは都市長やメーブルであり、いざ無人の砂漠で2人つきりになると、言葉が何も出てこなかった。

俺たちは無言でラクダに揺られ、午前の日差しに光るダウジングロツドを見下ろしている。

「あー、なんだ。その……いい天気だな」

「と、当然よ……っ。滅多に砂嵐が吹かない土地だから、シャンバラは栄えたの……っ」

「言われてみればいつも晴れてるな」

「ちよつとっ、あ、当たってるっ、当たってるからっ！ う、ううっ……っ」

「す、すまん……。いや、ところで何が当たってたんだ？」

「ちよつとっ、無自覚だったの!？」

「だから何がだと聞いている」

「それは い、言えるわけないでしょっ、もうっユリウスのバカッ……!」

探索を行うには、片方が手綱を引いて、もう片方が白銀の導き手を両手に持たなければならなかった。

加えてラクダの機動力を使わないというのも効率が悪い。

よって、シエラハゾはラクダの背の上で、俺に背中を抱きすくめられる構図に陥っていた。

密着した身体と身体が蒸れて、なんだかずっと変な感じだ……。

「なあ、やっぱりこれ、再考の必要があるんじゃないか……？ なんか、クラクラしてきたぞ……」

「そうだけど……あ、あたしは、我慢出来るわ……。あたしも、クラクラするけど……へ、平気よ……」

「平気じゃないか……？」

「へ、平気だったら平気よっ！ オアシス復活のためにも、あたしたちが、がんばるのよ……っ」

そうは言うのが白銀の導き手に反応はない。

失敗作だったりしないか、少し心配になって来た。

「その気持ちはわかるが、こっちは気が変わりそうだ……」

「あ、あたしだって好きで、こ、こんな……。だってしょうがないじゃない……っ！」

互いにマントをまとって肌を保護しているとはいえ、密着は密着だ。

汗ばんだシエラハゾの匂いが甘く鼻孔に広がって、やっぱりこんな気が変わりそうだった……。

「お前って、結構上品だよな……」

「な、何を急に……」

「水浴びを済ませるといつも髪をとかしてるだろ」

「あ……っ」

彼女は急に何を驚いたのだろう。

俺は最初こそ不思議に思ったが、すぐにそれが過去最悪の大失敗であることに気づいた。

なぜユリウスは、シエラハゾが水浴びの後に髪をとかすことを知っている？

いつものぞいていたからだ。

それは間接的な自白も同然だった。

「ち、違うつつ！ 髪が濡れてたら、水浴びの後だってわかるだろう！？ い、いや、もしかして、これも、墓穴か……？」

ここでうるたえること自体が追加の自白だった。

潔白ならば平静にしていればいいだけのことで、これでは見ていましたと、そう答えているにも等しい。

「小さい頃、母様がいつもしてくれたから……。とかすのは、習慣かな……」

「習慣か……」

「うん……」

俺の目の前で、シエラハゾのブロンドの後ろ髪が透けるように輝いている。

それを見てみると、いつも心には思うが、言葉には出来ない言葉が喉からはい出してきた。

「前から思ってたんだが……そんなに綺麗な髪、初めてだ……」

「え……。あ……。ありがとう……。ふふふつ、それ、メーブルにも

よく言われるわ……」

「い、いや、北方のツワイク人は剛毛だから、特にそう見えるだけで……っ。俺は、こんなに綺麗に見えた人は、お前が初めてなだけで、別に……。いや待った、やっぱり今のなしだっ、なんでもない！」

「あ、ありがとう……。あたし、嬉しい……」

何を言ってるんだ、何を言ってるんだ、俺は何を言ってるんだ……！？

長い沈黙が生じて、俺はその間もずっと心臓の鼓動を激しく脈打たせていた。

クラクラするのも当たり前だ……。

頼む、白銀の導き手。そろそろ反応をくれ……。

「あっ、動いたわ！　どんなに揺れても全然動かなかったのが、ロッドの先があっちの方に……！」

「よし来たっ、行くぞ、シエラハゾ！」

「うんっ！」

彼女にしては嫌に素直な返答に戸惑いながらも、ダウジンググロッドが示す方角にラクダを導くと、まるで磁力で引かれているかのようにはロッドも向きを固定させた。

やがてあるところまでやってくると、正面方向を指していたロッドがクルンと真後ろに反転した。

それは俺たちが心待ちにしていた契機だ。



シエラハゾは逃げ出すようにラクダを飛び降りて、俺も背の上で開放感を満喫した。

嬉しいシチュエーションだったのは認める。

だが気が気じゃない状況が続くのは、甘ったるかろうとそれはストレスだ。

心臓が落ち着くのを待ってから、俺もラクダを少し離れた場所で休ませて背から降りた。

・白銀の導き手で迷宮を発掘する 2 / 3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 【いただけるとう嬉しいです。

「この真下みたい」

「わかった、離れてくれ。いつもの手口でぶち抜いてみる」

「ふふっ、あなたがいればスコップ要らずね」

「ま、身体で掘るより遙かに楽だ。……アースグレイブ！」

巨大な大地の槍を発生させて、その槍を崩すとそれが地下トンネルになった。

しかもビンゴだ。砂の下には地下へと続く空洞があった。

その空洞に下りて進んでゆくと、それはあまり砂漠でお会いしたくないタイプの迷宮だった。

炎の迷宮だ。熱を帯びた壁のところどころが赤熱する、対策装備なくしては攻略どころか進入すら難しいやつだった。

「これは大外れだ。他を当たろう」

「凄く蒸し暑いわ……。だけど夜間のキャンプ地にはよさそうかしら……」

「かもな。目印だけ置いて移動しよう」

砂漠エルフの技術に、導石というものがある。

これは特定の魔力に反応して、場所を知らせるアイテムだ。

砂漠という広大で日々様変わりする土地で暮らすためには、こういうアイテムが必要だったのだろう。

それを置いて、俺たちはまたラクダの前に立った。

「て、提案があるの……」  
「却下だ」

「な、なんでよっ!? あたしまだ何も言っていないわ!」  
「どうせ自分が後ろに乗ると言うんだろ……却下だ!」

「そんなの不公平よ! あなただって、あたしと同じ気持ちを味わいなさいよっ!」

「お前は女で俺は男だろ!?!」

「だったらなんだって言うのよっ?! とにかく、あなたが前ったら前よっ!」

コイツは炎の迷宮の暑さでおかしくなったのではないか……。どうしても聞かないので、彼女の提案に従うことになった。

すなわち俺が前で白銀の導き手を水平に構え、シエラハゾが後ろから背中を抱くように手綱を持つ構図だ。

失敗はすぐに明白となった。彼女は胸がとても大きい……。

「ごめんなさい……。ま、まずいわね、これ……」  
「わかったなら入れ替わってくれ……」

「……嫌よ。こっちの方がまだマシだわ」  
「な、なんだと……?」

「だって、されるより、する側の方が気持ちは楽じゃない……」  
「まあ確かにそれは、肌身で感じ始めているな……。主導権が自分

にあつた方がいいな……」

次の迷宮が見つかるまで、俺はシエラハゾの身体の正面を背中に押し付けられながら、ただただひたすらに耐えた。

役得？ そうも言えるかもしれないが、長く続き過ぎる役得は、恐らくは拷問だ。

白く輝く砂漠を、エルフの美姫と共に俺はさまよつた。

・

そろそろ付近の村に寄つて休もうかとシエラハゾと話していると、俺たちは2つ目の迷宮を発見した。

雷の迷宮だ。これはこれでレアで、需要の高い迷宮となる。

だが俺たちが欲しているのはこれではない。

電撃と青い光を放つ岩で覆われた扉を離れ、俺たちは近隣のオアシスで一休みすることにした。

「なんだか変な感じね」

「何がだ？」

「あなたとこうしていることよ。ちょっと前まで、あたしたち行商人のふりして世界中を回つたのよ。諜報のためにね」

「ああ……。メープルのことを考えれば、腰を落ち着かせた今の生活の方がいいだろうな」

「そうね。だけどあなたが迷宮に1人で突っ込んで行こうとしなけ

れば、もっと安心できるわよ……?」

「まだ根に持ってたのか」

「戦いがからむと、あなた普通じゃないわよ……」

「ははは、言われてみればそうなのかもな。だが大半の男はそんなものだ。男は戦うのが好きなんだよ」

小さなオアシスを眺めながら、俺たちは木陰でゆっくりと休んだ。水深が深いのか、やけにここの湖水は青く見える。

「本当に不思議よ……。なんであなたが、あたしたちを選んだのか、最初はわけがわからなかったもの……」

「断り文句のつもりだった」

「知ってるわ。だけど、それだけじゃないでしょ……?」

「いや、どうもわからん。自分でもなんであんなことを言い出したのか、今ではよくわからん」

俺を拉致した実行犯を困らせてやろうとか、話したことがある相手の方がまだマシという部分も確かにあった。

しかし俺は、あの馬車の中でシェラハゾの姿を見たあの時点で、好ましい物を感じていた。

メープルだって面白いやつで、さらに愛らしく、それがあの選択を導いたとも言える。

「あたしもよ。断ることだって出来たのに、なんでか今こうなってるわ。……ん、顔が赤いけど、あなた大丈夫? もっと水を飲まなきゃダメよ」

シエラハゾは立ち上がると湖水をすくって、俺の前に両手を差し出してくれた。

その繊細な手から直接飲めと……？

「早く！ こぼれちゃう！」

「わかった……」

これは熱射病ではなく、今朝のオアシスで踊っていた彼女と、今のオアシスの前でたたずむ彼女を重ねて見ているせいだ。

そうとも知らず彼女は両手を差し出して、俺にその指へと間接的に口付けさせた。

いや、やはり熱射病なのかもしれない。

それだけでは物足りない俺は立ち上がり、オアシスの水を何杯も飲み干した。

「あたしね、ユリウス。あなたが一人でツイクに戻ってしまったとき、凄く不安だったの……。このままあなたが帰って来ないかと思うと、なぜだか凄く不安で……」

「だがこうしてちゃんと帰って来た」

「うん……。帰って来てくれて、ありがとう、ユリウス……」

「お、おう……。いやに素直だな……」

「だって、あなたは自分の意思でシャンバラに戻って来たのよ。あたしもメープルも、そのことが凄く嬉しかったの。あなたは帰ってきてくれたの！ 約束を守って帰って来てくれたのよっ！」

「大げさだ。単にここの居心地が良かっただけだ。工場に縛り付けられた生活より、こっちの方が遙かに優雅だ」

俺たちは気を取り直して、オアシスから南東へと再出発した。  
あまりシャンバラの中央を離れ過ぎた場所を発掘しても、その後  
が行き来なり管理なりが大変だ。

それからまたシエラハゾと言い合うように言葉を交わしてゆき、  
やがて昼前になると、ようやく白銀の導き手に反応があった。

指し示された方角へとラクダを導いてゆくと、そこで俺たちは思  
わぬ顔ぶれと出会うことにもなった。

「ユリウス様ミヤ！ ブミヤアツ、ベタベタしてるミヤアアツツ？  
！」

「もふもふ、最高……。あ……。これが、百合の世界……。？」

あの白いネコヒトとメープルの乗ったラクダだ。

メープルはふわふわのネコヒト後ろから抱き込んで、実にご満悦  
だった。

「どつやらその地面みたいだな。ぶち抜くからラクダを移動させ  
てくれ」

シエラハゾから白銀の導き手を受け取り、手綱を彼女に握らせる  
と慎重にラクダを下りた。

続いて皆が待避するのを待つてから、短剣を増幅装置にして本日  
3発目のアースグレイブを大地に放つと、期待通りの地下空洞がそ  
こに生まれていた。

一足先に降下してみると、やっとこさのビンゴだ。

俺たちはついに目当ての『土の迷宮』を発掘することに成功して  
いた。



「ユリウスと、姉さんが仲良しだと、私も嬉しい……。もうおっぱい触った……。？」

「昼間から酷い寝言だな……。それより少し休め」

「なんで……。？」

「今からこの迷宮を攻略するからだ」

「フフ……。ヤバ、ドン引き……。」

最短でキーアイテム『大地の結晶』を手に入れるなら、これこそが真だ。

土の迷宮の前はひんやりとしていて空気に潤いがあり、ちょっとした休憩に最適だった。

・白銀の導き手で迷宮を発掘する 3 / 3 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 【いただける嬉しいです。

母国ツワイクにおいては、土の迷宮は雑草とも呼ばれるほどにありふれた迷宮だ。

その名の通り、それは地中に掘られたトンネルのような迷宮で、冒険者たちの中にはこの迷宮を毛嫌いする者も少なくない。

その理由は数えて3つほどある。

1つ、自然に近い迷宮ゆえに、明かりの持参が必須。もし失うと極めて危険。

2つ、通常の迷宮とは異なり、地下世界そのものが崩落する可能性がある。

3つ、果てしなく続く暗闇の世界への、本能的な恐怖。

対する長所は、比較的 몬스터の危険度が低いところや、金属や宝石の鉱床に出会える点だ。

そのため嫌うやつは嫌うが、土の迷宮には他にはない歴とした口マンがあった。

「待ってっ、待ってっばっ！ もうっなんで平気なのよ、あなたっ?!」

「仲間から噂には聞いてたけど、物凄い蛮勇だミヤ……」

照明魔法はシェラハゾの数少ない得意系統らしい。

俺は背後からのライトボールに照らされながら、白いネコヒトと並んで暗闇の迷宮を進んだ。

まあ後ろがやかましいのは恒例のことだ。

「こういうのに慣れてるだけだ」

「なんで慣れてるミヤ？」

「あ、それ聞きたい……。宮廷魔術師だったのに、どうして、迷宮に詳しいの……？」

「宮廷魔術師だからだ」

「どういうこと……？」

「考えてもみてくれ。確実にガツポリ稼げる迷宮が国内にあったとして、それを国の業突く張りどもが、フリーの冒険者に解放すると思うか？ 冒険者を金で雇って、稼ぎの上前をはねる方が儲かるに決まっている」

これはツワイクが抱えてきた社会問題の1つだ。

利益性の高い迷宮を独占する王や領主ばかりがブクブクと肥えて、年々と貧富の差が激化している。

「つまり……公務員として、あなたが手伝わされたってこと？」

「ああ。訓練って名目で、これまで何十回も潜ってきた」

「それ……危険手当とかは……？」

「1度も出たことはないな」

「ケチくさい……」

決まってガツチリと前衛が前を固める編成なので、当時は後方から術で敵を狙撃するだけだった。

1つの迷宮に、過剰とも言える人数を投入する傾向があった。

「そうだったの……。なんだか嫌ね、シャンバラもいつかそうなっちゃうのかしら……」

「それを決めるのは都市長だ」

ツウィク王国の失敗をこの目で見た者として、この国がああならないよう願うばかりだ。

豊かな産業があるのはいいが、民がその産業の奴隷になつては本末転倒だ。

ところがそうしていると、暗闇の向こうに狭いフロアが現れて、そこに立ちはだかるようにモンスターがひしめいているのが見えた。

「なんだあれっ、でっかい宝石だミヤッ!？」

「違つぞ、よく見る。宝石の下になんかいるだろ」

「ミヤ……? ミギヤーツ、な、なんかいるミヤアアツ?!」

「お前いちいちリアクションがいいな……。あれがルイン・タートルだ、最後は自爆するから、あまり近づかない方がいい」

言つよりも見せた方が早いので、亜空間転移で合計5体のルインタートルの背後を取つた。

妙に平たいその甲羅の、柔らかい尻のあたりにナイフを突き刺すと、自爆のスイッチが入つた。

「さすが、ユリウス……。言ってることと、やってること、全然違う……」

「俺はいいんだ」

ルインタートルの甲羅上の宝石がチカチカと光り始める。

俺は魔力爆発の臨界寸前に、新たな扉を開いてみんなの前に舞い

戻った。

宝石亀が爆発して、それが他の宝石亀に激突して、連鎖的に起爆のスイッチが入ってゆく。

時間差で派手な花火が5回弾けて、ドロップだけがそのフロアに残った。

宝石亀の鼈甲へっぴょうが3、小粒のサファイアが1だ。

あの職人の集まるオアシスで、この鼈甲を櫛にしてもらってシエラハゾにプレゼントしたら、彼女は喜ぶだろうか。

・上の迷宮で素材を集めよう 1/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

「どうした、行くぞ？」

「め、迷宮って、怖いミヤ……凄く怖いミヤ……」

「ヤバ過ぎ……。亀さんも、ユリウスも、どっちも、ヤバ過ぎレジエンドだ……」

「いや、アレはレアモンスターだから安心しろ。もしあんなのばかりだったら、モンスター同士のケンカで迷宮がぶっ壊れるだろ」

「そ、そう……。あら、でも綺麗ね、これ……」

色とりどりに透ける鱗甲と、サファイアを彼女たちに渡して探索を再開した。

探索を進めてゆくと、泥人形ことアースマンや、ジャイアントバッド、人型ネズミのラットマンが立ちはだかったが、そんなものは俺たちの敵ではなかった。

「アースマン、燃やすの、おもしろ……」

シエラハズの細剣は泥の肉体を持つアースマンには無効だったが、メイプルのファイアボルトの連発により砂岩へと戻った。

「ミヤアアアーツツ、ネズミ怖いミヤアアーツツ!!」

「ネコヒトがなんでラットマンを怖がるのよっ、普通逆でしょっ?! 痛っ、こ、このおっ!」

白いネコヒトが巨大ネズミに追いかけて回されていたが、救援のシエラハズの細剣が急所を貫き、ラットマンを瞬殺した。



その際に脚をラットマンに引つかかれてしまったようだ。

しかし俺たちに負傷という後退はない。

すぐにシエラハゾが持参したエリクサーほおぼると、その傷口がみるみるうちにふさがって、最後は綺麗に消えてくれた。

こんな超回復薬を持った冒険者たちが迷宮を下ってくるなんて、モンスターたちからすれば理不尽でしかないだろう。

思えば母国で長らくくすぶっていた俺が、こんなチートアイテムを量産してしまえるなんて、今でも現実が信じられなかった。

「フミヤアアアーツツ、大きいコウモリも怖いミヤアアーツツ!!」  
「とか言いながら、余裕で、やっつけてるし……」

ジャイアントバッドはネコヒト族の機敏さには敵わず、次々とレピアの餌食になった。

キャラは濃いが、白ネコの俊敏さや的確さは、他のネコヒトたちをも凌駕していた。

「起爆させるぞ、フロアから離れる!!」

「ちょ、ちょっと待つミヤツ、ユリウス様アアツツ?!」

「待つて待つてっ、やるならもつとゆとりを持って……っ! あたしもうルインタートルはイヤよっ!!」

それとルインタートルは俺が受け持った。

レアモンスターのはずなのだが、これはシャンバラの土地柄か何かだろうか。

俺は背の宝石から放たれる魔法マジックアローを短剣で弾き返し

て仲間を守り、転移と急所突きで迷惑な亀を自爆させた。  
撃破後、その爆心地に残っていたのは親指大のルビーだ。

悪くない。ルインタートル大盛りという難点こそあるが、いずれこの迷宮はシャンバラの産業に大きく貢献してくれるだろう。

「マジでガクブル……。あの亀、トラウマに、なりそ……」

「そもそもなんで自爆するのよっ!?!」

「存在そのものに神様の悪意を感じるミヤ……」

死なば諸共。昆虫などの群生生物の世界では希にあることだ。

その後もモンスターの群れと出会ってはドロップを回収していたが、目当ての『大地の結晶』とはまるで出会えなかった。

・

それでも諦めずに暗闇の迷宮を進んで、進んで、進んでゆくと気づけば地下5階だ。

俺たちは俗に言われる、ボス部屋の前に到着していた。

脆い土の扉を崩して中をのぞいてみれば、3人の顔が青ざめるのを目撃することにもなった。

「でかいな……。土の迷宮あらため、宝石亀の迷宮とでも名付けるべきか」

大部屋の中央に、体長3、4mはあろう『キング・ルインタートル』とでも名状し得る巨体が、俺たちを待ちかまえていた。

「ま、待って、待ちなさいよ、ユリウスッ！ あたしあんなの絶  
対イヤよっ！」

「爆発したら、この階層ごと、潰れちゃったりして……」

「ダメミヤッ！ アレだけは、アレだけはシャレになってないミヤ  
アアッッ！！」

左右からメーブルとネコヒトに腕を掴まれ、シエラハゾには羽交  
い締めにされた。

その大きな胸が背中にムニユリと当たると、スケベ心に負けて闘  
争心が鈍るから困ったものだった。

・土の迷宮で素材を集めよう 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

これから第二部の量産体制に入ります。

開発速度によっては、第一部(15万字) 完結後に、数日のおやすみをいただくかもしれません。

「離れてくれ、転移出来ない」

「するなって言ってるミヤッツー!!」

「あんな大物は初めてだ。倒してみたい」

「あなた人の話聞いてないでしょっ!? あんなのが爆発したらっ、大変だから止めましょっつてあたしたちは言ってるのっ!」

「じゃあここからはソロで」

「バカ過ぎ……。金的、食らわすよ……?」

「金的とか鬼かお前は」

「それこっちのセリフ……。蹴っていい……? ハアハア、むしろ、積極的に蹴りたくなってきた……」

メープルはそう言ってジャンプと屈伸によるウォーミングアップを始めた。

「まずい、コイツ、目が本気だ……」。

「や、止める、わかったから金的だけは止める。よし、ここは出直すでしょう」

大事なところを蹴られたら肉体的にも精神的にも死んでしまうので、メープルの奇襲を警戒しながら俺は観念した。

と見せかけて、彼女たちが手を離れた一瞬の隙を突いて転移した。

狙いはキングルインタートルの尻だ。

起爆して、逃げて、最後は魔法盾を展開すれば仲間を守れるだろう。……たぶんな。

「消えたミヤアツ?!」

「ま、まさか……ユリウスウツ!!」

「騙された……。後で絶対、金的食らわす……100発食らわす……」

なんか文句も聞こえたが、やるべきことを優先だ。

ルインタートルみたいな敏捷性に欠けるモンスターは俺の力モでしかなく、俺は短剣を逆手に両手持ちして、転移で急所の上空に飛ぶと、筋力と万有引力の限り刃を突き刺した。

亀が咆哮とも悲鳴とも取れない叫びを上げた。

背の巨大な赤い宝石から、メチャクチャに炎や爆裂魔法をぶっ放して、死なば諸共の本能ってやつを見せつけてくれた。

「危険よユリウス逃げてっ! どうしてあなたって人は あ、あれ……脚が、あっ……?!」

「姉さん……!?!」

「逃げるミヤツ、あんなのが吹っ飛んだらみんな仲良しこよしのオダブツミヤアツ!」

何かあったのだろうか。地に崩れるシエラハゾを2人が引っ張って後退して行くのを見た。

炎、電撃、氷、風、ありとあらゆる属性の魔法がフロアの壁に放たれ、今にも天井が落ちて来そうだ。

「浅かったか。短剣じゃなくて、師匠みたいに魔法剣を持つべきかな……」

そこで俺は短剣越しに、ヤツの急所に電撃魔法をぶち込んだ。再び絶叫が上がり、巨体が暴れ回り、ようやくやつが動きを止めることになった。

他のルインタートルにも等しく、背中 of 宝石が暗転を始めている。じきに爆発するようだ。

すぐに転移して、姉妹とネコヒトと合流した。

「起爆して来た。どうしたんだ？」

「わからない……。姉さん、急に立てなくなって……」

「今起爆したって言ったかミヤツ!? もぉーっ、なんてことする人だミヤアアーツツ?!」

シエラハゾからの抗議はなかった。

酷く苦しそうに俺を流し目で見ただけで、こんなのは俺の予定になかった。

「大丈夫だ。予定より爆心地に近いがどうということはない。メープル、手伝ってくれ」

「あたし、は……逃げ、て……」

短剣を増幅装置にして魔法盾を展開すると、さっきの攻撃で切っ先の刃が欠けてしまっていることに気づいた。

姉を守るには他にないと悟ると、メープルは本気で俺を睨んでから杖を掲げる。

「来るぞ」

「後で絶対……絶対食らわす……。100発、食らわす……」

「いいから集中しろ。……ちなみに何を食わせてくれるんだ？」

「後で絶対、金的食らわす……100発！」

「アタイが許可するミヤッ！」

奥の通路に白い閃光が走ると、大地が揺れて音速に至った爆風が魔法盾に激突した。

直撃したら爆死、爆風を食らっただけでも内臓破裂だ。盾の強度が足りなかつたら死ぬ。

爆風を受け止めきると、パラパラと天井や壁が崩れる音と、スリルに呼吸を乱すみんなの声だけが聞こえるようになった。

粉塵は魔法盾を越えることが出来ない。盾からこつち側にいれば安心にして快適だ。

おまけにこれはなんの幸運か、魔法盾のすぐ先に、岩のように大きな『大地の結晶』を発見することにもなっていた。

「姉さん、平気……？」

「ごめんなさい……。なぜだか、足の感覚が、ないみたいなの……」  
「脚がミヤ？ アタイが見るからじつとして え……っ！？」

魔法盾の位置を動かして、大地の結晶を足で蹴ってこつちに移動させた。

しかし盾を展開したままみんなの方に振り返ると、なぜか彼らは青ざめている。

変だなど、シエラハズの脚を見るとそこに原因があった。

「ユリウス、お願い……お願い、姉さんを助けて……。姉さんの、綺麗な脚が、そんな……助けて、助けて、お願いユリウスウツッ！」



「これは石化毒だミヤ……。まさか、あのときのラットマンかミヤ……？ ア……。アタイがへタレたせいだミヤ……」

やっと水の迷宮の大穴を塞ぐ補修剤が作れるというのに、シエラハゾの左脚が石になっていた。

石化が重要な臓器に至れば、そいつは死ぬ。この世界の常識だった。

たかがザコモンスターと油断していた。  
進行速度を考えれば、脚を切り落とすか、今すぐ石化毒を解かなければ、これは死に至る。

「ユリウスッ、お願い……！ 私、ユリウスが欲しいもの、なんでもあげるから……お願い、姉さんを助けて……。イヤ……こんなもの、イヤだよ、イヤ、イヤァ……」

徐々に徐々にと、シエラハゾの美しい脚が灰色の石へと変わっていつている。

メープルの悲痛な叫びが、痺れるように俺の思考能力を奪うのを感じた。

「いいのよ、メープル……。あたし、ついてなかったわ……。ただ、ついてなかっただけ……」  
「そんな……っ」

「ふふふ、こんなの、困っちゃうわね……。やっと、こんなあたしにも、好きな人が出来たかと思っただのに……。ふふふっ、本当に残念……」

「ど、どうするミヤッ、どうすれば助けられるミヤッ?!」

石化毒の治療法なら盗んで来た本に載っていた。

材料も俺たちの工房にある。そこへと転移する方法も俺は持ち合わせている。

ただし、人を連れての亜空間転移は禁止されている。  
やれば何が起きるかわからない。

ノーリスクで済む可能性もあれば、100年後に飛ばされたり、  
別世界に閉じ込められる可能性もある。

だがこうなれば、やる他になさそうだ。

リスクを支払ってでも、俺はこの2人との生活を守りたい。  
メープルとシエラハズのいない生活など、今となっては考えられ  
ないからだ。

ここで終わりだなんて、そんな理不尽な結末にはさせない。

「俺がシエラハズを工房に連れて行く。ただし、人を連れての転移  
は禁じ手だ。最悪は100年後になつたり、もつと酷いと、こちら  
の世界に帰ってこれない可能性もあるが、それでもいいか……？」  
「ツツ……ね、姉さんが、死ぬより、そっちの方がいい！ 姉さん  
がいない世界なんて、私には考えられない！ お願い、ユリウスッ、  
姉さんを連れて……飛んでっ！」

「わかった、俺なりに悪足がきを試みる。すまんが魔法盾の維持  
を頼む」

俺は倒れたシエラハズを抱き支えると、どうにか踏ん張って抱き  
抱えた。

時間の猶予はない、すぐに飛ばぼう。

「俺たちの工房で会おう。お前の姉は必ず守る、約束する」

俺は亜空間の扉を開くと、ここではない別の世界へと身を投じた。  
願わくば禁忌の代償が、メープルの愛するシエラハズにだけでも

降りかからないことを願う。

俺もシエラハズのいない未来など嫌だ。

俺はもう2度と、彼女以上に美しい女性と出会うことはない、  
今さらになって確信した。

シエラハズを抱いて、世界の裏側を歩く。

迷宮という螺旋階段を上り、地上に出ると俺たちの工房を目指して歩いた。

今のところ周囲に異常はない。

両手の中の彼女は苦しげに目を細めて、未知の世界ではなく俺だけを見つめていた。

「ユリウス……」

「なんだ。あまり喋るな、死なれると本気で困る」

「あなた……孤児、だったのね……」

「そこまで俺を調べていたのか……。まあ、ツイクでは別に珍しいことではない。富があるところに、戦争が生まれるものだ」

走りたいが走ると座標が狂う。

俺は彼女の病状に何度も目を送りながら、ただ慎重に歩いた。

危険な転移ゆえに、少しのミスも許されない。

「違うの……。あなたの過去が、見えたのよ……」

「急ぎたいが我慢してくれ、必ず守る。お前のいないシャンバラの生活なんて、絶対にあり得ない。絶対にだ」

俺の責任だ。俺がまともな準備をしないで迷宮を下ろうとしたか

ら、こうなった。

もしも彼女が死ねば、メーブルは心の痛みに堪えきれずに俺を憎むだろう。

「メーブルは、そんな子じゃない……」

「苦境に追い込まれた人間は変わる。必ずそうなる」

「そうだったら……あたしの代わりに、あの子を救って……」  
「わかった。必ずそうしよう」

いや……待て、これは変だ。なぜ彼女は俺の考えていることがわかるのだろう。

まるで頭の中を直接見られているような……これは、まさか禁忌を犯したことによる異変なのか？

「なんだ、これは……」

「わからない……。あたしには、あなたの全てが見えるわ……。あなた、ユーリと呼ばれてたのね……ふふ、かわいいわ……」

「馬鹿な」

工房への道すがら、俺はとても奇妙なものを見た。

それは俺がシエラハゾとなり、幼少時代の彼女の幸福と、悲しい転機を見る白昼夢だ。

この白昼夢が真実だとすれば、メーブルとシエラハゾの間に血縁関係はない。

心の中で美姫と呼んでいた世にも美しい女性は、シャンバラの本当のお姫様だった。

・禁忌と代償 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

## ・塵気楼の姫君

### ・塵気楼の姫君

昔々、デザート・ウオーカーと森リーフ・シーカーエルフが分かれたるよりもずっと古い時代に、世界全てのエルフを束ねるまほろばの王朝がありました。

その王朝はたった1人の女王が1000年の永き安寧に導いた後に、次の王を指名することなく、一代にして崩壊を迎えたとされています。

いにしえの13の部族のうち、11部族が戦いの果てに姿を消し、デザート・ウオーカーとリーフ・シーカーだけがこの地上に残されました。

そしてお前は、その偉大なる始祖にして千年王シエラハの末だとお父様とお母様があたしに教えてくれました。

やさしかった両親のその言葉が、狂気にも等しい血筋への執着だと知ったのはずっと後のことです。

あたしは始祖様と同じ名前を与えられ、家人にシエラハ姫、姫様、シエラハ様と呼ばれながら育ってゆきました。

ところが幼きシエラハ姫の幸せは、本人からすればあまりにあっけなく終わりを告げました。

彼女が8歳を迎えて間もないある日　お父様は大切なお姫様の部屋を訪れると、悲しみと覚悟の混じり合った表情でこう言ったのです。

「シエラハ。お父さんとお母さんはこれから、遠くに行くんだよ…

「遠くに……？ それ、シエラハも、一緒に行くの……？」

「いや、お前には後から使いを送ろう。それまではあの男 シヤムシエルがお前を守ってくれる。これからは彼と一緒に暮らしなさい」

「それって、あのやさしいお爺さん……？ でも、急にそんなこと言われても、シエラハは……」

もちろんそれはあのシヤムシエル都市長のことよ。

お父様とお母様はわたしを都市長に預けて、このシャンバラを去ることにしたの。

「消えた11部族 いや、新しいエルフの国が見つかったら迎えに来るよ。それまでの、ほんの少しの我慢だ……」

「でも……。でも、少して、どれくらい……？」

「5年……いや、10年。はは、100年かかるかもしれないな……」

「そんな……。だったらシエラハも連れてって。お父様とお母様と、そんなに離れ離れなんてイヤよ……」

「ああ許してくれ、シエラハ……。私たちが野心に飲まれなければ、こんなことにはならなかったというのに……」

お父様とお母様はあたしを都市長に預けると、あの美しかったお屋敷から姿を消したわ。

とても辛かったけど、あたしは都市長の シヤムシエルお爺さんのやさしさに救われた。



そして、後から知ってしまったの。

父と母は都市長と対立して、数々の死者をも出す政争の果てに、シャンバラとあたしを捨てて出て行ったと。

シヨックだったわ……。

両親もシャムシエルお爺さんも、どっちも同じくらいあたしは大好きだったから……。

こうして甘ったれた砂糖菓子みたいだったお嬢様は、少しずつ都市長とメーブルの隣で現実を知ってゆき、それから、やがて

「ユリウス……脚が重いわ……」

「そりゃ石化してるからな。だが喜べ、もう到着する。お前は必ず俺が治す」

「ありがとう……。ユリウス、あたし……。あたしね……。あたしは

……」

「……シエラハゾ？　おい、どうしたっ!？」

あたしはあなたを見つけさせてもらったの。

この人なら衰退してゆくシャンバラを救えると、メーブルと一緒に確信したの。

今ではあなたを選んでよかったと思っているわ。

あなたならシャンバラを救えると信じている。

だからユリウス、お願い。

あたしが死んでも、メーブルにやさしくしてあげて……。

そしてどうか、あたしの代わりにどうか　お父様とお母様が愛

したシャンバラを救って……。

お願い、お願いよ、ユリウス。遺志を継いで。

あたしを少しでも哀れむなら、そのやさしさをどうか、メーブルとシャンバラに……。

俺たちの拠点・白亜の工房への転移はちょうど今無事に成功した。本当なら2階のベッドにこの姫君を寝かせてやりたいが、今は一瞬だろうとも時が惜しい。

シエラハゾを工房の冷たい床に横たわらせた。

「いいか、寝るんじゃないぞ！ 寝たら戻ってこれなくなるから、気合いで起きてろよっ！」

バケツを持って、工房前のオアシスとの間を往復して錬金釜に湖水を流し込むと、石化治療薬のレシピを求めて工房の本棚に飛び付こうとした。

いや、ところがどうもこれが変なのだ。

その本は既に作業用テーブルに置かれ、しおりが挿され、石化治療薬のページが開かれている状態だった。

「おかしいぞ、なんで、材料が……。いや、今はそんなこと考えている場合じゃない……！」

冷静に作業テーブルをよく見ると、なんと治療薬の材料までそこに並んでいた。

そのレシピはポーションの工程からさらに手順を発展させたもので、雑に言えば完成前のポーションにバジリスクの鱗などを加えたものだ。

残る問題は杖だったが、これもメイプルの杖そっくりの物が窓際に立てかけてあるのを見つけた。

再び疑問が頭をよぎったが振り払い、何も考えずに杖へと飛び付いて錬金術を開始した。

一心不乱に水に魔力をかけて15秒でエッセンスを作ると、アロエとベースハーブとナツメヤシを加えてポーションの段階まで進めた。

「なぜ、メイプルの杖がここにある……。わからん、何が起きているんだ……」

そこにバジリスクの鱗を加えて、教本通りに強い魔力をかければ完成だ。

俺は数十年ぶりに神に祈った。

エリクサーをも生み出す奇跡の力よ、どうかシエラハゾを救う奇跡の治療薬になってくれと、ヒューマンではなくエルフの神に願って、全力全速力の超速度で石化治療薬を完成させた。

「ぐっ……?!」

軽い破裂音と、甘い匂いのする灰色の蒸気が上がった。

同時に激しい息切れと、魔力の大幅な消耗による虚脱感が俺に膝を突かせた。

それでも休んでいる時間などない。急がなくてはならない。

石化毒が重要な臓器を冒す前に、シエラハゾに薬を与えなければならぬ。

釜にしがみ付いて、中であつたたたった1つだけの錠剤を握り取ると、俺はシエラハゾの隣まで地をはいつくばった。

「薬が出来たぞ、起きろ……！　おい、シエラハゾ……ッ！」

まずい。シエラハゾは俺が大声で呼びかけても、うわごと一つすら返してくれなかった。

服用者の意識がないというのに、よりもよってなんで俺は錠剤を作ってしまったんだ……！

「ほら、薬だ、飲め！　飲まないと死ぬぞ、起きろシエラハゾッ……！」

彼女の下顎を引っ張って、無理矢理飲ませようとしても呼びかけが通じなかった。

見れば石化はこの短時間で、下腹にまで至ってしまったている。

「起きろ起きろ起きろ起きろよっ、シエラハゾッ！！　俺たちを置いて勝手に死ぬな！！　ふざけるなっ、俺がどんなに、どんなにお前に惹かれていっているんだっ！！　オアシスで水を浴びるお前を見てから、俺はお前のことが頭から離れない！！　お前以上に美しい女なんてこの世にいるものか！！」

感情任せに錠剤を噛み砕き、バケツの水を口に含んだ。

激しい呼びかけが彼女の意識を微かに揺すり起こしたのか、うっすらとその目が開く。

「ユ、リ……。んっっ……」

薬は一錠だけだ。

ここまでやった以上、吐き出してそれを飲めとは言えない。

だから俺は彼女の小さな唇を奪い、やわらかな感触に心奪われながらも、少しずつ彼女に命を救う薬を口移しで与えた。

……良かった。薬を飲んでくれている。

薬の方に不具合があったり、病状が手遅れでない限り、これで救えたはずだ。

薬を全てを飲ませても、どうしてもそのやわらかな唇から離れる気が起きなくて、俺は彼女に覆いかぶさって石化で冷えた身体を温めていった。

「んっ、んっっ……。あ……。あれ……。あた、し……」

「……意識が戻ったか。石化は　おおっ、良かった治ってるぞっ！」

「ユリウス……」

「なんだ、どうしたっ！？　何が欲しい！？」

小さな声で何かを言っている。

聞き取れないので唇の前に耳を寄せて、彼女の言葉を待った。

「嬉しい……」

主語がなくて意味がわからなかったが、表情をうかがうと幸せそうに彼女は俺に笑い返して、また綺麗な瞳をまぶたで隠した。

まさか死んでないよなと、再び口元に耳を寄せると安らかな寝息が聞こえる。

「良かった……。はぁぁ……。良かった、本当に良かった……」

深い安堵に俺はそのまま床にへたり込んで、激情の反動かしばらくを放心状態で過ごした。

それから気持ちの余裕が少し出てくると両手両膝を突いて、もう一度シエラハゾの顔を見つめ下ろす。

美しいエルフの美姫がそこに眠っている。

世界の裏側で彼女と混線したこの記憶が真実ならば、彼女は本物のお姫様だ。

シエラハ・ゾーナカーナ・テネス姫　略してシエラハゾだ。

「嬉しい、か……。どうとでも取れる言葉だ」

医療目的とはいえ、1度重ねてしまえば、2度目はそう難しくはないらしい。

俺は胸にある熱い衝動任せに彼女の唇を再び盗み取って、それに満足すると、両手で彼女を抱き抱えて2階の部屋まで運んだ。

・歴気楼の国の錬金術師 1 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 【いただける嬉しいです。



薄手の掛け布団をシェラハゾにかけて、慰めるように頬を撫でる。彼女の穏やかな寝息が耳に届くたびに、俺は何度も何度も安堵のため息を吐いていた。

それから気持ちを落ち着かせるためにオアシスで休もうと我が家を出ると、そこでようやくだった。

ようやく俺は、この世界の違和感の正体に気づいた。

俺たちが土の迷宮の攻略を始めたのは、正午くらいだったはずだ。そこから地下5階のボスを倒すまでの時間経過は、どう見積もっても1時間にすら達していない。

だとしたら今は昼の13〜14時ほどのはずなのだが、オアシスの前でふと西の地平を眺めると、そこに黄金に輝く夕日が浮かんでいた。

つまり、時間が飛んでいる。昼過ぎであるべき世界が黄昏の世界に変わっていた。

まさかとは思うが、俺たちは転移に失敗していたのか……？

目の前に浮かぶこの世界が、師匠の警告にあるような100年後の世界だったとしたら、それは……。

「いや、いや落ち着け……そんなはずはない。家はそのままだ、オアシスも市長邸も変わっていない。なら100年も経っていないはず……。だが、どうやらこれは、時間が飛んだと見て間違いないだろうな……」

師匠は術を連発するなと俺を叱った。その意味がやっとバカ弟子の俺もわかった。

転移魔法がこんなに危険な魔法だとは思わなかった……。

メーブルの杖が工房に置かれ、レシピ書と材料がそこに用意されてあったのは、彼女が俺たちより先に家へと帰っていたからだ。

そうだ。メーブルはどこだ。帰らぬ俺とシエラハゾに、きつと苦しんで

「ユリウスツツ!!」

夕焼けの琥珀色の輝きを映すオアシスから、市長邸の方角へと振り返ると、そこに記憶通りの小さなエルフがいた。

美しい銀髪に可憐な素顔、夕方になるとマントを脱いで踊り子みたいな半裸になるその少女が、行方不明の俺に飛び込んで来る。

「メーブル! シエラハゾの石化なら解け」

「金的、食らわすつっ!!」

「ちよ、ちよ止めるよおいいつつ?! 止め あ、あれ……?」

「お帰り……お帰り、お帰りユリウスツツ!! 姉さん、救ってくれて、ありがとう……!!」

襲撃を警戒して内股になっていると、身軽な少女に首根っこに飛び付かれた。

それでも金的の不意打ちが怖かったので、内股のまま俺は彼女の背に両手を回した。

少女は何も言わずに抱擁を受け入れて、しばらく何も言わずに安

堵へと浸っていた。

「へーいへーい……ガード解いちゃいなよ、ユリウス……」

「止めとく、お前は油断ならんからな。それより、何日が経過した……？」

「ん……2日待った……。待って待って、待ちこがれた……。10年後だったら、どうしようって……悩みまくった……。ああ……良かった……」

「すまん、脅かし過ぎたみたいだな。帰って来たよ、ただいまメーブル」

「お帰り……。あ、姉さんのところ、行ってくる……！ ユリウスは、都市長に報告お願い！」

「あ、ああ……。温厚な爺さんだが、今回はかりは怒られそうだな……」

「かも……。私、都市長に、久しぶりに泣きついたから……」

琥珀色の夕日に照らされながらメーブルが家に飛び込んで行くのを、俺は安堵と幸せと共に見送った。

不幸は突然降りかかって来て、俺たちから幸せを奪い取る。

この日、俺は守るべきものと、このシャンバラで生きる目的を見つけたような気がした。

父と母が愛したシャンバラを救って欲しい。

世界で最も美しいと感じる女に、俺はそう願われた。

だったら男として彼女の願いを叶えよう。

俺はシエラハズという1人の女が好きだ。彼女の幸せのために動

きたい。

失いかけてやっとそう気付いた。

・豚野郎の才能、あるよ……

怒られやしないかと恐る恐るシヤムシエル都市長の政務室を訪れると、説教よりも先に抱擁による歓迎を受けた。

といつても娘の無事の方が気になるに決まっている。その抱擁はすぐに解かれた。

「貴方が無事ということは、シエラハゾの石化は……！？」

「治した」

「おお……そうですか、そうでしたか、それは良かった……。私はもう、寿命が縮まりそうなほどに心配をしましたよ……」

「俺が勝手なことをしたせいで迷惑をかけた。こればかりは正式に謝罪するよ。悪かった……」

「いいえ、あの子が無事ならそれでいいのです……。あの子を助けて下さりありがとございます……」

「だから、全部俺のせいだから気にするな」

軽くそのことで言い合ってから、都市長をうちの家に　シエラハゾのベッドの前に連れて行った。

無事を喜ぶ彼の姿を見届けた頃には、西の空が群青色に変わっていた。

「ところでメープル、大地の結晶は回収したか？」

「倉庫……」

「わかった」

「ちょいまち……チクリ」

「痛アツツ?!」

必要な情報を聞き出せたので部屋を出ようとすると、メイプルがいきなり背中にしがみ付いて来て、まるでノミみたいに人の腹をつねった。

「ムフフ……やっぱりユリウスは、良い悲鳴してる……。豚野郎の、才能、あるよ……」

「都市長の前だぞ、離れる……」

「私は別に構いませんが?」

「ほら?」

「ほらじゃねーよ。痛っつ?!」

「調査は、明日にして……?」

「今やりたい気分なんだ。いててっつ、変なところに手を突っ込むなっ、お前はノミかっ!」

力づくでメイプルをふりほどいて、俺は階段を駆け下りた。

併設されている工房へと入ると、要所に照明魔法を浮かばせて倉庫を漁った。

メイプルは追ってこない。

大地の結晶、石灰岩、砂。必要素材を錬金釜の前に集めて、紅と群青色に輝くオアシスに出た。

3往復ほどして釜の半分ほどまで水を貯めると、作業テーブルを整理して、本から補修剤コンクリルのページを開いて猛禽類しやうりゅうの羽根を

挿した。

そこから先は淡々とした教本通りの作業だ。

まずはじっくりと時間をかけて多量の砂を水に溶かし、液体が薄黄色に澄んだところで、石灰岩と大地の結晶の塊をハンマーで砕き、天秤で量ってから教本通りのバランスで混ぜ合わせた。

教本によると、この調合では比率がとても大事だと記されている。なんでもレシピのバランスが崩れると強度が落ちるそうだ。

「よし、こんなものか」

補修剤が粗悪品になっては目も当てられないので、5分ほど丁寧に混ぜ合わせてから、反応のトリガーとなる白魔法系の魔力を加えた。

完成だ。釜から灰色の煙が上がり、それが粉塵のようにしばらく工房の中を漂った。

「教本通りに作ったら、教本通りになったな。たぶん成功だろう」

釜の中には手のひらほどの灰色のキューブがゴロゴロと積み重なっていた。

これに水を加えて、砂と混ぜ合わせることによって、硬く固まる白い泥になると記されている。

「ユリウス……姉さん、起きたよ……」

「起きたか。意識が戻ったならもう安心だな……」

「ん……」

「お、おい……っ」

これは感謝の感情表現か何かなのだろうか。  
メールは泰然と俺の目の前に立つと、なんのためらいもなく人の腰に両手を回した。

「今は、つねらない……」

「そこはずっとつねらないでいてくれ……」

「ユリウス、冷たい……暖炉に当たろ？ 姉さんも、降りて来てるから……」

「そういうメールは温かいな」

「今日は、都市長が……ご飯担当……」

「あの人が……？ あの爺さん、やさしいよな。俺も選べるならああいう親がよかったよ」

くつついて離れないメールを担ぎ上げて、俺は薪がくべられた暖かい居間へと戻った。

「あ……っ」

「ど、どうした……？」

シエラハゾが俺の姿を見るなり、気の弱い少女みたいにか細い声を上げて俺から視線を外した。

こっちだって、とんでもないことをした反動が今さら返って来て、彼女を上手く直視出来なくなっていた。

「あの2人はなんともかわいらしいものですね」

「わかる……。姉さんも萌えるけど、ユリウスも……。ああいうのを見ると、私、いじめたくなる……。ハアハア」



「一つお聞きしますが、メープルはユリウスさんを取られたような気分になったりは、しませんかな？」

「笑止……。姉さんも、ユリウスも、私が好き……」

都市長が作ってくれたポトフは温かく、少し塩辛かったがパンに合って美味かった。

シャンバラはいいところだ。

昼は灼熱で、夜は暖炉を囲むほど冷え込むけれど、そこには人の温かみがあった。

・豚野郎の才能、あるよ……（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】

【いただける】と嬉しいです。

・轟音 蘇った姫君

翌朝、消えていた暖炉に、眠気に開かない目で薪をくべようとすると、轟音と共に大地が揺れた。

「な、なんだ……!?!」

もう朝だった。俺は姉妹のことが心配になり、毛布を脱ぎ捨てて階段を駆け上がる。

「え……っ、ええええええーっ?!!」

「どうしたっ、何があったっ!?!」

2階の寝室に飛び込むと、予想の斜め上どころではない超展開が待っていた。

どうもわけがわからないのだが 寝室の壁に大穴が空いて、その前にシエラハゾが立ち尽くしている。

大穴の向こうにはオアシスが広がっていて、冷たい外気がそこから流れ込んでしまっていた。

「むにゅ……あ、おはよ、ユリウス……。あ……これ、夜ばい……?」

「さあな、何事かは俺が聞きたい。いったい何があったんだ、襲撃か何かか?」

「違うの……」

ベビードール姿のシエラハゾが、どういう意図なのか石材の破片

を拾い上げながらこちらに振り返った。

続いて俺がその姿に見惚れる間もなく、彼女の長く細い手のひらが石材を握りしめ　まるで砂岩のように握力が石を粉々にしていた……。

「わお……姉さん、す……」

「や、やっぱり……。ユリウスッ、これ、これ何っ！？　なんなのよっ、これえっ！？」

恐ろしいな。あんな力でもし平手打ちでもされたら、こっちの首が折れてしまいそうだ。

俺は彼女の前に歩み寄り、一晩にしてトロールを超える怪力となった手のひらに触れた。

「いいこと、思い付いた……。今から、姉さんとユリウスが、指相撲……」

「殺す気がバカ」

「だ、大丈夫よっ、加減出来そうよ」

「だったらこの壁は？」

「寝ぼけて壁に手でもたれかかったら……吹っ飛んだの……」

「すっげーな……」

「姉さん、かっこいい……」

「他人事みたいに言わないで！　困るわよっ、こんなのっ！」

しかし困ったな。しばらくこの部屋を使えそうもない。

そうなると今夜の寝床が自動的に、下の階の暖炉になってしまう。

3人一緒に暖炉の前で毛布にくるまるというのは、少し楽しそうではあるが、間違いなく楽しいだけでは済まない。

「ねね、ちよと、私思っただけけど……これ、ユリウスのせい……？」

「なんでだよ」

「だって、姉さんに、特別な薬、飲ませた……。口移しで」

「ちよ、ちよっとメープルツ、そのことは秘密って言ったでしょっ！ どうしてあなたはそんなに口が軽いのよっ！」

「あ……ごめ、うっかり……」

それは俺にとっても衝撃的な発言だった。

医療のために行ったこととはいえ、あのことは人に知られていいことではない。

あの時、俺はいくつかの行動をリビドーに身を任せた。特に2回目のアレは言い訳不能だ。

「あっ……あの薬が原因ってことっ！？ あ、あり得るわっ、ユリウスの調合薬だもの！」

「酷い言いがかりだな……。だが、ま、確かにそれが臭いか」

完成した薬はどうしてかたった1錠だけだった。

さらに俺の術はポーションをエリクサーに変える増幅力を持っているため、あれに想定外の二次作用があってもなんらおかしくはない。

全身全霊で、彼女を救うために、あの薬に魔力を叩き込んだのだ

から。

「気にしないで、あたし前向きに考えてみるわ。ユリウスがあそこまでして、あたしを救ってくれたんだもの……。だったらこれは、神様からの祝福よ」

「す、すまん……。あれは、あの時はああするしなくて、しょうがなかったんだ……」

「ニヤニヤ……」

いい性格してるよ、お前……。

メープルは布団から立ち上がって、寒そうな姉に毛布を投げ渡した。

「あのね……あたしね、ユリウス……。あのとき、微かだけど……意識があったのよ……。あなたの言葉とか、二回目の、あの、く、口……」

「朝飯を食ったら壁の修繕を始めよう。今日は俺が作るから、2人は暖炉の前で休んでくれ」

くっ……意識があったなんて想定にない……！！

待て待て待て待てっ、だったらあの言葉全部聞こえてたってことか！？ 生き恥じゃねーかっ！！

お、おまけに、衝動に負けて2回目の唇を奪ったことまで……。

は、ははは……。ははははは……。

誰か俺を錬金釜に詰めて、上からふたをしてくれ……。どこかに穴があつたら入りたい……。

「ユリウスは、色白だから……照れると、すぐわかる……むふふ」

嬉しいと、あの時シェラハゾはうわごとのように言っていた。  
つまりそれは、俺の衝動任せの行動と言葉に対する返事だったの  
だろうか。

俺の背中側には、ニコニコとご満悦のメーブルと、モジモジと身  
を揺するエルフの美姫が立っていた……。

当然といえば当然だが、朝食を作っていると都市長とその執事が家に押し掛けてきた。

寝ぼけているのかと、どちらも俺たちの報告を最初こそ疑った。

しかしシエラハゾが恥ずかしげに少し落ち込みながら、あの背筋のゾツとする握力でメキリと薪をへし折って見せると、納得する他になかったようだ。

「良かったら一緒に食ってくか？ 爺さんの分も作ったぞ」

「おやおや、気づかいの出来るやさしい旦那様を見つけましたね」

「誰が旦那様だ、食わんなら帰れ」

「そんなこと言わないで下さい、もちろんいただきますよ」

朝食はパンと、ベーコンエッグと、干し肉にコシヨウとタマネギを加えてゆでただけのスープだ。

ハッキリと言って雑だったが、都市長と執事は喜んで食卓に加わってくれた。

「壁の修復ならもう手立ては付いている。実は昨晚、例のコンクルが完成してな、実験にはおあつらえ向きだ」

「あつ……。それがあればっ、やっとマク湖のみんなが家に帰れるのねっ!？」

「それは素晴らしい……。貴方はやはり天賦の才をお持ちです。いえ、世紀の大天才錬金術師と言っても、既に差し支えない域でしょう」



俺はエリートだ。ちょっとくらいおだてられたところで、決してニヤケたりなどしない。

賞賛には　あまり慣れていないので、だいぶ落ち着かないところではある……。

「試しに使ってみないと結果はわからない。爺さん、工員を何人か回してくれるか？」

「もちろん、すぐに動ける人員に心当たりがありますので、お任せを。フフフツ、朝から胸が躍りますね。貴方と一緒にだと童心が蘇りますよ」

爺さんが執事に何かを耳打ちすると、彼は出された朝食を綺麗に早食いして、雅やかなお辞儀と共にうちの家を去っていった。

出された物をすっかりと食べてから行くところが気に入った。アイツは物静かだがいいやつだ。

その後、食事を終えてしばらくすると、非常に残念なことがあった。

工員がここを訪れることになったので、シェラハゾが今日の水浴びを止めてしまったのだ。

いやそもそも俺は、彼女の水浴びをのぞいていたことを昨日に自白している。

非常に残念だ。もう二度とあの美しい光景を見られないのではな  
いかと思うと、非常に残念でならなかった……。

「ユリウス、お手伝いさんが来たわ」

「早いな……」

「それもそのはずよ、正規の工員じゃないもの」

「どういうことだ……?」

「そんなの見ればわかるわ! い、いきましょ……っ」

明るい言葉とは裏腹にシエラハゾは俺の手を迷い迷いに握ると、薄暗い工房の外へと引つ張り出した。

「よっ、手伝いに来たぜ、錬金術師様!」

「アンタの作ったエリクサー、あれ最高だよ!」

「ああ、あれのおかげで俺たちやまったく死ぬ気がしねえ! だからお返しによっ、今日はお前んちの修理を手伝ってやるよ!」

「アタイも来たミャ!」

そこにいたのは正規の労働者ではなく、市長肝いりの冒険者たちだった。

あの姉御肌の白いネコヒトもいる。誰もが腰に武器を吊していて、目立つものでは魔法帽をかぶったネコヒト族もいた。

・吹っ飛んだ家を最硬の補修剤で直そう 1 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】【】いただけると嬉しいです。  
投稿が定時より遅くなってしまつてすみません。

「手伝ってくれるのは嬉しいが、みんな仕事はいいのか……?」

「ユリウス様のためミヤ！ おみやーらっ、アタイに恥かかせるんじゃないミヤ、しっかりやるミヤア！」

「へいつ姉御！」

小柄なネコヒト族が長身のエルフたちを従わせている。

もしかしてこの白いネコヒトは、シャンバラでは大物だったのだろうか。

図体のデカい屈強な鎧男まで、その白くて綺麗なネコヒトに心まで平服していた。

「今日はヒヨッコどもを実践投入させるから、気にしないでいいミヤ」

「そうか、だったらお願いする。直して欲しいのはあの壁だ。まずは木材で骨組みを作って、そこを錬金術で作った特別な泥で塗り固める。落ちないよう気をつけてくれ」

「ネコヒトにはなんでもない高さミヤ」

「そそ……。ネコちゃんたちは、3階から落ちても、大、丈、夫…」

「本当かよ」

「やってみせるかミヤ？」

「見ていておっかないから遠慮しよっ」

ともかくそういう段取りになったので、骨組み作りを彼らに任せ、俺たちは壁材の準備に入った。

材料は砂だ。オアシスを少し離れるとそこら中に転がっている粗い砂を、壺に入れてかき集めた。

「ジョン。ニア、モ、砂、集メマシタ（・ー・）」

「だから俺はユリウスだって言ってるんだろ……。ここに入れてくれ」

小型ゴーレムのニアがどこからもなく現れて、砂集めを手伝ってくれた。

俺はその小さい割にやたら重い身体を持ち上げて、ニアが木椀で抱える白い砂を壺へと移す。

そこにコンクルという名の白いキューブを加えれば、後は水を入れて混ぜるだけだった。

これで固まらなかつたら大恥だな。

「コンクリート、トハ、似テ非ナル物、デスネ。不思議デス……（  
v・）」  
「なんだそれ？」

「混ぜルト、固マル石、デス（・ー・）」  
「へー……」

そうしていると、あの姉御肌のネコヒトが2階からこちらに声を上げて、ひょいと俺たちの前に飛び降りて来た。

あんなに高いところから飛び降りたというのに、彼女はなんでもない様子で立ち上がった。

「準備OKミヤ！ 次は何をお手伝いすればいいミヤ！？」

「ネコヒト族って何気に凄いな……。ああそれで、これに水を加えて混ぜ合わせるから、それであの壁を塗り固めてくれ。固まるとき熱が出るから直接は触るなよ」

「かしこまったミヤ！ フ、フミヤアツ?!」

「ああ、すまん。綺麗な毛並みだからつい……。いつも手伝ってくれて助かるよ」

猫にするように頭を撫でると、白いネコヒトが飛び上がった。

どうにもこいつらは、直立歩行をするでかい猫にしか見えない……。…。

「ユリウス、それ、セクハラ……」

「そうよ、勝手に女性の身体をベタベタ触るようなものよ。猫にしか見えない気持ちは、あたしもわかるけど……」

「ユ、ユリウス様になら、な、何されてもいいミヤ……。ミヤツ、な、なんでもないミヤアツ！」

許可が出たのでもう1度白いネコヒトをモフると、俺はオアシスから水をくんで壺に流し込んだ。

それを木の棒で混ぜ合わせて、これを運んでくれと彼女たちに依頼する。

白いネコヒトは長身のエルフたちに囲まれながら、壺を抱えて2階へと上がっていった。

「ネコヒト族って、かわいいな……」

「それって、女の子として……?」

「なんでだよ……。なんで動物としてかわいいって、言い直さなき

「やいけないんだよ……」

「そ、そうよね……。はあっ、正常な趣味でよかったわ……」

「なんでシエラハゾまで疑うんだよっ!？」

「だって……シャンバラだと……。そういう性癖の人、別に、珍しい……。そういうお店も、あるよ……？ 紹介する……？ 控えめに言って、ニャンニャンパラダイスだよ……？」

知りたくもない情報をありがとよ。メーブルの額を小突いた。

こうして俺たちはコンクルを混ぜ合わせた白い泥を作っては、それを冒険者たちと一緒に2階へと運んで、吹っ飛んだ壁の補修を進めていった。

・吹っ飛んだ家を最硬の補修剤で直そう 2 / 2 (後書き)

投稿が遅れて申し訳ありません。

現在、たくさんのブックマークへの感謝の第二部製作中です。

これからもじっくりと続きますので、じっくりとお付き合い下さい。



「ん、んん……？」

コンクリルの速乾性は恐るべきもので、あっという間に壁の補修が完了していた。

外から見ると塗り固めた部分だけポコポコで少し不格好だったが、色合いは元々の建材よりも真っ白で実に綺麗なものだった。

通常ならば2、3日はかかる修復作業が、1時間弱で終わっていた。

そこまではまあよしとして……。

「余ったから……ユリウス像、作らせてみた……なう」

「は、トロール像の間違いだろ？」

「ううん……。これがユリウスの、真実の姿……」

「どこまで本気なんだ、お前……」

「割と、全部……？」

ボールみたいに膨れた腹と豚鼻は、どう見たってトロールそのものだった。

建材が余ったのなら、小屋を建てるなりもうちょっとまともな使い道があっただろうに……。なんだこの、冒瀆的なオブジェは……。

「……しかしこれ、どれくらいの強度なんだろう。ああそうだ、おい、シエラハズ！ これぶん殴ってみてくれ」

「嫌よ、メーブルが一生懸命作ったのよ、壊せるわけじゃない」

「姉さん……」

「ふふふつ。勇ましいトロール像ね！」

姉にかばわれて幸せそうな妹の様子が、途端に無表情へと戻るのを俺は見た。

いや360度どこから見ても、トロールにしか見えねーし……。これがユリウスに見えてるのは、きつとメーブルだけだ……。

「ユリウス像なのに……」

「えっ!? あ、ああっ……そうね、えっと……め、目のあたりがユリウスに似てるわねっ！」

「んなわけあるか……っ！俺はトロールじゃない、こんなものはぶっ壊す……っ！」

切っ先の欠けた短剣を抜いて、その柄を使ってコンクル製のオーク像を殴り付けた。

「硬っっ?! 傷一つ付かないぞ、これっ!?!」

「おお……さすが、私のユリウス1号……」

おい、1号ってどういうことだよ。

まさかお前、2号目を作る予定があるのか……? 止めてくれ……。

「シエラハズ、これ壊せるか試してみてください、強度を確認したい」「いいよ……。ユリウスの、指からいこ……。ふふっ……」

でつぶりと太った石の人差し指をシエラハゾが握り締めた。  
続いて彼女が小さく声を上げて力を込めると、ピキリと白いコン  
クルに亀裂が走る。

硬さだけではなく、石のくせに剛性もとんでもなかった。  
もちろんシエラハゾの怪力の方もだ。

「う……。ヒ、ヒビ1つ入らないわ……っ」

その人間離れしてしまった力を隠したいのか、シエラハゾはバレ  
バレの嘘を吐いた。

冒険者たちともども、俺たちはそういうことにはしておいてやった。

「しかしこれ、いけるんじゃないか……？」

「いけるって、何がいけるミヤ？ 猫まんまかミヤ？」

再確認にひびの入った指先を、自分の力でもぎ取ろうとしてもビクともしない。

やはりいけると確信した。

「俺たちはマク湖の底に眠る、迷宮の穴を塞ぐためにこれを作った。これだけの強度の補修剤を使えば、水圧のかかる穴を塞ぐことも可能だろう。だが……もし塞げば地下水の流れが正常化し、あの迷宮の入り口が湖の底に沈むことにもなる」

「そんなの悩むことなんてないわよっ、迷宮なんかより、民の生活の方が大事に決まってるでしょ！」

いや、それは凡夫の考え方だ。

エリートである俺は常人の斜め上に行くべきだ。

マク湖という人が集まる大きなオアシスと、富を生み出す迷宮の両方を取る道があることを、このコンクルの補修作業が証明してくれていた。

これは使える。砂と水と混ぜ合わせるだけで、破城槌すら跳ね返せる壁がそこに生まれるとなれば、その用途は無敵大だ。

軍略のみならず、この超コンクルはあらゆる土木工事に革命を起すだろう。

「違うな、二者択一で考えることこそ間違いだ。この桁違いの強度と速乾性があれば、二択は二択にすらならない」  
「まどろっこしい……。つまり、どゆこと……?」

「迷宮内部の亀裂を塞ぐ前に、このコンクリで迷宮の入り口を保護する。水没しないように周囲を覆って、地上との行き来が出来るようにしよう。そうすればそこに、迷宮という名の経済が生まれる。それだけ復興が早まるってことだ」

そうこちらが主張すると、しばらくの沈黙が返ってきた。  
この奇跡の建材があれば水没から迷宮を守れる。たったそれだけのことだ。

「あなたって、意外と考えてるのね……」  
「それ名案ミヤッ！ 冒険者として賛成したいミヤッ！」  
「面白そうじゃねーかつ、それ今すぐやろうぜっ、錬金術師！」

反論する者はいなかった。ならば都市長さえ納得させればプロジエクトに移れる。  
頼もしいことに、冒険者たちは口々に工事を手伝うと名乗り出てくれた。

「これで決まりだな、爺さんに報告を頼む。俺はコンクリの量産に入るう。余ったところでいくらかでも使い道がある物だからな」  
「ユリウス2号……デビルタイプも、作れるね……」

「お前はこれ以上、おぞましい物を作るな……。アレどつするんだよ、下手したら1000年単位で残るぞ……」  
「プツ………笑える……」

「笑えねーよっ、さっさと報告に行けよっ！」

白いネコヒトの方はギルドに戻って、もう少しの人員をかき集めてくれるそうだ。

今日1日でマク湖オアシスに水を戻して、迷宮もその後利用できるように保護する。

都市長の許可が下りると、冒険者たちが在庫のコンクリと水を持って、マク湖へと先行していった。

俺もありったけのコンクリを量産してから、彼らの後を追うことにしよう。

我が家の小破から始まる騒動は、思わぬところで転換を迎えて、オアシスのど真ん中に塔を建てる一大プロジェクトへと発展していった。

・ 真実の姿 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

・枯れたオアシスに築く希望の塔

調査を始めてより1時間半ほどして、俺たちは再びあの枯れたオアシスにやって来た。

追加物資をラクダに乗せて、俺とシエラハズは昼を迎えつつある黄色い砂漠を歩いて、ようやく到着といったところだった。

「見て、ユリウスッ、あれっ!」

「おいおい……あいつら、どんだけ人集めたんだよ……?」

「急ぎましょ、工事が止まってるみたい。きつとあたしたちの物資を待ってるのよ!」

「目がいいよな、お前ら……」

エルフという種族の特性に加えて、広大な平野で暮らしているからこそ視力なのだろう。

オアシスの中央に塔のようにそびえ立つ白い建造物は、既に目視で2階建ての建物ほどの高さを持っている。

木組みの足場が作られ、その周囲にはロープやマントをまとった人々が集まっている。

その数、遠目にも100人をゆうに超しているように見えた。

「ユリウスッ、見えるっ!?!」

「人が集まっているな。しかし、どこからあんなにかき集めたんだが……」

「民よ!」



「民？ 民って……まさか、あれってこの元住民か？」

「きつとそうよ！ ご年輩から子供たちまで、みんなが工事を手伝ってくれてるわ！ あなたの計画に賛同してくれたのよっ！」

ラクダの手綱を引きながら、俺は目の光景に心を奪われた。

彼らは自分たちの生活を取り戻すために決起しただけなのかもしれないが、それでもこれだけの人数が計画に賛同してくれたことが嬉しかった。

「何よ、黙り込んで。ユリウスはアレを見て何も思わないのっ！？」

「驚いたよ、驚きに言葉を失っていただけだ。……やるじゃないか、シャンバラの民。ってな」

「ふふふっ、あなたの口からそう言われると嬉しいわ」

さらに近づいてゆくと俺の目でも詳しく確認出来た。

エルフにネコヒト、有角種、みんなが一丸となって枯れたマク湖に塔を作っていた。

俺たちに気づくと人々が駆けて来て、口々に感謝を述べながらラクダに積んでいた物資をあちらに運んでいった。

その姿は長いスラム生活に汚れ、少し臭ったが、誰もが希望に表情を輝かせていた。

「どうしたの、ユリウス？」

「別に大したことじゃない。……いいことすると、案外気持ちいいもんだな」

「ふふふつ、そうね。あたしもあなたが誇らしいわ」  
「おだてるな。お、あそこにメープルがいるぞ」

メープルのところまでやってくると、その隣に小綺麗な身なりのエルフ族の老婆がいた。

その老婆にかわいがられていたみたいだ。

「ユリウス、これ、ちょーろー……結構、いいやつ……」  
「ちょっとメープル、失礼でしょ。ごめんなさい長老様、メープルはこういう子なの」

今日2度目の感想になるが、この姉は妹に甘すぎる。

両親を失った彼女の前に現れたのが、この愛らしいメープルとやさしい都市長だったと考えれば、当然といえば当然なのかもしれないが……。

「ありがとうねえ、このオアシスの民を代表して、ユリウスさんにお礼を申し上げますよ。ああ、ありがや、ありがたや……神様はやつぱりいたんだねえ……」

「拝まないでくれ、俺はただの超スーパーエリートだ、神なんかじゃない」

老婆は両手を擦って俺を拝んだ。

水涸れで街ごと離散して、大半の民がスラム街で生活していたのだから、それだけ感謝する気持ちはわかる。

水涸れ。それは本来ならば絶対に覆すことの出来ない天変地異だ。

「貴方様は救世主だよ……。もっと顔を見せておくれ……」

「ずいぶんと年老いてるな。婆さん何歳だ？」

「ヒツヒツヒツ、あたしゃ始祖様の時代から生きてるよお……」

「それは確か、13のうち11の部族が失われる前か？」

「あらまあ、勉強熱心なのねえ……そうだよお」

シエラハゾに流し目を向けるとそっぽを向かれた。

これはシエラハゾの幼少期の記憶で、俺のものではない。

「それでユリウス様……あの塔が完成すれば、マク湖に水が戻るんだよねえ……？」

「それは地下水の流れ次第だな。まあこれは個人的な見解だが、水が戻る可能性は高いと思う」

「そうかい……っ！　ありがとよ、ありがとよおっ、ユリウス様……！」

「ようやく着きましたか、待っていましたよ。どうやら長老に気に入られたようですね」

そこに初老のエルフが現れた。なんとそれは都市長だ。

アンタ都市長としての仕事はどうした？　って目で見ると、彼はやさしそうにこちらへと笑い返す。

「私がいなくともシャンバラは回ります」

「あのね、都市長がね、スラムのみんなに、声をかけに行ってくれたの……。故郷を、蘇らせるチャンスが、来たって……」

「それで納得だ。そりゃアンタが声をかければ、これだけの人数が集まるだろうな。何せ信用が違う」

都市長のやり方に俺は心の中で賛同と賞賛をした。

スラム街に追いつめられているとはいえ、助けが来るまで待つだけでは苦境から抜け出せない。

そんな避難民たちに、チャンスがやって来たから自発的に行動すると、彼は励ましたのだ。

人から与えられた復興よりも、ずっと価値あるものになるだろう。

「爺さんは、完成までどれくらいかかると思う？」

「そうですね……。この調子だと、夕過ぎくらいでしょうか。追加物資も来たことですし、もう少し壁を厚くしたいところでもありません」

「水圧がかかるとなると、それが確実かもな。だったら俺も手伝おう」

「お、お待ち下さいユリウス様！ 貴方を働かせるくらいなら、このババアめが……！」

「ただ俺が身体を動かしたいだけだ。それより婆さん、今度機会があったら昔話を聞かせてくれ。エルフの歴史に興味が出て来た」

みんなと別れて、俺は塔の建設現場に向かった。

亜空間転移の力を使えば、建材を塔の上に運んだり、内部に運ぶのも簡単だ。

今日中に、暗くなる日没までに完成させたい一心で、俺たちは日中も交代で作業して、枯れたオアシスに希望の塔を築いていった。

・枯れたオアシスに築く希望の塔（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】いただけるとうれしいです。

・再潜、樹の迷宮！

建物というのは、大きければ大きいほどに手がかかるものと、肌身をもって体感させられた。

それでも人々の努力のいかいもあって、ついに夕方前に白亜の塔が完成した。

高さは約5m、壁の厚さは慎重に慎重を重ねて40cm以上。壁には石ころが埋め込まれてそれが間に合わせの階段となり、内部は螺旋階段が設けられてそれが深い地下へと続いていた。

喜びに人々の歓声が上がる中、俺たちはその螺旋の道を下る。

シエラハズの照明魔法に照らされながら、俺たちはあの樹の迷宮の扉までやってきた。

「もし水が漏れたら頼むな。迷宮から戻って来たら、そこが水の中だったなんてオチは避けたい」

塔の内部で工員に待機してもらい、俺たちは精鋭とともに迷宮を下った。

最後の仕上げだ。これから樹の迷宮内部の水漏れを修復し、地下水の流れをあるべき形に正す。

「ユリウス様の前だよっ、アタイに恥かかせたらぶっ殺すミヤッ！」

「へいつ、姉御！ オラオラオラオラアアアッ！」

「オラオラどけどけっ、姉御様のお通りコラアアッ！」

白いネコヒトは冒険者たちのリーダーだったが、あの日の負傷でしばらく現場から離れていたようだ。

しかし今では調子を取り戻し、部下と一丸となって俺から仕事を奪ってくれている。

「ユリウス、言うておくけど転移は禁止よ」

「わかってる。この前の件で、必要もないのに連発する術じゃないと理解はした」

「ふあいやー……」

「あつこらっ、それ俺が狙ってた獲物だろが！」

「のろまは、罪……」

「人をあおるな！」

投入された人員は俺たち含めて14名だ。ハッキリと言って後衛に出番などなかった。

総勢9名の前衛たちが、モンスターの群れに突撃を仕掛けては飲み込んでゆく。

俺たちはボス部屋に至るまで、ほぼ立ち止まることのない進撃を果たしていた。

「リビンググアーマーか。やっと出番が来たな」

ボス部屋にいたそれは、首のない全身鎧の騎士だ。

骨だけの不気味な馬に騎乗していて、その体軀は高さ3m以上もあつた。

「突撃ミヤアツツ!!」

「スケルトンなんて怖くないっ、怖いのは姉御の雷だけだあーっ！  
！」

「お先にっ、ユリウス！」

腰の短剣に手をかけようとすると、シエラハゾと白いネコヒトを含む前衛たちが突撃していた。

しまった出遅れたと、俺も室内になだれ込み、短剣を引く抜く。

「ウィークネス、アーマーブレイク、スロウ、筋力弱体、守備力弱体、あと敏捷性低下！」

メープルが弱体魔法を連発すると、リビングアーマーが突撃部隊と激突する。

シエラハゾがその手に持っていたのは、いつものあの細剣ではなく、分厚い刀身を持ったカトラスだ。

なんと彼女は一刀をもって、リビングアーマーの利き腕を怪力で斬り飛ばしていた。

「嘘だろ……」

寝ぼけて石壁を吹き飛ばす身体能力だ。

目を疑う光景だったが、理論上はガンドレットごと敵の腕を飛ばすことなど簡単だった。

利き腕を失った騎士の鎧の隙間に、次々と冒険者たちの刃が突き刺され、追撃の魔法がスケルトンホースを止めた。

まずい、このままだと出番なしで今回の冒険が終わってしまう。

俺はいつもの癖で亜空間転移をするのを踏みとどまって、代わりにアイスピアを増幅した。



敵はでかい。胸から上には刃が入っていない。

3mほどの鋭く長い氷の槍を生み出すと、俺はヤツの心臓をめがけて狙いを絞り、仲間が敵の動きを封じているのも幸いして、寸分狂わずに胸を射抜いた。

すると雄々しく巨人のように低い悲鳴が上がり、鎧騎士の身体が崩れてゆく。

魔力を失ってかスケルトンホースも同様にただの骨へと戻り、主もろとも崩れていった。

後に残ったのは小さな銀色の宝箱だ。

「見覚え、あるような……開けていい……？」

「奇遇だな、俺もだ。金目の物ならみんな分けてよう」

「たぶん……そういうのと違う、予感……。あ……。っ、ニア……？」

「な、なんでここにニアが入ってるのよっ!？」

そういえば、ニアはこの迷宮で手に入れたんだった。

箱の中に入っていたのはニアそのままの白いゴーレムで、俺たちの言葉に反応して動き出した。

「ハジメマシテ、ワタシノ、名前ハ (・ー・) 」

「ニアだろ。お前何やってんだ？」

今更も今更の自己紹介に口を口を挟むと、ニアがプチフリーズした。

「アツ……。モシヤ、貴方ガ……。ジョン？（？|？）」  
「俺はユリウスだっつってんだろ……。天井ネタもいい加減しつこいぞお前……」

しかしこれは何がどうなっているのだ？

冷静に考えてみれば、迷宮の外にいるニアがここにいるはずがない。

これはリビンググアーマーの身体から発生した宝箱だ。なぜこの箱からニアが出てくる……。

「ユリウス、ユリウス、これ、ニアじゃないよ……？」

「なんでわかる？」

「あの子、外の塔を作るの手伝ってたのよ。ここにいるわけないわ」

「あのちっこい成りでか？」

「ちっこいけど、力持ち……。狭い日も、安心……」

「じゃあ、コイツはなんなんだ？」

何から何までニアと同じなので、いくら観察しても見分けがまるで付かない。

「タツタ今、外ノ、ニア、ト、交信出来マシタ。ヤハリ、貴方ガ、ジョン……。才会イ出来テ、光荣デス（一人ー）」

「俺はユリウスだっ！！」

わけがわからないが、俺たちは2つ目のニアを手に入れ、うちで引き取ることになった……。

・再済、樹の迷宮！（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】【 】いただけると嬉しいです。

・シャンバラの未来のために

その事件はユリウス・カサエルの始まりを意味していた。

この後に起こった出来事は、俺の人生において大きなターニングポイントになった。

いったい誰に想像が出来るだろうか。

迷宮の扉をくぐり、地上へと戻ってくると、己を呼ぶ大歓声が塔の外側から轟いていたなど、常人に予想など出来るはずがない。

姉妹と俺は顔を見合わせ、白いネコヒトと冒険者たちはさあ行けと道を譲ってくれた。

呼ばれているのだから、俺たちは姿を現さなければならない。螺旋階段を一步一步上って、光あふれる世界へと進んでいった。

「凄い歓声ね」

「みんな、ユリウスに感謝してる……」

「なんで俺なんだ」

「貴方が救ったからに決まってるでしょ！」

「もしかしたら、もしかするよ……これ……」

外はもう夕暮れだった。

塔の最上部へと至ると、歓声は割れんばかりの最高潮に達するころになった。

いつの間にかこんなに増えていたのか、300をも超える数え切れ

ないほどの人々が俺たちを見上げていた。

それもそのはずだ。塔から真下を見下ろすと、枯れたはずのオアシスがそこに蘇っていたのだから。

まだ十分な水かさに達してはいなかったが、それは少しずつ増水していて、澄んだ湖面には、紅く燃えるような夕空の輝きが水鏡となって映し出されていた。

ユリウス、ユリウス、ユリウスと人々が俺の名を叫ぶ。

俺はエリートだが、決して王者ではない。王者とはほど遠い孤児の出だ。

だというのに彼らは熱狂的に、まるで英雄でも崇めるかのように俺の名を繰り返し呼ぶ。

今日1日で奇跡的に生み出された白い塔の上で、紅く燃える湖水に囲まれながら、彼らの歓声を聞いた。

「凄いわ……あなた、まるで王様みたいに呼ばれてるわ！」

「むふ……姉さんと、私が選んだだけ、あるね……」

「それだけ彼らにとって、オアシスの復活は神に願ってやまない悲願だったのだからな」

しかし、ずいぶんと気の早いオアシスだな……………。

俺は静かに右手を挙げて、大歓声が静粛するのを待った。

それから大きく息を吸い込み、声を張り上げる。

「もう大丈夫だ、地下の穴は俺たちが塞いだ！！ マク湖の底が抜けることはもうない！！」

歓声とはこれほどまでに気持ちいいものだったのか。

普通ならば臆するところだが、俺はエリートだ。エリートは歓声ごときどつということはない。

「俺はヒューマンだ!! お前たちからすれば部外者かもしれないが……俺はこのシャンバラが好きだ!! 俺はこの地で、太陽の沈まぬ国シャンバラが過去の栄光を取り戻し、さらなる発展を迎えるように努めよう!! 俺は盟友であるシャムシエル都市長とともに、シャンバラを支えることをここに誓う!!」

思わぬ俺の演説に姉妹は驚いたようだった。

しかしなんのことはない。これはリップサービスであり、人望を得る絶好のチャンスだ。それに言うわけならタダだ。

ユリウス、ユリウス、ユリウスと、興奮した人々の絶叫が天を突く。

あまり人が多すぎて都市長の姿はいまだ見つからなかったが、きつとどこかで俺の行動に笑っているはずだ。

「シャンバラの未来のために!!」

俺が締めの一言を叫ぶと、人々の歓声は最高潮を迎えた。

もはや疑いようもない大成功だ。これでマク湖オアシスの連中全てが俺の支持者だ。

実績を上げればさらにビッグな仕事が回ってくる。

すなわちそれは、エリートの上をゆく超エリートの道が拓けたことを意味する。

俺は人々の歓声に包まれながら、少しずつ増水してゆくオアシスを見下ろした。

枯れたオアシスが熱狂とともに蘇る光景なんて、この先2度と見ることはないだろう。歴史的瞬間に、自分が立っているのを感じた。

夕日に輝く湖水はまるで燃えるように美しかった。

メイプルとシエラハゾ、美しい金と銀の姉妹が左右から俺の手を握ると、俺はプレッシャーに負けずに胸を張れた。

「あなたって人は……メイプル以上に、何をするかわからない人ね……」

「ユリウス、やっぱおもしろい……。これからも、シャンバラをもっと、面白くして……？」

良くしろではなく、面白くしろか。いい方針だ。俺はメイプルの小さな手をキュツと握り返していた。

この依頼、受けてみて良かった。

権力にはあまり興味はない。

だが一生懸命生きている連中の助けになることは、それ自体が大きな興奮がともなつて、非常に面白いことだと俺は知った。

次はもっとデカイプロジェクトにしよう。

例えば砂漠に草原を作ったり、コンクルで何かを建設するのも面白い。

人々の止まぬ歓声は、野心未満、遊び半分以上の計画を極彩色の輝きで彩っていった。

・シャンバラの未来のために（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】

【いただける】と嬉しいです。



シャンバラという都市国家は、言い換えれば砂上に存在する魔法の国だ。

マク湖のあの老婆が言うには、遙か遠い過去のシャンバラは美しい水里で、深い迷いの森がこの地を覆っていたという。

その迷いの森は、今では迷いの砂漠となつて外部の人間を阻んでいる。

少し言い方を変えれば、それはシャンバラの民だけがこの大砂漠を横断することが可能ということであり、大砂漠と化したこの地が交易都市となるのは必然だった。

水涸れからマク湖を救ったその翌日、俺はポーションの量産に成功した。

1度の製造で50粒ほど作れるエリクサーを、工房の水槽とオーブを使って薄め直すと、約500本のポーションが作り出せる。

それを俺たちは国外に輸出した。

1日に1000本ずつ、シャンバラの特別な交易路から信頼出来る闇ルートに流し、その利鞘を国内の投資に回した。

主要な輸出先はツワイク王国だ。

世界で最もポーションが消費される国に、出所の不明の闇ポーションが流れ着き、瞬く間に冒険者たちの間に広まっていった。

その日ツワイク王宮に、ヘンリー工場長の姿があった。  
国王の前に膝を突いて彼はこうべをたれ、その顔を真つ白に青ざめさせていた。

「ち、違うのです、陛下！ これは、ユリウス・カサエルの仕業なのです！」

彼は今、国王からの事実上の尋問を受けていた。

王と閣僚、それに目立つところではアリ王子に囲まれながら、命惜しさに言い訳を繰り返していた。

「ヘンリー男爵、なぜそのことを報告しなかった？ 宮廷魔術師ユリウスの裏切りは理解した。だが、なぜユリウスが産業スパイと共に、設備を盗んで逃げたことを、余に報告しなかったのだ？」

「う……そ、それは……。それは、まだ報告する段階でないと私は近々陛下に、ご報告するつもりだったのですよ！？」

宮廷というのは怖ろしい世界だ。

ヘンリー工場長の味方は謁見の間どこにもなく、むしろ閣僚たちは彼を追い落として利益を得ようと、口々に彼を蔑む言葉を吐き出した。

「余が聞きたいのはスパイのことだけではないぞ。そなたに任せたあのポーシヨン工場だが、最近よからぬ噂を聞く」

「う、噂でございますか……！？」

「工場長であるそなたが知らないわけがなからう。そなたの工場が、ポーシオンを薄めて売っていると、冒険者どもが口々に文句を言っ

ているぞ」

「いえっ、それは何かの間違いでございます……っ！ そんなことをしても、私に利益などありません！」

俺の古巣 ツワイクのポーション工場では今、薬の回復効果が半分にまで落ちていた。

そこまで効果が落ちては、噂や勘違いではもう済まない。

彼の誤算はこき使っていたユリウスが、ポーションの効果を高めていたと知らなかったことだ。

製品の粗悪化は、彼の想定を遙かに超えてしまっていた。

そこに追い打ちとなって、正体不明の闇ポーションが国内に現れた。

「利益か。そう言う割に、最近の売り上げが鈍っているようだ？」

「そ、それは……それは、実は……ユリウスが！ ナリウスのやつが、破壊したのはオーブ2つだけではなく、他の中核設備にも……

！ ヤツめ、倉庫に火を放って逃げたのでございます！！」

ユリウス。その名が上がるたびに、同席していたアリ王子の頬がひきつった。

王に糾弾を受けるヘンリー工場長が自分に重なって見えたためだろう。明日は我が身だと。

「ユリウス・カサエル、恐るべき男だな。アリ、そなたはどう思う？」

「ッッ?!」

「ユリウスについて、忌憚なき意見を述べよ」

「あ、あの男は……あの男は、ユリウスは戦犯です、父上……！  
アイツが敵前逃亡しなければ、俺も任された軍を壊滅させることも  
なかった……！ アイツが悪いのです、父上、アイツなら放火だっ  
てやりかねない……！」

酷い言われようだ。俺はお前をいさめた側だ。

お前のせいで俺は多くの戦友を失った。お前は嘘ばかりだ。

「魔術師長アルヴィンス」

「はっ！」

「ユリウス・カサエルについて、そちの方はどう思う？」

「彼ですか。彼は 彼は恐るべき天才ですな。ただ……」

「ただ？」

「宮廷での処世術にはあまり富んではおりませんでした。良くも悪くも正直で、世俗的。出自は不明ですが、断じて悪事を働く男ではありません」

実はこの話は師匠が アルヴィンスのやつが俺に教えてくれたものだ。

やっと言いたいことを言えるチャンスがやって来たので、言える範囲でぶつちやけたと師匠は笑っていた。

「ふむ……ヘンリーとアリとは、正反対の評価であるな」

「では陛下、せっかくの機会なので、ぶつちやけてしまいましたが、よろしいでしょうか？」

「ま、待てっ、何を言っつもりだ、アルヴィンスッ!？」

「陛下っ、この男の言うことを信じてはなりません！ ひ、昼間から酒を飲むような不良魔導師でございます……！」

職務態度の悪い酔っ払いなのは事実だ。

だが師匠は俺と同じように、政争の類に嫌気がさしている。文句を言うチャンスだった。

・半月後、ツイイク王国にて

1 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】  
【いただける】と嬉しいです。  
投稿が遅くなってしまってすみません。

「余計な口をはさむな。よかろう、言え、アルヴィンス」

「は！ ポーション劣化の原因はユリウスです」

その一言に、ヘンリーとアリは胸をなで下ろした。

しかしな、アルヴィンスはそういうやつじゃない。へそ曲がりの偏屈野郎だ。

「根拠はあるのか？」

「はい。私が育てた弟子の中で いえ、宮廷で最も魔法の才能に恵まれていた男の名が、ユリウス・カサエルなのです。そのユリウスが工場から消えれば、ポーションの粗悪化は必然でしょう、バカなことをしたものです」

「なんと、それほどまでに才であったと……？」

「はい。彼をポーション工場に回したのはある面では正解でした。

しかしその彼を冷遇し、スパイとの国外逃亡を招いたのは我々です。我々は国の繁栄を約束させる天才を、自らの手で追い出したのです」

「黙れ、でたらめだ、ふざけるな、たわごとだ。」

ヘンリー工場長とアリ王子は、ありつただけの罵声をアルヴィンスに送った。

しかし陛下は重く一考し、息子と無能な工場長を睨んだ。

「ヘンリー男爵、工場は引き続きそなたに任せよう」

「おお……信じて下さいますか、陛下っ！」

「ただし、経営を立て直せなければ、爵位と全財産を没収とする。よく励むように」

「……はっ、はひっ!?!」

「それとも今すぐ没収されたいか？」

「はっ、め、滅相もございません!?! か、必ず、必ず……必ず建て直しを……は、はあっ、はあっ、このわたくしめに、お任せ下さい……」

建て直しは不可能だ。

同額で2倍の回復効果を持った闇ポーションがシャンバラから流れてきている。

それでも彼は競争に勝たなければならない状況に追い込まれた。

可哀想だが、彼が王の命令を遂行するなど不可能だ。財産と爵位はいずれ露と消える。

「次にアリ」

「なんででしょうか、父上」

「ポーションの劣化は、経済のみならず、次の戦争の勝敗にすら影響を及ぼす。アルヴィンスよ、ユリウスの力がポーション工場を支えていたというのは、真実であるな？」

「はい、断言しましょう。加えてユリウスは転移魔法の天才でもあります。彼を軍の主力に置けば、戦いは常勝無敗となるはずでした」

「そうか、惜しい男が出奔したな……。なれば」

王はアリのクソ野郎を再び睨んだ。

アリの素行の悪さ、性質を親が知らないわけがない。



ツワイク王はそんなアリが俺に罪を擦り付けるのを、見て見ぬ振りをしていたはずだ。

「ユリウス・カサエル侯爵を捜せ」

「……はい？ 父上、やつは薄汚い下民」

「これより余は、ユリウス・カサエルを形式上の侯爵に封じる。アリ、そなたはユリウスを連れ帰るその日まで、ツワイクの地を2度と踏むな」

「……は？ ご冗談でしょう、父上？ お待ち下さい、どこにいかもわからない人間を、どうやって捜せというのですかっ！？」

「黙れ！！」

「うっ……！！？」

「そなたのせいで、3年前の戦争はこちらの完勝だったというのに、無用な譲歩をすることになった！！ そなたがユリウスに罪を擦り付けなければ、彼はアルヴィンスの右腕として余の力となっていた！！ 無能はユリウスではない、そなただっ、このどうしようもないバカ息子めっ！！」

ただの結果論だ。

しかしヘンリーとアリが苦境に追い込まれたとの報は、俺の胸をスツさせてくれた。

「私より、下民の才を選ぶと、そう言うのですか、父上……？」  
「そうだ。そなたの嘘にはもううんざりだ。ユリウス侯爵を宮廷に連れ帰れ、それまでそなたは勘当だ。二度と顔を見せるな」

「そんな、バカな……。これは夢だ……。そんな、俺の才が、あの男に劣るなど……。あの薄汚い魔術師風情が……。ク、クソオオ……。ツッ！！」

アリは力なく地に崩れ、暴言を吐きながら謁見の間を追い出されていった。

さて。では、先述した話に戻すが、シャンバラは元々迷いの森に囲まれた水里だ。

つまりアリは俺の居所を見つけたところで、シャンバラで美しい姉妹と暮らす俺の前に立つことは、ほぼ不可能と言ってもよかった。アリは国を追い出され、見つかるはずのない男の足取りをこれから捜すことになる。

ヤツが憎しみの言葉をいくら吐き出しても、その呪詛はシャンバラの迷いの砂漠を越えることはないだろう。

俺はこのシャンバラを去る気など、さらさらないのでから。

むしろ半月経った今では、ここに骨を埋めたいとすら思っていた。この連中はいいやつらだ。俺は母国ではなく、やつらの力になりたい。

・半月後、ツイイク王国にて

2 / 2 (後書き)

二部からは頻度の低かったザマア展開を強化します。

また、近々平行して新作を公開する予定です。

どうかそちらも応援して下さい。

Twitterで宣伝を手伝って下さったり、みなさまのたくさんのご支援に感謝いたします。

シャンバラでは元よりガラスの製造が活発だ。

その原材料の珪砂はこの地ではありふれたもので、探せば天然のガラス塊まで砂漠に転がっている。

そのためポーシヨンの輸出事業は、シャンバラのガラス工業と非常に相性が良かった。

今日も職人街の徒弟より、ガラス瓶が我が工房の水槽に500個並べられると、ものの15分の調合でポーシヨン500本がそこに完成していた。

それを2回繰り返せば、1日のお勤めは終わりとなる。

「今日もお疲れ様でした」

「後は我々にお任せを」

完成するといつもは工房の徒弟たちと、うちの姉妹が搬送を手伝ってくれる。

しかし今日はどういうわけか、メープルとシエラハゾの姿が朝からどこにもなかった。

「なあ、メープルとシエラハゾを見てないか？」

「今日は見えていませんね」

「都市長から別件の仕事を任されたのでは？」

「かな……。後であつちにも顔を出してみるか……」

エルフとネコヒト族の徒弟たちが木箱にポーシオンを詰め直すのを見送って、俺は1度工房を離れて居間に戻った。

「おーい、シエラハズ。メーブル。やっばいないのか……」

2階が上がっても部屋は空っぽで、なんだか調子が狂うような妙な気分だった。

彼女たちは錬金術師ユリウスの補佐役だ。

その2人が何も言わずに姿をくまますなんてことは、これまでそうあることではなかった。

「あ、ユリウスさん。あの僕、前から貴方に聞きたかったことがあるんですけど……」

「早く行かないと兄弟子たちに置いてかれるぞ。それで？」

工房に戻ると、ちょうど最後の徒弟が木箱を抱えて出て行くところだった。

彼は11歳くらいのエルフの男の子で、美少年と呼んでも差し支えなかった。

「お金、取らないんですか……?」

「ああ、ポーシオンの売り上げのことか？」

「そうですね。億万長者にだってなれるのに、どうして……?」

「都市長にも同じことを言われたな。いや別に俺は聖人じゃないぞ。単に金の使い道が思い付かなかったから、当面は分け前を遠慮したんだ」

そう答えると、若い徒弟はなんとも言えない曖昧な顔をした。

金持ちは金の使い方を悩んでいると言うが、きっとそれは本当の

ことだ。俺は金の使い方をまったく知らない。

かといって金持ちの真似事をしたところで、あまり楽しめなさそうだ。

「あのっ……僕、尊敬してます！ シャンバラのために、お金も受け取らずに尽くしてくれるなんて……。やっぱり貴方は素晴らしい方だと思います！ がんばって下さい、ユリウスさんっ！」

「……へ？ あ、ああ……ほどほどにそうするよ」

徒弟は重い木箱を抱えて、俺に対する誤解を抱えたまま外に駆けていった。

彼らのはあのポーションを商館の倉庫に運んで、商館はそれを世界各地に輸出する。

そして俺は、あのスラム街が小さくなってゆく様を眺めて自己満足に浸る。

都市長が俺のパトロンでいてくれるからこそ、気軽な立場だった。

「しかし、あいつらどこに消えたんだろな……」

都市長のところを訪ねようかとも思った。

しかしそんなことをしたら、彼に気持ちを悟られてしまう。

だったら目の前の錬金釜で遊んでみようと、俺はまず本棚に手にかけて貴重本のページをめくった。

少し特殊な物を作ろうとすると、何かと貴重な材料が必要になる。

それゆえにままならないのが錬金術の宿命のようだ。

稼いだ金の使い道があるとすれば、やはりこっちの方向だろう。

「土壤改良剤、シルフの接吻……これだ」

これとやってやることもないのでしばらく読み漁ると、ようやく俺は目当てに近いレシピを見つけ出した。

本によるとそれは、枯れた大地に実りを蘇らせる魔法の薬品だ。

その本を抱えながら倉庫を物色すると、完璧ではないが有り合わせの材料でどうにかなりそうだとわかった。

ならばやることは決まりだ。

・砂漠の国に春を 1/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。



釜にオアシスの水を入れ、魔力で沸騰させると、レシピ通りに魔物素材と大地の結晶を混ぜ合わせる。

仕上げに樹の迷宮で手に入れたトレントの枝を加えれば、シルフの接吻の完成だった。

オアシスを少し離れるとそこは砂漠だ。瓶詰めになった深緑の薬液を砂の大地に垂らす。

すると不思議なことに、砂はやわらかな土に変わって、歩いて一歩ほどの面積を緑の沃野に変えていた。

どことなくトレントに似ていなくもない苗木が一本と、エメラルドグリーンに淡く透けるクローバーだ。

砂漠の中に生まれた緑は、否応なく掛け替えのない宝のように見えた。

「成功か。だがこれでは釣り合わんな……」

あのオアシスのように、錬金術の力を駆使すればシャンバラの姿をいにしえの理想郷に戻せるのではないか。

そう期待して調べてみたものの、これでは材料費に対して面積があまりに小さ過ぎる。

「やはりユリウスさんでしたか。おや、それは……お、おおっ！」

砂漠にぽつんと生まれた小さな草原を眺めていると、都市長の声がして後ろを振り返った。

しかし彼は、俺が実験的に生み出した小さな緑の方に夢中だった。

「シャンバラの砂漠に草木が……！ これは貴方が……！？」

「ああ、土壌改良剤こと、シルフの接吻が本に載っていたので作ってみた。だが……現状は効果範囲が狭すぎて、これでは道楽の域を出ていないな」

「いえつ、そんなことはありませんよつ！ 緑が、この枯れた砂漠の大地に緑が……これは我々の希望です、ユリウスさんつ！」

「爺さんは落ち着いているようで、結構情熱家だよな。喜んでもらえてよかった」

都市長はちつぽけな緑の前に膝を突いて、オアシスを離れるとすぐに不毛となる大地に希望が生まれたことに、大げさな感動をしていた。

それは彼ら砂漠デザートエルフの夢の一つだ。

シャンバラのあるべき姿を、ここの老人たちは取り戻したいと切に願っている。

マク湖のあの長老に俺はそう教わった。

シヤムシエル都市長を支えてやってくれとも、頼まれてしまった。

「それで爺さん、爺さんこそこんな半端なところで何やってるんだ？」

「おお、そうでした。実は貴方にお願ひがあるのです」

「いいぞ、シャンバラを発展させるのは、かなり楽しいとわかったからな」

「いえ、シャンバラのことではありません」

「なんだ、違うのか？」

「ええ、ですがそれと同じくらい大切なことです。市長邸に着替えをご用意いたしましたので、ちょっとそこまで、付き合っていただけませんか？」

妙な誘いだった。どこかのお偉方のところにも、俺を連れて行きたいのだろうか。

あまり気乗りしないが、家に帰ってもやることがないので、俺は市長邸に向かって一歩を踏み出した。

「行かないのか？」

「行きますとも」

そう言いながらも、都市長は落ちつきなく後ろを振り返っては、砂漠に生まれた緑に目を奪われていた。

こんなに喜んでもらえるとは思わなかったな……。

・砂漠の国に春を 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

・ 厩気楼の彼方へ

「では、まずこちらに着替えていただけますかな」  
「構わないが、なぜこんなものを……」

市長邸に着くと、白のタキシードを着るように指示された。  
やはり位の高い人間に俺を会わせるのが魂胆だろうか。

どうにもキザったらしいそれを身に付けて、再び屋敷の外へと出ると、俺と都市長はラクダに揺られて砂漠へと出た。

「なあ、爺さん」

「はい、なんでしよう?」

「これ、ちょっとそこまでの距離じゃないか?」

「さてどうでしょう。そこまで長旅にはならないと思いますが」

「長旅つて、アンタな……」

都市長も髪に櫛を入れて、どこことなくキツチリとしていた。  
昼前の砂漠を、俺たちは地平線に浮かぶ陽炎を眺めて進み、どこまでも続く砂漠を体験した。

「もう少し、もう少しですよ」

「食えないな、爺さんは……。ならせめてどこに行くかだけでも教えてくれ」

「大切な場所です。私たちにとっては、とても大切な……」

「へえ……いいところなのか？」

「はい。かつてはとても美しい場所でした」

よくわからないが興味が湧いてきた。

彼は盟友である俺に、見せたい場所があると知っている。ならば喜んで付き合おう。

「わかった。友達として付き合おうよ、シヤムシエル爺さん」

「フッフ、嬉しいですね。ですが、私をお義父さんと呼んでくれても構いませんよ？」

「バカ抜かせ。俺はアンタが気に入ったんだ、娘を差し出さなくてもずっとアンタの隣にいてやる」

「それは愛の告白でしょうか」

「そうかもな……」

俺は孤児だ。この爺さんに拾われたメーブルとシエラハゾが羨ましい。

「見て下さい、やっと見えてきましたよ。アレです、あの屋敷が目的地です」

「……屋敷？　屋敷って言うよりありゃ、遺跡……いや、廃墟じゃないか……」

都市長の指先を追うと、砂漠の陽炎の彼方に、蜃気楼のように揺らめく廃墟があった。

様式はシャンバラの高級邸宅によくある白亜のもので、遠目に見ても恐ろしく巨大な屋敷だった。

「廃墟……廃墟ですね。愚かな私が廃墟に変えたのです」  
「アンタが……？」

「はい……。かつてゾーナカーナ・テネスという、偉大なるエルフの始祖の血を守る家がありました。それがあの家でした」  
「……まさか、あれがシエラハゾの実家か？」

俺がそう問いかけると、都市長は罪悪感に心折れたのか、視線を足下の砂に落とした。

近付けば近付くほどにその廃墟は巨大となり、陽炎がその像を大きく揺らめかせた。

「私たちは元々友人でした……。ですが、彼と私は思想を違えました……最後は彼を倒す他になかったのです……」

敷地の前までやって来ると、門の片方が崩れた正門があった。

片方の門は招くように開かれており、敷地の中へと進むと、痛ましくも荒れ果てた庭園と、枯れたオアシス、巨大な屋敷、それに大きな神殿が建っていた。

その神殿から奇妙な魔力を感じる。

入り口には砂漠では珍しい白と桃色の花々が飾られ、その瑞々しさからして、数時間前に用意されたものに見えた。

「さ、中へ」

「ちよつと待ってくれ、爺さん……。これはいつたい……」

「入ればそこに答えがあります。さあ、中へ」

「わかった……」

その大きな神殿は、どことなく俺たちの工房の元になった神殿に  
雰囲気似ていた。

俺は都市長に誘われるままに門をくぐり、背中の彼が門を閉じる  
音を聞いた。

奥の祭壇に誰かが立っている。

長身の女と、小柄な女だ。大きい方は白、小さい方は桃色のドレ  
スを身にまもっていて、ゆっくりとそれがこちらへと振り返った。

「んなっ……」

それは長い耳を持ったエルフの姉妹、メイプルとシエラハゾだっ  
た。

美しい絹のウェディングドレスをまとった俺の家族だった。

額には銀と宝石のティアラ、頭には絹のベールがかけられていて、  
立ち尽くす俺と同じように、向こうもまたじっと俺だけを見つめて  
いた。

「爺さん……アンタ、謀ったな……」

そのあまりの美しさに俺は言葉を失った。

そうだった。シャムシエルという男はこういうやつだった。

「やっと来た……。すっぱかされるかと、マジ冷や汗ものだった……」

「き、来ちゃったのね……。ああ……。あたし、まだ、心の準備も出  
来てないのに……。う、うう……。っ」



何がちょっとそこまで付き合っただけ……。  
こんなもの完全に罠じゃないか。

友情がいつかは終わることを彼は知っていて、だからこそより深い結び付きが必要だと言っているようなものだ。このタヌキジジイめ……。

「さあ始めましょうか。結婚式を」

爺さんは立ち尽くす俺の背を押して、美しいエルフの姉妹の前に導いていった。

間抜けな話だが、俺は爺さんの行為に抵抗しなかった。

近づけば近づくほどに、狂おしいほどに心臓が暴れ狂い、自制のためにメーブルとシエラハズという美姫から視線を外すしかなかった。

何もかもが強引で突然だ。俺たちは出会ってまだ1月も経っていない。

メーブルは自由奔放で、少し寂しがりなところが庇護欲を誘う。やたらにくっついてくるのは、直情的な性質もあるが、寂しさの現れでもある。

シエラハズはあまりに美しく、メーブルにそうするように、まるで姉のようにやさしい女性だ。

しかし本当の彼女はとても純粹で恥じらい深く、高貴な生まれゆえか気負いがちで、そこが弱々しくて守ってやりたくなる。

そんな2人を好ましく思わないはずがない。

俺たちは力を合わせて迷宮を探し出し、素材をかき集め、オアシス復興のために同じ目的を共にした。

欲しい。関係を永遠のものにしたい。

都市長に謀られるがままに、そう思ってしまうのは弱さだろうか。

俺の目の前に、光射す廃墟と化したボロボロの祭壇を背に、シャンバラで最も美しい花嫁がいた。

俺は彼女たちに惹かれている。この情欲シスターに身を任せて、婚姻を結んでしまってもいいと、そう思うくらいに、俺はメーブルとシエラハゾが好きだ。

だからそうだ。もうこのまま流されてしまおう。そう思い、愚かな俺はもう一步を踏み出した。

・履歴書の彼方へ（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】

【】いただけると嬉しいです。

今夜と明日朝更新分、分割上文字数が少なくなります。

1部完結まで朝夜更新で、1日あたり3000字を予定しています。

祭壇に進みながら頭上を仰ぐと、そこには青く晴れ渡る空と、脆くひび割れた天井があった。

神殿の佇まいは何もかもが洗練されていて、あちこちに細かなレリーフや彫刻が刻まれ、仰々しい柱が天へと無数に伸び、祭壇の奥には天秤を持つ女エルフの彫像が刻まれている。

しかし今やあちこちに砂塵が降り積もり、崩落した天井が瓦礫となつて神殿を埋めて、祭壇のエルフ像も高く掲げた右手を失っていた。

見れば見るほどに、その神殿は滅びと栄光の残滓が入り交じる悲しい場所に感じられた。

邪魔な瓦礫を迂回して、ゆっくりと祭壇に近付いてゆくと、壇上に白くて小さなゴーレムが2体立っているのが確認出来た。

「ジョン（・・）」

「ニア、タチガ、神官ヲ、務メマス。マ、任セトケ（・・）」

「サ、コチラへ……」（＝＝）

「あ、ああ……。俺はユリウスだ」

言われるがままにニアにとってのジョンとやらは祭壇に近付く。祭壇の左右には絹のドレスをまとったメープルとシェラハゾがいつもよりも慎ましげに立っていて、俺は彼女たちの間に挟まれる構図となつた。

「よっ、ジョン……」

「いい加減そのネタしつこいぞ、お前ら……」

「でも……ニアにとって、ユリウスはジョンだよ……？」

「……この状況で、そんな哲学的なことを言われてもな」

左を向けば薄桃色のウェディングドレスをまとったメーブルがいる。  
霧のように透けるベール越しに目と目が合うと、さすがのメーブルも熱い恥じらいを覚えたのか、慌てて視線を外してきた。

ドレスは薄着を好む彼女らしくカットが多く、特に大きく露出した背中ではまるで赤子のように綺麗だった。

「しかし、まさかお前まで爺さんとグルだったとはな……」

「ち、違うわよ……っ。だって、メーブルと都市長が、強引で……。気付いたらこうなったの……っっ！」

右を見れば、ブロンドの美しいエルフが胸を隠すように身をよじっている。

ドレスは胸の上部が大きく露出するもので、否応なく男の目を奪う魔力を秘めていた。

彼女の水浴びをのぞいてばかりいるこんな俺だが、近くで見ると取り分けに強烈だ。

シエラハゾはシャンバラの誰よりも美しく、刺激的な容姿を持った女性だった。

「とか言いいながら……さっきまで、ドキドキ……ウキウキ……お

尻と胸、揺らしてた……」

「そ、そんなことしてないわよっ!?!」

「してた……ぶっちゃけ、超、エロかった……。はあはあ……辛抱  
たまらん……」

「うつつ……だって、しょうがないじゃない……。っ。こんなの、緊  
張しない方がおかしいわよっ!」

「お尻、振りながら……?」

「メーブル、ソレ以上八、イケナイ(=|=)」

「非常ニ、ニア、モ、ワカリマスガ……。イケマセン、旦那様、  
ヨヨヨ……(=^=)」

後ろを振り返れば、都市長がニコニコと満面の笑顔でこちらを眺  
めている。

養子とはいえ大事な娘なんだろ? 俺なんかで、本当にいいのか  
……?

「それ、まさかこの前の……ダンジョンで手に入れた絹か？」

「そうだよ……。これは、運命神の、お導き……」

「こ、これが決断のダメ押しになったのは、間違いないわ……」

そう言うと2人はとても大切そうに自らのドレスを抱いた。

なんだかんだ言つて、シエラハゾとメーブルが嬉しそうにはにかんでいる姿が俺の心を浮つかせた。

「ええ、これは偶然ではありません。運命です。運命の歯車が、貴方たちに婚姻を結べと言っているのですよ」

「それはまた、ずいぶんと爺さんに都合のいい解釈だな……」

「ええまあ、本音を言ってしまうえば、私は貴方を絶対に手放すつもりはありませんので。何がなんでも、ここで娘たちと婚姻を結んでいただきます」

「皆サン、才似合イデス。何モ、問題アリマセン。ラブラブデス（  
〃 〃）」

都市長に呆れの目を向けていると、何か言いたいことがあるのかメーブルに袖を引っ張られた。

「ユリウスと結婚したい……」

「んなつ……!？」

それは不意打ちのド直球だった。

「私、ユリウスが好き……。ユリウスの声、聞いていると、安心する……。都市長と同じ……。私は、ユリウスを逃がさない……。絶対、しばく……」

「しばくなつての……っ！」

「あて……。っ。へへへ……」

ティアラ越しにメーブルの額を小突くと、明るく無垢な笑顔が帰って来た。

そういつやつなのは知っていたが、いくらなんでもハツキリと言い過ぎだ……。

そうしていると今度は右の方から、ちょいちょいと控えめにシエラハゾがこちらの袖を引いて振り向かせて来た。

「く、唇……。あ、あたしの唇……。2度も奪ったんだからっ、責任取りなさいよ……。っ！ あ、あなたが、初めてだったのよ……。？  
なのに、2回も、2回も……。っ！」

その時、俺はハツキリと状況を理解した。

これはもう逃げられない。背中 of 都市長へと振り返る勇気が欠片もなくなるほどに、今の俺はもう後戻り出来ない状況にある。



・闇の婚礼 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

・変ワラヌ、愛ヲ

「あれは……あれはその、つい……。ついお前が、だって綺麗で、どうしても、その、衝動が止まらなかったみたいだ……」

「わお……」

「そ、そう……そうなの……。あ、あんまり悪い気はしないわ……っ」

正直、嫌な気分ではない。いやむしろ心の奥底で、俺は2人から愛の告白に感動していた。

喜びのままに、もはや逆らいようがないほどに一時の感情に流されかかっていた。

人生を左右させる大きな決断を迫られているというのに、なぜかそこに不安はなく、あるのは期待と、ワクワクと、抑え切れない激しい喜びだけだ。

もしも人目がなければ、床の上で転がり回った後に、両手を上げて飛び跳ねて、それから踊り回りたくなるほどに、色ボケした感情が胸の中で大爆発していた。

「ユリウス、私たちと結婚して……？」

「あ、あなた以外はもうイヤよ……。あなたが、あたしにあんなことするから……ッ……、もうっ、責任取りなさいってば……っ！」

ああそうだな、もう無理だ、このまま流されてしまおう……。

後悔するのは後でいい。後でどうとでもなる。感情に身を任せて今こそ返事を返そう。

「俺もずっと、一緒に暮らせたらいいなと思っていた。二人といると、とにかく毎日が楽しい。ワクワクする。朝から浮ついた気分になって、まるで夢の中にいるかのようだ！ だからどうか、メーブル、シエラハ、俺と結婚してくれ！」

ニアと都市長が興奮の歓声を上げた。

シエラハゾは高ぶる感情に耐えきれなくなったのかシヨールで顔を覆い、メーブルは得意げに笑っていた。

「では神官さん、お願い出来ますかな？」

「ハイハイ、オ任ヲ……（・へ・）」

「汝、メーブル、シエラハゾ、ソシテ、ジヨン （ーーー）」

だから、ユリウスだったの……。

「暑サデ、熱暴走シソウナ、日モ。寒サデ、基板ニ、結露ガ滴リソウナ、日モ。砂嵐デ、塗装ヲ剥ガサレソウナ、悲惨ナ日モ。変ワラヌ、愛ヲ、誓イマスカ？」

「それ全部ゴーレム視点じゃねーかつ！」

「違イマス。ニア、タチハ、ロボデス（・へ・）」

これは人選ミスだな……。

ニアたちは祭壇の上で、抗議するように跳ね回った。和む光景だが、愛を誓う雰囲気ではない……。

「誓う……。シバきたくなる日も……吊したくなる日も……。私は、ユリウスに永遠の愛を誓う……。だって……。おでこ叩かれると、幸せになるから……。」

「はは……。お前らしいな。てか人をシバくなつ、吊すなっ！」

「でも、夫婦は……性癖レベルで、分かり合う必要が、あると、思うよ……?」

「……いきなり真顔で正論っぽいことを言うな」

悪いがそつちの趣味には付き合えない。

ははは、今さらだが、少しだけ後悔して来た……。

「あたしも誓うわ。どんな辛い日も、悲しい日も、ユリウスがボケたお爺ちゃんになっても、あたしは最後まであなたを見守るわ」

「なんでお前らは、いちいちツッコミどころを作らなきゃ気が済まないんだ……」

エルフとヒューマンでは寿命が違い過ぎる。

それを承知で俺を選ぶというのだから、それはとても光栄なことだ。

「ジョン。アナタモ、誓イヲ（・・）」

そう言われて俺は一步下がると、心臓に胸を当てて片膝を突いた。

「ああ……。ヒューマンとエルフの神、2つの神に誓おう。死ぬまで俺は、メーブルとシェラハゾを支えて生きる。まだ愛を誓えるほど俺たちは時間を重ねてはいないが、だが必ず幸せにすると、2つの神に誓う。俺はシェラハゾが好きだ、メーブルが好きだ、これからも一緒に居たい」

バカ正直な誓いは、姉妹を少しだけ呆れさせた。

どうにも歯切れが悪いが、誓いだからこそ嘘は吐けなかった。

「大丈夫だよ、姉さん……ユリウスは、ツンデレ……。ポーシヨン工場で、3年間くすぶるくらい、超バカ正直なだけ……。本当は姉さんのこと、大好き……。今夜、メチャクチャにしたいって、言ってるよ……」

「言ってるよっ!? メ、メメメ、メチャクチャだなんて人聞きの悪いこと言っなよっ、おいっ!？」

「え……夫婦ですが、何か……?」

「何か、じゃねーよっ!」

「才孫ノ顔ガ、楽シミデスネ(^^)(^^)」

「はい、とても。さぞや魔法や武勇の才に飛んだ優秀なエルフとなるでしょうね、フッフ……」

続いてニアが祭壇に置かれた小箱を、小さな身体で持ち上げた。小箱は3つ用意されており、どこからどう見てもそれは『最も重い契約の象徴』、結婚指輪に見えた。

この指輪をはめればもう後戻りは出来ない。

絶対に俺を逃がさない。だから婚姻で縛る。という、シャムシエル都市長の心配性な願いが叶うだろう。

「デハ、指輪ノ交換ヲ(=|=|)」

それぞれのニアが姉妹に小箱を手渡して、それが終わると俺の番だ。

覚悟を決めて、俺は自称ロボの変なゴーレムに手のひらを差し出した。

「……いや、待て。……外から何か音が聞こえる」

それは足音だ。1つや2つではない大勢の足音と、カチカチと金属がぶつかる物音が聞こえる。

直ちに転移して神殿の小窓から外をのぞけば 見渡す限りのモンスターの群れが、こちらに迫って来ていた。

さらに四方の小窓に飛び回ると、俺たちが極めて危険な状況にあることがわかった。

「な、何この足音……？ 外に何がいたの、ユリウス……！？」  
「静かに。そして落ち着いて聞いてくれ。……俺たちは今、モンスターに囲まれている。敵はゴブリン、ホブゴブリン、コボルト、オーク、トロール、ざっと亜人系が4、500体。突然だが、死の覚悟がいる状況だ」

どこからともなく現れた亜人系モンスターの群れに、崩れかけの神殿が囲まれていた。

・変ワラヌ、愛ヲ（後書き）

もし少しでも気に入ってくださつたら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】

【いただける】と嬉しいです。

・死の婚禮 1 / 2

幸い、平静を失う者は出なかった。  
とはいえ死と隣り合わせの絶望的な状況だ。

なぜ地上にモンスターが現れたのか疑問ではあったが、今はそんなことを考えている場合ではない。

怪力となったシエラハゾに瓦礫を動かしてもらい、正門を瓦礫のバリケードで塞いだ。

「敵の狙いは我々のようですね……」

「どうしよう……」

「こんなところで籠城しても後がないわ！ 手薄なところを強行突破するべきよ！」

もう神殿の壁に取り付かれそうだ。

やつらが持つ鈍器や剣が石の壁を叩き付けて、建物全体がヒステリックに鳴り響いた。

まずい。本当にこれはまずい状況だ……。

「ユリウスさん……お得意の転移魔法で、娘たちを外に運んでくれますか？」

「そんなのダメよっ！」

「ユリウス……私たちがいいから、都市長を、外に……」

「私の命より、娘たちの幸せの方が大切です。さあ、ユリウスさん……」



指導者シャムシエルというシャンバラの未来か、自分の未来の嫁か、俺は究極の2択を迫られた。

残った者は殺される。俺だけは生き残れる。目前にあるのは理不尽な選択肢だった。

「仮に転移で逃げるならば、全員連れて行くよ。全員で禁忌のツケを払えばいい」

「でも……もし、転移先が100年後になったら……その間、誰がシャンバラを、導くの……？」

「先に都市長を運んで！ あたしたちはその後で構わないわ！」

どのプランも一長一短で犠牲がともなうものだが、悩んでいる場合ではないという部分だけは確かだ。

今にも正面の扉が叩き破られそうで、俺たちはますますの覚悟を迫られた。

なぜこんなことに。そんなことを考えている暇もない。

シエラハゾが最初に提案した強行突破を試し、突破に失敗したら、全員での転移を試みるべきか……。

「諦める前に強行突破を試そう。それでダメだったら転移を使う。もう時間がないので反論はなしだ、これでいくぞ」

「ユリウスさん、ではもしもの時は私を捨て下さい。私は娘を守りたい。娘を頼むと、私は彼に頼まれたのです！」

「イヤよっ、あたしはお荷物にはならないわ！ あたしは戦士よ、死ぬときは戦い抜いて死ぬわ！」

どいつもこいつも高潔過ぎる……。

俺は誰かが殺される姿は見たくないので、飛ぶときは全員で飛ぶと心に決めた。

手薄なルートはやはり神殿の後方だろう。

敵ごとあの壁を吹っ飛ばして、シエラハゾを切り込み役にして、俺たちが支援に回ればどうにかなる可能性がある。

「ちよいちよい……。おい、ちよいちよい……」

「強行突破だ、行くぞメープル！」

「ニアたちが、見つけた……」

「下、下！ 何カアル！ コノ下、何カアリマス！」

口数少なかったニアたちが跳ね回り、メープルが足下を指さしていた。

そんな状況ではないのだが、意識を足下に向けると おかしなことに地下から微小な魔力を感じた。これは、いや、まさか……。

「試してみる価値はある！ ニーアツ、そこをどけっ！！」

「ドウゾドウゾ……！（・へ・）」

短剣を引き抜き、最短の増幅速度で、俺はニアたちが跳ねていた床をアースグレイブで隆起させた。

連鎖的にメープルが爆裂魔法でアースグレイブを吹き飛ばすと、それはまさかのまさかだ……。

「あれって、嘘っ、迷宮っ！？」

「あれに入るぞ！ 迷宮にはルールがある、モンスターは迷宮と地上を行き来出来ない！ あれが俺たちのシエルターだ！」

俺はお手柄のニアを抱え上げて、アースグレイブで生まれた傾斜面を滑り降りた。

皆が後に続き、誰もがそこに現れた迷宮の様相に驚いた。

だが今はそれどころではない。

その迷宮の入り口が、光拒む漆黒の霧に包まれた『闇の迷宮』のものであったとしても、俺たちは生きるために中へと飛び込む他になかった。

入ってしまったえば、危険は迷宮内部のモンスターだけだ。

地上の壁が崩され、モンスターたちが奇声を上げながら雪崩込んでくる暴力的な騒音を聞きながら、俺たちは霧の扉の中へと逃げ込んだ。

・死の婚禮 2 / 2

「はー……死ぬかと思ったー……」

「実際、死ぬところ、だったな……。何が、どうなってるんだか……はああつ……」

俺たちは闇の迷宮に逃げ込むなり、動揺に乱れた心拍を息切れしながら整えることになった。

地上にモンスターが現れたという話は、ツワイク王国でも何度か聞いたことがある。

だがあんな大軍勢が現れて、連携して人を狙ってくるなど聞いたこともない。

ピンポイントに俺たちを標的にした点も加えて、これは異常なことだった。

姉妹は都市長にしがみついて、それぞれの無事を噛み締めている。なぜかはわからないが、俺の隣はニアが困っていた。

「怖カッタデス……（T―T）」

「死又カト、思イマシタ……（T―T）」

「鉄塊のお前らが言うつと、なんかシユールだな……」

「酷イデス、ユリウス様……（TへT）」

「お、今ユリウスって言ったな？」

「ア……。酷イデス、ジョン……（TへT）」

変なゴーレムたちのツルツとした装甲を撫でて、もうジョンでもなんでも好きに呼べと慰めた。

しかし落ち着いてくると、次に気なってくるのは闇の迷宮の姿だ。

それは赤と黒に彩られた不気味な世界だった。

霧のように見えるその壁は、触れてみると実体を持っており、ブヨブヨとへばりつくような感触が気持ち悪い。

「こんな話を知ってるか？ 闇の迷宮は別世界の入り口で、この迷宮の果てには、ここではない別世界に直接通じているそうだ」

「おー……ユリウスのうんちく、始まりました……」

「別の世界だなんて、あたしには想像も付かないわ……」

「だが歴史上、戻ってきた者はたった1人だけ。行けばほぼ帰ることとは出来ないってことだな」

「そう、だったら交易路としての価値はなさそうね……」

そういう発想になるところがシャンバラのエルフらしい。

ところが都市長は俺の言葉に、怖い顔をして迷宮の奥を睨んでいた。

「爺さんも興味あるのか？」

「……ええ。シャンバラの都市長として興味深い話です。あの男の屋敷に、別の世界に通じる迷宮があった。とても偶然とは……」

後半は独り言で、何を言ってるのか上手く聞き取れなかった。

「ユリウスさん、貴方は偵察をしつつ町に戻って下さい。外の軍勢が全てとは限りません」

「え……。それって、町が、襲撃されるかもって、こと……?」

「そんなのダメよっ!!」

仮に群れが外の連中だけだとしても、どっちみちアレはシャンバラの中心に向かうだろう。

今すぐ迎撃準備をしなければ都市部に入り込まれて混戦になる。

「私たちは迷宮を出入りしながら、ヒット&アウェイで外の群れを叩きます。町への連絡、頼めますね?」

「……議論している場合ではないな、わかった。みんな、爺さんがムチャしないように頼むな」

安全は確保したが、事態はまだ動いている。

俺は盟友の願いに立ち上がり、直ちに亜空間の扉を開いた。

「待って!」

「そう……そうやって、すぐ消えようとするの、よくない……」

「悪いな、説教なら後にしてくれ」

「違うわよ。ユリウス……うん、ユーリ、約束して……。必ず生きて戻るって……」

「それとこれが終わったら、今度こそ、私たちと……結婚して……。うん……って言うてくれたら、処女のまま死ぬに死に切れないから、死ぬほど、がんばれる……。ユリウスとの、緊縛の、初夜……フフ」

ブレない妹の後頭部を軽く叩くと、また嬉しそうに笑い返してくるのだから、かわいい未来の嫁さんだった。

「シエラハゾがドン引きしてるからそれ以上は止めとけ……」

「そ、そういうのがいいなら……わ、私もがんばるわ……」

「姉さん……うんっ、やろっ!」

「旦那の人権を尊重しろよ、お前ら……。じゃあな、また後で会おう。ニア、みんなを頼んだぞ」

「ハイ、背中二乗ッテ、才癒シマス（＝へ＝）」

「そうか、爺さんを壊さないようにな」

亜空間に身を投じて、俺は世界の裏側に忍び入った。

やはり闇の迷宮は特殊な場所のようだ。

螺旋を描く上り階段から、足下をうかがうと、大きく光る何かに向こう側に見えた。

この力を使えばもう1つの世界に行けるのだろうか。

帰って来れない場所に行く理由など、俺には皆目なかった。

・死の婚礼 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。



・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
伝令・俺一人 -

これはシャンバラを滅亡へと導きかねない大危機だ。

闇の迷宮から外の砂漠に移ると、遙か後方に大地を暗色に埋め尽くす大軍勢があった。

その半数がゾーナカーナ邸を取り囲み、もう半数がどうやら別行動を始めて、都市長の予想通りにオアシスへの進軍を始めている。方角と距離からして、やつらの狙いは交易商人たちが集まるあのバザー・オアシスのようだ。

これは非常にまずい展開だ。

オアシスのバザー街とそこにある商館の数々は、シャンバラの経済を支える大動脈と比喻したって差し支えない最重要拠点だ。

それに隣接する行政区やスラム街も無事では済まないだろう。数にしてざっと1000体のモンスターたちが、統率も陣形もないバラバラの布陣で、一步また一步とオアシスを目指して進んでいる。

「亜種族系混成が1000体か……厄介だな」

この国は各地に点在するオアシスや氾濫川ごとに町がある。

そのため兵力が各地に分散しており、あの大軍勢を迎え撃つには、近隣のオアシスから性急に兵をかき集める必要があった。

あの軍勢がバザー・オアシスを襲うのはもはや時間の問題だ。これが風雲急を告げる事態である以上、俺が近隣全ての兵舎に、亜空

間転移して伝えて回るしかない。

恐ろしい大軍勢を注視しながら方針をまとめると、まずは行政区の市長邸に飛んだ。

「え、ユリウスさん……？」

あの物静かな秘書は、都市長の書斎机に腰掛けて仕事を代行していた。

「聞け、非常事態だ！！ モンスターの軍勢約1000体がバザー・オアシスに来る！！ 行政区の兵員をかき集めて、現地に部隊を展開させてくれ！！」

「本当ですか？」

「疑うなら窓の外を見る、まだ遠いが、どうにか見えなくもないはずだ！」

彼はペンを投げ捨てて書斎を飛び出し、2階廊下の窓から北部の砂漠を睥んだ。

再びこちらに振り返った頃には、鋭い眼差しに変わっていた。

「父 都市長はっ！？ メープルとシエラハズは無事ですか！？」  
「無事だ。実はゾーナカーナ邸地下に迷宮を発見してな。今はそこを防波堤にして敵の一部を引き付けてくれている」

「そうですか、良かった……。いえ、よくありませんね、あれがこ

こちらに来るとなると……」

「数は約1000、ゴブリンを主にした亜種族による混成だ。ゾーナカーナ邸を囲んでいる軍勢も足すと、約1500体はいると見た方がいい」

「ユリウスさん、ではお願いが」

「わかっている。俺は元宮廷魔術師だ、伝令には慣れている」

彼の張りつめた表情に、希望が輝きが灯るのを見た。

かと思えば全速力で書斎へと引き返していった。

「待つて下さい、急ぎ伝令書を作ります！」

「わかった。あんたがすぐに信じてくれて助かったよ……」

俺の方は応接用のソファーに深々と横たわって、書類の完成まで体力と魔力の回復に努めた。

シャンバラに被害を出すわけにはいかない。

戦いで兵員が減れば、それだけ迷宮に向けられる人的資源が失われることになる。

これからの計画を下方修正させないためにも、被害を必要最小限に抑えたい。

「ところで結婚式は、どうになりましたか……？」

「あんたもグルなのか……。爺さんのその策略なら、一番いいところで中断になったよ」

「……許してやって下さい。シャムシエル様はああいう方なのです。年齢を重ねてゆくと、過去の失敗から多くを学びすぎて、必要以上に慎重になるものです」

「わかってるよ。しかし、やっぱり付き合い長いのか？」

「……彼とは30年前からの付き合いです。私も、あの子たちと同じ立場だったのですよ」

「ああ……。そういうことが」

少し似た境遇のせいか、彼にさらなる親近感が湧いた。言うなればこの物静かな秘書は、俺の未来の義兄さんだった。

「出来ました」

「よし来た、防衛線の構築は任せたぞ！」

「お任せを。貴方に感謝を」

全てを聞き遂げる前に俺は世界の裏側に潜り込んだ。伝令書は合計8枚。これを近隣全てのオアシスに届ける。

普段は世界の裏側を走ることはないが、魔力の消耗を覚悟で実体なき大地を蹴った。

兵舎の司令室に真正面から乗り込んでくる人間に、軍人たちは多種多様な反応をくれた。

「ブツッ……?! ゲホツゲホツ、な、何者だ!？」

「都市長お抱えの錬金術師ユリウス、今回は伝令役だ。バザー・オアシスに援軍を出してくれ」

茶を吹いて目を白黒させるやつ。  
窓から遙か遠い敵影が見えたので、すぐに彼は信じてくれた。

「ち、痴漢にやっつ!!」

「安心しろ、ネコヒト族には興奮しない。それより援軍をくれ、すぐそこまで敵が迫っている」

着替え中のネコヒトはバインダーを投げつけて来た。

それをかわして伝令書を机に置き、わけを伝えるとすぐに動いてくれた。

「つまり事実上の戦争ということですか!? そうなんですなっ、やっつたっ!!」

「……戦に血沸き肉踊る気持ちはわかるが、それよりも急いでくれ」

「ありがとうっ、ありがとうっ、待ちに待った戦だぞお前たち!!」  
「だから急げって……」

不謹慎なやつらも割と多かった。

いつの日か実戦の日が来ると信じて、今日まで練兵を続けて来た連中だ。反応としては正常の範囲だろう。

・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
伝令・俺一人 - (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマー  
ク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
戦闘準備

「本当か？ おいヒューマン、お前都市長のお気に入りなのをいいことに、やりたい放題やってると聞くが？」

「新参者が気に入らない気持ちはわかる。だが今は兵を」

中にはわからず屋もいた。

どこの世界にもこういうやつはいるものだ。今は虚勢の張り合いをしている場合ではないというのに。

「信じられんな」

「信じてくれ、軍にも民にも被害を出したくない」

「ヒューマンなのか？」

「そんなもの関係ない、手と足が2本あって頭が1つなら同じ人間だ」

「ふんっ、ならば猿も同じ人間だな」

「……わかった。もしこれが嘘だったら、お前に金貨100枚やる  
伝令書をひっくり返して、そこにテーブルにあったペンを滑らせた。」

誓いと署名、信じてもらうために血判も足した。

「むう……。だ、だが……お前は信用出来ん……」

「隊長っ！ ユリウス様は枯れたマク湖を復活させた英雄ですよっ！？」

「ごぶさたしております、ユリウス様！ あなたのおかげで故郷は

救われました！ 隊長っ、派兵しましょうよっ、嘘のわけありません！」

それでも決断しない隊長にイライラとし始めると、司令室に彼の配下が飛び込んで来て直訴してくれた。

驚いたことに、どちらもマク湖の大工事で見た顔だった。

「わかった！ だが嘘だったら金貨100枚だぞっ、わかってるな！？」

「約束する。……口添え助かったよ、武運を祈ってる」

「はっ！ ほら隊長、急ぎますよ！」

「何ちんたらやってるんですかっ、お国の危機ですよっ、ちゃんとして下さい！」

話が付いた。亜空間の扉を開き、俺はシャンバラ防衛戦の第2段階に移った。

転移先は行政区画の冒険者ギルドだ。

「あらっ、ユリウスちゃんじゃないっ、いらっしやい ごめんなさいねえ、今ちよっと立て込んでるのよお……」  
「まさかあんた、前線に立つのか……？」

ギルドに転移すると、冒険者たちが慌ただしく戦闘の準備を始めていた。

受け付けのカマカマ野郎は、長身の肩にウォーハンマーをかけて、軽装の鎧を身に付けていた。



「むふふ……愛するアタシの町だもの。みんなの幸せを奪うクソ野郎は、アタシがスペシャルミンチしてあげるんだから」

「ミヤアツ、ユリウス様！ 出陣前に会いに来てくれたミヤツ！？ 感激ミヤアツ！」

「いや、こここのエリクサーを取りに来た。前線で布陣中の正規軍に俺が届けるよ」

「フミヤア……。男って、男って……。戦が絡むとみんなこうミヤ……。戦のバツキキャローツツ！！ アンタたちっ、たらたらやってないで出陣するよっ、あと30秒で準備するミヤツ、ブミヤアアツ！！」

「なんで急に荒れるんだ……？」

「んもっ、聞くのは野暮よ、ユリウスちゃん」

ギルドには冒険者たちのためにエリクサーとポーションが備蓄されている。

俺は受け付けから樽1つと木箱1つを受け取って、すぐに亜空間の扉を開いた。

「助かった、これがあればしばらく前線ももつだろう。またな、白にゃんこ！」

「アタイは猫じゃないミヤツ、ネコヒトミヤアツ！」

頭を軽くモフったら姉御肌のネコヒトは静かになった。

続いて世界の裏道をちよつと歩いて、回復物資をバザー・オアシス北部に展開する前線部隊に運んだ。

動員された兵力はまだ100名にも満たなかったが、砂漠の向こうに動きの早いゴブリンとコボルトが群れをなしてこちらに迫って

来ていた。

「ユリウスさん、援軍の方は？」

「全軍がこちらに来る。それとギルドからエリクサーとポーションを持って来た、使ってくれ」

「おお……どんな瀕死の重傷も瞬く間に治す奇跡の薬エリクサー……。これがあるとないとは、まるで状況が変わってきますね。貴方が味方で本当に良かったですよ……」

「ギルドの連中もじきに来る。増援が集まるまでどうにか堪えてくれ。こんな状況で悪いが、俺は工房に戻る」

兵の中には防具を付けない民間人らしき者もちらほらといた。

義勇兵というやつだろう。中でもエルフは誰もが大小の魔法の才能を持っているので、こういった有事において頼もしい。

「ご武運を」

「そっちなよ。お義兄さん」

「よして下さいよ、こんな状況だというのに、顔がニヤケてしまします」

「死ぬなよ、寂しがりやの都市長が悲しむ」

「ええ、あの方はそういう方です。……私たちが長寿であるからこそ、変化や死に対しても臆病なのです。しかし貴方ならば」  
「その話は後だ、今は急ごう」

彼に別れを告げて、世界の裏側を通ればちよつとそこまでの工房に戻った。

あっち行ったりこっち行ったり、もう目が回りそうだった。

それでも厳しい前線に立っているあいつらのために、俺は本棚から分厚い一冊を引き抜いて、そのページをめくり散らした。  
この状況を一変させる奇跡のマジックアイテムが必要だ。

頭をフル回転させて文字を流し読んでゆくと、半分ほど読み進めたところで、今回向けの超危険なレシピを見つけ出した。

「フレアボム……そうか、これだ！」

必要素材：

- ・フレアストーン
- ・ルインタートル素材
- ・プリズンベリル
- ・基礎素材

ただしこのアイテムは、材料費と威力の帳尻が合わない。……とある。

次に倉庫へと飛び込んで在庫を確認すると、幸いなことに全ての必要素材が既に集まっていた。

机に材料を並べて、水瓶を抱えてオアシスの湖水を釜へと流し込む。

最近ではメイプルの杖の代わりに、掃除用のホウキを使っている。それを錬金釜にコンと突き入れた。

・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
メギドジエム - 1 / 2

「クソ……戦端が開かれたか、もつと急がないとまずいな……」

バザー・オアシスの方角が騒がしい。

剣と剣がぶつかり合い、兵士たちがときの声を上げ、モンスターたちがそれを咆哮で返した。

今すぐ戦いに加わりたいが、俺は集団戦が苦手だ。

ならば錬金術師として、戦況を一変する奇跡のアイテムを作ろう。

俺が作ったポーションはエリクサーとなる。ならば、俺が作ったフレアボムは、フレアボムの残念な常識を必ず吹き飛ばすはずだ。いつもの手順で湖水に魔物素材を溶かし、全ての元となるエッセンスを作った。

その次はフレアストーンだ。火の迷宮に挑戦した冒険者たちから、つい先週こちらに回してもらったばかりのレア素材だった。

「あちつ、危なっ!？」

温かい熱を持つ赤い石は、釜へと投入されるとまるで油のように燃え上がり、俺の眉毛や前髪を焼いた。

これはどうということだと再びレシピに目を向けると、なるほど。難易度Sクラスと記されていた。

「む、難しいな、これは……やたらに不安定だ……」

釜の中はまるで溶岩のように赤く輝いている。

今にも爆発しそうなそれを、魔力で包み込んで押さえ込まなければ、爆発が起きて失敗となってしまうそうだ。

だが、前線ではみんなが命をとっている。

メープルもシェラハゾも都市長も、闇の迷宮を盾にして戦っている。

俺がここで失敗するわけにはいかない。

歯を食いしばってフレアストンの暴走を押さえ込むと、爆発の鍵となる、ルインタートルの鱗甲を錬金釜に投入した。

爆発しそうな液体に、爆発属性のルインタートル素材を入れたのだ。

当然ながらもますます不安定になった……。

「く、くううっ……お、俺は、俺は……っ」

熱く燃え上がる液体から、凄まじいほどの魔力がほとばしっている。

とても抑えきれない。こんなもの無理だと、気弱な心が臆病風に吹かれた。だが……！

「俺はエリートだっ、超スーパーエリートだっつ！！　こんなものっ、こんな反応ごときに……っ、エリートは絶対に負けんっ、なぜならっ、俺はっ、エリートだからだっつ！！」

十分に混ざり合った。これ以上ないほどにこの液体は不安定となった。

俺はそこに無色のプリズンベリルを3つ入れて、宝石の中へと究

極の危険物を封じ込めた。

「う……うぐっ……?!」

魔力も気力も体力も全てを使い切ったせいで、俺は地に崩れかかったが踏みとどまった。

透明だったプリズンベリルは、炎と爆発の力を宿して深紅に染まり、いかにも不安定そうにチカチカと微かに輝いている。

「待てよ、このレシピを応用すれば……」

もう体力と魔力の限界だった。

しかしひらめきは極限状態時に現れがちなものだ。

俺は極めて危険なフレアボム、いやメギドジェムとも呼べる魔法爆弾を懐に入れると、調合を再開させた。

最初の手順はエリクサー作りと同じだ。

いつもよりも濃度を高めたエリクサー水溶液に、あえて成分を不安定化させるリインタートルの鱗甲を入れる。

つまり、これは爆発属性のエリクサーだ。

最後にプリズンベリルを3つ投げ込むと、エメラルド色に輝く爆発回復薬が完成した。

ついにやり切った。俺は釜に抱きつくように崩れ落ちて、乱れる呼吸と、もつろうとする頭が元に戻るまで、しばらく安静にするしかなかった。

転移の連続からの危険な調合で、もう体力も魔力も限界だ。

しかしここで力尽きたら元も子もない。急がなければ、1秒遅れ

るだけでシャンバラの民に被害が出る。

そんな展開は、俺と爺さんの夢には不都合だ。

「俺の魔力は……エリートの魔力は無限だ……。せめて、こいつであいつらを吹っ飛ばしてから……う、うおおおーっ!!」

エリートとは、優秀ゆえにブラックな労働環境が約束された悲しき存在だ。

定時に帰って飲んだくれてる連中とは、鍛え方が違うのだ。

年末休み!? 俺の人生にそんなものはなかった!!

この程度の苦境、18連勤を耐え抜いた元宮廷魔術師の障害ではない!!

・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
-  
メギドジエム - 1/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】【いただけると嬉しいです】  
もう数話で第一部が完結します。



・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
メギドジエム - 2 / 2 -

最後の気力と魔力を込めて、俺は転移した。

目標は敵の背後だ。後ろからメギドジエムを投げ付けて、爆発に巻き込まれる前に即逃げる。

その後、この爆発型エリクサーを前線に届けたら、しばらく休もう……。

「へへへ、この辺りかな……。ヤバい、膝がガクガクするわ……」

亜空間を経由して、俺は敵の背後に転移した。

「あ………?」

ところが、無理が祟ったのか座標が狂った。目の前にトロールの巨体があり、俺の周囲にはゴブリンの群れがひしめいていた。

敵のど真ん中だった……。

「や、やべ………」

いつもならば転移からの再転移なんて無意識で出来る。だが肝心の身体が動かなかった。

「グッツ………?!」

そのせいで正面のトルルに胸へと膝蹴りを入れられ、後ろのゴ布林に背中を斬られた。

問題ない。瀕死寸前の大ダメージだが、エリクサーがあれば何も問題ない。

しかしまたもや、俺の身体は動かなかった。

しまった……これ、死ぬな……。

力が出ない。これは、もっとうにもならない。大地に膝を突き、敵の刃が俺を囲んだ。俺は死ぬ。

すまん、メーブル、シエラハ。俺、カッコ付け過ぎたみたいだ……。

目を閉ざし、人生の終わりを受け入れた。

辺りそこら中から、立て続けに雷でも落ちたかのような轟音が響いた。

いくら待っても死は訪れず、肉の焦げる匂いばかりが鼻をついた。

おかしい……。不審に思い目を開ける。

「アルヴィンス……？」

「諦めんじゃねーよ、バカ弟子が。おう、アルヴィンスお師匠様のお通りだぜ」

よく見慣れた不良中年がそこにいた。

いつもならば、魔導師のローブからアルコールの臭いが強烈に立ちこめているはずなのに、今日の師匠は中年の匂いしかなかった。

周囲にいたはずのモンスターたちは、まるで師匠得意の落雷魔法サンダーストームを打ち込まれたかのように、真っ黒な消し炭になっていた。

「なんとか言えよ。てめーをかばったせいで、てめーのお師匠様は首にされちまった。どう責任取ってくれんだ、あぁー？」

「すみません……」

素直に謝罪の言葉を返すと、師匠は拍子抜けしていた。身体が動くようになっていたので、エリクサーを口に押し込んで、ろくすっぽ噛まずに飲み込んだ。

全身から痛みが消えてゆく。  
魔力はもう空っぽだが、傷は癒え、体力もある程度戻っていた。

・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
神罰の炎 - 1 / 2

「変なこと思い出したわ。昔のてめーは素直でかわいかったな……。  
あ、困まれてるぜ」

「師匠の正体を知る前は尊敬してましたから。師匠、これを」

師匠に世界で最も危険な魔法爆弾を見せた。

彼はその秘めたる魔力に目を見開き、遅れてニヒルに笑った。

「それがてめーの消耗の原因か。ならソイツをここで発動させて、  
一緒に転移するってのはどうだ？」

「そのつもりです。もう魔力が残ってないので、同伴させて下さい」

マイペースにやっている俺たちを、奇声を上げる怪物たちがじり  
じりと包囲を狭めていた。

そんな中、師匠は俺の肩を下から抱き抱えて、メギドジエムを奪  
うと、亜空間の扉を開いた。

逃げられると思ったのだろう。一斉に怪物どもが俺たちに襲いか  
かった。

「ヒヤハハハハッ、もう遅いぜウスノロども！！ 吹っ飛ばや下  
等種どもがっっー！！」

師匠が不安定なメギドジエム3つをまとめて点火して、天高く放  
り投げる。

異常な密度で膨れ上がるその魔力は、この世界にあってはいけない  
ものだ、そう断言出来るものだった。

赤熱してゆく世界から、シンプルで何も無い世界の裏側に師匠に引きずり込まれた。

あちらではきつと、神話級の炎と爆発が敵軍を焼いているのだから。

制作物の結果を見られなかったのが残念だが、俺たちの勝利はこれで確定したようなものだった。

へたり込みながら、俺がエメラルド色の宝石　爆発型エリクサーを差し出すと、師匠のたくましい手がそれを受け取った。

「へー……さっきのやつ回復薬版ってところか。薬を爆散させるとか、バカみたいなこと考えるやつだな」

「ええ、破壊するとエリクサーが拡散する新型です。前戦の仲間に使ってやって下さい」

「アホ、それじゃ俺の手柄みたいになるだろ、てめーが自分でやれ」  
「師匠に任せます。実は、あの……そのですね……。結婚を約束した人が、まだあっちで戦ってるんです」

役に立たないとわかっていても、俺はあっちに行かなくてはならない。

そんな俺を見て、師匠が師匠らしくもなくやさしく笑った。

「クカカカ……おめー変わったな」

「え、そうなんですか……？」

「おう。おめーはキャリアにこだわるつまんねーところがあったけどよ、その方向性がよ、嫁さんの方向に向かうのはいいことだと思うぜ。いい笑顔だ」

「……はあ、よくわかりませんね」

キャリアにこだわるつまんない男か。

シャンバラに来る前の俺は、確かにつまんない男だったのかもしれない。

あつちで出世して、それで何が欲しかったのか、今となってはわからなかった。

俺を突き動かしていたのは、多分……エリートという名の虚飾そのものだ。

「ふーん……俺も少し、この国に興味がわいてきたわ。お前なんかを選ぶ変な嫁さんの、顔も見ておきたいしな……」

「紹介するよ。けど今は有事だ、さっさと行け、アルヴィンス」

俺が師匠に対して、全面的に素直になる日は来ない。

別れ際に悪態を吐いてバランスを取った。

「お師匠様だ。僕ちゃんの命を助けて下さりありがとうございます、お師匠様だ」

「感謝はしています。けど恩義せがましいです」

「んだとおつ、このクソ弟子がつ！ 助けてやらなくてもよかつたんだぞ、プライドばっか膨れ上がったアホがつ！」

「助けてなんて言ってます。……でもまあ、後で礼は返します。作りたい物があつたら、なんでも言ってお下さい」

「お、いいのか？ な、なら……よしつ、バストが100cmある、従順で美人のホームクルスを作ってくれっ！」

「……すみません、イヤです、本気でイヤです。まったく気乗りし

ないので別の話にして下さい」

「なんつでだよっ!?!?」

「いい歳した大人がバカなこと言わないで下さいよ……。絶対にイヤだと言ったらイヤです」

本当に、出会ってしばらくは心からアルヴィンス師匠を尊敬していたのに……。

いい歳してなんて大人なのだろう。

俺は師匠の抗議を背中で受けながら、メープルとシェラハゾが待つ闇の迷宮に引き返した。

師匠と呼ぶにはちよつとヤンチャなアルヴィンスを、どう紹介したのかと物思いながら。

・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
-  
神罰の炎 - 1 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマー  
ク】と【評価】いただけると嬉しいです。



・シャンバラ滅亡の危機を桁違いのマジックアイテムで覆す  
神罰の炎 - 2 / 2

「ユリウス……お帰りっ！ 良かった……また会えて、良かった……。死んじゃうかと、心配した……」

闇の迷宮の内部に潜り込むと、奮戦にボロボロになったシエラハゾと、消耗したメープルが揃って胸に飛び付いて来た。

それは当たり前前の感触なのに、感激するほど温かく、2人が生きている現実が何よりも嬉しかった。

運命が俺たちに味方しなければ、二度とこの甘い匂いを嗅げなかった。

無事な姿よりも匂いが心を安心させた。

「死ぬわけないだろ」

「ちよつとっ、あなた背中斬られてるじゃないっ!？」

「あ……ザックリいつてる……。やっぱりまた、ムチャしたんだ……ドン引き……」

「なんであなたは突撃、突撃、突撃ばかりするのよ……。あたし、心配だったんだから……」

「よくない……。ユリウスの、そういうとこ、極めて、わるし……反省する……」

2人はいつまで経っても俺の胸から離れなかった。

よっぼどこの突然の事態を不安に思っていたのだろう。

無事で良かった、無事で良かったと、俺たちは幸福なこの現実

幸せを噛み締めた。

「ジョン……（・―・）」  
「なんだ？」

「結婚式、やり直し、マスク？（・―・）」  
「そう言ったって式場が潰れちゃったしな……。今度仕切り直すから、また神官さんやってくれ」

「ア……。ハイ、喜ンデ（＝へ＝）」  
「ソウ言ッテクレルト、ニア、タチハ、信ジテマシタ。嬉シ、嬉シ……（＝―＝）」

都市長のやさしい眼差しが俺たちを見ている。

彼も深いため息を吐いて、生きてまた会えたことに安堵していた。

この世界ではちょっとした運命の成り行きで、親しい人間が簡単に死んでしまう。

後悔がないように生きたいと、2人の美姫を強く抱き締めると、同じように硬い抱擁が返って来た。

メーブルとシエラハズはその後、疲れと安堵にうとうとと眠りかけて、町からの救援がやってくるまでしがみついて離れなかった。

こうして命の危機を迎えてわかったことがある。

俺はこの2人に、これまで誰にも向けたことがないくらいに強烈な愛情を抱いている。

幸せにしたい。この情熱の行き着く先が婚姻だと言うならば、俺はメーブルとシエラハズと結婚して、2人がもつと幸せになれるよ

うに帰くして生きたい。

俺はメーブルとシエラハヅを愛している。そう自らに認めさせた。

私たちのユリウスはシャンバラの歴史にその名を刻んだ。

ユリウスの天才的な転移術が各地に窮地を知らせ、それが救援部隊の到着を大幅に早めて、バザー・オアシスの防衛を可能にした。

彼のポーションとエリクサーが前線の兵を不死身に変えた。

軍と義勇兵と冒険者による連合軍は、10倍の敵兵力を平野で受け止めた。

救援が到着して兵力が膨れ上がるまで、戦士たちは肉を引き裂かれようと、腕を落とされようと、勇敢に戦った。

彼らは、エルフが死を恐れる弱い種族ではないと証明した。

非力で小柄なネコヒトが戦場で活躍出来ることも、シャンバラの民が強いと証明した。

でも、後世の歴史家はこの戦いを、大げさに話を盛ったと評価すると思う……。

それはきつと避けられない。

だって、ユリウスが最後に切ったカードは、まるで神話の神々が放ったとされるメギドフレームを再現するような、あり得ない力だったのだから……。

前線で戦っていた兵士たちは、口々にこう言った。

まるで世界を焼き払う終焉の炎のようだった。

自分たちまで巻き込まれそうで怖かった。  
神の奇跡だと思った。神々が悪しき軍勢に天罰を下してくれたと思っただと。

3つのメギドジエムは、合流するはずの敵増援をも巻き込み、最前線だけを残して全てを焼き払った。

砂漠は神の炎を受けて終末の世界のように赤熱し、やがて冷めて、  
一帯をガラスの大地に変えた。

こうして私たちは53名の尊き戦死者を出したものの、圧倒的な  
快勝でシャンバラの民を守り抜いた。

回復薬の切れた前線に、爆発式のエリクサーによるオーロラのように輝く霧と暴風が現れて、多くの命を救った点も、モチのロンで外せない……。

凄過ぎる……。嫁として鼻が高い……。

天より降臨した神にも等しい活躍に、シャンバラの人々はユリウスをあがめた。

その後は残党探しの追撃戦が始まり、闇の迷宮で抗戦していた私  
たちを救援部隊が助けてくれた。

歳の離れた兄さんが泣きそうな顔をして、なんからしくなくて  
笑えた……。

都市長の胸に飛び込んで、父さんと何度も呼んで涙を流す姿を見  
たら、同じ父親に拾われた養子なんだって実感も湧いた……。

それからしばらくは、軍と冒険者たちがシャンバラ中の砂漠を回  
って、残党探しと原因探しに努めたけど 結局、地上にモンスター

ーがあふれた原因はつかめなかった。

きっと迷宮がシャンバラに現れたことと、今回の未曾有の危機は繋がっている。

ユリウスと都市長はそう推測している。

私もそう思う。迷宮から富だけ吸い上げることなんて、きっと出来ない。

都市長が議会に軍の増強を提案すると、反対ゼロで法案が可決した。

私は、私たちのシャンバラが変わってゆくを感じた。

でも怖くない。ユリウスと姉さんが隣にいるから、きっと大丈夫。

ユリウスと姉さんがもっと笑顔になれるように、エロい方向も含めてがんばろうと決めた。

エロは正義……。エロは不可避……。そこは絶対に譲れない……。

そして、あれから約10日後

・祝福の日 1 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】【いただける嬉しいです。

「汝、ユリウス・カサエル。アナタハ、コノ、メーブルト、シエラハゾヲ、生涯愛スルコトヲ、誓イマスカ？（・|・）」

「前回ノヨウナ、曖昧ナ答エハ、締マリガ悪イデス。ゴ遠慮下サイ（・へ・）」

あのね、私たち……もう1回結婚式をすることにした。

あの後、ユリウスが私たちにプロポーズしてくれたの……。嬉しかった……。

私たちが育った市長邸の、砂混じりの庭園で、私と姉さんがもう1度ドレスをまとうと、ユリウスが熱い眼差しを向けて来ていた。

ユリウスはむっとりスケベ。カッコ付けマンだけど目がエロい。

私には、ハッキリとわかる……。この人はとんでもないドスケベだ……。

「誓う。俺はメーブルを愛している。シエラハを愛している。本当の家族になりたい」

「は、ハッキリ言い過ぎよ……。っ。も、もっっ……。っ。っ。照れる……」

ユリウスがまた変わった。

ツウィク王国ではユリウスは虚栄心の塊だった。

でもシャンバラに来て、私たちと一緒に暮らしてゆくうちに変わった。



自分の出世と再起のことばかり考えていた男が、私たちのやさしい家族に変わった。

それからあの魔物の大襲撃事件が起きて、彼は気持ちを偽らなくなつた。

ちよつと、まだ私も戸惑っている……。

「汝、メープル。アナタハ（・―・）」  
「誓つ」

「ウウ……最後マデ、言ワセテ……（T―T）」

「愛してる……。結婚したい……。姉さんと一緒に、くんずほぐれつして、それから……。グフフ」

「ちよつとメープルツ、人前で変なこと言わないでよっ!？」

この前のはひっそりとした結婚式。

今回のはみんなが集まる賑やかな結婚式。私が冗談を言うと、みんなが笑つたり、青い顔をした。

「ブミヤアアーツツ、羨ましいミヤツ、羨ましいミヤツ! 3番目のお嫁はアタイにしてミヤツ、ユリウス様ーツツ!」

「おやおや、ユリウスさんはネコヒト族もいける口ですか」

「おつかしいなあ……。んな変態に育てたつもりはねーんだが……」

私、ユリウスのお師匠好き。

名前長いから忘れたけど、スラム育ちの私には荒っぽい方がなじむ。

あと、ユリウスはきつと、ネコヒトも性的に愛せる懐の広い男だと思つ……。。

「おい、なんか言えよ、バカ弟子！」

「師匠にバカと言われても全然悔しくないですね」

「んだとおっ!? お師匠たまに泣きついてばかりだった頃のこと、バラしてやつてもいいんだぞ、おらあっ！」

「人の結婚式で、おらあっ、とか言わないで下さいよ……………」

「ユリウスユリウス、あのね……………おらー……………」

「お前は話をひっかけ回すんじゃない……………」

「あてっ……………。えへへ……………」

私がユリウスに額を小突かれると、姉さんと都市長が、会場のみんながやさしそうに笑った。

なんか、幸せ。こういう結婚式を待っていた……………。

「アノ……………イイデスカ……………?(T|T)」

「ごめんなさいね、ニアちゃん。続けましょ」

「ハイ……………!(^|^)」

「汝、シエラハ・ゾーナカーナ・テネス。貴女ハ、夫ジョンヲ、永遠ニ愛スルト、誓イマスカ?(・|・)」

「ええ、誓うわ。世界で2番目に、あたしはユリウスを愛してるわ」

「アノ……………ソコハ、1番デナイト、締マリガ……………(T^T)」

「だって、家族として1番愛してるのはメーブルだもの。ユリウスは2番目よ」

「姉さん……………私、嬉しい……………」

姉さんとヒシッて抱き合つと、会場がどよめいた。

百合疑惑キタコレ。面白いからそついうことにしておつと思つた。

「ダハハハハハッ、さすがうちのバカ弟子と結婚するだけあるぜ！  
良かったなあ、バカ弟子！」

「新郎を煽るな、バカ師匠」

「2人トモ、仲良ク、シテ下サイ……（T―T）」

「デハ、指輪ノ、交換ヲ……（・へ・；）」

あのとりのように、白くて変なゴーレムから指輪を受け取った。  
姉さんがユリウスの指に黒曜石の指輪をはめて、ユリウスが私に  
コランダムの指輪をはめて、私が姉さんの指にトパーズの指輪をは  
めた。

最も重い契約の象徴とユリウスは言うけど、そついう感じはしな  
い。

これは私たちが家族になった証……。ずっと一緒にいるって誓つ  
た証拠だ……。

「デハ、最後ニ、誓イノ、キスヲ……（＝へ＝）」

「ムチユーツト、ヤツテ下サイ（＝＝）」

「ウホツ、ヘタレんじゃねーぞ、バカ弟子！」

「結婚式というのは本当にいいものですねえ……。ユリウスさん、  
どうぞ私たちに見せつけて下さい」

都市長も師匠も意地が悪い……。

ユリウスと姉さんが煽られて真っ赤になった。

「ちよいちよい、ユリウス……。むちゅー……」

「んっんぶうっつ?!」

あ、舌入れたら逃げられた……。

初めてのベロチューは、サディスティックな欲望が燃え上がる味  
だった……。

・祝福の日 2 / 2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】【いただけると嬉しいです】。

明日の更新は1回、明後日の更新で第一部完結となります。

・そしてついに、結婚初夜

「し、しししつ、舌入れんなよつ、人前だぞこらっ?!」

「あ、人前じゃなかったら、おっけー……?」

「よくねーよつ、よくねーよつ! お前今、大人の階段3段くらいすっ飛ばしたからなっ!?!」

「へへへ……その反応が、嬉しい……。ユリウスは、乙女心がある……」

「公開処刑かよっ!」

お師匠さんがお腹を抱えて転げ回っている。

やったね、ユリウス。師匠はユリウスのこと愛してるよ。

「ごめん、私、育ち悪いから……。あ、次は姉さんの番ね……」  
「は、はいつ……!」

姉さんが上擦った声でガチガチに固まった。

そんな姉さんの頬に私はチューして、それから腰を押ししてユリウスの正面に運んだ。

「ユリウス、してあげて……。ベロチュー?」

「ひっ!? む、むむ、無理よっ!?!」

姉さんが逃げようとするから、私は腰をユリウスの方に押し戻す。

この2人はくっついたたり離れたたり、見ててまどろっこしい。もっと押し込んだ……。

「シエラハ、こっち向け」

「で、でも……人前で、人前でするなんて私……。んっっ……!?!?」

残念、ユリウスは舌を入れなかった……。

ただ情熱的に姉さんの背中を抱いて、のけぞって逃げる姉さんの唇を荒々しく奪った。これはこれで、エロい……。

「フミヤアア……ウミヤアア……ッ」

「よしよし、気持ちはわかる……。んちゅー……」

「ブミヤアアツツ?!?! ななななっ、何するミヤアアツツ?!」

「えと……おすそ分け……?」

「ありがとうミヤ じゃなくて、なんてことするミヤアアツツ!」

なんてカオスな結婚式……。

安心して、8割私のせいだっって自覚はある……。

「しっかし、いきなり重婚選ぶとかさすがだねえ……カカカツ!」

「どちらか片方だけなんて、そんなの選択肢に最初からなかっただけですよ」

「お、おう……言うじゃねーか……。そこまで開き直れるなら大したもんだ……」

「ユリウスさんたちには、これが最も自然な形なのでしょう。ユリウスくん、メープル、シエラハ、ご結婚おめでとございます」

それはそうと、私は用意しておいた小道具を取り出した。

ユリウスにそれを見せると、口があんぐり開けっ放しになった……

…。

「買ったちゃった……今夜のために……」

「<sup>ウィップ</sup>鞭つつ！？ お前は俺に何をするつもりなんだよっ！？」

「だって、初夜が来ますよ、旦那様……？」

「しょ、初夜……っ。や、止めてよっ、せっかく考えないでいたのに……っ」

「だからさ、なんでそこに鞭が出てくるかと聞いているんだが……？」

「ユリウスに、使うため……？」

「使うなっ！」

「え、なんで……？ 初夜といえば、緊縛プレイ……エルフの常識……」

「んなの聞いたこともねーよっ！」

「もうメープルッ、勝手に変な風習作らないでよっ！」

小道具の効果は抜群だ……。

はぁ……本気だったのに、残念……。まことに残念……。

縛りたい、吊したい、ユリウスの悲痛なうめき声が聞きたい……。それだけで長パン一本はいける……。

「私はメーブルを応援しますよ。新しい孫の顔を1日でも早く見たいので」

「気に入ったぜ、やっぱお前最高だぜ！ 俺の分もバカ弟子をからかってやってくれ！」

「おっけー……ユリウス、夜は気を付けて……」



鞭を引っ張って見せると、ユリウスがちょっと青ざめた。  
ユリウスはやさしい。やさしいからしばきたい……。

「もうっ、いい加減にしなさいっ！」

「あて……。へへへ……。姉さんに、ゲンコツ食らったの久しぶり……」

「あ、ごめんなさい、つい……。痛かった……？」

「平気……。姉さん……。一緒にしばかない……？」

「誘うな……っ」

ユリウスの手をかわして、私は彼のたくましい胸にしがみついた。  
こっすると安心する……。

姉さんに手招きして誘うと、姉さんはユリウスと手と手をつないだ。

子供同士のカップルだって、もうちょっと積極的だと思っ……。

結婚おめでとう。祝福の言葉が式場に木霊した。

みんながニコニコしていて、幸せいっぱいなひとときが過ぎていった。

美味しいご飯を食べて、ふざけて笑いあって、無事でいる今を喜んだ。

誰もが帰宅を惜しむくらい、とてもいい結婚式だった。

そして ついに初夜が来た……。

・

「姉さん、姉さん……ユリウスは……？」

「逃げられたわ……」

「え……」

「あたしね、冗談であなたの鞭をユリウスの前で振ってみたの……。そしたら……」

見ると窓際のカーテンがスツパリと斬れていた……。

姉さんが真空波を会得した瞬間だった……。

「これ、死ぬね……」

「そ、そんなつもりはなかったのよっ！ あたしは普通に……普通に甘い夜を……な、なんでもないわ……っ」

私なら逃げる。私だって命は惜しい……。

姉さん、恐るべし……。

「私が慰めてあげる……。一緒に寝よ、姉さん……。だって今日からは私たち、本当の家族だよ……？」

「ふふ……そうね、そうしましょうか。夫婦らしいことは、ゆっくりやってけばいいわよね」

「それは、賛同しかねる……。けど今夜は、姉さんとずっと一緒にいられる幸せ、噛み締める……」

初夜は姉さんのぬくもりに包まれて終わった。

ユリウスが夜の町のどこかで、姉さんの鞭さばきに恐怖していると思うと面白くて、ぐっすり眠れた……。

こうして私たちは、いつまでもいつまでも、家族として笑顔絶  
やさずに幸せに暮らしていきました。  
めでたし、めでたし……。

・アフターエピソード 〳 あるオアシスの棧橋にて 〳 1 /  
2 (前書き)

このエピソードは、15万字完結版の結末にあたります。  
追加執筆が決まったので、あくまで15万字完結版の外伝として楽し  
んでいただければと思います。

2 ・アフターエピソード 〳 あるオアシスの棧橋にて 〳 1 /

ここではどんなに注文が多くとも、1日の業務が午前のうちに終わる。

必要分のエリクサーとポーションを作り上げると、メープルのやつが釣り竿を3本も手に入れて来た。

もし釣れたら昼食に魚を加えようと決まって、3人で釣りをすることになった。

そうして俺たちは今、市長邸側のオアシスに移動して、そこにある棧橋から湖水に釣り竿を垂らしていた。

「平和ね……。あの戦いが嘘みたい……」

「そうだね、姉さん……。結婚したのも嘘みたい……。ユリウスが、淡泊過ぎて、ガツカリ……」

「淡泊で結構だ。ん、んん……。ふああ……。こうしていると、昼間から眠くなってくるな……」

あの恐ろしい鞭さばきに一抹の不安を覚えて、結婚初夜から逃げ出した俺だが、今はなあなあの関係でゆったりとやっている。

いや、アレはダメだ。シエラ八には鞭を絶対に持たせてはいけないと、心に決めた夜だった。

俺だって初夜を期待していたが、あんなもの食らったらエリクサーを使う間もなく死んでしまう……。真剣に命の危険を感じた……。

「ねね、ユリウス……」

「なんだ。変な話なら無視するぞ」

「うーうん。あのね……ユリウスは、私たちと結婚したこと、後悔とか、してない……？」

「してないな。むしろ満喫している」

「そ、そう……。あたしだってそうよ……っ」

「私も。初夜、逃げられたから、一応確認したかった……」

「それは……。だって、あんなの食らったら死ぬだろ……」

「こ、殺さないわよっ！？ あれは……。うっかり、真空波が出ちゃっただけよ……っ」

恐ろしい人を嫁さんにしてしまったものだ。

ちよっと傷ついているみたいなので、俺はシエラハの肩を後ろから軽く叩いて慰めた。

死にたくなかったんだ。すまん。

「って、何さり気なくくっついてるんだよ、お前……」

「だって、夫婦だし……」

「昼前だぞ、暑い」

「姉さんもほら、サービスサービス……？」

「そ、そういうのはっ、あ、あたしたちにはまだ早いわよ……っ」

「結婚したのに、早いも遅いもないよ……？ これだと、子供出来

るの……ユリウスがシワシワになってからに、なると思う……」

「そ、そうだけど……」

「姉を煽るな。……シエラハ？」

俺を中心に、棧橋に腰掛ける姉妹はピタリとくっついて来た。

これまでが駆け足だったので、これからはゆっくりとやって行きたいのに、心臓が堪え性もなく暴れ始めた。

「これじゃなんのために結婚したかわからない……」

「なんのためって、家族になるためだろ……？」

「それだけ……？ 姉さんも、ユリウスも、本当はドロドロの下心隠してるだけ……。夫婦なら、ドロドロの欲望を、さらけ出すべき……」

「そ、そうなのかしら……？」

「流されるな。メープル、お前はお前で欲望に正直過ぎる。ゆっくりやるう」

そう説得すると、メープルは不満そうに首筋をつねって来た。

本当は俺がヘタレしているだけ。そういった面もあるのかもしれない。

「ユリウスツ、引いてる引いてる！」

「う、うおっ！？」

危つく湖水に引きずり込まれる寸前で、シエラハとメープルが身体を抱き支えてくれた。

緩急を付けて釣り竿を引き、魚が疲れるまで粘ると、俺は大物を釣り上げた。

黄金に輝くサマーヌだった。体長50cm前後はあろう大魚だ。

「やったやった……！ これ、美味しいやつだよ……っ、ネコヒト族に見せたら、ユリウス英雄になれるかも！」

「ふふっ、もうユリウスはシャンバラの英雄じゃない」

暴れるサモーンを抱き込んで、電撃魔法で絞めてから釣りかごに突っ込んだ。

案の定、デカ過ぎてほとんど入らない。

「ユリウスさん」

「ユリウス様っ、アタイが来たミヤッ、今日もお元気ですかミヤッ！？ そ、それは……っ！？」

どうしたものかと金のサモーンを見下ろしていると、都市長とあの白いネコヒトが現れた。

「どうしたんだ？ ああそれか、今さっき釣ったんだ」

「す、凄いミヤ……。ゴルドサモーンミヤ……ッ！」

「休んでいるところすみませんが、追加のオーダーをしてもよろしいでしょうか？」

「いいぞ。それで？」

「コンクルの追加生産をお願いします。どうやら足りないようで」

発掘した迷路を保護するために、建材にコンクルを利用することになった。

これまでは石切場から石材を切り出して運んでいたが、今は砂漠そのものが石材だ。

それが足りなくなるのは想定内だった。

「それはいいが、大地の結晶がもうないぞ」

「はっ！？ それなら大丈夫ミヤ、アタイらが手に入れて来たミヤ！」



「じゃあ作るう。メイプル、シエラハ、手伝ってくれるな？」

棧橋の方に振り返ると、2人は俺の背後にもう立っていた。

2人は静かにうなづいてくれた。

「それと、大地の結晶に加えて、トレント素材を工房に運ばせています。例の物もお願いします」

「アレか」

「はい。素材の許す限り、作れるだけ作っていただきたいのです」  
「わかった。やろう」

都市長は付近の砂漠に公園を作りたいそうだ。

そこに東屋を建てて、シャンバラが美しい草原であったことを子供たちに教えたい。以前そう言っていた。

そんなわけで工房へと引き返すと、既に素材が錬金釜の隣に納入されていた。

準備のいいことで、俺はホウキを手にとって、姉妹のサポートを受けながら調査を始めた。

慣れた作業なので、特にこれといった苦労はない。淡々としたものだった。

2 ・アフターエピソード ～ あるオアシスの棧橋にて ～ 2 /

「ところで、初夜はどうでしたかな？」

「ブツッ……?!」

釜の中につばを吹き出してしまった。

「ナイスサポート……都市長」

「私は早く孫の顔を見たいのです。すみませんが、急げますか？」

「ご、ごめんなさい……。それは……」

それは不幸にも真空波の会得イベントにより中止になった。

とは都市長に言えない。彼は本気で期待しているようだった。

「ゆっくりやると決めたんだ。ゆっくりやらせてくれ」

「それは困ります」

「そう、超困る……。欲望を、満たせると、思ったのに……」

「出会ってまだ2ヶ月も経っていないぞ……」

「そ、そうよっ、まだ、早いわ……」

「この前は、1ヶ月も経ってないって、言い訳してた……」

俺とシエラハは奥手だ。行為に及ぶのは、やはり無理がある……。

1 歩ずつ大人の階段を上らなければ、転落死してしまう。あるいは神速の鞭で真っ二つだ。

「お願いしますよ、死ぬ前に孫の顔を見たいのですよ……」

「クソ長寿のエルフに言われてもピンと来ないぞ。……まさか、病

気なのか？」

「いいえ、健康過ぎて困るくらいです」

「それは良かった。長生きしてくれ」

「姉さん……都市長も、こう言ってるし……。お義父さんを喜ばせよ……？」

「……そ、そうね……。それで、都市長が喜ぶなら……」

「流されるなつてのっ!？」

これはあれだ。求められれば求められるほどに、逃げ出したくなる現象だ。

コンクルをパツも完成させて、搬送作業を発生させて話をこまかした。

「貴方の奥ゆかしさときたら、下手をすればうちのシェラハゾ以上ですね」

「それがわかっているなら、けしかけないでくれ……」

「わかっているからこそですよ」

「はぁ……。注文の多いパトロン様だ……」

搬送作業が落ち着くと、俺は大地を蘇らせるための調合に入った。シャンバラが緑を取り戻すには、果てしない時間と資源が必要になるだろう。

それでも彼は、エルフが散り散りになる前の輝いていた世界を取り戻したかった。

先は長い。それでも彼と2人の嫁たちに付き合ってやろう。

俺だつて見たいからだ。

砂漠とオアシスの国も美しいが、草原に囲まれた世界はもっと美しいに違いない。

そこに俺たちの末裔たちが暮らしてくれたら、これほど嬉しいものはない。

子供。子供か……。口車に乗ってみるのも、悪くないのかもしれない。

肝心の勇気が、俺とシエラハには足りていないが、いつの日か、美しい草原を子供たちが走り回る姿を見たい。

いつか俺が死んでも、子が残るならば、代わりにシャンバラの成り行きを見守ってくれる。

勇気を出そうと、心に決めた。

シエラハは美しい。あまりに美しい。だから汚す勇気が出ない……。それでも……。

「な、何よ、そんなに見つめちゃって……」

「今夜一緒に寝ないか……？　一緒に寝るところから始めたい。それくらいなら俺たちにも出来そうだよ……？」

「え……っ、あ……っ。は、はい……あたし、よ、喜んで……」

調査はこんなに簡単なのに、家族計画はこんなにも難しい。

都市長の切なる願いが叶う日は、まだまだ遠いようだった……。

あ、てすてす……。おけ……。

その数年後、砂漠の国シャンバラは、砂漠に囲まれる草原の国シヤンバラに姿を変えた。

耕作地の拡大により、もう1つの部族リーフシーカーの民が流入し、シヤンバラはその後、再び1000年の繁栄を迎えたという。

女王シエラハ・ゾーナカーナ・テネスと、大魔導師メープル・カサエルの手によって。

その隣には、ヒューマンでありながら永遠に老いることのない、奇妙な錬金術師がいたと伝えられている。

子供もいっぱい。孫もいっぱい。いっぱい増やして、ユリウスは後のエルフの始祖になった。

めでたし、めでたし……。

とんだ、ドスケベだったよ……と、私は後の人々に語り継いで行くころ。

「人を性欲魔獣みたいに脚色すんなよっ!？」

「可哀想だから止めてあげてなさいって言ってるでしょ、もう……」

ユリウスは、死んじゃった……。

でもユリウスは天才……。

オートマタ  
機械人形を作って、最期は魂を移植した。

だから私たちはずっと一緒……。

ユリウスの魂がオートマタから消える日まで、いつになるかわか

らないけど、終わりの日が来るまで、ずっと

シャンバラの英雄は、とんだドスケベだったよ……。  
でもやさしくて、恥ずかしがりで、かわいい人だった……。

私と姉さんはユリウスのことを忘れない。

続く

・アフターエピソード ～ あるオアシスの棧橋にて ～ 2 /  
2 (後書き)

これにて第一部完結です。

今日まで沢山のご愛顧、応援ありがとうございました。感想返しが出来なくてごめんなさい。

誤字報告にも感謝しております。

よろしければぜひこの機会に、評価とブックマークによるご支援をいただける、2作品目の書籍化の希望が広がります。

現在、第二部の制作に勤しんでいます。

本作は元々は森が舞台で、白いエルフたちに囲まれてキャツキャウフフの想定でした。

ただそれだと味付けが平凡かなと思ひまして、今まで描いたことのない砂漠舞台のお話にすることにしました。

砂漠の方が土地改善の広がりがあったり、水が不足していたり、ガラスや塩などの特定の資源があったりと、不毛の地だからこそ話が広げやすいのではないかと。

続編の第二部では、森で暮らす白い肌のエルフを新しいヒロインに加えて、より明るくキャツキャウフフとしたテイストに仕上げしていきます。

どんでん返しも用意して、きつと驚くような展開が待っていますので、どうかこれからも本作を読みに来て下さい。

第二部は、3日間のお休みをいたたいで、21日日曜日に公開予定です。

また明日から新作「隠居聖女の三食もふもふ付きブックカフェ生活  
〜森で出会った狼は呪いをかけられた王子様でした〜」を公開し  
ます。

公開しましたらこちらにリンクを張りますので、どうか読みに来て  
下さい。

女主人公になりますが、男性が感情移入しやすいヒーロー役を用意  
してあります。

ざまぁを楽しむと同時に、穏やかでやさしい生活に心癒されるはず  
です。ご支援下さい。

それでは、第一部完結まで読んで下さりありがとうございます。



## ・第二部プロローグ 白百合のグライオフェン

人はボクのことを白百合のグライオフェンと呼ぶ。

なんだかボクには似合わないような気がして止まないけれど、だ  
けどこれは大好きな女王陛下から賜った大切な呼び名だ。

ボクは分かたれた12部族のうち1つ、リーフシーカー森エルフの王国リーンハ  
イムで長弓隊の隊長をしていた。

王宮暮らしの将校として、ある時は天高くそびえる城から黒ずん  
だ木造の城下町を見下ろした。彼方に広がる穀倉地帯を眺め、その  
さらに向こう側に広がる針葉樹林を見やった。

またある時は剣盾と短弓で揃えた精鋭を連れて、女王陛下の名の  
下に生態系を破壊するモンスターを狩って回った。

このリーンハイムは国土の半分を深い森に包まれている上に、な  
だらかな丘に囲まれてデコボコと見通しが見通しが最悪だ。

そのため戦える者が定期的に各地を巡回して、怪物の痕跡を見つ  
け出し、追跡して危険を排除する。

華やかな王宮暮らしの軍人のようで、実は狩人のように泥臭いこ  
の生活をボクはもう50年も続けていた。

この先の50年後も、さらに100年後も、ボクは大好きな女王  
陛下と共に1年の半分を王宮で暮らし、残りを戦いに身を置いて生  
きたらう。

だけど永遠なんてものはどこにも存在しない。

ボクはリンハイムと大好きな女王陛下を捨てて、彼と共に生きるようになった。

その経緯は一言ではとても説明しがたい。仮に言っても信じてもらえないと思う。

女神が手繰る運命の糸が絡み合い、誤って彼とボクの運命が繋がってしまったとしか言い難い出来事だった。

白百合のグライオフェンは、砂漠の国の大錬金術師ユリウス・カサエルと出会い、今でもちよつと認めがたいけれど、彼に強く惹かれていった。

彼は人間のくせに聡明で、生き急ぐ傭兵のように命知らずで、どんなにボクが邪険な態度で接しても、機嫌を損ねることなく大らかに笑い返してくれた。

全てを失ったボクにとってそのやさしい笑顔は救いだっただ。

彼に奥さんがいなかったらどんなに良かったか……。今ではそう思わずにはいられない。

あの日、ボクは全てを失った。

リンハイム城城壁にて

「これは、ちとまずいのう……」

「陛下、士気に関わる発言はご自重下さい……」

国中から黒煙が立ち上っていた。

耳を覆いたくなるような、人々の悲痛な叫び声が聞こえては消えて、そのたびにボクを恐怖と怒りに震わせていた。

「うむ、愛しの家臣に叱られてしもうたわ。しかし、これはいかんともし難いのう……。奇策の一つも打たなければとてもひっくり返せんな」

「く……せめて辺境を巡回している軍だけでも戻せれば……」

気づいた頃にはもう全てが遅かった。

どこからともなくモンスターの大軍が現れて、リーンハイムの国土を蹂躪した。

敵は国境に現れるのが常識なのに、それが王都近郊にいきなり現れるなんて……。

こんなどんな軍事国家だっって対応できない。

ボクたちはまともな前線すら構築出来ないまま、民を城に避難させて籠城することになった。

城下から聞こえる悲鳴の数々は、言うなればボクたちの失態であり呪詛と同義だ……。

「わらわのグライオフエンよ、策を思い付くまでそのまま撃ちまくれ。敵に城壁を登らせるな」

「仰せのままに！」

いつか人間たちは結界を通り抜けて、ボクたちエルフに襲いかかると危惧していた。

だけどそれがオークやゴブリンの軍勢だなんて、こんな戦いは想

定していない。

兵たちは連戦に次ぐ連戦に疲労困憊で、それでも城壁に近づかせまいと矢を放ち、侵入者を命がけで排除した。

身軽なゴブリンはハシゴも無しに城壁を登ってくるので、防衛線の絞りようがなく厄介だった。

「うむ、わらわの計算によると、じきにリーフシーカーは滅びるな」「それをひっくり返すのボクたちの仕事でしょう！　ちゃんと考えて下さい、陛下！」

愛用の長弓は敵の刃を受けて折れた。

今は仲間の死体から剥いだ短弓で、女王陛下と共に城壁に張り付く怪物たちを射ている。

陛下は戦略を練りながら、特別な魔法の力で石や木を弓矢に変えていってくれた。

おかげで球切れはない。しかし敵の増援も無尽蔵だ。

「うむ……ダメだな、何百パターン考えても既にこれは詰んでおる。民のために、少しでもここで戦い抜いて時間を稼ぐくらいしか……何も思い付かぬのう……。む、時間稼ぎ……時間稼ぎか……」

敵もきつとこの思わぬ抵抗に驚いているはずだ。

根気強く戦えば、士気を失って撤退してくれるかもしれない。

ところが黒い影が空に現れて、それが城壁のボクたちを強襲した。

「陛下、何か来ます！」

「おお、なんじゃあれは……」

それは奇妙な個体だった。  
青い肌に長い爪を持っていて、自らの翼で飛行している。

全身に毛髪がなく、代わりにあちこちに血管が太く浮き上がった醜い怪物だ。

「まるで伝説の悪魔みたいだ……」

「ククク…… 出会い頭に悪魔とは口を知らない家畜どもだな」

ボクたちは驚いた。モンスターが喋るなんて今まで聞いたこともない。

本能的な危険を感じてボクは返事よりも先にヤツへと弓を放った。  
あっさり命中したけれど

「ん、今何かしたか？」

ヤツの手で弓が引き抜かれると、傷口がゆっくりとふさがってゆく。  
常識的ではあり得ない回復力だった。

常識的ではあり得ない回復力だった。

「いかんのう…… 知能を持った半不死身の飛行タイプか。 詰み要素が増えよったわ」

「我が名はアダマス、家畜の言葉言うところの異界からの侵略者だ。  
察しのいい指導者よ、さっさと降伏しろ。我が軍勢は無限だ、戦いに終わりはないぞ」

そう言ってアダマスと名乗る悪魔は、白い骨片のようなものを床にまいた。

たちまちにそれが幻のように透けるスケルトンに変わった。

「降伏の見返りはなんじゃ？」

「殺さずに家畜にしてやるぜ。半永久的に生きる奴隷というのはなかなか理想的だからな、ヒヤハハハ！」

「うむ……ならば、論外じゃ！！ 吹き飛ばせ下郎が！！」

「ツツ?! 全軍待避!!」

ここがボクたちの最後の砦だ。

女王陛下は隙だらけの怪物たちに、純粹魔力エネルギーの巨大ビーム魔法「マジックブラスト」を無詠唱でぶちかました。

「ふう……。これで、少しは、時間が稼げるかのう……」

アダマスと名乗った悪魔は言葉を発することも叶わず、スケルトンごと城外に吹き飛ばされていった。

指揮官の敗北に、モンスターたちが動揺を始めている。中には敗走を始める個体もいた。

「さすがは陛下です！ まさか交戦前に一撃で倒してしまうとは……」

「いや、あれは死んではおらぬ……。じきに回復して戻ってくるじゃろう……」

奇襲攻撃により、防衛隊の士気が高まっているというのに陛下は相変わらずだった。

彼女は片手間に術で矢玉を作りながら、その美しい容姿を歪めて策を考える。

ボクも短弓を再び構えて、敵軍に矢を放った。

一時的にはあるけれど戦況が好転している。絶望の中に小さな

希望が宿っていた。

「何か思い付かれましたか？」

「うむ。どう逆立ちしても数の差はどうにもならぬ。増援が必要だ」

「なら国境側の軍がこちらに戻って来るまで、それまで耐えしのげば……」

「それも計算の内じゃ。その上でも兵が足りぬ……うむ。ではこうしよう」

城壁から眼下に矢を撃ちながら、背中で陛下と言葉を交わす。すると背中の方から、感じたことのない魔力の高まりを感じた。

「え……な、なんなのですか、その妙な影は！？」

「うむ、これは世界の裏側への入り口じゃ。適性と知識のない者が入ると酷い目に遭ったりもする」

「はあ、それはいかにも危険そうですね……」

「ああ、危険極まりないよ。一部のヒューマンどもは器用に使いこなすようだが、わらわにもどうもあの連中はわからん。あちら側に渡ってもペナルティを受けない、特殊な身体の構造をしているようだ」

聞いたことがある。確か西のツイイクの魔法使いは、馬よりも早く空間を移動できる。城壁すら乗り越えて単身忍び込めると。

「入ったらヤバいので、もっぱらゴミ箱代わりにしておったのだが……事情が変わった。今回はゴミの代わりに、最も大切に人が渡しがたい、わらわの希望そのものを送り出すとしよう。……グライオフェン、迎撃を止めてちこっ寄れ」

「は、ご命令とあらば！」

振り返ると陛下は寂しそうにボクを見ていた。それから大切そうにボクを胸の中に包み込んで、堅く抱き締めてくれた。

「へ、陛下……あ、あの……ボク……」

「その瑠璃のように青い髪、澄んだ瞳、勇敢で勇ましいようで、脆さを秘めた魂……こればかりは失い難いのう……。わらわのグライオフェンよ、この50年、わらわの側にいてくれて感謝するぞ。そちに支えられたこれまでの一時は、長いわらわの生涯でも夢のような黄金期であった……」

「陛下……？ なぜ別れの言葉めいたことを……」

「グライオフェンよ、これはわらわからの最期の命令じゃ。未来のために、そちはシャンバラへと転移せよ」

「陛下、その役割はボクでもなくても出来ます。他の者を  
「嫌じゃ」

「いくら嫌と言われましても……」

「わらわはそちが無惨に殺される姿を見たくない。わらわが血をまき散らして倒れる姿も、そちにだけは見せたくない」

貴き唇が近づいて、陛下はボクに愛の証をくれた。

喜びに頭がぼやけて、ボクは彼女の胸の中で無防備になった。

「ボクには陛下を置いて逃げるなんて出来ません……」

「これは撤退ではないぞ。過去の実験が正しければ、このゲートは分かたれた12部族のうちの残り1つ　デザートウォーカーの国



シャンバラに通じておる。すまんが、援軍を一つ頼む」

「そんなの嫌だ!!! 最期の瞬間までボクは貴女と一緒にいたい! 最期くらい立場も捨てて、貴女と へ、陛下、止めて、ダメ、ボクは行きたくない!!!」

リーンハイム最高の魔法使いは、得体の知れない穴の中へとボクを少しずつ飲み込ませた。

剣を杖にして、ボクはそれに抵抗した。

「ああ、わらわもずっと一緒にいたかった。残念じゃ、白百合のグライオフェン」

「止めて陛下、仲間と貴女を見捨てるなんてボクには出来ないよ!」

「うむ、安心しろ、わらわたちは死ぬ気で生き残ってやるぞ。だからさっさと行けっ! 扉よっ、同胞の地へとわらわの白百合を導け! ついでに最期に言っておくぞ、そちなんかわらわは大嫌いじゃ!!! まだうら若いそちが城に現れてっ、一目見た時から大嫌いじやった!!! そちなんかどこにでも消えるがよい!!!」

悲鳴めいた陛下の言葉が胸を熱くさせて、死別にも等しい別れに胸がズキズキと痛んだ。

彼女に送り込まれた扉の向こう側は、足下にマス目があって色のない世界だった。

そんな世界で、目には見えない不思議な濁流がボクを押し流し、どこかもわからない世界の彼方へと運んでいった。

助けなければならぬ。

シャンバラの民を説得して、仲間と陛下を全滅の運命から救わなければならぬ。

薄れゆく意識の中、ボクは必ず仲間を守ると誓いを立てた。

けれども

運命の女神は残酷だった。

・第二部プロローグ 白百合のグライオフェン（後書き）

今後の方針について

投稿ストックが既にカツカツです。そのため1日1話更新に変更していきます。

もしストックが尽きたらどうか許して下さい。

（来月公開の新作も準備しなくてはいけないので……！）

それでは、第二部も明るく楽しく、運営に怒られない範囲でエロスになっていきますので、どうかこれからも応援して下さい。

おっさん成分増えますが、そこはおっさんどももかわいいものだと、許して下さい。

・なんでもない新婚生活の1ピース 1 / 2

結婚生活を始めるにあたって、ベッドを1つ買った。

2階の広い部屋を姉妹に譲って、俺は下のちょうどいい大きさの部屋に落ち着いた。

しかしそれはあくまで俺の都合であり、彼女たちの意思ではない。メープルは特にブーブー言っていた。

シエラハの方はああいう奥ゆかしい気質なので、俺の気持ちもわかってくれたみたいだ。

……やや不満げだったように見えるのは、エリートである俺の思い込みだろう。

まあそうだったわけで、結婚初夜に見せられた真空波に恐れをなした俺は、あれからも変わらない距離を保っていた。

ただし、繰り返すがそれは俺の都合でしかなかった。

「起きてユリウス、もうこんな時間よ？」

「案の定って感じ……。ツンツン……」

シエラハのやさしい声と、メープルの容赦のない人差し指による小腹の襲撃がその日の目覚めだった。

ぼやける視界で2人の姿を見て、やっぱり眠気を堪えられなくて

目を閉じた。

「夜遅くまで本なんて読んでるからよ」

「奥様がすねてるよ……？」

「べ、別にすねてないわよ……！？」

「せっかく大好きなユリウスに、朝ご飯作ってあげたのに……。そういう顔してる……」

どんな現実も眠気の前ではなすすべもない。

申し訳ない気持ちを抱きながらも、俺は睡魔に身を任せた。それに今日は工房の定休日だ。俺には二度寝の権利がある。

「だって、せっかく作ったんだからもつたいないじゃない……」

「おお……人妻サイコー……。熟れた身体を持て余す……」

「もう、何言ってるのよ……」

「それよかユリウスだけど……これ、完全に忘れてるよ……」

何か言っているが、脳が音を言葉として変換しなかった。

「グハツツ?!」

ところが言葉よりももっと直接的な、実力行使が俺の目を見開かせた。

メーブルが俺の腹に馬乗りになって、無表情で見下ろしていた。

「おっと、お尻が滑った……」

「ク、クソ……寝てる旦那になんてことすんだ、お前は……。つか飛んでないか、その尻……」

「今日はお出かけする約束。反故は許されない……」

「メーブル、さすがにそれはかわいそうよ」

「だって……。あ、また寝た……」

意思に反してまぶたが勝手に落ちていた。

お腹の上にメーブルの体温を感じて心地いい。

2人分のいい匂いがして、こんなものは安眠確実だった。

「ゆさゆさ……ぎしぎし……」

「よっぱど眠いのね……。しょうがないわ、お昼まで寝かせてあげましよ」

「ん……。そうだ、一緒に、ユリウスにイタズラしない……?」

「え……?」

「起きないのが悪い。イタズラしよ……? あのね、2人で一緒にね……」  
「コシヨコシヨ……」

ギシリとスプリング入りのベッドが鳴った。

しかしそれすらも、圧倒的な眠気の前には無力だ。

「ふうふう……」

「ヒッツ、ヒフッツ?!」

誰が予想するだろうか。

エルフの姉妹に、左右の耳へと湿った唇を寄せられて、くすぐるような吐息を吹き込まれるとは。

「おお……ビクンビクンしてる……。もしかして、凄く感じちゃった……？」

「お、起きない方が悪いのよ……。それに、あたしだって妻ですから……！」

飛び起きるように身を起こした俺は若干の不満を覚えた。

しかしそれ以上に気持ちよかった。余韻が背筋に残っていて、それがまた眠気に置き換わっていった。

こうなったら意地でも寝てやる。

「ユリウス、起きて？ 起きないと、もっとしちゃうよ……？」

「ダメよ、これ以上はかわいそうよ。下でご飯食べましょ」

「けど……姉さんが楽しみにしてたのに……」

「私もだけどメープルもでしょ」

「うん……」

よかった。寝かせてもらえそう

「ンヒイイツツ?! な、なな、何すんだよっ!？」

首筋にメープルの指が走った。

ただそれだけなのに、絶妙な力加減にまた俺は飛び起きることになった。

「起きて……？」

「どこで覚えたんだよ、そういう技……」

「いっぱい練習した……姉さんで……」

「お前、実験台にされる側の気持ちも考えるよ……」

シエラハは何も言わずに、顔だけ赤くしていた。

「どうやら姉はともかく、妹は絶対に俺を二度寝させないつもりだようだ。」

「シエラハ、ちょっとこっちに」

「何……?」

「いいからもっとこっちだ。こっちにこい」

「は、はい……わかりました……」

なんて素直なんだと、かいがいしさに惚れ直すところだった。

「メーブルもこっちに顔を」

「おっけー」

「キャッツ?! ちょっと、わ、私、そんな……あ、ああ……っ!」

姉妹が身を乗り出すと、俺は2人を抱き込んでベッドへと引きずり込んだ。

「メーブルは少しゴツゴツしていたが軽くて、シエラハはどこを触ってもやわらかい。」

「おやすみ……」

「え……こ、ここまでして寝るのっ!?!」

「強引にされると、ドキッとくるね、姉さん……」

「同意を求められても困るわよっ……」



両手のやわらかな感触が、左右からぴったりと寄り添うのを感じると、安心感と喜びに意識が途絶えた。  
今は眠い。ただただ眠い。

・なんでもない新婚生活の1ピース 1/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 【いただけると嬉しいです。

「あれ……」

ふと目を開けると、窓辺より差し込む日差しが白から薄黄色に変わっていた。

それとなぜか両手が痺れていた。

「おはよ、ユリウス……」

「え、メーブル……？ なんでお前ここにいるんだ……？」

「自分で引きずり込んだくせによく言う……。でも、こんな自堕落的な休日もたまにはいいかな……」

「記憶にないんだが……」

左手の痺れはメーブルの頭の下に敷かれていたせいだった。  
いや、だとすれば右手のこれはまさか

「は、はうはあ……っっ?!」

「姉さん無防備だね。今ならやりたい放題……。さあ、思いの丈を……」

シエラハの寝顔は安らかで、高貴で、メーブルが言うとおり無防備で、視線と意識の両方を吸い寄せた。

「お前、俺を焚き付けてないか？」

「別に……。ただおおいかぶさって、姉さんのいい匂いを感じて、寝顔にキスしたって、ユリウスは許される……。だって、もう夫婦

なんだから……」

「うっ……た、焚きつけんかって言ってるんだろ……するわけねーだろ、そんなことっ?！」

「ユリウスと、姉さんに足りないのは……獣欲。獣欲に身を任せるべき……」

これが人間の嫁さんだったら欲に流されて間違いを犯したのかも  
しない。

しかしメーブルもシエラハもあまりに綺麗すぎて、どうしても手  
を出す勇気が出ない。

「却下だ！ 腹減った、昼飯作ってくる……」

「こっとなったら、姉さん起こして外食希望……」

「それは それは悪くないな」

「では、目覚めのチツスを……」

「だったら言い出しっぺのお前がやれ」

「おっけー……」

メーブルは俺を踏み台にして、反対側のシエラハに顔を寄せた。

「おっけーじゃねーよ!? おい起きろ、起きないと妹に唇奪われ  
るぞ。あっ……」

どうにかしないといけないと、シエラハを揺すり起こそうとする  
と ムニユリと大きなものに手のひらが埋まっていた。

で……でかい……。

「え……？」

「大変……ユリウスが、姉さんのを……」

「ヒ、ヒウツ?! ど、どこさわってるのよ、もっ……っ! ユリウスの……ユリウスのエッチ……」

「手、手が滑ったんだ故意じゃない!」

「で、でも触ったのは事実じゃない!」

「ニヤニヤ……。よいですね、ベタベタの青春だね……」

顔が熱い。手のひらがふわふわしている。俺は今、完全に頭が色ボケの沼にはまりかかっている……!!

このままでは、マジで獣欲に身を任せてしまう日が来るぞ……。

「とにかく飯食いに行くぞ! このままじゃ休日を寝過ごしちゃう!」

「朝は寝かせてくれーとか言ってたくせに……」

「私、朝ご飯作ったのに……」

「もちろんそれも食う」

逃げるようにベッドから這い上がると、メープルが宣言もなしに背中へと飛び乗ってきた。

シエラハの方に振り返ると、最初は一緒に寝てしまったことに恥ずかしそうにしていたが、メープルを背負った俺の姿に笑っていた。

大事な妹なんだなと、俺もついつい笑い返していた。

俺たちは賑やかに言い合いをしながら階段を下って、少し遅くなった休日を始めた。

・母国ツワイクに迫る貿易の危機 純正ポーションと闇ポーション 1/2

ふと思い返せば、この砂漠の国に移り住んでかれこれ二ヶ月が経っていた。

あの仕切り直しの結婚式から数え直せば約半月のことで、俺たちは今も『新婚生活』の真っ直中にあつた。

その事実を俺たちは互いに意識せずにはいられない。

シエラハはあの通りの控えめな性格であるし、また意外なことにメーブルの方もなんだかんだ、過激な挑発をしてくるくせに、男女の一線だけは絶対に越えてこようとはしなかった。

俺たちは結婚したというのに、相変わらずの関係を続けながら、いつかこの関係に転機が訪れることを心の底で期待しているようだった。

最近の出来事といえば、つい三日前に初めての砂嵐に遭遇したとだ。

まるで楽園のように美しいシャンバラだったが、希に砂漠の神様が機嫌を損ねる日があるようで、俺はその二面性に震え上がることになった。

その日、暇つぶしにバザーオアシスに立ち寄ると、雲もないのに急に辺りが暗くなり始めて、やがて痛みをとまなう砂嵐が俺たちを

襲った。

あのとき、親切な店主が屋台の下にかくまってくれなかったら、俺の砂嵐に対するトラウマはより深刻なものとなっていただろう。

あそこの連中はみんないいやつだ。

常連の店主たちにすっかり顔を覚えられてしまったようで、誰も俺をユリウスと呼び捨てで呼んでくれる。

特に最近は景気がいいと口々に喜んでいて、付近にあるあのスラム街も当時の半分にまで縮小していた。

だが、ああいったものは決してなくならない。

雨が降った後に必ず同じ場所に水たまりが生まれるように、あそこはきつとそういう場所なのだ。

俺たちが救済できたのは、元から冒険者や商人の適正が合ったり、再び立ち上げられるだけの力を持っている者だけだった。

さて、話を本題に移そう。

その日、俺はシャムシエル都市長と昼食を共にしていた。

「そうそう、先日キャラバン隊が帰ってきました」

「それならもう知っている、ツイイクに行っていたやつだろ？ バザーオアシスの方がお祭り騒ぎだったよ」

「はい。実はそのキャラバンが面白い話を仕入れてきまして」

「何かあつちであつたのか？」

喉に詰まりかかったパンを冷たい水で押し流して、俺は食えない爺さんを注視した。

しかし真剣な話ではないようだ。よっぽど面白い話を聞いたのか、彼はおかしそうに笑っていた。

なので俺もだらしく頼杖を突いて、今では家族の爺さんの言葉を待つことにした。

「我々の作った闇ポーシヨンが、いかにツワイクの社会に浸透し、彼らの独占事業を崩壊させたか。興味はありませんかな？」

「わざわざ悪趣味な言い方をしなくてもいいだろう……。で、俺の作ったポーシヨンはあつちでどうなった？」

「フフフ……お話ししましょう」

歳を取れば丸くなるというのは、やはり偽りだな。

爺さんは饒舌に、シャンバラ産の闇ポーシヨンがもたらしたやつらの窮状を教えてくれた。

少し前、ツワイクでは

その昔、この男は俺にこう言った。『ユリウス、私は君を助けた』と。

しかし今となつては立場が逆だ。ヘンリー工場長は書齋で頭を抱



えたまま、かれこれ十数分間も微動だにしていなかった。

「いったい、何が起きている……。このポジションの出所はどこなのだ……。こんな物、あり得ない……。なぜこんな値段で売れる……」

その闇ポジションのせいで、ポジションの売り上げが先月比で3割にまで落ちていた。

当然ながら大赤字だ。ダブ付いた在庫を売るために、値引き販売を敢行することになっていった。

しかしそれでは、経営を立て直すという国王との約束は果たせない。

手詰まりのあまり、工場長は茫然自失と書斎にうずくまることしか出来なかった。

「もう、終わりだ……」

約束が果たされなければ、国王はヘンリー工場長から爵位と財産を取り上げると宣言している。

そこに闇ポジションが現れて、建て直しどころか即死級の追い打ちを仕掛けた。

もはや彼は、震えて沙汰を待つだけの豚も同然だった。

「し、しかしいくら陛下でも、家臣の地位と金を奪えば、ただでは済まないはずだ……。あ、あれは、あれはただの脅しなのだ……。実行するとは、か、限らない……」

ツイイクは絶対王制ではない。

他国と比べて王家の力が強いとはいえ、何もかもが王の自由になるわけではない。

諸侯がヘンリー男爵を庇う可能性はないこともなかった。

現在ツイイクでは、闇ポーションと呼ばれる出所不明の輸入品が出回っている。

もちろん工場長はこの危険な商売敵を潰すために、出所を掴もうとした。

しかし相手はうちのシャムシエル都市長だ。

シャンバラから来たエルフたちのキャラバンが出所とは、そうそう簡単に掴ませるわけがない。

事実、工場長も海外から流れてきているとしかわかっていなかった。

「工場長……。もしもし、工場長！ 聞こえてますか、工場長つ！」

「あ……。ああ、君か……。ノックくらいしたまえ……」

「それより大変です……。王宮から出頭命令があなたに」

「ひっ、ひいつっ……。！？ く、暗い話題はワンクッションはさみたまえと、先日言ったではないかっ！ は、はあっ、はああっ……。む、胸が……」

もはや落ち目にある男に、いつまでも人が同じ態度を取ってくれるはずもない。

震える工場長を、秘書は冷たい目で見下ろしていた。

「ですが急いだ方がいいですよ。すぐに王宮に上れとお達しでしたから」

「いよいよ、私も終わりか……。ああ、どこで何を間違えたのだ……」

「ユリウスさんに冷たく当たっていた頃からは」

「ぐっ……い、言われなくともわかっているっ！！ ユリウス……ユリウスだ、これは闇ポーションは、あいつの仕業に違い……なんて、なんて恩知らずな……う、うう……っ」

「地位ある者に媚びるだけではなく、才ある者にも媚びるべきではないね」

「黙れ！！ お前、私が首になると思っているだろうっ!？」

「行けばわかりますよ。急いで下さい」

信頼していた秘書に冷たくあしらわれて、工場長は震えながら王宮行きの馬車に乗った。

最悪は処刑。命と名誉の全てを失う。なんとしてもそれだけは避けたかった。

・母国ツワイクに迫る貿易の危機 純正ポジションと闇ポーション  
ン 1/2 (後書き)

もし少しでも気に入ってくださったら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】 いただけると嬉しいです。

・母国ツワイクに迫る貿易の危機 純正ポジションと闇ポーション  
ン 2/2 (前書き)

先日は申し訳ありません。

2/2を先に投稿してしまっていました。

差し替えましたので、1話戻って読み返していただければ、問題なく読み進められます。

投稿ミスの常習犯でした。

・母国ツワイクに迫る貿易の危機 純正ポーションと闇ポーション 2/2

ヘンリー工場長が謁見の間を訪れると、そこになぜか見慣れた顔があった。

それは小生意気な彼の甥で、なんに付けても自分に反発する一族の厄介者だった。

「……は？ 今、な、なんと……？」

「今日よりこの者に工場を任せる。そなたより剥奪された男爵位と私財の管理もまた彼に一任する」

「お待ち下さい！ それはあまりにもあんまりでございますっ！

あ、あの……あの闇ポーションさえなければ、建て直しは、出来たはずなのに……！」

「既に決まったことだ。以降、彼に従うように」

王の興味は既にヘンリー元男爵にはなかった。

それでも情けをかけてやった方だと、王は謁見の間から工場長をすぐに退室させた。

こうして元工場長の前に残ったのは、叔父に対して勝ち誇る甥だけだった。

「気分が優れないようですな、叔父上」

「なぜ、なぜお前なのだ……お前は直系ではなく、傍流ではないか……っ」

「その言い方はないでしょう、叔父上。叔父上のせいで我々一族は

窮地に陥ったのですよ？ 身ぐるみはがされて、皆で路頭に路頭に迷うより、まだマシな結末でしょうに」

「はっ……！？ まさか……き、貴様、貴様……っ、王と取引したなあっ！？」

息子ではなく、最も関係の悪い甥に権力が渡るだなんて。

今日からこの小僧に逆らえないだなんて、工場長からすれば新たな悪夢の始まりでしかない。

「叔父上。叔父上には早速仕事を任せたい」

「お、思い上がるなよ……！ お前が私に命令だと！？」

「貴方はもう工場長ではありません。今日からは、ただの倉庫番です。ああそうです、叔父上にトイレ掃除を任せてもいいですね」

「な……んな……？！」

工場長は絶句した。

「ふ、ふざけるなっ！ なぜ私がそんな汚らわしい仕事を……！」

「見せしめですよ。僕に逆らったらこうなると、知らしめるのには十分でしょう？」

「私に敬意を払え！！ 男爵家を守ってきたのは私なのだっ、この恩知らずが！！」

「いいですよ、嫌なら出て行ってもらいます。男爵家に面倒を見てもらえるだけ、ありがたいと思わなきゃ。そうでしょう、元工場長？」

衝撃のあまりに工場長は地に膝を突いた。

既に男爵の地位は己になく、財産もなく、生き繋ぐためには最低

の甥に従わなければならなかった。

「わかった……」

「アツハツハツ、こんなに簡単に家に乗っ取れるなんて思わなかったですよ。悪いねえ、ヘンリー倉庫番。いや、便所係かなあ？」

財産と地位が甥の手に渡ること、男爵家の破滅こそ回避されたが、これから工員たちに見下される毎日が始まる。

明日から始まる絶望に、希望の何もかもが打ち砕かれた。

「ユリウス……、お願いだ、工場に戻ってきてくれ……。お前さえいれば、わたしは、元の地位に……。う、うう……」

「ハハハハツ、地位ある者に媚びると同時に、天才にも媚びるべきだったな」

その言葉は、己の秘書が憎らしい甥と繋がっていた証拠だった。既に彼は裏切られていたのだ。

「とまあ、こういったわけでした、キャラバン隊は前回の7倍の利益を叩き出しました」

「自業自得とはいえ、あまりに悲惨だな……」

ヘンリー工場長が薄めたポーションで、どれだけの数の冒険者が命を落としたかと思えば、それでも温情のある処罰だろう。

人の生死を分ける薬を薄めた時点で、普通ならば極刑を受けても



おかしくなかった。

「ユリウスさんはおやさしいですね」

「本人の顔を知っていればそりゃ多少はな」

「しかしこの愚かな男のおかげで、闇ポーションは飛ぶように売れていますよ。キャラバン隊が1つ戻るたびに、ツワイク金貨が3000枚も手に入るほどですよ」  
「えげつないな……」

俺の力はシャンバラの商人たちと相性が極めて良かった。

彼らが世界中にポーションを流通させて、そこから富や物資をかき集めてこの国に戻る。

彼らの広大で太い販路がなければ、これほどまでに決定的な結果は出なかっただろう。

「どちらのポーションが優れているか。ツワイクの冒険者たちからすれば考えるまでもないでしょう」

「そこは命がかかっているからな。俺だって薄められたポーションを命綱にするなんて、お断りだ」

「ただ……近い将来、闇ポーションは彼の国で規制されてしまうでしょう。その前に売れるだけ売り切ってしまうところですよ。規制が入るといふ噂をこちらから流して、消費を刺激するとしましよう」

本当にこいつら、商売となるとえげつないな……。

交易商人は品々の物価の差を利用して稼ぐ商売でもあるので、それだけ売り時を見抜く目がシビアなのだろうか……。

「だったら向こうの錬金術師を味方に引き入れたらどうだ？」  
「とうとうと？」

「エリクサーを向こうの錬金術師に薄めさせればいい。信頼のかけ  
そうなやつを数人知っている。工場勤務時代のコネだな」

「せっかくキャラバンという形で雇用が生み出せているので、それ  
を変えるのは気が進まないですね。シャンバラのガラス産業からす  
ると、瓶が売れてくれるのがまた都合が良いのです」

「そういえば、アンタは政治家だったな……」

雇用はこの国の課題だ。

一部の事業がバカみたいに儲かっているにも、働く場所がないと国  
民の生活が成り立たない。おかしな話だった。

「しかし情勢が変化したらその方法も試したいところです。念のた  
め、その者たちの弱みを握っておきましょうか」

「弱みって……。今のは聞かなかったことにしておくよ……」

「スパイ活動は綺麗事だけでは済まないのですよ」

まあ、あの工場で過労にあえぐ生活をするよりもずっと幸せだろ  
う。

ところがそうしていると、あまりこの場所では会いたくない男が  
書齋に現れた。

「よう、邪魔すんぜジジイ」

「ジジイって……。俺の師匠なら言葉くらい選んで下さいよ……」

「構いません、事実ジジイですので。ようこそ、アルヴィンスさん」

最初はどうも信じがたかったが、師匠と都市長はなぜか気が合うようだった。

「借りてきた本返しをにきただけだろ。面白かったぜ、エルフの作家もバカにできねえわ」

「ツワイクの読書家にそう言われると、エルフの一員として嬉しいものです」

どちらも読書家で、師匠はここに泊まり込んで、ツワイクの本の話を爺さんにすることもあるそうだ。

それはまあいいのだけど、師匠の言葉遣いさえまともならと、どんなに思ったことだろう……。。

「じゃあ俺はこれで」

下品なのを承知で皿の残りを一気に平らげて、俺は席を立った。ところが師匠が俺の前に立ちふさがってきた。

「どこ行くんだよ、バカ弟子」

「家に帰ります」

「奇遇だな、俺もてめーの工房に用があつたんだ」

「………それ、嫌な予感しかしないのですけど」

そう答えると、ニタリと不良オヤジがこちらに笑い返してきた。本当にこれは、ろくなことではないに違いない……。。

「あの日、俺はてめーを助けてやったよなあ？」

「それって、シャンバラに師匠が現れた日のことですか？」

「おう。俺はてめーの人生に、魔導師の道をくれてやっただけではなく、命の恩人でもあるんだ」

「ユリウスさんの駆け出し時代ですか……それは興味深い。後でぜひ教えて下しませんか？」

「いいぜ。あの頃はコイツも素直でかわいかった。おい、待てよ！」「だったらさっさと本題を言って下さい」

横をすり抜けて去ろうとするとまた道を阻まれた。

「よし言うぞ」

「いいから早く言って下さいよ！」

「いいかユリウス。てめーは、恩返しに、おっばいのでっけー人型ホムンクルスを俺に作りやがれやっつ！」

あまりにバカ過ぎて言葉の意味が理解できなかった。

義理の父の前で、「己の師匠から『おっばい』という単語も聞いたくなかった。

「はああ……っ。俺の師匠なら、お師匠様らしい注文して下さいよ……。そうやってなんで……なんで、人前で恥をさらすんですかつ、もっつ……！！」

「うるせえっ！俺の注文は俺に都合の良いおっばいちゃんだつ！そうと決まったら行くぞ、バカ弟子！！」  
「バカは師匠の方でしょう！！」

師匠は転移魔法を発動させて、早く工房に行くぞと世界の裏側に

俺を引つ張り込んだ。

ああ……素行の悪い人だとは思っていたけれど、ここまでバカでスケベだとは思わなかった……。

振り返り際に見た都市長は、何か面白いのか俺たちに向けて楽しそうに微笑んでいた。

・おっぱいの大きい人型ホムンクルスを作れと言われても……  
1 / 2

師匠を工房の中へと招くと、興味深そうにあちこちを見回すので、元弟子として少しだけ誇らしい気分になった。

しかし注文の方は最低だ。せめて『おっぱいの大きい』というオーダーさえなかったら、同じ男として、魔導の道を行く者として理解出来なくもなかった。

「ポーション工場のアレをパクったのか。やるじゃねーか」

「ええ。ちなみにあそこのオーブはメープルとシエラ八が工場から物理的にパクってきたやつですよ。それより、本当に作るんですか……」

「おう、作れ」

「……だったら取引をしましょう。正式に俺たちの仲間になって下さい」

この男は天才だ。それに魔導師というものは、単体で運用するよりも複数人で行動させた方が能力が輝く。

俺たちの一人一人が最高の伝令役だからだ。

「いいぜ、ただし上下関係はなしだ。そういうのはツワイクの王宮でもうんざりだからな……」

「わかりました、師匠にしては折れた方ですから、それで妥協します」

「んだとテメエ……？」

「引き替えに俺は師匠のために、巨乳のホムンクルスを作ります」

「俺はジジイのために動く。テメエは俺のためにかわいい巨乳ちゃんを作る。よっしゃ決まりだ！」

「本当にそんな条件でいいんですか……」

所属国の決定はその者の人生を変えらるというのに、師匠は本気でこの条件で飲むようだ。

条件が釣り合っているようには思えなかった。

「俺もそろそろ嫁さんが欲しくてな。テメーら見てたらなんかよ、そんな気になっちまったんだよ」

「だったら普通に相手を探して下さいよ……！？ 町に出れば美人のエルフが山ほどいるじゃないですか！」

「うるせー！ 作るのか作らないのか、どっちなんだっ！？」

多大な恩があるのは事実だ。

ところどころというか、全体的に尊敬出来ないだけで、恩返しはしたい。可能ならば普通の形で……。

「ツワイクを首になって開き直ってませんか……」

「それはテメーだろ」

「まあ、そこは否定しません」

本棚から、ホムンクルス関連の研究本を取り出した。

作業用のテーブルを置いて、師匠と一緒にそれをのぞき込む。

昔は彼に教わるだけだったけれど今は違う。

注文はやはり最低だが、師匠に立派になったところを見せたい。

ページをめくってゆくと、ようやく人型ホムンクルスの項目を  
見した。

「これですね。材料は　これと、これが足りません。どちらもか  
なりのレアアイテムらしいですよ。ああそれと、理想の女性の髪  
の毛も必要だとあります」

「コイツを手に入れてきたら作ってくれるんだな？」

「いいですよ。もし材料があれば、俺だって試してみたいですから  
「その言葉、忘れんじゃねーぞっ！　おっ……」

するとそこに来客があつた。確かこの人は、メープルの昔の知り  
合いだつたはずだ。

「よう、探したゼアル。小金ができたんでよ、ちよいと飲みに行か  
ねーか？　錬金術師様も元気そうだな、いつもメープルが世話をか  
けるわ。いやあ……アイツってあの性癖だろ？　嫁の貰い手があつ  
て良かったわ、マジでよ……」

冒険者のおっさんにポンポンと肩を叩かれて、唐突に感謝されて  
しまった。

その気持ちはわからないでもない……。

「飲みの誘いは嬉しいが……テメエを男と見込んで頼みがある……」  
「なんだよアル、水くせえな。俺とお前の仲だ、なんでも言えよ」

そのおっさんの前にうちのおっさんが迫って、深刻な眼差しを向  
けた。



「実はよ……ここにある材料を集めると……。ぶつぶつ……」  
「な、何いっ！？ 従順な、きよ、巨乳のお姉ちゃんまで作れるのかっ！？ よしやるう、ぜひやるうっ、こりゃ飲んでる場合じゃねえっ、いくぞ相棒！」

「そう言ってくれると思ったぜ。んじゃあな、バカ弟子！ 材料が集まったらただ捏ねるんじゃないぞー？」

「捏ねませんが、全力で呆れてはいますね……。どうしてあなたはそうなんでしょうね……」

俺は師匠と気のいいおっさんを見送った。

あのおっさんは最近メキメキと頭角を現しているギルドの成長頭だそうで、遅咲きの成長期が来ていると、受付のカマカマ野郎が言っていた。

しかしそうそう簡単にレア素材が集まるわけがないので、今日はもう休みで確定的だ。

夕方。夕飯がもう一品増えたらいいなど、湖にメープルと一緒に釣り竿を垂らすことになった。

二人で棧橋に腰掛けて、必要もないのにピッタリとくっついてくるのを好きにさせて、夕日にキラキラと琥珀色に輝く湖水を見ろした。

「今日も一日が終わるな」

「うん」

「腹減ったな」

「うん」

「シエラハは良い嫁さんだな」

「うん……ユリウスと結婚して、大正解……」

最初はあれこれと言葉を交わしていたけれど、段々と話題がなくなって、無為の時間を過ごすことになった。

それでもメープルは好意を示すように、人の肩に頭を寄せてくる。

嫁さんっていうより、まるで娘か妹みたいだった。

「ユリウス。こっち向いて……」

「なん　ンブツツ?!」

そう思っていたのは数秒までのことで、メープルは振り返った俺に不意打ちのキスをお見舞いしてくれた。

「な、何をする……」

「喋らないのもなんだし……夫婦っばいこと、してみた……」

「今の、夫婦っばいか?」

「ん……もつと過激な方が、夫婦っばい……?」

彼女はなんでもない様子で首を傾げて見せるけれど、興奮に頬が色づいていた。

可愛らしいを嫁さん貰ってしまったものだ。頭をポンポンと撫でると、幸せそうな笑顔が返ってきた。

幻の世界に迷い込んでしまったかのような、ツイイクであくせく

と生きていた頃からすれば嘘みたいな気分になった。

俺たちヒューマンからすれば、正しくここは幻想の国シャンバラだった。

「そういうのは日が沈んでからにしてくれ……」

「え、それって、前フリ……?」

「ただの言葉のあやだ。痛っ……!?!」

「はあ……失望した……。やっと、誘ってくれたとばかり、思ったのに……」

「そういうのはゆっくりやりたい。まだ出会って二ヶ月だぞ」

「それ、男のセリフ……? メープル、お前をメチャクチャにした……とか、言えがいいのに……」

「メチャクチャにしたい」

「ツツ……!?!」

最近、メープルのことがよくわかってきた。

自分から人を挑発する分には平気みたいだが、こちらから迫ると意外と純情だ。

だからなおさら、まだ手を出す気になれない。

・おっぱいの大きい人型ホムンクルスを作れと言われても……  
1 / 2 (後書き)

本作の宣伝拡散に協力して下さい、みなさまありがとうございます！

・おっぱいの大きい人型ホムンクルスを作れと言われても……  
2 / 2

「……………あ、おっさん」

「え、師匠？　って二人ともなんなんですか、その格好っ!？」

足音に気づいて後ろを振り返ると、全身ボロボロに傷ついた師匠とおっさんがいた……………。

おまけにふらふらと疲労困憊としており、いったい何があったのだと疑わずにはいられない光景だ。

「て、手に入れてきたぜ……………こ、これで、俺たちの理想が……………」

「ザマア見る、バカ弟子が……………。これで、造らざるを得ねえなあ、カカカ……………!」

二人はそれぞれ赤と青の果実をこちらに差し出して、ついにレア素材を手に入れてきたと半笑いで誇った。

「二人とも何があったんですか……………」

「へっ、別に大したことじゃねえ……………3パーティ、迷宮攻略をハシゴしただけだ……………」

「おっぱいちゃんのためだろ……………。同じスケベオヤジとして、こういうのは成し遂げるしかねえだろ……………っ!」

どちらも凶鑑通りの本物だ。

俺は二人のスケベ心と激運に賞賛を覚えると同時に、男ってバカだなと海よりも深く実感した。

しかし材料が集まってしまった以上は、着手するしかない。

「男同士で、おっぱい、作るの……?」

「なんてお前はそういう語弊のある言い方をするんだ……」

「いいか、メープル。俺たちはよ、おっぱいの大きなホムンクルスを作って貰うんだよ!」

「おお……。それは、なんて素晴らしい……」

「いや、普通ひくだろ……」

しょうがないのでポロポロの師匠に肩を貸して、すぐその工房まで連れて行った。

それから約束は約束と、夕飯までにちゃっちゃとやっちゃおうと、男のずばら料理感覚で材料を次々と釜に投げ入れていった。

「煮えてなくない……?」

「夕飯の方が大事だろ」

「確かに……」

「バカ言え、おっぱいの方が大事だろ」

「人んちでおっぱいおっぱい言わないで下さいよ……もう……」

普通なら沸騰するまで待つが、待たずにどんどんと材料を入れてゆく。

赤と青の果実を入れると、水と油のように二つが釜の中でまだら色を作り、やがてゆっくりと混ざり合っていった。

ようやく綺麗に混ざった。最後の仕上げだ。

「後はイメージする女性の髪か何かを……」

「髪は、手に入らなかった……。っていうよりよ、理想の女性って言われても、んなのわかんねえ……」

「だが安心しろ相棒っ、俺たちにはこれがあるっ!!」

そう言っておっさんが俺の前に突きだしたのは、髪の毛ではなく、  
絵だった……。

美人のお姉さんが描かれた絵だ。やたらに胸がでかい。あり得ないくらいにでかい。

こんな女性が現実にいるのか……？

「よし、入れよう……。これは、いいものですね……」

「なんでお前まで乗り気なんだよ……」

メープルはおっさんからセンチティブな絵を受け取って、全く迷うことなく釜へとぶち込んだ。

「二人とも晩ご飯よーっ!!」

「あっ、大変……ユリウス、姉さんが呼んでる。早く行かなきゃ……」

夕飯ができたと言うのだから仕方がない。

さっさと反応させて、師匠待望の人型ホームンクルスを完成させた。

蒸気が視界を覆い、それがゆっくりと薄れてゆくと、ようやく釜の中に何かのシルエットが見つかった。

しかし煙が晴れると、それが衝撃的な物体であることに俺たちは気づいた。

ぶるぶると揺れている。

しかし人型と言い難い。どちらかというそれは、おっぱい型の危険なフォームで、言ってしまうえば薄水色のスライムが二匹だっ

た。

「バ、バカナアアアーツツ?!」

「バカは師匠です……。これってつまり、女性本体には興味はなくて、胸のことしか考えてなかったせいなんじゃないですか……?」  
「やべ、否定できねえぞ、俺……」

メーブルが釜の中のおっぱいスライム2匹を持ち上げた。  
見れば見るほどに、人様にはお見せできないフォルムだ……。

「意外とかわいい……。あと、これは……揉み心地が、マジクリソツ……」

「ま、マジでか!? 俺にも触らせろ、メーブル!」

「お、おおっ……。こ、これは……。これはなかなか悪くねえな……!」

「あ……。逃げちゃった……」

おっさんたちにベタベタと触られて、おっぱいスライムさんたちは不快だったのか、柵の影に隠れてしまった。

「怖くないよ……。ほーら、おいでおいで……。チチチ……」

「野生動物か何かかよ」

メーブルはスライムの保護に成功した。

気のせいかな、メーブルに懐きかかっているようにも見えなくもない。

「もっつ、二人とも何やってるのよっ! あら……?」



そこにシエラハは怒り混じりにやってきた。

最初は来客に驚いているのかと思っただが、どうも違う。

彼女の視線を追えば、そこに服の下におっぱいスライムを胸に装着したメーブルが立っていた。

「……アリだな」

「いやぁ……俺はナシだわ。だが、他のお姉さんが胸に付けるなら、俺的にはアリだ」

服の下から胸に付ける。その発想はなかった。

「ユリウス……これ、大発明……。最高だ……。ふふん……」

メーブルは巨乳（偽）になっていた。スライムはメーブルの褐色の肌色に擬態していた。

しかしその十数秒後、ずるりとスライムが服からたれてクリアカラーに戻ってしまった。

「な、なんなのよそのスライムツ!? メ、メーブルが一瞬だけ巨乳に……」

「気に入った……。この子は、私が引き取るね……」

「じゃ、じゃあよ。たまに触らせてくれよ、そいつ……」

うちの師匠は何を言っているんだ……。

こっちは尊敬しているんだから、せめて人前では言葉を選んで欲しい……。

「いや、これスライムですよ……?」

「わかるわ……。おっぱいに見えれば、おっぱいに見える何かを触れれば、俺はもうなんでもいい気がしてきたぜ……」

この日から、ときどきメーブルが巨乳になって、胸ごともげる光景が日常化した。

・小エピソード アリ王子の無様な流浪生活

これも都市長が外から仕入れてきた話だ。

ツワイク王国を追放されたアリ王子は、憎くてたまらない俺の似顔絵を懐に入れて、町から町へと当てもなく渡り歩いていた。

彼には護衛一人すら与えられなかった。

あるのは旅装備をまとった青鹿毛の愛馬が一頭と、ツワイク王国の外交官であることを証明する勲章くらいなもので、アリ王子はたった一人でユリウス侯爵の行方をたどらなければならなかった。

「おい、この男を知っているか？」

「しらね。おめえこそ誰だべ？」

「ちつ……ならいい！」

「おい待つべ、おめえどこのボンボンだあ？ 命さ惜しかったら、その馬と服くへさ置いてけ」

「なんだと？ くつ、こ、こいつら……」

「おい待てつ、おめえら困め困め！」

ある農村で貧相な男に問いかけると、現れたのは尋ね人の行方ではなくピッチフォークや鎌に鍬だ。

格下の中の格下だと思っていた農民に、ときにアリ王子は身代金目当てに追いかけて回された。

「う、うう……なんて連中だ……。あれでは蛮族と変わらん……。なんて、恐ろしい……」

この話が都市長の耳に届いたということは、ヤツが無事に逃げお  
おせたということだ。

権力に従わない無法者には、王族の地位などなんの意味もないと  
ヤツは思い知ったことだろう。

その後も町から町へと渡って行けども行けども、ユリウス侯爵の  
行方は依然とわからなかった。

それも当然だ。転移術を連発するコウモリ野郎が、己の足跡なん  
て残すわけがない。

それでもどこかに定住していれば、見つかる可能性があると思  
じて、愚かな王子は世界をさまよい続けた。

ユリウスは生まれ育った孤児院に一度だけ立ち寄った。そこま  
ではわかっていた。

そのため孤児院に一人、諜報員を張り付かせている。

もしその網にユリウスがかかれば、国に残した配下が捕らえてく  
れるかもしれない。

部下には必要ならば孤児院を人質にしるとアリは命じていた。

「その女、この男を知っているか……？」

「あんた誰？ 知るわけないでしょ」

「おい、その、この男を見たか！？」

「そんな言い方じゃ、知ってても答えるわけねえだろ、バアーカ」

「貴様アツツ！！」

町の中で剣を抜き、馬に乗って民を追いかけますバカ男が、最後は憲兵隊に囲まれて袋叩きにされることもあったとか。

アリ王子は傲慢さゆえに各地で騒ぎを起こし、自業自得でゴロツキに追いかけて回されたり、先々の留置所のご厄介になった。

「なぜ俺はこんなみすばらしい格好で、砂漠でコインを探し回るような生活をしなければならんだ！！ ユリウスウーツ、貴様どこにいたるうーっ！！ なぜ痕跡がないのだっ、これでは探しようがないだろうがっ！！ これだからっ、これだから魔導師どもは…クツ、クソオオオーツツ！！」

疲れ果てて酒場宿に泊まったときはもっと酷かった。

寝ようにも外の酒場が騒がしく、繊細な王子様はダニに食われた胸をかきむしりながら発狂した。

一人でそんなバカみたいな大声を上げたら、頭のおかしいやつだと思われるのが関の山だ。

そもそも探したところで俺が見つかるわけがない。

俺はヒューマンが入ることの出来ない閉ざされた聖域、シャンバラにいる。

お前がたどり着く日は永久にこないの、早く諦めて新しい人生を始めた方がいい。

「火酒を寄越せ！」

「荒れてるね、お客さん」

「ふんっ、貴様に俺の苦勞がわかるか！ ああ、イライラする……！」

「それ飲んだら部屋に戻った方がいい。奥のあの男、この辺りのギャングのリーダーだ。アンタを睨んでるぜ」

この先、アリの中では無法者への恐怖が消えることはないだろう。火酒を一气飲みして、アリは逃げるように部屋へと早足で歩いた。

「おい、待てよ。狂人のくせにずいぶんと偉そうじゃねえか」

「ボスが一緒に飲みたいってよ。おら付き合えよ？」

「ヒッ……お、俺に触れるなっつ……！」

アリはギャングの手下を殴り飛ばした。

そうなればもうごめんなさいでは済まない。剣を抜く前に手足を拘束され、ギャングリーダーの拳を腹にねじ込まれた。

「ゲハッッ……！？ 何を、する……俺は、俺は王子だぞ……っ。アゲアッッ?!」

そんなことを言っても誰も信じるわけがない。

本物の狂人だとギャングたちに笑い飛ばされ、サンドバッグのように代わる代わる殴り飛ばされた。

「お客さん、災難でしたね。こんなときに済みませんが、お代は結構ですから出て行って下さい。うちもあの人たちに睨まれると、商売立ちゆかないものでして」

結局、ゴミでも捨てるようにギャングたちはアリを外へと運び、お前にはここがお似合いだと橋の下に投げ捨てて去っていった。

「俺は……俺は自分の身すら、守れないのか……。う、うう……ちくしょおお……」

男にとって、暴力への敗北は最高級の屈辱だ。

この日、さしものアリも理解しただろう。

いかに自分が王家の権威に守られてきて、それを失った己がいかに弱い存在なのかを。

「ギャングどもに酷くやられたな。飯食ってくか？」

「俺は……乞食の情けなど、受けん……っ」

「けど今のお前、その乞食より下に見えるけどなあ……」

「消える、クソ野郎……」

それでもそうそう簡単に人が変わるはずもなかった。

乞食は哀れむように愚か者を見下ろし、『今日は別のところで寝るか』とつぶやいてから、やさしくも寢床を譲ってくれたのだった。

・小エピソード アリ王子の無様な流浪生活（後書き）

予告通り、ざまあ回を増やしていきます。  
投稿が遅くなつてすみません。



・日常回 シャンバラの民はギンギンバキバキをこ希望のようです  
1 / 3

世界のどこかであつての宿敵が袋叩きにされているとは露さえ知らぬある日、一日の業務を終えた俺はオアシスの木陰に座り込んで一冊の本を読みあさっていた。

といつても時刻はまだ昼前だ。

これから日差しがきつくなる前に、ちょうどいい陽光に当たつて気持ち晴れやかにしたかつた。

文字を追いながら青く輝くオアシスをぼんやりと眺めて、つい先ほどまで裸のシエラハがそこで踊っていた光景を思い出せば、集中力が平時の3割ほどまでに落ち込んでいたとも言える。

ここにいれば美しいシエラハの沐浴が見れる。

そう期待してここに陣取つたのも事実だつた。

彼女に手を出す勇氣はいまだ出ないが、遠くからありのままの姿を見る勇氣ならば、不思議といくらでも出た。

俺は愚かだ。師匠をバカになんか出来ないくらいにバカでスケベだ。

「ユリウスって不思議ね。戦っているときはあんなに命知らずなのに、そうしているとなんだか泉の妖精みたい」

「泉の妖精はシエラハ い、いや、なんでも、なんでもないぞ…」

「そ、そう……」

シエラハは俺がのぞいていることを知っている。なのに沐浴を続けている。

恥ずかしそうに視線をそらすその姿に、メープルの言うところの獣欲を覚えかけた。

昼を前にした陽光が、褐色肌にブロンドのうちの嫁さんを美しく浮かびあがらせ、俺を無心に凝視させた。

俺が見とれると、シエラハはいつだって恥ずかしそうにしながらも、ウキウキと嬉しそうにしてくれる。

いや、今は頼まれ事があったのだった。

視線を古い本へと落とし、ページをめくっていった。

「何を探しているの？」

「ああ、さっきギルドに寄ったんだけどな、そうしたら……ある相談をされてな」

別に頼み事に応えてやる義理はないのだが、他にやることがあるかと言えば別がない。

それに師匠が言うには、活字は読書家の精神安定剤だ。

何もせずに過ごすより、文字を追って過ごす方が心地良い。

「またあの……あの、ス、スライムを作るんじゃないでしょうね……？」

「アレ以上あんなものを増やしてどうする……」

左がカトリーヌで、右がメリディーヌだそうだ。

何がつて、あのスライムの名前がだ。俺には左右があることが驚

きだった。

「そうね……だけどありがとう。姉さんより大きくなったって、メーブルがとつても喜んでいたわ」

一瞬でたれ落ちる偽物の胸だけどな……。

やさしい姉は妹の喜ぶ姿を思い出してか、歪みない微笑みを浮かべて俺に語ってくれた。

「シエラは本当に妹に甘いな……」

「あ、それで誰に頼まれたの？」

「誰って……アイツだよ。カマカマ野郎に頼まれた」

ギルドのあの珍受付嬢（ ）から、俺はとある依頼を持ちかけられた。

なんとも一言では説明しがたいので、隣に座れと砂地の地面に叩いてみせると、素直な姫君が疑うことなく腰を落としていた。

少し前

「んねえ、タマタマ坊や、精の付くお薬とか作れないかしら……？」

珍しい素材はないかなとギルドの倉庫に立ち寄ると、あのクネクネとした美形の受付嬢（ ）が気持ち真剣にそう語りかけてきた。

しかしこんななりだが、コイツは頼れるいいやつだ。

先のシャンバラ防衛戦では、最前線で獅子奮迅の大活躍をしたと聞いている。

「最近うちの連中ね、なんだか疲れてるみたいなのよ。ねえ、どうにかしてあげられないかしら？」

「珍しくまともな話だな」

「まあ酷い！ それじゃアタシがいつも下ネタ言ってるみたいじゃないっ！」

「わりと常に言ってるだろ……」

呆れた目でツツコミながらも、俺はカマカマ野郎の話を噛み砕いた。

ポーションや、迷宮素材を使った交易が行えるのは冒険者たちの奮闘のおかげだ。

しかしそれは過酷な仕事で、加えてエリクサーで傷は治せても疲労ばかりは治らないとくる。

「ギンギンになるのがいいわ」

「いや、仕事中にギンギンになるのはまずいだろ……って、下ネタ早速使ってるじゃねーかよ……」

「あらかだっ、ウフフフ……。とにかく、ギンギンのバツキバキッにしてちょうだい！」

イケメン細マッチョの腕がたくましいガッツポーズを作った。

性癖がノーマルなら、この人パワーもあるし、さぞやモテただろうな……。

「わかったからそれ以上喋るな……俺の心が汚れる」

「そうね、あたしもそう思うわ。この薬はタマタマ坊やの夜の生活にも使えるわね」

「んなこと一欠片も思っちゃねーよっ!？」

「んもう、わかってないわねえ……。いい、ユリウスちゃん？ あの子たちが大切なのはわかるけど、あの子たちはもう大人よ。あなたが大人の世界を教えてあげるのよっ!!」

「アホ抜かせ」

俺は仲間思いの受付嬢からの依頼を受けて、素材ごと錬金術工房に転移した。

それからあのスケベなおっさん冒険者をなんとなく思い出しながら、がんばっているあのおっさんに疲労回復薬を飲ませたら楽しいかもしれないなど、本のページをめくり始めた。

・日常回 シャンバラの民はギンギンバキバキを希望のよう  
す 1/3 (後書き)

以降、カマ多めになります。

・日常回 シャンバラの民はギンギンバキバキをこ希望のようです  
2 / 3

「ギ、ギンギン……」

話の一部始終を語り終わると、ふと見たシエラハの顔が真っ赤に染まっていた。

『あの子たちはもう大人よ』と、そうカマカマ野郎の言った言葉が否応なしに脳裏へとよみがえって 頭を振り払うことになった。

「そつちじゃない……。冒険者のみんなの疲れを少しでも癒してやりたいんだ」

「バキバキ……いいね、私も大好きな擬音……」

そこにどこからともなくメープルが現れて、姉妹で挟み込むように俺の隣に腰掛けた。

いきなり現れて、さも当然とくつついてくるところがまるで猫のようだ。

「どこから現れて、どこまで盗み聞きしてたんだよ、お前も……」  
「そんなのいつものことよ。それよりもその疲労回復薬のレシピを探しましょ」

「ま、コイツにいちいち突っ込んでたらキリがないか……」  
「うん、そゆこと……」

俺たちは今回の目的に近いレシピはないかと、3人で本の文字を目で追った。

しかし手分けをしたとはとても言い難い。

姉妹はのぞき込むように俺の膝の上へと身を乗り出して、俺の集中力を甘い女性の匂いでかき乱したからだ。

「確かこの本に載ってたような気がするんだ」

「次、次……」

「ユリウスはページをめくって。レシピはあたしたちが探すわ」

それ、自分でめくった方が早くないか……？

そう言い掛けてやはり止めた。

本の中身は姉妹の後頭部でろくすっぽ見えなかったが、代わりに無防備に汗ばんだ首筋がそこにあっただからだ……。

俺はしばらくの間、姉妹のうなじだけを無心に見つめながらペー  
ジをめくるマシーンと化していった。

「あつたわ」

「あつた……」

本をのぞき込んでいた2人が得意げにこちらを向いた。

その笑顔にまたもや見とれかけた自分自身を抑え込んで、冷静を装いながら彼女たちの指を追う。

これならば俺にも作れそうだ。

採算性が悪いので、材料を集める時間を休憩に回した方が遙かに効率的ともあるが、そこは作ってみてから考えればいい。

「これとこれ、うちの倉庫にはないから、ちょっとギルドにあるか聞いてくるよ」

「一緒に行く……。あの受付さんのお姐さん好きだし……」



「一人の方が楽しだし早いんだが」

「そういう問題じゃないわ。メーブルと一緒にいって言うてるんだから、非効率でも一緒にいくべきよ」

「ユリウス、転移魔法使いすぎ……。やり過ぎは、よくないよ……？ 歩くの、楽しむのも大事……」

とつさに反論出来なかったので、まあ急いでもいいしいいかと一緒に工房を出ることになった。

・

「あらいらっしやい、新婚さん　タマタマ坊やとの夜の生活はどう……？」

「よっ、姐さん。どうって、クソ淡泊……。一緒に寝るのに、何もしてくれない日々……」

シエラハはセクハラにまで真面目に言葉に返そうとて言葉を詰まらせて、メーブルの方はこれ幸いとこの流れを利用して俺に抗議した。

毎晩一緒に寝るだけでも、俺とシエラハには胸の高鳴りの止まらない刺激的な夜なのに……。

「そういうことを人にバラすな……」

「ヤダ可哀想……。熟れた身体を持て余した人妻が2人もいるのに……なんてこと……」

「片方はそんなに熟れちゃいないだろ……」

「そういうのがいくせに……」

「うっ……。アホ言っていないでやることやるぞ。……ジャイアントビーの蜜と、迷宮キノコはあるか？」

「もちろんあるわよ、甘い蜂蜜と、太くて立派なキノコが……んふっ」

才能のあるやつって、どうしてこうも濃いのだろうか……。

俺たちは蜂蜜とキノコをラクダの背にありったけ乗せて、歩きながら手綱を引いて工房へと戻った。

「やっぱり、勉強になる……。あんなふうには、エグい下ネタでユリウスを凍り付かせたい……」

「ダ、ダメよっ、そういうのは見習っちゃダメッ！」

「お前はこれ以上俺を凍り付かせて、どうするつもりなんだ……」

「動揺を楽しむ……」

「やっぱりお前は変だ……」

メープルの後頭部をポンと叩いて、砂漠の彼方に小さく見える我が家を見つめた。

ギンギン……ギンギン、か……。

調合の準備を始めると、2人がオアシスの湖水を運んできてくれた。

それを助け合って釜へと流し込み、砂漠で拾った棒きれでかき混

せた。

まずはポーシオンをそこへと流し込み、安定させてからジャイアントビーの蜜をたらし入れる。

たちまちに甘ったるい匂いが工房中に広がった。

「いい匂いね……」

「クンカクンカ……ハスハス……。あ、よだれ入っちゃった……」  
「おまつ、変なもん入れんなよっ!？」

エルフの姉妹が錬金釜の上に顔を突っ込んで、さつきからスンスンと鼻を鳴らしている。

女性というのはどうしてこういった匂いが好きなのだろうな。

「けど本当にいい匂いよ……? このまま、飲み干したいくらい……。ね、ねえユリウス……ちょっとだけ、味見とかがしたらダメかしら……? いたっ……」

「料理じゃないんだから、ダメに決まってるだろ……」

メープルにするように、シエラハの後頭部を軽く叩くと彼女まで嬉しそうに笑い返してきた。

なんか、こう見ると姉妹だな……。

「また姉さんに見とれてる……」

「見とれてない。それより調合に集中しろ」

「ギンギンだもんね……」

「ギンギンから離れる……」

そんなことより調合の続きだ。釜の中へと、魔石を主としたレシ

ピ指定の添加物を加えていった。

それをグルグルと混ぜ合わせて、仕上げの迷宮キノコを投入してみると、黄金色の輝きに緑が加わって蛍光色へと姿を変えた。

それをさつと仕上げで、用意しておいた小瓶をあるだけ流し込めば、ふわりと甘い蒸気が上がって完成だ。

錬金釜の中に、燐光する小瓶と薬がギツシリとひしめいていた。

・日常回 シャンバラの民はギンギンバキバキを希望のよう  
す 3 / 3

「飲んで?」

「いや、俺はそんなに疲れてはいないんだが……?」

「飲みなさいよ……」

「なんでお前までそんな……。わかった、自分で実験してみよう」

さっきまで自分たちが味見したがっていたのに、2人はそろって同じ小瓶を手にとって、俺の胸先に突き出してきた。

逆らう理由も別にないのでこちらも素直にそれを受け取って、グビツと一口飲んだ。

すると身体が軽くなった。

その身体に引つ張られるように気持ちまでもが上向いて、自分でも自覚していない疲れが取れたのか、嘘のように身体が楽になっていた。

今日までこんなに重い肩を背負って生きていただなんて驚きだった。

「どつ? むらむらする……?」

「疲れが取れた」

「むらむらは……?」

「しない」

「え、それだけなの……?」

メープルならわかるが、なんでシエラ八まで残念そうにしているのだろうか……。

これは画期的な回復薬だ。もっとそちらの方向に驚いてほしかった。

「刺激が足りない可能性……」

「何を期待しているのかわからんが、これはそういう変な薬じゃないぞ」

「かもーん、カトちゃんメリちゃん……。シャキーンツ……」

「いや、さも当然のようにスライムたちを使役すんなよ……」

どこからともなくセンチティブなフォームをしたスライムが現れて、メープルの服の下へと入り込むと胸部で合体した。

ところが粘着が足りなくて、すぐにストーンと落ちる。それが最近のお約束だった。

「おっぱい、おなかに生えた……。これはこれでマニア受けの可能性あり……?」

「ねーよ……」

俺とシエラ八は視線を重ねて、何も見なかったことにした。

「じゃ、ギルドに届けてくる」

たまには歩こうかと薬を木箱に積めて外に出ると、いつの間にか太陽が高くなって、強烈な日差しが降り注いでいた。

なので立ち止まってフードをかぶり直すと、左右をまたメープルとシエラ八に囲まれた。

「一緒にい」……」

「と、途中で元気になり過ぎちゃったら困るわ……見張らなきゃ……」

「何を言ってるんだお前は……。そんなおかしな効果はないから安心してってくれって言ってるだろ……」

過酷な日差しも美しい姉妹と並んで歩いてゆくと、不思議と気持ちいい。

転移魔法に頼りきりだった俺は、歩く楽しみを見失っていたのだと、フードに包まれた嫁さんたちの素顔を盗み見ながら実感した。

ギルドに戻ってくると、俺たちはラクダから荷物を下ろし、カマカマ野郎に蛍光色の新型ポジションを納品した。

「あらやだ、ギンギンポジションもう出来ちゃったのねえ、んふふふ……一本ちよろまかしちゃおうかしら」

「いいね、その名前……」

「んな効果はねーって、何度言えばわかるんだよ、お前は……」

喜ばせたくて作ってきたのに、なんだかぬか喜びされそうだ。

ところがそうしていると、あの気の良いおっさんがギルドに戻ってきた。

俺が行動するよりも先に、メープルが新型ポジションことギンギンポジションを抱いて、おっさんの前に駆けて行って、その効能を

説明してくれた。

「それってつまりアレだろ……？　へへへ……今夜はお楽しみだなあ、お前ら、へへへへ……」

「んな効果はねーからさっさと飲め！」

「へっ……！？　こ、こんな俺に飲ませてどうするつもりだ……！？」

「ただの疲労回復薬だよっ、ギンギンから離れるよ、お前らっ！！？」

なんだと残念そうにおっさんは笑って、俺たちの差し入れを喜んで飲んでくれた。

自分でも確かめたので既にわかってはいるが、効果覿面だった。

「お、おおっ、おほおお……！？　こ、こりやすげえ……すげえけど……。はあ……ギンギンにはならねえなあ……。なんだよ、ちえ、つまんねえ……」

「何よおっ、聞いてたのと全然違うじゃなあいつ！！」

エルフって……思ってたよりずっと俗だな……。

スケベオヤジとカマカマ野郎は落胆していた。

「そういうのも希望。作るべき。エルフの少子化対策を救えるのは、ユリウスだけ……」

「今度な……」

「やった……」

「あくまで今度な」



「あたしも期待してるわよ、ユリウスちゃんっ！」

「ま、貰ったところで使う相手とかいねーんだけどなあ……」

「それ言ったらヤボよ、んもーっ」

シエラハは下品な話題に加わりかねて、頬だけ赤くしてずっと黙っている。

俺と目線がぶつかると、何を勘違いしたのか慌てて視線をそらされた。こっちは変なことなんて考えてないぞ……。

疲労回復ポーションはその後、戻ってきたギルドの連中にも振る舞われた。

もちろん大好評だ。この様子だと、日課の仕事が増えてしまいそうだ。

ギンギンポーションは、シャンバラの生産性を飛躍的に高めてくれること請け合いだった。

「ユリウスさん、例のあの薬ですが……」

「あああれか、なかなかいいだろう。いくら経済が上向いても、労働者に休日を休む体力が残らなければ本末転倒だ」

「ええ、画期的です。ですが……ギンギンになるやつも作ってやって下さい」

「あんたまで何を言ってるんだ……」

「エルフはヒューマンと比べると数が少ないですから、そういった薬があるにこしたことはないのです。いえ、エルフの発展に不可欠と言っても差し支えがありません。作って下さい」

「……わかった。考えておく」

都市長にも言われてしまったが、心の中で、作る気はないとキツパリと決めた。

メーブルがその存在を知ったら、絶対に盛ってくるつもりで切り切っているからな……。

こうしてギンギンポーションは、シャンバラの冒険者たちや医療施設へと配布されて、人々を驚かせながらも落胆させていったという……。

ある晩、夕食の準備をしていると玄関からノックが鳴り響いた。

「こんな時間に来客なんて珍しいな。すまんが出てやってくれ」  
「おけ……」

実は今夜の夕飯は俺が作ることになっていた。  
そこで皿を並べてくれていたテーブルに対応に出てもらった。すると聞こえてきたのは、あの都市長の落ち着いた声だ。

キッチンから顔だけ出してみると、そこにはビール瓶を両手に抱えた都市長と、包みを持った秘書（義兄さん）が立っている。  
包みの中はどうかやら焼き鳥か何かのようだ。炭火で焼かれない匂いがした。

「夜分押し掛けてしまい申し訳ありません。やっと時間が作れたものでして」

「つまみをありったけ用意してきました。さあ飲みましょう」

爺さんの方はさておき、普段あれだけクールな義兄までみやげを手に微笑みを浮かべている。

この義兄との距離感をまだまだ測りかねていた俺には、彼が自分を認めてくれたような気がして嬉しかった。

「いきなりだな。まあいい、座ってくれ」

「新婚ほやほやの夫婦の家に……ビール瓶を持って押し掛けるなんて……笑える……」

「別にいいわよ……。夫婦らしいことなんてしてくれないんだもの……」

なぜそこですねる……。

俺はキッチンに戻って、後は盛り付けるだけの夕飯を皿に移していった。

「お酒は久しぶり……」

「何ちゃっかり飲もうとしているのよ。あなたはまだダメよ」

少しするとシエラハがキッチンに戻ってきて、今日の夕飯をあちらに配膳してくれた。

しかし突然だ。こんな夜中にいきなり現れるなんて、これまでにないケースだった。

「おお、これはツイイク料理ですか。これは懐かしい」

「バザーに寄ったらたまたまカボチャが手に入ってな、これを2人に食わせたくなったんだ」

キッチンの壁越しに声を張り上げてふと思った。

あのしたたかな爺さんのことだ。この訪問に裏があってもおかしくはないと。

最後の皿を抱えて俺も居間へと移ると、テーブルの上が宴会ムードになっていた。

ツイイク料理のパンプキンシチューと、チーズドリアがそれぞれの席に並び、中央には焼き鳥と甘く揚げたパンや、スライスされたチーズが山を作っている。

「これはずいぶんと買い込んできたな……」

俺も席に着いて、彼らと食卓を囲んだ。  
姉妹との甘ったるい夜もいいが、こういう夜も悪くない。

我先とメープルが焼き鳥を掴むと、グラスにビールが注がれて晚餐あらかた宴会が始まっていた。

「あたし、ユリウスと結婚してよかったわ……」

「うまうま……。ユリウス、主婦の才能あるかも……」

「おお、これは美味しい。私もあちらの料理を食べたのは久しぶりですよ」

なんの変哲もないツイイク料理を彼らは喜んでくれた。

義兄の方は相変わらず物静かで上品だったが、パンプキンシチューが気に入ったのか黙々と食べてくれている。

「それだけ長く生きていれば、そりゃツイイクに行ったことがあってもおかしくないか」

「ええ、昔のことですが。それに当時はツイイクではなく別の名前です、私の記憶の中あの地は、素朴で木々の多い良い国でした」

だったら今の発展したツイイクを見たら爺さんは驚くだろうな。

「ツイイク人の俺からすれば、シャンバラのビールの美味さにはちよっとした驚きだ」

「ユリウス、ちよっとだけ……。それ、ちよっうだい……？」

「ダメに決まってるだろ」

「あてっ……。へへへ、残念……」

それ目当てでわざとやってるんじゃないってくらい、今夜もいい笑顔だ。

黄金色の液体は本国の黒く濁ったものより澄んでいて、その苦みが香草風味の塩辛い焼き鳥を夢中にさせる。

俺たちはしばらく他愛のない話と、美味しい食事に夢中になった。

・

酒が入って、頭が少しふわふわとしている。

都市長と義兄さんとの夕飯は存外に楽しくて、ついつい酒が進んでしまったのもあった。

ところが俺にしだれかかってくるやつがいた。

「おいメープル、都市長の前でそういうのは止める」

「それ、私じゃない……」

「お前以外にこんなことするやついるわけないだろ。他に誰がんなつ、おい大丈夫かっ!？」

それは隣の席のシエラ八だった。

どうやらかなり酔っぱらってしまっているようだ。

座っていられないのか、俺が背に腕を回すと体重の全てをかけてきて、人の肩を枕にし始めた。

「え、なにがあ……?」

彼女とは思えない間延びしきった声だった。

「姉さん、お酒弱い……」

「それは見ればわかる。というか、弱いなら先に言うべきだったろう……」

今にもイスからずり落ちそうで危なっかしいので、やむを得ず俺の方からイスを寄せてしっかりと抱き込んだ。

義兄さんがそんな俺たちの姿を静かに笑い、爺さんの方はもっただらしな顔でニヤニヤとしている。

俺が支えると、シエラハは体重の全てこちらに任せて、まるで甘えるようにくつついてきていた。

「んふふふ……ユリウスの肩、気持ちいい……」  
「酔っぱらってるな」

「ユリウスが悪いのー……っ。ユリウスが、ちっともくっついてくれないから……私からあ、くっついてるのー……」  
「そのセリフは、明日絶対後悔するやつだぞ……」

「今は平気だもーんっ」  
「むふ……。酔っぱらった姉さん、かわいい……」

シエラハはもっとくっついて欲しかったのか……。  
ならこれからはもっと いや、違うな。酔っぱらいの言葉をあまり真に受けない方がいい。

普段はあれだけキッチリしているのに、お酒が入るとだらしないだなんて、彼女の意外な側面を見てしまった。

真面目な人間というのは、己が真面目であるよう気持ちを張り詰めて生きてきている。

なので何かのきっかけでそれが崩れると、まあ、こうなるんだな……。

「ユリウス……。あたしの旦那様、スリスリ……」  
「あ、私たちはお構いなく。ジジイの彫像だとも思っただ下さい」  
「いや、そこはお構うに決まってるだろ……」



しかし『旦那様』か。この響きは悪くない……。  
親御さんの前で、その豊満な胸部をぐいぐいと押し付けられると、  
スケベ心や喜びよりも冷や汗や動揺の方が勝るけどな……。

「もつとお……旦那様らしいこと、してくれたっていいのにい……。  
どうしてしてくれないの……？」

「同意……。姉さんに、激しく同意……」

「だからって、それを爺さんと義兄さんの前でやらなくてもいいだ  
ろ……」

「フフ……お構いなく」

「だから構うってのっ！」

そう抗議すると、あれだけ物静かな義兄さんが声を上げて笑いだ  
した。

彼らは長寿なので、俺たちがまだまだ子供に見えるのだろうか。

「ユリウス、あーんっ、あーんして」

「や、止める、せめて人前ではそういうの止める、頼むから、止め  
て下さい……。ちょ、押し付け、うっ……」

串の先を人に向けるものだからおっかないそれを、俺は恐る恐る  
ほおばって酔っぱらいを満足させた。

間接キスなのを気にせずに、串の続きを己の口に運ぶ姿は普段の  
シエラハではあり得ない。

「やるね、姉さん……。わたしよりたち悪いかも……」

「ユリウス……好き……好き…… あたしの旦那様……ユリウス  
大好きい……」

「へーいへーい、口元にやけてるよ、旦那様……」

「ではその調子で子供も願います」

「この状況でそういうこと言っなよなっ!?!?」

俺も少し期待したが残念なことに、酔っぱらいはそれを真に受ける前に寝息をたてていた。

助かったような、惜しかったような……寝てくれてホッとしたのは事実だ。

「じゃ、そういうことで」

「また明日。ユリウスさん、今日はとても楽しかったです、こんな義兄でよければまた一緒にさせて下さい」

ところが急に妙な流れになった。

メーブルがシエラハに肩を貸して、二階の寝室へと運び始めると、義兄がそれにあわせてもう帰ると立ち上がった。

義兄が玄関から去って、メーブルとシエラハが上の階に消えて、俺と爺さんだけが散らかったテーブルに残されていた。

メーブルはその後、1度だけ水をくみに戻ってきてけれど、その後に戻ってこなかった。

「さて」

さっきまでのゆるゆるのお義父さんから一変して、シヤムシエル都市長は理知的で迫力のある大物エルフに一変していた。

「例の白銀の導き手、もう少し作れませんか？ 国中の隅々まで調べるとなると、あれだけでは足りません」

「アンタはどうしてそんなに回りくどいんだ……。だったら直接そ

う言えばいいだろうに……」

現状は迷宮に対して冒険者が足りていない状態だ。

迷宮の発掘を強化するよりも、冒険者の育成にリソースをさくべきだ。と言ったところで、都市長もそんなことはわかっているだろう。

「すみません、私はこういう性格でして」

「知ってるさ……。大事な娘を貰っちゃったしな、爺さんには逆らえそうもない。それで、狙いは？」

「緑です」

「緑……？ ああ……なるほど、あの話か」

「貴方が私に夢を見せたからいけないのですよ。貴方はこのシャンバラを、緑の大地に変える力をお持ちだ。どんなに私が貴方のような存在を待ち続けたとお思いですか……？ 貴方は、我々シャンバラの老人の悲願そのものなのですよ」

きつととつくの昔に諦めていたのだろうな。

ところがそこに俺が現れて、不可能を可能にしてしまった。

「本当に回りくどいな……。だがその話なら喜んでやろう。砂漠のど真ん中に緑が蘇ってゆく光景は、眺めていて最高に楽しいに決まっているからな」

莫大な金と労力がかかるだろう。

しかしだからこそ面白い。ツワイク王国のポーション需要からふんだくった金を、何かに使うならこういったでかい事業だ。

「ではこれからの計画を聞いて下さいますか？　まず貴方が白銀の導き手を量産します。その後はローラー作戦を実施し、シャンバラ中の迷宮を一挙に発掘してしましましょう」

「まあ捉えようによっては悪くない。確かに冒険者は足りていないが、迷宮の数が多ければ多いほど、欲しい素材をピンポイントに狙える。やる価値は高いだろう」

「ええそうなのです！　そして狙うは植物系の魔物素材と、大地の結晶です！　特に大地の結晶は、万能建築素材コンクルに使いますので、より重点的に発掘してゆく必要があります！」

「落ち着け、爺さん……」

薬の効果を考えれば、それこそ気の遠くなるような話だが地道にやっけてゆくとしよう。

「わかった。だったらダウジングも手伝おう。明日の午前にダウジングロットを量産して、その後はローラー作戦を実行だな。……さすがに急か？」

「どうにかしてみせましょう。ああ、貴方は正しくデザートウォーカーの　いえ、エルフの救世主です。これからも頼りにさせて下さい」

「そうやってエルフの長が俺に弱みを見せてどうする……。偉いんだから、もうちょっと上から目線で頼んでもいいんだぞ？」

「何を今さら！　我々は家族ではないですか」

「そう言われるのは、そんなに悪い気がしないな……。しかしこれからは用件の方を先に言ってはくれないか？　何度も言うが、いちいち回りくどいぞ」

「いえ、あなたと一緒にお酒を飲みたいと言い出したのは、あの子

の方です。最近、彼はあなたの話ばかりなのですよ。英雄気質の好ましい男だと、貴方が国を捨てて来てくれたことに期待していると」

「それは驚いたな……」

「もちろん、私も貴方のことが大好きですよ。メープルも、シエラハゾも、私たちは貴方が大好きです。どうかそれをこの先も忘れな  
いでいて下さい」

こうして楽しい一晩が終わり、忙しない明日が約束されて、俺は  
都市長を邸宅までも送っていった。

俺の20倍じゃきかないほどに生きている爺さんと、家族になっ  
て、同じ満天の星を見上げることになるなんて、工場勤務だったあ  
の頃は思いもなかった。

・オカマさんと一緒！1/2

俺たちツワイク人からすれば、シャンバラの夜明けはいくら見ても飽きることのない光景だ。

何せここには山がない。そのため地平の彼方に太陽が昇ると、恐ろしくノッポな影法師が生まれる。

真横から日の光を受けるこの感覚は、山や森の多いツワイクで生まれた俺には、住み慣れようと世界不思議のものだった。

さて、今日はがんばる日だ。

まだ肌寒い中、オアシスの湖水で顔を洗い、手足だけを軽く布で拭くと俺はすぐその自宅へと戻っていった。

「ん……なんかあつちが騒がしいな……。まさかもう準備に入ってるのか……？」

市長邸の方が騒がしい。これは急いだ方がよさそうだ。玄関をくぐるとキッチンに入り、そこにある有り合わせで簡単な朝食を作ってから、二階の嫁さんたちを起こしに行った。

「そうならもつと早く起こしてよっ！ もつっ、都市長つたら急なんだからっ！」

「すまん、そこは俺の提案なんだ。朝食が済んだら調合を手伝って

くれ」

「え、ユリウスが作ったの……?」

「ああ、早くに目が覚めてしまったからついにな」

シエラハは昨晚のことを覚えていないようだ。

あまりに普通に行っているの『好き好き大好きあたしの旦那様』と、そう言われたのが幻覚のような気がしてきた。

「もっと、旦那様らしいこと、してくれたっていいのに……。どうしてしてくれないの……?」

そんな俺の内心をまさかとは思うが読んだのか、メーブルがボソリと昨日の言葉を復唱した。

「何言ってるのよ、朝ご飯を作ってくれるだなんて最高の旦那様だわ」

「そだね……」

どうやら昨日のことは綺麗さっぱり忘れてしまったようだ。

メーブルと俺は目と目を合わせて、まあその方がいいだろうと密かに笑いあった。

「それより早く飯食わないとやつらが来ちまうぞ。ほら……」

少しは旦那様らしいことをしようと、俺はベッド中のシエラハに手を貸して起き上がらせて、同じことをメーブルにもした。

それからバルコニーの方に出て、市長邸の方に再び目を送ると、人だかりのようなものが見えた。

「急げ、もう集まってるぞ」

「だ、だったら早く出てってよ……。き、着替えられないでしょ……」

「むしろ、ここで嫁鑑賞モードに入っとく……?」

「そんな時間はないっての。じゃ、下で先に食ってるぞ」

「つまんない……。ペロン……」

「なっ……。ぬ、脱ぐなアホーッ?!」

「はあっ……。そういうの男女でリアクションが逆じゃないかしら……」

不意打ちで肌をさらしてくるメーブルに、俺はとっさに顔を覆って下の階へと逃げていった。

男女が逆というより、メーブルが男で、俺たちが女だった方がバランスが取れたのかもしれないなど、どうでもいいことと、一瞬見えてしまった肌を思い返しながら逃げた……。

で、そういうわけだ。急ピッチで朝の身支度と食事を済ませるとうちの工房に総数50名ほどの有志が集まっていた。

彼らは俺と姉妹を取り囲み、追加生産分の白銀の導きが支給されるのを固唾を飲んで待ちかまえていた。

「お、おおおおお……!!」



今回は工業的に大量生産しようということで、オーブと水槽を使  
つての調査だ。

ツワイク生まれのこの独自技術は、有志（半数がジジババ）たち  
を多いに驚かせた。

急ぎの動員が出来て、かつシャンバラの緑化を切に願う者たちと  
なると、こういった現役を引退した連中が中心になるのは仕方がな  
かった。

20分ほどの調査時間をかけると、ついに完成した。

沸き上がる蒸気が工房を白く包み込み、乾燥した砂漠の気候によ  
り瞬く間に晴れてゆくと、水槽の中に現れたのはおびただしい数の  
『銀の導き手』だった。

ニアアが拾ってきた白銀のコインを入れていないためか、それは  
白銀色ではなく銀色だった。

「すまん、どうも作りすぎたみたいだ」

乱暴に言ってしまうえば、100対くらいはありそうだった。

「凄いのう……」

「ワシも長いこと生きたが、こんな凄まじい術は見たことがないぞ  
……」

「は、最近の子は凄いのねえ……」

続いてメープルとシェラハがてきぱきとくじ引きのヒモを配って  
いった。

彼女たちは同じ模様がペアだと説明して、俺もそのうちから一本  
を引いた。

ヒモの下部には赤と黒の線が7本走っている。  
同じ模様のペアを求めて、人でごった返す工房の中をうろつろと  
する。

知っているやつだと気楽でいいな……。

なんならあのときみたいにな、シエラハとくっついて砂漠をラクダ  
で歩きたい。

「おっ……」

「あらあん……」

俺の相手は秘めたる願い通りの『知っているやつ』だった。ただ  
し……。

「出たな、妖怪……」

「やーだあ　タマタマ坊やじゃない！　今日はあなたとずっと一  
緒なの？　やだあっ、うーれーしーいーっ」

その中でも一番濃ゆいやつだ……。

顔見知りでかつ同性である分、気楽ではあるが、どんな精神攻撃  
をしてくるのやら今から既に恐ろしかった。

「ミヤアアアーツツ、なんでまたメープルとミヤアアーツツ……！」

「ニヤンニヤンパラダイス……始まりました……」

メープルはあの姉御肌のネコヒトとペアになったようだ。

手をワキワキさせながら、白い毛並みの持ち主ににじり寄ってい  
る。

「あら……」

「参ったな。よりもよって弟子の嫁さんかよ……。おい、よろしくな……」

シエラハは工房の隅の壁で、だらしなくもたれていた男　うちの師匠とペアになっていた。

「はいっ、よろしくお願ひします、お師匠様。うちのユリウスがいつもお世話になってます」

「はっ、そりゃこっちのセリフだ。うちのバカ弟子を選んでくれてありがとよ」

……意外と仲良くやれているようだ。

しかしそうになると、師匠が余計な話をしないか心配になってくるな……。

「さ、イキましょユリウスちゃん」

「あ、ああ……。わざわざ朝っぱらから悪いな……」

「いいのよ、アタシもシャンバラに緑が生まれる姿を見てみたいもの。それに……」

「それになんだ？」

ためるような思わせぶりな言い方をするので、早く言えと急かした。

外にはよくこれだけ確保できたなど、総数50頭に及ぶラクダが待機していた。

都市長も手伝いがしたが、政務を優先しろと義兄さんに止められたそうだ。

偉くなると大変だな。

「タマタマ坊やと一緒に朝立ちも悪くないわあ、んふふっ」

「どうしてアンタは無理矢理にでも下ネタに繋げたがるんだろっな……」

「だって、坊やの恥ずかしがる顔がかわいいんだもの」  
「そうかよ……」

俺はオカマと一緒にラクダにまたがって、まだ肌寒い朝の砂漠に旅立った。

メーブルの仕込むクジは、どうもおかしな結果ばかり出るような気がするのよ、俺の気のせいだろうか……。

「あらそう……坊やも苦労してたのね。お師匠さんには感謝しないといけないわね……」

カマカマ野郎は二人でゆっくりと話してみると、包容力があるというか、面倒見の良いやさしい姐さんだった。

彼女（？）と話していると不思議と言葉があふれてきて、俺はどうでもいいプライベートまで話のネタにしてしまっていた。

「ああ、飲んだくれの師匠が城下町をほつき歩いて、たまたまそこに通りすぎた子供に魔法の才能を見出さなければ、俺はここにはいなかった。下手をすれば他の孤児みたいに、都市に寄生するギヤングになっていたかもしれん」

運が良くて職人。悪くてその日暮らしの宿無し労働者。最悪は10代で命を落とすギヤングの道だ。

「うふふ……坊やは、お師匠様を意識し過ぎなのよ」

「俺がアイツを意識……？ まあ、意識せざるを得ない厄介な人なのは間違いない」

「でもね、坊やの話聞いた限りだと、アタシはこう思ったわ。貴方はお師匠様のことをとても尊敬しているのよ。だから今のだらしない姿にイライラしちゃうの」

言い当てられたようでギョツとした。

確かにそうだ。俺は師匠を尊敬している。だからこそ、今の姿に

納得がいかない。昔はもう少しまともだった。

「アルヴィンスは、昔は本当に立派な男だった。それが今ではって、どこ触ってんだ……」

「だってほらあ、うふふ……落ちたら危ないじゃない？ あたしが、ユリウスちゃんを守ってあげないと」

ラクダに揺られながら、俺が前に座って銀の導き手を構えて、カマ野郎が手綱を握っている。

そのカマの片手がなぜか俺のふとももに置かれていた。

「安心して。アタシ、ノンケには手を出さない主義よ」

「現在進行形で出してるじゃねーかっ！！」

「オホホホ、こんなの愛撫みたいなものよ」

「愛撫ってなんだよっ、そこは挨拶って言えよっ！？」

一緒に騎乗して一つわかったことがある。

この受付、なぜ冒険者として前線に立っていないのか理解不能なほど、極めて鍛え上がった身体をしている……。

取っ組み合いになったらお前は勝てないと、隆々としたその体躯が俺に告げていた。

「それで、お嫁さんたちとはどうなの？ まだ手を出してないんでしょう？」

「そうやって断定するな……」

「そんなの見ればわかるわよっ！ くっついたり離れたりする思春期のカップルみたいで、んもあーっ、甘酸っぱいんだからもっっ」

「人の背中で、腰をカクンカクンさせんな……っ」

肘でヤツのわき腹を突いても、鋼の筋肉に跳ね返された。  
それでもしつこく抗議の肘鉄を何度か入れると、やっとこさ落ち  
着いてくれた……。

「あややだ、アタシったらつい……っ」

「次は俺が後ろに乗るわ……っ」

「えっ、アタシを後ろからどうするつもり……っ?」

「どうもしねーし……っ」

なんてバカなことをやっていたら、銀の導き手から目を離してしまっていた。

これはローラー作戦だ。迷宮の見落としはシャンバラの未来のためには許されない。

「あのね、ユリウスちゃん。メープルとシエラハゾちゃんのことだけど…… 2人ともね、ユリウスちゃんが男気を見せてくれるのを待っているはずよ」

「……そうなのか?」

許されないのだが、その話は興味の絶えないところだった。

「そりゃそうよっ!? だって結婚したんでしょう!? 甘ああい生活に期待しているに決まってるじゃない!!」

「そ……そうか……っ」

俺はこれまで女性と付き合ったことがない。

国に仕える魔導師として仕事漬けであったし、国も俺たちが世俗と交わるのを推奨していなかった。

だからよくわからん……。

「だがあの2人は俺にはまぶしすぎる。俺は2人の笑顔を見ているだけで幸せだ」

「何ちつちな男の子みたいなこと言ってるのよおっ!? 襲っちゃいなさいよっ!!」

「んなこと出来るかつ、このアホーッ!!」

「うふふふふ……んもうっ、もうダメッ我慢できないっ! ユリウスちゃん……んもーっ、かわいいわぁーっ」

「あっこらっ、カマカマ野郎っ!? カックンカックンさせんなって言ってんだろっ?!」

「いいのよ、いいの……アタシが手取り足取りレクチャーしてあげるわ……。さあ、お尻を上げごらんさ　　なんじゃアリアアア　　ツツ?!」

己の背の上で暴れるオカマ野郎を、ラクダはさぞ迷惑に思っていただろう。

ところそのオカマボイスが低く雄々しい絶叫に変わった。

それもそのはずだ。

俺たちの持ち場は『闇の迷宮』があったあのゾーナ・カーナ邸の周辺だった。

そのゾーナ・カーナ邸の跡地に、突如として天から青い光の柱が降り注いだとあれば、誰だって驚く。

通常はここまで雄々しく立派な声にはならないだろうが……。



「ダウジングは中止だ、行くぞ！」  
「あらやだ、強引ね。でも、そうね……」

俺は銀の導き手をしまい、彼の手にあつた手綱を横取りして、ラクダを光の柱に向けて走らせた。

カマカマ野郎の方も切り替えが早かった。

コイツ、受付になる前はどこで何やってたんだろうな。  
すぐにこれがヤバい事態になる可能性を察していた。

「ラクダって遅いな……。気が変わった、転移するから下ろしてくれ」

「バカ言わないで。あのときだつて坊やはあそこで死にかけたじゃない。あそこにやつらの群れが待ち構えていたらどうするのよ？」

「なるようになる」

「ダメよ、そんなの水くさいじゃない。さ、しつかり 掴まっ  
いやがりなさいよっ！ オラアアーツ、ちんたら走ってるんじゃないわよっ！！ ケツにモロヘイヤぶつ刺すわよっ？！！」

カマの気迫に恐怖したラクダは、さっきまでの速度が嘘のような爆速で砂塵を立てて駆け抜けていった。

「アンタ、地の声の方がカツコイイぞ」  
「嬉しくねえわよっ！！」

非常事態だというのに、ついつい俺は笑ってしまっていた。  
いつかこいつが喜ぶこともしてやりたいな。

・白百合来る

闇の迷宮があつたあの神殿から、奥へと10mほどの場所が光の柱の発生源だったようだ。

既に怪異が収まっているのに、なぜわかるのかと聞かれれば、そこが爆心地だったからと答えるのが適当だろうか。

元は荒れ果てた庭園だった場所が、今では地表ごと吹き飛んでいて、陥没した地中より石の寝台と、13体のエルフ像が現れていた。そしてその寝台に、白いエルフが横たわっているのだから、俺たちは驚きに言葉を失ってしまっていた。

「あら大変っ、あの子、傷だらけじゃない!? 早くタマタマ食べさせてあげなきゃっ!」

「タマタマゆうなって言ってるんだろが……」

俺たちはラクダを下りて、さらにその陥没の中へと下りた。そこにいたのは、剣と弓を持った青い髪の女性だった。

その白い肌は一般的に知られるエルフのもので、彼女は俺たちが駆け寄ると意識がよみがえったのか、弱々しく薄目を空けた。

「あ……ここ、は……」

「大丈夫っ、何があつたのっ!？」

「お願い………を……助け………助け、て………」

「おい、本当に大丈夫か、おいっ!？」

その女性が弱々しく何かを言い掛けた。だが上手く聞き取れない。彼女はそれつきり目を開けず、俺たちに容体を心配させた。

「何やってんのよっ、坊やのタマタマ出しなさいよっ！ あたし今日タマタマ持ってないのよおっ！」

「大声でタマタマ、タマタマ、タマタマゆーなっ！！」

俺は一部の淑女にご好評の、丸くてぷにぷにのエリクサーを取り出した。

断じてこれはタマタマではない……。

タマタマなら持つてるだろうがこのカマ野郎と、まかり間違っても突っ込んでほならない……。

「さ、貴方が与えなさい」

「……は？」

「ほら水筒よ、口移しで飲ませてあげなきゃ死んじゃうかもしれないわ。早くなさい」

「ちよつと待て……。なんでその役割を俺がやらされるんだよっ！？」

「決まってるじゃない。オカマの口付けと、若い男の子の口付けじゃ、あたしなら断然後者よ！！ はーやーくーしなさいよっ！！」

なんて説得力のある言葉なんだ。

俺は医療目的だと腹をくくって、とにかく急げとエリクサーを噛み砕き、美味しくてついそのまま食べてしまいたくなるのを堪えて、さらに細かく噛み砕く。

それから少量の水を含み、青い髪のエルフの唇へと自分のものを

重なると、少しずつ薬を彼女の口腔へと流し込んだ。

「ん……んっ、あっ……う……うあ……」

何せ相手が気絶しているのに、処置には時間がかかった。

甘い声が聞こえたような気がしたが、聞こえなかったことにした。

「このことは内緒な……」

「はあ……いいもの見れたわあ……んふふ、燃え上がっちゃう  
」

「鎮火させとけ。それより人を呼んでくる、この女性は任せたぞ」

「あら、あたしにいつてらっしやいのチツスわあ……？」

「あるわけねーだろ……。若者をからかって楽しいか……？」

「坊やとお喋りは最高に楽しいわ さ、急いで。いつてらっし  
やい」

間違いない。コイツ、シャンバラで一番濃いわ……。

俺はしかめっ面に苦笑を浮かべてから、亜空間の中へと身を投じた。

「ミヤアーツ、また痴漢男が現れたニヤアツ?!」

「また着替え中だったのか、久しぶりだな」

「出てけニヤアツ!」

「そうはいかん。2、3名の人員をゾーナ・カーナ邸まで頼む。出来れば医療経験のあるやつがいい」

「わかったから出てくニヤアツ!」

「そう言われても胸毛しか見えん」

近隣のオアシスに転移して、兵舎に協力を求めると二つ返事で人員を割いてもらえた。

こうしてローラー作戦の片隅で、白いエルフの女の子が保護された。

.

見つかった迷路の数は、今日だけで37に達した。

これならば、都市長の狙い通りに、欲しい素材をピンポイントに狙うことが出来る。

生産量はあまり変わらないが、選択肢の広がりという意味では大躍進だった。

しかし

光の柱と共に現れた謎の少女は、翌日になっても昏睡状態から目覚めることはなかった。

## ・砂漠に再び緑を

それから1週間が経った。

1週間を目処に、国家の総力を挙げて迷宮から取りつただけの素材を調達することになって、俺たちもギンギンポーションの量産という形でそれを陰から手伝った。

これは素材あたりの歩留まりを高めるためでもある。

釜ではなく、オーブと水槽で作るツイイク式の術を使うならば、ためてから一度に作った方が効率が良かった。

そして今日。倉庫に山となってひしめいた植物系魔物素材と、大地の結晶を使うときがきた。

大地を復活させるという夢に、多くのご年輩方が工房に集まって、量が量だけに非常にじっくりとした調合を、茶飲み話と一緒に見守っていた。

「邪魔くさい……」

これは古い時代から生きるエルフたちの夢だ。

丁寧に、慎重に、じっくりと時間をかけていった結果、既に調合開始より現在1時間半が経過していた。

「ユリウスユリウス……せっかく人がいるし……。エッチなことしよ……？」  
「……？」  
「しない」

メーブルはさっきまで、マク湖の最長老さんにかわいがられてい

た。

それが音もなく俺の後ろに立って、バカなことをささやいた。

「なんで……？」

「人前だからだ」

「人前じゃなくてもしなくせに……」

「そ、それは……それは俺にも考えがあるんだよ……」

メーブルは俺の隣に立って、見よう見まねでオーブへと魔力を供給してくれた。

この子は補助魔法の天才なので、仕込めばいつか錬金術も使いこなしてしまつかもしれない。

「やーいやーい、ザーゴザーゴ、ユリウスのヘタレ」

「くっ……」

「私もだけど、姉さんも、エッチなこと、期待してるよ……？」

そのシエラハはお茶をご年輩に配って回っている。

ジジババたちは古めかしいボードゲームを始めたり、食べ物を持ち込んだり、俺たちには到底わかるはずもない昔話を語り合ったり、人の工房でやりたい放題だ。

「大事な調査中なんだから、集中力をひっかき回すな……」

「あ、そだった……。じゃ、またね、ユリウス」

そんなシエラハのところに、メーブルがとてとと軽い足取りで飛んでゆくを見送った。

ところが何を話したのか、入れ替わりでシエラハがこちらにやってくる。

顔が赤い。何かを吹き込まれたようだった。

「し、澗瓶……借りてくるわ……。ま、任せて……！」

「それはメーブルが吹き込んだデタラメだ……」

「えっ!?!」

「ニヤニヤ……。おしっこするの、手伝ってもらえばいいのに……」

長時間の調合中にそういう嘘を吐かれたら、真に受けるかもしれないな。

シエラハはしてやられたとメーブルに怒っていたが、そんな怒り方で反省するはずもない。再犯は間違いなかった。

それからもう30分じっくりと作業してゆくと、ようやく手応えが返ってきた。

「みんな……やっと、完成するって……」

メーブルの声は小さかったが、彼らジジババからすれば待ちに待った瞬間だ。

会話が少しずつ途絶え、こちらに注目が集まって、俺はその注目を浴びながら最後の仕上げをした。

都市長を含むご年輩方が水槽の前に集まっている。



その彼らの前で、爽やかな若葉の香りがする薄緑の蒸気が上がった。

「あの薬とどうも見た目が違うようですが……?」

「ホントだ……」

水槽の中に、エメラルドのように透ける種もみが生まれていた。

「そこはアドリブだ。まくならこっちの方が使いやすいだろうし、薬の状態よりじっくりくるだろ?」

「それもそうですね。しかしこんなに来るとは……素晴らしい、素晴らしいですよ、貴方は」

ジジババは諸手を上げて大喜びしていた。

水槽にたつぷりと積もった種もみを、元気な連中が袋詰めして、それを行政区とバザーオアシスの双方に近い辺りの砂漠まで運んだ。

・

「さ、砂漠に緑が……」

「おお……これは、夢じゃなからうか……」

「はああ、ありがたや、ありがたや……」

そこに小さな種もみを一つ蒔くと、2cm四方ほどの草原が生まれた。

夢のような光景にジジババたちは年甲斐もなく大はしゃぎした。

……緑であふれていた昔を思い出したのかもしれない。

「綺麗……。これって凄いわっ、まるで神様の奇跡みたいだわっ！」  
「ヤバ……。これ、テンション上がる……。面白そう、私も蒔きたい……。」

うちの嫁さんたちも大興奮だった。

俺からすると小さな奇跡も、エルフの血でも騒ぐのか、キラキラと目が輝いていた。

追加で同じ場所に種もみを落とすと、草がさらに深くなって若木が生えた。

蒔く密度によって、草原になったり、森になったり、緑の濃さが変わるようだ。

若木は森の復活を意味する。またもやジジババたちが興奮に沸き上がった。

さらにひと摘まみを取って、フライパンに塩でもまぶすようにふりかけると手のひらの下に緑が広がっていった。実験成功だ。

「ユリウスツ、私もやるっ、それやるっ、ちようだいっ！」  
「実験成功だ。後はみんなで好きにしたらいい」

そう答えると、爺さんとシエラハがそろって種もみ袋に飛び付いていた。

俺はヒューマンなのでよくわからんが、彼らにとってこの不思議の種もみは、特別に美しい花火のように見えるのかもしれない。

2人が辺りに緑をまき散らすと、他のご年輩方もそれに加わって、俺たちの四方で緑が次々と蘇っていった。

確かにこれは神の奇跡でも見ているかのような気分だ。

白い砂漠が草原に変わってゆき、木々が大地より生えて林を作り、薄ピンクの小さな花々まで現れた。

誰もが笑顔で、夢中で種もみを握っては不毛の砂漠に蒔き、そこに生まれた緑に目を輝かせた。

そうしているとシエラハが俺の隣にピタリと寄り添ってきたので、普段の彼女らしくない積極性に驚いた。

「シエラハはもういいのか？」

「うん、ちよつとだけ貰ってきたわ。家の前に少しだけ蒔かせてもらおうと思って」

それは国家事業の私物化では？

なんてつまらないことを言うほど俺も愚かではない。

「しかしこれは想定外だ。ここまで強烈な効果になるとは……」

「この一週間、シャンバラのみんなでがんばったんだもの。当然よ」

「そうだな、そこが特に大きいだろうな」

最初は小さな小さな公園のつもりでいた。

だが確保した素材の量に加えて、じっくりと調合したのも幸いしたのか、俺たちの周囲で爆発的に緑が広がっている。

「これはあなたが作った森よ。あなたがこの夢のような光景を作ったの」

「おだてるなよ」

「だってそれが事実だもの！ 都市長がずっとあたしたちに見せたかったものを、貴方が実現したの。それって素晴らしいことだわ！」

広がってゆく森を、俺はシェラハと一緒に見つめていった。  
何せ出来上がった種もみの量そのものが膨大だ。

全てを使い尽くした頃には、断言は出来ないが目視で直径80m  
ほどの巨大公園に変わっていた。

シャンバラ全体から見ればあまりに小さい。

だが、シャンバラに暮らす民にとってそれは奇跡であり希望だっ  
た。

「おお……みんな、集まってきた……」

「そりゃそうだ。砂漠にこんなでっかい緑が生まれたら、暇なヤツ  
は見物にくるに決まってる」

バザーオアシスの方角から、緑に惹かれるように人々が集まって  
きていた。

蘇った緑の大地に誰もが感嘆の声を上げて、中には舞い上がるお  
調子者までいた。主にお調子者気質のネコヒト族だったが。

「シャンバラに緑の大地が……」

「信じられない……」

「都市長っ、我々は出資が足りなかったようだった！　これは投資す  
るだけの価値のある事業ですよっ！」

「とんでもないニヤッ！！　歓楽街で美形エルフはべらすよりずっと  
有益で面白いニヤアツッ！」

最後のはネコヒト族にかしづくイケメンを連想させたが、聞かな  
かったことにした。

希望であふれる彼らの姿は、俺にも金の正しい使い道がなんであ

るか、指し示してくれたように思う。

「ユリウスさん、私の次のお願いを聞いていただけますかっ!？」  
「いいぞ。アンタのそんな笑顔を見せられたら断れるわけがない」

「シャンバラには、もっともつと資金と素材が必要です！ でしたら、何も育たない不毛の砂漠に次は耕作地を築きたいのです！」  
「耕作地の拡大か。バカ正直でいいじゃないか」

普通なら諦めるしかない夢だ。しかしこの光景を見てしまった今となつては違う。

そしてこのシャンバラ最大の弱点は耕作地の狭さだ。

それを克服したとき、それは革命にも等しい奇跡をこの地に起こすだろう。

「ですがユリウスさん、そろそろ報酬の方を受け取っては下さいませんか……?」

「そこは爺さんたちの笑顔で十分だ。なんなら跡継ぎにしてくれてもいいぞ。俺の方が先にぼっくりと死ぬがな」

都市長が悲しそうな顔をしたので、その言葉は撤回することになった。

だがどうあがいたって俺の方が先に死ぬ。それが俺たちの宿命だ。せめて死ぬ前に、ありつたけの奇跡をこのシャンバラの大地に刻んでから死んでやろうと、この時は思った。

「んもうつ、最高よ坊や！ ああつ、アタシのジャングルも隆々になつちやう……っ!! いでえっつ?!」

神聖な瞬間を汚されたような気がして、軽く本気のローキックを  
カマのケツに入れて済まないと思っている。

・砂漠に肥沃な耕作地を作ろう - エッチ…… -

耕作地を築くならば、当然ながら水と、砂ではない土の大地が必要だ。

土壌に関してはあの新緑の種もみを使えば、砂を土に変えることも出来るが、製造には大地の結晶と植物系モンスター素材が必要になっってくる。

断言しよう、非効率だ。

10年単位のビジョンで見ると、未来への先行投資ともなるが、現状ではマンパワーと貴重素材を消費し過ぎてしまう。

ならばどうすれば最低限のコストで、最高の結果を得られるのか。その晩の俺は暖炉の前であぐらをかいて、思っていたより厄介な宿題に頭を悩ませていた。

「ジョン（・・・）」

「俺はユリウスだ……」

そこにニア×2がとてとてとやってきた。

「ゴ命令ノ、品ヲ、ゴ用意、シマシタ。ゴ確認ヲ」

「ああ、もう集めてきてくれたのか。お前らはマジで働き者だな……」

……

ニアにサボテンの種の収集を依頼した。

シャンバラの広大な砂漠全てを緑化するのは、俺の一生を捧げても無理だ。

そこで錬金術の力で、砂漠への順応性をさらに高めたサボテン強化種を作れないものかと、ニアに回収を依頼していた。

「ん……小分けになっているのか？」

「ソツチハ、アロエベラ、デス。竜舌蘭モ、回収、シテオキマシタ（・v・）」

「ゴーレムとは思えない自発性だな……」

「ロボ、デスカラ（・|・）」

小さいけど超地道。それがニアの凄いところだ。

3種類の種がぎっしりと小袋に詰められていた。

アロエはポーシヨンの材料、竜舌蘭は確か……酒になるとも聞いたことがある。

どちらももっと増やしたいところだ。

「助かった。ニアのおかげで新種のサボテンを作れそうだ」

「テへ……コレカラモ、ガンバリマス（〃〃）」

そうしていると、てっきり寝たと思っていたやつが2階から降りてきた。

寝間着姿のシエラハだ。胸の谷間やふとももの露出するその格好は、見ているだけでこう、ついつい思考が停止してしまう刺激だった。

そんな俺の視線を受けて、シエラハはライトボールの魔法を消して、暖炉の暗い光の中に美しい姿を隠してしまった。



「もう……そんなに見ちゃいやよ……」

「す、すまん……つい……」

「ニヤニヤ、ナノデスヨ（＝|＝）」

「あら、そこにいるのはニアア？ お帰りなさい。最近見なかったけれど、どこかに行っていたの？」

「ジョン、カラ、極秘任務ヲ、少々（・・）」

この件はまだ伏せていた。

エルフたちは本当に緑が好きなので、そんな彼らをぬか喜びさせたくなかった。

「秘密だ。じきに打ち明ける」

「もう、夫が妻に隠し事するの……？」

「必要ならな。それよりそっちこそどうした？」

「あなたの様子を見に来たの。都市長の依頼のことで、今日はずっと考え込んでいたでしょ……？」

「ああ、まだ答えが出ていない。耕作地には水と土が必要だが、両方を揃えるとなるとなかなか……」

「あの種もみでは、お金がかかり過ぎるって言ってたわよね……」。

あ、そうだわ、ニアアに聞いてみたらどうかしら？」

ニアアに……？ そういう発想はなかった。

俺とシエラハは、暖炉の前に座り込んだ変な自称口ボを見つめた。余談だが女の子座りでシエラハが腰掛けると、つついその脚に目を奪われてしまう。

「ユリウス、どこ見てるのよ……」

「すまん……」

一方のニアの方は何やら考え込んでいた。  
どこから来たのかわからん奇妙な存在だからこそ、俺たちにはない発想を出してくれるかもしれない。

「……土管。土管ヲ、敷設、シテミテハ、ドウデシヨウ（ーー）」  
「なんだそれは」  
「爆発しそうな名前ね……」

「違イマス。粘土ヲ使ツテ作ツタ、筒デス（・ー・）」  
「ああ……それならツワイクで見たことがあるな。確かその筒と筒が繋がるようになっていて、その中に水を流すんだっただか」  
「つまりどういうこと……？ うう……顔を見なさいよつ、エ、エ  
ツチ……ッ」

また怒られてしまった。

そうやってモジモジとされると、カマカマ野郎の言葉が蘇ってくる。

結婚したのだから、シエラハも期待していると。

「すまん……」  
「い、いいわよ……。わざと、この格好で来たんだもの……。あなたが喜ぶと思って……」

「え」  
「じよ、冗談よ……っ」  
「オオ……コレガ、砂糖大盛り……（＝＝） アテッ……（・へ・）」

ニアの硬い頭を小突いて、俺はニアの話を噛み砕いた。  
土管。砂漠。耕作地。川。なるほどな……。

「つまり、あのコンクルを用いて土管を作り、その土管と土管を繋いで、砂漠の下に地下水路を敷設しろってことか？」

「ハイ。アトハソレヲ、川ニ繋イデ、耕作ニ、適シタ土地ニ、運ベバ……」

「あっ、それで土と水が揃うのねっ！ いいじゃないっ、それってユリウスの錬金術と噛み合っていると思うわ！」

全部言われてしまった、というやつだ。

俺たちはニアに感謝して、地下を通して水を運ぶという発想に胸を高鳴らせた。

シエラハと目と目が重なると、さらにドキドキが膨れ上がって、  
またもや視線を外せなくなった。

「デハ、オ邪魔ロボハ、引ッ込ミマス。オ幸セニ……（ーーー）」  
「ゴーレムのくせに気を使うな……」

「男ハ、度胸、デスヨ、ジョン（・へ・）」  
「だから、俺はユリウスだ……」

ニアは器用に全身を使って階段を上ってゆき、俺たちに見守られながら上の階に消えていった。

俺たちは暖炉の前に取り残されて、恐る恐ると視線を重ねる。

「シエラハ」

「は、はいっ……！」

「今夜は、どうも少し変だ……。もしお前が嫌でなかったら、これから、お前の唇を奪ってもいいか」

暖炉の明かりにブロンドをキラキラと輝かせながら、美しいエルフの美姫がコクリを首を縦に振った。

背中を抱くと、サラサラの長い髪が腕にからみ付いた。

俺たちはぎこちなく唇と唇を重ね合って、そのまましばらく抱き締め合つと

「じゃ、じゃあ……。あたし、行くな……。おやすみ、ユリウス……」

「おやすみ、シエラハ。こんなかわいい嫁さんと一緒にいられて、俺は幸せ者だ」

自分たちがそれ以上の行為を行う勇気のないヘタレ同士だと、残念な事実気づくことになった。

「ふふ……。つ。あたし、ユリウスとキスしちゃった……。つ」

シエラハが幸せそうに唇を押さえて、はしゃぐ子供のように軽やかな足取りで独り言と共に2階に消えてゆくと、やはり惜しいことをしたような気がしたが、今さら手遅れだった。

「はあつ、姉さんかわいいね……」

「ナツ……。ンナアアツツ?!」

ちなみに、寝ていたとばかり思っていたメールに、一部始終を見られていた件については、蛇足なのでこれ以降は省くものとする……。

翌朝、日課通りにポーションを生産すると、引き渡しや都市長への報告をシエラ八に任せることになった。

「姉さん……ユリウスに、行ってらっしゃいの、チューは……？」  
「し、しないわよっそんなの……っ！」

「でも、昨日はあんなに……」

「そうやって姉をいじめるな……ほら行くぞ。また後でな」

「う、うん……。いつてらっしゃい、ユリウス……」

一人で候補地を探しに行くと言うと、メーブルがくつついてくることになった。

俺を護衛しようというわけではなく、ただなんとなくだそうだ。

俺たちはまだ肌寒い時刻に家を出て、市長邸でラクダを借りると白い砂漠に出た。

まずは彼方に見える氾濫川を目指す。新たな耕作地は、そこから水路を引いたどこかになるだろう。

「ユリウス……」

「なんだ」

「昨日の……昨日の姉さんと、ユリウス……超エロかった……」

「うっ……。またその話か……」

「だって……。普段あれだけ控えめな姉さんが、あんな……。エロ

過ぎる……」

「そこは普通、嫉妬しないか……？」

「フ……それは、小者の発想……」

「お前は大物過ぎるわ……。痛っ、つねるなっ！」

朝の砂漠は肌寒い。背中に張り付いたくつつき虫が、デリケートゾーンをつねってきたので肘を入れてやった。懲りている様子はまったくくない。

「それよか仕事しろ、仕事。爺さんの夢を叶えてやれ」

「姉さんとは、いつエッチするの……？」

「んなっ……ひっ、ひひひっ、人の話聞けよっっ！？」

「フッフ……」

氾濫川までまだ距離がある。それでも砂漠の中には、砂ではない土の大地が混じることがある。

そこに水路を通してやれば、そこが新たなる耕作地となる。俺たちが探しているのはそういった開拓の余地のある土地だった。

「私がユリウスの立場だったら……姉さんを、メチャクチャにしてる……。あのばでえは、たまらんですよ、へへへ……」

「おっさんか、お前は……」

氾濫川の辺りには農村が広がっている。

そこまで行ったらまず聞き込みをしよう。

始末に負えない厄介な嫁にしがみつかれながら、俺たちはまだ冷たい砂漠を進んでいった。

「畑が広がるなら大歓迎だ！ 情報はないがうちの茶を飲んでいっ  
てくれ。おーいお前っ、噂の大錬金術師様来たぞー！」  
「何朝っぱらから寝ぼけたこと言ってるんだい！ 噂のユリウス様が  
こんなところに来るわけ ヒツ、ヒヤアアツツ?!」

農村の連中はどいつもこいつも純朴というか、みんないいやつら  
だった。

日に当たる仕事ゆえか、砂漠エルフの中でも特に肌が黒く、それ  
にみんな明るかった。

「大げさだろ……」

「ユリウス、変わったね……。虚栄心の塊、だったのに……」

「いやそこまで酷くねーだろ。あ、どうも……」

「うち……」

奥さんがぬるいお茶を出してくれたので、それでのどを潤した。  
旦那さんはラクダのために水をくみに行ってくれている。

「ああ、そういう土地ならどこかにあったと思うよ。このまま川沿  
いに進んで行きなよ」

「本当か？」

「あたしらあまりこの辺りを離れないから、断言は出来ないけど、  
そういう土地は珍しくもないよ。ただ、どうやって砂漠の上に水を  
引くんだい……？ 水路を作っても、砂に全部水を吸われちゃうか、

お日様にもっていかれちまうよ?」

「砂漠の下に管を通すんだ」

「へえ……ヒューマンは凄いこと考えるもんだねえ……」

夫婦に感謝と別れを告げて、俺たちは氾濫川沿いの農村を離れた。そうして砂漠へと戻ると、川を遠巻きに見ながら砂の上を歩く。

明確ではないが、そういった土地があるという目撃情報が得られたのはなかなか大きかった。



「おい、何やってる……」

「あ、おかまいなく……」

そんなこんなでまたラクダに揺られて、ぼんやりと空と白い砂漠を見つめてゆくと、メーブルが何やら怪しい拳動を始めた。

いや怪しいというか、何を考えたのやらラクダの上で、その体をグルリと反転させたのだ。

先ほど一度降りたときに、彼女は俺の前に座り直したので、俺たちは身体の正面と正面を向け合うことになった。

「お構うわ。もう一度聞くぞ、何やってんだ……」

「私、衝動に任せて行動してるから……そう聞かれると、少し返事に困る……。ふう……。でもやっぱ、こっちのが、落ち着く……」

小さなエルフは人の肩に顎を置いて、ガツチリと人の胸にしがみついていた。

いや、こっちは全くといって落ち着けないんだが……。

「そうか、もう好きにしろ……」

「嬉しいくせに……」

「否定はしない。だが人に見られたら赤っ恥だぞ……」

「通報、されたりして……。プツ、ウケる……」

「いや笑えねーよっ?!」

だがこっちの方があつたかいし、やわらかくて、いい匂いで、落ち着くかと言われたら、段々と落ち着いてくるから不思議だ。もう彼女の好きにさせて、俺は砂漠の彼方だけを見つめた。

ニアのプランは面白いが、こうして調査してみると大きな問題が発覚した。

それは川沿いを離れると、耕作に適さない砂の土地がどこまでも続く点だ。

つまりこれでは、かなり長大な用水道を作らなければならなくなる。

「あ、ユリウス……大変……」

「もう大変なことになっている気もするが、どうした？」

「あそこ、砂漠じゃないっぽいよ……?」

「おっ、おおっ……よし行ってみるとしよう!」

「うんっ! 私、テンション、上がってきた……!」

「ぐっ……そんな強く抱きつくな、苦しいだろ……っ」

メーブルの視線を追うと、白ばかりだった世界に微かに赤茶の色合いが混じっていた。

ラクダを走らせてみるとかなりの面積だ。だがわかってはいたが川からだいぶ遠いようだ。

さらに進むと、俺たちは広大な赤土の大地にたどり着いていた。

「パサパサの、カチカチだね……」

「そりゃ水気があつたら既に誰かが畑を作つてるだろ」

「どうやらこの辺りは窪地のようだ。水は高い場所には上つていかないの、距離という難点こそあつたがなかなか理想的だ。」

「しばらくその赤土の大地を探索してから、窪地を出てみれば氾濫川は遙か彼方だ。」

「見たところ距離にして1.5kmくらいはあるだろうか。」

「水路を造るにしても、2mの長さの土管750本分だ。製造から敷設工事まで、これは生半可な作業ではなかつた。」

「だが、この広大な耕作地面積は魅力的だ。」

「上手く水を運ぶことができれば、シャンバラの食料自給率を大幅に改善し、迷宮以外の働き口を増やすことになる。」

「ユリウス……ここ、かなりいいかも……」

「奇遇だな、俺もそう思った。ここならスラムの連中の働き口にもなりそうだしな」

「学も知恵も武勇もない者は、商人にも冒険者にもなれない。」

「だが余剰の畑があれば話も変わる。」

「昔の友達、ここに連れてきたい……。まだあつちで、くすぶつてるから……」

「その前に水を通さないと始まらないな」

「スラム育ちのメープルにとつても、やりがいのあるプロジェクトのようだ。」

「興奮してきた……。そうだユリウス、キスしよ……?」

「んなつ、何言っただよっ……?! お前つ、お前衝動のままに生き過ぎだろ……っ?! ちよ、本気かつ、本気なのかつ、ちよっ、ちよおおっ?!」

「逃げるな、ベイバー……」

「砂漠のど真ん中で襲われる側にもなれよっ?!」

「だったら……旦那にキスを拒まれる、新妻の、気持ちにもなっ  
て……っ?」

「う……っ」

「あ、隙あり……」

「んむっ!? むっ、んむぐううーっ?!!!」

俺がこいつとのキスを拒むのには相応の理由がある。  
こっぱずかしいのもあるが、最大の理由は、さも当然と舌を入れ  
てくるからだ……。

俺は小柄で年下で世にも愛らしいエルフの少女に、超テクニク  
に、男児の尊厳を蹂躪された……。

「ん……ん……っ。ぷはっ……はああ……っ、えかった……」

「う、あ……うっ……くっ……」

「やっぱりユリウスは、反応、面白いから好き……」

抗議の言葉も出なかった。

少女はうつとりとした表情で蹂躪された俺を見ると、甘えるよう  
にまたしがみついた。

「もう少し、調査するぞ……」

「おっけー……。飽きたらセクハラ……旦那に、セクハラ……？」

「旦那相手でもセクハラはセクハラだろ……」

片手で手綱を引きながら、ギョツとメーブルの背中を抱き締めて再び砂漠に出た。

すると途端におとなしくなるから不思議だ。相手が退けば踏み込んでくるが、逆に踏み込まれると弱い。こいつはそういうやつだった。

「恥ずかしい……」

「あれだけやっておいてよく言う……」

それからかなりの距離をラクダに歩かせて、太陽が高く昇ってフードが必要な日差しと気温になると、まあこんなものだろうと調査の結論が出た。

候補地はあそこしかなさそうだ。

つまりは場所をどこにするにしろ、最低で2mの土管750本分が必要だということだった。

## ・少年ユリウスとマリウス

その晩、幼い頃の夢を見た。

それは工房の長マリウスと、同じ孤児院で暮らしていた頃の夢だ。

あの頃はまだ9歳くらいだっただろうか。

俺たちは少しでも稼いで、孤児院の生活をマシにするために、その日も靴磨きや煙突掃除の仕事を請け負っていた。

「ようガキども。ほら財布出せ、ポケットの中も見せな」

中には俺たちを哀れんで、多めに金を払ってくれる金持ちもいた。だが、その善意は全額俺たちに渡らない。

子供が必死で稼いだわずかな儲けも、町のギャングに半分以上をむしり取られてしまうのが日常だった。

「へへへ、今日はだいぶ稼いだみたいだなあ。明日もせいぜいがんばれよ」

金を巻き上げられようと、俺たちはギャングに従うしかなかった。

王都のどこもかしこもギャングの縄張りで、そこで商売をするには上納金が必要だった。

「悔しいな……。もっともっと、院のみんなのために稼げたらいいのにな……」

「俺はあんなふうにはならねえ。マリウス、俺たちだけでも助け合

っていいかげん……」

「うん、もちろんだよ。君とボクは親友だからな、ユリウス！ お前がピンチになったら、俺が助けるからな！」

「だったらお前のピンチは俺が助ける。俺たちは絶対にギャングに入らない、約束だぞ！」

将来、片方が窮地に陥ったらそれを助ける。ギャングには入らない。

そう約束したことを今さらになって俺は思い出した。

なのに俺は、ツイイクに戻ったあるとき、金だけ渡してアイツの前から去った。

マリウスにとってその行いは、裏切りに映っただろうか。

それからまた別のある日、俺たちがいつものように大通りぞいの裏路地で商売をしていると、そこに酒臭いローブ男が現れた。

「よう、その小僧！」

「あ、はい、煙突掃除ですか、靴磨きですか？ 人への伝言や配達の種類もやっています、どうぞなんなりと」

「いや、俺あ客じゃねえよ」

「なんだ、媚び売って損した……」

「おじさん、ボクたちに何か御用ですか？」

「藪から棒にすまんがな、テメエなかなか目立つというか、とんでもねえ潜在魔力をしてるじゃねえか。こりゃ、掘り出し物かもわからんな……」

そのおじさん入りかけのお兄さんは、マリウスではなく俺を見て言っていた。

「そういうアンタ誰？」

「気を付けるよ、ユリウス。コイツ、男色家の変態オヤジかもしれないぞっ！」

「男しょ　おまつ、いくらなんでもそりゃ失礼だろがつっ!？」

マリウスがそう誤解したのは、その男が俺に才能を見いだしていたからだ。

路地裏でギャングに金を巻き上げられる商売をするしかない、哀れで学のないガキに、男は熱心な目を向けていた。

「いいかよく聞きやがれ、俺様は宮廷魔術師のアルヴィンス様だ。……なあ小僧、テメエ、クソみてえな人生を変えてみたくはねえか？　テメエにはバカみてえに高けえ潜在魔力がある。俺と一緒に来たら、今の人生観が嘘みてえなエリート街道を歩ませてやるぜ？」

言葉を疑う俺たちに、アルヴィンスは小指から親指まで、順番に魔法の炎を移して見せて黙らせた。

本物の宮廷魔術師だ。俺は本物の宮廷魔術師にスカウトされた。

「本当か……？　俺も、お前みたいに魔法が使えるようになるのか……？」

「おいつ、ユリウス！　こいつうさん臭いぞ、信じるな！」



うさん臭いのはアルヴィンスの地だ。

俺はその日、クソみたいな人生から救い出してくれた恩人、アルヴィンス師匠と出会った。

そしてそれは孤児院との別れでもあった。

俺は師匠が見せてくれた希望に溺れて、親友のマリウスの隣から去った。

「そういえばアイツ、工房を取られてしまったとか、やたら荒れてたな……」

目覚めると朝日が部屋に差し込んでいた。

俺は1人用のベッドから身を起こして、己が今はシャンバラの地で暮らしていることを再認識した。

既に眠気はない。ベッドから立ち上がり、白ではなく昔の黒ロブに袖を通すと居間の暖炉に火を放つ。

そうだ、もう1度遠征しよう。技術者として成長したマリウスの元に向かい、親友をこのシャンバラに招こう。

エルフの技術者を疑うわけではないが、信頼がおけて、優秀で、おあつらえ向きにちょうど今フリーになれるやつといえば、アイツしかない。

ということで、一足先に工房に入り、ポーションを完成させてから、ツワイクに行ってもいいかとメーブルとシェラハに相談した。

「いつ？」

「今日」

そう答えると、メープルは無言で俺の胸に飛び込んできた。

シエラハにはそんな気配はなかったが、つられて二人の距離を詰めて、それから寂しそうに手を握ってきた。

「行かないで、とは言わない……。だけど、ぶっちゃけ、超寂しい……」

「そうね……。でも、だからって止められないわ……。ユリウス、出来るだけ早く戻ってきてね……。あたしも、あなたがいないと寂しいから……」

「すまん、目的が片付き次第すぐに戻る」

それから朝食を共にして、二人が食べ終わるのを待つと都市長のところに転移した。

するとまたもや書斎にアルヴィンス師匠が同席していた。

話によると師匠はシャンバラの歓楽街が気に入ってしまった、そこにある酒場宿を借りたらしい。

「ちょっとツワイクに行ってくる」

「おめーバカだろっ！」

師匠に一蹴された。そうだろうな、俺の失踪間もなくして闇ポ―

シヨンが現れたとなれば、向こうは俺が裏切ったと推測しているだろう。

「友達をここに引き込みたい。同じ孤児院の生まれで、国に工房を奪われた男がいる。あれを引き込めば、ツワイクの技術の一部が手に入る」

「ふむ……ではこうしましょう。名前と居所を我々に教えて下さい。次のキャラバン隊に使いを頼みましょう」

「いや、ソイツはかなり面倒な性格なので、俺が直接説得した方がいい」

「んん……てめーの知り合いに、そんな野郎いたっけか？」

「いますよ」

「工房……めんどくさい性格……。ん……。ああ、もしかしてあのガキか？ ユリウスを連れて行かないでって、俺んところに乗り込んできてよ。あの時はピーピー泣かれて手を焼いたわ」

「ああ……。そういえば師匠もマリウスと面識がありましたね」

「アレを引き抜くか……。だがアイツは……。お前、嘘だろ……」

「なんです、らしくもなく口ごもったりして」

「おめー……。ずっと同じ孤児院で暮らしていて、気づかなかったのか……。？ いや、あり得ねーだろ……」

「だから、なんなんですか？」

「一つ聞ぐが、アイツと一緒に風呂入ったことあるか？」

「孤児院に風呂なんてあるわけじゃないですか」

「あー……。そうか。まあ、じゃあ、そうだな……。マリウスにはや

さしくしてやれ。嫁にするように、やさしく付き合え。わかったな  
?。」

「無理ですよ。師匠が俺を拾い上げた日から、アイツと俺はずっと  
ギスギスしてますから」

「俺のせいだよ……」

話がまとまった。

これから5日分の仕事を前倒しで済ませるので、そういう形で手  
配してくれと都市長に依頼した。

「まるで嵐のような決断力ですな。お任せを」

「わがまま言ってますまん」

「なあ……バカ弟子よ」

「師匠、さつきからなんですか……?」

「あのガキはよ、マリウスはよ、ユリウスを連れて行かないでくれ  
って、俺に言ったんだよ。アイツはよ、てめーとずっと一緒にいた  
かったんだ。だから、弱ってる今だけでもやさしくしてやれ……」

「そんなのわかってますよ」

「はあ……。お前もお前で厄介な性格してるぜ」

そんな余計なお節介に俺は反感混じりにうなづいて、約束通りに  
5日分の仕事を一気に片付けた。

「じゃあまたな。俺も寂しいが……なんか喉に引つかかった魚の骨みたいな感じでな、どうしてもアイツを　んぬあつ?!」

出発前、銀と金の姉妹に両頬へと口付けされた。

「ペロペロ……」

「ギャツ?!　こ、こらっ、なっ、何しやがるっ!?!」

さらにメーブルは人の耳にかぶりついてきた。

「舐めてみた……」

「えっと……あ、あたしも舐めた方がいいのかしら……?」

「シエラ八まで何言ってるんだよっ!?!」

「ハアハア……そういう反応、いい……。お別れの前に、つねっ  
ていい……?」

「お断りだ!　それじゃまたな、必ず戻るから待っていてくれよ!」

「それフラグ　あっ」

逃げるように俺は世界の裏側へと転移して、遙かなるツワイクに  
向けて歩き出した。

繰り返すがアイツはかなり面倒な性格なので、交渉にしばらくか  
かるかもしれない。

だがこの素材を見せれば、少しはその気にさせることが出来るは  
ずだ。

待っているよ、マリウス。工房を奪われたというなら、俺がお前  
に新しい工房をくれてやる。

シャンバラの発展にはお前の技が必要だ。

ツワイクに到着するともう真つ暗闇の夜更けだった。

繁華街の方はまだ明かりがポツポツと灯っていたが、他はひっそりと音もなく寝静まっている。

俺は記憶を頼りに旧友の工房へと再転移して、ライトボールの魔法で店の看板を確認した。

本来ならばそこに『シルヴァンス工房』と記されているはずなのに、真新しい看板に変わっていた。ツワイク国営第47番工房だそうだ。

「こりゃ酷いな、何も名前まで奪わなくてもいいのに……。アイツが荒れるのも当然だな」

ライトボールを小さくして裏に回ると、蜘蛛の巣が顔に引っかかった。

こんな時間に訪ねても、普通ならドアなんて開けてくれない。

そこで俺は裏口を見つけると、短距離の転移魔法で扉をすり抜けて、まあ要するに不法侵入した。

奥から明かりが漏れている。どうやらまだ起きているやつがいるようだ。

何やらブツブツと小声が聞こえるが、扉が邪魔してうまく聞き取れない。

さっきと同じように扉をすり抜けると、小声の主はやはりマリウスだった。

「ああ、また間違えた……。こんな簡単なミスをするなんてどうかしてるよ……。はああ……。せつかく工房も上手くいったのに、どうしてこんなことに……」

シャンバラで美人の嫁さんたちが待つている。1秒だつて惜しい。だからすぐに声をかけようとしたのだが、その独り言の重い内容といい、マリウスから放たれる陰鬱な雰囲気といい、どうにも声をかけにくかった……。

「ここは俺の工房だ……。それがなんで、あんなはした金で奪われなきゃいけないんだ……。看板まではがすなんて酷すぎる……」

マリウスは本格的に参っているようだ。

マリウスには悪いが、彼が苦境にあればあるほどに勧誘の成功率が上がるので、俺は性悪にもほくそ笑んでいた。

「ユリウスもユリウスだっ!!」

ところが自分の名前がいきなり飛び出してきて、つい声を上げそうになった。

「国を捨てて出て行くなんて！ これじゃ、張り合いがないじゃないか……」

マリウスのやつ、俺のことをそんなふうに思っていたのか……。ついこの前まで、マリウスのことを忘れて姉妹にのぼせ上がっていたのが、少し申し訳なくなった。

「それにアイツ……。アイツ、絶対……。俺のことに気づいてない……」。



なんで気づかないんだよ、あり得ないだろ……」

「気づかないっていうか、今ちようどこにいるんだけどな」

「キヤッツ?!?!」

声をかけると、マリウスが作業台からひっくり返った。

どうやら彼は馬車用の鉄の車輪を作っていたようだ。

「よう、人生どん詰まりって顔だな」

「うるさいっ!! 　　というか、なんでここにいるんだっ!?!」

「お前に頼みがあつてきた」

「アハハハハハ! 俺はもうお前が頼る価値のある人間じゃない。

俺はただの雇われ工房長だ……。今の俺は、自分の好きに物を作る  
ことすら許されていない……。こんなの笑えるだろ……」

言葉にマリウスの作業場を見回すと、鉄の車輪だけがひしめくよ  
うに並べられ、それ以外の完成品はどこにもない。

鉄の車輪だけ作らされているのだろうか。

だとしたらこんなのは才能の無駄づかいだ。

マリウスは広い得意分野を持つ万能型の職人だというのに、特化  
型の仕事をさせては宝の持ち腐れだった。

「めんどくせーやつ」

「なんだと!?! 幼馴染みが落ち込んでるんだから、少しは慰めた  
らどつだよっ!」

「そついうのは俺とお前のノリじゃないだろ」

「うるさい……。こっちは本気で落ち込んでるんだ……」

あ、いかん。マリウスにやさしくすると師匠にしつこく言われたんだった。

しかしついついこの顔を見ると、ちょっと荒っぽかった孤児院時代のノリに戻ってしまう。

ウェーブのかかった長い黒髪は、普通ならば女たちがほおっておかないだろうに、やはり神経質な性格が災いしてか浮ついた話をまるで聞かない。

そんなマリウスに、昔したように背中をポンポンと叩いて慰めると、途端におとなしくなっていた。

「昔はよかった……」

「そうというのはジジイになってから言えよ」

「はあっ……。やっぱりわかってない……」

「孤児院時代よりマシだろ。雇われ工房長でも、孤児院出身の俺たちからすれば大出世だ」

「うるさいっ、そんなのわかってる！ だけど、あの頃はお前がいたんだっつー!!」

マリウスのその悲痛な叫びに心を飲まれてしまって、俺は沈黙で返すことしか出来なかった。

それでもかつての親友を助きたい一心で立ち直って、また背中を叩いて慰めた。

「知らなかった」

「こんな本心、お前に言えるわけなかったからな……」

「工房の話じゃない。お前がアルヴィンス師匠に直訴しに行っただなんて、本人に聞かされるまでずっと知らなかったよ」

「へ……？　ア、アイツ……あの頃のことをお前に話したのかわかんない？　うっ……ク、クソ、恥ずかしいな……。そんなの、遙か昔の話だぞ……」

よくわからんが、恥ずかしがっている割にとても嬉しそうでもあった。

「置いてって悪かったよ。でも師匠は才能があるって言うてくれたんだ。てめーは生まれながらのエリートだから、死ぬ気で努力すれば人生を変えられるってな……」

「そのことならいいんだ……。あの頃は俺も子供だったんだ。だけどアイツ、宮廷魔術師長を首になった途端に、姿をくらましたって聞いたけど……いったいどこで会ったんだ？」

その質問は、本題の方向に話の流れを運ぶいいきっかけだった。俺はマリウスの隣を離れ、もったい付ける形で正面側から向き合った。

「師匠なら今うちにいる。シャンバラがえらく気に入ったみたいだ」「お、お前っ？！　エルフ側に寝返ったのかっ！？」

「ああ、嫁さんも2人貰っちゃった」「なっ、んなああっ……？！！」

甲高い声でマリウスは絶句した。そのまま腰を抜かしそうになったので、またマリウスの背中に腕を回して、やけに動揺しまくる彼をうかがった。

「そんな大声だすことないだろ」

「だ、だって……だって、そんな……ユリウスが、結婚……そんな、しかも、2人も……」

「だったらお前だって結婚すればいいだろ。シャンバラにきたら、かわいいエルフの嫁さんを都市長が紹介してくれるはずだぞ」

「そんなの紹介されても困るよっつ!!」

「だよなー。俺もそうだった。けどたまたま気の合う2人が出来てな、それで気づいたら お、おい？」

へなへなと脱力してゆくマリウスを、俺は地に膝を突いてソフトランディングさせた。

俺に先を越されたことがそんなにショックだったのか……？

まあいいか。シャンバラの方向にも話を運べたことだ、口説き落とすとしてしよう。

「さて本題だ。マリウス、お前は俺に付いてこい」

「え……」

「俺と一緒にシャンバラにきてくれ。俺には仲間が必要だ」

「仲間……仲間……仲間か……。はああ……っ」

親友として熱い誘い文句で口説き落とすつもりだったのに、マリウスはまるで泣き出すように両手で顔を覆ってしまった。

何が不満なのかまるでわからん……。

「ああそうだ、これを見てくれ。これを見たら元気が出るはずだ」

シャンバラから持ってきたとある白い石を見せた。

それはコンクリルを使って、砂漠の砂を固めた物だった。

「……なんだそれ？」

「ほら、職人なら当ててみるよ」

「あ、ああ……。なんだ、これ……」

石を渡すと、次第にマリウスはその未知なる素材にのめり込んでいった。

硬さを確かめるように指で叩き、勢いよく立ち上がると工具箱に飛びついた。

「なんだこれっ！？ こんな石見たことないぞ！？ 恐ろしく硬く頑丈で……、ほらっ、ヤスリに当ててもちっとも削り取れやしない！」

「それ、俺が作ったんだ」

「嘘だろっ！？」

「なんで疑う。名前はコンクリル。基礎素材のコンクリルに砂と水と混ぜ合わせるとそれになるんだ」

マリウスは他の誰の反応よりも強く、新素材コンクリルに引かれていた。

端正な顎に手を当てて、険しい顔をして素材にのめり込む姿は、生き生きと生きていてホッとした。

「それって凄くないか……？ お団子みたいに、どんな形もできる  
ってことだよな……？ しかも硬くて、強くて、色合いも白くて綺  
麗だ……」

「石材のように、重たい石を石切場から運び回らなくてもいいとこ  
ろも魅力だぞ。水と砂さえあればどこでも作れる」

「焼かなくてもいい煉瓦みたいなものか……。型に流し込めば好き  
な形の石材も作れるし、これ、面白いな……！」

まるで少年みたいに目を輝かせていた。

そんなマリウスを見てみると、自分まであの頃の無垢だった少年  
ユリウスに戻ってしまいそうだった。

「いい発想だ。実はな、マリウス、シャンバラで今、大きく国が動  
き出そうとしている。そこにツイイクの技術者がいれば百人力だ」

エルフが自然と共存する種族ならば、ヒューマンは自然を征服す  
る種族だ。

それぞれ持ちこたえる技術に得手不得手がある。マリウスを誘う価値  
は大きい。

「俺と一緒にこないか。シャンバラにはお前の力が必要だ、マリウ  
ス」

他にもシャンバラの良さを語ってしまいたかったが、これ以上は  
蛇足だろう。

夏の少ないツイイクと比べたら、砂まみれだろうとあそこは楽園  
だった。

「わかった、行ってもいいけど条件がある」  
「全部飲もう、さあ言え」

「俺ががんばった分、孤児院にお金が流れるようにしてほしい。それとうちの工房から1人連れて行く。それが最低の契約条件だ」  
「いいぞ、俺にはまったく損がないしな。ぜひそうしよう」

「いったい誰を連れてゆくつもりなのか少し気になった。確実に自分に付いてくるという、確信があつての発言に聞こえたからだ。」

「なら決まりだ、俺は君と一緒にシャンバラに行く！」  
「では段取りについて話そう。その足でシャンバラ国境まできてくれ。そこまできたら、シャンバラの商会を訪ねてくれ。そうすればエルフの連絡員が迷いの砂漠を通してくれる」

「わかった、3日で行くと伝えておいてくれ」  
「み、3日だと……？」

「3日でお前に追いつくから待っている！」

そんなに急がなくてもいいと、言い掛けて引っ込めた。  
早くきてくれる分には助かるし、ちよっと前まで落ち込んでいたから水を差したくない。

「それと、フツ……お前に少しだけ面白い話をしてやる。孤児院には寄ったか？」  
「いや、真っ先にここにきた」

「行かなくて正解だ。政府から見張りの女がやってきて、ずっとあ

そこに張り付いてる」

「ああ……とうとう睨まれてしまったか」

世話になった古巣に迷惑をかけているのは心苦しい。  
だが悪いのはやつらだ。俺は悪くない。

「睨まれる？ はははっ！」

「違うのか？」

「いいか、よく聞け、今やお前はな……。お前は、マキス侯爵カサエルだ  
！ どうだ、笑えるだろ、アハハハハッ！！」

「……はあ？ お前、何言ってるんだ……？」

この日、俺はアリ王子が国から追放されたことと、形式上とはいえ破格の爵位が与えられたことと、己の身柄に莫大な懸賞金がかかっていることを知った。



・白百合目覚める

その翌日、シャンバラでは

・白百合

終わりのない悪夢から飛び起きると、そこは白くて暖かい世界だった。

ベッドはふかふかでやわらかく、目覚めた部屋の内装は宮殿のよう立派だった。

どうやら誰かがボクを保護してくれたみたいだ。

身を起こすと戦の傷が今さらになって痛んで、全身の傷に丁寧な処置がされていることにまた驚いた。

「帰らなきゃ……」

ここが女王陛下が言っていたシャンバラだろうか。

身を起こして少し歩くだけで、柔軟性を失った傷口が引っ張って痛い。

それでもどうにかしなきゃと、ボクはろくすっぽ回らない頭で部屋を出た。

廊下に出ると窓辺に寄った。

「え……」

そこにあっただのは砂と湖の国だった。

見たことのないひよろりとのっぼな木々に、光であふれたまぶしい世界があった。

そしてそんな世界で、浮き上がるように青く輝く湖がたたずんでいる。

「うっ……。熱いな、こっ……」

それに惹かれるように建物を出ると、ジリジリと熱い日差しがボクの肌を焼いた。

それでもあの湖が気になって、ボクは涼しそうな湖水に近付いた。

大きな建物から出ると、左手に神殿を改造したかのような白い建物がある。

あそこだけ花に囲まれていて、砂の中に小さな緑があつて綺麗だった。

「ん……。ちよつとしみる……」

オアシスの水は浅いところはぬるく、奥の方はひんやりとしていた。

ボクは辺りを見回し、誰の姿もないことを確認すると、衣服を脱ぎ捨てた。

処置をしてくれた医者には悪いけど、水を浴びてすっきりしたかった。

「つつ……。痛、いたた……」

最初は痛みを感じたけれど、次第に身体が慣れていった。

ということはもちろん治りかけているということだ。

ボクは湖の　　オアシスの奥まで入って、軽く背泳ぎをして浮力に身を預けた。

コポコポと、水に浸かった耳がぐぐもった音を聞き取った。

一面真っ青な空と、あまりに熱い太陽がボクの肌を温めてくれた。

「あれ……。あれって、デザートウォーター砂漠エルフ……？　じゃあ、ここは本当に、もう一つの……」

しばらく暖かさと冷たさの混じり合った沐浴を楽しむと、神殿側の湖にボクと同じように水浴びをするエルフを見つけた。

輝くブロンドと褐色の肌がまぶしい。

なんて美しい人だろうと、ボクは夢中でその人を見つめて、少しずつ距離を詰めていった。

そうすると向こうもこちらに気づいたみたいだ。

泳ぎ慣れているのか、湖をスムーズにかいて、ボクの目の前までやってきた。

ああ、そうだった……。

少しずつ頭が回っていった、水浴びどころではないことを思い出した。

「良かった、目が覚めたのね。ここはシャンバラよ。あなたは青い光の柱とともに現れて、ユリウスに　　う、うちの旦那様に保護されたの」

ボクはその美しい女性の両肩を力強く抱いた。

近くで見ると、ますます綺麗だった。でもそれどころじゃない！

「キヤッツ！？」

「いきなりごめんっ！ ボクは森リーフシーカーエルフの民、長弓隊の隊長グライオフエン！ あなたたち砂漠エルフの民に救援を求めにきた！！ お願いだ、ボクの故郷リーンハイムを救ってくれ！！」

ああ、それにしてもなんて美しい人なのだろう……。まるで女王様みたいだ……。

彼女の名前はシエラハゾ。伝説の千年王国を築いたにしえの女王と同じ名前を持った人だった。

彼女はやさしくたおやかで、すぐにボクたちの苦境を察してくれた。旦那のユリウスが憎らしくなるくらい、とても素敵な女性だった……。

・

ボクはこの素敵な女性、シエラハゾさんを信頼することにした。

なんと彼女はこのシャンバラの最大権力者の養女で、ボクが寝かされていた建物こそ、都市長こと伝説のエルフの邸宅だと教えてくれた。

これによりシャムシエル様との面会すぐに叶った。

当然、ボクは国への救援をすぐに求めた。

「なんと……それは本当ですか」

「は！ あんな神出鬼没の軍勢、本来ならば絶対にあり得ません！ ですが事実です、ボクが飛ばされた時にはもう、王都はもう陥落

寸前で……」

すると彼らは何か知っているのか、どこか驚いた様子で顔を見合わせていた。

なんだろう……。彼らの納得もやけに早かった。

「まだ一月も経っていませんが、実はこちらも同じ状況に追い込まれました」

「えっ……！？」

「亜種族を中心としたモンスターの群れが突如現れ、あわやシャンバラは再起不能の大打撃を受けるところでした」

「じゃ、じゃあ……皆さんはアレを撃退したんですかっ！？」

あり得ない。あんな軍勢に勝てるなんて、この国はどうなっているんだ！？

「ユリウスが救ってくれたの」

「そのユリウスとは？」

シエラハゾはその名前を出すときに声を大きくする。

よっぼどそのユリウスが誇らしいのか、大きなその胸を張って彼女は得意げに笑い返してきた。

「私の自慢の息子で、そのシエラハゾの夫です。強大な魔力と錬金術の才覚だけではなく、不思議なカリスマを持った男です。彼がいなければ、シャンバラの形式上の首都であるこの地は陥落していたでしょう」

それは都市長ことシャムシエル様も同様で、よっぼどそのユリウ

スは凄い男なのだど期待させられた。

その人がいれば、故郷を助けられるかもしれない。

「砂漠エルフにそんな素晴らしい英雄がいるのですか。一度お会いしてみたいものです」

「い、いえ、ユリウスは、その……」

「しかし救援ですか」

「はい、急ぎ救援部隊を編成していただきたく！ 王都は既に、陥落寸前で……。ボクたちはあなたたちを頼るしかないのです……。どうかお願いします、ボクたちを助けて下さい……」

戦闘に巻き込まれようというのだ。そう簡単な話ではないのだろう。

シラムシエル様は静かにまぶたを閉じて思慮を始めた。

彼は古くより生きる伝説の存在だ。

数々の功績を上げながらも、王とはならずシャンバラを共和制に導いたとされている。

「よっ、爺さん。爺さんが薦めてくれたあのニヤンニヤンパラダイス、最初はどうかと思っただが、なかなか良かったぜ」

「えっ、なっ ヒューマンツツ!？」

そこにヒューマンのオヤジが入ってきて、ボクは会見の場だといふのに剣を抜きかけた。

だけどそうだった、今はボクの腰に剣はなかったのだった。

「おう、ヒューマン様だが何か？ つーかさつきから話聞いてたんだけどよ、それ、間に合わねーんじゃないか？」

「ツツ……」

誰もわかつている現実と突きつけられて、ボクは苦痛のあまりに暴れる胸を押さえ込んだ。

そんなボクを、シエラハズはやさしくいたわってくれる。慰めにボクの背中をさすってくれた……。

けどなんでヒューマンがエルフの国にいるのだろう……。

「やはりそこですね……」

執事風の男が地図を取って、大きな書齋机に広げていた。

「両国の間には、ヒューマンの国が5つですか。国境通過の許可を取るだけで、正規軍の到着は1ヶ月以上も先になってしまいうでしような」

「そ、そんな……」

リンハイムにシャンバラの主力は送れない。

それは滅亡の宣告も同然だった……。

「大丈夫よ。都市長は仲間を見捨てる人ではないわ」

「一応、ツワイクでお偉いさんをやってた身だ。必要なら俺が交渉を取り付けるが、それでも半月はかかるぞ。そこから行軍となりゃ、いつになるやら……」

どうにもならない現実に、思考回路すら麻痺しかけた……。

敵と思っていたヒューマンが味方しようとしてくれているのも、混乱に拍車をかけた。

「だったらユリウスを頼ればいいわ」

「ユリウス……そのユリウス様は、そんなに凄いのか……？」

「そうよ。わたしの旦那様は凄いの！ やさしくて、強くて、ちょっと突っ走り過ぎるところはあるけれど、彼は奇跡を引き起こす不思議な人よ」

「しかしいくらバカ弟子とはいえ、この状況がどうにかなるもんかね？」

「そ、それは……。例えば、と、透明になるアイテムを作ってもらったか……」

「ははは、んなもんあったら天下取れちまうぜ」

大事な会談の席だというのに、絶望が思考回路を埋め尽くして、言葉の理解を拒んでいた。

大好きな女王様があのまま、怪物たちに殺されてしまっただなんて……そんな……。

「まずは少数を派遣しましょう。それで多少の陽動にはなるはずですよ」

少数を派遣することになって、派兵の準備をしながらユリウスという男の帰りを待つことに決まった。

ボクの面倒はシエラハゾが見てくれることになって、今日から彼女の家にご厄介になることになった。

錬金術師ユリウス。転移術の天才にして、たった一人で国家規模のポーションを大量生産してしまう男。

本当にそんな超人がいるのだろうか……。

あまりに絶望的な状況だったけれど、今は傷を癒して待つしかない



か  
っ  
た。  
。

## ・ユリウスの帰還

気が変わった。マリウスが3日でシャンバラの地を踏むと言うならば、元相棒の俺だって全力でサポートするべきだ。

なぜならマリウスはシャンバラにとって大切な客人であり、外界の技術の塊だからだ。

なので俺は、己の転移術を最大限に駆使して、マリウスの旅路を加速させることにした。

まだ10歳ほどにしか見えない愛弟子を馬の後ろに乗せて、マリウスは今、馬車駅で馬を借りては街道を駆けている。

その斡旋をしているのは俺だ。

前方の安全確保をしつつ、早馬の予約を馬車駅に取り次いでは、マリウスを待つてから次の目的地に転移した。

軍にいた頃は斥候任務が主だったので、まあこういった活動は慣れたものだった。

「嫁がいるんだろ……まっすぐ帰ればいいのに、なんで俺に付き合  
うんだよ……」

「一目置いているからだ。それに、シャンバラの外を楽しむいい機  
会だ」

馬車駅で顔を合わせるたびに、マリウスが旅の間にため込んだ文  
句を俺にたれる。

俺だってかわいいシエラハとメーブルとの生活を再開したかった  
が、親友を置いて先に戻れなかった。

次の馬車駅でも文句を言われた。

「お前、自分が指名手配されてるの忘れてないだろな……」

「ははは、大丈夫だろ。まさか侯爵が使いパシリしているとは、誰も思わないだろ？」

「なんで侯爵が俺の使いパシリなんてしてるんだよ……」

「友達だからだ」

「はああ……」

「なぜそこでため息を吐く」

「こちらの質問に答えずに馬を走り去ってゆくのを見送って、俺も次の駅へと転移した。」

「ふん……悔しいけどお前のおかげで順調だ。三日どころか、今日中に迷いの砂漠に着きそうだな」

「意外と乗り気なんだな」

「そりゃ、あのまま国に残っていても……来る日も来る日も車輪作りばかりだ……。もうなんだっていいよ、俺は……」

「助かるぜ、マリウス。こうして一緒に着てくれたことに感謝しない。また一緒にがんばろうぜ」

「ふんつ、調子のいいことを……。俺たちはもう靴磨きと煙突掃除してた頃とは違う。やるからにはプロとして全力を尽くすさ」

「マ、マリウス様あ……。お、お尻が、もう痛」

「我慢しろ」

「はひ……」

マリウスの弟子には申し訳ない気持ち半分、一緒にきてくれたことに感謝したい気持ち半分だった。

早馬で走り抜けるマリウスと弟子を見送って、馬車駅で待って、また見送る。

繰り返し繰り返しこれが続けていった。

こうしてツワイクを出立してより2日目の夕暮れ、俺たちはシャンバラの国境を抜けた。

本来はエルフの魔法が必要なのだが、面倒なので裏技を使わせてもらった。

結界の部分だけ、多少の危険を承知で、彼らを裏側の世界にご招待することでもうにかしたのだ。

師匠には怒られそうだが、ちょっとくらいならいいだろう。

ちなみにほんの少しでも早く帰るために、俺は最後の駅で馬を1匹買って彼らに渡した。

今は砂漠をマリウスと弟子が馬で駆けて、その先々で転移した俺が道案内をしているところだ。

「おい、その力、いくらなんでも便利すぎないか……?」

「不便なところも多いぞ。風景を楽しめないし、何よりも人と一緒に同じ情景を見られない。これがあまりよくないと気づいたのは、最近だな」

「はっ、ノロケ話なら他のやつにしろ。そついう話は聞きたくない……」

「そんなに嫌か……?」

「嫌だ!」

「そうか、わかった……」

何がそんなに気に入らないのやらわからん。

親友である俺とお前の関係が揺らぐわけでもないのに。

再び転移して、行政区のあるオアシスの付近でヤツを待った。

「アレだ。あれが行政区、一応このシャンバラの中心だ」

「おお……意外と小さいけど、なんて綺麗な町なんだ……」

白い砂漠の中で、青く輝くオアシスが見える。

付近にはバザーオアシスもあって、砂漠らしい砂岩の建物も物珍しかった。

灼熱の日差しと凍てつく夜を物ともせず、美しい緑を保つその場所はツワイク人に奇跡的な光景だ。

「思ったよりいいところだ。気に入ったぞ、ユリウス！」

「うう……。暑くて、溶けそうです……」

「オアシスに着いたら水に飛び込んだらいい」

「そんなはしたないこと出来ませんよおっ!？」

「本当にデリカシーのないやつだ……」

ところがそうしていると、そこに一頭のラクダが駆けてきた。

「帰ったか、ユリウスッ！」

「そういうアンタは、メープルの昔なじみの……」

「覚えていてくれたか。それより急いで戻った方がいい、一大事だ！」

「何……？ まさか2人に何かあったのか？」

「そうじゃない。俺たちの同胞の窮地だ。どうもリーフシーカーの民がモンスターの軍勢に襲われたらしくてな……頼むよ、仲間を助けてやってくれねーか……？ 俺あ救援を求めてやってきた、あのボクっ子がどうも見てられなくてよ……」

何やら妙なことになっている。

話に浮上したそのボクっ子とやはらは、もしかして光の柱と共に現れたあの白いエルフのことだろうか。

「慕われてるな。エリートぶって偉そうにしてた頃とは大違いだ」

「俺、そんなにエリートぶってたか……?」

「俺はエリートだ！ って言ってたぞ」

「あ、ああ、それは言ったかもしれん……。それよりありがとよ、おっさん」

下民の中の下民の出身だった俺には、エリートという肩書きが必要だったのだろう。

結局その肩書きも、国に使い捨てられる形で崩れ去って、気づいたら砂漠でエルフの小娘に腹をつねられる人生をしている。

「たぶん、戦いになるんだろ？ 俺も一緒に戦う頼むぜ、ユリウス」  
「……なら悪い、さっそく頼めるか。このマリウスを、市長邸まで案内してくれ。俺は一足先に行く」

「おう任せろ！ よろしくな、マリウス！」

「あ、ああ……。なんだか思ってたエルフのイメージと違うな……  
って言ったら怒るか？」

「ハハハハツ、俺だってヒューマンはみんな野蛮なクソ野郎かと思  
ってたぜ、そこはお互い様だ！ じゃ、頼むぜ、ユリウス」

威勢の良いおっさんときこちないハイタッチをして、俺は市長邸  
へと飛んだ。

・森エルフヘリーフシーカー〉救出の奥の手

ちょうど日没を迎えていたので、話と一緒に夕食をごちそうになることになった。

俺たちは邸宅の食堂に集められ、遅れて都市長と一緒に客人がやってきた。案の定、それがあの白いエルフだった。

「に、人間……！？ 君たちは人間と結婚したのかつ！？」

「そらけど？」

顔を合わせるなり、彼女は俺の耳が短いことに度肝を抜かれていた。

それに対して、メープルはしれっと返すものだから、俺も堂々とすればいいと反射的に抱いた反感を腹の奥に引っ込めた。

「で、でも……ユリウスがヒューマンだなんて、聞いてない……」

「だって、言わない方が、面白そうだったから……ニヤリ」

そこは説明くらいしておけよ……。

しかし彼女がヒューマンを嫌う理由を聞けば、まあそこは納得だった。

シャンバラは交易の中継地点として発展して、近隣諸国との友好関係を構築した。

対するリーフシーカーは森へと引きこもり、孤立主義を貫いた。

そんなリーフシーカーにとってヒューマンは、森を脅かす恐ろしい存在だったようだ。



「種族はヒューマンだけど、俺も師匠も、ここにいるマリウスも今やシャンバラの一員だ。喜んで協力するよ」

「だ、だけど……ヒューマンは悪いやつだから、近付いちやダメだつて、女王様が……」

「ふんつ、あながち間違ってもいないな。人から工房を奪い取るクズもいる。俺はマリウス、ツワイク王国出身の技術者だ。ユリウスからの勧誘により、今日からこの地に力を貸すことに決めた者だ。よろしく」

マリウスの社交能力が高くて助かった。

特に俺から紹介する必要もなく、自分から組織にとけ込もうとしてくれた。

それからグライオフエンと名乗る彼女から、現在の窮状を一通り聞いた。

その頃には美味い夕食に腹も満たされていて、宿題として残された援軍の問題をどうにかするだけだった。

「聞いてみた感想、女王が使ったというその転移魔法、俺たちが知っているものと少し違うな……。到着先でいちいち光の柱が生まれていたら、目立つことこの上ない。それにゾーナ・カーナ邸に現れたという点も気になるな」

「ええ、そうですね……」

都市長としては因縁の地だ。付け足すならばあそこで俺たちは死にかけてたくらいだ。

「あそこ、まだ何かあるんじゃないか？」

「へっ、転移魔法の才能のねえやつを、五体満足で目的の場所に転送する何か。そういう変な物がある可能性はあるな」

そこまで話がまとまって、師匠がやつとこさ口を開いた。

転送先があつた場所だつたことに何か意味があるはずだ。そこから糸口を探ってみよう。

「ふむ……もう一度、調べる価値がありそうですね」

「つまり……グラちゃんが、こつちに飛んできた方法を、解明すれば……。私たちも、同じ方法であつちに行ける……つてこと……？」

「ちよつと待て、グラちゃんってなんだ？」

「ボ、ボクのことだ……。似合わないから止めてくれと、言ってるのに……」

「むふふ……」

「妹がごめんなさい。グライオフエンさんに懐いてしまったみたい」「いえ、シエラハゾさんがそう言うならボクは別に……！」

シエラハは彼女に一目置かれているようだ。

俺の知らないうちに、姉妹はすっかりグライオフエンと仲良くなつていた。

「明日朝一で調査を行い、それでも糸口が見つからなかったらプランBといふ」

そう話を進めると、メーブルが拳手をした。

どうせろくなことじゃないことはわかつていたが、しょうがないので発言させた。

「姿を消すアイテム希望……。それがあれば、国境越えられる……」。

それに、もつとビジネス変態的な至近距離から姉さんの裸　むぐつ?!」

危なかった。こんなこともあるのかと、メーブルの口にいつでも長パンを押し込めるようにしていなかったら、俺が美姫の水浴びをのぞいているのを、最悪の現場でバラされるところだった。

メーブルは長パンをちよつとかじると、俺をからかうのが目的だったみたいでそのまま黙った。

「えっ、シエラハゾさんのなんですか?」

「なんでもない」

シエラハに流し目を向けると、胸を隠しながら真っ赤になっていた。

俺たち、次のステップまではまだまだ遠いな……。変な汗が吹き出して頭がおかしくなりそうだった。

「それでユリウスさん、プランBというのは、具体的にどういった作戦でしょうか?」

「俺が直接精鋭を連れてリンハイムに転移する」

「アホ抜かせこのバカ弟子ツツ!!　そういう使い方止めるつってんだろつ!?!」

「けど他にないじゃないですか。そうしないと全滅なんじゃない?　ならバクチしてみるしか……」

「ダアアアーツツ!!　嫁さん悲しませるようなことすんじゃないねえよっ、このドアホがツツ!!」

師匠に頭をぶつ叩かれて、プランBは却下になった。

最悪は本当に透明になる薬を作るしかないのかもしれない。

それでも向こうにたどり着く頃には、全てが終わっていてもおかしくない。となれば、バクチだって悪い奇策でもなかった。

・森エルフヘリーフシーカー〜救出の奥の手（後書き）

もし少しでも気に入ってくださったなら、画面下部より【ブックマーク】と【評価】

【いただけると嬉しいです。

いつもありがとうございます。投稿ストック0なので、これから書きます。連載もし止まったらごめんなさい！ どうかかします！

・白百合と砂漠の錬金術師は間を持たない

翌朝、俺たちは朝日が昇って間もない早朝に慌ただしく起き出して、市長邸のエントランスにて調査隊と合流した。

主な人員は冒険者たちだ。ゾーナ・カーナ邸は以前、魔物の大発生地点となってシャンバラを滅ぼしかけたため、調査隊にもそれ相応の連中が選ばれたようだ。

集合が済むと俺たちは冷たく乾いた砂漠を進み、30分ほどラクダに揺られると、あの因縁の地に到着していた。

「姉さんの実家、せっかく綺麗だったのに、ボロボロになっちゃったね……」

「あんなことがあったんだからしょうがないわ。それに都市長は、余裕ができたらここを補修するつもりみたい」

敷地に入ってみると、ただでさえ崩落寸前の建物にいくつもの亀裂が走っているのがわかった。

特に籠城地点だった神殿の方はもはや亀裂どころではなく、破壊された壁や落ちた天井がおびただしい瓦礫を作っていた。

「なあ、なんかあそこ、うっすら光ってないか……？」

「あその地下にあったあの不気味な迷宮、二人とも覚えてるでしょ。あれはそれを封じる結界よ」

なんだ結界か。  
リンハイムが襲われた今となっては、それこそが正しい判断だ  
っただろう。

「あの時は、ヤバかった……。処女のまま、死んでたまるかって、  
神を呪いかけた……。でも、まだ処女のまま……」

「あ、それはボクも少しわかる……。じゃなくて、何言ってるんで  
すか、メーブルさんっ!？」

「グラちゃんも、処女……?」

「うっ……。だって、だってボクには、女王様がいたから……」

白百合ことグライオフエンは、そこまで答えて祖国のことを思い  
出してしまったようだ。

女王様とやらはよっぽど立派な人物なのだろう。彼女の表情から  
崇拜にも近い感情を感じた。

「じゃーん……。それでは、恒例の、くじ引きタイムです……。はい、  
引いて引いて……」

「お前のクジは毎度毎度、やたらおかしな結果ばかり出る気がする  
んだが、俺の気のせいか……?」

これから手分けをして、ゾーナ・カーナ邸の全域を調べ回ること  
になっている。

崩落の可能性が高いので、このことは昨日の時点で決まっていた。

「メーブルさんが不正なんてするわけないだろ。ほら、君も引けよ」

「あ、ああ……。お前、男相手と女相手で態度がだいぶ違わないか  
……。?」

「当然だ。母にそう躰られたんだ」

「そりゃ凄い母親だな……。って、嘘だろ？」

「嘘じゃない、本当　えっ……?!」

俺とグライオフエンは互いのクジを付き合わせて、そこに同じ模様が刻まれている現実に絶句した。

すなわち、今日の調査はグライオフエンとペアを組むことになる。

これは絶対におかしい。証拠はないが、絶対に何か仕込まれているとしか思えない……。

困惑と抗議の混じり合った目でメールを睨むと、彼女は悪びれもせずにご満悦の微笑を返してきた。

人に睨まれて喜ぶなんて、つくづくこじらせた嫁さんだった。

調査が始まった。そして即、困った。本格的に困った。困り果てた。

いや別に無理して言葉を交わす必要なんてないのだが、気づけば調査開始より20分近く、俺とグライオフエンは一言も言葉を交わしていないかった。

さっきまで普通に話せていたのは、間にシエラ八とメールがいたからだ。

いざ二人だけになってしまうと、あまりにそれぞれの立場が異なる



り過ぎて、言葉を交わそうにも話題が見つからなかった。

ヒューマン嫌いの向こうからしたら、俺は最悪のペア相手だろうしな……。

「そこ、危ないぞ」

「あ、うん」

「……その、俺がペアで悪かったな」

「ああ……だけどそれはそっちもだろ。俺、男の人とこうやって話す機会、あまりなかったから……」

「そうなのか？ リーンハイムって変わってるな」

「誤解するな、違うよ。ボクは女王様の直属だから……」

「へー……」

さらに続けて根ほり葉ほり聞くこともできたが、どうしても気まずいこの感覚が拭えない。

一度長い沈黙が生まれると、そのまま会話がとぎれてしまっていた。

「いつ結婚したの……？」

次に彼女が口を開いたのは、それからしばらく後のことだ。

「メイプルとシエラ八とか？ 一月くらい前だ。あの時は式場にモンスターの大量が現れて、あわや全滅するところだった」

「そうだったんだ……。そうだった、ボクはがんばらなきゃ……」

「ああそうだな。だがそうやって焦ると怪我するぞ、そこも崩れそうだ」

「そんなのわかってるよ……」

コイツが悪いやつじゃないことは昨日の時点でわかっている。

俺だって同じ立場だったら、仲間を心配するあまりにナーバスにだつてなる。

「だから、そこ崩れるぞっ!？」

「わかつて あっ?!」

乱暴にグライオフエンの手を握ってこちらに引っ張りよせると、手前にあつた外壁が倒れるようにこちらに崩れ落ちてきた。

それから逃れるために、俺は彼女の腰に腕を回して抱き寄せることになつていた。

「ツツ……!!」

「すま　ンガツツ?!」

平手打ちがパチンとこちらの頬をはたき飛ばすと、気まずさが限界を迎えて、以降会話がなくなつていた。

白百合と呼ばれるだけあつて、彼女はとても綺麗で、密着するといい匂いがした。

さらにもう少し調査を進めてゆくと、そこにメーブルが軽いその身を駆けさせてやってきた。

一緒に暮らして知ったが、メーブルは見た名以上に軽い。

「ユリウス、その顔……どうしたの……？」

「なんでもない。それよりどうかしたか？」

「あ、そだった。ニアがお手柄。裏庭の方で、地下室、見つけてくれた……」

「庭に地下室……？ いかにも怪しいな……」

グライオフエンは俺たちのやり取りに沈黙を守って、こちらに気を使ったのか俺たちをおいて先に歩き出した。

メーブルと俺はその背中を追ってゆく。

「来てくれて助かった……」

「あ、そうそう……。あのね、あのね、ユリウス……あのね……」

何か秘密で話したいことがあるのか、メーブルがしきりにこちらの手を引っ張ってくる。

あまりにしつこいので足を止めて身をかがませると、彼女は背伸びをして俺の口元に唇を寄せた。

マントの前を開くにはまだ寒いだろうに、視線の下には健康的な小麦色の肌が無防備にさらけ出されていた。

「どうだった……？」

「どうって、なんの話だ？」

「だから……ユリウスと、グラちゃんが、一緒になるように、イカサマしてみた件……？」

「……は？」

コイツ今、なんて言った……？

イカサマ……？ アイツと俺が一緒になるように、イカサマしたって言ったか……？

「どうなったか、教えて……」

「どうもこうもねーよ、お前なんてことしやがんだ……。最高に気まずかったに決まってるだろっ！」

「フフ……」

「フフじゃねーよ。アイツもアイツで困り果ててたぞ……」

「だって、ユリウスなら、グラちゃん、たぶらかせるかと思ったから……」

「お前は俺のことをなんだと思ってるんだよ。せめて仲のいいシエラと組ませてやれよ、あんなにナーバスになってるんだからよ」

そう答えると、メーブルは何が面白いのかまたクスリクスリと笑った。

俺の返しがそんなに面白かったのだろうか。

「ていうか思い出したぞ、こらっ！ お前あのとき、俺をカマカマ野郎と組ませやがったなっ！？」

「うん」

「うんじゃねーよっ!?!」

「気が合つと、思った……………」

「嘔吐け、単に面白がつてやったただけだろっ!?!」

「うん!」

「おま、お前な……………。少しは悪びれるよ……………」

俺の抗議がそんなに嬉しいのか、メーブルはますます怒るに怒れない愛らしい笑顔を浮かべた。

コイツは人を観察して、ちよっかいをかけて、まるでそれに共感するかのように相手の反応に自己投影をするところがある……………。

「グラちゃん、寂しそっだったし……………。ユリウスの、おすそ分け、してみたかった……………」

「まあ……………。アレはだいが参っているみたいだな。って、こらっ、離れるよっ!?!」

「おんぶして……………。さながら、豚男みたいに……………」

「誰が豚男だ……………。バカなことばっか言つてると、本気で振り落とすぞ……………」

「嬉しいくせに……………」

「止める、腰を振るな……………。人に見られたら赤っ恥だぞ……………」

そうやっていつもとそう変わらないやり取りをしてゆくと、荒れ果てた裏庭に到着していた。

軽いメーブルの身体を背中に背負ったまま、俺はそこに暴かれて

いた地下階段を下っていった。

下ろそうにも、くつつき虫がかにばさみで張り付いて離れないので、恥を承知でやむなくそのまま進むしかなかったとも言っ……。

大きな螺旋を描く地下階段は、進めど進めど底が見えなかった。ちよつとした倉庫にこんな深さは必要ないだろう。俺たちはどうにもこれはおかしいと、まだ新婚も間もない色ぼけ状態から我に返っていった。

メープルは自分がくつつくと、俺が内心で喜ぶのを知っている。彼女は人の反応を観察するのが大好きなので、密着にニヤケそうになる俺を見抜いていないはずがなかった。

「これは、なんだ……?」

「なんだろ……わあっ!？」

さらに進むと壁に隙間が作られていて、そこに何か丸い物が置かれていて気づいた。

それに興味本位で手を伸ばすと、まるで可燃油に火を灯したかのように、進行方向と帰り道の両方に薄黄色の照明が灯っていった。

「凄まじいな。こんな技術、ツイイクでも見たことがないぞ」

「魔力、ちよつと吸われた……?」

「そうみたいだな」

「この技術、ちょっと欲しいかも……」

「なんに使うんだ？」

確かにライトボールを使うより魔力の効率がよさそうだ。

この照明の難点があるとすれば、魔力がなければ使えないところだろう。誰もが魔力を持つエルフらしい技術だった。

「うん、あのね……。ユリウスの魔力、吸ってみたい……好きな人の魔力と、一つになりたい……」

「うっ……。お、お前はどこまで倒錯的な性癖してんだよっ!？」

「じゃあ、エッチして……？ 私に、ユリウスのドロドロした欲望の丈を叩きつけてくれたら、その必要ない……。あてっ……」

俺は平気な振りをしながら、喉から心臓が飛び出しそうなほどの激しい衝動を抑え込んだ。

『エッチして……？』は反則だろ……。

「聞こえてるぞ……。何をバカなことをやってるんだ、君は。このロリコンが……」

ちょうどそこで階段が終わり、俺たちは下層にたどり着いた。

背中にメーブルを乗せた俺をマリウスが冷たい目で見ていた。

「これは、あまりに凶星過ぎて、言葉を失ってるね……」

「誤解を招くような勝手な解説をするなよっ!？ おら下りろっ、んなこと言っやつはもう背中に乗せてやらんっ!」

地下室はあの魔法の照明により照らされて、穴底とは思えないほ

どに明るかった。

それと部屋の中央に、巨大な棺のような奇妙な物体が転がっていた。

「これが嫁さんだと聞かされたときは、師匠の俺も言葉を失ったもんだわ。だがこう見えて17歳なんだとよ」

先に到着していた師匠と、マリウスがその棺を調べているところのようだ。

グライオフェンは胸の前に腕を組んで、静かに調査の様子をうかがっていた。

「で、なんだこれ……?」

「コレガ、特異点デス。(・・)」

「じゃあ聞くが、その特異点ってなんだ?」

「時空二、影響ヲモタラス、名状シ難イ、何カデス。(・へ・)」

そうか、俺にはまったくわからん。ニアたちも一緒になって棺を囲んでいた。

辺りを見回してみるとそこは飾り気のない空間で、これといった儀式性や生活感もなかった。

「で、これをどうするんだ?」

「いい質問だ。よしバカ弟子、そっち持て」

「ちょっと待って下さい、師匠。まさか……」

「地上に運ぶから手貸せや。おら早くしろ、お師匠様を待たせんじやねーよ」



本当にこれが特異点　グライオフエンの転移を成功させた何か  
だとするならば、言い方はしゃくだが回収する価値がある。

俺は棺の反対側に回って、それに両手をかけた。

「えっ、き、消えたっ!？」

最後に聞いたのはグライオフエンの甲高い声だった。

俺たちは世界の裏側に棺を引きずり込み、通常の方法では絶対に  
外へと運び込めない物を白日の下へとさらしていた。

・大いなる遺産 1 / 2 (後書き)

平行連載作、もふもふブックカフェの完結に合わせて、今月の新作を公開します。

その昔流行ったラグナロクオンラインのアルケミストから着想を得た、経験値独り占めのレベリングを主軸としたなろうらしいお話です。

砂漠エルフの連載もどうにか維持出来るようがんばってゆきますので、どうか公開しましたら、新作も応援して下さい。宣伝でした。

「恐らくは神々の時代に使われていたアーティファクトでしょう。何せ場所が場所ですから、間違いないかと……」

大型の荷馬車を呼び寄せて、苦勞しながらその巨大な棺を市長邸へと持ち帰ると、シャムシエル都市長はもったいぶるように吟味した後に、そう俺たちに告げた。

「具体的にどういう物なのですか？ 何かご存じなら教えて下さい」「フフフ……ユリウスくんにするような言葉づかいでも、私は構いませんよ、マリウスさん」

「いえ、ユリウスと違って最低限の節度は守ります。エルフの長相手に『爺さん』だなんて、同郷として恥ずかしいですよ、俺は」「そうやって当てつける方が非礼だろ。俺と爺さんは同志であり家族だからいいんだよ」

マリウスは文句を言いたげだったが、爺さんの話の続きの方が気になるようであえて黙ったようだ。

「驚くかもしれませんが実は昔、私はこれを見たことがあるのです。多数のエルフがこれに魔力を供給することで、少人数の転移が可能になる。そんな奇跡的な装置だったはずですよ」

「いや、ちよつと待ってくれ、爺さん。そういうアンタ、今何歳なんだ……」

「それなりに若作りはしておりますよ」

「知らなかったのか？ シヤムシエル様といたら、エルフにとつては生ける伝説だ」

「いや、それにしたつて長生きにも限度があるだろ……」

都市長の話にマリウスはますます興味を引かれたのが、さっきから棺との睨み合いを再開していた。

回収したはいいが、これがそんなにとんでもない物とは思わなかった。

果たしてこれは俺たちに使える技術なのだろうか……。

「何かわかったか？」

「大まかにはな。詳細な原理はわからないが、どこがどうなってるくらいならわかったぞ」

「ほ、本当ですかっ!？」

それに飛びついたのはグライオフエンだった。

マリウスはいきなり美人に手を取られて、かなり驚いた様子だった。

「あ、ああ、あくまで外側だけですが……。ここのこれが変換装置でしょう。ポーション工場で使っている物によく似ています」

「へー……」

「わかってないだろっ、ユリウス！」

「専門外だからな。というよりもだ、お前こそなんで超古代の技術がわかるんだ……?」

「そこは私もユリウスさんに同感ですね。どうしてマリウスさんは、我々エルフの技術をご存じなのでしょう」

「……シヤムシエル様、驚きかも知れませんがこれは、ツワイクの技術に似ているんです。見たところこの構造ならば、外部パーツの改良も出来るかと思えます」

それはまたおかしな話だ。

だが少し整理して考えれば、因果関係が見えてこなくもない。

この石の棺が示唆するところは、転移術が元々はエルフの技術であつた可能性だ。

爺さんもその結論に行き着いたのか、解決の糸口が見えたというのに難しそうな顔をしていた。

失った技術をヒューマンが使いこなしているとあつては、さぞ複雑だろう。

「俺も同じ結論だ。ツワイクからパーツを取り寄せて交換すれば、魔力の変換効率が上がると思うぜ」

「それとここの魔力を蓄えるコンデンサーも新しく出来そうです。だけど取り寄せるだけだとつまらない。ここは新しく作ってしましましょう！」

師匠が後押しをすると、爺さんは納得するようになつた。

要するにアーティファクトを現代の技術で魔改造するってことか。

工房を接收されて腐っていたマリウスが、目を輝かす姿は親友として嬉しいものだった。

「けど、作れるのかお前？」

「ユリウス、君は俺のことをなんだと思っているんだっ!？」

「だって、伝説級のアーティファクトだぞ……」

「君が働いていたポーシヨン工場に、技術を提供しているのは俺たち職人だ！」

「そうだったのか？ それは知らなかった……」

「なんで知らないんだよっ！？」

エルフとヒューマンは接点が少ないようで、目に見えないところで繋がっているのかもしれない。

救出の糸口が見えてきたからか、グライオフェンは深いため息を吐いて、やっとこさやわらかな微笑みを浮かべた。

「とにかく良いパーツを作れば、それだけ多くの援軍を大量に送れるってことだ」

「アルヴィンスさん、それは性急に国境の通行許可を取るよりも現実的なプランでしょうか？」

「ああ、中心部分の原理は俺も皆目わからんが、ツワイク製のパーツに変えるだけでも、10人くらいは運べるようになるだろ。根本的なところは俺たち宮廷魔術師の技術と変わらんはずだ」

そこで何を考えたのやら、師匠とマリウスの視線が半ば傍観者になりかけていた俺に集まった。

それは連鎖的に、その場にいた連中全ての注目に変わった。

「これからシャンバラの力を動員して、集めてもらいたい素材がある」

「そしてその素材を使って、テメーには錬金術を使った精錬をさせてやる。やってくれるよな？」

そう言われても精錬なんて一度もやったことがないぞ。  
しかしツワイク製のパーツを待ってられないとなると、パーツ  
そのものを自作するしかないのか。

「わかった。軍隊を引き連れて転移魔法を使うよりはよさそうだ、  
やるぞ」

「ではシャムシエル様、ギルドはコンデンサーの原材料になる帯電  
石と、変換機に使うレインボークォーツを調達して下さい」

精錬のノウハウなんてまったくないが、こうなっては経験がなか  
ろうとやるしかない。

俺たちだって同じ異常事態で死にかけたんだ。最初からこれは他  
人事じゃなかった。

「お任せを」

こうして一丸となって素材の調達、加工、生産の予定が組まれて  
いった。

そんな中、グライオフエンは言葉を失ったまま、ただ俺たちツワ  
イク人の顔ばかり見ていた。

「あ、あの……ボクは……」

「どうした、何か引つかかることでもあるのか？」

「別にそんなものはない……。ただ……君たちの行動が、心底意外  
で……」

「気にするな、俺は技術者としてこの話に興味があるだけだ」

「魔術師として、最高に面しれえネタなのは間違いないな」

師匠とマリウスのヘソの曲がった返しに、白い肌のエルフは拳を

握り締めて感激していた。

それから俺を見ると、何やら自分の手のひらを掴んで、何かに迷ったようだった。

「何でもするから手伝わせてくれ。そ、それと、ユリウス……あ、あの時はごめん……。お、男の人に、ああいうことされるの、慣れてなくて……。っ、ううっ……」

その言葉によりマリウスが蔑むように俺を冷たい目で睨み、師匠が下品な笑い声を上げた。

俺の顔面にビンタをくれたときのことを言っているのだろうか。

だが義父である都市長の前でそれを言われるのは、そういう言い方をされるのは勘弁してほしい……。――

「たかがビンタ1発だ」

「ダハハハハハハッ、テメエこんな美人さんにビンタ食らわされたのかよっ！？ そりゃ最高のご褒美じゃねえか！ いやあ羨ましいねえ！」

「師匠は笑い過ぎです」

その後、グライオフェンが特にシエラハに懐いている点もあつたので、うちの家で面倒を見ることにすると決めると、俺は彼女を連れて昼食と嫁さんの待つ自宅への帰路についた。

「あんな綺麗なお嫁さんがいるだなんて、ボクは君が羨ましいよ。綺麗だけじゃなくて、あんなにやさしくて、かわいらしい人なんだから……」

「その話をシエラハが聞いたら喜ぶだろうな」



「えっ……！？ い、言わないでくれっ、恥ずかしい……っ」  
「だったら言わなきゃいいだろ……」

グライオフエンのことが少しだけわかったような気がした。

コイツは……女好きだな。美人に目がなく、そのくせやけに純粹で、そこに愛嬌を感じた。

コイツの同胞ならば救ってやりたい。そう思えた。

・シャンバラ式の休日の過ごし方 - 可憐だ -

同胞の救援のために国中が一丸となっている中、空気を読まずに俺たちは休暇を取った。

遠征帰りの俺には一日をゆっくりと過ごす権利がある。

そんなわけで明日は休みと決めて、昨晩は早めの床に付いた。

「あ、おはよ」

「お、おはよう……お、起きるのが遅かったから、ただあなたを見ていただけよ……っ」

最近の水鳥のやかましい声の他に、小鳥の小さなさえずりが聞こえるようになっていた。

それはバザールオアシスと行政区の間に、万緑の大地を生み出した影響なのだろう。

「ユリウス、寝ぼけてる……?」

「ここ、俺の部屋じゃないな……」

「寝ぼけてるわね……。下のベッドをグライオフエンに貸すって言ったの、ユリウスじゃない」

そうだった。落ち着いて彼女が眠れるようにそうしたのだった。

だから一足先にベッドのど真ん中で寝させてもらって、羞恥心と同時にフラグをへし折ったのが昨晩だ。

左を振り向くとメーブルの真っ直ぐな凝視が、右を向くと慌てて顔を背けるシエラハの姿があった。

どちらもあるの無防備な寝間着姿だ。首から下はとても直視出来ない。

「スケベ心をたぎらせて、私たちを待っているかと、思ったのに……。爆睡は予想外……」

「そうよ、こっちは緊張して損しちゃったわ……。っ。ついに……。っ。て、思ったのに……」

「遠征帰りで疲れていたみたいだ。それに、お客様がいるのに変なことをするのはまずいだろ」

左右をはさまれているので、俺は掛け布団に潜って足の方から外に出た。

清々しい朝だ。バルコニーから彼方を眺めると、砂漠のご真ん中に広大な緑がそびえているのだから、絶景というか達成感があるというか、もつとあれを巨大にしたいなという野心が働いた。

「ん……。あれ、なんで俺、上、裸なんだ……。？」

「キヤアツツ?!！」

不思議に思っただけ振り返ると、シエラハが驚いて掛け布団で顔を隠した。

「メーブルの方が何か知っているって顔だな……。絶対コイツが犯人だ。」

「うん、私がやった……」

「そりゃ、シエラハはこんなことしねえよな」

「え、でも……。姉さん、意外と喜んで ムゲウツ」

「ち、違うわよっ。もっつ、メーブルだったらいい加減なことばかり言わないで……!」

「ぷは……。理不尽……。姉さん、鼻息荒くしてたくせに……」  
「し、しっ、してないもんっ!!」

可哀想だからもうそのへんにしてやれ……。

俺はメープルへと否定するように手を振って、肌着を探し出して身に付けると続けてその上に白のトーガをまとった。

階段を一段一段鳴らして居間に下りる。

部屋の扉が開いていたので自分のベッドを確認すると、グライオフェンの姿が家のどこにもなかった。

ならば外だろう。窓辺に寄って外を見回すと、案の定そこに彼女の姿があった。

「姉さん、大変……。ユリウスが、他の女に、うつつを抜かしてる……」

「人聞きの悪いことを言うな」

同じものを見せようと、着替えを済ませたシェラハに手招きをした。

ちなみにメープルは既に俺の隣だ。

潜伏魔法ハイドを家族に使うなど言っているのに、覗き見が趣味のコイツは聞く耳すら持たなかった。

「彼女、昨日もあそこでああしてたわ……。休んだ方がいいって言ったのに聞かないの」

どこで調達したやら、グライオフェンはヤシの木に板を吊して、それを的にして弓の練習をしていた。

見事な命中精度だ。見たところ的外したのは一発だけで、それ以外は全ての中心を射抜いている。

「なんか、いっぱいいっぱいオーラ、感じる……。声、かけよっか……」

「そうね。……もう、ユリウス一緒に来るのよっ」

「いや、俺もか……？ アイツ、俺のこと苦手だろ」

するとメーブルが背伸びをして、小悪魔の唇を耳元に寄せてきた。

「来ないと、あのこと、姉さんに言っ……」

「ど、どのことだよっ!？」

「フフ……。それは今朝、姉さんの姿を見た、ユリウスが……」

「えっ、わ、私っ!？」

「言っな」

俺は転移術でメーブルの背後に飛ぶと、口を塞いで家の外へと引きずり出した。

シエラハは聞きそびれてとても残念そうにしていたが、知られるわけにはいかない。黙っていると、メーブルにジェスチャーで念押ししてから解放した。

「よう、飯にしないか？」

「あ……おはよう。もしかしてコレ、うるさかったか……?」

「別に平気よ。ユリウスなんて熟睡だったもの」

「あのね、姉さん、ユリウスが大好き……。ずっと、ユリウスの顔、見てた……。あっ……?!」

ところ構わず爆弾に火を付ける困った嫁を、俺は両手で担ぎ上げ

て背を向けた。

それは20を越えても赤面をしてしまう自分の姿をごまかすためでもあった。

「ここは平和だな……。君たちが羨ましいよ……」

「そんなに焦らないで。きっとみんながどうにかしてくれるわ」

グライオフエンは弓の撃ち過ぎで指の豆が破けていたらしい。

シエラハが手当をしている間、俺とメーブルで朝食を作って食卓を囲んだ。

おっさんが辛気くさく焦る姿はただただうつつとうしいが、焦るグライオフエンの姿には憂いがあつて、元の美しさもあつて目を奪われた。

・

「ごちそうさま。君たちのやさしさには感謝したりないけど、そろそろボクは行くよ」

「あら、どこに？」

「冒険者ギルドに決まってる。ボクも素材の調達に加わってくる。

今日は宿を取るからボクのことには気にしないでくれ」

「手、怪我してるのに……？ グラちゃん、出てくなんて、冷たい……」

……

そこは俺たちに気を使っているのだろう。

俺たち夫婦の仲が良ければ良いほどに、居づらくなってしまふの

は当たり前だ。

「こんなの怪我のうちに入らないよ」

「けどお前、転移から目覚めてから1日も休んでないんだろ？」

実は当てずっぽうだ。だがコイツの性格からしてそうに違いない。グライオフエンは城壁の外周を50周回れと主君に言われたら、血反吐を吐こうと命令を果たすタイプだ。

「当然だ、休めるわけがないだろ」

「けどいつぱいいつぱいに見えるぞ。それじゃ肝心なときに動けなくなるだろ」

「うん……。がんばりすぎても、続かない……」

「そうよ。今日は私たちと一緒に休みましょう？」

俺のメープルの言葉にはまるで従おうとしなかったのに、シエラハが言うと彼女が迷い始めた。

さらにシエラハが傷ついたその手を取ると、ビクリと震えた。

「アレ、どう思う……？」

「どうって……よっぽどシエラハのことが気に入ったんだな」

「えー……」

「えーってなんだよ。この話、わざわざゴソゴソするような内容なのか……？」

「姉さん、取られても知らないよ……？」

「……意味がわからん」

俺としては、シエラハが一目置かれているようで気分がいい。

ところがこれは説得失敗のようだ。グライオフエンがシエラハに背を向けた。

「やっぱりボク行きます……。貴女に誘ってもらえたのは光栄ですが、仲間を1人でも助けたいんです……」

「そうか。んじゃ、俺も付き合おうわ」

「えっ!?!」

「ちょ、ちよつとユリウスッ!」

「それはない……。今日のお休みを、ずっと楽しみにしてたのに、それはないよ……」

「そうよ……。今日は一緒に買い物に行きたかったのに……」

迷宮攻略も楽しい休暇の使い方だと思ったのだが、シエラハが嫌々をするように子供っぽくすね始めた。

「可憐だ……」

「うん、わかる……。姉さんは、可憐だ……」

「お前ら何朝っぱら寝言言ってるんだ……」

確かに可憐ではあるが、彼女たちからは崇拜の域の何かを感じた。そうか、こいつらちよつと同性の似てるんだな……。

「ねえ、どうしても行くの……?」

「いや……そういう態度されると、かなり迷うな……」

さあどつすると白百合ことグライオフエンに視線を送ると、彼女はついに折れたのかため息を吐いた。



「わかりました、今日は休みます……。ボクは家で留守番をしているので、ご夫婦で楽しまれてきて下さい」

「それはそれで他人行儀だろう。俺たちと一緒にいかないか？」

「いえ、邪魔なのはわかってますから……」

「邪魔なんかじゃないわ。一緒に行きましょう、グライオフエン」

「へへ、決まりだね……」

まあこういう休日もあるだろう。

俺たちは一度家に戻ると、簡単な準備をしてから客人と共に町へと出た。

「なんだよ、ユリウス。また嫁さん増やしたのか？」  
「えっ……！？」

バザーオアシスにやってくると、顔見知りの店主にいきなり冷やかされた。

人間嫌いのグライオフエンには申し訳ない誤解だった。

「人聞きの悪いことを言うな。メーブルとシエラハとは同時に結婚したから、増やしたという表現は適切じゃないぞ」

「いや、同時に嫁さん2人めとるやつは、俺の知る限りお前だけだぞ、ユリウス……」

「確かに……」

「お前も納得すんなよっ！？」

八百屋店主がお詫びにプラムを1つくれたので、それはメーブルに手渡して全員分の金を払った。

「す、酸っぱ……っ？！」

「はははっ、なんだ、お前プラムは初めてだったのか？」

「あ、でも、美味しい……」

甲高いグライオフエンの声が甘くとろけた。

そつえばあの頃、メーブルと分け合って食べたっけ。

「で、何買ったんだ？」

「最近お客様が多いでしょ。来客用のお茶がもうないのよ」  
「あと、香水とか、お花の肥料も買った……」

「豚串は？」

「もち、食べる……」

シャンバラで目覚めたその日に、この豚串も食ったっけな。  
朝食の後なものもあったので、4本注文して全員に配った。

で、食いながらぶらぶらと朝から賑やかなバザーを歩く。  
花や装飾品、砂糖菓子類があると揃いも揃って彼女たちの足が  
止まって、本来の買い物の方をおざなりにした。

「ユリウス、飴ちゃんあげる……」

「あ？ いや、俺別に……んぐつ?!」

「その味、あんまり好きじゃないから、あげる……」

「食いかけじゃねーかよつ、これっ?! お前が食えっ!」

「むぐつ?! あ、あう……」

口につつまれたハツカ飴を、一瞬の隙を突いてメープルの口へ  
と戻すと、見る見るうちに褐色の肌に朱がさしていった。

自分からやる分には平気だが、押されると弱い。いつものメープ  
ルだった。

ようやく目当ての買い物が進んで、それを自宅に運びなおした頃にはもう朝日とは呼べない日差しになっていた。

ポカポカと暖かくなると、姉妹は露出が一気に大胆になる。

俺とグライオフエンはなぜか一緒に、2人の褐色の肌に見取れることになった。

シエラハが恥ずかしそうに大きな胸や足を隠すと、隣の白いエルフが感嘆を上げる。……なんとなく、コイツのことがわかってきた気がした。

「じゃ、次は歓楽街ね……」

「歓楽街？ 俺、あそこ苦手だからいいよ。留守番する」

バザーオアシスの反対側に、歓楽街と職人街を中心とした街がある。

夜のお店があつたりして、元から自分の肌に合わない土地だったが、師匠があそこに住み着いてからますます行きにくくなった。

もし見つかったら、あの性格だから絶対に俺を冷やかす……。

「違うよ、ニヤンニヤンカフェじゃないよ……？」

「なんですか、それ？」

「あのね、かわいいネコヒトさんたちが、サービス、してくれるお店……」

「な、なんとつつ！？」

高潔に見えて、意外と食いつきいい……。

何を想像したのやら、グライオフエンの表情が興奮に輝いた。

「キャバクラよりはマシだな……」

「キャバクラ……。キャバクラがあるのか……」

「紹介する……？ 私のコネなら、7割引……」

7割引はディスカウントし過ぎだろ……。

それ、どんなお化けが出てくるやら怖いものがあるぞ……。

「話がそれてるわよ……。あのね、あそこの喫茶店にね、美味しいドーナッツを出す店があるらしいの」

「ドーナッツな……」

シエラハが恥じらい混じりのぎこちない手つきで、一緒に行きたいと俺の手を取った。

そんなことをされたら、断れる旦那はこの世にいないだろうな。

「家でゴロゴロするよりは有意義だな、行くか」

「ふふふつ、ありがとうユリウス！ 私、なんだか楽しいわ……！」

「たかが一緒に喫茶店に行くだけなのに大げだろ……」

「だって……ずっと楽しみにしてたんだもの……」

しつかり者のシエラハの中には、無垢で繊細な少女が眠っている。それはきつと、幼い頃に両親に置いて行かれて、都市長に保護されたとはいえ大人になるしかなかった彼女の、もう一つの側面なのだろう。

「おお……。ねえねえ、姉さん、可愛すぎない……？」

「わかる……。美しさと、少女の純粹さを合わせ持つ高貴なる美姫

……。素晴らしい……」

「グラちゃんなら、そう言ってくれと、思った……」  
「何やってるんだお前ら……。行くなら日が高くなる前に行くぞ。ちよっと爺さんにラクダを借りてくる」

市長邸宅でラクダを帰りて引き返すと、それぞれの体格を考慮して、グライオフエンはシエラハと同じラクダに乗ることになった。いや、もっと直接的に表現するところだ。

グライオフエンはシエラハの大きな胸を背中に感じて、鼻の下をだらしく伸ばしていた。

メープルが言っていたのはこれのことか……。

「ユリウス、ユリウス、私にもアレして……」

「ん、こうか？」

「硬い……」

「そりゃそつだ。やわらかいのがいいならあつちに乗れ」

「うっん……。これはこれで……硬くて、気持ちいい……」

「際どい発言すんなって言ってんだろ……。っ。せめてお客様の前では自重しろ……」

俺たちは背中を日差しに照らされながら、なんだかんだピツタリと仲良くくつついて、噂のドーナッツの美味しい喫茶店に向かった。

「ユリウス、ユリウス……」

「なんだ……」

「硬い……」

「すまん……」

男はそういうものだ。

しかし色ボケしたフワフワとした気分も、鼻の下を伸ばしっぱなしの白百合の姿を見ると、反面教師となって冷めてくるから不思議なものだった。

「故郷にはこんな店なかった……」

喫茶店に入ると、誰よりもグライオフエンがウキウキと笑顔を浮かべ始めるのが意外だった。

茶と一緒に注文の大きなドーナッツがやってくると、目を輝かせて舞い上がっていた。

そのドーナッツは甘くした小麦粉を油で揚げたもので、さらにその上に粉砂糖を乗せた強烈な一品だ。

女性陣につられて口へと運んでみると、まあわかってた。確かにこれは美味いが、顎が外れそうなほどに甘かった……。

「シャンバラは砂ばかりだけど、世界中の食べ物が集まるのよ。だからおかげでお砂糖も安いの」

「なんていいところなんだ……」

「いや、甘過ぎないか……」

「うーうん。ちょうどいい……」

女性というのは匂いに敏感だったり、甘さに強かったり、男とは若干味覚が違うのかもしれない。

俺の方は茶を飲みながらチビチビとドーナッツをかじっているのに、彼女たちは大きな口を開けてバクバクとほおばっていた。

まあ、みんな幸せそうだからいいか……。

「あ、砂糖付いてるよ……」



「おっと、悪いな。……ンガツ?!」

「ペロリ……」

「ツツ……?!」

生温かくてザラリとした感触が、唇のすぐ隣の肌をこそぎ取った。一度ならず、入念に3ペロもだ……。

「あの、メープルさん……。大胆なのはいいのですが、ユリウスが固まってしまいましたよ……?」

「だけど、そこがユリウスの、いいところ……。あてっ」

これ以上恥じらったらメープルの性癖にドストライクに突き刺さるだけだ。

俺は平静を取り繕い、いつものようにおでこを小突いた。

あ、頭から……。ヌルツとしてザラツとした感触が消えない。鳥肌が、引つ込まない……。

「あ……。姉さんの口にも、粉砂糖付いてる……」

「ひっ……。?! あ、あたしにはしちゃダメよっ!?!」

うるたえるということは、前にやられたことがあるんだろうな……。

そこは同情であり、共感だ。シエラハの顔をうかがうと、確かに唇の横に白い粉砂糖が付いていた。

「ユリウス……。舐めたげて?」

「え……。っ?!」

「あ、あああ、アホ抜かせ……。っ! 店に迷惑だろっ、この色ボケ

がっ！」

シエラハは粉砂糖を拭わなかった。

その後、いくら経っても粉砂糖を付けっぱなしにして、俺と視線がぶつかるこそっぽを向いてモジモジした。

いや、そんな誘われても無理なものは無理だぞ……。

人前でそんなことが出来る勇気があったら、俺たちもつやることやってるだろ……っ。

本当にすまない。その期待にはとても応えられない……。

食べ過ぎだろ……。

誰がいくつ食ったのやら定かではないが、お会計によると締めてドーナッツ17個が胃袋に消えていたことが判明した。

俺は1つしか食べていないので、1人当たり大きいのを4つ食べたことになる。

今日はコイツら、晩飯いらないかもな……。

「あ、私たち寄り道するから、2人とも、先に帰ってて……」

「そ、そうなの、ちょっと寄るところがあるのよっ」

ともかく店を出ると、姉妹が急におかしなことを言い出した。

「なんだそのわざとらしい急用は……」

「じゃあね……」

「あたしたちもう行くわね。それじゃ！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、シエラハズさんっ！？ そんなの困りますっ、ああっ……！？」

シエラハとメーブルがラクダに飛び乗り、俺とグライオフェンは歓楽街の外れに取り残された。

俺とあっけに取られて、さてこれからどうしたものかと互いの様子をつがった。

「なんとなくあいつらの腹はわかるが、いきなりこういう状況を作られても参るな」

「ボクたちのやり取りがぎこちないから、無理矢理きっかけを作ろうとしてくれたのかもね。……いいよ、ボクは1人でも帰れるから君だけ先に帰ったらいい」

「それは無理だな。砂漠に慣れていないやつをここに残せるわけないだろ」

「意外と真面目なんだな……」

「意外とは余計だろ。ほら、こっちこい、こんなところに突っ立つてたらのぼせちまうぞ」

「あ、ああ……」

喫茶店を出て、小さな出店で水を買ってイスに腰掛けた。

「まだ夕方まで時間があるな」

「そうなのか……？」

「シャンバラは山がないからな、昼間がやたら長いんだ。……とい

うことで、近くの迷宮に寄ってから帰ろう」

「……へっ!？」

「腹ごなしにペアで潜ろう。迷宮に行きたかったんだろ？」

「ふ、2人で!？ 前衛は!？」

「それは俺がやる。ほら行くぞ」

直接手を取るのは失礼かと思い、水を飲み干すと彼女の服を引っ張った。

突然のことですらたえているようだな。

「ちよ、ちよっと……何言っているのかわからないぞ!？ 君は錬

金術師で魔術師だろっ!？」

「行けばわかる。ちよっと運動するだけだから付き合え」

「え、えええーっ!？」

彼女をラクダに乗せて、抱き込むように俺が後ろに乗った。

ちよっとセクハラっばいが、こっちの方が操縦しやすい。

「君っ、本気で行くつもりなのかっ!？」

「ああ。もう見えてきたぞ」

「ち、近っ?!」

迷宮の見張り番に、ペアで潜りたいと言つと冗長なやり取りがいくら続いた。

だが俺は話を押し通し、グライオフエンを引っ張って迷宮へと突入した。

「早速出てきたぞ。俺が狙う相手にはサインを刻むから、お前はそれ以外を狙撃してくれ」

「どこまで非常識なんだ……。えっ?!?!」

サインを刻んで、転移して、狩って、その3拍子を繰り返した。そうやって一緒に戦ってみてわかった。グライオフェンは強い。

麗しいその外見に騙されてしまったが、彼女は戦闘経験に富んだ歴戦の戦士だった。

次々とモンスターの急所に矢が突き刺さり、オークタイプを一撃で即死させる技量に驚かされた。

かくして俺たちは迷宮をペアで大躍進して、幸運にも地下5階のボスモンスターから目当てのレインボークォーツを入手していた。

それは鋭い三角錐をした水晶で、その名の通り角度によって色彩を変える不思議な石だった。

だがガラスよりも脆いので、宝飾品としてはあまり利用されないようだ。

それが小さな布袋1つ分も手に入った。

「これで勝算が高まったな」

「はあっはあっはあっ……。き、君という人は、な、なんて、非常識な戦い方をするんだ……。ツツ!!」

「そうか?」

「なんで不思議そうな顔をするっ!! あ、あんな魔法の使い方があるかっ! なんなんだ君はっ!!」

「俺は昔からこうなんだ。それよか、感謝の言葉とかはないのか？」  
「あ……っ」

昨日もそうだったが、コイツはどこか不器用なところがあるみたいだ。

急に下を向いて、しどろもどろと小声で何やらつぶやき出すと、それからだいぶたってから顔を上げる。

「あ……あり、うっ……。あの、その、ボク……。か、感謝……あ……ありがとう……」

「どういたしまして。さ、いい運動になったところで帰るとしよう」

「お、男の人は……実はボク、苦手で……」

「それは見ればわかる」

迷宮から引き返し、今度は自分が手綱を引きたいというのでラクダを彼女に任せて、美人姉妹の待つ家に俺たちは戻った。

夕飯のいい匂いがした。

今日の夕飯は、どうやらツイイク名物パンプキンシチューみたいだ。

「いい匂いだ……ああ、お腹空いた……」

「お前ら、あれだけ食ったのによく夕飯が腹に入るな……」

玄関を開けるとテーブルが胸に飛び込んできて、シエラハのやさしい笑顔がキッチンから現れた。

俺はそれに幸せを感じたが、グライオフェンは残してきた同胞を

思い出してしまったらしい。

その背中を叩いて励ますと、高潔な彼女は『君には頼らない』と言いたそうに調子を取り戻して、それから

「キッチンに立つあの姿……なんてかいがいしく、美しいんだ……」

「ああ、同感だ」

2人 いや、メイプルも含めて3人一緒にシエラハの姿に鼻の下を伸ばした。

・一方、ツワイクのポジション工場では

「お疲れ、工場長。ああ違った、元工場長だったな、ハハハハッ！」  
「違うだろ、便所係だろ？ おい、バカが便器の外に小便外したみたいだ、掃除しておいてくれよ、ヘンリー掃除夫さんよ」

狭量な人間は地位を失ったときに、そのツケを支払わされる運命にあるのだろうか。

善良ならば同情が集まり、悪党ならばこれ幸いと追い打ちを仕掛ける。群衆とは残酷なものだ。

ヘンリー工場長は便所の掃除夫扱いに堪えきれず、半泣きでその場から逃げ出して行ったそうだった。

だがさらにそこへとヒエラルキー上位の存在が現れた。国王に取り入って地位を得た新工場長だ。

「貴様ら何をやっている、油売ってないで仕事したまえ、仕事を。売り上げが落ちるようなら給料から天引きするからな」

「バ、バカ言わないで下さいよ!？」

「給料分はちゃんと払ってくれないと困りますよっ!？」

「だったらさっさと現場に就け。来期までに新しい錬金術師を勧誘出来なかったら、給料2割カットだぞ、わかったな!？」

「ムチャクチャですよ、そんなの……。見つかるわけじゃないじゃないですか……」

「首になりたくなかったら口答えをするな、いいな?」



横暴をまき散らして新工場長はその場を去っていった。

そんなことをしても工員たちの士気を下げただけだろうに、こう  
いう手合いが高い地位にのさばるのが世の常だ。

「まるで悪徳企業だ……」

「ていうか詐欺組織だろ、こんなの……。俺ら奴隷なんかじゃねー  
ぞ……」

「ユリウスがいた頃は良かったな……。キツイ仕込みは全部アイツ  
がやってくれたしな……」

「様を付けるよ……。どこにいるか知らないけど、今やアイツ侯爵  
様なんだぞ」

「けど噂の闇ポーション、アイツが作ってるんじゃないか……？  
だったらツワイクの敵だろ……」

「あり得るな……。俺こんなところ辞めて、アイツの側につきてえ  
よ……。錬金術師は国の奴隷じゃねえ……」

近い将来、ツワイクが闇ポーションに規制をかけることが見えて  
いる。

こいつらが手抜きをするバカなのは身に染みて知っていたが、そ  
れでも錬金術師をこちらに引き込んでやつらから働き手を奪うのは、  
あながち悪い判断でもなさそうだった。

「私が工場長だ……。私は工場長だ……。私は工場長なのだ……」

その一方でヘンリー工場長は死んだ魚のような目で、便器をブラ  
シで擦り、汚い飛沫が顔に飛ぼうとも眉一つに変えずに、不気味な  
独り言を繰り返していた。

彼の怠慢でポーションの質がさらに下がり、冒険者から死傷者が

出た可能性を考えれば、哀れではあるがやはり同情はされなかった。  
この話を聞いたとき俺は思った。こんな国に仕えたくない。侯爵  
の地位などお断りだと。

その日、俺たちは『鋼の迷宮』を下っていた。

それは壁という壁が鉄板で覆われた世にも無骨な世界で、オイルと錆の匂いが鼻についてどうにも慣れない場所だった。

「なんか、臭いね、ここ……」

「人のトーガで鼻を覆いながら言うな、それじゃ俺が臭いみたいだろ……」

「うーうん……ユリウスは、いい匂いだよ……。汗と、男の匂いがするから……スンスン……」

「お前は犬かよ……」

シエラハは前衛だが、今は後ろでグライオフエンと並んで歩いている。

どちらも鼻をひくつかせて、慣れないこの匂いに戸惑っているようだった。

「姉さんも、好きって言うってた……。ユリウスの、寝汗の匂いが特に あてっ」

「止めてやれ……」

シエラハは声を上げなかったが、俺が後ろをうかがうと、強ばった様子で赤面しながらそっぽを向いた。

それでは肯定しているようなものだろう……。

対するグライオフエンはそんな姉妹の趣味が理解できないと言い

たげに、怪訝な表情を浮かべていた。

いや俺、そんなに汗臭いだろうか……？ 服を嗅いでみてもよくわからなかった。

「しかしいくら進んでも敵の姿がないな」

「そうみたいだな……。本当にここでシンクウカンが手に入るのか？」

「さあな、俺も鋼の迷宮には入ったことがない。ツワイクでもこの迷宮は外れ枠だったからな」

例えるならば鋼の迷宮は毒魚ばかりのハズレ漁場だ。

敵が強いのにドロップや宝箱がイマイチなため、ここで何が手に入るかも詳しくはわかっていなかった。

「マリウスさんを信じましょ。あの人、とてもいい人よ。ユリウスの幼なじみなのも納得ね」

「ま、気難しいやつだけだな」

「それは、ユリウスに対してだけ、だと思っ……。ていうか、ユリウス、あり得ないよ……」

「何がだ？」

「ああ、確かにあり得ない。信じられない鈍感さだ、普通気づくだろう……あり得ない……」

そういえば師匠も似たようなことを言っていた。

しかしそう言われても気付くも気付かないも、俺にとってマリウスは見慣れたマリウスだ。

今回の迷宮攻略は、そのマリウスから『シンクウカン』の調達を

頼まれて、急ぎよその場にいた俺たちだけで鋼の迷宮を攻略することになったことが発端だった。

「あ、階段だ……。なんか、しょっぱいね、この迷宮……」

「ああ、強敵を期待したのに拍子抜けだな」

「それはユリウスだけよ」

俺たちは錆び付いた下り階段を進み、地下2階の奥へと進んでいった。

やがていかにもな大部屋にたどり着いた。

そこで俺たちを待っていたのは、空飛ぶ鉄のモンスターだった。

「ねえ、あれ……。浮いてない……?」

「う、浮いている……。翼もないのにつ、どうやってあいつら飛んでいるんだ……。っ!? あ……。っ」

グライオフエンが大声を上げるから、その奇妙なモンスターたちに気付かれてしまった。

室内をウロウロと飛び回っていたやつらが、俺たちの方を一斉に向いてジッと静止した。

「部屋の外に逃げろっ、何かくるぞっ!」

「そう言いながらなんで君は突撃を わああーっっ?!」

メーブルとシエラハは素直に逃げてくれたが、グライオフエンは俺の背を追ってきた。

そうなるも仕方がないので、俺は一瞬だけ世界の裏側に彼女を招待した。

「えっ、こ、ここ、あの時の……。あっ……。!? ど、どこ触ってる

んだっ！」

「動くな、100年後に飛ばされても知らんぞ」

よくよくその状況を捉えなおしてみれば、俺は白いエルフの細い腰を片手で抱いていた。

肉付きのいいシエラハとはまた少し違った、しなやかな感触だった。

「うっ、男臭い……」

「悪かったな。そっちこそ女臭いぞ」

「ボクは君ほど汗臭くない……っ」

「シャンバラはこういう気候なんだからしょうがないだろ……。あ、あそれより戻るぞ。あの空飛ぶ鉄のモンスターは、遠くから魔法式の何かを飛ばしてくるやつらしい。気を付ける」

再び足下に亞空間の扉を引き、俺たちは元の世界へと戻った。

少しおしゃべりし過ぎていたようだ。戻った頃には、メーブルとシエラハが交戦を開始していた。

シエラハがレイピアで刺突を放つと、硬いようで繋ぎ目にもろい部分あるらしく、深々と突き刺さった。

しかし特に有効なのはライトニングボルトのようだ。

メーブルが通路側から放った一撃が、その鉄の鳥とでも呼べるようなものを一撃で機能停止させていた。

「今の見たか？」

「見たけどいつまでボクの腰を抱いてるんだ！」

「おつと悪い。じゃあ始めようぜ」  
「早く離れろっ、汗臭い！」

俺たちは散開して、大部屋にひしめく鉄の鳥の殲滅を開始した。グライオフェンが装甲の隙間へと矢を放つと、2発に1発が深々と突き刺さって、やつらは動くことのない鉄クズへと戻っていった。

俺の方はメーブルのやり方を見習った。

電気にかなり弱いようなので、背後に転移しては低出力のライトニングボルトでゼロ距離射撃してゆく。

触れて電気を流し込むだけで動きを止めるので、これほどまでに楽な敵はかつてなかった。

どうやら俺たちと鋼の迷宮は、かなり相性がいいようだ。

「シンクウカンはっ!?!」

「ドロップにそれっぽいのはないな。よくわからん鉄クズばかりだ」

歯車に鉄板、ネジやバネのような変な物まで、マリウスじゃなきやわからないものが山ほどドロップしたが、その中にガラスに包まれた長細い物は含まれていなかった。

「ねえ、これはなんなのかしら……?」

「あ、なんか、特別そう……」

シエラハが何かを拾ったようなので寄ってみると、それは確かに妙な感じの物体だった。

片面が薄ピンクに塗装された鉄で、もう片面には驚くほどの透明度のガラスが張られている。

さらによく見ると『A O U O S』との文字が刻まれていた。

「わからんが、それ、マリウスにくれてやったら機嫌が取れそうだな」

「じゃ、はい……」

「……へっ？」

「機嫌、取った方がいい……」

わからんが、そのガラス板と鉄で構成された変な物は、俺からマリウスに寄贈するのがベストだと、3対1の多数で可決されることになっていた。

恐らくこれはきつと、ここではない異世界からきた鏡だろう。

ガラスにクツキリと顔が映り込むところからして間違いない。これは女物の手鏡だ。



・A O U S (後書き)

今書き上がりました

定時より遅くなっ  
てごめんなさい

シンクウカンを求めて鋼の迷宮をさらに下ってゆくと、地下4階にて花摘みがしたいと姉妹が言い出した。

「の、のぞいちゃ嫌よ……?」

「のぞくわけないだろ、普通に考えて……」

「説得力、なさすぎ……。私は、のぞかれてもいいよ……。特殊性癖で、殴り合ってこそ、夫婦……」

「最低だ……」

「頼むからメーブルの言うことを真に受けなくてくれ……」

確かに俺は、水浴びをのぞいてばかりのムツツリスケベかもしれない……。

だが女性のトイレをのぞきたいだなんて思ったことは1度だつてないぞ……。

「ユリウスはボクが見張っている。さあ行ってきてきたらいい」

「はぁ……。酷い侮辱だ……」

とにかくそういうことになって、姉妹は迷宮を引き返していった。迷宮に排泄された人の糞尿は、いったいどこに消えるのだろうか……。

「しかしグライオフェンは行かないのか?」

「ユリウス、なら逆の立場で考えてくれ。男同士で一緒にトイレに行きたいか、君は?」

「それは……あまり気が進まないな」

しかしコイツもだいたいぶ打ち解けてきたものだ。

最初は言葉を交わすのも互いにためらっていたのに、甘味のもたらす魔力は偉大だな。

「ん……それそうと、あそこの床、何か変じゃないか……？」

「床……？ そこの床がどうかしたか？」

「ユリウス待てっ、それ以上不用意に近づくな！」

「大丈夫だ、俺には転移魔法が あ」

「あっ?! う、うわあああーっ?!」

パカリと鉄板の床が落ちた。

ふわりと自分の体重が足からなくなって、俺を止めようとしがみついたグライオフエン共々、俺たちは足下の世界へと落ちていった……。

俺には転移魔法がある。いざとなったら自分だけ隣の座標に飛べばいい。

だが、この魔法はお1人様専用だ。よって俺は、グライオフエンを抱くように庇ってそのまま落ちてゆくしかなかった。

しかもこの深さ、1フロア分の落とし穴ではない。遙か迷宮の底まで落下していきながら俺は思った。

これ、このまま落ちたら死ぬな……。

そこでやむなく俺は、再び世界の裏側へと彼女を引きずり込んだ。

落下が止まり、静止した世界で俺たちは安堵のため息を吐いた。

仰向けに寝そべりながら、グライオフエンのやわらかな体と体温を身体の正面で感じながらだ……。

「ご、ごめんっ、ボク、そんなつもりじゃ」

「動くな。リスクが上がる」

「で、でも……でも、こんな……っ。お、男と、こんな……動くだなんて、言われても……っ」

「いいから言うことを聞け。この前、重傷のシエラ八を連れて迷宮を脱出したときは、3日後の世界に飛ばされていた。余計なことをすると時間を失うぞ」

その一言だけで、グライオフエンはまるで重たい人形のようにおとなしくなった。

やわらかなその胸越しに激しい心拍が伝わってきていたが、それはお互い様だ。

「このまま元の座標に戻っても、落下のエネルギーが消えるわけじゃない。となると……」

「ボ、ボクに……発情しているのか、君は……」

「こんなうら若く可憐なエルフに密着されて、心臓が暴れ回らない男がいるわけないだろ」

「ボクはそんなに若くない……」

鼻息が当たってくすぐつたいと言ったら、気位の高い彼女のことだから機嫌を損ねるだろう。

いかな。生存のことを最優先で考えなければいけないのに、女

体への興奮が思考回路を圧迫し始めた……。

俺たちの生死がかかっているというのに……。

「ヒューマンからしたらエルフの年齢なんて関係ない。リーフシーカーは綺麗だ」

「そういうヒューマンは……君は、汗臭くて、硬い……」

感触を高めるようにグライオフェンが身じろぎをすると、ますますやわらかな感触が脳髓を麻痺させた。

「グライオフェン、このままだと俺たちは死ぬ」

「えっ……！？ あ、そうか、ボクたち落ちていたんだ……」

「だから、これから元の座標に戻るの、こっちの方向に同時に反動のかい魔法をぶっ放そう」

「わかった。女王陛下のマジックブラストをまねてみる」

「なら俺もそれにしよう。いくぞ……」

「う、うん……。ボク、メープルの気持ちがちよっとだけわかったよ……」

深く彼女が鼻息を立てて深呼吸するので俺もそれに呼吸を合わせて、世界の裏から元の座標へと戻った。

「撃てっ、グラフツッ!!」

「うんっっ!!」

上と下の双方からの激しい衝撃に、何がなんだかわからなくなったのも一瞬のことだ。

俺は迷宮の床へと叩きつけられ、胸の中のグライオフエンに押しつぶされた。

しかし激しい痛みはない。

俺たちは遙か上層からの大転落から、どうにか生き延びることに成功していた。

「ごめんユリウスッ、でもそれどころじゃない、立って！」

「そうは言っても身体中ガタガタ　うおわっっ?!」

災難はそれだけで終わらなかった。

どうにか死を免れて一息つけたのもつかの間、俺たちはアイアン  
ゴーレム5体に囲まれていた。

「まずいな……いざなったら君だけでも逃げろ。君が死んだらシエラ  
ハゾさんが悲しむ……」

「そういうお前が死んでもアイツは悲しむだろうな」

包围はアーチャーからすれば最悪の展開だ。

彼女は近づくゴーレムで射抜いてみせたが、鉄の巨人は怯みもし  
ない。

「相手にするだけムダだ、逃げるぞ」

「囲まれてるのにどうやって逃げるんだ！」

「ズルして逃げる」

再び世界の裏側に彼女を引きずり込んで、有無を言わせず抱き上  
げた。

「う、うわっ?!　こ、この世界、ボクが動く危険なんじゃない  
のか……?」

「だから俺が抱えてるんだろ。死ぬよりはマシだ、付き合え」

「あ、ああ……助かるけど……。君だって、失敗したらシエラハゾとメープルと会えなくなるんだぞ。いいのか……?」

「短距離なら大丈夫だろ」

「えっええーっ、後先くらい考えなよっ!？」

「苦手なんだ、そういうの」

目標の座標までやってこれたので、俺はグライオフエン　いや、グラフを抱いて元の世界に戻った。

「時間は飛んでないみたいだ。よし逃げるぞ」

「よ、よかった……」

ゴーレムだらけの大部屋から逃げ出して、俺たちはどちらが上層行きかもわからない通路を歩いた。

階段を見つけた。だがその階段の前にアイアンゴーレムが3体も陣取っていた。

「3体くらいなら倒せるか」

「ほ、本気か君は……?」

「見ろ、階段の途中にシャッターがある。こいつらを倒さないと通してもらえないらしい」

「だったら腹をくくるしかないな……」

俺はゴーレムの肩へと飛ぶと、首を狙って鎧の隙間に短剣を突き刺した。

動きが少しきこちなくなった感じだが、どうやらここは急所ではない。



捕まっつて握りつぶされる前に、今度は別のやつの中身に飛んだ。同様に刃を突き刺すが、これも外れだった。

「こいつらの急所ってどこだ……？」

「とにかく手当たり次第やってみるしかない。ユリウス、悪いけど敵を引き付けて！」

「任せろ、そういうのは得意だ」

グライオフエンは部屋の入り口から弓を構えて、敵の装甲の隙間を射抜いてみせた。

だがそれもハズレ、次のやつもハズレ、今のところ全部がハズレだ。

だったらこうしよう。短剣を突き刺し、敵の内部に電撃を流し込む。

グライオフエンに最も近い危険な一体に飛ぶと、俺は首の後ろに刃を差し込み、電撃魔法を流し込んだ。

「ユリウスッ、そんなことしたらキミまで黒こげになるぞっ！」

「問題ない、その前に逃げる」

ライトニングボルト程度の出力では、アイアンゴーレムの内部を焼くことをできないようなので、5倍の魔力をぶち込んだ。

成功だった。感電死する前に転移すると、ついに敵の巨体が崩れ落ち、動きを完全に止めていた。

「やった……倒した……。って、ユリウスッ?! もう止めるっ、焦げてるぞキミッ!!」

「まだ大丈夫だ」

「全然大丈夫じゃないっ!!!」

大丈夫だ、俺たちにはエリクサーがある。

ところがもう一体を同じ方法でゴーレムをもう1体始末すると、想定外のアクシデントが起きてしまった。

「……しまった、折れた」

愛用の短剣がついに寿命を迎えて、ポツキリとへし折れていた。肌がヒリヒリと痛む。焦げているという彼女の言葉は、比喻ではないようだった。

さすがにこれはまずいかと思い、懐の緑のぷにぷにを取り出した。それを半分かぶりつき、貪るように租借して飲み込んだ。

「えっええっ、えええええーっっ?! な、治った……」

「半分やるよ。ほらっ」

「お、男の食いかげなんて食べられるかっ!」

「いいから食べ、それは薬だ、戦士が薬を飲むのを恥じらってどうする」

「っっ……」

さて、問題は残されたゴーレムだ。

こいつを倒さねば地上に戻れないが、切り札の短剣はもう使い物にならない。

後ろを振り返ると、噛まずにエリクサーを飲み干すグラフの姿があった。

俺の食べかけがそんなに嫌なのか……。

「これを使え」

「悪いな、正直それを期待していた」

グラフが腰の剣を抜いて俺に差し出してくれた。

近接戦ではそっちを振った方がいいだろうに、今まで一度も剣を抜かないので、変だと思っていたが触れてみると理由がなんとなくわかった。

「それはリーフシーカーに伝わる聖剣だ。本来ならヒューマンなんかが握れる物じゃないんだからな……」

「これは使えるな。力が溢れてくるかのようだ」

そのショートソードは俺との相性が最高だった。

集中すると刀身が白く輝きだし、あまりの増幅力に制御不能になりかけるほどにライトニングボルトの魔力をバチバチと暴れさせた。

「ちょっと待てっ、なんだその使い方はっ!? ボクたちの聖剣に、そんな力が秘められていたなんて……あっ?!?!」

「これなら刃を突き刺す必要もない。食らえ鉄クズツ、ライトニングプラストツツ!!」

雷の矢ではなく、電撃の奔流がアイアンゴーレムたちを白く焼き払った。

素晴らしい。こんなとんでもない増幅器がエルフの世界にあったなんて、師匠が見たらひっくり返るぞ!

全ての決着が付くと、上層への道を閉ざしていたシャッターが荒々しい音とともに上がった。

ただし、出力に絶えきれずに白い聖剣が黒焦げになることがなければ、なお完璧だっただろう。

「すまん、焦がしてしまった……」

「なっとなあああーっつ、エルフの秘宝になんてことをするんだああーっつ?!」

「悪かったよ。こつちで修理してみるから、しばらく貸してくれ」

「ヒューマンなんかっ、キミなんかやつぱり嫌いだっ！女王陛下に、なんて言い訳すればいいんだよおーっ?!」

「だから直すって言うてるだろ」

「直せよっ、絶対直せよっ、約束だぞユリウスッ!!」

真っ黒になった刀身はまだ熱を放っており、まるでひどく酸化したように黒ずんでいた。

あんなに美しかった聖剣が見るも無惨、悲しくなる気持ちもわかった。

「それより宝箱を開けないか？」

「宝箱……？ わっ、いつの間に……」

3体のゴーレムは、数えて8個の宝箱へと変わっていた。

そのうち5つはどこかで見覚えのある銀の小箱だ。この小箱、どこで見たような気がするんだが、どこだっただろうか……。

「あっ、見るユリウスッ！ これ、マリウスさんが言っていたやつじゃないか!？」

「こつちのは何かのインゴットだ。ギルドに持ち帰らないとよくわからんな」

シンクウカンは見るからに脆そうな不思議な物体だった。

薄いガラスが中の何かを包み込んでいて、ちよつとどこかにぶつけたらすぐに割れてしまいそうだ。

さらに残り1つの箱を開けると、さっきのより少し小さなシンクウカンがもう1つ現れた。

「やった……これで仲間の元にまた少し近付けた……。ユリウス、ありがとう……」

「あ、ああ……。なんか素直だな……」

「キミがボクにおかしなことばかりするからだ……！ あ、あんなこと……男にされたなんて、陛下になんて報告すればいいんだ……」  
「後はこの銀の小箱だな……。やっぱりどこかで見覚えがあるんだよな……」

悩んでないで中を見てスッキリしようと、俺は銀の小箱を開けた。

「ハジメマシテ、ジョン（・ー・）」

次々と開けた……。

「ニアデス、ヨロシク（・ー・）」

「ドモ（・・・）」

「コレモ、ニア、デスヨ（・v・）」

「当選、オメデトウ、ゴザイマス（・ー・）」

豪華そうに見える銀の箱の中身は、全部がニアだった……。

「またお前かよ……。俺はユリウスだって、言ってんだろが……。ど  
んだけ天井ネタ好きなんだよ、お前……」

「かわいい……」

「いや、かわいいか……?」

探索の結果、俺たちはシンクウカン2つと謎のインゴットと、新しいニアを5体手に入れた。

自分の妙なレア運に困惑しなくもないが、目当てのキーアイテムが手に入ったのだからめでたしめでたしだ。

・

「ユリウス……ッ、よかった……。もうっ、あたしあなたが死んじ  
やったかと思っただから……っ」

俺たちがニアを引き連れて上層に戻ると、半泣きのシエラハを  
胸に抱き締めることになった。

メープルの方は増えたニアに驚いて、地べたへとしゃがみ込ん  
で1人ずつ握手をしていた。

「姉さんは大げさ……。ユリウスは、スカラベより、生命力あるか  
ら……死ぬ訳ないって、言ったのに……」

「お前な、旦那をスカラベ扱いすんな……」

「あとね、姉さん……。いつか、本当に、死んじゃうかもしれない

から……やること、やっといた方が、いいと思う……」  
「うん……そうね、あなたの言うとおりだね、メープル……。あたし、もっと勇気を出すわ……」

姉はあっさりと妹に焚き付けられて、モジモジと身を揺すりながら俺を見た。

何を決意してしまったのか、聞くのが怖い。

恥じらうシエラからは甘い匂いがして、それでいて温かくて、ついこの胸の狂おしさのあまりに衝動に身を任せなくなる媚薬的な効果があったが、同時に小さな少女のような一面を持っていたので、俺を正気へと引き戻した。

・転移装置のパーツを精錬しよう 1 / 2

黒焦げの聖剣を腰に吊して地上に戻ると、工房の前に木箱が積み重なっていた。

中を確認すると、それらは全てレインボークォーツだった。

質はピンキリで、綺麗に澄んだ虹色をしている物もあれば、濁っていたり不純物が混じっている物も多くあった。

マリウスから精錬の作業工程は既に聞いていたので、昼食を待たずに早速始めることにした。

液体で満たした錬金釜に魔力をかけて、そこにレインボークォーツを投入して、不純物と分離するだけの作業だ。

虹色に輝く液体を攪拌しては完成させて、マリウスご所望のピュア・レインボークォーツに変えていった。

錬金釜の中に親指大の四角錐の輝石がひしめく姿に、メープルもシエラハも、あのグラフまで最初こそはしゃいでいた。

だが次から次へとレインボークォーツが工房に納品されてくるようになって、事情が変わった。

少しでも早く素材を納品すれば、それだけ転移装置の完成が早まるとあって、昼食と夕食の休憩をのぞけば俺たちはぶっ続けて精錬を続けていった。

そして気付けば今や深夜だ。

あとほんの少しだけがんばれば、明日の朝にマリウスが増幅装置の組み込みに着手出来ることまでやってきていた。



支え続けてくれたシェラハとメーブルも、今は工房の端っこで暖炉用の毛布を抱いて眠っている。

だがあと少し、あと少しなので俺は工房からオアシスに出て、つりかけの腕で水をくんで釜へと戻る。

するとそこに、少し前にダウンしたはずのグライオフエンが立っていた。

「っと、ビックリさせるなよ……っ」

「そっちこそ静かにしろ。キミのかわいい天使たちが目覚めてしまっぞ」

「うなづきにくい言い方をするなよ……」

「フツ……キミを見ていたらわかるさ。キミはシェラハゾさんとメーブルにベタ惚れだ。見ていてこっちが恥ずかしくなるよ」

何も言わずに彼女は俺からバケツを取って、代わりに釜へと流し入れてくれた。

仲間の運命がこれで決まると、俺よりムチャな働き方をしていたくせに、まだ身体を動かさず足りないらしい。

「種族が違うのに、どうして助けてくれるの……？ この仕事、明日に回したって誰もキミに文句なんて言わないのに……」

「他に出来るやつがないからだな。それに転移装置が本当に実現出来れば、これ以上面白いことなんてないだろ」

「そうなのか……？」

「想像力のないやつだな……。魔力消費を考えれば万能ではないだろうが、これがあれば物流に革命を起こせるぞ。これまでの常識は

全て昔話となり、爺さんが言うところの分かれた部族を1つに束ね直すことすら可能になる。離れた国と国の距離が、全く意味をなさなくなるんだからな」

どうも変だな。うざいくらい饒舌に語ったはずなのに、今夜のグラフは変におとなしかった。

素直に俺の言葉にうなづいて、感心した様子でこちらを見てきた。

「そんなこと考えてただなんて、思ってもいなかった……」

「いやそうやって素直に返されると、こっちはどうも調子が狂うんだが……」

「ボクはキミのことを誤解してた。キミはいいやつだ。2人がキミに夢中になる気持ちが今ならよくわかるよ」

「お前、本当にどうしたんだ……？　そういうのらしくないだろ」  
「ぶっ続けてがんばってくれるキミの姿を見ていたら、壁を作っている自分が嫌になっただけだ。キミのその努力と善意にボクは報いるべきなんだっ！」

何やらよくわからんが熱くなっているので、人差し指を唇の前に立てて彼女を黙らせた。

グラフはシエラハとメーブルに視線を奪われて、それっきり黙り込んでしまったので、俺も沈黙で返して仕事を進めた。

チャプチャプと、水音と釜の底を擦る物音だけが工房に響き渡っている。

「ボクは……2人が羨ましいよ……。キミみたいにやさしい旦那様と、一緒にこんなに綺麗なオアシスで暮らせるんだから……」

「俺、そんな立派なやつじゃないぞ……？」

「ああ、聖剣を黒焦げにしたお騒がせ野郎だ。どうしてくれるんだ、あの剣……」

「だから、悪かったよ」

コンツと底を突くと、高純度のレインボージェムの完成だ。疲れた……。あと2工程でノルマ達成なんだよな……。

「もし転移装置の改良が成功して……シャンバラが援軍を故郷に送れることになったら、ボクは支払いきれない恩がキミに出来る……。どうやってキミに返そう……」

「グラフ、律儀って言われるだろ」

「グ、グラフ……？」

「お前の名前、長いからグラフな」

「う、うーん、グラフ……。なんか、表みたいな響きだな……」

「とにかく、恩返しする気があるなら、向こうとのコネクションになつてくれたらそれでいいぞ。2つの国が転移装置で繋がれば、やれることが山ほど出来るからな」

「それはもちろんいいけど……。それだけじゃ、とても返し足りないよ……」

マジでクソまじめなんだな、この女……。

そんな姿を見ていたら、つついっぴいメールにするようにグラフのおでこをつついていた。

「いたっ……な、何をする……っ」

「すまん、メイプルにやってる癖が出た」

「なんだ、そうか……。なら、いいよ」

「いいのかよ……」

「いいんだ……。メイプルと同じ扱いは、そんなに嫌じゃない……」

闇夜に微笑むグラフの姿は、どこか吹っ切れたようで見ている爽やかだった。

・転移装置のパーツを精練しよう 2 / 2

ダウンしかけだったが、彼女のおかげで最後まで走り切れた。

最後の精練が終わると、俺は錬金釜の前に崩れ落ちて、マリウスの臨時工房までの運搬を都市長に依頼してくれとグラフに伝言を頼むことになった。

「起きろ、こんなところで寝ると明日の朝酷いぞ……。つて言っても、起きねーよな……」

「ごめん、あたし起きれないわ……。それより、終わったの……？」

「終わったぞ。おら、ちょっとふんばれ、上まで連れてつてやる」

「ふふ……王子様みたい……」

「そのセリフ、絶対明日後悔するぞ……？」

シエラハを両腕で抱き抱えて、階段をヒイヒイと踏ん張って2階のベッドに運んだ。

「寒い……。一緒に寝て……？」

「暖炉に少し火を入れる。メープルも連れてこなきゃいけないだろ」

「うん……」

それっきり、シエラハは起きなかった。

工房まで戻ると、熟睡したメープルを抱き抱えてシエラハの隣に運び、ようやく一息をついた。

「おやすみ」

寒くないように掛け布団を整えて、2人の整えてから1階に戻った。

くたびれた……。毛布をかぶって、暖炉に炎魔法を放った。

「おつかれ。こっちも終わったよ」

「悪いな、外は寒かっただろ」

「いいよ。……目が冴えてきちゃってたから」

そう言いながら彼女は自分の弓を取って、こんな時間だというのは暖炉の前で弓の手入れを始めた。

こんな時間だというのに、新しい弦に張り直すつもりのようにだった。

「こっちはもうわりと眠い……」

「見ればわかるよ。ありがとう、ボクはキミの姿を誇りに思うよ」

「そういうのは明日にしてくれ、眠くて全然響かん……」

「クスツ、そうみたいだね」

なんか、素直な態度を取るこいつ、かわいいところあるな……。あれだけ壁を作っていたのに、たった1日で無防備に変わってしまった。

「キミを女王陛下に紹介したいよ。ヒューマンにもキミみたいなやつがいるって、陛下に知ってもらいたい」

「そうか……眠い……」

「寝なよ」

「んじゃ、お言葉に甘えて……」

毛布にくるまって暖炉の前に横たわると意識が途絶えていた。

・

「ぬぁ……っ?!」

翌朝、目を明けるとグライオフェンの寝顔が目の前にあった。

あまりの驚きに飛び起きると、俺たちは同じ毛布にくるまって眠っていたようだった。

「昨日は、お楽しみだったようですね……」

「おまつ、いつからいたよっ!？」

「一緒に暖炉の前に横たわる、二人を眺めて、妄想を高ぶらせていた……。ユリウスのことだから、指一本、触れてないに違いない……」

……

「触れる理由がないからな。ちょっと水かぶってくる」

「お供する……」

「正気か？ まだ死ぬほど冷たいぞ」

「それは、ほら……。ユリウスが、裸で温めてくれるはず……あてっ」

頭を軽く叩くと、嬉しそうな顔でこちらに笑い返すので、っいつ

いそれ以上は断り切れず……。

俺たちは互いに身体を隠しながら、一緒に水を浴びていた……。

「ユリウス、ヤバい……。ムラムラどころじゃないくらい、寒すぎ

……。死ぬよ、これ……」

「ならなぜ付き合っただよ……」

「だって……ユリウスと、一緒がいいから……」

そう言われて嬉しかった。

だから俺は彼女の希望通りに、いや、己の衝動任せに裸で嫁の身体を温めた。

「マジでムラムラどころじゃねーな……暖炉の前に帰るぞ……っ、

さぶっ……！」

「バカなこと、したもんだね……」

びしょ濡れの裸で暖炉を浴びる俺たちの姿に、目覚めたグラフが朝っぱらから悲鳴を上げたのは言うまでもない。



・転移装置のパーツを精錬しよう 2 / 2 (後書き)

投稿が遅れてすみません。

長かった……。

下民どもと同じまずい飯を食らい、ダニのいる硬いベッドで夜を明かし、貴族を換金アイテムとしか思っていない頭のおかしい連中に追いかけて回される苦節の日々に、ようやく終わりが訪れようとしている。

ついに俺はユリウスの足取りを掴んだ。

「おうそうそう、黒ローブの若い男だったよ。今思うと変な話だよなあ……馬も持っていないのに次から次へと馬車駅に現れて、相場の5割増しで早馬を予約していったんだからなあ」

間違いない、ユリウスだ……。

こんな非常識な転移魔法の使い方をするやつが、他にいてたまるか。

「確認に聞くが、馬に乗ったのはどんなやつだった？」

「髪の毛長い美人さんだったよ。髪は黒で、まあ一見は男に見えるがあれは女だ。尻を見ればわかる。いい尻だった」

やつは誰かの移動をサポートしたようだ。

「その女、若いやつを連れていなかったか？」

「おおそうそう、尻に夢中で忘れてたわ。確かにいたぜ、青くせえ尻のお子様がよ」

「くっ……。尻はどうでもいい……」

「そこはどうでもよくねえだろ、兄ちゃん!？」

「どうでもいいのだっ! それよりその早馬はどっちに行っただ!?」  
「なんだよ、女の尻に興味ねえとか兄ちゃん、まさかそっち系かあ?」

「お、俺に下品な物言いをするなああっ!!」

馬車駅のバカどもの品のなさには困り果てたが、これは好機だ。

この早馬の足取りをだどってゆけば、やつを居所を掴める。

ついに尻尾を出したな、ユリウス! 謝罪してやるから首を洗って待っている!

俺は馬車駅から馬車駅へと、ヤツの行き先を追って渡り歩いていった。

クククッ……。うかつだったな、ユリウス。これでは後にたどってくれと言っているようなものだ。

長い苦渋の生活が終わり、再び王宮に戻るチャンスが俺の前にやってきていた。

ところが町から町へと愛馬を歩ませてゆくと、さっきまで晴れていたのにシトシトと小雨が降ってきた。

それはいつまでも止まずにうつつとうしく肌へと張り付いて、マントの隙間から服へと染み込んでいった。

「くっ……。なんで俺が雨の中を進まなければならぬ……」

だが、だががこのチャンスを逃がしたくない……。

俺は起死回生の手がかりを求めて、パンツに雨が染み込もうと、それに体温を奪われて震えようとも進むしかなかった。

「……しかし。う、うむ……しかしどうやって、ヤツを説得すればいいのだ……？」

ユリウスを足取りを掴むなり、長らく避けてきた問題が目の前に突きつけられていた。

俺たちの関係は最悪だ。

今となってはこちらはユリウスを憎むどころではないので、譲歩は別にやぶさかでもないのだが……。

「アイツが、俺の要求を聞くか……？　あり得ん。ならどうしたらいい……？」

だが国に、王宮に戻れるなら俺はなんだってする。

自分を偽ってでも、ユリウスを必ず説得しなくては……。

やつは人一倍、出世欲の強い男だった。

だったら地位を約束すべきだろう。嘘でもいいから領土を与えると言って、交渉の席に立たせよう。

「くっ……」

だがそれを確実に実現するには、誠意ある謝罪が必要だ……。

俺は馬にまたがりながら、小雨の降りしきる中、ああでもないこうでもない謝罪の言葉を探していった。

「すまなかったユリウス、俺を許せ。……むう、何か違う」

口バを連れられた商人が隣を通りすがり、俺を不審そうに一瞥して去っていった。

「俺が間違っていた。特別に許してくれていいぞ。……ダメだ、なぜ俺はいちいち上から目線になるのだ!？」

これは王宮に帰るためだ……。  
王宮にさえ戻れば、それまでの恥は帳消しと思ったっていい。

とにかくだ、ユリウスを引き連れて王宮に戻らなければ何もかもが始まらない!

「ああ、ユリウス、こんなところで奇遇だな。昔は色々とあったが過去のことは水に流そう。おっと、ところでユリウス、実は父上がいや、これも違う……」

俺は馬上の上で、頭を抱えて悩みに悩み抜いた。  
謝罪なんてこれまで、王侯貴族のごくごく一部にしかしたことがない……。

家庭教師たちは、俺に謝り方など教えなかった……。

「申し訳ありませんでしたユリウスさん、どうか私と一緒にツイイクに戻ってくれませんか! お、おおっ、こ、これだ! よし……」

俺に媚びへつらう取り巻きどもがやっていたあれを、そのまま演じればいいのか……!

この際、俺の本音などどうでもいい。

今はプライドをかなぐり捨てて、引き替えに俺は王宮へと戻るの

だ！

そうこうしていると雨が上がって、爽やかな日差しが緑の大地を照らした。

少し進めばそこが次の馬車駅だった。

「もし。黒ローブの怪しい若者が数日前にこなかったか？ 早馬を羽振りのいい価格で借りていったはずだ、隠すためにならんぞつ、すぐに吐けっ！」

俺は馬車駅の下民にユリウスの進路を聞き出して、さらに先へ先へと馬を進めていった。

・アリ王子編 ユリウスを追って三千里 1 / 2 (後書き)

投稿が遅くなりました。今書きました。

そしてすみません。しばらく1話あたりの投稿量が減ります。

1ヶ月に1作、新作をリリースしたい作者の都合です。ご容赦下さい！

しかしその5日後

「ユリウス貴様アアアッ、貴様は今どこにいるうううっ！  
！ こんな辺境くんだりまで俺を連れてきて、足取りを消すなど不親切にもほどがあるだろう、ふざけるなあっっ！！」

この地の馬車駅でヤツは馬を買った。

恐らく早馬を乗り継ぐ理由がなくなったからだろう……。

ならばヤツはこの最果ての地のどこかにいる。

ツワイクに蔓延する闇ポーションの背後にヤツがいるとすれば、  
必ずどこかの有力者に味方しているはずだ……。

「逃がしてたまるか……。ここまできて、逃げられると思うなよ、  
貴様アッ！！ 絶対に見つけ出して、謝罪してやるからなクソが  
ああーっっ！！」

天に向かって叫んでも、聞こえてくるのはヒバリの鳴き声と風の  
音だけだった……。

それからさらに2日後



「何、本当かつ!? 本当にソイツはユリウスと呼ばれていたのかつ!?」

ついに俺は、小麦も生えない荒れ地の村でヤツの足取りを発見した……。

「落ち着きなされ、若いの」

「これが落ち着いていられるかあっつ、それでそのユリウスはどこちに行つたっ!?」

「それが不思議で……。ワシらは止めたんじやが、どうもアツチなんじやよ」

そのジジイが指さした方角には、広大な砂漠が広がっていた。砂塵か何かが行く手をおおっていて、砂漠の先が見えない。

「さ、砂漠を越えたのか……?」

「いんや、あれは人間には越えられねえんよ。あれは迷いの砂漠。エルフだけが行き来出来る、ここではない別の世界の入り口じやよ」

「どうやったら行ける」

「無理じやよ。デザートウォーカーは下手な人間よか話のわかる連中じやが、行き来の掟には厳しいべ」

「それでも俺は中に入らなければならん! そのデザートなんとかの国に入る方法を教えろっ!」

ジジイは目を細めて黙った。

「わしゃ、そういう下品な物言いのやつと、これ以上喋りたくない

のう……」

「俺のどこが下品だ!」

「全部じゃよ」

「ク……クソオオーツツ!」

下民といえど、横暴な態度を取ると反撃に出てくることは既に学習済みだ。

俺は下民と対等に会話しなければならないこの状況に絶望した。

あと少し、あと少しでユリウスにたどり着けるといつのに、迷いの砂漠だと!? ふざけるな!

「こ、こりゃ待つのじゃ! そっちはダメじゃ、迷いの砂漠はマジで危険なんじゃよつ!」

「姿を現せ、ユリウスウウツツ!」

俺は迷いの砂漠を馬で駆けた。

だがしばらく進むと馬が砂に脚を取られて、俺は頭から落馬してしまった。

辺りを見回せば一面の砂の世界で、どこから自分がきたのかすらわからなくなっていた。

それでも俺はもう引き返せない。再び馬にまたがり、砂の大地を進んだ。

・

砂漠の出口はその翌夕ようやく見つけた。

凍え死にかけたほどの冷たい夜に、干からびて死んでしまっ  
た。な昼の日差しに俺は干物にされた……。

「み、ず……水を、くれ……」

「それ言わんこつちやない！ だから行くなとワシは言ったんじや  
！」

あの荒れ地の村に戻ってこれたのは奇蹟だった……。

「ここまで来て…… ユリウス…… ユリウス、貴様……」

「一人の男にそこまで執着するとは…… もしや、おぬし……。一途  
なホモじゃな？」

「出てこい…… 出てこいクソが…… 俺が、わざわざ、ここまで来て  
やったというのに……。うっ……」

重度の脱水症状に、俺はそれから三日三晩、まったくといって立  
ち上がれなかった。

あまつさえ、ようやく身体が回復した頃には、村の中で俺は彼氏  
を追ってきたホモ野郎だと酷い勘違いを受けていた……。

ユリウス…… ユリウス…… ユリウス貴様…… ツッ！

卑怯だぞ、砂漠から出てこい！ 俺がここまで来てやったのに、  
ふざけるなっ、ふざけるなあぁーっっ！ 俺に謝罪をさせるお  
おっっ……！

「そのユリウスっていうのは、罪作りな男よのう……。しかしアリ  
さんや、叶わぬ恋は諦めて、他の彼氏を作ったらどうじゃ？」

老人は一度記憶した情報を修正できない。

その後何度言っても、ジジイの誤解は解けなかった……。

今日もユリウスは姉さんの水浴びに夢中だった。

いつもいつと同じ木陰に身を隠して、裸でオアシスを舞う姉さんに熱い目を向けていた。

姉さんはそんなユリウスの視線をときおり流し目で確かめながら、のぞかれている事実には恥じらいながらも無防備をさらす。

ああ、なんて大胆で、ヘタレで、ムツツリスケベな夫婦だろう……。

そんな2人を私はハイドの魔法で身を隠して、わりと至近距離でいつもガン見している。

やっぱりエロい……。

姉さんに夢中になるユリウスを見ると、私はニヤニヤとだしなく笑わずにはいられなかった。

世間は私を変わり者だと言っけれど、私はユリウスと姉さんの両方が大好きなだけ。

好意を持った相手に自己投影して、それを見守るのが好きなのだ。

「いつもあそこなのよね……。もっと、近くで見てくださいもいいのに……。」

姉さんが大きな胸を自慢げに撫でて、大好きな旦那様に少し不満そうな目を向けた。

姉さんも姉さんだ。見られているとわかっているのに、この習慣

を絶対に止めようとするな。

もう夫婦なのだから、もっと大胆なことをしたっていいのに……。

「ふう……。そろそろ家のことをしないと……」

姉さんの水浴びが終わった。

だから私は足跡で気付かれないように回り込んでから、今度はユリウスの背中に回って肩を叩いた。

「うわっ……。おまつ、またお前かよっ!？」

「襲っちゃえばいいのに……」

毎日思う。そんなに姉さんが大好きなら、襲っちゃえばいいのに

……。  
もっと近くであれを見て、欲望に身を任せればいいのに……。

「へっ……。?」

「姉さん、襲っちゃえば……?」

「んなっ……。あつ、朝っぱらから何言ってるんだよっ、お前!？」

「夫婦らしいこと、もっとした方がいい……」

「そ、そうか……。?」

ユリウスは夫婦としての在り方をまだ悩んでいるみたいだ。素直な反応だった。

「うん。おはよつのキスとか……」

「ハハハハ……。無理だ、俺のキャラじゃない」

奥手にもほどがある……。

私が背中を押してあげないとこの2人、どこまでも子供同士の力  
ツプルみたいなやり取りを続けると思う……。

「じゃあ、私で練習。あなた、おはよのキスを……えっと よ

こしやがれ？」

「お前も慣れてねーのに無理すんな……」

「うん……。これ、いつもするエロい誘惑より、言つの勇気いた…

……」

たぶん、私もユリウスと姉さんの奥手時空に飲まれかけている…

…。

手と手が触れ合うだけでときめいちゃう、ねんねな世界が姉さん  
とユリウスの地平に広がっていた……。

「お前は相変わらずどっかズレてるな……」

「まーね……そついう、自覚ある」

「ん……？」

「どしたの？」

ユリウスが急に不思議そうに周囲を見回した。

特に変なところはない。いつもの爽やかなシャンバラの朝だった。

「……見る、あのオーク像が消えたぞ？」

「ユリウス像だよ？」

「俺はあんなビール腹じゃねーよ……」

「あれは、ユリウスの、心の贅肉だから……」

「いや意味わかんねーし……」

ユリウスは変わった。

過去の栄光にすがりつくだけだった哀れな男だったのに、いつの間にか心の贅肉が落ちた。

「ブヒイって言うってみて？」

「言うわけねーだろ……。しかしどこ行っただらな、あれ……」

「あ、言わなかったっけ……？ あれなら、公園に置いたよ？」

驚いたり怒ると思ったのに、ユリウスは固まっちゃった。

だから私はもう一度、事実を伝えてあげた。

「あれは、あそこの公園に置いた……」

「はあっ！？」

「あのね、あとね、ユリウスの功績を称えた、石碑も隣に作っただよ……？」

またユリウスは固まった。

それからようやく理解が追いつくと、気が遠くなったのかフラフラと倒れかけた。

「おま……お前、なんてことを……。つ。悪ふざけさせたら天下無双だなお前っ！？ なんてことすんだよっ！？」

「みんなが欲しいって言うから、私も泣く泣く譲ったのに……」



ユリウスのうるたえがかわいくて、私は満面の笑みを浮かべてしまうのを堪えた。

動揺している。既にもう取り返しはつかない。ユリウスは嫁に恐怖した……。

「他になかったのかよ……。アレじゃ、シャンバラのユリウスはオークだって勘違いされるだろ……」

「ウケる……」

「ウケねーよっ!?!」

いっぱいあおると、ユリウスは私のおでこを小突いてくれた。

それを待っていた。私は嬉しくなって、もう我慢できない。ユリウスを満面の笑顔で笑い返していた。

「はああ……。っつ。なんてことをしてくれるんだ、お前は……」

そうするとユリウスは溜め息を吐いて、私の壮大なイタズラを許してくれた。

「でも、好評だよ……?」

「お前には一生叶わねーわ……」

私たちは姉さんの姿を探して、2人一緒に家へと帰った。

新作、作りたくなってきたけど、今やコンクルは貴重な建材。そこは我慢だった……。

・二代目ユリウス像建立事件 2 / 2

・二代目ユリウス像建立事件 2 / 2

朝はそんなことがあった。

ところがその日の昼過ぎ、すっかり超絶人気スポットになったユリウス記念公園でまったりしていると、私にとある依頼が飛び込んできた。

「うん……そういうことなら、喜んで……」

「おお、受けて下さいますかっ、カサエル婦人！」

「もち……ユリウス像なら、私に任せて？」

やわらかな草の上でくつろいでいたら、マク湖オアシスの長老補佐とばったり出会って、彼がこの公園みたいなユリウスの像が欲しいと言いだした。

「ユリウス様はマク湖の救世主ですからな！ 我々が離散した家族ともう一度あそこで暮らせるのも、すべてユリウス様たちのおかげです」

「じゃ、5mくらいのやつでいい……？」

「5m!? い、いえ、いくらなんでもそれは、大きすぎるのでは……」

「オアシスのランドマークになるよ……? 観光客、わちゃわちゃ、くるかも……」

補佐さんの顔付きが変わった。  
一度ぶっ潰れたマク湖には、もっともっと多くの収入がいるんだ  
と思う。

「わちゃわちゃですか……？」

「うん……ユリウス像を一目見ようと、シャンバラ中の民が、マク  
湖にわちゃわちゃ……」

「それは 悪くありませんね。いえ、ユリウスさんの業績を考え  
れば、かなり期待出来るような気がしてきました……」

「じゃ作る……今から作る？ 大丈夫、都市長からコンクル分けて  
もらうから、必要なのは、人手だけ……」

「それは助かります！ では人手はこちらで！」

そういうことになったので、私は補佐さんを連れて市長邸に戻っ  
た。

都市長に話すと、楽しそうに私の思い付きに笑ってくれた。

「なるほど、彼の彫像ですか。マク湖のために彼がしてくれたこと  
を考えれば、あってしかるべきでしょう」

「じゃ……」

「はい、必要なだけお持ち下さい。期待していますよ、メーブル」  
「うん、任せて……。出来るだけ、面白くする……」

こうして私は荷馬車を駆って、マク湖を目指した。

到着すると人手を集めるよう補佐さんをお願いして、それまで長  
老のところまでゆっくりした。

「婆ちゃん、それじゃ一仕事してくる……。また、遊びに来るね……」

「待ってるよ、メーブル。みんなのために、がんばっておいで」  
「うん……」

婆ちゃんの家を出て、現場であるマク湖の水辺に向かった。するともう、砂とコンクリと水瓶の手配が済んでいた。

「でっかいの作るんだってな、手伝うぜ！ かつこいいよなあ、あのオーク像」

「あれは、ユリウス像です……」

集まってくれた人々の中には、仕事上がりの冒険者の姿もあった。面白そうだから手伝うって、言ってくれた。

「みんな、今日は集まってくれてありがとう……。突貫工事で、今日中にざっくり、やっちゃおう……」

1日で5mの像を建てようとする私に驚く人もいた。だけどコンクリには、それを実現する超スペックがある。混ぜて、こねて、みんなで5m級の泥遊びをするだけ。

「ユリウス様はいくら感謝したってしたりないよ」

「ユリウス様の像が建ったら、私たちも嬉しいわ！」

「もし観光客が来てくれたら、うちの店も潤うだろうし……悪くな

いな」

欲望も込みでユリウスは大人気だった。  
創作意欲が私の中で、ふつふつと燃え上がるのを感じた……。

「それじゃ、これが、ユリウス像2号の、ミニチュア版……。みんなには、これを参考に、作ってもらいます……。」

ちよつとだけ斬新なのでみんな固まった。

「これ以外は、認めません。これがユリウスの、真実の姿……。フォーム2です……。」

「い、いや、ちよつと待つてくれ夫人……。こ、これ、問題ないか……？」

「ありません。フォーム1では、ユリウスの虚栄心を、抽象化しました……。ですが、今回は写實的に、ユリウスの……獣欲を、表現してみました……。」

「じゅ、獣欲つて……。シャンバラの救世主つて、こういうお人だったのか……？」

「うん」

断言して、私たちはユリウスフォーム2の建立に入った……。  
コンクルの速乾性と30名を超える人手もあって、像は夕方前に完成していた。

エルフ、驚異の技術力だった……。

そついうわけでは像を直立させるだけ。

素晴らしい出来映えなので、ユリウスと姉さんを呼ぶようにお願

いした。

「あの……カサエル夫人……？」

「なに……？」

「これ、本人に怒られませんか……？ 素晴らしい仕上がりではありませんが……」

「大丈夫……。ユリウスは、私にただ甘だから……」

そこからまた時間が経って、夕方前になった。

気温が落ち着いて、空が琥珀色に輝いてきた頃、ユリウスと姉さんが彫像の前に立つことになった。

サプライズなので荷馬車に押し込んで、絶対に外を見させないよう細かく御者さんをお願いをしておいた。

ユリウスと姉さんは見た。ユリウス2号と 姉さん1号の有志を。

「な……何……何よこれ……っ、ちよつとメープルツ！？」

「むふ……」

「ハハハハハ……こうきたか。お前は嫌がらせをさせたら、天下一の奸雄だな……」

「嫌がらせじゃないよ……？ これが、ユリウスの真実の姿……」

「ただののぞき魔じゃねーかよっ！……」

ユリウス2号は写実的な仕上がりになった。

写実的過ぎて、本人が発狂するくらい、残酷なほどに写実的だった……。

それはユリウスが木陰に身を隠し、マク湖オアシスの中で水を浴びる姉さんをのぞく姿を彫刻として掘り出した、シャンバラで最も美しい世界遺産だった……。

西に傾いた夕方の空を背負って、白亜の裸の姉さん（5m）がマク湖の中で水浴びをしている。

美しい……。これこそ、男たちのスケベ心のたまものだった……。

「俺たちもつい熱が入っちゃまったぜ……。特に、シエラハゾ婦人の豊かなボディを作るのは最高だった！」

「う、うう……。もうっ、勝手に人の彫像作らないでよっ！ というより……。なんであたしだけ裸なのっ!？」

姉さんは天高くそびえる自分の裸体にモジモジ身を揺すりながら、内股になって胸を隠していた……。

「後世に残すべきかと思って……」

「いや意味わからん……。これ、撤去しちゃダメか……?」

「そ、それはダメよ……。メープルが、がんばって作ったのよ……  
うっ、うう……」

姉さんはやっぱり私を許してくれた。

ああ、誇らしい……。姉さんの美しい姿を5m大の巨神サイズで世に示せたことに、私は深い感動と達成感を覚えていた……。

「ごめんね……。大好きな姉さんと、ユリウスを、形にしたかった……」

「い、いいわ……。許すわ……」

「いやいくらなんでも妹に甘すぎだろ、お前……」

2人はこう言うけれど、恥ずかしいのは当事者だけで、彫刻としての仕上がりはため息ものだ。

水浴びをする女神に、男が魅了されることなんて、神話ではそんなに珍しくもない。

これは、男が女に夢中になる純真を描いた芸術だ……。そしてそれこそが、ユリウス像フォーム2の神髄だった。

「ユリウス、俺らアンタのことをさ、すかしたタコ野郎だと誤解してたぜ。わかる……。わかるぜ、わかるわ、俺ら……」

「いやわかってねーから。わかった口で肩叩くなよっ、これは違うんだってっ!？」

こうしてマク湖に数世紀に渡って残るランドマークが生まれた。いずれ偉大なるユリウスとその妻シエラハゾの巨大像を一目見ようと、シャンバラ中の善良な紳士淑女が、このマク湖へと巡礼に現れるようになる……。

「はあ、ありがたいねえ、ありがたいねえ……」

「ユリウス様って、意外とかわいいところがあるのね……」

ユリウスはマク湖の民からすれば既に崇拜の対象だ。

ただのスケベ男に両手を組んで長い祈りを捧げる人たちもいた。

夕焼け空を背に水を浴びる姉さんと、それをのぞくユリウスは美しく、どっちも超立派なむっつりスケベだった……。

はあ……良い……。

大好きなものを伝えたい。それこそが創作の原動力で、忘れては



いけない初心だと、私は今日のことを胸に刻んだ。

……あきれ果ててため息を吐くユリウスと、ユリウスを意識してお尻を揺する姉さんの姿も一緒に。

マク湖の皆さん、これが私の大好きな二人です……。

先日はシャンバラ一国レベルで恥をさらすことになったが、とうか現在進行形でマク湖界限で恥をさらしている厳しい状態ではあるが、すこぶる遺憾ではあるが、作られてしまったものは仕方がない。

撤去しろだなんて言えなくなってしまった俺たちは、あの後に豪勢な食事をごちそうになつて家に逃げ帰った。

そのうちグラフの耳にも届いて、俺は高潔な彼女に蔑まれることになるだろう。

さてそんな愉快では済まない昨日のことはさておき、俺たちはその日もエリクサーを中心とした補給物資の生産を続けていた。

そろそろ厨房からシエラハが現れて『ご飯よ』と俺に呼び掛けてくれるはずだった。

「ユリウス、お疲れ……。では、突然だけど、今から姉さんが、肩を揉んでくれるよ……」

「え、飯じゃないのか？ あ、いや、確かに疲れているのは事実だが わっ?!」

「そ、そんな大声出さなくてもいいじゃない……」

正面はエリクサーによる果物の匂い。後方からはシエラハの甘い匂い。

いい匂いといい匂いが混じりあって、細い指先が俺のこわばった肩を揉みほぐしてくれた。

「わあ……ギンギンバキバキだ……」

『いかがわしい言い方すんなっ！』とツツコミを入れたらメープルの思う壺だ。

しかしこれは気持ちいい……。

本人が気づいていなかっただけで、身体にかなりの無理をさせていたようだった。

「疲れてるなら休みなさいよ。いくらユリウスしか出来ない仕事だからって、こんなに無理していいわけないでしょ……」

「疲れていることに気づかなかったんだ」

「だと思っただわ。メープル、そっちお願い」

「りょー」

「ちょっと待ったっ、そいつに任せるのは不安しか　　ゲエツ?!」

シエラハが右肩を譲ったはずなのに、メープルは俺の二の腕を掴むと筋肉の隙間に指を押し込んだ。

「あれ、違っただかな……んー、おかしいな。フフ……」

「旦那をいたぶって楽しむな……」

「違うよ……。押すと気持ちいいツボ、昔、マッサージのプロに、教わった……。あのお姉さん、エッチな服着てるから、好きだった」

「……」

それは本当にマッサージ屋だったのか……？

というかお前とどういう関係だ？　詳しく聞くのが怖いので聞かないことにした。

「ところで昼食は？」

「覚えてないの？ 今日で都市長のところでランチの予定じゃない」

「そうだったか？ ああ、そういえばそんな気も ツツ?!」

エリクサーの調合にはもう慣れ切った。寝ながらだって出来る自信がある。

だがこれは反則だ。何を考えたのやらわからないが、シエラ八が俺の背中に身体を押し付けてきた。

つまりそれは、要するに、そういうことである……。

結婚してこの方、触る権利があるというのに触らせてもらおう勇気が出なかったモノが、ムニユリと密着していた。

「ど、どうしたの……?」

「お、おま、あた……あた、て……っ。くっ……」

「おお……」

メールが焚き付けたわけではないらしい。

というよりもこれは、メールが散々あだこうだと姉を焚き付けた結果なのかもしれないが、とにかくそれはシエラ八の自発的な行動だった。

自発的に、彼女は俺に押し付けている……。押し付けていたのだ……。

「これ、像にしたい……」

「頼むから止めてくれ……」

シエラハに届かない小声で、メープルは創作意欲を静かに燃え上がらせた。

お前はっ、俺たちをシャンバラのエロ神にするつもりか、お前は……っ。

「ユリウス……そろそろ、いいんじゃないかしら……？」

「な、何っ!？」

そろそろいいって、どういう意味だ!?

そろそろ次のステップに上がるべきだと、シエラハはそう言っているのか!?

そ……それが出来たら苦勞はしてないぞ！ 俺だって、興味はないこともないが……だが……。

「プツ……超ウケる。ユリウス、姉さんは、そういう意味で、言ったんじゃない」

「えっ、私変なこと言った？ ……あっ、ち、ちがっ、違っのユリウスッ！ そろそろって、その水槽の話よっ!？」

「へっ、あっ、お、おおっ!？ わ、わかってたぞ、俺は最初からわかってからな!？」

恥じらいのあまりにシエラハの指が止まり、背中から離れてしまったのが寂しかった。

妹の方は俺をツボ治療の実験台としか思っていないようなので振りほどいて、俺はエリクサーをさっさと完成させた。

水槽の底部にギツシリと、緑色のプニプニが敷き詰められたその光景は、カエルの卵を連想させるがあえてそこは口に出さないでおきたい。

「じゃ、それ終わったら都市長のところ行くか」

「おっけ……はあ、食べたい」

「わかるわ……」

「補給物資を食つなよ」

「だって……」

「そつだよ。なんでこんなに、美味しいのに、薬なんだろ……」

それはこっちが聞きたい。

姉妹には悪いが作業テーブルのイスに腰かけて、一息付きながら壺に詰めるのを見守った。

カラカラのシャンバラの気候では特に問題ないが、森に囲まれた世界は湿度が高い。

壺ごと持っていくにしたって対策が要りそつだ。

ところがそうしていると、外から慌ただしい足音が聞こえてきた。何かと思い工房の入り口を開けると、住居の方の玄関にマリウスの姿があった。

「ユリウスッ!!」

彼は俺を見つけるとこちらに飛び込んできた。

こんな時刻にそんな恰好でいたら暑くてたまらないだろうに、マリウスはローブもまとわらない作業着のままだった。

「どうした、転移装置でも吹っ飛ばしたか？」

よつぽど急いできたのか、冗談を言ってもマリウスは俺たちの目

の前で息を乱すだけで顔を上げない。

「バカにするなっ！ 完成したにきまつてるだろっ！」

「そうか。だったらグラフを呼んでやらないとな。……工房に合流すればいいか？」

「あ、ああ……そうしてくれると」

「よしきた。そこで合流しよう」

話が決まったので俺は冒険者ギルドに飛んだ。

・転移装置完成 いざ森エルフの国へ！ 1 / 3 (後書き)

遅くなつてすみません。どうにか今日中に書きあげました。  
スケジュールに余裕がないので、投稿できない日が発生したらごめ  
んなさい。



受け付けはいつものイケメン（オカマ）だった。

ここはいつ来てもこいつだ……。いったいどうなってるんだ……。

「あら坊や、いらっしやい。取り合えずビールでいいわよね？」

「はあ……。なんでいつもいつも顔を合わせるなり、お前にツッコミを入れなきゃいけないんだろな……。」

「うふっ、それ、は、タマタマ坊やの反応がキャワイイからよっ」

「うっ……。既婚者にウィンクするな……。」

「だけど2人と1度もエッチしてないんでしょう？ んもう、そこがキャワイイッ」

カマが下品すぎて、思考回路が何度もプチフリーズを繰り返した。エルフってというのは長寿だからな。

俺たちみたいな若いやつの行動一つ一つが、こいつらには面白いのかもしれない……。

「それよりオッサン」

「イヤッ、オッサンは止めて、あたはまだオッサンじゃないわ!! せめて、せめてかわいいお姉さんって呼んでちょうだい」

「お姉さん」

「なあに、坊や」

「転移装置が完成した。グラフ　グライオフェンはどこにいる？」  
「あら……」

急に声を低くして、カマカマ野郎は後ろの棚からバインダーを取った。

「そうね、そろそろ迷宮から出てくるころだと思っわ。ここなら近場よ、ラクダを貸してあげるから迎えに行ってあげなさい」  
「いいのか？　そりゃ悪いな」

「いいのよ。あの子、がんばり過ぎでうちのみんなが心配していたもの。1日で迷宮3つを受け持った日もあったわ」  
「どおりで家に帰ってこないはずだ……。んじゃ、借りてくぜ」

「ユリウス、あたしからもお願い。リーフシーカーを助けてあげて。……あたしも本気出しちゃうわ」

「だったら受付なんてやってないで最初から前線に立てよ……。  
そう返すと話が長引くなるに決まってるのであえて黙り、ギルドの厩舎に飛び込んで砂漠へと出た。

迷宮から出てくると、そこに俺が待ち構えていたので当然グラフは驚いた。

同時に、どことなく嬉しそうにも見えた。  
だが事情を告げると、彼女は何も言わずにラクダに飛び乗る。

俺も特に何も言わず、彼女とともに工房のある行政区を目指した。間に合わせの公房は市長邸宅の一角にある。

元々は管理用の道具置き場だったらしいが、コンクリルによる補強により、中も外装もすっかりマリウスに改造されていた。

「呼んできたぞ。で、転移装置はもう飛べるのか？」

「ユリウスッ、行くなら行くとえっ！どこまでせっかちなんだ君はっ！」

たどり着くといきなり文句が飛んできた。

グラフの方は身軽にラクダから飛び降り、公房内部のマリウスに駆け寄る。

「ついに完成したんですね！早くみんなを助けに行かなきゃ！」  
「焦らないでくれ。これは君たちが思っているほど万能な道具ではなくてね、完成はしたが、いくつかの問題がある」

「問題っ！？完成したんじゃないのかっ！？」

ラクダには悪いがヤシの木陰で我慢してもらおうことにして、俺も工房の内部に入る。

するとどうにも意外なことに、工房の内部にあったのは改造されたあの棺だけだった。

古いパーツが取り外され、その代わりに俺が精錬させられたレインボークォーツを敷き詰めた箱が繋がっている。

あのシンクウカンという名の変なパーツも付け加えられていた。

……正直、なんだこりゃって印象だ。

「ユリウス、どうだった……？」

「どうって、何がだ？」

「おっばいに、決まってるでしょ、グラちゃんの」

「お前は空気くらい読め……」

「すまんとグラフに頭を下げると、不満だったのかそっぽを向かれました。」

「マリウスにまで誤解されてしまったのか、険しいで睨まれていた。」

「ふんっ、最低だな」

「だったらどうすりゃよかったんだよ……」

「ラクダだけ渡して、君だけ飛んできたならよかっただろ」

「お……おっ、言われてみればそうだったな……」

「急いでて気づかなかった……」

「どこか抜けていた俺たちに、いや俺だけをマリウスは冷たい目でまた睨んだ。」

「どうしたら俺たちは仲直り出来るんだろう……」。

「転移装置の話に戻すぞ。この棺の問題は大きく見て2つだ。これは内部構造が複雑すぎて、我々には解析出来ない。だからログを頼ることになる。それを頼れば最後の転送元であるリーンハイム王国に飛べるのは確かだが、その土地のどこに飛ばされるかはわからない」

「女王とやらに、グラフが飛ばされた場所に行くんじゃないのか？」

「いや、きつとそうはならない。向こうのどこかにこれと同じ装置

が隠されていて、そこに飛ばされることになると思う」

「フフ……。じゃ、地面の中に、飛ばされたりして……」

「ちよっとメープルツ、止めてよそついうのっ!? か、考えただけでも震えがくるじゃない……っ」

「で、もう1つの問題は？」

「少し考えればわかることだが、この転移装置は一方通行だ。こちらに戻るには同じものを向こう用意しなければならない。そして3つ目の問題は、1度も試運転をしていないことだ」

後出しで現れた3つ目の問題は、わりとシャレになっていなかった。

これは古代のアーティファクトを、現代のパーツで魔改造して作り上げた継ぎ接ぎだらけの装置だ。

「実験台にならボクになる！」

「いや、これは誰が実験台になるかという問題ではないだろ」

マリウスは最初からわかっていたようだ。

わかつていたから、都市長に報告する前にうちを訪ねた。

この転移実験に最も相応しい被験者。それは俺だ。

「止めるな、ユリウス……。ボクは、ボクはこれ以上君に借りを作りたくない……」

「なら考えてみる。仮に実験が成功したとして、その成功の報告をどうやってシャンバラに届ける？ 早馬を乗り継いで数日かかるぞ」

だから俺が被験者になるしかない。

転移術を最も巧みに使いこなせる俺ならば、地中に飛ばされても

どうにかなる。

マリウスはやはりわかっていたようで、静かにうなづいた。

「ユリウスが適任だ……。ユリウスなら、どこに飛ばされても戻ってこれる……」

「なら決まりだな。実験開始と行こう」

「ま、待て！ それでもボクも一緒に行く！ ボクなしでどうやってリンハイムを歩くつもりだ！？ 国中が森に囲まれてるんだぞ！」

「ん、まあ一理あるね……。それにユリウス、ヒューマンだし……」  
「そうね……。ユリウスだけじゃ、話を聞いてもらえないかもしれないわ……」

行って戻るだけのつもりだったが、向こうへの伝令をかねるならばグライオフエンが必要だ。

グライオフエンを絶望的な戦況である向こうに残すのは、あまり乗り気がしないのだが……。

「だったら俺も行こう」

「んなつ、し、師匠！？」

「白いエルフちゃんだらけの国に俺も興味があるからな。男なら行かねえわけにはいかねえだろ」

「おお……清々しいほど、わかりやすい動機、キタコレ……」

「お師匠様なりの照れ隠しよ。……そ、そうよね？」

両方だろ……。

最近の師匠は完全に開き直っているからな……。

お堅い職場ですつと我慢してきた反動だろう……。

「俺のいたツワイクでは、特殊な状況でもない限り魔導士はペアで偵察する。ペアでないとは、目標の監視と伝令を両立出来ない。師匠が同行する価値は高い」

ただし今回の監視対象はリーンハイム王国ではなく、グラフだ。師匠に目配せすると『それは俺が教えたことだろ、バカ弟子』と言いたげにニヒルに表情を歪ませた。

「んじゃ役割分担だ。ユリウス、テメエは結果をシャンバラに持ち帰る役だ。んで俺は、お嬢ちゃんと現地に滞在して情報を集める役だ」

「その配役、不安なので俺と逆に出来ませんか……？」

「バアアカツ、テメエがシャンバラから消えたら誰が薬作るんだよ、アホ」

「そうですね……。師匠みたいな人間をヒューマン代表だと思われるのは、ちょっと……」

「はっ、エルフの嫁さん2人も困っておいてよく言うわ」

いつもの感覚で師匠に反論しようとしたのに、それにはぐうの音も出なかった。

そこを突かれると非情に弱い。

だが俺は、シエラハとメープルの両方が欲しかった。くれると言っから正式に両方もらっただけだ。

「それには俺も同意しよう。お前はヒューマンの恥だ……あまつさ

え、マク湖にあんな物をこさえるなんて……。最低だ……」

「フフ、ウケる……」

「ウケねーよっ！？ とにかく話は決まりだ、都市長に報告次第決行するぞ！」

転移魔法ですぐに姿を消したい気分だったが、やはり外に放置されたラクダが可哀想なので、俺はその背に飛び乗ると市長邸の厩舎を目指した。



「本当によろしいのですか？」

「それはこっちのセリフだな。行っていいのか？」

「……娘たちのことを考えると、行くなと叱り付けたくもありませんが、すみません、行って下さい」

「大丈夫だ。どこに飛ばされようと俺はシャンバラに戻る」

「ユリウスさん、そうだった縁起でもない言い方は避けて下さい」

「だがどうなるかもわからんだろう。言うだけ言っておくよ。人助けが動機とはいえ、俺たちはヤバい技術に手を出してると思う」

「ええ、そうですね……。ですがそれでも、私は仲間を助けたいのです。お願いします、ユリウスさん……」

都市長とも話がついた。

シャンバラと娘のことだけを考えるならば、師匠だけを実験台にするべきだったが、都市長は同胞リーフシーカーの救援を取った。

かくして俺は都市長を連れてあの殺風景な工房へと戻り、再び奇妙なその場所を確認した。

工房は外から見ると、増設により白い半円状の形状になっている。

「工房？ ここはもう工房ではないよ。そうだな、名付け直すならばここは【転移門】だ。この建物そのものが転送装置のカゴなのさ」

戻ると内部に無数の砂袋が詰め込まれていた。

長つたらしいマリウスの解説によると、合計で3000kg分あるそうだ。

まず第一陣としてこれを向こうに飛ばし、その後に斥候であり諜報員である俺たちを飛ばすと説明された。

それと建物の外には、スラム街から連れてきたと思しきエルフたちが集められていた。

「君たちは向こう側に砂袋が全て運ばれているかどうか。状態の確認をしてくれ。100人送ったら数人消えていたなんて悲劇は避けたい」

「ダメエな、飛ぶ前にそういう怖ええこと言うなよっ!？」

「最悪の可能性を言ったただけだ。嫌なら降りればいい」

「はっ、白いエルフちゃんだらけの国を俺が諦めるわけねーだろ」

エルフは誰しもが魔力をもつため、このプロジェクトが成功すれば迷宮で戦えないスラム民も仕事を得ることが出来るだろう。

この技術は、エルフの国シャンバラだからこそ実現可能なものだった。

そういうことで実験開始だ。

俺も魔力の供給に加わることにした。

「待て! 魔力お化けのお前が加わったら実験にならないだろ!」  
「違いねえ。ソイツは女の尻も撫でられないヘタレのくせに、魔力だけは一人前だからな」

師匠は口が悪過ぎる。ヒューマン代表がこんな不良オヤジで本当に大丈夫だろうか……。

ヒューマンと森エルフとの間の国際問題になったりしないよな……？

「じゃあ、ここは、姉さんのお尻、撫だよ？　ねちっこく……」  
「えっ！？　えっえっ……そ、そんな、人前ではダメよ……っ」  
「撫でるわけねーだろ……」

俺たちがバカなやり取りをしている横で、エルフたちの魔力が白亜の建物を青白く輝かせた。

あの建物の中で、俺たちの転移魔法と同一の力が膨れ上がり、やがてあの日見た光の柱が天高く立ち上るのを再び目撃することになった。

「見ろっ、成功だ！　成功したぞ！」

マリウスがはしゃぐように中を確認すると、中に残っていたのはあの棺だけだ。

3000kgの砂袋が全て消えていた。

ちなみに集められたエルフは50名ほどだ。

人数もあって負荷が分散したのか、これだけの大魔法だということにまだ2、3回は同じだけの魔力供給が出来そうだと答えていた。では実験本番と行こう。

「次は俺たちだな」

「自分で飛べるのに、誰かに飛ばしてもらったのも妙な感じだな」  
「ついにこれで戻れる……。待っていて下さい、陛下……ボクは、ようやく貴女の下に、再び……」

ところが『さあ行こう！』と前に進み出そうとすると、正面を小

走りて飛んできた姉妹にふさがれた。

俺がどこかに行こうとすると、この2人はいつだってこうだ。しかし今回はいつもに増して不安げだった。

「おっと……お、おい、人前でこういうのは……」

左右からひしりと抱き着かれた。

俺が言っても離れる気は全くなさそうだった。

「あなたなら大丈夫だとわかっているけど、それでもあたし心配よ……。こ、こんなことなら、メ、メープルが言うとおりに、していればよかったわ……」

「何を吹き込まれたんだ……。俺なら大丈夫だ、必ず戻る」

人前でモジモジしながら際どい表現をされると、スケベ心よりも羞恥心による冷や汗の方が勝った。

マリウスはもちろん、そんな俺の姿を怖い顔で睨んでいた。

「一応聞くけど、どんな、お墓がいい……?」

「お前、そうやって人を脅かすなよ……。けどそうだな、作るなら愉快的ヤツで頼む。辛気臭いのはダメだ」

「おっけー。あ、そだ……んちゅーっ……」

「ンブツ、ンツ、ンツンムウツツ?!」

これについては具体的な表現は控えたい……。ぬらりとした熱いやつが入ってきて、頬にもやわらかな感触が走った……。

出陣前だというのに、全身が熱く火照った……。

「ソフフ、無事に戻ったら秘蔵の38年物を開けてあげるわ　いいつてらっしゃい、あたしの、お・じ・さ・ま」

「エルフも色々いるけどよ、てめーが1番濃いわ……。その約束、忘れんなよ?」

「ええ、ニヤンニヤンパラダイスでまた会いましょ!」

「あ、いいなー……」

師匠とカマとの間に友情が芽生えているのを遠巻きに眺めていると、メープルが加わろうとしたので引つ張り戻した。

ネコヒトだらけのキャバクラって、そんなにいいものなのか……?

2人の楽しそうな様子に、少しだけ興味を覚えてしまった自分に戸惑った。

陽気なネコヒト族に接待されるのは、楽しそうではあるか。

「じゃ、またな」

「うん……あたし、待ってるから……」

「姉さん、そういうの、フラグだよ……?」

順番に嫁さんの背中を抱いて、出来るだけ素直に笑い返して転移門に入った。

外から魔力がかけられると視界が青白く染まり、やがて光のほとばしりと共に俺たちは世界の裏側へと引きずり込まれた。

魔術師の転移との差異は、転移魔法が世界の裏側に潜るだけの力だとするならば、転移装置は世界と世界を繋ぐ濁流だ。

激しい流れに俺たちは押し流され、1分にも満たない圧倒的な速度で運ばれると、裏側の世界から押し出されていた。

かくして転移は成功した。  
だが、向こう側の世界で俺たちは奇妙としか言いよのない事実に直面した。

理論上はあり得る。ならばこのグライオフエンの正体は……。  
その結末は彼女にとっての幸運であり、大きな悲劇でもあった。

・螺旋より来たりし者

転移先は暗闇の世界だった。

一瞬、世界の外側に落ちてしまったのかと背筋が凝ったがどうも違う。

白い光が生まれて、グラフと師匠の顔がそこに現れた。

「はっ、ゾツとしねえな。おらユリウスッ、テメエも明かりを灯せ！」

グラフのライトボールはずいぶん暗かった。

だが師匠も同様にライトボールを生み出すと、光源が弱いのではなく、この場所が広すぎるのだと気づくことになった。

そこでいくつかのライトボールを周囲に飛ばしてみると、ようや

くこの場所の正体が見えてきた。

足元には石畳が敷かれている。

壁もまた石材で覆われ、天井も石で覆われていた。

「どこだ、ここ……」

「嬢ちゃんが知らないなら、俺たちが知るわけねえな」

「だが土の中よりはマシだ。足元に砂袋があるということは、転移装置のログ通りの場所に飛んだはずだ」

元から転送先がリーンハイムではなかったという可能性もあるが、口に出して仲間を不安にする必要はない。

辺りには重い天井を抱えるように、無数の石柱が立ち並んでいる。

耳を澄ますと、ピチャピチャと水の滴り落ちる音が聞こえた。管理されていないのか、ところどころが深く苔むしている。

シャンバラの乾燥に慣れきっていた俺には、むせかえるような湿気が息苦しかった。

「水が落ちてくるってことは地下だな」

「そういえばシャンバラのあの棺も地下に隠されていましたね」  
「見てくれ、あれ、扉じゃないかっ!？」

エルフは目がいいな。俺たちは飛び出してゆくグラフの背を追って、施錠された扉を内側から開けた。

外からは入れないようになっていたようだ。

「待てグラフツ、そんなに急ぐと滑るぞ！」

「おう、もしかしたら上は占領されてるかもしれないぞ。俺は巻き添えはごめんだぜ」

グラフは言葉を詰まらせて、扉の先にあつた螺旋階段を駆け上げるのを止めて、堪えるように鞘へと手をかけた。

かなりテンパっている。注意して見てやらないとどうなるかわからない。

螺旋階段をしばらく上ってゆくと、新たな疑問が俺たちの前に浮上した。

「しかしここはどこなんだ……?」

「深えな……。まだ上が見えねえぞ……?」

階段は壁から張り出すように建築されたもので、中央は空洞にな



っていた。

そこには手すりも柵もなく、下を見下ろすとビュンツと身のすくむ恐ろしさがある。

「なあ、俺らとんでもねえもんに手え出しちまったんじゃねえか……?」

「そうですね。けど他になかったんだから、しょうがないじゃないですか」

「この階段、天国に続いてたりしてな……」

「そんなわけないでしょう。だったらさっきまで俺たちがいた場所は地獄か何かですか?」

「止める、そういう話……。っ。不安になるだろ……」

大きめのライトボールを作って上に飛ばしてみるのもよかったが、敵がいたらそれだけで気づかれてしまう。

螺旋の終わりに至るまで進むしかなかった。

長い螺旋階段が終わると、そこに開かずの扉が現れていた。

扉の形をしているがノブがなく、かといって魔力に反応するような仕組みもない。

どうやって向こう側に抜けたものやら、俺たちは立ち往生した。

「クソッ、階段のどこかに、これを開ける仕掛けがあったのかもな」

「まさかここまで来て引き返すのか……。っ!?!」

「ここを作ったやつは、さぞ性格の悪い野郎だったんでしょね……」

…」

俺と師匠は扉を前にして互いの様子をうかがいあった。

俺ならグラフを連れて向こうに転移する。だが師匠はそれを許さないだろう。

「バカなこと考えんじゃねーぞ、バカ弟子」

「ならどうするんですか？ グラフを得体の知らない場所に残すよりいいと思いますけど」

「そういう問題じゃねーよ！」

「ちよつと待て、この状況でなんでケンカを始めるんだっ!？」

「コイツがバカ弟子だからだっ!！」

「ちよつとくらいいいじゃないですか」

「よくねーよっ!！」

「なら……」

扉に手を当てて魔力をかけると、師匠も同じように力を増幅させた。

驚いたのはグラフだ。何がどうなってそうなるのか、理解が追い付かなかっただろう。

「吹っ飛ばすしかねえな」

「そうしましょう」

「ちよ、ちよつと待てっ、なんでそうなるんだっ!?! 止めるっ、敵がいるかもしれな」

俺と師匠は扉を爆裂属性の魔法で吹っ飛ばして、そこをガレキの

山に変えた。

・

「子弟そろって君たちは非常識だっつー！」

「いや、それよりも正面を見る」

「こりゃ、やっちまったかもな、ハハハハッ！」

扉の向こうは別世界だった。

陰鬱な地下世界からは想像もつかない、緑のビロウドの絨毯が敷き詰められた優雅で高貴な世界がそこにあった。

・捻じれたのは俺たちか、あるいは世界そのものか？ 1 / 2

背中側に振り返ると、そこに扉らしい扉はなかった。

俺たちに吹き飛ばされて見るも無残なありさまだったが、よく確認すると壁が二層になっていた。

どうやら開かずの扉は、壁の中に塗り固められていたようだ。

正規の方法で開いても、これでは結局吹き飛ばすことになっていった。ならば結果オーライだ。

「さて、どうするか？ 俺らは逃げられるが、グライオフエンちゃんには飛べねえしな」

「ならグラフを連れて一度裏に潜り、同じ座標に」

「だから止めるつつてんだろ、そういう使い方……っ、嫁さん悲しませるようなことばっかすんなっ！」

「もう実験済みです。同じ座標ならば害はありません」

「こ、このっ……このアホッッ、後先考えやがれっ、だからテメエは」

「黙れ、誰かくる……」

グラフが声押し殺して警告すると、俺たちは対策を迫られた。足音。それはつまりこの場所の正体を知る鍵でもあった。

「倒すか」

「ま、それしかねえだろな」

「君たちが壁を吹っ飛ばさなければ、避けられた戦いだ……。ああ

……ツワイク人はなんて非常識なんだ……」

ところが足音の正体は俺たちが予想もしないものだった。

「えつつ?!！」

「あ、貴女はグライオフエン兵長!? こんなところで何をしているのですか!？」

それは白い肌のエルフだ。

剣を腰に帯びた、いかにも衛兵風のエルフたちが数えて8名現れて、俺たちの正面を取り囲んでいた。

当然と言えば当然だが、俺と師匠にはあまり友好的な態度ではなかった。

「あ……どこかで見たかと思ったら、ここは城の地下か! よかつたつ、聞いてくれ朗報だつ、援軍を呼んできたぞ!!！」

「援軍、ですか……?」

「そちらの2人はヒューマンのようですが……」

どうも話がおかしい。ここが陥落寸前の城なら、彼女たちは鎧をまとっているだろうし、大小の傷だつて負っているはずだ。

だが彼女たちの軍服は汚れ一つなく、こんな状況で言うのもなんだが、優美で美しい姿だった。

「ヒューマンだろうと援軍は援軍だぜ」

「ボクたちはデザートウォーカーの国シャンバラから飛んできたんだつ! それで外の戦況はどうなっているつ!？」

これではまるでグラフが道化のようだ。

張り詰めたグラフとは対照的に、彼女たちの顔にはこの事態への疑問しかなかった。

「はい……？ 戦況とは、辺境の警備の話ですか？」

「何を言っているんだっ、城の戦いはどうなっていると聞いているんだっっー！」

「あの、兵長……。戦いとは、なんの話ですか……？」

「ええ、そうですよ。外は今日もお日柄もよく、ポカポカと平和そのものですよー……？」

「ふざけるなっ！ こんな状況でっ、人をからかってる場合か！」

「だったらご自分の目で行ったらいいのでは」

怒ったグラフが仲間たちを押しつけて、城の地下を駆け出したので俺たちもそれを追った。

「ちょっと待って下さいっ！ ヒューマンの方に勝手に歩き回られでは困りますっ、ご、こらあーっ！？」

「固いこと言うなって姉ちゃん、綺麗な顔が台無しだぜ！」

「師匠っ、そうやって出会い頭に女性を口説かないで下さいっ！」

「へへへ、弟子に怒られちまった。じゃなあっ！」

「お、追えっ、追えーっ！」

俺たちは地下から地上へと駆け上がった。

上って、上って、上って、どれだけ上に行くのだろうかとグラフに声を張り上げかけると、俺たちは城のバルコニーへとたどり着いていた。

リンハイムは美しかった。  
しかし敵軍の姿はどこにもなく、襲撃を受けた後にはあまりに優美だった。

城から見下ろす町は平和そのもので、彼方に広がる森林や湖が淡い陽光に照らされて美しく輝いている。

モンスターの大量襲撃、陥落寸前の城。その事実そのものがここではなかったことになっていた。

グラフが混乱に立ち尽くし、ついには両膝を突いて頭を抱えるのも無理もなかった。

あれだけ故郷を救うために必死でがんばってきたのに、実際には何も起きていなかったのだから。

「何が起きている……。あれはボクの夢、だったのか……。？ けど、だったらどうして、ボクはシャンバラに……」

グラフにかける言葉が見つからない。

それよりもこの状況を分析しようと俺は少し考えて、それから師匠の横顔をうかがった。

キリリとした、幼い頃に尊敬した男の姿がそこにあった。

「こりゃ、なんかおかしいな……。だが転移に失敗したって感じじやねえ……。確かに成功したはずだぜ」

「ええ、そこは同感です。一度だけ、数日後の世界に飛ばされたことがありましたけど、あの時は昼過ぎが夕方に変わっていました」

時間を飛び越えたら日差しも変わる。ただそれだけの情報を出しただけなのに、師匠が険しい顔で俺を睨んだ。

聞いてねえぞ、バカ弟子。って顔だった。

「ケツ……だったら今の俺たちは、元の時間軸からズレてはいないな。……ん、いや、1つだけ可能性があるか」  
「可能性……？ それは、なんのことだ……」

焦燥にかすれた声でグラフは問い、バルコニーの固い地面を焦点の合わない目で見下ろしていた。

「転移魔法に失敗すると、遙か未来に飛んでしまったり、逆に過去へと迷い込んでしまうことがある。これは俺らツワイクの魔術師の中では常識だ。俺の師匠も、ムチャな使い方しまつて、そのまま行方知れずになつちまつたくらいだ……」

なんだ、そういうことか。師匠の流し目を無視しつつ、俺は一足先にこの事態に納得した。

俺たちは転移に失敗していない。だがグラフはここではない別の世界を知っている。

「だったらボクたちは、過去の世界に飛んでしまったのか……？」  
「グライオフエンちゃん……残酷なことを言うが、それは違つぜ……」。転移には、失敗してねえ……」

「そんなこと言われてもわからない！ だったらなんだつ、ボクにボクにわかるように言えっ！！」

ヒステリックにグラフが叫ぶ。

俺も会話に加わりたところだったが、寄つてたかつて事実を突きつけるより、ここは師匠に任せた方がいいだろう。

「転移に失敗したのは、グライオフエンちゃん……お前さんだけだ。



お前さんはあの日シャンバラに転移してきた時点で、あの時点で過去の世界に迷い込んでいたんだよ。……お前さんはな、未来人だ」

状況だけを見ればこれはいい流れだ。

援軍をここに呼んで、万全の態勢で敵を迎え撃つことが出来る。

グラフにとっては歴史を変える結末にだって出来るだろう。だが問題がある。この世界には

「ヒューマンの異邦人よ、それはどういうことだ？ なぜ、ボクと瓜二つのボクがそこにいる。君たちはどこの誰だ？」

もう一人のグライオフエンがいる。

膝を突いて絶望するグラフの背中に、この世界における本物のグライオフエンが衛兵を引き連れて立っていた。

それが他人を見るような目で俺を一瞥するのだから、残念というか、気持ち悲しいものがあった。

ともかく師匠の仮説は現実となった。

二人同時にグラフが存在するというこの事実こそ、グラフが未来人である証拠そのものだった。

・捻じれたのは俺たちが、あるいは世界そのものか？  
1 / 2  
後書き)

恒例となっていてすみません。  
今書きあげました。

・捻じれたのは俺たちが、あるいは世界そのものか？ 2 / 2

「そんな目で見んなよ、グライオフエンちゃんよ？」

「誰だ、ボクの知り合いにお前みたいな汚いオヤジはいない」

「ハハハハッ、なかなか言うじやねえか！ 心折れる前はそういう性格だったんだな……」

「知ったような口を聞くな！ おい、そのボクの偽者！ なんなんだ、コイツらはっ！？」

そう問い詰められても、グラフはまだ混乱しているようだ。

余計なことを言っただけを混乱させる師匠の代わりに、俺が話をまとめる必要に迫られた。

「俺の名はユリウス。そっちの無礼な男は元上司のアルヴィンス。俺たちは見ての通りツイク人だが、今はヘッドハンティングされてシャンバラに所属している」

「ん……キミはまだ話が通じそうだな。それで、祖国を裏切ったヒューマンが、なぜボクそっくりのやつと同行してる？」

「こんがらがって訳が分からない気持ちは俺たちもわかる。俺たちだって訳が分からない。だが、そこにいるアンタと同じ顔をした女は、アンタだ。偽者ではない、同じ存在だ」

白百合のグライオフエンはグラフの前にひざまずき、思い悩む自分自身と見つめあった。

自分自身が挫折している姿なんて、あまり気持ちのいいものではないだろう。

とはいえ心根のやさしい彼女はその情けない姿を責めたりはしなかった。

そこは俺だってわかる。時系列が異なるうと、グラフはグラフだ。コイツはいつだって気高く高潔なのだ。

「やれやれ、参ったな……これは本当にボクじゃないか……。おい、何があったか知らないがしつかりしろ、君はボクだろう」

「フツ……自分に慰められる日があるなんて、思わなかったな……。女王陛下は……？」

「謁見の間で民の陳情を受けている頃だ」

「そうか……。そういえばそうだったな……」

グラフはもう一人の自分に手を引かれて立ち上がった。

彼女にとってはさぞ悲劇だろう。知らぬうちに自分自身が、別世界に迷い込んだ異邦人となっていたのだから。

「君が本当にボクなら、ボクの秘密を知っているな？ 言ってみろ」

「女王陛下を敬愛している……」

「そんなの国民なら誰だって知っている！」

「だったら、君は女王陛下に、臣下以上の気持ちを持」

「そ、それは止めろっ……！」

そのやり取りを師匠がニタニタと面白そうに眺めていた。趣味が悪い。

「9歳の頃まで、おねしょが治らなかった」

「うつ？！」

「13のとき男の子とケンカして、腕力で負けたのが悔しくて軍に入った。そして初めて陛下とお会いしたあの日」

いいところで本人がグラフの口をふさいでしまった。

全て事実のようだ。驚くグライオフエンの姿が証明していた。

「どうやら本当にボクらしいな……。だが、なぜ……」

グラフが答えないので代わりに俺が説明することにした。

グラフの身に起きたことは夢ではない。近い将来に起きる事実だ。この地には性急な迎撃準備が必要だ。

「聞いてくれ。近いうちにこの国はモンスターの大军に強襲される」  
「強襲？ モンスターごときが城までたどり着けるはずがないぞ」

「シャンバラがモンスターの軍勢に襲われたことは聞いたか？ いや、知らないか……。知っていたらあのとき驚いていないな。とにかくその軍勢は、国境を無視して政府の中枢に現れるんだ」

「そんなメチャクチャな軍があるか！ キノコみたいに生えてくる軍勢なんて、聞いたことないぞ！」

俺たちも同感だ。だがあの棺を掘り当てた今となっては論理的な理屈が通る。

敵も俺たちと同じ棺を持っていて、既に使いこなしている可能性がある。

そう考えれば、ゾーナ・カーナ邸に現れた理由にも説明が付く。

俺たちが狙われたのではなく、たまたまあの地が棺の眠る出口だ

ったのだ。

「本当だよ……。この城は陥落寸前まで追い込まれ、ボクは、女王陛下に……。陛下にお別れの言葉を伝えられて、この世界のシャンバラに、飛ばされたんだ……」

「え……。女王陛下がボクに、お別れの言葉を……。？」

「悲しそうだった……。ボクを死なせたくない、そう言っていた……。だから信じてくれ、グライオフェン、今なら間に合うんだっつー！！ 城壁の外の民が、ボクらに助けを求める声が、今だつて頭からこびり付いて離れない！！ 町が蹂躪されているのを知りながら、ボクたちはここに立て籠もることしか出来なかつたっ！ もう二度とあれを繰り返してたまるものかつつー！！」

今なら歴史を変えられる。悲惨な結末を迎えた王都を救える。グラフはその事実気づくと、ついに自分を取り戻して力強く迫った。

「わかった、ボクは信じよう。まずは急ぎ、国境の軍をこちらに戻さないとな……」

「ふう……。なんか見ててヒヤヒヤしたぜ」

「勘違いするな、ヒューマンと慣れ合うとは一言も言っていない」  
「お、おい……。その男は確かに無礼なやつだが、一応ボクの恩人だぞ……」

こっちのグライオフェンは、ヒューマンと仲良くする自分にまだ戸惑っているようだ。

後はこっちの政府中枢と話を付けるだけか。当初の予定どころじゃない展開になってしまったが、悪い流れではない。

「俺の方は別にいい、邪険なグラフには慣れているからな。それより問題は、どうこの国を説得するかだな……」

惨劇を未然に防ぐために、原因の究明と防備の充実を実現しなければならぬ。

そうなるよこの荒唐無稽な現実を、この国の支配者に信じさせる必要がある。

だが起きてもないことを説明するのは、難しいどころか不可能だ。

間違いなく嘘を疑われることになるだろう。

「あー……女王陛下と会うのは俺も楽しみだったんだが、そういうのはクソ面倒だ……。うし、後任せたぜ、バカ弟子」

「いや、仮にもツワイクの宮廷魔術師の長だった男が、どの口でそういうこと言うんですか……。どう考えたって、これは俺より師匠向けの仕事でしょう……」

「だからこそだ。じゃあな、説得がんばれよ」

この状況でバックレてどこに行くつもりなのだろうか、この男は……。  
野放しにして大丈夫だろうか、仮にも己の師匠ではあるが不安になった。

「あの汚いオヤジには見張りを付けよう。それに陛下はああいう、汚いオヤジがあまり好きではない」

「ああ、態度も最悪だ。恩はあるが……連れて行かない方がいい」

汚いオヤジはさすがに言い過ぎではないか……？

師匠は振り返らずに背中に監視役のエルフを付けて、バルコニーから消えていった。汚いオヤジと言われて、ノーダメージという様子でもなさそうだった。



陳情を中断させることになってしまったが、リンハイムの女王は寛大にもすぐに俺たちに会ってくれた。

グライオフエンが二人に増えた事実にもあまり動じず、堂々とした立派な王者の貫禄を放っていた。

とはいえ俺たちの報告は最初からぶっ飛んでいたもので、いかに寛大な精神の持ち主であろうとも受け止めかねたようだ。

そこで美しきリーフシーカーの女王、アイオライア様はこう言った。

「それにしてもいい男よの……わらわは美女と幼い男が大好きだ」「へ……？ 幼いって、まさか俺を見て言ってるんですか？」

辺りを見回しても子供の姿はどこにもない。ここにいるのは俺たちだけだった。

「うむうむ。そちは何歳じゃ？」

「変な勘違いさせて悪いんですが、もう俺、21ですよ……？」

「おおお、ちっちゃくてかわいいのう……。さ、ちこつ寄れ ますはそうじゃの、わらわの膝に乗るかっ」

なんか、グラフから聞いていた人と違う……。

グラフが言うには美しく聡明で何もかもが完璧な大魔法使いらしいのだが、どうも妖艶というか、露出が多いドレスをまとっているのもあいまって、別の意味で近付きがたい人だった。

「女王陛下、一応俺、デザートウォーカー側からの使者なんですけど……?」

「うむ、噂は聞いておるぞ、シャンバラに奇跡を起こした錬金術師がいると。だが、わらわはそちのような食べ頃の幼き男が好きだ。幼き娘と同じくらいな……」

女王陛下は蛇のように唇を舐め上げた。

助けてくれと隣のグラフとグライオフエンに流し目を向けると、嫉妬に狂った眼差しが2つ返ってきた……。

「ユリウスツ、陛下を誘惑するな!!」

「そうだ、ヒューマンが汚らわしい目で陛下を見るな!!」

「なんでだよ、怒るならあっちに怒れよ……」

そんな俺たちのやり取りを女王は面白そうに見ていた。

特に付き合いの深い方のグラフと、俺の關係に興味があるようだった。

「すまぬ。わらわのかわいいグライオフエンが2人に増えて、ついふざけてしもうたわ。クフフ……」

「いや、本気の目に見えましたけど……」

「ユリウスと申したか。かわいいのう……」

「それはもういいですから、本題を進めましょう」

「ふむ……」

俺たちをからかうのを止めて、女王は考え込み始めた。

グラフが2人ここに存在していること。それは状況証拠にはなる

が、未来の存在を証明するものではない。

「お気持ちはお察しします。どんな命令を下すにしても、それらしい理由が必要でしょう」

「うん、そうなのじゃ　そこはそちと個室でゆっくりしたら、何か思い付くかもしれぬのう……」

「そろそろグラフがキレますよ」

「うむ、ではこうしよう。そちが本当に未来からきたというならば、これから起きることも知っているはずだ。何か言い当ててみせよ」

「えっ……？　い、いえ陛下、そんなこといきなり言われても、そう都合よくポンポンと言い当てられるわけないですよっ!？」

まあそうだろうな。

それができたら未来人ではなく預言者だ。あるいは凄まじい記憶力の持ち主だろう。

そうしてグラフがしばらく困っていると、謁見の間にお仕着せを着た侍女がやってきた。

何やら水差しとバケツを持っている。会談中にマイペースに自分の仕事をする姿もあって目を引いた。

「一つだけ思い出した……」

「ほっ?」

「あの子、あそこの花瓶をひっくり返す」

俺たちが注目すると、侍女は花の活けられた花瓶を本当に手から滑らせていた。

だが歴史を変えられるかどうかのいい実験台でもあったので、俺

も預言に介入してみることにした。

「あっ……?! す、すみませんっ、助かりました……。ああよかった、私、またやっちゃんところでした……」

いつものように高速転移して、花瓶と侍女の両方を受け止めると、  
全て俺の手柄になっていた。

どうやら小さな事実は変えられるようだ。

「こちらこそ助かった。花瓶を落としてくれてありがとう」  
「へっ……？ えっ、ええっ!？」

元の場所に転移で戻ると、俺に邪険な方のグライオフエンも侍女と同じく転移魔法の連発に驚いていた。

「喜べ、グラフ。未来は変えられるみたいだぞ」

「ユリウス……人前でその力を連発するな、説明が面倒になるだろう……」

「な、なんなんだ君はっ!？」

「似たようなセリフをこの前同じ顔から聞いたな。俺は元々はツウイクの魔術師なんだ」

「ほう、あの奇妙な連中の1人か。これは白百合の未来予知よりも、そなたの異質さの方に目がいつてしまうのう……。ふむふむ、魔力の高さからして、ただ者ではない思っていたが、ほ、ほおお……」

さつきから女王陛下はしきりに手招きをしてくるのだが、近付くわけにもいかない。

近付いても俺になんのメリットもないからな。恐らくあれは、巨大なジョロウグモみたいなものだ。

「もしかして、今のだけでは押しが弱いか？」

「うむ、わらわは信じた。こんなもの見せられては信じる他にない。だが決定的な証拠がなければ、軍を大きく動かすのは難しいのだよ、坊や」

「そんな……そんな生半可な迎撃で、倒せる軍勢じゃないのに……」  
グラフはこの女王と民を守りたい一心で今日までムチャヤをしてきた。  
なのに十分に信じてもらえないのは心外なのだろう。

シャンバラの軍勢をこちらに援軍として呼ぶにも、女王の全面的な協力が必要だった。でなければただの国境侵犯だ。

ところが何を考えたのか、グラフはグライオフエンの矢筒から矢を一本盗み取った。

「な、なんのつもりだっ!? お、おいっ!?!」

「だったら決めたぞっ、そこで見ている、過去のボクッ! いいか、ボクはもう君じゃないっ! だからこうしてやるんだっ!」

矢じりを自分の喉に向けて、彼女は俺の足元にひざまずいた。

そう、それは騎士の誓いにどこか似ていた。

女王アイオライアから笑顔が消えた。

主従の誓いを交わした彼女たちからすれば、それは裏切りだった。捧げた剣を取り返すも同然の行為だった。

「ボクはもう過去のボクじゃない。ボクは……ボクは変わってしまった……。陛下、ボクは貴女への忠誠を返上して、この身をユリウス・カサエルに捧げます!」

「いや、女王陛下は信じてくれるって言ってるだろ……。やってることがムチャクチャだぞ、お前……」

「ムチャクチャなのはいつだって君の方だ!」

「あ、ああ、そりゃ、そうなんだが……」

だからって、なぜそうなる……？

「だってそうじゃないか！ 君が信じてくれなかったら、君たちの助けがなかったらボクはここには戻ってこれなかった！ この恩義を君に返すために、ボクは戦士としての忠誠を君に捧げる……！」

「しょ、正気か……？ なんて、こんな男に、このボクが……！」

毛嫌いしているヒューマンに自分が忠誠を誓う姿に、グライオフ  
エンは動揺に後ずさった。

しかもそれはよりもよって、大好きな女王陛下の前だ。

ああ、えらい展開に巻き込まれた……。

「ボクだって……出来ることなら、女王陛下とずっと一緒にいたい……。だけど、ボクはこの世界のボクではないんだ。その役割はボクではなく、この世界のボクが担うべきなんだ……。陛下、軍を動かして下さい！ ボクは本当につ、本当に殺戮に泣き叫ぶ民の声を聞いたんです……！ 信じてくれないなら、この場でこの男の靴を舐めてっ、貴女の大切な白百合を汚したっていい……！」

信じてもらうためにそこまでするか？ グラフはなんて情熱的なやつなんだろう……。

女王が自分を愛していることを逆手に取って、自分を人質にして話を飲ませるなんて、やっぱコイツは真面目なようで面白いやつだ。

熱くなると何をしでかすかわからない。そこに親近感を覚えた。  
また別の面からみれば、それだけ自分がこの世界に属していないことに、グラフは大きなショックを受けていたのだろう。

帰属するもの全てを失ったと。

確かに女王の寵愛を受けるのは、本物の白百合のグライオフエンだけで十分だろう。

こちらの世界のグライオフエンからすれば、シャンバラのグラフはお邪魔虫でしかなかった。

「止めてくれ、それは、そればかりはわらわも堪えられぬ……。ああ、わらわが大切に育んだ白百合が、ヒューマンに、寝取られるだなんて……。はあっ、ふうっ……。っ、つらいのじゃ……」

「女王陛下っ、お気を確かに！　なんてことするんだ、ボクッ！」

女王アストライアは精神に大ダメージを受けていた。

「寝取った記憶がないんだが……」

「ふんっ……。どっちにしろ、ボクには行くところがない。これからも君たちと同行させてくれ」

「いいぞ。ここまでされて、忠誠はいらなんて言えないだろ。

それは俺とお前は、とくに仲間だ」

「う、うう、うううう……。はっ、もしやこれが、これが寝取られ

……。？　お、おお……。こ、この感覚は……。これはこれで、新しい刺激じゃあぁ……」

「へ、陛下っ！　なぜ笑っておられるのですっ！？　陛下、正気に

戻られて下さい、女王陛下っ?!」

なんか、悪いことしたな……。

女王アストライアは薄気味悪い笑みを浮かべながら、なぜか気持ちよさそうにピクピクしていた……。

その先に知ってはいけない世界があるように気がして、目をそむ



けた。

さて、以降はグダグダを極めたので、ここはあえて話を割愛しよう。

とにかくやけくそになった女王は、やけくそになったグラフの願いを全面的に受け入れてくれた。

では報告役の俺はシャンバラに帰るとしよう。女王にそう伝えると、何やら執拗に引き留められた。

.

「凄まじき魔力の持ち主よ。わらわの白百合を寝取り、新たな性癖の扉を開きおった稀人よ。しばしわらわの寝所で休んでいられないか？」

「すみません。勘弁して下さい、すみません、悪いとは思っていますからどうか許して下さい……」

「わらわはな、わらわは考えたのじゃよ……。男に女を寝取られたのなら……ならっ、その男をこっちが寝取り返せばこちらの総取りであるっ！？」

「あの、生まれてたった21年の若造には、ちよつとよくわからない話でね……。それに陛下には、隣に本物の白百合がいるじゃないですか……?」

「うむ、そこなのじゃよ……。考えてもみよ、せつかく白百合が2人に増えたのに、なんで両方わらわの物にならぬのじゃ!? おかしいじゃろそんなのっ!？」

「知りませんよ、そんなの……」

いつかそなたごと寝取り返してやる。

なんてメチャクチャなことを言われたが、まあ聞かなかったことにして俺は転移魔法でシャンバラへと帰還した。

こうして転移装置による実験は、時間軸の狂いという予定外こそあったが無事に成功した。

これによりただちに援軍がシャンバラよりリーンハイムへと運ばれて、万全の迎撃態勢が築かれていった。

リンハイムへの転移を行ったのが昼前。ゴタゴタの果てに女王アストライア様の説得に成功したのが昼過ぎ。

個室で打ち合わせをして、シャンバラへの伝令内容が決まったのが夕方前。

アストライア様は泊っていけど、まるで寂しい老婆のようにしつこかったが、本気で貞操の危険を感じていた俺はそれを丁重に断って、世界の裏側へと潜った。

そしてほんの少しでも早くシエラハとメーブルの笑顔が見たくて、強行軍でシャンバラへの転移を成功させた頃には真夜中だ。

真夜中の砂漠は凍えるほどに冷たく、砂の大地が月光を受けて青白く幻想的に輝いていた。

もしも俺たちの仮説が間違っていて、俺たち全員が過去の世界へと転移していたとしたら、俺はこれから俺の眠るベッドを目撃するだろう。

2階で眠るシエラハとメーブルはこの世界の俺のもので、俺は世界から孤立した不要な異物と化す。

それがグラフが直面した苦痛だと思うと、もっとアイツにやさしくしておけばよかったと今更になって思った。

グラフは全てを失った。

師匠が俺にマジギレするように、転移の代償はとてつもなく大きい。

意を決して再び亜空間を開くと、俺は自分の家の寝室へと飛んだ。

「なっ……?!」

幸い、ベッドに俺の姿はなかった。

だが上で眠っているはずのシエラハとメープルが、なぜか俺のベッドでやすらかな寝息を立てていた。

ここで寝ていれば、真夜中に俺が戻ってきてもすぐに会える。そう考えてくれたのだろうか。

そうだとしたら、急いで帰ってきたかいがあって口元がついつい緩んでしまっていた。

けど起こすのは可哀想だ。

そこで俺は居間へと短距離転移すると、毛布を身体に巻き付けて暖炉に火を放った。

「よかった……」

同じ世界に帰ってこれてよかった。

あるいは逆に、未来から別の俺が迷い込んでくる可能性も、まあないこともなさそうだ。

報告は明日の朝にしよう。

凍えるような寒さの中、暖炉の炎がゆらめくさまを見つめていると、いつのまにか意識が途絶えていた。

翌朝、早起するはずが目を覚ますと隣で姉妹が眠りこけていた。どうやら俺を見つけたものの、気を使って起こさないでいてくれたようだ。

ちよつとシャンバラを離れただけなのに、こつやつて寂しがつてくれるこいつらを非常に好ましいと感じた。

とはいえ都市長への報告は急務だ。立ち上がった。

「あつ……おはようつ、ユリウス！ メーブルツ、起きたわよっ！」

「お、おお……。おはよ、帰つてもノツクすらない、恥ずかしがりの、旦那さんだ……」

「安眠の邪魔ほど、人に嫌われる行為もないだろ。ただいま」

姉妹に背中を向けると、トーガのすそを2人に引つ張られた。

「待つて、その格好のままはダメだよ」

「うん、過去最高級に、汗臭い……」

「そうか？ 言われてみれば、まあ……つて、無言で旦那をはぐなつ！？」

シャンバラのいいところは、汗をかいてもすぐに乾いてくれるところだ。

匂いに敏感な嫁たちは鼻をスンスンと鳴らしながら、旦那の首元に鼻を近付け、さも当然とトーガをひつぺ返そうとしていた。

誤解を招く言い方になるかもしれないが、これでは男女が逆だろ  
う……。

「ええじゃないか、ええじゃないか、ほーれ、ほーれ……」

「あ、あたし目をつぶってるからっ、おとなしく脱ぎなさいよ……」

っ

いや、薄目を開けた状態で言われてもな……。

俺は姉妹をトーガからはがして、パンツと黒ローブを抱えてオアシスに移動した。

今日も爽やかないい天気だ。

冷たい湖水で汗ばんだ肌を流すと、帰ってきた実感がわいた。

・

都市長への報告を済ませると、俺は日常に戻った。

シエラハとメープルと何気ない会話が出る幸せを喜びながら、交易品であるポーションと、補給物資であるエリクサーとスタミナポーションを量産した。

それを昼過ぎまで続けると、素材を使い切る形で今日の業務が終わりになった。

いや、ところが予定外が起きた。

俺は変わらない日常に戻るつもりだったのだが、現在は事態が大幅に動き出している。

もっと具体的に言えば、向こうへの援軍の話だった。

「遠征軍の指揮官……？」

「ええそうよ。ここでユリウスの手伝いをするより、もっとグラフさんの助けになると思うの」

「グラフ？ いつの間にお前まで名前を略すようになったんだ」  
「だってこっちの方が呼びやすいんだもの」

誰に推薦されたかは明言しなかったが、シエラハが遠征隊の指揮官に抜擢されてしまった。

俺と一緒に行動していただけあって、今回の事情にシエラハも詳しい。

もっと一緒にいたい俺個人のがままを抜きにすれば、適切と言っ  
ていい配役だった。

・日常回 シャンバラでの甘い生活 1/2 (後書き)

今回含む4話、文字数が乱高下します。

いつも感想、誤字脱字報告ありがとうございます。



「それにグラフさん、今大変なんですよ……？ 自分がもう1人いて、故郷に居場所がなくなってしまったなんて、そんなの可哀想よ……」

「まあ見た限り、だいぶいっぱいはいみだいだったな」

グラフはシエラハに懐いていた。

女王アストライアとのあの関係からするに、グラフにはそっちの気があるようなので、旦那として微妙なところでもあるが……。

「だったらあたしが行って励ますわ！ 行かせてくれるわよね、ユリウス！」

「あっち行ったりこっち行ったり飛び回ってる俺が、行くななんて言えるわけないだろ。……寂しいけど行ってきたらいい」

「ええそうよつ、あなたがいない間、あたしたちすごく寂しかったんだから！ 今度はユリウスが思い知るといいわ！」

「ああ、ちょうど思い知っているところだ。……シエラハ、グラフを支えてやってくれ」

明日は我が身だ。

俺たちのようなツウィク魔術を学んだ者たちは、いつ時の迷子になってもおかしくない。ただ

「一言だけ余計なことを言わせてくれ。あっちの女王には気を付けるよ……」

「えっ……？ それって、グラフさんが自慢していた素敵な女王陛下

下のことがしら？」

「素敵、素敵な……。まあ、美しくはあるが……。あれは見た目に反してとんでもない女好きだから、気を付けるよ」

「意味がわからないわ。女王様なら女好きではなくて男好きでしょ？」

「いや……。とにかく気を付ける。話のわかる立派な女王様だが、厄介なので気を付ける……」

本当にリンハイムに行かせて大丈夫だろうか……。

信じて送り出した最愛の嫁が いや、シエラ八に限ってそれはないか。まるで理解出来ていないみたいだしな……。

「そうだった、言い忘れてた。今回の件が終わったらグラフをうち置く。本人の希望だ」

「それ本当っ！？ 偉いじゃないっ、ユリウスッ、あたしあなたを見直したわ！」

「あ、ああ……。実は反対されたらどうしようかと、心配していたんだが……」

「いいに決まってるじゃない。ふふっ、これからはもっと楽しくなりそうね！」

俺の嫁はもしかしたら天使なのかもしれない。

文句一つ言わず、俺たちが勝手に決めたわがまを許してくれた。

「ユリウス、やるね……。嫁さん3人目、ゲットだぜー……。？」  
「何言ってるんだ？ グラフは俺に忠誠を誓っただけだ、そういうのじゃない」

「うん。そう思ってるのは、ユリウスだけだよ……。あつ、姉さん……」

マリウスの工房あらため転移門にて、俺たちはシエラハの見送りにやってきていた。

打ち合わせが終わったのか、邸宅からシエラハたち先遣隊が現れると、メーブルが姉の胸に飛び込んだ。

「ごめんなさい、行ってくるわ。あたしの分までユリウスをお願いね」

「うん……。一緒に、行こうかと、マジで悩んだけど……。ユリウス放置は、危険……」

「すぐにまた会えるわ。先に行ってるわね」  
「うん」

そこには戦闘員の他にも大勢のエルフが集められていた。

マリウスいわく1度に50名を運べる巨大転移門も、軍隊を性急にリーンハイムに運ぶとなると全く容量が足りていない。

市長邸の中は今や人と物資でいっぱい、広々としたエントランスは足の踏み場もなかった。

皮肉なことにこの事件をきっかけに、新しい雇用と事業が生まれようとしていた。

「もう行くみたい。えつと、ユ、ユリウス……」

「なんだ？ んなっ……！？」

「お、おおお……」

人前だというのにシエラハは旦那の唇を唇に押し付けて、続けて最愛の妹の頬にも接吻した。

今やシエラハは先遣隊の指揮官だ。注目と歓声が上がっていた。

「さすがマク湖のエロ神たちだ……」

「外でこれなんだから、家じゃもつとお熱いんだろな」

「やっぱり若い子同士っていいわね……」

誰がエロ神だ……。言っただヤツ出てこい……。

かくしてシエラハと先遣隊は転移門に消え、天へと飛翔する青白い柱となってリーンハイムへと旅立った。

シエラハ、女王には気を付けるよ。マジで気を付ける……。

女を寝取った男を寝取り返せば総取りというあの発想が本気ならば、女王は お前を狙う。だからお前はその純真さで、戦い抜け。

「姉さん、行っちゃったね……。寂しいね、ユリウス……」

「ああ、寂しいな」

「じゃあ、寂しいから、人気のないところで、一緒に、水浴びする……」

「……」

「えっ、一緒に、水浴び……？」

「姉さんいないし、羽伸ばそ……？ 墮落しちゃお？ あ、ニヤン

ニヤンパラダイス、行く……？」

「それはマジで羽目外しすぎだろ……。バカ言っでないで晩飯買い

に行くぞ」

ニャンニャンパライスはさておき、メープルと2人だけの水浴び、水浴びか……。

つい応じかけてしまった俺は、メープルに背中を向けて、乾きかけの白いトーガをはためかせてバザー・オアシスへと歩き出した。

シエラハがいなくなって俺たちは寂しい。

おまけにシエラハという歯止めがなくなった今、非常に誘惑にもろくなっている。

「ね……。今夜、どうしようか……」

「ど、どどどっ、どうもしねーよっ……」

「……献立の話、だったのに」

「づぐっ?……!」

「むふ……」

その日の俺たちは何から何まで意識しまくりだった。

・番外編 錬金術の光と闇とモテ期が到来したおっさん

メーブルのやつが今の仕事を紹介してくれなかったら、俺はスラム街のクズのままだっただろう。

俺だって今でも信じられねえ。

自分が裏社会を抜けて、一介の冒険者に転職して堅実に働くだなんて、そんな道があるとは思ってもいなかった。

「おっさん、次は俺たちと組んでくれよ！」

「おっとそうはいかねえ。旦那は俺らが予約済みだ。そうだよな、旦那！？」

「いやお前らよ、俺がいようといなかるうと、そう変わらなくねえか？」

スラム街でクズをやっていた俺は、今や冒険者ギルドのエースだ。一仕事終えてオカマ野郎の待つギルドに戻れば、いつだって次の仕事の誘いが飛んできた。

「何言ってるんだよ、おっさんがいるとしないと大違いだ！」

「旦那がいると、なんでもかんでも仕切ってくれて楽しなあ……」

「おい、それって楽しんでえだけじゃねーか、てめーら……」

「違う違う。おっさんとは仕事がしやすいんだよ」

「はいはい、わかったわかった。じゃ、ちょうど時間が余ってる」とだし、今から行くか？」

ユリウスのエリクサーは、多くの者の才能を開花させた。

瀕死からの生還すらもたらす奇跡の薬は、覚悟が足りていなかったやつらに勇気を与えたんだ。

さらには疲れの抜けにくいおっさんの身体を、あのスタミナポーションが癒してくれた。

その効果はとにかくヤバい、あれこそヤバ過ぎる。中年を縛り付ける疲労をリセットしてくれる薬が現れたんだからな。

俺たちおっさん勢からすれば、そいつはエリクサーと比翼をなす奇跡の薬だった。

それが遠回りの人生ばかりだったおっさんに、遅まきの成長期をもたらしていた。

今日もレベルアップ、昨日もレベルアップ、明日もきつとレベルアップだ。

頼れる相棒も出来た。男にばかりモテる人生だったが、かわいい女の子がついにだ……。

「マジかつ、だったらすぐ仲間をかき集めてくる！ 待っててくれよ、旦那！」

「そうそう、コイツも一緒だから数に入れておいてくれよ？」

ペコリと隣の相棒が会釈をした。

黒髪に、砂漠エルフにしては明るい肌、胸はないがスレンダーに引き締まった長身が魅力の美人だ。

話によると未亡人だと言っていた。

胸はまあ、本当に驚くほどにないんだが……。

「悪いな。疲れてるんなら抜けてくれてもいいんだぜ」

「いえ、貴方のお手伝いをさせて下さい……」

「お、おう。悪いな」

しかしおっさんだの旦那だの言われていると、昔の仲間たちを思い出して寂しくなる。

スラムの商売は汚かったが、兄貴兄貴とあいつらは俺を慕ってくれた。

だが俺はもうヤクザ者は止めたんだ。昔の子分のことは忘れよう。何より今は、砂漠エルフが一丸となって森エルフを助けなきゃいけない。

ユリウスとメイプルに少しでも恩返しするために、ご希望のレア素材をかき集めてやろうじゃないか。

パーティメンバーが集まると、俺は美しい相棒を加えて新たな迷宮攻略に出發した。

・

「強い……さすが俺らより長生きしてるだけあるわ」

「んなこたあねえよ。それより少し休むとしようぜ」

最前列に立ってガンガンと迷宮を進んだ。

疲れはスタミナポジションが、負傷は支給のポジションとエリクサーがどうとでもしてくれるんだ。



いくらだつて気迫のままに進めた。

だが後ろがバテてきているようなので、我先にどっこいせつと腰を下ろす。

「なあ旦那、どうやったらそんなに強くなれんだよ？ 俺たち前に立つと、どうしてもビビッちまつてさ……」

「ははは、そこは俺がおっさんだからじゃねえか？ 若いやつに先立だれるのはキツイしな、歳取ると自分の命が軽く感じられてくるんだよ」

「いやでもさ、他のオヤジは旦那ほどの気迫はねーよ。やっぱり旦那はすげーや」

「ふふ……」

相棒の未亡人ちゃんがそれを聞いて嬉しそうに笑った。

何せ俺の相棒だからな。そういうときはいつだって、コイツは誇らしげだ。

そうしているとネコヒト族が図々しくも俺の膝に乗ってきた。

「ニヤー、たくましいニヤー　なでなで……」

「おい、どさくさにまぎれてどこ触つてやがる、猫野郎……」

「いい腹筋してますニヤ、惚れちゃいそうですニヤ」

「見た目に騙されんぞ俺はっ、雄だろがテメーはっ?!」

「うぶん」

「うぶんじゃねーっ!」

あの受付といい、冒険者には変わった連中も多い。俺は茶毛のネ

コヒト族（ ）を突き放して、迷宮の壁際に逃げた。  
俺に遅滞きのモテ期がやってきていた。

「今度、お店にもきてニヤ」  
「だから雄だろが、お前っ!？」

未亡人ちゃんがクスクスと笑ってくれた。それだけでまあいいかという気分になる。

しかし歓楽街の連中もあくどいな。

通称ニヤンニヤンパラダイスに雄のネコヒトを混ぜるだなんて、アルヴィンスの野郎が知ったら発狂すんぞ……。

「よろしければ肩、お揉みしましょうか……？」

「いやいいよ。がんばってるのはお互い様だろ。それにお前さんみたいな美人さんに触られたら、迷宮の中だったのに変な気起こしちまいそうだ」

「あ……。私、美人ですか……？」

「何当たり前のこと言ってるんだ、美人に決まってるんだろ」

こんなに綺麗な嫁さん残して死ぬなんて、旦那はさぞ死ぬに死にきれなかっただろうな。

嬉しそうにはにかむ未亡人ちゃんに、俺は豪快に笑い返した。

そこはお世辞っぽくしておかねえと、お互い勘違いしちまうしな。

「嬉しい……」

「いや、そう大げさに受け止めるなって」

「だって……」

いや申し訳ねえ。死に別れた旦那のことを考えりゃ、こういうのはよくねえ。

俺は真に受ける未亡人ちゃんにちよいと戸惑った。

だがな。だがソイツは 実は未亡人じゃなかった。俺が未亡人だと勝手に勘違いしていただけで、違ってたんだ……。

「貴方からそう言ってもらえて、女になったかいがあつたわ……」  
「……へ？」

今、なんて言った？ 女に、なった……？

いや聞き間違えだよな。いや、比喻表現か何かだろうな。こんなに美人が男のわけねえ。違う、違うはずだ……。

「あのよ、今……。女になったって、お前さん言わなかったか……？」  
「はい……」

憤ましげに未亡人ちゃんはうなづいた。

姿形はかわいくてたまらないのに、コクリとうなづいちゃった……。

「実はその、私……ユリウス様にわがままを言って……綺麗になる薬を作ってもらったんです……」

ユリウス・カサエル。それは今やシャンバラでは、不可能を可能にする男の名だ。

その名を出すことでどんなムチャクチャにも説得力が出るので、

今では詐欺師たちが好んでよく使うほどだった。

未亡人ちゃんの姿に、実は前々から俺は既視感を覚えるときがあった。

ソイツの親族が何かかと聞いたら、未亡人ちゃんは違うと答えていた。だ、だが、ソイツ本人だったとすれば、別に嘘ではなくなる……。

「ま、ままま、まさ、まさかつ、おまつ、お前つ……お前なのかつ?!」

「兄貴…… 実は、へいつ、おいらなんですぜ……」

「なつ、なつ、なつ、んなあああーっつ?!」

俺は凍り付いた。

未亡人だと思い込んでいたその女性は、妻と死に別れた過去を持つ俺の子分、通称ラクダ泥棒のロッコだった……。

ちよつと待てユリウスツ、綺麗になる薬ってレベルじゃねーぞ、おいっ?!

「兄貴っ兄貴っ」

「うっ……?!」

ユリウスの錬金術、恐るべし……。

その日の俺は魂の抜けたオヤジの抜け殻だった……。

ハハハハ……道理で、でけえ上に胸がねーわけだわ……。

一方その頃、ユリウスたちは

シエラハがいない夜を過ごして、新しい1日が始まった。  
しかしどうもしっくりこない。

姉とずっと一緒だったメイプルからすれば特にそうで、昨日は日が落ちると旦那と誘惑してくると思いきや、終始寂しげでおとなしいものだった。

「ユリウス、ユリウス……この前の薬、ありがと……。昔の仲間、喜んでた……」

「美人になる薬のことか？ レシピ通りに作ったただけなんだが、先方が満足ならよかった」

「うん、大好評……」

シエラハがいないので、バザー・オアシスまで出て屋台飯を昼食にしていた。

これから日差しがきつくなるので、戻ったらオアシスの水をかぶって部屋に引きこもろう。

「で、その友達の女の子、美人になってたか？」

「えっ……？」

「え？」

粗末なカウンター席に座ったメイプルが、驚いたというか意外そ

うな顔でこちらを見ていた。

何か重大な過失が発生していたりしないか、不安になってきた…。

「だから、美人になってたんだよな？ 不細工になってないよな？」

「うん、私から見ても、メツチャ好みだった……」

「驚かすなよ。失敗したかと思ったたる……」

「……えっと。言ってなかったっけ？」

「何を……？」

俺はコイツの口車に乗せられて、いったい何をさせられたんだ…

…？

不安を抱えながら恐る恐る聞いてみた。

「依頼人は、男」

最悪だった……。

「マジか……」

「うん……。おかげで、彼と、上手くいってるって……」

俺はてっきり、顔に自信のない女性を救ったつもりでいた。

だが実際は違った。俺は男を美人に変える薬を作らされていた…。

「そうか……」

「あのね、ずっと、好きだった兄貴に、昨日、正体を明かしたって……」

「なあ、もしかしてだけどさ。俺、その兄貴にクソ迷惑かけてないよな……？ ていうか明かしたってどういうことだよっ！？ その兄貴、ずっとその子のこと、女だと思ってたってことだろ！？」  
「ふっ……」

メープルは悪戯をまんまと成功させた少年のように笑った。  
なんて恐ろしいことをするんだ、コイツは……。

「いや、まずいだろ、それ絶対まずいだろ……」  
「ちっちっちっ……。その気にさせちゃえば、後はごり押しゴリラ  
プレイ可能……。それに、言ったでしょ……彼と、上手く行ってる  
って……」

「お前……。ろくでもねーことさせたら天下ーだな……」  
「むふふ……」

「すまん、兄貴とやら。本当にすまん……。  
そしてどうか、お幸せに……」。

「あとね、ギルドの受付のお姐さんも、欲しがってたから量産  
「するわけねーだろ……」

人を美人に変える薬は封印と相成った。

・いともたやすく考案されるえげつない戦略

リンハイムに向かったシエラハヤ、残った師匠たちからの調査報告が届いた。

向こうからこちらに戻るには、あちらのどこかに眠っている棺を発掘し、2台目の転移門を完成させなければならぬ。

そこで伝令役として、アルヴィンス師匠がこき使われることになった。

「師匠がそうやって勤勉に働いているところを見ると、なんか気味が悪いですよ」

「ああ？ お師匠様のがんばりを見習えやバカ弟子。……っーか、ツウィクでいけすかねえ連中の尻拭いばかりかしてた頃よか、テメエだつてずつといいだろ？」

「否定はできませんね」

「おっ、今戻つたぜ」

都市長の書齋に爺さんが戻ってくると、師匠は重要な報告があるのか姿勢を正した。

「おかりなさい、アルヴィンスさん。では先に報告を聞きましょう」  
「詳しい内容は書類にしてあるが、口頭でざっくり説明するぜ。今あつちではな」

師匠の話は多岐に及んだので、ざっくりと要約する。  
彼らはまず特異点、すなわちあの白い棺を探した。



調査は難航したがついに彼らはそれを見つけたらしい。

当初は俺たちが転送された城の地下に眠っていると踏んでいたが、どうしても見つからないので、師匠が世界の裏側から歪みを観測することにした。

その結果見つかったのか、城下町の郊外に眠る古い地下建造物だった。

シャンバラでもそうだったように、魔物の軍勢は棺の存在していた場所から発生している。

ならばと棺の周囲に障地を作り、迎撃する段取りになった。

「ま、そんな感じでな、上手くは行っている。テメエの嫁さんが谷間を作って頼み込めば、あの女王様は大抵の頼みごとを聞いてくれるしな」

「あの女王にシエラハを近付けるのは不安だ……」

「フフ……大丈夫ですよ。シエラハは偉大なる始祖と極めて似た容姿を持った娘。アストライアも恐れ多くて手を出せないでしょう」

そう願わずにはいられない。

「脱線はそこまでな。予定通り迎撃はするんだが、結局向こうからこちらへの接続を絶たなければ、根本的な解決にはならねえ。つてのがマリウスの見解だ」

「ええ、そうでしょうね。そしてこの報告が真実ならば、シャンバラにある棺も危険物であることを意味しますか」

「そうそう。だからよ、バカ弟子。テメエは向こう側からの接続を断つアイテムを作れ」

ムチャクチャを言うてくる元上司に俺は疲れた顔をさらにしかめさせた。

「んな都合のいいアイテムがあるわけないでしょう……」  
「じゃあどうするんだよ？」

そう聞き返されても困る。俺たちはそれっきり黙り込んで、別の策を絞り出そうとした。

だがどうにもこうにも出てこない。

「あ、お構いなく……」

「だからお構うわ。こんな大事なときに何してるんだ、お前？」

借りてきた猫みたいにおとなしくしていたので触れなかったが、姉の報告が聞けると期待してメールが同席していた。

いや現在は同席していたメールが、俺の膝の上に乗って、同じ席に無理やり座ろうとしていた。

「ハハハハ、そっちの嫁さんは予想が付かなくて面白えな。マク湖の彫像の件は大爆笑だったぜ」

「やったね、ユリウス……。大爆笑だつて……」

「喜ぶな……。師匠、これ以上コイツが暴走したらどうしてくれるんですか……」

「面白えからいいじゃねえか」

「よくなーよっ！」

つい丁寧語が外れるほどに、超よくなかった……。

「あ、いいこと、思いついた……」

「ほう、聞きましょう」

「お前の思いつきは、いつだってろくなことじゃないだろ……」

まさか師匠とつるんでいるあのおっさんが、美人化薬の被害者だとは思ってもいなかった。

女性にしては確かに胸がないし、背が高いので変だと思ったと、この前恨めしそうに睨まれてしまった……。

「あのね、向こうがくるの、待つんじゃない……こっちから接続して、迎撃すればいい……」

「お前って……なんでやることなすこと過激なんだ……？」

「いや、だけどそれが出来るならそれにこしたことはないだろ？」

「ええ、敵もよもや先制攻撃が飛んでくるとは思っていないはず」

俺たちは考えて、最終的にその案を採用することにした。

そこで書斎へとマリウスを呼んだ。

「ああ、そのログならこちらの棺に残っていた。俺が行けば接続は可能だろう。だが、どうやって攻める？ 一方通行だぞ」

「ならば兵ではなく、毒物 いや、川の水を大量に流し込むというのはどうだ？」

大量の毒を流し込むには準備が足りない。ならばそこにある物を利用すればいい。

リンハイムは湿潤な土地なので、水が豊かだろう。

「えげつな……」

「いいんじゃないか？ グライオフエンちゃんの世界を侵略した悪

党どもだろ？ 溺れ死んじまえばいいだろ」

「同感だ。町を蹂躪したとも聞いている。俺も向こうに転移するか  
らその手で行こう」

こうして水を流し込む方針となって、俺の方は向こう側の転移装  
置の改造のために、素材の精錬に入ることになった。

予備パーツのために素材のゆとりはあったが、2台だとしても足  
りない。

シャンバラが再び一丸となって、急ピッチで迷宮からのレインボ  
ージェムの確保に動き出した。

この作戦はシンプルだが確実だ。こちらから敵を水攻めにしてや  
ろう。

・ドンパチが始まるぜ 1 / 2

それから3日後、素材の調達と精錬が完了した。

精錬されたレインボークオーツとその他素材は、すぐに現地リーンハイムにおもむいていたマリウスの元へと運ばれた。

「シエラハが恋しいんだろ。先に行ってもいいぞ」

「冗談。ユリウスとの二人っきりの生活、捨てるわけない。寂しいのは、ホントだけど……」

「向こうも寂しがってるだろうし、行ったらいいと思うぞ」

「ん……でも、やっぱり止めとく。グラちゃんも、姉さんに甘えてる頃だから……」

俺たちも材料と一緒にいて行こうかと迷ったが、あつちでがんばってくれているシエラハのためにもこちらに残って、錬金術師とその助手として迎撃の準備に奔走した。

あの棺は諸刃の剣だ。あれはリーンハイムの救出を実現させる奇跡の古代遺物であると同時に、敵からの転送先にもなってしまふ可能性が高い。

そのため当初の予定を変更して、こちらの防衛体勢も強化することになった。

金、労働力、時間。全てが足りていないが、皮肉なことにそれがまた景気や雇用を刺激していた。

絶対に消えないとばかり思っていたスラム街が、もしかしたら消

える可能性すら見えてきていた。

「んじゃ、もう少しがんばるか」

「そだね……早く、会いたいね……。姉さん……」

「作戦が始まったら嫌でも呼びつけられる。もうちょっとの我慢だ」  
「うん……。姉さんの、水浴びが恋しい……」

「だな……。じゃなくてっ、何言っただよ、お前っ!？」

「おお……。さすが、マク湖のエロ神だ……」

「誰がエロ神だ、こらっ！ お前のせいで付いたレッテルだろが！」  
「超ウケる……」

「だからウケねーよっ！」

家からシエラハのやさしい声が消えて、ふいに物足りなさや寂しさを感じることも多かった。

だがメーブルはいつだってこんなやつなので、生活に飽きるようなことはなかった。

ところが俺たちの予想に反して、家族の再会はその翌日となった。シエラハがいないとどうにも昼食を作る気になれず、都市長のところで飯をもらっていると師匠が現れた。

「待たせたな、バカ弟子。すぐにリンハイムにこい、ついにドン

「パチが始まるぜ」

珍しくも扉からだ。聞けば師匠はリーンハイムから転移装置を使っ  
つて一瞬で飛んできたそうだ。

俺たちはマリウスのあまりの仕事の早さに驚かされた。

「ドンパチって、あちらの転移装置が完成したのはわかりましたけど、もうこちらから攻めるつもりですか？ グラフの世界で、リーンハイムが襲撃を受けた日に合わせた方が効果的では？」

「そこはもちろん議論したぜ。だがあちらの結論は、先制攻撃だ」

都市長の承認が下りると、俺たちは準備をしてリーンハイムに向かうことになった。

戦術的には襲撃に合わせるのが効果的だが、国家規模の戦略的にはそうではない。

向こうの怪物たちの体勢が整う前に、先制攻撃をしかけてこそ事を有利に運べ、次のアタックや迎撃への時間のゆとりを作ることができる。

それが女王アストライアの出した攻撃的な結論だった。

・ドンパチが始まるぜ 1/2 (後書き)

あまり書けなかったので、今回含めて4話は1話平均2000字になります。

また近日中に新作を公開する予定です。

レベル0に戻ってしまった元傭兵が、ホムンクルスを従えるレア職に目覚めてインフレ成長してゆくお話です。

10万字でお話が綺麗にまとまります。公開しましたら再度告知いたしますので、どうか読みに来て下さい。

来月はおっさんがチート馬を育てる話を公開したいです。

宣伝失礼しました。



・ドンパチが始まるぜ 2 / 2

世界の裏側を流れる濁流に乗って、無事リンハイムへの転移を完了させた。

コンクルで塗り固められた転移門を出ると、そこはもう砂漠の国でなかった。

「メーブルッ！」

「姉さんっ！ やっと会えたっ、姉さんっ姉さんっ！」

メーブルがシエラハの胸に飛び込んでゆくのを見守って、俺は辺りをグルリと見回した。

シエラハの美しいブロンドと健康的な小麦色の肌をまた見れたのは嬉しかったが、どちらかというとこの場所の物々しさの方に目があった。

「よくきた、ユリウス。シエラハゾさんが君のことをずっと待ってたぞ」

「グラフも思ったより元気そうでよかった。しかし、凄いな……」

ドーム状の転移門を取り囲むように、白いコンクル製の陣地が構築されていた。

それはまるでコロシラムのど真ん中に迷い込んでしまったかのようで、陣地の上では白い肌をしたエルフたちが守りを固めていた。

500名はいるだろうか。あの数に高所から弓を撃たれては、半無尽蔵の軍勢だろうとそうそう抜けるものではない。

「どうだ、恐れいったか」

「マリウス様あ……人使い荒いですよあ……」

そこにマリウスとその助手がやってきた。

転移門には水路が接続されており、今は急場しのぎの水門で水の流れがせき止められている。

「お前らその顔、寝てないだろ……」

助手とマリウスの顔に大きなクマができていた。

見れば防壁を背にして、労働者風のエルフたちが何人も熟睡している。

「もう寝たいです……寝かせて下さい、マリウス様……」

「ダメだ、技師ならばちゃんと結果を見とどける。どうだ、ユリウス！ なんとか言えっ！」

「お前を引き抜いてよかったよ。こんな凄い仕事、お前じゃなかったらできないな」

「ふっ……わかればいい……」

「お、おいっ……」

倒れそうなマリウスを抱き支えると、ヤツはすぐに俺の助けを突っぱねた。

「触るな、離れる……っ」

「友達相手にその態度はないだろ。いやけどお前、もしかして太ったか？」

「失礼なやつだな！　むしろ痩せたよっ！」

どうも変だ。確かにマリウスは連日の激務に痩せたように見える。だがさっき抱き支えた感触は、とてもやわらかかった。

「えええ……。なんで、気付かないですか……？」

「そういうやつなんだよ、コイツは……ッ」

ところがそうしていると、ざわざわと陣地に設けられた大門の方が騒がしくなってきた。

誰かきたのだろうかと堅牢な大門を眺めていると、なんと現れたやつは技師たちにデスマーチ強いた張本人だった。

「ずるいのじゃ、ユリウスッ！　どうしてそちはわらわ好みの美人ばかり囲っておるのじゃっ!?　理不尽じゃろこんなのっ!!」

「うっ……」

「いや、顔を合わせるなり何を言い出すんですか……」

マリウスがどこか嫌そうに後ずさった。

マリウスは美形だからな。

美しい者に目がないこの女王に、ちょっとかいをかけられていても不思議ではない。

「女王陛下、その……ユリウス一行の到着により、先制攻撃の準備が整いました。ご指示を……うっ、すみませんが、それ以上こっちに近付かないで下さいっ！」

「えらい反応だな。何をされたんだ、お前？」

「うるさいっ、聞くな！」

「美人じゃなくてよかったです……」

女王は長い耳をつり上げながら、「ご満悦でマリウスを見つめていたがすぐに我へと返った。

たらたらしていたら日が暮れてしまう。

「シヤムシエルの許可は下りたか？」

「ああ、爺さん　じゃなくて、シヤムシエル都市長は先制攻撃に賛成した。水攻めを仕掛けよう」

「久方ぶりに会えるかと期待しておったが、こなかったか。まあいずれ会えるかの。では、者共、これよりタイダルウェーブ作戦を

むっつ?!」

「どうした、敵か!？」

「そちが古の女王の妹じゃなっ!？　たまらぬ、たまらぬぞ、そのベビーフェイスッ!　フ、フォオオオーツッ!」

「おお、あれが噂の、エロ女王……?　わお……」

グラフとグライオフエンが頭を抱えてしまった。

アストライアは作戦そつちのので、シエラハと仲睦まじくしているメーブルとの間に空気も読まずに飛び込んで、両方を胸に抱き込んだ。

「あの、陛下……?　うちのメーブルのことは、後で必ず紹介しますから、今は作戦の方を　」

「姉さん、この人、聞こえてないと思うよ……。あ、ども、妹のメーブルです」

「陛下っ、士気が下がるのでそれくらいにして下さい!」

こちらの世界のグラフが不機嫌そうに女王を引っ張りはがすと、

さあ始めるぞと熟睡中の技師たちが叩き起こされて、次元を越える水攻め、オペレーション・タイダルウェーブとやらが始まった。

転移門が開いた状態を保つために、陣地のエルフ全てが魔力をドームへと放ち始めると、青白い柱が天へと上った。

続けて水門が開かれると、轟々と激しい水音を立てて、それを転移門が無尽蔵に飲み込んでいった。

川が枯れるか、エルフたちの魔力が尽きるまでこれは続く。いざ作戦が始まってみると、それは根比べもいいところの持久戦だった。

・異界侵攻隊長アダマスに起きた悲劇

・異界侵攻隊アダマス

あまりに世界と世界が遠く離れていると、箱の力だけでは次元を越えることができない。

そこで先人たちは最も原始的な解決方を選んだ。

箱の力を頼ることが出来ないならば、世界と世界を繋ぐ天然の門、闇の迷宮を踏破すればよいのだと。

我が名はアダマス。この闇の迷宮の先にあるとされる、白いエルフの国をこれより蹂躪する者。

エルフはいいぞ、実にいい……。

この長寿を誇る家畜は飼い方さえ間違えなければ補充の必要がなく、加齢により劣化もしなければ、魔力の養殖場にすらなる。

この作戦が成功すれば、俺は分け前としてエルフを数百匹分け与えられて、一生魔力にも金にも不自由しない生活を楽しめる。

闇の迷宮を進み続けてこれで一ヶ月。もうじき向こうにたどり着けるはずだ。

エルフ種たちが持つ豊かな魔力を、これから浴びるほど食らうことができると思うと、疲れようとも足取りは確かになっていった。

「ククク……これでよし。オークとゴブリンの軍勢にやつらは恐怖に泣き叫ぶに違いない」

我々の兵士たちは無尽蔵だ。

迷宮にて養殖したこいつらを、標的の世界に流し込めば大抵の場合はそれで片が付く。

俺があちら側の世界にたどり着き、この中継器の終端を配置してやりさえすれば、後はあの箱からウジャウジャと現れて敵の国土を飲み潰す。

「待ってるよ、エルフども。今すぐお前たちの魔力を俺が食らい尽くしてやるぞ、ヒハハハッ！」

俺は迷宮の中に中継器を配置しながら、魔力あふれる世界を夢見で進んだ。

「ん……妙な音がするな？　もしか向こう側にたどり着いたのかわ！？　やった、やったぞつ、これで俺は億万長者だ！　ウオオオオオーッッ……お？」

走り出すと足下に水たまりが生まれていた。

その水たまりはゆっくりと水かさを増してゆき、それと同時に轟々とした物音も、いや水音がこちらに近付いてくる……。

「ひっ……？！　こ、これはっ、これは……まずい、まずいのではないか、これはっ？！　な、なぜ、なぜ水が、ヤ、ヤベエ、ウ、ウオオオオオオーッッ？！！」

翼を羽ばたかせて俺は逃げた。

だが向こう側からの増水は止まらない。逃げても逃げても荒れ狂う濁流が俺を追い、じわじわと迫ってきていた。

「チクシヨウツ、チクシヨオオーツツ、後少しっ、後少しで金持ちになれたのに！！ あっあっあっ、アアアアアアーツツ?!?!」

俺は冷たい水に飲み込まれ、ちよつとやそつとでは死ねない半不死身の肉体を与えられたことを呪うはめになった。

この調子では受信機すらまとめて押し流され、俺たちの世界に至った濁流は闇の迷宮の入り口を水没させるだろう……。

死んでたまるか。魔力であふれる世界がすぐそこにあるというのに、こんなところで死んでたまるか！

肺が冷水に満たされ呼吸困難になろうとも、俺は濁流に逆らって果てしなく遠い向こう側の世界へとはい上っていった。

・

一方リーンハイム側では

川の水が取水限界に達すると、一度転移門を閉じることになった。魔力供給を行っていたエルフたちは崩れ落ち、結局のところマリウスと助手も全てを見届ける前に寝落ちしていた。

「や、やれたかしら……?」

「ふう……もう、へとへと……この後、戦闘とかお断りだから……」  
「うっ……。なんで、君は平然としてるんだ……」

お人好しにも魔力供給に加わる連中がいたので、師匠と俺もそれ



を手伝ってやることになった。

本来ならば戦力である俺たちは温存するべきなのだが、水をありつたけ流し込めるにこしたことはない。

「コイツは昔からこうだ……。はあつ、なんかくたびれちまったわ」

技師たちが水門を閉じてゆくのを後目に、ドームの入り口を開いてみると中は水滴1つなかった。

水が内部を濡らす前に、全てを敵の座標に送り込んだということだろう。

それを見る限りでは、戦果の確認こそできないが大勝利だった。

「味気ないのう……。さぞ向こう側ではえげつないことになっておるはずじゃが、いまいち実感に乏しいの」

「そう言って、なんでひつつくんですか……」

何か勝利の手がかりはないかとそのまま眺めていると、女王陛下に肩を抱かれたのですぐに逃げた。

「考えてもみよ……」

「その枕詞好きですね」

「そなたをわらわの物にすれば、平行世界の白百合だけでなく、金と銀の真珠まで付いてきおる！ おまけにあの麗しい天才技師も我が物に……フ、フヒヒ……」

真珠というのはうちの嫁たちのことだろうか。

艶やかなあの髪は、確かに真珠のように美しい輝きを持っている。

「おいつ、何のほんとしやがるっ！ 何かくるぞっ、女王を連れて下がりやがれ、バカ弟子！！」

師匠の警告に従って、俺は女王を連れて短距離転移した。

師匠は怒るだろうが緊急事態だ。裏側からこちら側に戻っても、師匠は俺に文句を言わなかった。

いや実際のところ、それどころではなかったとも言える。

俺たちの目の前に、見たこともない不気味なやつがずぶ濡れの状態で現れて、まるで路地裏の酔っぱらいのようにひざまずいて口から大量の水を吐き出していた。

「何こいつ？」

「はっ、どう見たって水攻めを食らったアホだろ」

「なんじゃこの身体は、不気味なやつじゃの……」

ソイツは青白い肌をしていて、全身のどこにも体毛がなく、まるで怪物みたいに脈打つ血管が肌に浮き上がっていた。おまけに背中にはコウモリの翼を持っている。

これがオークとゴブリン軍団の大将と言われたら、そんな気もしてくるいかにもな風貌だった。

「アダムス！！ コイツだっ、コイツがボクの世界のリンハイムを襲ったやつだー！！」

「ゲハツ……な、なぜ、俺の名前が、知れて……うっ、呼吸、が……」

「気を付ける、コイツは不死身なんだ！ 不死身……のはずなんだけど、凄いな、水攻めって……。不死身の怪物にも効くのか……」

「捕縛せよ。嚴重に魔封じの腕輪をかけて、指一本動かせなくなる

まで縛り付けるのじゃ！」

俺たちはアダマスという名の悪魔 便宜上の悪魔アダマスを捕縛した。

生きて喋るやつを捕獲できたのは大きい。どんな手を使ってでも、女王はコイツから情報を引き出すだろう。

かくしてリンハイムを滅亡へと追いやりかけた危機は、呆気なくも川一本分の濁流で薙ぎ倒された。

引き続き棺の監視と侵略への警戒は必要だったが、今回の嵐は落ち着いたようだった。

・異界侵攻隊長アダマスに起きた悲劇（後書き）

第二部がもう少して完結します。

同時にプロットが尽きてしまうので、第三部のプロット構築に少しの休載期間を設ける予定です。

これからも更新を続けますので、どうか応援して下さい。

一晩明けた。女王は先勝祝いをするには早計と、転移門の監視を続けるように命じた。

俺たちもシャンバラには戻らずにこちらの城へと泊まり、今日まで続いていたハードワークの疲れを癒した。

悪魔アダムスは、戦略的に重要そうな情報は何も喋っていないらしい。

エルフは彼らにとっての家畜で、彼らの世界では魔力が枯渇している。だからエルフを捕まえにきた。

俺たちに捕まったというのに、アダムスは高圧的な態度をあらためなかった。

それはつまるところ、まだ戦いは終わっていないのではないかと、俺たちを不安にさせた。

「大変です、陛下！ モンスターの軍勢がこちらに迫っていると、警備隊の者たちが！」

その疑いは的中した。

アダムスが保険を残しておいたのか、あるいは別働隊がいたのか。真偽はわからないが、敵がこちらに迫ってきていた。

せつかく構築した陣地もこれでは意味を成さない。

俺と師匠が偵察に向かってみれば、世界の裏側で別の歪みを観測することになった。

「棺は2つあった。ユリウスとアルヴィンスの報告が正しければ、そう考えるのが妥当だろう」

「あの薄気味悪い悪魔の余裕は、こういうことじゃったか。入念なことじゃの……」

「我々にお任せ下さい、陛下。ボクの世界の陛下は、この時のためにシャンバラへとボクを送ったのです」

グラフは落ち着いていた。

彼女が体験した最悪の展開と比較すれば、天国のような成り行きだったのもあるだろう。

こちらにはシャンバラからの援軍がいる。王都の防衛体勢も整えてある。

転移門があればシャンバラからさらなる援軍が呼べるとなれば、被害は出るがこれは勝てる。

「ちょいちょい……」

「メーブル、まさかまたお前、なんかくくでもないこと思い付いたのか……?」

広い会議室に集められた一行は、都の城壁を使った防衛戦を計画しながら意見を出し合った。

そんな中、メーブルが俺の肩をわざわざ叩いてから手を上げた。

「なんじゃ、銀の真珠よ?」

「ユリウスの爆弾……使えばいいと、思う……」

「あっ、シャンバラで敵を焼き払ったあれのことね！ 確かにあれなら」

一応、その爆弾ならば持参してある。

しかしこれは最後の最後の手段で、これと使うとこちらでは非常にまずいことになる。

こういう物もあると、テーブルの上に置いた。

「テメエなあつ、んな危険物持ち歩くなつてのっ!!」

「暴発したら、城が吹っ飛ぶね……。フフ……」

「なんだ、それは？ そんなに危険な物なのか？」

グラフが不思議そうにそれをつつくと、シエラハが飛び付いて止めさせた。

「これは超広範囲を高熱で焼き払う錬金術製の爆弾です。シャンバラでは砂の大地がガラス化して、ちよつとした名所になりました」

「なっ……。?! そ、そんな危険物を城に持つてくるなっ、バカか君はっつ?!!!」

グラフが凍り付いてそれから激高した。

安定しているから安全なはずなのだが、誰も信じてくれない。

「そんなものぶっ放されたら、戦いが片付いても森が焼け野原になるじゃろ……。却下じゃ……」

「ま、奥の手もあるつてことで……。炎に包まれた森……。いいかも」

「よくなーよ」

勝ててもその後が大変だ。森林火災になれば二次災害、三時災害もあり得る。当然却下された。

しかし錬金術を使って事態を解決しようというアプローチは正しい。

そうだ、こんなところで作戦立案に加わっていないで、俺は俺としてやるべきことをしよう。

「大きめの釜か、あるいは妥協して壺か何かはあるか？ 何か作ってみる」

「ならあたしたちも手伝うわ。ここにいてもしょうがないもの」

「だったら炊事場の大釜を使うといい。こっちは任せたま、ボク」

「あ、ああ……。ボクがヒューマンに懐くなんて、何度見ても不思議な光景だ……」

俺たちは会議室を出ると炊事場に移り、空っぽの釜に水を満たしてそれを取り囲んだ。

こちらで作業に入れるように、素材やレシピ本は持ち込んである。

調理台に本を並べて、何か応用できるものはないかと急ぎ読みあさった。

一通りの物資は既に供給してある。これといって決め手になるようなレシピは見あたらない。

そう都合よく奇跡が起こせるわけもなかった。

「やっぱり、爆弾で、吹っ飛ばす……？」

「そんなのダメに決まってるだろっ、なんで君はそんな過激なんだっ！？」

「ごめんなさい、こういう子なのよ。許してあげて」

「はい、シエラハゾさんがそう言うならボクは許します！」

「うわ、この人、やっぱりちよる過ぎ……」

それでも一縷の望みを求めて、俺たちは数々のレシピを読みあさ



っていった。

「そつだ……城の図書館に行くのはどうだ？」

「エルフの国の図書館か。……禁書室はあるか？」

「あ、あるはずだ……」

「ならあたしが付いて行くわ。ユリウスたちはここに残って」

「ユリウス、本泥棒の前科、あるしね……」

「えっ!？」

メープルが手元の本をグラフにちらつかせた。

余計なことを言うなと後頭部を軽く叩くと、待ってましたと微笑かに笑った。

敵が城壁に現れるまでまだもう少しある。

焦らずに俺たちは本へと目を落とし、横目で2人を見送った。

その後も俺とメープルはレシピを読みあさっていった。筋力を強化する薬。回復力を高める薬。氷属性の爆弾。いくつかのレシピが候補に上がったが、それらは選択肢から外れることになった。

理想は戦局を塗り替える奇跡のマジックアイテムだ。それゆえに決め手に欠けていたり、そもそも特殊な材料が必要なものは候補から除外した。

「お前、珍しく真面目だな」

「何言ってるの……？ ふざけてる場合じゃ、ないでしょ……」

「普段やりたい放題のお前にそう言われると、なんかムカついてくるわ……」

「あ、見て……。これ、足の臭いを消す、香水だって……」

「それな。こっちの奥様方には需要がありそうだな」

シャンバラはカラカラの世界だ。汗も靴下もすぐ乾く。

早くあつちで元の生活に再開するためにも、今はがんばらなければならぬ。

「はあ……なんか、脱ぎたくなってきた……」

「待てこらっ、脱ぐな、あっ、こらっ！！」

上を脱ごうとするメープルを、俺は揉みくちやになってどうにか

止めた。

厨房でテーブルがすっぽんぽんになってる現場を、もしグラフが目撃したらひんしゆくどころじゃ済まない。

「あ、姉さんお帰り……」

「はあ……またか。城で脱ぐなと約束しただろ……」

と思っただが、既にグラフの前で現行犯を働いていたようだ。シャンバラで過ごす俺たちにとって、こちらの気候はどうにも慣れなかった。

「それよりユリウス、これ見てちょうだい！」

「こつちもだ！」

2人は革張りの大きな本を両手に抱えていた。

それを厨房のテーブルにドスンと乗せると、どちらも年寄り臭く腰を叩く。

お互いに同じ仕草をしていることに気付くと、フッフとやけに仲良く笑い合っていた。

「仕草が移るのは、仲良しの証……。大変だよ、ユリウス……。これ、寝取られだ……」

「バカ言ってるねーでほら、姉貴の運んできた本に目を通せ」

新しい本を3人に配って、俺はその中でも特に大きく仰々しい本を手に取った。

ずいぶんと手が込んでいる。皮の上に白いシルクが張ってあって、ところどころ破けて中の皮が露出している。

「えっ、その本はなんだ……?」

「何って、お前が運んできたんだろ。変な本だな」

「そんなわけあるか! そんな目立つ本があったら誰だって覚える!」

「あたしも見覚えはないわ……。変ね、どこからまぎれ込んだのかしら……」

しかし次に驚くべきはその中身だった。

「こなかでかいのに、めくってもめくってもどのページも白紙だった。」

「手の込んだ冗談だな。これを作ったやつは、よっぽどの暇人か芸術家気取りに違いないぞ」

「おお、なるほど。参考になるかも……」

「何を思い付いたか知らんが、お前は余計なことすんな……」

「あてっ……へへ」

念のため目次を確認してみると、デザインの入った手の込んだ目次がそこにあった。

ただし問題はそこから先だ。

空っぽの目次ににじみ出すように文字が浮かび上がり、俺たちに目を擦らせた。

不可解だが、それは疲れ目や手品の類ではなかった。

『13p 愚者の英知』

指定のページを開いてみると、今度はビッシリと黒いインクがそ

ここに敷き詰められていた。

「こわ……」

「な、なんなんだこの本はっ、まさか呪いの本じゃないだろなっっ！？」

「その理屈だと、運んできたお前が呪われてることになるだろ」

愚者の英知とはまた気取った名前だ。

ギツチリと詰められた文字の羅列からは、執筆者の変質性を感じさせられる。

「うっ……止める、全く冗談になっていないぞっ！」

白紙のページがこれだけ余っているのに、なぜ敷き詰める必要があるのだと思いつつも読み進めてゆくと、それは錬金術師か何かを書いた、日記帳のようだった。

「グラフ、月光草の根はあるか？」

「え？ それなら、女王陛下が大切にしている花の1つだけ……」

「貰ってきてくれ」

「まさかそれ、レシピ帳なのか……？」

「よく読めるね、ユリウス……。くせ字、酷すぎて、脳が理解を拒むレベルなのに……」

「まあそんなところだ。材料があるなら作ってみるとしよう」

日記の内容を要約すると、この『愚者の英知』を作るためにこんなに苦労しましたよと記されている。

そこから材料を読み取ることが出来た。

「だけどユリウス、この愚者の英知ってどんな効果を持っているの？」

「知らん」

「わけのわからない物のために、キミは女王陛下の花園を荒らせと言ったのかっ!？」

運命を信じるわけではないが、本の著者がこれだけの情熱をかけて何を作り出そうとしたのか気になった。

それにこの本は存在が恣意的だ。

俺たちがレシピに飢えているところに、まるでどこからか運び込まれてきたかのように都合よく現れた。

偶然なら偶然でよし。誰かの酔狂なら酔狂でよし。

筆者のこの変質的な情熱に付き合ってみる価値はある。

「頼みにくいならあたしが行くわ」

「それはダメだ、それならボクも行くっ！」

「悪いが急いで頼む。こっちは他の本に目を通しておくよ」

そう誘導すると、シエラハとグラフはまた厨房を飛び出していった。

その後ろ姿をメープルが見送って、おかしそうに微笑んでいた。

「何が面白いんだ……?」

「えっと……ドロドロの、人間関係……?」

「ああ、自分が2人もいると大変だな。俺なら全てを捨てて逃げ出したくなる」

「そう？ 私はユリウスが2人に増えたら、もっと幸せだよ……？」

「そうか」

「うん……だから、別に、増えてもいいよ……？」

俺はその一言に少しだけ救われた。

きっとグラフは女王がシエラハにデレデレするのが気に入らないのだろう。

シエラハを女王に取られたくないという心境もありそうだ。

確かにドロドロの心境が見えなくもなかった。

「増えたら、エロ本みたいなこと、できるし……」

「何を想像してるか知らないが、んなことしねーよっ、しねーからなっ！？」

「ごめん……今私、挟撃されてみたい、年頃だから……」

「だから、しねーって言ってるだろ……」

ツッコミに疲れた俺はメーブルのおでこをコツンと叩いて、月光草が届くまでのレシピ探しに戻っていった。

水に魔力をかけて、十分な量のポーションを投入すると、触媒の純銀を入れた。

十分に安定したところで、女王が大切にしてた月光草の根を12束加える。

「なんだ……？」

「いや別に。綺麗な花だな……」

グラフの頭には澄んだ月光のように白い花が刺さっていた。

そんな姿を見ると、白百合のグライオフェンという通り名に今さら納得がいく。

一緒に行ったシエラ八には渡さず、グラフの髪にだけ大切な花を刺したのは女王からの愛情の証だろう。

「こんなに綺麗な花なのに、根から引っこ抜いちゃうなんて……陛下に申し訳ないよ……」

ここに残りたかったら残ってもいいからな。

そうグラフに言おうかと迷ったが、今はそういう状況ではないので止めた。

……言われて嬉しい言葉でもないだろう。

「あ、甘い匂い、してきた……」

「お、美味しそうね……」

「お前らはどうして食い気が先なんだ……。シエラ八、メーブル、



仕上げるぞ、手伝ってくれ」

シエラハとメーブルが厨房備え付けのかき混ぜ棒に手をかけて魔力をかけると、それにグラフも加わってくれた。

「ボクをのけ者にするな」

「悪い、次はお前の名前も呼ぶよ」

俺たちは最後の魔力を流し込んで、正体不明のアイテム『患者の英知』を完成させた。

まばゆい光と一緒に、ふんわりと月光草の甘い匂いが広がって、釜の底に薄めた乳のように白く濁った液体が生まれていた。

「なんか、ますます美味しそう……。スンスン……」

「ダメよメーブル、髪の毛が入っちゃうでしょ。スーハアスーハア……」

「ユリウス、少し舐めていいか……?」

「いいわけねーだろ……」

3人揃って釜に顔を突っ込んでいるのを順番に引っ張り上げて、俺はおたまで小皿へと液体を運んだ。

「ユリウス、ずるい……!」

「自分だけ先に飲もうなんて見損なつたぞ!」

「バカ言ってるじゃねーよ……。お前から人体実験出来るわけねーだろ……」

そういうことで、俺はその果汁のように甘い薬を喉の奥へと流し込んだ。

「あ、そうね……。もしかしたら毒薬かもしれないものね……」

このタイミングでそういうことを言うな、むせかけただろう……。

幸いこれは猛毒ではなかった。

しかし『愚者の英知』という仰々しいその名の通り、なんの意味があるのやら理解しかねる薬効を持っていた。

身体が変だった。腕を上げようとしても上がらず、頸を曲げようとしても思うように動かなかった。

いや違う。正確には身体の動きが急激に鈍り、ゆっくりとしか動けなくなっていた。

「どしたの、ユリウス……？」

「おい、大丈夫なんだろうな……？」

だがすぐにそれも間違いだとわかった。

緩慢になっていたのは俺の動きだけではなく、世界全てだったのだ。

メープルとグラフの音が極限まで引き延ばされ、少女らしからぬ野太さになったことに、俺はゆっくりとしか動いてくれない顔で笑っていた。

「ユリウスッ、しっかりして、ユリウス！」

こんな状態ではまともに喋れそうもないので、俺は遅延する世界で首を左右に振る。

最初は混乱するばかりだったが、ようやくこの状態に慣れてきたので、俺は『愚者の英知』の神髄を披露することにした。

未調理のジャガイモを手にとつて、右から左へと投げた。新しい物を拾つて左に投げる。

緩慢に動く世界で、慎重に投げては受け止めて、投げては受け止めるだけで、俺はジャグリングの天才になれた。

「す……」

「まさかこの薬、手先を器用にする薬なのか……？」

惜しいがそうじゃない。俺はまた首を左右に振つて、ジャグリングを止めた。

世界がスローなので考える時間は十分にあつた。

「ユリウス……？」

白銀のコインを取り出して、それを『裏、表、表、裏、表』の順に見せてから頭上高く爪弾いた。

ゆっくりと回りながら飛翔するコインを、予言通りに掴んでは答えを差し出す。

極めつけにコインを3枚同時にして飛ばして、全て表で揃えて見せると、彼女たちもやっと理解してくれたようだった。

「もしかして、器用になる薬じゃなくて……世界がゆっくりになる、薬……？」

「そ、そうなのかつ！？」

「それって凄いわ……。これがあれば、よくわからないけど、凄い

「ことが出来そうなのはわかるわ！」

やっと伝わってくれた。

自分の思考だけが加速した世界で、相手の返事を待つのは非常にもどかしい感覚だった。

時間が十分にありすぎるので、相手の発言が予測出来てしまう。文字盤でもあれば、相手の言いたい言葉を先読みして驚かすことができる。

「てか、それって、チート過ぎじゃ……」

「あ、ああ……。これは使える……。！これがあれば、どんな軍勢も撃退出来るんじゃないかっ！？」

同感だ。特に遠距離攻撃を得意とするエルフ族との相性も最高だ。ゆっくりと動く世界で、いくらでも慎重に照準を合わせて、ムダのない高速射撃が可能になるからだ。

時間の感覚が狂うので計りようがないが、すぐそのトイレにちよつと行って戻るくらいの時間が、ゆっくりとした夕食ほどの時間に間延びしていた。

「ふうふう……。つ。やっと、効果が切れたか……。これ、すげーけど疲れるな……。グラフ、お前も試してみるよ」

「あ、ああ……」

小皿に盛って差し出すと、グラフは戸惑った。時間が極限まで間延びするようになる薬なんて、あまり飲みたいものではないだろう。

「ごめん……。ユリウス、そういうの、気にしない人だから……」  
「なんの話だ？」

グラフが小皿を受け取り、おとなしくそれを口に運ぶのを見守つてから、横目でメープルに聞き返した。

「男女でお皿を使い回すことに、抵抗のない人……」

「ああ、孤児院じゃそれが普通だったからな」

「あ、マリウスちゃんに、同情……」

「そこでなんでアイツの名前なんだ」

そうしていると、グラフが背中の中の短弓と矢を取った。

何を撃つつもりなのかと様子を見れば、厨房の窓から庭に突ったオレンジを、驚愕の速射で次々と枝から落として見せてくれた。

「へー、外側から見るとこうなるのか。こりやすげーな」

グラフの世界ではゆっくりと慎重に撃つたものだ。

それが非服用者の俺たちの世界からは、全弾必中の乱れ撃ちに変わっていた。

「イケルツツ！！ コレナ」

ただ会話能力を失うのが難だ。早口過ぎてグラフが何を言っているのかわからなかった。

「クスクス……なにこれ、おもしろ……」

「だからユリウス、一言も喋らなかつたのね……」

「クソナンテコ」

「プツ……面白い、面白すぎるよ、これ……アハハハッ」  
「失礼よ、メーブル」

グラフは意地になりやすいやつだ。

その後も一生懸命、言葉を伝えようとしていたが、ニュアンスしか俺たちに伝わらなかった。

しょうがない。見てられないので代弁してやるか……。

「この薬があれば、ムダの全くないモーションで次々と矢をつがえて、百発百中の射撃が可能だ。つまりこれは、アーチャーやボルト魔法使いを最強の固定砲台に変える薬だ」

コクリコクリと機敏にグラフが首を縦に振るので、つい笑ってしまった。

グラフには悪いが確かにこの薬、面白い……。

「ふっふふっ……ごめんなさい、グラフさん　そんなに一生懸命、首を降らなくてもいいじゃない、ふっふっ……あははははっ  
お、おかしいわ……」

限りなく機敏にこちらへと抗議してくるグラフは、まともに伝わらない早口もあってその後もシエラハを大爆笑へと追い込んだのだ。

愚者の英知はその後、不満そうなグラフが超効率でポーション瓶に詰めるのを手伝ってくれた。

こうして木箱に詰めたそれを会議室に運び、薬効を説明して師匠に前線への運び屋役を頼むと、後はひたすら愚者の英知の量産を行

うだけだった。

どんな愚か者も天才に変える薬。愚者の英知。

ふとレシピ帳に目を落とすと、ページの反対側に手書きの挿し絵と、そんな文面が書き足されてゆくのを見てしまった。

けったいな本だ。だが今は助かった。

もう一つの世界でグラフが守れなかった命を、全てを守り抜くこともこれならば決して不可能ではない。

【宣伝】

明日から新連載

【レベル0の元傭兵、生命創造職ホムンクルスマスターに覚醒するも、経験値総取りの仕様により超絶レベリングモードに入ってしまった。くえ、団長を刺した俺に最強傭兵団からの報復？ こちら最最強を揃えて迎え撃たせてもらおう】を始めます。(長い)

ラグンロクオンラインのマーチャントのカートアタックと、アルケミストのホムンクルス自動狩りが着想点の、レベル0始める効率レベリングを軸とした物語です。

妹ヒロインのリリウムは、性格は異なりますが、本作のメープルに似た味付けのかわいい女の子になっています。

楽しい一作になりましたので、どうか明日から応援して下さい。宣伝失礼しました。



## ・百発百中の防衛戦

大地を緑で埋め尽くす怪物たちの群れが、ついに城下町防壁まで到達した。

城下の市民は城へと避難させ、全軍を防壁と門に配備する強気の迎撃体勢で迎え撃つ作戦になった。

理由はただ一つ。その方がずっと敵を狙撃しやすいからだ。

ありつたけの弓手と矢とボルト魔法使いを用意して、2人に増えた弓兵長グライオフエンの指揮の下、愚者の英知によるカウンター作戦がついに始まった。

「ま、まだですか、兵長!？」

「まだまだ、もう少し引き付けてからだ!」

「ですがこの薬、ヒューマンが作ったんでしょう? もし効果が期待はずれだったら」

「ユリウスを信じる! 確かに種族は異なるが、錬金術師としての才能は天才どころではない! アイツが信じられないなら、アイツを信じるボクを信じる!」

メーブルとシェラハは女王とともに中央を受け持った。

グラフが左翼、グライオフエンが右翼。俺と師匠は城の高台に残って守りの薄い部分への遊撃を行う。

「愚者の英知を服用後、射撃に移れ! 撃って撃って撃ちまくれ!」

中央が先立って射撃を開始すると、左翼と右翼もそれに併せて城

壁に群がる敵軍に攻撃を開始した。

最初は皆が薬に慣れず、緩慢に変わった世界に驚いていたが、グ  
ラフが次々と敵を狙撃して見せるとすぐに要領を掴んでくれた。

「戻りました」

「はっ、盗み聞きたあ趣味がわりいな」

「気になったので。戦況の方はどうですか？」

「見りやわかるだろ。ありや反則だ……」

ゆっくりと狙う時間があるということは、急所を確実に狙い撃て  
るということでもある。

即死したモンスターは次々と実体を失い、富をもたらすドロップ  
に変わっていった。

「出番、なさそうですかね……」

「今んとこな。大活躍して、エルフちゃんたちにちやほやされる予  
定だったのになあ……」

近くで見るとえげつない光景も、遠くから見ると限りではまるで敵  
が溶けてゆくかのようだった。

「バカなこと言わないで下さい」

「だってよお……。こうなりや、今から無理矢理にでも乱入してく  
るかね……」

「……それは、悪くありませんね」

「だよな……？」

もはや負けるような戦いでないことは、ここから見下ろせばわか

った。

狙う時間がたつぷりとある上に、愚者の英知を服用した先にある世界では敵が止まって見えるのだ。

城壁前まで迫っていたモンスターは実体を失い消えてゆき、矢の嵐がゴブリンとオークによる緑の地平を浸食していた。

「じゃ、お師匠様はあそこの城壁に行くわ。テメーはどうする？」  
「なら俺は反対側に」

突撃しか能のない怪物たちは、ゴブリン1匹すら防壁を越えることが出来ないまま、押し寄せた波が引いてゆくように大地から消えていった。

エルフの弓術の勝利だ。

愚者の英知は軍隊の戦術どころか、国のパワーバランスすら破壊してしまうチートアイテムだった。

「すまんの、尻拭いをさせてしまつて。此度の恩は忘れぬぞ……」  
「恩返しならいくらでも歓迎だぜ」

敵の迎撃は片付いたが、相手の侵攻ルートはまた消えていなかった。

そこで俺たち転移魔法の使い手が、リンハイムの各地を回って世界の裏側から歪みの観測を行うことになった。

「感謝ならグラフに言ってやって下さい。アイツはいつだって貴女を守ろうと必死でした」

「あの跳ねっ返りがこっちに迷い込んでこなきゃ、こうはなってねえな。……そういう意味じゃグライオフェンちゃんは、確かにうちのバカ弟子にはなびいちまったが、忠義を尽くしたんだよ」

「なびいた？　こちらの世界の自分のために自ら身を引いただけでしょう」

「ムキイーツッ！！　わらわの白百合を寝取っておいて、なんじやそのアホ鈍感さはーっ！　惚れてもない男に剣を捧げるやつなどこにおるかーっっ！！」

「なら王に剣を捧げた騎士たちは、みんな揃いも揃ってホモってことになるでしょうね……」

「はあ……わりいな、女王さん。コイツガキなんだよ……。信じられるか？　メーブルはまあわかるが、コイツよ、シエラハゾちゃんにいまだに手出してないんだぜ？」

なんでその話になるんだと俺は師匠を睨んだ。  
だが師匠はあきれ顔を崩さなかった。

「ほう……それは、それで……うむ、かわいいのう……　　ウブな存在ほど汚したくなるというかのう……　　大人のドロンドロンのグチャングチャンの世界を教えたくなるのう……」

「まあわからんでもないが、俺あ人妻派なんだ」

「俺、先行ってますね……」

付き合いきれなくなったので世界の裏側に身を隠すと、俺は歪みを探して歩き出した。

あれだけの大軍を転送してきたのなら、どこかしらに痕跡が残っ

ているはずだ。

そのルートを潰さない限り、この戦いに本当のピリオドを打ったことにはならなかった。

向こうとこちらの接続を論理的に断つ方法はわからない。

そうなってしまったら残る手段は1つだけだ。カズくでどうにかするしかなかった。

・百発百中の防衛戦（後書き）

新連載「Lv0の元傭兵」を始めました。  
もしご興味がわきましたら、こちらの新作も読みに来て下さい。

本作の第二部は次話で完結です。

続けてエピソード展開を書く予定ですが、以降はプロット制作のためのおやすみをいただきます。

その後、2日1回の投稿ペースで連載してゆきます。

クオリティ維持のために、ペースを落として質を上げることになりました。

どうかこれからも本作を応援して下さい。

・第二部終幕 次元の狭間に消えた錬金術師

「よう、遅かったなバカ弟子、ちょっと手伝えや」  
「なんで先にいるんですか」

歪みが見つかった。都から思ったよりも離れていたので手間取ったが、歪みの目前でこちらの世界に戻ってみると、エルフたちに混じって師匠が敵残党と戦っていた。

「ま、また生身で転移してきただっつ、なんなのだコイツらはっ！？」

「いやそれ、こっち側のセリフなんだが？」  
「違いねえ」

オークとゴブリンの混成を、アダマスにそっくりの外見を持った連中が操っていた。

数は3名で、アイツと同じく悪魔みたいな不気味な容姿をしている。

こいつらはエルフを狩りに、こちらへと遠征してきているんだっ  
たか。

そうなると侵略者というより、征服者や、奴隷商人の末端に近い  
のかもしれない。

「気を付けるよ、こいつら驚くほどタフだ」  
「グラフによるとそうらしいな」

俺が短剣を構えると、やつらは後ずさった。

師匠を相手にしていたのなら当然の反応だ。攻撃魔法は師匠の方が得意だからな。

「こちらの世界には、こんな魔力の塊みたいな怪物がゴロゴロいるのか……？」

「ビビるなっ、勝てない相手じゃない！　んなっ、ゲハアツツ？！……！」

リーダー格を見分けて、ソイツの前に短距離転移して折れた短剣を突き出した。

心臓を貫くと紫の血液が飛び散ったが、奇妙なことにソイツは死ななかつた。

「刺しておいてなんだが、投降しろ」

「出来るかそんなこと！　下等なヒューマ　　グエエツツ?!」

リーダー格は翼を使って空に逃げたつもりだったが、こちらは転移で背中に回り込んで後ろから刺してやった。

逃げて、刺されて、逃げて、刺されてを繰り返すと、ようやく怪物も膝を突いた。

「か、怪物……」

「だからそれ、こっちのセリフだって」

「どっちもどっちだろ。……あらよっ」

残り2体と残党たちは、師匠お得意のサンダーストームで空に逃げることも許されずに丸焦げになった。

これでは俺がこなくても師匠の楽勝だっただろう。



「こ、降伏は、出来ない……」  
「なんでだよ？ 死ぬよかマシだろ」

「出来ない契約なんだよおおっ！！……アツ、アアツ！？ キ、キタツ、ア、アツ、ソナツ、ア、アアアアアアアツ？！！」

リーダー格の男が突然苦しみだした。

最初は発狂したのかと哀れみかけたが、ソイツの仲間たちが悲鳴を上げて怯えだすところからして、何かがおかしい。

その理由はすぐにわかった。

リーダー格の男の肉体が、元から悪魔じみたそれがおぞましく肥大化してゆき、やがてオークを越える醜い巨体へと変わっていった。

「おい、テメエら、コイツの仲間だろっ！？ なんなんだよ、これっ！？」

「そういう契約だって言ってただろっ！ 敵に捕まりそうになったら、リーダーがああなる契約なんだよっ！」

「た、助けてくれ…… ああなったら誰にも止められない……。俺たち、殺される……」

師匠と俺は目を向け合い、悪くない流れだとうなづいた。

こいつらはアダマスより話がわかりそうだ。それにどちらにしろ、リンハイムにこんなものを野放しに出来ない。

「ちっ……こりゃ骨が折れるぜ」

悪魔の成れの果てに師匠が落雷魔法サンダーをぶち込んだ。ひるんだだけで、まるで効いていない。

反撃の跳躍が師匠を狙ったが、ツイクの魔術師に近接攻撃は効かない。師匠は転移魔法で世界の裏側に身を隠した。

「た、助けてくれ……」

「狙われ、あつ……」

エルフたちや証人を守るために、俺の方は近接戦闘を仕掛けた。さすがに折れた短剣ではコイツとは戦えないので、グラフに怒られそうだがエルフの聖剣を使わせてもらった。

「どうする、そのまんまじゃらちが明かねえぞ！」

「こっちは忙しいので、師匠がそれを考えて下さい」

反撃を入れながら、食らえば即死の攻撃をかわしまくった。

まるで重たい水でも斬っているかのようだ。

斬っても斬っても傷口がふさがって、まるでダメージになっていく感じがしなかった。

だがコイツは不死の代償として知能を失ったようだ。

そうとなればこちらの転移先を予測することの出来ない獣ごときに、転移魔法を極めた俺を倒すことも不可能だった。

そうしてしばらく時間を稼いでゆくと、ようやく師匠が答えを出してくれた。

「飛べ……。そいつを連れて、特異点の向こうに飛びやがれっ、バカ弟子っ……」

「シンプルですが、ありますね」

師匠としては苦渋の決断だろう。

だがその判断は正しい。師匠の術すらまるで効かないのだから、これを殺す方法はどこにもありはしない。

だつたらあちらの世界にコイツを返品してやるのも、反撃と防御が両立していて悪くない。

「ソイツは野放しにできねえ、やれバカ弟子っ！！ テメエならどこに飛ばされようと、必ずここに戻ってこれる力がある！！ テメエは天才だっ、テメエだから俺は命じるぜ！！ ソイツを歪みの向こうにブチ込んでやれ、ユリウスッ！！」

「了解です、師匠」

俺は聖剣の力で魔力をブーストすると、成れの果てに突っ込んだ。ただちに師匠が爆裂魔法で敵の動きを止めると、あとはソイツに俺が触れて、いつものように別の存在を世界の裏側に引きずり込むだけだった。

世界の裏にきた。視界の正面には成れの果ての巨体と、全てを湾曲させる巨大な歪みがある。

その成れの果てに、俺はブーストしておいた純粹エネルギー魔法マジックプラストをぶち込んでやった。

結果は成功だ。歪みは成れの果てを飲み込み、俺までもをあちらの世界に引きずり込もうとしていた。

「シエラハ、メーブル……ッ。ま、まずいな……クソ……ッ」

俺は歪みに飲み込まれまいと走った。

だがどんなに力を振り絞っても、少しずつ引っ張り込まれてしま

っている。

こんな状態で元の世界に戻ろうとすれば、それこそどこに飛ばされてしまいかもわからなかった。

このままあえて飲み込まれて、向こうに殴り込みをかけるのも面白いと言えば面白い。

だがちよつと別行動しただけであれだけ寂しがる嫁たちを、この世界に置いていけるはずがない。

だから俺はアイツらの名を何度も叫んで、己を勇気付けてるとまあ、こんなこともあるつかと、用意しておいた例の物を取り出した。

これこそがシャンバラの滅亡の未来をひっくり返したキーアイテムだ。

計算通りに事が運ばなければ、俺は焼かれて死ぬことになるだろう。それでもやるしかない。

俺は全てを焼き尽くす炎メギドジエムを起動させて、ソイツを歪みの向こう側の世界にぶん投げた。

全てを湾曲させる大きな歪みの中で、恐ろしい炎が燃え上がり世界を真っ白に染めた。

だが成れの果ても、メギドジエムの天罰の炎も、向こう側とこちら側を繋げる何か全てを飲み込んでくれた。

背中の方こうで全てが吹き飛ぶのを俺は走りながら見届けた。

それにより正体不明の引力が消えて、自由となった俺は憔悴に膝を突いた。

頭が回らなかったが、碁盤目状に光る足元を這いずって、師匠たちがいるであろう座標へと引き返す。

問題はここからだ。

あれだけ大きな現象が目の前で起きた以上、確実に元の時間軸に戻れるとは限らないだろう。

むしろ何も起きない方がおかしい。

「エルフの神よ、次元の狭間の神よ、どうか頼む……。どうか俺を、あいつらのいる世界に帰してくれ……」

時の迷子はいいつらを死ぬほど悲しませることになるので、それだけは絶対に困る。だから心より願った。

あいつらと同じ場所に、どうか俺を帰してくれと。

かくしてこの日、俺は転移魔法の本当の恐ろしさを我が身で知り、師匠の方は時と場合によっては、禁忌を破ることも必要であることを知った。

「……あれ、シエラハに、メープル？」

「あ、ああ……ユリウスッ、よかったっ！！ あたしたち、ずっと待ってたのよっ、ずっとっ、ずっとっ！！」

元の座標に戻ると、夕暮れが訪れていた。

俺の前にシエラハとメープルが飛び込んできて、いるはずのない

グラフやマリウス、師匠が胸を撫で下ろしていた。

「痛っ、止める、何をするこらっ、痛っっ?!?!」

「ユリウスのバカ……。置いて行かれる側の、身にもなれ……。本気で、世界が終わるかと思っただ……。」

「師匠、あれから何日経ちました？」

「安心しとけ、たった1日と数時間だ。だがよくやったな、弟子。俺じゃ戻ってこれなかった。しかもこいつらにしかたま怒られてよ……。戻ってくれてよかった、生きた心地がしなかったぜ……」

「当たり前だっ、師弟なら師匠が身体を張る状況だったのに、貴方は俺の前から2度もユリウスを奪おうとしたんだ！」

「ほらこれだよ……。うちのバカ弟子なら必ず戻ってこれるって言っても、聞きやしねえ！ いでっ?!」

「おっと、矢が滑った」

「滑るかよっ、そんなもんっ!?!」

師匠の判断が正しかった。師匠は悪くない。

そうフォローしたいところだったが、今はシエラハとメーブルを慰めるのに精一杯だ。

涙を流して無事を喜んでくれるシエラハと、しがみついて離れないメーブルの背中を撫でながら、俺は無事に同じ世界に戻ってこれたことに感謝した。

「グラフ、ちょっとだけお前の気持ちがわかったよ」

「そうだろうな」

「こつちが片付いたら一緒に帰ろう」

「ああ、心変わりはない。これからもシャンバラでよろしく頼む。

……無事でよかったよ、本当に」

ここに残りたいたいなら残ってもいい。あるときそう言わなくてよかった。

俺たちは友情の握手を結び、同じ時空で生きられる喜びを噛みしめた。

「で、くだんの特異点は？」

「この地下の棺ごと潰れていたよ。けど、いったいどうやって潰したんだ？」

「怒られそうだからそこは秘密だ」

「何をやったのか、聞くのが怖いよ……」

こうして俺たちはリンハイムでの滞在を終えて、あの美しいオアシスにたたずむ白亜の邸宅へと帰っていた。

所属する世界からこぼれ落ちて、異なる世界に飛ばされることは死とそう変わらない。

俺はこの世界、この時間軸でもう一度生きられることに感謝した。

・

ああ、やっと戻ってこれた……。

これでまた明日から、美しい嫁の水浴びをのぞき見できる。

マク湖のエロ神と言われようと、この習慣ばかりはどつしても止められる気がしない。

少なくともシエラハが止めない限りは。

それほどまでに湖水に舞う彼女の姿は美しく、それが同じ時間で生きられる喜びとして胸を熱くさせる。

この先、どんな世界に飛ばされようとも、必ずこの場所に戻ってこよう。

俺はユリウス・カサエル。美しい嫁と厄介な嫁を二人ほど持つ、シャンバラの錬金術師だ。

世間ではエルフの救世主、あるいはマク湖のエロ神とも呼ばれているが……。

実際、むつつりスケベなのだろう、俺たちは。

無事に帰ってこれたからこそ、今は特にシエラハとメープルが輝いて見えてしょうがなかった。

金と銀の真珠とは、アストライア女王も上手いことを言ってくれたものだ。

俺にとって2人は、宝石よりも美しい最高の宝物だった。



・第二部終幕 次元の狭間に消えた錬金術師（後書き）

新作への誘導URLを間違っていたので修正しました。  
リンクから飛んで下さった方、ごめんなさい。

・第二部エピローグ 外堀りを埋められた錬金術師あらため、セ  
三 ー その後の世界 ー

俺は今、完全に追いつめられていた。  
こうなってしまうのは、立ち上がることも目を閉じることも出来  
なかった。

視線をそらせばライトボールの明かりが幻想的な辺りを照らし、  
それがいくつもの影を映しだしていた。

リンハイムは救われた。未曾有の危機は過ぎ去った。

だが、今度は俺の目の前に個人的な危機が訪れた。

こんな展開、誰が予想しただろうか。

いや確かに兆しはあったが、まさかここまで思い詰めているとは思  
ってもいなかった。

手を伸ばせば欲望の全てが手に入る。

だが衝動に負けてはならない。

俺は閉じようにも命令を拒む目を開きっぱなしにしたまま、この  
身に沸き起こる激しい衝動を 小難しい追想を行うことでもごまか  
すことにしてみた。

・

リンハイムでの戦後処理が片付くと、新たななる問題が身を起こ  
して俺たちの前に立ちはだかった。

それはあの『棺』どう扱うべきかを主題にした大論争だ。

薄々誰もが危惧していたことだったが、シャンバラとリーンハイムを繋ぐあの転移門は、両者の経済を爆発的に発展させる大いなる遺産であったが、同時に別世界からの侵略経路そのまんまでもあった。

よって当然、森の方でも砂漠の方でも議会で大荒れの議題となった。

国防を取るか、経済を取るか。これは二つに分かたれたエルフたちが再び合流するチャンスであると同時に、最悪は隷属の未来を生み出す希望と災厄の詰まった棺だった。

「信じられん！ 技術は使いこなしてこそ意味があるものだろう！！」

「落ち着けよ、マリウス。あんなの一时的なものだって」

「待ってられるか！ 俺は都市長に抗議してくる！！」  
「そうだな、そうしたらいい。言いたいことがあつたら言うに限る」

そのために半月間、転移門は封鎖を余儀なくされた。

心穏やかでなかったのは生みの親であるマリウスだ。顔を合わせるときに、俺に話したってしょうがないだろうにプリプリと怒っていた。

最終的にその問題は、両国の間で議員総出の会談を設けることになった。

そこでようやく出された結論というのが、向こう半年間の転移門の稼働と、転移門を中心とした要塞の構築、そして新たな棺の捜索だった。

「いいですか、技術を封じるだけでは意味がないんです！ あの転移門の稼働を止めたところで、どこかに別の棺が眠っていては、そこから攻め込まれてしまいます！ ならばこの古の遺産を、使いこなしてこそ未来があるはずです！」

決議の決め手となったのは、災厄の生き証人にして時の迷子グライオフェンと、転移門をこの世に復活させた大技術者マリウスの演説だった。

やや余談となるが、ヤツの熱い魂に感銘した議員たちは、技術者を辞めたら議員にならないかとマリウスに勧誘をしかけてきたそう  
だ。

かくして両国間に、新たな交易路が開設された。

転移門は昔ながらのキャラバン隊に置き換わるほどの輸送力は持っていないかったが、瞬時に物資を移動させるその力は、シャンバラに大きな競争力を与えることになった。

対するリーンハイムは元より人間の国々に囲まれた鎖国状態であったため、シャンバラからの数々の舶来品が民の生活を豊かにした。

また輸入が増えるということは輸出も増えるということで、今商人たちの中では、リーンハイムに輸出産業を根付かせる計画が進んでいる。

リーンハイムは閉じた世界だから、貿易相手として最高級の隣国だった。

視点を国家レベルから個人レベルまで低くしてみれば、また別のものが見えてくる。

ここシャンバラで生活していて、特に変化を感じるようになったのは往来の人々だ。

褐色肌のエルフばかりだった町並みに、白い肌をした弓使いたちが多く混じるようになっていた。

それはご想像の通り、リーンハイムから出稼ぎにやってきた森エルフたちだ。

その大半は冒険者としてシャンバラの迷宮に挑み、富や砂糖菓子を抱えてリーンハイムに帰って行く。

グラフがドーナツに感動していた現象が、他の森エルフたちの間でもわき起こり、シャンバラは今空前の砂糖不足となっていた。

いや、加速してゆく経済はありとあらゆる物を不足させていったと、言い換えてもいい。

その最たる物が人手不足だ。

この人手不足によりスラム街は大きく縮小し、それでも社会に復帰できない少数だけがあつた場所に残つた。

そんな彼らでも一定の魔力を持つため、転移門の魔力供給に加わることが出来る。

都市長はそんなスラム街の連中に、優先的に仕事を回していった。必要に迫られて生み出した転移門だが、もう俺たちは革新前の世界には戻れそうもない。

侵略のリスクを冒してでも転移門のある社会を維持したい。人々がそう考えるのは当然のことだ。

さて、また少し話の角度を変える。これはあの異世界からの侵略

者、アダマスたちについての話だ。

まだ全てではないが、彼らは多くの情報を吐いてくれた。

決め手は皮肉にも、あのリーダー格を異形に変えた「グール化」の力だ。

「すまん、まるで理解が追いつかないんだが……」

「ええそうでしょう。若い貴方だってそうなのですから、私なんてもう大混乱でしたよ」

この話は都市長を介して聞いた。

どうやらあちらの世界は、俺たちの世界とは何もかもが違うようだ。

「絵本のように、悪い魔女や大魔王が手先を送り付けてきていた。そういう展開を心のどこかで期待していたよ」

「同感です。彼らはとても高度な世界にいたようです」

俺たちの世界は国家によって形成されているが、あちらでは国家という枠組みが形骸化し、巨大企業と巨大企業がしのぎを削る社会になっているそうだ。

王が沃野や経済都市を求めて隣国を侵略するなど過去のこと、彼らの行動理念は金稼ぎと資源の確保が目的そのものだ。

アダマスのいる世界では魔力が枯渇しており、だからこそエルフが豊富に持つ魔力を求めて、異なる世界へ侵略者を送る。

確かに進化に進化を重ねた社会だと俺も思ったが、国家なき世界に嫌悪感も抱いた。

「私は聞いたのですよ、ユリウスさん。あのアダマスさんに、ならばどうしたら貴方の世界からの侵略を、我々は防げるでしょうかと」「アイツがそんなバカ正直に吐くか？」

「いえ、ゲール化の話をしたら、意外にもあっさりと答えて下さいました」

「ああ、あれな。生物を不死身の怪物に変える力が……。なんて倫理観のない世界だろうな……」

ゴブリンやオークではなく、あのゲールとかいう斬っても斬っても再生する怪物を送りつけられたら、こっちは詰んでいただろう。

「アダマスはこう答えました。……俺たちは帳尻の合わない場所には攻め込まない。国を守りたかったら、技術を革新し、もつと強い国を作れ」

「それ、なんかムカつくな。それが出来たら苦労はないだろ……」

「フフ……ですがこうも言っていましたね。ゲール化しちまったバカを向こうに送り返すエルフなんて、俺は始めて見た。どこのバカか知らないが、面白いことをしてくれるもんだ。……と」

「ああ……。でもあれ、戻ってこれなくなるところだったけどな……」

「その件については、ユリウスさん。……今からでも覚悟をしたおいた方がよろしいかと思えますよ。ふふ……っ」

「なんの話だ？」

「さて、なんの話でしょうね……」

その後も都市長の話を聞いて、俺はこう思った。

アダマスたちには国家への帰属心がまるでない。稼ぐために侵略の先兵となっただけで、そこには忠誠も何もなかった。

「彼らは自らをタンタルスと名乗りました。彼らは別働隊を用意していたのではなく、最初から別々の企業に雇われていたようです」

あのおびただしい軍勢は、モンスターの溢れる世界をこちらの世界に繋いで、それを特殊な技術で操っていたらしい。

この技術は軍隊を送るよりもずっとローコストなのだと、そんな種明かしまでしてくれたそうだった。

「ま、取りあえず平和になったんだ。やれることをやっていこうぜ、爺さん」

「ええ、これからも頼りにしていますよ、ユリウスさん」

とまあ、そんなわけで俺たちは一丸となって、転移門の向こう側にいるタンタルスどもに対抗出来る力を手に入れる必要に迫られ、ネコヒトの尻尾すら借りたい状況となった。

リンハイムの救援が終わればゆっくり出来るかと思っていたのに、世の中そう甘くないらしい。

仕事は欲しいときには来ず、忙しいときにはかりやってくる……。いつだってそうだ……。



・第二部エピローグ 外堀りを埋められた錬金術師あらため、セ  
ミ - 遅れた上にまとめてやってきた初夜 -

で、そろそろ自分をごまかすのが辛くなってきた……。  
そんな色々な出来事が今日まであったが、今夜の俺は超超超ピン  
チだ……。

このままでは、俺はコロツとってしまうかもしれない……。  
どうしてこんなことに……。  
まさか、普段潔癖気味なグラフまで、この悪い冗談に加わるなん  
て、現実がとても信じられない……。

いや、だが、どうやら彼女たちは本気も本気だった……。  
俺は完全に、精神的にも肉体的にも空間的にも全てにおいて追い  
詰められていた。

その夜、俺は謀られた……。

「ねえ、ユリウス……」  
「むふふ……我慢しなくても、いいよ……？ 今こそ、エロ神の獣  
欲を、世に解き放つとき……」  
「じ、じれったいやつだ……。早く覚悟を決めろ……。っ、こっち  
が恥ずかしいだろ……。っ」

今日はシエラハたちが外泊をするので家に俺1人のはずだった。俺のベッドに花瓶の水をこぼしてしまったので、今日は2階のベッドを使えばいいと、まんまと誘導されていた。

.....  
畏だった。彼女たちは最初から、外泊する気なんてなかったのだ。

「ユリウス……姉さんの、おっぱいばかり、見てないで、こっち向いて……?」

「あ、あたしは……み、見られても、別にいいわ……。夢中になってくれるの、嬉しいもの……」

「キミはやっぱり、むっつりスケベだ……」

それが大きくてふかふかのベッドで眠りに付けば、左にシエラハ、右にグラフ、のしかかるようにメーブルが俺の腹の上に寝そべっている。

少し前、なぜこんなことをするのかと俺が聞けば、彼女たちはこう言った。

「ユリウスは、はかない……セミ?」

「人を昆虫扱いすんな」

お前はセミだと。

「けど、セミは交尾して死ぬ……。交尾しないで消える誰かより、ずっと偉い……」

「こ、ここここ、交尾いいっ?! え……ま、まさか、お、お前から……っ!?!」

いやお前はセミ以下だと。

メーブルは甘い吐息をはきながら、俺の上でモジモジと身を擦り付けた。

「私たちは、生物として正常……。別に、何も間違っていない……」  
「ツツ……そ、そうよ。それにあたし、もう、イヤだもの……。いつか貴方が別の世界に飛ばされて、帰ってこないかと思うとっ、堪えられないわ……。だからっ、こうするのよっ！」

シエラ八がまた少し身を寄せて、ふにゆりとやわらかな感覚が強くなった。

セミみたいにはかないユリウスが悪い。それが彼女たちの言い分だ。

長寿を持つエルフらしいといえば、エルフらしい感性だろうか。

「ボ、ボクは仲間外れはイヤだから……。加わってみた……」

「いや待て、なんでそうなるっ!? ノリでするような行為じゃないだろ、これっ!?!」

「なんでって……。君はボクの主だろっ！」

「……え? いや、確かにまあ、形式上はそうなのかもしれないが……」

あれって封建主義的な意味合いじゃなかったのか……?  
主って、そういう重い意味も含まれていたのか……?

にじりと、白百合とまで言われたグラフまでもが距離を詰めて、俺の心臓は動揺を隠しようもなく高鳴った。

「ユリウス、お願いよ……」

「ボ、ボク……覚悟は出来てるから……」  
「へーいへーい……旦那さん、ビビってる……。姉さん、ここ触ってみて……心臓、バクバク……」  
「ちょ、止めっ、うっ?!」

メーブルな小柄な手と、シエラハの日焼けした手、グラフの白く細い手が重なって、俺の心臓を肌の上から触れた。  
興奮、動揺、好意で溢れた強い感情。全てが暴かれた。

それでも彼女たちは、こちらが誘惑に負けるのを待っているのか、辛抱強くこちらの動きを待っている。

シエラハが暑そうに胸元をはためかせたり、メーブルが人の胸に頬ずりをしたり、グラフが無言で人の横顔を凝視している。

さすがに俺も理解していた。彼女たちの想いはただ一点だ。  
ユリウスという男があまりに命知らず過ぎて、本当に失ってしまった日が訪れるのが恐ろしくなり、形となって大きくなるものを欲した。

その気になれば俺はシエラハの大きな乳房にも、グラフのスレンドーで引き締まった肢体にも、手を伸ばそうと思えばいくらでも伸ばせる。

彼女たちはきつと拒まない。俺が明日死ぬか、あるいは迷子になるかもしれないセミちゃんだからだ……。

小柄なメーブルの身体は少しゴリゴリと硬いが、色々と密着して非常にまずい状態だ。

彼女は俺の筆舌しかねる状態を、その身で全て把握してしまっていた。

「ユリウス……夫婦らしいこと、しょ……？」  
「お願い……あたし、あなたを失うのが怖い……」  
「ボクは、仲間外れだけはイヤだ……。この世界で真実ボクが所属出来る場所は、この家だけだ……。だから頼む……」

必要だからそうする。これほどまでに理性的な行動があるだろうか。

断じてこれは獣欲ではなく、必要だからしなくてはならないことだ。

ようやく覚悟を決めた俺は、長らく抑圧してきた欲望を解き放つてまずは腕を伸ばし、メープルの背中を強く抱きしめた。

これは必要だからしょうがないんだ。

そう自分に思い聞かせた。

こうして俺たちはその夜、ようやく夫婦の第一歩を踏み出したのだった。

ちなみにだが……。

結婚初夜で鞭から繰り出される真空に恐れをなして逃げた旦那はその翌日、腰の折れ曲がった老婆のような滑稽な姿勢で、錬金術工房のオーブの前で腕をかざしていたという。

シャンバラは天国だ。ベッドの上で見上げるシェラハは、湖水で

踊るあの姿よりもずっとずっと美しくかった。

【第三部に続く】

・第二部エピローグ 外堀りを埋められた錬金術師あらため、セ  
ミ - 遅れた上にまとめてやってきた初夜 - (後書き)

第二部完結まで呼んで下さりありがとうございます。

感想返しが出来なくてごめんなさい。私生活がしっちゃかめっちゃかしています。

というのも本作、新作Lv0の元傭兵、来月公開の新作と、3つ同時に進めなければならぬため、あらゆる部分に手が回っていません。

それでもこの続きが書きたいので、どうか時間を作ってがんばってゆきます。

第三部については、初心に返ろうかと考えています。

まだ大まかな構想だけですが、シエラハゾとメーブルとのイチヤラブ部分をメインにして、ツイイク本国との経済戦争をするような展開もいいかと、大まかに。

第二部は、シエラハゾとメーブルの順番が減りがちだったので、ここからは積極的にカバーしてゆく構想です。

といったわけで、第三部を作ります。楽しく作ります。運営さんに怒られない範囲でさわやかエロスに盛ってゆきます。(本当はもっと過激にしたい)

プロット制作中は連載が止まりますが、どうか連載開始を待っていて下さい。

最後に余韻を乱すような宣伝となってしまうですが、新作LVOの元傭兵がHF日間のいいところに入っています。

読んで損のない軽快な娯楽作品になっていますので、よろしければこちらも読みにきて下さい。

ステータスがインフレするのが苦手な読者さんも、新境地として楽しめる味付けになっています。

それでは連載再開まで短くて約一週間ほど、これよりプロット作りに行ってきます。

ここまで読んで下さりありがとうございました。

これからもやりたい展開を詰め込んで、楽しく作ってゆきます。



・追放王子

ユリウスの説得は叶わなかったが、訳あって俺は祖国ツワイクへと帰った。

これはその際に、とある思わぬ筋から教えてもらった裏話だ。

我が名はアリアルフ・ツワイク。絹ではなく木綿の服を身にまとうこの姿からは、とても信じてはもらえないかも知れないが、これでもツワイク王国の元王子だ。

・

俺が母国に送った情報は、瞬く間に宰相を介して国王へと届けられた。

「陛下、アリ殿下がついにやり遂げました。あのユリウスめは、エルフの国シャンバラに身を寄せているそうです」

「なんだと……？ あれだけ探して見つからなかった男を、あのアリが見つけ出したというのか？」

「アリ殿下はユリウスを説得次第、こちらに戻ると言っています」「シャンバラか……。だが、余の記憶が定かであれば、あの国には迷いの砂漠があったな？」

「お気づきになられましたか。ええそうです。ヒューマンがあの砂漠を越えるのは、不可能だと言われています」

だが父上も宰相も、俺がユリウスを説得して戻ってくるとは端から思っていなかった。

ユリウスと俺の軋轢を考えれば、当然のこのだろう。

アリ王子の口からはユリウスの説得など不可能。

その現実気づいていなかったのは、愚かな俺だけだった。

「ならば望み薄か」

「みすみす内通を疑われない者などいません。接触も説得も困難を極めるでしょう」

いやそれだけではない。

俺がもたらしたこの情報は別の、ツワイク王家には極めて重大な意味を持っていた。

「ですがアリ殿下は実によくやって下さいました。陛下、我が国の経済を浸食するあの闇ポーシオン　その出所の目星が、これによってやく付いたのではないですか？」

「そうか、シャンバラか……。シャンバラのエルフどもが我がツワイクに、あんなダンピングまがいの値段で、ポーシオンを売り付けていたのだな……？」

俺はそんなつもりはなかった。

あの時はただ、俺は無能ではないと父上に成果を伝えたかった。それがこんなことになるなんて、俺としては不本意だった……。

「そう断定してしまってもいいでしょう」

「ぬう……ならばシャンバラとの取引を禁止する法律を」

「シャンバラだけ封じても意味がありません。ツワイクに入ってくる闇ポーシオンは、既に他国へと転売された物です」

「む……。ならばそなたの意見を聞こう」

「はっ、謹んで申し上げます。ユリウス・カサエルがこの世にいる限り、ツワイクは国外勢力に富を奪われ続けることになります。残念ながら、我々の工業力ではあの闇ポーシオンには敵いません」

ツワイクは迷宮産業にどっぷりと浸かっている。もはや抜け出せない深みまで沈んでいる。

ポーシオン市場の独占を崩されたこの状況は、利権に染まった父上たちには今後の権勢にすら影響する大問題だった。

「うむ、あの値段で売れること自体が異常だ。厄介な男を敵に回してしまったものだ……」

「無能者を工場長にしたのが間違いでしたな」

「余に毒を吐くな」

「これは失礼を」

「腹案があるならば早く申せ」

「はっ、経済封鎖が意味をなさないならば 対シャンバラ、経済  
包圍網を敷いてはどうでしょうか。ここ一帯の市場から、やつらを  
閉め出すのですよ」

「包圍網か。うむ、確かにシャンバラとユリウスが手を組んだとなると、これは危険だ」

「同感です。彼の国は不況を乗り越えて、空前の大繁栄を迎えつつあるそうです。それも今となっては納得です。やつらは、我々から、寄生虫のように富を吸い上げていたのですよ」

「……あいわかった。宰相よ、対シャンバラ経済包囲網をそなたに任せる。必ずや、彼の国に格の違いを見せつけよ」

「はっ、お任せを。……シャンバラは砂漠に覆われた貿易依存の国です。だから、経済封鎖が広がればひとたまりもないでしょう」

俺のせいだった。俺が父上に報告を入れたから、シャンバラとツウィクの間で経済戦争が勃発した。

ある男はいずれ起きることだったから気にするなと言うが、引き金を引いたのはこの俺だ。

祖国でそんな陰謀が動き出しているとは知らずに、その時の俺はついに念願叶ってユリウスとの接触が実現したことに舞い上がった。  
いた。

「ユリウスに渡りを付けてくれと言っただろう！」

「そう簡単に言わないでくれ、アリ。ユリウス様は今やシャンバラのナンバー2だぞ、バザーオアシスに姿を現すのを待つしかないんだ」

「それはこの前も聞いた！　どうか頼む、俺はヤツに会わなければならんのだっ！」

「わかったわかった。村のためにがんばってくれてるみたいだし、

ユリウス様がいたら声をかけてみるよ』

シャンバラの隣国、その小さな村に身を寄せて、時折やってくるエルフの商人に何度も何度も頼み込んだ。

ヤツとの接触が実現したのは、この村に身を落ち着かせて数ヶ月が過ぎた後だった。

『違うな。このままでは帰りの路銀が足りないから、王子である俺が働いてやってるだけだ！』

『でしたらアリ王子。貴方には意外と、農民の才能があるようですよ』

『む、そ、そうか……？』

『少なくとも俺はそう思う』

俺はこの地で、村の下民どもと一緒に畑を耕して生活している。

この村の連中は人手が足りていないからと言って、俺に仕事を割り振ってくれた。

愚かな俺はそれに腹を立てた。

なぜ王子である俺が下民と同じ仕事をしなければならないと、文句を言いながらも働いた。

『お前だから言うが、それが妙な感覚なのだ……。ツワイクの王宮では、いつだって俺は苛立っていた。だが、畑を耕していると、つまらぬこと忘れて無心になれる……』

『だったら王子なんて辞めてしまったらいい』

『ふんっ、バカな冗談だな』

しかしいつしか俺は、ここでの生活が当たり前になっていった。  
己が大国ツワイクの闇に飲まれた愚かな王子であったことに、少  
しずつ気づいていった。

・第三部プロローグ 王子と錬金術師の邂逅  
・陰謀  
・(後書き)

長らくお待たせしてしまつてすみません。

今日より2日に1回の更新で連載を再開します。

おかげさまで第三部完結までのプロットを準備できました。

砂漠を見つめてユリウスを待っていると、この村の娘であるゲルタがやってきた。

「アリ王子様……ユリウス様とお会いしたら、貴方はもう行ってしまうのですか……？」

この子だけが俺を王子と信じてくれた。  
あの老人に至っては、いまだに俺をユリウスに恋するホモだと誤解している始末だというのだ……。

「当然だ」

「そうですか……」

ゲルタは別れが訪れると早とちりして、目線を悲しげに落とした。色黒の肌と黒い髪、粗末な麻の服をまとったその姿はあまりに惨めで汚く、みすばらしい。以前はそう思っていたが、今の俺の目には違って映った。

服で人間の価値を決めるのは、バカがすることだとやっと気づいた。

「ユリウスを必ず俺は口説き落とし　そして他でもないお前を連れて、俺はツワイクに帰る」

「え……！？」

「ゲルタ、俺と一緒にツワイクにこいつ……！」



「えっ、え……！？ わ、私を……連れて行って、くれるんですか……？ でも、でも、私なんか……王子様とはとても……」

「身分？ そんなもの構うものか！」

「構いますよっ！」

「貧しい農村に生まれようともお前の心は高貴だ！ お前には俺の隣にいる権利がある！ お前だけが俺を信じてくれたではないか！ そんなお前がいたから、俺は……！」

「でも……」

どんなに熱く叫んでも、ゲルタは同行を迷うだけだった。

彼女のような人間を貧しい村から救い出してやりたい。清らかな心にふさわしい人生を与えてやりたい。

「いいから俺に付いてこい！ 必ず、し、しわ……幸せに、してやるから、頼む……。俺にはお前が必要だ。だから、何も考えずに、この俺と」

ゲルタは顔を上げて、感極まったかのような泣き顔でこちらに歩み寄った。

よかった。一緒にきてくれるのだ。俺もそれを寄って、彼女の背中に腕を回そうとしたところで、己の隣にある白い人影に気づいた。

「ユ、ユリウスッ？！ なっ なっ なっ……何を見ている貴様アア― ツツ？！」

「やっと気づいたのか。……だって出るに出れないだろ、この状況。あ、それよりお前、なんか感じ変わったか？」

そいつはユリウスだった。  
せつかくゲルタと抱き合えるチャンスだったというのに、最高の  
場面で邪魔をされた……。

「当たり前だつ、貴様のせいだこっちは死ぬほど苦労したんだぞっ  
！！」

「高飛車なところは変わってないな……。ん……？」

今日までの苦労を思い返すと、俺は感無量に表情をしかめさせて  
いた。

やっと会えた、やっと見つけた、やっとこの時が来たのだと……！

「どれだけ……どれだけ……どれだけ貴様を捜したと思うっっ！！  
パンツの中まで砂にまみれ、泥だらけの靴とマントをまとって、  
雨の日も雪の日も、竹槍持った農民に追いかけてまわされて本気で泣  
いた日も、どれだけ長い間、俺が貴様を捜し続けたと思うっっ！？」  
「んなこと言われても……。うっ、いたた……」

腰でもやっっているのか、ユリウスは急に動きをぎこちなくさせて  
自分の腰をさすりだした。

だがこっちはちよつと言ったくらいでは気が済まない。長かった  
……あまりに長かったのだ……！

「極めつけはあの迷いの砂漠だ！！俺はあの沙漠で、本気で死ぬ  
ところだったのだぞっ、なんであんなところで暮らしているのだっ、  
ユリウス貴様アツッ！！」

「……やっぱ、なんか感じ変わったな。それって、その子の影響か  
？」

ユリウスに指を刺されて、ゲルタはぺこりと頭を下げた。

そんなゲルタの姿を見ると、この怒りとはまた異なる抗議の感情が、急激に萎んでゆくのを感じた。

そうだ。ゲルタの影響だ。このみすばらしい娘が俺を変えた。ゲルタが隣にいないければ、俺はまた墮落してしまうかもしれない。

「ユリウス!!」

「なんだ？」

「父上は貴様を侯爵に……だから俺は、形ばかりの地位ではなく、土地を、お前に……」

何度も予習した誘い文句を、俺は途中で言葉にするのを止めた。俺がユリウスに言いたかった言葉は、こんなものではない……。

「ユリウス・カサエル侯爵な、その話なら知り合いから聞いた。だが仮にお前が俺をツワイク王にしてくれるって言っても、俺はツワイクになんか戻るつもりはないぞ」

「だろうな……。その返事は、もう最初からわかっていた……」

「おい……ならなんで俺を呼んだんだよ？」

白く清潔なトーガをまとったユリウスは、もはやコウモリと蔑まれる宮廷魔術師ではなかった。

最初は俺もユリウスを懐柔するためにこの接触をもくるんだ。

「俺はな、ユリウス……。この場所で、俺はシャンバラで活躍する貴様の話を聴いた……。敵対していた男が大活躍をしてゆく様に、激しい悔しさを覚える反面、同じツワイク人として、誇らしくもなつた……」

「嘘だろ？ お前が、俺に……？」

「対して俺はなんだ？ 威張り散らすばかりで、將軍としては無能、父上からもついに見捨てられ、こうして追い出されたも同然の処遇だ……」

ユリウスは薄気味悪そうに俺を見る。

ツワイクでの愚かな俺を知っていれば、当然の反応だ。

「ユリウス……悪かった……。お前を軍から追い出したのは、間違っていた……」

「えっ、えええええーっ？！ おま、お前アリツ、大丈夫かよっ、頭とか打ってないよな、お前っ！？」

「俺は、見栄だけの虚飾に包まれた空っぽの人間だった……。だがそんな俺も、村の下民どもと一緒にクワを振って、同じ暖炉を囲んで暮らして、ようやくわかった……。俺は人間のクズだった……」

そうするとユリウスは驚くのを止めて、どこか困った様子でこちらを見た。

ユリウス、お前は俺を変ったと言うが、お前もすっかり変わっただろう。

俺はかつてのお前の、凝り固まったエリート根性が気に入らなかった。

実力で今の地位まで這い上がってきた自分は、たまたま王家に生まれたお前とは違う。そういう目で以前のお前は俺を見ていた。

「けど、俺を連れて行かなきゃ、ツワイクには帰れないんだろ……？」

「これから失敗の報告に行く。貴様の居場所をつかんだんだ、成果は認めてくれるだろう……」

「なあ、アリ……お前、誰？ 偽者？」

「俺は俺だ。お前を軍から追い出して、まんまと敵の罠に落ちた愚か者のアリだ」

ゲルタに目を向けると、そんなことはないと言った首を横に振ってくれた。

彼女は俺の真実を知っても失望したりはしなかった。

「なんかそこまで反省されると、このまま手ぶらで返すのも悪い気がしてきたな……。そうだ」

ユリウスはまるで子供に飴玉でもくれるかのように、エリクサーと名付けた奇妙なプニプニを俺にくれた。

さらには王への手紙まで書いてくれて、俺の顔が立つように気を使ってくれた……。

「お前を許す。別人に変わり果てるくらいメチャクチャ反省しているようだから、王様も許してやってくれ。そう書いた、持って行けよ」

「いいのか……？ 俺はお前を閑職に追い込んだんだぞ……」

「だがそうしてくれなきゃ、俺はシャンバラの嫁と出会えなかった。いや、ただ……」

「ただ？」

「その子は難しいんじゃないか？」

彼がゲルタを指さして難しい顔をした。  
貧しい農民の娘を、王子の伴侶にするのはさすが無理があると。

「どうにかする」

「そうか。じゃ……」

「ああ」

差し出された手のひらを握り返して、俺たちは別れを告げた。  
俺は今のユリウスの姿を一生忘れないだろう。

ヤツは狐につままれたような不思議そうな表情で、こちらの手を握り返しながらもまだ少し戸惑っていた。

俺はツワイク王家に悪霊のように根付いた妄執から解放された。

「じゃあな」

「ああ、またどこかで会おう」

ユリウスは不思議な男だ。

一瞬目を離すと、あの転移魔法で幻のように姿を消していた。

「ゲルタ、一緒にツワイクへ行こう」

「本当に、私でいいんですか……？」

「……かまわん。父上が認めぬならば、俺もユリウスのようにツワイクを出奔してやる。あんな国、どちらにしる先がないからな、ワハハハッツ！！」

「でしたらそのときは、私が一生アリ王子の面倒を見ます。王子様、どうか私をツワイクに、連れて行って下さい……」

心の底ではわかっていたのだ。父上が下民との関係を認めるはずがないと。

それでも俺はツワイクに戻り、父上に許しを求める必要があった。

そこは当然だろう！

どうせ出奔するなら、自分の私財を売り払ってからの方がいいに決まってる！

大切な女に、貧しい辺境暮らしなどさせられるか！

俺は帰る！ 帰るぞ、ユリウス！ いつかまた、どこかでまた会

おう！

俺はツワイクで最も愚かな王子、アリアルフ・ツワイクだ！

・腰を押さえながら、放り投げた公共事業を再開しよう

あのアリに地位や金目当てじゃない真つ当な彼女が出来るなんて、今でも信じられん……。

クズは死ぬまで一生クズだ。例外はない。ずっとそう思っていたのに、なんなのだ、アイツのあの変わりようは……。

俺は馬車ならぬラクダ車に揺られながら、もしかしたら俺は知らぬうちに、アリが改心する平行世界に転移してしまったのだろうか。と何度も現実を疑った。

だがしかし、もう一つの現実はやさしくなんてなかった。

「い、いたたた……。も、もう少しゆっくり頼むよ、御者さん……」

「すみません、ユリウス様」

「謝らないでくれ、これはただの自業自得だ……」

「ふふ……お盛んなことで、羨ましい限りです」

「お盛んな……。ま、なんの言い訳も出てこねーわ……。実際、まんまその通りだからな……」

最近の悩み。それは日々重傷化してゆく腰痛だった。

原因はまあ、説明しなくてもわかるだろ、察してくれ……。

初夜からずっとずっとお預けを食らってきた嫁さんたちは、旦那よかずっとずっと、あっち方面が貪欲で底なしだった……。



「大丈夫ですかー、ユリウス様ー？」

「大丈夫じゃない……」

「もうじき着きますよ。ですけどその腰で仕事、出来ますかね……？」

「たぶんな……。ていうか、今日は体調悪いからお家返しては、絶対に通らねーしな……」

ズキズキと痛む腰を押さえたまま、俺は馬車の中で無理なうつ伏せを取ったまま、まるで荷物のように目標ポイントへと運ばれていった……。

「うっ……?!」

「歩けますか？」

「あ、歩けないは、通らない……歩くしかないんだ……」

心やさしい御者さんの介護を受けながら馬車を下りると、目の前に総勢200名を超える工員が集合していた。

そう、だから俺は帰れないのだ。俺の腰痛一つで、彼らの予定を変えるわけにはいかないので働くしかないのだ……。

「ありがとう、後は、私たちに任せて……」

「だからあだし、昨日は止めようって言ったのよ……」

美しい美姫

もとい夜は野獣と変わらない嫁さんたちが要介護

錬金術師を引き継いでくれた。

ちなみにグラフは昨日からリンハイムに遠征している。

あちらでは転移門の要塞化がいよいよ大詰めで、グライオフエンが1人では足りないので2人に増やしたいとヘルプが飛んできてしまった。

しばらくシエラハとメーブルに腰をさすられていると、そこに今回の現場監督であるマリウスがやってきた。

「そんなに腰が痛いなら、腰痛を治す薬を作ればいいだろ」

「それならもう飲んで……」

「治ってないじゃないか」

「治らないんだ……」

既に巨大錬金釜が設置されている。

まるで足腰の立たない老人のように、俺は足場を上がり、用意された釜へとかき混ぜ棒を立てた。

こんなことになるなら、昨日だけでも誘いを断るべきだった……。だが、今夜も今夜で断れるような気が全くといってしない……。

メーブルは愛らしく、シエラハは美しく、俺にはどうしても無理だった……。

「笑える……」

「笑えねーよ……」

「ユリウス、大丈夫……？ ごめんなさい、夜は元気そうだったから、あたしたちもつい……」

「みんな夜になると気が変わるんだよな……」  
「毎日が、スケベ心への、敗北……やっぱり、ウケる……」

それはメーブルが俺に言った言葉なのに、身に覚えがあるのかシエラハが顔を覆って恥じらった。

俺もシエラハも毎日が白星だ。正直なメーブルの方は、白星とか黒星とかいう次元を超越していた。

「イチヤついてないで早くしろ、工員たちが待っているんだぞ！」  
「ああ、すまん……」

「まったく……お前がそこまで墮落するとは思わなかったよ！」  
「面目ない、反論不能だわ……面目ない……」

今回作るのは、いつもの万能建築素材コンクリートの耐水型だ。ただし今回は必要な量が量なので、現地で直接生産することになった。

この日のために砂漠の中に屋根付きの大きな作業場が作られ、それがまだ昇り始めたばかりの朝日に照らされている。

「いたたた……」

俺がコンクリートを作り、釜から取り出されたそれに、工員たちが水と砂を練り合わせて土管を整形する。

それを砂の下に敷設してゆけば、グラフが目覚めて以来ずっと止まっていたままだった耕作地作りが軌道に乗る。

砂と灼熱の大地に奪われることなく、水を赤土の大地に運ぶことが出来る。

どんなに腰が悲鳴を上げようとも、ここに用意された材料を使い切るまでは、俺はお家に帰してもらえなかった。

「がんばれ、がんばれ……ザアコザアコ…… ザコ腰？」

「だったら今夜は自重してくれ……」

「無理……」

「ごめんなさい……。ユリウスの体が大変なのはわかるのだけど……あたしたち、やっぱり自信がないわ……」

「へへ……私、痛そうユリウス見るの、好き……」

「お前は前からそういうやつだよ……」

「うん」

「うんじゃねーよ……」

こうして俺は朝っぱらから錬金釜をかき回して、砂漠を横断する巨大水路の原材料を生み出していった。

実際に土管を作って、それを砂の下に埋める工員たちの苦労と比べれば、俺の腰の痛みなどたかだか知れている。

「うっ……?!」

いややっぱり宣言撤回だ。昨晚の俺はアリを越える愚か者だ。

腰痛はやせ我慢でどうにかなるものではなかった。

「コンクルはそのくらいでもういいぞ」

や、やっと、やっと終わった……。帰れ、る……。

「次はスタミナポーションを作ってくれ」

「な……何言ってるんだよ、マリウスお前っ!? こ、腰がヤバいって言ってるだろっ、死ぬ、死ぬってこれこれ以上は死ぬぞ、おいっ!?!」

「ふんっ、このドスケベが……。お前には失望したよ……」

「なんでだよ……。なじるんじゃないくて、病人をいたわれよ……」

最近マリウスが冷たい。元から口の悪いやつだったが、最近は特に酷い。

今でも不機嫌な目つきで俺を睨んで、もっと働けとスタミナポーションの材料を釜の中に入れてさせていた。

顔を合わせるたびにコイツは俺に言うのだ。失望したと。

「がんばれ、がんばれ……」

「終わったら背中を揉むわ。だからがんばって、ユリウス」

左右をエルフの美姫に囲まれたまま、俺は労働者の頼れる相棒スタミナポーション200本×半月分を目指して、再び釜へと魔力をかけてゆくのだった。

ようやく材料を使い切った頃には、もう日差しが高く暑くなった  
昼前だった。

設営された土台から見下ろせば、眼下には巨大な土管が50本ほど  
完成している。

目標は700らしいので、まだまだ先は遠かった。

「もう帰っていいぞ。せいぜい嫁と好きなだけ楽しめばいいさ……」  
「その言い方はねーだろ、マリウス……」

「じゃあ手伝ってくれるのか？」

「この腰でか？ 無理だな、死ぬわ」

「だったら帰って腰を休ませろ。それと……治らないなら医者に行  
った方がいいな」

どちらにしろシャンバラでは昼は休むものだとなっている。

お先に失礼して、医者に寄ってから家に戻った。

・  
医者は言った。

「お盛んですな。特製の湿布薬を処方しておきましょう。いやあ、  
それにしても、お盛んですなあ、ユリウス様は、ヒヒヒッ……」

みんながみんな、俺のことを見透かした目で見る……。  
だがしょうがないだろ……。こんなに綺麗な嫁さん貰ったら、し

ようがないだろ……。

俺は美しい嫁さんたちに夢中も夢中だった。

・

そしてその晩

「ユリウス、ユリウス、あのね、あのね……新しい下着、買ってみた……。姉さん、早くこつち……」  
「で、でもお……」

「いいからいいから……。旦那様の腰のことは、明日から、考えよ……?」

「そのセリフは昨日も聞いたわ。はあ、もう、しょうがないわね。メープルがそこまで言うなら、わかったわ……」

「お前らな、俺の意思を確認しろよ……」

腰痛の薬が効かないのではない。

毎日が真っ白な白星で埋め尽くされているだけだ。

シャンバラは正真正銘の地上の楽園だった。

・腰を押さえながら、放り投げた公共事業を再開しよう（後書き）

次回の更新分、少し短くなります。



・完成した地下用水路を見に行こう。腰を支えながら……

地下用水路の着工から完成まで、約半月を要した。

その間、あつちからもこつちからもやってくる仕事をこなしてゆけば、水路造りのことなど半ば忘れてしまっていた。

土管そのものは5日間で目標数が完成したらしい。

苦労したのは砂の下に土管を敷設し、コンクリを接着剤にして接続する方の作業だったそうだ。

砂漠の下に行く長距離用水路は、川から耕作地へと接続され、後は水門を開くだけとなっていた。

「ユリウス……あれから半月も経ったのに、なぜ腰を折り曲げて歩いている……？ まさか、治っていないのか……？」

「治そうとはしたぞ……。俺なりに治そうとはな……」

「へへ……。さすがに、都市長に、怒られちった……」

「習慣って怖いね……。うっん、情性って言った方が正しいかしら……」

このままでは10年以内の早死にを迎えるか、その前に伝説の赤い玉を目撃することになってしまう……。

ともかく腰の折れ曲がった錬金術師はラクダ車を降りると、土管の終端に取り付けられた小さな水門の前までヒィコラヒィコラとがんばって歩いた。

今日はこの耕作地に作られた大きな穴へと、出資者たちの前で水を流し込んで、立派なため池にする日だ。

「ご覧下さい、あの水門こそエルフの魔法技術を応用した最新型の水門です。なんとあれは、取水口側と開閉が連動する画期的な仕組みになっています」

マリウスは出資者の前で驚異の技術力を誇ると、よくわかってもないのに驚きの声があがった。

「へえ。けど水門って割に、ハンドルがなくないか？」

「そんなものは不要だ。この水門は魔法の力で動くのだからな。都市長、あれに魔力をかけてみて下さい」

「はて、どうなるのでしょうか、楽しみですな」

都市長は事前にデモンストレーションでも見せられていたのか、もうあれの仕組みを知っているような顔つきだ。

有力商人や議員たち、出資者たちの注目の中、都市長は水門に埋め込まれた青い宝石に触れた。

すると低く震えるような音を立てながら、土管を塞ぐ水門がハンドルもなしに上がっていった。

しばらくは水の陰もなかった。それでも人々は乾いた大地に水が降り注ぐことを期待して、その時を待った。

「ユリウス、ユリウス……後で、一緒に水浴びしよう……？ 姉さんも、一緒に……」

「ちょ、ちょっとっ、メープルッ……」

が、うちのトリックスターは空気なんぞ読まない。とんでもない爆弾発言に会場がどよめきだした。

「さすがマク湖の工口神……」

「英雄色好むということか」

「お盛んですな」

「若いというのはいいものですねぇ……いやまったく羨ましい」

「あらかわいらしい」

あまり聞きたくない言葉を山ほど聞くことにもなった……。

「あ、しまったー、ひとまえだったー……」

「お前、旦那の世間体を完全破壊して楽しいか……？」

「わりと……？」

「わりと、じゃねーよっ、超楽しそうなのはつらつとした笑顔でゆーなよっ！？」

ところがそうしていると川のせせらぎのような音が土管の向こうから聞こえてきた。

水の姿はないが、土管の中を水が跳ねて、それは音となって幾重にも反響して、それが大きく増幅されてゆく。

「水だ！！」

誰かがそう叫んだ。

土管の下部から微量の水がチヨロチヨロとため池へと滴り落ち、やがてそれは勢いを増して途絶えぬ水流となっていた。

乾いた砂漠の空気に、冷たい水の匂いが混じった。

深く掘られたため池は水かさはまだまるで足りていなかったが、そこへと豊富な水が土管から絶えることなく降り注いでいる。

砂漠の地下を大横断する地下用水路が、ついに開通した記念すべき瞬間だった。

都市長、出資者、敷設に尽力してくれた工員たち。誰もが目前の光景に舞い上がっていた。

かくして砂ばかりで灌漑しようがないシャンバラの土地に、立派な地下用水路が生まれた。

美しい清流に人々は目を奪われて、感動のため息を吐いた。

彼らはいつまでも飽きることなく、シャンバラの強い日差しに輝く水面を見つめていた。

「成功だな」

「ええ、ユリウスさんもお疲れさまでした。貴方が腰を折り曲げながら工事に尽力してくれたことは、後の世まで語り継ぐことにいたしましょう」

「余計な部分まで伝えなくていい……。人が悪いぞ、爺さん……」  
「ふふ……しかし冗談はさておいて、これはシャンバラにとって大きな躍進です。砂漠を越えて水を運ぶ方法が見つかったのですから。この砂漠の国にとって、この意味は非常に大きいでしょう……」

食料自給率の改善はまだまだ先の話だが、貿易で稼いだ金で食料を買っしかなかったシャンバラに希望が見えてきた。

輸出依存だった国に前向きな変化が訪れている。加えてこの国は空前の好景気だ。

俺たちの未来が明るく輝いているのを、俺だって実感していた。

「ところで孫の方はまだですか？」

「まだに決まってるだろ。十月十日という言葉を知らないのか？」

「いえ、エルフは5ヶ月で生まれます。……楽しみですね」

「ははは、冗談よしてくれよ、爺さん」

「さてどうでしょう」

「いやさすがに。それはないだろう、爺さん」

きつとたちの悪い冗談だ。

・

「え、子供と言ったら五月五日よ？ 何を言ってるのよ、ユリウス  
ったら……ふふふっ」

「マジか……」

「冗談ではなく真実だった。

家に帰ってからシエラハにそれとなく聞いてみると、本当に5ヶ月で産まれると、素で返された。

さらにはモーションと勘違いされて、その日も俺の腰に再び甚大な被害が降り注いだのは、言うまでもない。

「ずるいぞ！ ボクが帰るまでほどほどにしておくって、約束だったじゃないかっ！」

「すまん……」

その翌日、グラフがリンハイムでの出張から帰ってきた。

なんでも次から次へと頼られてしまい、帰るべきタイミングを失ってしまっただらしい。

そりゃ自分と同じ人間がもう一人増えてくれたら、俺だってそいつを使い倒す。

もう一人の自分が存在することに最初は戸惑ったが、今となってみると便利でしょうがない。そうこちらの世界のグライオフエンが言っていたそうだった。

そこは同感だ。他のやつが大切な嫁の肌に触れるだなんて想像するだけで最悪だが、もう一人俺がいれば、この腰もここまでポロポロになることはなかっただろう……。

「いい。逆の立場だったら自分がどうしたかなんて、そんなの考えるまでもない。ああ……会いたかったよ、ユリウス……」

「あ、ああ……」

平和が訪れてより、グラフはだいぶ変わった。

使命に駆られていた気高き白百合は、このシャンバラを介して外の世界を知った。

いや……変わったと表現するより、順応したと言った方が近いだろう。

環境や境遇が変われば人はガラリと変わる。

具体的に言えば、今日までグラフを縛り付けてきた全てのしがらみが失われて、ちょっと子供っぽい甘えたがりのお姉さんになった。

「酷いんだよ、こっちの世界のボク……。自分だけ女王陛下の御寵愛を受けてるくせに、キミがいると便利だとか言っつて、次から次へと仕事を割り振ってくるんだ……。おかげでボクは」

「おお、よしよし、それは大変だったな……」

なんだか、仕事に疲れたキャリアウーマンを慰めてるような気分だ……。

青く美しいグラフの髪を撫でて励ますと、俺より遙かに年上のくせに上目づかいで甘えてくる。

もう一人のグライオフエンがこれを見たら、きつと発狂すること間違いなしの弱々しい愛らしさだった。

「疲れた……」

「そうだろうな、お疲れさま」

直立していると腰がゾワゾワと痛む。

かといってどこかに座ってからくつき直すことになれば、なおのこと離してもらえなくなるだろう。

俺はオーブに魔力をかけながら、鈍い腰痛を堪えてポーションを仕上げた。

「ふう…… やつと落ち着いてきた。すまない、ユリウス。ここに帰ってくるよと落ち着くんだ……」

「当然だろ、ここがお前の家だ」

ところが水槽の方からガラスのぶつかる音がした。

納入にきた商会の人間かと思えば、それはフードをすっぽりとかぶったメーブルだ。

「お帰り、グラちゃん……。今夜は、譲るね……」

「え……。み、見てたのか……っ!？」

「ま、割と、んーと…… 最初から……?」

「そ…… そんな……」

「コイツの趣味はのぞき見だから……。お、おい……?」

「うっ…… うううーっ!」

子供みたいに甘える姿を人に見られたのがよっぽど恥ずかしかったのか、我が家ぶつちぎりの最年長はそれこそ思春期の少女みたくに恥じらいながら、まあ端的に言えば工房から逃げていった。

「グラちゃん、ヤバくない……?」

「あんまりいじめてやるなよ……」

「だって…… いじけながら、ユリウスの胸をグリグリするところとか、鼻血もので、つい……。それに対して、ユリウスも鼻の穴がヒクヒクと……」

「お前、どれだけ近くで見てたんだよ……」



「そこ」

我が家で最も厄介な嫁さんは、潜伏魔法ハイドを使って俺たちを足下から見上げていたと暴露したのだった。

とんでもないやつと結婚してしまったな……。

・

昨日はそんな日だった。

幼児退行してしまった美しき白百合を、ただひたすら慰める一晩だった。

「いつも搬送ありがとな」

「い、いえっ！ ユリウス様のお力になれるだけで、ボクは光栄です！」

「様付けは止めてくれって言ってるだろ……」

「でも尊敬している人を敬称で呼ぶの当然だと思います」

素直なエルフの少年は笑顔を輝かせて、リンハイム製の木箱にポーションを詰めていった。

彼はフードをかぶってから小さな身体で木箱を抱えると、汗を流しながら工房を出て行く。

「もう昼か。おーいっ、都市長のところに行ってくるから後よろしくなーっ！」

「はいっ、お任せ下さいユリウス様！」

ラクダ車に木箱を乗せる後ろ姿を見守ってから、俺はご年輩向け

のステッキを突いてすぐその市長邸宅に向かった。  
転移魔法は あんなことがあった後だ。歩いて済む距離ならば  
歩くことにしていた。

「少し早かったか？」

「そんなことはありません、首を長くして待っていましたよ」

義兄に案内されて書斎に入ると、都市長はステッキを突く俺の姿  
をおかしそうに笑った。

「フフ……そのご様子からして、孫の顔も後一步といったところで  
しょうね」

「ああ……。けどその前に俺が死ぬかもな……」

書斎机の前にイスを運び、斜めにして座った。  
すっかり座れる場所を探したり、作り出すのが習慣だ。

「はて……。あのレシピ帳の数々に、腰痛を治す魔法の湿布みたい  
なものはないのですか？」

「いやそれが、そういうスタンダードなのは載ってないみたいだ。  
本にして解説するまでもない、口伝で片付く分野なのかもしれない  
な」

「ではあのスタミナポーションは効きませんか？」

「いや……」

無意識のうちに、俺は喉から乾いた笑いを漏らしていた。  
都市長はそれだけで察してくれたようだ。コクリと、やや満足げにうなづいた。

スタミナポーションで腰への疲労の蓄積を解消したところで、そこは大人の事情により、明日に持ち越される疲労の総量はあまり変わらなかった……。

砂漠に多少の雨が降っても、砂の大地が全てを吸い尽くしてしまっ  
うアレに似ている。

「それで、今日はなんの話なんだ？」

「あなたがあの子たちを、そんなに愛してくれると私も嬉しいですよ。最近のあの子たちはいつだって笑顔で……ああ、すみません、つい」

「まんまとアンタにはしてやられたよ。こうなってはもう他国に寝返るなんて考えられない」

あの日、別の女性を選んでいたらこうは愉快にらなかったらう。

「はい、私も貴方がシャンバラを捨てるなんて、もう絶対にあり得ないと思っています。さて、そんな姿のユリウスさんに頼みごとするのもし訳ないのですが、お話がありまして……」

「この腰はただの自滅だ……。遠慮なく言ってくれ」

「大地の結晶と、植物系魔物素材が目標の数まで集まりました」

「お……」

その一言に俺は顔を上げて、期待を込めて都市長へと微笑んでいた。

「となると、ついにやるのか？」

「ええ、今回もパーツと使ってしまうことにしましょう！　そうそう、国民投票をしたことはご存じですか？」

「国民投票？　俺のところにはこなかったな……」

「はて……まあいいでしょう。ともかく国民投票を行った結果、今回我々は森を作るのではなく、広い草原地帯を作る方針になりました」

草原か、いい考えだ。

最近はその都市公園も、朝から夜まで人でごった返している。あの場所にただたたずむだけで、彼らは幸せそうだった。

「候補地は？」

「はい、マク湖を取り囲むように草原を作ることになりました」

「マク湖？　お、おい……ちょっと待ってくれ。あそこは、あそこだけは困るぞ……」

「あそこだからいいのですよ。あなたの彫刻を一目見るために、国中のエルフがあそこに集まるのです。現状、これ以上の候補地はないと行っていいでしょう」

「いやそれって、義理の息子の恥をさらすようなもんだろっ！？」

「恥？　エルフの美貌にヒューマンの英雄が魅了される姿に誇らしさを覚えると、大好評ですが？」

「んなっ……んなわけあるかよっ！？」

つい力をかけたステッキが滑って、俺は死にかけの腰に深刻なダ

メージを受けるところだった。

昨晚のグラフは薄明かりにあの美しい青髪が揺れて……いや、こんなところで何を考えている、俺は。

国の発展に貢献した英雄ユリウス。その彫像を眺めにきた観光客たちは知るだろう。

英雄と呼ばれる男が、ただのドスケベ野郎である現実にだ……。

最近、俺も自分のことがわかってきた……。この腰の痛みは、ドスケベ野郎の刻印だ……。

・砂漠に広がる緑の地平 - 刻印 - (後書き)

日付をまたいでしまったってごめんなさい。

どうにか書き上がりました。

追記、投稿ミス失礼しました。教えてくださった皆様ありがとうございます！

「ご安心下さい。我々から見れば、貴方もまだ純粋な少年のようなものです。見ていて非常に微笑ましいですよ」

「もうその話は止めましょう……。とにかくマク湖周辺に広い草原を作ればいいんだな……？」

「はい、お願い出来ますか？」

「思うところはあるが、まあいいぞ……。あそこの連中、オアシスが枯れて以来まだ完全に立ち直りきってないしな。……で、いつやる？」

「明日からでよろしいですか？」

「わかった。今日のうちにアレを改良できないか試してみる。量産はそれからだ」

さあやるかと、俺はステッキを頼りに立ち上がった。

さすがに冒険者ギルドまでは歩いていけない。ここは飛ぶか。

「おっとお待ちを。転移は昼食を食べてからにしましょう」

「危つく逃げられるところでしたね。都市長はユリウスさんのために、ツイイク産のブドウ酒を用意させたのですよ？」

爺さんがベルを鳴らすと、扉の向こうで待ち構えていたのか、ワインを抱えた義兄さんがすぐさま書斎に現れた。

「私にそうするよう促したのは貴方でしょう」

「そうだったかもしれませんがね。さ、食堂へどうぞ」

「アンタたちはいつだって強引だな……。喜んでご馳走になるっ」

特に断る理由もない。爺さんたちと一緒に一階へと下りて、食堂の大きな食卓を囲む。

するとそこにシエラハとメープル、それに新しい家族のグラフまで遅れてやってきた。

全員が揃うとすぐに温かな食事が運ばれてきて、食事を楽しみながら仕事ではない日常の言葉を交わした。

あまりにも平和だった。そんなアットホームなひとときが人の腰を重くして、俺たちを食堂に縛り付けた。

土壤改良材『シルフの接吻』の改良は、もう少しゆっくりしてからにしよう。

最初はエルフ族に混じって暮らすことに違和感を感じたが、今ではこれが自然なことに感じられた。

酒はほどほどで断って、昼過ぎの激しい日差しを雲が覆ったのを頃合いに、俺は冒険者ギルドへと転移した。

「あらんっ、素敵な旦那様じゃない」

「出たな、カマカマ野郎……」

「フッフ、きてくれて嬉しいわ。アタシったらね、ちょっとだけ、あの子たちにユリウスちゃんを寝取られた気分になっちゃったもの  
お……」



「一瞬でもお前の物になった記憶はねーよ……。うっ、いつ、いた  
たっつ……」

「あら痛そう、さすってあげるわね……」

老人みたいに腰を折り曲げてトントンと叩くと、しなやかで機敏な身のこなしでカマカマ野郎がカウンターを乗り越えてきた。

人にさすられると痛みがやわらぐ。それがカマの手であろうと、その麻酔効果に違いはなかった。

「ありがとう……」

「いいのよ」

「はぁ……。お前だから言うけどさ、あいつら、もう、もう毎晩毎晩……このままじゃ俺は死ぬかもしれん……。ああ、やっと痛みが落ち着いて　っておいっ?!」

しかしその手つきが次第にやらしく妙にテクニシャンに、腰の上部から下部へと滑り下りてきたので、そこまでは頼んでないとステツキで反撃を入れた。

「あら、ごめんなさい、つい癖で……むふっ　　おわびに前の方も

さすってあげるわねっ」

「そういう下品な冗談は嫌いだ……」

一歩距離を取って、俺はステツキにしがみつくように身構えて敵を警戒した。

「んふふ……。もう、食べちゃいたいくらいカワイイわよ……」

「息を荒げながら言われると本気で怖いぞ……。あ、そうだ、それ

より都市長がため込んでいる大地の結晶と、植物系魔物素材を分け  
てくれ」

「もちろん話は聞いているわ、草原を作るんでしょ？ どうせあ  
なたのところに運ぶ物だから、好きなだけ持って行きなさい」

カマカマ野郎は受付嬢にそぐわない常人離れた足運びで背中側  
に回ると、こちらの腰をトンと叩いた。

「いてっ?!」

「アタシ、エッチな男の子も大好きよ」

「反応に困る……。そうやって人を困らせて楽しむなよ……」

「それはメープルちゃんよ。アタシはただ、ただね 熟れかけの  
青い果実を遠くから眺めてるだけ……。ソフフツ……。ジュルリッ……」

若干本気で怖くなった俺は即座に転移魔法を発動し、ギルドの倉  
庫で素材を確保するなり自分の工房へと逃げた。

あくまで試作なのでオーブと水槽は使わずに、錬金釜の前に立つ  
た。

市長邸で聞いた話では、メープルとシエラハはグラフを誘って、  
これから新しい耕作地に行くつもりらしい。

見物と言いついていたが、本音はあちらの開拓を手伝いたいのだ

ろう。

あの光輝くため池を目にしてしまうと、その気持ちもわからないでもなかった。

ツウィク人の俺から見ればただの泥臭い農作業でも、彼女たちにとってはもつと輝かしく感じられる何かなのだろう。

「うっ……。慎重に、慎重に……。うぐっ……」

バケツを持って灼熱の日差しの下に出ると、オアシスで冷たい湖水をくんだ。

昼は焼けるように暑く、夜は凍り付きそうなほどに冷たい。

背中に佇むあの立派な白亜の家は、この地の過酷な環境から俺たちを守ってくれている。

そんなシャンバラに緑が欲しい。砂の大地に草原が欲しいとシャンバラの民は願った。

こうしてトーガで肌を覆いながら、灼熱の日差しの下をバケツを抱えて歩いていると、俺だって同意したくもなる願いだ。

少しでも立派な緑が広がるよう、俺は薄暗い工房の中で試行錯誤をしていた。

なかなか上手くいかず、ついに知恵熱を起こしかけてヤケクソで飛び込んだオアシスは、あまりに冷たく心地よかった。

心のどこかで嫁の帰りを待ちながら諦めずに試行錯誤をしてゆくと、いつの間にか夕方になっていた。

なのにまだ彼女たちは帰ってこない。これはよっぽど耕作地造りにはまっているのだろう。

乾いた大地に少しずつ緑が蘇ってゆく姿がたまらないと、そう言っていたのはグラフだったか、メーブルだったか、いや全員か……。

窓の向こうに広がる黄金色の夕日と、黒く長く伸びた木陰はどこか物悲しく、天を行く鳥たちまでもが帰路へとついていた。

嫁たちは普段使わない筋肉を酷使して、今日もヘトヘトになって戻ってくるだろう。

そう思い浮かべたら、この手が勝手に夕飯を作っていた。

「ユリウス、ただいま……」

「あら、この匂いはもしかして」

「これはパンプキンシチューの匂いだ！」

家事も新型の試作も片付いたので、2階のバルコニーからゆったりと彼方を眺めていると、いつの間にかうたた寝をしていたようだ。下の階からシエラ八たちの声が響いて、無意識に笑いがこぼれた。

「お帰り。遅かったな」

「すまん、つい楽しくて……。ボクとしたことが帰り時を見失ってしまった……」

厨房にはもうグラフとシエラハがいた。

パンプキンシチューの入った大きな鍋を、一緒に抱えて暖炉へと運んでくれている。

「はー、おなか空いた……。ユリウスが、嫁でよかった……」

「嫁はお前だ」

俺の腰を労ってくれているのかと思っただが、もう半分は空腹ゆえのようだ。

「ユリウスは座ってて。後はあたしたちがやるわ」

「シャンバラはいいところだな、世界中の美味しい物が集まる……」

お言葉に甘えてテーブルに腰掛けて、残りの支度を見守った。

笑顔を華やかさせてよく喋る嫁たちを眺めていると、気まぐれを起こしてよかったと思えた。

・

「ユリウスも見に行くべきよ、あの時とは見違えるほどに綺麗になつてるのっ！」

「あのね、ユリウス。こんなに大きな魚、ため池にいた……」

「へー、川からあの土管を通ってきたのか」

「そうみたい……。面白いね……」  
「明日もあそこに行きたいな……。泥いじりがこんなに面白いとは思わなかった」

みんなよく喋って、よく食べてくれた。

ツワイクにいた頃の俺の人生は、安定はしているが停滞し切っていた。

それがこつちでは毎日がお祭りだ。

毎日が……。腰痛い、だった……。

そんな嫁たちをニコニコとこちらが眺めると、向こうも暖かい笑顔で笑い返してくれる。

それはとても幸せなことだ。この先もずっとこのまま、仲違いせずに仲良くやっていきたい。

「だったらその衝動に任せて、明日も耕作地に行ってみたらどうだ？」

「何を言っている、ユリウス。明日からキミの調合を手伝うに決まっているだろう。枯れた沙漠に緑を　素晴らしい計画だ」

「そゆこと……」

そんなもの気にしないで行ったらいいと言い掛けて、言葉を取り止めた。

作る量が量なので、彼女たちのサポートなしではとても続かない。

「じゃあ、手伝ってくれ」

「言われなくとも手伝うに決まっているわ。緑の草原でオアシスを囲むのよね、それって素敵じゃない！」

「マク湖のばーちゃん、絶対喜ぶ……。う……。ううっ?!」

ところがシチューのスプーンをくわえたまま、メイプルが苦しげに顔をしかめた。

「どうした、不味い部分でもあつたか？」

「んぐっ……。?!」

「あ、あれ……。うっ……。ボクまで、気持ち、悪い……」

ところがそれがシエラハとグラフにまで伝染した。

三人揃って口を押さえて、とうとう我慢出来なくなったのかトイレへと駆けていった。

「おい、大丈夫か?!？」

もしかやシチューの材料が腐っていたのだろうか。

しかし俺は平気だ。つい美味くて多めに味見をしたのに、全く身体に異常は感じられない。

だが目の前で、自分のシチューを食べた嫁たちが次から次へと便器に嘔吐えつしているのを見ると、動揺せずにはいられなかった。

「すまん、俺のせいだ……。だが素材は新鮮だったはずだ……。だからこれは、別の原因が」

「ちがう……。私、少し前から、こっ……。」

「え、キミもなのか……?」

「そう、みんな同じ症状なのね……。ユリウス以外は」

大まじめに俺は悩んだ。

シチューが原因でないのなら、他の原因を探らなくてはならない。

「まさか、感染症か？」

あるいはエルフにだけ毒になる成分が、何かしらに含まれていたのだろうか。

俺だけ症状がないというのはおかしい。だが人間より遙かに高い免疫力を持つエルフだけが、なぜ

「違うわ」

「なぜ気づかない……」

「気づくもなにも、だったらそれ、なんの病気なんだ？」

「そ、それは……」

「えっと、あのね、その……あ、あれよ、あれ……」

二人はそろって言いよんだ。ならばこういう時はメーブルだ。爆弾発言の大御所は少しまだ苦しそうに顔をしかめていたので、俺は背中をさすっていたわった。

「おめでと、ユリウス……」

「おめでとっ？」

「これでいきなし、三児のパパだね……」

メーブルの背に手を当てたまま、目の焦点がぼやけてゆくを感じた。

続いて心臓が加速し、冷や汗を感じたかと思えば全身が熱くなつて、脳は狂ったようにメーブルの言葉を反すうした。

この症状の正体はつわりだと、そう彼女は言っているのだ。



シエラハもグラフも恥ずかしそうにうなづくだけで、それ以上は何も言わない。

まずい。このままではますますマク湖のエロ神として、一部界限で笑われたり親しまれたり崇められたりするはめになる……。身に覚えがあるかないかと言えば、あり過ぎてもう否定しようがなかった。

いや、へその曲がった解釈は止めよう。前向きに考えれば、こういうことだ。

……今日から腰痛とはオサラバだ！

俺はちょうど目が合ったシエラハゾを正面から抱き締めて、かなり乱暴に唇を奪った。

味は、味は今一つだった……。

「ユリウス、ユリウス……。鳥の世界では、胃の内容物を、口移しで分け合うらしいよ……あたっ」

「この状況で色気のないことを言うな。いや、とにかくお前ら口をゆすげ、そのままじゃ喉にも悪いぞ」

俺は食卓に戻るとそれぞれのコップにボトル入りの水を注ぎ足して、トイレへと引き返した。

堪えようもなく溢れてくるこのだらしない笑顔は、人には見せられない。だからそうするしかなかった。

俺たちの子だ。それも3人同時にだ。

緩みっぱなしの表情はすぐに見抜かれて、主にメーブルに散々おちよくられたのは言うまでもない。

かくして、その翌日から第二次緑化事業が始まった。

3日間に渡る果てのない調合作業の果てに、その後たった半日でマク湖を囲む広大な草原が生み出されると、それはシャンバラの希望となって燦然と輝いていった。

数々のレシピ帳とにらみ合つての改良のかいもあつて、その草原は多くの牧草を含んでいる。

マク・オアシスから半径1kmにも及ぶ巨大な牧草地帯は、将来俺たちの食卓に美味しい飯を運んでくれるに違いなかった。

## ・シャンバラ包囲網と経済戦争の始まり

国が喜びに湧いていた。

長く不可能かと思われていた灌漑の成功と、期待以上の面積となつた広大な草原の誕生に、分かれた部族の合流が重なればそれは当然のことだ。

おまけにシエラハとメープルの腹に新たな命が芽生えたと聞けば、親であり兄である都市長と義兄さんが、浮かれに浮かれるのもまた道理だった。

しかし災厄はいつだつて前触れもなく降ってくるものだ。  
いや、それは正しくは災厄でも災難でもなかった。

より相応しい言葉をあてるならば、それは 空から振ってきた  
邪悪なる陰謀だった。

膨らみに膨らみきつたシャンバラの好景気を、一撃で吹き飛ばす  
とんでもない爆弾を、母国ツワイクがこちらに仕掛けてきた。

これは戦争であつて戦争ではない。これは、やつらが仕掛けてきた  
立派な経済戦争だ。

ツワイクとシャンバラの静かなる激突が始まるうとしていた。

「ツワイクが経済封鎖……？」

「はい。極めてまずい状況になりました」

その急報は西方を目指して進んでいたキャラバン隊が、馬を飛ばして運んできた。

それが都市長の耳に届くなり、すぐに臨時議会が召集され、事態の把握と対策に奔走した。

俺たちの耳にこうして実際に届いたのは、翌日になった昼過ぎ、今この場所であった。

「なんで教えてくれなかったんですか、師匠も意地が悪いですよ」

「バアアカ、テメエは嫁の隣にいてやれよ。へへへ……それにしてもお前に息子か。お師匠様は嬉しいぜ！」

「男と決まったわけじゃないですよ」

「けどジジイも男がいいって言ってるぜ？」

「いえ、そうは言っていませんよ。ただ、シエラハゾの子は男の子であった方が夢が膨らみます。ゾーナ・カーナの血筋を蘇らせるチャンスですからね……」

「だったら女でもいいのでは？」

「そこは遺伝の問題があるからな、欲を言えば男なんだよ」

「血筋が絶えるのだけは避けなければなりません。お手柄ですよ、ユリウスさん」

俺の血が男系に入った時点で、血筋も何もない気がするが不毛なので黙った。

血筋のことなど現在のこの問題を解決しなくては、シエラハの血統が続くかすらわからない。

「それよりどうするんだ？ この書面を見る限り、この経済封鎖はメチャクチャまずいことになりそうだが……？」

「おう、最悪だな」

「ユリウスさんのおかげで少しずつ変わっていますが、シャンバラは過剰なまでに輸出に依存した国ですからね。極めて深刻ですよ」

包囲網を形成してきた国は、ツワイクを加えて7国。どれもツワイクから東側にある国だ。

こいつらがエルフ族を排除する方針を取ったので、以西にキャラバン隊を送れなくなってしまった。このままでは国営から民間まで、シャンバラの国中の商會が大損と在庫を抱えることになる。

ツワイクからさらに西へと行っているキャラバンも、こちらに戻るために大幅な遠回りをしなくてはならないだろう。

「なら戦争でもぶつかますか？」

「アルヴィンスさん、それは冗談になっていません。議会で鷹派の意見を抑えるだけでも大変だったのですよ……？」

「ははは、悪い、半分は冗談だ。だが、向こうがやってきたことはそういうことだ。潰される前に潰し返すのもありだぜ」

師匠は事実上の諜報部、宮廷魔術師の頂点にいただけあってシビアだった。

都市長は気乗りしていない。師匠とは親しいはずなのに、その話に関してはずんざりしていた。

きつとうんざりするくらいに、答えのない議論を議会で繰り返し

たのдарろう。

「何、ツワイクの魔術師は俺とユリウスで寝返らせよう。その後は、あの棺をもう一つ発掘して、ツワイクに運べば奇襲一発で王手だ。封建制度の弱点を突いてやろうぜ」

「参考にはしますが、その手は極力使いたくありません……。それこそ、エルフが世界の敵になってしまいます……」

その言葉に師匠も俺と同じ事を思ったのか、こちらに視線を重ねてきた。

「強すぎる力を持つということとは、そういうことだからな。ツワイクなんてずっとそうだった。国々は俺たちの発展を羨みながらも、常にツワイクを警戒していた」

考えようによってはこれは、世界の頂点の座がシャンバラに移り行くこうとしているからこそ、起きるべくして起きた陰謀なのだろう。ついにツワイクは闇ポーションの出所を掴み、今の栄光を守らるがために俺たちを潰しにきたのだ。

「その議会の方はどうだったんですか？ 戦争以外でどうやって経済封鎖を破るか、何か名案は出ましたか？」

「はい、まるで出ませんでした」

「妥協案はあったが、どれもな。向こうだって封鎖を解けと言われて素直に解くはずがねえ……。いずれは殴り合いになると、俺は思っせ？」

都市長の書斎机には地図が置かれ、ツワイクを除く7国に駒が置かれている。

仮にツワイクに交易路を繋ぎ直すだけでも、最低で3カ国の懐柔

が必要だった。

いや、この期に及んでツワイクと取引をしようだなんて、それは考えるだけムダか。

「ユリウスさん、その顔は何か思い付かれましたか？」

「この爺さんな、お前なら良いアイデアをくれるって言うんだよ。なんかひり出せよ」

「師匠を名乗るなら、そういう汚い言い方をしないで下さい」

ハメられたから取引をしないというのは短絡的ではないだろうか。むしろ、ハメられたのならば武力ではなく、同じ流儀でやり返せばいい。幸い、こちらには強いカードが山ほどある。

「では、これは机上の空論かもしれません……。まず、この地図のうち3国を懐柔して、ツワイク行き交易路を復活させます」

「おいおい、敵と取引するつもりかよ？」

「ええ、そもそもこの経済封鎖は、俺たちがツワイクの経済に喰らいつき過ぎたからです。向こうも苦しいからこうする他になかった」「そこはまあ、そうだな。向こうも必死だ」

「だったら、もう一度、罾ポーションを向こうに流通させればいい。倉庫の魔物素材も安く国際市場に放出して、相場を下げてくださいよ」

武力で殴り合うのはその後でもいい。

これこそが交易で国を守り続けてきたシャンバラらしい戦い方だ。

「なかなかえげつねえこと考えやがるな……」

「議会でも似た意見はありましたが、ユリウスさんの案ほど過激ではありませんでしたね」

「やっぱりダメか？」

「いえ悪くありません。どちらにしろ、西の交易路が失われた状態です。だぶついた商品を倉庫で腐らせるよりはずっと賢いでしょう」  
「問題はどうかやって、ツワイク行きルートを確認するかだな。そこまで行けば、一方的に札束でぶん殴って終わり、って予感はあるんだが……」

札束で殴るといふ表現に引っかけた。

だが金貨袋で殴ったら死んでしまいそうだな。

「その理屈で言うならば、ルートとなる3国も札束で殴って通してもらおう方針になりますけど、絶対に足下を見られるのでは？」

シャンバラは大地の結晶や、植物系魔物素材を輸入しまくるほどに経済的に豊かだが、金が無限にあるわけではない。

もしその国が俺たちに強い脅威を感じていけば、話に応じない可能性もある。

ツワイク行きルートを切り崩せなければ、この作戦は失敗だ。

「そうだ、いいこと思いついたぜ！」

「それ、まともなプランでしょうね……」

「さてな、それはテメエ次第だぜ」

「なんだか嫌な予感がする言い方ですね……。一応聞きますが、どういう意味ですか？」



師匠が地図上の駒を、ツワイクを目指して3つ順番に倒した。

「王の性格からして、ランスタ、ファルク、オド、この3国がいいだろう。この3国に使者を送る」

「使者を送ってどうするんです？ お金をあげますからお願いしますと頼んだだけで、封鎖を解いてくれるはずがないでしょう？」

そしてその次に、師匠は弟子の鼻先を指さした。

「行くのはお前だ、バカ弟子」

「……は？」

「不景気まったただ中だったシャンバラに、奇跡を起こした天才錬金術師ユリウスを派遣する。テメエは王たちの願いを叶え、引き替えに経済封鎖を解いてもらってこい」

いいこと思い付いたと言っておいて、言ってることは全て弟子任せだった。

「それ、全部俺に丸投げじゃないですか……」

「王には王の悩みがある。それは金や権力じゃ解決出来ない問題だ。だがお前なら出来る、お前が起こした奇跡の数を考えれば、これこそが合理的見解だぜ」

だがそれをする、俺は子供をお腹に抱えた嫁たちを残して、また遠征することになる……。それは嫌だ。

「……私からもお願いします」

「爺さんまでそんなことを……」

「金で強引に首を縦に振らせるよりも、援助という形で約束を取り付ける方が良好な関係を結べます。エルフとヒューマンの対立を煽られた以上、我々は武ではなく援助で対抗するべきです。信頼を勝ち取ってきてくれませんか？」

思いつきで意見を出してみたら、俺に白羽の矢が立っていた。

他のプランも考えて、これ以上の案が出なかったらこの計画でやってみよう。

そう付け加えて、長い議論の果てに俺は夕刻の市長邸を出た。

・

「あら、おかえりなさい。ずいぶん遅かったのね……？」

「ん、どかした……？」

「疲れた顔をしているな、また無理難題を言われたのか？」

重い気持ちを引きずって帰宅すると、どうしても言い出せなくて表情まで暗くなっていた。

子供が出来て喜んでいたのも束の間。どうやら他に方法がなさそうだ……。

「そこに座って。みんなで旦那様の肩を揉んであげる」

「そういうのはいいよ」

「いいの……。これからは、ユリウスの、お世話になるだろうから……」

メーブルがお腹をわざわざ露出させて、慈しむようにそこを撫で

た。

「メーブルがやるとやや犯罪臭い。歳の差もあって罪悪感を感じた。

「それで、何があったんだ？」

「いや、別に……」

「せっかく子供がお腹に宿ったのに、また遠征に行くなんて行ったら、こいつらは絶対にヘソを曲げる。

「俺ははかないセミだそうだから……。どうすればわかってもらえるのだろう……」。

「旦那は半ば引つ張られるようにテーブルに座らされ、肩やら背中やらに6本の手が伸びた。

「いたわりの気持ちありがたい。だがなおのこと言いにくくなった。」

「彼女たちが不安にならない方法をどうにか考えよう。」

「それでお腹の子に何かあったら一大事だ。シャンバラを離れるだけで気がかりだ。可能ならば手元に置いて　ん、手元？」

「実はな、シャンバラ興亡の危機がきた」

「えっ、それは本当なのかっ!？」

「事実だ。そのためには、俺がまた長い遠征に出なくてはならなくなっただけだ」

「えっえっ……反対、反対、それ反対……っ!」

「勝手に死なれたら困るぞ!　これ、お前の子なんだぞっ!?!　この子がバージンロードを歩くまで、ちゃんと面倒を見るっ!」

「いやどんだけ将来設計が進んでるんだよ、お前……」

「とにかく反対反対っ、反対よ！ 私もユリウスが遠くに行くなんて、絶対嫌よ……っ」

そんな彼女たちの手に一つ一つ触れて、静かになだめた。

「ここは視点を180度ひっくり返そう」

「嫌よ、子供が生まれるまでずっとあたしたちと一緒にいて……お願い……」

「シエラハ、メイプル、グラフ。これから新婚旅行に行こう。行き先はランスタ、ファルク、オドだ」

そう意思を伝えると、あれだけ反対していた彼女たちは途端に明るく豹変して、何を着て行こうかとはしゃぎだしていた。

そういうわけだ。俺たちは新婚旅行のついでに、錬金術の力で3つの国の国王を懐柔する。

これはあくまで新婚旅行のついでにだ。

・番外編 虚飾を捨てて

・アリアルフ・ツワイク

王都を離れた閑静な丘地に、碧玉宮と呼ばれる王家の離宮がある。父上にこの地を任されてかれこれ20年、すっかり長い付き合いになった。

「メリダ湿原の娼婦画、500万でヴァイシュタイン公が落札されました。おめでとうございます」

だがその付き合いもここまでだ。

俺は己の住まいであるこの離宮にて、私財の売却をすべくオークションを執り行った。

腐っても俺は王子であり元將軍だ。金目の物を売りさばく術はよく心得ている。

芸術は投機対象として打って付けで、かつ愚かだった俺のつまらない虚栄心を満たしてくれた。

「700年前の神殿より発掘された翡翠の神像、10万からのスタートです。どなたかおりませんか？ はい、50万！ 80万！ 120万！ …… 230万でケリー大使が落札されました。おめでとうございます、大使」

一つ、また一つと私財が持ち去られて行くたびに、俺は己の心が軽くなってゆくを感じていた。

虚飾のために買い集めた芸術に、自分自身が縛り付けられていた

のだとそう実感した。

「ではアリ王子、お宝はいただいでいきますぞ」

「俺にはもう必要のない物だ。大切にしてください」

父上は俺にこう言った。その下民の娘と別れるならば、宮殿に戻ることを許そう、と。

父上は一度もゲルタの名を呼ばず、最後まで下民の娘と言い張った。

ゲルタには申し訳ないがそれに対しての怒りはない。失望もない。それもまた王者としての生き方だ。貴族の血筋を守るならば許されないことだ。

諸侯に愛想笑いをしながら、俺は落札されるたびに持ち出されてゆく宝の数々を目で追った。

何度確認しても、ちっとも惜しくなかった。

虚飾が剥がれ落ちた後には自由が残る。もう息苦しい格好をする必要はないのだと、俺は胸のボタンを1つ外して息を吐いた。

全てが終わると小姓が俺の前に来てきて仰々しいお辞儀をした。失脚をきっかけに、他の小姓には全て逃げられてしまったというのに、彼だけは離宮に残ってくれた。

「アリ殿下、これで一通りの売却が済みました」

「ご苦労。これでお前たちの退職金が支払えるな」

「殿下は……最後なので包み隠さずに申しますが、本当に変わりましたね……」

「ふんっ……この国は泥船だ」

「泥船ですか？」

「やつらはユリウス率いるシャンバラを敵に回したんだ、巻き添えはゴメンだ」

ヤツの亡命先がシャンバラという特殊な国でなければ、あそこまで新参者が重用されることはなかっただろう。

どこかしらでつまらない権力争いに直面し、世渡り下手なあの男は失脚させられていたはずだ。

「殿下がそこまで他人を認めるだなんて……。失礼ですがそんな殿下を初めて見ました」

「人であろうと物であろうと、優れたモノは素直に賞賛すべきだ。そう気づいたのだ」

俺の報告がシャンバラ包囲網の結成を招いた。

それが俺の役目だったとはいえ、意に添わない展開になってしまった。

「父上やポーシヨン工場のやつらは、経済封鎖でようやく売り上げが戻ってきたと、そうほくそ笑んでるかもしれん。が、それは大きな勘違いだ」

「まあ、短絡的ではありませんね。しかしツイクとしては、経済封鎖は妥当なところかと……」

この小姓は賢い。どこに再就職しても上手くやっつけていけるだろう。俺と一緒にユリウスを貶めようとしたやつらの方は　俺と同じような、別の軽い御輿を見つけて担ぎ直すだろうな。

「ユリウスは枯れた湖を復活させた。魔物の大襲撃から民を守り抜いた。不毛の沙漠に小さな緑を蘇らせた。あの男がその気になれば、砂漠をガラス化させたという恐るべき力で、ツイイク軍を焼き払うことすら出来てしまう」

「そんなことが、本当に常人に　錬金術の力で可能なのですか……？」

「さあな、直接俺が見たわけではない。だが俺はもう2度と、あんな怪物を敵には回さない」

「……本当に変わられましたね、殿下」

しかし思いの他にオークションでは高値が付いた。

これならば慎ましく暮らすどころか、あの貧相な村に投資をすることも可能だ。ならば金の力で、ユリウスの真似事をするのもいいかもしれない。

「再就職は見つかったか？」

「いえ、職務を終えるまでは仕事を徹底するつもりです」

「……だったら、勝ち馬を紹介してやってもいいぞ。そいつに仕えておけば間違いはない」

「勝ち馬……。参考にお聞きしますがどなたでしょうか？」

「それは　む、父上か。ようこそ、我が離宮へ」

そこにツイイク王である父上がやってきた。



息子が私財の処分を始めたので、驚いて駆けつけてきたようだ。

「アリよ、これはどういうことだ？」

「見ればわかるだろう」

「バカな……。せっかく国に戻るチャンスだというのに、出て行くつもりか？」

「そうだ」

いくら引き留められてもツワイクに留まる気はない。

ゲルタは　この地に残っても幸せにはなれない。ゲルタは富だけでは幸せには出来ない種類の女だ。

「本気なのか？」

「本気だ」

「……わかった。そこまで言うなら、あの娘を側室に入れるだけなら許そう。だからこんなバカなことは　」

「俺は農民になる」

「な、なんだと……っっ!!？」

贅沢暮らしはもう飽きた。おべっかばかりの取り巻きに囲まれた生活も、金をかき集めて悦に入る自分にも、もう飽き飽きだ。

「王子として生きるより、農民として生きた方がずっと面白い。俺はもう、虚飾と欲望渦巻くこんな世界で暮らす気はない。父上、俺

は王子の器ではなかった」

父上は変わり果てた息子の姿に、期待と失望の感情を入り交じらせた。

「その謙虚さがあれば、我もそなたに一目置いていただろうに、なぜ今さらになってそんなことを……」

「ムダだろうが警告しておくぞ、父上」

「我に警告だと？」

「今のシャンバラはツイクが対抗できるような国ではない。もし事を構えるなら、それはユリウス・カサエルが没してからにしろ」

ヤツがいる限りシャンバラは世界最強の経済国家として栄華を極めるだろう。

だがヤツが没すれば、シャンバラは主力商品ポーションを失う。

仮に迷いの砂漠がこの世界からなくなったとしても、ユリウスのポーションある限り戦争に勝つことは不可能だ。

勝てる相手ではないので付き合い方を変えろ。

そう父上に持ちかけても、彼は聞く耳を持たなかった。

かつての栄光にすがりつき、シャンバラさえ封じれば利権と繁栄が取り返せると勘違いしていた。

父上は良くも悪くも政治家だった。

その翌日、俺はゲルタと共に離宮を去った。

「ん、どうしたゲルタ？」

「アリ様、あれを……」

「あれは……」

ホ口馬車の御者席に並んで乗った俺たちは、王都に立ち寄って薬や交易品を買い込んだ。

ところが去り際に寄った王宮前に、冒険者や商人たちがデモ隊を組んで陣取っていた。

彼らは口々にこう叫んでいた。

シャンバラ製ポーションの流通を許せ。不公平な競争を止める。ポーション工場は王家の利権構造そのものだ。と。

「あ、大変……」

「父上も墜ちたな。だがあれを助けることは出来ない、行くぞ、ゲルタ」

そんな民たちが槍斧を持った兵士たちに取り囲まれるのを見た。

ポーション工場の独占と癒着は、王家にとっては突っつかれるとかなり痛いところだ。ああして民に騒がれると、王家の連中としては実力で黙らせる他にない。

「でも、いいんですか……？ あれはアリ様の民なのでしょう……？」

「問題ない。予定通り俺たちはあの村に帰るぞ」

アレもあの男の差し金だろうか。  
まあいい、俺にはもう権力争いなどどうでもいい。

「本当にいいんですか？」

「俺はもう王子ではない。そ、それよりゲルタ……か、帰ったら……う……っ。村に帰ったら、その……。お、俺と……俺と結婚してくれ……」

「はい……っ！ 一生、アリ様の面倒を私が見ますっ！」

「う、うむ……。そこはもう少し言い方を選んで欲しかったぞ……。助け合っつていこう、ゲルタ」

「はい、神に誓います！」

俺たちは王都を出て、遙か遠い辺境の村へと旅立った。  
そこで俺とゲルタは慎ましやかな結婚式を挙げる。

ユリウスがそうしたように、俺もツワイクを捨てて新しい土地で新しい人生を始めることにした。

ユリウスほど俺は有能ではないが、金ならばある。この金で俺なりに出来ることをしてゆこう。

苦難の果てにツワイクに戻った今だからこそわかる。

「金の力は偉大なのだ!!」

「キャッ、な、なんですか、いきなりっ!？」

「む、口に出ていたか」

「ふふふ……アリ様は面白い方ですね」

俺はクズだが投機だけは得意だ。

あの砂に飲まれかけた貧しい村を、シャンバラに負けなくらいに栄える街にしてやる。

見ているよ、ユリウス。

・番外編 虚飾を捨てて（後書き）

並行連載作、「Lv0の元傭兵」が完結しました。

ご愛顧ありがとうございました。

これからも10万字ほどで完結するお話を1ヶ月スパンで公開してゆきます。基本方針として、どれも本一冊で綺麗にまとまるお話を念頭に作っています。

以上、宣伝でした。

## ・フェーズ1-1ランスタ王国

ランスタ王国はシャンバラより馬車で5日ほどの距離にある。

広大な平野と多くの河川を持つこの国は、どこまでも広がる麦畑やブドウ畑、いくつもの橋と輝く川を眺める事が出来る豊かな農業国だ。

まずはこの国を籠絡し、次の国へのルートを作る。作戦の便宜上、俺たちはランスタでの活動をフェーズ1-1とした。

合計3国をこちらに引き込んだ後は、闇ポーションによるフェーズ2を始める。

都市長や師匠のことなので、俺たちが失敗した場合のカバーストリーくらいは考えているだろうが、これにしくじると手段が武力行使に変わりかねない。

ツイクにいる親しい人たちのためにも、今回の籠絡は絶対に成功させなければならなかった。

しかしそんな使命感はほどほど、俺たち家族は交代で仲良く御者をしながら旅を楽しんでいた。

ランスタの美しい国土はなかなかに見物で、どこまでも広がる小麦畑に砂漠生まれの姉妹も、森生まれのグラフも息を飲んで驚いていた。

「シャンバラより遙々よくぞいらした。来るとは予想していたが、これは思わぬ顔ぶれだ」

馬で先行していた使者の働きにより、ランスタ王との謁見はすぐに叶った。

ただ俺たちのことはあえて詳しく伝えていなかったようだ。

「シエラハ・ゾーナカーナ・テネスと申します」

「元リーンハイム長弓隊隊長、グライオフェンです」

「えーと、元スパイです。あてっ……えと、メーブルと、言います」

シャンバラの未来がかかってるんだからふざけるなど、しょうがないポケ担当の後頭部を軽く叩いた。

さて残るは俺か。

「そなたが噂のユリウスだな？」

ところがランスタ王は俺のことを既に知っていた。

「え。ええ……私がユリウスですが、しかし、なぜ私のことを？」

「貴殿はその界限では有名だ。エルフを3人も妻にしたと、その界限では噂で持ち切りだぞ」

「ちょ、え……っ？ シャンバラの外で俺、そういう扱いになっていたんです……っ!？」

「どの娘も美しい。老いぬ妻か……羨ましい限りだ。おっと、ゴホンゴホンッ……」

今この王様、本気で羨望の眼差しを俺に向けたぞ……。



なんか、こうなるとやりにくいな……。いや交渉の滑り出しとしては悪くないのだろうか……。

「自慢の嫁たちです。気だてが良く明るくて、いつだって俺を驚かせてくれます。しかし陛下、時間も限られていますので、早速本題に入ってもよろしいでしょうか」

「ん、うむ……。どうやったらそんな美人をひっかけられるのか、ご教授願ったかったのだがな」

「ご冗談を」

「ほっほっほっ……うーむ」

気のせいかな本気で美人をひっかけろアドバイスを求めているような、そんな眼差しだった。

仮に聞かれても俺にわかるわけがないので、これは交渉のカードにはならない。

「それで本題なのですが、お察しの通り経済封鎖の件です」

「であるうな」

「解いてもらえませんか？」

いくら取り繕おうとそれこそが本題なので、まずはシンプルにこちらの要求を伝えた。

「シャンバラは貴重な輸出先、対立は望むところではない。だが妻がツイイク王家の者でな、今さら裏切るわけにもいかないのだ」

「存じています。ですが俺たちはその無理を承知で、そこを曲げていただくためにやってきました。……どうぞ、こちらの書簡をご確

認下さい」

蜜蝋で封じられた公式の書簡を王のお側付きに渡すと、王がそれに目を通した。

それからしばらくすると頷いて、顔を上げて俺を見た。

こちらの方針は経済援助を含む懐柔だ。都市長はターゲットである3国に経済援助を約束する書簡を記した。

加えてその書簡にはこう記されている。

『そこにいる錬金術師ユリウスは、不可能を可能にする世紀の大天才。対ツワイク包囲網に加わってくれるならば、ユリウスが全力をかけて王の願いを叶えると保証する』

俺はそこまで万能ではないが、今はそういうことにするしかない。王を信用させるために俺は礼儀正しく平伏した。

しばらく王は思慮していたが、やがてお側付きに命じてツワイク王家の妻を呼び出した。

「本当に……かしら……？」

「書簡には、枯れた湖を蘇らせたとある。ならば……も……」

コソコソと何かを話している。俺には上手く聞き取れないが、俺の嫁さんたちは揃いも揃って地獄耳だ。

隣のグラフに俺が流し目を向けると、なぜか難しい顔で返された。

「ユリウス殿……そなたに願えば、どんな願いも叶うというのか……?」

「出来ることと出来ないことがあります、最大限の努力をお約束しましょう」

「例えばそれは、病気を治すことも可能でしょうか……?」

王妃様はツワイク人だ。彼女は同胞であり裏切り者である俺を責めずに、すがりつくような目でそう言った。

「それは症状次第ですね。どなたのどんな病を治せばいいのでしょうか?」

「……一番下の娘だ」

「お願いします、見てやっては下さいますか……?」

グラフが難しい顔をしていた理由はこれが。俺たちにとってこれはチャンスだが、とても笑えるものではなかった。

お姫様の寝所に向かうことになった。

しかしこのメンツでゾロゾロと押し掛けるのもよくないだろうと、シエラハとグラフは気を利かせてくれた。

そこで2人には調合の準備を任せた。

俺たちの方は王妃に連れられて王族専用の区画へと入り、お姫様の寝所の前で立ち止まった。

「ここです……」

「ねえ、名前、なんていうの……?」

「ガラテアと名付けました。お願いします、ユリウス様……どうか娘を助けてやって下さい……」

願いが悲痛であればあるほどに安請け合いは出来ない。

引き歪んだ表情を浮かべて王妃は両手を組み、神にでも願うかのようには錬金術師へと頭をたれた。

「わかりました、最大限の善処をお約束しましょう」

「愚かな王族と思われるかもしれませんが、娘が助かるならば、わたくしはツイイク王家だって裏切れます……。どうかお願いします、どうか娘を……」

ここから先は陰鬱な話になったので要約する。

医者言うにはそれは筋肉の病気だそうだ。

少しずつ筋肉が分解されていってしまい、やがて立てなくなり、内臓が止まって死に至る。

身体を維持する作用そのものが壊れてしまつては、もはや薬でどうしようもない。ただ娘の死を待つしかない状況だった。

「待つて。私が先に行く……」

「お前が?」

「お姫様と、打ち解けたら呼ぶから、旦那様はお座り……」

「妙な夫婦関係疑われるようなこと言うな……。わかった、任せた」

「うん……任せといて」

歳が近い方が話しやすいだろう。シエラハとグラフは最初からのつもりで抜けたのかもしれないな。

「見た目は若いですけど、やさしい奥さんですね……」

「いや、アイツには困らされることの方が多いんですけどね……」

「それとユリウスさん、ア리가ご迷惑をかけたようですね……。すみません、あの子は昔からああで……。わたくし、アリの叔母に当たります」

「そうでしたか。大丈夫ですよ、もうアイツのことは恨んでいないので……」

アイツを許す日がくるとは思わなかったな。

俺と王妃様はメープルがわざと小さく開けっ放しにした扉から、中の様子をつかった。

「エルフさんがきてくれるなんて、嬉しい……。ずっと、会ってみたかったんだ……。ああ、すごい、かわいい……」

「私の姉さんは、もっとかわいいよ。女神様みたいに綺麗でね、なのに純情で、辛抱たまらんの……」

おい、お姫様相手に辛抱たまらんは止める……。

だが王妃様は嬉しそうだ。娘が笑顔を浮かべて客人に喜んでいるからだろう。

まあ……メーブルのお腹が将来ああなったら、俺だって同じことを思うだろうな。国だって裏切るかもしれない。

「メーブルちゃんも綺麗だよ……。ガラテアなんて、ほら、この脚見て……」

「うわ。……あ、ごめん」

「いいの……。いいな、小麦色の肌……。メーブルのお姉さん、見てみたいな……」

「すぐに見れるよ。ちなみにだけど、私」

こちらが聞き耳を立てているのを承知で、メーブルはガラテア姫に耳打ちをした。

「えっ、メーブル、結婚してるの……っ?」

「実は、新婚旅行中、だったり……」

「えっ、ええっ……う、嘘……」

「私の旦那様、ガラテアに、紹介してもいい……? ホントのこと言つと、扉の向こうで、待ってたり……」

「い……いいよ……。メーブルの旦那様、ガラテアも会ってみたい……」

上手くやってくれたようだ。

姫の弱々しい姿にこちらは見ているだけで哀れになってきて、無性に胸が締め付けられる気分になっていた。

元気づけてやりたい。助けてやりたい。こういう境遇の子を救ってこそ、誉れある真の錬金術師だろう。

俺はダメ元であの大きな錬金術の本を抱えて、ガラテア姫の寝所へと入っていった。

お姫様の部屋はずいぶん薄暗かった。

王妃に見送られて中へと入ると甘い花の匂いがして、ふと辺りを見回せば、所狭しと花々やぬいぐるみが敷き詰められていた。

ガラテア姫はランスタ王家にとってよっぽど大切な存在のようだ。部屋を見るだけで愛されていることがわかった。

「わ……メープルの旦那様、カツコイイ……」

「これがユリウス。いい悲鳴で鳴く、私の旦那様……あるいは、豚？」

メープルは誇らしげに俺のことを自慢した。

コイツがわざと引っかかるような言い方をするのは、ツッコミを入れて欲しいからだ。スルーしてやった。

「ユリウス様は、お歌が上手なの……？」

「ふふ……まあ、そんなとこかな、むふふ……」

「あ、でも、その大きなご本はなあに……？」

「これ？ これは、エッチな本だよ。あてっ……」  
「王宮でそういうたちの悪い嘘を吐くな……」

リンハイムで見つけたこの白紙の書は、とにかくでかくて重くてよく目立つ。

よっていつまでも抱えていられないので、余りに余ったベッドの上へと置かせてもらった。



「俺は錬金術師のユリウスだ。一応お母さんと同じツワイク出身ということになる。よろしくな、ガラテア姫」

「はい、ユリウス様、お会いできてガラテアも嬉しいです……」

腹に力の入らないはかない声で、お姫様は微笑みを浮かべてくれた。

「で、どう……?」

「さて、どうだろうな」

メープルも気になっているようで、白紙の書に流し目を向けて俺に聞いた。

この本を持ってきたのはダメ元だ。実は俺たちの馬車には、今日までかき集めてきた錬金術の本のほぼ全てが積み込まれている。

引き替えに調合の材料は持たず、シャンバラに属する現地の商会から調達する方針だ。

「あの、ユリウス様……それでそのご本は、なあに……?」

「そうだな……何と言われても上手く答えにくいが、不思議の本とあったところだろうか」

「読んでみる……?」

「いいの……っ!? 読んでみたい……」

「おっけー。ま、ほとんど白紙だけだね……」

どこで覚えたのやら、メープルはガラテア姫の背中後ろにクッションを集めて、いたわるように身を起こさせた。

そうするとお姫様はますますやせ細って見えて、細い腕や浮き出

た鎖骨がまた痛々しかった。

そんなお姫様の膝の上に本を運び、ページを一枚一枚開いて見せてゆく。

「愚者の、叡智……？ わぁ……これ、魔法のお薬なの……？」

「そだよ。ユリウスはこれを作ってね、森に閉ざされたエルフの国、リンハイムを救ったんだよ」

「えっ、それって本当……？」

「本当だよ。これ飲んだエルフの弓使いがね、迫りくる怪物たちを、次から次へと弓矢でやっつけてね……あっという間に、全滅させちゃったんだよ」

お姫様はそれを聞いてもう一度、愚者の叡智の説明文に目を通した。

「凄い……。凄い凄いつ、ユリウス様、お話の中の勇者様みたい……」

こんな都合のいい薬が存在するわけがない。

普通は信じるどころかホラ話疑うところだろうに、ガラテア姫は人を疑うことを知らなかった。

「次のページも、読んでみたい……」

「それなんだが……この本はかなり特殊なんだ。これはここぞというときに動き出して、俺たちに起死回生のレシピを教えてくれるやつみたいでな、次のページは何も」

すると何を思ったのか、ガラテア姫の右腕が力なく上がって弱々

しく書へと伸びた。

奇跡の本が自分も救ってくれないかと、すがり付きたくなったのだろうか。

メーブルがその手を支えて、次のページをめくるのを手伝った。リンハイムでのあの一件きり、白紙の書が俺たちに何かを示すことはなかった。

それは恐らく、何かしらの条件を満たしていなかったからではないかと思う。

「わっわっわっ、わああーっ?!」

だが今、その条件が満たされた。光輝く白紙の書の上で、不可視のペンが踊りだした。

尋常ならざる速筆で空白のページに文字が刻まれてゆき、やがて一通りを記し終わると、最後にレシピのタイトルが刻まれた。その薬の名は

「筋肉のポーション……?」  
マスキュラー

名前からしてそのまんまだった……。

逆さまの文章にさらりと目を通した感じ、これは服用者をムキムキのマッチョに変える薬だった。

「ユリウス、これ、作ろう……!」

「飲むと、筋肉が、ムキムキになる、お薬……? あっ、これっ…

…これっ、私これ、飲みたい……っっ!」

今までで一番大きな声だった。

ガラテア姫は期待に本へと身を乗り出して、それからさすがのように俺を見上げた。

書の起動条件がわかったような気がする。

白紙の書の起動に必要なのは錬金術師と、せっぱ詰まった状況あるいは、何かを願う人の強い想いだ。

「ならダメ元で作ってみるか。都合のいい結果になるとは限らないが、試してみる価値は十分にある」

「絶対、上手くいく。ユリウスを信じていいよ……」

「うんっ……ありがとうメール、ありがとう、ユリウス様……っ！」

あまり期待させるとダメだったときのショックが大きくなるので、あえて悲観的に言っただつもりなのにメールは無責任な太鼓判を押した。

こうなつては全力をかけて成功させるしかない。

俺たちはマスキュラーポーションのレシピと共に、シエラハとグラフの待つ作業場へと移動した。

これは余談だが、お姫様の症状にそのまんま効きそうな奇跡のレシピに、王妃様の表情も明るく涙ぐんだものに変わっていた。

・フェーズ1-1ランスタ王国 - 筋肉と病 - (後書き)

更新遅くなりました。

毎度となりますが、今回のエピソードも投稿文字数にばらつきがあります。

ゆっくり楽しんでいただけたら何よりです。

作業場は城の一角にある研究棟に用意されていた。

しかしいざその塔にやってきて、3階の作業場の前まで最近調子の良い腰が上がってくると、ランスタ王を含む見るからに位の高そうな貴人たちが大集合していた。

「おお、ユリウス殿！ 姫を救う特效薬が見つかったというのはまことなのか！？」

「頼む、妹を助けてやってくれ！」

「必要な物があればすぐに取り揃えよう！ なんでも言ってくれ！」

ずいぶんと愛されているな。

彼らはガラテア姫の兄や姉たちで、妹を救う方法が見つかったと早合点にも大喜びしていた。

これでもし失敗したら、『このペテン師め！』と逆恨みされてもそうおかしくない。

「舞い上がっているところ悪いが、成功は保証出来ない。だがやるだけやってみよう」

「失敗したら、打ち首にされたりして……」

「お前は俺を追い詰めたいのか発破したいのか、どっちなんだよ……」

「両方……」

「だろうな……」

扉をくぐって中へと入ると、気が散るので俺たちだけでやらせてくれと彼らを閉め出した。

中では薬の調合用の釜と、木製のかき混ぜ棒が用意されていて、釜の中には既に澄んだ水が満たされていた。

「レシピが見つかったんだって？」

「ああ、これを見てくれ」

作業用テーブルに白紙の書を置いて、新たに生まれたレシピ【マスキュラーポーション】をシエラハとグラフに見せた。

「確か、筋肉が衰えてしまう病気だったな……？」

「この薬が最適じゃない！ よかったわ、早く作りましょうよっ！」

作るのはいいんだが、誰がこの薬の被験者になるかが問題だ。さすがに俺もこういふのは嫌だぞ。勇者のようにたくましい肉体に憧れはするが、ガチムチ体型は困る……。

「なんか、新婚旅行とか、どうでもよくなってきたね……」

「おい、思ってもそういふことは言わないよ、盛り下がるだろ……」

あくまでメインは旅行で、諸王の懐柔はついでだ。

そこを履き違えてしまうと、新婚旅行がオマケになってしまうので断じて認めてはならない。

「あたしは楽しみよ。釣りの出来る湖畔の宿なんて素敵じゃない」「ボクも釣りは好きだ。楽しみだな……」

そうなのだ。この一件が片付けば、俺たちはランスタののどかな釣り宿に泊まることになっている。そうなればさっとお姫様を助け

て、静かな休暇を楽しみたいところだ。

新婚旅行がいつの間にもやら、気分悠々釣り旅行になっているような気もするが、まあ別に構わないだろう。

風光明媚な湖畔の宿でゆっくりしながら、みんなと楽しい気持ちをつかち合いたい。

いや、だがそれはあのガラテア姫を救ってからだ。

「えと……マスキュラーポーションに必要なのは、水、ベースハーブ、レッドハーブ、蜂蜜、オークの牙、純銀が少々。あと、獣肉が50キロ（干し肉なら半分）だって……」

「薬草類ならその棚にあったわ」

「蜂蜜も厨房に行けば分けてもらえるんじゃないか？」

「そうなるに残るはオークの牙と銀と、肉か……。牙の方はこの前のリーンハイム防衛戦で腐るほどドロップしたから、こっちでも在庫がダブっているだろうな」

この研究棟にも探せばありそうなものだが、それよりは直接シャンバラの商会支部を訪ねた方がずっと早い。

「ちょっと貰ってくるよ。蜂蜜の手配は任せた」

「おっけ。シャンバラに、ガチムチエルフ軍が生まれる未来も、近いね……」

「嫌な想像をさせるな！ シャンバラの美しい戦士たちが、ことごとく肉だるまに変わるなんて最低だ！」

「あ、あたしは遠慮するわ……。力なんて、ユリウスのせいでも有り余ってるもの……」

そこから先のやり取りはわからない。



世界の裏側へと潜り込むと、俺は商会のランスタ支部を訪ねて素材を分けてもらった。

あちらでの待ち時間を含めて、往復10分弱といったところだろうか。

主に薫製肉の山と一緒に研究棟に戻ってくると、そこには留守番のシェラハしかいなかった。

「おかえりなさい、やっぱりユリウスの方が早かったわね」

「そりゃ転移魔法を使って負けたらこっちの立場がない」

「ふふつ、最近は自重してくれて嬉しいわ」

「それはまあ、当然だろう。……俺は今日までこの力に頼り過ぎていたみたいだ」

ツイクのポーション工場にいた頃だって、この力を使わずに通勤していたらもっと人との繋がりが出来ていただろう。

転移魔法に頼り切った生活は、人との関わりを捨てた隠者とそう変わらない。

「わかってきてくれて嬉しいわ。これからもあまり無茶な使い方をしないでね……？ この子の妹も欲しいんだから……」

「なっ、妹っ！？ い、いや、それは……」

待ってくれ、それは俺の予定表にないぞ。

ようやく腰が回復したのに、また激しい腰痛に床をはいずる日々

がやってくるというのか……!?

砂漠の国のお姫様は、おねだりをするような上目づかいでそつとこちらに近付き、震える旦那の手を握った。

どうやら再び杖を突いて歩く未来は、避けられそうもなさそうだ……。

「もしかして、ユリウスは嫌……?」

「嫌ではない……。嫌ではないんだが……」

「そう、よかった……。ふふふつ、同い年の兄弟っていいと思わない?」

「そ、それは……それはまあ、わからないでもないが……」

それ、ずいぶんとハードワークな家族計画だな……?

「あつ、戻ってきたみたい。さあ始めましょ」

「お、おう……」

これは本気で言っているようだ。可憐に微笑む褐色美人からかき混ぜ棒を受け取って、俺は水の満たされた釜へと魔力をかけた。

「やっぱり君の方が早かったか。ほら、みんなでつまみ食い出来るくらい貰ってきたぞ」

「あれ、ユリウスなんか……顔青くない?」

「大丈夫だ、がんばれる……。たぶん、がんばれるはずだ……」

エルフはヒューマンに対して個体数に劣る。

個体数を増やそうというのは、国家戦略的にも間違っていない。だが、俺は果たして、長生き出来るのだろうか……?

嫁たちは俺の青い顔を心配してくれた。

しかしそれもレッドハーブが投入されて赤くキラキラと輝く水溶液を見るなりすぐに薄れて、さらにベースハーブの緑が加わって桃色へと変わると、続けて蜂蜜の琥珀色が足されていった。

そこに25キロの干し肉や薫製肉を流れ作業で溶かせば、完成まであと一歩だ。

ところがそんな中、部屋の入り口が小さく音を立てた。

誰かが入ってきたようだが、俺は構わずに調合に集中した。一国の姫君に いやあれだけ家族に愛されている子に、妙な薬は飲ませられない。

「あ、ガラテア……きたんだ」

「え、お姫様っ!?!」

しかしやってきたのは車椅子に腰掛けたお姫様だった。

彼女は王妃様に押されて釜の前までやってきて、力のない小さな声でこういった。

「ごめんなさい、どうしても、気になって……。あの、お邪魔でなかつたら……ここで見ていても、いいですか……?」

「もちろんいいに決まっている。ユリウス、ランスタ王国一可憐なプリンセスの御前だ、失敗は許されないと思え」

「いちいち余計なプレッシャーをかけるな……」

グラフはガラテア姫の庇護欲誘う弱々しさと可憐さに、すっかり目も心も奪われていた。

彼女は女性的な美しさに目がないからな、こうなることは姫を見た時点で予想が付いていた。

さて、そろそろ仕上げに入ってもいいだろう。そこでオークの牙へと手を伸ばそうとすると、シエラハが察してくれて代わりに投入してくれた。

薄桃色に輝いていた液体は、瞬く間にオークの肌のような緑色の濁った液体へと変わってゆく。

一抹の不安がよぎったが、仕上げの純銀の欠片を落とすと濁りが消えて澄み渡っていった。

これで完成だ。最後にポーション瓶を投げ込むと、薄水色に輝くマスキュラーポーションがそこに完成していた。

・

「さて……問題はここからだな。誰が飲む？」

「え、もちろん、ユリウスでしょ……？」

「お前は旦那が変わり果てた姿になってもいいのか……」

「あまりいかついのはボクの好みじゃないぞ」

「あ、あたしも、今のユリウスが好きよ……」

じゃあこれは飲めないな。

王妃様に目を向けると、彼女もこちらの意図を理解してくれた。

「わかりました、毒味役を呼びましょう」

筋肉の付かない身体に悩んでいる者はそう少なくない。被験者はすぐに見つかるだろう。

「毒味役なんていらないうつ！ それ、私が飲むつっ！」

「な、何を言っているのですガラテア！？ これが安全かどうかもわからないのですよっ！」

「母様、私はユリウスさんを信じます……。それに私、もう誰かを犠牲にするなんて、もう嫌……。それ、かして……。っっ！」

ガラテア姫は車椅子から立ち上がろうとして地に崩れた。

それでも彼女はやせ細った身体ではいずって、俺の手にあるマスキュラーポジションへと腕を上げる。

「ガラテアツ、よしなさい！」

「嫌っ、もうお荷物は嫌っ！ 私は強い身体が欲しいのっ、今すぐに！！」

彼女は俺の手からポジションを奪い取った。

騒ぎを聞き受けて王や兄弟たちが駆け込んできたが、ガラテア姫は止まらない。

彼女は歯でポジション瓶のコルクを引き抜くと、中の液体をためらうことなく一気飲みした。

家族は誰もそれを止めなかった。長らく彼女が病に苦しんできたことを、誰よりも知っていたからだろう。

「ユ、ユリウス殿……これは、大丈夫なのだろうな……？」

その王の言葉に、王子から王女、王妃まで俺に答えを求めて必死の形相を向けた。

ぶっっちゃけどうなるかわかりません。……なんて言えるわけもない。

「あ……これ、何……？」

ところがその凝視は再びガラテア姫へと戻った。

ほのかな光が彼女の全身を包み込み、穏やかにやさしく明暗している。

この反応からして、どうやら毒ではなかったようだ。

その場にいたありとあらゆる者が、ホッと安堵のため息を吐いた。だが、それは予兆でしかなかったのだ。

「あ、あれ……身体が、熱い……。あっ、あっ、あっ、ああああっ？！？」

ドレスが弾けた。

ガラテア姫の全身が膨れ上がり、それが衣服を引き裂いて、やがてそこに、そこにその、言葉にするのもはばかられるがあえて言葉にするならばその……。

隆々たる肢体を持った美少女マツチヨ姫が爆誕してしまっていた……。

身長180はあるだろうか。枯れ枝のような腕は揺るぎない丸太のごとき太さに生まれ変わり、6つに割れた豊かな腹筋が究極の境

地へとガラテア姫が至ったことを証明している。

ガラテア姫は筋肉の病気を筋肉で克服した。

「ユリウス殿オオオーツツ?!」

「げ、元気になりすぎではないですか……?」

「妹が……俺の妹が……俺より立派な姿に……。あ、悪夢だ……あのかわいい、ガラテアが、そんな……っ」

王族たちは絶叫した。変わり果てた最愛のガラテア姫の姿に悲鳴を上げた。

だがぬつくと姫が立ち上がると、それがジワジワとした喜びへと変わってゆく。

「お父さん、お母さん、兄さんたちに姉さんたちっ！ 私、立てた！ また立てたよっ！ あっ……」

しかしイレギュラーは姫の豊か過ぎる体躯だけに止まらなかった。新しい身体にまだ慣れないのか姫はよろけてしまい、窓際の壁へと手を突いた。

すると壁が消えた。爆発音を立てながら壁が弾けるように吹き飛び、麗らかな午後の日差しが室内へと差し込んだ。

あ、これ、以前どこかで見た光景だな……。

「ユリウス殿っ、こ、こここっ、これはどういうことだっ!? た、確かに姫は健康になったが、こ、こっというのは聞いておらんぞっ?!」

姫は救われた。だが麗しく儚げだった姫は、ランスタ国内でも最

強無敵の豪傑に変わり果てていたのだった。

その後軽いドタバタが続いたが、グタグタを極めたただけなので割愛しよう。

とにかく姫は死に至る病より救われた。俺と王は謁見の間へと戻り、仕切り直すことになった。

「約束通り経済封鎖を解こう……。ずいぶんと隆々とした体躯になつてしまったが、それでもあのまま死ぬよりはマシだ……。いや……。いや、だがしかし、あれでは嫁の貰い手が……。う、ううむ」  
「すみません……」

「いや、あの時はつい取り乱してしまつたが、それは別にいいのだ……。立ち上がれなくなつた娘がああして元気でいてくれるのだから、私は嬉しい……。嬉しいはず、なのだが、どうにも釈然とせん……」  
「本当にすみません、まさかあんなに効くとは」

「いいのだ……。謝らないでくれ、ユリウス殿。娘が幸せなら私はそれでいい……」

そうは言うのが気持ちの整理が付かないのか、王はさっきからずっと眉をしかめっぱなしだ。

そこに彼方より轟音が轟くと、なんとも言えない苦笑いに変わつていた。



またお姫様が何かやらかしたようだな。

あちらでは似たような体質のシエラ八が付き合っ、メープルとグラフと一緒に力の加減を教えている。

「すみません」

「謝らなくていいと言っているだろう！ いいのだ、これでいいのだ……」

「では仕事の話に戻しますが……。残りの薬はどうしますか？」

「全てこちらで引き取る。あれは徐々に筋肉が衰える病だ、常備しておきたい。だが……虚弱体質の姫であれなのだ、健康な人間が飲んだらどうなるかわからぬ……」

「止めておいた方がいいでしょうね」

当のガラテア姫は今の自分の姿が大好きだそうだ。

本人にとっての理想の体型がアレなら、まあこれでハッピーエンドだろう。剣を覚えたいとも言っていたくらいだ。

「して、そなたらは次にどこへと向かうのかね？」

「ファルクです。といっても俺たちは新婚旅行中ですね、ランスの宿で一泊釣りでも楽しんでからになります」

釣りの仕草を見ると、王も釣りが嫌いではないのか小さく笑った。

「オドにも行くのだな？」

「ええ、ツワイク行きの変換ルートを復活させたいので」

「そうか。では差し出がましいかもしれないが、両国宛の紹介状を書こう。ツワイクに味方する利薄し、とな」

「それは助かります。……ですがガラテア姫のことは、本当に申し訳ありません。まさかあんな」

「謝るなど言っておろう。君はランスタ王家の恩人だ、何かあればいつでも我々を頼ってくれ」

「いえ、そこは持ちつ持たれつで」

そこでまた轟音が轟いた。今度のは金属音も混じっている。

姫の手から剣でもすっぽ抜けたのだろうか。

「……気が変わりました。あの研究棟、もう少し貸してもらえますか？ このままじゃやっぱり申し訳ないので、サービスで壁の補修剤を調合させて下さい」

「お、おお……そんなことまでそなたは出来るのか！ ではそうしてくれと助かる！ ははは、しかしあのままでは、いつか城ごと吹き飛ばされてしまいそうだな、わははは……は、はは、はあ……」

……

「すみません……」

「謝らなくていいと言っておるじ……」

ツワイク王に礼を言って、奇跡の建築材コンクリルを生産してから俺たちは王宮から立ち去った。

次の目的地は都を離れた湖畔の宿、川鶺亭だ。

・フェーズ1ー1ランスタ王国 - 豪傑となった姫君 - (後書き)

次回更新分、ボリューム少なめになります。

楽しい宿暮らしを楽しんだ翌日の朝、早くに目が覚めてしまった俺たちは寢室を抜け出して、湖畔の棧橋から釣り針を下ろした。

ここ一帯は保養地でもあることからあまり人の手が入っておらず、湖の周辺はどこもかしこも美しい針葉樹林の緑にあふれている。

それがエルフ族の好みにドンピシャの絶景だったようで、昨日はどいつもこいつも『綺麗だ、綺麗だ』と同じ言葉を繰り返して浮かれ上がっていた。

あまりにそれが無邪気なので、つい孤児院で下の子たちの世話をしていた頃を思い出したくらいだ。

「あら、どうかしたの？」

「いや……機嫌がよさそうだなと思ってな」

エルフの姫君シエラハ・ゾーナカーナ・テネスは、ぶらぶらとこの棧橋から足をたらしながら、物静かに目の前の雄大な自然を見つめている。

彼女が清々しそうに深呼吸すると、大きな胸が上下に隆起した。

「そう？　だつてこうしているだけで楽しいじゃない。あなたに付いてきて正解だったわ、ふふふっ……」

「……なら、体調の方は大丈夫か？」

「体調……？　ああ、全然平気よ」

「よかった。もし旅先で苦しくなったら、無理をしないで言ってくれ」

妙な感じだった。俺が人の体調を細かく気にするようになるだなんて、妙としか言いようがない。

思えばかつての俺は傲慢だった。

アリのやつと対立せずに上手くやる方法もあつただろうに、俺はそれをしなかった。俺はなんて小さな人間だったのだろう。

「ふふふつ、わかつたわ、そうする。……だけど不思議ね。あなたをさらつたあの時は、まさかこんなことになるなんて思わなかつたもの……」

「それはお互い様だろ。……てか、もう一つ質問いいか？」

「なーに、旦那様？」

「そのお腹、気のせいか、だいぶ膨らんでいないか……？」

シエラハのお腹はまるで大食いをしたかのように丸く膨らんでいく。

それが嬉しい反面、俺は少し子供の成長が怖くなった。

「ふふ……やつと気づいたの？」

「いや、やつとというか、いくらなんでもそれ、成長が早すぎないか……？」

「だから5月5日って言ったでしょ？」

「それは頭ではわかつて……。しかしそれを理解した上で言いたい。どういふ生態をしてるんだ、お前ら……」

「ヒューマンの方がおかしいのよ。10ヶ月なんて長すぎるわ」

「それはそれはまあそうだな、そうだろう。いや、そうなんだ

「がな……」

俺の視線はシエラハの綺麗な顔ではなく、お腹の方に釘付けた。さつき怖いと言ったがやはり撤回だ。小さなその膨らみはどれだけ見ても飽きないほどに綺麗だった。

「たぶんあと3、4ヶ月、ってところじゃないかしら？」

「そ、そんなに早いのか……!? そうか……そうなのか……」

気持ちの整理が付かないので、俺は10ヶ月で産まれるヒューマン式も悪くないと思う……。

シエラハはお腹ばかり見る俺の姿がよっぽど面白いのか、やさしい声で笑っていた。

「大丈夫よ。ユリウスって面倒見がいいから、立派にお父さんをやるわ」

「そうか？ いや、なんでそこまでお見通しなんだ……」

「わかるわよ、どれだけ一緒に暮らしてきたと思うの？」

「まあ短くはないな、もう……」

「きつと上手くやっていけるわ。これまでだってそうだったじゃない」

シエラハやさしく微笑んで、またお腹ばかり見る俺を笑った。

「……触っても、いいか？」

「うん……。そんなのいいに決まってるじゃない」

そつとシエラハのお腹に触れると、いつもと変わらない温かな人

肌を感じた。

「本当に膨らんでいる……」

「もう、膨らませたのはユリウスじゃない……。毎晩毎晩、あんなにいっぱい……」

「いや、俺の記憶だと逆だったような……」

「そんなことないわよっ。仮にそうだとしても、ユリウスがあたしにそうさせたのよっ……！」

気持ちのいい湖畔の風を受けながら、俺はヒューマンおつたまげのエルフの神秘に気を取られて、魚に餌を取られてしまっていた。

それも仕方がない。少しずつ膨らんでゆくシエラハのお腹はあまりに美しかった。

あと3ヶ月ないし4ヶ月。とても心の整理なんて付く気がしない……。

・フェーズ1-1-1ランスタ王国 - 川鶴亭での休暇にて - (後書き)

変な理由ですが、連日の降雨により執筆時間が確保できていません。もしかしたら次の更新、1日分遅くなるかもしれません。



・フェーズ1 - 2ファルク王国 - いや、でも、なぜ? -

次の目的地ファルク王国への経路に山はない。深い森もない。  
あるのはなだらかな平原と、大小の川と橋ばかりで、雨雲を知らないのかな陽気が俺たちの新婚旅行を祝福してくれていた。

「ユリウスユリウス、あーんして……?」

「いや、俺はもういいや……。というかどんだけ食うんだよ、お前ら……」

「え、まだまだ足りないよ……?」

「ごめんなさい、アタシたち無性にお腹すいちゃって……。あ、止めてユリウスッ、あれは蒸かし芋さんよ!」

新婚旅行あらため食い道楽旅行と言った方が正しいのかもしれない。  
い。

財布担当のシェラハがグラフとなぜか手を繋いで飛び出していつて、いらなと言わなかったばかりか4人前を買って戻ってきた。

ちなみに隣にいたはずのメープルはちゃんと馬車席に戻っていた。  
いた。

「ユリウス、それ食べないのか……?」

「ずいぶん前にお腹いっぱいだって言っただろ」

片手で手綱を握りながら、もう片手で芋を手持ちぶさたにしていくと案の定の結果になった。

御者席から馬車席へと蒸かし芋を差し出すと、芋はシェラハの物

騒なレイピアで三等分されて彼女のたちの腹へと収まっていった。

別の生き物が皮をかぶって、俺の嫁になりすましているのではないか。そう心のどこかで疑ってしまっただけに人間離れた食欲だった。

ヒューマンの約半分の期間で子を育むということは、それだけ必要とされる栄養も膨大なのだろう。

「ユリウスツ、あれを見る！ あれはしょっぱい揚げ菓子屋だぞ！製粉したトウモロコシを使ったサクサクとしたやつだ！」

「お前ら食うのはいいけど、なんで芋や菓子ばかりなんだよ……。もう少し動物性の栄養を付けろよ……」

「酸っぱくて甘いブドウも食べたよ？」

「オレンジも美味しかったわよね。アタシ、実はまだあの皮持っていたりするの」

シエラハが荷物袋から乾いたオレンジの皮を取り出して、それを鼻へと押し付けて深呼吸した。

どうして女性というものは、花や果物の匂いに目がないのだろうか。

「……その匂いだけ錬金術で抽出したら売れるかな」

思い付きでそう言葉を返してみると、シエラハの荷物袋からオレンジの皮が次々と現れて、急ぎよ街道の外れで香水を作らされることになっていった。

さて、横道にそれた話はここまでだ。

雨に見舞われることもなく、ましてや盗賊に出会うこともなく、終始騒がしく平穩に2日間の旅路を終えた。

このファルクと呼ばれる王国には、国内を2つに分断する大河が流れており、その河川を使った水運が工業と商業の双方を発展させていた。

広い平原もあつて、ランスタ王国ほどでもないが肥沃な耕作地にも恵まれている。

少し前まで森の国に閉じこもっていたグラフでさえその目で認めるほどの、非常に豊かな国だった。

つまり札束で殴るような手口はこの国に限っては効果薄で、ファルクは最も説得が厄介な国と言ってもよかった。

俺たちは2日目の夜をファルク王都の宿で過ごし、翌日に正式な書簡と共に王城へと上がった。

・

「ガハハッ！ 経済封鎖を解き、反ツワイク連合に加われってか！ バカ正直な野郎どもだぜ！」

王への謁見はすぐに叶った。

これだけ豊かな国の王なのだから、さぞ品がいいのだろうなと勝手に想像していたのだが、玉座に腰掛けていたのは王の格好をしているだけの豪快なおっさんだった。

「はい、」一考いただけませんか？」

「おう！ 今、一考している！ ……やっぱ最大の懸念は、酒か」

「え、酒……お酒ですか……？」

「つたりめえだろ！ そつちに降ったランスタと対立すると、ランスタの酒が飲めなくなるだろ！！ ちったあ考えろやバカ野郎っ！！」

「あ、はい……そうですね？」

個人で飲むくらいならただ密輸すればいいだけの話では……？  
そう突っ込んでやりたかった……。

「陛下、酒だけの問題ではございません。このままでは穀物も肉も繊維も全て入ってこなくなりませすぞ」

「バカにするな、宰相！ そのくらいワシにもわかっておるわっ！」

それから豪快なファルク王は声を小さくして、宰相と呼ばれる初老の男とヒソヒソと話し合った。

彼らの目は俺たちが届けた書簡に向けられている。

そこまではランスタで見た流れだが、これは気のせいかな宰相がファルク王を叱りつけているようにも見えなくもない。

気になって隣のシエラハへと流し目を向ければ、彼女は眉をしかめながらやり取りを盗み聞きしている。俺の視線に気づくと、返ってきたのは苦笑이었다。

「おい、その兄ちゃん！ 本当にお前はこの書簡にある通り、奇跡を起こせるのかよっ！？」

「陛下っ、ダメですっ、せめてもう少し有意義な」

「ガハハッ、何言っつてやがる宰相、十分過ぎるほど有意義だろうがつー!!」

「ただの道楽ではないですかっ!!」

「道楽の何が悪い！ おい兄ちゃん、それでどうなんだよ!？」

「お待ちを陛下っ、もっとと有意義な フゲツツ!!」

おっさんと爺さんの漫才は、いたわりの精神皆無のチョップで終わりになった。

こんなパワフルな王様がツワイクの王だったら、もう少し状況もマシだったのだろうか……。

「……なんでもとは軽々しく申せませんが、3日前に我々は病の姫君を救いました」

「それはランスタ王の手紙で読んだっ、あの子を助けてくれてありがとよ、兄ちゃん!」

「……いえ、あんな姿を見せられたら助けるしかないでしょう。…

…若干、思わぬ結果になりましたが」

「元気ならそれでよしっ!! よし気に入ったっ、ならばこうしよっぜー!!」

王としての資質はおいといて、人情味のあるいい王だな。

喜んで彼の願いも叶えてやりたくなった。

「天下無双!!」

「え……はい……?」

「天上天下!!」

「あの、急になんですか、それ……?」

「超! 超超超超つ、超美味い至上最強の酒を出してみせいつつ!」

「え……? 至上最強の、酒ですか……? 念のため聞きますが、それは美味しいという意味ですよ?」

「うむつつ、いつまでも待つぞ!! 至上最強の酒をワシに飲ませてくれたら、ワシらはツイクを裏切りつ、この胸くそ悪い経済封鎖を解いてやるう!!」

これはどういうことですかと、宰相さんに目を向けても諦めた様子で首を左右に振るだけだ。

「いや、でも、なぜ……。なぜ酒なんですか……?」

「ガハハツ、何言ってるんだ兄ちゃん!! ワシが美味しい酒が飲みたいからに決まってるだろつ!!」

ツイクはシャンバラに浸食されているとはいえ、ここ一帯では最強の国だ。

それを敵に回す条件が美酒だなんて、まるで対価が釣り合っていない……。

「わかりました。それが条件だとおっしゃるならば、こちらは全力を尽くしましょう」

「おおつ、期待しているぞ、兄ちゃん!!」

ファルク王の条件、それはシンプルにして厄介。王をうならせるほどの最強、最高の酒の確保だった。

・フェーズ1-2ファルク王国 - いや、でも、なぜ? -  
(後書き)

宣伝となりますが、書籍化作品「超天才錬金術師」のコミカライズ版が、明日7月5日より、無料マンガサイト双葉社がうがうモンスタ―より連載を開始します。

併せて、完結済みのウェブ版の連載も不定期ですが再開します。  
どうかコミカライズ版をよろしく願います。

漫画は小説以上に制作コストが高く、それもあって売り上げが出ないと非常に苦しい商売です。  
どうか漫画家さんを応援して下さい。

この国は全てにおいて豊かだ。経済力ではシャンバラが上であろうとも、この国には砂漠エルフが羨む恵まれた水と大地がある。

そう、特に水だ。当初の予定では城下のそれなりの宿に泊まる予定だったのだが、あの後にファルク王の計らいでリゾートホテルとやらに俺たちは案内された。

そこで俺たちは見た。贅沢この上ない水の使い方。人工的に造り出された小さなオアシス。野外プールというやつを……。

高級リゾートホテルのプールサイドにて、俺たちは水着と呼ばれるピタリとした肌着をまとして、小さなラウンドテーブルを囲んでいた。

「しかしあの王、ああ見えてとんだ食わせ物だったな……」

グラフは淡い青空のようなその髪にピタリの、水色のビキニとやらをまとっている。

すらりと細い彼女には、それがまるであつらえたようによく似合っていて、膨らんだお腹をことさらに目立たせていた。

「だな……。王をうならせる酒なんて、世の中に存在するかも疑わしいぞ。だがあれは断り文句というより、あの王の素だろうな……」  
「そうね……。探せばあることはあると思うけれど、商会の力で希少なお酒を手配したところで、もう飲んだことがあると言われかねないわね……」



視線を白い方から褐色の姉の方に移した。  
否応なくシエラハの豊かな肢体をついついたっぷりと凝視してしまつと、彼女は白い水着姿を恥ずかしそうによじらせた。

俺が見とれて、シエラハが恥じらいながらそれに気をよくする。  
メープルに彫像にされてしまつくらいに、俺たちの関係性はそこへと要約されているのだろうか。

その点ばかりは素直には認めがたいが、俺からすればシエラハは凝視せずにはいられない最高の女性だった。

「ユリウスは……何か、思いついた？」

「いや、何も」

「フ……。ユリウスは、ずっと、姉さんたちに見とれてただけですよ……」

「う……。いやちゃんと考えてはいたぞっ！ それに それに自分の嫁さんに見とれて、その何が悪い……」

「おお……ド正論。そゆうの、悪い気しない……」

メープルはワンピースと呼ばれる桃色の水着をまとっていた。

そのお腹もぽっこりと膨らんでいて、その、非常にその 犯罪の匂いを香らせていた……。

「ふんっ……。このむつつりスケベ……」

「いや、お前らにそれを言われるのは釈然としないわ」

「あ、それも正論……？？」

「そんなわけないでしょ！ もっ……っ」

その後も俺たちは冷たいドリンクを片手に、答えのない難問に声をうならせた。

それでも答えは出ない。最初から答えのない哲学の問答にすら感じられた。

「ああもつつ、このままでは知恵熱を起こしそうだ！ ちょっとそのプールで頭を冷やしてくる！」

「あ、それ私も付き合っ……。わーい、きゃっほい……」

まるで川遊びに夢中になる子供たちみたいに、メープルとグラフは青く澄んだプールへと飛び込んでいった。

その笑顔は天真爛漫そのもので、『お前ら本当は遊びたかっただけだろ……』とついツツコミたくなるほどに楽しそうな姿だった。

「2人は先に泳ぎたかったのね。……ユリウスも行く？」

首を横に振ってその誘いを断った。シエラハは先に飛び込んだ2人がよっぽど気になるのか、ソワソワとしきりに視線を送っている。

「ごめんなさい、アタシも行ってくるわ！」

やがてついに我慢が出来なくなったようで、胸を揺らしながらイスから飛び跳ねるように立ち上がると、彼女もまた子供みtainな声を上げて白亜のプールに飛び込んで行った。

オアシスでの沐浴が大好きなシエラハが、清らかな水の誘惑に勝てるはずがなかった。

「……ん？」

しかし妙だな。てつきりエルフの水浴びに人々の目が集まると思っていたのに、この高級リゾートに集まった富豪たちはどうしてか俺ばかりを見ていた。

いったい何が悪いのかわからない。場違いな世界に招かれたことは理解しているが、それでも俺なりに上品に振る舞っているつもりだった。

なのになぜ、外の世界では珍しい白い肌のエルフ以上に、俺ばかりが注目を浴びているのだろう……。

視線を視線で返してやると、富豪たちは注目をやっとなめた。不可解だが堂々としていればいいだろう。

俺は水の中で無邪気に舞い踊るエルフの美姫たちをぼんやりと眺めながら、ファルク王が出してきた難問をどうしたものかとゆったりと考え続けた。

「ユリウスツ、早くキミもこいよっ！ キミがこないとボクたちが遊んでいるみたいじゃないか！」

「無理。人前で水着の女の子に囲まれて、キャツキャウフフする勇氣なんて、ユリウスにはない……。」

やたらに俺ばかり注目された意味が、その言葉で今わかったような気がする。

端から見れば俺は、美しいエルフの美姫をはべらせたVIPの中のVIPに見えたのかもしれない。しかもどのエルフもお腹を膨らませているとあっては、さぞ関係を詮索したくてたまらなかつたことだろう。

「俺はもう少しここで考えておくよ。お前らこそはしゃぎ過ぎて滑ったりするなよ」

「ふふふっ、ありがとう、気をつけるわ」

「本当に気を付けろよ？ 転んでからじゃ遅いぞ？」

「なんか、そういうの、お父さんみたい……」

はしゃぎ回る彼女をたちを眺めていたら、なんだか無性に心配になつてきた。万一足を滑らせたりして、お腹をどこかにぶつければしたら大変だ。

少し前の俺はこんなやつではなかったはずなのに、こういうのは男の本能なのだろうか。

俺はその後モエルフの美姫たちに二重の意味で目を奪われながらも、ああでもないこうでもない、長々と考えあぐねて過ごした。

・フェーズ1 - 2ファルク王国 - プールサイドにて  
後書き)

次話も2500字くらいのボリュームになります。

超天才錬金術師コミカライズ版がスタートしました。

スマホアプリ、ガウガウモンスターからぜひ読みにきて下さい。

「せっかくの旅行なんだぞ、少しは休んだらどうだ」  
「……………ああ」

テーブルから目を上げると正面にグラフが立っていた。彼女は肌や髪から水を滴らせながら、少し心配そうにこちらを気づかってくれた。

「おい、聞いてるのか、ユリウス？」  
「ああ」

今日も天気が良い。グラフの白い肌は明るい陽気に照らされて、キラキラとまぶしく輝いて見えた。  
健康な肌は水玉を作ってよく弾き、それが首筋を伝って水着の上へと流れ落ちていった。

「おい……………っ、そんなにボクを見るなよ……………。そんなに見られたら、は、恥ずかしいだろ……………」  
「すまん、不覚にも目を奪われていたみたいだ」

「そ、そういうのはいちいち言わなくていいっ……………！」  
グラフが身体を抱くように胸元を隠すと、膨らんだお腹の方に目が行った。

「お前の子だ……………。せめてこの子が大きくなるまで、ボクらの前から消えるなよ……………？」

「そういう予定はないよ。……それより試したいことがあるから、少し付き合ってくれるか？」

「え、シエラハとメープルは？」

「姉妹であんなに楽しそうにしているのに、邪魔するのは悪いだろ。ここの従業員に伝言だけ残して行こう」

考えるだけではなく、試行錯誤をしないと見えないことも多い。俺たちは上着だけを羽織ってテーブルを離れて、プールサイドの一角にある屋根付きのバーへと入った。

そこでブドウジュースを2人分注文した。

「美味しい！ 冷やしたブドウ果汁がこんなに美味しいなんて知らなかったよ……！ あ、ユリウスは飲まないのか！？」

すぐに彼女のグラスが空になって、青空よりも爽やかにグラフは笑った。

こちらの世界のグライオフエンと、平行世界からやってきたグラフ。この2人はもう別人と言っていいほどだった。

「バーテンさん、ブドウジュースをもう一杯」

「いいの catt!？」

そのまま彼女に差し出すのも惜しい気がして、一口だけ飲んでみると酸味のひかえめな甘いブドウ果樹だった。

「飲みかけにされた……」

「元は俺のだからな、文句があるなら注文が届くのを待て」

「飲むよっ！ キ、キミの口が付いてても、ボクは別に気にしない……」

今度は大切そうに、グラフは少しずつグラスを傾けて甘くて冷たいそれを満喫した。

つくづく白いエルフは甘い物に目がないようだ。幸せそうに微笑むその姿はずっと年下にすら感じられた。実際は遥かに年上らしいが……。

それから少し待つと3杯目のブドウジュースが手元に届いた。

今度はグラフが欲しがる前に、俺はジュースに魔力をかけて錬金術の要領で発光させた。

「迷惑な客だな、キミは……」

「ちようど他の客がいなくてよかったな」

錬金術の基本材料も何もなしだが、このくらいの量ならどうにかなるだろう。

俺はこれまでの経験を応用して、魔法の力でブドウジュースを変化させた。

薄紫色の果汁が黒く濃厚に変わって、今は特有の芳香を放っている。

「ちょ、ちょっと待てっ、なんか平然とんでもないことしてないか、キミッ!？」

「意外とやってみたら出来るものだな。……飲むか？」

「飲むわけないだろ。キミ、このお腹に子供がいるの忘れてないだろな……?」



「ああ、そうだったな……。酒はダメか」

チビリと口に運んでみると、なかなか美味しいワインになっていた。実験は成功だ。錬金術を用いての酒造りは可能だとわかった。

「それ、本当に酒なのか？」

「ワインだな。この時点でかなり美味しいが、これだけではあの王は納得しないだろう」

「もしかして他の飲み物でやったら、それも酒になるのか？」

「そう、そこだな。この要領で別の素材から新しい酒を作り出せば、あの王様をうならせることも可能かもしれない」

よつぽど気になるのか、グラフは指を出来立てのワインに浸して、一舐めだけ味を確認した。

「毒だな……」

「え……っ？」

「なんて美味しいワインだ。衝動任せに飲み干したくなるから、これは毒だっ！」

「脅かすなよ……」

グラフはせめてもう一滴と、また指をグラスに差し込んでいた。

「けどいきなり王様の服が破れて、ムキムキマッチョになったりはしないだろう……？」

「オークの牙と肉を入れたらそうなるかもな。……ん、魔物素材、魔物素材か、その発想はなかったな。いいんじゃないか？」

「キミ、王が飲む物だつてこと忘れてるだろ……」  
「ああ、そういえばあの人、ここの王様だったな。……今でも信じがたいが」

もう一口ワインを口へと運ぶと、酒の力で気が強くなったのかこの手法で行けそうな気がしてきた。

「話は、聞かせてもらった……。要するに、モンスターカクテル、だね……」

「試すだけ試す価値はあるんじゃないかしら。陛下にお出しするかどうかは、作ってみてから決めましょうよ」

頃合いを見て従業員さんが伝言を伝えてくれたのか、そこにメーブルとシエラハが合流した。

どうせ糸口すら見えていなかったのだから、まずはこの手でやるだけやってみよう。

「決まりだな」

「うーん、本当に大丈夫かな……。キミにはガラテア姫を別人に変えた前科があるからな……」

「あれはあの本が悪い。衝動任せに一気に飲みしたガラテア姫もだ」  
「今度は十分に確認してから提供しましょ。……それにいいのよ、あの子凄く喜んでいたもの。強い身体に」

とにかく実験だ。場所と物資を確保してモンスターカクテルを作り出そう。

あの変わり者の王のことだ。変わり種の酒に喜んで飛びついてくれるだろう。

・フェーズ1 - 2ファルク王国 - モンスターカクテルを作る  
う -

コンセプトは悪くない。錬金術の力とモンスター素材を使った酒  
というのは斬新だ。

だがこの実験には、1つの大きな問題があった。

「あのさ、ユリウス……ここまでやって、今さら気づいたんだけど……。どんな効果があるのかわからない、魔法のカクテルを、誰が飲む……?」  
「だよな……」

子供を宿した彼女たちにそんな物を飲ませられるわけがない。消  
去法で俺が被験者になった。

実験場所はシャンバラの商会が有する大倉庫に決まった。

ここならば手当たり次第に素材を選んで好きに試行錯誤できるの  
で、今回の目的に合致している。

商会のエルフたちからすれば、封鎖された交易路をこじ開けてよ  
うとする俺たちは救世主みたいなものだった。

だが1つだけ大きな予定外があった。

釜と水を倉庫内に持ち込んで、候補となる素材を周囲にかき集め  
ると、そこにはいけない人がまぎれ込んでいたのだ。

「ガハハハハッ!!」

あの元気なおっさん、ファルク王だ……。

経済封鎖に加わっているくせに、したたかにもファルク王はシャ

ンバラ所属の商会を訪ねていた……。

「話は聞かせてもらったぞ、モンスターカクテルとなっ!! その酒、もちろんこのワシが飲むぞ、ガハハハハ、愉快愉快!!」

自ら被験者に志願する王など聞いたこともない。嗅ぎ酒感覚で王は釜の前にドスンとあぐらをかいた。

「ムキムキに、なっても、知らないよ……?」

「はっ、望むところよ!!」

「お控え下さい、ファルク王! 御身に何かがあったらそれはボクたちの責任になります!」

正論だ。だが正論は、正論が通じる相手にしか効果がない。

「ならこの話は終わりだ。ワシに酒を飲ませないなら、経済封鎖は解かんぞ!!」

なんたる暴挙。なんたるわがまま。メーブルと王をのぞくその場の全ての者が頭を抱えた。

「もし、死にかけたら、エリクサー、飲ませたらいい……。あ、ユリウスが、口移しで……?」

「おい、待て……。それだけは勘弁してくれ……」

何が悲しくて、幸せな新婚旅行でおっさんをキスした思い出を残さなければならぬのか。

こうなるとなおさらに失敗など出来なくなっていた。

「さーけっ! さーけっ! ブーブーツ、早くしろーっ!!」

王は膝を叩いて酒を催促した。

「王とは思えない民度の低さだ……。あ、いや、なんでもない……！」

「やっぱり私、このおっさん、好きかも……！」

ファルク王もお前みたいに人を煽るのが好きそうだから……。早くしろとただの酔っぱらいが拍子を刻んでうるさいので、とにかく試作を試してみる事になった。

台に乗せた小さな壺の中に、麦と水とホップを入れて、錬金術の魔力をかけてサツとビールを生み出す。簡単な試作作業だ。

すぐに完成して、ビール特有の癖の強い芳香が立ちこめた。

「ギャー……ッッ！！ ワシ飲むっ、これ飲むっ、早くしろどうなつても知らんぞーっっ！！」

「なんてたちの悪い酔っ払いなんだ……！」

「その辺の路地裏の飲んだくれの方がまだ紳士かもな。さあどうぞ、ファルク王」

用意しておいたグラスを取り出すと、ファルク王は俺からそれを野猿のように奪い取って壺に押し込んだ。そして綿にでも浸すかのように、もの一瞬で一気飲みしてのけた。

「うー……まー……いー……っっ！！ 雑味のないこのすつきりとした味わい……これが、これが生まれたてのビールの味わいなのかーっっ！！」

「でしたらこれで取引は成立でしょうか？ ボクたちシャンバラの味方に付いて下さるなら、ユリウスがこれを大量生産」

「バッカもーんっつ!! モンスターカクテルを飲まずして、このワシが経済封鎖を解くわけがなかるうがっ!!」

まあそうだろうな。

イラッときたのか、グラフの顔が引きつったのを俺は見逃さなかった。

「おもろ……。このおっさん、うざいけど、おもろ……」

「はああ……。なら本気で飲む気なんですね……」

できあがったビールに魔力を加えて、俺はそれを琥珀色に澄んだ蒸留酒へと変えた。

不純物は壺の底で石となって沈殿している。

壺ごと蒸留酒を飲まれても困るので、そこに一度ガラス瓶を3本ほど投げ入れて錬金術の力で詰め直した。

「超絶美味いビールの蒸留酒……。ゴ、ゴクリ……。それもワシに飲ませろおおーっつ!!」

「はいはい、どうぞご勝手に」

「美味いっつ、美味過ぎるっつ!!」

ワシをうならせると言っただわりに、この王様味覚ガバガバだな……。

そのへんのちょっと良い酒で満足してくれたんじゃないか、この反響……。

俺は酒臭い王に肩を抱かれて、酒臭いブレスを食らった。

嫌だ。絶対にこの唇には緊急医療を施したくない……。

「どうしてもこの続き作らなきゃダメですか……?」

「あたぼうよ、酒だ酒っ、モンスターカクテル持ってこいっ!!」

「どうなっても知りませんからね……」

このままだと酔っ払いが狂暴化しかねないので、諦めて俺は新たな境地へと踏み出した。

蒸留酒をベースに、ゴブリンの爪を魔力で溶かしたモンスターカクテル、だ。

「辛くて美味いっつ!!」

次は、蒸留酒をベースにオークの爪を魔力で溶かしたカクテル。

「筋肉がピクピクして美味いぞおおっ!!」

「ユリウス……大丈夫なのか、これは……?」

「笑える……」

「笑えねーよ……」

酒が入れば入るほどに、王はご機嫌に、騒がしく、ひたすらに人迷惑になっていった。

「さあ次こい!! 次だ次!!」

「このおっさん、まだ飲む気なんだ……」

「こうなりゃ潰れるまで飲ませるしかないかもな……」

ということだ。次を作った。

蒸留酒をベースに魔石とブルーハーブを魔力で溶かしたカクテル。

「つて、魔石!?!」

「あ、手が滑ってた……」

「またお前かよっ!?!」

「ちよつと待って王様っ、魔石入りはまずいと思うわっ!」

分解できない魔力の塊である魔石は、人が食っていいようなものではなかった。というより、普通はこんなもの食わん……。

シエラハは止めようとしたが、ファルク王の一気飲みの方が早かった。青く毒々しく澄んだ酒が、飲んだくれの胃袋へと流し込まれていった。

「む、む、む、むうううーっ?!!　グッ、グハッ?!!」

ああ、最悪の展開だ。すぐにファルク王が叫び声を上げて後ろにひっくり返った。メーブルのいたずらはシャレにならない事態を招いた。

「か、身体が、熱い……。な、なんだ、これは……。ウッ、ウヌアアアアッ?!!」

「ユリウス、大変、人工呼吸、してあげなきゃ……」

「意識のあるおっさんに迷わず人工呼吸出来る猛者なんてどこにもいねーよっ!?!　ってというか意識あるなら人工呼吸の必要ねーよっ!?!」

そう思いながらも万一死なれたら困るので、俺は王の顔を上から見下ろした。



今すぐエリクサーを飲ませればなんとかなるだろうか。そうだ。今飲ませれば、口移しという最低の事態は避けられ

「だ、だが……だが、これは……っ、うっ、美味あああああ  
ーっ！っ！っ！」

「へっ……なっ　　グハアアア……ッツ?!」

後でこの酒の効能を知ったのだが、どうやらブルーハーブと魔石を使ったカクテルは、画期的な魔力回復薬だった。

しかし誰に想像が出来るだろうか。

「ユリウスッ、ユリウスッ、大丈夫ユリウスッ!」

必要とはいえむさいおっさんの唇に自分のものを重ねる行為を迷いに迷っていると、そのおっさんの口から、纯粹エネルギー魔法マジックブラストが天めがけて発射されると、誰に予測出来る……。

「口から魔法が出たぞっ!?　そんなバカな……なんなんだこの酒はっ!?!」

「ぶっ、ぶぶっ……うける……。おっさんの口から、ビーム出た……ぶっ、ぶぶぶっ……」

「ユリウスッ、しっかりしてっ、ユリウス!」

王の口から発射されたマジックブラストは倉庫の屋根を吹き飛ばし、俺に昼過ぎの青空を見せてくれた。

シエラハの包容はやわらかく、患部を撫でてくれるその指は細くて気持ちよかった……。

「はあああーっ、スッキリしたっっ!!　これはいいぞっ、今日まで飲んだ酒の中で、これが一番美味かった!!　ガハハハッ、で

かしたではないかユリアス！！」

その後、どんなやり取りがあつたのかはわからない。

上位魔法の直撃を顎に食らつた俺は、不意打ちのアップercutを食らつた拳闘士のように、あえなく昏倒していたのだつた。

・フェーズ1 - 2ファルク王国 - モンスターカクテルを作る  
う - (後書き)

宣伝ばかりで恐縮ですが、超天才錬金術師のコミカライズ版がスマホアプリ、がうがうモンスターにて始まっています。  
どうかお氣が向きましたら読みにきて下さい。

翌日、王宮にて

「ガハハハハ、先日は世話になったな、ユリアス！」  
「ユリウスです」

のっけから人の名前を間違える大雑把さがさすがだ。もういちいちツツコミを入れてもこつちが疲れてしまうので、俺は落ち着きある大人の対応をすることに決めていた。

「おめえの作ってくれたあの酒、ワシの飲み仲間でも大好評よつ！  
！ ワシは気に入ったぞ、お前の酒が！！ どうだつ、俺の国で酒蔵を経営してみねえかつつ！？」

「シャンバラを首になったら考えますね」

ちなみに今日は誰も王宮に付いてきてはくれなかった。  
疲れるからな、このファルク王の相手は……。

「そうかそうか！ うつつ……?!」

「へ、陛下つ、吐くときはあちらに！ あちらをお願いします、陛下！」

国王は口からマジックブラストを吐いた！

謁見の間にぽっかりと生まれていた風穴を通して、マジックブラストは空の彼方へと消えていった！

「ふうふう……これだからモンスターカクテルは止められないぜ、

ガハハ！！」

「恨みまずぞ、錬金術師様……」

宰相から暗い目を向けられた。

今後、城の中でこれを吐かれると思うだけで、財政的にもこの住民的にも生きた心地がしないだろう。

「して、ユリアスよっつ！！」

「いやユリウスって言うてるでしょ、王様……」

「これはツワイクに味方するなど無理筋だっ、ワシはお前に付くぞ！！ シャンバラではなく、希代の酒造家ユリアスに味方すると決めたっ！！」

「だから俺はユリウスだ！！ って言うてるでしょっ！？」

「ワハハハハ、こまけえこたあいいのよ！！」

「なんでですか……。 たった発音1つ覚え直すだけのことじゃないですか……」

いや落ち着け俺、これはメープルにからかわれるときの流れに似ている。

この手の連中にいちいちツッコミを入れていたら、会話は何一つ終わらない……。

「すぐにでっけー酒蔵作らせるからよっ、国出てくならしこたま酒作ってからにしてくれ！！ そこでワシは　ワシは酒で泳ぐ！！」  
「いやそれ死にますって！！」

口から魔力のビームが出る酒があれば、戦況を一変させることも不可能ではない。

モンスターカクテルを片手に横陣を組み、敵をまとめて薙ぎ払うことだって夢ではない。ついでに魔力だって回復する。

だがその絵づらはとてつもなくシユールで、人間としてもう全てがダメだ。国最強の兵たちがただの酔っ払いの集団になってしまうのだから……。

口からビームが出る酔っ払いたちが仮想敵になるなんて、他国からすれば夢どころか悪夢だろう……。

「せめて普通の蒸留酒じゃダメですかね……？」

「ダメに決まってるだろがっ!! 気の合う仲間たちと、口から一緒にビームを出せるから楽しいんじゃないかよおっ?!」

「最悪ですね……」

「ええ、最悪ですよ……」

不敬もへつたくれもなく、宰相さんと俺は互いにこの癖しかない王に困惑した。

「でもあの酒だと、大げさかもしれませんがいずれこの都が瓦礫と化するような……」

「む……うむ!! ならばごういっつのはどうだっ!!? ビームは空に向けて吐かなければ厳罰に処す!! ガハハツ、これを施行すれば解決よ!!」

んなアホな法律があつてたまるか……。

ファルク王はあれだけ宰相に抗議されたというのにまたグビツと一杯やって、頭上の風穴に向けて気分爽快なビームを放った。

「法律にまで語り継がれる、末代に渡る恥となりましような……。軍事的価値は認めますが……。有事の際には、酒蔵が空になっていることでしょうか……」

こうして俺たちはファルク王国をシャンバラ包囲網から切り崩し、ツイイクへの交易路到達にリーチをかけた。

ファルク王国の空にはその後、連日ビームが行き交って、町中の天井を吹き飛ばしたという。

決して人に向けて口からビームを放つべからず。

空に向けてビームを放たなかったモンスターカクテル飲酒者は、禁酒30年の刑に処す。

アホみたいな法律のおかげで、被害は最低限で抑えられ、遙か遠い未来ではファルク王国を救う切り札にもなったとか、ならないとか。

「またこいよつ、ユリアス!!」

「ユリウスだって言ってるでしょう……」

余談となるが、ファルク王は俺の名前を一度も覚えてくれなかった……。

ファルク王国滞在、後日談

これはユリウスが知らない話……。

かわいいエルフちゃんたちが3人も集まって、プールサイドでキヤウフフと遊び回っていたら、それにナンパ男が吸い寄せられてこないはずがなかった。

「うっ……ビームは止めて、ビームは……うっ、うっ……」

ユリウスは熟睡。お酒を造らされまくって、飲んでもないのに泥酔状態で帰ってきた。

いたずらしたいけど、今は寝かせてあげた。

「そのエルフちゃんたち、俺たちと遊ばないか？ 俺、その力ジノの息子なんだ」

「うひよおおーっ、お姉さんおっぱい大きいなあっ、へ、へへへ……  
…触ってもいいかなあ……？」

私たちはユリウスに目を向けたけど、いびきかいて寝てる。

こういうのって、男の姿を見せれば帰ってくのに、タイミングが悪……い……。

だから私はずいとお腹を突き出した。

だってほら、姉さんの3番目の信奉者のグライオフェンちゃんが本気で怒ってしまうと、楽しいバカンス気分が台無しだから……。

ある意味で言えば、私たち家族はユリウスではなくて、シエラハ・ゾーナカーナ・テネスという美姫を中心にしたハーレムだったとも言えちゃうかもしれない……。

「私たち、赤ちゃん、いるけど、いい……？」

「へっ……!？」



「姉さんも、グラちゃんも、お腹に赤ちゃん、いるけど、いい……？」  
「なっ、んなっ……」

「マジだっ……マジでこの姉ちゃんたち腹が……っ」

ナンパ男たちは後ずさった。この時点で既に決着は付いている。ただ、言いたいから言った。

「私たち、あの男に、孕まされたの……」  
「げええーっっ?!?!」

ナンパ男たちは、ユリウスにドン引きしてた……。エルフ種3人に同時に手を出して、小柄な私にまで手を出す鬼畜男を、まるでゴミを見るような目で見ながらも、そこに激しい羨望を混じらせていた。

「お、俺ら、急に寒くなってきたから帰るわ……」

「旦那がロリコンって、大変だなあ、奥さんたち……」

「けどいいなあ、何食ったらこんなにエルフちゃんにモテまくるんだろな……」

ユリウスの所業はナンパ男たちすら戦慄させた。私はそれが無性におかしくなって、つい抑えきれずに声を上げてわらってしまった。

ユリウスは知らない。ファルクの高級リゾートホテルで、節操無し  
のロリコン野郎扱いを受けてたなんて、思いもしない……。

私は水着の上から、小さく膨らんだお腹を撫でて、勝利の愉悦を  
浮かべるのだった……。

「のんきに寝ているな……」

「でも本当にあのお酒、大量生産してよかったかしら……」

「面白いから、私はいいと想う……。」  
「は、酔っぱらいの口から、  
ビームが出る国」

笑える。

ファルクのリゾートを満喫したその翌日、俺たちは次なる目的地オド王国へと出立した。

河川に恵まれた美しいファルク領内を離れると、街道は一変して林道に変わる。林道と聞けば一見は爽やかそうで聞こえがいいが、その路面は草木の浸食によりデコボコだらけだ。

やがてその車輪とすこぶる相性の悪い道を抜けると、以降の道は山を迂回して右に左と曲がりくねりながら俺たちをオド王国へと導いた。

「シャンバラの交易商人たちは凄いんだな……。こんな苦勞をしながら、世界中に商品を運んでいるのか……」

「同感だな。転移魔法を使わない世界がこんなに広くて厄介だとは知らなかった」

御者席で俺とグラフがそう感想を漏らすと、馬車室のシエラハとメーブルは誇らしげだった。2人は元スパイだ。シャンバラの交易商人の振りをして世界中を回っていた。

いや、というよりもだ。シャンバラからくる交易商人のその全てが、大小のスパイ活動に関わっている節がある。流通を征する者は情報を征するってことだった。

オドへの旅は3日かかった。オドは国土の半分を山岳と原生林に覆われた鉱業が盛んな国だ。ここで掘り出された鉱石は、豊かな森から生まれた木炭によって精錬されて、インゴットの状態で世界中に運ばれる。

しかしそう聞くと、煤煙や汚水に包まれた汚い土地を連想するだろう。

その認識は間違ってもいないが実際は少し違う。この土地には周辺国ではなかなか珍しい、好きな者からすればスルーなど断じてあり得ない、とある名物が存在していた。

それは、温泉だ。鉱山が発展しているからこそ、誤って掘り当ててしまった副産物、温泉がこの土地では豊富だった。腰を著しく痛めたことがある今だからこそわかる。今回のオドへの逗留には、温泉旅行という特別な楽しみがあった。

さて前置きが長くなったが、王都に到着した俺たちは温泉のないつまらない宿で一泊を過ごすと、王城へと上った。

「あ……………う……………あ……………う……………」

「陛下はごうおっしゃっております。ようこそ遙々いらっしゃいました、皆様を歓迎します、と」

隣国のツワイク人として、この王のことは噂に聞いていた。

王冠をかぶった少年が体格に似つかわしくない玉座に腰掛ける姿に、嫁たちは面食らっていた。

「ありがとうございます、陛下。今からオドの温泉宿が楽しみです」  
オド王は噂以上に臆病な少年だった。彼が隣の女官にコソコソと小声で言葉を伝えては、女官が大きな声でそれを代弁する。それがこの慣習のようだ。

「う……あ、う……」

「……ゆっくりして行って下さい。陛下はそうおっしゃっています」「そうですか。ところで、先ほどの書簡はご覧になりましたか？」  
「ん……」

コクコクと、アッシュブロンドの少年が首を縦に振った。  
これは、なんだろう……。同性だというのに、相手は王のはずなのに、俺は不覚にも目の前の人物をかわいいと感じてしまっていた……。

「ランスタとファルクは我々に味方しました。貴国からすれば、ファルクの水運を使えなくなるのはかなりの痛手ではないでしょうか？」

「う……あ、あう……で、でもお……」

母親にすぎるように、少年王はまた女官に耳打ちをした。  
元々はこんな性格ではなかったと、噂で聞いている。

「陛下はこうおっしゃっています。ツワイクと戦争になるのは困るよお……。と」

「うん……」

王がこれだけ若いには理由がある。

この国は先の戦争でツワイクに大敗し、貴族から王族まで戦える者の大半が討ち死にした。

なぜそんなに詳しいのかと聞かれれば、その戦争で俺は宮廷魔術師ユリウスとして、直接ではないがこいつらと戦ったからだ。

あの戦争の結果、オドの貴族王族階級に残ったのは戦えない老人と女子供に遺児たちだけだった。貴族が率先して戦う尚武の気質が、最悪の裏目に出たってことだ。

「オド王、そこをどうにか頼めませんか？」

「あ、う……っ」

「でもあ……。と、おっしゃっています」

とはいえ、このままではらちが明かない。これはどうしたものだろうか……。

「なんか、かわいいね、ここの王様……」

「メープル、そういう感想はわざわざこの場で言わなくてもいいだろ……」

「だって、かわいい……。ああいうのを見ると、つねったり、引ついたりして、いじめたくなる……。へへへ、ニタアア……」  
「ヒツ、ヒウツツ……?!」

小柄なメープルにすら身をすくませるなんて重傷だ。

王様は女官の腰に抱きついて、完全に幼児退行してしまっていた。

しかし気のせいか、女官が嬉しそうにニヤケているような……。

「でも……う……なの……？ 言って……」

「陛下のお言葉です。ツイイクと戦うのは嫌だけど……本当に、どんな願いも叶うの……？ と」

女官の言葉は基本は凜としているが、王の言葉を代弁するところだけで弱々しい少年風に演じる。

おかげでこっちは気が散ってしょうがない。

「ああ、努力はする。俺たちはベッドから立ち上がれなくなった姫を少し前に助けたばかりだ」

「ムキムキの、ガチムチに、なったけどね……」

「余計なことを言うな……」

「……」

なぜ俺はこのトラブルメーカーを、諸王の謁見に同席させているのだろうか……。ときどきそう疑問に思う。

「陛下はその話に興味がおありのようです。『それ本当っ！？ 僕もムキムキになりたい！』と、おっしゃっております。筋肉シヨタ王……私も悪くないかと思えます」

「おお、気が合っね、私もわかる……。ぶっちゃけ、アリだと思っ  
……」

しかしそのトラブルメーカーの一見はどうでもいい発言が、交渉に活路を拓いていた。

気弱な筋肉シヨタ王か。それは属性を盛りすぎではないだろうか……。

「でも、ツワイクと戦争は嫌だ。よくて中立。……だそうです」  
「戦争にはさせません。俺も出身はツワイクですから、戦争だけは避けたい。俺たちが諸王を説得して回っているのは、戦争を回避するためです」

「ツツ……せ、せん、そ……。う、うう……っつ」

「申し訳ありません、宮廷魔術師様。私たちオド王国の者は、敗戦のショックからまだ立ち直れていないのです」

その言いぶりからして、向こうは俺の過去を知っていたようだ。不幸な戦いだったと返そうかと思い、やはり止めた。それが地雷になるかもわからない。

「オドオドしてるから、オド王……?」

「余計なこと言うなっつてんだろ、お前は」

「あてつ……へへへ」

隣のメープルのおでこを小突くと、そこに花咲いたのはいつもの笑顔だ。

少年王は俺たちのやり取りに興味があるのか、目を丸くして見ていた。

「ではオド王、貴方を屈強な男にするマスキュラーポーションを作ってから、また交渉に参ります。それでよろしいでしょうか?」

「う、うん……。お、おねが……。ま……。す……」

消え入りそうな声で、少年王が俺に期待の目を向けた。

確認に女官の方をうかがうと、彼女の方も静かにうなづき返す。



「王宮の離れを用意させましょう。こんなに積極的な陛下は4年ぶりです……がんばりましたね、陛下」

「う、うん……っ」

王をダメにする女官を見てしまったような気がしなくもないが、そっちは俺たちの役回りではない。

残るはこの1国だけだ。ここさえ陥落させれば、ツワイクへの密貿易ルートが開く。そしてそこまで踏み込めば、ツワイクを札束でどつき終わりで。

オド国からすれば宿敵に復讐するチャンスだというのに、少年王は哀れになるほどに気弱だった。

・フェーズ1 - 3オド王国 - 少年王は小心者 - (後書き)

更新遅くなりました。

また近々、ローファンタジージャンルで新作を始めます。  
どうか応援して下さい。

要人のための宿泊地なのか、庭園のキャビンは城内だということに  
縁豊かで気持ちがよくかった。

俺たちはそこでマスクュラーポーション（1/4）を完成させて、  
女官の1人に謁見の取り次ぎを求めた。

健康体に元の濃度の薬を与えてしまうと、想像するだけで恐ろし  
いことになりそうなので、加減に加減をした25%濃度だ。

王がこれを気に入ってくれたら、俺たちは腰にも肩にもやさしい  
温泉旅行を楽しめる。

「楽しみだな。実はボク、温泉は初めてなんだ……」

「きつと気に入ると思うわ。お肌もつるつるになって、それにお湯  
に身体が溶けちゃうくらい気持ちいいの」

「理想は、露天風呂が、いい……。沐浴マニアとしては……フツ」

メープルはなぜかこちらを見て勝ち誇った。

よくわからんが、何か非常に失礼な理由で勝ち誇られたような、  
そんな気がしてならない……。

「もし、ユリウス様……」

ところがそこにノックと女性の声が響いていた。

「あ、急にお訪ねして申し訳ありません……。実は、先ほどのこと  
なのですが……」

キャビンの玄関を開くと、そこに立っていたのはあの少年王の女官だった。

彼女はどこか申し訳なさそうに、ひかえめにこちらをうかがっている。謁見の間でのあの淡々とした姿は、もしかすると威厳のない王の代わりに演じられたものなのかもしれない。

「キミは先ほどの……。何かあったのか？ 薬ならもう完成したぞ」「あの……。そのことなのですが、追加で依頼をすることは、可能でしょうか……？」

グラフはまるでシャンバラの歓楽街のホストのように、玄関前の女官の手を引いてみんなの前に連れて行った。

美しい女性を見るとグラフはいつだってこうだ。美人に目がなかった。

「ええもちろん。陛下は何をご所望でしょうか？」

「剣を」

「最強の剣ですか？」

「いえ、最強でなくても構いません。ですが、最強の剣に見える剣を1本お願いします」

俺たちは一斉に首を傾げた。

最強に見えるだけの剣に、いったいなんの意味があるのだろうか。

「陛下には失礼ですが、ずいぶんと変なオーダーですね……？」

「すみません、違うんです……。これは陛下からの頼みではなく、私個人のお願いなんです……」

「別に構いませんよ、レディ。ボクたちは美しい女性からの頼みを断れない。そうだろう、ユリウス？」

「いや、なぜわざわざ素直に同意しにくい言い回しにしてからこっちに振る……」

俺は別に美人が好きというわけではないぞ。たまたま好きになつた相手が、世界で一番綺麗な美人だっただけだ。

シエラハに流し目を向けると、彼女はよくわかつていないのか明るく笑い返してくれた。

「説明してくれるかしら？」

「単純な話なのです……。王に必要なのは筋肉ではなく、勇気です……」

「うん。そんなの、誰から見ても、そう思う……。てか、あそこまでヘタレだと、チクチク、いじめたく　ムグウ?!」

ちっちゃいサディストの口をふさぐと、気持ちが高ぶっているのか手をつねり返してきた。

そのこじらせた性癖を他の方々語るのは止める……。

「あの方はああ見えて、剣の天才なのです……。ですが、父、母、兄弟の全てを戦争で失い、戦いに怯える王になってしまいました……」

「つまりどういうことです？　俺たちは何をすれば」

「わかりませんか……!?　彼に真実必要なのは筋肉ではありません

ん……!」  
「じゃあ何　」

「陛下に必要なのは、最強にカッコイイ剣なのですっ!!　それこ

そが、臆病に変わってしまった陛下の心を救うつ、たった1つの方法なのですっ！！」

なんか、凄いな、この女官さん……。この情熱とやさしさ、そして何よりもこのぶっ飛んだ発想力が凄いな……。

最強にカツコイイ剣と筋肉を少年王に与えて立ち直らせよ。普通の発想力ではこうはならない。

「この人、意外と、おもしろ……」

「メーブル、失礼よ。……貴女の気持ちはよくわかったわ、大切な人を救いたいよね」

「うん、なかなか面白そうじゃないか。ユリウス、キミもかつての戦争に加担していたんだろ？ オド王を救えば、それなりにキミもスッキリするんじゃないか？」

「やりましょうよっ、ユリウス！」

「超面白そうだしね」

だったら決まりだ。俺たちはこの追加オーダーを受けることにした。

「そうになると、オド王の好みを分析したいところですね。何か資料はありますか？」

「ありがとうございます！ それならば、陛下の大好きな冒険小説をこちらにお持ちします！ 毎晩そのまま寝てしまっただけで熱心に読んでいますので、あの本の通りに作れば間違いないかと！」

そうか。その発言を聞いて俺たちは思った。

重用されているとはいえたかが女官が、なぜここまでオド王の夜の過ごし方まで詳しく知っているのかと。

だがそこは俺たちも聞かないでおいた。  
あのメープルでさえ、そこには突っ込まずに口をつぐんだほどだった。

しばらく待つと、他の女官たちがキャビンに王の蔵書を運んできた。

王は冒険や戦争物が好きなようだ。俺たちは最強にカッコイイ剣のコンセプトを求めて、王の愛読書をパラパラと読みあさった。

「あ、これ、ビンゴかも……」

「何か見つけたの？ あら……ふふふっ」

「うん、ああ見えて男の子だな」

少年の趣味を笑うなんて酷いだろ。そう喉まで言葉が出かかったところで、俺もつい笑ってしまった。

王の好みの剣が見つかった。というよりも、ご丁寧に赤ペンが引いてあったのでこれで間違いない。

「この本、バレないように元通りに場所に戻してもらわないとな……」

「ん。誰かに見られたら、割腹モノの黒歴史だね……」

「そうね……。でもこんなに沢山の本、元の場所になんて戻せるのかしら……」

本に赤ペンを引く行為の善し悪しはおいておいて、その一冊の冒

険小説を見る限り王は 抜くと闇のオーラが立ちこめる妖刀を  
希望だった。

赤ペンを追ってメーブルがページを進めてゆくと、さらに情報が  
集まってゆく。

王は振るたびに刀身が必要もないのに妖しく輝き、両手でしかと  
ても扱えない太刀を希望だ。

ゆっくりと動かすと残像が生まれ、相手の剣とぶつかるブォン…  
…となるころにも赤ペンと『カツコイイ!!』との注釈が加えて  
あつた。

「私、あの子、好きかも……。見た目も中身もお子さまで、かわい  
い……」

「いや、ボクはこういうの嫌いじゃないな。うん、小さい頃はこう  
いうのに憧れたものだよ」

「あ、あたしはちょっと……。こんなの持つだけで、恥ずかしいわ  
……」

そりゃ、いちいち闇のオーラと残像と音が出る剣を使ったがる戦  
士の方が少ないだろう。

これで本当に陛下が自信を取り戻すのかは正直未知数だ。だが、  
彼の好みであることは間違いない。間違いなくあの少年王は喜ぶ。

「よし、とにかくこれを作ってみよう」

「え、マジ……?」

「ボクは賛成だ、ぜひ作ろう!」

「なら決まりね。早速これに似たレシピを探しましょ。覚え違いで  
なければ、どこかで見たような気がするわ」

「あ、私も見たかも」



「あ、あるのか……？ 錬金術つて、いつたい……」

俺も見た。シャンバラから運んできたこの膨大な本の中に、あつたよな気がする……。

こうして王の好みの分析を終えた俺たちは、続けて先人の残したレシピ本を読み込んでいった。

・

「もしかしてコレのことか？」

「あ、それ」

4人体制でページをめくってゆくと、グラフが迷い迷いに開かれた本をテーブルの中央に置いた。

レシピの冒頭にはこう記されている。【振ると光る魔法のステッキ】と。

「そう、これよ。あたしが見たのもこれだったわ」

いざ作ってみたはいいものの、不必要に目立つので実用性は皆無だったと、著者は最後に締めている。

だったらなんでこの著者は、こんなレシピを後世に残そうと思っただんたろうな……。尺稼ぎか？

「色々とツツコミどころはあるが、これが一番近いんじゃないか？」

「別に、杖じゃなくても、いいみたいだね……」

レシピには材料に【杖】とある。

ならば別に【剣】を用意して、このレシピを応用した処置を施せば近い物が作れそうだ。

「だったら剣を用意しないといけないわね」

「そこはミスリル製でいいんじゃないか？ 今やシャンバラの名産品だしな」

「ちょ、ちょっと待て、まさか剣から作るつもりなのかっ！？ 錬金術で鍛冶をするなんて、聞いたことないぞ！？」

「そりゃそうだが……。ミスリル製の太刀なんて、どこの倉庫を探してもないだろ……」

「あ……。言われてみればそうだな……。ならユリウスが作った方が早いな……」

ないなら作ればいい。合理的な帰結だ。

そうと決まったので嫁たちには調合の準備を頼んで、俺はいつも通りにシャンバラの商会オド王国支部へと転移した。

戻ってくると、いきなり一方的に消えるなど怒られた件は割愛しよう。

転移魔法をあまりに連発すると、後でそれがツケとなって腰に返ってくることは既に経験済みだった。

材料は【ミスリルインゴット】と、それを光らせるためのキーマイテム【星の砂】に、成分を安定させるための触媒である【妖精の鱗粉】だ。

さらにそこへとアレンジとして【闇の石】を加える。これは黒の絵の具に使われるもので、産出地である闇の迷宮そのものが少ないこともあってそれなりに高価だ。

さて材料も揃ったので調合に入ろう。俺は釜へとかき混ぜ棒を下ろして、基礎素材で満ちた水溶液に魔力をかけていった。

「ねね、ユリウス……大事な話がある……」

「大事な話？」

「これ見て……こんなことも、あろうかと、用意した……」

また何かとんでもないことをやらかすつもりではないかと、俺はメーブルに警戒の目を向けた。ところが現れたのは1枚のメモ書きだ。そこに絵が描かれていた。

「うわ……」

「うわ、とは失礼な。グラちゃんと、一緒に、一生懸命、考えたやつなのに……」

「まさかの合作かよ……」

それは太刀の絵だった。黒い刀身には赤と紫の模様が浮き上がり、仕様通りに黒いオーラを放っている。しかしその細くアーチがかかったツバは著しく武器としての信頼性に欠け、握りの部分には銀の装飾が施されている。

さらに柄の部分にはアメジストのような宝石がくっついていていた。

「あ、あたしは関わってないわよっ、念のため！」  
「どうだっ、カツコイイだろうっ！」

かつてリンハイムでは白百合のグライオフエンと呼ばれ、人々の尊敬と憧れを集めていた女性は、まるで少年のようにメーブルとの合作を自慢した。

「うわ……」  
「だから、うわ……とはなんだよっ、キミにだけは言われたくないぞ！」  
「カツコイイのに……」

これを腰に吊して人前に入る勇氣はないな……。  
だがまあ、この上なく男の子が好きそうなデザインではある。  
…対象年齢がかなり低めなような、そんな気もしなくもないが。

「わかった、この路線で作ってみよう。けどアメジストなんて持ってないぞ……」  
「こんなこともあるのかと、ほい……」

「なんでそんなもん持つてるんだよ……」  
「アメジストじゃないよ。ただの、鋭利な、黒曜石……。ユリウスのベッドに、いつか、仕込もうかなって……」

「お前は俺を殺す気が……」

黒曜石は宝石と呼ぶよりもガラスに近い。硬質だが脆く、割れると肉を裂くほどに鋭く尖る。

「冗談に聞こえないところが怖いな……」

「ダメよ、メーブル。いくらエリクサーがあっても、ベッドが汚れたら宿の人に迷惑でしょ？」

「ごめん、姉さん……。使うのは、帰ってからにする……」

俺の嫁は性癖がハード過ぎる……。

危険物が1つ釜の中に消えてくれたことを喜びつつ、俺は太刀1本分のミスリルを投入して、なぜかフルカラーで描かれたラフを眺めながら初めての武器制作に入った。

完成した。深紫の蒸気が立ち上り、それが晴れると釜に引っかかるように長く細い太刀が姿を現していた。

おおむねデザイン通りだった。

「見ろっ、ボクたちのデザイン通りだ！ カッコイイ……！」

「いいものですね……。グラちゃんが持つと、よく似合う」

「そ、そうか？ フフフツ、ならば少し試し斬りという……！ ユリウス、そのパンをこっちに投げろ……！」

「見た目はともかく、切れ味は気になるわね。だってユリウスが作った物だもの……」

シエラハもそう言うので、俺は室内の奥へと下がって太刀を構えたグラフへと、硬い長パンを軽く投げた。

ところがそれがとんでもない切れ味だった。パンは刃を受けたというのに軌道すら変えずに、ただ真っ二つになって床へと落ちていた。

「え……な、なんだこの剣っ!？」

「凄いわ……。見た目は痛々しいのに、これなら鉄でも斬れちゃうんじゃないかしら……」

「なあ、これ、危険過ぎないか……?」

「そ、そういうこと言うなよっ!？ 持ってるのが、怖くなってくるだろ……っ」

既にこの時点で立派な魔剣だった。ミスリルは優れた金属である反面、それゆえに加工が難しいのが難点だ。そこが錬金術を用いた成形と上手く噛み合ったのだろうか。

「ユリウスが、悪い……」

「俺のせいだよっ!？」

「でも気に入った……。これ、戦場で振ったら、仲間ごと真っ二つ、だね……」

「持つてるボクの前でこれ以上怖いこと言わないでくれ……っ」

速やかに持ち主から剣を奪わなければならない。そう人に思わせずにはいられない凶悪な一振りだ。

「もうこのまま納品すればいいか……。だって、近くに置いておくだけで怖いし……」

「ダメ……闇のオーラは、大事……」

「そうかあ？」

「そうね……。危険な剣であることをアピールするためにも、オーラは必要かもしれないわね……」

本末転倒な気がしなくてもないが、まあ一理ある。

俺たちは危険な刃を注視したまま、次の錬金釜に基礎素材を投入し、続いてそこへと順番にキー素材を混ぜ込んでいった。

ガラスのようにキラキラと輝く【星の砂】と、触媒である【妖精の鱗粉】を加えると、釜の中がまばゆい七色に輝き出す。

そこにアレンジレシピの【闇の石】を混ぜ込んで、どうやら溶けにくいそれに魔力をかけて強引に混ぜ合わせると、輝きはドス黒い闇のオーラに変わった。

「ヤバ、禍々しい……」

「あたしたち、もしかして後世の人たちに迷惑がかかるようなことしてないわよね……？」

「さあな。さてそろそろその魔剣を釜に　　うわっ、ちょっと待て  
グラフツ、今すぐこいとは言っていないだろっ?!」

世界で1番危険な魔剣を持ったエルフが、ゆらりとこちらに迫ってきたので俺たちは緊急避難した。

ちよっと手が滑るだけで相手を両断できる刀だ。あのメーブルでさえ尻尾巻いて逃げ出していた。

「ふう……溶けると一安心だな。ボクはもう作らせたことを後悔しているよ……」

最凶の太刀が釜へと消えた。

魔法を使える俺が言うのも妙な話だが、長い太刀が底なしの釜に消えてゆくのはまるで魔法のようだった。

「このまま、捨てる……?」

「それも考えたんだが、シャンバラの未来には代えられないだろ……」

……

「そうね……でももし出来たら、次は鞘もお願いできるかしら……」

「そうするべきだな。暖炉の薪でいいか、入れてくれ」

「おっけー……。刃が鞘になつて、薪が剣になつたりして……」

「これ以上、怖いことを言わないでくれ……」

そこから先はイメージとの戦いだった。

男の子が喜びそうな物を作るには、制作者もまた幼心に返る必要がある。

俺は集中に集中を重ねて、かつてないほどにじつくりと混ぜ合わせる。ついになんちゃって妖刀ならぬ、本物の妖刀を完成させたのだった。

・

「ヤバい……。ヤバいのはわかってるけど、ぶっちゃけ、これっ、カツコイイ……!」



「ああつ、不思議と恐怖心が薄まったぞ！ カッコイイツ、カッコイイぞ、これこそが最強にカッコイイ太刀だ！」

動かすと残像、常に黒いオーラが立ちこめていて、振るとブォンと音が響き妖しく輝く。

完璧だ。元のままでも十分過ぎるほどに魔剣なのに、極めて痛々しい最強の剣が生まれた。今回は鞘が付いているところも安心感があっている。

あまりによく斬れ過ぎるところが難点だが、これならばあの女官もオド王も喜んでくれるだろう。

「あ……しまった！ 手が滑ってつい……」

だがグラフが操る闇の妖刀がバターののようにレンガ製の壁を斬るのを目撃すると、俺たちは言葉を失い、長い思考停止に陥った。

これは鉄の門すらぶった斬れる立派な攻城兵器なのではないか？  
全てを斬れるということは、全てを斬ってしまうということだ。

「うわ、ヤバ……過去最凶だ……」

「やっぱりあたしたち、作っちゃいけない物を作ってしまったんじゃないかしら……」

だがこんな魔剣、単騎で戦場に突っ込むような一騎当千の狂戦士でもない限り、誰にも使いこなせないだろう……。  
むしろどちらかというと、戦場よりもサーカス向きと言ってもいい。

俺たちはこの魔剣の実用性について、それ以上考えることを止め

た  
⋮  
。

あの女官に闇の太刀を見せると、これこそ陛下が求めていたものだと言われちゃった。切れ味がヤバ過ぎると説明しても、我が国は尚武の気質なので刃は斬れれば斬れるほどにいいと、加えて喜ばれてしまった……。

さあ、王の待つ謁見の間に向かおう。そう意気込んだものの、俺たちが案内されたのは謁見の間ではなくこのキャビンのある庭園の反対側だった。

少年王はそこにいた。木に吊されたブランコにまたがって、何か思い悩んでいるのかずつとうつむいていた。

「陛下！ ユリウス様が約束の品を作って下さいましたよ！」

「え……本当っ!?!」

少年はブランコから飛び上がって、まるで母親に甘えるかのように女官に飛びついた。続けてこちらにオドオドと頼りない流し目を向けて、目が合うと女官の胸で顔を隠してしまった。

「いじめたい……」

「怖がらせるなって言ってるだろ……」

意地の悪い俺の嫁は、わざわざ木の枝を拾い上げてそれをパキリとへし折る。そんなちよつとした物音に、オド王は身をすくませて驚いていた。

オドオドしているからオド王。彼にはとてもそうとは言えないが、言い得て妙だった……。

「シエラハ、頼めるか？」

「任せて。……陛下、こちらがお約束のマスキュラーポーションです。さ、どうぞ」

「あ、ありがと……」

シエラハなら怖がらせることはないだろうと、俺は役割を譲った。少年はエルフの褐色美人に少し惚けたように見とれながら、遠慮がちにポーションを受け取る。

「メープルの気持ち少しわかるな……」

「うん。ああいう子は、いじめるのが、一番かわいい……」  
「だから、怖がらせるなって言ってるだろ……」

なぜかそれに女官さんまでうなづいていたのを、俺は見なかったことにした……。

「これからあれば、兄さんたちみたいに、たくましくなれるんですか……？」

「ああ。濃度はハーフ&ハーフなので、効果は常識的な範囲になっているはずだ。それを飲めば、陛下はムキムキだ」

「本当……っ!？」

「飲めばわかる」

そう軽く返すと、少年は感激の笑顔を花咲かせてマスキュラーポーションを豪快一気飲みしていた。

「わっ、わああーっ!?! 腕がつ、胸が、あっ、見てっ、僕のお腹に腹筋がつ!?!」

「い、いけません陛下っ、人前でそんな……っ！」

女官さんの目がキラキラと輝きながら、少年がまくったお腹をガ  
ン見していた。凄まじい効果だ。5%濃度ほどに抑えて自分も飲み  
たくなるほどの、見事な筋肉シヨタがそこに生まれていた。

「ぐへへ……ええですな」

「ええっ、ええですねっ！ あっ、いえっ、なんでもありません！」

女官がうつかりメーブルに同意して、体裁を取り繕っていたがも  
う今さらだろう。だが少年王の方は、次第に明るさを失っていった。

「どうしたのかしら？ 何か他に不安でもあるの……？」

「だって……。よく考えたら、あれだけたくましかった兄さんたち  
も結局、戦死したと思うと、筋肉なんて付けても……」

「ヘタレ」

「あうっ……？！ だ、だって、だって……やっぱり、ツイイクと  
戦うなんて無理だよ……」

「大丈夫です。大丈夫ですよ、陛下」

シエラハと女官さんに挟まれながら、少年王はビクビクと震えて  
いた。

「どうやら彼女の分析は正しかったようだね。陛下、こちらをお持  
ち下さい」

「え……。わ、わあっ、カツコイイ剣……」

グラフが芝生にひざまずき、闇の太刀を少年王に差し出した。ど  
ういう仕組みなのか作った俺にもわからないが、鞘に入っている限

りはただの痛々しい装飾の剣だ。

「抜いてみて、きつと、驚く……」

「だけど刃に触っちゃダメよっ、それ凄く斬れるから慎重にね！」

「これは彼女の いや、俺たちからのサービスです。きつと気に入るはずですよ」

「これっ、ボクにくれるのっ!? ボクッ、ずっと前からっ、こっこのうのが欲しかったんですっ!!」

お子様だな……。黒焦げの聖剣を借りパクしている俺が言うのも妙だが、アレを腰に吊す勇氣がある者はごくごく限られるだろう……。

少年王はメーブルの言葉を思い出し、女官とシエラハの前から離れると、鞘から長い刀身を引き抜いた。

性格はこの通りのヘタレだが、剣の天才というのは誇張でもないらしい。太刀の長い刀身を難なく引き抜くと、少年王は闇のオーラを放つ刀身に魅了された。

「っ、これは……ッッ！」

両手で闇の太刀を天に掲げていた。だが輝くその瞳に徐々に闇がさしてゆく。

「ああ……疼く……疼くよ、兄さん……」

「おお、なんか、剣と喋ってる……。これは、芸術点高い……」

「痛い間違いだろ……。って何言わせるんだよ……っ」

こちらの声などオド王には届いていなようだ。憂いを帯びた目に自嘲気味の微笑みを浮かべて、剣（兄さん）と楽しそうにお喋りを

していた。

「わかったよ……ボク、兄さんたちの仇を討つよ……。見ててね、兄さん……！」

その刹那！ 少年王が素早く後ろに飛び退いた。そして体格に対してあまりに長いその闇の太刀を、まるで演劇の剣舞のように縦横無尽に振り回して見せた。

オド王は開眼した。その眼差しは力強く、口元には不敵な笑みがあつた。

「ククク……でかしたぞ、錬金術師。この闇の魔剣グランハザードを生み出したのは、うぬで間違いないな？」

「グラン……へ、なんだって？」

「魔剣グランハザードだっ！！ ククク、名には興味などないということか。さすがはグランハザードの刀工よ……！」

「もしかしてそれ、今付けた名前なんですか？」

「うむ、よくぞ見抜いた！ 素晴らしい、素晴らしいぞ、この魔剣は……！」

少年王はまた太刀を振り回して、魔剣に魅入られた狂戦士のよう  
に愉悦を上げた。

念のためグラフの方を確認したが、あれは闇のオーラが出るだけのただの名剣だと首を横に振っていた。

「製造は俺で、デザインはこいつらです。断じて、俺の趣味ではありません」

「カッコイイのに……！」

「ユリウスはわかってないな。おっと……」

オド王が肩に太刀をかけて、こちらに戻ってきたので女官をのぞく全ての者が後ずさった。剣の天才なのはわかったが、それでも切れ味が切れ味なので所有者が近付くだけで怖い。

「我は何を今まで悩んでいたのだろうな。父を、母を、兄たちを殺したツワイクに、我はなぜ服従する気になったのか……。流された血は、血をもつてあがなわれるべきだというのに!!」

「これが、増長……」

「も、もうちよっと平和的な方が国民は喜ぶんじゃないかしら……」

シエラハの意見に王は顔色を変えた。これは彼女や女官の話ならば聞くようだな……。

「陛下、彼らの提案するツワイク包囲網ですが、どういたしまししょうか？」

「もちろん参加だ!! 我を目覚めさせてくれたユリウスらは我が盟友! よろしく頼むぞ、ユリウス兄者!!」

「話はわかったから早くそのグランなんたらを鞘に戻してくれっ!!」

こうして意味もなく魔剣（中二病仕様）を振り回す少年王が、ツワイク包囲網に加わってくれたのだった。

「あ……。ご、ごごごっつ、ごめんなさいいーっつ!! ボクッ、ボクはなんて失礼なことを……。っ、すみません、すみません、失礼しましたユリウスさんっ!!」

「あの剣を腰に戻すと元の性格に戻るのか……。どこからどこまでも極端な子だな……」



グラフの指摘に少年王は顔を真っ赤にして恥じらった。

終始あの性格のままよりも、まあこのくらいの方が平和的でもいいだろう。こっちは多少混乱するが……。

「あの、ユリウスさん……?」

「あ、ああ……どうした?」

「あの……貴方のことを、お、お兄ちゃんって……呼んでも、いいですか……?」

……なぜ? まさかさっきの兄者発言と連動しているのか……?  
だが、兄者とお兄ちゃんではニュアンスが全く違うぞ……?

「アリだね……」

「アリですね!」

メープルはともかく、なぜ女官さんまで同意するのだ……。  
シエラハはやさしそうに微笑んで、グラフは俺の肩に手を置いてうなづいていた。

「つまり、あたしたちの弟ねっ、ふふふっ!」

「何、よくあることだ。年下というものは、同性の年上に憧れるものだ。まあ……それ以外を迫られることも多々あるが」

グラフはいやに詳しく……。

「まあその、オド王の好きにしたら、いいんじゃないか……?」

「わああっ、ありがとうお兄ちゃんっ! ボクッ、ユリウスお兄ちゃんを尊敬しています! ユリウスお兄ちゃんの道を阻む敵は、ボ

クが叩き斬りますねっ!」

「おお、まさかの、ヤンデレルート？　ぷっ、笑える……」

笑えねーよ……!!

この日、全てを両断する魔剣を吊した厄介な少年が俺の弟分になっ  
たらしかった……。

・フェーズ1 - 3オド王国 - お兄ちゃん - (後書き)

7月22日より新作『おっさんスタリオン 異世界からきたおっさん騎士は北海道で馬を育ててダービーを制覇するようです』の連載を始めます。

趣味で書いた作品ですが、スケベオヤジを主人公にした娯楽性がバツチリ整っています。もしよかったら読みにきて下さい。

温泉宿は翌日にお預けになった。オド王 カミュ・オドが城から俺を出してくれなかったからだ……。

嫁たちは非情にも早々に俺を見限って、王都観光を頼むと城から去っていった。……いやこのパターンこの前も経験したぞ!?

家族を失った少年には、自分を立ち直らせた奇跡の魔剣を生み出した俺が特別に見えたのだろう。

あの戦争に加わった1人として、彼に対する罪悪感もあったので、その日だけはなんにでも付き合うことにした。

「お姉さんたちにどうかよろしくお伝え下さい……。それともし近辺を通りかかることがあれば、いつでも王城を訪ねて下さると嬉しいです、お兄ちゃん!」

「わかった。こっち方面はお前に任せた」

ヘタレだった少年は少しだけ頼もしくなつて、今回の作戦を後押ししてくれると約束してくれた。このオドは、対ツワイクの密貿易拠点だ。彼の協力は必要不可欠だった。

こうして俺たちは中断していた新婚旅行を再開した。

オドの山がちな街道を進み、寝不足からのうたた寝から目覚めた頃には、もう現地に着いていた。

「へ、貸し切り……?」

「はい、お話はつかがっています。どうぞ何日でもごゆるりと……」

昨日、一番良い露天風呂はどこかとカミュに聞いた。

その山奥の宿に遙々やってきてみれば、宿が貸し切りになっていた。

「いい弟分を持ったな」

「ふふふつ、貸し切りなんて夢みたい！ 泳いでも誰にも怒られな  
いってことよねっ!」

「あの子、思ったより、おもしろい……」

もちろん部屋も一番いい部屋だった。4人家族にしてはちょっと  
広すぎる気もしたが、ご厚意に素直に甘えることにした。

部屋には紅茶と茶菓子があった。

「俺はいいや。風呂行ってくる」

「えっそれってっ、つまりユリウスの分も食べていいってことよね  
っ!?!」

「そう言ってくれるとボクはキミを信じていたよ!」  
「いってら」

半笑いを浮かべて、ちょっと立派過ぎる部屋を出て露天風呂を浴  
びた。

天然の湯に身を沈めて、肩まで深々と浸かれば疲れが溶けだして  
ゆくかのようだった。

「はぁ……っ、きてよかったな……」

最初は遠征を新婚旅行とそれらしくこじつけただけだったが、あの判断は正しかった。

旅先のあちこちで浮かぶみんなの笑顔を眺めるだけで、なんだか幸せな気分だ。

昨日は 昨日は色々とあつて寝不足だ。

湯船の中でこれまでの旅を思い返しながら目を閉じると、意識が軽く飛んでいた。

.

目を覚ますとそこは岩盤に覆われた湯船だった。

入浴はほどほどにして、溺れる前に部屋へと戻って昼寝でもしようか。

俺は湯船から立ち上がって、自分がだらしなく笑っていることに気づいた。

格好悪い話だが最近これが多い。これは思い出し笑いだ。あることを考えると、笑顔がどうしようもなくあふれてくる。

「へへへ……それにしても俺の子、俺の子か……。なんかちよつと怖いけど、楽しみだなあ……」

都市長の話では、エルフは強い遺伝力を持っているらしい。特にエルフの母から産まれる子は必ずエルフとして産まれてくると、人間の常識ではよくわからないことを言っ

「あ、ども、お構いなく……」

「又ワアアーツツ?!?!」

だがしかし、俺は幸せいっぱい後ろを振り返るとメーブルがいた。

彼女はタオルで身体を隠しもせず、無表情に俺を見つめていた。

「お、お前っ、お前っ、またハイドの魔法使ってただろっ!?!」

「ふっ……俺の子か」

「ウグツツ?!?!」

「なんかちよつと怖いけど、楽しみだなあ……」

激しい羞恥に俺の手は震えていた。メーブルはご機嫌で、普段無表情気味の彼女らしからぬ満面の笑顔を浮かべていた。

「言うな……。今のだけは、他のみんなに言わないでくれ頼む!!」

「いいよ。別に、そんなの、隠さなくても、最初からバレバレだし

……」

「え……?」

「私たちのお腹見ながら、いつも、ニヤニヤしてるよ……?」

嘘だ。気が遠くなって湯船に倒れかかるのを、俺は踏みとどまった。

俺はそんなにニヤニヤしていたのか……? それが本当なら、なんてだらしない姿だ!

「あ、それとユリウス……」

「なんだよ……」

「こっちは、どうでもいいことだけど……」

「だからなんだよ……?」

「こっち、女湯」

「へ……? えっ、嘘っ、ちよっ、そっち先に言えよなっ?!」

俺は湯船に身を沈めて辺りをうかがった。貸し切りでなければ死んでいた……。

メーブルがこの場にいる時点で、もっと早く気づくべきだった。

「姉さんたち、そろそろくるよ?」

「それ、マジ……?」

「うん」

「ヤバいじゃねーか……」

「なして?」

「なしてもクソもねーよっ!? 女湯に入ったら旦那がいました! んなもん通るかよっ!」

俺は脱衣所に注目して、行くべきか行かざるべきか悩んだ。そう  
だ、こんなときこそ転移魔法

「ガシツとな」

「お、おい……?」

「そっいうのつまんない、ダメ、禁止」

もう長い付き合いだ。メーブルは俺の胸に抱きついて、転移による緊急離脱を封じた。



「見て見てグラフィツ、思っていたよりずっと広いわ！！　これが貸し切りなんて、なんて贅沢なのかしら！」

「気を付けたまえ、ユリウスやメーブルがキミの無防備な姿をどこかでのぞいているかもしれないよ」

「そんなわけないじゃない。メーブルはともかく、ユリウスがそんなことするわけないわ」

「……そうかもしれないな。彼は変に堅いところがあるからな」

青ざめる俺を、メーブルはニタアアと笑いながら身を擦り寄せた。

お前は悪魔か、鬼か。最初にへマをしたのは俺だが、なぜこんな仕打ちを俺にする！？　知っているよっ、お前は俺のうるたえる姿が大好物だからなっ！

「なして逃げるの？」

「社会的に死ぬからだ……」

露天風呂には大きな岩が置かれている。

俺はその岩場の陰に隠れて、隠れて　途方に暮れた……。

無理だ、無理に引きはがそうとすれば水音で気づかれる。こうなってしまうっては、彼女たちが露天風呂から去るのを辛抱強く待つしかない……。

「夫婦なのに、なんで隠れるの……？」

「夫婦だからだ……」

「深いね」

「深くねーよ、メチャメチャ浅いつての……っ」

俺はお腹の大きただだっこに張り付かれたまま、マジでシエラハとグラフィが露天風呂を離れるまで、蒸気と密着でのぼせながらも耐えしのいだ。

もう温泉旅行なんてこりこりだ……。俺は辺りの様子をつかがいながら脱衣所に戻り、安堵に床へと崩れ落ちた。そんな俺を見下ろしながら、メーブルはこう言った。

「私、ユリウスと結婚して、よかった……」

「そう思うなら、あまりに旦那をいじめないでくれ……」

「無理。好きな人は、いじめずにいられない、性分だから……」

「シエラハにはただ甘だろがっ!？」

「姉さん、綺麗だったね……」

「ああ、綺麗だったな……。じゃなくてよおっ!？」

天使みたいに脱衣所を跳ねて、メーブルが姉を追って去っていった。

俺は一生、アイツにいじられまくって生きるのかもしれない……。

温泉宿の晩飯は、油で揚げた山菜やキノコ、シシ肉の鍋が最高だった。

やはり宣言撤回だ。また機会があったらここにきたい。オドでの温泉旅行はこれまでの旅行でも、格別に楽しいひとときだった。

・フェーズ1 - 3オド王国 - そして温泉へ…… - (後書き)

新作『おっさんスタリオン 異世界からきたおっさん騎士は北海道で馬を育ててダービーを制覇するようです』を開始しました。

異世界から日本にきたおっさん騎士が穴馬で競馬場を沸かせます。もしよろしければ応援して下さい。

「あまり無茶するんじゃないぞ。キミはやることなすことメチャクチャだからな、たまには無事に帰ることだけ考えて行動しろ」

「いいこと言うね、グラちゃん」

今のツワイク王国にエルフは入れない。ここから先は別行動になることが最初から決まっていた。

「そう言われても気づいたら突っ込んでいるんだ。意識はするが、上手くやれるかはわからないな」

「じゃ、あのこと、バラす」

「あら、それってなんのこと？」

メープルに掴まれた弱みは数多いが、昨今となるとあのだらしない独り言や、女風呂に潜むことになったあの一件だろう。

「善処するからそれだけは勘弁してくれ……」

「どうしよう……。みんなに、喋りたくて、たまらない……」

「頼むから止めてくれ……」

「みんな、喜ぶと、思っのに……」

「だからなんのこと？ ユリウスの前で言えないなら後で教えてちょうだいね」

「フツ、帰りは裏話を明かしあって帰るとしよう」

嫁さんを複数人抱える男は痩せてゆくと言うが、あれは本当のことなのだろう。帰り道で、こいつらが何を語り合っのかと想像する

だけで、首の後ろがチリチリと焦りに逆立った。

「ああ……もう好きにしてくれ……。早めに終わったら合流するから、各地に寄りながらゆっくりと帰ってくれてもいいからな」

「ええ、待つてるわ。……だけど、無理はしないでね、絶対」

「死なれたら、マジで困る。自重しろ……」

俺たちはオドの温泉宿にてしばしの別れを交わして、シエラハたちは女同士の楽しい帰りの旅を、俺は母国ツワイクでのフェーズ2に入った。

密貿易という名の札束で殴るにあたって、俺たちは工作活動に入った。転移魔法で飛んで、ツワイクの宿に落ち着くなり、現地で待機していたアルヴィンス師匠の方から接触してきた。

今回は俺と師匠で役割を分担して、それぞれの得意分野からツワイクを切り崩す。

「もうちょっと手間取るかと思ってたぜ。花丸をくれてやるよ、バカ弟子」

「一応それ、誉めてるんですよね？」

「何を当たり前のこと言ってるやがる。で、役割分担だが、宮廷魔術師と商人どもは俺に任せろ。お前は錬金術師と冒険者どもこちらに寝返らせる」

「当初の計画通りってことですね」

「ああそれとな、禁輸によりポーション工場は勢いを取り戻したらしいが、一部の冒険者たちや商人どもが禁輸にキレてな。抗議活動を行ったところ投獄されちまったそうだが」

「投獄……？ 今の王家はそこまでするのか……」

「あんまバカなことすんじゃねえぜ。せめてガキの顔見るまで、バカなバクチを打つのは止めとけよ」

師匠は言いたいことをだけ言うと、世界の裏側へと潜り込んで姿を消した。

俺たちは元々こうだった工作活動を仕事にしていた。俺たちのような尾行不能の作業員は、敵国からすれば悪夢のような存在だった。

まずは錬金術師から籠絡していった。具体的に何をしたかといえは、ポーション工場の同僚たちに声をかけていった。

激務に堪えきれずに工場を退職した者たちは数多く、そいつらに声をかけては芋づる式にたぐっていった。

「工場に恨みがあるやつか……。それならラステイとジョーイだな」  
「聞き覚えがあるな。よければ紹介してくれ」

「いいぞ。あんだだけこき使われたら、誰もあんな工場に義理立てなんてしないさ」

「それは助かった」

「いや……こちらこそ悪かった。キツイ仕事をお前に押し付けたのは工場長だが、俺も見て見ぬ振りをしていた。悪かったよ……」

「別にこっちは気にしていないが、そう思うなら働きで返してくれ」

夜の町に出て、家から家を行き来した。酒場で飲んだくれていたりやつも多く、俺が工場に反撃する計画があると誘うと、どいつもこいつも喜んで誘いに乗ってきた。

「一緒に商売しないか？」

「ユリウスッ!? お前、ツイイクに帰っていたのか!？」

簡単に籠絡できたのにはもう1つ理由があった。元々顔見知りばかりだったのあったが、1番の理由はエリクサーだ。

今回もカウンター席にその緑のぶにぶにを置くと、他の同僚たちの反応に漏れず不思議そうな顔をして、だいたいが遅れて驚いて、そのまま床にひっくり返るやつすらいた。

「これは……これが、闇ポーションの正体なのか……?」

「ああ」

俺はエリクサーの欠片を水の入ったグラスに入れて、それをポーションに変えて見せた。耳かき1つ分の欠片が、グラスいっぱいポーションになる。

「凄まじいな……。だがどうやってこれを作っているんだ?」

「そこは企業秘密だ」

ポーションと同じ感覚で、苦もなく作っていると言えば嫌みになるのでそこは避けた。

「既に取りつたけのエリクサーをこちらに密輸してある。お前たちはこれからこのエリクサーを、昔ながらの釜を使った錬金術でポ-

シヨンに変換し、市場で売り払え」

「そのエリクサーとやら1つでいくらだ？ ……なんだとつ、そんな値段でいいのかっ!？」

「ただし急げよ、稼ぎ時はシャンバラとツワイクが対立している間だけだ。お前たちの手作りで、工場製のポーションを駆逐してやれ！」

「よし乗った！ 今回はお前が勝ち馬だ、ユリウスッ！」

元同僚たちは思わぬ反撃と稼ぎ時に興奮した。その中から特に信頼のおける昔なじみに統括役を任せて、俺の方は次のフェーズに動いた。

予定通り次は冒険者たちだ。こいつらを少しでも多く、素早く懐柔して、シエラハたちの後を追いたい。

今頃はどこかの宿で女同士の旅行を楽しみながら、シエラハたちは俺のあの恥ずかしい独り言をメーブルから聞いていることだろう……。

そう思うと合流するのが怖い。メーブルがあゆるゆるの口が、律儀に秘密を守る可能性は、確率にして0%と言ってしまってもよかった……。



・フェーズ2 - 1 ツワイク王国 - 古楽 - (後書き)

次回の更新、もしかしたら遅い時間になるかもしれませんが、

ツワイク滞在4日目、夜

ツワイクで行動するなら、あの陰気くさい黒のローブが最適だった。フードを深くかぶっていても別段素性を疑われず、転移魔法でいきなり姿を消しても宮廷魔術師だからで話を通る。

その晩、俺はとある歓楽街の酒場へと入って奥の薄暗い席に腰掛けると、ツワイク産の火酒を注文して待ち合わせの相手を待った。今日の相手は錬金術師ではない。あちらは昨日の時点で十分な人数に達したので、今日からは冒険者の引き抜き工作に入っていた。

ただこちらの方は予想通り難航している。わざわざ祖国ツワイクを捨てて、遙か遠方の砂漠とオアシスの国で働きたいなんて普通ならば思わない。

それでも冒険者をヘッドハンティングすれば、ツワイクの経済力をそぎ落としつつ、それを俺たちの力に変えることが可能だ。

……しかし遅いな。店を間違えたのだろうかといぶかしみながら、俺は火酒をあおってグラスを空にした。

ところがふと顔を上げると、目の前にパリツとしたスーツを身に付けた男性が立っていた。

「申し訳ありません、どうやらお待ちさせていただきましたようですね」「いや、別にいい。最近は何かと忙しかったからな」

身なりがよく、それでいて綺麗な容姿をした男だ。顔にかけられた銀の眼鏡が知的で、いかにも仕事が出来そうな雰囲気だ。

「お気づかい感謝します、葉屋さん。私のことはギウンターとお呼び下さい」

「わかった。では早速仕事の話をしよう」

見ての通り、これは俺のコネクションではない。彼は我がシャンバラ冒険者ギルドの受付嬢のお友達だそうだ。あのカマカマ野郎のコネのはずなのに、あまりにまともな雰囲気俺はあっけに取られていた。

「ではこちらをご覧ください。こちらが私を含む移民希望者になります」

「協力助かる。……ん？」

彼は向かいの席に腰掛けながら、バインダーを俺の前で開いた。そこに納められていた薄黄色の藁半紙には、人名と冒険者ランクとジヨブがリストアップされている。

ページをめくり上げてランクの部分だけざっと流し読むと、S級が2名、後はAとB級ばかりの高ランク冒険者たちばかりだった。

「どうされましたか？」

「いや……頼んだのはこちらだが、本当にこれほどの強豪たちがシャンバラに来てくれるのか？」

「ええ、こちらの条件を飲んで下されば」

「条件？」

そう問い返しても、ギウンターは言葉を返さずに俺の様子を注視

していた。もしや器を計られているのかと俺はフードを下ろし、堂々と胸を張って視線を視線で迎え撃った。

彼はなんの意図なのか、テーブルへと預けていた俺の手のひらに自分のものを重ねてくる。

「美しい……」

「美しい？ それは何がだ？」

「あ、すみません……。あまりに好みの男性でしたので、私としたことが、つい……」

「……………ん、んんっ？」

彼は俺の手を解放しつつ、いちいちジェントルタッチで手の甲を撫でてきた。

ああ、なるほど、そういうことが、なるほど、理解した。理解したくないが理解した。理解した俺は、本人の意思に反して震える指で、もう一度強豪揃いのリストを指さす。

「まさか、このリスト……」

「察しがよいところも素敵です。ええ、彼らは全て性的マイノリティーになります」

つまりカマのコネは、カマカマネットワークだった……。

「ツウィクはこういう国です、我々のような者には厳しいでしょう？ しかしシャンバラには、そういったルールはないそうですね。

ああ、素敵です……」

「ちよっ、待っ、いや……っ」

再び手に触れられて、俺は戸惑いに戸惑った。バインダーの上の

リストはあまりに魅力的で、俺は彼の機嫌を損ねたくない。こいつらがシャンバラにきてくれたら、倉庫にもっと多くの素材が集まって、結果的にもっとレアな素材が俺の手元に届くだろう。

このリストは、次の緑化事業への近道に他ならない。

俺は手を引つ込めたい本心を包み隠しながら、脂汗を流しながら痩せ我慢した。

「その恥じらい深さ、可憐です……。彼が気に入るのも無理もありません」

「いやその……。一応これでも俺、既婚者なんだが……？」

「何か問題でも？」

「問題しかねーよっ！？ お、おおお、俺はそういう趣味はないぞっ！」

「……本当ですか？」

「なんで疑われているんだ、俺は……」

最初はキツチリしていてカッコイイと思っていたのに、ギョウタは乙女のように首を傾げてこちらに微笑んだ。しかししばらくすると本題を思い出したようで、その頬から笑みが消える。

「先週は仲間がランチに遭いました。それから一月前には住処に火を放たれた者もいます。こんなのはあんまりですよ……。お願いします、ユリウスさん、どうか我々を温かく受け入れて下さいませんか？」

「それを断る理由はこちらにないな。俺たちは戦力が欲しい。それにあんだけ濃ゆいカマエルフがいるんだ、ちよっとくらいあれより薄いのが増えても、別になんにもかまわないだろ……」

「ユリウスさんっ、ありがとうございます！ あっ……」

俺は彼にまたもや手を取られて、ここでその名前は少しもまよをしかめた。

「シャンバラで待っているよ。同じツワイク人が増えるのは正直嬉しい。どうか俺たちに力を貸してくれ」

「ええ、喜んで！ 仲間たちもこれで喜びます！」

こうしてツワイクでもトップクラスの冒険者たちが祖国を捨て、シャンバラへの長い旅の準備に入っていた。

さて、こちらに話も付いたので、こちらも帰国前にもう一仕事だけすることにしよう。

その翌日の昼、俺は王都郊外にある刑務所に忍び込んだ。ギョントーにそれとなくターゲットの特徴を聞いて、まずは目当てのリーダー格に接触した。

「その話乗ったぜ。ただ……こういうのは独り身に限るだろうな。確かに脱獄は誰だっけってしたいだろうが、国を捨てられるやつは限られる。お前みたいにな、ユリウス」

「そうだろうな、最初からそのつもりだ」

どちらにしろ、明日には有力冒険者たちが一斉にツワイクから姿を消す。そうなれば獄中のこの連中をいつまでも監禁しておくとは

考えにくい。……とはあえて言わないでおいた。

「では今夜迎えにくる。それまでに仲間に通しといてくれ」

「任せてくれ、俺たちはもうツワイク王家には愛想が尽きた。お前と一緒に行くぜ、ユリウス」

話がまとまったので、俺は世界の裏側に潜り込むとギョウターと合流した。彼らの出発はちょうど明日の朝に正式に決まったようだ。どうせやることもないので軽くその準備を手伝い、夜がくるのを待った。

こうしてこの夜、王都郊外の刑務所でちょっとしたドンパチが起きた。何者かが牢屋の鍵を次々と開け放ち、看守と脱獄者の激突に発展した。

奇跡的に死傷者は出なかったが、看守の大半が拘束され、主に政治犯を押し込めていた独房から囚人たちが姿を消したという。

・フェーズ2 - 2 ツワイク王国 - カマとコネ - (後書き)

遅くなってごめんなさい、執筆に夢中で投稿作業を忘れていました  
……。



翌日、ギウンターたちは自分たちをキャラバン隊に見せかけて、数台のホ口馬車とともにシャンバラへの旅を始めた。

俺はそれを人気のない街道にさしかかるまでゆっくりと待ち、手頃なタイミングで彼らの前に姿を現した。

「ユリウスさん！？ やだ嬉しいっ、もしかして私を見送りにきてくれたのですかっ？」

「いや、そっちはついだ。悪いが頼みたい連中がいてな」

もう隠れる必要はないと後ろに合図をすると、刑務所帰りの冒険者たちが草原からひよこりと頭を出した。

「えっ、貴方たちは！ ああよかった、無事だったんですねっ！」

「お前受付のギウンターじゃねえか！」

「このユリウスのやつが脱獄を手伝ってくれたんだ。すげーんだぜコイツ、独房の鍵を全部開けやがった！」

「別に全部開けなくてもいいのによっ、全部開けやがったんだよ、この馬鹿！ おかげで刑務所はひでえ騒ぎだったよっ！」

いや、他の囚人の脱獄を幫助した理由ならある。他の囚人は追っ手を分散させる良いデコイになってもらった。

「彼らも旅に加えてやってくれ」

「ユリウスさん、貴方って人は……その、見た目はとても素敵なのに、とんでもないことをしてかしますね……」

「そうか？ それより早く行こう。オドまで逃げ込んでしまえば後はこっちのものだ」

「美形のエルフだらけの国、シャンバラ！ 俺あ今から楽しみだぜ！」

ツワイクの冒険者たちはシャンバラで準備中の特区に移住することになる。

……脱獄組は性的マイノリティーに囲まれて暮らすことになるが、まあ、そこもまあ、あえて言わないでおいた。

特区の中では、ノーマルがマイノリティーだ。

そこから歩きの旅を経て、オド王国の安全圏まで彼らを護送すると、軽くあの少年王に挨拶をしてから嫁たちの馬車を追うことにした。

「もう行っちゃうんですか……？ ボクもお兄ちゃんと一緒にシャンバラに行きたい……」

「……いや、まあ、そこはその……平和になったらな？ もし来れそうならうちの家で歓迎するよ」

「ボクを家に泊めてくれるんですかっ！？ やったあつ、この一件が片付いたら必ず遊びに行きますっ！ えっと……使節として！」  
「国王が自ら使節団を率いるとか、そういう話はちょっと今まで聞いたことないな……」

まあ来たいなら来たらいい。このかわいい弟分とシャンバラのオアシスを泳ぐのもあながち悪くもなさそうだった。

その次はファルクだ。一晩泊まって欲しいと、半泣きで懇願する少年王に謝って、俺はあの豪快で酒臭い王に嫁はきていないかとお伺いを立てた。

「おうっ、あのちゃんねーなっ、3日前にきたぞ！ ランスタの釣り宿が気に入ったから、もう一度寄って帰るってよっ！ おい待てやっ、何消えようとしやがる！」

「陛下、ユリウス殿は新婚旅行中です。引き留めるのはさすがに器を疑われますぞ」

「んなこと言ってねえよっ！ おうユリアスッ、景気付けに一杯飲んでけ！」

「それ飲んだらもう行かせてくれます……？」

「おうっ、お前も家では嫁に尻にしかれてんだろ？ ガキが出来る女ってのはすぐそうだ！ ソイツで鬱憤吐き出しから行きな！」

俺はファルク王国の誇る驚異のビーム魔法酒、モンスターカクテルを飲み干して、空にマジックプラストを口からぶっ放してからランスタ王国へと転移した。

「ユリウス様、こんな強い身体を下さりありがとうございます。おかげで私、毎日が夢みたいに楽しいんです！ あ、これ、昨日メーブルが教えてくれた新技の……指弾です……！」

ランスタのお姫様はその後もすこぶる元気だった。

隆々とした恵まれた体躯から放たれた小石が、川鶉邸の湖畔の上を豪速球で跳ね回り、もはや水切りとかそういう次元ではない破壊力で対岸に着弾していた。

どうやら少し遅かった。嫁たちは昨日の昼過ぎの時点で、ランスタのこの川鶉邸を離れていた。

「どうですかっ、とても面白くないですかっ!？」

無邪気にお姫様は指弾で水切り遊びをしては、恐ろしい爆音で水中と地上の両方を戦慄させた。

「姫、その遊びはなんというか……お魚と釣り人さんが可哀想だから止めよう」

「ふふふっ、グライオフエンさんにも同じことを言われました！」

「なら止めておこうよっ!？」

「メーブルとは、シャンバラのオアシスで指弾遊びしようって、約束したんですよっ！ それもこれも、ユリウス様のおかげです！ありがとうございます！」

「いや、それをシャンバラでやられたら、正直困るといっか……」

この子もシャンバラにいつか来るつもりなのか……。あのオド王と会わせたらどうなるだろう……。似た者同士ではあると思うんだが。

「さ、次はユリウスさんの番です！」

「あー、じゃあ、こんな感じでどうかな。見ててね、お姫様」

「はいっ！ えっ……わっ、わああーっっ?!」

転移魔法を使った1人キャッチボールを見せてやると、結構お姫様にウケた。体躯は立派に人迷惑になっってしまったけれど、メープルたちがかわいがるのもよくわかった。

隣国の街道で待ち伏せすると、どうにか旅行が終わる前にシエラ八たちと合流することに成功した。残りの計画は俺たちではなく、師匠やシャンバラの作業員、それに商人たちの仕事になる。

「ユリウス、お帰り……」

「やっと戻ってきたな。まったく何日待たせるつもりだ、キミは」「でもちゃんと合流できてよかったわ。シャンバラまであとちょっとだけど、ここからはゆっくり行きましょ、ゆっくり」

仕事で数日離れていただけに、顔を見るとホツとした。

馬車の中で俺はシエラ八とメープルに左右からくっつかれて、上機嫌で御者をするグラフの後ろ姿を眺めた。

「俺の子かあ、へへへ……」

「ウグツツ?! お前っ、ま、まさか……っ」

「ごめん、全部、話しちゃった……。だって、あの言葉、嬉しかっ

たから……」

「うん、ボクは悪い気はしなかったな。逆よりもずっといい」  
「ふふふっ、もう少し待っててね、もう少しよ」

やはりもう少し遠回りをしてから合流するべきだったと、俺は己の思慮の浅さを呪いたくなった。その日の彼女たちはご機嫌もご機嫌で、視線が合えば必ず微笑み返してくれるほどだった。

あまりに空気が甘すぎると人はいたたまれない気分になる。冗談を言つて雰囲気をごまかしたくなる。自分はもつと落ち着いた微糖がいいなと思いつつも、無意識にだらしなくなる口を俺は何度も引き締めた。

かくして新婚旅行をかねた懐柔と謀略が終わり、俺たちは美しいオアシスと砂漠、それにほんのわずかながらも美しい緑がある国シヤンバラでの日常生活へと戻ってゆくのだった。

・その後の出来事と、シャンバラでの平穏な日々

毎日が平穏だった。まだ外の世界では包囲網と包囲網がせめぎ合っているとはとても信じられないほどに、俺たちの生活は元の落ち着きを取り戻していた。

都市長から定期的に外の情勢については聞かされるのだが、今一つ実感に乏しい。

シャンバラ包囲網から1国が脱退して、中立に姿勢を変えたとか。その影響で再びツワイク以西にキャラバンを送れるようになったとか、そういった話だ。

ツワイクでの手作りポーションの販売は絶好調らしい。シャンバラで作られたエリクサーは、甘味好きのエルフの口に渡らないように厳重に管理された状態で、あの転移門を使ってリーンハイムに輸送される。

そしてそこから迅速にツワイクへと密輸されて、工場を辞めた錬金術師たちによってポーションに変換される。

これが上手いことに噛み合っているようで、最近はどうも忙しい……。

連日8時間みっちり働くなんて、これでは真人間のようだった。ちなみにシエラハたちの方はこの錬金術工房ではなく、相変わらず耕作地の方に意識が向いている。

「!」  
「!」

「腰の調子もいいしなんだってこい。しかしお前、すっかりシャンバラに順応してるな」

「というのも俺が不在の間に、技術担当のマリウスたちが黙々と自分の仕事をしてきた。その結果、第二の耕作地候補が見つかったぞうだ。」

「なので明日はまた、沙漠のど真ん中におもむいてコンクリルを現地生産する荒行を始めることになっている。」

「最初は少し不安だったぞ。けど今はツワイクより居心地がいい。開拓し尽くされたツワイク王都と違って、こっちじゃなんだって作り放題だ。君たちの金でな！」

「ああ、そこはわかるよ。努力した分、みんな喜んでくれるところがいい」

「そうっ、そこでだ、ユリウス！ 今回の地下水道は、水を循環させたい！」

「循環……？ いや、ちょっと待て、それはつまりところ……」

「ああ、君には前回の2倍のコンクリルを製造してもらおう！ 川から取水した水を、もう1本の水道で川に戻すんだ」

「俺はまあ付き合っが……それ、労働者がぶっ倒れるやつだぞ」

「優れたインフラというのはそういうものだ。俺たちが死んだ10年後でも問題なく使い続けられるものが本当のインフラだ。だから水は循環させる」

「都市長や議会はマリウスの循環水道案を採用した。エルフは100年足らずで死んでしまっ俺たちと違って、半永久的に壊れないイ



ンフラがお好みの方だった。

マリウスの工房での打ち合わせを終えて自宅の前に戻ってくると、時刻はもう夕方だった。

オアシスは夕暮れの日差しを受けて金色に輝き、弱い風が水面に微かな波紋を描いている。

それを眺めながら工房へと戻り、残りの仕事を進めていった。

「あ、今日は水を浴びていないな……。冷える前に少し」

肌がベタベタしていることに気づいて、俺は大きく開け放たれた扉越しにオアシスを眺めた。けれどもそこには先客があった。

スケベ心を持つにも、そこにあるシェラハの姿はあまりにも遠い。彼女は浅瀬の上で子供みたいにくるくると回って、少しずつオアシスの奥へと身を沈めていった。

そんな光景に意識を奪われながらもオーブに魔力をかける。この差し入れのスタミナポーションがなければ、労働者がぶっ倒れることになるのは見えていた。

しばらくするとするとオアシスに裸のメープルと、グラフの白い肌が加わって、それがまるで妖精のように踊りだした。

3人ではしゃぐその姿は見るからに楽しげで、それに気持ちよさ

そうだった。長い往復の旅を終えてみれば、出発から約1ヶ月ほどが過ぎ去り、彼女たちのお腹も目立つようになっていた。

あそこまで大きくなってしまったら、ツイイク側で何か起きても次は俺の単独行動になるだろう。

と思っていたところで完成だ。俺は明日作らされると相場が決まっていたスタミナポーションを箱詰めして、それが済むと厨房に入った。

そこでようやくコツを覚えてきたシャンバラ料理を作って、彼女たちが腹をすかせて戻ってくるのを期待した。案の定、夕飯の香りにつられて家族が家に戻ってきた。

「また君はそうやって、ボクたちの仕事を奪おうするんだから困ったやつだよ」

「そうよ。それに私よりシャンバラ料理が上手くなったら、こっちの立場がないわ」

グラフとシエラハが俺の仕事を横取りして、メープルが俺を引っ張って厨房から居間に連れ出した。うちではよくあることだった。

「またのぞいてた……」

「たまたま見えたんだ。それにずいぶん遠かったし、逆光だったぞ」

「じゃあ聞く。姉さん、どうだった……?」

「今日も綺麗だった」

「私も、そう思う……やっぱ、気が合うね」

「そう思うなら手加減してくれ」

厨房でシェラハとグラフィがかしましい声を上げるだけで、俺とメープルは気分がよかった。

一方、その頃ツウィクでは

貴族議会は大荒れだった。シャンバラに経済包囲網を仕掛けたはずが、瞬く間に切り崩されて残る味方は3国のみ。

元からツウィクは周辺国に敵が多いのもあって、敵がカウンターとして仕掛けてきたツウィク包囲網に加わる国が後を絶たない。エルフたちの首を絞めたはず、逆に締め返されていた。

議題は3つある。どれも繰り返し議論されては、座布団を投げ合うほどの大荒れになる。

そのたびに議員たちは自分の投げた座布団を探し回り、議論が中断される。コメディのような話だが、貴族議会では珍しいことでもなかった。

- 1 ・手作りポーションの販売禁止令法案
- 2 ・シャンバラに対する外交政策の再検討
- 3 ・国王への退位要求

議題1は国王一派と、新工場長による新法案だ。工場を抜けた鍊

金術師たちが、個人でポーションを作り始めて、それを信じられない安値で売り始めた。

ツウィク王たちは俺たちが仕掛けたこの策略を、新たな法律を作ることで封じようとしている。だがさすがに、そんな恣意的な法案を諸侯が許すはずがなかった。

「輸入ポーションでも別にいいではないですか。安いですから」「そうですぞ。安いポーションが流通して都合が悪いのは、工場の持ち主である王家だけではないですか」

「適度な関税をかけましょう、関税を。シャンバラもそれで納得するはずです」

いかに王と言えど、貴族たちを説得しなければ新法は通せない。これは今日までポーション産業を、王家の独占事業にしていたツケだった。

議題2は現実主義者とハト派議員による提案だ。シャンバラに対する外交政策を変更し、和解した方がツウィクの利益は大きいという意見だ。

「何を言っている！ やつらは表向きは隠しているが、シャンバラには迷宮がある！ ツウィクとの共存は不可能だ！」

「ならどうするのだ？ 彼らの国は迷いの砂漠の向こう側、軍事力では倒せんぞ」

「市場を健全な状態に戻しましょう。こうも両陣営に分かれて対立しては、貿易どころではありません」

優勢だったはずの経済封鎖を次々と切り崩されて、多くの諸侯が日和見を始めていた。

議題3は説明するまでもない。この状況を生み出した国王に、退位を迫る決議だ。過半数にはとても届かなかったが、むげに扱えば反乱のきっかけにもなりかねない危険な状況だ。

「あのうつつけのアリの言葉が正しかったというのか……？ 宰相、元はと言えばこれはそなたの思い付きだろう。何か案はないのか……？」

「申し訳ありません……。シャンバラの底力を見誤っていたようです……。陛下、ここは和睦を……」

今は退位の要求が議会を通らなくても、1月後にそれがどうなるかはわからなかった。ツイイク王は屈辱に顔を真っ赤に染めて、シャンバラとの和睦を拒んだ。

その一方、ポーション工場でも1人の男が頭を抱えていた。工場長の書斎机で、新工場長はうずくまるように身を丸めて、歯ぎしりを鳴らしている。

そこにまたノックが響き、それが若い彼を震わせた。

「退社すると言っただろう！？ 出て行きたいなら出て行け！ 我が工場がポーションの独占販売権を得た後になって、吠え面をかくなよっ！！」

しかし扉の向こうにいたのは工員ではなく、前工場長だった。なんだお前かと安堵したのもつかの間、そのでっぷり太った叔父は書

齋の前に立つと辞表を叩きつけた。

「今日まで世話になったな、甥よ。私も今日をもって退社させてもらおうよ」

「はははは……無能者のお前などいらん……」

「無能はお前だ」

「なっ、なんだと……?」

「この期に及んで時流が読めないほど私は愚かではないよ。私は勝ち馬に乗らせてもらうことにした」

辞表を爪弾いて、叔父の方は背を向けた。

「まさか、叔父上……自分だけシャンバラに寝返る気か!？」

「それは言えんよ。ではな、男爵家と共に借金におぼれ苦しむといい。私を、便所掃除夫とした報いを受けるといい……」

勝ち誇る叔父が書齋から消え、甥は身が震えるほどの不安を抱いた。自分は勝ち馬だ。王こそが勝ち馬だ。勝ち馬に乗っているはずだと、彼は自分に思い聞かせた。

「工業生産品が旧時代の手作り品に負けるわけがないだろう! やつはら何か、イカサマをしているはずなんだ! あんなもの、王が認めるはずがない……!」

しかしその半月後　ポーション価格は適正相場の2割弱まで落ち込んだ。売れば売るほど儲かるボロい商売は、市場に商品の過剰供給をもたらした。

少し前までは自分たちの独占事業で、相場を下げるも吊り上げるも思いのままだったというのに。

当然、工場で作れば作るほどに赤字になる。冗談のような桁数の売り上げ報告が届いた。こうなってはツイイクポジション工場は操業を停止する他になかった。

・その後の出来事と、シャンバラでの平穏な日々（後書き）

ストックの都合で次回更新が遅くなります。



・フェーズ3 俺の知らないところでなんか争いが終わってた

あれから1ヶ月が経った。こちらが仕掛けた迷宮素材のダンピング攻撃と、ツワイクとシャンバラの2つの陣営に分かれての経済封鎖合戦は、まだ静かな戦いとして外の世界で続いている。

状況はシャンバラの圧倒的な優勢だそうだが、ダンピングを続けられ続けるほどこちらの傷口だつて広がってゆく。可能ならば今すぐに、こんな不景気な戦いは終わりにしてもらいたいものだった。

「なんかこれ、タルみたい……ウケる……」  
「自分の腹だろ」

「うん、ユリウスに、こんな身体にされた……。あ、落ち着いたら、これ、新しい彫像」  
「お願いだからそれだけは止めてくれ……。後世の人たちが、俺のことをロリコン野郎だと誤解するだろうが……」

「それが、目的？」  
「止めるってっ！？ お前は俺を歴史的に殺す気かつ！」

「あと、マニアウケも確實……」  
「誰もんな要素は望んでないから、安心しろ……」

お腹の方はみんな順調に成長していた。タルと言われたらまあ、確かにタルのようにぽっこりと大きく真ん中が膨らんでいる。医者が言うには出産まであと一ヶ月だそうだ。

待ち遠しい反面、孤児の俺が親としてちゃんとやっていけるのか

少し不安にもなった。

「お待たせしました。経済封鎖のせいでやはり手に入らない野菜が増えているようです」

「あ、どうも。こんなことまで手伝わせちゃってすみません」

けどたぶん大丈夫だろう。

都市長のところの義兄さんが買い出しを代わってくれたり、市長本人が夕飯を作ってくれる日が増えた。これからもう1ヶ月の間は、錬金術師であり主夫でもある生活が続いてゆきそうだ。

「なんでも言ってお下さい。大変なのはわかっていますから」

「ありがとう。ただ……外の争いの件は、もう手伝わなくていいのか？ 何かあれば手伝うぞ」

「貴方のお師匠様がよくがんばってくれていますので、大丈夫ですよ」

「だが、本当に手伝わなくていいのか……？」

「いいんです」

何かしら俺の力が必要になる部分があるはずなのに、最近はずっとそいつの話がない。どうも釈然としない気分で食材を台所に運び、2階に上がってテラスで干していた肌着を取り込んだ。

それとそうだった。ヒューマンの冒険者たちのための特区はマク湖の一角に築かれた。

そこで『ドキッ、性的マイノリティーだらけの水着大会！？』が開催されているとか、されていないとか、まことしやかな噂が流れている。もちろん事実や詳細は別段知りたくもない。

しかし嗜好はさておきそいつらは超優秀な冒険者たちだ。今はダ  
ンピングをしなければならぬので厳しいが、両国の争いさえ収ま  
れば、彼らは頼れる助っ人としてシャンバラの迷宮産業に一躍駆っ  
てくれるはずだ。

『恨むぜ、ユリウス……。綺麗なお姉ちゃんたちが増えたかと思っ  
たらよ、その尻触ったらよ、それが明らかに男のケツの感触で、や  
つちまったと青ざめるおっさんの気持ちがわかるか？ わからねえ  
よなあ……………』

メーブルの知り合いのおっさんは、まんまとアレに引っかけかかって  
しまったらしい。あの時は恨みがましい目で俺を見ていた。

『それ、親しくもない相手の尻を触るのが、そもその間違いでは  
？』

『はっ、正論かよ……………』

『兄貴っ、兄貴っ、探しましたぜ兄貴っ　一緒に迷宮行きましょ  
うよ、兄貴っ　』

おっさんは今もあの少し大柄な元子分と仲良くやっているようだ。  
片方はとても幸せそうだったので、まあそれでよしとした。

『ああ、女にモテてえ……………』

『見た目はカッコイイんだから、いきなりお尻を触る行為をあらた  
めたら、わりとモテるんじゃないか？』

『ありがとよ。けどそれがな、気づいたら無意識に尻触ってたんだ…  
……………』

さすがはあのメープルの知り合いだ。今日まで逮捕されなかったのが奇跡だった。

ところがそんなことを思い返ししながら、遙か彼方のマク湖の方角を眺めていると、後ろのベッドの上にシエラハが腰掛けていた。

その手には洗濯物が握られていて、彼女は動きにくい体で一つ一つそれを折り畳んでいる。

「それは俺がやるっ」

「ダメよ、洗濯物だけはユリウスに触らせないわ」

「妙なこだわりだな。洗濯物くらいいいだろう」

「うっん、上手く言えないけど、嫌なものは嫌なの」

「そう言われても、今はそんな身体だろ？」

「そうだけでも……。こういうの洗濯したり、たたんでる間に、ユリウスがあたしに……。幻滅しちゃうかもしれないじゃない……」

「そんなことない」

「そんなことある!」

シエラハは洗濯の仕事だけは譲ろうとしなかった。

仕方がないので俺はそんな彼女をテラスからただ見つめて過ごした。そうするとシエラハは機嫌をよくして、ポツリとこう独り言を漏らした。

「昼食を食べたら、少しだけ水浴びをしようかしら……」

幻滅されたくないという言葉の意味が、少しだけわかったような気がした。俺もこの先ずっと、シエラハ・ゾーナカーナ・テネスと

呼ばれる美姫に憧れていた。

しかし世の中、全てが計画通りに進むものではない。せつかくシエラハがああ言ってくれたのに、義理兄さんを交えての昼食を終えると、俺は都市長の書斎に呼び出されてしまっていた。そしてそこで、思いもしない報告を受けることになった。

そうだったのだ。このシャムシエルと呼ばれる男は、このシャンバラで最も厄介な食わせ者だった。

「ちょっと待ってくれ……今、なんと言った……？」

もう2、3ヶ月はツイイクの痩せ我慢が続くかと予想されていたこの札束と札束の戦いは、思わぬ形で、俺の知らぬところで勝手に終わっていた。

「ツイイク王は失脚しました。儲からない戦いはもう終わりです、これでツイイク産のカボチャが食べられますよ」

「失脚って、いくらなんでも早くないか……？」

「詳しくご説明しましょう。実はですね」

説明が長かったので代わりに要約しよう。

ツイイク王家の傍流に、クリストと呼ばれる男がいる。彼の王位継承権はなんと11位。本来玉座に座れるような男ではなかったが、

彼は時流を巧みに味方に付けて、ツワイクの玉座を現王から鮮やかに奪い取った。

シャムシエル都市長と、師匠率いるツワイクの反乱魔導師の支援を受けてな。

「まあそういったわけでした、ツワイク貴族議会は王の退位要求を承認しました。こんな誰も儲からない情勢に国を導いた王の代わりに、議会はこのクリスト・ツワイクを指名したのです。王も退位を受け入れました。断れば内乱になりますからね」

「いや、おかしいだろ、何をどうやったら継承権11位が王になれるんだ……」

「私たちは支援をただけです」

「支援、支援な……」

都市長はクーデターまがいの政治工作をとぼけながら、俺に赤い蜜蝋で封をされた書簡を差し出してきた。どうやらこれは錬金術師ではなく、魔導師としての仕事のようだ。無言でそれを受け取った。

「親としてはあまり貴方に家を離れて欲しくないのですが、新王クリストは貴方をご指名です。この書簡を彼に届けて下さいますか？

もちろん、時短のために転移門を使っても構いません」

「クリストなんてやつ、俺は知らないぞ？」

「貴方に並々ならぬ興味があるようです。それに貴方は事実上のシヤンバラのナンバー2、功績においてはこの国のトップと言ってもいいでしょう。では、同盟締結の使者になってくれますね？」

「いやちょっと待ってくれ！いきなり同盟ってどういうことだ？！」

この爺さんは、俺の知らないところでどれだけの暗躍をしているのだろう……。

今すぐこの儲からない戦いを終わらせて、自由な交易関係を取り戻したいのはわかるが、話が飛びすぎだ……。

「既に向こうを待たせています。急いで下さいますか？」

「わかったわかった……貴人と合うのは気が知れないが、王位継承権11位から王になった男なら少しは面白そうだ。帰りはカボチャでも抱えて戻ってくるよ」

「それはいい、ユリウスさんのパンプキンシチューは絶品です。楽しみにしていますよ」

同盟、同盟な……。それこそが台頭するシャンバラを相手に、ツイクが唯一生き残れる道なのだろうか。

ご指名とあっては仕方がないので、俺は家のみんなに出張の理由と、往復2日で戻るつもりだと予定を伝えて、要塞化してゆく転移門の前に立った。

「少し待ってくれ、昨日からどうもこれの調子が悪くてな」

「調子が悪いって……だったらこんなもの止めた方がいいんじゃないか？」

「そうもいかないよ、これだけ便利だとなかなかね」

「まあ、そうなんだが……ちゃんと調整してくれよ、2日で戻ってきたい」

「わかっているよ。……よしできた！ お腹の中の子供たちのために、ちゃんと戻ってこいよ、ユリウス」

「いやそれ、事件の伏線だろ……」

門はここ最近不調らしく、マリウスが再調整を済ませてくれるまでしばらくの足止めになった。

俺は転移装置の光に包まれて森の国リーンハイムまでショートカッ  
ットすると、母国ツワイクを再び目指した。



・フェーズ3 俺の知らないところでなんか争いが終わった(後書き)

遅くなりました。

新作短編の準備中です。もしよろしかったら、告知しますので読みにきて下さい。

新王クリスト・ツワイクとの謁見はまだ朝だというのにすぐに叶った。だがその新王は、俺を見るなりこう言った。

「おお、ユリウス大先生！ よくぞお越し下さいました！」  
「だ、大……え、なんだって……？」

「大先生！」  
「……ちょ、ちょっと待ってくれ、いきなりなんの話なんだそれ！」

新王はアリのやつに少しだけ顔立ちが似ていた。それは大柄で肩幅の大きい青年で、髪は黒く肌もやや浅黒かった。その立派な風格にこっちは若干威圧されていたというのに、いきなりでかいやつに大先生だなんて言われても、返事に困る……。

「これは異なることをおっしゃります。ユリウス・カサエルと言ったら、エルフ道を極めた男として、その界隈で貴方は最も著名な方ではないですか」

エルフ道って、なんだ……？ そんな言葉、生まれて初めて聞いたぞ……。

「聞きましたよ、砂漠エルフ、森エルフ、そしてロリエルフ！ 3人も妻にして、その全てと同時に子供を成したそうですね！ これほどまでに芸術点の高い行いは、過去例がありません……なんて素晴らしい……！」

芸術点とかあるのか……。ますますエルフ道とやらの謎が深まったな……。

新王は著しく興奮しているようなので、まあ、同盟を締結させていこちらとしては好意的な態度は都合がいいのだが……。これでは何を考えているのやら、まるで頭の中が読めない……。

「いや、まだ子供は産まれてないんだ。来月生まれる予定でな、どんな子が産まれるのか俺も楽しみだ」

「ええ、わかりますとも！ エルフの女性から産まれる子は、必ずエルフとして産まれるというところもいいですね！」

「お、おう、ずいぶん詳しいな……」

「なんとという英雄だ……。どうかこの私にも、エルフにモテモテになる方法をご教授下さい！」

「いや、なぜそんなアホなこんな謁見の間で　いや、なんでもない」

新王は情熱的な男だった。家臣の前だというのにずいずいと俺の前に出てきて、手を取って立ち上がらせた。

彼はよっぽどエルフという種族が好きなのだろう。どうやって都市長に籠絡されたのか、そんなもの聞かなくてもわかった……。

「ユリウス師匠に対抗して、私はエルフのお嫁さんを4人いただくことにしました！」

「はあっ、4人っ?!！」

「はあ、楽しみだな……ですが聞いて下さい、ユリウス大先生！」

私、覚悟を決めたのはいいのですが、大好きなエルフに嫌われたく

ないのですっ！！　どうかエルフさんたちと、仲良くする方法を私に教えて下さいませんかっ!？」

この王は、大丈夫なのか……？

本当にこの男に、祖国ツワイクを任せても大丈夫なのか……？  
元国民として、不安になってきた……。

いや、第三者からみれば、俺もこの男と大差ないのだろうか……。  
いや、いやいやいや、そうとは思いたくない……。

「そう言われても中身は人間と全く変わらないぞ」

「そんなことはありません！　エルフは人間よりも心が美しいのです！」

「いや、だが俺の知ってるエルフは、人の尻を触ってばかりいるぞ」  
「純粹さゆえでしょう」

おっさんが純粹でも得するやつはいないだろ……。

「……ん、そうだな、やたら甘い物が好きなやつらが多いから、最初は菓子で釣るといいんじゃないか？」

「なるほど……少し待って下さいっ、メモの用意をしますので！」

「いやメモされても困るっの……！」

「いえ大事なことですので！」

秘書官らしき者が、俺の言葉に合わせて金箔貼りのメモ帳に筆を滑らせた。

本当に、本当にこの王で大丈夫か……？

「それと、あいつらは自然がやたらと大好きだ。逆に言うと、狭くて石ばかりの環境じゃ不満かもしれないな」

「そ、そうだったのですか！？ おいつ、今すぐ後宮の植林を急げ！ 壁紙も爽やかな感じの緑に張り替えると現場に伝える！」

俺が親切心で余計なことを言ったがために、現場に大きな負担がかかった瞬間だった……。

「そうじゃなくて、一緒にピクニックに行くとか、そういう触れ合いを試みたらどうだ……？ あまり工事を急がせたら、現場の労働者たちが困ると、俺は思うが……」

「なるほど、山を買えということですか」

「言っただけよっ！？」

「ははは、ユリウス大先生は面白い方ですね」

「はああっ……。だが何よりも大事なものはな……。どうあがいても、俺たちの方が先に死ぬってところだ。このことを忘れると、酷い目に遭うかもしれないぞ」

「酷い目？ 具体的にどのようなの？」

「……そこは、ノーコメントだ。俺の場合は死にかけたとだけ伝えておく。というより、そろそろその書簡を読んでくれ……」

そうお願いすると、王は素直にも静かになって、一通り目を通してくれた。

「はい、では同盟しましょう」

「はい、では同盟しましょう」

「早っ?! いやちゃんと考えてから答えてくれ! ツワイクの未来がかかっているんだぞ!？」

「断る理由はありません、どうかツワイクと同盟して下さい」

断られた場合も想定して、説得のプランを考えていた俺がまるで馬鹿ではないか……。

常に侵略の危機に迫られていたツワイクが、シャンバラの盟友になれば元国民として安心できることではあるが。

「シャンバラの長は聡明な方ですね。この国が再起不能になるまで追い込んでよかったのに、生き残りのチャンスをくれるなんて、とてもおやさしい方だと思います」

「それは人間の視点だな。エルフとヒューマンの対立が深まれば、将来的にはどちらにも損しかない。あの爺さんは俺たちと違って、1000年先まで考えているんだ」

「だったらヒューマンなんて滅ぼして、エルフだけの世界を作っちゃえばいいのに。それをしないなんて、やっぱり博愛的な方です」  
「冗談なのか素なのかわからない冗談は止めてくれ、怖い……」

俺は書簡を届け、同盟締結の返事をもらった。

迷宮を軸としたツワイクの輸出品はシャンバラと著しく競争するため、貿易だけ考えればツワイクを経済的に潰すのも1つの答えだった。だがシャムシエル都市長という男はそういうやつじゃない。

彼はいつだって未来を見ていた。

謁見は終わり、プライベートが始まった。外交官としてここにきた以上、真っ直ぐ帰れるとは思っていたかったものの、新王に気に入られて王の宮に招待されるとは想定外だった。

「ユリウス師匠、お会い出来てよかった。あのアリ兄さんが言った通りの方でしたよ」

「それ、悪評じゃないのか？」

「いえ、とても褒めていました。べた褒めです。シャンバラの繁栄はユリウス・カサエルが没するまでのこと。ユリウスが死ぬまで、シャンバラは敵に回すな。そう言っていました」

「あ、アイツが、そんなことを言ったのか……？ 信じられん……」

「反対に言えば、貴方が亡くなればもう1度ツウィクの時代がくるということですね。そう考えれば、ただか数十年くらいシャンバラが台頭しても別にかまいません」

「怖い話もう止めてくれ。しかしアリについては驚いた、まさか、自分から王族の地位を捨てて国を出ていくなんて」

「わかります。アリ兄さん、変わりすぎです。きっとあのお嫁さんの影響なのでしょう」

「いやそれにしただって……。アイツ、やっぱりどこかで頭でも打つたんじゃないか……？」

「酷いですね、ユリウス先生は。それではユリウス先生、お互いに仕事の話も終わりましたし、宮廷画家に描かせたエルフ画をご覧に入れましょう。同志ならきつと！ 気に入るはずですよ！」

エルフ画って、なんだ……？

「勝手に同志にするな……」

「何言ってるのです！ あっ、そうでした、お子さんが産まれたらどれだけ可愛いからお手紙を送って下さい！」

「手紙じゃわからないだろ……」

「わかります、そこは妄想力でカバー可能です！ さあ、私のエルフ画コレクションによろこそ！ 見て下さいこの優美なライン！」

絵画か何かなのかと思い、少しのスケベ心と共に王のプライベートトギヤラリーへと入ると、そこには耳だけがキャンバスいっぱい描かれた珍妙な画があった。

どれを見ても耳。どこまで行っても耳、耳、耳！ コイツ、エルフの耳しか見てねえ……。

「どうです、美しいでしょう？ これなんて、画家に描かせるの苦労したんですよっ」

「画家が可哀想だからもう止めてやれ……」

ツワイクの新王は、ただただ濃かった……。



「あ……」  
「む……」

蛇足だが、別れを伝え、王の宮を離れてもなぜかくついでくるクリスト王と一緒に王宮の回廊を歩いていると、どこかで見た人影が隣を通りすぎた。

「これはこれはユリウス様、ご機嫌麗しゅう。陛下、あまりユリウス様を困らせてはいけませんぞ。彼はシャンバラの国賓なのですからな」

「お、お前……まさか、ヘンリー工場長……？」

それはツイイクポーション工場の工場長だった。失脚したはずの彼が、なぜか立派なトーガをまとって王宮にいた……。

「どうかしましたかな、ユリウス様？」

「なぜ工場長がここに……。噂では、トイレの掃除夫まで、落ちぶれたって聞いたんだが……」

「ほっほっほっ、私はね、ユリウスくん……。男爵家に生まれながら、コネと世渡り一つでここまで成り上がってきたのだよ？ 時勢を嗅ぎ分けるセンスだけは、まだまだ若造どもには負けんっ！ ……ということ、今後ともよしなにお願ひしますぞ、ユリウス様」  
「そうなのです。嗅覚だけは凄いの、内務大臣を任せることにしました」

ヘンリー工場長が内務大臣って、どんな冗談だ……。

「大丈夫か、この国……」

栄枯盛衰。工場長は落ちぶれたり成り上がったり、とかく忙しいおっさんだった……。

俺はその後、もう帰りたいたと言ったはずなのに、エルフ尽くしの接待に頭がおかしくなりかけたところで、這々の体でシャンバラへと帰国したのだった。

・タンタルスの真実編 迷宮からの招待状

朝、いつものように俺は木陰から、オアシスで舞うシエラハの妖精のような姿を眺めていた。

この時刻の水はまだ冷たいのに、お腹の子は大丈夫だろうか。身重になったというのに、シエラハは軽い足取りで水の上を踊り回って綺麗な声で笑っていた。

その姿がときおりこちらに確かめるような目を向けるのは、たぶん気のせいだ。木陰に隠れながら見れば見るほどに、やはり俺の嫁はこの世界で最も美しかった。

ところがしばらくすると、突然に大地が震え始めた。まさかメーブルのイタズラかと辺りを見回すも、どうやらこれは違う。水面に幾重にも波紋が生まれて、次第に揺れは激しさを増していった。

湖の中の方がかえって安全かもしれない。シエラハの方は問題なさそうだったので、俺は頭上のヤシの実を見上げて、この場所に留まるのはまずいだらうと別の木の根本に場所を移した。

その後も激しい揺れがしばらく続き、当然ながらあちこちで慣れない地震への悲鳴が上がり続けていた。

「シエラハ……?」

揺れが止んだ。ヤシの実がいくつか落ちただけでこれといった被害はなさそうに見える。ただ妙なのは、シエラハの姿がオアシスのどこにもないことだ。

背筋が凍るような不安を感じた俺は、シエラハが水を浴びていた辺りに転移した。幸いすぐに見つかった。シエラハは別に溺れたわけではなくて、ただ足を滑らせて身体を水に沈めていただけだった。よかった。両手でその身体を抱き上げて、俺は深いため息を吐いた。

「驚かさないでくれ……最悪の可能性を想像した……」

「あら大げさね」

「大げさなものか。お前に死なれたらみんなが困るぞ！」

「そこは自分が困るって、言ってくれた方が嬉しかったわ」

シエラハはなんだか嬉しそうに笑っていた。姿はその、かなりまじいものだったが、首から下に目を向けなければ公序良俗に反する行為とはならない。本音を言えば、直視したかったが……。

「ふふ……」

「急になんだ？」

「うぬぼれた言い方だけど、ユリウスはあたしに夢中ね」

「それはうぬぼれだな」

もう水浴びはいいから一緒に岸へと帰ろうと誘って、俺は身を反転させた。

「うぬぼれじゃないわ。ユリウスはあたしのことを　えっ、ちょっとユリウスッ、あれっ、あれ見てっ！！」

指を追って見上げた空に、青白い光の柱が立ち上っていた。だがそんなものは毎日見慣れている。あれは転移門を発動させた後に起

きるありふれた現象だ。

「近所迷惑を通り越して綺麗なもんだな」

「違うわっ、マリウスが作った転移門はあっちよっ！ こっちは…  
…こっちは、あたしの実家のある方角よ…」

自分の顔から笑顔が消えてゆくのを感じた。

ゾーナ・カーナ邸跡地の方角にて、青白き光の柱が立ち上る。俺たちが管理している設備からの発光ではないことは確かだ。

彼女の温もりを両手と腹部に感じながら、何も言わずに岸まで歩いた。

「急いだ方がいいかもしれない。悪いが偵察してくる」

「え…でも…」

「大丈夫だ」

最悪の展開を想像するならば、あれは異形の種族タンタルス側からの侵略の兆しだろうか。だが、あそこからはもう棺を回収したはずだ。なのになぜ、白百合のグライオフェンがやってきたときと同じような、光の柱があのに浮かんでいるのだろうか。

「本当に本当…？ 絶対に無理しないって約束出来る…？」

「わかってる」

行かないといけないのに、シエラハがしがみついて離れない。

岸に降ろしても彼女はくっついたままで、目が俺を信じていなかった。…前料が多すぎるからな。

「わかってないわ。ほら…触って…。無理は絶対にしないでね

「……？」

「わかって」

シエラハに導かれて膨らんだお腹に触れると、中の赤子が何かを感じ取ったのか、俺の手を蹴り返してきた。

噂に聞くと、シングルマザーというのは恐ろしく大変なものらしいな……。この美しい人に、そういう苦労は似合わないか。

「わかった、今回は消極的にやってみる」

「うん、信じてる……」

水浴びで冷たくなった唇が唇へと押し付けられて、世界で一番美しい女性が胸から離れてくれた。

俺は世界の裏側へと潜り込み、ゾーナ・カーナ邸へと転移した。

消極的な偵察を終えると、俺は都市長の書斎のドアを叩かずに彼の目の前に飛んだ。予期していたのか都市長はちっとも俺に驚かなかった。

「シエラハゾから話は聞きました。ゾーナ・カーナ邸は、どうでしたか……？」

「どうもこうも、妙なことになっていた」

「妙とは？」

この爺さんはシエラハとシエラハの両親にずっと執着している。

いつものひょうひょうとした余裕が彼から消えていた。

「あそこは地下に闇の迷宮があったらどう？ あれが地表に現れるほどに巨大化していた。今のところ、危険はなさそうだが……」

その迷宮には、1つだけ報告するべきか悩む妙な特徴があった。だがここで報告をしなくとも、誰かが都市長に報告をする。腹をくくって言うしかなかった。

「どうやら他に何か見つけたのですね？ 教えてください」

「妙なんだ……」

「妙なのは今さらでしょう。あそこは何もかもが妙なことばかりです」

「なら言うが……。その闇の迷宮の入り口に、俺とシエラハの名が刻まれていた……」

「な、なんですと……！？」

「そうなる中が気になるよな。俺も気になって、シエラハとの約束を破って、迷宮の中を偵察してみたくなっただが……これが、開かなかっただ……」

勝手に人の名前をフルネームで飾っておいて、闇の迷宮は俺の進入を拒んだ。

「これは以前聞いた話だが、迷宮の中には、入場者を指名してくる種類の迷宮があるらしい」

「……つまり、ユリウスさんとうちのシエラハゾ。この2人が揃わないと入れないということですか」

やってみないとわからないがそうかもしれないと、俺は都市長にうなづいた。

しかしタイミングが最悪だ。あんなにお腹が膨らんだシエラ八を、迷宮探索に連れていけるはずがない。どこを斬られても一大事だ。

「お話はわかりました。ここは準備を整え、もう少しあの子にゆとりが生まれてから始めましょう。それまでは軍を配置して、監視しないといけませんね」  
「それに賛成だ」

あれがどんな物かわからない以上、放置はまずいのもかもしれない。楽観視するならば、俺とシエラ八を指名する時点で、もっと別の勢力が別の意図でやっている可能性の方が高い。

「反対よ！」

ところが会話は盗み聞きされていたようだ。シエラ八と一緒に秘書の義兄さんまで書斎やってきて、義兄さんの方は申し訳ないと頭を下げた。

「ユリウス、今から一緒に行きましょう！ その迷宮、念のために調べておかないと危ないわ！ また襲撃されるかもしれないじゃない！」

「その身体で迷宮なんて入れるわけがないだろう」  
「ええ、その通りです」

「でもあたし、ずっとあの迷宮が気になっていたの……っ。あの迷宮を調べたら、消えた父と母の行方が、わかるかもしれないって……」

「シエラ八、それはダメです。危険過ぎます」



「わたしの両親はここではない別の世界に旅立ったわ！ 自分の家の地下に、別の世界の入り口になると言われる闇の迷宮が存在しているなら、きつと父と母はその先の世界に行ったのよ！ もしまた会えるなら、あたし、そこで子供を産んでから帰りたい……」

「それは都合の良い妄想だ。確かに闇の迷宮は別の世界に繋がると言われているが、戻ってきた者はいない。戻ってこれないのは色々困るだろ？」

消えた両親を捜したい気持ちはわかる。だがこちらでの生活を捨ててまでしてすることではない。俺たちが消えたらメープルはどうなる。不在に堪えられるとは思えない。

そう現実を伝えても、シエラハは普段の聞き分けが嘘のように譲らなかった。だが俺たちだって譲れなかった。

「どうしてわかってくれないの……。あたしは、両親にもう1度、会いたただけなの……。両親に、ユリウスを紹介したいの……」

「ならなおさら後回しだ。せめて子供をどうにかしてからでないと、子供まで巻き添えだぞ」

「でも、シャンバラの未来はどうなるの……。？ また魔物の軍勢に襲われるかもしれないわ。2人が本当にこの国を守りたいなら、危険を冒してでも闇の迷宮を偵察するべきよ！」

消極的な偵察だけに留めるならば、シエラハのその意見は間違っていないかった。いずれは調べなくてはならない。何か都合の悪いものが見つかってからでは遅い。

「なら偵察だけしよう……」

「ユリウスッ、ありがとう！」

「ダメです！ ユリウスさんっ、そればかりは同意できません！  
大切な我が子が産まれるのですよっ、なぜそんなリスクを貴方たち  
が冒さなければならぬのですか！？」

全てが正論だ。だが俺たちは行くと決めた。

調べずに放置はやはりまずい。そんなことは都市長だっ  
てわかっているはずだった。

・タンタルスの真実編 迷宮からの招待状（後書き）

次回更新、恐らくは遅くなります。

俺たちは一通りの準備を整えて、翌々日の早朝に闇の迷宮の前に立った。

地上にそそり立ったその建造物は、どうやら光を飲み込むあの闇の結晶で構成されているようだ。新月の夜よりも暗いその外壁は、何一つ光を反射しないことから見る者の遠近感をこれでもかと狂わせる。

おまけに辺りには濃い霧が立ちこめていて薄暗い。朝だということに日没のような深紫色の光に包まれていて、それが見送りのみんなの顔色を不安に染めていた。

言うなればその迷宮は闇を恐れる人間の本能を直接刺激するものだ。この迷宮が邪悪な何かであるという根拠は何一つないが、そのたたずまいに誰もが禍々しさを感じずにはいられなかった。

「それじゃ行ってくるわ。ユリウスのことはあたしに任せて」

「待ってくれ、シエラハ！ どうしても行くというのか……？」

「ごめんなさい……。あたしは行かなきゃいけないの」

「頼む、どうか思いとどまってくれ……。メープルがまだ泣き出しそうだ……」

この場の誰もが突入に否定的だった。特にメープルは誰よりも突入に否定的で、昨日までシエラハと何度も口論をしてはケンカ相手本人に慰められていた。

「ごめんなさい……必ず帰ってくるわ。戻ったらメーブルのどんなお願いも聞くから、お願い。あたしを行かせてちょうだい……」

「一応……その話は、覚えとく……。でも、反対、絶対反対……」

それから一通りのやり取りを終えると、俺たちは闇の迷宮の前に立った。

そこが門であると言わんばかりに光が扉の形に灯っている。その門の手前には石碑が地面から生えていて、そこに俺とシエラ八の名前が刻まれている。

「これでもし俺たちが中に入れなかったら、冗談で全てが終わってくれるんだけどな……」

「冗談では済ませないわ。必ず、何か足取りを手に入れてから戻りましょ……」

「必ず？ 一応偵察って建前じゃなかったか？」

「偵察も両親探しも、どっちもあたしにとって大切よ……。さ、行きましょ……」

2人で扉に触れると門が耳障りな高音を立てて独りでに開きだした。その内部へとシエラ八と歩幅を揃えて踏み込むと、背中からメーブルの大きな叫び声が聞こえて、それがくぐもったように遠くになっていった。

「ここってこんなだったっけか？」

「違うわ……。前に立てこもったときは、もう少しこう、ドロドロと不安定な感じだったわ……」

「だったら入ってみて正解だったのかもな」

迷宮の内部はおどろおどろしい闇の世界だ。壁の代わりに真っ黒な霧が渦巻いていて、好奇心で触れてみると柔らかな弾力があつた。

床の方はあの闇の結晶だ。光を全く反射しない漆黒の床は、脳がそれを地面として認識しようとはしなかった。この床のせいで、カンテラの強さを調整することになった。

「おい、待て！ それは約束が違う！」

「なら早く行きましょ。あまり待たせたらメーブルが可哀想なもの」

「だったら最初から突入なんて止めればいいだろう。待ってくれ、シエラハ！」

カンテラの調整を中断した。俺は早足で前を歩くシエラハを後ろから抱くように引き留めて、落ち着かせてから自分が前に出た。とても妊婦とは思えないバイタリテイだ……。

「ユリウスがこんな身体にしたんでしょ……」

「そ、それは……お前、あんなに毎晩……迫るからだろ……」

「ふふ……そっちじゃないわ。こっちの方よ」

シエラハが俺の前にすり抜けると、細剣より繰り出された真空波が得体の知れない怪物を片付けた。その黒い影は絶命するとゴブリオンへと姿を変えて、すぐに灰となって消えていた。ドロップはなしで、驚愕は増し増しだ。

「前が出るなと言っているだろ……」

「そのセリフ、ユリウスにだけは言われたくないわ」

「そんなことはわかってる。だがその身体は……」

もうお前だけの身体ではない。そうベタベタのセリフを言い掛けて、やはり恥ずかしくなつて引つ込めた。ここ数日、みんながシエラハに繰り出したセリフだ。言つても陳腐だった。

「さあ、どんどん行きましょー！」

「お、おい、待てー！」

「ふふふっ、いつもと立場が逆ね！ 少しは普段の行いを思い知るといいわっ！」

「わかつてるっ、もう思い知ってるから自重してくれ……！」

「まだまだよ！ もっともっと、あたしたちはいつもユリウスのメチャクチャを心配してるんだから」

前を競うような形で、俺たちは倒すまで正体の判らない闇鍋みたいなモンスターたちを片付けていった。

早歩きの快進撃で地下3階までやってきた。

すると相も変わらず闇夜を歩いているかのような床に、白い紙きれが落ちていることに気づいた。

「あ、こらっ！ そうやって飛び出すなど言っているー！」

シエラハは遅れてそれに気づくなり、大きなお腹で走り出してそれを少し難儀そうに拾い上げた。俺が抗議をしてもシエラハからの返しはなく、彼女は紙切れに目を合わせて固まっている。……やがてその唇が、自分自身に聴かせるように動き出した。

「『分かれた種族を再び一つに……。始祖の時代の栄光を再び取り戻し、地上の支配権を再び我らが』……こ、これ……これは、お父様の言葉よっ！ お父様が昔、似たようなことを家の者に言っていたわっ！」

俺たちは今、この迷宮に化かされているのだろうか。なぜ都合よくもそこにシエラハの望む手がかりが落ちているのか。俺には驚きよりも警戒心の方が勝った。

「なかなか物騒なお父さんだな。もし本当に会えたら、ヒューマンの俺を認めてくれるんだろうか」

「お父様はやさしいから大丈夫よ」

「それは子供の頃のシエラハにだろう……。って、またかよっ！？」  
「進めばもつと見つかるかもしれないわ！ あたしを戦わせたくなかったら、ユリウスもがんばって！」

まるで子供に戻ってしまったかのようだ。シエラハの少女時代が両親の失踪により突然に終わってしまったとするならば、両親の足跡に彼女がこうなるのは筋が通ってはいる。だが、妊婦にそれをやられると見ていられない！

俺は再び可能な限りのカバーをしながら、闇の迷宮の奥へと進んだ。通常ならば踏み入れただけで外に帰りたくなるこの迷宮も、こうなっただけは障害を排除して突き進むしかなかった。



またあのメモが見つかった。シエラハが飛び付く前に俺が転移で緊急回収すると、子供みたいに抱きつかれてひったくられた。いつもはくつつくだけで恥ずかしがるのに、これではまるで幼児退行だ。

『友よ、私を許してくれ。私はそれでも、貴方が見た緑溢れる当時のシャンバラを見たかった。砂漠の外には豊かな世界がある。なのになぜ我々は、こんな荒れた土地で生きなければならない。このままでは我々は、いつかヒューマンに』

シエラハの父は都市長と政治的に対立し、理想郷を求めてシャンバラを去ったと聞いている。

「読んだ感じ、どうやらこれはシャムシエル都市長宛てだな」  
「そうね……」

「自分宛てじゃなくてガツカリしたか……？」  
「うん……実を言つとそう……。でも、お父様の言葉を聴いただけでも、嬉しい……」

これもまた、なぜこんな場所に落ちているのだろう。迷宮が俺たちを指名したのは、このメモ書きを読ませるためだと解釈するならば、この迷宮は意思を持っていることになってしまう。

「シエラハのお父さん、都市長とは方針が合わなかったかもしれないが、これを見た限りだと、シャンバラのことを真摯に考えていた

ようだな」

「うん……そうなの……。理想が高過ぎるところはあったけど、とてもやさしい人だったもの……。あたし、大好きだった……」

さぞ愛らしい娘だったのだろうかと、かわいい嫁さんを見つめながら思った。……もし本当に彼女の父に会えたら、さぞ敵しい歓迎が待っているのだろう。こんなにかわいい娘を男に取られて喜ぶ男親はどこにもいない……。

地下7階までやってくると、降りてすぐが広大なボスフロアだった。大型のマントイコアが俺たちの前に立ちはだかったが、シエラ八に無理をさせたくないのので事前準備しておいたプチ・メギドジェムで爆殺した。

白熱する光がマントイコアごと部屋の中央を小さな溶鉱炉に変えて、すぐに冷えて固まっていった。ちなみにボスドロップは融けた床に飲み込まれて消えたようだ。少し惜しいが、シエラ八に傷を負わせるよりはずっといい。

……というよりシエラ八に怪我をさせたら、俺がただでは済まない。

「ユリウス、いくらなんでもやり過ぎよ……。その爆弾はもっと危険な敵に使うべきよ……」

「なら引き返そう。今さらだが既に偵察の域を越えているぞ」

「それはわかってるわ……。でも！ ここまできて引き返せるわけないわ！ お父様の言葉の全てを手に入れるまで、あだし、もう帰りたくないっ！」

「気持ちはわかるがそれはわがままだ」

「わかってる！ それでもあたしはどうしても知りたいの！ どうしてお父様とお母様が、あたしを捨ててシャンバラを去ったのか……」

「頼む、どんなだって聞くからもう帰ろう……」

「だったらお願い！ あたしと一緒に前に進んで！」  
「はああ……っ」

お腹を大きくしているくせに、とんでもない無茶をする嫁をかばいながらボスフロアを抜けた。すると次の紙切れは地下8階への下り階段の目前に置かれていた。

『シエラハ、父さんと母さんを許してくれ。始祖様と瓜二つに育つてゆくお前を見てゆくうちに、私たちはお前の幸せにはならない道を選んでいた。だが、それでも私たちは欲しかったのだ……。緑と水に溢れた沃野を……』

都市長があればほどまでに緑化事業に入れ込むのは、友であるシエラハの父との対立と失踪があつたからなのだろうか。砂漠ばかりのシャンバラのエルフが緑の大地を手に入れようとするならば、それはもう征服戦争以外にない。

また進んでゆくと、地下8階の終わりに同じ白いメモが現れた。

『シャンバラは交易に依存しすぎている。今はいい。だがいつの日か、ヒューマンと我らの力関係が決定的な物となったとき、我らは不平等を強いられるだろう。そのいつの日かが訪れる前に、我らはやはり、分かれたれた部族を再び1つにしなくてはならない。そしてその日こそ、反撃の』

ツワイクとの経済戦争はいずれ起きただろう。仮に俺がいなくとも、シャンバラで発見された迷宮そのものが両国の対立を深めて、やがてシエラハの父が予言した状況に近付いただろう。彼女の父はヒューマンに敵しそうだが、俺には彼が言っていることが必ずしも

間違っているとは思えない。

「ユリウスがいてよかったわ……。ユリウスがシャンバラにきてくれたおかげで、お父様のこの予言が外れることになったのだもの」  
「有無を言わずスリールをかけられて、麻袋に突っ込まれて、馬車に積み込まれた上に、小さい方にマウントポジションを取られた覚えが俺にはあるぞ……」

「ええ、あの男がまさか自分の旦那様になるとは思わなかったわ」  
「そこは俺も同感だ。あの美人に、ここまで自分が入れ込むなんて思わなかった……」

「あ、あたしもよ……」

シエラハが大切そうにメモをしまい込むのを後目に、もう帰ろうと止めてもどうせ先に行かれるのだから俺はあえて前進した。このメモは俺たちを奥に引き込むための罠ではないかと疑いながらも、シエラハを止めることはできなかった。

さらに下のフロアに進むとまたメモを拾った。

『苦難の果てに、我らは新たな世界に至った。だがこんなものは予定外だ……。帰り道が、消えてしまうだなんて……。これではせつかく見つけた新天地を、仲違いした友に報告することも叶わない。なんてことだ。なんたる不幸だ。ああ、娘と、もう1度会いたかった』

その最後の一文をシエラハが朗読することはなかった。言葉を詰まらせて、感極まったように顔を覆って、鼻をすすりながら袖で顔を擦っていた。俺の方はそんな彼女の肩を抱いて、それから少し奥にまだあのメモが落ちていることに気づいて、それを拾い上げて朗

読した。

『いつの日か。これが我らの故郷に届く日を願う。これを捨てた勇敢な冒険者よ、我は偉大なる始祖ゾーナ・カーナ・テネスの末。どうかこれを、私の娘、シエラ八に届けてくれ』

朗読を終えるとすすり泣きが号泣に変わった。子供に戻ってしまったシエラ八を抱き締めて、彼女が泣きやむまで付き合った。……母親の号泣に胎児は何を思うのだろう。

「まだ十数年しか経っていない。きつと生きて会える」

「でも、戻れなくなっただって、書かれていたわ……」

「今もそうだとはい限らない。……それよりそろそろ食事にしないか？ 流した分の水分も補給しよう」

「食欲なんてないわ……。喉は、乾いたけれど……」

やはり偵察なんて止めておくべきだったな。今回の異変は侵略者タンタルスとは関係がなさそうだ。

シエラ八を真っ黒な床に座らせて、サイコロのように小さな圧縮食料を握らせた。自分の分を彼女の前で口に運んでみせると、まだ精神が幼少期に引つ張られているのか素直に真似をしてくれた。

それからこれも錬金術で作った『水精のケトル』を取り出して、そこに水を生み出すと1つのコップを回し合いながら喉を潤した。

出発前、俺たちは不測の事態が起きても無事に生還できるようにと、万全の準備を整えることになった。

ところがレシピを求めてシエラハが本棚の前に立つなり、あの白紙のレシピ帳が輝きだした。それだけ両親にもう1度会いたいという、シエラハの願いが強かったのだらう。

メーブルとシエラハがそれをテーブルに運んで、2人一緒にページを開いた。するとムキムキのお姫様の挿し絵が書き加えられたマスキュラーポーションのその次のページに、新たなレシピが追加されていた。それが3つもだ。

万能圧縮食料缶。水精のケトル。バリアリング。白紙の書まで俺たちの身を案じてくれたのか、それは至れり尽くせりのレシピたちだった。

「この本も、姉さんの赤ちゃん、見たいのかも……」

「思えばこの魔導書がなければ、リンハイムはユリウスのメギドジエムで敵ごと森を焼き払うしかなかったな……。正体はわからないが、この本はボクたちのことを常に考えてくれていると思うよ」

一つ目の「万能圧縮食料缶」は、キューブ1つで1食分の食事となる大遠征向けの万能食料だった。それが完成するなり、シエラハもメーブルもグラフも迷わずに自分の口へと運んだ。

「ん……味、いまいち……」

「いまいちなのに、なんだかもうお腹いっぱいだな……」

「そうね……。なんだか一食分、損した気分よ……」

「いや、なぜそうも速攻で食う……」

俺も食ってみたが、美味くもなく不味くもなく、ただ腹だけ満たされる味気ない非常食だった。

2つ目の「水精のケトル」は説明するまでもないだろう。魔力をかけると周囲が乾燥して、代わりにケトルに水が集まる魔道具だった。

元から空気が乾いたシャンバラでは集まりが悪く微妙だったが、森の覆いリーンハイムの方では、除湿と同時に水まで飲める至宝となるだろう。

「ユリウス……後でこれ、もう1つ作ってくれないか？ もう1人のボクに渡して、女王陛下にプレゼントしてあげたいんだ」

「あ。これは未練、まだありますね……たらたら……」

「な、ないよっ……。今のボクはユリウスとシャンバラ一筋だ！」

「同時に2人の人を愛しても、ユリウスは怒らないと思うよ……？」

「いや、どうにも返しにくい話をこっちに振るな……。それにグラフからしたら、そう簡単でもないだろう……」

あちらには本物のグライオフェンがいる。時の迷子であるグラフは、グライオフェンから見ればやはり邪魔者だ。そのことを最も自覚しているのは、目の前にいる爽やかな青髪と白い肌を持ったエルフ、グライオフェンだろう。

「ああ、コレで我慢するよ。コレと一緒にいると面白いからな……」  
「旦那をコレとか言うな……」

三つ目の『バリアリング』は、欲張って4つ用意することになった。2つは俺とシエラハ、もう2つはメーブルとグラフのために念



のために作った。

これは強い衝撃から身を守ってくれる指輪で、迷宮に挑む俺たちだけではなく、子供を宿す女性が身に付けてくれると、旦那が安心すること請け合いの夢のマトニティグッズだった。

その他にも迷宮でも使える小型のメギドジェムやエリクサー、へこたれたとき用の濃縮スタミナポジションを手配した。

こうして俺たちは万全の体制を整えて、現在では闇の迷宮に挑み、さらにその後も下へ下へと長い旅を続けていったのだった。

俺が止めてもシエラハは諦めない。本人が満足するまで闇の道を進むしかなかった。

・父母の足跡を求めて、奈落の果てへ 2 / 2 (後書き)

もう少しで第三部完結です。毎度のこととなりますが、プロットを作らなければならぬので、1〜2週間の休載に入ることになります。

次はもっと娯楽性や錬金術のわくわく感にスポットライトを当ててゆく予定です。

シエラハは諦めなかった。『もはやこんなものは威力偵察ですらない』と釘を指したのも既に昨日のことで、いつしか俺たちは本気でこの迷宮の果てを目指していた。

身重だというのに諦めない彼女をどうしても止められず、むしろ俺もこれだけ思わせぶりな物を見せられては、好奇心の方が勝るようになっていった。

本当にこの果てにシエラハの両親が見つけた新天地があるならば、自分だつてそこに行つてみたい。彼女の両親はきつと俺に良い顔をしないだろうが、彼らの飽くなき冒険心を賞賛したい。部分的にだが緑が蘇つた今のシャンバラを彼らに見せたい。

彼らは砂漠に閉じこめられた砂漠デザート・ウォーカーエルフを救いたいその一心で、この闇の迷宮の果てを目指し、ついには理想郷を見つけ出した。彼らもまた、今となつては分かたれた部族の1つと言つてもいい。少なくとも、シエラハと義父シヤムシエルにとつては、再び1つに束ねなければならぬ存在だった。

「ユリウスッ、あれを見て！ あれつて、入り口にあつた物と同じ穴よっ！」

「不用意に飛び出すなど、何回言えばわかる……」

「ふふふっ、反面教師になつたでしょ！ ほら、早くきてっ、やっぱりそうよっ、これがきつと出口よー！」

こうして1度の睡眠と6回の食事によるところの探索2日目の夜、

俺たちはついに『向こう側』への出口を見つけ出した。

シエラハの父母たちはこの迷宮の攻略にさぞ苦勞したことだろう。フロアを重ねることにモンスターが強くなるのは迷宮の常識だが、この地下81層目まで降りてくるとゴブリン1匹ですらオークのような生命力と筋力を持つようになる。

これでは1フロアを攻略するだけでも相応の人的被害があったはずだ。

「ふう……やつと着いたか。最初は偵察のはずだったのにな……」  
「私は最初からこのつもりだったわ、あのお父様の手紙を見てからずっと！」

「そういうファザゴンっぷりを見るたびに、親に会うのが怖くなる」  
「お父様もお母様はやさしい方だから大丈夫よ。ああ、早く会いたい……」

だがその気になれば迷宮の壁すら吹き飛ばせる脳筋妊婦と、間合いななど意味をなさない転移魔法使いの敵ではない。

フロアボスはプチメギドジェムによる瞬殺の連続で、そのイカサマまがいの攻撃力によって、俺たちはたった2日でここまでやってこれた。

とはいえさすがに無傷とは言えず、シエラハの金色のバリアリングにはひび割れが走っている。このバリアリングがなかったら、エリクサーがあるうとも俺たちは撤退を余儀なくされていただろう。

俺とシエラハは迷宮の出口の前に立った。

闇の中に青白い光が渦巻いていて、どの迷宮にも共通しているこ

とだが向こう側が見えない。

ところで急にシエラハが静かになったので、ふと隣に目を向けてみれば、先ほどまでの笑顔がそこから消えていた。

当然だろう。この先に彼女が望む真実があるとは限らない。シエラハは臆病風に吹かれていた。

「……ここまでできて帰るなんて言うなよ？ 覚悟はいいいな？」

「う、うん……。いいに決まってるわ……」

「お父さんとお母さんに会えるといいな」

「そうね……。でも、急になんだか、会えない気がしてきたの……。だって、もう10年以上が経ってるのよ……」

「さっきまでの強気はどこに行った。そう弱気になるもんじゃない」  
「でも……こんなにモンスターが強いのか？ お母様は無事にたどり着けたのかしら……。それにこの向こう側も、本当にお父様たちがいる世界に繋がっているのかしら……」

その細い肩を叩くのを止めて、俺はその美しいブロンドの髪の方を撫でた。こういうのは子供扱いなのかもしれないが、今の彼女には肩を叩くよりもずっと効果的だった。

「ごめんなさい……。最近のあたし、どうかしてたわ……」

「ああ、どうかしてたな」

「ちょっと、何よその言い方……」

「その身体でこんな深さまで迷宮を下ったやつなんて、シエラハが史上初だ。お腹の子はさぞ強い子になるだろうな」

子供の話をすると、弱気になっていたその姿が見るからに明るくなった。

「ふふ……虫も殺せないお嬢様だったあたしが、こんなたくましい戦士になったと知ったら、お父様もお母様もきつと驚くわ！ さあ、行きましょ、ユリウス！」

「実は俺も緊張しているんだ。『初めましてお義父さんお義母さん』って言わなきゃならないんだから……」

俺たちは離れないように手を繋いで、闇の迷宮の出口へと一歩一歩進んでいった。

俺たちは父と母が消えたもう1つの世界へと、最後の一步を踏み出してあちら側の大地を踏んだ。

・ E l f h e a v e n 1 / 2 (後書き)

分割の都合上、今回は短く、次々回更新分が長くなります。

目前の光景に驚くよりも、まず先に後ろを振り返った。それはシエラハも同じだった。

俺たちの背後には闇の迷宮の入り口がある。ただしあちら側にあった石碑はなく、どうやら誰でも入れる状態に見えた。

あのメモ書きにあるように、帰り道が消えるようなことはなかった。よくはわからないが、マリウスが管理する転移門が突然不調になった件もあったように、外的な要因で行き来が遮断されることもあるのだろうか……。

「暗いわね……。あら……。？」

「調子が悪いのか？ 無理をしないで照明魔法は俺が……。む？」

暗いのでシエラハがライトボールの魔法を使うと、ずいぶんとそれは薄暗かった。俺が発動させたライトボールも同様だ。2つの魔法は干渉しあって、チカチカと暗転している。

どうやらここは地下のようだ。ゾーナカーナ邸の闇の迷宮も地中に眠っていたので、さほどおかしいことではない。

「変ね……。」

「とにかくここを出よう。そっちのライトボールは消してくれ」

「わかったわ。……。あつ、少し明るくなったわね」

「そうだな……。」

上り階段を見つけたので、俺が先を歩いて慎重に足場の強度を確



認した。……大丈夫そうだ。最後に俺たちは白い光の漏れる壁を見つけると、それをシエラハが蹴り開いた。

壁だと思われていたものは朽ちかけの金属扉で、老朽化で歪んでいたのか俺が押しても全く開かなかった。

「ユリウス……あれ、何……？ それに、この空気……」

落盤の危険があったので俺は立ち尽くすシエラハの手をとって、外の世界へと出た。

世界は緑にあふれていた。その緑の世界のあちこちに、青白く透ける半円状のドームが地面から生えていた。けれども俺とシエラハが何よりも驚いたのは、この世界の空気そのものだった。

その世界には、俺たちの世界に当たり前に存在しているとあるものが欠けていた。

「あ……っ！？ ユ、ユリウス……まさか、こ、ここって……」

「ああ、こりや……まずいかもな。しかし無理をして正解だったとも言つべきか……」

ライトボールが不安定になるのも当然だ。そこは魔力無き世界だった。

「誰かくるわ……」

シエラハが言うには誰かがこちらに近付いてくるそうなので、俺たちは迷宮ではなく付近の茂みに身を隠した。それからしばらく身を屈めて待っていると、ふいに声が聞こえてきた。

「おかしいな。魔力反応が消えたぞ……」

「おい、それ壊れてるんじゃないか？」

「再起動してみてもダメだ。GPSにも反応なし」

「無駄足だったな。……なあ、もし脱走エルフを捕まえたら、牧場に返さないで俺たちで飼っちゃダメかね」

「俺は収容所送りは嫌だね」

「まあそうなんだが、1度くらい魔力を浴びるほど独り占めしたいだろ……」

声は次第にこちらに近付いてきて、俺たちの隠れる茂みの前を横切った。

魔力のない世界という時点である程度の覚悟はしていたが、こうして実物を見ると、自らの口を手でふさがずにはいらなかった。

あのアダマスと比較するとずっと小さく、悪魔的な翼もなく不気味さに欠ける。しかし血色の悪い肌、髪のない頭は、異世界からエルフを狩りにやってきた種族、タンタルスたちにそっくりだ。

エルフを家畜にしている先ほどの会話からしても、導き出される結論は1つだけだろう。

ここは敵地、タンタルスたちの世界だった。

「ねえ、ねえユリウス……これって、どういうことなの……？ どうして、どうしてお父様が見つけた世界に、あいつらがいるの……？」

かなりまずい状況だ。茂みの中で動揺するシエラ八の手を握って、とにかく安全な場所で落ち着こうと、やつらが消えた方角と反対側にシエラ八の手を引いて歩いた。

「ユリウス、聞いてる……？　ねえ……答えてよ、あたし、どうすればいいの……？」

「落ち着け」

「無理……無理よ、こんなの……っ、やっと会えると思ってたのに、こんなの酷い……っっ」

「ああ、酷い展開だ。だがここは敵地だ、スパイ時代の自分を思い出せ」

そう励ますと、彼女は頭を抱えてうつむいた。ちよつどいい倒木があったのでそこに座らせて、俺も寄り添って座った。

父と母が見つけた新天地に、なぜかタンタルスたちがいる。

やつらの侵略を受けた？　いや、恐らくは違う。

アダマスたちは俺たちの世界を侵略するにあたって、肉体改造を受けたと言っていた。その果てがあのだ死身の成れの果てだ。だが俺たちが見たあの個体は見るからに弱そうだ。

それとエルフを家畜にした牧場の話をしていた。彼らの世界には魔力がなく、魔力を生み出すエルフを家畜にしているとアダマスたちが言っていた。

「あいつら、気になる単語を使っていたな。脱走エルフ、牧場。聞くからにこの世界に、エルフを家畜にした牧場があるかのような表現だ」

「だ、だったら……」

震えるシエラ八を抱いて、ずっと寄り添って彼女が落ち着くのを待った。あれこれと推理を語りたいのが本心だが、それはシエラ八

を余計にうるたえさせるだけだった。

震える母親に子は何を思うのだろう。俺もまた敵地に身を置くことが不安だったようで、くっついてしていると気持ちが悪いらしいだ。

「ユリウス、どうしよう……。あたしたち、帰るべき……？」

「まだ結論を出すには材料が足りないな。しかし帰り道もあの通りあることだ、ここは一つ……」

「どうするの……？ あたし、もうどうすればいいのかわからない……」

「仲間を助けよう。家畜化されているエルフを強奪し、シャンバラに連れて行こう」

てつきり大声で驚かれると思った。ところがシエラハの反応は再度の抱擁だった。彼女は頼るようにこちらを強く抱き締めて、おでこを俺の肩に擦り付けた。同意というよりもこれは感謝なのかもしれない。

「誤解するな、それが状況的に正しいと思ったからするだけだ」

「恥ずかしがらなくてもいいじゃない。あたしも賛成よ、あたしもそうしたい……。助け出したエルフから、お父様たちの行方がわかるかもしれないもの……」

「ならやろう。ここまできて、手ぶらで帰るなんてあり得ないからな」

「そうね、仲間を見捨てられるわけないわ。必ず助けましょ」

「ここは危険だ。だが危険だからこそ、可能な限り情報を確保して帰らなければならぬ」

これから俺たちはタンタルスに家畜化されたエルフを救い、闇の

迷宮の中に逃がした後、この世界にあるはずの白の棺と、闇の迷宮の両方を吹き飛ばす。

砂漠すらガラス化させるあのメギドジエムならば、神代の時代の遺産であるうとも跡形もなく全てを融解させてくれるだろう。

本作がネット小説大賞一次選考に落選してしまいました。

こうなってしまうと、新作にもつと力を入れないとまずい状態です。非常に心苦しいのですが、第4部からは3日に1話の更新に変更することにしました。

「隠居聖女の三食もふもふ付きブックカフェ生活」と「冷やし魔大陸」は無事通過となりました。

この機会にもしよろしければ、こちらの過去作を読みに来て下さい。どちらもお気に入りの一作です。

シエラ八には外で潜伏してもらい、潜入は俺が受け持つことに決まった。それが最も合理的だったので、シエラ八も反論はしなかった。だがその代わりに保険をかけようとした。

「ねえ、ユリウス……。これ、持って行って……」

黒曜石の指輪がはめられている薬指の2つ隣、俺の人差し指に彼女は自分のバリアリングをすかさず通してきた。

「待ってくれ、これはシエラ八が持っていてくれないと俺が不安だ！」

「でも何があるかわからないわ。あたしは外で脱走を補助するだけなんだから、これはユリウスが持っているべきよ」

「何が起きるかわからないのは外も同じだ！」

「いいのっ、返してもあたし受け取らないわ！ 付けて行って！」

まるで子供みたいにシエラ八両手を背中後ろに隠してしまった。気持ちは嬉しいがこういうのはかえって不安だ……。だがシエラ八というのはたおやかなようで、ときに頑固者だ。俺はバリアリングを2つはめていくしかないようだった。

「必ず帰ってきて……。貴方のいないシャンバラなんて、あたし嫌よ……。あたし、自分のわがままを今、後悔しているの……。こんな世界、こなければよかった……」

すぐにさっきの連中に追い付かなければならないのだが、シエラ八のやわらかな抱擁だけは拒めなかった。彼女のやわらかな胸の感触を感じながら、こちらでも強く抱き締めて、なんとしても父と母の足跡を掴もうと決意を新たにした。

「やるべきことをやってくる。タンタルスたちにとってエルフは命より貴重な資源なのかもしれないが、俺たちにとっては同胞だ。助け出して、俺たち自慢のシャンバラを見せてやろう！」

シエラ八が抱擁を解いてくれるのを待ってから、俺は世界の裏側へと転移した。奇妙な話だが、こちらの世界も裏側は同じ情景をしていた。

方眼紙のように刻まれた光の線の中を、俺は歩いては現実世界に戻って辺りを確認しては、さっきの連中を捜した。

無事にターゲットを見つけ出し、尾行を終わらせた。この世界はとても奇妙だ。ドームの中は高度に発達している鉄と石の文明なのに、外側は手つかずの自然ばかりだった。もし俺たちが牧場のエルフを強奪したら、まずいことになるのかもしれない。

しかし俺たちは奪われた者を取り返すだけだ。エルフの人間牧場いや、収容所と呼んだ方が相応しい施設までやってくると、俺は潜入を開始した。

魔力のない世界では少し発動時の負荷が大きかったが、だてに転移魔法の天才と呼ばれてなどいない。高い外壁も見張りも鉄格子も、転移魔法使いの前にはなんの意味もなさなかった。



こうしていともたやすく収容所に潜入した俺は、牢屋の中のエルフに渡りを付けて、その代表と顔を合わせるようになった。

「ヒューマン……神話の中だけの存在かと思っていました……」

彼女はエルフなおばさんの容姿をしている。俺を見て最初は驚いていたが、他のエルフと違って品があった。しかし何よりも残念なのは、彼女たちが白い肌をしていたことだ。残念ながら彼らは、シャンバラからやってきた砂漠エルフではなかった。

「こつちの世界には、俺たちみたいなのはいないのか？」

「さあ……私たちは一生、このエルフ牧場から出ることができませんので……。ですが元いた世界では、貴方のような方はおりませんでした」

かといって森リフ・シカーエルフとも少し違う。彼らは耳がたれていて、おばさんに言うのも妙だが見るからにかわいらしかった。あの新王が見たら、きつと歓喜乱舞して相当にウザつたい反応を見せるに違いない。

「その話をもつと聞きたい。つまり貴女たちは、別の世界から連れてこられたと……？」

「そうです。もう、何十年も前の話になってしまいましたが……。ある日、オークの軍勢が現れて、私たちの国を……。ああ、あんな、あんな酷いことをするなんて……」

それはグラフの世界で起きた悪夢の続きのようなものだろう。彼女は両手で顔を覆って、よっぱど辛いことがあったのかすすり泣いた。最初は気まぐれでしかなかったが、こうして助けにきてよかつ

たと思った……。

それとこの施設に入るなり、魔力を少しずつ吸われている感覚があった。こうなると魔法が得意ではないシエラ八をあちらに待機させて正解だった。

「それは俺たちの知っている流れと同じだな」

「同じ……？ それは、どういうことですか……？」

「俺たちの世界もやつらに侵略されかけた。砂漠エルフも森エルフも、もう少しのところで国ごと滅びるところだった」

「あの軍勢に勝ったのですか！？ あんな無尽蔵の敵を相手に、どうやって！？」

大声を上げていることに気づいて、彼女は自分で自分の口を押さえた。少しするとその目が羨望と妬みが混じったような、苦悩を混じらせたものになった。

破滅を迎えた自分たちの世界と、俺たちの世界とで何が違うのかと、静かな激情を燃やしている。そう見えた。

「なあ、こんな息苦しいところから抜け出して、俺たちの国にこないか？」

「わ、私たちを助けてくれるのですか……！？」

「もちろんタダではない。リスクを冒すのと引き替えに、あなたたちが持っている情報が欲しい。だから、ここにいる全員に生きて、俺たちの世界にきてもらいたい」

「ヒューマンの世界ですか……」

「違う。あちらはヒューマンとエルフが共存する世界だ。俺たちの

リーダーは共存を望んでいる」

結界の中で生きるしかないエルフたちが求めた新天地が、同じエルフの地獄となっていたのだから嫌な皮肉だ。嘘や冗談を疑われないように、俺は表情を崩さずに真剣な目を彼女に向け続けた。

「どんな世界でもかまいません。ここでは魔力の枯れた者から順番に殺されてゆきます。どうか私たちを、貴方の世界に連れて行って下さい」

「全員だぞ、1人も残したくない」

「ああ……なんてやさしい方……。貴方は神の使いなのかもしれないね……」

交渉成立だ。そうと決まったので夜までの時間を作り、リーダーには信頼のおける者への連絡を頼んだ。ちょうどこれから中庭での日光浴が始まるそうだ。

俺の方はシエラハと合流して、成果を伝えて近辺への待機をお願いした。

「500人!? そんなに捕まっているの!?!」

「少し骨が折れるが、先頭はシエラハに任せる。俺はしんがりを受け持とう」

弱っているシエラハには言えなかったが、10年前はその10倍いたそうだ。

あんな無理な環境で飼育されるように監禁されては、上手く子供も育たないそうだった。

「バリアリングは返す」

「嫌、それはもうしばらく持っていて。せめて脱獄が完了するまで、ユリウスが持っていないきや受け取らない」

「それはないぞ……。お願いだから身に付けてくれ、もう気が気じゃない！」

「だったらしんがりはあたしがするわ」

「それもダメだ！」

残りの時間はシエラハと一緒にこの奇妙な世界を眺めて過ごした。この世界には魔力がない。そこから俺たちが魔力を奪い取ったら、多くのタンタルスたちが苦しむことになるだろう。

なんて救われない世界なんだと、隣に寄り添うシエラハと共にただタンタルスの奇妙な世界を眺め続けた。

全ての準備が整うと、月のない空を見上げてあちら側に轉移した。

「あれは監視カメラ。つまり機械式の目のようなものです。このプラントのスタッフたちが私たちを常に監視しています」

「ならば壊すか」

「ダメです、そんなことしたら警備が現れてしまいます。あのカメ

ラの死角になる道を進むしかありません」

そこで俺は少し考えて、リーダーの部屋の壁へと触れた。転移魔法の応用で、その壁だけを世界の裏側に飛ばすと、壁はえぐり消える。

「な、なんという力……！ 貴方はやはり天使様か何かなのですか！？」

「いや、そちらと技術体系が異なるだけだ。それより消して欲しい壁を教えてください。脱走路を作るぞ」

監視カメラとやらを避けて、壁という壁を世界の裏側に送り込んだ。独房は少なく、多い物だと30名ほどがまとめて一室に監禁されていたので、覚悟していたよりも脱走路作りはサクサクと進んだ。

最後にエルフ牧場 ではなく、魔力プラントとやらの分厚い外壁に穴を空けてやると、脱走劇の始まりだった。

既に俺の背に集まっていた耳のたれたエルフたちが、俺を押し流すように一斉に外へとあふれ出て、外の世界に感激していた。

「ユリウスッ、先頭は任せて！」

「おい待て、バリアリングを持って行け！」

「気が変わったから嫌！ 先頭はあたしに任せて！ みんな、こっちよー！」

シエラハがエルフたちに呼びかけると、皆がシエラハを追って走り出した。似た姿をしたシエラハを見て安心したのもあるだろう。

シエラハが先頭で俺がしんがりだ。たった2人で俺たちは500

人を誘導した。子供をのぞけば老齡はあのリーダーだけで、それだけあの魔力プラントでの生活が過酷なことを物語っていた。

追っ手が先か、俺たちの闇の迷宮入りが先か。残念ながら人数が人数だったので、あと一步のところまで俺がしんがりの役目を果たすことになった。

「止まれ、止まれ！ 止まらなと撃つぞ！！」

「おい不用意に撃つな、壊したら俺たちが損害賠償させられるぞ！ それにどうせ逃げ道はない！」

威嚇にやつらが妙な道具を使ってきた。それは筒状の妙なもので、引き金を引くと高威力のマジックアローが発動する。

だがリーチ無制限の俺との相性は、あまり良くなかったようだった。

あまりの弱さに拍子抜けした。あのアダマスたちのように異常な自己再生能力と強大な魔力を持つていると思いきや、短距離転移からの背中への斬撃程度で、追っ手のタンタルスは赤い血しぶきを飛ばして草地に倒れ伏せた。

「ひ、人殺し!!」

「エルフを家畜にしておいてよく言っ」

「撃て、撃てっ、あの耳の短いエルフを撃てっ　ギャッツ?!?!」

「しかし、なんだ？　コイツも弱いな……」

兵士だというのに、彼らは服の下に鎖かたびらさえ身に付けていない。武装らしい武装と言えば引き金の付いた妙な筒だけだ。やつらは恐怖に駆られた顔でその道具を俺に向けると、機械式のマジックアローを雨あられと放ってきた。

再び転移でやつらの背後に飛ぶと、俺の居た草地だった場所には破壊による砂煙が立ち上り、それがちょうどいい目くらましになっていた。

「やったか!?!」

「ざまあみやがれっ、殺人鬼め!」

敵の数は10数名ほどだ。後ろから立て続けにやつらの背中を斬り付けて、人数を数えやすくなるまで敵を減らした。あまりに弱すぎて、あっという間にもう残り6名だ。

「その筒、面白いな。それがあれば魔法の素養がなくとも、マジックアローを連発できるのか」

「な、なんなんだ、コイツ?! 人が消えるなんて、そんなのあり得ない……!!」

「ば、化け物…… ツツ、ヒ、ヒイツツ!!」

やつらは逃げたエルフを追おうなんて、もはや考えてすらいらないようだ。俺に魔法の筒を向けながら、ジリジリと後退している。背後からの奇襲に怯えてしきりに後ろを見るので、次は側面からの攻撃を仕掛けてもいい。

加えてやつらは気付いていないようだが、マジックアローが着弾するたびに辺りに魔力が拡散するので、こっちは撃たれば撃たれるほどに魔法の発動が快適になっていった。

「ギャツツ!!」

「た、助けてっ、こんな危険な仕事なんてっ聞いてないっ!」

「こんなやつどうやって倒せっというんだ! て、撤退」

あまりに一方的なので同情しかけた。だが、こいつらは自分たちの利益のためだけに、シャンバラやリンハイムを征服しようとした連中だ。殺傷力のある武器を持って攻撃してきた以上、民間人も言えない。……全て片付けた。

「また新手か……」

しばらく身を伏せて待機すると、さっきの連中よりもずっと大きな筒を身に付けた連中が現れた。

一方で俺の背中の後ろでは、エルフたちが自由を求めて丘を駆け



上っている。

彼らの一部は増援に気付いたのか悲鳴を上げて、その中には動揺のあまり転んでしまったり、息が続かなくて膝を突く者もいた。魔力プラントでの生活がよっぽど過酷だったのか、だいぶ弱っているようだった。

「ぜ、全滅している……」

「隊長、妙です。こいつら、背中ばかりを鋭利な刃物か何かで斬られています」

「各員、円陣を組んで周囲を警戒しろ！ 魔力プラントのエルフに、こんな芸当は不可能だ！」

そいつらはさっきの連中と異なり、頑丈な兜と全身鎧をまとっている。黒焦げの聖剣であれを斬るのは難しいだろう。

「撃て、手当たり次第に撃て！！ 敵はどこかに潜伏しているはずだ！！」

隊長の判断に従って、やつらの筒の1つ1つが土砂降りのようなマジックアローを辺りに放った。

背中ばかりを狙われた傷痕から、潜伏を得意とする敵を想定したところまでは正しい。

だがそんなことをされたら、丘の上のエルフたちに流れ弾が飛んでいってしまう。

よって仲間を撃たれるわけにはいかなかった俺は、やつらの円陣の内側へと潜り込んで、そこでプチ・メギドジエムを起動させた。

「その筒もいただこう」

起爆まで少しあったので、こちらに気付いて振り返った勘のいいやつから、その破壊力抜群の筒を盗んでやった。

それから世界の裏側で一息ついてから、その肩掛けベルト付きの筒を抱えてみた。持てなくもないが、怖ろしく重い。どうやらこの連中は、アダマスほどではないが多少の肉体強化を受けているのかもしれない。

大きい筒と小さい筒を抱えて世界の裏を歩き、丘の上の座標まで進むと元の世界に戻った。

メギドジエムは魔力無き世界でも無事に発動し、溶鉱炉のような爆心地を作って追っ手の全てを消し飛ばしていた。

「そこら中で何か鳴っているな……。少し派手にやり過ぎたか……？」

彼方に見える全ての都市やさっきの魔力プラントから、まるで敵襲を告げる鐘楼のように騒がしい警告音が鳴り響いている。しかしここまで時間と距離を稼げばもう俺たちの勝ちも同然だ。

闇の迷宮に群がる長蛇は、次々と迷宮内部へと飲み込まれていつている。俺は敵襲を警戒しながら辺りを注視して、それと同時に辺りの魔力や、裏側の世界での歪みを観察した。

「ユリウスッ、よかった、無事だったのね！ えっ、そ、それって何……!?!」

「やつらの武器だ。せつかくなのでいただいてきた。これはなかなか凄いで。これは魔法が使えない者でも、機械の力でマジックアロ―を連発できる装置のようだ」

「あたしにはそんな凄い物には見えないけれど……。あ、だけど、

これ持って帰ったらマリウスさんが喜びそう」

「だろうな。あいつならこれを複製してくれるかもしれない」

「ううん……。それはいくらなんでも、彼女を買いかぶり過ぎじゃないかしら……」

「いや、アイツは転移装置を復活させた男だ」

「……そ、そう」

「悪いが代わりに持って行ってくれ。俺はこれからこの闇の迷宮と、この眠っている棺を爆破する」

「わかったわ。……あ、でも、少しだけ待って」

「なんだ？」

「あ、あのね……」

シエラハが少し迷った様子でこちらを見た。シエラハは色黒なので、ライトボールの明かりすら不安定な地下では表情が上手くうかがえない。

そこで俺はどうにか顔を読み取ろうとシエラハに一步近寄った。するとなぜか彼女の方までこちらに飛び込んできて、それから不意打ちも不意打ちのキスを頬へとお見舞いしてくれた。

「死んだら許さないわ。絶対に無事に戻ってきてね……。そ、それじゃ、行くわ！」

「あ、ああ……」

そんなに恥ずかしいなら始めからやらなければいいのに、シエラハは逃げるように闇の迷宮の暗黒へと去っていった。

これから自分が迷宮ごと爆死しかねないミツシヨンに入るとい

のに、危つく俺まで色ボケしかけるほどにシエラハは可憐だった。

・楽園から魔力あふれる沃野へ 1 / 2 (後書き)

遅くなつてすみません。

あと3話ほどで第三部完結の予定です。

棺の場所ならば既にだいたいの目星が付いている。あれを破壊したと知れたらマリウスが発狂しそうだが、あんなでかい物を迷宮に持ち込むことはできない。よって持ち帰れないならば、破壊のみだ。

俺は地底の中で、ゆいいつ魔力の感じられる座標へと己を転移させた。成功だ。真つ暗闇の世界をライトボールで照らすと、見覚えのある白い棺が目の前に眠っていた。闇の迷宮のあるところに白の棺がある。あの仮説は正解だったのかもしれない。

俺はプチ・メギドジエムをそこに置く。……それから少し迷った。本当にこれを破壊すべきかどうかを。だが結論はやはり、破壊だ。タンタルスの世界とシャンバラを繋ぐ道は、この世界から必ず抹消しなくてはならない。

「遣してくれた先人たちには悪いが、すまん、消えてくれ」

ジエムを起動して、俺は元いた闇の迷宮の前に戻った。

ところが俺があちらで破壊を迷っている間に、追っ手がここにやってきてしまっていた。さっきのやつを越える超重武装のタンタルスが、突然現れた俺に巨大な筒を向けている。

すぐに撃たれるかと思ったが、やつらは固まっていた。棺の爆破により大地が揺れると、不安定な装備なのかやつらの数人が地に膝を突いた。

「コイツ、まさか闇の迷宮の向こう側の世界からきたのか……？」

「隊長、早く攻撃の許可を！！ 仲間の敵を討たせてくれ！！」

「ダメだ、撃てば迷宮側に被害が出る！！」

……こちらの世界でも、これのことを闇の迷宮と呼ぶのだな。どうやらタンタルスにとって、闇の迷宮は侵略の窓口であり、もしも破壊すれば責任を問われるような重要な場所のようだ。

「耳の短いエルフよ、お前は何者だ……？ お前はどこの世界からやってきた……？ プラントのエルフたちをどこにやるつもりだ？」

このリーダーは話のわかるやつのようにだった。しかし出会った場所とお互いの立場が悪かったな。

俺はその質問に答えずに、メギドジェムを手のひらの中で起動させた。

「ヤツから膨大な魔力反応！！ コ、コイツ、自爆する気ですっつ

！！」

「なっ、全軍待避ッッ、待避ッッ！！」

この地下からやつらが逃げ出そうとするので、軽めのマジックブラストで登り口を落盤させた。

「俺たちの世界には行かせない。すまないがこの迷宮ごと消えてくれ」

臨界寸前のジェムを足下に落とすつつ、俺は報復のマジックアロアの弾幕の中をバックステップで飛んだ。止めるとか、助けてとか、お母さんとか、胸の痛む叫び声が響いたが迷いは許されない。続けて闇の迷宮に入るなり俺は転移魔法を発動させて、後方で起きる時

空の歪みから逃げた。

方眼紙のような世界が揺れるように渦巻いて、リンハイムでの掃討戦の日のように俺を渦の中に飲み込もうとしたが、こちらは同じ失敗を繰り返さなかった。

破壊により生み出された次元の狭間に飲まれるよりも早く、俺は迷宮内部の座標へと己を転移させた。

「……危なかったな。危うく時の迷子どころか、本当に自爆するところだったか」

後ろを振り返ると下り階段があった。しかしその階段から下に世界はない。あるのは真っ白な光だけで、そこから先は重さという概念すらなくなっているのか、崩れ砕けた闇の結晶が光の世界に浮遊していた。

これならばあちら側の迷宮が仮に無事であろうとも、こちらにたどり着くことなど不可能だろう。

「ユリウスツ、ああ、よかった……！ もう、心配させないで！」  
「そこはお互い様だろう。それより見る、ここまで壊せばやつらもこちらにはこれない。俺たちの勝利だ」

「え……っ!？」

「迷宮が壊れるとこうなるんだな。しかし、もう少し威力を落としたり物を作っておくべきだったな」



「ねえ、ユリウス……。わたしたちを追ってきた人たち、大丈夫かしら……」

「きつと上手く逃げただろう。それよりも帰ろう、ここまで崩れたら大変だ」

「ゾツとしないこと言わないで……。あ、でも、あたし……」  
「どうかしたか？」

シエラハは俺に文句を付けるのを止めて、崩れた下り階段の前に立った。何をするかと思えばそれはお祈りだ。彼女は消えた父母がたどり着いた世界に祈りを捧げて、しばらくすると少し吹っ切れた様子で俺の前に戻ってきた。

「さ、帰りましょ。お父様とお母様のことは結局わからなかったけれど、あの人たちをシャンバラに連れて行ったら、都市長がとっても喜ぶわ。分かれた種族を再び1つに。それこそが父とあの人の願いだつたもの……」

「戻るのが遅過ぎる。約束が違つと、都市長に怒られるのも見えているがな……」

「ふふふつ……。あたし、あの人に逆らつたのは生まれて初めてかもしれないわ！ それもこれも、全部ユリウスの影響ね！」

「それは冗談でも、都市長に言わない方がいいな……」

しんがりにはシエラハとあのリーダーエルフ。先頭は俺が受け持つて、俺たちは踏破済みの闇の迷宮を進んでいった。全員分の食料も水もなく、エルフたちが弱っているのもあつて、決して簡単な道の上りではなかった。

それでも俺たちは希望を求めて闇の迷宮を進み、この果てに本当の理想郷があるのだと仲間を励ました。幸いは迷宮の階段に、階層を示す数字が刻まれていたことだろう。

1つ1つ若くなつてゆく数字を追いかけて、俺たちは元の世界、自由と魔力にあふれる理想郷シャンバラへと、一步一步彼らを導いていった。

シエラハの父母が行き着いた先は魔力無き緑の大地、タンタルスの世界だった。この事実が指し示す結論は、きつとシエラハの望む答えではない。情報が欠けていたのでまだ何とも言えないが、あの世界に砂漠エルフ《デザートウォーカー》はいなかった。

ならば彼らは、シエラハの父母たちはどこへと消えたというのか。俺は脳裏に浮上した仮説に口をつぐみ、ただあちらで待つメーブルとグラフの笑顔だけを思い描いた。

……何もかもが仮説ばかりだが、ただ1つだけ確かなことがある。それは、彼女たちがごめんなさいの一言だけで許してくれる可能性は、0%だということだ。メーブルいわくはかないセミちゃんは、己に起こり得るこの先の未来に恐怖していた……。

### ・第3部エピソード タンタルスの真実

危険と隣り合わせの2日間の旅を乗り越えて、かつて分かれた一部族『ウェットランダー湿地エルフ』の500名はついにシャンバラへとたどり着いた。タンタルスの魔力プラントで飼育されていた彼らが、長い苦難の果てに隷属のくびきから解放されたのだ。

「ありがとうございます、ユリウス様……。貴方はやはり、私たちの天使様です……。ああ、こんなにも近くに、魔力があふれる世界があっただなんて……」

彼らの目の前に現れたのは砂漠であり、廃墟化したゾーナカーナ邸宅だったが、彼方には町とオアシスが見えていた。誰もが自由な新天地に心躍らせて、もう過酷な生活は終わったのだとむせび泣いた。

闇の迷宮の防衛にあたっていた軍人たちは、突然現れた500名の耳のたれたエルフにずいぶんと驚いていたがな。だがそこはシエラハが持ち前のカリスマと処理能力でどうにか話をまとめてくれた。

一通りの引き継ぎ処理が終わると、湿地エルフを付近のオアシスに移送することになった。シエラハと俺の役割はそこでいったん終わり、やっと一息吐くとシエラハがどこか浮かぬ顔で俺の隣に立った。

「闇の迷宮を抜けるまでは、余計なことを考えないようにしていたけれど……。ねえ、ユリウス、これって、どうということなのかしら……。私のお父様と、お母様は……。いったいどこに消えたの……。？」

「その疑問はもう少し先延ばしにした方がいいな。彼らから詳しく話を聞けば、何かしらわかる」

「でも……」

「無事に戻ってこれただけでもめっけものだろう。俺たちは運悪くやつらの世界に行き着いて、だが古の同胞を助けて、侵略経路を破壊して戻ってきた。独断ではあるが、誇ってもいい大戦果だ」

「みんな怒ってるでしょうけど……」

「……そうだな。まあ、メチャクチャに怒られるのは確定だろう」

「ごめんなさい、あたしのわがままのせいで……」

「いいんだ。結局俺は止めなかつたんだから、シエラ八と同罪だ」

結婚式を挙げたあの神殿が懐かしくて、その前で俺たちは少し休んだ。するとメーブルとグラフがラクダを飛ばしてやってきて、バカな俺たちを叱りつけた。

「おい待て、なんかおかしいだろ！　なんで俺の方が責められてるんだよっ！？」

「はぁ……。ユリウスには、失望した……」

「ボクたちがどれだけ君たちを心配したと思う。君がシエラ八を止めてくれたら、こんなに思い悩むことはなかったのに……」

「お前らあつちも責めろよ！？　どんだけシエラ八に甘いんだよ、お前ら……！？　そしてそのしわ寄せを無理矢理にこっちに持つてくるな……！」

「ユリウスだって……姉さんが止まらないことくらい、最初から、分かり切ってた癖に……」

「一緒に行くとはめたのは君だろ。シャムシエル様はあれだけ反対

してたじゃないか」

文句をたらたら言いながら、メープルは矛盾した行動を取った。よつこらせと人の胸に抱き付いて、その必要性があるのかはなはだ疑問であるが、こちらの背中に両足を回してしがみ付いた。

「失望した……」

「なら降りろ」

「それと、これは、別……。はあ、もう一度、会えてよかった……。

おかえり」

「ただいま」

その後もメープルとグラフは隙あらば文句をたれていたが、俺たちが想定していたほどには怒ってもいなかった。シエラハと俺は内心それにホツとしながらラクダの背にまたがって、居心地のいい自分たちの家へと運ばれていった。

ふう…… 思えば大変な大遠征になってしまった。

さてオアシスの湖畔に輝く我が家に帰ったら 帰ったら、そうだな……。

シエラハの水浴びをのぞこう。

・

『私のお父様とお母様はどこに消えたの？』

あの日シエラハが俺に言ったその疑問は、湿地エルフを保護してより5日後にとある書物が示してくれた。

それはあの魔力プラントの職員が、エルフの少女を哀れんで差し入れてくれたものだ。それはエルフのものではなく、タンタルスの歴史を刻んだ児童向けの歴史書だった。

少し意外だったのは、彼らの言語が俺たちの言語とほど同じだったことだ。ただ非常になまりが酷く、歴史書なのもあって固有名詞もまたやたらと多かったので、獄中のアダマスを頼ることになった。

俺たちにはまともに読めなかったが、タンタルスである彼ならば読める。俺とシエラハは覚悟を決めて、湿地エルフの少女より歴史書を借りて、アダマスの牢獄を訪ねた。その歴史書に刻まれた内容は、シエラハの父と母の行方を暗喩するものだった。

「つくづくとんでもないやつだな……。まさか、俺たちの世界に行つて、無事に戻ってくるなんて、貴様は化け物だ……」

ヤツは本来のタンタルスと見比べれば、もはや異形と言ってもいい姿だ。しかししばらくの牢獄生活で中で角が取れていたのか、俺を見る目はどちらかというと妙に好意的だった。

「お前、なんだか丸くなったな？」

「ケツ、そう言われると思ったぜ。だが、まあ間違つてもいないな。実はあのシャムシエルの爺さんが、暇を見つけてはここにきてくれてな……」

「え、都市長が……？ どうして……？」

「最初はいけすかないジジイかと思つたが、あれは話のわかるジジイだ。貴様らが慕うのもわかる。ま、こっちは貴様に迷宮ごと浸水

させられて、あの時は死にかけたが……」

「冗談とかも言えたんだな、お前……」

「ねえ、それよりも教えて、アダマスさん！ これ、貴方の世界の本なのよねっ!？」

「そうだ。表紙は違うが、中はガキの頃に読んだ覚えがある」

「よければ翻訳してくれないか？」

「いいぞ」

「え……そんなあっさり……。本当にいいの……?」

シエラハが驚くと、ヤツは俺から歴史書をひったくった。こいつらには国家への帰属心がないんだったか。こいつらの世界のルールは金で、金の切れ目が縁の切れ目、といったところなのか。

「こちらなりに思うところがあつてな。どこを読めばいい？」

「ここだ。ここを読んでくれ」

鉄格子ごしにページを開き、文面に指を指した。するとヤツはさつと目を通して内容を鼻で笑う。態度は悪いが、かなり興味深そうな顔付きだった。

「『我々の始祖はここではない別の世界からやってきた。始祖の世界には勝てる見込みのない別種族があり、いつの日かやつらに滅ぼされてしまうことが決まっていたからだ。……彼らは果てしなき旅路の果てにこの地へと至り、ここを真の楽園とした』」

その一文こそが全ての答えだった。俺たちの知っているある事実に酷似していた。

「次はここを頼む」

「『我々の先祖は誰もが魔力を持っていたが、やがて魔力なきこの世界に順応し、今の姿となったという。その始まりの者たちのことを』 クククツ……」

そこが俺たちが一番知りたいたい部分だ。なにせ教科書の中に、俺たちがよく見知った名詞が混じっていたからだ。

アダマスは血色の悪い顔で、意地の悪い表情を浮かべて、けれども悪意のない淡々とした言葉で締めくくってくれた。

「『その始まりの者たちのことを、ゾーナカーナ・テネスと呼ぶ』」

それが真実だった。震えるシエラハを強く抱きしめて、彼女を落ち着かせた。事実を受け止めかねてか、シエラハは呆然としている。時系列がおかしいが、それはグライオフェンという前例がある。決してあり得ないことではない。

この異形の怪物たち、発展しすぎた世界の住民タンタルスの正体は

「その女はシエラハ・ゾーナカーナ・テネスと言うらしいな」

「ああ。そして彼女の父と母、それに従う者たちは新天地を求めてこのシャンバラを去った」

「あたしにはわからない……。それって、どういう、意味……?」

「腹にガキがいるのに悪いな。俺たちは同じだったんだよ」

「同じって、どういうこと……? 私のお父様とお母様はどこに……」

「もう気づいてるんだろ。ただ認めたくねえだけだ」



「アダムス、もういい、ここから先は俺が後で伝える」

「いいやダメだね、こっちは牢獄で死ぬほど暇してんだ、真実を突き付けてやるよ！俺たちだ、俺たちだったんだよ！！」

「止める、アダムス！！」

「俺たちこそが、消えたゾーナ・カーナに従う一派の成れの果て！  
！俺たちの祖先は、貴様らエルフだったんだよ！！」

「え……………」

シエラハの震えが止まった。やはりもう気づいていたのだろう。  
すぎるように彼女は俺の胸に顔を埋めて、あふれてくる涙に悲し  
そつに鼻をすすった。

「きつとグラフと同じケースだな。グラフとは比較にならないほど  
に遠い過去に、シエラハの両親は飛ばされていたのだろう。彼らタ  
ンタルスこそが、ゾーナカーナ・テネスの末。デザートウォーカー砂漠エルフは、彼ら  
の遠い祖先だ」

かつてシャンバラの砂の大地に絶望した者たちは、緑にあふれる  
理想郷を求めてこの地を去っていった。そしてそれは果てしない時  
を越えて、もう1度このシャンバラに帰ってきた。

「そんなに泣かないで。シエラハのお父さんとお母さんは、ついに  
理想郷を見つけて夢を叶えたんだ。確かにシエラハとは会えずじま  
いで終わってしまったけれど、あんなに立派な文明を築いた。2人  
はきつと、幸せだったと思う。だからこれは不幸な足跡ではないん  
だ。シエラハのお父さんとお母さんはやり遂げたんだよ」

泣いている人を慰めると、もつと多くの涙があふれてくる。

俺はシエラハの肩を抱いて、恨みがましい目をアダマスに向けてからそこを去った。『悪かったよ、そんなに泣き出すと思わなかった』と言われたが、嫁を泣かされて喜ぶ旦那はいない。

シエラハの父。偉大なる始祖を持つ男は、やはり尊敬に値する人だった。

シャンバラに娘を残して、行き来を途絶させられてしまった夫婦は、言葉では言い尽くせないくらいに悲しかったのだろう。

だから迷宮が俺たちを呼んだ。時を越えて俺たちに真実を伝えてくれた。そう解釈すれば、少しは救いがある。

「ユリウス、あたしたちは立派なお父さんとお母さんになりましたよ。いつだってやさしかったお父様とお母様に負けなくらい、立派な父親と母親に」

この日、シエラハは執着し続けてきた過去と決別し、未来へと新しい一歩を踏み出したのだった。

女性　いや、母親というのはとても強いのだな……。

・第3部エピソード1/2 たった一ヶ月で三児の父となった錬金術師

異世界からの侵略者タンタルスの正体はエルフ。その恐るべき真実は、秘匿されることなく人々に公開されることになった。

戦いの戦意を削ぐので公開は止めた方がいいと師匠は言った。都市長もまた愛するシエラハと、かつての政敵であり親友である男のために秘匿を望んだ。

だが当のシエラハが公開を望んだため、真実を明るみにすることになった。

消えたのは彼女の父母だけではなく、その賛同者たちも多く含まれていたからだ。

『公開しましょ。お父様に従ってくれた人たちの家族のためにも、あたしには娘として真実を伝える義務があるわ。消えたみんなは夢を叶えて、見つけた理想郷で幸せに生きて！ そう伝えてあげるべきよ！』

彼女の望みにより、タンタルスの真実は公開されることになった。あのアダマスの仮説によると、祖先<sup>エルフ</sup>たちは魔力無き世界で暮らしてゆくにつれて、やがてあちらの環境に順応し、自ら魔力を生産出来ない身体に退化したのだと言う。

しかし魔法を失ったことが彼らの科学を発展させて、そして長い月日の果てに再び魔法と出会うことになった。タンタルスの肉体は自ら魔力を生み出す機能こそ退化していたが、魔法を扱う構造そのものは残っていた。

魔法と科学が融合した結果、魔力が文明の繁栄に必要な資源となり、彼らは魔力を持つ生き物を家畜化するようになっていった。

だとするとタンタルスとの共存は難しい。彼らにとって魔力を持つ俺たちは資源そのものだ。もし狩猟や飼育を止めれば、彼らの文明は崩壊してしまう。

侵略をこれからも警戒しながら、やつらがこちらを対等と認めるまで戦い続けるしかなかった。

自分たちが家畜化している存在が自分たちの祖先だったと知ったところで、彼らはもう止まれないだろう。

それはこのシャンバラが交易と迷宮を捨てられないことと同じだ。俺たちとタンタルスは宿命的に戦い続けるしかなかった。

さて、その後の日々は平和そのものだった。ツウィクとの同盟関係の構築により、経済構造に変化こそあったが、その話はまあ別の機会にするとしよう。

あれから約2ヶ月が経った。先月にはついに子供が産まれて、俺はたった1月の間に3児の父となっていた。

子供たちはあまり俺に似ていない。エルフの母から生まれる子はエルフだそうなので、まあそういうものなのだろう。

まるで子供たちは母親の生まれ変わりのようで、そこがまたかわ

いくて仕方がなかった。

夜泣き、おむつ、理由不明の大泣きに、さんざん悩まされた。

おまけに連日のように義父と義兄と師匠がここに押し掛けてきて、その相手をしなければならぬ。

子育ては理想ほど綺麗なものではなく、先月までの日常はもうどこにも残っていないかった。

だがそれにも増して、子を抱いて微笑む彼女のたちの姿はあまりに美しかった。子供を作ってよかったと、そう断言できるほどに。

「しかし……まるで犬猫のような成長の早さだな……。いや、ありがたくはあるのだが……」

「だから、ヒューマンの子の成長が遅すぎるのよ」

こうして現在、ベビーベッドに横たわっているだけだった子はベツドの上をはったり、隣の子にちよっかいをかけたり、人に意思表示をして世話やおっぱいをせがむ。

取り替え子とか、鬼子という言葉が脳裏をよぎるほどに、エルフの子供たちはどんどん賢く大きくなっていった。

「あっち向いてて」

「なんでだ？」

「ユリウスが変な目で見るとよ」

「そうかな……」

「そうよ」

シエラハはメープルの子を片手で抱いて、胸を出すとおっぱいをあげた。

やさしい微笑みを浮かべる彼女の姿はまるで女神のようで、孤児だった俺にはその姿があまりにまぶしかった。

「ほら、だらしない顔してる……」

「仕方がないだろ。この光景を見てニヤケない方がおかしい」

シエラハの子は手がかからない。逆にメープルの子は手が焼けて、グラフの子は少し神経質だ。

どうも少し臭うのでおしめを変えて、早くおまるにまたがれるくらいに成長してくれと祈った。

「ここはあたしがどうにかするから仕事に戻って。メープルとグラフもそのうち戻ってくるはずだから」

「いや、大変じゃないか？」

「平気よ。兄さんもきてくれるはずから」

「じゃあ戻るか」

やんちゃなメープルの子を軽く撫でて、それから俺はシエラハに少しらしくないことをしてから工房に戻った。

あんなにやさしい母親を持って、あの子たちは幸せ者だ。兄弟にも恵まれ、誰もが必要としてくれている。

俺は工房で輸出用のエリクサーを作りながら、何度も何度も子供

たちを羨んだ。

そうしていると珍しくマリウスのやつが工房にやってきた。

「やあ、調子はどうだい？」

「ボチボチだ。若干寝不足くらいだな……。何か注文か？」

「違うよ、あの子たちの様子を見にきた。ユリウスの子だからしっかり教育しないと」

「どういう意味だ」

「なあユリウス……。俺とも子供を作らないか？」

「ブツ……。？！！」

「ははははっ、もちろん冗談だよ。あの子たちを見て、ちょっとそう思っちゃっただけさ」

「ゲホッゲホッ、悪い冗談だ……。はあ、ビックリした……」

子供たちに会いに来たというのに、幼なじみのマリウスは俺の隣に静かに寄り添った。

それから俺の仕事を、光るオーブと緑色に燐光する水槽を見下ろしている。

「羨ましいよね」

「いや、男が子供は産めないだろ……」

「そうじゃないよ。あの子たちが羨ましくないか？俺たちよりずっと恵まれていて。あんなにやさしい母親に囲まれて、同い年の兄弟が2人もいる」

「お前……。なんで俺と同じこと考えてるんだよ……」

「同じ場所で育ったからじゃないかな」

「院長先生はやさしかっただろ」

「でも俺たちだけの母ではなかった」

「まあ……」

そんな俺に父親役などできるのだろうか。そのままの弱音をマリウスに伝えてみた。

「俺も守るよ。あの子たちには、俺たちみたいな苦労はさせない。

みんなに愛されて、真っ直ぐに成長してもらわなきゃ困るんだ」

「ありがとう、マリウス。情けない話だが、頼りにさせてくれ」

「遠慮するな、俺たちは親友だろ」

「そういう臭いことを言うな」

「フツ……10年もすれば、君こそ『お父さん臭い』と言われるようになるだろ」

「そういうのは止めてくれ……」

俺たちの子はシャンバラを救った英雄の子として、ありとあらゆる人々に愛されて、健やかに成長していた。

本当に、まるでモヤシや豆苗のようにグングンと、下手をすれば5年で『お父さん臭い』と言われてしまいかねない驚異の成長力で育っていった……。

あれだけ大きな馬ですら3年で大人の身体になるのだから、自然の在り方から逸脱しているのは、もしかしたら俺たちヒューマンの方なのかもしれない……。



・第3部エピソード1/2 たった一ヶ月で三児の父となった錬  
金術師(後書き)

次話で第二部完結となります。

・第3部エピソード2/2 バブみあふれる女神

しかしその数日後、恐るべき事態が水面下で進行していることが判明した。

前々からどうもおかしいとは思っていた。万能建築素材コンクリル発注が妙に多く、用途も建設の終わっていたはずの水道工事という名目だった。

一応発注者は都市長なので、またあの狡猾な人が何か暗躍しているのだろうと軽く見ていた。だがそれは間違いだったのだ。

俺たちが最初に築いた地下水道。その先にある新たな耕作地から先日ご招待が届き、都市長たつての希望でパーティーに参加することになった。

会場は広場に用意されていて、すぐ近くでは一面に青い小麦が風にそよいでいて美しい。しかしその広場の一角には、建物か何かの布に包まれて悪目立ちしていた。

それと、なぜかメープルがパーティーの壇上上がった。

彼女はまるで主催であると言わんばかりに謝辞を述べて、それから誇らしげに布に包まれた何かへと腕を掲げた。

「今日、この日、この瞬間を……ずっと、待ってた……」

嫌な予感がした。このパターン、前にもなかったかとデジャヴを覚えた。

そう、これはアレだ。マク湖での一件に似ている気がする……。

あのときは俺たちが馬車から降りたら、そこにシエラハの水浴びをのぞく愚かなヒューマン・ユリウス像が建っていた。ということは、まさか……。

「題名は　　バブみあふれる女神」

メーブルがひもを引くと、巨大な布が滑り落ちてそこに白亜の彫像が現れた。

大きさにして5、6mはあるだろう。メーブル作にしては題材があまりにスタンダードだったが、今の俺たちには直撃の破壊力を持つていた。

「ちょ、ちょっと待って！　こ、これって、これって、まさか……」

「うん……私の娘に、おっぱいをあげる、姉さん像……」

「う、美しい……。衆目がなければ、思わずよじ登って頬ずりをしたくなるほどに、あまりに美しい……」

やっぱりうちの一家って、俺じゃなくてシエラハを中心にしたハレムなのではないだろうか。

グラフが彼女とは思えない黄色い歓声を上げて、会場の連中と一緒にになって大喜びしていた。

「もっつ、あたしに勝手にこういうの作っちゃ嫌ってっ、言ったでしよっ！？　こ、こんな……こんなのハレンチよ……み、みんなに、こんな……うううう……っ」

「はあはあ、たまりませんなあ……。あてっ」

俺はツカツカと壇上に上がって、うちのトラブルメーカーのおでこを小突いた。ちよっと目を離すとすぐにこれだ……。

ツツコミに嬉しそうに喜ぶメーブルにあきれながら、頭上を見上げる

「おい……」

「お気付きに、なされましたか、ぐふふ……」

「ぐふふじゃねーよ……。おい、これ……これどうやって作ったんだよ……？」

「がんばった……」

至近距離から見上げるとスカートの中まで作り込まれていて、その奥にパンツが見える……。しかもそこだけムダに肉感的というか、人の目を引き付ける肉体美があった。

遠くから見れば母性に感動させられるほどの素晴らしい仕上がりだというのに、なぜコイツは、こんな余計な作り込みを……。

「そこからだと何が見えるんだ？ なっ、こ、これは……っ?!」

グラフに向けて人差し指を立てて、シエラハが気付いたらまずいと警告した。

だというのにこいつめ、ニヤニヤと頭上を見上げたまま首を戻さない。そりゃ、確かにいい眺めだが、もしこのとんでもない仕様に気付かれたら

「なっ、なななっ、何よこれっ?!! もっつ、もおおーっつ!

! メーブルッ、今日という今日はあたし許さないわ、ちよっとこ

「うちにきなさい!」

まあ、マジ切れするよな、これは。

「ごめん、姉さん……」

「謝ってもダメ! あなたは本当にいつもいつも、どうして!」  
「ういうことするのよ!」

「だって、姉さんが、綺麗だから……」

「じゃあこれは何?」

シエラハが天を指さした。そこにあるのはパンツとふとももだ。

「だってこういうの……。スカートの下まで、作り込んでなきゃ、詐欺だと思う……。あてっ……」

「隠しなさい! 隠さなきゃ今日からメーブルとお話ししてあげないからっ!」

これだけ怒っているのに、シエラハの報復はデコピン1つと子供みたいなそのセリフだけだった。

「無視は困る、本気で困る……。わかった……。布で、長いスカート、はかせれば……。許してくれる……?」

「ええ、それなら許すわ。……。本当にもう、メーブルも都市長も、こんな金のむだづかいばかりして、しょうがないんだから……」

そうやってすぐに許すから、同じ暴走が繰り返されるのではないか。

それにこれにスカートをはかせると、それはそれでかえって目立つような気が……。

「もうっ、ユリウスは見ちゃダメよっ！」

「すまん、つい……」

ともあれあまりにいい眺めなのでつい顔を上げてしまっ。

そんな俺にシエラハが飛び付いてきて、自分の方を向かせた。

会場の誰もが像を見上げていた。誰も文句など言わなかった。口々に美しいと人々が漏らすと、恥じらい深いうちの嫁さんが、くっついたままモジモジと尻を揺すった。

子を抱くシャンバラの女神の姿は、新たな時代の始まりを俺たちに予感させている。

経済戦争が終わり、敵だったツイイクが盟友となり、タンタルスの真実が公となって、ここに新しい世代が産まれた。

「そんなに気に入ったの……?」

「まあ、実を言うとかなり」

「そう……。それだけユリウスが気に入ってくれたのなら、わかつたわ、もういいわ……」

「それだけメープルにはシエラハが綺麗に見えたんだろう。愛されてるってことだ」

「もう、みんながそういう目で見ると、あたしがあの子たちを抱きにくくなるじゃない……」

「だって、子供を抱く姉さん……。女神様みたいに、綺麗だから……」

「あなたは反省しなさい！」

「はい……ごめんね、姉さん……」

かくしてシャンバラの開拓地のだ真ん中に、子を抱く女神像がそびえるようになった。

見ようによつては、それは豊穡の女神様だ。ここの農夫たちは子を抱く母親の姿を見上げて、大地の実りに感謝をするだろう。

エルフの子供は成長が早い。どんどん大きくなって、一定の体格に至ると成長が緩やかになる。

こんな姿を見られるのもそう長くないだろう。だとするならば、この像は後に残すべきだろう。

何度見上げても、俺たちのシエラハが子を抱く姿は美しく、見上げているだけで俺を誇らしい気分になんてさせてくれた。

・

蛇足

そこまではよかった。だが恐れていたことが起きてしまった。

師匠と都市長がほろ酔いでうちの家を去り、グラフと軽く後片付けをして、俺は自分のベッドに横たわった。しかし

「ねえ、ユリウス、中に入ってもいいかしら……?」

「まだ、起きてるっぽい……」

「じゃあ入ってもいいな。ユリウス、実は相談なのだが」

タヌキ寝入りは即見破られ、俺はベッドの3方向を嫁たちに囲ま

れた。

彼女たちの言い分はこうだ。

子供1人だけではとても足りない。

「ちよ、ちよつと待て、言わば俺は、生物としての義務を果たした偉いセミちゃんだろっ!? それがなぜ、なぜこうなるっ!?」

「それはそれ、これはこれ。据え膳食わぬは、男の恥……。おとなしく、食われて……。?」

「すまん、もうボクは我慢の限界だ……」

「ごめんなさい、ユリウス……」

「う、嘘だろ……。?」

「あたしには、血筋を蘇らせる義務があるの……。男の子を、作らないと……」

シャンバラの英雄、錬金術師ユリウスはその日以降、再び腰を折り曲げながらオーブに腕を掲げる姿が見られるようになった。

タンタルスの世界に迷い込んでより、俺たちには1つの目標が生まれた。それは理想郷の再建だ。かつてこのシャンバラは緑にあふれたエルフの理想郷だったと言われている。

この世界に帰ってこれなかったシエラ八のお父さんたちのためにも、俺たちはここに緑の大地を蘇らせなければならない。そう強く思うようになっていった。



砂漠に再び緑を。俺たちの大切な子供たちに、緑にあふれるシャ  
ンバラを。

俺たちの次なる目標は、かつて楽園と呼ばれたシャンバラの再生  
だった。

### 第三部 終わり

・第3部エピローグ2/2 バブみあふれる女神（後書き）

これにて第三部完結となります。

落選によりモチベーションに深いダメージを受けていますが、落選したからってお話を投げ捨てるのはおかしいので、第四部のプロット制作に入ります。

2、3週間で更新を再開するつもりです。

ただ、ちよつとまだよくわからないので、もしかしたら1ヶ月ほどお待たせしてしまうかもしれません。申し訳ないです。

また近々、平行連載作「おっさんスタリオン」が完結します。

入れ替わりで新作「ガテン系令嬢」の連載を始めますので、もしよろしければ読みにきて下さい。

ツルハシ背負ったガテン系お嬢様が悪役令嬢を救ったり、土木建築技術で道を作ったり、橋を築く元気なお話です。

ここまで本作を読んでくださりありがとうございます。

感想返しできなくてごめんなさい。ありがとうございます、ありがとうございます！

第四部はもつと明るい展開や、キャラとのラブコメ展開を強化しながら、この物語の残る目的である砂漠の緑化を描いてゆく予定です。伏線のほとんどを消化してしまったので、第四部で一度物語がまとまるような構想で練ってゆく予定です。

それでは、2〜3週間、あるいは一ヶ月ほど休載いたします。  
どうか新作もよろしくお願いします。

・1年目 ある愚者の追想、千年王国が滅びた日

終幕 錬金術師ユリウス・カサエルの無窮なる生涯

・1年目 ある愚者の追想、千年王国が滅びた日

・愚者

ひたむきに錬金釜と向き合うユリウスを見てみると、狂おしいまでにこの胸が締め付けられる。

彼の生み出す摩訶不思議な種子は神の奇跡そのものだ。

それが大地に落ちると砂漠が美しい草原に変わり、草原が木々の生い茂る森へと変わってゆく。

その度にこの愚者の胸には、到底己でも把握し切れないほどの激しい感情が入り乱れる。

故郷の再生を喜ぶ純粹な心。ユリウスの才に嫉妬する心。彼への憧れ、信賴、恐怖、歪んだ愛情。

止めてくれと願いながらも、全てが己の望み通りに動いてゆくのを愚者はほくそ笑んだ。

「貴女がいなかったら我々はこの荒れ果てた大地を捨てるしかなかった。改めてなりますが、我々をお救い下さり本当にありがとうございます」

「賞賛はいらぬ。それがわらわの務めだ」

昔々、愚者はユリウスと同じことをしていた。  
作物の実らぬ荒れた大地に、緑を蘇らせては人々に熱く賞賛され  
ていた。

それが感謝祭ともなれば、次から次へとこの謁見の間に国中の民  
がやってきて、真実を知らずにその愚者を称えていた。

「貴女は我々の誇りです」

「どうかこれから我らをお導き下さい」

「ご機嫌麗しゅう、お会いできて光栄です」

苦痛だった……。

慕われ、謝辞を述べられるたびに、この心が氷のように冷たく冷  
えてゆくを感じた。

この千年の統治も、大地の再生も、ありとあらゆる行為の何もか  
もが、彼らのためではなく自分のための行いだっただからからだ。

違う。

裏切ったのではない、最初から味方ではなかっただけだ。

どんなに慕われ、愛されようと、わらわの耳に贅辞の言葉は届  
かない。

「母上、今日は僕のがまを聞いていただきたくここに参りまし  
た。その、お仕事のお邪魔でしたでしょうか……？」

「そなたか。そなたがわらわにわがまとは珍しい。言ってみよ」

そんな中、なんの奇跡か戯れの相手との間に子が生まれた。

どんな男と交わっても子を宿すことなどなかったというのに、建

国千年目にて美しい男の子を授かった。

父にはまるで似ず、母親によく似ている。

愛おしいと感じる反面、この子の扱いには困っていた。

「僕の親友を母上に紹介したいのです」

「そなたに親友か……。もしかそれは隣の彼か？」

「はい！」

「よかるう、顔を上げて名を名乗らせよ」

許しを下すと、少年は顔を上げていかにも聡い瞳でこちらを見つめた。

「シヤムシエルと申します。ヴァン王子とは、恐れ多くも親友の誓いを上げることになりました。陛下、お会いできて光栄です」

「母上、それである……。お願いというのは、シヤムシエルを」

運命とは因果なものだ。ここでこの決断を下さなければ、ユリウスはシヤンバラに拉致されたりはしなかっただろう。

「シヤムシエルと言ったか。そなたをヴァンの小姓として召し抱えよう。息子をよろしく頼む」

「あっ……。ありがとうございますっ、母上っ！ やったね、シエル」

「ヴァン、陛下の御前ですよ。喜ぶのは後にしましょう。……陛下、ヴァン王子は私にお任せを」

息子に親友が出来たのが嬉しくて、つい笑ってしまった。

それと同時に『自分は何をやっているのだ』と、自分自身に呆れ

た。

違う。彼らはエルフではない。

彼らの未来を案じたり、心を許すなどしてはならない。

愚者は息子とその親友を謁見の間から遠ざけて、とても幸せそうに立ち去る2人の姿を見送った。

それからすぐに腹心のある男を呼んだ。

息子とシヤムシエルを見ていると、あちら側に引き込まれてしま  
いそうだった。

「あと何年かかる……?」

「もう3、4年かと」

「そうか……。この茶番も、それまでの夢幻か。よもや、1000  
年もかかるうとはな……」

「長かったですな」

感慨に彼と一緒にため息を吐いた。

彼はこの国の宰相。この愚者の真実の姿を知っているただ一人の  
存在だった。

「長かった……。あまりに長すぎた……」

「しかし子息はどうなされますかな?」

「アレを気にする必要はない」

「いえ、ですが……。ですがワシとしては、せめてヴァン王子だけ  
でも……」

「時がくれば全てが終わるのだ。全てはそれまでの戯れだ」

「ならば どうせ全てが消えてしまふのならば、ワシが何をして  
も自由のはずです。もしその日が来たら、王子は私の手で都から遠  
ざけます」

「好きにせよ。そなたは千年の忠を貫いたのだ、何をしても許され  
る権利がある。宰相として、わらわを裏切り、世界の終わりを止め  
る権利もな」

「生憎、その気は毛頭ございませぬ」

ここで彼が逆らわなかったら、ヴァンの末であるシエラハゾと呼  
ばれる女は生まれなかった。

シラムシエルも死に、役者なき歴史が紡がれただろう。

「そなたには感謝している」

「どうかご自分の夢を叶えて下さい。我らに千年の安らぎを下さつ  
た貴女には、全てを破壊する権利があります」

宰相は平伏し、謁見の間を離れた。

この千年、本音を言えるのは彼だけだった。その彼も老いて、白  
髪の老人となってしまうた。

愛して欲しいなど願ったことはない。

ましてや許して欲しいなどと考えたことすらない。

全ては幻。まほろばの国シャンバラは、じきに消える。

「千年だ、千年を安寧に導いた。ならば十分であろう……。この手



に代価を受け取る権利だつて、きつとあるはずだ」

裏切つたのではない。

わらわは最初から、そなたたちの味方ではなかつたのだ。

畑が豊穡の実りを迎えたとき、それを刈り取るのは当然のことだ。千年を乗り越えて、ついに収穫の時が来たのだ。

「シャンバラよ！ 逆しまの幻となりて我が願いを叶えよ！！ 我が名はシエラハ・ゾーナカーナ・テネス！ この大地の真なる継承者だ！」

あの日、千年王国シャンバラは滅びた。

残された者たちはシャンバラを捨て、またある者たちは今のシャンバラに残つた。

裏切つたのではない。

赦しも要らぬ。

わらわは己の行いに後悔などない。

・ 錬金術師

子供たちが生まれて1年が経つた。

親が4人もいるというのに子供たちの世話は大変の一言で、毎日が目まぐるしく過ぎ去っていった。

驚いたのはエルフの子の成長速度だ。

お腹の中でヒューマンの2倍で育つ種族は、お腹の外では3倍で育っていった。

あつという間に歩くようになり、喋るようになり、最近では勝手に家を出て砂漠を歩こうとして手が付けられない。

あまりに大変なので都市長が乳母を付けてくれると頻繁に言うが、みんなにその気はないようだった。

空を見上げれば緋色の夕日が入道雲を赤く燃やしている。

砂漠の気候は両極端で、早くも少し冷えてきている。

そこで俺は家から大きなタオルを2枚取ってきてみると、それをシェラハと子供たちにかけてやった。

長女の名前はウエルサンディ。シェラハとの間の子だ。

次女がメープルとの子のウルド。三女のスクルズは今はいない。

あの子はいつものように母であるグラフにくっついて、リーンハイム王国を訪ねている。

女王アストライアは青い髪のスクルズにベタ惚れで、グライオフエンとグラフの両方が嫉妬するほどの愛されようだ。

それも無理もない。娘たちはどの子も利発で愛らしかった。

「ん……。ああ、ユリウス……。そこにいたの……」

日が沈む前に起こした方がいかと迷っていると、シェラハがうつすらとまぶたを開いて、俺に手を伸ばした。

なんだか少し様子がおかしかった。心細いのだろうか。

シェラハの手を取ると、安心したように彼女は目を閉じた。

「とても怖い夢を見たわ……」

「悪夢か。大丈夫か……？」

「ええ……ユリウスの顔を見たら落ち着いたわ」

「そうか。……だがうなされているようには見えなかった」

「違うの……。怖いと言っても、怪物が出てくるような夢ではなくて……。ん……」

「どうした？」

「ごめんなさい、よく思い出せないみたい……」

「夢なんてそんなものだ。思い出したところで意味なんてない」

子供が出来てからシエラハたちみんながたくましくなってしまうて、最近はこの様な弱々しい彼女を見ることなんてほとんどなかった。不謹慎かもしれないけど、弱々しい今の姿がとても綺麗に見えた。

「だけど、なんだか胸が締め付けられるように、苦しくて……。それに夢の世界のわたしには、子供がいて……」

「現実の世界でもいるだろ」

「そうだけど、そうじゃなくて……」

「夢だよ。きつとシエラハは、みんなの世話で疲れているのかもしれないな。乳母、やっぱり雇ったらどうだ？」

「それは嫌。この子たちはわたしが面倒見るわ。だって、ちょっと目を離れたらすぐに大人になっちゃうんだもの」

「確かに。もう4年も育てれば15歳の姿になるなんて、そんなの成長が早すぎる……」

シエラハと微笑みながら話していると、タオルがモゾモゾと動いてそこから顔が生えた。

メープルの子のウルドだ。母親譲りの褐色の肌に、キラキラと輝く銀髪がとても綺麗な子だ。

「おとうさん……?」

「おはよう、ウルド。そろそろ家に帰ろうか」

「うん……。さむい、かえる……」

両手を差し出すと、ウルドは両脇をその上に乗せて父親に抱き上げられた。

その軽さに庇護欲を誘われずにはいらなかった。

「サンデイが起きるまでわたしはここにいるわ」

「ほどほどにな」

「ばいばい、シエラ……」

オアシスの木陰を離れて、家に向かって歩いた。平穏だが忙しない日々だ。子供たちから目が離せなくて、自分のペースで動ける時間が大きく減ってしまっていた。

「おとうさん……」

「なんだ?」

「うち……」

「ま、待てっ、まだ出さなっ、急げば間に合っ!」

「んっんっんっ……っ」

「待った待った待った待った、まだふんばるなっ!!」

おまるまで走った。

結局間に合わず、汚物まみれのオムツと戦うことになった……。

乳母の雇用に俺は賛成だ。

いつでも心変わりしてくれても構わない……。

・1年目 ある愚者の追想、千年王国が滅びた日（後書き）

連載再開が遅くなってごめんなさい。

プロットが完成して無事執筆に入れましたので、本日より「3日1回更新」で連載を開始します。

1度物語を締めようということ、これが最終章となります。

予定文字数は10〜15万字。この投稿を含めて、33〜50話くらいでこれまでの伏線全てを回収して、完結をもってゆく予定です。

以降は気分次第の投稿になるかと思えます。

どうかこれから3〜5ヶ月ほど、お付き合い下さい。

・1年目 客人来る

「パパ、しゅごいしゅごい。ぴかぴか、きらきら……しゅわぁ……」

その日、俺は娘のウェルサンディに抱きつかれたまま、工房のオーブに魔力をかけていた。

足下に広がる水槽は、まあ確かにピカピカでキラキラでシュワシユワだ。

「ママたちには内緒だぞ。見つかったらパパが怒られる」「ないしょ……？」

「そう、ないしょだ。ママには言うなよ、特にシエラハはうるさい」「……ぴかぴか。きれい」

工房はまだ概算3歳の子を近付かせたい空間ではない。

特に仕事中は水槽に転落するのではないかと、俺だって気が気ではない。

今はエリクサーを作っている。

これを材料に各地の錬金術師が薄めて売る商法が定着化したので、最近は輸出となるとこれが多い。

サンディは父親にしがみついたまま、小さな目を輝かせて光る水槽を見下ろしている。

母親譲りのブロンドに褐色の肌は、子供のあどけない容姿と混ざり合つとまるで天使のようだった。

「きらきら……」

「ああ、キラキラだな」

「パパ、すき」

「……そうか」

「ママも、すき」

「俺もだよ」

かわいい。かわいくてたまらない。だけれど、コイツらはとんでもなく手が焼ける。

特にサンディは超活発で、メープルの子のウルドの方がずっとおとなしいくらいだった。

「あ、やっぱり……」

「あ、ママ……」

今の子供たちにとって、ママは自分の母親にだけ向ける表現ではない。というより、どれが自分の実の母か把握してない嫌いもある。

というより、どれが自分の実の母か把握してない嫌いもある。

「メープルか。シエラ八には内緒にしてくれ」

「姉さんならウルドと寝てる……。辛抱たまらん……」

「しんぼー？」

「子供の前で変な言葉は使わないって決めただろ……」

「あ、そんなことより、ユリウスにお客……。都市長のこと……」

俺にしがみついたままのサンディをメープルが抱き取ってくれたので、エリクサーの仕上げを進めた。



輝きが強くなり、ピカッと光れば完成だ。

後は水槽の下に転がるぷにぷにのエリクサーを、メープルがシャンバラ製のガラス瓶に詰めてくれる。

「じゃあ悪いけど、お願い」

「じいじ！　いくー！」

「ジイジにサンデイが呼んでるって言うておくよ」

「というか、呼ばなくても来る……」

「あいつら朝昼晩と必ず来るからな……。じゃ」

「うん……。たぶん、驚く……？」

どういう意味だろう。ともかく俺は工房の正面玄関から外に出て、真っ昼間の熱い日差しの下でフードを深くかぶった。

最近なんというか、平和だ。

というのも子供が産まれた影響で、トラブルメーカーだったメープルが落ち着いてしまったのが大きい。……いや、それは俺もだらうか。

タンタルスの世界から帰還したあの日以来、家庭の中はともかく、世界は平和そのものだ。

今回のお客というのもせっぱ詰まった話には聞こえなかった。

よってここ一年の俺は、シャンバラの大地の再生に注力することになっていった。

「よう、パパさん。元気か？」  
「アダマス……？ 客っていうのはお前か？」

市長邸の広いロビーに入ると、そこにタンタルス族のアダマスがいた。

「知らねえな。それよりマリウスさんを知らねーか？」

「マリウスが工房と転移門にいないなら、消去法でここか、あるいはうちの家かもな」

現在のアダマスは魔法銃の開発に協力している。

元は同族だったという真実をきっかけに、彼も心変わりをしたようだ。今では監視付きの自由を許されていた。

「お嬢ちゃんたちは元気か？」

「元気も何も元気すぎて困っている」

「いいことだ。魔法銃の方は見たか？」

「ああ、いい仕上がりだ。あっちからパクツてきたかいがあったよ」

「何度も言うがあれはいい判断だった。おかげで俺も仕事が貰えた。……おっ、マリウスさん！」

そこにあのちんまい弟子を引き連れたマリウスがやってきた。やはりここだったみたいだ。アダマスに手を振って、俺の目の前に立った。

「なんで君は僕にだけさん付けなんだ？」

「はっ、俺なりに尊敬しているからだ。技術の後れたこっちの世界で、転移門と魔法銃を実用化させやがった。マリウスさんはただ者じゃねえ」

「その点については俺も異論はないな」

「ユリウス、君は都市長のところに用があるんだろう、さっさと行け。かなり意外な客が待っているぞ」

「意外って、ファルク王がモンスターカクテルの督促にでも来たか？」

「いいや、客は同じツワイクの間人だ。早く行け、待たせているぞ」

そう言われたので片手だけで別れの挨拶をして、エントランスの階段を上がった。

同じツワイク人となると、まあ……変な候補しか上がらない。

都市長の書斎をノックして義兄に中へと招かれると、まあ案の定そこにいたのはアリ元王子だった。

「ユリウスも来たことなので単刀直入に言う。金を貸してくれ」

「金って……顔を合わせるなりいきなりもいきなりだな。一応聞くが何に使うんだ？」

「ええ、殿下はかなりの資産をお持ちのはずでは？」

来客用のソファーに俺も腰掛けた。

アリは王子時代の私財を処分して、かなりのまとまった金を持っていると前に都市長から教えてもらった。

「農園を買う」

「農園？ そのくらいならお前の私財で」

「買うのは大農園だ。それに資材は村の開拓に投資してしまって、今は金が足りていない」

「なのに農園を買うのか……？ なぜ？」

「元手が足りないからだ」

都市長は何か事情を知っていそうだ。

その姿から見るに、今回のアリの提案に好意的に見えた。

「単刀直入に言うんだろ、話をループさせるなよ」

「ふふ……。そうしていると、かつて争っていたようには見えませんね」

「ジイジ、これが仲良く見えるか？」

「ええ、見えますとも」

困ったものだどアりにジェスチャーを送って、早く話を進めると沈黙を選んだ。

思えば当時の俺は、アリに対して冷たく当たりすぎていた。地位に嫉妬していたのだろう。

「尻拭いだ……。シャンバラ経済包囲網から始まった混乱が、とある奴隷農園を破綻させてな……」

「つまり、俺のせいだって言いたいのか？」

「愚かな父上の尻拭いのつもりで言ったが、確かにお前のせいでもあるな」

「どづいことだ」

「お前がシャンバラの大地に水を引き、緑を再生しているせいで、ここに食料を輸出していた連中は今かなりの不景気だ」

「それはこつちが砂漠の国であることをいいことに、足下を見ていたせいだろ。それを助けるなんて都合のいい話だ」

なぜ俺はアリに対して無意識に強く当たってしまうのだろう……。それはきつと、人間の関係がそうそう簡単に変わるはずがないからだ。

「まあまあ、そこは商売ですから。シャンバラだって同じような物の売り方をしています。ではこうしましょう。ユリウスさんが望むならば、代わりに私が融資と商売の契約をお約束しましょう」

都市長、なぜ俺にそれを決断させる……。

「頼む……。元王族として、これはやらねばならんことだ……」

「……いや、お前、誰？」

「俺だ。愚かにもお前を軍から追放したアリ元王子だ」

「彼は大農園の奴隷たちを心配しているのでしょう。主人を失えば、若い者はさておき、老いた者は次の農園の持ち主に捨てられることになるでしょう」

「買い手が見つからなければ、奴隷たちはまとめて路頭に迷う」

奴隷は都合のいい労働力ではない。

一応ではあるが、雇い主は老後まで保証する義務がある。でなければ若い奴隷は主人を捨てて出て行ってしまふ。

「ならそうと単刀直入に言えよ」

「俺は彼らをだしにするつもりはない。出資をしてくれ」

「出資してくれ」

アリから都市長の方に振り返ってそうお願いした。

シャンバラが緑を取り戻すにつれて、その影響で様々な問題が吹き出すだろう。その尻拭いを好き好んでアリがやってくれるそうだ。

「いいですね、私も若い頃は相棒がいました。では契約の話をしてしましよう。その農場でサトウキビを作れますか？」

「既にサトウキビ畑ならある。増産は可能なはずだ」

「では向こう3年、そのサトウキビをこちらで買いましよう。価格は」

細かな商売の話は俺にはわからない。

ソファから立ち上がって、そこでサンデイの言つてを思い出したので、窓辺に寄ってしばらくの時間を潰した。

「話はまとまったか？」

「ええ、もう十分です」

「感謝する。これで500名の労働者とその家族が救われる」

「じゃあ言うがジイジ、サンデイが遊びに来て欲しいそうだ」

「私のウェルサンデイがですか！？ すぐに参りましよう！」

しかしそれは義兄さんが許さなかった。

それは仕事を終わらせた後だと出口を無言で塞いだ。ところが相次いで書斎の入り口がノックされた。

「ユリウス、君もいたのか」

「父っ、父いたっ、ただいまっ！」

娘を連れだたグラフがリンハイムから戻って来た。

母親のように白い肌と青い髪がとても綺麗なスクールズは、俺を見つけると子犬みたいに飛びついて来て、俺はそれをいつものように抱き上げていた。

「お帰り。しばらく会えなくて寂しかったよ」

スクールズを都市長の前に運ぶと、だらしなく老人の顔が緩んだ。

お客様の前なのでまだ平静を取り繕っているが、普段はこんなものではない。

「聞いてはいたが、恐ろしく成長が早いな……」

「そうじゃない、人間の成長があまりに遅いんだ」

そんな中、グラフは俺に抱かれた娘の肩に手を置いて、やさしい母親の顔で微笑みかけた。

「スクールズ、母はジイジへの報告がある。先に父と一緒に帰っていてくれ。父は目を離すとすぐに消えるんだ」

「うん、わかった！ ……あ、父、大変！」

「なんだ？」

「おしっ」……！

「へ……？ あっ、お前、あっああーっ？！……！」

まずいと気づいた頃にはもう手遅れだった。

抱き上げた娘の股から、オムツの隙間から漏れ出して来たおしっこが俺の白いTーガを熱く汚していった。

温かい……。俺はスクルズをグラフに返却した。

「ちょっとオムツとタオルを取ってくるよ……」

「こういう時、ユリウスの力はとても便利だな」

「そうなんだけど、おもらしの後始末に転移魔法を使うのは、これはこれで使い方が著しく間違っている気がするぞ……」

転移魔法はおしめの交換にも大活躍で、野外で娘が漏らしたときはいつだって俺の役回りだった。

オアシスでおしめを洗うのも、すっかり慣れた……。



・1年目 客人来る(後書き)

今月15日より、コミカライズ版「超天才錬金術師1巻」が発売します。

もしよろしければ書店にて手に取ってみて下さい。

・1年目 続・客人来る

それから3ヶ月ほどが経った。

報告によるとアリは予定通りに大農園を買い上げて、そちらの屋敷に移り住んで奥さんと一緒に切り盛りしているそうだ。

ビジネスでシャンバラを訪れる頻度も上がり、なんだか俺よりもずっと真つ当に社会人をやっている……。

そこは腐っても王子で、やつの経営能力は元の農場主よりずっと高かった。

「パパ、お魚まーだー?」

「さあどうかな。釣れるかどうかは魚の気次第だからな」

今は三人娘たちに囲まれたまま、棧橋ではなく湖畔の砂地に座り込んで釣り竿をたらしめている。

サンデイが膝に乗って、左右をウルドとスクルズが囲むと午前だというのに暑苦しい。

「おとうさん、あとでキラキラ、みせて」

「あ、うちもみたい!」

「父、お願い」

工房に連れて行くとシエラハに怒られるので即答できなかった。そのシエラハはちょうど今、オアシスの右手遠方で水を浴びている。今日もシエラハは精霊のように綺麗だった。

こんなに美しい人がいることに、俺は今でも半分信じきれない。

美人は3日で飽きると誰かが言ったが、いくら見ても飽きなかった。

「ママ、きれい」

「ちちは、ママばかりみてる」

子供に痛いところを突かれてなんて返そうかと迷っていると、釣り竿の浮きがストンと沈んだ。

その手応えにタイミングを合わせて竿を引き上げると、あの独特の匂いのするアユの大物が釣れていた。

「父、すごい！」

「おっきいつ、わっわっ、ぬるぬるっ！」

「このお魚、変な匂い……。あ、おかあさん」

今までどこに隠れていたのやら、どこからともなくメープルが現れて魚を釣りカゴの中に外してくれた。

「おけ……」

「いるなら見てないで普通に混ざれよ……」

「ごめん……。私、遠くから見るのが好きだから……」

「知ってる」

「サンディ、ちよいちよい……」

メープルはサンディの手を取って、湖水でアユの粘膜に汚れた手を洗わせた。

横目でそんな母親らしい光景を眺めていると、人間関係の変化を感じずにはいられない。

「お前、おとなしくなったよな……」

「ん、物足りない……？ 昔みたいに事件、起こした方がいい……？」

「ただでさえ大変なんだから今は余計なことをするな……」

「うん、賛成。いたずらは、この子たちが落ち着いてからにする」

「そこはずっと自重していてくれ……」

餌を付けて、安全のために右手に場所を移して釣り針をオアシスに飛ばすと、なぜかみんながこっちに寄ってきた。

くつつかないという選択肢はないらしい。

「おい、親……」

「ん……？」

「メープルママ、そこはダメーツ、そこはサンディのところなのーっ！」

俺が砂地に腰掛けると、メープルが俺の膝の上を占領した。

「大人げないまねをするな……」

「ごめんね、サンディ……。だけどサンディが産まれる前は、こっが私の席だった……」

「譲ってやれ……」

「やだ」

「じゃあ、こっつするー！」

メープルの膝の上にサンディが乗っかって、左右をウルドとスク

ルズが困むと、暑苦しさが倍になった……。

「サンデイは、天才……」

「暑い、みんなどいてくれ……」

誰も微動だにしなかった。

・

少しするとそこにシエラハがやってきた。

「おかあさんっ」

「あ、ずるい……」

すると子供たちどころか、メープルまでシエラハに取られてしまった。

しかしさつき水浴びしていた割に、ずいぶんと着替えが早い。

「今日到着するらしいわ」

「今日って……予定じゃ明日のはずじゃなかったか？」

「早いにこしたことはない……。楽しみ……」

実は客人が来ることになっている。もちろんそれはアリのことではない。

「迷宮に潜りたいって言っているそうよ。子供たちはわたしが面倒を見るから、連れて行ってあげて」

「おけ……そこは私に任せて……」

「いや、そうはいかないだろ……」

本人にそのポテンシャルがあるのは十分にわかっているが、過保護な家族の手前怪我なんてさせられない。

「ただどいつかシャンバラに来たいと言っていたので、一通りここを紹介してやりたい。」

「母、なんのはなし？」

「お客様が来るのよ」

「私たちの友達……。きっと、ビックリする……」

泣き出さないか心配なほどにビックリするだろう。

するとそこにドストドスンと重い足音が近付いてきた。まさかと思いきや市長邸の方角に振り返ると、そこにあのガラテア姫の巨体があった。

「きゃーっ?!」

「父っ、おつきいつ、おつきいひときた！」

「ひっひう……っ」

そのあまりにたくましい体躯に、子供たちは俺を盾にして隠れてしまった。

「ガラテア、いらっしやい……」

「ようこそシャンバラへ、歓迎するわ」

「シエラハズお姉さまにメールお姉さま！ お会いできて光栄です！」

そんな子供たちの前で彼女たちは再開を喜び合った。

一見熊のように見えなくもないが、心根はやさしく、可憐なお姫

様だ。子供たちを落ち着かせるとやっとな俺もその場から立ち上がった。

「わあ、綺麗な湖！ あっ、その子供たちがみんなの子供なのねっ！  
？ こつちがシエラハお姉さまの子供で、そつちがメープルお姉さまの子供でしょう！ 見ただけでわかるわ！」

「ご名答。ところでガラテア姫、王様たちや護衛はどこかな……？」

「護衛なんて私にはいらないわ。馬車が遅いから、一足先に私だけ走ってきたの！」

「走ってって……砂漠をか？」

「砂漠もだけど、馬車を飛び出したのは隣国からよ！」

「タフ過ぎる……。まさかの長距離走だった……。」

「姫という身分から目をそらせば、ガラテアはフィジカル最強の超戦士だ……。」

「もし要望通り迷宮に連れて行ったら、彼女は最強の前衛になってくれるだろう。」

「ガラテア、ガラテア……アレ、子供たちに見せたげて……？」

「アレ？ あっ、アレというと、もしかしてこれですの……？」

「そうそう、指弾。姉さんと勝負してみせて……。」

「いいわ。見ててね、みんな！」

「いや、ちよつと待て！ 指弾ってアレだろっ！？ まさか、ここのオアシスでアレをやるつもりか！？」

ガラテア姫に俺の言葉なんて聞こえていなかった。

彼女は湖の中から手頃な小石を探り当てると、それを指先に装填した。そして撃った。

超破壊力の小石はオアシスの水面を跳ねて、対岸で投石機みたいに爆発した。

「ひいつ?!」

小心者のウルドが悲鳴を上げた。

そりゃ親指1本であんな爆発を起こされたら『ひいつ』ともなる。

「父っ、あれなにっ、どうやったの!？」

「すっごーいつ、オアシスのむこう、とどいた!」

スクルズとサンデイは興奮に舞い上がった。

どうやったと言われても、父が知りたいぞそんなの……。

「はい、次はお姉さまの番よ」

「ふふふ、見ないうちに腕を上げたようね。それじゃ、わたしもいくわ。えいつ!」

言葉尻だけはかわいかったが、シエラハの指弾の破壊力はもはや爆弾だった。

指先から低い軌道で石ころが発射されると、水面を超速度で跳ね回って、やがて対岸に達すると重い着弾音と共に空高く砂煙が立ち上った。

「さすがシエラハお姉さまです! 4段で向こうに届かせるなんて私にはまね出来ません!」



いや、普通は段数を競うものではないだろうか……。それがなぜ破壊力勝負の世界になっているのだろうか……。

「おとうさんっおとうさんっ、あのおねえちゃん、シエラおかあさんとおなじくらい、すごい……！」

「うち、もつとみたい！ 怖いけど、あの人、すごい……！」

「賛成じゃ！ もう一回、もう一回！」

少し話が横道にそれるけれど、スクルズは最近、リンハイムの女王アストライアの口調が移ってきてしまっている……。

あの人、あの人で問題があるので、あまり見習わせたくない大人だ……。

「ならば段数が多い方が勝ちね……」

「それは威力を抑えなきゃ難しいわ」

「何を言っているんだ、むしろそこは積極的に抑えてくれ……」

ガラテア姫とシエラハが同時に指弾を繰り出すと、また対岸が爆発した。

こつも何度も大爆発させられてはもはや釣りどころではない。魚たちもオアシスの下で震え上がっていることだろう。

「私の勝ちね、ふふふっ！」

「もう一勝負お願い、お姉さま！」

「いやこれ以上は止めようよ……。これ以上やったら人があぁ、もう遅かったみたいだな……」

当然この爆発は何事かと、行政区の兵たちが押し掛けてきたのは言うまでもない……。

「違うわ、ただ指弾遊びをしていただけよ？」

通るか、そんなもん……。

「みんなで対岸まで何段で届くか勝負しましょ！」

常人が出来るか、そんなもん……。

・1年目　まるで野獣

翌日、俺たちは隊列を組んで迷宮深層を歩いていた。

後衛は妨害魔法のスペシャリストのメーブル、中衛は俺、前衛はシエラハと　まあお察しの通り、ガラテア姫が魔物を現在進行形で殴り倒していた。

「つよ……」

「接待プレイどころじゃないな、これは……」

「出番なさ過ぎ……。あ、そだ。ユリウス、ちょっと背中借りるね……」

「背中？　つておい、さすがにそれは油断しすぎだろ」

一児にして三児の母が俺の背中に飛び乗って、後衛の仕事を丸ごと放棄した。

とはいえメーブルの性質上、前衛が敵を瞬殺してしまうこの状況では、出番がまるでないのも事実だ。

「どうですか、シエラハお姉様！」

「凄いわ、ガラテア。戦士を目指してたった一年とは思えない立ち回りよ！」

「私、シャンバラに来てよかった！　お姫様なんて止めて、ここで冒険者になりたいくらいだよ！」

「うん……。ガラテアは、冒険者向いてると、思う……」

「おい、お姫様をあまりそそのかさな……。っ、本気で決断しちゃったらどうする……」

ここは少し前に新発見された新種の迷宮で、赤の迷宮と名付けられた。

壁は灰色の石、床は焦げ茶色の土だ。それがなぜ『赤』と呼ばれているのかというと、出てくるモンスターが全て赤い強化タイプだからだ。

「ガラテア、そっち行つたわよ！」

「心得てます、お姉様！ ヌウンツツ！！」

ガラテアの隆々とした巨体から繰り出されたハンマーが、レッドオークの土手っ腹にぶち込まれると後ろのモンスターたちが軒並み吹っ飛んだ。

鮮やかなシエラハの剣技とは対照的に、ガラテア姫は何もかもがパワフルで力ずくだ。そしてそれがとんでもなく彼女の型にはまっている。

「ぐう……」

「この状況でよく寝れるな、お前……。おい、起きろ、一応戦闘中なんだから起きとけ……っ」

「お断り……」

「なんでだよ、自分の命だろ」

「だって、このポジション、久しぶり……」

「だからって、寝るなよ……」

俺は時折、マジックアローで奥の遠距離タイプの狙撃をした。

あくまで相手の体勢を崩すだけの威力に止めると、技のシエラハ

と力ずくのガラテア姫が全て片付けてくれた。

モンスターのドロップの方は、代わり映えしない一般的な物ばかりだったが上品質だ。

とはいえ今となつてはこの程度の素材、工房で待っているだけでシャンバラの冒険者ギルドに集まるので、ますます今回の迷宮攻略が茶番じみていた。

しかしそれもまた納得の上だ。

ガラテア姫を含むランスタ王家の面々がこのシャンバラを訪れたのは、観光だけが理由ではかった。

探索開始より約4時間が経つと、俺たちは地下20層目に到達していた。

ところが節目となるその階層に降りてくると、長い直進通路の先に巨大な扉が1つ待っていた。

「これって見るからに特別なお部屋よね。ここに赤の迷宮の王様がいるのかしら」

「ガラテア、これがボス部屋……」

「まあっ、これがあの有名なボス部屋なのね！」

「いやボス部屋なら、今まで通過してきた中にいくつもあつたぞ……？ ガラテア姫とシェラハが瞬殺するから、単に気づけないだけで……」

やっと自分の出番かと、メーブルが猫みたいな伸びをした。

「だけどころなに派手な扉は初めてよ。ユリウスはどう？」

「俺の目から見てもここまで仰々しいのは初だな。中を見て、相手がヤバそうなら引き返そう。怪我をされたらランスタとの交渉が決裂する」

そう伝えると、左右の巨門をシエラハとガラテア姫が押し開いた。その先で俺たちを待ちかまえていたのは、体長4、5mはあろう巨大なレッドドラゴンだった。……撤退するべき相手だ。

「これなら勝てるわ！」

「はあっ?! ちよつとつ、ガラテア姫っ、それどついつ判断っ?!?」

ガラテア姫に続いて、シエラハがその背中を追った。するとメーブルも杖を構えて、ようやく出番だと表情を輝かせながら弱体魔法のフルコースを放った。

「姫のサポート、お願い……」

「言われなくともそうするよ!」

火傷なんてさせたらランスタ王夫妻がブチ切れる。

そこで俺は火竜の注意を引き付けるために、敵の鼻先に飛んだ。

プレスが俺を消し炭にする前に、再転移して頭の後ろに回り込む。そこから鱗と鱗の隙間を狙って、借りパク聖剣に電撃をエンチャントして突き刺した。

シエラハは細剣を腰に戻し、サブウェポンの方の長剣で竜の腹を

引き裂いた。

通常ならば鱗に阻まれて斬れないはずの装甲を、力づくでぶつた斬っていた。

「ユリウス様ツ、離れて下さい！ えいつ！！」

火竜もまさか自分の背丈の3分の1すらない生物に、瞬殺されることになるとは思ってもいなかっただろう。

よもや肉ダルマのように見えるガラテア姫の巨体が天高く跳躍し、そのハンマーが自分の顔面を物理的に有り得ない超破壊力で殴り倒すとは、想像もしなかったに違いない。

赤いボス部屋の外壁に火竜の巨体が叩きつけられ、大地が激しく揺れた。

瞬く間に火竜は実体を失い、そこにスイカみたいに巨大な宝石だけを残した。

「まあ、なんて大きなルビーなのかしら！」

「ふふ……なんだか歯ごたえがない竜だったわね」

「そこはぶつちゃけ、相手が悪い……」

そう、相手は指先一本でオアシスの対岸まで届く指弾を打てる淑女たちだ。

いかに巨体の火竜といえど、このレディたちの全力に堪えられないはずがない。相手が悪かった。

「これはルビーじゃない、クリムゾンナイトだ。しかしこれだけ巨大となると、世界中を探しても買手なんて付かないだろうな……」  
「じゃ、ちょうどいい記念品だね……。これはガラテアにあげる……」

「え、でも……こんなに大きな宝石……」

「あげる……」

「ええ、あげるわ。それじゃ、大物もやっつけたことだし、そろそろ帰りましょうか」

砕けば換金出来るがそれはなんとももったいない。

それにスイカみたいにでかい宝石は、ガラテア姫が小脇に抱える  
とよく似合う。

俺たちは来た道を引き返して、軽い足取りで地上を目指して歩いていった。

「ガラテアにだけ明かす、ユリウスの秘密、その1……」

「まあっ、ユリウス様の秘密ですか!？」

「おいこら待てっ、人を暇つぶしのネタにするなっ!」

「冒険中のユリウスは、なんと 下着をはかない……」

「ま、まあっ、そ……そうだったんですのっ!？」

「んなわけねーだろ、今だっではいてるわ……っ!」

「うん、嘘……」

「嘘……驚きました……。てっきり私、本当にはいてないのかと……」

「んなわけないだろ……」

「ガラテアにだけ明かす、ユリウスの秘密、その2……」

「おい、続くのかこれ!？」



「夜のユリウスは……その気にさせると、まるで野獣……」

「ま、まあっつ?! お、お盛んですのね……。それもそうね、まだまだ、新婚さんですものね……っ」

「お前、いい加減にしろよな……。お姫様相手にそういうことを口にするな」

「あてっ……っ」

メーブルのおでこを小突いて、もうお前は黙れと隣に引き寄せた。シエラハの方に目を向けるとどうしてか慌てた様子で目をそらされたのは、いったいなぜなのだろう。

「ここだけの話……最初のはこの赤の迷宮らしい嘘だけど、2番目ののは……マジ　むぐっ」

困ったやつを口を手で塞いで、いい加減にしろと渋い目を向けるとさすがのメーブルもそれ以上は黙った。野獣……野獣はさすがに言い過ぎだろう……。

・1年目 まるで野獣（後書き）

再宣伝となりますが、今月15日より「超天才錬金術師コミカライズ版1巻」が発売します。

コミックなので大判の小説よりお安くなっています。もしよかったら購入をご検討くださると嬉しいです。

・1年目 天高く吠ゆるビームの日

「おおおーっ、ユーリアスウウーッッ！ 待ってたぜーっ、ワシの酒の友よおーっっ！！」

赤の迷宮を満喫して、袋いっぱいドロップ品を背負って自宅へと帰ってくると、その軒先にまた濃いのが現れていた。

「げっ、ファルク王……」

「おいメーブル、仮にも相手は国王なんだからそういう態度はよせ」「ごぶさたしています、ファルク王。ランスタのガラテアでございます」

筋肉の塊が突然淑女になると、それがギャップ萌えになるというか、そこいらの女性よりもずっと貞淑に見えるから妙な感じだ。

でかいファルク王はパーフェクトボディのガラテア姫と強烈なハイタッチを交わして、流れるように俺の肩へのしかかってきた。

「臭っ、酒臭っっ?! なんか尋常じゃならざるほど酒臭いんですけど、ファルク王っ?!」

「ガハハッ、ワシはまだビール樽2つしか呑んでねえぜ!」

王の全身の毛穴という毛穴から酒気があふれ出ている。

シャンバラ入りと俺との再会を喜んでくれることはわかったけれど、やっぱりこの人はひたすらに生き様が迷惑だ……。

「シャンバラへようこそお越しを、ファルク王」

「おう、久しぶりだな、奥方よ。悪いがちょいと旦那を借りるぜ」

「待つて、ちょっと待つてっ！ それなんの話ですか、ファルク王！？」

「んなの決まってんだろっ、カクテルだよ、カクテル！ 今すぐ新作のモンスターカクテルを作りやがれ！」

「ごめん、ユリウス……。私たち、もうコレお腹いっぱいだから、一抜けするね……」

「わ、わたしは市長邸から娘たちを引き取ってくるわっ、またねユリウス……っ」

俺から見てもはた迷惑なのだから、女性から見たらさぞ厄介な人なのだろう。

シエラハとメーブルは俺とガラテア姫を残して、家の軒先から逃げ出していった。

「ガラテア姫、君も2人と一緒に行つていいよ。この方の相手はかなり骨が折れるから……」

「存じていますから大丈夫です」

「はははっ、間違えたように元氣になりやがって！ 死ぬかもしれないって聞いたときは、ワシはよお、もういたたまれなくてよお……。よくやったぜ、ユリアス！」

「ユリウスです……」

「おう、そんなことより酒だ、酒！ 酒を造りやがれ！ あの口からビームが出るヤツも頼むぜ！」

「いや、でもあれは……。あれはシャンバラで呑んで欲しくなかったり、するんですけど……」

「ガハハハッ、シャムシエル爺さんにも話は通ってるぜ！ おめえが酒をたらふく作ってくれたら、今回の件は全て首を縦に振ってや

るよ！」

そう言われて気が変わった。

今回の件は、俺たちの未来に関わる極めて重大な決断と言ってもいい。

彼がそれに全面的に応じてくれるというなら、多少そのへんの家がビームで吹っ飛ばされようとたっぷりお釣りが返ってくる。

「モンスターカクテルとは、なんですか？」

「錬金術で作った酒だ！ 辛かったりピリピリしたり、口からビームが出てたりして美味いっつー！」

「よ、よくわかりませんの……」

「要するに、迷宮の魔物のドロップ品とお酒を混ぜ合わせたカクテルだよ」

「まあっ、そうでしたの。でしたらどうぞ、これをお使い下さい」

「うはあっ、こりゃでけえ宝石だな？！ ガハハッ、その酔狂気に入ったぜー！」

国宝クラスのお宝を、酒に変えてもいいとガラテア姫はファルク王に差し出した。

それに対して迷うことなく王はクリムゾンナイトを受け取り、コイツを酒にすると天高く掲げた。

「いや……それはさすがに、さすがにあの……。その使い方はどうかと俺は思うぞ……」

「構いません。こういった宝石は災いの源になると聞いたことがあります。でしたら、いっそお酒にしましょう！ そうしたら皆で分け合うことが出来ます！」

わからない、理解不能、理解不能だ……。

俺はたくましいファルク王に背中を抱かれて工房へと引きずり込まれ、さあ頼んだぜと調合用の杖を手渡された。

「わかりました、ではあちらの水槽で作りましょう。必要となる材料は　小麦。ありったけの小麦を買い付けてきますので、少々お待ち下さい」

「やったぜ！　酒気はガツンと強くしてくれよ！」

「ふふっ、私ユリウス様の錬金術をもう1度見たいと思っていました。楽しみです！」

バザーオアシスに有する商館に赴くと、その倉庫に保管されていた国産小麦を国家予算で買い付けた。

王を待たせているからすぐにうちの工房に運んでくれと頼むと、ありがたいことに彼らはこちらの願いに応じてくれた。

それから工房に戻り、水槽にベースハープと水を流し込んで、それに魔力をかけて仕込みをした。

そこに国産小麦が届けば調合開始だ。

労働者たち、ファルク王、ガラテア姫が水槽へと次々と小麦を流し込んでくれると、まばゆい黄金色の輝きが生まれた。

「姫。やはり考え直した方が……」

「いいの。ファルク王様がこれで幸せになれるなら、それが私にとって最高の思い出になると思う」

「いい子じゃねえか……。大人になったらよ、ワシと一緒にコイツでいっぱいやるうぜ」

「はいっ！」

こうして水槽の中に、どんな物とだって余裕で交換出来るであろう宝石がぶち込まれて、この世から1つの莫大な富が姿を消した。たちまちに水槽は真っ赤に燃え上がるように色合いを変えてゆき、そしてすぐさまに完成を迎えていた。

赤い蒸気が上がり、それがさつと晴れた頃には、水槽の中に真紅に輝く宝石がギッシリと詰まっていた。

「まあ綺麗！！」

「どういうことだよユリアスツツ、酒はっ、ワシの酒が宝石なんかにならなかつたじゃねえかよおっ?!」

「申し訳ないです、ファルク王。これはどうやら失敗かな……」

しかし水槽いっぱい宝石はあまりに美しい。これはこれでよかったのではない始めた。

「ユリウス、ユリウス……。スクルズ、知らない……?」

「え、まさか、また消えたのか……?」

ところが家側の扉からメーブルがやってきて、なんとも不安になることを言い出した。

うちの子たちは親に似て1人1人が厄介だ。砂漠に出られたことなんて1度や2度ではない。

「あ、よかった、いた……。ほら、あそこ……」

「なんだ、驚かすなよ……」

指を追うと、水槽いっぱい宝石に目を輝かすうちの娘がいた。

女の子はやはりこういうのが好きなんだな……。

「って、待てスクールズツツ、それは口に入れちゃダメだツツ!!」

ところがその宝石を、スクールズは飴だと思ったのか口へと運んでいた。

転移魔法を駆使して止めたが遅かった。口の中に指を入れようとしても拒まれた。噛みつかれた。

「むうーっ! 父、やだ!」

「ヤダじゃないっ、それは食べ物じゃないんだ!」

「あめちゃん!」

「飴ちゃんじゃない、これは宝石 いや、待てよ」

俺たちは水槽に手を入れて、輝くそいつの正体を確かめた。

甘い匂いがする。試しに舐めてみると実際甘い。それは宝石ではなく本物の飴ちゃんだった。

「はあっ、はああっっ、し、心臓に、悪い……っ。びっくりした……

……。石で喉を詰まらせるかと……」

「ごめん、私がちやんと見てたら……」

「お嬢ちゃん、その飴ちゃんどうだ? もしかして酒の味とかしねえか?」

「残念ですけどファルク王、お酒の味がしたら吐き出していると思います……」

「あー……そうか、そっぴやそうだな……」

「父!」

「なんだ、スクールズ? おしっこか?」



「なんか……出る……」

「出る……？ うんちの方か？」

「んっ、んんっ……」

「待て、客の前でそれはダメだっ、メープル今すぐスクルズを」

「ペーっ！」

「へゴオオツツ?!?!」

「いったい誰に予測出来るだろうか……」。

うんちを漏らすのではないかと娘の前にしゃがみ込んで両肩を抱き、その子を抱き抱えようと両脇の間に手を移そうとすると 娘の口から赤いビームが発射されるなんて、いったい誰に予測出来る……？

赤のビームは俺ごと工房の壁を吹き飛ばし、俺をオアシスの中にぶち込んだ。

しかもどうやら一発だけではない。2発目、3発目と、赤いビームがオアシス上空に閃光を走らせた。

「ここはワシに任せよう！ ングビツ……ぶあっ、うっ、きたきた、きたぞお……！」

「父、ごめん、止まら、止まらないのじゃ……んんっ、ぶえーっ！」

「ガハハッ、よしきたあっ！」

俺はいったい何を見せられているのだろうか……。

スクルズの小さな口が吐き出す赤いビームを、軒先に立ったファルク王が白いビームで相殺した。

スクルズのビームが打ち止めするまでのもう2発分もだ。

この王、何げにこのモンスターカクテルを誰よりも使いこなしている……。

「はぁ……すつきり……。おいちゃん、しゅーいー！」

「なあに、いいってことよっ！」

オアシスからずぶ塗れて戻ってくると、スクルズが申し訳なさそうに俺を見るので何でもないと笑い返した。

「って、ユリウスツユリウスツ、このバカ王止めて……っ！ー！」

「ガハハッ、ついに本音が出たな嬢ちゃん！ んっ、うめっ、うめっ、こりゃモンスターカクテル合っぜー！」

が、問題がまだ残っていた……。

ファルク王がウィスキー感覚で飴玉をかみ砕いて、水筒からモンスターカクテルをあおっていた。コイツ、狂ってやがる……。

王の口から赤と白のツインビームが天高く5発分発射されると、先日あれだけやらかしたというのに、またもや兵隊さんのご厄介になることになった……。

破壊力、連射性、どちらも抜群だ。

奇しくもファルク王のこの暴走がデモンストレーションとなり、各国へのモンスターカクテル配備が加速化したのは、もはや運命の冗談としか言いようがなかった。

・1年目 渡る世間は変人ばかり

「お兄ちゃん……っっ」

ともかく部屋に帰って着替えよう。そう決めて玄関へと歩き出すと、そこにもう1人の役者がやってきた。  
ファルク、ランスタとくれば、オドだ。

「久しぶりだ、オド王。あれから少し見ないうちに背が伸びたか？」

「お兄ちゃんっ、お兄ちゃんっ、僕、会いたかった……っ」

「待て、今はずぶ濡れ、わっ?!」

それはあの気弱な少年王だ。華奢な少年がこちらの胸に飛びついてきて、しばらくの間、何を言っても離れてくれなかった。

せめて一言だけでも助け船を出してくれてもいいのに、なぜかガラテア姫たちは見て見ぬ振りをしている……。

いやメーブルに限ってはむしろ逆で、ニヤニヤと俺の困り果てる姿を遠くから嬉しそうに眺めていた。

「オド王、まさか君まで俺に無理難題を言ったりしないよな？」

「え……何かお願いしてもいいのですか……?」

「もちろん。じゃないと流れからして不公平だからな」

「なら僕……ユリウスお兄ちゃんの家泊めて欲しいです……。僕ね、ずっと、お兄ちゃんに会いたかった……」

「そうか、ならそうするといい。というより最初からそのつもりだった。歓迎するよ」

久しぶりに会ってみるとやはりほっとけないというか、つつい彼を甘やかしてしまう。

孤児院育ちの俺からすれば、慕ってくれる弟分に弱いつて部分もあるのだろう。

その日はオド王とガラテア姫を交えて、楽しい一晚を過ごした。2人は似た境遇もあったのかすぐに仲良くなっていたようで、それが彼の成長を感じさせられて俺も嬉しかった。

・

こうして翌朝、俺はいつものようにベッドから身を起こした。この感覚は知っている。起きるとメープルが隣で猫みたいに眠っていることなんて、ここではそう珍しいことではなかった。

「へ、オド、王……?」

ところが俺の隣で眠っているのは、あのうら若い少年王だった。

「あ……おはようございます、ユリウスお兄ちゃん……」

「お、おはおう……。あ、あれ……?」

「どこかされましたか?」

「いや、どうもこうも……あれ……?」

なぜここに彼がいる？

なぜ俺は彼と一緒に眠っていた？

昨晚の俺はどこで何をしていたんだっただか……。

「ユリウス、陛下を知らないかしら？」

「陛下ってオド王か？ それならここにいる」

「あっ……！？ ご、ごめんなさい……あたし、あたし何も見なかったことにするわっ、ごめんなさい！」

「待て！ 待て待て待てっ、誤解だ！ なんか誤解してるぞ、シエラハ！？」

「ふ、深くは聞かないわ……。へ、平気よ、わたし、ぜんぜん、平気よっ」

「あの……僕何かご迷惑をおかけしましたか……？」

と言いながら、なぜ君は俺の胸にピッタリと頬を寄せるのだろうか……？

「違うんだ、誤解なんだっ、待つてくれシエラハッツ！！」

「だって……だって……っ」

ところがこの騒ぎを聞きつけてか、階段から無数の足音が鳴り響いて人がここに押しかけてきた。

現れたのはグラフとメーブルだ。特にメーブルは何か主張があるのか片手を上げて、俺とシエラハの間に割って入った。

「私、犯人知ってるよ……。犯人は……私だ！」

「は……？」

「ど、どういふこと……？」

「昨晚、ユリウス、先に寝たでしょ……。だから、せつかくだから……。私が、寝床が足りないからユリウスのベッドで寝るように、オド王に言っただけ」

「それをボクは見ても振りをした」

「お、おまつ、お前らなんてことを……。?! 余計なことすんなよっ、ビックリしただろ!!」

「なんだ、そういうことだったの……。よ、よかった」

「ご迷惑をかけてすみません……。ここでは、そういうものなのかと……」

しかし王のために手配していたはずのベッドが届かないなんて、そんなことが起こり得るのだろうか。

疑いの目でメーブルを見ると、彼女はニタリとこちらに笑い返してきた。

「お前な……」

「お兄ちゃんと一緒に寝れて、よかったね……」

絶対コイツ、確信犯だ……。

2階から子供たちが降りてくる前に俺はベッドから抜け出して、弟分のオド王に手を貸して起床させた。

こんな現場を娘たちに見られたら、親としてあまりに悲しすぎる……。

「パパー、おはよー!」

「母、おなかすいた!」

「またママ、いたずら、したの……?」

おい……メーブルお前、子供にまでたちの悪さを覚えられてしまっているじゃないか。

「えと……これは、慈善事業……？」

「どこがだ……」

自分の子供にそう言われたら、さすがのメーブルもばつが悪そうだった。

ウルドはメーブルに似て頭がいい。将来はとても賢い子に育つだろう。

オド王とガラテア姫を交えて朝食を囲み腹を満たすと、午前の仕事はモンスターカクテルの増産に決まった。

ファルク王の機嫌を取っておいて損はなく、一応有事の際の戦略兵器にもなる。

いや一応ではなく、こんなシユールなものが本格的に運用できてしまつところが、俺を複雑な心境にさせた。

確かに強い。とんでもない破壊力だ。だが酒を呑んでは口からビームを放つ集団に自分が倒されたら、死ぬに死に切れないというか、相当に納得のいかない死になるだろう。

「オド王、ここはいいから暑くなる前に水浴びでも……」

オーブと水槽を使った酒の調合が一段落したので、付き添ってく

れた彼に振り返る。すると彼は作業テーブルに腰掛けたまま眠ってしまった。いた。

今朝のメーブルのイタズラには驚いたけれど、親兄弟を失った彼からすれば、兄と慕う存在と一緒に眠れたのはとても嬉しいことだったのかもしれない。

確かにまあ、メーブルの行動は慈善事業と取れなくもなかった。

「父、たいへんじゃ！　へんなおきゃく！　へんなおきゃくきた！  
「変なお客？」

もう十分過ぎるほど濃ゆい連中が集まっているのに、これ以上はないだろう。

伝えに来てくれたスクルズの前にひざまずいて、父親は我が子の愛らしさに目を奪われた。無垢だ。あまりにこの子は無垢だ。

空のような美しい髪とその白い肌は、このあどけない容姿と組み合わせるとまさに天使そのものだ。

「おお、ここが大先生の工房ですか！　素晴らしい！」

と思ったのが、なんと変なお客というのはあのツワイクの新王だった。

彼は周囲にエルフの嫁さんたちをはべらせて、ツワイクではなんの変哲もないうちの錬金術工房を絶賛していた。

確かに、コイツはぶつちぎりの変なやつだ……。

「そしてこれがあのモンスターカクテル、口からビームが出るとい  
うあれですね！　ツワイクにもこれ売ってくれませんか！？」



「はあああ……っ」

今となつてはアリの方が尊敬できる。この新王は極力シャンバラの人々に紹介したくないエルフ狂いだ。ツワイクの恥だ……。

「ダメですか？」

「そこは普通に考えてくれ……。住宅の密集するツワイク王都で、こんな物がもし市場に流れたら王都ごと吹っ飛ばす……」

「公共事業がはかどりそうですね！」

「そういう問題じゃねーよ……。ん……。？ その女性2人はどうした？」

「お気付きになられましたか、大先生！」

「だからなんの先生なんだよ！」

「エルフ道の大先生ユリウス先生！ 実は今回、新しいお嫁さんを2人貰うことになりました！ これで大先生の2倍の6人です！」

あまりの無計画さに頭を抱えた……。

・1年目 渡る世間は変人ばかり（後書き）

コミカライズ版、超天才錬金術師1巻がついに発売しました。書店で見かけたらどうかよろしくお願いします。

・1年目 六国同盟

「すまん、本当にすまん……。ツワイク人はこんなやつばかりじゃないんだ、すまん……」

「ユリウス先生が言っても説得力がありませんよ？ しかし……。うん、やはりいい……」

俺が嫁さんたちに謝罪したり、国恥に頭を何度も振っていると、よりにもよってソイツはうちの娘にソロリソロリと不気味な足取りで迫ってきた。

当然、俺はスクルズを背中後ろにかばった。

「父、このおじさん、あやしい、のじゃ……！」

「同感。だけど『のじゃ』は止めなさい。そんな言葉使いをしていると、アストライア様みたいになってしまうぞ」

「なりたい！」

「ああなったら終わりだ。それで、会議はいつ？」

「今日の昼に繰り上げになったそうです。大先生とご一緒するのが楽しみですよ」

「悪いけど俺はそういうのには出ないよ」

「え……。なぜです？ 貴方はもはや事実上のシャンバラのトップでしょう」

「んなわけあるか。俺はここでコツコツと仕事をして、無理難題を叶えるのが仕事なんだ」

うるさかったのか、作業テーブルのオド王が寝苦しそうに顔を上げた。

ツワイクの新王に気付いて、過去の対立もあってか驚いた様子で飛び上がった。

「やあ」

「来ていたのですね、ツワイク王」

「君もね、オド王」

そのやや険悪な態度に少し安心した。

前々から頼りないと思っていたが、今ではこの弟分に、かつての敵を睨むくらいの気骨が芽生えているようだ。

「すみません、僕はまだ、ツワイクへのまだわだかまりが解けていないのです」

「わかるよ。じゃあこうしよう、会議が終わったら、噂の巨大エルフ像と一緒に見に行こうか」

巨大エルフ像……？ ま、まさか、それは……。

「なんですか、それ？」

「いずれ世界遺産となる偉大なる芸術ですよ。シャンバラに来たからに、アレを見ずに帰るのは人生の損です」

「待て、待てよ！？ まさかそれ、マク湖にあるアレのことを言うてるのかっ!？」

「もちろん!」

「あっ、おば！ おば、きた、のじゃ！ いらっしやい、おば、のじゃー!」

おば、というのはリンハイムの女王アストライア様のことだ。  
最悪のタイミングで厄介な人が現れてしまった……。

「おおおーっ、会いたかったぞーっ、スクルズちゅわあーんっ  
っ」

「た、たまらない……。ああ、どんなに君に会いたかったことが……  
っ、なんて可憐なレディなんだ……。っ」

もう1人のグラフ、グライオフェンも一緒だ。

彼女たちは人の目すら忘れてスクルズに飛びついて、ちっちゃなお姫様に世にも情けない顔を公人の前にさらけ出した。

「紹介しにくいんだが……。こちら、リンハイムの女王アストライア陛下だ。で、こちらがオド王で、ごつい方が新しいツワイク王だ」  
「うむ、それでさっきの話じゃが、ワシも行くぞ。美しきエルフ像を眺めながら親睦を深めるとしよう」

いや、いやいや……。なぜそうなる……。

女王陛下は諸王には目もくれず、スクルズばかりを溺愛していた。

「ぜひ一緒にしましょう。いやあ、エルフっていうのは本当に素晴らしいですね」

「えと……。これって……。ぼ、僕も行かなきゃいけない流れなのでしようか……」

たぶんな……。

しかしその話はさておいて、彼らがこのシャンバラに一同に会したのはもちろんただの偶然ではない。

これから彼らは首脳会談を行い、そこで六国同盟の締結を目指す。全てはあのタンタルスに対抗するためだ。

エルフが刈り尽くされたら、その次はヒューマンがやつらに狩られることになる。これはもうエルフだけの問題ではなかった。

タンタルスの脅威を説明し直して、より強い結束で経済、軍事的に各国を結び付けるのが今回の目的だ。

本来ならばこちらの世界の者が一丸となって対抗しなければならぬが、俺たちを信じて味方となってくれる勢力となると、現在は彼らだけだ。

俺たちと関係の薄い者たちからすれば、これはまだ絵空事で、現実的にはこの6国で異世界からの侵略に対処するしかなかった。

・

まだ仮決定ではあるが、先ほど六国同盟が無事に結成された。

初日の会談が終わった頃にはもう夕方前で、俺たちはラクダ車を揺られてあのマク湖を訪れることになった。

美しいエルフの美姫、始祖ゾーナ・カーナ・テネスに瓜二つのシエラ八像。そしてそれに魅了されるユリウス像という悪魔の想像力による産物に、俺は青ざめながら羞恥に震えた。

その像が描き出す光景が、まぎれもない真実だったからだ……。

「ふんっ……君は見た目に以上にスケベなやつだな」

グライオフエンは冷たい目で俺を見て、吐き捨てるようにそう言った。

「ご覧になりましたか、アストライア様！ この造形美を！」

「うむ、なんとという神業じゃ……。我が国にも1つ欲しいのう……。ユリウスは要らんが」

「ええ、大先生は必要ありませんね」

「ふっ、気が合うではないか」

「それはこちらの言葉ですよ、アストライア様！」

ツワイク王とリーンハイム女王はまるで友人であるかのように語り合いながら、シエラ八像の美しさを絶賛していた。

これだけ美しければ、夢中になる気持ちもわかると、わかったよ  
うなことを言われた……。

「ユリウスお兄ちゃんは、本当にシエラ八さんを愛しているんですね」

「あ、ああ……。まあな」

オド王はさつきから俺の手を離してくれない。

俺は彼にとつて、失われた肉親の代わりようなものなのだろう。

手を握り替えずと、嬉しそうに笑い返してくれた。

「僕、国に帰りたくないです……」

「んなことになったら俺がああ女官さんに殺される。またいつでもきてくれ、歓迎する」

彼はオドでたった1人の王族だ。役目を果たさなければならなか

った。

「シエラハ、母さま、綺麗……。父、なぜいる？」

「さ、さあな……」

スクルズは像の意味をよくわかっていなかった。

「笑える……」

「笑えねーよ……こんなの公開処刑じゃねーか……」

「それが笑える……」

「お前な……」

「私は、姉さんが大好きな、ユリウスが大好き……。もっともっと、多くの人に、このことを知ってもらいたい……。ユリウスが、姉さんに夢中で、いつだって崇拜しているんだって……」

「子供の前だ……これ以上は勘弁してくれ……」

六国同盟が締結され、シャンバラに同盟議会が設立された。

俺たちはタンタルスからの侵略に対抗する力を蓄えながら、少しずつ砂漠に緑を蘇らせてゆく。

そしてその果てに、まさかの転機が待っているとはまだ露さえ知らずに、この年に出来ることを必死にこなして生きていった。



それからまた数ヶ月の日々が過ぎ去り、ついに子供たちが2歳の誕生日を迎えた。

エルフの2歳はヒューマンで言うところの6歳相当だ。

断片的だった言葉使いが文法の形を取るようになって、それぞれが強い個性を持ち始めた。

「パパ、もう1度！ 今のもう1度だけ教えて！」

「イヤだ」

「えーっ、なんでーっ!？」

「あまり教えると、サンディに追い抜かれてしまいそうだ」

サンディは3日で最下級魔法マジックアローを覚えてしまった。

さらには6属性それぞれの魔法を6日間で覚え切り、今は魔力増幅のコツを俺にねだっている。これが出来ない和高威力の魔法を放てない。

「ふふーん、だってうちは天才だもん！」

「思い上がるな。早熟の天才ほど才能に慢心して、将来伸び悩むんだ」

「ふーん……よくわかんない！ それよりも強い魔法の使い方教えてよーっ、パパッ！」

「……しょうがないな。だが約束」

「練習以外では使わない！ 誰かを怪我させたらママたちが悲しむ、でしょ！」

サンディは活発なだけあって言葉が上手い。父親の腰に飛び付いて来て、甘える目でこちらを見上げた。

仕方がないので魔力を増幅してみせて、それをサンディの前で砂丘に放った。

魔法の練習は家を少し離れた砂漠でやるが多かった。

「わあっ、砂が全部凍っちゃった！！」

「一生下級魔法しか使えない魔導師や魔法使いも多いくらいだ。サンディも気長にやるといい」

「ふーん……パパはどれくらいかかったの？」

「俺か？ 2ヶ月はかかった気がするな」

「そう、だったら私は1ヶ月で覚えて見せる！ 待っててね、パパ！」

「勘弁してくれ……。パパはサンディの才能が怖いよ……」

サンディは攻撃魔法の天才だ。だからこそ頭が痛かった。

師匠もきつと、クソガキだった頃の俺に対してこんな苦勞を覚えていたのだろう……。

ギルドの訓練所ではグラフがメープルの子のウルドに弓を。

都市長が回復魔法をグラフの子のスクルズに教えている。どの子も早熟の才能を持っていた。

「えいつっ！！ あ、あれえ……？」

「魔力を使い切ったみたいだな。そろそろオアシスに戻って休もう」  
幸いどの子もまだ小さい。魔力や体力にも限界があった。

「わっ?!」

「帰るぞ。お前を成長させすぎるとパパが怒られる。おっと……」

サンディを抱き上げて砂漠から引き返すと、ヤンチャ娘が肩車をしると人の肩によじ登った。

「てんい魔法? あれで帰ったらいいのに!」

「あれは危ない魔法だからダメだ」

「でもパパ使ってる!」

「まあ、必要に応じてな……」

「危ないのになんで使うの?」

「なんでって……。とんでもなく便利だからか?」

「でも危ないんでしょ?」

「ああ……その通りだ」

純粋なサンディに痛いところを突かれて、もう少し使用頻度を減らそうと決めた。

昔は鉄砲玉みたいな戦い方ができたのに、今は躊躇することがある。

戦士として俺は弱くなった。

それもまた1つの事実だ。俺は死ねないし失踪も出来ない。この子たちが艶やかな美女となるまで見守らなければならなかった。

「でな、ロッカーだったか棚を開けたら　そこにメーブルママがいたんだ。そしてソイツが、不意打ちの睡眠魔法をかけてきてな…」

「あはっ、メーブルママらしいねっ」

「ああ。今でこそアイツは自重してるが、サンディたちが生まれる前のメーブルママは凄まじかったぞ。何度アレにひっかき回されたことか……」

「でっ、それでそれでっ!？」

木陰に腰掛けてサンディに昔話をした。  
聞きたいというので、俺たちの馴れ初め話をするようになった。

「シエラハママとメーブルママにシャンバラに誘拐された」

「ゆーかい!？」

「ああ、あれは立派な誘拐だった……。その誘拐犯たちを奥さんにする事になったなんて、不思議な話だな」

「きつと、ママたちはパパに一目惚れしてたのよ」

それはないと否定したところで女の子は喜ばないだろう。  
……むしろ逆で、俺の方がシエラハとメーブルという金と銀色の乙女に魅了されていた。

「それでそれで?」

「……そうだな。ママたちの魅力にメロメロにされてしまった俺は、ママたちを自分のサポート役に付けて欲しいと、ジイジに無理なお願いをしたんだよ」

真実を話したらサンディはドン引きする。

大好きなシャムシエルジイジが、母親たちを使って俺を籠絡しようとしたなんて、そんな老獪な事実は知らなくてもいい。

「やっぱり!」

「やっぱりって……どういう意味だ?」

「だってパパ、ママたちが大好きだもん!　うち、ママが大好きなパパが好き!」

「そ、そうかもな……」

そう真っ直ぐに指摘されると恥ずかしい。

まだ生まれて2年目だというのにサンディはおませだ。

「あらサンディ、魔法のお勉強はもういいの?」

「あつ、シエラハママ!　あのねっ、魔力なくなっちゃったの!」

家から俺たちを見つけたのか、家事をしてくれていたシエラハが木陰にやってきた。

正直、これ以上追求されるとボロが出そうだったので助かった……。

「ふふ……サンディはがんばり屋さんね」

「ママはお買い物?」

「そうよ。2人も一緒に来る?」

「行く！」

「俺はいいや、もう少しここで休みたい」

どの子も才能や個性が強くて手が焼ける。

都市長や師匠、マリウスたちが手伝ってくれなかったら、うちの家庭はもっとギスギスしていたかもしれぬ。

「そう、わかったわ。行きましょ、サンデイ」

「あのねっあのねっ、ママ！ さつきね、パパがママのことをね！」

「お、おいっ、その話はシエラには内緒だ！」

「パパね、ママに一目惚れだったんだって！ ママが大好きなんだって！」

「そ、そう……っ、ふふふっ…… その話、もっと教えてくれる？」

「さっさと行けお前ら……っ、クソ、話すんじゃないかった……」

フードローブ姿の幸せそうな2人を見送って、俺は予定通り自分の錬金術工房へと入った。

シャンバラの再生。最初は年寄りたちを喜ばせたくて始めたことだったが、いつしかそれは人生の目標となっていた。

俺はこの大地に緑があふれる姿を見てみたい。

だからそのための研究をコツコツと地道に進めていった。

・2年目 幸福と平穩、それと湿った唇 1 / 2 (後書き)

投稿が遅くなってすみません。

シエラハたち遅いな……。

そう思いかけた頃、半開きにしてあった工房の入り口から腐れ縁のアイツが現れた。マリウスだ。

「なんだ、何か注文か？ ん、それは……」

「フツ、今日はこれを見せびらかしに来た」

マリウスの片手にはショートソードほどの長さの魔法銃があった。確かこれは見せて貰ったことがあるやつだ。

「改良が済んだのか？」

「君がそれを言うのか？ 改良に終わりはない。そうだろ？」

「否定は出来ないな」

「それより見てくれ、アダマスと一緒にここまで改良したんだ」

そう言っただけマリウスは長い銃身をこちらに突きつけた。そして引き金を引いた。

銃にはなんの反応もない。まさか裏切ったのかと疑った俺がバカみたいだった。

「脅かすな……」

「はっ、俺が君を殺すとも思ったか？ ふっ、なかなかいい顔だったよ」

「一瞬、本気で娘たちの顔が浮かんだぞ……」



「あの子たちは君に全く似ず、かわいらしいからね」

マリウスは何か意図があるのか魔法銃を俺に握らせた。

コイツが欠陥品を持って来るはずがない。何かがあるのだろう。

「この銃を使うには魔力が必要だ」

「そう言われてもよくわからない。魔力があるなら普通に詠唱すればいい」

「はあっ……本気で言ってるみたいだから腹が立つな……。ユリウス、それは天才の理屈だよ」

「いや、どうということだ？」

「誰もが君みたいに魔法を器用に使いこなせるわけじゃない。これは攻撃魔法が苦手な者に、攻撃魔法の適正を持たせるための武器だ」

マリウスが外に俺を手招くので、俺は銃を肩にかけて彼女を追った。

彼の話はよくわかった。これがあれば戦えない者が戦えるようになる。そういうことだろう。

「空に向けて引き金を引いてみる」

「こうか？」

魔力を銃に流し込んで引き金を引いた。

すると轟音と共に光の柱が天高く立ち上り、俺は反動に倒れかけた。

「バ、バカッ、やり過ぎだっ!!」

「引き金を引けと言っただのはお前だろ！」

今のはマジックブラストだろう。

俺は虚脱感に膝を突き、煙を上げる銃身を見つめた。これは大発明だ。

「そつだがここまでやれとは言っていない！」

「ここまで威力が出るとは思わなかったんだ」

マリウスは俺から魔法銃を引つたくと、想定外のこの威力に難しい顔でブツブツと独り言を始めた。

「魔法の素養が高過ぎると、魔法銃が持たないのかもしれないな…

…。このままだと、連発性能に難があるか……」

「凄いのじゃ！」

ところがちょうどそこに、そこにスクールズが青い髪を揺らして帰って来た。

どうも魔法銃に興奮しているようでマリウスにくつついて、ヤツではなく銃ばかりを見つめていた。

「これ、わらわも撃つてみたい！」

「危ないからダメだよ。そうだろ、ユリウス？」

「父、お願い！ これ欲しい！」

「子供が持つものじゃない……。おいユリウス、なんとか言え！」

「……そうだな、1回だけ撃たせてやったらいい。スクールズ、くれぐれも言つがママたちには内緒だぞ？」

「君はバカ親かつ！」

「わーい、父大好き！」

スクルズは新型魔法銃を受け取ると、空にめがけて構えた。そこにマリウスが引き金を引くのだと教えてやると、威力はずつと低かったがマジックブラストが轟音と共に天高く発射されていた。

「キヤーツ、見たか見たか、父っ、マリウスッ?! ビームが、ビームが出たのじゃ!」

スクルズは無邪気にはしゃいでいた。

だが俺たちの感想はそれとは逆だ。この新型魔法銃は危険だ。子供にすら人を殺す手段を与えてしまう。

「見て見て、あそこのヤシの実! バーンッ!」

1回だけという話だったのに、スクルズは魔法銃を使ってまたマジックブラストを放った。

驚いたのは彼女の意思で、適切な破壊力に調整されていたことだろう。

純粹魔力がヤシの実の上部だけを破壊して、オアシスの砂地にヤシの実がドスンと落ちていた。

「ユリウス、この子凄いぞ! 俺の魔法銃を使いこなしてくれている!」

「ああ、意外な才能だな」

スクルズの得意は回復魔法だ。攻撃魔法が苦手で、今までマジックアローすら撃てなかった。

マリウスとアダマスの研究は大成功をおさめたことになる。

「スクルズ!!」

「ぎゃっ、母?! ち、違うのじゃ、こ、これは……パパが! パパが撃つてみるって言ったから、しょうがなかったのじゃ!」

ところがそこにグラフがウルドを連れて帰って来た。

そして鮮やかに娘は父に冤罪をおつかぶせた。

「いてっ!?!」

「すぐにバレル嘘を吐くな。グラフ、スクールズに銃を持たせたことは謝る。もう2度とさせないから許してくれ」

「俺も軽率だったよ。すまない、グライオフエン」

「何を言ってるんだ? ボクはこのくらいの頃から弓を持っていた。それよりさっきのを見たか、素晴らしい命中精度だ! スクールズ、今度はあっちのヤシの実を撃つてみてくれ!」

忘れていた。グラフは元武官だった。

弓の才能が今一つだった自分の娘に、魔法銃使いの才能を見出して笑っていた。

「父、なんか許されたのじゃ!」

「みたいだな……」

「父!」

「なんだ?」

「嘔吐いてごめんなのじゃ……」

「気にするな。孤児院時代のユリウスはもっと嘔吐きだったぞ」

「おい、娘の前で親の過去を掘り返すな」

スクールズには回復魔法と魔法銃の才能、ウエルサンディには攻撃魔法の才能、そして一番おとなしいウルドには弓の才能があった。

「おとうさん、ただいま……」  
「お帰り」

「おとうさん、まだアレ、やってる……？ お父さんのアレ、見た  
い……」

「どうせ今日も失敗作ばかりだぞ」

「いいの……。お父さんのお仕事、見るの好きなの……」  
「そうか。なら特等席にご招待だ」

ウルドを抱き上げて工房に引き返すと、そろそろと残りの連中が  
付いて来た。

みんなの前で試行錯誤して、みんなの前で凡作としか言いようの  
ない失敗作を完成させた。

シャンバラの再生はまだまだ遠い。

それでも諦めずに、いつかこの目で緑にあふれたシャンバラを見  
るために、俺は失敗を繰り返していった。

・2年目 罪か、偽善か

失敗。失敗。失敗を繰り返してゆくうちにあれから5ヶ月が過ぎて、ようやく効果1割増しという小さな成功に漕ぎ着けた。

そこでこのささやかな成功を記念して、バザーオアシスのすぐ隣に新しい公園を作ることになった。

「見て見て、パパ！ 見たことない花！」

「それはきつとデイジーだ。デイジーは涼しい地方の植物だからな、サンデイが見たことなくても当然だ」

「お父さん、これは……？」

「……ランに見えなくもないが、ん……わからん。そういうのは森育ちのグラフの方が詳しいからあっちに聞くといい」

「大変じゃー、父ーっ！ 助けてー！」

「お前はお前で何やってるんだ、スクルズ……」

「転んで落としてわらわの周りに生えちゃったのじゃ……っ！ 助けてー、助けて、サンデイ、ウルドーツ！」

辺りは大騒ぎだった。蒔けば花園を生み出す不思議の種に、この場に集まってくれた誰もが大小の嬌声を上げてはしゃぎ回っていた。

次々と花が芽吹き、砂漠に淡い緑が生まれ、むせかえるように甘い花の香りが立ちこめてゆく。

そんな花園の世界をエルフの子供たちが跳ね回る姿は、今日までの失敗の日々を十二分に労ってくれた。

娘たちがかわいい。だがそれが3人もいると手に余る。今にも蝶々のようにどこかへ飛んでいってしまいそうで、親としては気が気じゃない。

「ユリウス、代わるか……？」

するとちょうどそこにメーブルが戻ってきてくれた。

「そうしてくれると助かる……。シエラハとグラフは……？」  
「帰った」

「はっ、俺たちを置いてか!？」

「うん、なんかあったみたい……。そうじゃなきゃ、この子たち置いて帰るわけないよ……」

せつかくこんな花がいつぱいで、子供たちが興奮してはしゃぎ回っているというのに、なんて場の悪い話だろう。

「……都市長に話を聞いてくる」  
「ダメ」

「お、おいっ……?!」

「ちよい待ち……ハスハス……」

「人前で人の臭いをあからさまに嗅ぐな!」

転移魔法を使おうとすると、メーブルが飛び込むように抱きついてきた。いや、さらによじ登るようにしがみついて、あまつさえ両足を俺の背中に回してきた。

メイプルの眼差しはどういうわけか得意げだ。人様の目線なんて全く気にしていなかった。

「あーっ?! メイプルママずるいよーっ!」

「楽しそう! せっかくだからわらわも乗るのじゃ!」

「お、お母さん……っ、みんなの前でそういうの、恥ずかしいよ……っ」

メイプル、スクルズ、サンデイの3名がしがみつくと、さすがの俺も立っていられなくなつて崩れ落ちた。

「まだ事件だつて、決まつたわけじゃない……」

「痛っ、つねるなっ」

「はあ……子供たちの前じゃなかったら、もっと際どいこと、言えたのに……」

「言わんでいい……」

「じゃ……」

「んぐっ……?!」

メイプルのねっとりとした熱い唇が不意打ちで唇に押し付けられて、荒い鼻息を鳴らす彼女にむさぼられた。

「わっ、わっ、わあああーっ?! お母さん止めてーっ!」

「お、おおお……。メイプル母上は、やはり……す、すんごい人なのじゃ……」

「あ、あっち行こ! なんかつち、恥ずかしい……!」

子供たちは俺たちを捨てて、花園を広げに砂漠へと飛び出してい



った。

何をするんだと俺はメーブルを引きはがて、睨んだ。

……あまりに情熱的な口付けに、つい我を忘れて全てを受け入れてしまった。

ああ、今さら取り繕ってももう遅い……。

「おい、あれはドン引きしてたぞ……。親のラブシーン見せられて喜ぶ子供なんてそうそういないだろ……」

「ごめん……なんか、ちょっとのつもりが、爆発しちゃった……」

「爆発？ 大爆発の間違いだろ」

「ねえ、ユリウス……もつかい、キスしてもいい……？ なんか、お花いっぱい、ドキドキする……」

「ダメに決まってるだろ……」

「私、2人目が欲しい……。そしたら、あの子たちも、嬉しいと思う……」

「それは……それは、あいつらがもつと大きくなってから考えよう。これ以上増えると俺たちは過労 ン？ 誰かこっちに走ってくるぞ……？」

メーブルは引きはがしてもピッタリとくっついてくる冬の猫みたいなやつだ。

そんな彼女となんだかんだ仲良くやっている、そこに皮の軽鎧とローブをまとったシャンバラの軍人が飛び込んで来た。

「大変です、ユリウス様ッ！ 急ぎ市長邸にお戻り下さい！」

「何かあったの……？」

「タンタルスですっ、タンタルスとその軍勢が再びこの世界に現れました！！ 急がないと手遅れになるとっ、シヤムシエル様がつ！！」

結果論でしかないが、メーブルが俺を引き留めたのは失敗だったな。

そんな彼女を慰めるために、俺は彼女の唇に自分の物を重ねてすぐに立ち上がった。

「メーブル、子供たちを頼む」

「うん……。気を付けてね、ユリウス……」

「こういう時のために今日までじっくりと保険をかけてきたんだ、どうにかするさ。……必ずお前の元に戻るよ」

「帰ったらいっぱい、慰めてね……？」

「そ、それは……今はそんなこと言ってる場合じゃない。じゃあな！！」

だいぶ久々に俺は悪空間の扉を開いて、世界の裏側へと身を投じた。

タンタルスは迷宮のどこかとこの世界を繋げて数で押ししてくる。対応が遅ければ残るのは蹂躪による奴隷化による破滅だけだった。

侵略を受けたのはシャンバラ北部にある王国カーロスだった。シャンバラとは貿易相手で関係は良好。国土の南半分が荒地地であるため全体は豊かではないが、実りのある北部には多くの人々が暮らしている。

しかしカーロスにエルフはいない。その点だけこれまでとパターンが大きく異なっていた。

なぜシャンバラの転移門に現れずに、隣国カーロスに現れたのか。エルフは狩れないと諦めて標的をヒューマンに変えたのか、あるいは迂回のためか。確証を選ぶには情報が不足していた。

ただ1つ確かなのは、時間をかければかけるほどにやつらの兵力が無尽蔵に増えてゆくという点だ。

そこで俺と師匠はシャンバラからの援軍がたどり着くまで、先陣を切ることになった。

「おい、シャレンなってねーぞ、コイツは……」

「同感です。これは腹をくくらないといけないでしょうね」

見晴らしのいい高台に飛んでみれば、迷宮の魔物たちが地上にあふれ出していた。

それは黒い群れとなって景色を埋め尽くし、カーロスの軍勢とせめぎ合っている。

戦いはカーロス側の劣勢だ。

無尽蔵に現れる軍勢を相手に平野での野戦が繰り広げられている。

おびただしい戦死者が死体の山を作り、カーロス軍は今にも飲み潰されかけていた。

「バカ弟子、テメエは次元の歪みを探せ。俺はあいつらを援護する」  
「了解。破壊次第すぐに合流します」

「見つかるといいんだがな……」

師匠が亜空間に姿を消して、俺も歪みを探しに世界の裏側に潜った。

しばらくすると師匠の残した言葉の意味を理解することになった。

「ないな……」

歪みを見つけ出し、魔物の坩堝を吹き飛ばせば敵の増援を断てる。

「変だ、どこにも歪みがないぞ……」

だがいくら探しても世界の裏側に歪みらしい歪みが観測出来なかった。

そこで俺は師匠の痕跡をたどって彼に事態を報告した。

「落ち着けよ、バカ弟子。プランAが使えなくなっただけだ」

師匠は範囲魔法が得意だ。彼は雷神のように雷の荒らして魔物を消し炭に変えて、戦場に死体の山を積み重ねていた。

「なら今すぐプランBとやらを教えてくださいよ、今は1秒だって惜しい」

「焼き払え」

「師匠がもうやってます。切りがない」

「違う、テメエのメギドジエムを使うんだよ。シャンバラの戦いはあれで片付いただろ」

「ダメです、ここで使えばカーロスの前線部隊を巻き込んで  
「それも焼き払え」

普段はただの酔っ払いなのに、アルヴィンス師匠は少しの動揺もなく冷たく言い切った。

「……正気ですか？」

「他にねえ。対応が遅ければ、世界がモンスターだらけになるかもしれねえぜ。なら、歪みごとアレを吹き飛ばすしかねえだろ……」

残酷で短絡的で軽蔑すべき判断だと思った。

だがプランCは浮かばなかった。悩めば悩むほどに敵が増え、それにより戦死者が増えてゆく。

「俺が責任を取る。やれ、ユリウス」

虐殺者となるか、偽善を選んでさらなる被害を拡大させるか、俺たちは究極の選択を迫られていた。

「カーロス側にせめて事情を伝えましょう」

「言つてどうする。これからテメエらは死にますよとも言つのか？ 正気じゃねえ」

「俺たち転移魔法使い最大の役割は伝令です。カーロス側と連携を組んで、最小限の被害に抑えて見せますよ。いつまでもバカ弟子とは言わせません」

師匠は少し考える素振りを見せた。中級魔法で次々と魔物を片付けた。ゴブリンからオーク、巨大なトロールまでなんでも一撃だった。

「はっ、ならやってみるか。多少は寝覚めがマシになるだろうしな……。よし、やるなら行け！ カーロス本陣を説得してこい！」

ツワイクの魔導師のトップにいただけあつて師匠は決断力が早かった。

「了解です、アルヴィンス師匠」

「こつちは任せとけ、がんばりや神様も多少の温情をくれるだろ」

「それはどうでしょうね……」

世界の裏側に潜つて、彼方に見える鈍色の軍勢の中に移動した。ワンクッションを立てて敵陣の真上あたりに飛び、カーロス本陣を見定めるとそこへともう一度飛んだ。

「なっ、何者だ貴様っつ?!」  
「敵だっ、將軍をお守りしろっ!!」

戦闘中の本陣にいきなり白いトーガの魔導師が現れたら、刺客だと思っのが妥当だろう。

俺はすぐに膝を突き、敵ではないと將軍と思しき初老の男に頭をたれた。

血迷ったやつが俺の首を落とすかもしれない。だが俺がこれから彼らにすることを思えば、このくらいの賭けではオッズがあまりに小さ過ぎた。

「待て！ 彼はシャンバラの救世主ユリウスだ！」

「なんだとっ、本当か、アリ殿!？」

アリの声と名前に驚いて顔を上げると、そこに一般兵の革装備をまとったアリがいた。

隣には將軍と思しき初老の貴族がいる。見るからに強そうなやつだった。

「アリ、なぜお前がここにいる……」

「商談でたまたまこちらに滞在していた」

「それがなぜ戦場に」

「決まっているだろう、お前を見返すためだ。……それと、無尽蔵に現れる軍勢を相手に、戦わずに逃げるのはまずいと思った」

「アリ……。お前、誰？」

「俺だ！ 愚かな元アリ王子だ、どうだ見直したかっ！」

「見直したよ」

静かに笑い返すと、アリのやつは誇らしげに微笑んだ。一步間違えれば、一応友人と呼べなくもない男を焼き殺すところだった。まったく、運命のいたずらというものは恐ろしい。

「さて將軍、俺はシャンバラのユリウス。シヤムシエル都市長の右腕だ。単刀直入に言うが、俺はあの軍勢を焼き払う力を持っている」「なんと……いや、しかし、むう……。錬金術師ユリウスの噂は聞いているが、さすがにそれは信じかねる」

「信じてくれ。これは改良型のメギドジエム、これ1つで半径300mを焼き払える。ただし、現在の戦況でこれを使うと、この軍を巻き添えにしてしまう」

「ユリウスの言っていることは事実だ。ユリウスはあれ1発で、シャンバラを滅亡の危機から救った」

將軍は話を受け止めかねていた。それだけこの力はリスクが大きすぎる。

「噂は聞いている。今日まで半信半疑だったが、アリ殿が言うならば事実なのだろう。むう、しかし、この状況では決死隊を選別している余裕もない……」

「急で申し訳ない。だが、もうこの手しか残っていないと俺は思っている。もう、やるしかない……」

彼はいい將軍だった。最前線の兵たちを捨て駒にするのを迷っていた。

彼は悩み、前線から響き渡る悲鳴に耳を澄ませて、すぐに覚悟を



決めてくれた。

「転移魔法使いならば、我が陛下を説得して来てくれないか？　このままでは外交問題になろう……」

「妥当なところだ。確かに前線は崩壊寸前だが、後のことを考えれば話だけでも伝えておいた方がいい。シャンバラに属するお前が、カーロス軍ごと敵を焼き払うのだから……」

王との交渉の予定はなかったが、幸い將軍との交渉が迅速にまとまった。

すぐに行つて、すぐに戻れば、戦死者は増えるだろうがまだ間に合はずだ。

「わかった。ではまたすぐに会おう。……名をうかがっていていいか、將軍？」

「ネルティウスだ。さあ急げ」

「了解。すぐに戻る」

足下に亜空間の扉を開き、俺は落ちるよつに彼らの前から姿を消した。

それから危険を承知で世界の裏側を走った。王都はすぐそこだった。

「カーロス王！　非礼を承知で踏み込ませてもらった！　俺はシャンバラのユリウス・カサエル、急ぎ貴方に伝えたいことがある！」

謁見の間では会議が行われていた。

そのど真ん中に俺は転移した。非礼を非難される覚悟をしていたというのに、彼らの反応は正反対だった。

「シャンバラからの援軍か！」

「陛下、噂によるとユリウス・カエサルといえばシャンバラを救った男ですよ！」

「ユリウス殿、援軍はいつ到着するのだ！？ もう長くはもたないぞ！」

戦場が王都からそう遠くないところからして、狼煙でまずい戦況が伝わっているのだろう。

彼らは俺を救世主のように迎え、中には祈るように両手を組む大げさなお偉いさんもいた。

「英雄ユリウス・カサエル。詳しい話を聞こうか」

「では手短かに」

陛下と重臣たちに現在の戦況と、起死回生の策を伝えた。

これが異世界からの侵略で、メギドジエムで歪みごと吹き飛ばさなければならぬことを、手短かに。外交を通じてタンタルスの脅威だけは王に伝わっていたので、話は早かった。

「シャンバラの悪夢が此度は我が国で起きるとは……。そのメギドジエムを使えば、本当に倒せるのか？ 兵士たちを犠牲にすれば、この悪夢は終わるのか……？」

「見過ごせばより多くの死傷者が出ます。やつらは迷宮とこの世界を接続して、魔物たちを操っている。こちらに裏切ったタンタルス族が言うには、理論上はほぼ無限の兵力らしい」

「なんとということだ……」

「ご決断を。急がねば死傷者が増えるばかり、もうやるしかない」

「だが……」

カーロス王は迷っていた。しかし謁見の間に兵士が飛び込んで来て、前線右翼が崩れたと報告を入れると彼の顔付きが変わった。

「やってくれ……。このまま敗北し、民が蹂躪されるよりいい……」  
「心中お察しします。それでは」

カーロス王の説得が済むと、すぐに俺は本陣へ転移した。

・2年目 全てを焼き払う炎 1 / 2 (後書き)

次回更新分、短くなります。

「……アリ、ネルティウス將軍は？」

「最前線だ。撤退の指揮は俺が執ることになった」

「そうか……」

「高潔な男だった。さて、戻って来たということは説得は済んだんだな？」

「ああ、撤退させてくれ」

「任せろ」

アリとネルティウス將軍の副官による指揮で、すぐに撤退の伝令が本陣から飛び出していった。

仲間を捨てて逃げるのかと抗議する者もいたが、そこは強引に押し通した。

「あの時も、お前の提案に従っていたらよかった」

「あの時？ それはあの天幕での一件のことか？ そんなの今さらだろ」

「そうだな……。では後を頼むぞ、ユリウス」

「ああ、任せた」

最前線を残して、カーロス軍が撤退を始めた。

アリが馬にまたがり、本陣を捨てて去ってゆくと戦場に混乱が生まれた。なぜ最前線を残して撤退するのか？ 自分たちは捨てられたのか？ 怒りや悲しみが戦場にこたえました。

……気が重いがそろそろ始めよう。無人の天幕から戦場に飛んだ。するとそこには、師匠とネルティウス將軍の姿があった。

「地獄へのお迎えが来たようだ。楽しかったよ、アルヴィンス殿」  
「おう、俺もだ。最期まで付き合えなくてすまねえな……」

「貴殿のおかげで理想的な戦況が作り出せた。軍人としてこれほど嬉しいことはない。……アルヴィンス殿、地獄で待っているよ」  
「おう、また地獄でな。それじゃ、後始末は任せたぜ、バカ弟子。……それと俺の後を追って来れば、シャンバラの援軍と合流出来るぜ」

師匠は俺の肩を叩いて、將軍に向けて酒を飲むような仕草をしてから亜空間に姿を消した。

あれだけ奮闘しておいて、最後の転移分の魔力を残しているところがさすがだった。

「さあユリウス殿、今こそ好機。多くの兵と民を救うために、さあ、我々ごと敵を焼き払ってくれ」

「すまない……。本当にすまない。どうか許してくれ……」

ここから先は見るに堪えない話だ。

俺はネルティウス將軍とその精鋭たちに守られる中、メギドジエムを起動した。そしてそれを彼に手渡した。

「そんな顔するな、また地獄で会える。さらばだ」  
「すまない」

世界の裏側に潜り、その場から全速力で待避した。

師匠の痕跡を追い、後ろを振り返らずに仲間の元に走った。

俺は悔いた。甘かったのだと悔いた。

・

「ユリウス、無事だったのね！」

「よかった、心配したぞ！」

師匠の痕跡が途絶えた座標で元の世界に戻ると、目の前にシエラハとグラフがいた。

2人の姿を見ると悪夢から覚めたような救われる心地がした。だが、それは違った。

後方より立て続けにメギドジエムによる爆発が起こり、俺は2人を守るために飛び付いて、押し倒した。

「あ、あれは、君の……な、なんてことを……っ。君は前線ごと敵を……っ」

「焼き払った」

2人にしがみついたまま、俺は目を固く閉じた。

最悪の汚れ仕事だ。必要だったからとはいえ、俺は戦場の英雄たちを焼き払ってしまった。

「ユリウス、あなた大丈夫……？」

「あまり大丈夫とは言えない……。当然だ、誰が好きであんなことをするわけがあるか……」

「ユリウス……」

2人は多くは語らなかつた。2人は左右から罪人である俺をやさしく包み込んでくれた。

きつと困惑しているだろうに、無条件で慰めてくれた。そうしているのが気が蘇ってきて、俺はどうにか立ち上がった。

「気に病むことはねえ、俺がテメエに命じたんだ。テメエは命令に従っただけだ。戦犯は俺だ」

「師匠はそこで休んでいて下さい。援軍として、残党を狩ってきてます」

「それで気が済むならそうしな。ネルティウスのやつ、なんか言ってたか？」

「地獄でまた会える。そう言われた」

「ははは、そりゃ死ぬのが楽しみだな！」

師匠は強い。だてに組織のトップに君臨していた人間じゃない。だが俺はちょっとダメそうだ。戦って贖罪をしたい。

「ユリウス、待って！ 1人で行っちゃダメよ、あたしたちも一緒に行くわ」

「今の君は危うい。ボクたちと行動を共にするべきだ」

「そうかもな。ありがとう……」

「ふっ、家族にそんな言葉は不要 んむっ?!」

「ユ、ユリウスッ?! …… キャッツ?!」



きつとメーブルのせいだ。メーブルが花園で俺にあんなことをするから影響された。

俺は淡く美しい青髪のライトエルフのグライオフエンと、金と褐色のダークエルフのシエラハに、ちよつとどころじゃないくらい情熱的な口付けをした。

「愛してる。さあ、戦おう！」

俺たちは溶鉱炉のように赤く燃える戦場に向かい、残党を狩り、やがて歪みを発見して『白の棺』を探し出すと、棺ごと強制転移すること、向こう側からの接続を完全に断った。

白の棺の回収はやはり急務だ。

これがこの世界にある限り戦いは終わらない。

俺は甘かった。俺のやり方は間違っていた。

シャンバラの再生ばかりにかまけて、現実の脅威から目を背けていた。

俺は、甘かった……。

・2年目 全てを焼き払う炎 2 / 2 (後書き)

日付をまたいでしまってますみません。  
投稿がストックがカツカツです。

・2年目 新たなる時代へ

夜、眠れなくてシエラハを求めた。

朝、起きれなくてずっと眠っていた。

昼、味気ない昼食を食べて、仕事を投げ捨てた。

夕、やっと気温が落ち着いてきたので、屋根付きの棧橋からオアシスに釣り竿を垂らして、仕事をサボった罪悪感をごまかした。

「お父さん、これあげる。元気出してね……」

「ありがとう。ウルドはやさしい子だな」

「……業者さん、困ってたよ。明日からはちゃんとお仕事してね……」

「そうするよ」

やさしいウルドを見送って、彼女がくれたナツメヤシをかじった。釣果はあまりよくない。ブーツとしているせいだ。

師匠も俺もあの戦いで心の傷を負った。いや、師匠に限っては理由を付けて飲んだくれているだけなのかもしれないが……。

とにかく帰って来てから俺たちは元の日常に戻れずにいた。

だからこうしている。何もしないで過ごしている。

夜は苦しさをまぎらわせるために妻たちの身体を激しく求め、昼は仕事を投げ捨てて水面ばかりを見ている。

誰かに会うだけでも今は苦痛だ。  
偽善者は俺と師匠の判断を責め、傷口をえぐってくる。好きでや  
つたんじゃない。

「あはははっ、ママ捕まえたーっ！」

「捕まえたのじゃーっ！」

「あら、じゃあ次はあたしが鬼ね。いーち、にーい……」

ふと顔を上げれば、シエラハと子供たちが水浴びをしていた。

いつもだったら美しさに魅了されてしまうのに、今日は全く心が  
躍らない。彼女の美しい姿を見つめるのが生き甲斐だったのに、心  
が錆び付いてしまっていた。

あの戦場は小さな村も含まれていた。

もしかしたらその村に、逃げ遅れた人々がまだいたかもしれない。  
だとしたら俺は、それを焼き殺したことになる。

いやそんなはずない。魔物の襲撃を受けてみんな逃げたはずだ。

だが、我が家で息を潜めて隠れていた者があそこにいたとしても、  
それは別におかしくもない……。

やさしい人たちは誰も仕方がないことだったと言う。

高い視点で事実だけを見ればその通りなのだろう。

だが見捨てられた前線の兵士たちからすれば、あれは大いなる裏  
切りだ。見捨てられて、援軍になるはずの味方に焼き払われたのだ  
から。

「おい」

わからない……。

本当にあの判断は、仕方なかったの一言で済むのだろうか……。

「おい、ふ抜け！ こつちを見る！」

「……なんだ、マリウスか」

「俺で悪かったな。それより仕事をサボったそうじゃないか」  
「だからなんだ？」

「ふんっ、これは思っていたより重傷だな……。おいユリウス、これは俺からのアドバイスだ。いいか？ 仕事をしていた方がずっと気がまぎれるぞ」

「それは仕事の種類にもよるな。錬金術の場合、調合中に余計なことばかり考えてしまう」

マリウスはまだここに居座るつもりのようなようだ。靴を脱いで棧橋から足を下ろした。

男のくせにムダ毛の全くない綺麗な足だった。

「状況からして、ああする他になかっただろ。何をウジウジしている」

「理屈じゃない。善悪でもない。やってしまったことの実態が問題なんだ」

「ユリウスは必要なことをしたんだ。あそこまで追い込まれたのは、カーロスの軍備が不足していたのが原因だ、ユリウスのせいじゃない」

「理屈じゃないって言うてるだろ」

「なら目の前の現実を見る！ ほら、君の愛するシエラ八と子供たちだ！ いつもいつもあれに鼻の下を伸ばして 幼なじみとしてちょっと情けなくなるくらいだ！」

「お、俺はそんなに鼻の下を伸ばしてなどいないぞ！」

「とにかく見る。ほら、あの子たちが魔物に蹂躪されていいのか？ 焼き払うことになってもいいのか？ お前がこのまま仕事を放棄すれば、経済も労働も滞る。この国はお前のポーシヨンとスタミナポーシヨンが頼りだ」

絶対にそれは嫌だ。しかし可能性として考えれば、メギドジエムという殲滅手段を持つ以上、大義のために家族を焼き払う未来もある。

「ユリウス、確かにお前は今回多くの人間を殺めた。だがお前の薬はそれ以上の人々を日々救っているんだ。だから働け、それが何よりの贖罪になる」

マリウスがこちらの手を取り、包み込むように慰めてくれた。休ませるのではなく働くように迫るなんて、いかにもマリウスらしい励まし方だ。

「お前なら同じ失敗を繰り返さない。そうだろ？」

「そこまで思い上がるつもりはない。だが、そうあるべきだな」

棧橋から立ち上がって俺は美しいオアシスを見渡した。

裸で子供とじゃれ合うシエラ八の姿に、ちよつとムラツとしたりもした。美しい。やはり俺の嫁は美しい。あの美しい人と子供たちを俺は守らないといけない。

「ありがとう、覚悟が決まった」

「覚悟？ なんの覚悟だ？」

「俺が何も考えずにただウジウジしていたと思うか？ 考えていたんだ、同じ失敗を繰り返さないようにするには、どうすればいいかって」

「答えは出たのか？」

「出た。俺は甘かった」

「まあ確かにな」

マリウスを見下ろすと、彼はこちらを既に見上げていた。

黒いくせつ毛の髪と気の強い顔付きは、昔と全く変わらなくて見ていると安心する。

「タンタルスに対抗するためには、タンタルスと同等の力を手に入れないといけない」

「なんだって……？」

「敵が転移門を使ってくるならば、こちらだって転移装置を止めるのではなく、門をもっと使いこなすべきだ」

「ああ、なるほど……その件については俺も同感だ。俺たちは甘かったな。で、これからどうする？」

「世界中の白の棺を回収し、それを同盟国に配備する」

技術者としてたまらないプランなのだろう。マリウスの口元が嬉しそくに緩んで、すぐに引き締められた。

「それで？」

「その周囲を要塞化し、魔法銃を配備し、完璧な状態で敵を迎え撃つ！ 全ての白の棺を利用しつつ、こちらの監視下に置くんだけ！ そうすれば悲劇は繰り返されない！！！」

叫ぶと棧橋にグラフがやって来た。どうやら迷宮探索の帰りのようだった。

「賛成だ。ボクもそうすべきだと思う。悲劇は繰り返されてはならないんだ」

グラフは破滅の世界から来た。言わば彼女は悲劇の当事者だ。だから賛成してくれると思っていた。

一方でマリウスの方は慎重だった。技術者だからこそこれが極めて危険なプランであることがわかっているのだろう。

「ユリウスにしては超過激な発想だな……。ん……。なんだあれ？」

驚くマリウスの指先を追うと、うちの工房から白い光が漏れていた。

錬金術の調合による一時的な発光ではなく、まるで俺たちを招くかのように光り続けている。

工房の中に駆け寄ってみると、なんと光っていたのはあの白紙の書だった。

導かれるようにページを開くと、そこに妙なレシピが追加されていた。『21式コンデンサー』だそうだ。

以前、転移門の実用化の際に魔力を貯蔵するパーツを作ったが、どうもそれに仕組みが似ているような気がする。



「おお……このコンデンサーがあれば、きっとバッテリーの性能が何倍にもなる！」

「本当か？　つまりそれは、君の魔法銃の威力が倍に上がるということか？」

グラフが半信半疑でそう尋ねた。

「ああ！　だがそれだけじゃない、転移門も改良出来る！　エネルギー効率が上がれば、より少ない魔力で連続運用が出来るはずだ」

ならばこれは、俺たちがまさに今必要としている物だ。白紙の書は、転移門の改良に繋がる力を俺たちに提供してくれた。

「……だけどなぜ、この書はこうも都合良く、俺たちをサポートしてくれるんだ？　こんなのはあまりに都合が良過ぎるだろ」

「力を貸してくれるんだからいいじゃないか」

グラフはそう言うけれど、この白紙の書はいつだって気まぐれだ。どついう基準で俺たちを助けてくれるのか、よくわからない。

「さあ、俺たちで今からシャムシエル様を説得に行こう！」

「もちろんボクも同行するよ。ユリウス、一緒に行こう」

グラフがでかい白紙の書を抱えて、俺たちはその足で市長邸の書斎を訪ねた。

「過激、あまりに過激ですな……。改革が必要なのは私にもわかりませんが……ふうむ。すみません、少し考えさせて下さい」

都市長は過激なこの決断に驚くも、その後数日間を慎重に考えた後に、最後は首を縦に振ってくれた。

侵略が続いている以上、危険とわかっているとしても俺たちはやつらの力を求めなければならない。そうしなければ、大切な物を失う可能性がある。

それからこの提案は、同盟国議会の議題に上げられた。

当然、あまりにも革新的なこの提案に議会が大きく割れることになったが、結局は他に道がないと最後は可決された。

タンタルスがヒューマンを襲うと証明されたのだ。

こうなった以上は、俺たちが進めなくともいずれ起きる改革だった。

俺たちは始める。世界中に転移門を配備し、タンタルスと同等の力を手に入れる。

世界が大きく変わってしまうだろう。だが蹂躪と隷属の未来よりもずっとマシだ。

俺たちは白の棺を探し出し、これから世界を一つに繋ぐ。

・2年目 シェラハソの迷い

・シェラハ・ゾーナカーナ・テネス

わたしの旦那様はとても純粋な人よ。それに真面目で、勤勉で、やると決めたらどこまでも貫き通す不器用な人。それがユリウスの魅力であり、見ていられない危うさだと私は思っている。

彼は目的のためなら自らを犠牲にすることもいとわれない。自分の命を軽く考えがちで、平気で敵の懐に転移して、魔導師なのに剣を振る。

それにわざとやっているのではないかと疑うくらいにギリギリのタイミングで敵の攻撃をかわし、そしてまた敵の懐に飛ぶ。

子供が産まれる前のユリウスは、まるで放たれた弓矢のような人だった。

彼はいつだって目的を果たすまで止まらない。

猟犬のようにどこまでも獲物を追いかけて、平気で危険を冒す。

世界中に転移門と魔法銃を配備するというあの発想は、彼の刹那性があつてこそその決断よ……。

「ふうっ……全部片付いたようね」

「ふっ、他愛ない。今回は戦力の過剰投入だったかもしれないね」

わたしたちはユリウスの負担を少しでもやわらげたい。

だから今回、わたしたちは子供たちを都市長や義兄に任せて、ユリウスの夢のために迷宮を下ることにした。

「グライオフェンちゃんもシエラハゾちゃんも強ええくな……。こ  
んなん、おっさんの立場ねえぞ……」

「あたいたちはやれることをやるだけミヤ」

「楽でいいと思う……」

編成はわたし、メーブル、グライオフェン。それと名前を思い出  
せない冒険者のおじさんと、ネコヒト族の女の子。彼女は今もユリ  
ウスに夢中よ。

この【水晶の迷宮】はモンスターが硬くて危険な半面、大粒のレ  
インボークオーツが手に入る。このクオーツがユリウスたちが作っ  
ている新型コンデンサーの材料よ。

「姉さん、落ち着いて……。みんな、同じ気持ちだから……」

「ああ、もし怪我をして帰ったらかえって心配させるよ。彼はいつ  
だって君の美貌に夢中なんだから。……まあ、ボクもだけど」

「グギギ……。ユリウス様のご寵愛を受けるなんて、羨ましいミヤ、  
羨ましいミヤ……。ブミヤアツ?!」

メーブルのいやらしい手が白いネコヒトを撫で回した。

あれ、身体が震えるくらい気持ちいいから困るのよね……。

わたしたちは美しい水晶の迷宮を進んで、クオーツゴブリンやク  
オーツゴーレムを粉碎していった。

そのたびに小粒のレインボークオーツがドロップして、わたしは  
それを拾い上げながら……。何度も迷った。

わたしたちのしていることは、本当にシャンバラのためになるの  
だろうか……。と。

そんなことを思いながら虹色の輝きをジッと見つめていると、メーブルが私に寄り添ってくれた。

「ユリウスたちがやるうとしてること……ぶっちゃけ、超危ない……。メチャクチャ、過激……」

「そうよね……」

「ボクは賛成だ。タンタルスどもに対抗するには、やつらと同質の力を手に入れるしかない。ボクたちはその事実に気づくのが遅すぎたんだ」

「おっさんにはそういう難しい話はわかんねーわ」

「ん……それにも同意。やってみるしかない……」

「ユリウス様とつがいになるために！ あたいもがんばるミャーッ！」

「え……。一応、私たちの旦那様なんだけど……」

「気にしないミャ。4番目の嫁になってみせるミャ！」

「で、でもユリウスって……ネコヒト族も、女性として愛せるのかしら……」

「さあな。ユリウスは堅いようで節操がないからな、全く脈がないとも言い切れないぞ」

あたしは後ろのみんなと言葉を交わしながら硬い水晶の床を歩いた。

いくらなんでもネコヒト族はないと思う……。

それにどちらかというと、最近のユリウスはマリウスさんとの距離が近い。

わたしは迷いを抱えながらユリウスがくれた筋力でゴーレムを力づくで砕き、メーブルの支援で加速したみんなが鮮やかに小者たち

を倒していった。快進撃と言ってもいいくらいの一方的な戦いだ  
た。

「話戻すけどよ、これって一度やっちなまえば、もう二度と元の状態  
には戻れない一方通行の道だよ……。上手く言えねえんだが……  
世界中にあの転移門と魔法銃を配備しちまったら、もう誰もそれを  
手放せなくなるよな……」

「そうだな。だが征服されて滅びるよりマシだ」

計画に全面賛成派のグライオフェンがそう断言しながら、モン  
スターのコアを大きなロングボウで射抜いた。

「ま、そうだけだよ……」

「あ、ボス部屋だ……。待って、支援魔法のフルコースかけるから  
……」

この先どうなるかなんてわからない。

わたしたちがタンタルスたちと同じ過ちを繰り返さないように、  
慎重に見守ってゆくしかない。

ボス部屋の奥には、水晶のように輝く巨大な鎧人形が待っていた。  
やっと出てきた倒しがいのある大物に、わたしたちは剣と矢と魔  
法を向けて、戦いの興奮に身を任せて迷いを打ち消した。

どうしてあの白紙の書は、あたしたちの危険な計画に力を貸して  
くれたのだろう。

あの書が新型コンデンサーの設計図を描き出さなければ、世界を  
1つに繋ぐというユリウスの計画は難航することになったと思う。

けれど子供たちの笑顔が脳裏に浮かぶと、迷いが消える。わたし

たちの子供たちをタンタルスの魔力牧場送りになんてさせない。

私は敵の水晶の盾を薙ぎ払いで破壊し、前衛みんなで一斉に飛びかかってその巨体を粉碎した。

古い世界を犠牲にしようとも、わたしたちは負けられなかった。

・2年目 シェラハソの迷い（後書き）

更新が滞ってすみません。

どうにか執筆時間を捻出してゆきます。これからも応援して下さい。



・2年目 大望と後継者

・ユリウス

一方その頃、ユリウスは

「あれ、もう帰ってきたのか？」

オーブに手をかざして水槽を見下ろしていると、工房の入り口から光が射した。

ウエルサンデイ、ウルド、スクールズ。気の強い順に子供たちが入ってきて、水槽の輝きに駆け寄った。

「パパ、ただいまっ！」

「わああ……今日の、綺麗……」

「こらっ、危ないからそこから離れなさい。ほらこっちだ！」

聞き分けのいい順にスクールズ、ウルド、ウエルサンデイがこちらに上がってきた。

いい子のスクールズの頭を撫でたら、まるで犬ころみたいに子供たちがくつついてくる。母親みんなが迷宮に行ってしまったので、きつと寂しいのかもしれない。

「お父さん、これ、何……？」

「レインボークォーツを精錬している。ほら、あの虹色に輝く宝石だよ」

「えーっ、もったいなっ！」

「確かにね。だけどこれが世界を1つに繋ぐんだ」

これさえあれば迅速に動ける。援軍が遅れて手遅れになることもない。

そう思い詰めていることに気付いて、俺は表情を父親の顔に戻した。

「アストライアおば様に聞いたのじゃ！ 父ががんばれば、毎日遊びに来れるって言ったのじゃ！」

それはまた、なんて迷惑な……。

しかしこれ以上わかりやすい説明もないだろう。嬉しいかどうかはともかくとして、みんな納得していた。

「仕上げるよ」

水槽にバケツいっぱいサファイアを投入した。

すると輝きが暗い工房を青白く照らし上げて、子供たちが甲高い興奮の声を上げた。

「きれーっきれーっ、でももったいないよっ！」

「父、凄い……」

「私、お父さんみたいになりたいな……」

蒸気が上がり、水槽の中央に『21式コンデンサー』の原材料である『クラスタージェム』が完成した。それは青白く透き通っていて、角度によって色合いが変わる巨大な宝石塊だ。

水槽に下りて物差しを当てると、縦横きっかり50cm、奥行き

20cmの指定通りの規格になっていた。

「しゅごいのじゃっ、なんだかよくわかんないけど父はしゅごいのじゃー!」

「綺麗っ、綺麗っ! パパっこれサンディにちょうだいっ!」

「国家予算ちよっと分けてくらのわがままだぞ、それ」

「錬金術が使えたら、こんなに大きい宝石、作れちゃうんだ……」

父親っていうのは案外バカだな。子供たちがこうして目を輝かすだけで、わけもなく誇らしくなれるのだから。

俺は点検と自慢をかねて、みんなの前でクラストーゼムへと魔力を流し込んで見せた。

その巨大な宝石は無尽蔵にこちらの魔力を吸い上げる。どこまで流し込んでも限界を感じ取れなかった。

「魔法の力を、吸い取る宝石……なの……?」

「その通り、スクルズは賢いな」

「マジかつ、みんなでやってみるのじゃっ!」

「おっけーっ!」

子供たちそれぞれが積極性順にクラストーゼムへと触れて、魔力を流し込みだした。魔力の伝導率もこれの特徴だ。子供たちはすぐにへとへとになって、空の水槽に尻餅をつくことになった。

「にゃ、にゃんこりやあぁーっ?!」

「ふう、ふう……なんなの、これ……っ、あ、パパ……」

一人一人に順番に触れて、魔力を分け与えると彼女たちは順番に立ち上がった。

品質に問題はなさそうだ。危険性を感じるほどの容量と伝導率だった。

「さて、みんなはマリウスのところにお使いに行ってくれるかな？」

「嫌！ パパの仕事もつと見る！」

「わ、私も、見たい……。お父さん、次は何を作るの……？」

「国家機密だ」

以前、迷宮発掘のために『白銀の導き手』というアイテムを作った。

その製法を応用して、どうにかして地中の『白の棺』をダウジングする物を作りたい。

「うう……。負けちゃった……。もうしょうがないなっ、ちょっと行ってくるね！」

じゃんけんに負けたウエルサンデイが工房を飛び出していった。その間に俺は汲み置きの水を錬金釜の方に入れた。水かさが足りないことに気付くと、スクルズとウルドがオアシスまで汲みに行ってくれた。

「ありがとう、助かったよ」

「いいの……。お父さんのお手伝い、好きだから……」

「お礼に何作ってるのか教えるのじゃ！」

「だから国家機密だって。それに狙い通りの物が出来上がるかもわからない」

基本の材料を入れて水溶液を燐光させると銀の延べ棒を入れた。

続けて白の棺から削り取った粉末を入れて、それから白の棺と共鳴するようにアドリブで素材を入れた。

「うっ……」

「父？　どうかしたのか？」

「困った……トイレに行きたくなってしまった……。うっ……。？！」  
「行けばいいのじゃ」

「ダメだ、大切な材料を使っている……。っ。うっ、うぐっ……。？！」

漏らそうともここを離れてはいけない。

だが、娘の前で漏らすのは出来ることならば避けたい！　いや避けたいというより、絶対に嫌だ！

父親としてのメンツか、それとも仕事の成否か、突如として俺は究極の選択を迫られた。

「スクルズ、ウルド！　お父さんは漏らそうとも仕事を遂行する！　さあっ、大変な現場を目撃する前にここを出て行けっ！」

「はわわわっ、父は凄いのかわかんないのじゃっ？！」

材料はムダに出来ない。よってここは、甘んじて漏らすしかない……。

ところが覚悟を決めた俺の杖に、スクルズがそつと手をそえた。

「たぶん……私、お父さんみたいに出来ると思うの……」

「それじゃ！　この前スクルズは父に内緒でポーション作ってたのじゃー！」

ウルドが俺から力任せに杖を引つたくと、それをスクルズに握

られた。

錬金術は才能のない人間が制御しようとしても吹き飛んでしまう。なのにスクールズは、便意に不安定化していた水溶液を見事に安定させてくれた。

「ど、どうかな……」

「ほれ見る父！」

「でかしたスクールズッ、しばらくそれ任せたぞっ!!」

父親として、自分の才能が娘に遺伝して嬉しい!

そう感激に胸震わせたのは、トイレに駆け込んでやることを済ませた後のことだった……。

・

危なかった……。

台無しになった感動を胸に俺は工房へと戻ってきた。

「パパ！」

「お帰り。大変だったそうじゃないか」

するとサンディとマリウスがいた。俺はがんばってくれたスクールズの肩を叩いて、一緒に杖で釜をかき混ぜた。

「もうだいぶいいね、一緒に完成させよう」

「う、うん……」

仕上げに釜の底をトンツと突いて、国家機密を完成させた。

「ねえねえ、何これ？」  
「方位磁針に見えるな」

銀と黒塗りの包囲磁針が釜の底に12個完成していた。  
試してみるまでわからないが、とにかく白の棺探索の試作品が完成だ。

「やったな、スクルズ！ 凄い凄いのじゃっ！」  
「お、お父さんがすごいだけだよ……」

「そんなことはないぞーっ、スクルズがいなかったら父がうち漏らしてたのじゃー！」  
「勘弁してくれ……」

マリウスには鼻で笑われた後に、やっぱり可哀想だと同情の目を送られた……。

マリウスは妙な2本の棒を両手に持って、それをクラスタージェムへと当てた。すると棒と棒を繋ぐ紐がキラキラと輝いた。

「素晴らしい。これをバッテリーに内蔵すれば、これまでの半分以下の人数で転移門を稼働出来るぞ！」  
「本当なら破格だな」

「それだけじゃない。このコンデンサーを小型化すれば、魔法銃にも内蔵出来る！ 魔力を事前に充電しておけば、魔法が使えない者も攻撃魔法で戦えるぞ！」

「わあっ、マリウスも凄い！ 出来たらうちに撃たせて！」  
「おいマリウス、子供の前で物騒な話は止める……」

「だがこれが興奮せずにいられるか！ ユリウスッ、これをもっともつと量産してくれ！！ これで世界が変わるぞ！！」  
「言われなくともそうする。追加の材料もみんなが取りに行ってくれてるところだ」

サンディとウルドはスクルズを囲んで、跳ねながら自慢の姉妹を褒め称えていた。

無邪気だ。世界を様変わりさせる仕事を手伝ってしまったとは、あの子たちは心にも思っていない。

「迷うな、あの子たちを守るためだと思え」

「そうだな……。それに後悔するならやり尽くした後にしたいたい」

後の世の者は俺たちの行いを恨むかもしれない。だがこうなっては止まらない。迷わずにこのまま突き進む他になかった。

スクルズとの合作にあたる銀の方位磁針は、その後無事に白の棺に反応を示した。

小型に精製したクラスタージェムも、マリウスの工房に運ばれて新型コンデンサーに加工され、新しい魔法銃に組み込まれた。

マリウスは魔法の使えない者でも攻撃魔法を使える時代を作り出した。さらには既存の持ち主の魔力を動力にした魔法銃の方も、大幅な軽量化を果たしたそうだ。

さあ、これからだ。



世界中の白の棺を回収し、魔法銃を装備した軍勢で要塞を固め、奴らからの侵略を返り討ちにする。

カーロスでの同じ惨劇を繰り返さないために、俺たちは少しずつ世界を変えていった。

・2年目 男の追想、シャンバラが砂漠となった日

子供を持つ前は目の前のことしか見ていなかった。

けれど愛くるしい娘を持ってからは、自分の死後のことまで考えるようになった。

向こう50年もしないうちに俺は死ぬ。そう思うと、なぜヒューマンに生まれてしまったのだとやるせなくなった。

それに俺がエルフに生まれていたら、シャンバラの全ての大地に緑を再生させることも可能だったろう。

いつしか俺はこう考えるようになった。

『このままでは時間が足りない……』

都市長の概算では、シャンバラの緑化は今のところ0・8%だ。

このままでは一生かけても間に合わない。

シャンバラの緑化のために、より革新的なレシピが必要だと焦りだして、かれこれ1年半が経ってしまっている。

エルフという限らない時を生きる人々が隣にいるからこそ、俺はシャンバラに生きた証を残したかった。

俺が朽ちて塵となった後も、変わらずにシエラハたちの前に残る物が、中途半端では納得がいかなかった。

遠くない未来に俺は死ぬ。そして妻と子供たちが残される。どうあがいてもこの未来は変わらない。

その日は母親たちに遊びに行かせて、俺と都市長とだけで子供たちの面倒を見ることになった。

といっても都市長は仕事をしながらなので、あまり頼りにはならない。ただそこにいるだけと言ってもよかった。

「お父さん、次は成功するよ……がんばって」

「そうだよ、うちのパパは天才なんだから！」

「早く次次！ 次のじゃ、父！」

耳の長い子供たちに囲まれて錬金釜をかき回した。浅い水かさの中を杖がゴリゴリと底を擦って、今日も失敗ばかりの調合を続けていた。

完成した。爽やかな蒸気が上がり、釜の底に一握りの緑の種が生まれた。

それをサンディが釜に身を投げ出して取って、姉妹で分け合ってから工房の外へと飛び出していった。

「さて、どうでしょうね」

「もう1万回以上失敗している。期待するだけムダだろう」

そこまでゆくと、都市長が手を止めて子供たちを追って外に出る。今回の種は半分の面積しか砂漠を緑に変えてくれなかった。

それでも都市長は嬉しそうだ。彼は砂漠に緑が戻るだけで嬉しいのだろう。

「焦りすぎではありませんか？」

「焦る？ 何を？」

「結果をです。気付けば私よりも貴方はシャンバラの再生にのめり込んでいます」

「そんなはずない。都市長ほど渴望してないよ」

「そうでしょうか」

「そうだ。だが、死ぬ前に果たしたい目標だと思っている」

砂漠に戻った緑はピザ1枚程度。けれど紫色の小さな花が咲いて、子供たちはちっほけなそれに夢中になっている。

「この一生をかけても20%も蘇らせないかもしれない」

「だから改良されているのでしょうか？」

「そうなんだが、こつも結果に結びつかないと、焦りもする……」

「2割もいけば十分ですよ。我々も努力して、ツイクから素材を輸入しますので気楽にやって下さい」

そこまで話して、俺は都市長をじっくりと見た。そういえばこつやって2人だけでゆっくりする時間は今日まであまりなかった。

「はて、どうかされましたか？」

「いや、これは単なる好奇心なんだが……。砂漠になる前のシャンバラは、具体的にどんな世界だったんだ？」

「ああ……その話ですか」

すると都市長は子供たちを　いや、ウエルサンディばかりを見つめた。彼にとってサンディは特に特別な孫だ。

「辺境に荒れ地こそありましたが、砂漠なんてどこにも存在しない美しい世界でした。森と草原、畑と川。何もかもが清らかな理想郷でしたよ……」

「だけどなんでそれが砂漠になったんだ？」

何気ない質問のつもりだった。しかしその問いに都市長は考え込んでしまい、そこに子供たちが帰ってくる形でそれぞれの仕事にまた戻ることになった。

それからまた試作して、完成させて、子供たちを追って外に出た。子供たちは飽きもせず緑を生み出す失敗作に高い声を上げていた。

「当時、私は女王陛下のご息の小姓をしておりました」

「女王って、シエラハの祖先のか？」

「はい……」

「本当にその方とシエラハは似ているのか？」

「はい、この目で見てきました。我らの女王シエラハ・ゾーナカーナ・テネスと、ほぼ同一の容姿に成長してゆくあの子の姿を」

「だったらなんでそんな大事な娘を俺にくれたんだ……」

「本人たちがそう望んだからです」

「いや、だからってそんな……。ああ、もう戻って来たな」

一足先に工房に戻ると、今度は白い花が咲いたと子供たちは喜んでいた。

もう人間で言うところの9歳を超えている。ここからさらに個性が強く出て、素直に俺をパパ、父、お父さんと慕ってはくれなくなるだろう……。

・

「少し外に出ませんか？」

「もちろん付き合おう」

子供たちは飽きたのか、工房を離れて家の方に行ってしまった。そうなる自力で実験しなければならない。

だが失敗続きにどうにもそんな気になれずぼんやりしていると、都市長に誘われた。

「さて、続きをお話しましょう」

「ああ、その話なら喜んで聞こう」

俺たちは屋根付きの棧橋に落ち着いた。

「シャンバラが砂漠と化した災厄の日、私と王子は宰相に連れられて、都を離れました」

「王子というのは？」

「女王陛下ただ一人のご子息です。私の親友でした」  
「となると……それがシエラ八のご先祖様なのか？」

「はい……。私はずっと彼の血筋を見守ってきました……」

なるほど、そういうことか。

その気になればこの男は、シャンバラの王にだってなれただろう。なのに彼がそうしなかったのは、己が臣下であることを今日まで貫いて来たからだ。

「宰相は当時を生きていたエルフたちからすれば、共通の祖父と言つてもいい男でした」

「どんな人だ？」

「白い髭をたくわえた老人です。嘘か本当か、1000年を生きているという話でした」

「1000年つて……。いや、だけど俺からすれば都市長も似たようなものだ。都市長は俺たちみんなのお爺ちゃんだ」

「ふふ……。貴方にそう言っただけで光栄です」

「で、都を離れた後に何が起きたんだ？ 災厄ってなんだ？」

「はい……。私たちが辺境に 迷いの森の外に落ち着いてまもなくして、怪異が起きました」

「災厄、怪異とは穏やかじゃないな……」

「緑の地平に、灰色の波が襲いかかりました。瞬く間に全ての植物が真っ白な灰に変わり、私たちの目の前で砂のように朽ちてゆきました。草も、木も、家すらも……」

たった一瞬でシャンバラが砂漠に変わったと都市長は言う。そんなことが実際に起こりえるのだろうか。

「それでよく無事だったな……。いや、その宰相が守ってくれたってことか？」

「きつとそうでしょう。砂漠化の爆心地は都。あそこに残っていたら、私たちはあそこに残された哀れな白骨死体となっていました」

「それは想像するだけでもエグいな……。砂漠化の原因はわからないのか？ その宰相が何か知っていたんだろ？」

「彼は何も語らぬまま墓に行きました。もはや誰も真実は……な……っ?!」

ところがどうしたのだろう。都市長は慌てて立ち上がって砂漠の方を指さした。

指を追うと、砂漠の一角に大きな緑が生まれている。その中心に子供たちがいた。

「まさか、釜に残っていたのを蒔いたのか？」

都市長と俺はその大きな緑に駆け寄った。近付いてみると、4倍だ。最も効果の出たレシピの4倍の面積の緑が現れていた。

「パパツ、おめでとう!」

「やったのじゃ、大成功なのじゃ!」

「あのね、釜に入ってた分だけしか、使ってないよ……。よかったね、お父さん、じいじ……」

試行錯誤はついに実を結んだ。

大地の結晶をベースに、『ドライアド素材』『琥珀』『水の結晶』を少量加えることで、効果を飛躍的に高めることが可能になった。

「ふ、ふふふ、はははは……」



「都市長？」

「大変じゃっ、じいじがボケてしまったのじゃ!？」

「素晴らしい、素晴らしいですよ、ユリウスさんっ！ 皆を呼んできましよう！ 今すぐ皆を、ここにみんなをです!!」

そこから先は都市長が仕事を投げ出してのお祭り騒ぎになった。今すぐ素材をかき集めて、ありったけの在庫を使って大量生産をすることに決まった。

今日まで地道にがんばってきてよかった。

俺は緑にあふれた世界を、このシャムシエル都市長に見せてやりたかった。これからも、そのずっと先も。

・2年目 男の追想、シャンバラが砂漠となった日（後書き）

22日より、新作「このたび私は冷血で女嫌いと悪名高い氷の侯爵と婚約することになりました」を始めます。タイトルの通りの女性向け恋愛です。

迷走するなく綺麗にかけたなど、満足している1作なので、もしよかったですら読みに来て下さい。12話くらいで完結します。

・3年目　へそ曲がりとへそ曲がり、家族と家族

月日が過ぎ去りついに3年目、娘たちが人間で言うところの9歳の体格に成長した頃、俺たちはついに白の棺を見つけ出した。

搜索チームの半年間の苦勞がついに実ったのだ。彼らが世界中を回り、誰も立ち寄りぬ秘境に足を踏み入れて、しらみ潰しに棺を探してくれなかったらもつと時間がかかっていただろう。

ちなみに、去年カーロスで回収した棺は母国ツワイクへと配備された。これはツワイク、シャンバラ、リンハイムに莫大な富を生み出し、そして同時に世界の貿易網を著しくもつれさせた。

中でもツワイクでは破産する商会や貴族が続出し、かなりの混乱が起きたようだ。

『あの転移門がうちの国にきてくれるなんて嬉しいぜ！』  
『すみません、ファルク王。こんな役回りを貴方の国に押しつけてしまつて……』

新しい白の棺はファルクに配備された。

ちょうど西と東がランスタとオド国なので、その立地の都合で選ばれることになった。

『がはは、らしくねえなあ、ユリアス！』

『ユリウスです』

『もうエルフだけの問題じゃねえ、ここは俺の肩を借りときな！』

『ありがとうございます……。ずいぶんと、酒臭そうな肩ですけどね』

『がはははっ、そうと決まったら今日は飲もうぜー！』

『勘弁して下さい。少しでも早く仕事を済ませて、子供たちのところに帰りたいです』

『飲みながらやれよ！』

『平然とムチャクチャなことを言わないで下さい……。常人は、酒を飲むと頭が鈍るんですよ……』

出入り口である転移門の周囲を要塞化しつつ、ようやく量産化に成功した魔法銃とバッテリーも配備する。

やつらタンタルスが現れたら、やつらの技術で撃退できる。これならば民間人に被害は出ない。

『そうか！これがあれば出来立てのモンスターカクテルがシャンバラで飲み放題ってことだな！？』

『え？いや、あの、うちに押し掛けられても……』

『シャンバラの酒場にも行ってえな！今度誘うから付き合えよ、ユリアスっ！』

『人の話を聞いて下さい……。ですから、俺には家族と生活が……』

『家族が恐くて酒が飲めるか、バカ野郎ツツ！飲まねえなら転移門は返品だっ！』

『そこまで言いますか……。わかりましたよ……』

マリウスたち一行がファルクに到着するまで、要塞化を加速させるために支援をした。

具体的にはスタミナポーションを現地生産して労働の効率を上げつつ、隔日でシャンバラとファルクを行き来した。

それからざっと1週間後、白の棺とマリウスがこちらに到着し、建造中の要塞の中央に転移門を配備した。転送テストも無事に成功。これにより4つの国が1つに結ばれた。

「はあっ、これでようやく二重生活が終わる……」

「お疲れ、ユリウス。加えてファルク王の相手はさぞ大変だったろう」

「まあね……。だが、ツワイクの時よりはいい……」

「そうなのか？ ああ……確かにたちの悪さでは、我らの新王の方が勝るかもしれないね」

「バカ言え、ぶっちぎりだよ……。アイツは王の中でぶっちぎりのたちの悪さだ……」

「君はアレに好かれているからね」

マリウスが同情するように肩を叩いて来た。

「あの新王、嫁さんを連れてシャンバラの歓楽街のニヤバクラに行くつもりだよだぞ。憧れのエルフの国が近所さんになったって、大した舞い上がりようだった……」

「そんなことを……？ それは、ああなんてことだ、アレはツワイク人の恥だな……」

有能なことは有能だが、あの新王は羽目を外しすぎるところがある。

これでもかと両国の転移門を有効活用して、経済的利益を上げる

一方で、ツワイク人はエルフに目がないと人々に誤解を植え付けていた……。

「そういえば、あの時孤児院に寄ったんだが……。誰の仕業かわからんが、これ以上寄付されても困ると院長先生に断られた。お前の仕業だろ、マリウス……」

「俺はこれまで通りに儲けの1割を送金していただけさ」

「は？ 1割っておい……」

今のマリウスは転移門の技術者として、各国から莫大な報酬を受け取っている。

その1割となると常識外れの金額だ。大げさに言えば、レンガではなく純銀で孤児院を建てられるかもしれない。

「ユリウス、大切な話がある」

「大切？ なんだ急に？」

「何度も考えたが、俺たちのしていることは正しいとは限らない」

「ああ、そのことが」

その話は何度も何度も彼とした。結論は、他に選択肢はない。その答えが出ていたはずだった。

「確かにこれならタンタルスの迎撃は容易だ。転移門は各国の人と資源を1つに結び、さらなる恩恵を俺たちにもたらすだろう。しかし同時に、既に数え切れないほどの事件も起きている……」

「けど他にない。やるしかない。タンタルスに家畜にされるよりはずっとマシだ」

マリウスは世界を変えた共犯者だ。そのマリウスにそんなことを言われると、裏切られたような気分になった。害も承知で始めたはずだと俺は彼を睨んだ。

「なんだその目は、俺は君を責めてるんじゃない。俺は……もつと俺を頼れと言っているんだ、ユリウス」

「いや、そんなのもう十分すぎるほど」

「俺も君と同じ罪を背負っている。転移門のせいで首をくくった商人や資産家は数多い。もしかしたら、君は地獄に堕ちるかもしれない。だけど、それは俺も同じだ。君だけで背負うな」

友情。いや、友情にしては情熱的にマリウスは俺の肩に両手を置き、顔を近付けて来た。

彼は真面目だ。真っ直ぐな目でこちらを見つめている。

「ありがとう、マリ」

「ユリウス……」

しかしその彼の唇が、自分の唇にいきなり押し付けられることになるなんて、誰が予想するだろう。

不意打ちの口付けに俺は固まった。だが、不思議と嫌ではなかった。俺にとってマリウスは昔の家族で、近しい存在だったからだろうか。

いや、だけどこれは、ホモ……？

マリウスは、ホモだったのか……？

「よかった……拒まれるかと思ったよ……」

「別に嫌じゃない」

「本当か……？」

「ああ。……というより、今気付いたんだが。もしかして、もしかしてだけどな……」

「悪かった……奥さんがいるのに、こんなことしてごめん、ユリウス……だけど俺……」

今のマリウスが昔のマリウスと重なって見えた。

癖っ毛の美少年と組んで、俺たちは孤児なりに胸の張れる仕事をした。

しかしそんな孤児院時代にいくつかの疑問があった。

マリウスは頑なに俺と一緒に着替えたり、風呂に入ろうとしなかった。変な奴だと思った。

「ユリウス……。だけど俺は、俺はね、ずっと昔から、君のことが……」

だけどある仮説を上げると、これまでのコイツの行動に一貫性が見い出せる……。

いや、それこそが答えたつたのではないか？ 冗談みたいな話だが、その仮説ことが真実に見えてくる。だから、彼に言ってみた。

「マリウス、もしかしてお前　女？」

実はこいつが女だとするならば、今日までの全ての疑問に答えが出る！

あまりにぶっくらぼうなので今日まで疑うことすらなかったが、



最後のヒントでさすがに気付いた。男の親友は、男の親友に口付けなんてしない！

「ふ……」

「女、だよな……？」

「うん……一生気付かないかと思った。そうだ、俺は女だ！ そして君にずっと昔から惚れている！ だからツウィクではなく、君と一緒にシャンバラを選んだんだっつー！」

「ああ、そういうことか……。ああ、なるほどな……」

「なのにつ、なのにお嫁さんが2人も！ それから3人に増えるなんて聞いていないぞ！！ おまけに子供まで作ってっ毎日毎日イチヤイチャしてっつー！！ それを見せられる俺の気持ちを少しは考えるっつー！！」

口付けをされなければ気付くことはなかったと思う。

俺は昔の家族を抱き締めて、慰めたくてその身体を胸の中で温めた。

もしアルヴィンス師匠に抜擢されなかったら、俺はあの孤児院に残って、いつかマリウスと関係を結んでいたのだろうか。

「止める……もう、子供がいるんだぞ……」

「関係ない。俺たちは家族だった。少なくとも昔はそうだった。師匠に拾われなかったら、ずっと家族だったはずだ」

昔、マリウスは師匠にユリウスを連れて行かないでと願った。

その本当の理由がわかった気がする。俺にとってはチャンスを得た恩人でも、マリウスにとっては家族を引き裂いた悪い大人だっ

ただ。

「やっぱりダメだ、ダメだよ……。あの子たちが可哀想だ……。やっぱり忘れてくれ……」

「そうかもしれない。だけど、俺にとってはマリウスの幸せも大事だ」

この日を境に、俺はマリウスに対する態度をやさしいものに変えた。きつとお互いに張り合う理由がなくなったからだ。マリウスは、自分を棄てて孤児院を出ていった俺が気に入らなかつたのだ。

「ダメだって言ってるだろ。子供の幸せ以上に大切なものがあるか」  
「マリウスも俺の家族だ。昔はそうだっただろ」

マリウスも同じ孤児だった。

だからこそ子供を傷つけるようなことをしたくないと、そう言っていた。

不意打ちで人の唇を奪っておいてマリウスは譲らなかつた。

俺はシャンバラまで来てくれた親友であり、家族であり、好意を持つ相手を幸せにしたい。そう願うことの何が悪いのだろうか。

・3年目 魂と書

「ユリウス、ユリウス、ちょっとこっち来て……」

ある晩、子供たちがやっと布団に入ってくれて一息ついていると、メイプルが工房側の扉から現れて俺のトーガの袖を引いた。

「どうかしたか？」

「見たらわかる……」

「それ、今じゃなきやダメか？」

「うん……むしろ、見なきや損かも……」

総当たりでレシピを構築するようになってより、いつからかメモが習慣になっていた。

試した組み合わせを紙に残して、変わった結果が出た物には記述を加える。俺はペンを手放してメイプルに引かれていった。

「こっちは寒いな。ん、なんだあれ？」

メイプルが照明魔法もなしに人気のない場所に連れ込むので、少しその……そっちの方を期待していた……。ところが錬金釜の隣の作業テーブルの上で、何か大きな物が幻想的な薄緑色に光っていた。それは白紙の書だった。

「本が光ってたから、開けてみたら……ほら」

書の前までやってくると、メイプルが大きなその本を開いてペー

ジを進めた。すると白紙だったはずの新しいページにこれまでにな  
い現象が起きていた。

『シャンバラに再び緑を。希望はユリウス・カザエルと共にある。』

驚いた。白紙の書がレシピ以外の自己主張をしてくることなんて  
今まで一度もなかった。

正体不明のこの書までもが、俺にシャンバラの再生を願っている。

「まさか本にまで褒められるとは思わなかった。ますます正体不明  
だ……」

「あ、消えた……」

光が消えて工房が真っ暗闇になってしまったので、照明魔法を頭  
上に浮かべた。メーブルも同じことをしていたので、煌々とした  
明かりが工房を照らすことになった。

「消えてるな……。いや、この場合は消したと言った方が正しいか  
ページは白紙に戻っていた。

この書は自らの意思で記載を削除する能力がある。とても興味深  
いことだった。

「なんか、かわいいね……」

「かわいい……？ なぜそういう発想になる……」

「きつと恥ずかしくなって、自分で消しちゃったんじゃないかな……」

「まあ、言われてみればそう取れもなくなる。ただ、本が意思を持  
っていることの方を驚くべきだと思うが」

「あ、そか……。わ、言われてみたら……超びっくり……」  
「先にそっちに気付けよ……」

ページをめくってみると、過去の記述は消えずにそのままを保っていた。

書から不要な記述を消したのか、あるいはメールが言うように恥ずかしがりなのか、どっちとも取れた。

幾度となく俺たちを救ってくれたこの書が、シャンバラの再生を支持してくれたことも俺には嬉しいことだ。明日からはもっとがんばろう。

「そろそろ戻ろう。本格的に冷えてきた。……ンブツツ?!」

寒いと言ったらキス魔に襲われた……。

そいつは小柄な身体で俺の首根っこにしがみついて、詳しくは記述しかねる情熱的な愛情表現をしてくれた。

「ムラムラしてきた……外、いこ……」

「待て」

「待てない……」

「せめてこういつ時は前振りをくれっ、いきなりされると、驚くだろっ……っ」

「まどろっこしい……。はよ、はよこい、はやく、はやく……」  
「引っ張るなっ、それに、なぜ外なんだ……っ?」

砂漠の夜は寒い、外は肌寒いところじゃない。

「だって……外の方がロマンチックだし、それに……」

メープルはしがみついてもう離れない。

両足を俺の背中に回して、興奮しているのか甘い吐息を人の耳元に漏らしていた。

「それになんだ？」

「本の中の人に、見られちゃう、よ………？」

「その本の中の方は、今頃お前の突拍子もない行動に困惑していると思うぞ………」

その晩、俺は夜の砂漠に引っ張り出されて危つく風邪を引きかけた。

ちよつとのつもりだったはずが、最後は暖炉の前でメープルと一緒に震えて過ごすことになっていた。

子供たちを寝かしつけて戻ってきたグラフの、白い目を受けながら……。

・3年目 魂と書（後書き）

しばらく更新が滞ってしまってますみません。  
埋め合わせに明日も投稿する予定です。

・3年目 甘き森

新しい緑の種は『砂漠の光』と名付けられた。

名付け親は最大の出資者にして渴望者であるシャムシエル都市長で、従来の4倍の面積を再生するこの種はまさに『砂漠の光』となつていった。

しかしそうになると、これをどこに使うのかという問題が浮上する。転移門を使った琥珀の迅速な輸入に商人や都市長が奔走する中、候補地選びにシャンバラの議会が荒れた。

「ユリウスは仕事だよ。政治の話ならあたしが聞くわ」

誰もが自分の地元で緑を蘇らせたいに決まっているからだ。

ここが行政区に近いこともあって、ごますりに来る議員たちだけでも大変だった。

「これはシェラハゾ婦人。しかし可能ならば、直接ユリウス様とお会いたいのですが……」

「ごめんなさい、ユリウスの研究は根気と記憶力の両方が要るの」

オアシス各地に平等に分配するか、それとももっと意識的に使つてゆくべきか。議会ではその点でも意見が分かれていた。



「ユリウス、やっとあの話がまとまったそうよ」

「あの話って、砂漠の光のことか？」

「そう、結局みんなで分けることにしてみたわ」

「ま、妥当なんじゃないか」

それからしばらく経ったある日、バルコニーにもたれて1日の疲れを癒していると、シエラハが続報を持って来てくれた。

彼女は俺のすぐ隣にやって来て、同じようにバルコニーにもたれてオアシスと砂漠を見た。

「でもね、その前に実験をすることになったわ。南にフリドと呼ばれる小さなオアシスがあるの。まずはそこで試験的に運用してみても問題がなければ各地に配布するそうよ」

「ラッキーなオアシスだな。それっていつ始まるんだ？」

「材料が集まり次第、こちらから報告を入れる手はずよ」

「なら明後日の夕方までに納品すると言っといてくれ」

「わかったわ。ふふふっ………なんだか楽しみなね！」

「参加すること前提なんだな」

「もちろんよ！ 自分の手からこぼれた種が、砂漠を花のある草原を変えてゆく。何度見ても飽きることなんてないわ」

彼方を見つめるシエラハを横目に、俺も同じ光景を眺めた。

ここ一帯は少しずつ砂漠とも言い切れない世界に変わってきている。毎日のように試作品をあちこちに蒔いていたら、こうなるのも当然だ。

「ならもう少し働くか。よければ手伝ってくれるか？」  
「ええ、あたしがそれを断るわけないわ」

俺とシエラハはバルコニーから工房に下りて、砂漠の光の大量生産に入った。

オド産の美しい琥珀に囲まれながら、俺たちは約束通りに2日で納品を済ませた。

こうしてあれから3日目の今日、人口2000人にも満たない小さなオアシス・フリドで『砂漠の光』の実験が始まった。

3階建ての兵舎の屋上から辺りを見回すと、オアシスの周囲は一面の耕作地だ。

それを囲むようにドーナツ状に居住地が立てられ、その外側には不毛の白い砂漠が広がっていた。

「行こう、行こうよ、ジイジ！」

「すみません、ユリウスさん。サンデイがこう言うので私は……」  
「行ったらいい。後でどんな光景だったか話すよ」

俺は高見の見物を決め込んだ。自分の今日までの成果と苦勞を噛みしめるには、距離を置いてここから眺めるのが一番だ。

「パパも一緒に行こうよーっ！ 見てるより自分でまいた方が楽しいのにー！」

「アレを作ったパパからすると、みんなが使うところを眺める方が

楽しいんだ。それより早く行かないと始まるぞ」

「もっつ、パパの頑固者！ いこつ、ジイジ！」

「フッフ、言われてしまいましたね、ユリウスさん」

「さっさと行け……」

サンディたちが兵舎の屋上から下りて行くと、残るは俺だけになった。

高見の見物を決め込んでいるのは俺だけで、ジジババから議員、金持ちまでもが自ら時く方を選んだ。

しばらく待機すると、人々の歓声が沸き起こった。ついに始まった。

白い砂漠に緑の染みが広がってゆくかのように、次々と砂漠が草木の生い茂る緑に変わってゆく。

都市長は今頃感動に震えているだろう。

これは彼が都市長が幼少期に見たという、シャンバラの砂漠化とは正反対の光景に見えた。

「ヤバいのじゃ！ 父はヤバいのじゃ！」

「わっわっ、足下から木が……っ、スクルズちゃんっ、あんまりこつちに飛ばさないで……っ！」

「木の実！ 木の実がなつたよっ、ジイジ！」

この『砂漠の光』は、集中的に時くと何種類かの果樹を産み出すことが判明している。

フリド・オアシスを囲むように果樹が生まれ、熟した甘い香りが漂い、砂漠を植物の潤いで飲み込んでいつている。

「いい匂いだな……。それにずいぶんと盛り上がっている……」

人々は歡喜に笑顔を浮かべ、大人から子供まで興奮にはしゃいでいた。

年寄りには涙を流し、森の再生を目撃して立ち尽くす者もちらほらだ。そんな彼らの姿は森が広がるにつれて木々に覆い隠され、やがて全く見えなくなっていった。

「あれ、何か忘れ物か？」

ところが何か違和感を感じて後ろを振り返ると、そこにシエラハが戻って来ていた。

「ううん、あなたとこれと一緒に見たくて戻って来たの」

「そうか、なら隣が空いてるぞ」

手招いてもシエラハは隣に寄って来なかった。

俺からちよつと距離を置いて、彼女は砂漠の再生を見つめて動かなくなった。

「こんなことがあり得るのね……。不可能だと、誰もが諦めていたのに……」

「俺も驚いているよ。生きているうちは無理だと思いかけていたが、これはいけるかもしれない……」

「ふふつ、あなたには長生きしてもらわないと困るわね。あ、みんなにはこのこと内緒にしてくれる……？」

「わかった。でもそんな中途半端なところにはいないで、もうちよつとこっちに來たらいい」

こつちの方が見晴らしがいいぞと、シエラハの手を引こうとした。しかし何が気に入らなかったのか、彼女が逃げるように俺から離れた。

「シエラハ……？」

「ごめんなさい……急に恥ずかしくなってきた……」

「そうか、シエラハらしいと言えばシエラハらしいな」

「あ、ほら見てっ、ほら見て、もうあんなに果樹の森が広がってるわ！」

「ああ。シャンバラじゃドライフルーツばかりだったけど、じきに食べきれないほどの果物が流通するだろうな。バザー・オアシスに売られるようになるのが楽しみだ」

シエラハは俺と距離を取ったまま、屋上の手すりにふらふらと寄った。目の前の光景に魅了され、何も見えていないかのように少し心配になった。

「小鳥たちも帰って来てくれるかしら……」

「鳥……？ ああ、果樹があれば鳥だって戻って来る。どこかの木に巣を作って、毎朝さえずってくれるだろう」

「そうね……。そうだといいのだけど……」

「なんだか、変だ……」。

上手くは言えないが、これはいつものシエラハではない。彼女は果樹の森から視線を外さない。

「夢のような光景ね……」

「そうだな。ただ……」

やっぱり今の彼女は変だ。どうかしたのだろうか。

「何？」

「いや……綺麗だ。緑が蘇ってゆく姿は何度見ても飽きないな。これが見られるなら、死ぬまでこの事業をやっていけるよ」

将来死に別れるという話をすると、シエラハは悲しんだり、そんな話をするなととても嫌がる。

だけど今日のシエラハは広がってゆく緑の方に夢中のようにだった。

「あ、ごめんなさい、ちょっとよろけちゃって……」

「大丈夫か……？ 本当に、どうかしたのか……？」

それとなく手を繋ごうとすると、何が気に入らなかったのかまた逃げられた……。

励ましたかっただけなのに、今日の彼女はわからない。

「そろそろ帰るわ。念押しだけれど、くれぐれもこのことは秘密よ？」

「わかっているよ」

シエラハは手すりの前を離れて俺から背を向けた。

彼女の美しいブロンドにシャンバラのまぶしい光が降り注ぐと、まるで太陽がもう一つそこにあるかのようにだった。

「ありがとう……。本当に感謝しているわ……。本当に……」

どうという意図で言ったのだろうか。

去り際のその言葉はどこかシエラハらしくなかった。

この日、シャンバラの南部に果樹にあふれる森林が生まれた。  
何も生み出さない砂漠から、果樹や材木が手に入るようになった  
のは大きな進歩だ。

ちなみにあの後に転移魔法で合流してみれば、うちの子供たちは  
森に興奮して駆け回っていた。

「パパはうちの誇りよ！」

「父はスゲエのじゃ！ ワシはっ、とんでもねー父を持ってしまっ  
たのじゃ！」

「わ、私も、これのお手伝いしたい……。お父さん、お願い……」

まだまだ未熟だけれど、この子たちがいればきつと大丈夫だ。  
俺が天寿を迎えても、俺の代わりに未来を築いてくれる。その時  
は強くそう信じられた。

シャンバラ緑化計画の進捗2・5%

フリド・オアシスでの実験は成功した。

約1ヶ月の経過観察をはさんでも森は枯れず、シャンバラの強い日差しにも負けずに青々と輝いていた。

それを見て、都市長や議員たちは本気も本気の国家予算をこの計画にぶち込んだ。

ありったけの材料を転移門を経由して世界中から輸入し、今日までため込んできた在庫素材も全投入した。

こうして各地のオアシスに奇跡の種『砂漠の光』が運ばれ、それが各地にちよつとどころではないお祭り騒ぎを引き起こすと、俺の立場も以前と少し変わる事になった。

崇拜されるようになったのだ……。

マク湖の【妻の水浴びをのぞくユリウス像】の前には、連日多くの参拝者が訪れるようになり、それがメーブルの爆笑と、シエラハのどこか得意な微笑みと、俺の激しい困惑に変わった……。

しかしそれでも、全ての緑を取り戻すにはまだまだ効果が足りない。

俺が生きている間に望みを叶えるには、さらなる改良が必要だ。

俺は鍊金釜の前で、27枚目に入るメモ帳を片手に調合の総当たりを続けていった。



ところがそんなある日、大地が揺れた。

「わっわっ、キャ……ッツ?!」

俺はちょうどすぐ側にいたグラフを抱き止めて、壁に手を突いてしばらくの間踏ん張った。

地震は1分近くの長時間に及び、その間グラフは普通の女の子みたいに震えていた。

「グラフママかわいいーっ!!」

「キャッ、って言ったのじゃ! 確かに母が悲鳴上げたのを聞いたのじゃ!」

「みんな、そういう言い方したらダメだよ……」

ちょうど昼食の後だった。グラフはみんなの前でらしくもない姿をさらしてしまった。

「ごめん、助かったよ、ユリウス……」

「凄い揺れだったな」

グラフを解放して、落ちた食器をテーブルの上に集めた。シエラハが手伝ってくれたのですぐに終わった。

「おとと……揺れた……」

「いや揺れてないっての……」

「おっと……手が、滑った……」  
「痛った?!」

メーブルはわざとらしくもたれ掛かってきて、人をつねって嬉しそうに笑った。なんて教育に悪い母親だろう……。

「お母さん……っ、お父さんをいじめちゃダメだよ……っ」  
「大丈夫……ユリウスは喜んで……。ほら、ビンビン　うぐっ  
!?!」

そういうのは止める……。  
あまりにも酷いのでメーブルの鼻をふさいで黙らせた。

「あ、アルヴィンス叔父様が待ってるんだった！　うち行ってくる  
!」  
「おお、そうじゃった！　わらわらも行かねば！」

ウエルサンディは師匠の元で攻撃魔法。ウルドはグラフと一緒に弓の練習。スクルズはマリウスの工房で技術の勉強をする予定が入っている。

気まぐれな子供たちはグラフと一緒に慌ただしく家を出て行った。

その後を追うように、シエラハも食器を持ってオアシスに向かうと、俺は我が家最大最凶の問題児の前に取り残された。

「ねえ、なんか今日は少し涼しいね……」  
「ああ、もうお昼なのに今日はちよつと変だな」

「午後の仕事、手伝う……」

「頼むよ。……変ないたずらはナシでな」

「ビンビンなのに……？ あて……っ」

「止める、子供の前でそれは止める、いつか嫌われるぞ……」

「ごめん、最近ムラムラしてて……あてっ」

メーブルのおでこを2度小突いて、俺はその日の仕事に戻った。その時はただの地震。そうとしか思っていなかった。

夕方前、一日の仕事を終えてオアシスの木陰でたたずっていると、都市長のところの小間使いが駆け込んで来た。

「あれ、あなたはお爺ちゃんのところの……」

「大変です、ユリウス様！ 今すぐシャムシエル様のところまでおいで下さい！ 大変、大変なのです！！」

まさかタンタルスが動いたのかと転移門の方角を見上げてても変化はない。

俺はメーブルの子のウルドを胸の中から解放して立ち上がった。

「直接お爺ちゃんに聞いた方が早いな、ちょっと行ってくる」

「う、うん……気を付けてね、お父さん……？」

「心配するな。サンディとスクルズを頼んだぞ」

「わかった……あっ?!」

ウルドに後を任せて、亜空間の扉に身を投じた。

都市長の書斎はすぐそこだ。世界の裏側をちよつと歩いて元の世界に戻れば、そこにシャムシエル都市長と師匠、それに軍人たちの姿があつた。

「よう、バカ弟子。一大事だぜ」

「それは聞いています。敵襲ですか？」

「はっ、そつちの方がまだ幾分かマシだな。シャンバラを囲う結果がよ、消えちまったんだとよ……」

「消えた……？ 迷いの砂漠が、人を惑わさなくなったということですか？」

師匠は質問に静かにうなづき、それからどうしたものかと難しい顔で両腕を組んだ。それが事実ならばとんでもない一大事だ。

シャンバラは迷いの砂漠に守られた不可侵の国だからこそ、今日までヒューマンと対等にやってこれた。もし迷いの砂漠を失うことになれば、シャンバラは武力による恫喝や、最悪は征服を受けることにすらなる。

都市長の様子をつかがうと、落ち着いてはいたが書斎に片肘を突いて頭を抱えていた。迷いの砂漠の消滅が、ありとあらゆる問題を招くことなど目に見えていた。

「来て下さりありがとうございます、ユリウスさん……」

「大丈夫か……？」

「ええ、私自身に問題はありません。問題はこの状況です……」

「シャンバラは今、丸裸だ。おまけにこの土地には山がない。昔も国境警備隊も何も無い。シャンバラは確かにテムエのおかげで強くなったが、防衛戦となると分が悪いぜ、この土地はよ……」

ああでもないこうでもない、都市長の書斎は集まった人々の間で議論が続いていた。俺は静かに彼らの言葉に耳を傾けて、状況の把握に努めた。

現在のシャンバラには多くの同盟国があり、エリクサーのおかげで迷宮で失踪することなく成長を続けた冒険者たちがいる。彼らを頼れば国の防衛は可能。だが怖いのは人さらいや盗賊たちだ。もし転移門で各国を1つに繋げていなかったら、なおまずいことになっていた。

とかそういつた話だった。

「都市長、迷いの砂漠を復旧させる方法に心当たりは？」  
「不明です」

「なら過去に似たようなことは？」  
「ありません……。こんなこと、私の人生でただの1度も……」

「わかった。なら援軍の到着まで俺と師匠で国境を偵察する。いいですよ、師匠？」  
「はっ、国境警備隊がねえならそれしかねえ……。俺は南、テムエは東西北の全てを見張れ」

「ではそれで」

「申し訳ありません、ユリウスさん、アルヴィンスさん。こちらも総動員で対処しますので、可能ならば明日の早朝まで国境の監視を

お願いします……」

「気にすんなよ、爺さん。俺とアンタの仲だろ、今度一緒にニヤバクラ行こうぜ、ニヤバクラ」

俺と師匠は防寒対策を済ませると、各地での偵察に出た。

迷いの砂漠の消滅が何を引き起こすかはまだわからない。結果の向こう側からやってくるものが、今日のような涼しい風ばかりとは限らなかった。

・3年目 desert cradle 1/2 (後書き)

更新が不定期になってすみません。

恋愛の新作を明日から始めます。もしよかったら読みに来て下さい。

迷いの砂漠の消滅は、まずいことに肉眼で把握することが出来た。こちら側とあちら側では極端に湿度が異なり、これまでは雲や光の歪みとして境界を露わにしていた。

ところが今はそれが消え、外と内側の空気が入り交じっている。夜間には外の空気が霧となって国境を包み、あからさまな変化が国境沿いの民を驚かせた。

「助かるよ、アリ」

「もう少し休んでいけ、どうせ霧で何も見えない」

「そうですよ、せめてスープが出来るまで待つて下さい」

深夜にアリの暮らす村に寄ると、巡回をしていたアリに見つかった家に招かれてしまった。

寒くてたまらなかつたのでつい暖炉の前で丸まると眠くなって、温かいスープを腹に入れることになった。

「こんな夜中にありがとう、そろそろ行くよ」

「暖炉はこのままにしておく。芯まで冷えたらここに戻って来い。

村の周囲は俺たちが見張っておく」

「マジで助かるよ、アリ」

「ふんっ、出資者の機嫌を取りたいだけだ。シャムシエル都市長に俺の功績を伝えておけよ」

「あの、これ……スープを水筒に詰めておきました……。湯たんぽ代わりになるかと……」



俺はアリと嫁さんに感謝して、また夜の砂漠に出た。

世界の裏側には寒さという概念がない。そのため身体が冷えることもなければ、暖まることもなかった。

時計回りに霧の深い国境を巡り、湿気が流れ込んだせいでかすみ雲が浮かぶようになった夜空を見上げたりしながら、国境のアリの家を拠点にして各地を飛び回った。

「あ……ユリウスツ！ きゃっ、冷たい……っ」

国境を5周回ると早朝になっていた。

冷えた身体で都市長の書齋を訪れると、書齋机にシエラハがいて、俺を見つめるなり胸に飛び込んで来た。

「あつたかい……」

「もっつ、あなたって人はなんで無茶ばかりするのよっ！ こんなに冷たくなるまでがんばらなくてもいいじゃない……」

シエラハのやわらかな温もりは天にも昇る抱き心地だった。

彼女から少しでも体温を分けてもらいたくて強く抱き締めて、肺の奥に入り込んでいた冷たい空気を吐き出した。

離れたくない。このままベッドに連れ込みたくなつた……。

いやらしいことをしたいのではなく、暖炉のある部屋で一緒に眠ってしまいたい。

「都市長は……?」

「会議室よ。ひっきりなしに人が来て、眠る時間もないみたい……」

「いつか良い人材を見つけて隠居させてやりたいな」

「そっくりそのまま、あなたに返すわ!」

冷たい廊下を進んで会議室に移動すると、暖炉で湯が沸かされていた。

すぐにシエラ八がその前に駆けて行って、お茶の手配を始めてくれた。

「少し待って下さい……。お帰りなさい、ユリウスさん」

「ただいま、都市長。やつれた酷い顔だ」

「それはお互い様です。では、報告をお願い出来ますか?」

「あまり良くない。シャンバラを囲むように霧が発生していて、シャンバラへの侵入をもくろむやからが後を絶たない。狙いは辺境のエルフのようだ」

「なんと愚かな……」

「ユリウス、一気に飲んじゃダメよ。少しずつね……?」

「ありがとう。熱……っ」

「だから言ったじゃない」

芯まで冷える凍えのあまりに、ついお茶を一气飲みたくなる。

シエラ八が少しでも俺を温めようと、俺の左手を胸の中に抱え込んでくれた。ああ、やわらかい。温かい……。

「訊くのが恐ろしいのですが、その、侵入者の数はどれほどでしょう……？」

「この一晩でざっと100だ。うち3名はただの悪ガキで、家まで送り届けることになった」

「では、残りは盗賊や強盗ですか……」

「傭兵風の者もいた。悪党の振りをして話を合わせてみたんだが、人さらいに盗賊、強盗。どいつもこいつも悪人ばかりだ。キャラバンを狙うって言うっているやつらもいたな……」

都市長は頭を抱え込んでうずくまってしまった。

起きていた重役たちも言葉を荒げて、それが居眠りをしていた連中を起こして、さらに大騒ぎだ。

「ひ、人前でそういうのは……ダメよ、ユリウス……」

「わかってる……。だけど今だけは許してくれ……」

「で、でも……」

それを見ていたら一気に疲れが来て、俺はさすがのようにシエラ八を抱き寄せた。

茶を一杯飲んだ程度で、芯まで来る凍えはそう簡単に消えなかった。

「よう、お二人さん、お熱いねえ……お師匠様も混ぜてくれねえか？」

「師匠も戻りましたか。うっ、酒臭っ?!」

そこに師匠が戻って来た。身体を温めるために酒を頼ったのだから。冷たくて酒臭くておっさん臭い身体が俺とシエラ八をハグした。

「おっと、それどころじゃねえんだった。今すぐ派兵の準備をしな、南から敵が迫って来てるぜ。数はぎつと500名、ありゃ傭兵だ。他のオアシスを無視して、真っ直ぐこっちに向かってやがるぜ」

軍人たちは師匠の報告を受けて慌ただしく動き出した。

見ると中にはヒューマンの将校が混じっていて、そのうちの1人はどう見てもツワイク人だった。

「アルヴィンス殿、ここは我ら援軍に花を持たせてくれるよう頼めないか？　せつかくシャンバラまで呼ばれてきたのだ、戦ってから帰りたい」

「はっ、いいぜ。旧交を温めるついでに俺が案内してやるよ」

彼は師匠と知り合いだったみたいだ。彼が指揮官となることに決まり、連合軍を率いて行政区から出立して行った。

俺は残った。疲れ果てていたし、俺が加わらなくても余裕で勝てる戦いだった。

「ユリウスさん、何かあればお呼びしますので帰って寝て下さい。その子も連れて行って構いませんので」

「ではお言葉に甘える」

「ちよ、ちよつとユリウス……ひ、人前でくつつかないで……」

「それは無理だ」

「な、なんで……っ」

「人肌が恋しいんだ。帰って暖炉で暖まって、起き出してきたみんなの顔を見たら、一緒に寝たい」

そう正直に答えると、会議室の連中に冷やかされた。シエラハは恥じらいに真っ赤になって、おかげでその分だけくっついてる俺は温かくなれた。

それから帰宅して、暖かな暖炉の前にシエラハと一緒に座り込むと、子供たちに会う前に眠ってしまった。

目が覚めると夕方、派兵に参加していたグラフからその後の報告を受けることになった。

シャンバラを狙った傭兵団たちは聡い連中だった。500名による行政区への奇襲は合理的で、シャンバラの乗っ取りを目指すならば最も強力で確実な一手だった。

しかし目論見は失敗に終わった。行政区のエルフたちを精鋭で蹂躪するはずが、彼らの前に3倍の数の連合軍が立ちはだかったせいだ。

アルヴィンス師匠の偵察、伝令能力を駆使した包囲作戦が傭兵たちを困い込み、小規模の戦闘で敵に白旗を上げさせた。

シャンバラの弱点は平地が多いこと。だがその弱点は転移魔法使いと組み合わせることで強力な武器にもなると、今回証明された。

「君にも見せたかった！ あっという間だ、あっという間にあいつらは白旗を上げたんだ！」

「母は戻ってからずっとその話ばかりなのじゃ……」

「グラフは元軍人だからな。戦いとなると血が沸くんだろう」

「うー、困った母なのじゃ……。もつと父に色気のある話をしないと、愛想を尽かされるかもしれん……」

スクールズが自分ではなく母親の心配をするようになったことに成長を感じた。

だけどスクールズは誤解している。自分の父親が母親以上の戦闘狂とは知らないようだ。

「心配はいらない。グラフの気持ちは俺もよくわかる、きっと戦い足りなかっただろうな」

「ほら見る、ユリウスはよくわかってる」

「うーん……。なんか納得いかないのじゃ。父と母は夫婦というより、戦友か何かに見えるのじゃ……」

それも間違っていない。だがスクールズとしては夫婦らしい姿を見たいようだ。

そこで俺はスクールズの前でグラフをちよつと強引に抱き寄せた。

「キヤッツ……。な、何を……!?!」

「これで満足か？」

「満足じゃ！ 母はやっぱりかわいいのじゃ！」

「は、離せつ、いきなり何をする……。っ、君のせいでスクールズにまたからかわれただろうっ！」

「かわいい……。ワシも母みたいなお嫁さんが欲しいのじゃ……」

「スクールズ、お前は何を言ってるんだ……」

「だって母はかわいいのじゃ！」

カエルの子はカエル。グライオフエンの子はグライオフエンの子だった。

その後、侵略を企てた傭兵団たちは解放された。

転移門と6国が同盟ある限り、迷いの砂漠が消えようともシャンバラの侵略は不可能。傭兵と盗賊たちには、そう世に知らしめる広告塔になってもらった。

しかし現状、いたちごっこだ。シャンバラに集まる富や、エルフやネコヒトの希少性から、盗賊の流入が絶えない。国境の警備に大量の人員を割かなければならなくなり、シャンバラの緑化と対タンタルスの計画の動きが鈍った。

半月が経った今も迷いの砂漠は復旧していない。今日まで自分たちを育んできたゆりかごが消えて、シャンバラの民たちはとても当惑している。

せつかくヒューマンとの融和が進んだのに、疑心暗鬼が広がっていた。

・3年目 迷いの砂漠そのもの

あれからの日々は、砂と水を混ぜるだけで頑強な建材となる魔法のアイテム・コンクリの緊急生産が主な仕事になった。

都市長たちが編成した国境警備隊のために、国境に拠点を急ぎ作らなければならなかったからだ。

「お父さん、お疲れさま……やっと終わったね……」

「お疲れ。ウルドのおかげでだいぶ楽が出来たよ」

ちょうど今、どうにか納品分が完成した。

メーブルとシエラハは元政府関係者として都市長のサポートに奔走することになり、グラフモリンハイムからの援軍を率いて国境警備に加わっている。

なので最近母親たちの帰りが遅く、その影響で子供たちが自立を始めていた。

今はサンディとスクルズが厨房に入っている。俺たちのために夕飯を作ってくれるそうだった。

「さて、ウルドは居間で休んでいるといい。俺はもう一仕事してから戻るよ」

「何を……?」

ウルドは生意気さのない綺麗なメーブルだ。

その素直な表情が愛らしくて、そっと頭を撫でると嬉しそうに目を細めていた。



「実験だ」

「それ、私も手伝いたい……」

「たぶん失敗するぞ……？」

「手伝う……。パパを助けるって、メイプルママと約束したから……」

「なんていい子なんだ……。なぜメイプルからこんないい子が産まれたのか、本気でわからん……」

反面教師というやつだろうか？

必要な材料を作業テーブルに集めながら、ときおり愛しい我が子に目を送った。

これを誰かの嫁にやるなんて考えられない……。

「何を試すの……？」

「試作品を作る。迷宮や白の棺を探索するアイテムを作れるなら、迷いの砂漠そのものである『何か』だって、発掘することが可能だと思っ」

「ええつと……。なんだか、難しい話だね……。迷いの砂漠って、『物』なの……？」

「ああ、どこかに実在しているはずだ。白の棺がそうだったように、迷いの砂漠を発掘さえすれば後はマリウスがどうにかしてくれる」

ウルドにはまだ難しい話だったが、やさしいマリウスお姉さんを頼るのは賛成だったようだ。マリウスは子供たちみんなに信頼されていた。

「パパッ、お昼ご飯よっ！」

「ワシらが焼いた特製のパンなのじゃ！」  
「わーっ、美味しそう……！」

そこにエプロンを着込んだサンディとスクルズが飛んで来た。  
それぞれのトレイの上にはパンが乗っていて、作業テーブルの上に甘く香ばしい匂いと共にそれが置かれた。

「パン？　こんなの誰に教わったんだ……？」  
「マリウスじゃ！　あいつはやさしくて美人で好きじゃ！」  
「ほらパッツ、食べてみて！」

平たくて丸くてちよつと不格好なパンを軽くちぎって、口へと運んでみた。

「甘……っ」  
「わっわっ、これ美味しい！　2人ともすごいすごいっ……！」

これ、砂糖の加減を間違えていないか……？  
確かに美味しい。美味いが、信じられないくらいに甘いパンだった……。

「何を言う、羨ましいのはワシらじゃ、のうサンディ！」  
「そうだよっ、うちも錬金術の才能が欲しかったもん！　ウルドはつかずるい！」  
「えへへ……いいでしょ……」  
「むきゃーっ、ウルドはずるいのじゃーっ……！」

褒め過ぎると墮落するので頻繁に口にはしたくないが、この子たちは大人が羨むほどの才能をそれぞれ持っている。その良いところ

を1つ1つ褒めてやりたいのを我慢した。

「ところでパパ、何を作ってるの……？」

「これ？ お母さんが家に帰って来れるようになるアイテムの試作だ」

「本当かつ！？ 完成したら母たち帰ってくるのか！？」

「成功すればね。食べながら手伝ってくれる？ 俺たちでお母さんを取り戻そう」

こんな状況で、シャンバラの危機だというのに白紙の書は何も答えをくれない。

今日までかき集めてきたレシピ本にも、当然迷いの砂漠を復活させる物など記載されていない。

なので他のレシピを参考にしながら、自分の力でどうにかするしかなかった。

甘い　あまりに甘いパンを摘まみながら、子供たちの魔力をわけてもらって、俺は試作品を作っていた。

材料を変えつつ、合計64本8種類のダウジングアイテムを作成した。

外見はダウジングロッド、ペンデュラム、方位磁針、小さな水晶玉、それらの色違いだ。成功するとは限らないので、暫定で試作1号から8号とした。

「ふう、ふう……つ、疲れた……」

8種類を完成させるとウルドが床にへたり込んでしまった。素養がある分、負荷が大きかったようだ。

「みんなお疲れさま。これで目当ての物が見つければいいのだけど……」

「じゃあ、ネコヒトさんたち呼ぶね!」

「へ、ネコヒト……?」

「笛を吹くと来るのじゃ!」

サンデイがおもむろにホイッスルを取り出した。それから工房の外にウルドと一緒に飛び出して行って、やかましいと言っても差し支えのない音量で鋭く吹き上げた。すると

「な、なんだと……」

バザーオアシスの方角から砂塵が上がった。

それは少しずつこちらに近付いてきて、やがてネコヒト族たちの群れとなった。

「お待たせにや、ウエルサンデイ!」

「ちょうど僕たち暇してにや!」

「遊んで遊んで!」

バカな……手懐けているだと……?」

それに都合良くも、かなり暇なご様子に見える……。

そうか、ネコヒト族は小柄で非力なものもあって戦闘には向かない

ので、割とこの非常事態でも暇なやつがちらほらといるんだな……。

「父、ネコヒトさんたちに説明するのじゃー!」

「あ、ああ……」

うちの娘とどういう友達なんだ? と訊きたい本心の方が大きかった……。

しかしそれは後回しにして、俺はこの頼れるやつらにことの次第を伝えた。

「というわけで要約するとだ、この中に『迷いの砂漠』を生み出している何かをダウジング出来る物が混じっているかもしれない。どうかこれを持ってシャンバラを巡ってくれないか……?」

「ミヤ……???」

ネコヒトたちの半数が首をかしげ、もう半数は退屈そうに顔を洗っていた。

迷いの砂漠を白の棺と同じ『遺物』と定義するのは、まあ抽象的でイメージしにくい話だろう……。

「とにかくこれを持って砂漠を巡ってくれ! そして反応があったらその場所を教えてください!」

「何を探すにや?」

「それはさっき言っただろう……。見つけ出したいのは『迷いの砂漠そのもの』だ」

「……みゃあ???」

シャンバラの民にとって迷いの砂漠は空気と同じ普遍的な物なだろう。

だがきつと存在していると俺は信じている。迷いの砂漠は、白の棺と同じ古代遺物だ。ならば見つけるアイテムを作るのが俺の仕事で、見つけた後はマリウスの仕事だ。

「よくわかんないけど、わかったみゃ！」

「うち、ネコヒトさんたちに付いてくね！」

「お皿はウルドに任せたのじゃ！ 出陣じゃ、にゃんこーどもーっ  
！」

娘たちはローブをまとい、ネコヒトと一緒に嵐のように工房の前から立ち去っていった。

……とにかく反応があれば戻ってきてくれるだろう。それで成功か失敗かがわかる。

「お父さん、お皿洗ってくるけど……無理しちゃダメだよ……？」

私、お母さんと約束したんだからね……？」

「ああ、少しゆっくりさせてもらっつよ」

俺は娘とネコヒトたちからの報告を待ちながら、新しいダウジングアイテムを試作していった。

それは今日まで俺がやってきたことと同じだ。成功するまで繰り返す。ただそれだけのことだった。

・3年目 迷いの砂漠そのもの（後書き）

ネット小説大賞に1次落ちしてした本作ですが、今日発表された「新人発掘コンテスト」の最終18作品に残りました。

ありがとうございます。どうかこれからも応援して下さい。

更新が不定期になっていましたが、これからは安定供給できるようがんばります！

書籍化できるよう祈ってくれと嬉しいです！

「ごめんね、ユリウス……」

「ごめんなさい。だけどあの人……かなり無理をしているみたいだから、あたしたちなりに支えたいの……」

今日の朝食はラクダのチーズと野菜を使ったハムサンドと、あのフリド・オアシスで収穫された爽やかなオレンジ、それとランスタ王国直送の鶏卵を使った目玉焼きだった。

シエラハとメープルは慌ただしく朝食を済ませると、席を立ち上がって罪悪感混じりにそう言った。

「子供たちのことなら大丈夫だ。むしろ世話をされているのは、親の俺の方かもしれない」

「晚ご飯！ 期待しててね、ママツ！」

「ああ、サンディ……あなたはなんて良い子なのかしら……。今日の夜が楽しみ……」

シエラハが食事の中のサンディに近付くと、少女はパンくずの付いた両手を払って母親の胸に飛び込んだ。

こんなにやさしい母親を持てるなんて子供たちが羨ましい。そんな話をマリウスとよくするようになった。

「私、お父さんのお手伝い出来て、楽しいよ……」

「母たちがいない方がワシらは気楽じゃ！」

「うんうんっ！ だけど……お仕事が終わったら、早く戻って来てね、ママ……？」



「もちろん。お土産を買って帰るわ」

「ギヤツ、変なところつねるなあっ、メープル母はなんでいつもそうなのじゃーっ!？」

「お、お母さん、だめだよ……っ」

メープルを親に持つのはさぞ大変だろうな……とも話したことがある。

へそ曲がりの小さな母は、甲高い声を上げて逃げ回るスクルズを追いかけ回していた。

「行かなくていいのか？」

「あ……忘れてた……。それじゃユリウス、行ってきます……」

「行ってらっしゃい　ンブフツ?!」

「んっ……。ふう……。今日のは、ハムサンド味だった……」

教育に悪すぎる母親は、やることやると挑発するように小さな唇を舐めて見せつけ、悠々と家を立ち去って行った。後に残った俺はため息を吐いて、口に少し残っていたハムサンドを冷たいオアシスの水で胃に流し込んだ。

「メープル母は凄いのじゃ!　なんだかよくわからないけどっ、とにかく凄い女なのじゃ!」

「頼む、アレだけは見習わないでくれ……」

「もっっ……。は、恥ずかしいよ……お母さん……」

それはそうだろう。自分の実の母親があれだけフリーダムだと、それはそうだろうとも……。

慰めるように俺はオレンジにナイフを入れて、ウルドの皿に載せ

てやった。

「じゃあね、ユリウス」

「ああ、こっちは任せてくれ。んっ……お、おい……」

「ふふふっ、だってメーブルばかりズルいもの」

シエラハもやることをやって去って行った。

気恥ずかしそうに頬を染めながら、パタパタと逃げてゆくその姿は一児の母にはとても見えず、夜までしばらく会えないのが残念にならない後ろ姿だった。

ちなみにグラフだが、前々日から帰って来ていない。

今はリンハイムの兵士たちの指揮官となって、突貫工事された国境砦に駐屯している。

「今日もダウジングに行くのか？」

「お昼から手伝う予定！」

「うむっ、昼までは家と父の面倒を見てやるのじゃ！」

「お前たちは立派だな……。俺がお前たちくらいの頃は、もっと分  
からず屋のバカだったよ」

きっと母親がいいのだろう。軍人肌のグライオフエンに、やさしく  
公平なシエラハゾ、そして反面教師のメーブルだ。いや、メーブル  
の生き様だけは見習われては困る……。

「コンコンコン……ニヤ」

「ねえ、みんな、今音がしなかった……？」

「コンコンコーン……ミヤ」

「あっ、この声っ、いつものネコヒトさんたちだっ！」

子供たちが玄関に飛び出してゆくと、しばらく賑やかな騒ぎに耳を傾けることになった。しかし彼らは本題を思い出したようで、食器をまとめていた俺の前に飛び込んで来た。

「ユリウスさんっユリウスさんっ、僕たちのダウジングに反応っ、反応があつたニヤ！」

「本当か？」

「もしかしたらもしかするミヤ！」

「きつとあそこに迷いの砂漠が眠ってるニヤ！」

彼らは錬金術で作られたダウジングアイテム、赤のペンデュラムを取り出した。

実のところこの赤いやつは正体をはかりかねていた。この赤のペンデュラムは、今日まで何にも反応を示さなかったからだ。しかしだからこそ、こうして反応があつたのならばそれだけの期待が出来た。

ちなみに失敗作の方はすぐに正体がわかった。

小銭に反応したり、食べ物に反応したり、動物、鉄、川、さらには猫に反応を示す大失敗作まで多種多様だった。

「だとしたら行くしかないな、案内してくれ。日差しが強くなる前に確認したい」

俺たちは元通りの生活を取り戻すために、朝の仕事を投げ捨ててまだ冷たい砂漠に出た。

俺たちが暮らすオアシスから、日の昇る方角に1kmほどラクダにまたがって進むとそこが目的地だった。

「お、お父さん……本当に、何かあるよ……っ。錬金術って、凄い……っ」

「ワシはニヤンコを探せるやつがお気に入りじゃ」

「あれ楽しいよねっ、うちも貰っちゃった!」

赤のペンデュラムがウルドの手の下で真紅の光を放っていた。

彼女が腕を動かしてもいないのに、吊された宝石が激しく時計回りに旋回している。この場所に何かがあると、ペンデュラムが力強く自己主張していた。

「ユリウス様、どう思つかニヤー?」

「……これは気づかない」

まだ冷たくひんやりとした砂漠に膝を突いて、砂へと手のひらを押し当てた。

地中から極めて微弱な魔力が漏れている。念のため持って来た2つのダウジングロッドをためしても、そちらの方は全く反応がなかった。それぞれ、白の棺、迷宮を見つけ出すロッドだ。

「お父さん、どう……?」

「この下に何かある。集中して触れないとほとんど感じ取れないほ

どに微弱な力が、この下から漏れ出ている……」

「わっ、それってビンゴってことっ!? これでグラフママも帰って来れる!?」

「でかしたのじゃ、にゃんこーたちっ! ……むっ、しかし、この後どうすればいいんじゃ?」

意識を集中して足下のあちこちを触れて回った。

赤のペンデュラムが最も強く反応する座標と、魔力が最も強く感じられる座標はほぼ同一地点だった。

「よし、距離感も掴めたから下に転移してみる」

せつかくの能力だ。こういうときに使わずにいつ使う。俺は意識を集中して目標を絞った。

「だめ……っ、だめだよ、お父さん……っ!」

「そうだよっ、だってママたちが言ってたもん! パパに転移魔法は使わせちゃダメだって!」

「ワ、ワシは……ワシも父がいなくなるのは嫌じゃ、ずっと一緒じゃないと困るのじゃっ!」

そう我が子に言われてしまうと、これまで刹那的に生きてきた自分自身がためらいを覚えていることに気づくことになった。もし失敗してこの子たちと離ればなれになったら大変だ。

「わかった、少し様子を見るだけにする」

「父のアホーッ! ちょっともガッツリも同じじゃ、同じっ!」

「わ、私……メープルお母さんに、言いつける……よ……?」

それは　それは真剣に恐ろしい……。

しかしこの下に眠る物が、俺たちの求める『迷いの砂漠を復活させる何か』とは限らない。時をムダにする前に今すぐ答えが欲しい。

「頼む、メープルに言いつけるのだけは許してくれ。ではすぐに戻る」

「あつ、こらっ、パパーッッ！！」

世界の裏側に潜り込んで、俺は光が方眼紙のように走る世界を縦軸方向に歩いた。

きっとこの辺りだろう。地下に転移可能な空間があることを発見すると、表側の世界へと俺は戻った。

いや、ところが

「あれっ、パパもう戻ってきたの？」

「メープル母は恐ろしいからの……」

「どうしたの、お父さん……？」

狐につままれた気分だ……。

俺は子供たちの前で終始難しい顔で、足下の不可思議な世界に疑いを向けた。

こんな失敗は初めてだ。確かに入り込める空間を見つけ出したはずなのに、元の場所に弾き飛ばされた……。

だとするとこれは想像以上だ。この下には、俺たちの想像を絶する何か眠っていることになる……。

「転移魔法では入り込めなかった。となると残る選択肢は1つだ」  
「どうするの……？」

「目標の座標まで、人力で掘るしかないな」  
「なんじゃ、普通じゃの」

「帰ろう。このことを都市長に報告して、掘り返した結果を待つしかなさそうだ」

俺たちはネコヒト族たちに感謝して、再びラクダに揺られてオアシスに引き返した。

無邪気な子供たちと、高く暖かくなってゆく朝日を背に進むラクダの旅は、騒がしくて心の安らぐものだった。

それから市長邸の書斎に入ると、ちょうどそこに都市長とシエラハ、メーブルがいた。子供たちは下にいた義兄さんをお願いした。

「見つけたのねっ!」

「ああ、見つけた。ただ……」

もちろん報告した。ただ全てを伝えるべきかどうか少し迷った。

「なして、私を見る……?」

「メーブルがどうかしましたか、ユリウスさん?」

「その……有益な情報を提供すると引き替えに、恩赦をくれると約束してくれないか……?」

メーブルは不思議そうにしばらく首を傾げ、やがて何か悟ったのか、たちの悪いアルカイックスマイルを浮かべた。

「いいよ」

「本当に本当だろうか?」

「早く言って、気になるわ!」

「迷いの砂漠を見つけたかもしれない。そこで地下に眠るその空間に飛べないか、転移を試した」

「は……?」

メーブルの頬から笑いが消えた。ジト目にしては鋭いものが俺を



睨んだ。シエラハも少し不機嫌そうだ……。

「まあまあ。それで何か問題が起きたと？」

「目標の座標に飛べなかった。こんなことは初めてだ、何か特別なものが、あそこの地下に眠っているとしたか思えない」

「それは期待が膨らみますね。すぐに掘らせましょう」

「話が早くて助か　うっ?!」

何をされるのかと警戒していると、メーブルが胸に飛び込んで来た。強くしがみついて離れない。不機嫌な猫みたいに爪を立てられるかと思えば、ただそれだけだった。

「そういうところ……何度言っても、直らない……」

「ユリウスが消えたらあの子たちになんて言えばいいのよ！　もうっ！」

大げさだと返したら気持ち逆撫でするだろうか。

俺は寄り添ってくれたシエラハを抱き留め、自分の行いを後悔した。

俺がはかないセミちゃんに戻ると、それはリビドーとなって彼女たちを突き動かすだろう。そう思い返して、やはり軽率だったのかもしれないと我が身と我が腰かわいさに反省をした。

それから子供たちを連れて家に帰ると、残りの1日は錬金術師と

しての日常業務に戻った。

発掘のための物資を量産し、念のために新しいダウジングアイテムも作った。そのうちの1つは、犬を探り当てるムダアイテムだったが、子供たちには大好評だった。

輸出用のエリクサー、国境警備隊のためのポーション、労働者のためのスタミナポーションに、謎に同盟国で需要が高まってゆくモンスターカクテル。気づけば夕方になっていた。

今日の夕日はいつにも増して燃えるように赤い。

一日の仕事を終えた俺はオアシスの水辺に寄って、水面に浮かぶ真紅の夕空を見つめた。

目まぐるしく成長する子供たちのせいだろうか、最近はずいぶんと遠くまで来てしまったかのような、ふいに昔が恋しくなることがしばしばある。

ポーション工場での衝撃的な出会いはさておいて。シエラハとメープルと出会って、この砂漠とオアシスの国で、なんだかんだ言って互いに惹かれ合っていた始まりの日々は、輝かしくかけがえないものだった。

あの金と銀の真珠をただ見つめているだけで、あの頃の俺はソワソワとした気持ちで胸がいっぱいだった。それが今では、お父さんであり、パパであり、父だ。

「あれ、おかしいな……シエラハ？」

昔を懐かしみながら家族の帰りを待っていると、赤く輝くオアシ

スにシエラハのブロンドと小麦色の肌を見つけた。

変だと感じたのは、浅瀬ではなくへそが隠れるほどの深いところに見つけたことだった。

追想に夢中になっていたせいで、ただ彼女に気づかなかっただけだろうか……。いきなりオアシスに現れたような、そんな気がするのは1日の疲れのせいだろうか。

「ふふふ……っ、なんて綺麗な夕日なのかしら……」

不思議に思いながらも彼女の姿にみとれた。

こんなに美しい人がこの世にいるなんて、今でもまだ信じられない。水しぶきを飛ばして肌を清め、笑いながら踊り泳ぎ回るその姿は、呼吸すら忘れてしまうほどに綺麗だった。

「変だ……」

だがやっぱり変だ。シエラハ・ゾーナカーナ・テネスと呼ばれる女性は、その美しさに反して極めて恥じらい深い。その彼女が肌を隠しもせずはこちらにやってくるなんて、泥酔していたってあり得ないことだった。

俺は木陰に隠れた。砂漠の引きを正面から直視するのは、あまりに刺激が強過ぎた。

「ねえ、ユリウス……」

「な、なんだ……？」

ヤシの木越しに俺たちは言葉を交わすことになった。

「止めた方がいいんじゃないかしら……」

「止める……？ なんの話だ？」

「あの下に何が眠っているかなんてわからないわ。あるのは災厄かもしれない」

「ああ……それは一理ある」

「そうですね。やっぱり止めるべきよ。止めようって、都市長を説得してみない……？」

そういう話題なら動揺や劣情を隠せるので大歓迎だ。

俺は彼女の提案を慎重に考えて、その上でやはりそれはないと顔を上げた。

「ダメだ、迷いの砂漠がないとシャンバラは危険だ。迷いの砂漠はなんとしても復活させるべきだ」

「そうね……だけど、それも必要な変化だと思うわ」

「そうだろうか」

「そうよ、もうこの国には迷いの森なんてなくとも平気よ。ようやくエルフたちが揺りかごの外に出る日が来たのよ」

本気でそう言っているのだろうか、背中越しにシエラハをうかがった。……彼女は肌を隠さずはこちらを見ていたので、俺はカタツムリみたいに触覚を引っ込めることになった。

「確かに永遠に揺りかごの中に閉じこもってはられない。いつかは揺りかごを失う日が来る」

「なら……」

「だが、それは今でなくともいい。数に劣るエルフがヒューマンに  
対抗するには、迷いの砂漠がまだ必要だ」

「でも……本当に復旧させるべきかしら？ あの地下に眠るものは、  
白の棺どころではない危険な遺産かもしれないわ」

「だからこそ調べるんだ。なぜ迷いの砂漠が消えたのか、原因を調  
べずにこのままにするのは危険だ。あそこの地下に、転移魔法すら  
キャンセルする何かがあるとわかった以上、調べるべきだ」

深く考えた上でそうきつぱりと返すと、シエラハは黙り込んでし  
まった。

迷いの砂漠が戻ればみんなが元の生活に戻る。彼女だってそれ  
を望んでいるはずだ。

「ねえ、ユリウス……そつちに行ってもいい……？」

「な、なんだと……？ いや、それは、まだ夕方なのに、そういう  
のは……っ」

「お願い。あの下にはよくない物が眠っている気がするの……。お  
願い、みんなを止めて……」

崇拜して止まない女性に耳元へとそうささやかれた。

そうするべきなのだろうか、つい迷ってしまふものがあつた。

だが現実的に、目の前の事実から目を背けることは賢いとは言えな  
い。

「それはダメだ、俺たちは止まれない。転移門を使うと決めた以上  
は、世界中の古代遺物を掘り返して、タンタルスに対抗する力に変  
えなきゃいけない。これが俺たちの選んだ道だ。仮にそれが禁じら  
れた遺産であろうとも、俺たちはそれを使いこなしてみせる」

「そう……どうしても、ダメなのね……」

「それに今さら俺がノーと言っても、もう誰も止まらないさ」

赤く燃えるオアシスを背にしたシエラハを見たくて、再び後ろを振り返った。しまった、そこにサンディがいた……。

「ママ……？ パパと何してるの……？」

「ああ、サンディ……」

急に何を思ったのか、シエラハは娘に手を伸ばしかけて、迷った後にそれから引っ込めた。

「何、ママ……？ なんで裸なの……？」

「ふふ……サンディは日に日に美人になってゆくわね。あだし、サンディほど可憐な女の子を知らないわ」

「本当っ！？」

「ええ、いつか世界中の王子様がサンディにプロポーズしに来るわ」

「えへへっ、世界一美人のママに言われると、凄く嬉しい！」

「そろそろ戻りましょうか」

「うんっ、晩ご飯！ ママたちのために美味しい晩ご飯を作ったのっ！ ジイジも呼びましょ！」

「じゃあね、ユリウス。さっきのことは忘れて」

「わかった。だが色々と考えさせられた。慎重に発掘するよう都市長に言おう」

「ありがとう、そうするべきだと思うわ」

「ただ……」

その前に服くらい着るべきではないだろうか……。  
大きなお尻に目を奪われて、娘の前だと気づき慌てて視線を外した。

ほどなくしてオアシスに平穩が戻った。  
輝きはより赤々と水面に反射して、もの悲しく世界を美しく彩った。

なんだろう。何か釈然としない……。

しかし今はただ皆のがんばりを待つしかない。あそこの地下に眠るものが『災厄』ではなく『迷いの砂漠』であると信じるしかない。

「ただいま。やれやれ、やっと理由を付けて戻ってこれたよ……」  
「やっと帰ってきたな。みんなが寂しがってたぞ」

その日、久々にグラフが家に帰って来た。

一緒に帰ろうと立ち上がると、意外にも背中側からグラフに抱き付かれた。

「本音を言っよ……。寂しかった」

「俺もだよ。早く日常に帰りたい」

「ふっ、いつもそれだけ素直だったらいいのにな」

「そこはお互い様だろ。そうそう」

朗報がある。迷いの砂漠そのものを見つけたかもしれないと青髪のエルフ伝えると、感激のあまりに今度は正面から抱きつかれた。

俺たちは迷いの砂漠を発掘して元の生活に戻る。シェラハの言い分に一理あるとしても、必ずだ。



・4年目 パンドーラの棺 2/2 (後書き)

投稿日を間違えていました。  
安定供給がんばります！

・3年目 失われた都

シエラハは迷いの砂漠を揺り籠だと言った。それはたかだか言葉遊びに過ぎないが、納得出来る部分もまた多い。

揺り籠の住民たちはつい先日まで、絶対不可侵の揺り籠が消えてなくなってしまうだなんて夢にも思っていなかった。俺たちは正体のわかっていないものに頼り過ぎていたのだろう。

しかしだからこそ俺たちは知るべきだ。自分たちを今日までくれたものの正体を。迷いの砂漠をもたらしていた『何か』を。俺たちは知っておかなければならない。

揺り籠から卒業するためには、揺り籠の正体を知る必要があった。

日々が過ぎ去り、発掘開始より約半月後

その『何か』は俺たちの想像を超越した場所に眠っていた。

といつてもあのポイントが天国や地獄に通じていたというわけではない。単純に、『何か』はあまりに深い場所に隠されていたのだ。

掘れども掘れども魔力の発生源は姿を現さなかった。だが掘れば掘るほどに大地というカバークースが取り除かれてゆき、漏れ出した強大な魔力が気配となって存在を証明した。

地下に何かがある。俺たちの予測を上回る圧倒的な何かがある。俺たちを追うことに発掘の人員が増員され、そのたびに俺たちは『何か』が放つ異常な魔力に恐怖した。

『お願い。あの下にはよくない物が眠っている気がするの……。お願い、みんなを止めて……。』

何度も、何度も、シエラハの言葉を思い返すことになった。

俺たちは取り返しが付かないことをしてしまっているのではないかと、自分の判断を疑いたくもなかった。

しかし今さら俺が中止を訴えても、シャンバラの人々は止まろうとはしないだろう。見つけてしまった以上は掘り抜いて、正体を見定めなければならなかった。

そして ついに掘り当てた。

いや、だが 同時にもう一つの急報まで飛び込んで来た。それはあまりになんとというか、人為的なものを感じさせられずにはいられなかった。

「大変、大変よっ、迷いの砂漠が復旧したわ！」

「本当っ！？ やったあつ、これで全部元通りね！ お疲れさまっ、パパママッー！」

急報はシエラハが持って来た。やっと長いお勤めが終わったのだと、サンデイを抱き上げて舞い踊った。

やっと終わったのかと俺も深いため息を吐き、さっと仕事を完成させて家族の輪に加わった。

「かもーん……？」

「やったな、メープル」

シエラハは3人の子供たちに囲まれて定員オーバーだった。仕方がないのであぶれてしまった俺とメープルは軽くハグをして、元の生活に戻って来た喜びを噛みしめた。

「あ、おかまいなく……」

「おかまうわ。もう母親なんだからそういうのは止める……」

「むふふ、嬉しいくせに……」

「嬉しいのはまあ認める。だが、そのままだと母親の威厳を失うぞ」

相手がメープルとあってはちょっととしたハグで終わるはずもなく、俺はカニばさみでしがみつかれたまま詳細を聞くことになった。

「大丈夫、もう売り切れ……」

「へーきじゃ！ ワシらはメープル母を尊敬しておる！ 母は凄い女じゃ！」

「お母さん、恥ずかしいよお……」

「諦めなよ、ウルド。メープルママはメープルママだもん」

みんな舞い上がっていた。不自然としか言いようのないこの状況に疑問を呈することなく、素直に原因不明の復旧を幸運として受け止めていた。

「いい加減下りろ……」

「ん……わかった。次は、姉さんの番……はい、どうぞ」

「し、しないわよっ!？」

それだけエルフたちからすれば、迷いの砂漠の消滅は耐え難いス

トレスだったのだろう。シャンバラに眠る迷宮、遺跡を狙って外敵が襲いかかってくる可能性だってないこともなかった。

「だったらワシがもらうのじゃ！ 父っ、だっこじゃ、だっこしろーっ！」

グラフの特徴を強く受け継ぐ、青い髪と白い肌の小さなエルフを抱き上げた。スクルズは我が家の小さなお姫様だった。

そんなこんなでワーワーギャーギャーとやっている、都市長と義兄さんがやって来た。

難しい話を始めると察した女たちは、お祝いのパーティをすると決めて家やバザーオアシスの方に去っていった。

「自分もあんなふうに素直に受け止めたいですけど、立場上はそうもいきませぬ」

義兄さんはパーティの準備に加わりたそうだった。

俺たちは薄暗い工房の中に落ち着くと、イスを作業テーブルの前に運んでこの不可解な出来事について言葉を交わした。

「正直に申しますと、私も全ての疑問を投げ捨ててパーティの準備に加わりたいところですよ」

「都市長、アンタまで何を言い出す……」

「それくらい状況を受け止めかねていると思って下さい」

もう一つの話しよう。俺たちがあの地底より掘り当てたものは『遺物』ではなく『遺跡』だった。

しかもそれはあまりにも巨大で、入り口らしい入り口がどこにも

見つからなかったので、これからメギドジェムを使った爆破を行うおうとした矢先だった。

そこに迷いの砂漠の復旧報告が飛び込んで来た。とても偶然とは思えない展開だった。

「前向きに考えればこうだな、発掘が刺激となって迷いの砂漠が機能を取り戻した。結果オーライ、めでたしめでたし……とはいかないか」

「ええ、残念ですが。偶然と呼ぶにはいささか出来過ぎでしょう」「セキュリティ上の問題もあります。まるで向こうに我々の内情が筒抜けになっっているような……。いや、向こうという表現も変ですね……」

都市長も俺も義兄さんの話を否定しなかった。

何者かの意思がそこに存在していて、俺たちが爆破を決めたことをどこかで察知して、迷いの砂漠を元に戻した。

妄想にも等しい話だが、現在の状況から俯瞰するとそう見えてしまう。

「しかしこうなると、あの巨大遺跡の価値も自ずと変わってくるな。あの遺跡に風穴を開けて、迷いの砂漠を取り戻すのが俺たちの目的だった。だが砂漠が復旧した今となると、あれは危うい」

俺たちが発掘したあの遺跡はけた外れどころではない魔力を放っている。

あれは転移装置である白の棺どころではない、正体不明の大いなる遺産だ。調査すれば俺たちはきつと新たなる奇跡を手に入れることになる。

「十分ではないでしょうか……。転移門という力を得た以上、これ以上の過ぎたる技術は……。持つのが恐ろしくはありませんか……？」

「ま、負債もひつくるめて1つの遺産だからな。良いことばかりとは限らない」

俺たちはビビッていた。自分たちが掘り返したものが想像を絶する何かであることはもはや明白で、下手に手を出せば破滅を招くのではないかと疑っていた。

小さなアリが金塊を手に入れても潰れて死ぬだけだ。使いこなせる保証はない。

「ユリウスさん、爆破は中止にしましょう。あの遺跡が迷いの砂漠そのものだとなれば、刺激を与えるのは賢くありません」  
「妥当な判断だ。俺たちの目標は迷いの砂漠の復旧。目標はもう達成している」

遺跡は鋼鉄のツルハシでも傷を付けられなかったと聞いている。さらには俺の転移魔法を拒み、元の座標にはじき返した。破壊せずに入るのは不可能だろう。

「では先に戻ります。パーティの準備をしないといけませんからね」  
「楽しみにしているよ、義兄さん」

義兄さんはやさしく俺に微笑んで、主人である都市長を置いて帰って行った。ここに都市長が残ると言うことは、まだ何かあるのだろう。席を立たずに待った。

「ユリウスさん……実は、お話したいことがあります……」

「あまり良い話じゃなさそうだ」

「ええ、これは失敗だったのかもしれない……。ユリウスさんだけに明かしますが、実は、よくよく思い返してみると、あの場所には」

老人は恐怖に身を震わせて、吐き出すように、怖れるように続ける言葉を発した。

「間違いありません……。あそこは、都です……。あそこにはかつて、シャンバラの都があったのです！ 全てが灰と砂漠と化し、宮殿すら消えてしまったので、私も今の今まで気付きませんでした……」

言葉だけではすぐに意味を受け止めかねた。だが都市長の恐怖が伝染して、俺も肩が震えるのを感じた。遅れて思考回路が感情に追いつき、ただこう思った。

ヤバい。

「滅びた都の真下に眠る巨大遺跡。そしてそこから放たれるけた違いの魔力。……これはしくじったかもな」

「あの子の言葉にもっと耳を傾けるべきでした……」

仮説に過ぎないが、結び付けるとするならばその2つが最有力だ。最近生まれた若造に過ぎない俺は、都市長の最終的な結論を沈黙して待った。

「ユリウスさん……私たちはどうやら、爆心地を掘り返してしまっただようです……。下手にあの遺跡に触れれば、再びシャンバラが滅びかねません……」



「だとすれば大発見だな。俺たちはシャンバラ王国滅亡の真実を掘り当てたってことになる……。最悪の大発見だ」

真実はわからない。だが信憑性のない仮説で済ませるには、あまりに危険な条件が揃い過ぎていた。シャンバラを破滅させる危険を冒してまで、あの遺跡を調査するメリットは皆無だ。

「私の推測に過ぎません……」

「手を引くには十分過ぎる理由だ。俺だって今日までの仕事を台無しなんてしたくない。ほとぼりが冷めたらこっそりと埋めてしまおう……」

遙かに年上の男性だが、今回ばかりはかなり参っていたようなので俺は彼の肩を抱いた。一応、義父さんだしな……。

「毒ガスが発生したというカバーストーリーをこちらで用意します……。ああ、私はなんと……」

「都市長、俺たちは災厄がどこからやって来たのか、その場所を特定したんだ。掘り返してしまったのはマイナスだが、場所の特定はプラスだ。前向きに考えよう」

この日、俺たちは新たな義務をその肩に背負うことになった。俺たちはシャンバラ王国を滅ぼした爆心地を封じ、もし不具合が発生すれば、必要に応じて管理していかねばならない。

迷いの砂漠の消滅が、2度目の災厄の始まりであってはならなかった。

・3年目 失われた都（後書き）

私事ですが、コミカライズ版「超天才錬金術師」1巻が2巻の発売を前にして重版することが決まりました。買ってくださいました皆様、ありがとうございます。

この調子ならば早期打ち切りはまずなさそうです。もしよろしければ、この機会にコミカライズ版「超天才錬金術師」を応援して下さい。

・4年目 推定12歳の娘たち

子供たちが産まれて4年が経った。人間で言うところの12歳の肉体となった娘たちは、これまで以上にハッキリとした自己主張をするようになり、俺たちの言うことを素直には聞かなくなっていた。

「ウエルサンディちゃんっ、この前のお魚のお返しに来たミヤ！」

「わあっ、立派なお花！ ありがとう、ネコヒトさん！」

「ぜんぜん良いミヤ！」

「またお裾分け、期待してるニヤ！」

「いいよーっ、暇つぶしで釣った魚でお花が貰えるなら、こっちこそ大歓迎だし！」

彼女たちは母親に負けず劣らず愛らしく、そして誰からも愛された。

へそ曲がりで教育によるしくない俺やメープルのことはさておき、周囲が尊敬に値する人格者ばかりだったからだろう。

「ねえねえ、パパッ、アルヴィンスおじさまって素敵よね！」

「な……何を言っているお前は！？ あんなのはただのだからしない不良オヤジだ！ ああいうのは見習っちゃダメだぞ！」

「でもやるときはやるわ。そこが渋くて素敵！」

「サ、サンディ……頼む、考え直せ……。お前はその、お、男の趣味がちよっと……アルヴィンス師匠はさすがにないだろうっ！？」

「何言ってるのよ、パパが一番アルヴィンス様を尊敬してるじゃない。うち知ってるのよ」

大きくなれば手が焼けなくなるといふのは、必ずしも正しくないのかもしれない……。

サンデイは親の意に反して、まだ産まれて4年だといふのにおっさん好きに成長していった……。

「サンデイは下手物趣味なのじゃ……」

「や、やさしいけど……ね……」

「そうよ、アルヴィンスおじさまはやさしいの。ふふっ、よっぽどパパの娘がかわいいのね！」

サンデイの親離れの早さに俺は恐怖した……。

彼氏を連れて帰ってくる日も、そう遠くないのではないかと……。

・

気を取り直して現在の話をしよう。

あれからざっと半年が過ぎ去り、捜索隊の献身もあって白の棺を2つ発掘することになった。

何せ世界各地をしらみ潰しに探さなければならぬので、この捜索事業は簡単ではない。見落としがあればそこがタンタルス側の侵略経路になってしまうため、見落としだけは絶対に許されなかった。

発掘された棺はそれぞれ、オドとランスタ王国に転移門として配備された。

これにより同盟関係がさらに盤石なものとなり、軍事的に見ても俺たちを侵略できる者は、今のこの世界にはいなくなった。

「嬉しい……。これでお兄ちゃんといつでも会えるんですね……」  
「お、おう……」

オド王は大喜びだった。オド王国王宮の庭園を訪ねると、その必要があるのかと問いかけるきっかけさえ与えられずに、ぴったりと彼に寄り添われた。

4年経っても彼はほとんど体躯が成長していなかった。

「俺もいつでも暇ってわけじゃないが、遊びに来てくれると嬉しい」「ホントですかっ!？ ご、ご迷惑ではありませんか……?」

「もう他人じゃない。俺たちは盟友だ」

「そう思っていただけなんて光栄です！ ユリウスお兄ちゃんがきてくれるから、オド王国は息を吹き返しました。ありがとうございます！」

「こちらこそ。去年の援軍には助かったよ。あそこは厄介ごとの多い土地でな、また助けてくれると嬉しい」

「はい、お兄ちゃん……」

距離を取ろうとしてもオド王はぴったりと寄り添ってくる。

そのことについて誰も文句を言わない。既にそういうものだと誰もに納得されてしまっていた。

ところがそんな折り、大地が揺れた。

「オド王様ッ、私きちゃいました!」

「あ、ガラテア……」

ガラテア姫だった。転移門がオドとランスタをご近所に変えて、オド王とガラテア姫を結びつけた。オド王は大きすぎるお姫様に控えめに微笑んで、対するガラテア姫は豪快に笑っていた。

「ユリウス様もしばらくぶりです！ あなたのおかげでガラテアはこんなに元気です！」

「わあっ、凄い力こぶ……！ ガラテアはカッコイイですね……！」

「そう言ってくれるのはオド王様くらいです。あっ、そうだ、よければこれからユリウス様と一緒に試合をしませんかっ？」

「あっ、それいいですね！」

「ちょ、ちょっと待て、試合！？ なぜそうなる……！？」

ガラテア姫はそう言って巨大なメイスを俺に向けて身構えた。

オド王まで一緒になってあの魔剣に手を伸ばし、そして

「お二人には叶わないかもしれないですけど、僕なりにがんばりフツ、フツフツ、ついにこの魔剣を使うときが来たようだ……。ユリウス兄さん、さあ……僕の愛を受け取って……」

気弱な王はオーラ立ちこめる最強の斬鉄剣を抜いて愉悦に笑った。俺たちが作った魔剣をここまで気に入ってくれてなんて嬉しい反面、やはり大失敗だったのではないかと今凄く後悔している……。

「はい、では2人で力を合わせて、ユリウス様を倒しましょう！」

「はっ、なぜそうなる！？ ちょっと待て、俺は複数人を相手にするのは苦手 ちょ、来るなよっ?! その魔剣だけはシャレになつてないだろっ?!」

「問題ありません。ユリウス兄さんにかわせない剣なんてないんです……だから、本気でいきます!!」

最強の体躯から繰り出される巨大メイス。全てを両断する最強の中二剣。どちらを食らっても即死だ。かするだけでも重傷確実。その日の俺はシャンバラ公式の使者として、バイオレンスな歓迎を受けることになった。

勝敗？ 怪我なんてさせたら六国同盟は即崩壊だ。酷い泥仕合になった。

とまあ、あのときは大変だったが、とにかくこれで同盟国全てに転移門が配備されることになった。

もし新たな棺が発見されたら、どこの勢力を抱き込むか、そろそろ結論を出しておかなければならないだろう。

それとここ1年の変化といえばもう1つ。

マリウスとアダマスの努力によりタンタルスの技術がさらに発展し、魔法の素養のない者がバッテリーを介して、魔法銃での魔法の発動が可能になった。

「聞いているかユリウス、これにはスクールズも手伝ってくれたんだぞ？」

「あ、ああ……」

「あの子はお前の子とは思えないほどに賢い！ それにちょっと変

わってるが素直ないいい子だ！」

「まあ、そうかもな……」

特にこれは魔法の才能が偏るヒューマンの国での恩恵が大きかった。

「なんで上の空なんだっ、子供が褒められているんだから喜ぶところだろうっ」

「まあマリウス、それより仕事の話を先にしないか……？」

マリウスはうちの子供たちに 特にグラフの子のスクールズを溺愛していた。スクールズもマリウスに懐いていて、ここで研究の手伝いをすることも多くなった。

「ムダだぜ。こうなるとこっちの話なんて聞かねえよ」

アダマスのやつはあれからさらに丸くなった。元は同族という真実を知り、敵対する理由がなくなったのもあるが、半分はマリウスへの尊敬ゆえだろう。

エルフという種族の価値も変わった。誰もが魔法の素養を持つエルフは、ファルク、オド、ランスタ、ツイイクで引つ張りだこだった。

ただしそれはいいことばかりではない。今は技術がブラックボックス化されているからいいが、いずれこの技術が民間にまで普及すれば、問題が起きることは見えていた。

タンタルスの世界のように、魔法の素養の高い者が動力として搾取されるかもしれない。あるいはその逆に、魔法の素養のない者が



無能扱いされ迫害されるかもしれない。

だがそれでも俺たちは止まれない。この先にどんな世界が待っているとしても、俺たちは生き延びなくてはならなかった。

「待って下さいよ、大先生！」

「仕事は終わった、帰る」

「そう言わずちょっと付き合ってくださいよ！ これからコレクションを」

「帰ると言ったら帰る」

「ツワイク王として命令する！ 付き合え！」

「イヤだ、帰る」

その日、国外での仕事を済ませた俺はうつとうしいツワイク王を適当にあしらって、ツワイクからの輸出品に混じって転移門に入っ

た。  
自分で飛んで帰るという選択肢もあったが、こっちの方が移動速度そのものは早かった。

この感覚はそんなに嫌いではない。

冷たく湿ったツワイクの空気は、シャンバラに飛ばされると砂漠の空気と混じり合って、すぐに飲み込まれる。

肺に残っていた冷えた空気を吐き出して、乾いたシャンバラの空気を吸い込むのは呼吸で感じる奇跡だった。

「あつ、ユリウス！ お帰りなさいっ！」

「ツワイクに行かされた割に早かったな。てっきりあのウザい王に付きまとわれているのかと思っていた」

「ただいま。そこは強引に断ってきたから大丈夫だ」

玄関をくぐって居間に戻ると、厨房と2階それぞれからシエラハとグラフが飛び出して来た。こういうとき、真っ先に迎えてくれるのが子供たちやメンバーなんだが、今は不在のようだ。

「賢い判断だ」

「ユリウス……ツイクを怒らせたら大変よ……？」

「こつちが怒りたいくらいしつこかったから、そこはおあいこだな。……子供たちは？」

「先生方のところで修行しているわ。みんなたくましくて困っちゃう」

「問題があるよりはいいだろ」

グラフを抱き締めると、シエラハが無言でこちらに寄って来た。同じようにそっと包み込むと、途端に機嫌がよくなるのが見れた。

「ドーナッツを作っているの。おやつにはみんな戻ってくるはずだから、一緒に食べましょ」

「仕事をするのか？ なら今日は僕が手伝おう」

「グラフに手伝ってもらうのは久々だな。なら少し手を貸してくれ」

「あくまでおやつまでだぞ。今日は我らが美姫のドーナッツが主役だ。ひゃっ?!」

「楽しみだ」

グラフの背中を押すと甲高い悲鳴が上がった。反応が面白かったので、そのまま背中を抱き込んで工房まで引きずり込んだ。シエラハは鼻歌を歌いながら厨房へと戻っていった。

「昔はそんなやつじゃなかった……」  
「なんの話だ？」

「君のことだ！ いきなり触るなんて、ビックリするじゃないか……」

「それ、何年前の話だ……。そういう反応を返すから、実の娘に『母かわいい』とか言われるんじゃないか？」

「だ、だって……いきなり触られたらビックリするじゃないか……」  
「わかった、気を付ける」

多分、互いに何かと忙しい身なのが良い方向に出ているのではないかと思う。でなければ夫婦ってというのは、互いに刺激に慣れて新鮮さを失ってゆくものだろう。

だからさっきのグラフの甲高い悲鳴は内心を言えば、意識してもらえているとわかって嬉しかった。

「君とももう長いな……」

「長いも何も、この先もイヤでもずっと一緒だぞ」

「ああ、最初は君が嫌いだった」

「思えばよくそこからこんな関係になったもんだな……」

グラフにサポートしてもらいながら調合を進めた。

これはいつもの総当たりだ。新たな成功の組み合わせが見つかるまで、メモ書き通りに素材を反応させては、注釈や失敗の横棒を加えていった。

「今夜、君のベッドに行っていていい……？」

「え……。あ、おう……」

「本当……？ 2人には内緒だぞ……？」

「わかった。待ってる……」

「あ……。やった……。じゃなくて、ふんっ……。ちょっと話があるから付き合ってもらっただけだからな！」

「そうなのか……？」

「そ……。そうじゃなくも、ないこともない……。とにかく行くから……っ」

これでは『母かわいい』と娘に愛されるのも当然だな……。まるで青い露草のように可憐な嫁さんは、単調でゴールのないこの地道な作業を幸せなひとときに変えてくれた。

後でバザーの方に行って、精の付くものでも食べておこうか……。

「お、おいっ、ユリウス、あれを見る！」

白紙の書と出会ったのもグラフがこちらの世界に紛れ込んできたのがきつかけだった。その白紙の書が突然に本棚の上で白く光り出し、驚くグラフの手によって作業テーブルへと回収された。

この書は強い願いに反応して動き出すものだと思っていたのに、今回は書が勝手に動き出したようにしか見えなかった。

「これ、レシピアじゃないぞ……？」

「そうみたいだな」

というより、これが錬金術のレシピ本と俺たちが勝手に決め付けていたとも言える。

そこにあっただのはレシピではなく、地図と紹介文だった。

・地母神の神酒

・土の迷宮、地下100階

・入場制限

ユリウス・カサエルと娘たちのみ入場可能

・アンブロシア

・草の迷宮、地下110階

・入場制限

ユリウス・カサエルと娘たちのみ入場可能

・氷竜の永久晶

・氷の迷宮、地下130階

・入場制限

ユリウス・カサエルと娘たちのみ入場可能

娘……娘たちだと？

俺とグラフは互いに目を合わせ、そしてうなづき合った。

俺が本の上部、グラフが下部を掴んで『誰が大事な娘たちをそんな危険地帯に連れて行くかバカ！』と叩き閉じた！

「あり得ない！」

「同感だ。あの子たちが幸せに暮らせる未来のためにがんばっているのに、これでは意味がない」

「僕は失望した！ 助けてもらった義理はあるけど、こんなのではない！」

「ますますこの書の正体がわからなくなっ たな……」

白紙の書のことは無視して、俺とグラフは調査を続けていった。

「みんなー、おやつよーっ！」

しばらくがんばると、シエラハのやさしい声が今から響いて来た。グラフは美しいシエラハも甘いドーナッツも大好きなので、まるで子供みたいに浮かれた笑顔を浮かべた。

……実際にそうとは本人に指摘なんて出来ないが。

「先に行つてくれ」

「ああっ、この時のためにがんばっていたんだ！ 行かせてもらおう！」

かわいいママグラフを見送って、錬金釜の中の物を完成させるとメモに簡単な記載をした。後で1つ1つ砂漠にまいて実験の正否を確かめよう。

「ただいまっ、ぎゃっ、ドーナッツと母がセットであるのじゃ!？」  
「おかえり。僕が帰ってちや悪いか？」

「何を言うつ、嬉しいのじゃ！ 母っ、今日は休みかっ!？ おやつが終わったら一緒に泳ぎたい！」  
「わかった、君がそうしたいならそうしよっ」



甘ったるいドーナツを茶菓子にお茶をしていると、そこに未っ子のスクールズが帰って来た。彼女は何かと不在がちなかわい母に抱き付いて、ドーナツを手に取りながら母親に甘えていた。

まあ、成長が早いとはいえまだ4歳だしな……。

「スクルズのお茶を入れてくるわ」

「ああ、なら手伝う」

「あら、ユリウスが手伝ってくれるなんて珍しいわね」  
「まあちよつとな」

そう返すとシエラ八察したようだ。

何も言わずに俺と厨房に入って、てきばきとお茶の準備を進めた。

「それでなあに、何かあったの？」

「ちよつと問題がある。白紙の書、あるだろ。あれがついさつき反応してな」

「本当？ あの書が反応するなんてずいぶん久し振りね。なんのレスピが現れたの？」

「それがな…… 迷宮の場所と深層にあるお宝の存在を俺たちに伝えて来た」

「ふふつ、だったら一緒に行く？ たまには2人だけで、あたしが前衛でユリウスが後衛を」

「その時は俺も前衛に立つ。じゃなくてだな、その迷宮は入場者を指名する種類のようだ」

「また私？」

「子供たちだ」

シエラハの手が止まった。もう茶葉をポットに入れた後なのが幸いか。

彼女はしばらく固まり、穏やかな笑顔でこちらに振り返った。

「捨てましょうか」

「いや、捨てるのは忍びない。一応、リンハイムやガラテア姫を救ってもらった恩もある……」

「なら、鎖と鍵で封印するとか？」

「かえって子供たちの好奇心を刺激する」

「なら捨てるべきよ」

「落ち着いてくれシエラハ。シエラハがそういうことを言うとならしくなくて恐い」

「だって……まだ4歳よ!? なんてあの子たちを指名するのよっ!  
! もしあの子たちが見たら、行きたがるに決まってるじゃない!  
あ……っ」

大声を上げたらバレるぞと、唇の前に指を立てて伝えた。

「目立たない本棚の奥に保管場所を変えろというのは?」

「でも、そんな対応で大丈夫かしら……」

「そうだが、あの書は窮地になると俺たちを助けてくれる。遠ざけるのは賢くない」

「わかったわ……。実際にその迷宮が存在するか、こちらで調べておくわ」

「俺が転移すればすぐにわかる」

「いいの、ユリウスに頼りつきりはよくないわ」

「そうか？」

「そうよ。グラフもユリウスもそうやって自分を時間を失ってゆく  
のよ。もう少し人に仕事を押しつければいいのよ」

一理ある。いや、積極的にそうするべきなのだろう……。せめて  
子供たちが大人になるまで、ゆとりのある生活をしてかまってる  
の方がいいか……。

「それよりユリウス、あたし思ったのだけど……。そろそろ2人目

」

「3人の時点でこれだけ手が焼けてるんだから、それはもう少し先  
でもいいだろ……」

「そうかしら……」

「そうだよ。その点はエルフはいいな。育ち切ってから次に入って  
も遅れがない。ヒューマンからすれば羨ましい」

「ふふ……まあいいわ。あなたにその気があるのなら、あたしはそ  
れだけで嬉しいもの」

その後は新しいドーナツとお茶を持って居間に戻った。

スクルズは実母に飽きたようで、配膳が済むと今度はシエラハに  
飛びついて来た。

「ぐふふ……シエラハ母の方がやーらかいのじゃ……むふふふふ……

……」

「ちょ、ちょっと、ど、どこ触ってるのよ、もうっ……悪い子ー!」

「スクールズッ、それは僕のだっ！」  
「お前もお前で何を言っているんだ……」

ドーナッツはもう飽きたので残りをスクールズの皿にこっそり移した。

わがまま娘というのは、困ったことにそこがかわいいから厄介だ。

「ただいまーっ！ わぁあっ、ママのドーナッツ久しぶり！」  
「やった……っ、嬉しい……」

そこにサンディとウルドが戻って来ると、シエラハはやさしい笑顔で迎えて厨房にまた戻っていった。

サンディとスクールズが揃うとそれはもうかしましく、耳がちよつとキンキンするほどだった。

俺たちは間違っているかもしれないが、目の前の日常を守りたいのなら他にない。

喻え後の世の人々に恨まれようとも、全ての棺を回収し、同盟国を増やし、世界を1つに繋がなくてはならない。

必要ならば、あの地に眠る災厄に手を出すことも選択肢に入れなくてはならない。

「ふふっ、どうしたのパパ？ 娘がかわいくて見取れちゃった？  
あっ、さっきね、アルヴィンス様がかっこよかったのよ！」

白紙の書よ、迷宮のお宝情報なんてどうでもいい。

娘のおじさん趣味を直す薬をどうやったら作れるか、頼むから教えてくれ……。

追記。後日調べてみると、本当に地図の場所に新しい迷宮が生まれていた。

だが条件が釣り合わない。メーブルとも合意の上に、事実を闇に葬ることに決定した。

・4年目 地底からの招待状 2 / 2 (後書き)

ストック尽きました。もしかしたら次回更新遅れるかもしれません。

「ふう……」

出来上がった種をラベル付きの小ビンに移して、俺は文字でぎっしりのメモ帳に簡単な記録を残した。

迷いの砂漠が復旧してからは、代わり映えのしない静かな日々が続いている。

変化があるとすれば、昔より辺りが少し涼しくなったところだろうか。

外の世界から流れ込んできた湿気が雨となってシャンバラに降り注ぎ、川の方で増水が起きたとも聞いている。

迷いの砂漠はシャンバラを密封するガラスの容器みたいなものだったのだろう。

俺は小ビンたちを箱詰めして、実験のためにそれを抱えて工房を出た。……オアシスではグラフとメーブルが水浴びをしていた。

「平和なもの、なんかつままないね……」

「キャツ?! い、いきなりどこを触っているっ!？」

「お腹。ちょっと、増えた……?」

「増え……?! ふ、太ってなんかいないよっ!」

それに目を奪われ木箱を抱えて立ち尽くす俺の姿は、さぞはたから見て間抜けなものだったろう。なのでいつものように木陰に身を隠し、美しい彼女たちの姿に目を細めた。

時刻はまだ昼過ぎ。キラキラとした日差しが青い湖水を輝かせて、2人の肌をクツキリと描き出していた。

「じゃあ、また抜け駆け……?」

「な、なんの話かわからないな……」

「ふーん……。じー」

「み、見るなっ! ううう……わかったよ、僕は太ったよっ、認めるよっ!」

「いいお腹、してますね……。スリスリ……」

「ひうう……っ?!」

メーブルのやりたい放題について笑ってしまった。そしてそのちょっとした出来事が俺を我に返して、木陰から立ち上がらせた。

「父っ、のぞきはもういいの catt?」

「ス、スクールズツ!? な、ウルド……!?! こ、これは……これはただ、ちよつと、彼女たちの様子を見ていただけであってな、な、何も……」

「嘘じゃ」

「い、ごめんね、お父さん……。わたしたち、お父さんが工房から出てくるところからずつと、お父さんを見てたの……」

思わず木箱を落としかけた……。娘2人がそれを支えてくれて、父の動揺をありありと悟ったことだろう……。

「父はスケベじゃ」



「うっ……?!」

「スクールズちゃん……っ、そ、そういうのは、もうちょっと言い方があるよ、思うよ……?」

「花に誘われるチヨウチヨみたいに母に誘われていったのじゃ!」  
「ぐっ……」

「クフフフツ、父はかわいいのっ!」

スクールズは嬉しそうだった。自慢の母親に見とれる父親の姿がそんなに面白いのだろうか、元気に笑っていた……。  
親の威厳……俺の親としての威厳は、もはや存在しないも同然なのかもしれない……。

「えっと、あつ、実験っ! これから実験するんだよねっ、お父さんっ!」

「あ、ああ……まあどうせ失敗だろうがな」

「わはっ、実験! 実験なら手伝うのじゃ! ほれほれ父っ、キリキリ歩くのじゃ!」

スクールズを追って歩きながら、名残惜しさにオアシスの方に流し目を向けた。これだけの騒ぎもあってグラフとメーブルにももう気づかれていた。

メーブルは肌を隠しませずに俺たちに手を振って、グラフは湖水に身を沈めてしまっていた。

「父は本当に母たちが好きじゃのー」

「だっってお母さんたち、綺麗だもん……」

「うむうむっ、ありゃ辛抱たまらんの!」

「スクルズちゃんだって、グラフお母さんの子供だから、綺麗になると思うよ……」

「ふむふー、その時は町中のネコヒトさんたちをメロメロにしてやるのじゃ」

子供たちの会話に入り込めないまま背中を追いかけて、失敗作のひしめく小さな草地を抜けるとそこが砂漠だ。

「どのラベルの種を使ったか」

「忘れるなよと言うのじゃろ、父はいつも言っておるぞ」

「いつもというほどではないだろ」

「い、いつもだと、思う……」

2人は明るい得顔を浮かべて小ビンのコルクを抜いて、手のひらに移すと慣れた様子で辺りに蒔いていった。

まるで神の奇跡のように砂漠へと小さな緑が生まれ、俺はメモ帳とペンを手に1つ1つを観察していった。

「この葉っぱはなんかかわいいのう」

「うん、そうだね、スクルズちゃん。でもこっちは、もうちっちゃなお花が咲いてるよ……」

「おおおーっ、ちっちゃいのう……！ 後はチヨウチヨがいれば、

父と母たちじゃの」

「うっ……」

「あっ、えっとうっ、さ、最後の蒔くねっ、えいっ！」

ウルドはやさしい子だ。成長してもこの子の本質はこのまま変わ

らないだろう。だがスクルズは、将来どんな厄介な女に育つのか将来未恐ろしい……。

しかしそんなつまらない物思いは、目前の事象の前に吹き飛ばすことになった。

「ひゃっ!？」

「おわああーっ?!」

たった3、4粒の小さな種が砂漠に落ちると、緑の爆発が起きたからだ。爆発的に草地在が半径3mほどを飲み込み、さらには若木が3本も急成長して子供たちの腰を抜かせた。

「大丈夫か？」

「あ、父……。抱っこは……。抱っこは恥ずかしいのじゃ……。…」

「ならさっさと立て。ウルドは怪我とかないか？」

「だいじょうぶ……。でも、これって大成功だね、お父さんっ!」

「ああ、ジイジが泣いて喜ぶ。おっと」

「離せーっ、お子ちゃま扱いはするなと言っておろう! こう見えてワシはもう母たちと同じレディじゃ!」

そんなつれないことを言わないでほしい……。

俺は鈍い悲しみを覚えながらスクルズを立たせて、それからウルドが差し出す小ビンを受け取った。ビンは36番だった。

「確かこれは……」

番号とメモ帳を付き合わせてた。俺は最近妙に迷宮からよく回収されてくる『ゴーストプラント』という素材を軸にした組み合わせ

だ。『ゴーストプラント』はふわふわと重さの感じられないへんてこな素材だった。

効果面積は去年に完成させた成功レシピの、約3倍くらいだろうか。

「ねえねえ、この木も葉っぱがかわいいね。名前、なんていうの知ってる……？」

「それはメープルだ」

「え、お母さん……？」

「ああ、お母さんの名前がその木の名前なんだ」

「おおーっ、凄い偶然じゃ！ じゃあじゃあ、こっちはなんじゃ！？ なんか白くて面白いのじゃ！」

「そっちはシラカバだな。どちらも樹液を煮詰めると甘いシロップになる」

どちらもツワイクではそう珍しくない寒い地方の木だ。シャンバラでこの木々が見られるとは嬉しい。悪ガキの頃の記憶が断片的によみがえった。

「それは一大事じゃ！ 今すぐ新しい種を作るのじゃ、父！」

「わたし、舐めてみたい！ お母さんたちも呼ばなきゃ！」

「煮詰めないとそんなに甘くはないぞ。……とにかくオアシスマで戻ろう、都市長に報告しなきゃならない」

「だけど父、母たちはもう水から上がっていると思っぞ？」

「都市長に報告するためだっと思ってているだろっ……。あまり父親をからかうな」

「そんなこと言って父は　ギヤーツ、何をする父ーっ?!」  
「あ、また……。いいなあ……」

人の嫌がることをするやつには、同じ嫌がることで仕返しをした。俺はでっかくなったお姫様を抱き上げて、オアシスの前まで運んでやった。後でウルドにも抱っこをしてやるっ。

「3倍つ、これまでの3倍ですか！？ 素晴らしい、ユリウスさんの長い努力がついに実りましたね！」

「まだ気が早いだろう。素材の安定供給ができなければ、実際に3倍とはならない」

「それでも大前進でしょう！ よくやってくれました！ 我々のために、よくぞここまで……ありがとう、ユリウスさん！」

こうしてこの日から、レシピ改良の日まで倉庫で眠ることになっていた『大地の結晶』を含む基礎素材が全投入されて、この砂漠の国にて飛躍的な緑化が進んでいった。

都市長が言うにはシャンバラ緑化計画の進捗は4%だ。これから一気に伸びることになる。

もしかしたらこれはもしかするが、自分が生きている間に目標を達成できる可能性が出てきた。

こうして家のバルコニーから砂漠側を見れば、彼方にちらほらと緑の陰が見えるようになっていた。

たかが4%、されど4%。蘇った緑は俺たちの希望そのものだった。

それからしばらく経った、ある晩

「う……うわああああーんっっ!!」

その夜はメープルとその子供のウルド、それに俺だけだった。残りはリンハイムでの祝典にお呼ばれして、今頃は贅を尽くした料理や菓子を楽しんでいる頃だ。

「ん……なんだろ。ちょっと、見てきて……」

「悪い夢でも見たかな、あいつ」

「服着たら行く……」

「ああ、中途半端はダメだぞ。気づかれる……」

「もう、バレてると思う……」

そんな夜に突然ウルドの絶叫がとどろいて、俺は2階の子供部屋に入るようになった。子供の成長が早いと、子供部屋の手配も大変だった。結局、ムリヤリで無理矢理に増築したのが去年のことだ。

「どうした、ウルド？」

「あ、お父さん……ごめんなさい、起こしちゃった……？」

「怖い夢でも見たのか？ 今日はお父さんとお母さんと一緒に寝るか？」

「じゃ、邪魔なんてしないよっ！ せっかく、2人っきりの夜だし、お母さんにやさしくしてあげて……」

気づかれているのかと思いきりとさせられた。が、やさしさゆえの言葉だったらしく二重の意味でホッとした。

すっかりでかくなつたがまだまだ4歳のウルドを俺は抱き寄せて、ベッドに腰掛けると膝の上に座らせた。いや、これは少し子供扱いが過ぎるだろうか……。

「ねえ、パパのお父さんとお母さんって、大きかった……？」  
「記憶にない」

「そっか……。パパ、孤児だつたんだもんね……」  
「ああ、だが寂しくはなかった。マリウスっていう勇ましい相棒がいたからな」

大好きなマリウスおばちゃんの話題に触れたはずなのに、ウルドはうつむいてばかりの上の空だった。普段おとなしくて素直で自己主張の少ないウルドだからこそ、今の様子が気になった。

「お父さん……。私、もうダメかも……」  
「大げさだな。オネシヨでもしたか？」

「しないよっ！？ もっともっとう、深刻なの……っ」  
「ほう、何が問題なんだ……？」

するとメープル似の小さくて愛らしい少女は俺の膝から飛び出して、壁の中途半端なところに立った。そういえばその壁には傷が入っている。

「見て……。3ヶ月前からね……。わ、私、育ってないの……」  
「どれ、見てよう」

照明魔法を使って部屋を明るく照らして、壁の傷とウルドの頭の



てっぺんを見比べた。

「……育ってなくはないぞ」

「本当……?」

「ああ、少しだけ成長している。ウルドの測り方が悪かったろう」

まあ、ほんの2mmくらいだがな……。

「なら成長止まってないよね!? わたし、この先ももっと大きくなれるよねっ!?!」

「……ああ、グラフやシャラハみたいに美人になるに決まってる」

……ウルドの成長が止まった。

いや正確には14歳相当のところ、彼女の成長はエルフらしい緩やかなものになっていった。

いつかは成熟するかもしれない。しないかもしれない。母親のメーブルを見る限り、分はかなり悪い方だろう……。そこに小さな足音が響いて、たちの悪いのぞき見趣味の母親が潜伏魔法を解除していた。……俺たちのやり取りをずっと側から見ていたようだ。

「お母さん……ごめんね……。お父さんと2人つきりだったのに……」

「おお、よし、よし……」

「見てないで先に慰めればよかっただろ……」

「わたし、歪んでるから……」

「そんなことみんな知ってるよ」

メープルはやさしく娘の頭を撫でて、抱き締めて、頬にやさしくキスをして、また抱き締めた。

「お母さん……」

「ま、わたしの子だしね……。そんなもんだよ。人生、そんなもん……」

「う、うううう……私、一生チビのままなんだああ……っっ!!」  
「おまつ、絶望させてどうするよっ?!」

俺が抗議すると、メープルは静かに首を横に振った。その目は普段の小悪魔のものではなく、悟りに達した賢者の目だった。

「人生、諦めが肝心……」

「それは……妙に説得力あるな、おい」

なんだか可哀想になって、俺はメープルとウルドを左右の手ですっと包んだ。子供たちが母親にそっくりな姿で生まれた時点で、これはまあ、そういうことなのだろう。

ウルドのこれ以上の成長は、絶望的だった……。

その後、この恐ろしい現実をウルドは2人の姉妹に伝えたそうだ。次に成長が止まるのは自分たちかもしれない。サンディとスクールズは覚悟を決めた。

子の成長が早いのは生存競争において合理的であり魅力的だ。  
だが心の準備が整う前に成長が止まり、あっという間に大人にな  
るしかないエルフたちの人生は、俺たちヒューマンが羨むほど素晴  
らしくもないようだった。

・4年目 黄金の日々 2/2 (後書き)

次回はポリウム多めになります。

・4年目 才能と業

「いつてらっしゃい。パパのことはうちに任せて羽を伸ばしてきてね、ママ!」

世間は休日だった。だが急に午前の仕事が入ることになって、俺は森にハイキングに出かける家族たちを見送ることになった。サンデイも一緒に行けばいいのに、急ぎの仕事を手伝ってくれた。

「ありがとうございます様。せっかくのお休みにごめんなさい……!」  
「いいんだ。しかし……」

「え、僕がどうかしましたか?」  
「いや……なんでもない」

納入業者の若いエルフは、何年経っても姿が変わっていない。てつきり彼のことを少年だとばかり思っていたが、これはうちのウルドの同類なのかもしれない。

「何かお困りでしょうか? 僕に出来ることならなんでもしますよ……?」

「なら、今度機会があったらうちのウルドに話しかけてやってくれ。成長が止まったと嘆いていた」

「ふふふつ、それなら僕が適任ですね。任せて下さい!」  
「お願いするよ。本当に助かる」

「あつ、親方が呼んでるのでもう行きますね!」

大きな木箱を小さな身体で抱えて、少年のように見えて年齢不詳のエルフはうちの工房を去っていった。

「あ、もう納品終わったの？」

「ああ」

「手伝おうと思ったのに……」

「十分過ぎるほどサポートしてくれただろう」

居間の方から甘いパンの焼ける香ばしい匂いがする。この香りとサンデイの明るい笑顔を見るたびに、余所の誰にも渡したくなくなる……。

「パパ、もう少しでお昼ご飯だから待っててね」

「ぜひお言葉に甘えよう。さすがに疲れたよ……」

「お疲れさま、パパ」

俺たちはゆつくりと昼食を楽しんで、どこの家庭でもあるなんでもない会話を交わした。サンデイはお喋りで、この口からは無限に話題が出てくるのではないかと感心させられた。

それから昼過ぎになると俺は屋根付きの棧橋に出た。

オアシスに釣り糸をたらしめても、今日は美しきエルフの美姫たちは不在で、正直に言ってしまうと無茶苦茶に残念だった。

俺はきつと腰の曲がったジジイになっても、彼女たちの姿に見惚れ続けるだろう。

「パパ」

「サンデイか。どうした、退屈か？」

「ううん、町でネコヒトさんたちと遊んできた後よ」

「騒ぎが目には浮かぶようだ」

気になって釣り針を戻すと、知らぬうちに餌を取られていた。餌を付け直してまたオアシスにとばした。

サンデイはちょこんと隣に寄り添ってきて、ずいぶんとでっかくなつたもんだと俺は横目でその姿を確かめた。

「えへへ、ママに似てきたでしょ、うち！」

「ママはもつと上品だ」

「えーっ、それパパに言われたくない！」

「ああ、全くその通りだ」

「うちはきつとパパに似たのよ」

「俺はサンデイほど明るくないぞ」

不思議だな。サンデイと話すと会話が絶えない。次々と話題が浮かんで、この元気な笑顔に話が盛り上がる。

「パパって孤児だったんだよね？」

「ああ」

「じゃ、パパのパパママってどんな人だったのかな」

「前にウルドとも似た話をしたな。残念だが覚えていない」

「そっか……」

「たぶん、普通の親だったはずだ。戦争で亡くして、悲しかったこ

とだけは記憶にある」

だからオド王が他人には見えない。支えてやりたい。やりたいが、あの中二病斬鉄剣だけはちょっと……。元はと言えば制作者である俺の自業自得なのだ。

「ふーん……じゃあ、パパのパパママも転移や錬金術の魔法使えたのかな……」

「だから言っただろ、普通の親だったよ。たぶんな」

魚がかかった。タイミングを見計らって、力いっぱい釣り上げて見るとそれは大きなマスだった。魚かごに入れようにも、半分しか収まらないほどの大物だった。

「参ったな、こんなにでかいの食いきれないぞ……」

「じゃあ、ネコヒトさんたちにあげるっていうのはどう!？」

「ああそれはいいな。いつも遊んでくれてるお礼にはなるだろう」  
「じゃ、うちが届けてくる! これ持つてくね!」

「お、おいっ、そのまま持つて行くのか?!」

「大丈夫大丈夫っ、また後でね、パパ!」

オアシスの岸边を駆けて、サンデイがバザーオアシスの方に走って行くのを見送った。それから姿が完全に見えなくなると釣りを再開して、昔のことを少し考えた。

親のことなんてすっかり忘れていた。ごく普通の親から、俺みたいな変わり種が生まれる可能性もないことないだろう。天才の子が天才とは限らないように、血の遺伝というのは予測が付かない。



「よう、バカ弟子、隣邪魔するぜ」

「ちよっと、静かに座って下さいよ、魚が逃げるじゃないですか…

…」

「そついつもんか?」

「そつですよ」

俺の親、どんな顔をしていたっけど頭を悩ませていると、転移魔法でも使ったのかいきなり師匠が後ろに現れて、水面を揺らしながら俺の隣にどつかりと腰掛けた。

「師匠より落ち着きやがってこのバカ野郎」

「それどついう難癖の付け方ですか……。で、何か厄介ことですか?」

「いや、事件は起きてねえよ」

「へえ、師匠が用もないのに珍しいですね。ならどつかしましたか?」

「あー……」

師匠は渋い声でうなると、返答を諦めたのか知らないがそれつきり黙り込んだ。

なんかますます挙動不審だ。横目で表情を盗み見ても、なんか似合いもしない遠い目をしていた。

「重い病気にかかったなんて言わないで下さいよ?」

「いや、違つ……」

「そうですね、よかったです……。いや、どうでもいいことですが」  
「これは俺のことじゃねえんだよ……。サンディのことなんだがよ……。」

「サンディに手を出したら殺します」

「出すかアホッ！ じゃなくてだな……。はあ……。」

歯切れの悪い中年男が隣に陣取ると、これほどまでに邪魔ったいとは大発見だ。場所を変えようかとも思っても日差しが強い。屋根のある棧橋はここだけだった。

「らしくないですよ。一応なりにもツウィクの魔術師のトップだった男が、なんでそんなにうんうんうなってるんですか。ハッキリ言つて下さい」

「なら聞くが……。お前、親のことを覚えてるか……。？」

「サンディと似たようなこと言いますね。ろくすっぽ覚えてません。魔法の才能を感じたこともないです」

「なら……。ならよ。自分の娘からそれを感じたことは、あるか……。？」

「サンディは攻撃魔法の天才だと、そう言ったのは師匠でしょう。遺伝を感じているに決まっています」

話はサンディのことらしい。まさかあの子が人に怪我をさせたのではないかと不安になった。

実際、宮廷魔術師の世界ではそう珍しいことでもなかった。

「ユリウス、落ち着いて聞けよ……。？」

「十分落ち着いています」

「自分の才能が娘に遺伝する可能性は、考えたことがあるな？」  
「さっきと同じ話じゃないですか。もちろん、現にウルドが錬金」

俺の才能が、遺伝……？

それって、どついう意味だ……？

「そう、ウルドにはテメエの錬金術の才能が遺伝した。けどよ、他の才能が、他の子に遺伝する可能性だつて、当然あるよな……」

頭が理解をする前に、自分の背筋が凍り付くのを感じた。

「ちよつと待つてな、呼んでくる」

「だ、誰を……」

「待てばわかる」

師匠は滅多に普段使いすることのない転移魔法を使って、誰かを呼びに行った。

取り残された俺は動揺した。震える手で釣り竿を握りしめながら、まとまらない頭でただ湖水のまぶしい反射だけを凝視した。

まさか、遺伝つて、そういうことなのか……？

いや、だが信じたくない。もしそうだとしたら、俺は 今日までのツケを支払わされることになる。度重なる術の乱用が俺を成長させ、それが

「気を確かにな、呼んできたぜ」

背中後ろに師匠が戻った。足音は2人分だった。

「パパ、大切な話があるの。うちね……」

背後で魔力が高まり、それが忽然と消えた。そして俺の目のオアシスに、背後にいたはずのサンディが転移して水の中にそのままドボンと落ちた。

最悪の展開だ……。サンディに、転移魔法の才能が遺伝してしまっていた……。

「パパには全然似てないけど、うちはパパの子だったみたい！　うふふつ、この魔法つ、うちにも使えちゃったの！」

「バカ弟子よ、今回ばかりはマジで心中お察しするぜ……」

サンディは喜び、師匠は同情、俺は絶望していた。

「なんで、サンディに教えたんですか……」

「教えたんじゃないよ……。コイツ、俺の術を盗みやがった……」

一言だつてやり方なんて教えてねえのに、見よう見まねだけで勝手に覚えやがったんだよっ……！

それが本当なら真正銘の天才だ。これが我が子でなければ、新たな仲間として祝福していた。だがなぜサンディなんだ……。

「もうっ、喜んでよ、パパ！　おじさまもなんでそんな顔するのーっ！？」

俺と師匠は言葉を返せなかった。

シヨックだった……。

サンディは天才だ。そして転移魔法の天才というのは、それだけ

危うい存在だ……。

いつこの世界の輪からはみ出して、過去や未来、平行世界に飛ばされるかもわからない。これはそういう危険な魔法だ。  
それを娘が覚えてしまった……。

「おいサンディ、よくこいつの顔見てみる。親のこの顔を見たらわかるよな？」

「うん、わかる。ちょくちょくうちを心配してる」

転移魔法の問題点はその便利さだ。移動だけではなく、攻撃から防御、潜入まで用途は無限だ。危険性に反して、使い道は無限にある……。使わないなどという選択肢は選べない……。

「お前の親はとんでもないバカ弟子だったが、お前はコイツのマネすんじゃないぞ？ コイツが発狂するからな、はははっ、ざまあねえな、バカ弟子！」

「うん、わかった。グラフママみたいになるのは、怖いもん……。1人だけ別の世界に迷い込んで、一生元の世界に戻れないなんて、グラフママは可哀想……」

「おう、バカ弟子より賢いじゃねーか！」

俺の頭の中では理性が吹っ飛んでいた。感情だけが頭の中にあふれて、俺は衝動のままにオアシスに飛び込んで、サンディの肩をつかんだ！

「サンディ、ダメだっ！！ その魔法は絶対に使っなっ！！」

「パパが言っても説得力ないよ。ママたちをあれだけ心配させておいて、それは通らないよ」

当然そう返されるに決まっていた。

「指導は俺がしてやる。お前より物わかりがいいから安心していいぜ」

「教えるのか……？ そんなのダメだつ、矛盾しているのはわかっているが、サンディに使わせていい魔法じゃない！」

「パパ、落ち着いて。うちを心配してくれているのはわかっているから……」

娘に慰められるなんて、なんと情けない父親だろう。

サンディは俺の腰に手を回して、甘えるように額を擦り付けた。

「下手に自己流でやられると凄く危ないから……おじさまが教えてくれるんだって」

「そういつこった。ま、ママさんたちへの報告がんばりな」

師匠はやさしい声で俺を慰めてくれた。いや、後半は死刑宣告にも等しかったが……。

どうやって伝えればいい……。

転移魔法の才能が遺伝していたなんて、どうやってあの娘思いの母親たちに伝えればいい！？

「うちから言う……？」

「お、俺が……俺から伝える……。サンディ、頼む、無茶な使い方はしないでくれ……」

「それパパが言っても」

「説得力ねーな。だからあれだけ言っただろ、バカ弟子」

ウルドには錬金術。サンディには転移魔法の素質が遺伝してしま  
った。

今日までのツケを、遺伝という形で支払わされることになるとは  
……。俺はこの日まで、この世界の因果応報の仕組みがここまで巧  
妙にできているとは知らなかった……。

・5年目 推定15歳の娘たち

子供たちが生まれてより5年が経った。人間で言うところの15歳の身体に成長した娘たちは、父親の目から見ても華やかな女性に成長していた。

子供たちはもっぱらバザーオアシスでネコヒト族たちと遊んだり、都市長のラクダを借りて歓楽街の甘味処に行ったり、冒険者ギルドの訓練に自ら加わったりと、毎日親の気を揉ませてくれた。

シャンバラのナンバー2の娘で、ナンバー1の孫でもあるあの子たちに色目を使う男はいないと思いたいが、何せ肉体的にはそういうお年頃だ……。心配だ……。とても、心配、心配だった……。

「はあああ……。うわ、白髪!? 嘘だろ……」

髪に銀色のものが混じることも増えた。

ストレスだろうか。サンディに転移魔法の才能があると知ったあの日から、どうも気苦労が絶えない……。

何もかもが考えすぎなのはわかってはいる。しかし思考というのは本人の意思に反して勝手に動くもので、俺はまた深いため息を釜に向けて吐いていた。

「ゆくぞーっ、サンディ! おりゃあーっ!」

「あつちよつとつ、変なところに投げないでよ、スクールズ!」

その日は仕事をしながら横目でオアシスを眺めてばかりいた。今



は子供たちがオアシスでボール遊びをしていて、元気を通り越して騒がしいその声を聞いているだけで心が安らぐ。

マリウスと過ごした純真な少年時代を思い出したり、自分が肌寒いツイイクを捨ててシャンバラで美姫と娘に囲まれて暮らしている現実に、今更になって小さく驚いたりもした。

幻の国シャンバラで俺は今平穩に暮らしている。

生活や仕事の方かというと、毎日が試作の繰り返しだ。キー素材の枯渴、高騰の可能性を考えれば、選択肢は大いに越したことはない。緑あふれる未来のために、さらなる総当たりが不可欠だった。

「わっわっ、そんなの取れないよっ、サンデイちゃん……っ」

「早くこつちに投げ返すのじゃ！ ワシが仇を取ってやるぞ！」

「仇とかいらぬからスクルズは真っ直ぐ投げてよっ！」

「それが出来たら苦労はないのじゃー！」

「い、いくよ……えーいつ！」

平和だ……。砂漠の強烈な日射しを物ともせず金と銀と青の髪が水辺を駆け回っている。

「お仕事お邪魔します、ユリウス様。これ新しい注文票です。近くまで寄ったので、僕が……」

そこに商会の少年（風）エルフがやって来た。彼は娘をガン見する不審な父親に爽やかな笑顔をくれて、パタパタと小走りになって注文票を見せてくれた。最近、ちよつと変わった注文が増えた。

「ああ、ありがとう。……俺は娘に見とれてなんかいないぞ」

「ふふふっ、お母さんたちに似てとても綺麗ですよ、みんな」

「出るところも出てきた。はあっ、もう気が気じゃない……」

「僕もユリウス様の息子になれたらな……。あ、それじゃ、僕もう行きますねっ！」

「お疲れ、おかげで予定が立てやすくなったよ」

「へへへ、がんばって下さいね、やさしいパパさん」

少年エルフを見送って、俺はテーブルに置かれた注文票を拾い上げた。

以前、迷いの砂漠を発掘するために数々のダウジングアイテムを作った。そのうちの失敗作の数々が、注文票に加わるのが当たり前になっていた。

特に鉄や水を探るやつが好評で、意外なところだとネコを探るやつの注文もやたらと多かった。いったいあんな物を何の目的で使うのか、俺にはよくわからない。

「パパッ、お仕事なんて止めて一緒に泳がない!？」

注文票をテーブルに戻して、空きビンに重石にすると目の前にサンデイが突然現れた。

「サンデイ……そういう使い方はしないと約束しただろう」

「ごめん、だってこっちのが楽なんだもん」

母親譲りの美しいブロンドに褐色の肌、メープルが好みそうな大胆な水着からはオアシスの湖水が滴となって床に滴り落ちている。

美しく成長した俺の娘は、転移魔法を日用使いしていた。

「冷や冷やするから止めてくれ……」

「なんか最近のパパおじさんくさい……」

「うつ……！？ お、おじさん……だと？」

「あ、悪い意味じゃないよっ！　うち、むしろおじさんの方が好きだし！」

「サンデイ……」

「なーに、パパ？」

「頼む、普通の男の子を好きになってくれ……」

「子供はなんかやだ」

「お前だってまだ子供だろうっ……」

特に心配なのはサンデイだ。俺を越える転移魔法の天才になることが見えている。その上、おじさん好きだ……。サンデイはおじさんが大好きだった……。

「ねーねーっ、パパッ、一緒に遊ぼうよーっ！」

「仕事中だ……」

「でもでも、いつつも夕方はオアシスでのんびりしてるじゃん！　ちよつとだけ先に遊ぼうよーっ！」

「そんなことをしたら、気持ちが中だるみしてかえってその後の仕事辛い」

「えーっ、パパまじめすぎ……。お仕事なんてさー、サボっちゃえばいいのに……」

「はあ……っ」

転移魔法を覚えてサンディは少し変わった。その気持ちも理由はよくわかる。転移魔法は収得者に究極の自由をもたらす。この力があれば時間と距離を超越出来るからだ。

ある者は怠惰となり、またある者は傲慢にも思い上がった。前者が師匠で、後者が俺だ。

「あつ、ママ!!」

「お、やっと帰って来たな。待て、転移は使いな、要らん説教をされるぞ」

「うふふー、わかってるわかってる」

「ならなんで俺の前に飛んで来た……」

「パパだからいいかなって。あ、ママたち水浴びするみたい！ パパも来る!？」

「行けるわけがないだろ……」

「夫婦なのにー？」

「夫婦だからだよ……」

「えーっ、なにそれー？」

「ママたちは綺麗過ぎてパパの目には毒なんだ」

「ベタ惚れね!」

「旦那が妻にベタ惚れで何が悪い」

俺の返しにサンディはヒマワリのような笑顔を浮かべて喜んだ。

「最高よ、パパ！ ママーツ、お帰りなさいっ！！」

かわいいサンディを後ろ姿を見送って、オアシスに褐色と白い肌が入り交じるのを遠目に見た。

すぐに華やかな声が上がって、もう親も子供も関係なしの大騒ぎになった。

俺はそんなみんなの幸せを眺めながら、内心混ざりたい本心を押しさえ込んで、その日も地味で単調な試行錯誤を続けていった。

・5年目 推定15歳の娘たち（後書き）

いつも投稿時刻が不安定ですみません。

これからもじつくりと続けていきますので応援して下さい。

もしかしたらタイトルを変えることになるかもしれないので、行方不明になる前にブックマ等、してくれると嬉しいです。

・5年目 ガ八八！

少し話が前後するかもしれないが、白の棺の回収数はあれからのままだ。

白の棺が見つからないということは、それだけ侵略の出入り口が順調に減っているということでもあるので、一概に悪い結果ばかりとも言えない。

全ての棺を破壊すれば侵略を防げる。だが全ての棺を破壊できなければ、残る棺からやつらが現れる。だから俺たちは白の棺を回収し、それで世界を繋げる。この方針に現在も変更はなかった。

「よう、混ざらねえのかよ、パパさんよ」

「知らなかったんですか、ああいうのは女性だから許されるんです。男がやったら見苦しい」

「はははっ、正論だな。遠くから眺めるのも乙なもんだ」

「人の嫁と子供を変な目で見ないで下さい」

しかし師匠が転移魔法を日用使いする事は珍しい。ならばこれは重大な話なのだろう。

「悪いが仕事だ、今すぐファルクに飛ぶぞ」

「……状況は？」

「それを確かめに行く。あちら行き of 転移門がストップしちまった……こりゃ、あっちで何か起きてるぜ」

「わかりました。少しウルドに会ってきます」

「急げよ」

普段封印している転移魔法を使って、俺はキャッキャウフフのエルフの水浴びに乱入した。

「ウルド、俺は急いで出かけなければならなくなった、すまないが残りの仕事を代わってくれ」

「え、うん……いいけど。でもなんで急に？」

「その様子、また何かあったのね……」

さっきまで笑顔いっぱいだったのに、シエラハは不安そうに岸までやって来た俺の手を取った。

「ファルクの転移門が止まった。シエラハたちは都市長のところに念のための合流を」

「止まったって……。なんか、ヤバいね、それ……」

メープルも同じように手を取って別れを惜しんでくれた。だが今は時間がない。

「師匠と一緒に様子を見てくる。悪いがもう行く」

「気を付けてね、ユリウス……」

「死んだら呪うから……よろしく……」

「おおっ、死んだ方を生きてる方が呪うとか斬新なのじゃ！」

「必ず戻るよ」

「それ、フラグ……」

無愛想な別れを済ませて、俺は師匠の待つ工房へと戻った。



「じゃ、いくか」

「ええ、準備は出来ています」

最近全く使っていないかった聖剣を腰に吊した。

「戦いになるかもしれん。覚悟決めとけよ、バカ弟子」

「わかってますよ、そんなこと」

俺たちは世界の裏側に潜り込み、ファルク王国へと歩き出した。  
もしかしたら……いや、もしかしなくともこれは戦いになる。明確な予感が俺たちを駆り立てていた。

・

ところが、だ……。

ところが現地にいざ到着してみると 既に全てが終わっていた

……。

「ガハハハハハッ、遅かったじゃねえか、ユリアス!!」

「ユリウスです」

「なんだよ、お前らで全部片付けちまったのかよ……」

「おおっ、酒樽の友よ！ モンスターカクテルをご馳走してやりてえところだが……品切れだ。全ビームをぶち込んでやったぜ、ガハハ!!」

俺たちは転移門に現れた敵軍を撃退できるよう、事前に万全の体

制を整えておいた。

敵はやはりタンタルスの軍勢だったようだ。転移門を囲むように作られた要塞から、次々とあの口から出るビームと魔法銃がぶち込まれたのか、ボコボコに大地がえぐれ取れるほどの酷い有様となっていた。

ファルク王国軍（酔っぱらい）恐るべし……。

口からビームを放つ常識皆無の軍隊に、使役されたモンスターたちもタンタルスも、きつと生きた心地がしなかっただろう。

「おうそうそう、タルタルスも捕まえといたぜ、ガハハ！」

「はっ、コイツが非常識な王様で助かったぜ……」

「おかげで状況の理解が追いつかないですけどね……」

「なんとかかんとか！ ってやつも壊したから増援はもうこねえはずだ」

ええつと……。訓練通りにモンスターのいる次元とこちらを繋げる装置を破壊してくれた、ってことだろうか……。

となると残る問題はタンタルスの捕虜か。

「派手にやったもんだなあ……あれ、壊れてるんじゃないか？」

「たぶん、壊れてますね」

転移装置はドームごとぶっ潰れていた……。

白の棺さえ破損していなければ大丈夫だと思うが、どちらにしろこの様子ではしばらく使えそうもない。マリウスの海外出張確定だった。

「マジか……？」

「マジも何も、少なくとも1ヶ月は復旧出来ないでしょう」

「ま……待ってくれ、ユリアス！ このまま帰るなんて考えてねえよな？！ 俺たちや飲み仲間だよなあ！？」

「酒、作ってやってからにしてやってくれ。どっちにしろ、この国じゃビームの出るカクテル」国防だ、バカ弟子」

そりゃなんてデタラメな国だろう……。

「わかりました、そうしましょう。ですが先に、タンタルス族の方を処理してからですね」

「おうっ、せっかく捕まえたのにぶち殺すのか！？」

「違いますよ。ぶち殺せないから問題なんです」

「ああっ？」

懸念はリーンハイムのときのように、やつらが異常進化して不死の怪物となる可能性だ。彼らの身体の中には、生物の異常進化をもたらす薬品が埋め込まれている。

こちらに降ったアダマスが言うには、それは外科手術を行うことで取り出せるそうだ。

それに、タンタルスの裏切り者は多いに越したことはない。

「へえ、そりゃまた悪趣味なバカ野郎どもだ！ だが実際に戦ってわかったぜ、やつらはこの世界の敵だ！ もうエルフもヒューマンも関係ねえ、次かちこんで来たら、ド頭叩き割ってやらあっ！！」  
「いや、話聞いてました？ 追いつめると不死身の怪物になるって話をしたはずなんですけど……」

「ガハハハッ、そういう話は酔ってない時に言ってくれよ！」

「いやいつだって酔っぱらってるじゃないですか、アンタッ!？」

「おうっ、今日はたらく飲むぜ！」

「ははは、相変わらずフリーダムな王さんだぜ」

ファルク王はいつだって大ざっぱで人の話を聞かない……。

とにかくタンタルスの捕虜の手術が成功するまで、俺は錬金術で  
モンスターカクテルを造って待っていなければならぬらしかつた  
……。

・5年目 ガハハ！（後書き）

明日より新作

【勇者パーティーの汚れ役、正義厨にリストラされる。俺が抜けたら世間知らずのボンボンしか残らんけど、もう知らん。……と思った矢先に騙し討ちにされたので『盗賊』として反撃してやる】を公開します

戦いではなく、盗むことでスマートに目的を果たすお話です。どうか応援して下さい。

・5年目 ビーム(極大)が出る魔法のカクテル

ファルクにはオーブと水槽を使った工業的な錬金設備はない。

あるのは巨大な醸造樽と、地元産のワイン用ブドウにランスタ産の小麦が詰まった木箱、それと俺を取り囲む屈強な酔っぱらいどもだけだった。

「ユーリアスッ！！ ユーリアスッ！！ ユーリアスッ！！ あも  
ういっちょっ、ユーリアスッ！！」

彼らはファルク王国第一軍、口からビーム発射隊だ。ギャグのよ  
うだがマジでそういう名称らしい。理解しかねるセンスだ。

つまり彼らはこの戦争最大の武勲者たちであり、モンスターカク  
テルの過剰摂取により完全な泥酔状態に陥ったクソ迷惑な酔っぱら  
いでもあった。

「アホですか、アンタらは……」

「愛してるぜえ、ユリアスッ！！ お前の酒があれば俺たちは無  
敵だぜえ！！」

ファルク王が音頭を取ると、酔っぱらいたちが歌い出す！ 踊り  
出す！ 千鳥足でフラついて物を壊す！

俺はそんなクソ迷惑の権化たちに囲まれながら、巨大な醸造ダル  
の前の足場に立って超高濃度モンスターカクテル(ビーム味)を作  
っていた。

「へへへ、今から一杯やるのが楽しみですねえ、王！」

「あたぼうよっ！ この匂い立つ強烈な酒気とブドウ酒の芳香！  
これを飲まずに帰れるわけがねえだろ、お前らっ！」

『ここは有事のために飲まずに備蓄しておいた方がいいのではな  
いですか？』なんて正論が通じるわけがないので、俺は黙った。

彼らは精鋭の中の精鋭だ。正規軍選り抜きの酒豪どもに限界など  
なかった。

「うおおおーっ！！ ユーリアスツ、ユーリアスツ！！」

「俺、何しにファルクに来たんだっけ……。ああ、家族と砂漠が恋  
しい……」

錬金術の魔力でブドウと小麦、魔物の爪を強引に混ぜ合わせて、  
臨界に達したそれを超濃縮モンスターカクテルに仕上げた。酔っぱ  
らいどもは大興奮だ。千鳥足の男がブドウの箱に頭から突っ込んだ  
のを見た。

「もう飲めるのか！？ 飲めるよなっ、飲ませてくれよユーリアスツ  
！」

「いや、でもこれ、薄めないと絶対ヤバイ……」

「最高じゃねえか！！」

「いや、これの魔力でファルク王の頭が吹っ飛んだら、それ俺のせ  
いになるんですけど……」

「知らねえよんなこと！ よっしやてめえら、樽持ってこい樽っ！  
外でおっぱじめようぜ！！」

「人の話聞けよ、このバカ王っつ？！！」

「ガハハハハツツ、バカ王かつ、嬉しいこと言ってくれるじゃねえか、ユリアスッ!!」

「親愛の言葉じゃねーよっ?! あっ、またそうやって勝手に……!?!」

精鋭たちは自ら王のための足場となり、大樽を持ったファルク王は巨大な醸造樽から濃縮モンスターカクテルを強奪した。そして彼らは軍隊らしい無駄な連携力と機敏さで、酒蔵を飛び出して行く。

「飲むにしてもちよつとにして下さいっ、一気飲みとか絶対ダメですよっ!!」

俺は彼らを追って酒蔵の外に出た。すると

「うっめえええええーっ!!」

ファルク王が、ブナの大木の幹よりもぶつとい最強最悪のビームを天へと吐き出していた……!

「人の話聞けよおーっ?!」

ファルク王はたっぷり2秒間ほどかけて純粹破壊エネルギーを吐き終わると、空の大ジョッキを天に掲げる。それからこう言った。

「ガッハッハッハッ、細けえこたあいいのよっ!!」

「いつか死ぬぞ、アンタ……」

「上等よっ! 友の酒で死ぬるなら最高の人生ってもんよっ!!」

「ファルク王……」



「へへへ、俺あユリアスのことを大事な友達、いやせがれ同然に思ってるぜ！」

「俺を友達だと思ってってくれてるなら人の話聞けよっ、このアル中王っつー!!」

「ガハハハッ、さあ飲もうぜ、ユリアス!!」

「んな危険物誰が飲むかアホーッツ!!」

超濃縮モンスターカクテルの試作に成功した。

あくまで酒豪という意味で選り抜きの精鋭たちはファルク王に倣い、次々に超濃縮カクテルを中ジョッキで胃袋に流し込み

『うっめえええええーっつー!!』

ファルク王国の曇り混じりの空から、雲という雲をビームで消し飛ばしていった……。

もうやだ、この国……。

そこにある醸造樽全てに超濃縮モンスターカクテルを仕込むと、やっと自由の身だ。

俺はいびきを立てる酔っぱらいどもだらけの酒蔵を出た。

「よう、大変だったみてえだな」

「ああ、師匠……。そっちの方はどうですか……?」

外では師匠が待つてくれている。ファルク王たちにゲンナリさせ

られていた俺は、師匠の変わらない姿についらくもなく微笑んでしまった。

「成功だ。頭の中に、金属板と袋入りの水薬が埋め込まれていた」  
「……想像するだけでおぞましい」

「普通そこまでするか？ って感じだよな」

手術は成功。これでより多くの情報を捕虜から引き出せる。その捕虜が、アダマスのように何かに秀でていればそこから向こうの技術も手に入る。……悪くない結果だった。

「で、あのビームの出る酒の方はどうだ？」

「どうに確保出来ました。侵略により、モンスター素材が山ほど手に入りましたから」

「そうか、お疲れさん。しかしまさかあのビームが出る酒が一国救うたあな！ はははっ、この目で蹂躞を見たかったぜ」

「俺は遠慮したいです」

「よし、お前は報告に戻れ。後のことは俺に任せろ」

「え、いいんですか？」

つい嬉しくて俺は笑っていた。家族のところに戻れると思うだけで、口元が緩んでいた。そんな俺の姿を師匠はやさしく笑って、それにこまかすように乱暴に肩を叩いてきた。

そこまではよかった。

「あっここにいたのね！ パパッ、うちお弁当を作ってきたの！」

しかし不意にサンディの声が響いて、バスケットを抱えた彼女が俺たちの前に飛び込んで来た。俺と師匠は小さな天才の姿に思考回路まで固まり、すぐには言葉を返せなくなっていた。

「もう、無視しないで！ おじさま、今日もお髭が素敵ね！」

「お、おう……」

「サンディ、なぜここにお前がいる……」

「あのねっ、ママたちと一緒に弁当作ったの！ 差し入れよ、パパ！」

・5年目 **チーム(極大)**が出る**魔法のカクテル(後書き)**

宣伝

先日から新作を公開しています。

勇者パーティの汚れ役を担当していた盗賊の物語です。

ジャンルとしては勧善懲悪、ダークヒーロー系です。

戦闘ではなく、盗みの技でスマートに目的を達成してゆくお話です。

どうか より【勇者パーティの汚れ役】を読みに来て下さい。

初動が大事です。応援して下さい！

・5年目 同じ歩幅で

「あのなあ、サンディ……。転移魔法を日用使いするなって、お師匠様は言ったよなあ……………」

「ごめんなさい、アルヴィンスおじさま。でも明日の夕方までに帰るって、書き置きを残したから平気よ！」

「つまりお前さんは親をだまくらかして弁当を作らせて、それを黙って持ってきたと？」

「そ、それは……………。だってパパとおじさまが心配で……………うちっ、二人のお手伝いがしたかったんだものっ！」

俺はバスケットを受け取り、無言で中のハムチーズサンドを手にとった。濃厚な山羊チーズと小麦からはシャンバラの味がした。参った。俺にサンディを叱る資格はない。

「どう!? それ、メープルママと一緒に作ったの！」

「アイツが共犯者か？」

「え…………。っ。し、知らないわ…………。っ」

「ったく、親子揃ってとんでもねえバカ弟子だ。1つ貰っぜ」

「どうぞ、おじさま！ これっ、これ食べて！ うちが作ったの！  
パパにあげるつもりだったけど、おじさまにあげるわ！」

「そいつはパパに食わせてやりな」

俺たちは怒るに怒れなかった。俺も師匠も若い頃にバカな使い方をした経験があるからだ。あの頃は頭ごなしに俺を叱る師匠がいた

が、当時の俺はそれに全く聞く耳を持たなかった。

「ユリウスは行き違いにならなくてよかったな」

「え。それって……もうお仕事終わったってこと？」

「いや終わったっていうより、終わったたが正しいな……」

簡単に説明をしてみると、サンディは口に手を当てて驚いていた。まさか弁当を届けに追ってきたつもりが、その先で一方的な蹂躪が行われていたとは思わないだろう。

「明日の夕方までに戻ればいいんだろ？ 親子2人でどっか寄り道しながら帰れよ」

「えっ、いいのっ!？」

「師匠、いきなりそんな勝手に」

「うち、パパと一緒に旅を試みたい！ ねえ、パパツ、ママたちと一緒にいった場所がいっぱいあるんでしょ！ うちを連れてってよ！」

「家族サービスしてやれよ。この美貌だ、いつ彼氏が現れてもおかしくねえぜ……。そうなったらパパなんぞ用済み」

「わかりましたよっ、考えないようにしてるんだからその話は止めて下さいよっ!？」

「ふふふっ！ うち、彼氏にするならアルヴィンスおじさまがいいわ！」

「親が発狂するから止めてやれ。お前も睨むな、バカ弟子」

「サンディは絶対ダメですよ!! 手を出したら師匠を殺しに行きますからねっ!！」

「ほんとバカ弟子だな、お前は……」

大事なサンディを背中の後ろにかばうと、師匠はしらけた目で俺を見てチーズサンドを一気食いした。

「ご馳走さん、美味かったぜ」

「えへへっ、おじさまのためならうち、いつでも作ってあげるわ！」

「ありがたくて涙が出らあ。んじゃ、お疲れさん」

板挟みに堪えきれなくなったのか、師匠は錠を破って転移魔法を日用使いした。これだからこの魔法は危険だ。あまりに便利過ぎて自制が出来ない。

「それじゃあサンディ、一緒に帰ろうか」

「寄り道するんでしょうっ、どこに寄るのっ!？」

「ランスタの湖畔の宿なんてどうだ？ その宿に昔泊まったんだ。

……その、遅めの新婚旅行の際にな」

「新婚!？ そこっ、うちそこ行きたいっ!」

「なら決まりだ。それと たぶん戻ったら、シエラハとグラフがカンカンに怒り出す。そのときの言い訳と一緒に考えようか」

「うっ……。ありがと、パパ……」

「もう過ぎたことだ。やっちゃったもんはしょうがない」

「パパ、怒らないの……?」

「好き放題やってきた俺が怒っても説得力がない。ママたちに任せ  
る」

「うう……」

俺は扉を開き、小さくなったサンディを中へと導いてからそれに続いた。

世界の裏側はいつだって無機的で、暇つぶしの妄想や物思いなくしては堪えられないものだ。だが、今日はサンディが隣にいる。

「うち、パパの娘でよかった！　だってこんなに楽しいことが出来るんだものっ！」  
「そうか」

そのセリフは目頭を熱くさせる力がある。親としてとても嬉しい言葉だ。俺はそっぽを向いて、サンディの手を引いて方眼紙みたいな世界を歩いて行った。

同じ足並みで歩けるただ1人の家族は、母親譲りの世にも美しい容姿で、無邪気な子供の笑顔で微笑んでいた。

「わあっ、凄い！　水がこんなにいっぱい！」  
「そんなの見慣れてるだろ」

「ぜんぜん違うの！　だって、こんなに緑が　あつ、魚がいる！」

湖畔の宿に到着すると、辺りはもう夕刻だった。紅い光が大きな湖に反射して、その冷たい湖水がサンディを驚かせていた。

「きゃっ、凄く冷たい！　あははっ、変なの！」  
「いつかみんなで来るのもいいな」



「うんっ、うちもそう思った！ スクルズとウルドにも見せてあげたい！」

「よし、帰った時にこの話を振ろう。ごまかせるかもしれない」

「ん……そう上手くいくかしら？」

「ダメだったらパパと揃ってお説教だな。メープルも巻き込もう」

いつかのように小石を拾って、それを湖に飛ばして見せた。3段で石は湖に沈んだ。

「難しい……」

「4段跳ねればかなりの腕だ。シエラハママたちがおかしいんだよ」

「あつ、見てパパツ、あそこでお魚売ってる！ ネコヒトさんたちのお土産にしましょ！」

「川魚の干物か、喜ぶかもな。けどそれは明日にしよう」

サンディの手を引いて宿を訪れると、部屋はがら空きだった。客は裕福そうな落ち着いた老夫婦だけで、サンディが挨拶をすることも喜んでくれた。

夫婦と一緒に夕飯を食べることになり、楽しいひとときが過ぎていった。

……帰宅後のことは考えないようにした。

そして翌朝、俺たちはアユとマスとオゴゼの干物を買って宿を出た。

そこから先も転移を短距離に止めて、あちこちの絶景をサンディに案内した。昔が懐かしくなった。

「うち、わかったわ！ 転移魔法は旅行をするためにあるのよ！」  
「旅行の力か。そういう発想はなかったな」

「いつか世界中を旅してみたいわ。そしてたくさんのお土産を持って、パパとママのいるシャンバラに帰るの」

「ダメだ。パパは一生子離れ出来そうもない……」

「しつかりして、パパ！」

「無理だ、サンディ……。お前が遠くに行くなんて気が気じゃない……」

転移魔法は危険な力だが、悪いことばかりではなかった。

この力は旅行のための力だとサンディは言う。それには半分賛成で、半分は大反対だった。

この子はいつか俺たちの手を離れて遙か遠くに行ってしまうだろう。

スパイとして世界中を回っていたシエラハゾと、最もたちの悪い転移魔法使いだった俺の娘は、まだ見ぬ世界を求める目と、それを実現出来る才能を併せ持っていた……。

・5年目 同じ歩幅で（後書き）

お陰様で新作がなかなかの好調です。ありがとうございます。

もしよかったら「勇者パーティの汚れ役、正義厨にリストラされる」  
を読みに来て下さい。

また本作。これから安定供給、品質アップをできるようにがんばっ  
てゆく予定です。

本作も応援して下さい。

・ 5年目 真夜中の砂漠にて

シャンバラの緑化率 6 . 5%

それから月日が流れ、もうじき1年のうちの半分が過ぎ去ろうとしていた頃

「ユリウス……?」

「すまん、起こしたか」

シエラハの眠るベッドから密かに抜け出して、俺は魔導師の黒口―ブの方を身に付けていた。

「いいの、寝付いたばかりだったから。それよりもこんな時間にごに行くの?」

「いや、少し工房の方に行くだけだ」

「ねえユリウス、そんなに無理をしちゃダメよ。実験なんて明日までとめてやればいいじゃない」

「……眠れないんだ」

俺がそう返すと、シエラハは照明魔法を発動させて、ベッドの中でクルリとシーツを身体に巻き付けて身を起こした。そうすると繊細な鎖骨と褐色の肩がむき出しになって女神のように綺麗だった。

大きな胸がシーツ越しに隆起するその姿は、子供たちにはとても見せられないほどに刺激的だ。俺はその姿にまた少し見とれてしまっていた。

「温かい飲み物を作るわ。……手伝ってくれてもいいのよ？」  
「いや……先に行っているよ」

自分の寝室を出て、居間の暖炉にファイアボルトで火を入れつつ、  
錬金術工房の方に移動した。

オーブと水槽の方ではなく、錬金釜の前までやってくると照明魔法で辺りを照らし、付箋だらけのメモ帳を開いた。

……そこから先はいつもの単純作業だ。

シャンバラを再生させる。それが己の使命だと信じて、試作品を  
1つ1つ完成させていった。

「ユリウスッ、ユリウスつてばっ！」

「あ、ああ、すまん……。ぼんやりとしていた」

「きつと頭が疲れているのよ。はい、砂糖たっぷりレモンティー  
よ」

「ありがとう。うっ、甘いな……」

片手でマグカップいっぱいレモンティーをすすりながら、もう  
片手で釜の攪拌と魔力供給を続けた。

シエラハはそんな俺の隣に並んで、茶をすすりながら俺の顔や工  
房の天井、釜の中などに気まぐれな視線を送っていた。

「ねえ、ユリウス、初めて会った頃のこと、覚えてる……？」

「もちろん、忘れられるはずもない。酷い扱いだっ」

「ごめんなさい」

「別にいい。あの頃の俺はなんというか、小者だった」

「そうね」

「いや、そこは否定しろ……」

「ふふふつ……あの時捕まえた男が、自分の旦那様になるなんて、なんだか不思議……」

「ほぼ同感だな。全面同意と言い直してもいいくらいだ」

釜がポンツと軽い音を立てて、辺りに爽やかな緑の香りと淡い光が漂った。

シエラハがレモンティーをテーブルに置いて、錬金釜から小ビンに種を移してくれるのを、俺は次の素材の準備をしながらいつもの感覚で見守った。

「さ、もう寝ましょ」

「まだ眠れそうもない」

「ダメよ、あたしを独りで寝かせるつもり？」

「お、おい……っ」

シエラハは昔からひかえめな人だ。そんな彼女が男に背中に大きな胸を押し付けて誘惑してきた。まるでメーブルみたいにピツタリと貼り付いて今夜の彼女は離れない。

いつにないその積極性は、彼女の作戦通りに俺をベッドに帰らせた。くさせた。

「あ、あたし、なんでもしていいわ……だから、もう戻りましょ……」

「…?」

「眠れないんだ」

「眠れるまで一緒にいるわ！ な、何度でも、付き合っわ……」  
「……まずいな、このままでは本当に誘惑に負けそうだ」

「あたしと休みなさいっ、あなたはがんばり過ぎだっって言ってるのっ！」

作業の手を止めて、シエラハの温かくてやわらかな抱擁から抜け出すと、素材を元の棚に戻した。

ただ、このまま素直にシエラハの要求に従うのは気に入らない。  
そこで照明魔法を自分の頭上に引き寄せて、シエラハの手を引いた。  
小瓶を詰め込んだ木箱と一緒に。

「夜の散歩に付き合ってくれ。1人じゃ寒い」

「いいわ。さっと済ませて部屋に帰りましょ……」

「あ、ああ……」

「どうしたの？」

「いや……なんでもないぞ」

ただでさえ目が離せなくなるほどに綺麗な人だ。そんな美しい女性に誘惑されると、実験なんて中止して彼女を抱き上げて、このままベッドに戻りたくなかった。

けれどもそうもいかない。

「この時間はさすがに、かなり冷えるわね……。風が冷たい……っ」  
「帰るか？」

「あなた1人に行かせられるわけないでしょ。さ、木箱、こっちに  
ちようだい」

夜の砂漠　と呼ぶには緑がかなり混在する不思議なご近所を、  
俺たちはぴったりと寄り添い合って歩いた。

滅多に曇ることのない空からは、冴え冴えとした青い月光が美し  
く降り注ぎ、遠くの砂漠をぼんやりと幻想的に照らしている。

「ねえ、ユリウス、あなたは何を焦っているの？」

「ああ、その質問には答えない」

「答えないなら答えさせて見せるわ！　んっ……」

「んなっ、んっんぐっ……?!」

何年も連れ添っておいて、キス1つで恥じらう嫁と旦那というの  
もどうかと思う。けれど俺たちにとって、野外でこっいっことをす  
るなんて今でもあり得ないことだった。

月だけが俺たちを静かに見下ろしていた。

「こ、答えるまでするわっ！　え、えいっ……!!」

「あ、足払いつ?!　ぐあっ!!」

押し倒すと表現するにはちょっと巧みで力技過ぎる足さばきで、  
俺は黄金の真珠と心の中で揶揄する美女に押し倒された。彼女は俺  
の腰の上に馬乗りになって、問いかけへの答えを求めた。

このままでは2人そろって風邪をひいてしまうな……。

「答えて、ユリウス。あたし、あなたが心配なの……。まさか、重  
い病気だなんて言わないわよね……?」



「違う」

「そう、よかった……。あたし、ずっとそれが心配で……」

「違うんだ。俺はただ……」

その言葉の続きを本当に口にしていいものやら、俺は深く迷った。

「ただなあに？」

「……いや、ただ……ただみんなに置いて行かれるのが、怖くなっ  
たんだ」

冷たい砂漠でシエラ八抱き寄せて、彼女の温かなぬくもりを求めた。心が安らいだが、それは一時の麻薬に過ぎない。

「それって、寿命のことかしら……？」

「そうだ。子供たちはどんどん成長して、俺だけが老いてゆく……。俺はなぜ、ヒューマンに生まれてしまったんだ……。シャンバラのエルフとして生まれれば、こんな思いをしなくても済んだのに……。そう思う日が、最近増えてきた……」

「ユリウス……。あたしだって同じことを思っていたわ。なぜあたしは、あなたと同じヒューマンに生まれなかったのか、神様に何度も心の中で問いかけてきたわ……」

「お前も……？」

「メープルもグラフもよ！ 同じ時間を過ごせたらどんなにいいか……あたしたちが思わない日はないわ！」

胸の中で沸き起こる感激に彼女を強く抱き締めて、それから抱擁を解いて冷たい砂漠から助け起こした。

辺りはもう実験にちょうどいい不毛の土地になっていた。

「俺が生きているうちにこのシャンバラを再生させて、残された家族に何かが残るようにしたかったんだ。俺が塵となって消えても、緑にあふれる大地があればそれが慰めになる。俺の代わりになる。俺はそう信じている」

落とされた木箱から小瓶を手に取り、シエラハから少し離れてからそれを砂漠に蒔いた。

……失敗。……これも失敗。……失敗。

最後を手に取ろうと振り返ると、シエラハがピンを手に取って俺を手招いていた。

「そんなこと、言われなくとも知ってたわ。さ、帰りましょ」

「ああ、いつも心配をかけてすまない」

シエラハが最後の小瓶を逆さにして、今夜の実験は終わった。

いや、待てよ、これは

「見てっ、ユリウスッ！ これって成功っ、成功よねっ?!」

シエラハの喜びの大声に返事すら返さずに、俺は彼女から小ピンを奪い取ってラベルの番号を確かめると、喜びの感情のままに彼女を固く抱き締めた。

俺たちの足下に広大な緑が生まれていた。面積は以前の成功例とさほど変わらない。だが肝心なのは、レシピだ。

今回のレシピは砂漠の緑化アイテムの必須素材であり、需要過多により高騰が止まらない『大地の結晶』を使わないレシピだった。

「なんとか言っつてよ、ユリウス！ これって成功なのねっ!？」  
「ああっ、やったぞ、シエラハ！ これは三重丸の大成功だっ!！」

効果はほぼ同じでも、別の素材で似た効果を引き出せるならばその有用性は2倍どころではない。俺たちは砂漠に生まれた緑の大地で踊り回り、その草木が見慣れない物であることに少し遅れてから気付いた。

「ねえ、ユリウス……」

「ああ、あれがソテツで、あっちのがシャボテン。あの青い果実が実っている木は、たぶんバナナだろう」

シエラハが質問する前に先制して答えた。

俺たちを取り囲む植物たちは、どれもが常夏の国々で見られるものだった。

この種は『常夏の恵み』とでも名付ようか。

「ユリウス……ッ！ 最高っ、やっぱりあなたは最高よっ、うふふふふっ」

「お、おい……シエラハ……?」

シャンバラの姫君は隣の木を三角跳びの足場にして、バナナの房にしがみついた。そして猿みたいに身を揺すって房ごっそり全部をもぎ取ると、幸せいっぱいの笑顔で戻って来た。

「ふふふっ、あのバナナがこんなにいっぱいっ！ さ、帰りましょ」

「あ、ああ……」

内心、この後のことを期待していた……。  
けれども今のシェラハは食欲 いや、甘味欲に心まで飲まれていて、もう早く帰って温かい場所での青いバナナを食べることしか頭になかった。

素直にあのとき、誘惑に乗っていればこんなことにはならなかったというのに……。

俺は深い後悔を覚えながらも、ビンを木箱に戻して先に行くシェラハの後ろ姿を追った。

もしかしたらこれは、シャンバラに空前のバナナブームが来る前振れなのかもしれないな……。

・5年目 BANANA!

翌朝はバナナパーティになった。

いつもならパンとスープ、軽く火を通したハムや色鮮やかなサラダが並ぶはずの食卓は、バナナ色一色だった。

「おはよっ、ママッ！ 今日朝からお疲れ わーっ、なにこれーっ？！」

「わっわっ、これ、私っ本で見たことある！ バナナッ、バナナだよっ！」

「天国じゃ！ 寝て起きたらなんかワシらは天国にいたのじゃっ！」

子供たちは大喜びだった。我先に食卓に着いて、大皿のバナナを自分の皿に運んだ。

「んぐっ?! こ、これ、筋っぼくてまずいのじゃっ!！」

「えっと、あのね、スクルズちゃん……これ、こっやってむいてから食べる物 きゃっ、そ、それ私のーっ!！」

「う……っ、うーまーいーっ!！」

「あっ、ホントだ！ すごっ、超甘いよこれっ!！」

そんな微笑ましい子供たちをシエラハと俺は笑顔で見守った。俺の方はお腹いっぱいだ。昨晚、シエラハと一緒にちよつと食べ過ぎた。

「どっぞ」

「ああ、いつもありがとう。ん……んぶうっつ?!?!」

「あら、気に入らなかった?」

「い、いや……てつきり、いつものお茶かと……」

配膳された温かいカップの中には、茶ではなく白くドロドロとした半固形物が浮かんでいた。

これは、ホットバナナ……ジュース、なのか……?

「ふふふっ、早起きして作ってみたの、甘くて美味しいでしょ?」

「あ、ああ……お、美味しいよ……」

でも朝は紅茶がいいな……。

材料はバナナ、乳、砂糖といったところだろうか。不安になるほどに甘い……。

シャンバラを救う奇跡のレシピは、既にバナナに株を持って行かれていた。

「おお……なんて太くて、雄々しく、立派にそそり立つ……バナナなので、しょあてっ」

朝っぱらから下ネタをほめかす不良母も起き出してきた。

わざわざ俺の隣に寄り添ってそんなことを言うものだから、きつとこれは突っ込み待ちなのだろうと、挨拶ついでにおでこを小突いた。

「やる」

「せんきゅー。んっ……んっんんっ……ぶはっつ。ふああっ、これっ、美味し過ぎる……っ!?!」

「おま、よくそれを一気に飲みなんか出来るな……」

「え、なして？」

「ふふっ、ユリウスは甘いのが苦手なものね」

いや苦手ではないが、普通は限度つてものがあるだろう……。

「このバナナどうしたんだ？ んっ、このバナナ、まだ青いのに甘みが強くて、凄く美味しいな……」

グライオフエンも起きてきた。彼女は娘たちの向かいに座つて、見よう見まねでバナナをむくとそれをほおぼつて笑顔になった。普段クールなグラフが、今朝はただの食いしん坊の女の子に見えた。

「そんなの決まってるじゃない、いつものパパの失敗作よ。そうでしょ、パパ？」

「失敗作じゃない、今回は大成功だった」

「ああっ、そうだな！ こんなに美味しいバナナが実るなら、それを使って畑を作るべきだ！」

「違う……。成功したのはバナナが実ったことではなくてだな……」

『大地の結晶』を使わずに、広い面積に緑を

「シエラハ母！ バナナジュースはまだかつ、まだならワシが手伝うぞっ！」

「あ、それなら僕も手伝うよっ、何をすればいいっ!？」

クソ……誰も、誰も聞いてないねえし……。

成功したんだよ、大成功だったんだよ……っ。なのになんでコイツら、バナナのことしか頭にないんだよ……っ！

「お、お父さん……わ、私は、わかるよ……。材料、集めやすくな

つて、お爺ちゃんたち、凄く喜ぶんだよね……」

「ウルド、お前だけだ……。わかってくれるのはお前だけだ……。お前は本当にいい子だ……」

「お父さん……そういうの、恥ずかしい、よ……っ」

メープルとは正反対に育った娘を褒めたくると、なぜか実母の方がやたらと誇らしい顔をした。

「ふっ……」

いや、お前は褒めてないぞ……？

この上ない反面教師にはなったけれど、母親としてはマジでどうかと思うぞ……。

「あ、そだ。ケーキに乗せる……っっていうのは、どー……？」

「おおっ、いいんじゃないかっ!？」

「ならクリームと蜂蜜も乗せるのじゃ!」

「うちっ、アーモンドを使うのもいいと思うっ!」

これ以上ここに残ったら、朝っぱらから胸焼けに苦しむことになりそうだ。

俺は静かに席を立ち、静かに玄関をくぐって家を抜け出した。…

…嫁たちも子供たちも、バナナに夢中で、1人として俺の外出に気付く者はいなかったっという……。



都市長と義兄に報告を入れた。2人はこのレシピの価値をすぐに理解してくれて、早速帳簿を引つ張り出して来た。

「『燃える葉』と『うるおし草』に『ドライアドの実』……この材料ならば、コストは現在の12%ほどに圧縮出来ますね」

秘書をしている義兄さんは、涼しい顔で複雑な計算をやつてのけた。その言葉は都市長をもう1度喜ばせるのに十分過ぎた。

「急ぎツイクからも輸入しましょう。レシピについてはしばらくの箝口令をお願いします。あちらの商人に知れたら、相場を吊り上げられるのが見えていますからね」  
「わかった」

シャンバラの首脳部は今日も頼もしい。  
不器用な俺の代わりに、臨機応変に動いて物事を運行し、円滑にしてくれる。俺は感謝の気持ちもかねて、バナナを1本ずつ書齋に置いた。

「朝食の邪魔をしてしまったのなら、これはおわびだ。このレシピは常夏の草木を生みだし、中にはこんなバナナなんかもある」

「おおっ、これは美味しい……」  
「む、確かにこれは……おお、まだ青いのにとろけるほど甘いですな……っ」

ところがこれはエルフの宿命だろうか。都市長と義兄さんはやけに素早くバナナを拾い上げると、すぐに皮をむいて一口、二口、三口と凄い勢いでほおばった。

「残りは、自宅ですか？」

「あ、ああ……そうだが、義兄さん……?」

「朝食はあちらでいただきますしょう」

「ちょ、都市長まで……ちょっと?!」

「ユリウスさん、打ち合わせはあちらでしましょう」

な、なぜだ……。

まだ熟してもいない青みの残っているバナナのどこに、これほどまでにエルフたちを引きつける力があるのだ……?

その後の打ち合わせは、バナナをくっちゃべりながらの甘ったるいものになった。

「お待たせっ、ジイジツ、生クリームバナナケーキのアーモンドと蜂蜜がけよっ! うちとママの2人で作ったんだからっ!」

「うっぷっ……」

トドメのケーキは破壊的な味わいだった。

・5年目 BANANA！（後書き）

投稿が遅くなつてすみません。

執筆に夢中で投稿作業を忘れていました。

新作「勇者パーティの汚れ役」を精力的に連載中です。

とても楽しく、満足できる仕上がりのお話になっています。どうか応援して下さい。

次の更新日は31日予定です。31日にチェックしていただけると、ちよつと良いことがあるかもしれません。

・5年目 遙か東方へ（前書き）

『書籍化のご報告』

本作がトーハン主催新人発掘コンテストの銀賞に選ばれ、【書籍化】することになりました。

ここまでたどり着けたのは、本作を応援してくれた皆さま1人1人のおかげです。ありがとうございます。

まだ打ち合わせもしていませんが、書籍版はもっとエロくしたいです。

なるうというリミッターがかかっているため、自粛しなければなりませんでしたが、書籍なら大丈夫！

最近のエロい異世界コミックが売れる傾向も強いので、編集さんとこの方向で話を運んでみる予定です。

また、本作の悪い部分も精力的に改善してゆこうと思いますので、ぜひ書籍版を楽しみにして下さい。発売したら買って下さい。買って下さったらコミカライズのチャンスが広がってお互いにWINWINです。

また、ずっと滞っていた感想をこれからお返しします。

書籍ではこうして欲しいという要望があったら、感想欄なり、活動報告なり、Twitterなり、ご意見を下さい。

それでは、読書中に失礼いたしました。

・5年目 遙か東方へ

それから半月後、小さなと呼ぶには大きな、大きなと呼ぶにはあつけない小事件が起きた。

またもや迷いの砂漠が機能を止めたのだ。

いつかこうなることを予測していたシャンバラの上層部は、兵力を国境に回し、冒険者たちに動員をかけた。

また同時に、ある重大な議論が議会が沸き起こることになった。

それはシャンバラ王国滅亡の爆心地だった場所に眠る、地下巨大遺跡のことだ。

あれが迷いの砂漠の源ならば、やはり突入して管理下に置くべきではないかという緊急議題だった。

都市長を中心とする老人たちは猛反対だった。

下手をすれば今度こそ砂漠デザートウォーカーエルフは滅亡すると、断固として譲らなかった。妥協点の存在しない議論に議会は荒れに荒れたらしい。

だがお騒がせな古代遺跡は、翌日の昼過ぎに迷いの砂漠を突如として復旧させた。またもや俺たちは振り回されたというわけだった。

『パンドラの箱を開けるべきか否か？』

その答えを知る者は誰一人としていない。

だがもしもあの遺跡がシャンバラを砂漠に変えた原因そのものだと仮定すれば、これは極めて危険な兆候だ。

何かの拍子で俺たちが人生をかけて盛り立ててきた理想郷シャンバラが、再び一夜にして再び滅びる可能性をはらんでいた。

だがそうはさせない。俺は一生をかけてシャンバラを再生し、残された人々の記憶に残らなければならない。

ユリウス・カサエルが生きた証。シャンバラの再生こそが、エルフとヒューマンの悲しい愛をハッピーエンドにするただ一つの方法だと、俺はそう信じて疑わなかった。

事件というものはいつだってまとめてやってくる。シャンバラの議会が荒れに荒れまくって、都市長と義兄がどこか不機嫌そうに眉を難しくしていた今日、新たな急報が飛び込んで来た。

「はっ……このメンツってことは、また国外がらみか？」

「ご名答です、アルヴィンスさん。調査隊の長い苦労もあり、ついに白の棺が発見されました」

呼ばれたメンツは俺に師匠。後はいつもの都市長と秘書の義兄さんだった。

「へえ、場所は？」

「西と東の果てです」

「つまり2つ見つけたってことか？」

「はい。そこでお二人の力を貸していただきたく、こうしてお呼び

立っていました」

つまり、師匠と手分けして出張しろってことだ。

白の棺の掌握は急務とはいえ、家を離れるのは内心乗り気がしなかった。

「私から説明します。西がダネイン王国、肌の黒い人々の国。東がゲフェン王国、目の細い東方人の国です。どちらも遙か遠方にあり、棺を持ち帰ることは物理的に困難です」

「はっ、話が読めたぜ。現地の政府を抱き込むんだな？」

「そうです。お二人は外交官として現地の政府と接触して下さい。

そして相手を見定めた上で、転移門と同盟の有用性を説いて下さい」

「ならダネインは任せな。以前、1度だけ王家と接触したことがある」

「そつえば師匠って、一応元お偉方でしたな」

「おう、そんで今はテメエがお偉方だ。お師匠様の苦労がよくわかっただろ、ああー？」

「はあっ……。その厄介な性格でさえなければ、ツイクでももつと人望があつたでしょうね」

とにかく出張、遙か東方へのお出張だ。

シエラハもメープルもグラフも、彼女たちは俺の遠征をいつだって好意的に受け止めてくれない。俺がはかないセミちゃんだからだ。

「貴方の家族のことは私と都市長でカバーします。申し訳ありませんが」

「んな言い方すんなよ。全部コイツが始めた話だ、言い出しっぺが責任取るに決まってるだろ」

「わかっていきますよ。東は　ゲフェン王国は俺に任せて下さい」

全ての白の棺を転移門で繋ぐ。そしてそこに外世界からの侵略を防ぐ要塞を築く。この方針に変更はない。出発は明日だ。

そう話がまとまると、俺は帰宅して工房に入り、明日の分の仕事を急ピッチで進めた。

・

それから夜になって、みんなが食卓に集まって食事がある程度進むのを見計らって、今回の遠征話を伝えた。

「わかったつ、ならつ、うちがパパと一緒に行くわ！　だって1人より2人の方が安心でしょ！」

「な、なんだと……？　そんなのダメに決まっているだろうっ！！」

問題はウエルサンディだった。

この天才は父や母がなんと言おうとも、その実力で同行を実現出来てしまう。いまやメーブルを超える悩みの種だった……。

「うちらがもう少し育ったら、ママたちと新しい妹を作る約束なんでしょ！　パパに死なれたら困るわ！」

「な……なぜ、その話を知っているんだ……っ?!」

「あ……それ、言った、かも……？　あ、バッチリ言ったね……てへ」

「またお前かっ!!!」



メーブルが拳手をして、俺が鋭く突っ込みを入れると彼女が幸せな笑顔を浮かべた。

「だけど気のせいかな、シエラハとグラフの目も泳いでいるような……。おい、お前ら……？」

「そういつわけよ、うちは新しい妹のためにパパを守る役目があるのー！」

「ない……」

「あるったらあるのーっ！」

「えーっと……お父さん、帰って来ないと、私も困るよ……。私、お父さんみたいな錬金術師になりたいから……」

「頼むううっ、サンディイッ！　ワシもお姉ちゃんになりたいのじやあっー！」

しかしどんなに子供たちがだだをこねようと、母たちがそれを許すはずがない。

「早起きして、サンディとユリウスのお弁当、作らなきゃね……」

「おいっ？！」

「まあ……そんなに危険はないんじゃないか？　戦争の危険があったファルク遠征とは様子が違うし、無茶ばかりのユリウスを見張ってくれるならば、僕からは特に文句はないよ」

「お前まで何を言い出すんだよ、グラフ……」

「そうね……サンディに報告させましょ。どうせあたしたちがダメと言っても、勝手に抜け出すんだもの、この子……」

「そ、そうだが……だが、事態がどうなるかは……」

あれ……？ 俺ってもしかして、サンディより信用や発言権がない……？

「ふふっ、よろしくねパパ！ 帰りは色んな国に寄り道して帰りましょ！」

「外交官とその娘だ。いくら遠方の国とはいえ、今のシャンバラを敵に回すバカはいないよ。ユリウスを任せたよ、サンディ」

「任せて、ママたち！」

俺に拒否権はないらしい。

勝手にそういうことに決まり、彼女たちはどんな魔法を使ったのか都市長まで見事に説得してしまった。

・

こうして翌日、俺たちは弁当と貢ぎ物を背負って、みんなに見守られてこの美しいオアシスの前で転移魔法を発動させた。

「ああ、そうそうユリウスさん」

しかしさあ飛び込もうという寸前に、都市長に呼び止められた。

「その、無粋だとは思いますが……新しい孫の顔、心待ちにしております。ぜひ、がんばって下さいね」

「ああ……そういふことが……」

どんな言葉で都市長が説得されたのかようやく納得しながら、俺

はサンディと一緒に世界の裏側へと身を投じていた。

「ふふっ、ウルドとスクールズは同じ年でしょ。だからうち、妹たちが産まれるのが今から凄く楽しみ！ パパッ、いっぱいいっぱいがんばってね！」

「サンディ、その話はもういい……。代わりに……。そうだ、しりとりでもしよう」

「嫌よ！ あのねっ、うち妹と弟の名前を考えたのっ、聞いて！」  
「わかった、参考に聞こう……」

「あのねっ、あのねっ！ 男の子ならねっ、アルヴ！ 女の子ならエツダってどうかしらっ！？」

「悪くない。他には……？」

「うんっ、他にはねっ！」

転移魔法の天才同士の旅は、滅多に表の世界に出ることはなかったけれど、サンディとの旅は存外に楽しいものになっていった。

俺と同じ歩幅で歩ける存在は、この世にウエルサンディ1人だけだった。

「おはよ、パパ！」

「ああ……もう朝か。良いベッドというのはやはり毒だな……」

昨日の夕刻、俺たちは海辺の小さな保養地に立ち寄り、そこで宿を取った。

俺は堅実な仕事をしていそうな高級店を希望したのだが、サンデイは若者たちの集まる水上コテージの方を望んだ。

「え、どうして？」

「一日中、ここで波の音を聞きながら、寝て過ごしたくなるからだ……」

「へへへー、じゃあそうしちゃおう？」

「俺たちは外交官だ、責任を 持てと言ったら、もしかして俺は嫌な父親か？」

ベッドから起き上がると、俺は金糸と白のトーガを身につけて、外交官を証明する勲章を枕の下から取り出した。服はともかく、コイツを盗まれたら面倒だった。

「うーうんっ、わがママを聞いてくれた素敵なお父さんよっ！」

「そうか」

こんなに大きいのに頭を撫でるのはどうかと思うが、肉体に精神が引つ張られているとはいえまだ5歳だ。俺はサンデイの横髪をそつと撫でて、潮風にも痛まないその髪質に感心した。

「ウルドとスクルズも一緒に来れたらよかったのに……。海ってこんなに綺麗だったのねっ！」  
「そうだな」

水上コテージの窓から海を眺めれば、蒼く巨大な海がそこに横たわっている。昨日の夕刻は夕日を受けて紅く輝いていたというのに、今はどこまでも深く、その底知れなさが恐ろしい。

「もしかして、今ママのこと考えてた？」

「まさか」

「ふふふっ、パパはママたちが大好きよね。そのこと、お友達と話したらね、羨ましいってみんなが言ってたわ！」

「……ああ、そのお友達のその気持ちがとてもよくわかるよ。俺もお前が羨ましい」

さあ行くつとコテージを出ると、町の悪ガキどもが逃げ出していた。目当てはきつとサンディだろう。子供たちから見れば、うちのサンディは いや、さすがに親ばかが過ぎるから言うのは止めよう。

「今日中にゲフェンに行くのよね？」

「ああ。王との謁見は明日になるだろう」

朝食は海辺のダイニングにした。海鮮ヌードルを2人前頼んで、小ガニの素揚げも付けてもらった。

「ごめんね」

「何がだ？」

「パパ1人だったら、今頃はもうあつちにいたんでしょ……?」  
「お前は父親を買いかぶりすぎだ。いつか追い越されるんじゃないかって、こっちはヒヤヒヤしているよ」

「そう? えへへっ、それなら別にいいわ! あっ、このカニツ、サクサクしてて美味しい!」  
「なら追加するか?」

「うん!」

サンデイと腹を満たすと、ダイニングの外にまた悪ガキどもがいて、父親の姿を見て逃げていった。

何を思ったのかサンデイは父親の二の腕にしがみつき、急に甘えてきた。

「こうすればあの子たち、うちたちのことを恋人だと思つかも」

「……逆に、聞いてもいいか?」

「なあに、パパ?」

「俺たちは周囲の人たちに、どう思われているのだろう?」

「ん……たぶん、親子には見えないんじゃないかしら?」

「まあ、言われてみれば、そうだろうな……。親子として見られて  
いるつもりだった……」

尾行の下手な悪ガキどもに後ろを追われながら、俺たちは最後に見晴らしのいい岬まで歩いた。転移魔法を使えば一瞬だが、歩くとき意外と上り下りがきつく、到着まで20分近くもかかった。

東部沿岸に築かれたこの町は、こうして見下ろしてみれば、沿岸沿いに走る街道から伸びるように発展している。

転移魔法使いである俺たちは世界の断片だけ眺めて知った気になるが、現実の世界はもっともっと広いのだと実感させられた。サンディは目を輝かせて、初めて見る海辺の町を夢中で眺めていた。

「さて、そろそろ挨拶を済ませて行こうか、サンディ」  
「挨拶……？ あっ、そういうことね！」

悪ガキどもに向かって手招きをすると、サンディも父親の真似をした。恐る恐る地元の子たちが現れて、俺たちを物珍しそうに、特に男の子はサンディの美しい姿を見つめた。

「俺はユリウス、こっちは娘のウェルサンディ。ここはとてもいい町だった」

「ごめんね、もっと時間があれば一緒に遊べただけど……うちのパパ、外交官なの。またねっ！」

それから軽く手を振って挨拶を済ませると、俺たちは世界の裏側へと潜った。ツウィクの孤児院育ちの俺には彼らが他人には見えなかったから、あえてこうしたのかもしれない。

俺たちは昨日と同じように世界の裏側を歩き、東方の彼方にあるというゲフェン王国を目指して、取り留めのない言葉を交わしながら歩いていった。

・5年目 ゲフェン王国観光記 - 海鮮ヌードルと子ガニの素  
揚げ (後書き)

今回と次回は文字数少なめ、次次回と次次回は多めになります。



東に広がる内海を船なしで越えて、俺たちはついに東方にたどり着いた。

ここはシャンバラから陸路でたどり着ける土地ではあったが、内海を迂回しなければならぬこともあって、大陸中央部で暮らす者には全く縁のない場所だった。

「お待ちしておりました、ユリウス様、ウエルサンディ様。遠路はるばる、ようこそゲフェンへ」

「待たせたな、早速だがそちらの首尾を聞こう」

もちろん領事館なんてものもない。あるのは商館と呼ぶには殺風景な大倉庫だけだ。ゲフェンはシャンバラとの貿易関係こそあったが、強く結びつくにはあまりに遠すぎた。

「上々だな」

「時間だけは十分にございましたので、やれることは全て」

そのため、大倉庫が集合場所になった。搜索隊を担っていたエルフたちは、俺がやってくると次々と集まって来て、誇らしげに胸を張ってくれた。

「それにしてもよくやってくれた。俺の無謀な思い付きに、こんな東方の果てまで付き合ってくれたみんなには、感謝しかない。ありがとう」

「はいっ、長い苦勞がついに報われました!!!」

搜索隊の面々はこちらの倉庫で働く商会の者と連携し、ゲフェン王家とのルートを確保してくれていた。今すぐゲフェン王へのアポを取ってくれることになり、俺とサンディは彼らが手配してくれた宿に落ち着いた。

「何もかもが素敵！ ゲフェンは緑の国なのねっ！」

「木が多いと落ち着くのは、ツイク育ちの俺も同じだよ。しかし、何もかもが不思議な土地だな……」

外交官である俺たちは、相手に舐められないために高級旅館の離れの間泊まることになった。

建物の広さはほどだったが、黒檀がふんだんに使われた調度品や、よく作り込まれた木造の彫り物など、設計者の創意工夫がふんだんにちりばめられていた。

「ねえパパ、遊びに行きましょう！ だってみんなのために、お土産を買わなきゃいけないもの！」

「到着初日だぞ、気が早くないか……？」

「理由なんてなんでもいいのっ、さ、行きましょー！」  
「わかった」

外交官の勲章を懐に隠すと、俺とサンディはゲフェンの城下町に出た。

するとまたもやサンディは人々の注目を集めた。自慢の娘だが、自慢過ぎて将来がますます心配になった……。

「サンディ、世の中は善人ばかりじゃない。シャンバラのみんなはやさしいが、ヒューマンはお前が思っているより悪辣」

「もう、その話は昨日も聞いたわ。似た話なら一昨日もよー！」

「心配なんだ……」

「立場が逆よ、今回はうちがパパのお目付役！　パパこそ、ママを心配させるようなことしちゃダメよ」

「それは……わかつている……」

「わかつてないわ。ママたちはパパが大好きなのっ、だから危ないことしちゃダメッ、わかつた!？」

「……わかつた」

こうやってハッキリと物を言う性質は、グライオフエンに似たのだろうか……。

なぜか俺は娘に説教されながら通りを進んで、サンデイが喜びそうな商店街へと誘った。

「わあっ、飴屋さんだっつて!」

「飴か、お土産にもぴつたりだな」

「お土産？　ああそうねっ、忘れてたわっ、ふふふっ」

店の軒先には色とりどりの飴玉が展示されていた。

気まぐれなサンデイと並んで店に入ると、そこはエルフにとっての天国だった。木造のケースのそれぞれに、赤や青、よく済んだ琥珀色に輝く飴などが敷き詰められていた。

「パパ……大変……」

「どうした、どれが欲しい？」

「うちっ、ここの飴が全部欲しいっ!」

「外交官の娘でも、さすがにそのわがままは通らないだろう」

「じゃあ、買えるだけ買っていていい!？」

「あ、ああ……。帰りに自分が困らない範囲でな……。？」

「ママたちと分けたらこんなのがあつという間よつ、お願いパパも一緒に持つてっ！」

「いつから俺たちは飴の買い付けに来たんだ……。だが、一理ある」

大口の買い物をしたいと店主に話を通すと、試供品をたくさん分けてくれた。特に青く澄んだ飴が不思議な味だった。口の中で転がすと、少しシユワシユワとした。レシピは教えてもらえなかった。

店の者に荷物を持ってもらって宿に戻り、再び外へと出るともう日没前だった。

サンディは東方の町並みに夢中だ。もう少しだけ散歩することになり、俺たちはそこで出会った新しいお土産を買った。

「さあ帰ろう、せつかくの高級なタダ飯を食いつぱされるぞ」

「大変つ、そのことバツチリ忘れてた！ えへへっ、パパにくつついて来て本当によかったっ！」

サンディは両手に風車を抱えて笑っていた。

それは厚手の紙で作られた不思議な風車だ。まるでバラの花のように見えるその風車は、息を吹きかけるとクルリと回り出す。

そんな回る花の姿を、サンディは子供みtainな表情で夢中で眺めていた。

「お土産、もっと買って帰ろうねっ！」

「いや、これ以上は無理だろ……」

「ダメよつ。パパとうちが感じた驚きを、みんなにももっと知って欲しいの！」

俺たちは宿に帰り、物珍しいゲフェン料理に舌鼓を打って、明日から始まる重要な外交任務に備えた。

王国と言っても王の権力は国や地域ごとで異なる。お飾りの王もいれば、その逆もいる。その視点からみれば、ゲフェン王は立派な独裁者だ。つまりは彼さえ説得すれば同盟交渉は成り、失敗すればこじれまくる。

さすがに緊張した。宮廷の者たちの中には、ゲフェン王を恐れる者もちらほらといた。専制政治というのは議会がない分だけ効率的ではあるが、一国を支配者の人徳だけで治められるものではないのだろう。

だから恐れられる必要がある。そう思った。

「サンデイ、失礼がないようにな。この国の王は、あの愉快なファルク王とは全く違う」

「わかつてる。みんなピリピリしてるもの。あ、パパもいつもの軽口はダメよ?」

「ああ、気をつけるよ」

「あ、来たわ……」

まるで式典のように仰々しい前準備が終わり、ようやくゲフェン王が謁見の間に現れた。謁見の間は、赤と黒を基調としたド派手で金のかかった大広間だった。

俺たちは周りに合わせて、両足を折り曲げて床に丸まりながら頭をひれ伏し、王の言葉を待った。

「遙か西方の友人よ、へりくだることはない、面を上げよ」

「は……では、お言葉に甘えまして。私はユリウス・カサエル、砂漠ザイトウオーカエルフの国シャンバラで働く錬金術師です。事実上のリーダーであるシヤムシエルの娘を娶り、国のナンバー2の立場にある者です」

「その話は既に聞いている。しかし、隣の娘は？　もしかそれは、朕への貢ぎ物か？　その方よ、面を上げよ」

相手は独裁者だというのに、俺は一瞬キレかけていた。

「えっと、うちは……じゃなくて、えと……私はウエルサンディ・ゾーナカーナ・テネス。かつて滅びたシャンバラ王国の末裔で、えっと、ユリウスパパの娘です……」

「親子……？　ほう……これは珍しい……」

独裁者はけばけばしい玉座から立ち上がって、俺ではなくサンディの前に膝を突いた。そしてサンディの可憐で美しい容姿に見とれた。続いて視線がこちらに向く。

「似ていないな？」

「エルフというのはそういうものようです、陛下」

「うつむ……これは、なんと美しい……。まだ若いが、もう数年もすれば艶やかな大輪となる」

「えと、光栄です、ありがとうございます、陛下」

「むう、加えてなんて美しい黄金の髪と健康的な肌だろうか。おお、となると母は？　そちの母はもっと美しいのか？」

「もちろんです。ママは世界で一番、美しい人よ。そうメープルママが言っていたもの」

サンディ、そこで複数の妻を持っていることを明かす必要はないだろう……。

と、俺は思ったのだが、それは全くの逆だった。王は俺の肩に大きな手を置き、『わかる！』と言いたそうに笑った。

「ふあはははっ、堅物のようで貴様も好き者よのう……！ うむ、気に入ったぞ！」

「……その、そうですね。全員、他の人に渡したくなって」

「わかるっ！！」

「わ、私もです……」

王は俺を立ち上げらせ、サンディの方にはさらに丁寧に、気のせいでは少しいやらしい笑顔で立ち上げさせた。お堅い言い方であれば好色、身も蓋もない言い方をすれば、ゲフェン王はただのスケベオヤジだった……。

「ところで陛下、そろそろ本題に入ってもよろしいでしょうか」

「ああ、それも聞いている」

「では陛下に貢ぎ物を」

俺がそう伝えると、商会のエルフたちや宮廷の者が、次々と財宝を謁見の間の中央に並べていった。

黄金。宝石。エリクサーにスタミナポーション、コンクル、貴重な緑化アイテムである『南国の風』、ありとあらゆる宝を差し出した。半分は俺とサンディが運んで来た物だった。



「おおお……恐るべし、シャンバラの財力と言ったところか。しかし、この妙にふにふにした物はなんだ？」

「それはエリクサー、服用した者を致命傷から回復させる奇跡の薬です」

「それが本当なら凄まじいな！？ この黄色い薬はなんだ？」

「それはスタミナポーションです」

「お、精力剤か！」

「え、ええ、まあ……そういう使い方も出来ませんが、娘の手前深く踏み込んだ話は」

「朕たちは仲間ではないか、ユリウス・カサエル！ ギンギンになるのだな！？」

「う……つ。は、はい……まあ、一応……」

「大丈夫よ、パパ。仲良しの証拠だもの」

それはなんの話なんだ、サンディ……。

「この種はなんだ？」

「地に蒔くと、たとえ砂漠であろうとも、バナナを含む南国の樹木が生える種です」

「ほう、にわかには信じがたい話だ……。む、それは？」

「私たちの精神的指導者、シラムシエル都市長の書簡です。どうか落ち着かれて一読を……」

書簡を手渡すと独裁者は己の玉座に戻っていった。しかしこの間、彼の家臣たちは鉄の表情で一部始終を見守っていた。やはり恐れられているのだらうと、それだけでわかる。

王は膝をいかにも高慢に組み、片肘を突いて文面を眺めた。

「ふんっ、このシヤムシエルといい、貴殿といい、面白い男たちだ。そして、同盟か」

「はっ。遙か西方の国々からの同盟の誘い。さぞや妙にお思いでしょう」

「当然。説明してみよ」

「その文面にも記載されていますが、我々は転移門を築く技術を持っています。これがあれば、距離や地政学は意味をなさなくなりません」

「ならば聞く。なぜゲフェンにこの話を持ってきた？」

白の棺がこの国にあることは秘密だ。交渉が決裂した場合、俺たちはそれを盗掘して別の国に運ぶ。

「それはゲフェンが東方で最も政情が安定しており、我々の同盟相手に相応しいと、各国が承認したからです。我々は貿易で、莫大な利益を得ることになるでしょう」

「朕がここで断れば、他国にこの話を持って行くと？」

「恐悦ながら、同盟国諸侯は必ずそう動くでしょう」

「あいわかった。ならば金も宝石もいらぬ」

王が膝を打って立ち上がった。真っ直ぐにサンディの前に立ち、可憐な姿を見つめながらこう言った。

「朕にこの娘を寄越せ」

「……わかったわ、王様がお望みなら私はそうする」

怒りに我を忘れそうになった。サンディが一步前に出て、王の足下にひざまずいた。

「ゲフェン王」

「なんだ、ユリウス・カサエル？」

「大きく見えますがその子はまだ5つです。まだ5つの我が子を、人に差し出す親がいるとお思いですか？」

「ほう、朕に逆らうか。あいわかった、10歳に成長するまで待とう」

怒りを押し殺しながら、俺はサンディを立ち上がらせて背中後ろにかばった。

「娘は渡しません、この子は俺たちの宝です。この子を貴方が奪ったと聞けば、シャンバラの民は激昂するでしょう。彼女はウエルサンディ・ゾーナカーナ・テネス。シャンバラ王家の後継者です」  
「パパ……でも、うちが犠牲になれば、世界中のみんなが　えっ？」

途端に、ゲフェン王がやさしいおじさんの顔になった。サンディも俺もそれがあまりに意外で、あっけに取られてしまった……。

それから遅れて気付く。俺たちは試されたのだと……。

「すまん、サンディや。朕はその男が、平気で家族を捨てる男かどうか試したかったのだ。貴殿らは正しく親子。それも信頼のおける人間のようにだ」

「よ、よかった……。うち、みんなと離れ離れになるしかないかと思っただ……」

「ゲフェン王……貴方が恐れられている理由が、嫌でもこれでわかりましたよ……」

王は玉座に戻り、またあの行儀の悪い姿勢で書簡を読み返した。見る限り、かなりの上機嫌だった。独裁者というのは、俺たちがおもうよりもずっと大変なのだろうな……。

「書簡には世紀の天才である貴殿が、どんな願いも叶えるとあるが、これは本当か？」

「はい、私に可能なことならばなんなりと」

「ではその結果を見て同盟の締結を考えよう。……おい、朕の友人たちにイスをお出ししろ」

考えがまとまるまで待つことになるようだ。

玉座の目の前に赤塗りのイスが運ばれ、俺たちはそこに腰掛けて彼の願いを待った。

「甘い菓子は好きか？　しょっぱい方がいいか？」

「え……！？　あ、はい……甘い方が好き、です……」

「そうかそうか　おい」

揚げ団子にまんじゅう、餅と呼ばれる不思議な菓子たちは、緊張に固まっていたうちのサンディをご機嫌に変えていった。

「友人よ、朕は叶わぬ願いを2つ抱えている……貴殿にどうにかできらるうか？」

「それはどういったお悩みでしょうか？」

「うむ、これを見よ……」

もしかして深刻な持病か……？

王はおもむろに靴を脱ぎ、続いて靴下を脱ぎ、玉座から両足を突き出すとうずくまって頭頂部をこちらに向けた。

「あの……もしや、その……それ、水虫、ですか……？」

「うむ、加えてこの薄毛だ……。朕も若い頃はふっさふさで、宮廷の姫君にはキヤーキヤーツ言われたものだが、今はこの始末よ……」

「水虫と、薄毛の治療薬をご希望ということでしょうか……？」

「うむ、頼めるか……？ 髪さえ戻れば、朕も再びあの頃のようなモテモテに戻るはずなのだ」

独裁者の願いがモテモテって矛盾してないか……？

だが水虫の方は酷い症状だ、これはかなり辛いだろうな……。

「そんなことないわ、ハゲは素敵よ。飛び出したおでこが凄くセクシーに見えるものっ」

「おお……、なんといい娘さんだ……。本気で君が欲しくなったよ……」

「ふふっ、お上手ね、王様」  
「ははははは！」

サンディはおじさん好きだった。  
ゲフェン王の言葉、どうも冗談や社交辞令には聞こえなくなってきた……。

王のお抱え薬師の部屋を借りて、俺たちはゲフェン王の願いをかなえるべく調査釜の前に立った。あの頃は本を抱えて移動したが、今の俺は成長した。今回持ってきたのは、お気に入りの1冊だけだった。

「先に水虫の薬を作るか」  
「作れるの……？」

「前に頼まれて1度だけな。材料もたぶん足りるだろう」  
「凄いお部屋なものね。何を探せばいいの？」

薬師の部屋には薬棚が四方を囲み、さらに隣室の倉庫の方はまるで図書館のように棚がそびえていた。独裁者の健康は国の未来そのもの、って感じた。

「ベースハーブと水くみを頼む。他の素材は自分で探す」  
「わかったわ」

「しかしこう棚が多いと探すのも一苦労だな……」  
「うちはなんだか博物館みたいで楽しい」

素材は名前順に棚に格納されているようだ。

しかし大変なことには変わりない。地域によって名前が異なるケースもあるので、苦労することになった。

この部屋の持ち主はさっき怒って出て行ったきりだ。協力なんてしてくれないだろう。

「今回は色々使うのね……」

「いや、右側に寄せた方は、毛生え薬の候補だ」

「ふーん……あつ、見て見てパパツ、これお髭みたい！」

「似合う」

「もーっ、見てから言っつてよーっ！」

「似合うよ」

ようやく目当ての素材が見つかったので、白髭を生やしたサンデイの前に戻った。

材料は『マンドレイク』『竜酒』『キュアハーブ』と触媒である『ネコヒト族の髭』だ。サンデイに手伝ってもらって、1つ1つ順番に混ぜ合わせていった。

「スクルズたち元気かな……。ママたち、パパとうちがなくて寂しがつてないかな……」

「さあな。俺たちに黙って、美味しいものでも食ってるかもしれないぞ」

「あつ、それってあり得る……!」

サンデイの不在を寂しがっているのは、間違いないだろうな……。

「昔、ママたちとこつやつてあちこちの国を回って、王の願いを叶えたものだよ。あの頃が懐かしい……」

「それ、前に聞いたわ! オド王様の魔剣クリスタルガイザーを作ったのよねっ!」

「な、なに……?」

「だからオド王様が大切にしているあの剣よ!」

「あの剣……そんな命名をされていたのか……?」

「あ、でも…… オド王様、別の時はサンダーカイザーって言ったかも……。あ、待って、リヴァイアサンテイルズ、メシアブレード…… だつたかしら……」

「全部聞かなかったことにしておこう……」

最後に大瓶を投げ入れると、水虫の軟膏（１Ｌ）が完成した。作り過ぎた気もするが、まあいいだろう。

「うちはスターダストストリームがお気に入りよ」

「いや、その話はもういいから……」

サンデイと一緒に瓶を取り出して、水瓶の中身を釜へと移した。育毛剤そのものは要望が多かった。だから何度か試行錯誤したことがある。ただその時はあまり本気ではなかったし、大きな予算もかけられなかった。



この世には、薄毛の治療よりも優先するべきものがいくらでもあるからだ。

「毛の薬は作れそう？　うちとしては、つるつるの今の姿も素敵だと思うのだけど……」

「サンディ……頼むから、普通の若い男を好きになってくれ……」

「嫌よ。うちの理想は、アルヴィンスおじさまやファルク王様だもの」

「あの酔っぱらいが親族になったらパパは精神的に物理的にも死ぬから絶対ダメだっ！！」

「でも素敵じゃない、とても男らしいわっ！！」

急に涙が浮かんできて、俺はサンディに背中を向けて密かにそれを拭った。これだけの美貌に成長しながら、なぜこの子はこうなってしまったのだ……。

「パパ？　疲れてるなら少し休んだ方がいいわ」

「大丈夫だ……」

そうこう言い合いながら、釜に魔力をかけて素材を1つ1つ投入していった。ここはやり方を変えて、試作品をありったけ作るう。その中から成功例が見つければそれでいい。

黙々と、黙々と、いつもの日常のように俺は試行錯誤の結果を小瓶に詰め込んでいった。

1つ1つ組み合わせせてゆくと、完成した試作品は16本になった。外で待機している王の女小姓に事情を伝えると、すぐに王宮から16名の薄毛のおじさんが集められた。

「どうやら東方人は我々よりもハゲやすいようだ……。」  
薄毛の治療薬の研究と言ったら、もの一瞬だったと女小姓が言っていた。

「これは試作品です。上手くゆく保証はありません、場合によっては あっ、こらっ?!」  
「もう、みんなおでこが素敵なのに、なんで毛を生やさそうとするのかしら……っ」

人の話も聞かずに彼らは一斉に試作品を自分の頭に塗りたくった。小瓶の底まで爪を立てて、一心不乱にかき集めては、気になる部位にせっせと擦り込んでいた。

期待の笑顔でいっばいで、実験台にしているのが申し訳なくなっ  
た……。

『お、おおおおおーっっ!』

少しすると一斉に歓声が上がリ、被験者たちは互いの頭頂部を見つめ合い、ふさふさをその手で確かめた。

・被験者1、4、11、15

頭皮と呼ぶにはあまりにふわふわな産毛が生えて地肌を覆った。

これは失敗だダメだ、安っぽいヅラに見える……。だが生えればなんでもいいのか、被検者たちは大喜びだった。

・被験者2、3、7、9、16

黒々とした立派な剛毛が生えたが、30〜60秒ほどで散って、大の男が号泣を始めた……。見ているだけで胸が痛む……。後ほど成功品での救済が必要だ。

・被験者5、7、13

この髪型は確か、アフロヘアと呼んだらどうか。効果も強力で比較的良い結果だったが、ストレートに伸びる毛は一つもなかった。これではゲフェンが、アフロヘアの独裁者が支配する国になってしまふ……。

・被験者6、8、12、14

左から順番に、1本、3本、5本、7本だけ生えた。素数……。あるいは数列になったのは偶然だろうか……。ちなみに本人たちとても喜んでいた。

・被験者10

唯一の成功例。バーコード型だった被験者の頭部から、縮れのない健康な黒髪に生えて中年のロン毛男に変えた。彼こそが勝利者だ。歓喜のあまりに彼は踊り回り、人の頬に接吻を押し付けて出て行った。頬には唾液がこびりついて、そこからスルメの臭いがした……。

ともかくこれにて成功だ。俺とサンディは成功レシピの配合で大瓶入りの毛生え薬を作り、再び女小姓にゲフェン王との謁見を取り次いでもらうことになった。

朱塗りの装飾が鮮やかな外廊下を進み、俺たちは女小姓の背中を追って外回廊を歩いていた。ここでは何もかもが儀礼的で、小姓は頭くびを垂れながら両手を左右の着物の袖に入れて、滑るような摺り足で歩いていた。

「だけど残念ね、せっかく素敵なおでこの王様なのに。ふさふさにするなんてもつたいないわ」

「それ以上は言うな。男にはとても大切な問題なんだ」

「わからないわ。絶対、今の姿の方が似合ってるのに……」

「王は若い頃の姿に戻りたいんだろ。俺だって戻れるなら若い頃に戻りたい」

「そんなのダメよっ！ だって、老けたパパもきつと素敵だと思うの！」

「……サンディ、それは返事に困る」

「絶対素敵っ、絶対に素敵よ！」

「はあああ……っっ」

しかし気のせいか、先を歩いている女小姓の肩が震えているようにも見える。笑っているのだろうか。あるいはこれから謁見するゲフェン王に恐怖しているのか。

独裁者とその取り巻きというのは、俺たちが思っているよりも愉快なポジションではないに違いない。

「ここから先は私語をお慎み下さい。……私が、つられて笑ってしまいますので」

「すまん」

「どうもありがとう、小姓さん。よければ後でお話ししましょう」

「お戯れを、小さな女王陛下」

「パパツ、聞いた！？ 女王様だって！」

サンデイは人に壁を作らない。どんな相手も分け隔てなく温かく受け入れる。

見ようによつてはそれは人徳であったり、女王の器にも感じられるのだろう。

「ああ、お前は我が家のお姫様だよ」

「じゃあパパは王様ね！」

小姓さんが困っているのでサンデイを黙らせて、もう目前だった謁見の間へと入った。

今か今かとゲフェン王はあの豪華なイスから身を乗り出して俺たちを待っていた。

「陛下、シャンバラのユリウス様とウエルサ」

「つまらん儀礼はもういいっ！ 出来たのかつ、出来たのだなっ！？」

その一言からするに、この王宮での仰々しい儀礼は王の趣味というわけではなさそうだ。

彼は再び靴を脱ぎだして、また頭頂部と皮のむけた両足をこちらに突き出した。

うん……正直、リアクションに困る……。

「ええ出来たわ。でも王様、そのままでも王様は素敵よ？」

「良い子だ……。ウエルサンディ姫よ、よければ朕の妻にならぬか……？」

「ならば水虫とハゲの治療は諦めるべきですね」

「それは困る！ ははははっ、冗談だ、冗談に決まっているだろう、そう恐い顔をするなっ」

「本当でしょうね……」

「うむ、ウエルサンディ姫は朕のドストライクコースじゃが……致し方あるまい」

「まあ嬉しい！」

ニコニコと笑うサンディと、それに下心ありの目線を向けるスケベオヤジの姿は、父親の白髪を増やさせるのに十分だ……。

俺は大切なサンディを背中後ろに隠し、例の物をお出しするように小姓に依頼した。

「おおっ、ずいぶんと大量に作ってくれたな！」

「大量生産、それが俺の取り柄ですので。左の青い軟膏を足に、右の紫色の薬を小さじ1杯ほど服用して下さい」

「よし、すぐに塗れ！」

女小姓は表情一つ崩すことなく、大瓶を開けて軟膏を手にとった。そしてまさかとは思ったが、小姓さんはおっさんの水虫だらけの足

に軟膏を塗装していった。

背中の中のサンディに流し目を向けると、さすがのサンディもメチャクチャに嫌そうな顔をしていた。

「お、おおっ、おおおーっ、これは、夢か誠かつ!? あれだけジユクジユクと朕を悩ませていた水虫がつ、おおおーっ!!!」  
「す、凄い……」

小姓さんまで王と一緒に感動していた。菌に冒されボロボロとなっていた両足は、今や生まれたての赤子のようだった。

「どうっ、凄いでしょ、うちのパパ!」  
「こらサンディ、素が出ているぞ」

「だってだって、うちの自慢のパパだものっ! どう王様、気に入って下さった?」

「朕は……朕は今、感動している……。不治の病をこうも容易く癒すこの才能……サンディちゃんではなく、今はユリウス殿、貴殿が欲しい!!!」

「ふふっ、パパのせいで振られちゃったわ」  
「どうだっ、家族ごとこのゲフェンに越して来ぬか!?!」

両足の指をワキワキとさせながら言われてもな……。この笑顔を見る限り、同盟交渉は決まったも同然だ。

「残念ですがその予定はありません。ですがそのうち、みんなを連れて観光旅行に来ます」

「それは良い! ぜひ朕のゲフェン王国を楽しんでくれ!」

「陛下も我がシャンバラにどうかお越し下さい。果てのない砂漠と、青く輝くオアシスが美しい素晴らしい土地です。もし転移門が稼働すれば、日帰りで通うことだって出来ますよ」

「それは毛生え薬を試してから判断するでしょう。……薬を寄越せ」

「お待ち下さい、陛下。薬の服用は少し間を置いてからの方が」

「大丈夫だ、朕はユリウス殿を信じている」

「いえそういう問題ではなく、複数の薬を同時に利用すると思わぬ作用が」

「大丈夫だ！ さ、朕に飲ませよ！」

王は大口を開けて小姓の薬を待った。絶対服従の小姓は言われるがままに薬を運び、王は超ご機嫌でそれを飲み干した。

「うむ、念のためもう2杯飲んでおこう」

「ちょ！？ お待ち下さい陛下、その薬は1杯で十分です！」

「朕はユリウス殿を信じておる、大丈夫だ」

「いやっ、信じてたらそういう返事になりませんよ!?!」

人の話を聞かない王は、想定量の3倍の毛生え薬を服用してしまっただけ……。

「むっ、来たっ、来たぞ来たーっ！ 朕の頭皮がつ、死滅した砂漠がつ、今熱く燃え上がって……っ、お、おおおーっ 鏡っ、鏡を持っていっ！」

みすばらしかった王の頭部に、太く健康で黒々とした剛毛がズモ



モモと生えてゆく。強い髪はその1本1本が天を穿つ逆毛だ。やがて成長が止まると、そこには逆さにしたホウキみたいな頭をしたゲフェン王がいた。

「男らしいわ、思っていたよりずっと素敵！」

「こ、この……針金のような強い髪！ これだっ、これが朕の望んでいたものだ！」

いや、いくらなんでも強過ぎやしませんかね……。

これではふさふさというより、バリツバリツというか……強い。おまけに白髪1つない。

「ありがとう、ありがとう、ユリウス！ いや、朕の友よ！」

「ご満足いただけただけで何よりです。しかし本当にこれは凄いですね……」

俺ももう少し減ってきたら使ってみようかな……。

白髪が消える効果も超魅力的だ。

「パパはそのままの方がいいわ。おでこが広がったパパもきつとセクシーよ」

「父親にセクシー要素は必要ないだろう……」

「お願いパパ、1度だけでいいからハゲてっ」

「絶対に嫌だ……」

王は鏡に映る自分自身に見とれているようだ。

幸福の絶頂。そう表現しても大げさでもなんでもない幸福に満ち満ちた姿で、鏡に古臭いポーズを向けてキメ顔を作っていた。

「ではあらためまして陛下、同盟の件ですが……」  
「うむ、その話ならば既に答えは出ている。そちらの連合と同盟を  
結ぼう」

鏡を見つめながら、王は声を低く重々しくして答えた。  
表情は引き締めていたが、本当に幸せそうだ。

「その言葉、国に持ち帰ってもよろしいのですね？」  
「諸王によりしく伝えてくれ。実はな、朕は最初からこの誘いに応  
じるつもりだった」

「ふふ、そうだと思ったわ。王様は人が悪いわね」

「朕が今日まで出会った中で、最も素晴らしき貢ぎ物だった。エル  
フの長老シャムシエル殿に、朕が感謝していたと伝えるがよい」

「かしこまりました。では細かな条件や段取りをご説明します」

転移門の設置と、その中核である白の棺の危険性について説明し  
た。

「貴殿こそ食べぬ男だ。朕が交渉に応じなければ、その棺とやらを  
盗掘してゆくつもりだったな？」

「ええ。信用出来ない相手に、こちらへの転移手段を渡すのは無謀  
でしょう」

危険であるからこそ、転移門は要塞化する。そのための装備と予  
算はこちらで出す。

転移門を使った貿易は、相手政府に必ず話を通すこと。同盟国議  
会への参加要請。超上機嫌な王は、ほいほいなんでも二つ返事でこ

こちらの条件を聞いてくれた。

「ニヤバクラとなっ!? それは興味深い……」

「いや……なんでどいつもこいつもニヤバクラに釣られるんだ……」

「だってネコヒトさんたち楽しい人たちだもの! うちもご一緒するわっ、陛下!」

「ダメだ……」

「ならメーブルママも一緒に連れて行くわ」

「それはパパたちが胃潰瘍で死にかねん……。頼むからメーブルだけは止めてくれ……」

「あのねっあのねっ、ニヤバクラではねっ、ネコヒトさんたちがゴロニヤーンツ　って言うってくれるのよっ　あら……っ?」

ところがふいにサンデイの顔に疑問が浮かんだ。彼女の目線の先にはゲフェン王がおり、彼は　あああああーっ?!!

・5年目 ゲフェン王国外交記 - 陛下、毛生え薬でございます  
す - (後書き)

これから書籍版の改稿に入ります。

どうか連載を維持する予定ですが、場合によっては1日遅れたりするかもしれません。

がんばります。どうか予約が始まりましたら、書籍版も応援して下さい。

「買って損のなかった本」を目指して、最高の書籍版を作り上げます。

「た、大変っ!!」

「おおっ、伸びておるっ、まだまだ伸びておるなあっ、わははははっつっ!!」

「笑い事じゃないですよ、陛下っ!?!」

「ユリウス殿の言いつけを破って、3杯も飲んだからであろうな…

…」

「パパッ、王様の毛を斬って！ 毛の海に埋もれてゆくわ！」

玉座が黒々とした髪で埋もれていた。それは加速度的に成長速度を上げてゆき、謁見の間は怪異と言ってもいいこの非常事態に大騒ぎだった。

「やむを得ないっ、陛下っ、どうかご無礼を！」

ゲフェン王の身体は既に髪の毛が重心となってしまうていた。彼はあふれる剛毛に引きずり込まれながらも、なぜか笑っていた……。

俺はその髪の毛の周囲にエルフの聖剣を何度も何度も振り下ろし、髪の毛と王を分離しようと奮闘した。

ダメだ……後頭部の毛にまで手が回らない！ このままでは俺も毛に飲み込まれる！

「いいのだ、ユリウス殿。この不肖八ゲ、自分の毛に飲まれて死ぬるなら本望だ……」

「何アホなこと言ってるんですかつ、死なれたら外交問題どころじ

やないですってっ、絶対に死なせませんよっ!!」

王は怒らなかつた。穏やかでやさしい顔で、黒々とした髪の手で剣を振り回す俺に微笑んでいた。

こうなつたら多少のリスクを承知で、王を世界の裏側に引きずり込むしかない……!

「嬉しく思う。朕を畏れる者ばかりのこの宮殿で、そこまで朕を想つてくれるのは貴殿だけだ」

「クソッ、やむを得ない! こうなつたらゲフェン王、俺と一緒に転移 えっ、ええええーっ?!」

ところが、だ……。非常事態は突然に終わった……。

毛髪の豪雪とでも言えるものに、小姓たちがことごとく飲み込まれて姿を消している中、増毛が止まった……。

後に残ったのは、ツントルテンのスキンヘッドのおっさんだ……。

ゲフェン王は毛髪全てを使い切ってしまったていた。

交渉失敗……いや下手すれば戦争かな、これ……。

「お、おお……これは、お、おう……うむ、うむうむ……はっはっはっはっ……」

王は穏やかだった。彼を剛毛の海から助け起こし、聖剣を腰に戻した。

何もかもが毛に埋もれてしまったのか、辺りを見回してもサンデーの姿も見あたらなかった。

「申し訳ありません、陛下。薬が強すぎたようで……」

「よい」

「怒っていないのですか？」

「朕は悟った……」

「それは、何をでしょう……？」

「これでいい……これでいいのだ……」

王は毛の海にあぐらをかき、両手を組んで一人で納得していた。

「友よ、貴殿も考えたことはないか……？ 薄毛で悩むくらいなら、最初から髪なんて生えてこなければよかったと……。朕は何度そう思ったことか……」

「いや、俺はまだ、ちよつとそこまでの悟りの境地には至っていないというか……そうなんですな？」

確かに全ての毛が一掃されたことで見苦しさはなくなった。というよりも、よく見るとこれは男らしい。

毛の海の中に鏡を見つけた俺は、王にそれを差し出した。

「なあ友よ、朕……イケてないか？」

「イケてます」

「そう思うか!？」

「男らしいと思います。それに前より威厳が増したかと」

王は鏡を受け取らなかった。人に鏡を持たせることが彼にとっての当然なのだろう……。

「もうビックリしたわ！ わっ、王様その頭っ!？」

「おお、ウエルサンディ姫！ どうだ、新しい朕はっ！？」

頼むから余計なこと言うなよと、俺はサンディに鋭い目を向けずにはいられなかった。

「素敵！！ さっきのもさもさの剛毛より、そっちの方が断然素敵よ、王様！！」

よっぽど嬉しかったのか、鼻息を立てて王が笑った。

「友よ、今日は多くのことを学ばせてもらったよ……。ところで娘をくれんか？」

「しまいにはキレますよ、陛下。絶対にサンディは渡しません」

こちらが本気で独裁者を睨むと、彼はますます機嫌をよくしてしまった。なんとなくこの王のことがわかってきた。彼は独裁者だ。だが独裁者であることに少し疲れている。

力が強すぎて人に畏れられるがゆえに、対等の関係にある友人に飢えているのだろう。

「ははははっ、魅力的な娘さんでついなあ！ しかしこれで水虫も治ったっ、毛への未練も断ち切った！ すぐに書簡を書き上げよう！」

「お手伝いいたします。しかしその前に ここを掃除しないとダメですね」

こうして俺たちは遙か東方の地ゲフェン王国にて、この地との同盟の締結を成立させた。遙か東方と同盟諸国が1つに繋がる。さらなる飛躍が既に約束されたようなものだった。



同盟締結の血判を貰い、残りの雑務を商会のエルフたちに任せると、俺たちはあの高級旅館にもう1泊だけした。

ところが翌日の朝になってさあ帰国するぞサンデイを探すと、宿に彼女の姿がない……。

まさかかわい過ぎるうちの娘によからぬ感情を抱いて、誰かが誘拐したのではないかと不安になって、俺は宿を取り出していった。

「サン、デイ……？」

「ごめんなさい、パパ……。でも、これならママたちも凄く喜ぶと思うの！」

あきれ果てて言葉も出なかった。

そこにあつたのは1台の台車で、中にはぎっしりとお土産が詰まっていた。

あめ玉、風車、竹細工の玩具、こちらの酒に、朕重される乾物、餅と呼ばれるほんのり甘い菓子や、シルク製のこちらの衣服まである……。

「お前、これ、全部……持って帰る気なのか……？」

「2人で押して帰りましょ。きつと上手くいくと思うの。あとねあとねっ、弟が欲しいってゲフェン王に言ったらねっ、これをくれたのっ！」

サンデイが笑顔で取り出したガラス瓶には、信じがたいことに蛇が1匹浸かっていた……。

「え……？」

「パパに飲ませると弟が生まれるんだって！」

「誰が飲むかこんなものっ！！」

「お願いパパッ、弟のために飲んで！」

「が……がんばる……。がんばるから、これを飲むのだけは勘弁してくれ、サンデイ……」

「嫌よっ、お願いパパ！　がんばって！」

こんなの持って帰ったら確実に飲まされるはめになる……。

だがこれはサンデイからのプレゼントであり、ゲフェン王からの賜り物だ。俺は震えながら台車を握り、サンデイと共に長い帰路へとついた……。

・

「お願い、パパ……」

「いいぞ、あの子たちと遊んでこい……。少なくともあいつらはおじさんではない……」

帰り道、俺たちはあの港町にまた一泊した。

俺たちが町へと現れると再びあの子供たちが現れて、水上コテージまで隠れながら追いかけて来た。

「ありがと、パパ！　いつてきまーす！」  
「悪ガキどもによるしくな」

コテージからサンディを見送り、一緒になつて街へと駆けてゆく姿を目で追つた。

なんだか不思議な感覚だ。やはり引き留めたいような不安を覚えながらも、良い思い出を残してほしいと思つた。

「弟か……」

ラベルを確かめると、そこにはママシ酒とあつた。

・  
シャンバラに帰国し、それから2、3日が過ぎた頃、師匠が西方から帰つて来た。

ここから先は技術屋の仕事だ。パーツを持たせた技術者を東西に派遣して、転移門の完成を待った。うち東方はマリウスが遠征することになった。

これには完成に2ヶ月を労することになった。

無事に転移門が開通すると、世界はまた一皮様変わりした。

特に東西の素材が入手しやすくなり、シャンバラへの供給量が増えた。

転移門の動力である魔力を持つ者は、さらに世界にとって貴重な存在となり、多少の魔力さえ持つていればその者は仕事にあぶれることがなくなつた。

それでもシャンバラのスラム街は消えなかったが、あの土地までもが活気にあふれることになった。

「やり過ぎたかな……」

「悩んでも仕方がない。時代の流れに人間ごときが逆らえると思っ  
ていたら、それは思い上がりだよ、ユリウス」

「お帰り、マリウス」

「ただいま。ああほら、これはゲフェン王からのプレゼントだ。開  
けてみる、俺も中身が知りたい」

「嫌な予感しかしないんだが……？」

「早く開ける。……うっ、な、なんだ、これっ!？」

それも酒だった。ラベルにはこうあった。鹿鞭酒。

丸い何かが2つ、長細い肉が1つ、酒に浸かっていた……。それ  
以上の詳しい説明は、その……控えたい……。

「もうやだ、あの王……」

「俺はこんな物の運び屋にされたのか……。最低だ……」

東方とこちらの激しいカルチャーギャップに、俺たちはドン引き  
だった……。

・5年目 ゲフェン王国外交記 - 陛下、いろはにほへと  
・  
(後書き)

頭頂部を確認しなければハゲたことにはならないのです……。

・5年目 誰もが羨むエルフの特質

その日、一仕事終えた俺は釣り竿も持たずにオアシスの棧橋でうたた寝していた。

ぴちゃりと何か水音がして、寝ぼけていた俺は魚がかかったのかと飛び起きた。

「おい……。服着ろよ、一児の母……」

「え、なして……?」

「なして、じゃねーよ……」

「そう言いつつも、ユリウスは熱いまなざしを未成熟バディに向けずにはいらなかったのだった……。正直、そそる……。このまま服を脱ぎ、飛びかかって組んず解れつしてしまおうか……。ユリウスは、生唾を飲み干した……」

正体は魚ではなくメープルだった。さんさんと降り注ぐ灼熱の日差しの下で、美しい銀髪を湖水に浮かばせながら気持ちよさそうに背泳ぎをしていた。

「ホント、教育に悪い母親だな、お前……」

「品性下劣で、売ってます……。ツッコミ、まだ……? あて……」

わざわざ足下までおでこを運んできたメープルに、足では可哀想なので手で軽く小突きを入れた。

「頼むから水着を着ろ……」

「嬉しいくせに……」

「ああ、認める。だから服を着てくれ、魅力的過ぎる……」

「じゃ、今夜、行つていい……?」

「わ……わかった……待つてる……」

「ちよろい。魚の前のネコヒト族より、ちよろい……」

「いちいち煽るな……。あ……」

満足したのかメープルは湖の奥に行つてしまった。

遅れて自分の心臓が激しく高鳴り、彼女に魅了されていたことにも気付くことになった。

「もう少しがんばるか」

サンデイの弟や妹が産まれたときに、もっとシャンバラが緑であふれていれば、その子の幼少期はより豊かなものになるだろう。俺は棧橋から立ち上がり、工房へと引き返した。

「残念、ママより大きくなりたかったのに……」

「そ、そんなことないわ。小さい方があたしはかわいいと思うわ……」

……

戻ると家の方からサンデイとシエラハの声が聞こえた。

何かあったのだろうかと家の方に抜けると、そこには向かい合つて手を頭の上に乗せている2人がいた。

「何やってるんだ……?」

「あ、パパ。あのね、ここ3ヶ月、うち、背が全然伸びてないの……」

……」  
「成長の壁にぶつかつたみたい。でもサンディ、ここからゆっくり、ゆ〜っくり大きくなると思うわ」

「それってどれくらい……？」

「100年くらいかしら……。100年堪えたら20cm背が伸びたという話もあるわ」

いや、それは成長が緩やかにもほどがあるだろう……。

「つまり、メープルママやウルドにも可能性があるってこと？」

「え、ええ……。っ、たぶん……」

シエラハは遠くに目をそらした。長身になつたメープルなんてとても想像が付かない。可能性があつたとして、俺が拝むこともないだろう。

「胸は？」

「えっ!？」

「胸も大きくなるんだよねっ!？」

「え、あの……。それは……。ユリウスはどう思う……？」

「な、何っ、その話を俺に振るのか!？」

「どうなのっ、ママのおっぱい昔より大きくなってる!？」

「答えられるかそんなもん……」

大きくなつたと思う。シエラハは少し太つたと思ひこんでいるが、それは単に大きくなつただけだと思う。……サンディの前で言えるはずもなかったが。



「話は聞かせてもらったのじゃ！ 父っ、後生じゃっ、乳揉んでくれえーっっ！！」

「帰るなり何言ってるんだよ、お前は……っ！？ ただいまを先に言え……っ」

そこにスクールズが帰って来た。いつも通りの勢い任せの軽くツッコミを入れると、メーブルみたいに笑うのだからますます困ったやつだった。

「ワシも成長が止まってしまったのじゃ……。せめて乳だけでも……そう願って、何が悪いのじゃ……」

「いや、全部かな」

「ずるいのじゃーっ、ワシもシエラ八母みたいになりたいのじゃーっ！！ 揉めっ、父！！」

「揉むか、このバカ娘っ！」

「残酷じゃ！ 残酷なまでに緩やかな成長にワシらは絶望せずにおられんのじゃーっ！」

スクールズはだいたい17、サンデイは18歳ほどで成長を止めた。どちらももう大人も同然の容姿に育ち、それが嬉しいようで悲しいような複雑な気分だ。

「そうだわ、パパ！ 今からみんな水浴びしましょ！」

「たまには父も一緒に泳ぐのじゃ！」

ただ大きくなってはまだまだ心はお子様だった。

シエラ八は子供たちの思い付きに身体を覆い隠して恥じらい、そ

んな彼女の姿を俺はいつもの癖で見つめてしまっていた。

「たまにはいいかもな……」

「えっ、ユ、ユリウス……ッ?!」

「水着を着ていいなら付き合おう」

「やったーっ、今日のパパ乗りいいっ!」

「ワシのナイスバディを父に見せつけてやるのじゃ! いったもシエラ八母にばっか見とれて、ずるいのじゃーっ!」

その日の残りの仕事はサボった。

オアシスで踊り回るシエラ八と子供たちの姿は、まるで塵気楼のようにはなく、美しいがゆえに非現実的に見えた。

寿命の概念を超越し、いつまでも若々しく在れるその姿は誰もが羨むエルフの特質だった。

・5年目 誰もが羨むエルフの特質（後書き）

ストック尽きました。次回、更新遅れるかもしれませんが。  
改稿作業、なかなか始まりません。書籍の発売はもう少し先になります。

午前の仕事が一段落したので工房から少し離れていると、ちょうどいいタイミングでエルフの少年が搬出にやって来ていた。

「あ、ユリウス様っ、いつもお疲れさまです！」

「ああ、もう来ていたのか。午前の分はこれで終わりだ、持って行ってくれるか？」

彼はいつだって愛想がいい。今日だって明るい笑顔を振りまいて、ポーション入りの木箱やエリクサーの詰まった大瓶をラクダの前に運んでいった。

「あの、もしよろしかったらですけど……肩でもお揉みしましょうか……？」

「肩……？」

「最近、とてもお疲れに見えます。僕なんかでよろしかったら、どこでも……お揉み、しますよ……？」

「……じゃ、頼む」

彼について知るいい機会かと思い、窓際にイスを運んでそこに腰掛けた。彼はすぐに俺の肩に触れて、慣れた手付きでこわばった筋肉をほぐしていつてくれた。

「仕事、遅れて大丈夫か……？」

「平気です。ユリウス様のおかげで、いつもゆとりがありますし……。それに、めでたく先月、僕も親方に昇進出来ました！」

「おめでとじ」

「ありがとうございます！」

後ろに振り返って彼に祝福をした。彼は俺なんかには褒められてそんなに嬉しいのか、照れくさそうに笑って夜転んでいた。

彼とはもうかれこれ、6年ほど付き合いになるのだろうか？ もう一度振り返ってその顔をのぞいても、当時と何も変わらない若々しさだった。

彼は砂漠エルフらしい褐色の肌に、線の細い身体、黒い髪をしている。

「あ、あの……っ、何か僕に、ご用件でも……ありますか……？」

「ある」

「な、なんでしよう……っ！？」

「前々からずっと、お前のことが気になっていたんだが……」

「えっ、ぼ、僕をっ?! ダ……ダメですっ、ユリウス様には奥様たちや、サンディちゃんが……っ」

「あの頃と全く姿が変わっていない。いったい、何歳なんだ……？」

聞こえ聞こえと思っていたのだが、いつも忙しそうなのでなかなか機会がなかった。

俺が年齢を尋ねると、彼はだいぶ困ったように硬い苦笑いを浮かべた。

「え、えっと、それは、その……。き、聞いてしまいますか……？」  
「知りたい。この前、サンディのやつも成長が止まってみたくてな、

好奇心を覚えた。教えてくれ、ラウリイ」

「あ……。僕の名前、覚えていてくれたんですね……。っ、嬉しい！」  
名前を最近ようやく覚えたとは言えない。彼はつきつきと肩を揺するほどに嬉しそうだった。

「それで年齢は？」

「じ、実は……。僕……。あの、聞いても引かないで下さいね……。？」

「大丈夫、俺たちの関係は変わらない。ただラウリイのことをもう少し知りたくなっただけだ」

「そうですか。で、では……。じ、実は、僕……。よ……。43歳なんですっっ！！」

ラウリイには悪いが俺は固まった。せいぜい23くらいかと予想していたのに、俺よりもずっと年上の大先輩だった。

「マジか……。？」

「はい……。だから僕、ウルドちゃんの気持ちがよくわかるんです……。エルフの個体差は残酷過ぎるんです！！」

「すまん、ラウリイさん……」

「さんは止めて下さいっ！ ユリウス様におじさんだと思われたくないんですっ、僕……。っ！」

「わかった、歳のこと忘れよう。どっちにしろ、かわいらしいその外見からはそうは見えない」

そう返すと、ラウリイは嬉し恥ずかしそうにはにかんだ。

それから俺はもう少しのマッサージを彼にお願いして、その気持ちよさに負けて少しのうたた寝をした。

「あ……た、大変！ ユリウス様、僕もう行きますねっ！」  
「ん、あ、ああ……。けどそんなに急いでどうした……？」

「雨ですっ、雨！ 空にあんなに大きな雨雲がっ！」

言われて工房の外に出ると、西の空の彼方に真っ黒な暗雲が渦巻いていた。あんなに巨大な雨雲は、このシャンバラでは1度だって見たことがなかった。

「どこに運べばいい？」

「え……っ」

「肩を揉んでくれたお礼に、荷物を目的地に運んでおいてやる」

「えっ、いや、そういうわけには……」

「大雨で品物が損壊したら、そのしわ寄せがどこに行くかなんて分かり切っているだろ」

「あ……それもそうですな……。では、バザーオアシスの6番倉庫に、運んでもらえますか……？」

「喜んで。荷台を取ってくるから、積載を手伝ってくれ」

「は、はいっ！」

ゲフェン土産の東方式の荷車は、砂漠の国シャンバラでは使い物にならなかつた。だが世界の裏側では例外だ。

俺は彼と一緒に荷物を移し、荷車ごと世界の裏側に潜り込んで指定の6番倉庫へと転移した。

「ありやあ、ユリウス様っ?! ラウリイ親方はどうしたんです!」

「天气が崩れそうなので俺が代わりにな。まさか、彼が年上だとは思わなかった……」

「歳がなんだって言うんですか! かわいけりやなんだっていいじゃないですかっ! はああ……っ、ラウリイ親方、かわいい……」

「そ……そうか? とにかく、雨が振る前に済まさないか……?」

「雨……? げええっ!? た、大変だっ、ヤバイぞお前らっ、雨だ雨っ、こりやどえらい雨が降ってくんぞーっ!!」

彼らは気付いていなかったらしい。

ともかく商館に品物を渡し、ものついでにギルドに寄ることにした。

「あらん……」

「やっと顔を出してくれましたね、フッフ……」

あの日、ツワイクからマイノリティたちの移民を受け入れて以来、冒険者ギルドはさらにその濃さを増していた。

腰をくねらせる屈強なオカマの受付嬢に、クールタイプが新たに加わった。

よって俺は、極力ここには立ち寄るまいとずっと心に決めていし、事実そう努めていた……。

「あらやだ、雨でも降るんじゃないの、オッホッホッ」

「降るぞ。外を見てみる」



「なんですって……？ おっ、これはまた大きい……」

「あらホントッ、オホホホッ、大きいわねえ……」

窓辺に寄ってみせると、カーマスは俺の尻を、クールタイプの方は俺の手の甲をスリスリと撫で回してきた。やな挨拶だった……。

「何かうちに運ぶものがあるなら代わりに俺が運ぶぞ」

「あらん、気が利くわね」

「ええ、昔よりもずっと包容力が増して素敵ですね……」

また手の甲と尻を撫で回された……。

こいつらはやたらにテクニシャンだから困る……。

「フフ……」

「ウフフフ……」

「で、何を運べばいいんだ……？」

「では、素材の納品はこちらでやります。その代わりに、東西のキヤンプ地に物資を運んでいただけますか？ 迷宮に向かった冒険者たちが気にかかります」

「そうっ、アタシもそう言おうかと思ってたのよぉ。オホホホッ、迷宮ごと中の人間も水に沈んじやったりしてねえ」

「それ、笑えねーっての……」

これは俺たちがシャンバラの緑化を進めていった代償だろうか。あるいは2度の迷いの砂漠の消滅が、降雨量に大小の影響を及ぼしたのか。

ただ1つ確かなのは、冒険者たちががんばってくれるからこそ、

俺は工房で自分の仕事だけに集中出来るということだ。

「場所を教えてくれ、一仕事済ませてくる」

「恩に着るわ、ユリウスちゃん！」

「フフ、頼もしさにキュンキュンしてしまいますね……」

「んもうっ、それはアタシのセリフよおっ　ユリウスちゃんっ、素敵っ！！」

「冗談はもういいから、支援の支度を急がせてくれ……」

支援物資は食料がメインで、万能建材コンクルや毛布、酒類がそこに加えられた。俺はそれを東西のキャンプ地に2回ずつ運び、冒険者たちやギルドの人間に日頃の感謝の言葉を添えた。

土砂降りの雨がこのシャンバラを包み込み、砂漠の地下に飲み込まれていった。砂岩で作られた建物は水に弱く、あちこちで雨漏りが発生しているとの話も聞いた。砂漠の国シャンバラは雨にめっぽう弱かった。

・ 5年目 砂漠の雨 ・ 永遠の少年 ・ (後書き)

更新、通知が行ってしまった方へ。

別の作品の更新をこっちに投稿していました。ごめんなさい。

「パパ、お帰り！」

「サンデイ……？」

仕事を終えてギルドに戻ると、サンデイが待ち構えていた。

「ふふふつ、あのねつ、今カーマスさんたちにおじ様たちのたぶらかし方を教わっていたの！」

「あらつ、ダメよサンデイちゃんっ!？」

「私たちがユリウスさんに、マジギレされてしまいます」

もちろん俺は『何を教えたんだデメエら』と、マジギレ気味にヤツらを睨んだ。

「お話とつても面白かった！ 今度アルヴィンスおじさまに試させてもらっわ！」

「サンデイ、自分の師匠を試すな……」

帰りはサンデイと一緒に手を繋いで帰った。

師匠のことは信じているが……この母親似の美しい笑顔を見ているとわからなくなる。

「パパ、うちはもう大人よ？」

「違う、お前はまだ5つだ」

俺たちは玄関をくぐらずに、直接家の暖炉の目の前に転移して身体を温めた。

「キヤツ?! あ、しまつ……。帰ってきたのなら帰ってきたと言えっ!」

「ああすまん、ただいまの言葉を忘れていたな」

「ふふふつ、ただいま、グラフィママツ」

「玄関を転移魔法で通り抜けるのは禁止だって決めただろ……。おかえり、サンデイ」

一応、そういう取り決めはあった。

玄関をくぐらずに帰宅出来てしまう俺たちは、家人にとってはなかなか心臓に悪い存在だった。

騒ぎに気付いてシエラハは厨房から、メープルは2階から寝癖を頭に付けたまま下りてきて、誰もが口々に突然のこの雨のことを話題に語り出した。

ガラス窓からのぞく外の世界はまだ昼なのに日没のように薄暗く、シトシトと鳴り響く雨たちが、オアシスの水面に幾重もの波紋を描いていた。

「大変じゃっ大変じゃっ、どえらいこっちゃんなのじゃっ!」

「待ってよお、私だけじゃ、重いよお……っ」

メープルが入れてくれた甘ったるい茶をすすりながら、そういえば食べていなかった昼食をシエラハに温めなおしてもらっている

スクルズが工房の方から飛び込んで来た。ウルドも一緒に、彼女は大きな何かを抱えていた。

「どうしたの？ あーっ、それっ！ パパたちが大事にしてた本じゃないっ！」

それはあの白紙の書だった。このリアクションからして、スクルズは中の記述を読んでしまったのだろう。

グラフは厳しい面持ちでこちらに目を向け、へそ曲がりのメープルはわざとらしいあくびを上げてから、猫みたいにしなやかな動きで姉への密告に向かった。

「重いよお……2人とも手伝ってってばー……っ」

居間のテーブルに白紙の書が3人がかりで運ばれた。スクルズは人に運ばせておいて真ん中に陣取って、俺たちに見せつけるように件のページを開いた。

「大発見じゃ、父！ このお宝をゲットすれば、父とジイジの夢がきつと早まるのじゃっ！」

「ふう、ふう……っ。でも、スクルズちゃん、この本、棚の裏に隠されていたような……」

「ああーっ、何これっ、面白そうっ！！ うち、パパと一緒にこの迷宮に行ってみたいっ！！」

グラフと俺は頭を抱え、厨房から戻って来たシエラハも難しい顔をしていた。

ウルドはおとなしくて聞き分けがいいが、サンディとスクルズはそうじゃない。特に最近のサンディは行動力に満ち満ちていた。

「ダメだ」

「そうよ、ダメよ！ 絶対ダメッ！」

「ま、今回ばっかは私も反対……」

「考えてもみてくれ、ボクたちがそんなわがママを許すわけないだろっ！」

繰り返す、この2人は強情だ。親がダメと言って素直に聞くほどおとなしくも聞き分けもよくなかった。

「嫌じゃあーっ！！ 絶対行くっ、絶対行くっ、絶対行くのじゃーっっ！！」

「ふふーんっ、パパママがダメって言っても関係ないわ。うちら3人でこっさり行くものっ」

「……え？ えーっ、ええーっ、わ、私もっ？！ あ、危ないよお……っ！？」

「そーじゃそーじゃっ、ワシらを止められると思うなよーっ！？」

どうすりゃいい……。

頭ごなしに説教したところで、この2人が人の話を聞くか……？

親子で大ゲンカを始めれば、それはドロドロでギスギスの日々の始まりだ。

出来れば何か他に、上手い説得方法はないものか……。

「あれ……？ みんな、ちょいちょい……これ、ここ……。注目」  
「あら、どうしたのメーブル？ あら……っ？」

メーブルが何かに気付いたようだ。彼女の指先を追いかけて、俺

たちは白紙の書をのぞき込んだ。そこにはこうあった。

・地母神の神酒

・土の迷宮、地下100階

・入場制限

ユリウス・カサエルと娘たち、その妻1名のみ入場可能

・アンプロシア

・草の迷宮、地下110階

・入場制限

ユリウス・カサエルと娘たち、その妻1名のみ入場可能

・氷竜の永久晶

・氷の迷宮、地下130階

・入場制限

ユリウス・カサエルと娘たち、その妻1名のみ入場可能

なぜかはわからないが、入場制限が緩和されていた。以前見たときは、俺と子供たちだけという条件だったはずだ。

「ボクの記憶違いか……？　ボクたちが入れるとは、書いてなかったよね……？」

「確かにユリウスと子供たちしか入れないってあったわ！　なんなのよ、もうっ！」



俺が口をつぐんで深く思慮をすると、サンディとスクルズが期待の目を向けて来た。いや、俺に母親たちの説得を期待するのは間違いだと思うぞ……。

「この、アンブロシアという素材、気になって調べてみたところ錬金術の本に詳しい記述があった。桁近いの生命の力を持った不思議の果実らしい」

欲しいかどうかで言えば、喉から手が出るほどに欲しい……。アンブロシアを使ったレシピが、どんな夢をシャンバラに生み出すか気になってたまらない。

「ん……私はパス。おすすめは、姉さんかな……」

「ちょ、ちょっと待ってっ、あたしたちを行かせるつもりなのっ！？」

「うん……悔しいけどボクは弓使いだし、危険を考えれば、それが確実だろうね……」

「シエラハならオークタイプの体当たりも、片手で跳ね返せるしな」

「そ、そんなわけないでしょーっ！？ もっつ、あたしのことをなんだと思ってるのよっ！？」

「えと、ごめん……余裕だと思う……。むしろ、小指で……？」

子供たちは半信半疑だったが、シエラハの前衛としての屈強さを俺たちは知っていた。小指一本はさすがに言い過ぎだが、まあ……可能性はある。

「ねえ、ママ……？ ママってそんなに強かったの……？」

「待って、待ってよみんなっ、わ、私もいくのっ！？」

「当然じゃ！　ワシらはカサエル3姉妹、3人揃って一人前じゃ！」

白紙の書の意図はわからないが、まだだ**いぶ**迷うところではあるが、条件が魅力的だ。

心変わりをした俺たちはシエラハ・ゾーナカーナ・テネスという最強の前衛を盾にして、件の迷宮を下ってみることにした。

雨が上がったのは翌日の午前だった。シャンバラ史上例のないこの長い雨は、砂岩の建物を浸食し、オアシスを増水させ、砂漠を踏破不能の泥沼に変えた。

あの時カマカマコンビが機転を利かせて、キャンプに物資を運んでおいて正解だった。

その日は復旧活動のために、貴重な大地の結晶を消費して万能建築素材コンクルを作り続けた。

よって実際に迷宮探索に動けたのは、翌日の昼前のことだった。その頃には砂漠の水も抜け、オアシスの水位も正常まで落ち着いていた。

俺たちは砂漠の一角を訪れ、その地下に眠る草の迷宮の攻略を開始した。

迷宮の入り口は淡い色合いの若草で覆われており、内部もまた壁から床、天井まで全てが何かしらの草か苔で覆われていた。

「お、おおおお……」

「わあああ……っ」

「楽しそうっ、わがまま言ってみてよかったあーっ！」

子供たちは未知なる世界に魅了されていた。臆病なウルドまで不思議の世界に夢中になり、現れた植物系モンスターの姿に震え上がった。

半亜人、半植物のウッドオークに歩く食虫植物、うねる触手の塊

みたいな連中たちだった。

「え……っ?」

「にゃ、にゃんじゃそりゃああーっ?!!」

「あ、あれ……もしかして、もう終わり……?」

全部シエラハがぶちのめした。触手は長剣の乱舞にみじん切りにされ、真空波を伴う音速の斬撃が中距離から巨大食虫植物をバラバラにした。ウッドオークは張り手で吹き飛ばされただけで生命力を失った。

「ふふふっ、ごめんなさいね、ユリウス。ちょっと張り切り過ぎちゃったみたい」

子供たちは母親のあまりの強さにドン引きした。

知らなかったようだからあえて言おう。シエラハという女性は美しくてやさしいだけでなく、とんでもなく強いのだ。

「いいさ、後ろから見ているだけというのも悪くない」

「ママって……えっ、強すぎない……?」

「凄……シエラハお母さん、かっこいい……」

「そ、そうかしら……」

「ワシもシエラハみたいに、強くてやさしい女になりたいのじゃ!」

「カッコイイツ、メチャメチャカッコいいよっ、ママッ!」

そんなわけで、しばらくはシエラハや子供たちに華を譲ってやった。

どうやらこのダンジョンは1フロア1エネミーグループのようだ。構造は一本道で、階段部屋と階段部屋の間に敵や宝箱の現れるフロ

アを挟む仕組みだった。

「ドリヤーッツッー!!」

「ファイアッ!」

「え、えいつ!」

スクルズはマリウスがカスタマイズした魔法銃を構えて、奇声と一緒に高威力のマジックアローを放った。サンディは師匠譲りの攻撃魔法を放ち、ウルドは一番後ろからチクチクとコンポジットボウで狙撃した。

父親の出番は今のところ荷物持ちだけだった。

「かわいいっ!」

「猫さんの……えっと、置物……?」

「わはははーっ、なんじゃこりゃっ、金ぴかの洗濯板を持つてるのじゃー!」

モンスターのドロップは普通だったが、宝箱の中は妙な物ばかりだった。

今明けた宝箱には、片手を上げた猫の陶器人形が入っていた。ガラクタだ。

「捨て」

「お願いユリウス、あたしもこれ欲しい……」

「後生じゃあぁーっ、父いいーっ!」

「その後生は今日で4回目だろ……。わかったわかった、上に運んでおく」

手が余って暇だったので、転移魔法を駆使して迷宮の入り口にお宝を運む役を担った。

「この猫さん、どこに飾ろっかつ!？」

「割れちゃうと困るし、家の中、かな……?」

「次はでっかいぬいぐるみがいいのじゃ! 迷宮さん、頼むうーっ!」

そんな調子で俺たちはどんどん下って、どんどんガラクタをかき集めていった。スクルズのがままを迷宮が真に受けたのか、胸の下の辺りまでもあるヒヨコのぬいぐるみが出て来た。

なんだか迷宮にからかわれているような気がした……。

「あれはルインタートルか、懐かしいな」

「うっ……あたし、あれはトラウマよ……っ」

「お母さんが怖がるほど、強い……?」

「あれは攻撃すると自爆するんだ。シエラハ、みんなを下がらせてくれ、始末してくる」

「へっ……? マ、ママ……?」

草の迷宮は土の迷宮に性質が近いので、近い系統のルインタートルがいる可能性もくはない。俺が腰の剣を抜くと、シエラハは青ざめて子供たちを上フロアに押し去っていった。

俺の方は転移して、敵を一カ所に引きつけると、ルインタートルの宝石部分を聖剣で叩き割った。

「あ、お帰りお父さ ヒアッ?!!」

「ギャーッツ、死ぬーっ、怖いのじゃあぁーっ！！」  
「な、何っ、なんなのっ、じ、自爆って……っ、こんな破壊力いくらなんでもおかしくないっ！？」

上の階に転移すると、爆音と共に地面が揺れた。ここの迷宮は構造がシンプルなのできつと大丈夫だろう。

「粉塵が収まるまで少し休もう。迷宮についてきたこと、後悔したか？」

「お願いユリウスッ、あれを急に爆破するのは止めてっ！！」

シエラハ、お前は俺と一緒に子供たちを怖がらせなければならぬ立場だろう……。

「まったくもー、とんでもない父なのじゃ……！」

「わ、私も、トラウマになった、かも……！」

「う、うちは平気だもんっ！　うちだって、パパと同じことっ、出来るんだからっ！」

「ならばサンディに頼むか」

「ひうつ、パ、パパアツ?!」

「慣れるとあの強烈なスリルが病み付きになる」

この子たちは天才だ。天才ゆえに慢心して危険に飛び込むことになる。だから今のうちに怖がらせておきたかった。世界は恐ろしいやつでいっぱいなのだ。

「父も母も、家で知ってる顔と全然違うのじゃ……。修羅じゃ、修羅と羅刹がおるのじゃ……！」

「わ、私たち……こんなに凄い人の、子供だったんだね……！」

「なんなのよーっ！ モンスターが自爆するなんてっ、そんなのわけわかんないわよーっ！」

休憩しよう。圧縮食料を取り出して、例のポットを使って大気中の水分を水に変えた。

どちらも闇の迷宮をシエラ八と共に下ったときに使ったものだ。

「凄すぎるよ……私、お父さんの跡取りに本当になれるのかな……」

そこから先の迷宮はボスタイプがちらほらと現れるようになったが、危険な個体は俺とシエラ八が瞬殺していったので特に問題は発生しなかった。

・

「あっ、綺麗な宝箱！」

「もしかしてあの中に……」

「開けていいかっ、父っ、母っ!？」

時間の感覚が狂うほどの長期戦の果てに、俺たちは地下110階に到着した。

部屋には宝箱が1つだけで、その表面はビーズを散りばめたかのようにゴテゴテと飾りたてられていた。

「ダメだ、危ないから俺が」

「もう我慢できんっっ、ドヤーッッ!！」

ここまで1度も宝箱に罠なんてかかっていなかったのだから、罠



がないことは分かり切っていた。


俺とシェラハは親の言うことを聞かないわがまま娘に寄って、みんな一緒に箱の中を確かめた。

「わ、凄く甘い匂いがするよ……?」

「美味しそうね。それにいっぱいあるわよ、ユリウス?」

「後生じゃ父いっつ、1つ食べていいかっ!」

「お前らな……。ダメに決まってるだろ」

確かにアンブロシアだ。それはルビーのように輝く不思議の果実で、鑑通りに強く甘い香りを放っていた。

・5年目 母は超絶に強し ・ 母、強すぎ ・ (後書き)

もしよろしければ、画面下部より【ブックマーク】と【評価

】をいただけると嬉しいです。

書籍の発売に向けて、少しでも認知度を上げてゆきたいです。

「一口だけよ、一口だけ、いいでしょ……?」

「絶対美味いっ!」

「みんなで1つだけ食べましょっ、ねっ、パパ?」

「図鑑によると食べるとは書いてなかったから止めておけ」

宝箱に入っていた12個を布袋に詰めて肩に背負った。

まったく甘味のことになると、どいつもこいつも目の色が変わるから困る……。

「ん……? あれ、なんだ……?」

宝箱部屋でこの迷宮は終点のようだ。その壁がまるで隠し部屋でもあるかのように薄っすらと光っていた。

どうしても気になったのでシエラハに布袋を渡し、俺はそれに近づいてみた。

「何? その壁がどうしたの、ユリウス?」

「そっちこそ気付かないのか?」

「気付くって何」

その光る壁に触れてみると、シエラハの声がそこで途絶えた。上下の感覚が急に狂って、押し流されるかのように身体が奥に飲み込まれ、転移魔法に似た感覚がした。

畏だ。そう気付いた頃には、俺は全く知らない床にひざまずいていた。

「なんだ、ここは……？」

そこは草の迷宮ではなかった。鏡のように磨かれた石英のような物体で床も壁も構成されていて、それが幾重にも光を反射して輝いていた。

さらにはあのタンタルスの世界のように、この空間では魔力というものが感じられない。

いや、実際に確かめてみるともつと酷い。照明魔法すら全く発動しなかった。

そうになると、この環境下で転移魔法を使うのは想定外のリスクがともなう可能性がある。発動するかも怪しい。可能な限り避けたいところだ。

仕方がないので剣を抜き、辺りを警戒しながら一本道を進んだ。

「シエラハ……？ その格好、なんだ……？」

シエラハと合流した。ただ、そのシエラハは今日まで見たこともない妙な服を着ていた。おまけに俺が声をかけても、いつもの愛想のいい笑顔やさしい声はなかった。

「ユリウス」

「シエラハ……？ どうしたんだ……？」

ぴったりと肌に張り付くような、まるで水着のような不思議な衣服を身に付けていた。ただでさえ恵まれたボディラインが強調されて、一瞬目を奪われた。

「ユリウス・カサエル。貴方はシエラハとメーブルに導かれて、このシャンバラにやって来た。貴方は姉妹の予測を遙かに越える結果を示し、この国の迷宮事業を見事軌道に乗せた」

「……それがなんだ？」

「貴方はマク湖を水涸れから救った。さらにはタンタルスの襲撃を見事に跳ね返し、このシャンバラと民を救った。貴方は救世主となつた」

「もうだいぶ前だな。けどシエラハ、急にどうしたんだ？」

「それからしばらくして、貴方はリンハイムとあの哀れな迷い子、グライオフエンを救った。ツワイクからの経済戦争にも打ち勝ち、タンタルスの世界におもむき、見事帰還し、彼らがこの世界の脅威であることをこの世界に広めた」

最後まで話を聞くしかないようだ。腰に剣を戻して、つるつるとした壁を背にしてシエラハを見つめた。さつきから1度も笑わないせいか、冷たい印象を覚えた。

「タンタルスの再襲撃。貴方は犠牲を異国の兵たちに強いた。貴方は深く傷つき、矛盾や犠牲を承知で、世界を変える道を選んだ。全ての白の棺の回収。そして再稼働と徹底した管理。それこそが世界を守ると、貴方は信じている」

「ああ、やつらの奴隷にされるよりはマシだろう？」

「自分の行いが後の世に災禍を残すかもしれない。そう不安になる気持ちはよくわかるわ。だけれど進むしかない……。あたしもそうだったわ……。後から見れば正しいことも、現在から見れば確定することのない未来でしかない」

普通のシエラハはもつと世俗的だ。シャンバラや都市長に対して献身的ではあるが、哲学を論じるようなタイプではない。目の前の女性は、シエラハの皮をかぶった別人に見えた。

「だけれど何よりも素晴らしいのは、貴方の夢よ……。貴方は限りあるヒューマンの人生全てを捧げて、このシャンバラの大地を再生させようとしている……。あたしがどれだけ、そのことに、希望と夢を抱いているか……。ユリウス・カサエル、貴方は、知っているのかしら……」

確信した。コイツはシエラハではない。

シエラハはこんな陶醉するようになしゃべり方をしない。震えるように身を抱いて、苦しげに唇を噛んだりなんてしない。

少なくともこんな状況で、こんなことをする必要なんて何一つない。

だが、ならば、コイツは 誰だ？

「お前は誰だ？」

「あたしはあたしよ、ユリウス。貴方の愛したシエラハよ……」

「違うな、お前はシエラハではない。シエラハはそんな顔をしない」

「あたしの二重人格を疑ったことは……？」

それは、ある……。

何度か、違和感を感じたことがある……。

「もう一つ可能性がある」

「あら……」

「二重人格ではなく、今俺の目の前にいるアンタが、全くの別人であるという可能性だ」

彼女はその返しに笑った。

隠そうともせず、彼女は俺の返しに喜んだ。彼女が一步を踏み出すと、俺は一步逃げた。シエラハじゃないからだ。

「結論を聞いわ。ならば、ここにいるあたしは、誰……？」

「アンタがシエラハでないなら他にいないだろう。アンタは」

根拠もなく、理屈もまるで通らないが、シエラハと同じ顔を持つ者はもう1人だけいる。

「女王シエラハ・ゾーナカーナ・テネス。偉大なるエルフの始祖だ」  
「フフフ……さて、それはどうだろうな」

シエラハを演じるのを完全に止めて、彼女は口調まで気の強いものに変えた。

「だが、だとすると『なぜ老いていないのか？』という疑問も浮かぶ。生きているならなぜ、『なぜエルフたちの前に姿を現さなかったのか』という疑問もだ」

「フツ……それは全て、そなたの仮説の上に成り立つ疑問だろう。我が我であることを、証明するものではない」

「だったら、アンタはどこのだな様なんだ……？」

今度は逃げずに彼女の前に出て、至近距離から彼女と見つめ合った。彼女は視線を外さずに、こちらをまっすぐに見つめた。

「わらわにとつて、そなたは奇跡そのものだ。そなたはわらわがずっと諦めていた夢を、もう1度見せてくれた……。そのことにどれだけわらわが、感謝と葛藤を抱いているだろう……。感謝している……。心から、そなたに、感謝しているよ……」

「女王よ」

「なんだ、シャンバラの救世主よ……？」

「……タイムオーバーだ」

突然、彼女の背中の中の後ろの壁が砕け散った。こんなバカ力を発揮出来るやつは他にいない。それは本物のシエラハだった。

「よかった、ユリウス！ え……っ？」

「ククク……これで、二重人格説が崩れてしまったな」

「な、なんで、え、あたし……？」

「ユリウス……。シャンバラを真の意味で救えるのは、我とそなただけだ」

女王シエラハ・ゾーナカーナ・テネスは霧のように霧散して消えた。後に残された俺と本当のシエラハは、身を寄せ合ってお互いの無事に安堵した。

「ちょ、ちょっと、ユリウス……ッ?! こ、子供の前っ、んっつ……」

シエラハゾは2人いた。

目の前にいる彼女まで消えてしまわないか不安になって、衝動のままに彼女の唇を奪った。



「あつちより、こっちの方がずっといい」

「そ、そう……あ、ありがとう……んっ?!」

恥じらいに上擦った声が一子の母とは思えないほどに愛らしくて、もう一度唇を奪つと、子供たちが声を上げて騒ぎ立てた。

「ねえ……今夜、行っていい……?」

「もちろんだ」

俺たちは迷宮の底からアンブロシアと真実の断片を手にして、数々のガラクタと共に地上へと帰った。シエラハ・ゾーナカーナ・テネスは、二人いた。

・5年目 母は超絶に強し - ダブル - (後書き)

ストック尽きました、定期。

次回更新が遅れたらすみません。

昨晚はお祭りだった。実践を経験して自信を付けたうちの子たちはもちろんとして、その親、親族、それぞれの師匠、友人のネコヒト族や呼んですらいないカーマスどもまで、誰もがとても舞い上がっていた。

シャンバラの大切な姫君が迷宮での初デビューを迎え、その深層から両親と共に甘き果実『アンブローシア』を持ち帰った。

そのちよつとした伝聞があれよあれよと人々の耳に広がっていつて、いつの間にもやらうちのポーシオン工房をお祭り会場に変えていた。どこからともなく酒と食べ物とマタタビが持ち込まれ、アンブローシアが栄光の証として飾りたてられた。

人々は夜が更けるまで語り明かした。  
ウエルサンデイ、スクルズ、ウルド。シャンバラの誰もがこの子たちを愛し、その成長を喜び、アンブローシアを使った奇跡の錬金術を期待した。

ただし、古の女王。現在のエルフの始祖。シエラハ・ゾーナカーナ・テネスを名乗る女と出会ったという事実は、その翌日まで誰にも明かされることはなかった。

正直に言つて、俺もシエラハも受け止めかねていたからだ。あまりにシエラハにうり二つ過ぎて現実感が乏しかったからだ。祝いの席に水を差すくらいならば、俺たちは沈黙を選んだ。

翌朝、やはり黙ってはおけないことなので、俺から都市長に報告を入れた。隣のシエラ八を起こさないように慎重に抜け出して、朝早い老人の書齋を訪ねた。

「始祖様は、生きておられましたか……」

きつと彼は現実に当惑するだろうと。それは俺はそう予想していた。だが違った。都市長はとても嬉しそうに笑っていた。

女王の言葉の全てを伝えても、彼の表情にあるのはあふれんばかりの喜びだけだった。それだけ彼ら老人たちにとってあの女王は特別で、崇拜するのが当たり前存在なのだろう。

「まあ、話は以上だ。女王の言葉の意図、今さら姿を現した理由は俺にはてんでわからん。だから俺は戻って、今日の仕事を済ませることにするよ。……新鮮なうちに、あの果実も調理したいしな」

「ああ、すみませんユリウスさん、私ばかり舞い上がってしまった」

「いいさ。試作の結果が出たらまた報告するよ」

「楽しみにしています」

なぜ女王が姿を消したまま帰ってこないのか。なぜ迷宮深層に現れたのか。なぜ白紙の書が指し示した場所に女王が現れたのか。疑いは尽きなかったが、言葉にするのはひかえた。

さっきも言ったが、今さら現れた動機がてんでわからなかった。

帰宅して仕事に没頭した。オーブに魔力をかけて水槽を見下ろし、黙々と品物を大量生産していった。

転移門が世界を繋げば繋ぐほどに、あらゆる品物の需要が高まる。特にスタミナポーションの需要は常時に右肩上がり、現在ではポーションを超える主力商品になっていた。

「あれ、皆さんは……？」

やがてお昼時になるとラウリイが工房にやってきた。今回は納品数が多いので、彼はたくましい男たちやネコヒト族を引き連れた。

「すまん、昨晚ちよつとしたお祭りがあってな。さすがにそろそろ起きて来ると思うぞ」

「あっ、そこは全然大丈夫です！ いつも皆さんが手伝ってくれますけど、これは本来僕たちの仕事ですので……！」

普段は梱包を家族の誰かしらが手伝ってくれるのだが、今日はサポートがなくて散らかり切っていた。

ラウリイがてきぱきと指示をして、木箱や壺に品物を詰めさせてゆくのを、オーブに魔力をかけながららぼんやりと見守った。

「あっ、ラウリイ！ ごめん、うちも手伝っよ！」

「あ、サンディちゃん……。えっと、おはようございますっ!」

あれだけ迷宮で攻撃魔法をぶつ放したというのにサンディは朝から元気だ。ラウリイと並び合ってポジションを木箱に詰めて、華やかな笑顔を彼に向けていた。

それを見て、俺はふと思った。サンディは誰にも渡したくないが、おっさんの手に渡るのだけはやはり堪えられない……。ならば、いつそ目の前のこのラウリイ（46）ともっと親しくなつてくれないものだろうか……。と。

「ねえ、パパ、どうしてラウリイをそんなに見てるの?」

「えっ、ぼ、僕をつ?!」

「うんっ、じーっつと見てた!」

「えっ、ええっ?! そ、そんなに……。?」

オーブに最後の魔力をかけて、水槽の中のやつを仕上げた。わざと蒸気が辺りに立ちこめるように加減して、おかしなことを言うサンディを煙に巻いた。

「わっ……。?!」

「キャツ、ちよつとつ、何も見えないじゃない……。つ。もつっ、絶対わざとやったでしょ、パパッ!」

「すまん、ちよつとした事故だ。悪いがみんな、後は任せた」

オーブと水槽を使った仕事はこれにて終わりだ。俺は薄暗い工房を出て、厨房から香る遅い朝食の匂いを嗅ぎながら、寝癖の付いたグラフとテーブルで語り合った。

「スクルズの話聞いていたら、また君と一緒に迷宮を潜ってみたくなった。もし次の機会があったら、このボクを連れていってくれ。ボクもかわいい娘たちに凄く凄くと言われて、チャホヤとされたい……」

「チャホヤって……。清々しいほどにわかりやすい動機だな……」

「だって……。スクルズのやつがシエラハばかり褒めまくるから、悔しくなってきた……」

白百合のグライオフェンとまで呼ばれた気高い女が、子供からの賞賛欲しさにこんなことを言うようになるなんて、変われば変わるものだ。

俺はそんな彼女の白い手を取って、その気持ちがよくわかるとうなづいて見せた。

「俺もシエラハに美味しいところを全部持って行かれた、ぜひ行く」

「おおっ、本当かっ!？」

「俺たちが思っているよりもずっと、あの子たちは強い。迷宮に連れて行っても命を落とすようなことはないだろう」

「うんっ、ウルドの弓の腕は師匠であるボクが保証するよ。……少し、どんくさいけど」

ところがそんな話をしていると、メイプルのやつがいきなり現れて、結ばれた俺たちの手に自分の右手を重ねてきた。

「キャッ……?!」

「家族に潜伏魔法を使うなって、何度言ったらわかるんだ、お前は……」

「10億回くらい……?」

「反省する気ゼロじゃないか……っ!」

「そんなことより……話は、聞かせてもらった……。私も、チャホヤ、されまくりたい……」

お前までそれが動機かよ……。

だが幸い、あの入場制限がかかった迷宮はあと2つ分ある。彼女の予約を拒む理由はなかった。

「わかった、一緒に行こう。お室の方も魅力的だからな」

「ふ、ふ、ふ……ついに、来た、来ましたよ……。私の、汚名返上の、チャンス……」

「いや、汚名返上って……。普段から自分の行動に責任を持てばいいだけのことだろうが……」

「そだね……。でも、無理」

メープルは話を打ち切って厨房に帰ろうとした。

「そうやってあっさり諦め　ウツツ?!」

だがそれは不意打ちのためのブラフで、銀髪の美しいエルフは人の唇を突然に奪うなり飄々と立ち去って行った……。

「ふふ……っ」

「わ、笑うな……」

衝撃に固まる俺をグラフがおかしそうに笑った。結ばれた手をギョツと彼女は握って、親しみのこもった微笑みをくれた。



「ああいつどこまでも自由で気まぐれな生き様を、もっとボクたちは見習うべきなのだろうね」

「ない。アイツを基準にしたらシャンバラは終わりだ……」

「でも今のはとても参考になった。君はああいう不意打ちに弱いんだね」

「弱くない人間がいたら教えてほしいよ」

きつと千年経つてもメープルは童心を失わないだろう。

昼食と子供たちがこのテーブルに集まってくるまで、グラフと俺は手と手をずっと結び合いながら、またなんでもない言葉を交わしていった。

・

午後。またシャンバラに雨が降った。正確には短い天気雨だ。

普段のこの時間帯は日差しが熱くて外では過ごせたものではなかったが、今は熱された地表や屋根に雨が降り注いで、それがすぐに蒸発して湿気に変わっていた。

娘たちどころがその親まで一緒になって天気雨の中に飛び出して、はしゃぐ姿を工房の窓辺から眺めた。やがて雨が止み、蒸気が生み出した強い風が辺りの湿気を吹き飛ばして、いつもよりも気温の穏やかな昼を呼んできた。

「よ……」

「おい、一児の母……。髪、びしょびしょじゃないか……」

「ユリウスも、一緒に……出てきたらよかったのに……」  
「俺はツワイク人だから天気雨なんて見慣れてるんだ」

工房に髪や肌を湿らせたメーブルがやって来た。濡れたその姿はいつもとはどこことなく雰囲気異なって、それがより魅力的に彼女を彩っていた。

「で、まだ、始めないの……？ みんな、ユリウスの調査が始まるの、待ってる……」

「アンブローシアはもう1度手に入るかもわからない超絶レア素材だ。これをムダには出来ないよ」

いつもならば俺も錬金釜の前で、大地を蘇らせるために試行錯誤を繰り返している頃だ。しかし今日は文献とのにらめっこだった。

「早くしないと、食べちゃうよ……？」

「シャンバラの希望を食うな」

「違うよ。食べるのは、こっち……」

人が本を読みあさっているのに、メーブルは向かい合うように俺の膝に乗った。美味しいシチュエーションだ。だが今はドキドキよりも、仕事を妨害された不満の方が勝った。

「邪魔だ……濡れた身体でくっつくな……」

「昨日は……お楽しみだった、ようですね……。姉さんばっか、ずるい……」

「まだ昼間だ」

「うん……。子供たちにバレるかと思うと、ドキドキするね……」

「ドキドキじゃ済まねえよ……。つ。俺はまだバカ親だと思われたくないんだっつ」

「……えっ?」

「えっ、じゃねーよっ!?!」

「じゃ、笑止……」

「笑止でもねーよ……。っ!」

膝から降りないメーブルのお尻を抱き抱えて、往生際の悪いかにばさみをひっぺ返して床に戻した。クソ、メーブルの甘い匂いが頭の中から消えない……。

集中力を乱された俺は渋い顔でメーブルを見つめてから、欲望を堪えて文献漁りに戻った。

「そういう目で、見られるの……好き……」

「歪み過ぎだつての……」

「じゃ、何か手伝う……。何すれば、いい……?」

「この本を棚に戻してくれ。それから別の本をこっちに」

「おけ……」

メーブルにサポートしてもらいながらじつくりと考えた。性格は因業だが物静かなメーブルは、俺の意見を聞いてくれたり、黙々と文献集めを手伝ってくれた。

おとなしくさえしていれば、普通に優秀なやつだった……。

「うずうず……。そろそろ、セクハラ、したい……」

「それを膝に乗ってから言っな……」

「もう、無理……。まだ、我慢、出来ない……」

「頼むから集中させてくれ……」

メーブルの気まぐれに振り回されながらの研究は、なんだかんだ息抜きと集中のメリハリがあって上手く進んでいった。

き  
・5年目 甘き木よ来たれ！  
- 天気雨と不意打ち  
- (後書

投稿が遅くなつてすみません。

メーブルの妨害ストレスの支援もあって、西の空に夕日が浮かぶ頃には方針とレシピが固まってくれた。そこで夕飯に入る前に完成させようということになり、1つの錬金釜を囲んだ。

…… 2人ではなく、3人で。

「またお母さん、お父さんのお仕事の邪魔をしてたの……?」

錬金術師の才を持つウルドだ。実の母に酷い言いようだが、半分は事実だった。

「ま、そんなと」……?」

「ダメだよ、お母さん……っ。そんなことばかりしてたら、お父さんに、嫌われちゃうよ……?」

「ユリウスは、気にしてないって……」

「おい、シレッと人のセリフをねっ造すんな……」

「はああ……っ。ごめんね、お父さん……。お母さんには後で私から、ちゃんと saying おくから……」

「ぶぶ……。これじゃどっちが親か、わかんないね……。笑える……」

「いや笑えねーよ……っ!??」

錬金釜に水とポーションを加えて、ウルドと一緒に魔力をかけた。メーブルもウルドの肩に手を置いて、娘を介してサポートをしてく

れていた。

「それでお父さん、どうするの？」

「ああ、アンブローシアを使ってこれを作る」

資料には卵の形をした挿し絵が添えられていた。この本を残した錬金術師はまごうことなき天才だ。これから俺はこのレシピを参考に、アンブローシアの力を持った【触媒】を生み出す。

「触、媒……？ お父さん、触媒って、何？」

「半永久的に使える特殊な材料だ。他の材料に影響を与えるが、この魔法の触媒は決して失われないそうだ」

「……ご、ごめん、お父さん。私、何を言っているのか、わからない……」

「メープルみたいなものだ。お前のお母さんはそこにいるだけで周囲をグツチャグチャに引っかき回すが、お母さんは常にお母さんのままだろう？ 変化はしない」

「あ、なるほど……。す、凄く嫌な例えだけど、凄くよくわかったよ、お父さん……」

「え、私は、触媒……？」

「ある意味な。それにこのレシピを後押ししてくれたのもお母さんだ」

これならば俺が寿命を迎えた後も、形となってウルドの手元に残る。有限のアンブローシアを無限に変えて使い放題にしてみえる。もしこれが実現出来れば、各種ポーションの効果も強化されるかもしれない。

「ごめん、お母さん……。私、てっきり母さんが、またお父さんを邪魔してるのかと思ってたよ……」

「え、邪魔、してたよ……？」

「ああ……。危つく今日の実験をサボる寸前だった」

「お母さん……。っ、お父さんの邪魔をしちゃダメだよ……。っ、もうっっ」

「ウルドは姉さんに似て、お堅いね……。もっと、本能に忠実に、生きよ……？」

「んなこと母親に言われて喜ぶ娘はいないだろ……」

そんなやり取りをしながら、俺は素材を1つずつ混ぜ合わせてゆく。

迷宮から手に入れた小粒のエメラルド、グリーンベリルを袋ごと釜に流し込んで、レシピ通りに添加物を加えていった。鉄粉、銀粉、妖精の粉。どれも少量ずつ加えてゆくと、高まる輝きと共に顕著な変化が起きた。

「あ……。これ……。ヤバイ、やつ……？」

「あ、あれ……。っ、わ、私の力、どんどん、吸われて……。っ。う、うう……」

錬金釜は俺たちの魔力を際限なく吸い上げていった。メイプルもウルドも必死でがんばったが、やがて力を供給し切れなくなって床へと崩れ落ちていた。

「ごめん、ギブ……」

「お父さん、がんばって……」



「大丈夫そうだ。明日は休暇にしたい気分だがな……」

最後の仕上げにアンブローシアを入れた。もちろん、手に入れたやつ全てをだ。これは俺が滅びた後も、錬金術師ウルドを支えていってくれる未来への遺産だ。

ただ娘の手前意地をはったが、実を言えば俺の方もかなり苦しい。それでも残り少ない魔力を練り合わせて、最後の仕上げを進めていった。

生命の果実アンブローシアの力を持った触媒よ、生まれよと釜の底を杖で突いた。

たちまちにエメラルドグリーンの輝きが釜の中よりあふれ出し、目を開けていられないほどの激しい輝きが工房中に飽和した。

完成だ。俺は錬金釜にしがみつくように崩れ落ちた。輝きを見たのか家族たちが一齐に工房へと駆け込んできて、釜の前でへばる俺たちと、釜の内部の秘宝に気付いた。

「なんじゃこりはあーっ?!」

「綺麗っ! これって、宝石の卵!？」

スクルズが釜の中から触媒を取り出して掲げてくれた。隣のサンディはそれに目を輝かせて見上げ、グラフもその輝きに魅了された。シエラハはいつだってやさしい

「大丈夫、メーブル……?」

「へーき……。あと……ユリウスに、勝った気分……」

彼女は俺ではなくメーブルとウルドを介抱しつつ、やはり気にな

るのか自ら燐光するエメラルドグリーンの卵をしきりに見上げていた。

「大丈夫か？ ほら、肩を貸してやる」

「お言葉に甘えるよ」

片腕はかき混ぜ棒にしていた杖、もう片腕はグラフの細身にしがみついて立った。俺とグラフは普段ベタベタしないので、ちょっとしたこういう機会が刺激的だった。

「大変じゃ母っ！ あの甘い匂いのがなくなっておるうーっ！！」

「な、なんだってっ！？」

危うくグラフに振り落とされかけた。せめて1つだけでも食べたい。とでもこいつらは下心を持っていたのだろう。

「犯人は……この中に、いる……」

メープルは敬愛する姉の胸に甘えながら、犯人はこいつだと旦那を指さした。

「お、お母さんっ！ お父さんを密告したらダメだよーっ！？」

「おいつ、どついうことなんだ、ユリウスッ！」

グラフに両肩を掴まれて激しく振り回された。

「あたし、せめて最後に匂いだけでも嗅ぎたかったわ……」

「アンブローシア、もうないんだ……。パパなら少し分けてくれるって、うち信じてたのに……」

いや、そこまで落胆したりキレることか……？

俺は見るからに邪険になったグラフの拘束から逃れ、触媒をスクルズの手から回収した。

「これは　そうだな、これは、『生命の触媒』。アンブローシアの力を封じた、消費されることのない奇跡の材料だ。今からこれを使って試作するから手伝ってくれ」

このままでは丸く収まりそうにないので、みんなを説得して調査を始めた。既存のレシピにこの触媒を加えることで、どう変化するかを確かめたかった。

さつと混ぜ合わせて、さつと目的の試作品を完成させた。家族を連れて日没までもない砂漠に出て、手頃なところで足を止めた。小瓶の中には完成した種が納められている。それを逆さにして、砂漠に蒔いた。

「わ、わあああーつつ？！」

効果の単純増幅。それが俺の目標だった。だが、なぜか結果はそうはならなかった。

たくさんの果樹を生み出すあのレシピに、生命の触媒を加えて生まれた種は　花の木が咲き乱れる美しい森を砂漠に生み出した。

増加した効果範囲は、結果があまりに飛躍的過ぎてもう把握しきれない。

数粒の種が花の咲き乱れる小さな公園に変わる。そうとしか表現しようがないほどに、種は砂漠に圧倒的な変化をもたらしていた。

「花じゃ花じゃっ、木に花がいつぱいじゃーっ!!」

「わ、わああ……っ」

「最高よ、パパ！これって最高じゃないっ!!」

「ボクはいつもの食い気たっぷりの結果を期待したけど、これはこれで悪くない。凄くいい匂いだ……」

空を見上げれば青い花、桃色の花、白い花。それが樹木からあふれんばかりに咲き誇り、砂漠の澄んだ星空を背に浮かび上がっている。

「そうだわ、夕飯はここで食べましょうよ。もちろんジイジも呼んで、みんなですっ！」

「でもママ、それってまた、昨日みたいなお祭りになっちゃうんじゃない……」

「ちょっと私、知り合いのおっさんたち……呼んでくる……。なんとなく、酔っぱらいを集めたい……気分……」

かくしてその晩、人々は小さな花の森に集まって、集まって、集まりまくって、ビールジョッキとか串肉を掲げた。どこからともなく屋台までやってきて、寒さをしのぐための焚き火までもが用意された。

花の国シャンバラ。それはそれで悪くない未来だ。

陽気なネコヒト族は踊りだし、酔っぱらいたちは一緒になって歌いだして、未来のシャンバラが花と果樹で覆われる夢を見た。

「ありがとう、ユリウス。これでやっと夢が叶うわ……」

「ああ、これだけ爆発的な効果なら、シャンバラの再生なんてあっという間だ」

「そうね……。きっと、あつという間だと思っわ……」

いずれ砂漠の国シャンバラはおとぎ話に変わるだろう。この地がかつて砂漠であったと語っても若いやつは誰も信じない。そんな未来がもうすぐそこに迫っていた。

・5年目 甘き木よ来たれ！ ・花の国 ・（後書き）

書籍版の改稿作業に入りました。

定期更新がんばってみますが、力尽きたらごめんなさい！

子供たちが生まれて、ついに6年が経った。

遙か東方から西方まで、転移門が生み出した流通網は世界を目まぐるしく変えた。転移門を持つ国々が世界の中心となり、持たぬ国々は一步見劣りする辺境と化した。

もはや俺たち連合国を倒せる国は存在しない。防衛協定を結び、瞬時に兵を送り合える俺たちは、年月を重ねることに関係を深め、次第に1つの大帝国内に姿を変え始めている。

タンタルスの襲撃が繰り返されるたびに連合国は結束を深め、世界を守るという大義名分の下に肥大化していつている。

やがて俺たち連合国そのものが世界の歪みとなり、属さぬ国々に不幸をまき散らすのではないか。そんな疑いが俺と都市長、義兄さんの胸にはあつたが、人にはとても言えなかった。

異世界からの侵略が続く限り、連合国は存在し続けなければならなかったからだ。

一方で飛び切りにいい報告もある。それはシャンバラの大地の話だ。

先々月のシャンバラの緑化率は10%。先月が11%、今月の報告が12%。1ヶ月1%刻みの飛躍的な勢いで大地の再生が進んでいた。

このままの勢いで成長するならば、あとたった88ヶ月でシャンバラの砂漠を駆逐することが出来てしまう。

老人たちの記憶の中のシャンバラ王国とは少し異なるかも知れないが、生きているうちに俺は夢を叶えることが出来る。俺が生きた証を大地に刻み、新たな証を探す夢を始められる。

まるで魔法のように増えてゆく自然の姿に、シャンバラ中が喜びに湧いていた。

巨匠メーブルにより各地にユリウス像が建てられ、ユリウスはヒデブウなオークであり、スケベな覗き魔であり、その妻シエラは女神同然に美しい人だと人々の記憶に刻まれた……。俺に断りなく勝手にな！！

『大変ユリウスッ、またお供え物が届いたわ！』

『豊穰神ユリウス様、だつて……。うける……。』

『黒蜜がけのドーナッツじゃないか！ はははっ、ユリウスは甘い物好きと広めておいて正解だったな！』

お供え物や励ましの手紙が連日届き、もちろん甘味は俺ではなく家族の腹に消えた。ユリウスは甘い物好きだとこの策士どもは評判をねつ造し、甘味の入手を思うがままにした。

彼女たちが俺の名を騙って美味しかったと絶賛すると、どうも甘味屋が繁盛する仕組みにもなっているとか、なっていないとか……。俺という人間は、世間の認識からどんどん乖離していった……。

ともかく概算であと88ヶ月で夢が叶う。焦っていた頃が嘘のようだ。毎日が目まぐるしく過ぎていった。



その日、一日の仕事を終えた俺はオアシスの棧橋に腰掛けて、静かにそこへとたたずんでいた。

赤い西日が水面を寂しげに照らして、風が水面に細波を描いて通り過ぎてゆくのをただぼんやりと眺めた。

バザー・オアシスや、ここ行政区の遠景は既に緑化し尽くされ、砂漠に囲まれたオアシスの部分だけが未来への遺産として残された。シャンバラの民は緑を望んでいたが、砂漠やオアシスの姿が完全に消えるのはあまりに寂しかった。

「あれ……。メープル……？」

疲れていたのか、目を明けると自分がうたた寝をしていたことに気づいた。隣にはいなかったはずのメープルがぴったりとくっついて、こちらに体重を預けて眠っていた。

少し風が冷たくなってきていたけれど、きつと家族が起こしに来てくれるだろう。家族に起こしてもらえて、夕飯の食卓に導いてもらえるなんて、それはなんて幸せなことなのだろうか。

俺はまた目を閉じて、メープルの安心する匂いを嗅ぎながら幸福な眠りへと落ちていった。

「あれ……。シエラハ……？」

目を覚ますと隣にシエラハが増えていた。西日をバックにした彼女の横顔は女神のように綺麗で、ただでさえ美しいブロードが光り

輝いて見えた。

子供たちはお腹を空かせていないのだろうか。そう思い描きながらもう1度、目を閉じた。

しかし 眠りに落ちる前に俺は顔を上げた。遠い声がして、俺は2人を揺すり起こした。

声の主はグライオフェンだ。珍しくも彼女は砂漠馬にまたがっていて、砂塵を声を立てながら市長邸の方からこちらに駆けて来た。

そして彼女は言った。とても信じがたい いや、信じたくはない言葉を。いつもの枕詞『ユリウスツ、大変だ』の後に、最悪の知らせが続くことになった。

「ボクたちの森が……森がどんどん枯れていつているっ!!」

「ボクたちの森が……森が次々と枯れていつている!!」

当然だがメイプルもシエラハも飛び起きた。

森が枯れる。自然物なのだからきつとそういうこともあるだろうが、グラフの血相を変えた顔が、これはただ事ではないと叫んでいた。

「嘘……」

メイプルとは思えないほどに悲しそうな声が漏れた。

「枯れたって、どういうこと……? そんなに酷い状況なの……?」  
「うん……かなり、まずい……。ユリウス、しっかりしてくれ、ボクたちが付いているから……っ!!」

棧橋からなかなか立ち上がらないので、グラフにまで心配されてしまった。立つと足下が少しふらついて、シエラハとメイプルが左右から支えてくれると、自分が相当のショックを受けていることを知った。

「すまん、まだ寝ぼけているみたいだ。……都市長に報告は?」  
「した」

「そうか……。なら……実際の被害は、どれくらい、酷いんだ……?」

「遠くから見てわかるほどに酷い……。見れば動きとなってわかる

くらいに……大地が次々と、枯れていつているんだ……」

そんな、バカなことが、なぜ起きる……。

俺がしくじったのか……？

俺が生み出したあの緑は、一過性のまやかしだったのか……？

「場所は何？」

「後ろに乗って。ボクが君を案内する」

転移魔法は使うなって言いたいのだろう。転移して自分の目で確かめるのも恐ろしかったので、素直に馬の背へとまたがった。

「ユリウス、大丈夫よ、あたしたちもついているから……」

「だいじょうぶ……だいじょうぶだから、しっかりして……。そんな、悲しそうなユリウス、私、やだよ……」

平気だと微笑み返しても、力のない弱々しい表情にしかならなかった。

俺は2人を心配させたまま、グラフの駆る馬に運ばれてオアシスを発っていた。

急行すると、せつかく俺たちが築いた森が暗褐色に枯れ果てていた。

「酷い……」

「そうだね……。でも、ボクたちで原因を見つけるんだ」

「そうだな……。ああ、そうするべきだ……」

「ユリウス、少しだけ夢が後退したただだよ。原因さえ取り除けば、またボクたちは歩き出せる」

グラフが焦っていたわけもわかった。

大地がじわじわと枯れていつている。草木に覆われていた大地が、少しずつ荒れ地に変わってゆくのをこの目で見た。

「原因か。原因は、きつと、この先だな……」

「うん……。そうだろうね」

奥から順番に木々が枯れていつてる。

だったらこの奥に森を枯らしている原因がある。俺とグラフは枯れた森を進んだ。

「ユリウス、これって……。なんなんだ……。？　こんなの、おかしいよ……」

進むと枯れる枯れたどころではなくなっていた。草木が白い灰と なって崩れ落ち、瑞々しい土だったはずの大地が、白い砂漠に変わ り果てていた……。

「知っている……」

「心当たりがあるのか？」

「昔、都市長から、聞いた……」

「ユリウス、大丈夫。落ち着いて、焦らなくても大丈夫だから」

息が乱れて、また情けなくもグラフに慰められてしまった。俺は

呼吸を落ち着かせて、言葉にならない言葉を頭の中でどうにかまとめて、彼女に俺の知る事実を伝えようとした。

「都市長が言ったんだ……。昔、遠い昔……シャンバラが滅びた日……。その日、森も、建物も、何もかもが白い灰になって、全てが崩れ落ちたって……」

似た現象に見える……。大地が白い砂に変わるなんて、こんな怪奇が他にそうそうあるとは思えない……。

「ユリウス、あくまでそれは可能性だよ。それにこれが当時と同じ滅びだからって、覆せないとなんで君が決められる？ ボクの知る君なら負けない。しっかりしてくれ！」

そう俺に言うグライオフエンの声は震えていた。【滅び】が恐ろしいのは俺だけではなく、彼女だって同じだと気付くと、やっと身体に血の気が戻ってきた。

俺は馬を降り、滅びゆく森を見回した。今すぐこれを止めなければ、最悪は全土を飲み尽くす。

そんな結末はお断りだ。

「ここからは俺単独で動こう。グラフは報告に戻ってくれ」

「ダメだよっ！ 君はこういうとき、必ずバカをするやつだ！ ボクには今の君が冷静とは思えない！」

「大丈夫だ、ただの偵察だ」

「この奥で森を枯らした力が動いているんだろ！ 近付くだけで危ないじゃないか！」

「だからこそ確かめるんだ。この先に存在するモノに近付けるかどうか。確かめるなら転移魔法使いの俺が適任だ」

「ユリウス、君は……この先に何かがあるか知っているの……？」

都市長は言っていた。シャンバラ王国が滅びはその場所から始まった。とても偶然とは思えない……。

気持ちを落ち着かせ、グラフの問いに返事を返すために顔を上げた。

「俺たちは最初にそれを『迷いの砂漠そのもの』と呼んだ。そしてその後『謎の地下遺跡』とも呼ぶようになり、そこがシャンバラの『滅びし都』であることを知った。都市長はその時に言った、かつて都であったあそこが『爆心地』であると」

落ち着いて考えればどうってことなかった。爆心地であるあの地を刺激することを恐れて、結局あの遺跡の調査は中断になった。もう一度、シャンバラが滅ぼした何かが始まる可能性があったからだ。

「あの遺跡が原因……。それは、調べてみる価値があるな……。そしてそれは、一瞬で目的地にたどり着ける君にしか出来ないことか……。わかったよ、ボクは戻るよ……」

「グラフ いや、グライオフエン。情けないところを見せたな」

「ふっ……君も弱気になるんだな。意外とかわいらしかったよ」

少しの間だけ手を結び合ってから、グラフと別れて転移した。

あの遺跡はここからほんのちよっとの距離だ。保険として枯れ木を持ち込んでそれを足場として敷いて、真っ白に枯れ果てた砂漠に降り立った。

そこで俺は見た。あの地底に眠る遺跡を中心に、大地が灰のように真っ白に染まっっている様を。

かつてシャンバラ王国を滅ぼした災厄、その爆心地は　俺が再生させた砂漠の国シャンバラへと再び牙を剥いていた。

滅びの日は、訪れていた。

だがそうはならない。俺はこの滅びを止めて夢を叶える。ここが爆心地ならば、迷いの砂漠を破壊してでも、シャンバラの滅びを止める。

あらゆる生命力を吸い尽くす滅びの力が、少しずつ広がっていた。



・6年目 滅びの都 - 開かずの棺 - (前書き)

今回含め、分割の都合で投稿文字数がしばらく乱高下します。

その後、色々あった。とてもでは一言では言い尽くせないほどの混乱がシャンバラを飲み込み、夢にあふれていたシャンバラの民を絶望のどん底に叩き落とした。最悪は、国を捨てることになるかもしれないからだ……。

栄華の絶頂にあったシャンバラは、再び伝説のシャンバラ王国のようにこれから滅びようとしていた。誰もが情緒不安定で、口を開けばギスギスとしていた。

誰もが一度は報告を疑ったが、実際に白く枯れ果てた森をその目で見ると、破滅が近付いていることを確信した。

都市長は倒れた。ショックのあまりに寝込んでしまった。これまでの過労と重なっただけで、命に別状はないそうだった。

「ふがない私をお許し下さい、ユリウスさん……」

「そんなことはない。こうしてアンタに倒れられると、今日まで支えられていたことを実感するよ」

「ふふふ……。必ず、明日までに動けるようにしておきます……」

「死なれたら困る。ほどほどにな」

「ユリウスさん、都市長を気づかってくれるのはありがたいのですが、そろそろ時間が……」

普段物静かな秘書、義兄さんも今日はやはり神経が張りつめていた。これから彼と俺はシャンバラの議会に出る。現在は一秒すら惜しい非常事態だが、行動に出る前に有力者たちを説得しなくてはな

らなかった。

「悪い。また来るよ、都市長」

市長邸を出て、行政区の奥に進んだ。その先に議事堂とそれに連なる設備がある。

俺と義兄さんは駆け足で舗装路を進み、凍えるような夜の冷え込みの中を議事堂まで休むことなく走り抜けた。

議会に飛び込むと、シャンバラの有力者たちの注目が俺たちに集まった。

「シヤムシエル都市長は来れない。だから彼の代わりに俺が来た。文句は言わせない」

誰からも文句はなかった。都市長には政敵だってそりゃいたが、その政敵すらも都市長の身を案じていた。内輪もめしている場合はなかったのもあるだろう。

それに彼は、デザートウォーカーにとって共通の祖父も同然の存在だった。

今日までシャンバラを守り続けたのは、シャンバラ王国の王子と共に滅びを免れ、砂漠と化した大地で生きる道を指し示した彼だ。だからこそ彼の精神は今回の悲劇に堪えられなかった。人生の全てを失ったようなものだった。

俺は彼の義理の息子として、議長席に立った。都市長を心配する声や、滅びへの不安の声が響き渡り、『どうかしてくれユリウス様』と各オアシスの有力者たちにすがられた。

「ある女が、迷いの砂漠は揺り籠だと言っていた。迷いの砂漠は未熟なエルフたちを守る保育器で、いずれエルフはこの揺り籠から抜け出して、立ち上がらなければならぬ」と

俺が言葉を投げかけると、彼らはまるでゲフェン王に従う小姓たちのように静粛した。ユリウス・カサエルならどうにかしてくれると信じてくれた。

同時に思う。オアシスで水浴びをしていたあの女は恐らく、俺の知るシエラハではなかったのだらうと。

「だがその揺り籠は、緑にあふれたシャンバラを白く染め上げている。俺たちを今日まで育てくれたその揺り籠こそが、古の王国を滅ぼした元凶だった」

誰もがわかつていることでも口にする必要があった。シャンバラを滅ぼしかねない不発弾たる遺跡、パンドーラの棺が発見された日より、こうなる可能性もあることが既に予測されていた。

「ヒューマンである俺が言う。俺たちヒューマンは短絡的でろくでもない連中だ。平気で人を食い物にし、友情を歌いながら隠し持ったナイフで相手を傷つけるような存在だ。エルフやネコヒトにとって、さぞ付き合いたい隣人だと思う」

現状、俺たちの前に選択肢は2つある。

1つは避難だ。他の部族たちがかつてそうしたように、シャンバラを捨てる。そして災厄が終わった後に、戻りたい者だけが戻る。多くの物を失うが、揺り籠である迷いの砂漠が残る。

「だがそんなもの、もう今さらだらう！ 転移門がヒューマンの国々とシャンバラとリンハイムを繋いだ以上、揺り籠の価値は既に

失われている！ よって俺たちがこれからするべき行動は、ただ1つだけだ！！」

そしてもう1つは

「破壊だ！！ 古代遺跡パンドーラの棺を破壊し、迷いの砂漠と引き替えに緑あふれる大地を手に入れる！！ 俺たちが取れる選択肢は、砂漠化の原因を破壊すること、たった1つだけだ！！」

言葉は人々の心に深く反響し、その口を大きく開かせた。誰もが口を開き、大きな叫び声を上げて俺の言葉に反応を返してくれた。大半が賛同で、残りは妥協やミャアミャアだった。

「これから俺はメグドジエムの改良と量産に入る。これにはシャンバラ全体の支援が必要だ。ありったけの爆弾をパンドーラの棺にぶち込み、機能を停止させる。都市長が築いた冒険者ギルドと連携して、彼の子供たちである俺たちの手で、この破滅を終わらせる。せっかく築いた緑の大地を、あんな骨董品なんかに奪われてたまるか！！」

俺は議会を焚き付け、彼らからの支援を取り付けた。勝利の鍵は物量と供給だ。爆弾に加工出来るありとあらゆる素材を工房に納入することに決まり、安定供給のために冒険者ギルドの活動も維持することになった。

いずれ拡大する被害地域への対応や、避難誘導。やらなければならぬことが山のようにあった。

「ようやく応援が来たようです」

「応援……？ んなっ……？！」

議長代理として義兄さんに支えながら話し合いを進めてゆくと、議事堂の扉がいきなり開け放たれて、そこにアリ元王子が嫁さんを引き連れて現れた。

「何を驚いている。この話、うちの町にとつても他人事ではない。せつかくあそこまで栄えさせたのに、このまま砂漠化などさせてたまるか！ 力を貸すぞ、ユリウス！」  
「ではアリ様、ユリウスさんはご多忙です。代わりに議長を引き受けていただけますか？」

「ああ、元王族の俺に任せるといい。彼らへの面識は、お前よりも俺の方が深いからな」

「恩に着るよ、アリ。同じツウィク人として、今はお前のことを誇りに思っている」

巨体のアリと握手を交わすと、ヤツは驚いたように身を震わせた。昔の俺たちは相性最悪の犬と猿だったが、今はもう違つ。

「お、お前は、誰だっ！？ 俺に、誇り……？ バカなっ、あのユリウスの言葉とは思えんっ！！」

「じゃ、後は任せた。義兄さん、アリはかなり短気だから上手く操縦してくれ」

「あの頃の俺と今の俺を同じにするなっ！！」

「思えばお互いバカだったな」

「フ……私もあの時のエリート風を吹かせた青年が、こんなに立派な方になるとは思いませんでした」

「ハハハッ、当時のユリウスは虚栄心の塊のようなやつだったから

な

「……それはお前にだけは言われたくない」

アリと義兄さんにもう一度感謝して、俺は転移魔法を用いてベッドの前に帰宅した。

「あ……」

だが俺のダブルベッドには、娘たち3人がひしめき合って眠っていた。彼女らの寝顔はとても穏やかで、アリとの昔話もあって気持ちが悪く過去に巻き戻っていた俺は、娘たちという現在をその目にした。

「やっと帰って来たな。起こす前にこっちに來い、詳しい話を聞かせてくれ」

「ああ……。ただいま、グラフ」

自分の寢室を抜けて、それから彼女に引っ張られて暖炉の前に腰掛けた。大きな毛布をグラフと一緒にかぶって、赤い炎を眺めた。メープルとシエラハは都市長のところだ。あの2人についてはそれが当然のことだった。

「皮肉なものだね。シャムシエル様が倒れたおかげで、君は平静を取り戻して覚悟を決めた。うん、今の顔の方がずっと男前で好きだよ」

「あ、ああ……。お前にも心配をかけたな……」

白い肌、透けるような薄水色の髪をしたエルフが、慰めるように頬へと口付けをくれた。彼女らしくないサービスだったが、今は非常事態だった。

「こんな時じゃなかったら、君を誘惑していたのにな……」  
「こんな時じゃなかったら、うっかりその誘惑に乗りかけたよ」

グラフは俺の帰宅を待っていてくれたのだろう。

だがそろそろ動かなくてはならない。時間が惜しかった。

「ダメだ、ボクが起こしてあげるから少し休め。ほらっ、少しだけでも寝るんだ！」

立ち上がろうとするとグラフに押し倒された。こんな時だからこそ気持ちが高ぶって、変な気を起こしたくなりかけた。

だが それ以上に頭と身体が疲労していたらしい。彼女に寄り添われながら目を閉じると、意識が崩れるように眠りへと引きずり込まれていた。

俺は、シャンバラを守りたい。大切な恩人たちの国と夢を。



翌朝、アルヴィンス師匠に揺り起こされた。

「よう、報告に来たぜ」

「なんだ、師匠ですか……。普通にそこの玄関をノックして、足ではなく手で起こして下さいよ……」

「この状況で贅沢言っんじゃねえよ」

師匠のその一言が俺を現実に戻した。

この厳しい現実さえなければ、起こすと言ってくれたのにそのまま眠ってしまったグラフとこうして寄り添いあって、今しばらくの幸福なまどろみを楽しめたというのに。

「報告というのは？」

「メギドジエム。やっぱりありゃ、とんでもねえ代物だ……。俺たち転移魔法使いでもない限り、誰も使いこなせねえだろうな」

俺はグラフを起こさないよう慎重に毛布を抜け出した。

「まさか、使ったんですか、あの遺跡に？」

「アリの判断だ。今すぐ止められるなら、止めるに越したことはねーだろ？」

そう指示しなかったのは、破壊出来るとは思えなかったからだ。パンドーラの棺は今日まで誰にも開けられなかった。

「どうなりましたか？」

「失敗だ」

「やはりそうですか……」

水瓶からコップ2つに水を移して、師匠の待つテーブルへと配膳してそこに落ち着いた。

どちらにしろ、一度爆破してみてもどれくらいの効力があつたか聞いておかなければならなかつたので、手間が省けた形だろうか。

「まあ全くの無傷つてわけでもねえ。備蓄の5発を一気に全部ぶち込んだら、遺跡の表面が融解した」

「具体的にどれくらいですか？」

「あー、熱したナイフでチーズの塊を軽く撫でたくらいだな」

「やはり改良が必要みたいですね」

「熱でやわらかくして、そこを爆裂属性を持った新型でドカンッ！  
つてよ、吹っ飛ばせばいいんじゃないかな」

「指向性をもつと高めた方がいいのかもしれない。ただどうやって近付くのかという、問題に行き着きますが……」

「俺もアレには近づきたくねえな……」

信じられない強度だ。そうそう簡単に破壊できるとは思っていなかったが、想像を上回る異常な強さだった。いったいそこまでして古のエルフはあの棺の中に何を隠したのだろう。

「情報助かりました。どうにかします」

「大丈夫か？ なんなら俺も手伝うぞ」

「師匠は師匠の得意分野で頼みます」

「おう。……で、具体的にデメエはどうするつもりなんだ？」

「ジエムを改良しながら大量生産します。あの遺跡が先に吹っ飛ばすか、俺たちが死の砂漠に飲まれるか、根比べです」

「ま、そうなるよな。ならこっちはツワイク王に掛け合って、宮廷魔術師を工面してもらおう。はははっ、爆撃は俺ら転移魔法使いに任せとけ」

そのツワイクの宮廷魔術師と、これから改良されるメギドジエムが組み合わさったら、過去最悪の殺戮部隊が生まれてしまう。師匠とはそのことを話し合って、管理を徹底してもらおうことになった。

・

昼前になるとこちらの台所事情を心配して、シエラハが一時的に戻って来た。

バナナしか食べていなかった俺とグラフと娘たちは、彼女の作る少し早めの昼食を食べて、また忙しく工房へと戻った。

「ふう、ふう……っ、ユリウス様、お届け物です……っ！」

「今日はこき使って悪いな、ラウリィ。うわ、汗塗れだな……大丈夫か？」

朝から次から次へと素材が納入されて、俺はそれを湯水のように消費していった。

錬金術師ウルドとその姉妹は俺の日常業務を代行してくれた。大

量破壊兵器の製造を、やさしいあの子たちに手伝わせたくなかった。

「はいつ、目が回ってます！ 大丈夫です！」

それは大丈夫じゃないやつだぞ、ラウリイ。

「ラウリイは少しこっちに寄って休んでいってっ、ほら早くおいでっ！」

「むふふっ、美少年の汗はエロいのう！」

「スタミナポーション、もう少しで出来るから待っててね、ラウリイくん……」

ラウリイは俺よりおじさんのはずなのに、娘たちと同年代のように打ち解けている。

エルフっていうのは不思議だなとしみじみ思いながら、俺は世界を滅ぼしかねない危険な爆弾を、よりえげつなく改良しつつ大量生産していった。

「待たせたな、ユリウス！」

「アルヴィンス様から聞いたよ、派手な花火をやるんだってね！」

それからまた少しすると、古巣のツワイク王国から宮廷魔術師がやって来た。

彼らは俺が用意した改良型メギドジェムを受け取り、その美しいが危険な輝きをそれぞれの気持ちを胸に眺めた。

「みんな、来てくれたのか……」

「あちちつ、しかしこの国あつついなっ?!」

「そんな黒いローブを着ているからだ。そいつはシャンバラでは、ポータブル蒸し風呂装置だぞ」

黒いローブがユニフォームのツワイク宮廷魔術師は、急遽黄麻のローブに着替えることになった。彼らはこれからアルヴィンス師匠と合流し、空中に転移しての爆撃を行う。

俺が世界を滅ぼし得る爆弾を作り、彼ら元同僚がそれを投下する。こちらが力尽きるか、パンドーラの棺がぶっ壊れるまで、この作戦は続くことになる。

「危険な仕事を押し付けてすまない。せめて派手な花火を楽しんでくれ」

「気にすることはないよ。我々宮廷魔術師が、ツワイクとその盟友に尽くすことは当然の職務だ」

「アルヴィンス様とまた一緒に働けるなら、俺はなんだっていい！」

これは破壊力と物量に物を言わせたムチャクチャな作戦だが、実際にこうして決行してみると、最高にド派手でスリリングな刺激あふれる戦いでもあった。

「師匠はこっちじゃただの酒臭いスケベオヤジだ」

「はっ、ならツワイクの頃となんにも変わらないな！」

シャンバラを再び砂漠に変えようとするならば、こちらだってそちらを灰燼に帰してやる。

この日より絶え間ない爆発音が、シャンバラの空に轟くことになった。

俺たちはどんな手を使っても、後にどんな時代が訪れようとしても、今の光り輝く栄光の国シャンバラを守りたかった。

・6年目 滅びの都 - 宮廷魔術師 - (後書き)

更新遅くなりました。書籍版の改稿で忙しくしています。

丁寧に丁寧に仕上げていきますので、どうか発売しましたら応援して下さい。

(カマカマ野郎ことカームスさんは、大人の事情でカマ的表現が難しくなりましたので、別のカマ野郎になっています)

シャンバラの大地は日を刻むたびに死の砂漠へと飲み込まれていった。5日目にはシャンバラの穀倉地帯である氾濫川まで干上がり、マリウスと共にせっかく苦勞して作った地下水路までもを枯らした。

数多くの迷宮が飲み込まれ、素材集めにそこに近付くことすら不可能になった。避難民がうちのオアシスにまで集まって来て、都市長が毎晩うちの暖炉で夜を明かすことになった。

市長邸を避難民に全て貸し出してしまっなんて、都市長は相変わらずの人柄だった。

悲劇的な戦いになった。仮にあの遺跡を破壊出来たところで、シャンバラはこれから立ち直るのに多くの時間を労するだろう。

それでも俺たちは諦めずに、遺跡への爆撃を続けた。可能性が見えてきたからだ。

絶対に破壊出来ないのではないかと一度は諦めかけたが、ガラスの大地と化した爆心地の中心核で、遺跡の外壁が剥離し、日に日に壁がえぐり取られてゆくを見ると、逆転勝利を俺たちに期待させた。

爆破。爆破。爆破。世界を滅ぼしてしまえそうなほどの圧倒的な破壊の後に、俺たちはようやく、7日目にて成果を手にすることになった。



「宝箱の鍵がやっと開いてくれたぜ。ちょっとツラ貸しな」

夕飯は塩漬け肉を使ったオートミールだけの粗末な物になった。その昼食の場にアルヴィンス師匠が現れて、都市長と俺を肌寒い外へと誘った。

「壁の破壊に成功したぜ」

「おお、本当ですか……!？」

「おう、ついにやった。ただ……妙なんだよな」

「妙と言われても、それを説明するのが師匠の仕事でしょう」

額面通りに受け取ればこれは朗報だ。硬い外壁が破壊されたのだから、内部を攻撃するチャンスだった。

改良型メギドジエムによる爆破は日没で一時停止となるスケジュールなので、なにか理由があつて夜まで報告が遅れた形になる。

「うっせー、バカ弟子。こっちは爺さんをぬか喜びさせたくねえんだよ……」

「貴方との友情に感謝を。ご心配をおかけしました」

「おう、心配したぜ……。でよ、報告が遅れたのは調査をさせていたからだ。壁をぶち抜かれてビビったのか知らんが、砂漠化が止まりやがった」

「そういうことでしたか。それは妙ですね」

妙というよりも俺は既視感を覚えた。

迷いの砂漠が消えたときもそうだった。俺たちが迷いの砂漠の源

である遺跡を発掘すると、慌てて気を変えたかのように迷いの砂漠が復旧した。

俺たちはそれにまんまと騙され、大切な国土を死の世界に変えられた。

「で、外はドロドロの溶けたガラスの大地だけだよ、中は平気そうだったんで転移してみたんだ。そしたらよ……。中は青白いガラスみたいな壁で覆われててよ、扉が1つと、石のパネルが1つあった。パンドーラの棺の中身はよ……。まるで迷宮みたいだった」

それは困る。本当にそれが迷宮だったとしたら、砂漠化をもたらしている中枢部が爆発の届かない深層に存在していることになる。メグドジエムを直接精鋭が持ち込んで、その奥深くで発動させなければ、確実な破壊とはならない。

「パネルにはなんと？」

「『黒曜石。トパーズ。無色のコランダム。その父親のみ入場を許す。この地を救いたくば招きに応じよ』ってあったけどよ、どうもよくわからん」

師匠にとってはそうでも、俺と都市長にとっては身に覚えのあることだった。

シャンバラの大地を初めて踏んだあの日、メーブルと一緒に初めて攻略した迷宮で、キマイラが3つの宝石を落とした。

それは黒曜石と、金のトパーズ。銀とも言えなくもないコランダムだった。

メーブルたちはそれを神の思し召しだとか、運命だと解釈した。迷宮の奥にいる存在は、俺たちしか知らないこの事実をなぜか知っ

ている。

俺は薬指にはめられた黒曜石の指輪を、師匠の鼻先に差し出すように見せつけた。

「俺が黒曜石。シエラハがトパーズ。メイプルが色のないコランダムだった。そしてその共通の父親といえは、他にいない」

「懐かしさのあまりに涙が浮かんでしまいそうですよ……。ですが、なぜ私が指名されたのでしょうか……」

「そりゃ、爺さんとバカ弟子を殺せばシャンバラは終わるけどよ。なんか、妙だな……」

パンドーラの棺は確実に破壊しておきたい。

俺が寿命を迎えた後も、シャンバラは緑の大地でなければならぬ。今こうして機能を停止していても、また動き出すようでは困る。

パンドーラの棺の内部に存在するモノと、俺たちは相容れない。

「都市長たちは入り口だけでいい。奥は俺だけで片付ける」

「はっ……ま、妥当だな。爆破するなら他の連中は足手まといだ、テメエが吹き飛ばして来い」

「いえ、私たちも参ります。メイプルもシエラハゾも、決してそこは譲らないでしょう」

俺たちはパンドーラの棺を消さなければならない。それは迷宮という別世界の壁に阻まれていて、外側からの爆破では中枢を取り除くことが出来ない。

この現象を放置すればシャンバラは滅びる。今は停止していても、

きつとまた再発する。永遠の緑野を望むならば、俺たちは自らと家族の命を賭けなければならなかった。

「俺とシエラハが前衛をやる。都市長は一番後ろだ、メープルよりも後ろに立ってくれ」

「ユリウスさん、私をそんなに年寄り扱いしないで下さい」

「いや立派な年寄りだろう、アンタはそこいらの古木に説教出来るくらい古いぞ」

「だからこそ頼りにして下さい」

「ま、今ばかりはしょうがねえのか……。おいバカ弟子、俺の大親友を怪我させたら熱々のガラスの海に沈めてやるからな。ううっ、さぶっ、早く中で暖まろうぜ！」

これは推測に過ぎないが、俺とシエラハとメープルを結び付けた何かが、パンドーラの棺の中で決着を望んでいる。この誘いに応じなければ、迷宮に立てこもる敵を倒すことは不可能だ。

俺たちは罫である可能性も承知の上で、未来のために進むことに決めた。敵がもし己の意のままに迷宮の入場制限をいじれるならば、誰も入ってこれないようなルールを提示するはずだ。

俺たちは家の中に戻り、子供たちを遠ざけてこの話をシエラハたちに伝えた。

「ハブられたような気分だ……。なんでそこにボクを加えてくれな  
いんだっ！！」

それはきつと、俺が中心じゃないからだ。

都市長、あるいはシエラハがこの招待の主賓なのだろう。そう言

ってグラフを慰めてやりたかったが、伝えるチャンスに恵まれなかった。

投稿が遅くなつてすみません。現在、書籍版の改稿に追われていま  
す。

次話は文字数控えめ。次々話の更新は遅れるかもしれませんが。  
書籍版はウェブ版の雑だった部分を中心に、全面的な改稿、加筆修  
正を施していつてます。多くの時間と労力を傾けて、買って損のな  
い1冊に仕上げますので、どうか応援して下さい。

パンドーラの棺は開かれた。翌日の夜、俺たちは艶やかな薔薇の大輪となったガラスの大地を訪れ、その虹色の輝きに目を奪われた。夜まで待ったのは休息を取って万全を期してのもあったが、ガラス化した大地の冷却を待つためでもあった。

「不思議な感覚ですね。これから死地におもむくというのに、少しも怖くありません」

「大丈夫……いざとなったら、ユリウスと一緒に……私たちみんなで、迷子になればいい……」

「ダメよっ、子供たちが悲しむに決まってるでしょ！」

「あ、忘れてた……」

「いや、自分の腹を痛めて産んだ子を忘れるなっ……」

俺たちはガラスの大地を歩き、滅亡の寸前に引きずり込みかけた憎き遺跡を見た。ドロドロに融解して見る影もなかったが、壁にポツカリと暗い空洞が生まれている。

「みんなしっかりしてるし……大丈夫。私とユリウスより、しっかりしてる……」

「まあ、それはあるかもしれないが……。縁起でもないことをそれ以上言うな」

メーブルは俺の苦笑いが大好きだ。嬉しそうにこちらに微笑み返して、危険なガラスの大地を後る歩きで歩いた。

「危ないわよつ、一面ガラスなのよつ!？」

「ええ、刃の道を歩いているようなものですよ。メーブル、危険ですのでちゃんと歩きなさい」

「ん……じゃ、ユリウスに足払いを……」

「旦那を殺ろうとするな」

美しいが恐ろしい大地を進み、俺たちは棺の内部へと入った。

その構造に俺とシエラハは見覚えがある。互いに目を向け合い、確信した。エルフの女王と邂逅したあの場所にそっくりだった。

扉の前に立つと入場制限が満たされた。何人たりとも侵入を許さなかった古の遺跡が、ゆっくりと開いて俺たちを奥へと招いた。

「ご心配なく。私たちがここで死んでも、万事つつがなくことが運ぶよう工面しておきました。私たちはここで全力を尽くし、奥で待つ存在と決着を付けるのみです」

都市長は奥で何が待っているのか既に察していた。彼が選ばれたのは、今日までの時代の観測者だったからではないかと思う。

率先して俺とシエラハが並んで迷宮の扉をくぐり、光の向こうの世界に入り込んだ。その先の世界も外側と同じ冷たい水晶なようなもので構成された場所だった。

「ユリウス、この迷宮かなりまずいわ……」

「そうらしいな。おっと……大丈夫か、メーブル?」

「うん、わざとだから……大丈夫……」

腰にしがみついたメーブルを引っ張りながら迷宮を進んだ。構造は子供たちと攻略した迷宮のようにシンプルだ。すぐに1つ目のフ



ロアに行き着き、扉の向こうをうかがった。

フロアにいたのはキマイラが1体だ。メーブルと一緒に潜ったときもコイツがボスだった。

「コイツ、また金と銀と黒の宝石を落とすかもな」

「運命だと、思ったのに……」

俺たちは誰かに作為されて結び付けられた。理由は、会ってみないとまだわからない……。

・6年目 夢の在処 - 棺の奥で俺たちを待つモノ - (後書  
き)

書籍版初稿、まだ完成していません。

次回更新、次回投稿日に間に合いません。気長に待つて下さるとあ  
りがたいです。

こんなところで消耗してやる義理はない。即座にキマイラの背の上に転移した俺は、鷲の姿をしたその背に『ある失敗作』を張り付け、ただちにそれを起動した。

すぐさまシエラハの隣に再転移した。『失敗作』はほんの一瞬の間を置いて大爆発を起こし、さながら赤く巨大な槍となってキマイラを貫き、もの一瞬でその全身を炭化させていた。

「な、なんと……っ?!」

「もうっ、やるならやるって言うてっつて、いつもいつも言うてるじゃないっ!」

「マジ同意……。マジ、ドン引き……」

なんだか懐かしいリアクションだ。姉妹の抗議に笑顔で返して、キマイラがドロップに変化してゆくの見届けた。

あれは指向性を高めたメギドジエムだ。槍のように一方向にだけ力が発動する特殊なタイプで、あまりに起動が早過ぎたせいでパンドーラの棺の破壊においては失敗作だったが、奥の手としては格別だった。

「黒曜石……トパーズ……色のないコランダム……。私たち、おちよくられてる……?」

「大きさもあの頃の全く同じだわ……」

ドロップの方はまあ予想がついていた。姉妹とその義父は黒曜石

とトパーズとコランダムを囲むように見下ろして、とても難しい顔をしていた。

「まるで見てきたかのように、あの頃そのままの形ですね……」

「そうね……。でもそんなこと、あり得るのかしら……」

「そんなことを考える必要はない、俺たちはからかわれているんだ。さあ行こう」

シエラハの背中を強引に押しして、フロアの先にのぞく階段に向けて進んだ。昔は自分からこの美しい人に触れるだなんて、そんな恐れ多いことはとても出来なかった。慣れとは恐ろしいものだ。

「次は、あのヤドカリかしら……?」

「ヤドカリ?」

「もう忘れちゃったの? マク湖の下にあった迷宮を攻略したときに、大きなヤドカリが現れたじゃない!」

「ああ……完全に忘れていた。磯臭い思い出だな」

「しかし何やら、奥からその磯臭い香りがしませんかな?」

「あ、ホントだ……」

2層目は水晶の迷宮の一部が水没していた。水に沈んだ水晶が複雑に光を反射して非常に美しかったが、行けば行くほど腐った海のような臭いが濃くなっていった。

そして案の定だ。殻を持つ巨大ヤドカリ。ハーミットクラブが奥で俺たちを待ちかまえていた。

「もうっ、なんだかイライラしてきたわ! ここはあたしとメープルにやらせて!」

「姉さんがそう言うなら……。守備力弱体!」

メーブルが弱体魔法を放つと、ハーミットクラブが突撃してきた。重戦士シエラハはその突撃に対して迷いなき前進で迎え撃ち、腰から今日のために用意した禁断の剣を抜いた。

巨大なハサミがシエラハを狙って落ちてくる。だがそのハサミは、次の瞬間には漆黒の残像と共に両断されていた。

「あの頃とは、もう違っのよっっ!!」

「おお……。カニちゃんの、輪切り……。完成？」

シエラハが再び剣を薙ぐと、かつて結婚初夜に鞭から放たれたという真空波が発生した。それがハーミットクラブを真っ二つにして、さらには奥の水晶の壁までザクリと砕いた。

「私の出番がありません……。当時あんなに小さかったあの子が、怪物を一撃で屠るようになるとは予想しておりません。お見事です、シエラハゾ」

「オド王からラストエグザイルを借りてきたかいがあったな」

シエラハが今おっかなびっくりと鞘に戻しているのは、あの石だろつと鉄だろつとなんでも斬り捨てる魔剣だ。中二心がくすぐられるオシャレなデザインと闇のオーラと残像が浮かぶ男の子のロマンだ。

「ライジングサンじゃなかったっけ……」

「はて、ニンジャギルティとおっしゃっていたような気がいたしますが……」

「や、止めてよっ、使ってるあたしが恥ずかしくなるからそれ以上は言わないでっ!!」

ヤドカリの死骸は光となって2つの宝箱に変わった。1つは大きなもの、もう1つは小さな銀の箱だ。

「ハジメマシテ、ワタシハ（・ー・）」

「ニアだろ」

「ニアですね」

「ニアって、なんなんだろ……」

小さい方の中身は正体不明の白い手乗りゴーレムのニアだった。そして大きい方は絹だ。純白と薄桃色の絹がそこに収まっていた。

「ア、察シマシタ。シルク、持ツテ、帰リマスネ、ジョン（・・）」

「だから、俺はジョンじゃない……ユリウスだ……」

新しいニアは小さな身体で大きな宝箱を抱えて、迷宮の出口へと去っていった。

「わけがわからないわ……。ニアまで現れるなんて、こんなことってあり得るのかしら……」

「あの絹も、多分同じやつだった……。なんか、嫁としてのアイデンティティ、失いそう……。あてっ!？」

メープルの額を小突いて先に進んだ。

こんなものは茶番だ。仮に俺たちの婚礼をそそのかしたのが迷宮の奥にある何かだったとしても、遅かれ遠かれ俺たちは惹かれあっていた。

この調子ならば3層目にあのキングルインタートルが現れる可能

性がある。あの自爆亀を爆破するのは楽しいので、段々と青ざめてゆく隣のシエラハとは反対に俺の足取りは弾んだ。

「あれは、ラットマンですな？」

「ツツ……！？」

だが3層目に現れたのはネズミの姿をした怪物ラットマンだ。

シエラハとメーブルにとっては、その怪物はトラウマも同然の存在だった。直ちに俺は転移して、背後からラットマンの急所を貫いた。ドロップは何もなかった。

「シエラハ、大丈夫か？」

「え、ええ……平気よ……」

シエラハとメーブルは互いに抱き合い、都市長は何かを察したように言葉をつぐんでいた。

かつて土の迷宮を下ったシエラハは、あのラットマンに足を傷つけられ、石化毒を受けて死にかけた。

「俺たちの冷静さを奪うのが狙いなら大成功だな。怒りで我を忘れかけた」

「なるほど、そういうことですか……」

順を追って考えれば、迷宮での事情を知らない都市長でも察せることだ。俺たちの婚姻が作意されたものならば、あの石化毒もまた意図されたもの。迷宮がそう言っているようにも感じられた。

「ふふ……凄く怖かったけれど、今では大切な思い出よ。あなたのあの告白は、今でも一句一句復唱できるわ」

「姉さんが何度も言うから、私も覚えちゃった……。素敵だよね……」

∴。死ぬな、シエラハ　あてっ?!」  
「頼む、それだけは勘弁してくれ……」

都市長にやさしい顔で笑われた。親代わりのこの人を喜ばせたくて、俺たちは今日までがんばってきた。だから彼の笑顔を見ていると平静が戻っていった。

「私も一句一句正確に復唱できますが、どういたしましょう?」  
「う、嘘だろ……」

「ご、ごめんなさい……。あたし、あの時つい嬉しくて……」  
「ワロタ……」

「笑えねーよっ?!」

「だって、あんなに情熱的に誰かに愛してもらえるなんて、それって一生に一度あるかもわからない素敵なことじゃないっ?!」

「わかった……わかったからこの話題はもう勘弁してくれ……」

「その顔、しばきたい……」

「しばくな……」

俺だけが知らない衝撃の真実に愕然としながら、俺は彼らと共に次の階層へと下っていった。

都市長にまで知られていたなんてショックだ。羞恥の涙が目に熱く浮かぶのを感じた……。

「えっと……鏡?」

「なんだか変な感じね……。敵はいないみたいだけれど……」

4層目は合わせ鏡の部屋だった。



鏡の向こうから現れたりしないかと、シエラハは剣に手をかけたまま辺りをうかがっている。

「えっ、都市長……だいじょうぶ……!? あ……………」  
「メーブルツ！ ユリウス大変っ、二人が変だわ！」

都市長が膝を突き、それをメーブルが支えようとして一緒に倒れた。

確かに変だった。二人は目を見開いたまま、なのにもまるで眠っているかのように動かなくなってしまった。

「うっ…………?!」  
「ユリウスッ！ そんな、あなたまで……っ、ユリウスッ、ユリウスッッ！！」

激しい眠気に俺まで立っていられなくなった。俺はシエラハに飛びつくように抱き支えられながら、強烈な眠気に逆らい切れずに目を閉じた。

迷宮にこんなトラップがあるだなんて、聞いたことがない……。

それは自分が深い闇の底へと引きずり込まれてゆくような、これまで体験したことのない奇妙な感覚だった。

・6年目 シュレンディングアの錬金術師 - ハジメマシテ、  
ワタシハ - (後書き)

長らく更新が滞って申し訳ありません。初稿が完成しました。  
今日より三日に一更新で再開いたします。

世界は変わった。そうする他になかったとはいえ、俺たちは世界を変えてしまった。

昔々、タンタルスの襲撃に対抗するために世界を一つに繋いだ時代があった。それは今から30年も昔のことだった。

俺は老いた。黒かった髪は白髪だらけとなり、みずみずしかった肌には深いしわが刻まれた。黄金時代が過ぎ去り、終わりが近づいているのを肌身で感じていた。

「裏切り者!!」

「それだけの力を持ちながらなぜエルフどもの味方をする!!」

「ユリウスッ、お前は俺たちヒューマンの裏切り者だっ!!」

たった30年で世界は変わった。魔力を持つ者と持たざる者の格差が深まり、やがてそれはエルフとヒューマンの対立 いや、魔力を持つ者と持たざる者の戦いに発展した。

うなる時代の奔流に俺たちは飲み込まれ、転移門がもたらすネットワークは俺たちの手に余る強大な力となっていった。

「すまん……」

「謝って済むものかつ、全てお前が悪いんだ!!」

「そうだ!! お前があんな物を作り出さなければ、世界は古きよき時代のままでいられた!!」

「お前が俺たちヒューマンを奴隷に変えたんだ、ユリウスッ!!」

捕らえられた反逆者たちは、女王シエラハの目の前で俺を糾弾した。

俺もシエラハもいつかこうなることを覚悟の上で、世界を一つに繋いだ。タンタルスに俺たち魔力を持つ者たちが奴隷にされるよりマシだと信じた。

「申し開きようがない。俺はそれが正しいと思って世界を繋いだ。今でもこの世界の混乱をどうにかしたいと思っている……」

娘たちはもうシャンバラにはいない。俺とシエラハに愛想を尽かしてここを去っていつてしまった。

幸せな未来が待っていると信じていたのに、全ての予定が狂ってしまった。

「女王陛下！ 例の物が到着いたしました！」

シエラハは変わった。グラフとメープルが最大の原因だ。和平交渉のために尽力していた二人もまた、もうここにはいない。

「ユリウス、これで戦いは終わるわ……。これで、やっと元通りになるの……」

「何を言っているんだ、シエラハ。もうあの頃には戻れない。俺たちは、とんでもない過ちを犯し」

何かが見聞の間に届けられ、反逆者たちの顔色が凍り付いた。

不審に思い、彼らの視線を追う。するとそこには、俺の大切な家族の首があった。

「他になかった。こうするしかなかったのよ、ユリウス……。あたしはシエラハ・ゾーナカーナ・テネス。偉大なる始祖様と同じ姿、

同じ名前を与えられて生まれた。あたしには、エルフを守る義務があるの……」

それは、反逆者マリウスの首だ。自らが生み出した物が激しい対立を生み出したことに、マリウスはいつしか深く気に病み、やがて彼女は俺たちと袂を断って反乱軍のリーダーとなった。

「お、俺、は……」

「ごめんなさい、ユリウス。あなたのためよ……あなたを守りたいからあたしはこうしたの。あなたのためだったのよ……」

俺は塩漬けの首を胸に抱き、激しい慟哭に絶叫した。あの頃に帰りたい。あの誰もが笑顔だった時代に帰りたい。そう願っても悪夢から覚めることはなかった。

転移門は俺たちを異世界からの襲撃の恐怖から救った。だが、巨大すぎる力はいっしょか世界そのものを混乱の渦に飲み込んでいった。

「ジョン（・・）」

「ジョン、ジョン、ジョン？（？！？）」

「ジョン、ジョン、ジョン、ジョン、ジョン、ジョン、ジョン、ジョン、ジョン、ジョン？（・・！！）」

いや、それは悪夢だった。俺は荒れ狂う船の上で転がっているかのような感覚に飛び起きて、自分が変な生き物たちに担がれて、揺すられていることに気付いた。

「ニア……なっ、なんだお前っつ?!?!」

「ジョンジョンジョンジョンツ、ヨカッタ!! (T-T)」

それはニアの群れだった。ざつと50体を超えるニアたちが俺を立ち上がらせてくれた。俺の足下で、まるでカニの群れみたいにワチャワチャとしていた。

「……助かった。本当に助かったよ。悪いが都市長とメープルも起こしてやってくれ」

「ヨロコンデ(= =)」

二人をニアたちに任せて、シエラハを揺すり起こした。どんな悪夢を見ているのか、もしかしたら俺と同じ夢を見ているのではないかと気になった。

「あ……ユリウス……?」

「よう、余裕のない寝顔だな、酷い悪夢でも見ていたか?」

「ユリウスツツ!! よかったっ、あたしっ、ユリウスが死んじゃった後の世界に……っっ」

「夢だ。俺は死なない」

震えるシエラハを抱き締めると、彼女が鼻を鳴らして涙を流す声が聞こえた。

俺も安堵した。シエラハの鳴き声と震える身体は、あんな未来にはしまいと俺に決意を新たにさせるのに十分だった。

「大丈夫か、都市長?」

「ええなんとか。……しかし酷い夢でした。私が追放したあの男が、

タンタルス族となつて帰ってくる酷い夢を見ました……」

「私は……都市長に拾われない夢、だった……。遠くから、あのスラムから見ているの……。ユリウスと姉さんの、幸せな結婚を……。でも、私はそこにいない……。羨ましくて、ひもじくて……。最悪の気持ちだった……」

「お前らしい悪夢だな。ニアが守ってくれなかったら危なかった」  
「テへ……（・へ・）」

なんて意地の悪い迷宮だろう。俺たちに悪夢を見せてどうするつもりだったのだろう。

ニアが起こしてくれなければ、俺たちは死ぬまで悪夢に苦しめられることになっていた。

「ア、ジョン。コレ、拾ツテ、キマシタ。オ納メヲ……（・へ・）」  
「この展開も昔にあったような……な、なんだとおっ!？」

ニアたちは腰に小袋を結び付けていた。そのうちの1つを受け取って開いてみれば、中にあの白金貨が入っていた。

忘れもしない。この白い金は白銀の導き手となって迷宮発掘の助けとなった。

「凄いっ、凄いわ！ あの綺麗なコインがこんなにいっぱい！」

「ありがとう、ニア……超嬉しい……！」

「しかしなんなのでしょうね、このニアさんたちは……？」

袋1つに5枚。それが50を超える個体数分あった。

「ニア、これから俺たちは決戦に向かう。悪いがその白金貨を家に持ち帰っておいてくれ。俺たちもこの戦いが終わったら地上に戻

る」

「ハイ、スベテ、存ジテマス。ゴ武運、ヲ……（――）」

ニアたちが白いカニの群れのようになって合わせ鏡の間を去った。

俺はいつまでも離れないシエラハをもう一度抱き締めて、あの悪夢を思い返した。あの未来が現実になる可能性は決して低くない。

ハッピーエンドでこの戦いが終わっても、いずれこれまでの無謀な革新のツケを払う日がくるだろう。ポーションの工業化が錬金術師を墮落させ、彼らを誇りなき労働者に変えたように。

だから俺は

「ユリウス……ねえ、この戦いが終わったら……」

「ああ、わかっている。俺もそうするべきだと思う」

あんな不幸な未来は認められない。マリウスともよく話し合っただれからのことを考えよう。

転移門に依存しすぎた世界はやはり危険だ。

「ふふ、そう言ってくれてよかった……。二人目……ううん、4人目を作りましたよ……」

「……えっっ！？」

「その話……乗った……！！」

あ、あれ……？

シエラハとメープルは既に完全にその気で、都市長もいったいどれほど恐ろしい悪夢だったのやら、涙を浮かばせて話にうなづいていた。



俺たちは悪夢を見せられた。だがそれは同じ悪夢ではない。悪夢は俺たちの背中を後押しして、その先にある未来を見つめさせていた。

夢の世界の俺は老い果てていた。あんな姿になる前に、やるべきことをやっておくべきかもしれない……。

・6年目 方舟の女王

そこから先の戦いは単純にして単調。よって割愛しよう。  
異常な域まで単純強化された迷宮の怪物たちを、俺たちは斬って  
爆破してそのドロップの上をひた進んだ。

かつて闇の迷宮を進んだときに用いた携行食糧と、大気中の水を  
かき集める錬金術のアイテムが、長期の行軍を可能にした。  
かくして地下50階。そこまでやってくると、途端に迷宮は広々  
とした見たこともない世界に変わっていた。

「何、ここ……?」

「これは棺でしょうか……」

「何か誰が入っているわ! これも、それも、全部に!」

白い魔法照明で照らされるその空間は、六角形の筒状になってい  
る。その一辺一辺にエルフの眠る棺が配置されていて、それが遙か  
彼方まで果てしなく続く光景に驚かされた。

「変ですね。同じ顔が3つずつ並んでいませんか……?」

「なら、同一人物なのか……?」

さらに奇妙なのはそこだ。全くの同一人物にしか見えない顔がそ  
こに3つずつあった。エルフたちが呼吸をしている様子はない。だ  
が死んでいるにしては血色が正常に見えた。

「姉さんっ、どうしたの……っ?」

「あ……ううん、ちょっと、クラクラとしただけよ……」

シエラハの側に寄って、メープルと一緒に気づかった。都市長は難しい顔だ。難しい顔でガラス越しに棺の死体を眺めていた。

「これは砂漠デザートウォーカーエルフではありません。森リーフシーカーエルフでもありません。それに見て下さいこの額の宝石を。直接、額から生えているように見えませんか……？」

「確かにそう見えるな。額に石を埋めるなんて変わった文化だが……ならこいつらは、どこの何族なんだ？」

「わかりません。こんな種族、私の果てしない人生でも、一度も……」

俺たちはその生ける墓標を進んだ。進んでも進んでも棺が現れ、同じ顔が3つずつ並んでいた。墓標と呼ぶよりも保管庫。そう呼ぶのが正しい気さえしてくる奇妙な場所だった。

「待つて、誰かいるわ！ あれは えっ……？！」

しばらく進むと、奥に遠い人影を見つけた。

それはシエラハだ。俺たちのすぐ隣にいるシエラハと全く同じ顔をした女がそこに立っていた。

「おい、大丈夫かつ」

「す、すみません、ユリウスさん……。ですが、あれは、まさか……」

それを見てよろけた都市長をメープルに続いて本当のシエラハが支えた。

「姉さんと同じ姿をした、別人……。つまり、始祖様……。？」

そつだ。そこにいたのはあの古の女王だった。彼女は俺たちの前までゆつくりと歩いてくると、敵意ではなくやさしい微笑みで歓迎した。微笑み方までシエラハと全く同じだった……。

「久しいな、シャムシエル」

「女王陛下……。っ、本当に、本当に貴女様なのですか……。っ！？」

都市長は姉妹をふりほどき、古の女王の足下に跪いた。敵か味方かわからないのに危ないというのに、彼にそんな迷いはなかった。彼は女王を信じていた。

「女王陛下か……。懐かしい響きだ。王都での生活がついこの前のように感じられる……。いや、あれほど麗しかった少年が今は老いさらばえたジジイか。これが亜種の宿命か……。」

「女王陛下……。？ 今、私を、亜種と申されましたか……。？」

「左様。そなたらは、『全て』、亜種だ。そなたらは本当のエルフではない……。」

「どついう意味だ、女王。その人は俺たちの大切な父親だ、傷つけるようなことを言うならば許さんぞ」

女王に怒りを向けると、都市長に不敬だと鋭い顔で諫められた。都市長にとってそれだけこの人は特別だ。だが、その特別な人は、シャンバラを滅ぼした原因の中枢にいる。

「ユリウス、わらわの夢を叶えてくれた太陽そのものよ、そなたがそう言うならばわかった。……。うむ、順を追って説明をしてやろう、ついてくるがよい」

「顔は姉さんだけど……なんか、全然違う……」

「ククク……わらわこそが本物。その女はまがい物だ」

「酷い言い草ね。もう少し敬意を払える人かと思っただわ」

女王の背を追って、都市長を先頭にして俺たちは歩いた。行けども行けども棺の墓標は終わらない。既に1000体は通り過ぎたようないきさえしてきた。

「わらわたちはエルフ。いや、そなたら亜種と区別するために、ここはコモンエルフと名乗ろう。ここで眠るエルフたちは、その全てがコモンエルフ。遙か果てしない過去の時代を生きた真のエルフたちだ」

「アンタもか？」

「ユリウスさんっ、言葉を慎み下さい！ この方は我々の女王陛下なのですっ！」

「構わぬよ、シャムシエル坊や。さて話の続きだが、彼らコモンエルフには寿命というものがなかった。その坊やのように老いるようなことはなく、永遠に生きることが出来た」

「それがアンタが当時そのままである理由か？」

「いや、わらわは特別だ。……彼らコモンエルフは力が弱く、魔法の力も今のエルフほど恵まれていなかった。病気や環境の変化にも弱く、誇れるものは知能と寿命だけだ」

まるで羨むように彼女は砂漠エルフたちに流し目を向けた。亜種と見下している割に、本当に羨ましそうな長い凝視だった。

「ある時代に入ると、世界中が毒で汚染されることになった。ほぼ

大半のコモンエルフが生き絶え、生き残ったコモンエルフたちはこの地下へと下った。いつか再び地上に帰れると信じてな」

「帰れなかったの……？」

「ああ、そうだ。エルフであることを捨ててもしない限り、地上には戻れなかった」

「エルフを捨てる……？ あ、だいたい、察した……」

終点が近いのか、女王はこちらに振り返った。シエラハにそっくりだったがやはり冷たい雰囲気だ。いや、冷たいと言うよりもとても悲しそうな姿に見えた。

「地上に戻りたい。そう願う者たちが13体のプロトタイプを作った。だがそのプロトタイプたちは、肉体は強いが知能に劣り、下等な動物どものように醜く老いる生き物だった」

「自分たち種族そのものを変えるだなんて、そんなことが本当に出るのか……？」

「出来る。だが猿に戻りたいと望む者がどこにいる……？ 獣のように老いに急かされながら生きたいとは、ここに眠る者たちは誰も望まなかった」

俺みたいなヒューマンからすればなんて贅沢な悩みだと言ってやりたくもなかった。こっちは100年も生きられない。俺だけが家族の中で一人だけ老いてゆく。同じ寿命を持ちたいと願わない日はない。

そう思うと、この女王の気持ちがなんとなくわかった。

「そろそろ気付いたであろう。ここは箱船だ。彼ら真のエルフを遙か未来の世界へと運ぶ箱船だ。いつか楽園で目覚める日を願って、

彼らはここで死にも等しい眠りについた」

「だったらなぜあなたは起きているの、始祖様？」

「夢を叶えるためだ。そのためにわらわは地上にシャンバラ王国を築いた。夢、全ては夢のためだった……」

通路の最後には大きな扉が待っていた。女王はそこまで案内するとまた俺たちに振り返り、俺とメーブルに左右を囲まれるシエラハに羨望の目で見た。

「さあ、中へ……」

「わっ、ビックリした……」

女王は壁へと後ろ向きに飛び退くと、幽霊みたいにその奥に透けて消えていった。

ゆっくりとその壁は音を立てて開いていつている。触れると冷たく、ちゃんと実体があった。実体がなかったのは、あの女王の方だった。

「都市長、戦う覚悟がないならここで留まってくれ。丸く収まるとは思えない」

「なぜそう思うのです……」

「あの女が、この事件の発端だからだ。あの女が俺たちの夢を止めて下さい、そんなはずがありません!!」

「ならここに留まれ！ この砂漠化があの子のせいだというならば、シャンバラ王国を滅ぼしたのもあの子だ！」

「そんな、そんな、はずが……」

一つ目の扉に完全に開き切ると、二つ目の薄い扉が巻き上がるように上へと上がった。

その先に俺たちは見た。巨大な怪物と化したエルフの姿を。

青いその肌がタンタルスたちに少し似ているが、こちらは不気味を通り越して神々しかった。シエラハの顔をした上半身だけの怪物が壁から生えていた。

誰もがシヨックを受けずにはいられない光景だった。

「醜かるう、シャムシエル」

「そ、そんなことはございません……。あ、貴女様は、尊きエルフの女王……。姿など、問題ではございません……」

「聴く美しいいい子であったが、老いさらばえたな、シャムシエル。現実を見よ……」

驚いたのは彼女の姿だけではない。おびただしい数の白の棺がそこに眠っていた。

もはやその光景だけでわかる。白の棺と俺たちが呼んだ古代遺物は、彼女たちコモンエルフが所有する技術だった。



## ・6年目 果てなき夢の終わり

「見覚えがあるな？ これはそなたらが白の棺と呼ぶ物。物体を別の座標に移動させる力を持つ。だがそれは、ユリウスとマリウスが始めたように、この世界を一つに繋ぐためではない」

あれ1つだけでも国家のパワーバランスをひっくり返すバランスブレイカーだというのに、こんなものがシャンバラの地下に100体以上も眠っていたなんて信じられん。

道理で転移魔法で内部へと入り込めないはずだった。

「わらわはこれを使って、時を巻き戻す」

「まさか……そんなことが可能なのか？」

「これこそがコモンエルフの夢だ。この世界のありとあらゆる物を、元通りの座標に転移させる。さすればそれは、過去に巻き戻ったも同じこと。我らコモンエルフは、もう一度あの頃に帰ってやり直せるのだ……」

転移装置の用途。それは移動や運搬のためではなく、今ある世界を元の形に変えるために存在すると女王は言う。そしてそれは、今の世界の終わりを意味する。

「白の棺はそのため世界中に埋められた。そしてこの装置のエネルギー源こそが、このシャンバラの大地だ……」

「女王、陛下……？ 今、なんとおっしゃいましたか……？」

「すまぬ。古のシャンバラ王国の滅亡も、都市国家シャンバラを蝕

む死の砂漠化も、原因はわらわだ」

「陛下……貴女は、我々を、ずっと……騙して……」

「そうだ！ わらわが欲しかったのはそなたら愚昧なる亜種どもの繁栄ではない！ わらわが望んだのは、後にも先にもこの白の棺を動かすためのエネルギーだけだっつー！」

「この女……、姉さんと同じ顔だけど、最低だ……っ！」

メーブルに睨まれると、怪物の顔が一瞬とても悲しそうに引き歪んだ。だが彼女はもう止まらない。メーブルに最低と言われようと、もはや夢を叶えるしかなかった。

「そして愛しい我が夫ユリウスよっ！ そなたこそがわらわの希望っ！ そなたとシヤムシエルの夢がなかったら、わらわはただ絶望しながら永劫の時を、己の罪科であるこの砂漠を見つめて生きるしかなかった！」

「ユリウス、私とメーブルで都市長を下がらせるわ。気を付けて」

女王の叫びは悲痛と苦しみをたたえていた。彼女は自分が育てたシヤンバラ王国を犠牲にして夢を叶えようとして、無念にも失敗した。全てを諦めていた。だがそこに俺が現れ、彼女にもう一度夢を見せてしまった。

あの幸せだった頃に帰りたい。時さえ巻き戻せば、支払った犠牲の全ては改変した未来であがなうことが出来る。俺の存在が、俺の夢が、彼女の暴走と砂漠化を招いた。とても他人事とは思えなかった。

「ユリウス、なぜそんな目でわらわを見る……。わらわは敵だ、わらわに同情は要らぬっー！」

「古の女王、シエラハ・ゾーナカーナ・テネスよ。こんなことは止めて、俺たちと一緒に地上に帰らないか？」

「戻れるわけがあるかつ！ わらわは裏切り者だつ、わらわは今日までそなたらを利用し続けていたのだぞ！ 夢を叶えずに、終わりに出来るわけがないつ！！」

「砂漠はまた元に戻せばいい。アンタは俺にとってはシエラハゾだ。頼む、夢を捨てて、俺たちと一緒に暮らそう」

返答は言葉ではなく、高密度の純粹エネルギーの照射だった。転移を駆使して難なくそれを回避すると、転移先を読んだようにマジックレーザーとでも呼べる即死級の破壊魔法が打ち込まれた。

「さすがは転移の力の本家といったところか」

「わらわは帰るのだつ、もう一度あの頃に帰ればもうそれだけで十分だつ！！ 愛した男の軀などつ、あの幸せだった頃に帰れるならば安いものだつ！！」

何度かのフェイントで攻撃を回避して、彼女を葬るべく世界の裏側から彼女の胸元へと刃を立てて突っ込んだ。

阻む魔法盾をこちらも生まれ持った高い魔力でこじ開けて、突破を試みたがマジックブラストがそこに飛んできて再転移することになった。

「ごめ、ちよと、無理……」

「ユリウスッ、これを使って！」

思っていた以上に向こうの火力が異常過ぎる。

俺はフロアの外にいるメイプルのシエラハの前に転移して、魔剣をシエラハから受け取った。

「少し重いがこれなら利いてくれそうだな」

「無理っ、絶対無理……っ、早くいってっ、あんなの無理だから……っっ」

「お願いユリウス、あの人を止めて……っ！」

「どつちにしろそれしかない」

姉妹は都市長を抱えて撤退していった。

どちらにしろ参戦されても死ぬだけだ。女王シエラ八を倒せるのは、転移魔法使いである俺だけだった。

「待たせたな、シエラ八」

「わらわはそなたのシエラ八ではないっ！」

「よく言う」

「黙れっ……！」

レーザーの数が増えている。常人には絶対にかいくぐれない激しい弾幕を突破して、魔剣を振るった。

「斬れた」

「バ、バカな……っ?!」

魔法盾を叩き斬ると一端距離を取った。そのまま突っ込んで追撃されて死ぬからだ。

「最期にもう一度だけ言う。シエラ八、あんたはシエラ八と同じシエラ八だ。夢を諦めて、俺と一緒に地上に帰ってくれ。俺は……愛した女を斬りたくはない……」

「違つっ、わらわは偽者だっ！！ わらわはそなたを騙っていたのだ！！ ずっとずっと、ずっとだ！！」

「偽者だろうと関係ない。シエラハになりすまして現れたアンタを、俺はシエラハとして愛していた。本物が偽物かだなんて、そんなこととは関係ない。頼む、俺と一緒に」

「愚かな男よ！！ ならばそこで死ねっ！！」

マジックブラストとマジックレーザーの雨あられの中を、俺は得意の短距離転移を繰り返して翻弄した。

俺が斬る前に俺を撃ち落とせば彼女の勝ち。彼女が撃ち落とす前に彼女を斬れば俺の勝ち。問題があるとすれば、今日までの思い出だ。

今日までのどこからどこまでのシエラハがこの古の女王で、どこまでが本物のシエラハなのかわからない。斬れば思い出の片割れを失うことを意味した。

それでも勝機が見えてしまった。勝利し得る一筋のチャンスに食らいつき、俺は女王の胸元に再び飛んだ。

「畏だよ、それは」

「知っている」

死なば諸共。群体生物たちの世界でままあることだ。俺は女王が放つ巨大なマジックブラストを右手で受け流しつつ、刃を彼女の胸に突き刺した。

刃は重力のままに彼女の胸から下を斬り裂き、代償として俺は右腕を失った。

「ぐっっ……っっ……」

エリクサーをすぐに噛み砕いて飲み干した。だがさすがに消し飛んだ腕は返ってこなかった。奇跡の力で傷口はふさがったが、二の腕から先がなくなっていた。

攻撃が止み、やがえて女王の幽体が俺の目の前に現れることになった。

「わらわは、そなたをずっと見ていた……」

「知っているよ。絹から宝石、何から何までアンタは全てを知っていたみたいだ」

「いつしかわらわは、あの自分と同じ顔をした小娘と、己を重ねて見ていた……。そなたたちを見ると、自分が全く別の人生を歩んでいるような気分になれた……」

「妄執を忘れ、素直に選べばよかった」

見上げたその姿は何から何までもシエラ八そのままだった。表情からうかがえる気性まで、あのやさしいシエラ八に見えた。

「ユリウス……」

「なんだ……？」

「あたしを、止めてくれてありがとう……。それと、ごめんなさい……」

「いいんだ。あの頃に帰りたい……。その気持ちは痛いほどによくわかる」

「ふふ……。でも、このまま無力に去るなんて、あたしは嫌……。だから、最期に、あなたたちに……。希望を……」

異常進化したエルフ、女王ゾーナカーナ・テネスだった存在はまばゆい光を放ちながらぼんやりと霞んでゆく。何をするつもりかわからないが、今さら悪足掻きをしているようには見えない。

「シエラハ、何をしたんだ……？」

「地上に出ればわかるわ……。ふふ……。これで、最期くらい……。本当の女王らしいことが、出来たかしら……。シエムシエルお爺さんと、メーブルに、ごめんなさいと……。伝えて……」

その日、エルフの始祖と呼ばれた女は死んだ。彼女は長らくエルフたちを裏切り続けてきたが、最期の最期に大きな祝福を残して消滅した。

緑に溢れる大地シャンバラは、俺と都市長だけではなく、彼女自身のもう一つの夢だった。

後から考えてみれば、目的のエネルギーを確保した彼女は、その気になればすぐにでも世界を過去の姿に改変出来ていたはずなのに、実際はそうはしなかった。

俺たちをわざわざ迷宮に招いて、この結末へと導いた。

彼女こそが偉大なる始祖、偉大なる女王シエラハ・ゾーナカーナ・テネスだ。それ以外の歴史は、この世界に必要なない。

大地を砂に変えることになろうとも、わらわは帰りたい。

理想郷と呼ぶにはあまりにちっぽけな、思い出の中だけに生きるあの地平へ。

幸せだった頃に帰りたい。彼女の最期の言葉は、どこにでもある

平凡な願いだった。

彼女が俺たちに見せた悪夢は、決して悪意によるものではなく、破滅の未来を回避して欲しいというやさしい願いゆえだったのだから。

こうしてこの日、シャンバラの大地は蘇った。偉大なる女王の尊き墓標の上に。



・エピソード 1 / 4 シャンバラという名の失樂園

ここは天国の外、失樂園だ。昼は灼熱の日差し、夜は酷寒の風が人々を容赦なく襲う。国土を覆い尽くす砂の地表にはまともにも育つ植物もなく、迷いの砂漠の向こう側には短命で野蛮な猿たち<sup>ヒューマン</sup>が繁栄を思うがままにしている。

魔力を失った元同族タンタルス。その始祖となったシエラハの父と母とその信奉者は、ある意味では正しかった。エルフたちから見ればねずみ算式に増えるヒューマンたちに、いつかはあの迷いの砂漠を破られ、迫害や蹂躪を受ける未来もある。

彼らは生き残りを賭けて異世界に入植し、ついに悲願を果たし、こことは異なる速い時の流れの世界で変質していった。

彼らはシャンバラへの襲撃を諦めないだろう。魔力を失い、そしてもう一度魔力を科学的に発見した彼らが文明を維持するためには、どうしても魔力を吸い上げる牧場<sup>プラント</sup>が必要だとアダマスが断言していた。

ここは失樂園だ。地獄だ。全てが崩れ去った果てに生まれた荒廃世界だ。少なくともコモネルフ。そのリーダーだったかもしれない女王シエラハ・ゾーナカーナ・テネスからすれば、この世界そのものが破滅を迎えた失樂園だった。

俺はあの女王のことがよくわかる。彼女は都市長と同じだと思っている。シャンバラの大地を再生したいという都市長の願いは、彼女の願いとそうさして変わらない。

あの頃に帰りたい。そんなちっぽけで大それた願いのために、俺たちはシャンバラの今の生態系を犠牲にして夢を叶えようとした。

俺たちが虫けらに目もくれないように、コモンエルフからすれば今の造られたエルフや猿同然のヒューマンは、路傍の石と変わらぬい虫けら同然の存在だったのだろう。

そしてそれを変えてしまったのが、あの女王の気まぐれと、孤独だ。

彼女は箱船の番人だった。あの地底から彼女はシャンバラの全てを見渡し、言葉通り本当に見守っていた。夢果てたこの地でたくましく生きる今のエルフたちを見つめ、きつと迷いながらも深い愛着を覚えていたはずだ。

それから果てしない時が流れ、俺たちの知るシエラハが生まれた。いやあるいは、傍観しているだけの日々に飽き、彼女が何か細工をした可能性もある。あの箱船には、同じエルフが3体ずつ保管されていた。

ともかくだ。女王は今のシエラハに己を重ねるようになった。きっとそこで何かが決定的に変わったのだと思う。

徐々にヒューマンの繁栄に押されてゆく愛し子たちに、何かをしてやりたいと女王は考えた。

そんなシャンバラのエルフたちの前に、いや足下に、都合よくも迷宮という富の坩堝が現れた。都市長たちはこれに気付くと動きだし、ツワイク王国から錬金術師を奪った。いや、ただの落ちぶれた宮廷魔術師だったか。

その後も女王は地底の底から糸を張り巡らし、介入を続けた。俺たちの髪の色と同じ3つの宝石を迷宮からドロップさせ、さらに絹まで俺たちに与えて、運命を演出した。希有なる魔力を持った人材ユリウスを、この地に縛り付けるために。

ただ、なぜ自分の自己投影先であったシャラハと、俺のようなヒューマンの猿を結婚させようとしたのかがいまだにわからない。

ただの気まぐれだったのか、それともそこから先のシャンバラの歴史がユリウスを軸に動いてゆくことを予測していたのか。もはや真実は死後の世界にでも至らなければわからなかった。

それからまた少し経って、俺たちは今の家族であるグライオフエンと出会った。彼女の要請に従ってリンハイムを目指し、こちらの世界のグライオフエンと出会った。グラフは破滅の未来を迎えたもう一つの世界から来た迷子だった。

しかし俺たちはそこでもう一つのもので出会っている。白紙の書だ。今回の事件を通じて、白紙の書の正体に大方の予測がついた。女王には世界を過去に戻すという夢があった。その夢は俺と都市長の夢と皮肉にも利害が一致していた。そこで彼女は、あの書をまぎれ込ませたのだろう。

シャンバラの緑化計画を加速させるために、シャンバラを亜種の亜種であるタンタルスに奪われないように守るために、俺たちを陰から導き支えてくれた。

今回の死の砂漠化で、書がヒントをくれなかったのも根拠の1つだ。俺たちはあの悲しい女王に陰から操られ、導かれ、そして同時に見守られ、深く愛されていた。

時に女王はなりすましもした。あの時パンドーラの棺の発掘を中止するように提案したのは、シエラハになりすました女王だった。

シエラハと事実を照らし合わせてゆくと、驚くほどに多くの場面になりすましが発生していたことも発覚した。知れば知るほどに喪失感が深まり、それを殺めてしまった己の罪に俺は震えた。

メーブルもまたあの時、女王に敵意を向けるべきではなかったと後悔している。少なくとも俺たちの思い出の中にある女王はシエラハと何一つ変わらない。やさしくて恥ずかしがりで、いつだって俺たちを包み込んでくれる最高の家族だった。

俺たちは思い出を失った。同じ思い出を共有した家族を失った。

確かに彼女が犯した罪は果てしなく重い。だがそんな事実は関係ない。俺たちにとってあの女王もまた家族の一人だった。

・エピソード 1 / 4 シャンバラという名の失楽園（後書き）

後3話で完結します。続きのプロット制作のために少しお時間を貰うかもしれませんが。

「ユリウス、寝不足……？」

「まあ、そりゃな……」

あの箱船を出た後のことを話そう。

「ふふふつ、大丈夫よ。だって今はみんなが寝不足なもの」

「フフ……古代の女王陛下も粹な置きみやげをしてくれたものだね。おかげでこっちは……あふ……。眠いよ……」

そう、女王シエラハはとんでもない置きみやげを残して散っていた。それは緑だ。今日まで吸い上げてきた大地のエネルギーを彼女は地上に返還した。

砂の砂漠が潤いに満ちた豊かな土へと変わり、芽が芽吹き、双葉が割れ、植物たちが爆発的に大地を覆い尽くしていった。

砂岩の家は根に浸食され、壁中を緑のカーテンに包まれてしまった。

石の家もまあ同様だ。どこの家も植物に家の中まで入り込まれ、浸食され、バカにできない損害が出た。

シャンバラは深い森になった。整備された道も浸食され、かつてそこが道であったという目印程度にしかなくなかった。都市機能がほぼ完全に麻痺し、オアシスとオアシスの繋がりが断たれた。

「でも、ぶつちやけ……加減して欲しかった……。もう一人の姉さ

ん、やり過ぎ……」

「あたしは許すわ。だって、砂漠がなくなっちゃったのは寂しいけれど……緑の匂いがこんなにいっぱい！　ここはなんて素敵なお世界なのかしら！」

「ま、じきに落ち着くさ。ユリウスのがんばり次第だけだ」

で、俺たちがどうしたかというのと、今も問題が片付いていない。シャンバラは恐ろしく広大だ。その大地の全てが深い森に飲み込まれたとあっては、とてもではないが1ヶ月程度で復旧できるものではなかった。

しかし見ての通り、ヒューマン目線では大災害にも見えるこの事態を、シャンバラのエルフたちは喜んで受け入れていた。

だから俺は朝から晩まで、魔法の斧やノコギリ、ハードワークを可能とするスタミナポーションや、除草剤を錬金術の力で造っている。

緑を蘇らせるのが夢だったのに、それが今は新街道に撒くための除草剤を作っているなんて、もう何から何まであべこべだ。

「大丈夫、ユリウス？」

「前見て歩かないと、危ないよ……？」

「すまん、ちよつとよろけた」

俺たちは森の中を歩いている。いやどこもかしこも森なのでもっと具体的に言うべきか。

俺たちはもう1度、あのパンドーラの棺に向かって歩いている。

「まだ義手に慣れないのか……？　片腕のない君を見たとき、ボクは泣きそうになった……」

「同意……。ていうか、泣いてたし……」

腕を失った俺は魔法の義手を作った。まだ少しぎこちないが意のままに指が動く。だが物に触れても感覚がないのが妙な感じだった。

「な、泣いてなんかいないよっ!」

「いや泣いていたな」

「そうね、泣いてたわね」

「だって、君たちと一緒に行けなかったのが悔しかったんだっつ!」  
「きつと定員が4人だったんだろう。夫である俺。もう1人の自分であるシエラハ。妹として共に育ったメーブル。そして父であり、シャンバラを今日まで守り続けてきた男シヤムシエル。梓がもう1つあつたら、そこにグラフが入っていたんじゃないか?」

「本当……?」

「ええ、あたしもそう思うわ」

「あと、わがままに、巻き込みたくなかったのかも……」

俺たちは森を進んだ。久々に一緒に過ごせる休暇をハイキング感覚で楽しみながら、森の果てを目指した。

やがて森を抜け、その先に美しいガラスの大地が現れた。

すり鉢状になった広大なガラス化地帯を俺たちは慎重に下り、その先に設けられたガラスの墓標の前に立った。その墓には名が刻まれている。名を刻むわけにはいかなかった。

「始祖様……ううん、姉さん……。遅くなってごめんね……」

コモンエルフと箱船。女王シエラハの本当の役割は、彼らを守り



つつ、過去へと世界を戻すという夢を叶えることだった。パンドーラの棺の奥深くには、数え切れないほどの白の棺が眠っている。

だがそんな事実は存在してはならない。

シャンバラの砂漠化はあくまで原因不明の災害であり、断じてエルフの女王が俺たちを裏切ったのが真実であってはならなかった。

「あなたがやり過ぎたのがいけないのよ。もう、地上は今大変なんだから……」

「いいじゃないか。灼熱の日差しも酷寒の夜もなくなった。迷いの砂漠もだけれどね……」

「グラフ、その話は今は止めてくれ、頭痛の種だ……」

シャンバラはかけがえのないものを手に入れたが、いくつかの利権と安全保障を失った。今のシャンバラはフリーパスだ。人間たち外敵がこの森に入り込めてしまう。

今日までエルフが独占してきた砂漠を越えての交易網も、これから失われてゆく。

だから俺たちは急ぎ森を拓き、街道を造り、各地のコロニーや国境砦との繋がりを復旧しなければならない。

「しょうがないわ。上手く言えないけれど……赤ちゃんだっていずれ揺り籠から卒業して、自分で立たなければいけないでしょ。迷いの砂漠は女王様があたしたちを守ってきてくれた証拠よ。あの人の揺り籠から、エルフが立ち上がる日が来たのよ」

「姉さん、いいこと言うね……。まるで、本当の女王様みたい……」

危機は去った。夢も突然叶った。だが問題は山済みだ。俺たちを今日まで守ってくれた母親のような存在が、シャンバラから消えて

しまった。俺たちには新しい役割や夢が必要だ。  
祈りを捧げ、考え続けた。新しい夢、新しい役割について。

「お腹、すいた……」

「……ああ。すまん、もう少しだけ」

「別にいい……。でも教えて、何、祈ってるの……?」

「大したことじゃない。ただ……彼女のもう一つの夢を、叶えてやりたいと思っただけ。彼女は箱船の守護者だった。せめてその夢が遙か未来で叶うといいなと……そう思った」

口には出さず、心の中で俺は墓標に誓った。

どうにか方法を探して、コモンエルフの箱船を未来に届ける手伝いをしたい。だがこの重い誓いを口に出せば、シエラ八たちをも縛ることになるだろう。

俺は彼女の遺した箱船を守りたい。それが俺の新しい、だが叶うはずもない夢と役割になっていった。

あの運命の日より2ヶ月が経った。人海戦術で街道を整備し、どうにか大半のコロニーとの接続が完了した。

畑が森に飲まれ、木々に日光を遮られ、次の収穫は凶作どころではなさそうだ。

「気にすんなよっ、俺と前の仲じゃねえかよ、ユリアスウツ!」

「そうですねよ、大先生。長期的に見ればさらなる躍進が決まってい

るようなものです」

そんなシャンバラに各国が食料支援をしてくれた。相変わらずファルク王はやかましく酒臭く、ツワイクの新王は抜け目ないがうちの娘たちに色目を使っていた。

「あら王様たち！ いらつしゃい、元気になっていたかしら？」

「ああつ、ウエルサンディ……なんて君は美しいのでしょうか……。君はお母君とはまた違った若々しい色気といものが」

「陛下、サンディに手を出したら刺しますよ」

「パパツ、うちはもう大人よ。そういうことはうちが自分で決めるわ」

「だ、だが……サンディ、この男はダメだ……。手当たり次第エルフと重婚を」

「パパも同じでしょ」

「ガハハハハツツ、違いねえわ！」

「大先生と同格にしていただけだなんて恐悦至極。ところでウエルサンディ、この後少しお食事でも……」

「ふふつ、いいわね。でもパパが睨んでるから今日は止めておくわ」

支援してもらっている手前、この酔っぱらいとくせ者たちに邪険にできない。ファルク王に酒を飲まされ、都市長と一緒に泥酔する日も増えていた。

「そうか、女王陛下は生きておられたか……」

「報告が遅くなり申し訳ありません、女王陛下」

リンハイムの女王アストライアもまた、都市長と同じく古の女王を知る者の1人だった。

真実を知る者は少ない方がいいが、彼女には知る権利があると都市長の許可が下りた。

「あの方にはよくしていただいた。どことなく常越の者の雰囲気があるとは思ってはいたが、まさかわらわたちが造られし亜種であったとはのう……」

「ボクたちが亜種で、真なるエルフが他にいると知れば、よからぬことを考える者も現れましょう。このことは無期限の内密に……」

その任はこれまでの慣習により、グラフが受け持つことになった。彼女は娘を連れてリンハイムに転移し、機密のために女王と一対一で面会した。

「のう……ところでだがな、そろそろこちらに戻ってはこぬか？」

「え……っ」

「こちらのグライオフエンも許すと言っている。わらわの下に戻らぬか？ わらわのかわいいスクールズも連れてこい」

「そういつわけには参りません」

「むー、なぜじゃ……？ わらわはそなたとあの子の両方が欲しい

「……」  
「ユリウスのやつが心配なのです。女王シエラハは、シエラハになりすましてボクたちとたびたび接していたみたいで……」

「むうう〜！ あんなむつつりスケベのどこがいい……っ！？」  
「わらわの方が美しくお前を愛せるぞ！」

「心配なのです……。彼は、愛していた女を自分の手で殺したも同然なのですよ……？ ボクが支えてあげないと……」

そこで何が話されたのかは詳しく知らない。

ともかく真実が女王アストライアに伝えられ、箱船の守護と真実の秘匿が約束された。

「ワシじゃっ、遊びにきたぞーっ！」

話が終わると女王の私室にスクルズが飛んできた。

「おおおっ、スクルズ！！ わらわも待っておったぞーっ、こんなに美しくなりおってっ、辛抱たまらぬわーっ！」

「女王陛下っ、そ、それはボクの娘ですっっ！ 変な気は起こさないで下さいよっ！？」

「保証はできぬ。こんなに美しく、そなたにそっくりな娘を前にしたら辛抱たまらぬ、辛抱たまらぬじゃ……」

「しばらく泊まっていけ。ボクも君を歓迎するよ、もう1人のボク」

それとこちらの世界のグライオフェンもだ。自分自身と仲良くやるのは意外と難しいと、昔グラフィが愚痴っていた。

「迷惑じゃないか……っ？」

「そうだな、スクルズが生まれる前は少しだけそう思っていた。でも今の君はこの子の母だ。君はボクだけどボクじゃない。やっとそのことに気付いたよ」

外交という建前で彼らはしばらくをあちらで過ごし、そして緑であふれてにっちもさっちもいかないシャンバラへと帰っていった。

「結婚、おめでと……おっさん……」

「お、おめでとどうぞいます……。ウエディングドレス、とても綺麗ですね……」

シャンバラのどこかで結婚式があったらしい。新郎はメーブルの知り合いのあのスケベなおっさんで、新婦はその……その元子分だったとか。ウルドもそれに招かれたとか。

子分といえば、あのおっさんを慕うあまりに女性の格好をして近付いた子分がいたような気もするが、きっと別人だろう。男と男は結婚なんて出来ない。

「お、おう……。いや、でもごっこだしなあ……?」

「兄貴、幸せっス……」

「その格好で素に戻るな、品の良い女冒険者のアレで頼む……」

「ウケる……。今日は、初夜だね……」

「うっっ……?!」

「あ、兄貴い……っ」

幸せにやっているそうだ。その後日、男を女にする薬が欲しいと依頼された。時間が出来たら造ってみるのも悪くない。

「実は……夢を叶えた途端、無性に隠居がしたくなってしまいました」

「」冗談を」

義兄さんから困っていると相談された。

シャムシエル都市長が隠居したがっていて、息子としてさせてやりたいのは山々だが、それは当分は無理だと。

「いえ本気です。あの方の死と共に、私の時代も終わったのです。後のことは貴方とユリウスさんがどうにかしてくれるでしょう」

「困ります。私には貴方ほどの才覚はありません……」

「ふがいなくも私が倒れたあの時、貴方とユリウスさんは私の代わりに議會を奮い立たせ、シャンバラを1つにしてくれたではないですか。貴方には、貴方の才能があります」

「ありがとうございます。ですが現実問題として、やはり向こう5年は隠居を諦めていただかないと困ります」

シャンバラが森となり、多くの常識と仕組みがひっくり返った。

国境には豊かなシャンバラを狙う盗賊が、ちらほらと入り込んでいるという話も聞く。

ずっと俺たちを守ってくれた偉大なる女王に去られた今、いくら本人が願っても都市長を隠居させるわけにいかなかった。

「5年もですか……」

「何か、新しい夢を持たれては……？ ユリウスさんも新しい夢を探していると言っていましたよ？」

「新しい夢ですか……」

「例えばなりたかった職業。その後押しを都市長としてしてゆくと  
いうのは……？」

「……それは、悪くありませんね。では国内が落ち着きましたら、立派な学校を建てましょう」

「学校、ですか……？」

「幼い頃の私は王子様の小姓をしていましたが、その前は教師になりたかったのです」

こうして隠居の危機はまぬかれた。都市長はシャンバラに国際学校を建てることを新しい夢にして、もう1度歩き出した。

「悪いな、飯の工面までさせちまって」

「儲けたく好きでやっているだけだ、気にするな。それよりもユリウスはどうだ……？」

この前アリと会ったと、アルヴィンス師匠がやつこの活躍を教えて



くれた。

食料の自給が途絶えたシャンバラのために、アリは自分たちの農園から供給するだけではなく、遠方の領主とも話を付けてくれたそうだ。

「失った腕はもうなんともねえ」

「だが前に会ったときは様子がおかしかった。大丈夫なのか……？」

「やさしい嫁さんが3人もいるんだ、俺らが気にすることじゃねえよ。しかし……。テメエも変わったな、アリ王子」

「む……。昔の話はよせ……」

「あんどきはよ、俺のかわいい弟子をハメやがってクソ野郎！」

「ああ、悪かったよ！ あの時俺はどうかしていたんだ！」

「そう思っていたんだがなあ……。まともになりやがって。いい女つてのはすげえな……」

「脅かすな……。ああ、実際そう思う。俺を変えてくれたのは彼女だ。女というのは男を変える。その点はユリウスも同じだ」

「ははは、違いねえわ」

元気にやっているそうだ。少し遅くなったが嫁さんがようやく子供を授かったとか。人間の子供は成長が遅い。さぞ苦労するだろう。

「じゃ、俺は帰るぜ。今度ニヤバクラ行こうぜ、ニヤバクラによお  
く！？」

「断る、俺は妻一筋だ」

「ハハハハッ、女遊びと嫁さんは別腹だろ？ おっさんと遊ぼうぜ、

なっ、坊や？」

アリに言うのも妙な気もするが、師匠がアリに迷惑をかけていないか心配だ。

・

「ミヤーンツ、王子様……貴方はあたいの命の恩人ミヤ……ポツ」

「ガ、ガガガ……（Ｔ・Ｔ）」

「一生付いていきますミヤ……」

「コ、コマ、コマリマス、オネコ様……（Ｔ・Ｔ）」

うちのニアの群れと、あの姉御肌の白いネコヒトと一緒に迷宮を下っているという噂を聞いた。

真偽不明だが、かなりいいコンビらしい。

「ユリウス様のことはきっぱり諦めるミヤ！　これからの時代は、

ロボ彼氏だミヤー！！」

「彼氏、チガウ。彼氏、ナツテナイ……（Ｔ・Ｔ）」

同時にどこにでも存在できるニアは、ある者は迷宮に、ある者は街道整備の手伝いに、ある者はうちの工房にときおり現れてあの白い銀貨を届けては、かつてオアシスだった泉の前でたたずんでいた。

俺の方は変わらない多忙な日々を過ごしていた。食料の自給。街道整備。伐採。家を追われた人々の新居造り。国家規模の森林化への対応は、支援すればするほどに新しい仕事が舞い込んできた。

「ユリウス、もう寝なさい。休めるときに休まないと限界がくるわよ？」

「ああ、わかっている」

「わかっていないわ。貴方には長生きしてもらわなきゃ困るんだから……あら、それは？」

「壊れた大型のニアだ。迷宮の宝箱から出てきたらしい」

最近、新しい研究を始めた。それはこのニアだ。

人間と変わらない精神を持ち、モンスターにはね飛ばされても壊れない頑丈な肉体を持つ。特筆すべきは、彼らが寿命という概念を持たない点だ。

「可哀想……直してあげられるかしら……」

「そのつもりだ。中の仕組みを理解出来れば直せる」

「それは難しくないかしら……」

「ダメでもやるんだ。そうすれば……コイツが直る」

全であり個である不思議な生命体ニア。これを直せるくらいに構造を熟知すれば、何か糸口が拓けるかもしれない。

「ユリウス、来たぞ。こんな夜中に俺に見せたい物ってなんだ？」  
「あら、マリウス。マリウスまで巻き込む気……？」

「なんの話だ？ あっ、それはまさか、ニアなのかつ！？」

マリウスは壊れたニアに飛び付いた。

壊れているということは分解して分析してもいいということだ。

「中がどうなっているか、興味がないか？」

「あるに決まっている！ そうか、壊れてしまっているかあ……ははっ！ なら、直してやらないといけないなあ！」

「呆れたわ。あなたも働き詰めでしょ、ちゃんと休まないとダメよ……？」

「1時間だけ時間をくれ。それでダメだったら寝る」

「わかったわ。あたし、軽食と飲み物を作ってくる。見ておかないと朝までオモチャで遊んでいそいだもの……」

その日から俺たちはニアの鉄の肉体に没頭していった。マリウスとシエラハはニアを直すことが目的だったが、俺の場合は少し事情が異なる。

俺は亡き女王のもう1つの夢を叶えてやりたい。そのためにはニアの肉体を詳しく知る必要があった。

だがそんな俺の姿が引き金になったのだろうか。

またある晩、機能を止めたとはかり思っていた白紙の書が光り輝き、俺とシエラハとマリウスを驚かせた。そこにはこうあった。

『再誕の地に祝福を』

箱船の守護者よ 永劫の時の果てで わらわはそなたを待ってい

る

『我が名はシエラハ・ゾーナカーナ・テネス  
この地上に生きる全てのエルフの始祖にして 大地を砂漠に変え  
た愚かな女王』

『箱船がたどり着く最果ての地にて そなたを待つ』

女王シエラハは確かに死んだ。だが、あの箱船には同じ顔が3つ  
並び、それが目覚めの日を待つてる。だったら、2人目と3人目の  
シエラハもそこにいるはずだ。

俺は彼女が眠る箱船を未来にどうしても届けたい。そのためには  
ニアの肉体を熟知する必要があった。

ユリウスは死んじゃった……。  
でもニアそっくりのオートマタとなって蘇った……。

肉体の束縛から解き放たれたユリウスは、長く生きた。

私たちの一人一人を看取り、そして最後はひとりぼっちになった。

だけどユリウスは信じている。

いつかヒューマンも、エルフも、何もかもが滅びた最果ての世界  
で、もう1度シエラハ・ゾーナカーナ・テネスと出会えると。

彼は箱船の番人。

ガラスの遺跡を脅かす者を、機械の肉体と転移術、もはや神と変

わからない錬金術で撃退する最強の番人。

確かに始祖様は死んだ。だけど箱船の中には、姉さんにそっくりな姿をした女性があと2人残されている。世界が始まる日に2人はもう1度会える。

そう信じて、ユリウスは永劫の時を生きた。

腕が壊れたら腕を直し、顔が壊れたら顔を取り付け直して、記憶も心も定期的にバックアップした。機械人形はいつまでもいつまでも、時の箱船がどこかの陸地にたどり着く日まで、愛しい人の棺を守り続けた。

そうしてやっと、長い長い、あまりに永過ぎて100万回気が狂っても終わらない幾星霜の果てに、2人はもう1度出会うことになった。

「おはよう、シエラハ……」

「あなた、あたしのことを知っているの……？ あたしは、あたしは誰？ あなたは……」

「俺の名はユリウス・カサエル。俺は君の 君の崇拝者だ。時を巻き戻すという君の願いは叶わなかったけれど、箱船は無事に未来の世界にたどり着いた。今日ようやく、君の夢が叶ったんだ」

「なぜ、かしら……。あなたの声を聞いていると、なんだかとても気持ちが悪くわ……。」

「今日から1人の騎士として貴方を支えよう。貴方がこの最果ての世界にて、幸せを勝ち取る姿を見たい。箱船の番人シェラハよ、もう1度会えてよかった……」

時の最果てにて、二人とコモンエルフたちはもう1度生きた。可哀な始祖様は、果てしない未来の世界でユリウスと再会し、救われた。

オートマタとなっていたユリウスは、他の相応しい男が現れたら姉さんをゆずるつもりだったみたい。でも、男なんて現れなかった。未来の姉さんは、鉄の肉体を持つ男を愛した。

それから愛して、愛されて、そして 最後には必ず終わりが来る。ユリウスは最期の姉さんを見届けて、最果ての世界に取り残された。

終わり……。

え、どうして私がこの話を知っているかって……？  
それはね……。

「という事で、コモンエルフの再滅亡まで付き合ったら、無性に寂しくなっちゃったんで戻って来た。今日から旦那が2人になるけどよろしくな」

全てを見届けてきた未来のユリウスが、こうして過去の世界に飛んできたから……。

「オートマタへの魂の移植……成功していたのか……」

「ちょっとどういうことっ!? ユリウスはニアを直すために、がんばっていたんじゃないのっ!？」

「違う。過去の俺は、お前といつまでも一緒に生きたくて魂を機械に移す研究をしていたんだ。シエラハ、何度もお前は美しい……会いたかった……」

転移魔法の天才は、意図的に転移魔法を失敗させて、旦那づらをして私たちの前に戻ってきた……。

しかもロボになって。ウケる……。

「ラッキー……これで寂しい夜も安心だね……」

「おまつ、お前はそれでいいのかよっ!? 確かにこれは俺かもしれないけど、俺であって俺じゃないんだぞ!？」

「嫉妬……?」

「ごめんなさい、あたしはまだわけがわからないわ……」

「立場はわきまえているつもりだ。だけどせめて、一緒に居させてはくれないか?」

私はオーケーだと親指を立てた。同じユリウスなら、姉さんも迷ってるけど拒まないと思う。

問題はユリウス。近親憎悪。それは時にあまりにも深い憎しみに



発展する……。

「未来のターニングポイントを知っている。お前の危惧通り、いずれ転移門が災厄をもたらす。居させてくれる代わりに歴史の転換に助言をしよう。過度の介入はかえって危険なので、随所随所になるが」

その言葉がユリウスの顔色を変えた。

ぶっちゃけ相手が自分自身という問題点をのぞけば、これは空から降ってきた神様のギフトだった。

「嘘っ、このおつきいニアって、パパなのっ!?!?」

「ボクはいつかこうなる気がしていたよ……。いいんじゃないか？ 迷い込んできたユリウスはマリウスにあげればいい。ボク自身が自分をそうしたようにね」

「未来の俺を物みたいに言うな……」

「ウケる……」

「ウケないっての！ はぁ……本当にしようがないやつだな、俺ってやつは……。最果てまで付き合ったのなら、そこでおとなしく朽ちれば格好が付いただろうに……」

格好よりも愛しい人との時間の方が大事。それに、ロボユリウスからすれば、これももう余生だと思う。私たちを遠くから見守りながら、もう1度このシャンバラで暮らしたいんだと思う。

「別にいいじゃない。誰も困らないわ。お帰りなさい、ユリウス」

「ただいま、シエラハ。長かった……。やっとここに帰ってこれたよ……。やっぱり君がいる世界が一番だ……」

「あつ、おいつ！？ それは俺の嫁だぞ、俺っ！！」  
「へへ……これ、悪くないかも……」

自分に嫉妬するユリウス（肉タイプ）に、私は飛び付いて甘えつつ慰めてあげた。2つに増えたら私の中の独占欲が半分になって、いい感じだった。

「ユリウスも帰って来てね……。世界の果てまで行き着いても、ここに帰って来て……。そしたら私たちは永久に幸せ。永久に私たちはずっと一緒にいられる……」

「どういう理屈だ……」

「理屈じゃない。これは、ただの事実……」

100回世界をループしてもユリウスはここに帰ってくる。  
だってユリウスは私と姉さんが大好きだから。

特にユリウスの姉さんへの想いは崇拜と言ってもいい。  
ユリウスはいつだって、私の自慢の姉さんに夢中だ。だから必ず、どんな方法を使っても、ユリウスはここに帰ってくる。

お帰りなさい、ユリウス。

私も姉さんも、いつだって私たちを夢中で見つめてくれる、そんな貴方が大好きです。

終わり

・エピソード 4 / 4 箱船がたどり着く最果ての地にて（後書き）

連載開始より一年と数ヶ月。結構な長期連載となりましたが、本作はここで一度完結となります。完結ですが、もちろん続きます。これから半月ほどお休みしますが、既にプロットの骨組みが完成しています。なのでこれからも安定供給できるよう、がんばっていきましょうと思います。

本作、元々は森が舞台の予定でした。しかしそれでは代わり映えがしない。

なら砂漠を舞台にしよう。砂漠ならいくらでも開拓の余地がある。既に発展した都市や、切り倒せない森を舞台にするよりも、砂漠の方がきつと面白いと思って始めたのが本作でした。

メインターゲットは男性。ちょっとエッチ。だけれど決していやらしくない話。

いやでも今読み返すと、序盤のユリウスはいやらしいなど、書籍版の改稿をしながら反省する日々です。

で、次章！ 次章は、ミステリー寄りのお話にしたいなと考えています。

序盤は娘たちを主役にして、小さな事件を解決してゆくお話になります。でも本作はユリウスの物語ですから、上手くそこからバトンタッチして、ミステリー的な面白さと本作らしさを融合させたいなと考えています。

そんなわけで、半月のおやすみをいただきます。

本作をここまで読んで下さりありがとうございます。楽しいお話をこれからも続けてゆきますので、どうか追って下さい。

そして書籍版。書籍版を買って下さると、もっともっとウェブ版も続けていきます。これからもどうか応援して下さい。

それでは、長い間本作を応援して下さいありがとうございますございました。

・カサエル姉妹の美しくも退屈な日々（前書き）

本日より連載を再開します。

前話でも解説しましたが、前半は子供たち視点から大人たちを見つめる構成になります。

中盤からユリウスにバトンタッチしますので、しばらくは番外編感覚で楽しんで下さい。

・カサエル姉妹の美しくも退屈な日々

断章 少女探偵団カサエル姉妹の事件簿

ちよつとだけ昔。シャンバラがまだキラキラと輝く砂漠の国だった頃、うちは大錬金術師ユリウスの長女として生まれた。うちには腹違いの妹が2人いて、少し変わった家族構成で育った。

うちにはママが3人いる。やさしいママと、カッコイイママと、かなり困ったママがいる。ママたちはうちらを平等に愛してくれて、どんな時も順序を付けたりしなかった。

シエラハの娘ウエルサンディと、メープルの娘ウルドと、グライオフェンの娘スクルズは、家族でいっぱい幸せな家庭で育った。今年6歳を迎えた。

6歳になったその年、シャンバラが樹海の国シャンバラに変わった。

みんなパパとママと都市長が世界を変えたと言っている。シャンバラが減びかけたあの日、パンドーラの棺と呼ばれる遺跡にパパたちが挑んだあの日、うちの国は変わった。

今のシャンバラはほぼ全部が樹海。砂の大地はいい匂いのする湿った黒い土に変わって、草と木とキノコと宿り木が常にうちの隣にある。

あんなにもキラキラと輝いていた世界は、やさしい森の木漏れ日に飲み込まれ、爽やかな草木の香りと、湿り気のある空気に包まれている。

ただ息をするだけで気持ちがいい。輝く木漏れ日はやさしく暖かくて、いくら眺めていても飽きない。

これがパパとジイジが実現したかった世界だったんだって、うちは樹海の国シャンバラを見るたびに自慢の家族を誇りに思った。

お気に入りには水没林となったオアシス。うちは毎日その水没林の前に座って、木々に遮られることない太陽の日差しを浴びながら、万緑の世界を見つめた。

この光景が、いずれシャンバラのみんなの努力で拓かれて姿を変えてゆくことを知っていたから、うちは今のこの光景を記憶に留めようと、下手くそだけど最近絵も始めた。

うちと同じ足並みで歩けるのは、パパとアルヴィンスおじ様と、ツイイクの魔術師たちだけ。だからうちは大好きなママたちや姉妹のために、絵を描いて自分が見た世界を伝えたいと思うようになった。

「ごめんなさい、あたしたちもう行くわ」

「くれぐれも言うておくれが、あまりユリウスやシャムシエル様を困らせるんじゃないぞ」

「ま、ほどほどに、ね……？」

不満があるとすればそれは最近の大人たちだ。

パパとママ　　ううん、シャンバラ中の大人たちが仕事に奔走さ

れるようになって、どこの家の子供たちも不満を抱えるようになった。

家族みんなが集まる夜は3日に1日あればいい方だった。

それだけシャンバラの樹海化は、うちらにとつて大きな喜びであると同時に、どうにかして解決しなければならぬ大問題だった。

「あ、サンディちゃんにスクールズちゃん」

「お疲れさま、ラウリイ」

「父のポーシオンを運んできてやったぞー。……ん、なんじゃ？」

「それ、持って、きちやったんですか……」

シャンバラでは今、人が全く足りていない。

そんな中で、うちらだけが大人の時間を奪って授業を受けるわけにはいかなかった。

アルヴィンスおじさまの凜々しい横顔も、もう半月も前に見たきりだった。

「ごめんね。でもうちらも何か手伝いたくて……」

「いいんです、忙しくて目が回るくらいだったから……。助かります……」

「ラウリイが父を好いてくれると我也嬉しいぞ！」

「す、好きだなんて……っ、ば、僕はただ……あの方を心から尊敬、しているだけで……」

「パパって誰にでもモテるのね……」

「酔っぱらいと変態とネコヒトにもモテるのじゃー！」

納品を済ませると、スクールズとうちは空の木箱を抱えて道を引き



返した。

あちこちで家を建てる騒がしい物音がする。行政区やバザーオアシスの周囲に引っ越してくる人たちがどんどん増えていた。

うちらは飲み込まれた石の家、新たに築かれた木の家、ようやく拓かれてきた町並みを眺めながら、パパとウルドのいる工房に引き返した。

「水、浴びてく？」

「ウルドも一緒がいい！ みんながんばっておるんじゃないから、ワシらもがんばるのじゃ！」

「でもさー、地味な仕事ばっかで嫌にならない……？」

「なる！ ワシらは父と母の子じゃっ、もっとこっ……っ、ビッグ仕事かしたいのじゃ！」

「ウルドはいいよね……パパのサポートができるんだもん。うちもアルヴィンスおじさまを手伝いたい……」

「サンデイ、それは父が泣くのじゃ。言わぬ方がよいぞー」

うちらの家も樹海に飲み込まれて一時期は大変だった。

あの日以来、うちらの庭には花と木々があふれて、今だって管理が追い付いていなかった。

「ただいま、届けてきたよ、パパ！」

「おやつくれ、父！」

「あ、2人ともおかえり……っ」

パパはあの古い遺跡で右手を失った。自分で義手を作って、感覚がなくて不便だと言っている。

でも……あの日からパパは少し変わった。パパはあのオアシスの  
棧橋だった場所に腰掛けて、遠くを見つめていることが増えた。

パパたちはごまかすけど、絶対にあそこで何かがあった。  
ジイジもメープルママもおかしい。

うちらは、うちとスクルズは、そんなパパたちを見ていられな  
かった。

「パパッ、気づいてるっ!? 帰ったわっ!」

「あ……ああ、お帰り。もう戻ったのか……」

「ラウリイが寂しそうにしてたのじゃ、後で飲みにも誘ったらど  
うじゃ?」

「きつと迷惑だろう。あつちはこつち以上に忙しい」

「そ、そうかもしれないけど……ラウリイくん、きつと、凄く喜ぶ  
と思うよ……?」

パパは素っ気ない返事を返して、水槽の中身を仕上げた。

出来上がったのは黄色い液体が入ったポーシヨン瓶だ。このスタ  
ミナポーシヨンは各地の労働者に配られて、開拓を加速させる。今  
はポーシヨンよりずっと重要だった。

「ねえ、パパ。うちらそろそろ、もっと大きなお手伝いがしたいん  
だけど……」

「ワシはグラフ母を手伝いたいのじゃ! ダメならマリウス師匠の  
ところでもいいっ、仕事くれ、父!」

「うちもアルヴィンスおじさまのお手伝いがしたい! だって、う  
ちなら」

「ダメに決まっているだろう。お前らはまだ6歳、精神はまだまだ

未熟だ」

「ブーッ！ 心はお子様でも身体はもう大人じゃーっ！」

「そうよっ！ それに転移魔法使いのうちは、アルヴィンスおじさまの相棒に最適なはずでしょ！」

パパは義手で自分の顎を撫でて、難しい顔でうちの要求を一考してくれた。パパ、最近少し渋くなったかも……。

・カサエル姉妹の美しくも退屈な日々（後書き）

コミカライズ版・超天才錬金術師2巻、先日5月13日に発売しました。

今、書店に並んでいます。

棚はモンスターコミックス。ピンクの髪と爽やかな青空を、手の込んだ塗りで表現した綺麗なパッケージが特徴です。

もしよろしかったら1巻どもどもにーちゃんの過去作を応援して下さい。ストレスフリーでやさしくほっこりするお話になっています。

補足。誤投稿により次話まで投稿していました。

そこで申し訳ありませんが、予定していた分割位置でカットいたしました。ごめんなさい！

・バインダーと失踪者（前書き）

前回の更新。実は半分に分割し忘れたものでした。（翌日に修正しました）  
更新日に読んで下さった読者さん、ごめんなさい！

## ・バインダーと失踪者

「わかった、ママたちの許可が下りたら考えるよ」

「下りるかそんなものーっ！ 頼むうーっ、父から母を説得してくれーっ！」

「そう言われたって……。ただでさえこの混乱状態だ。親としてはもうしばらく、ここに居てくれた安心するんだが……」

「お父さん……。2人ともね、もつと、お父さんとお母さんたちの助けになりたいだけなの……」

「そうよ、みんながんばってるのに、なんでうちらだけ地味な仕事ばかりしなきゃいけないのっ!？」

パパはうなづいてくれなかった。

困ったようにため息を吐いて、水槽の中のポジション瓶を自分で木箱に移し始めた。まだ義手に慣れていないくせに……。

うちら姉妹はパパの後を追って、パパを引っ張ってイスに座らせて、梱包作業を代わった。

「仕方ない、義兄さんのところにも行ってこい。言えば何か仕事があるかもしれない」

「本当っ!？ やった、パパ話わかるじゃない！」

「ウルド、そなたも一緒にいくぞ！」

「えっ、で、でも、私……っ」

「一緒に行っていていいぞ。代わりにラウリィを呼んできてくれ」

そういうことになった。うちらはスタミナポーションの梱包を済ませると、台車を使ってラウリーのいる商館に荷物を運び出した。

ウルドは仕事漬けでストレスがたまっていたのか、外に出るとメーブルママ似のベビーフェイスで晴れやかに微笑んでいた。

「ユリウス様がっ!? もちろん行きますっ、行かせてもらいますっ! ありがとうサンディちゃんっ、スクールズちゃんっ!」

「うむ、父によろしくな」

「い、ごめんね……ラウリックくん……」

これでよし! 後はうちの新しい仕事を探すだけ!

バザーオアシスの商館から離れると、うちらは市長邸を目指して姉妹でお喋りをしながら歩いた。

市長邸に着くと、たくさんの人が建物の中を忙しく行き交っていた。

うちらはその中から伯父の顔を探して、少しの間キョロキョロと見回しながら待った。

「おや……何かジイジにご用ですか、皆さん?」

「ううんっ、あなたを探してたの! スレイ伯父さん!」

パパは名前を忘れがちだけど、この人の名前はスレイ。メーブルママとシエラハママと同じで、ジイジに拾われた孤児だって聞いた。

「私を……?」

「頼むうーっ、伯父貴いーっっ、ワシらに仕事くれーっ!」

「ふ、2人とも、パパのお手伝い、飽きちゃったみたいなの……」

「ふむ……お父さんとお母さんの許可は取りましたか？」

「ぎくうーっ?!」

「パパは許してくれたわ! ママたちはまだだけど……」

うちのマゴマゴとした様子に、スレイ伯父さんはやさしく目を細めた。すごいイケメンだけど、うちのにはやっぱり渋さが全然足りない。

「書齋へどうぞ。幸か不幸か、ジイジは今ちょうど不在です。この際に何か探してみましよう」

「助かるぞ伯父貴いっ!」

こちらは伯父さんと一緒に書齋に入った。

伯父さんは棚からバインダーを取り出して、それを書齋の上に置いて開いた。

「民からの陳情をまとめたものです。助けを求める者は多いのですが、とても手が回り切っていません」

「えっ、私たちに、任せてくれるんですか……?」

「簡単な物ならかまわないでしょう。それに……貴女たちを大切にしたいシエラハたちの気持ちはわかりますが、姫君が率先して民のために働くというのは、それはそれで士気高揚に繋がります」

「うちたちは少し困ってしまいました。」

パパとママがあまりに立派だから、シャンバラのみんなはうちらのことをとても大切にしてくれる。でもうちたちはただの子供だった。

「むー、地味いゝな仕事ばかりなのじゃ……」



「まあ、大きな事件は放置できませんので」

バインダーを姉妹でのぞき込みながら、スクルズがページをめくっていった。

すると1つだけとても気になる陳情が目に入って、スクルズの手の方も止まっていた。

依頼人はフリドオアシスのエヴァンス。

1ヶ月前に失踪した兄のロキシスを捜してほしいという内容だった。

「それは止めましょう。もしかしたら事件かもしれない」  
「待ってっ！」

スレイおじさんがページを次に進めようとしたので、うちはバインダーの中に手を置いてそれを止めた。

「面白そうじゃ、ワシはこれがいいっ！」

「ダメです、こんな仕事を斡旋したら私が怒られます！」

「でも……このエヴァンスさんって人、凄く困ってると思う……。お兄さんが心配で頼ってきたのに、何も出来てないんだよね……？」

普段控えめなウルドもうちの手の上に自分のものを重ねた。うちらは姉妹の希望はこれで決まりだった。

「うちら、この仕事にするっ！」

「決まりじゃ！ このエヴァンスという人に会いに行ってくるのじや、サンディ！」

「バ、バックアップは、私たちに任せて……」

「いえ待って下さいっ、犯罪に巻き込まれたらどうするのですっ！」

「？」

「大丈夫、うちは誰にも捕まらないわ」

帰らない家族の帰りを待っている人がいる。

知ってしまった以上はもううちは止まれない。これは転移魔法使いのうち向きの仕事だと言い張って、スレイ伯父さんを説得した。

「そういう紐の切れたタコのようなところがユリウスさんにそっくりですよ……」

「大丈夫、必ずうちがこのロキシスって人を見つけ出すからっ！」

「推理はワシに任せよ！ 安楽椅子探偵役はワシじゃ！」

「じゃ、行ってくるわ！」

「今から！？ ちょっと、待ちなさいサンディッ！」

いつも丁寧なスレイ伯父さんが、うちに命令調の言葉を使うのが面白かった。

うちは尊敬するパパみたいに世界の裏への扉を開くと、フリドオアシスを目指して歩きだした。

・依頼人エヴァンス（前書き）

ご報告

書籍化にあたってタイトルを少し変更しました。

まだ確定ではありませんが、この名前でお店に並びます。

現在、最終稿の作業中です。最高の書籍版を仕上げて、そこからコミカライズへと繋がってゆくんばってゆきます。応援していただけるとありがたいです

## ・依頼人エヴァンス

数年ぶりに訪れたフリドオアシスは果樹に飲み込まれていた。

どこを見回しても果物、果物、果物ばかりで、収穫されなかった物が地に落ちて腐敗していた。

うちの暮らしているところはシャンバラの中心なのもう拓かれていたけれど、このフリドオアシスはおびただしい草木にまだに飲み込まれたままで、人々は樹海とオアシスと共に暮らしていた。

道行く人にエヴァンスさんの家を聞いて、ちょうど今やっと見つけ出した。

その家も急成長した草木に全体を飲み込まれていて、まともに管理されているのは出入り口部分だけだった。

「はい、どなたですか……？」

「こんにちは！　　うちはウエルサンディ、エヴァンスさんの陳情を見て来ました！」

ノックをすると奥から穏やかな女性の声が聞こえた。

足音がやけにゆっくりと扉の向こうにやってきて、しばらく待つと玄関が開いた。

「あつ、もしかして……ユリウス様の娘の……」

「うんつ、そうだよ、ユリウスはうちのパパ！　　そっちはエヴァンスさん？」

「ええ。でもごめんなさい、こんな大切なときにユリウス様のお手

を煩わせるなんて……」

「あ、こっちこそ期待させてごめん……。実はね、パパは関係ないの……」

「え、そうなんですか……?」

「うんっ、でも安心して！ うちら三姉妹はパパの凄いところをそれぞれ受け継いでるの！ こんなふうになっ！」

パパやおじさまが怒る使い方だけど、うちはパパのまねをした。

パパがするように相手の背後に飛んで、相手の肩を後ろから叩いた。

「キヤツ……?!」

「うちは転移魔法の才能を受け継いだ あっ、ごめん、大丈夫……っ!?!」

エヴァンスさんがよろめいて、うちはその背中を支えることになった。

彼女は色の薄いブロンドと、体重がないかのように細い身体を持った華奢な人だった。なんかこういう人、グラフィママが凄く好きそうだ……。

「違います、サンデイちゃんのせいじゃないのです……。私、昔からこういう身体なのです……」

「そうだったんだ……。そうと知らずうち、ごめん……」

「気にしないで、この身体は元からだから……。あ、少し待って下さいね……」

エヴァンスさんはお茶の支度をしてくれるようだ。でも見ていら

れなくて、うちはエヴァンスさんと一緒に厨房に入った。  
話してすぐにわかったけど凄くいい人だ。いい人だからこそ、ま  
すます助けてあげたくなかった。

彼女は人任せにしたいくて兄探しを依頼したんじゃない。  
自分じゃ探せない身体だから都市長シャムシエルを頼った。うち  
はジイジの孫としてこの人を助けたい。

「兄のロキシスを捜してほしいのです……」

「あ、うん。じゃ、詳しい話聞かせて？ 行方不明になったのは1  
月前だっけ？」

オレンジピール入りの紅茶を、スライスしたリンゴをお茶請けに  
して楽しんだ。美味しいお茶だったから、後でどこで買ったか教え  
てもらおう。

「ええ……正確には、34日前です……」

「お兄さんのこと大好きなんだね。……それで、お兄さんは何か言  
ってなかった？」

「いえ、いつもと変わりませんでした。仕事が終わると帰ってきて  
私の作った食事を食べて、お喋りをして、眠って……。そんな毎日  
です……」

「えっと、じゃ他に親族は……？」

「私たちは2人だけです……」

「そっか、ごめん……。このお茶凄く美味しいっ、どこで買ったのっ!？」

「ふふ、でしたら後でお分けしますね。大好きな紅茶に自分でオレンジピールを加えたの。兄が果樹園で働いていたので……」

「凄いっ、これ自分で作ったんだーっ!？」

ママに少し似てると思った。ママはこんなにおとなしくないけど、ママに似てやさしい雰囲気があふれていた。絶対に絶対、この人グラフママの好みだ……。

「ありがとう、気に入ってもらえて私も嬉しいです……」

「あ、それでさ、うち思ったんだけどさ。……あの樹海化のせいであ、国中が混乱してるじゃない？ そのせいで戻ってこれないって可能性もあるよね……?」

「そうですね……。でも兄は、仕事が終わると買い物だけして、まっすぐに帰ってきてくれるんです。兄が黙ってオアシスの外に出るとは思えないのです……」

パパとママがこの樹海化を引き起こしたとするなら、ますますうちがこの人を助けなきゃいけない。

しばらくうちはエヴァンスさんの言葉を噛み砕いて、やっぱり推理なんて向いてないと頭を振り払った。

「でもロキシスさんだって、たまに寄り道するところもあるよね？ うち、そこから当たってみるから、よく行くお店とか教えてくれるっ。」

「ありがとう、ウェルサンディちゃんは優秀な探偵さんですね……」

「ま、まあねっ！ スーパーエリートの娘ですからっ！」

「うふふふっ、なあにそれ？」

「パパの昔の口癖なんだって。事あるごとに言っていたらしいの」

エヴァンスさんを元気にして、ロキシスさんの行きつけの店を聞いて、うちはオレンジピール入りの紅茶をおみやげにもらって調査に出た。

エヴァンスさん。うちは好きだ。うちはこのやさしい人を助けたい。



・うちは調査官ウエルサンディ！

エヴァンスさんが描いてくれた地図を見下ろしながら、うちは果  
実の甘酸っぱい匂いでいっぱいのフリドオアシスを巡った。

とは言っても、彼女のくれた地図の通りに歩くには、樹海に埋も  
れている道を無理矢理にでも超えなければならなかった。

「もう、パパママったらこんなのやり過ぎよ……。ふふふっ」

でもそれがとっても楽しい！

うちはお猿さんみたいに木々に手をかけて、樹木の海の中を軽業  
で通り抜けていった。青青とした草木がみずみずしく香って、ジイ  
ジがうちらに見せたかった新しい世界を存分に楽しんだ。

そうやって樹海を抜けると、最初の目的地が見えてきた。イルス  
さんの食料雑貨店。そうエヴァンスさんの地図には書かれていた。

「ああ、ロキシスのことかい」

「そう、おじさんがロキシスさんと最後に会ったのはいつ？」

「最後か……。一月くらい前だったな」

「それはわかってる！ それより何か変わった様子はなかったっ？」

「……。なあ、もしかして君、その顔……。あのウエルサンディ様が  
……。？」

「うん、そうだよ！ みんなサンディって呼ぶからそう呼び捨てて

「！」

両親の前ではうちらはただの子供だけど、シャンバラのみんなにとっては大切なお姫様だった。

「こりゃ大変だ……っ！　おーい、お前たちっ！　ちょっと店に顔出せっ、ウエルサンデイ様がうちに来てくださったぞっ！」

「あのっ、うちは調査に来ただけで……っ」

店の奥からイルスさんの奥さんと、2歳くらいの女の子が出てきた。

女の子の方はうちの姿に目を輝かせてはしゃいで、奥さんの方はおたおたと慌てた様子でしばらく戸惑った。

それからちようどそこにあつた乾燥リンゴの瓶を取ったかと思えば、それを無造作にうちの前に差し出した。

「どうぞ、ウエルサンデイ様！」

「あ、ありがとう……。でも、貰ってもいいの……？」

「貰って下さいよ、サンデイ様。あっ、干しプルーンとかもどうですかっ！？　お嫌いなら輸入品のクルミや各種香辛料も　」

「うっんっ、リンゴだけ十分、ありがと！　あ、それよりロキシスさんについて聞きたいことがあるのっ！　うち、エヴァンスさんの依頼で、ロキシスさんの行方を追っているのっ！」

「ロキシス……？　うーむ……あいつの行方って言われましてもなあ……。ロキシスのやつ、果樹園を首になっただきり、ずいぶんと落ち込んで　」

「えっ、首っ！？　その話、うちエヴァンスさんから聞いてないよ！っ？」

そううちが驚くと、イルスさん夫妻は目と目を向け合ってなんだか気の毒そうな顔をした。

女の子の方は、うちのことをまだキラキラとした目で見上げている。仲良くなりたくて小さく手を振ったら、残念……お母さんの後ろに逃げられてしまった。

「きつと妹には、クビになったただなんて言えなかったんでしょ……」

「あ、そっか、そうだよね……」

そういうものなんだ……。大人って、大変なんだな……。

「いえね、シャンバラ中がこの有様でしょう？ 果物も余りに余ってしまっていてね、私ももともと困り果っているんですよ。価値が下がっては収穫しても加工しても、まともな稼ぎにはなりませんからね……」

シャンバラの樹海化は良いことばかりじゃなかった。増えすぎた果樹が相場を壊して、人々の生活をメチャクチャにしています。

「うちはユリウス・カサエルの子よ！ だったらそれっ、うちがどうにかしなきゃっ！」

「ウエルサンディ様は、とてもいい方ね……」

「ああ、おやさしいところがシエラ八様にそっくりだ。……ああそうそう、話戻しますけどロキシスのやつ、だから出稼ぎに出たんじやないですかね？」

仕事を首になつたから出稼ぎ……それはあり得る。  
いやでもちよつと変だ。妹想いの兄が、何も言わずに家を出るはずがないよ。

「ありがとう、他も当たってみる！ 大変なのにお仕事の邪魔しちやつてごめんね！」

「いえいえいえっ、何かあればいつでも店にいらっしやつて下さい  
！」

「ウエルサンディ様、どうかロキシスをよろしくお願いします」

「おひめさま……バイバイ……ッ」

「えへへ、次はサンディって呼び捨ててね！ バイバーイッ！」

イルスさん一家に手を振つてうちは新しい目的に向かった。

次は八百屋のランパードさん。この商店街を歩いてすぐその店  
だった。

「もしかしてウエルサンディ様か！？ こりゃ驚いたっ、おーいお  
前らっ、珍しいお客様が来てるぞーっ！」

「あ、あのっ、こ、困る……っ」

「ロキシスを捜すんなら、人を集めるのが一番だろ？ おーいつ、  
お前らさっさと集まれ！ ロキシスがどこに言った知ってるやつは  
いないかーっ!？」

ランパードさんは年季の入った中年のおじさんで、すつごく声が  
大きくて行動力にあふれている人だった。

「ニヤンニヤ、ニヤンニヤ〜?」

「ランパードはいっつもうるさいニヤ……。フミヤアツ?!」

みんなの注目がくすぐつたい。だけどこの展開はうちにとって都合だ。

これならロキシスさん探しの手間が省ける。一軒一軒お店を回らなきゃいけないって思い込みを、ランパードさんが吹き飛ばしてくれた。

胸を張ろう。うちは立派なパパとママの娘だ。

うちは集まってきたみんなに明るくお辞儀をして、元気な声で自己紹介をした。

「初めまして、うちはウエルサンディ！ エヴァンスさんの依頼で、その兄のロキシスさんの行方を捜しています！ どなたか、ロキシスさんの行方や、一月前の様子をご存じありませんかっ！？」

「サンディ様がロキシスを捜してくれているのかっ！？」

「噂には聞いてたけど、いい子ニヤア……」

「かわいいニヤ！ かわいい系のシエラ八様がいるニヤ！」

人だかりが人だかりを呼んで、みるみるうちに厚みが増してゆく。うちは後からきた人たちにさっきと同じ質問を投げかけて、ロキシスさんの行方を聞いた。

「確かに変だ、ロキシスが理由もなく姿を消すわけがないぞ」

「誰か知らないかっ？ ユリウス様がロキシスを捜してくれているらしいっ！」

「エヴァンス、可哀想に……」

みんないい人たちだった。パパは世の中には凄く悪い人がいるから気を付けるって言うけど、うちにはそれがわからない。シャンバラのみんなはいつだってやさしかった。

「あ、勘違いかもしれないけど……俺、ロキシス……見たかもしれないね……」

「本当っ!？」

辛抱強く声をかけてゆくと、ついに情報提供者が現れた!

その人は荷物を背負ったロバを連れたおじさんで、迷い迷いに手を上げてうちの前のやって来た。

「いや、確証はねえけどよ……。西のオアシス行きで、通りすがったような……。ほら、一月前に切り開かれたあっちの道。たぶん……あれはロキシスだった気がする……」

「ありがとう! それでその道は、どのオアシスに繋がっているのっ?」

「ケパオアシスだよ……。時刻も、お、遅かったし、向こうに泊まったかもわからんけど……」

出稼ぎに隣のオアシスに行った。それならわからないでもない。急な話だったのかもしれないし、翌日には帰ってこれる仕事だったのかもしれない。

「ただど何かの理由があつて、ロキシスさんはこっちには戻れなくなつてしまった。」

「うーん……これ以上は無理。難しいことはスクルズとウルドに全部任せちゃおう。」

「ケパオアシスね、行ってみるっ!」

「そうか! こっちでもロキシスについて聞き込んでおくよ! どうかがんばってくれよ、ウェルサンディ様!」

「本当っ！？ それ超助かるーっ！」

八百屋のランパードにうちは尊敬の念を覚えた。  
うちには上手く言えないけど、こっぴどやって周囲の人々をどんどん巻き込んで前に進む姿勢、見習いたい！

「それじゃ、うちはケパに　ん、あれ……？」

パパみたいに転移魔法で颯爽と消えようとしたら、ふいに遠くから聞き覚えのある声がうちを呼んだような気がした。その声を追っ  
て辺りを見回してみると、人集りが割れていった。

現れたのはエヴァンスさんだった。彼女は杖にしがみついて、苦しそに胸を押さえて息を乱していた。

「こ、これを……。兄の、部屋に、落ちていた、物です……」  
「だ、大丈夫……っ？」

いたわろうとすると、彼女から何か小さくて硬い物を渡された。  
指につまんで木漏れ日の空へと掲げて見ると、それは銀で作られた何かの破片だ。じっくりと見ると、「翼」に見えなくもなかった。

「兄をお願いします……。兄をどうか、見つけ出して、下さい……。どこかで、辛い目に遭っていないかと、思うと、私……」

「うんっ、ドーンとうちに任せて！　だってうちはユリウスの娘だよ、こんな事件っ、簡単に解決してみせるんだからっ！」

「ありがとう、サンディちゃん……」

うちは銀色の変な破片を懐にしまって、今度こそ颯爽と転移して見せた。

それからうちは進路をやっぱり変えて、スクールズとウルドがいる家へと引き返すことにした。

うちはパパやママほど優秀じゃない。姉妹同士で力を合わせてやっとな一人前だ。

少しでも早い事件解決のためにうちは不思議な世界をゆっくりと歩いた。極力走るな。それがパパとおじさまに教わった転移魔法の初歩だった。

うちはグラフママみたいに時の迷子になんてなりたくない。この世界には大切な人がたくさんいる。

それが若い頃のパパとうちの大きな違いだ。うちはこのシャンバラが大好きだった。



・うちは調査官ウエルサンデー！（後書き）

宣伝となりますが、コミカライズ版・超天才錬金術師2巻が発売中です。

今ならKindleで1割引、1巻は5割引で買えます。

・ワシは安楽椅子ののじゃロリ娘

・安楽椅子ののじゃロリ娘

「とうわけでねっ、推理とか分析は2人に任せた！　うちは目撃証言にあったケパオアシスに行ってみる！　あとよろしくねっ！」

ワシら姉妹の賢さを順番にするなら、ワシがトップじゃ！

二番目はウルドで、技師マリウスの薫陶を受けたワシが最も賢い！　そう思いたい……。

ワシは……他の姉妹と比較すると、見劣りする……。

サンディは転移魔法。ウルドは父同じ錬金術の才を持つておるのに、ワシには魔法銃と知恵しかない……。

「嵐みたいな姉じゃ。シエラハ母はあんなにもやさしくたおやかでセクシー辛抱たまらんといいのに、ああいうところは誰に似たのかのう……」

「お、お父さん、かも……」

「うむ……。確かに人の話を聞かずに、ああやってどんどん突っ走ってゆくところが父にそっくりじゃな……」

ウルドが書記になって、サンディの報告を書類にしてくれた。

ワシは居間のイスに腰掛けて、銀の破片とサンディの報告を元に思慮した。

「お茶、どうぞ、スクールズちゃん」

「おお……ウルドは気が利くの。大きくなったらワシと結婚してくれー」

気づけば、ずいぶんと考え込んでいたみたいじゃ。

ひかえめでやさしい表情で、ウルドのやつがワシのために茶を入れてくれた。ワシはそれを優雅に口に付ける。

サンデイが持ってきた紅茶と干しリンゴじゃ。オレンジピールの香りが最高じゃった。

「お、女同士で結婚なんてできないよーっ!？」

「愛があればいいのじゃ、愛があれば。そう母も言っておった」

「私は、よくないと、思うけど……」

「ワシならそなたをほっとかん。のう、ボーイフレンドはできんのか?？」

「出来ないよおーっ、そんなのーっ!」

「ま、ワシらは英雄の娘じゃからなー……」

ワシがアストラリアおば上の真似をすると、母は困り果てた顔をする。

ワシは尊敬するおば上の真似をして、愛らしいウルドのあごに触れた。ウルドは驚いてイスごと後ろに引っ込みおった。

「私も一生懸命考えたけど、スクルズちゃんは考え、まとまった?」

「うむ、情報が少なすぎて、妄想の域を出ん」

「よければ、聞かせて……?」

「よかるう。……失踪は、ロキシスの自発的行動と見ていいのかも

しれぬ」

「うん……そうだね。妹のためにも新しい仕事、探さなきゃって思ってたと思う」

「幸薄で病弱な妹が。聞いただけでこう、ふつつつと妄想がはかどりおるわい……。『お姉ちゃん、私寂しい……行かないで……』とかのう！」

「スクルズちゃん、そういう妄想は、お布団でしようね……」

「エヴァンスは絶対いい女じゃっ、ワシにはわかるっ！」

これ以上はなんとも言い難い。言葉にすれば己の思考を縛ることもなるだろう。

ワシは事件の鍵になるかもしれない『銀の翼の紋章』をウルドに突き出した。

「えっと、なーに、スクルズちゃん……？」

「たぶん、これは紋章じゃ。調べればどこの家かわかるかもしれん」

「あっ、紋章！ そうかも……！」

「ウルドよ、ジイジの書庫に行くでしょう。紋章学の本が見つかるかもしれぬ」

「もんしょう、がく……？」

「暇人どもの道楽じゃ。紋章から家の起源が探れる」

サンデイがまた帰ってくるかもしれないので書き置きだけ残して、ワシらは市長邸の書庫に向かった。この事件をハッピーエンドで解決して、エヴァンスという美女とお近づきになりたいものじゃ。

絶対に美人、絶対に美人に決まっておる！

ワシはひかえめで女の子らしいウルドの手を引っ張って、緑あふれるオアシスの道を歩いた。

・ワシは安楽椅子ののじゃロリ娘（後書き）

しばらく各話の文字数の乱高下が続きます。

## ・ケパ湖の酒場娘

・賢さ最下位の娘

ケパオアシスに着くと、うちはスクルズに勧められた通りに一番賑やかな通りを探した。

余所者は目立つ。だからまずは、多くの人の目が集まる場所から探すように言われた。

「あれ、あれって……ヒューマン……？」

最も拓けていて人が集まる場所。それは今も昔もオアシスの周辺の広場！

オアシスの空には木々の枝葉が届かないから、明るく広々としていて気持ちいい！

シャンバラが樹海化してからは、昔以上に人がオアシスに集まるようになってる。

それはきつと広がって見晴らしのいい場所が減ってしまったせいだつて、ジイジとパパが少し前に話していた。

「毎度！ さあさあ穀物ならなんでもあるよっつ、果実がお金と交換だ！ 干し果実ならもつと高く買うよっつ！」

オアシスの前の広場にやってくると、バザーがそこにひしめいていた。

その中で特に驚いたのは、大きな荷馬車のお店だ。店の人たちはみんな耳が丸くて、見ただけで陸路でやって来た行商人だとわかつ

た。

ヒューマンの行商人なんて初めて見た。

転移門を使った貿易は国家同士の取引だから、個人が間に入ることはそうそうない。

迷いの砂漠が消えて、外からヒューマンが勝手に入ってくるようになって困っているとパパたちが言っていたけど、あの人たちは悪いヒューマンに見えなかった。

「飴もあるよーっ」

「飴っ！？ それちょうだいっ！」

「はい毎度！ おや、お嬢さんベッピンだなあっ！？」

「ママはもつと綺麗よ。うちはウエルサンディ、これであるだけくれる？」

飴を21個買ってバックに詰めた。

それを物欲しそうにしていた子たちにプレゼントして、自分と姉妹の分を残した。

「あ、ありがとう……お姉ちゃん、やさしい……」

「うっんっ、買いきりすぎちゃったからいいのっ！ 誰かに取られる前にすぐに舐めてね！」

「えっ、まさか、ウエルサンディ姫……？」

「違うよ、うちはお姫様じゃないよっ、お姫様はママ。うちは姫なんて柄じゃないもん」

「おおっ、ウエルサンディ様だっ！」



交易商人さんのお店もあってか、オアシスの広場は既にちょっとしたお祭り騒ぎだった。

その盛り上がりがもつともつと盛り上がって、またみんながうちを取り囲んで列をなしていった。

これはうちが凄いいんじゃない。パパとママとジイジのこれまでのがんばりの証だ。だけどせっかくだから、これも利用させてもらおう。

「初めまして、うちはウエルサンディ！　パパはユリウス、ママはシエラハ・ゾーナカーナ・テネス姫！　うちは今、人捜しをしているの！」

声を張り上げて、ロキシスの名前を叫び、特徴を説明した。

するとみんなが1ヶ月前のことを思い出そうとしてくれた。口々に当時のことを回想しようと隣の人と話しだし、それからしばらくすると1人の女性が前に出た。

「ウエルサンディ様、ロキシスという名前の方は存じませんが、似た特徴を持った方がうちの宿に泊まっていました。余所者だったの  
で、たぶん、あれが貴女が捜している方ではないかと……」

「それ気になる！　迷惑じゃなかったらお店に案内してくれる！？」

「喜んで。まだ若いのに民のために身を擲なげって働くそのお姿、私感動してしまいました」

「大げさだよ。うちらはただ退屈で　あ、えっと……とにかく助かる！　案内して！」

宿屋のお姉さんに連れられて、樹海化した町を歩いた。

オアシスのある広場から1つ奥の通りに入って、酒場や厩舎のあ

るゴミゴミとした町並みを見ながらしばらく歩くと、三階立ての立派な宿屋にたどり着いた。

樹海に飲み込まれた大きな宿は、ちょっと幻想的でいいなっと思っただ。

「よっこそ宿屋ストレートフラッシュへ、ウエルサンディ様」

「ありがとう。でも、お店の迷惑じゃないかな……？」

「ウエルサンディ様さえよろしければ、何晩だっってお部屋を無償でお貸ししますよ。さ、こちらへどうぞ」

驚いた……。だってその人は宿屋の女将さんだった。中へと入ると従業員が声を上げて、うちの姿にもまた驚いて高い声を上げていた。

うちは事務所に通されて、そこに保管されていた古い宿帳を開いてもらった。

「34日前……あ、この日ですね。夜に4名が3階の大部屋に宿泊しています。名義はエバート商会。エバートに、リヨースに、ダンに、アイスタン様です」

「どういうこと……？ この宿泊客が、本当にロキシスさんだったの？」

「はい、この日、夕方以降に宿泊した外部の方は、このご一行のみです。肉体労働者風の、薄いプロンドの砂漠エルフ。体格は痩身、言葉使いは丁寧で温厚。この日のお客様で間違いありません」

エバート商会って何？

どうしてロキシスさんは、妹に連絡もせずこの人たちと一緒に

泊まっていたの？

「うん、うちには全然わからない。うちは情報をかき集める役だ。わかんないことは、わかんないで済ませた。」

「もし迷惑じゃなかったら」

「こちらへどうぞ、お部屋へご案内します」

「いいの……？」

「ちょうど清掃中のようです。がんばって下さいね、小さな名探偵さん」

「ううん、うちは情報を集めるだけ。名探偵役はスクルズとウルドよ」

「才色兼備の娘さんばかりで、ユリウス様が羨ましいですわ」

女将さんに導かれて階段を上って、モップとバケツが放置された2階の部屋の前に立った。扉を開いて中へと入ると、廊下よりはまだいいけれど薄暗い。原因は窓の外を覆う樹海だった。

「取り除ける部分は取り除いたのですが、ここは壁にまで木の根に浸食されてしまいました……。いずれは建て直さないといけないでしょうね……」

「そうなんだ……。パパたちが、ごめんなさい……」

「恨む理由がありませんよ。ユリウス様たちは滅び行くシャンバラの救世主です。さ、明かりを」

「ああそれなら大丈夫、うち、魔法が得意なの」

ライトボールを9つ作って、部屋の8方角と中央に浮遊させた。

それからうちは部屋のあちこちを探った。

「私としたことがうっかりしていました。すぐに清掃の者を呼びましよう。何か見つけているかもしれません」

「あ、そっか。わかった、そっちはお願い！」

「それと夜は下が酒場になりますから、昼とは異なるお客様が店に集まります」

「何から何までありがとうございます！　そうだ、お返しに宿とか酒場の準備を手伝うっ！」

ウエルサンデイ様にそんなことはさせられない。そう答える女将さんの困り顔を押し切って、うちはそういうことにさせてもらった。女将さんと別れてしばらく調べると、部屋からは銀髪に近い薄いブロンドの髪が見つかった。

でも34日も経ってしまっている。これがロキシスさんの髪かはわからない……。

「ウエルサンデイ様、これを」

「あっ、それって……！」

女将さんが戻ってきて、うちの手のひらに銀色の塊を置いた。それはロキシスさんの部屋にあった銀の塊と質感や曇り具合がそっくりだった。

さっきのは翼で、こっちは枝分かれした動物の角に見える。

「うちの清掃人が隠し持っていました。彼が言うには、エバート商会の者はチップの払いが悪かったようです」

「ケチな人たちだったんだ……。ねえねえっ、これ、何に見える……」

…?」

「枯れ木　ではなく角、でしょうか……。だとしたらシャンバラでは見かけない動物ですね」

「やっぱりそうだよねっ、角に見えるよね……。っ!？」

うちは銀の塊を証拠として預かった。それからあの部屋から何も出てこないことを悟ると、外にあったモップを握った。

「あ、あの、ウエルサンディ様……。？」

「サンディでいいよ！　うち、このお店を手伝うから夜の調査をさせてくれる!？」

「そ、掃除……。っ!？　あの、ご協力しますっ、協力しますからっ、そういった仕事はウエルサンディ様には……。っ」

「一度宿屋さんってやってみたかったの。お願い、手伝わせてっ!」

「清掃人がこの話を聞いたら、ひっくり返りますよ……。？」

「ふふふっ、凄く面白そうね！　どんな反応をしたか、後で教えて!」

「かしこまりました、ウエルサンディ姫。ふふ……。貴女には負けましたわ」

鍵はこの宿、この宿に滞在する人々の中にきつとある。

うちはそう信じて、宿のお仕着せを貸してもらって、仕事をしながら情報収集活動を進めていった。

「よっこそおいで下さいましたお客様、さ、お部屋はこちらです!」

やってみると凄く楽しい！

シエラハママの娘に産まれたことはうちの誇りだけど、宿娘の真似事は予想した通り、やってみるとやりがいがあって楽しかった！

夢中で働いてゆくと太陽が沈んで、酒場の営業が始まった。うちは給仕としてお酒やご飯を配膳して、庶民的で陽気なケパオアシスの酔客たちと明るく笑い合った。

家ではパパママが心配しているかもしれないけど、何か証拠を掴むまでうちは帰れない！

それに……酒場娘って楽しい！

「え、ロキシスを知ってるの!？」

「知ってるも何も、俺は元々フリドオアシスの出身なんだ」

「ああ、なんだ、そういうことかあ……」

「いや、1ヶ月前にここではったり合っただよ」

「えっ?!」

「だけど、おかしいんだよ……。俺が声をかけたのに、アイツ無視して行っちまったんだ」

「それって、どういうこと……?」

「さあ? けどあれは確かに、ロキシスだったぜ……?」

「えっと……じゃその人っ、誰か他の人と一緒にいたっ!？」

「連れか? ああ、見かけない連中とつるんでいたかもしれん」

じゃあ、それがエバート商会って人たちで、ロキシスさんは偽名でチェツクインしていたってこと……?」

うーん……わからない。わからないけど、ついには足取りを掴んだ！

「そうだ、『新しい仕事』って、その連れと話してたな。よそのオアシスに行つて何かするつもりだったらしい」

「それってなんの仕事？」

「さあ、それ以上はよく覚えていないな……」

「そっかあ……。ありがとおじさんっ、よかつたら名前教えてくれる！？　うちはウエルサンディ！」

「ナンパかい、お嬢ちゃん？ ……ん、ウエル、サン、ディ……？」  
「うん、そうよ。サンディって呼んで」

「あ、あのよ……。お、お父さんの、名前は……？」  
「ユリウス」

「ウエツ？！　ウエルサンディ姫様じゃあないですかあーっ？！  
なっ、なっ、何やってるんですかこんな酒場でえっつ？！」

みんな大げさだ。でも反応が面白くて癖になっちゃいそうだ。

うちは驚くおじさんを笑顔で笑い返して、盛り上がる酒場のみんなに自己紹介をした。

今日の調査はこれで終わり。

どこかホツとした様子の女将さんからおみやげの自家製ピクルスを貰つて、うちはみんなの待つオアシス前の我が家へと転移した。

・ケパ湖の酒場娘（後書き）

書籍化にあたってタイトルを変更しました。

ちよつとだけ短くなりました。

また、書籍版の最終稿を先日提出しました。

売りは合計160時間にも及ぶ改稿です。

ポリウムたつぷりの2本の書き下ろしが、第一部をより読了感の仕上がり昇華させています。

読者さんに損をさせたくない一新で、採算度外視の労力を傾けました。

まだ少し先ですが、どうか発売しましたら書店にて手に取ってみて下さい。



・メープル母は見た！

・安楽椅子探偵（自称）

サンディと父は同類じゃ。いつだってワシらやママたちを心配させる。

夜になってもサンディが帰ってこないの、ワシとウルドは心配になった……。

帰りが遅くなればスレイの伯父貴に迷惑がかかる。

ワシらの楽しいこの仕事も、父と母たちの怒りを買えば中断させられてしまう……。

「えと……悪い子……。反省する……」

「ごめんなさい、メープルママ……」

メープル母はもう感づいているかもしれぬ。

言葉では叱りながらも、メープル母はサンディの頭を撫でて微笑んでいた。

メープル母は油断ならぬ……。あれは盗み聞きのエキスパートじゃ……。

「ボクも若い頃はヤンチャしたから強くは言えないけど、心配で小さくなっていったシエラハの姿を君に見せてあげたいよ」

「どこに行つたのよっ、ちゃんと夜には帰って来なさいって言うていたでしょっ！」

「ご、ごめんなさい、グラフママ、シエラハママ……」

母たちから見ればワシらはただの6歳児じゃ。6歳児が夜に帰ってこないだけで大騒ぎじゃった。

ワシはしょんぼりした姉に、喋るなよと警告の目を送っておいた。こうしてこつてり絞られたサンディと一緒に、遅い食事を済ませた頃にはもう夜更けだ。

ワシらは子供部屋に集まって、ワシはまだ目元の赤いサンディに調査の報告を迫った。サンディは無言で銀の紋章をウルドに差し出した。

「あつ、これって昼間と同じ紋章だね……」  
「紋章……？ これ、紋章なの……？」

いつも元気な姉がおとなして声が小さい。その様子にワシも調子が狂った。

父も母たちも過保護じゃ。ワシらは6歳かもしれないが、もう大人じゃ。

ウルドはテーブルの上に2つの紋章を並べた。  
左の翼と、左の角はパズルのピースのようにぴったりと上下にはまった。

「あつ、凄い！ 本当だつ、これって紋章なんだっ！？」  
「やっと元気になったようじゃの」  
「よかった……。でも、この角、なんの角だろう……」

「変な角だのう。明日、伯父貴に聞いてみるとしよう」  
「これで、紋章の分析がしやすくなったね」

『私たちはこんなことをしていたんだよ』と、そう言わんばかりにウルドが紋章学の本をベッドの下から取り出した。もしこの本を親に見られたら、何を企んでいるんだと探られるからのう……。

「わっ、2人とも頭いいっ！　もしかしたらこれで、エバート商会の正体がわかるかもしれないだっ！？」

「えーと商会、じゃと？　他にも何か掴んだのなら、はよワシらに説明せい！」

「うんっ、えっとなっ、ロキシスさん、かなりおかしなことになってるの！」

ワシらはサンデイから調査報告を聞いた。真面目なウルドが書記として詳細をまとめてくれて、報告が終わるとワシら三姉妹は文字の羅列を囲んで見下ろした。

「えと……なんで知り合いを無視したり、偽名を使ってたんだろう……」

「ロキシスと知られなくなかったからに決まっておろっ」

「でもなんでっ？　なんでそんなことするのっ？」

これから悪いことをするつもりだったのかもしれない。そう口にすれば、このまっすぐな姉を困らせるだろうか。

いくら直情的なこの姉だって、ロキシスがまずいことに首を突っ込んでいることくらい、それとなく察しているだろうがの……。

「とにかく仕事……。仕事するために、ロキシスさんはエヴァンス商会の人と一緒にオアシスを出たってことだよ……。なら……。この人たちはどこに行ったのかな……。？」

「え。そんなこと、これだけの情報からわかったりするの？」

ワシはわざと大げさに腕を組んで、ワシが考えてやるとうなって見せた。

ここでワシがいいところを見せてやらなければならん。ワシだけ遅れを取るわけにはいかん。姉妹だからこそ負けられぬのじゃ！

「行政区……あるいは、バザー・オアシスに向かったんじゃないかの……？」

「えっ、ここ！？」

「どうしてわかるの、スクールズちゃん……？」

「うむ、あくまで仮説じゃ。じゃが一ヶ月前というと、樹海化により道さえまともに切り開かれていなかった頃じゃ。フリドオアシスが目的地ならば、フリドオアシスでこやつらは待ち合わせしたじやろう。なら、行き先はシャンバラの中央、ここじゃっ！」

……たぶん、たぶん合ってるはずじゃ。

後で伯父貴に相談して、答え合わせをしてもらおう……。

「スクールズちゃん、すごい……っっ！！ やっぱりスクールズちゃん頭いいね……っっ！！」

「うんうんっ、本物の名探偵みたいっ！ きつとスクールズの言う通りだよっ！」

「わーっはっはっはっ、ワシはまだ6歳じゃが賢いからのうっ！！  
ワシも、スーパーエリートの子じゃっ！！」

こういつワシの見栄っ張りなところ、父から遺伝してしまったのかのう……。

「あ、そういえばあの頃、樹海を切り開くために人を集めてたよねっ！」

「うむ、仕事じゃな。それも体力さえあれば誰にでも出来る仕事じゃ」

「じゃあじゃあつ、明日起きたらジイジのところまで調べてもらおうよ……っ。もしかしたら、ロキシスさんの名前があるかも……！」

「偽名を使った可能性もあるな」

「それならしつかり覚えてあるよっ！ エバート、リヨース、ダン、アイスタン！ どれかの名前があったら、それがロキシスさんかも！」

ワシらは盛り上がった。2日でロキシスを見つけて、成果を報告出来るかもしれないからだ。

ところがそこにノックが響いた。……それは、あの盗み聞き上手のメープル母じゃった。

「ねえ……なんか、面白いこと……してる……？」

「な、なんでも、なんでもないよ、お母さん……っ」

「ふーん……そうなんだ……」

「それよりっ、お部屋になんのご用っ、メープルママッ!？」

「うん……これ、ないと困ると思って……。どぞ……」

ワシらは3人でテーブルの上の物を背中で隠していた。

メープルママはそんなワシらの前にひょうひょうとやってきて、紙切れを実娘のウルドに渡した。それは ジイジの書庫の図書カードじゃった……。

「紋章学……。私の娘とは思えないくらい、勉強熱心だね……」  
「は、はうつ？！ お、おか、おかあさ……っ」

「ん……危ないことはしない……。そう約束、出来る……？」  
「う、うむっ、するっ、するっ！ するから後生じゃっ、ワシらの  
楽しみを奪わんでくれっ、メーブル母上っ！！」

「うん……約束、する……っ」  
「メーブルママはなんでいつもいつも、こんなに鋭いのよ……。わ  
かったわ、気を付けるっ！ だからお願い、見逃してっ！」

メーブル母はやさしく微笑んで、ワシらが隠していたテーブルを  
回り込んでのぞいた。

メモに目を通して、紋章学の本と、銀の破片を交互に見た。

それから何を考えたのかわかぬが、目に付いた方から順番にワシ  
らを抱き締めた。

「偉い……」

それだけ言ってメーブル母は嬉しそうに足を弾ませて部屋を出て  
行った。ワシらは一斉にため息を吐いて、最も鋭い母がメーブル母  
であったことを感謝した。

「なぜじゃ……褒められたぞ……？」

「えへへ、そうだね……。お母さん、褒めてくれたね……っ」

「うんっ！ 明日からがんばろっ！ 事件解決して、明日の夕飯で  
パパたちに自慢しようよっ！ そしたらこれから、もっともっとな  
つてくれるかもっ！」

「おおっ、それもそうじゃな！ 親たちを驚かしてやるのじゃ！」

ワシら姉妹は冷め切らない興奮を胸に抱えて、その後夜遅くまで語り合った。

ワシらはもう子供ではない。そう証明したい。姉妹は夢を語り合い、同じベッドに入って、同じ匂いをかいで眠りについた。

・

じゃが、現実というのはそう甘っちょろくない。そうアストライアおば上が言っていた。

ワシらは希望を抱えて伯父貴と合い、ジイジに気づかれないうちに別室でリストに目を通した。

それは新たなに募集された開拓労働者たちのリストだ。

何か事故や事件が起きたときのために、名前と出身と連絡先をそこに記すのが義務付けられていた。

「ない、何度目を通してもない……。どこで間違えたのじゃ……」

リストに名前はなかった。ロキシスも、エバートもリヨースもダもアイスタンもおらんかった。ワシは安楽椅子探偵失格じゃ……。

別の募集に加わったのかもしれないと、さらに新たなリストを伯父貴に手配してもらったが、そっちも空振りじゃ。

ダンはおったが、齢700歳のジイジじゃった。  
元気なジイジもいたもんじゃ……。

「うちが間違った情報を集めてきちゃったのかな……」  
「紋章の角、スレイ伯父さんもわからないって言ってたね……。これからどうしよっか……」

ワシらはガキじゃった。ちよつとの失敗でへこたれてしまった。伯父貴はそんなワシらに気を使ってくれた。ワシらは伯父貴の仕事の邪魔じゃった……。

「うち、どこから調査し直せばいいかわからないよ……」  
「少し、頭を休ませたら……？ 1日に結果が出るわけ、ないよ……」

……  
「そうじゃな……。父の仕事でも手伝いながら、少しでも休むとして……」

手詰まりになったワシらは、工房でイチヤイチャしていたラウリイと父の間に割り込んで、しばらく無心で仕事を手伝った。



・私は小さな錬金術師

・小さな錬金術師

「はあ……っ」

「さっきからどうした？ スクルズにお菓子でも取られたか？」

私はウルド。三姉妹の次女で、今は見習い錬金術師。グラフィママから時々、弓を教わったりもしている。

「違うよ……。でも、お父さんには言えないこと……」

「ま、まさか、彼氏」

「そんなわけないでしょ……」

「そうか、よかった……。お前はまだ子供だ、彼氏なんて10年早い！ いや、やはり20年だっ！」

「お父さんがそのままじゃ、私たち行き遅れちゃうよ……」

「どこにも行かなくていい。ずっとここにいろ」

お父さんと一緒に魔力をかけて、最近は全く供給の追いつかないスタミナポーションを完成させた。

あと、お父さんは本気だった……。

「ねえお父さん……もしも、だけど……」

「お前はまだ6歳だっ！」

「そっちの話じゃないよおっ！」

「そうかすまん、俺の早とちりだった……」

やっぱりお父さん、最近ちょっと変……。

元から過保護だったけど、最近は寂しそうで、時々何かに怯えているような感じ……。

「あのねっ、もしもお父さんが何かを見つけれたいと思ったら、どうする……?」

「何かって、何をだ?」

「それは……あの、落とし物とか……」

「落とし物か。そうだな……それならば、お父さんの得意分野だ」

「どうするのっ!?!」

「銀の導き手のレシピを応用する。その本棚だったかな、レシピがあつたはずだ。そのレシピに、捜したい物の破片か何かを加えれば、失せ物と引き合うアイテムが生まれるだろう」

「そんなこと、出来るの……っ!?!」

錬金術……錬金術って、凄……!

そうか、そういうことなんだ……っ!

だったらそうだ、あの紋章の破片! あれを入れればいいのかない?!

そうしたら割れた紋章の残りが見つかる。ロキシスさんの行き先にあの破片にあつたのだから、破片がロキシスさんへの道しるべになるかもしれない!

「材料なら倉庫にあるだろう。ここはもういいから、あつちの錬金

釜で試してみるといい。ラウリッツ、ウルドのサポートをしてくれ！」

「え、ウルドちゃんのか？ 何か作るんですか？」

下の水槽ではラウリイが梱包をしてくれている。

ちょうどスクールズとサンディはオアシスの方で休憩中だった。

「えっと……そ、それは……」

「秘密だそうだ。悪いが付き合っただけでやってくれ」

「いいですよっ！ ウルドちゃん、僕にだけ何を作るか教えて下さいよっ」

「秘密……秘密です……っ」

「秘密ですか？ そう言われるとますます気になるなあ……」

「ごめんなさい、ラウリイくん……」。

お父さんに気づかれたら、この仕事を取り上げられちゃうの……」。

でもお父さんの言う道具が本当に作れるなら、落ち込んでたサンディとスクールズに希望をあげられる！ 私たちの事件簿はまだ終わってないんだって……っ。

私は本棚を探って、お父さんの言っていた銀の導き手のレシピを見つけて出した。

迷宮を見つけて出すためのアイテム。確かにこれを応用すれば、紋章の破片を見つけれられるかも。

「そんな顔をしたサンディちゃん、僕、初めて見たよ」

「あ、ごめんなさい……」

「そうじゃないよ、なんだか大人びて見えた。ユリウス様はいつまでも君を子供扱いするかもしれないけど、それは彼がヒューマンだからだよ。ヒューマンの子供は、大人になるまでに18年もかかるんだ」

「ラウリイくん、お手伝い、してくれますか……？」

「もちろん、僕たち友達じゃないか！」

私はラウリイくんに手伝ってもらった。

紋章の欠片を端っこを壊して、銀の導き手のレシピにそれを添加して、神様に祈った。どうかエヴァンスさんのために、ロキシスさんへと導くアイテムをここに生み出して下さいと。

「あ、あれ……何、これ？」

「僕知ってるよ。これってあれだよ。そうっ、ヤジロベエだよっ！」

私の銀の導き手はダウジングロットにはならなかった。

ヤジロベエと呼ばれる東方のおもちゃみたいな、針のような片足で地面に立って揺れる不思議な人形だった。

これで、ロキシスさんが見つかるといいのだけど……。

・小さな転移魔法使い

水浴びをしているとウルドが岸边に立っていた。

ウルドは右の手のひらにキラキラと銀色に光る何かを乗せていて、それをうちの前に突き出していた。

いつになく明るい笑顔だった。それを見ているだけで、うちらまでなんだか嬉しい気分になれる笑顔だった。

うちらは同じ父親の子として、同じ年に生まれて片時も離れずに育った。

だからウルドが嬉しいと、うちらも嬉しい。うちは笑顔に笑顔で返していた。

「ニヤンコ探しに使ったあれかつ！」

「ウルドって天才っ！ これでロキシスさん探しを再開出来るねっ！」

「ち、違うよ……っ、これ、お父さんのアドバイスだから……っ」

その銀色のやじるべえは、あの正体不明の紋章と引き合う。そうウルドが大まかに説明してくれた。

ゆらゆらと左右に揺れる不思議なオモチャはスクールズに奪われて、それからしばらくしてから、最終的に調査員であるうちの手に渡った。

「三角形じゃ。北と、南西、南東でそれを試すのじゃ！」  
「いいけど、なんて三角なの？」

「マリウスおば上にそう教わったのじゃ。四角よりも三角がいいのじゃ」

スクルズが木の枝で地面に三角形を描いた。

それからその三角形の中に、右端に棒を1本足して小さな三角形を作った。

「こうじゃ、わかったかつ!？」

「ううん、全然！」

「ムツキヤアアーツツ、現場担当のサンデイがわからんでどうするーっ!！」

「わ、私、わかったかも……。この3つの頂点の中で、一番反応が強いところを見つけるの。そして今度は、この小さな三角形から、残り2つの頂点の部分を調べるの」

スクルズがそうしたように、ウルドが小さな三角形の中に棒を1つ足して、さらに小さな三角形を作った。

「えっと……それで？」

「むふふふっ、そうかわからぬか！ 全くしょうがないのう、サンデイは！ 足りない知恵はこれからもワシが貸してやるっ」

「何よっ、ちよつと頭がいいからって偉そうに！」

「ひがむなひがむな。知恵担当のワシがちゃんとうわかりやすく教えてやる!！」

私は2人から場所の絞り込み方を教わった。

まだよくわかんないけど、2人の言う通りにすればきつと上手くいくってことはわかった。

「それじゃうち行ってくる！ 2人ともありがとつ、2人がうちの姉妹きょうだいでホントよかつたっ！」

「無理、しないでね……あつ」

居ても立ってもいられなくて、うちは準備が済むと感謝してからすぐに転移した。

北と、南西と、南東。シャンバラの辺境まで飛んで、それからうちは一番反応の強いところを探していった。

・

「あれ……おかしいな。全部内側に向いてる……？」

シャンバラはどこもかしこも樹海だった。

うちは一番大きなブナの大樹の上に転移し直して、高い幹の上から樹海の国シャンバラを見渡した。今は大きな三角形部分を終わらせて、二つ目の小さな三角形を調べ終えたところだった。

「ということは……。シャンバラの中心の方にあるってこと、だよね……？」

うちはどこまでも続く樹海と、伐り拓かれたオアシス周辺の町を眺めながら、スクルズ言葉を思い出そうとした。

こういう場合は　そう、スクルズは内側に逆三角形を作っていた！

三角形が4つ出来るように線を引いてた！

「うう、図形とか苦手……。でも、こういうの覚えておいた方がいいんだよね……。よし、がんばるっ！　とにかくやってみようっ！」

うちは足下に扉を作ると飛び込むように転移して、内側の三角形の頂点の部分に飛んだ。

するとそれぞれの頂点でも、銀のやじろべえは内側に傾いていた。

「あ、わかった！　この場合、内側にもう1つ三角形を作ればいいんだ！」

世界の裏側を、うちは歩数を数えながら歩く。

何歩で行けたか数えて、その半分の歩数のところに転移する。足下に碁盤目模様があるから、方角を間違えるようなことはなかったと思う。

飛んで、確かめて、また飛んで、うちは碎けた紋章の行方を絞り込んでいった。

・

そしたらただ　なんか意外なことになった。

だって銀のやじろべえが指し示す場所は、こちらが暮らすオアシスから見て、ちょっと東に行ったところだったの。



だからうちは場所を確かめた後、スクルズとウルドを誘った。せつかく近くなんだし、一緒に探そうよって誘ったら、2人とも凄く嬉しそうだった。

「近いぞ、近いぞ、ロキシスまであと一歩じゃ！」

「でもスクルズちゃん、直接、ロキシスさんに繋がるとは限らないよ……？」

「その時は何か遺留品を見つけて、またウルドを頼る！」

「あ、うん……っ。が、がんばるね……っ！」

「わははっ、ワシらはスーパーエリートの子じゃっ、出来ぬことなどないわーっ！」

うちらは樹海を探検した。やじろべえの導きに従って、道ならぬ道を伐り拓いていった。うちのウィンドカッターで。

「む、あそこに掘って建て小屋があるぞ……？ 誰が作ったかしらんが、尋常ならざるボロさじゃなあっ！」

「でも、なんでこんなところで暮らしてるの……？」

それは木の葉の屋根と、製材されていない木をいくつも使っても建てられた間に合わせの小屋だった。やじろべえはその小屋の方に強く倒れている。

あれ、でもウルドの言う通りだ。貧乏ならスラム街へ行けばいいのに、なんでこんな場所で隠れて暮らしているの……？

「そうだよっ、これってなんか変だよ、気を付けてスクルズッ！」

「大丈夫じゃ、今日のワシにはマリウスおば上特製のコイツがある

！ 皆の者、突入じゃーっ！！」  
「わっわっ、ダメだよおっ、危ないよおーっっ?!」

魔法銃を構えて、スクルズが木の葉で作られた入口に飛び込んだ。  
遅れてうちらも後を追ったけど

「ヒ、ヒエエツツ?!！」  
「スクルズちゃんっ?!？」

中からスクルズの悲鳴が聞こえて、ウルドが弓を構えながら突入した。

うちは転移で中に飛んで、戦いになるとパパがそうするように回り込んだ。

「し……死んで、死んでおる……」  
「そんな……。もしかして、この人がロキシスさん……?」

薄いブロンドの若い男の人だった。けどその人の胸には赤い血痕が広がっていて、背中の中の木の葉の寝床には、真っ赤な水たまりが出来ていた。

それは死体だった。ロキシスさんに似た特徴を持った男の人が、何かで胸を刺されて死んでいた。

「こ、これ……。っ、あの紋章……。っ!」

ロキシスさんの手の中にあの紋章の残りが握られていた。

「じゃあこれって、エヴァンスさんが探してたロキシスさんなの……? こんなのってないよ……。消えた家族が殺されていたなんて、そんなのあんまりだよ……」

お兄さんを見つけ出して安心させてあげたかったのに、死体を見つけただなんて、そんな報告できないよ……。

頭の中が真っ白だった。手足が震えて、急に怖くてたまらなくなつた。だってここに刺殺体があるってことは、殺した人がどこかにいるってことだもの！

うちらは恐怖にひきつった顔でうなづき合って、死体のある粗末な小屋から逃げ出していた。

うちらは死体を見つけた。ロキシスさんにそっくりな特徴を持った男の人を、見つけてしまった……。

・終幕 カサエル姉妹の事件簿 - 思わぬ結末 - (後書き)

更新が1日遅れになりました。  
お待たせしてしまってすみません。

でも災難はそこで終わらなかつた。小屋から出て気持ちを落ち着かせる間もなく、突然に、何かが風を切るような物音が響いた。それは弓矢だった。鋭い矢が一齐に飛んできて、うちの肩と膝に突き刺さっていた！

「おのれえっ、よくもサンディをっ！」

「い、一度中に戻るっ、サンディちゃんっ、こっちっ！」

よかつた、2人は無傷だった。

スクルズが電撃の魔法銃で反撃して、ウルドが激痛にあえぐうちを小屋の中に引っ張っり込んでくれた。

「なんなんじゃあいつらはーっっ!?!」

「犯人……っ、なんじゃ、ないかな……」

「矢、抜くね、サンディちゃん」

「えっ、それはまだ心の準備が あうっっ?! ちよ、もっとやさしく うああっっ?!」

普段はあれだけ臆病なのに、追いつめられるとウルドは強かつた。うちに刺さった弓矢を2本とも引き抜いて、あのぷにぷにで美味しいエリクサーをうちの口に突き付けていた。これを持たせてくれた心配性のパパママに感謝だった。

甘酸っぱくて美味しいぷにぷにを半分だけかじると、ますますパパに感謝したくなった。激痛が遠退いて、傷口がこちらの目の前

でふさがっていった。

なんて凄い人を父親に持ってしまったんだろうって、あらためて感じずにはいられなかった。

「サンディツ、動けるかつ!? 動けるなら逃げるのじゃっ、このままでは、ワシらまでロキシスのように殺されてしまうぞっ!」

「こ、怖い……っ、怖いけど、わ、私、がんばる……っ!」

殺意を感じて凄く怖かった。迷宮のモンスターならなんでもないので、同じエルフから殺意を向けられるなんて、こちらを愛してくれるシャンバラのみんなに弓を撃たれるなんて、こんなのショックだった……。

「なら、うちが囷になるっ! うちが先にあっちに逃げるからっ、2人は反対側に逃げて!」

「で、でも……そんなの、危ないよ……っ、また弓で撃たれたら

」

「ならばワシとウルドで援護するのじゃ! ウルドもグラフ母より授かった弓術、今こそ發揮する時であるう!」

「いくよっ、援護は任せたっ!」

「任されたのじゃ!」

うちが小屋を飛び出すと、待ち構えていたかのように矢の嵐が飛んできた。それをうちはウィンドカッターで軌道をそらして、囷と なって必死で走った。

そんな中、魔法銃とエルフの弓が悪いやつらに反撃してくれた。当たったかどうかはわからないけど、悪いやつらは逃げ出したうちを追いかけた!

「殺せ、絶対に逃がすな！」

あーあ、こんな危険なことをしたら、後でパパママにこっぴどく怒られちゃう。

逃げて、逃げて、逃げて、背中に矢を撃たれて転んでしまうまで、うちはたっぷり時間を稼いでやった。あいつらの誤算は、うちのこととをただの子供だと勘違いしたことだ。

「あの茂みだつ、蜂の巣にしてやれっ！！」

命乞いと悲鳴を上げながら、うちは転移魔法を足下に発動させた。あとちょっと転移が遅かったら、全身串刺しにされていたかもしれない。

うちは世界の裏側で背中 of 矢を引き抜いて、自分の分のエリクサーをかじって傷を元通りにした。

「死んだと思ってくれてるといいけど、そうもいかないよね……。  
うちを諦めたらサンディとウルドを追いかけるに決まってるもん……」

うちは歩き出して、逆方向に逃げたサンディとウルドを探した。  
あいつらは砂漠デザート・ウォーカーエルフじゃない。肌が白くて耳がたれていなかったから、きつと森リーフ・シーカーエルフだ。でも、どうして……。

視界の悪い密林の中を、2人を探して何度も転移した。

「恨みはないが見られてしまった以上は仕方がない、死んでもらおうか」

「ワシらがただでやられると思うてかっ！」

「ゆ、弓が、震えて……っ」

やっと見つけた。でも2人は弓を持った男たちに囲まれていた。このままじゃ間に合わない。転移魔法を使っても倒せるのは1人くらいで、このままじゃ残りの人たちがうちの家族を串刺しにする！

死なせたたくない。生まれたときからずっと一緒の大切な姉妹を守りたい。うちは自分の無力さを悔やみながら、せめて1人だけでもと転移した。

するとうちは、世界の裏側で　　パパを見た！！

あの聖剣を片手に消えては現れて、そのたびに向きを変えて、それを5度繰り返し返していた。

それからパパの姿を探して表側の世界に戻ってみれば、刺されて倒れ込む悪い人たちと、自分の義手を不思議そうに見ているパパの姿があった。

スクルズとウルドは無事だった！

「やはりどうも慣れん……」

「き、貴様は……ユリウス……ッ?!」

「ああ、あまり動かない方がいい。急所は刺していないが、傷口が広がればどうなるかはわからない」

「父いいーっっ、怖かったのじゃあぁーっっ！」

「お父さんっ、お父さぁんっっ！」

うちらはパパに飛び付いた。怖い気持ち胸の中で爆発して、我慢で憧れで強くてカツコイイパパにしがみついて震えた。



「ユリウス・カサエル……貴様は災厄だ……」  
「永久に呪われる！ 地獄に堕ちるがいい！」  
「我々がここで朽ちようとも、いつか仲間が、貴様の息の根を止める……」

悪い人たちが立ち上がった。エルフはみんなパパを愛しているはずなのに、どうしてそんなことを言うのかわからない。

うちらは英雄の娘として、絶対に負けないパパから離れて後ろに退いた。

「これ以上戦えば死ぬぞ」

「ユリウス……貴様だけは、絶対に許さん……」

「ハハハハッ、また会おう！！ 地獄の底で！！」

敵は魔法のスクロールを一斉に取り出した。それを開いて「燃えよ」と叫んだ。

うちらはてっきり、炎の魔法攻撃が飛んでくるのかと思って迎え撃とうとした。でも、魔法は飛んでこなかった。

「ヒイイツツ?! なんじゃああつ、こやつらはあーつつ?!」

「な、なんでっ、なんで、こんなこと……つつ」

「う、嘘……」

うちの目の前で人が燃え上がった。炎は凄まじい力で悪い人たちを焼き払って、やがてただの火柱に変わった。

理解、出来なかった……。

パパはうちの傲慢なのに、どうしてあの人たちがパパを憎むのかわからない。

どうしてあんなにも簡単に自分の命を捨ててしまえるのか、うち

らには全くわからなかった……。

それに　せっかくロキシスさんを見つけたのに、彼はもう死んでしまっていた。

うちの事件簿の1章目は、大失敗で終わってしまった。

「普段あれだけかましいお前たちが、それだけ静かだと心配になる」

「だって……何もかもが、シヨックだもの……」

「メープル母め、ワシら売りおったな……」

「いや、それは初耳だな。あいつめ、俺に報告してくれてもよかっただろうに」

「じゃ、じゃあ、誰から聞いたの……？」

「さあな。しかし、そうやって落ち込んでいていいのか？ 仕事はまだ終わっていないだろう」

パパに肩を叩かれた。うちの背中を押して、さっきの小屋へと歩き出した。

パパは小屋に入って行って、しばらくするとトレードマークの白いトーガを外に脱ぎ投げて、ロキシスさんを抱き上げて出てきた。

「一度戻ろう。それからサンディ、俺と一緒に依頼人にこの人を届けよう」

「で、でも……っ。お兄さん、死んでましただなんて、そんなの、言えないよ、うち……」

「気持ちはわかる、俺だって駆け出しの頃があった。酷い失敗をやらかして落ち込んだ」

「え……パパにも……？」

「アルヴィンスに慰められたよ」

さすがはアルヴィンスおじさまね！ やっぱりおじさまって素敵！  
……って口に出す元気はさすがになかった。

「だがこれは失敗じゃない。お前たちは見事に困難なこの依頼を達成してのけた。姉妹で力を合わせて、ロキシスの行方をこの短期間で突き止めたんだ」

「父い……っ」

「そうだね……。私たち、がんばったよね……」

「この男のことは残念だったが、依頼そのものは成功したんだ、もっと自分たちを誇れ」

うちらは道なき密林から引き返した。

パパは一足先に遺体を運び、それからわざわざ戻ってきて、怒るところかうちらを気づかせてくれた。

ママたちがパパに夢中になるのも、なんだかわかる気がした。

パパは人の痛みや苦しみに敏感だ。そんな人を憎むなんて、おかしいのはあの人たちだ。

「さあ行こう」

「う、うん……。でも、エヴァンスさん……」

「何も言わなくていい。俺が代わりに伝える」

「ううん……。うちが伝える……。だって、うちらが始めた調査だものっ！」

家に戻るとうちはパパと一緒に依頼人への報告に向かった。

パパが綺麗にしたロキシスさんを抱いて、うちがその隣で慰めの言葉を探しながら、世界の裏側を歩いた。

あの果樹の匂いのするオアシスに到着すると、うちが案内をして、うちがエヴァンスさんの家をノックした。

決めた通りに最初にうちが事情を伝えた。

それから遅れてパパが、ロキシスさんかもしれないの遺体を抱いて姿を現した。そうするとエヴァンスさんは、大粒の涙を流して玄関先に崩れ落ちていた……。

「私、覚悟はしていました……。こうなるかもしれないと、気付いていたんです……」

「エヴァンスさん……。うち、なんでも力になるからもつと頼ってっ！ これからは、うちらがエヴァンスさんを支えるからっ、ねっ！？」

「ありがとう……。ユリウス様も、わざわざ、こんなところまで……」

「この男のことは残念だった。お悔やみを申し上げる」

「ロキシスも喜びます……。あ、中へ、中へどうぞ……。あ……。っ、すみません、サンディちゃん……」

立ち上がるうとしてよろけるエヴァンスさんの杖になりながら、うちは家に入った。

するとテーブルの下に、大きな布袋が置かれていることに気付いた。それをテーブルの上に乗せて欲しいと言われて手に取ってみれば、信じられないほどの重さだった。

「先日、兄から届いた物です……」  
「え……これっ、全部金貨っ!？」

「これで身体を治せと……そう手紙に……。ああ、ロキシス、どうしてこんなことに……」

パパが寝室にロキシスさんを寝かせると、折り重なるようにエヴァンスさんがそこに倒れ込んだ。冷たく冷えた身体に驚いて、涙をまたあふれさせていた。

「言葉のかけようがない。心中お察しするよ……」

「ありがとうございます、ユリウス様……。サンディちゃんも、ありがとう……」

「え、でも、うち、ロキシスさんを……守れなかった……」

「いいえ、見つかって、なんだかホツとしました……。見つかったよかった……。こうしてロキシスとまた出会えたのは、サンディちゃんのおかげです……」

「違っの、ごめんなさい……。うちらが、もっと優秀なら……。せめて、もう1日だけでも早く見つけれたら……。ごめんなさい、エヴァンスさん……。ごめんなさい……」

ロキシスさんは見つかった。私たちの初仕事は成功したけれど大失敗で終わった。

慰めの言葉見つからなかった。どうしてもエヴァンスさんが気がかりで、うちとパパはまた会いに来ると伝えてからその場を離れた。

「始めからパパを頼ればよかった……」

「らしくないことを言う。どちらにしろ、パパたちは他の仕事があつて動けなかった」

「でも……うち、こちら、思い上がった……。自分たちの才能に、うぬぼれてたよ……。もっと、もっと修行しなきゃ……」

「それがその歳でわかるなら十分だ。パパなんて、シャンバラに来るまでは虚栄心にしがみついて生きていたよ。己の未熟さに気づけなかった。お前はやはり優秀だよ、サンディ」

パパに慰められながら帰り道を歩いた。久しぶりに、手を繋ぎながら。

それから家に戻ってくると、うちが長女なんだからちゃんとしなきゃって思っ、うちがウルドとスクルズをパパの言葉を借りて慰めた。

こちらは約束した。これからもお互いに助け合っ、次こそは依頼をハッピーエンドで終わらせようって誓った。

「うむっ、がんばるぞっ！… このくらいでへこたれてたまるかなのじゃっ！…」

「サンディちゃん、ありがとう……。サンディちゃんが1番、苦しはずなのに……」

「平気！ うち全然平気だから、これからも一緒にがんばろ！」

こちらの物語はここで一端終わり。そしてここから先は、パパの物語。

こちらが出会ったその事件は、ロキシスさんの遺体発見だけでは終わらなかった。

でもユリウス・カサエルは名探偵じゃない。彼は偉大なる錬金術師だ。うちにはパパの能力と常識にとらわれない行動力が、ミステリーの名探偵役に相応しいとはとても思えなかった。

パパは推理なんてしない。推理よりも行動で困難をねじ伏せる。  
それがうちのパパだ。



・錬金術師ユリウスの事件簿

午前の仕事を終わらせると、俺は都市長の書斎を訪ねた。

普段はアポなんて取らないんだが、今はお互いに非常に忙しい立場だ。久しぶりに彼と顔を合わせると、顔の辺りが少し痩せたように見えた。

「昨日の騒ぎは聞いているな？」

「ええ、だいたい。まったく、堅物のスレイもあの子たちには弱いようで……」

「それもアンタもだろ」

「それはそうですが、今回はさすがに」

「俺にあいつらの無茶を報告をしてくれたのもスレイだ。で、本題なんだがこの事件、娘たちから俺が引き継ごうと思う」

「ユリウスさん、ですが貴方は貴方でとても忙しいのでは？」

「まあな……。だがサンディたちのためだ。特に、サンディだ……。アイツは俺たちがダメと言っても素直に聞かたまじゃない」

「フフフ……誰かさんにそっくりですね」

「ああ、俺の生き方を見てああなったのなら、自業自得だな……」

俺が困り果てたように窓から遠くを見つめると、都市長はやさしげに鼻を鳴らして微笑んでいた。

「……しかとにかくだ、俺が動かなければ、いずれサンディが犯

人探しを始めると見ていい」

今は落ち込んでいるが、立ち直れば必ずそうなる。

都市長からしてもその展開はまずいだろう。いつだってほがらかなその老人が、深く悩むように片腕で頭を抱えた。

「犯人は自らを焼いて自害したそうですね……」

「俺に呪いの言葉を投げかけてな。どうも普通じゃない。エヴァンスに支払われた莫大な金もきな臭い」

「ええ……。それに自殺用のスクロールを持ち歩いているだなんて変ですね」

「遺体からは何も残らなかった。あれで残るわけもない」

自らの命を投げ捨ててでも守りたい機密がある、ということだ。

そしてそいつらはなぜか俺を憎んでいる。ならばもはや捨て置いていい事態ではない。

「水面下で何かが動いている可能性がある。ロキシスはそのための何かだったんじゃないか？」

「……あり得ます。その被害者の遺体はどちらに？」

「エヴァンスに届けた」

「では再び接触してもらえますか？ 趣味が悪いと思われるかもしれませんが、死体から情報をたぐる方法があります。回収していただければ、こちらで亡骸を医者の方に移送しましょう」

嫌な仕事だ。だが俺が最大の適任者だろう。

「わかった、これから頼みに行こう」

「では先に昼食にしましょう。我が名探偵カサエル姉妹の活躍を祝して」

「エルフは成長が早すぎる……。来年には、彼氏を連れて戻ってくるかもしれない……」

「サンディならあり得ますね。その時は祖父と父でタッグを組んでいびってやることにしましょう」

「そうしよう」

誓いの握手を交わして、それから都市長と昼食を共にした。

食事を終えると工房へと戻り、娘たちとラウリィと一緒に急ピッチで注文のポーシオンを大量生産した。

「後は僕たちにお任せ下さい！」

「いってらっしゃい、パパ。がんばってね……」

「雑用を片付けてくるだけだ。終わったら仕事の続きだな……」

行き先は言わなかったがサンディは既に何かを察していた。

あそこまで事件に関わった以上、今回の件がこれで終わりとも思っていないかっただろう。

俺は工房を離れ、フリドオアシスのエヴァンスを訪ねた。

ふさぎ込んでいたのか、酷い顔とボサボサ頭だった。茶を出す心のゆとりすらも失われていた。

「そういうことなら喜んで……。ロキシスを殺めた者たちが、他の方を殺さないとは限りません……」

「大丈夫か……？」

「ええ……。どうかユリウス様、事件の真相を明るみにして下さい。ロキシスがなぜ殺されなければならなかったのか、私は知りたいのです……」

「必ず伝えよう」

エヴァンスは兄との別れを惜しみ、ベッドに横たわる亡骸から離れなかった。

俺もいつかはこうなるのだろうか。こうやって大切な人を悲しませることになるのだろうか。

「私には力がありません……。仇を……。仇を討って下さい……」

「ああ、敵に容赦はしないと約束する」

俺は亡骸を抱いて引き返した。

死体なんて慣れきっていたつもりでも、いざ両手に抱き上げるととても重い。愛する人から遺体を引き離すだなんて、嫌な仕事だった。

報告は翌日の夕刻になった。

ひっきりなしにやってくる追加オーダーに答えて、一日の仕事をようやくこなすと、疲れた身体を冷たいオアシスに沈めた。

陸に上がるとそこにグラフが立っている。

グライオフエンという女性は2人いるので、時々どう迎えていいのか迷うときがあった。

「ふ、服を着る……っ」

「そうさせてもらうよ。しかし今日は早いんだな」

「娘たちが心配だつてグチったら、現場のみんなが早めに帰らせてくれたんだ」

「ああ……。一昨日のは大手柄であると同時に、危険極まりない大冒険だったからな」

湖水を拭っていつものトーガに袖を通した。

グラフはこちらに振り返り、顔をまだ少し赤く染めていた。一女の母とはとても思えない。美しく、凜としいて、なんでも話せるような信頼感があった。

「そこに座れ、都市長から報告を持ってきた。遺体の分析が済んだようだ」

「結果は？」

「死体は刺殺。大きな刃に内臓を傷つけられ、死因は出血多量からのショック死だ。全身に打撲跡。胃の中は空。食事は取っていないかった。爪にも何も残っていない」

オアシスの細波を眺めながら、グラフの話を噛み砕いた。

胃の中身まで調べるだなんて、大したお医者様だ。

「エヴァンスには報告しにくい内容だな……」

「そうだね……。ああそうそう、逆に君に聞くけど、発見時に争ったような形跡はあった？」

「ないな」

「なら監禁されていたと見るべきかもね。食事も与えられず、酷い

暴行を受けていた」

「そう見るとすれば、サンディの報告と矛盾する。宿で見知らぬ連中と共に行動しているのを目撃されている」

その報告にあった連中と、今回の悪党どもが同一かはわからないが。

「関係が途中で変わった」

「まあ、あり得る。断定は出来ないが、そう見るのが自然か」

とにかく被害者は監禁状態にあり、抵抗すら出来ないまま殺害された。

「次に交友関係だけど、配偶者なし、家族は妹だけ。親族付き合ひもない。病弱な妹のために仕事が終わるとまっすぐに帰宅し、大半の時間を妹と過ごす」

「そこはサンディの報告と変わらないな」

「ロキシスという男は少し変わってる。妹一筋で、交友関係らしい交友関係がない。だが、最近になって急に友人が出来たようだ。フリドオアシスの酒場でも、見慣れないエルフたちとつるんでいるのを目撃されている」

「そいつらの正体が知りたいな。たぶん、サンディたちを襲った連中なんだろうが……」

なぜロキシスのようなただの労働者を狙ったのだろう。

グラフの様子を見ればどこことなく不機嫌だった。危険を冒した娘たちが、実際に命の危険に脅かされた。

その時点で今回の事件の加害者たちは、俺たちの敵と言ってもいい。

「何かそいつらの遺留品が手に入れば、ウルドの力が役立つかもしれない。紋章と紋章を引き合わせたあれだ」

「ユリウス、君が代わりに動いてくれるなら安心だよ……。何かあればボクも手伝う。娘たちを傷つけたあいつらを、ボクたちで倒そう」

グラフの軽い抱擁を受け止めて、離れ際に確かめるようにその手を握った。

「ああ、そういうシンプルな動機の方が俺も好きだ。明日からサンデイを連れて各地を巡ってみるよ」

「サンデイを……？ それは危険じゃ……」

「あの性格だ、目を離せば勝手に動くぞ。なら隣に置いておいた方がまだマシだろ？」

「はあ……。つつ。あの子たちは、ボクらの性格の悪い部分ばかり遺伝している気がするよ……」

「同感だ。さ、そろそろ中に戻ろう」

「ん……。いや、待ってくれ、ユリウス。よければ……ボクと一緒に水浴びをしないか？」

「な、何……？！」

「フツ……。やはりスケベだな、君は」

本気にしかけたところで、「冗談だからかわれた。

いや誘いに即答していれば、そうはならなかったのかもしれない

が……。

「ボクも調査に賛成だ。何か裏で動いているなら、その前に叩き潰した方が断然いい」

俺はグラフが差し出した手を握り替えて、それじゃ夫婦っぽくないので不意打ちの抱擁をした。甲高い声を上げて恥じらう彼女の姿が、普段の気取った姿とはまるで正反対で愛らしかった。

「今夜は君のところに行く……」

「わ、わかった、待っている……」

「寝るなよ……?」

「起きているよ」

国境でがんばってきた彼女の背を慰めるように撫でた。

すると甘えるように顔を埋めてきて、まるで子供をあやしているかのような気分になった。

こういつ時々見せる弱さも彼女の魅力だ。俺は彼女の手を引いて、みんなのいる自宅へと引き返した。

『おかえり』

その一言がグラフを幸せいっぱいの笑顔に変えていた。



翌日早朝。これから本格的に調査へと乗り出してゆくために、俺は工房のオーブの前に立った。

「遅くなりましたっ、おはようございます、ユリウス様!」  
「謝るのはこっちだ、付き合わせてしまって悪かったな」

「いえっ、むしろ感激です! 貴方とご一緒出来るなら、僕はなんだって……っ」

「よしてくれ、その言葉に甘えてしまいそうになる」

「僕に甘えて下さい!」

実は昨日、無理を言ってラウリイに早朝からの手伝いを頼んだ。

小柄だが働き者の彼は、俺が頼むと指定の材料をテキパキと水槽に入れてくれた。

それが済むとちょうどさっき運んできたガラス瓶を水槽に溶かし、それから次の調合の準備のためにオアシスの水を汲みに行った。

オーブと水槽を使った錬金術は、彼らのバックアップがあつてこそその生産効率だった。

「あ、スクールズちゃんおはよう」

「た……大変じゃ皆っ! また父がーっ、ラウリイを工房に連れ込んでこき使いつておるぞおーっ?!」

「えっ!? あ、いや、別に僕はいいんです。僕、ユリウス様のお手伝いが出るだけで、それだけで幸せなんですから……」

「なんてことじゃっ、おまけにキャツキャウフフまでしておるぞーっ!?」

「していない」

「起きよっ、起きよ皆の者ーっ!! このままでは我らの仕事が取られるぞーっ!!」

グラフの青い髪、白い肌、端正な容姿を持って娘は、気質の面で言えば白百合とまで呼ばれた母親とは大違いだ。

見た目は美しかろうと、中身の方はというとまだまだ落ち着きのないお子様だった。

まあそんなこんなで、結果的に騒ぎは多くのバックアップ役を提供してくれた。

メーブルとシエラハがいつものように忙しく家を出て行く中、三人娘に休暇中のグラフ、ラウリイが早朝からサポートをしてくれた。

このおかげで『明日明後日分の仕事を今日中に片付ける』という無理が、ようやく昼過ぎまでに通ることになった。問屋やガラス工房、輸送を担う商会たちの理解や融通がなければ、こんな無茶苦茶はとても実現しなかつただろう。

こうして錬金術師ユリウスの仕事が終わった。

これでようやく調査官ウエルサンディと共に、そのお目付役とし

て真実を探しに行ける。

なぜロキシスという誠実な若者が殺されなければならなかったのか。

ロキシスを殺害した連中は何者で、何が目的だったのか。俺だっ  
てここまで関わった以上、気になって気になってたまらなかった。

「行こうか、サンデイ」

「うん……」

軒先のオアシスの前に集まり、家族に見送られながら出発しよう  
とすると、サンデイのやつがらしくもなくうつむいていた。

「どうした、疲れてしまったか？」

「ううん、そうじゃなくて……。あの……ごめんね、パパ……」

「ごめん？ それは何がだ？」

「だってパパ……信じられないくらい忙しい人なのに……。うちら  
何も考えないで巻き込んだじゃった……」

「うむ……。あれだけ働いて、まだ働けるとか、父も母も信じられ  
ん気力じゃ……。大人はヤバいのじゃ……」

言葉を受けてグラフと目線を合わせると、お互いに自虐するかの  
ような冷笑を返された。シャンバラの混乱状態を言い訳にしている  
が、今の多忙極まった状態は親としてあまりよくないな。

「いや、俺はただ真実が気になっているだけだ。さあ行こう、サン  
デイ！ ロキシスがなぜ殺されなければならなかったのか、俺たち  
の手で調査を進めるんだ！」

「……うんっ！ パパとうちって、やっぱり親子ねっ、ふふふっ！」

さあ行こう。世界の裏側への扉を開いて、そこにサンディの背中を押した。

「さ、ボクらも買い物にでも行こう。せつかくの休暇だ、なんだつて買ってやるぞ」

その言葉に、サンディが後ろを振り返って抗議の言葉を上げたのは言うまでもない。

だったら俺だって、調査先でサンディに何か贅沢をさせてやろうとそつ心に思っただけのこと、あえて言うまでもなかった。

まずはフリドオアシスに向かった。

エヴァンスの家を訪ねてこれから調査をすることを伝えると、彼女は感激の涙を浮かべていた。

シャンバラの英雄というこの肩書きが、少しでも彼女への慰めになるのならばと、俺は頼もしく目に映るようにと理想の英雄役を演じた。

だが最大の慰めは、俺なんかよりもサンディの来訪の方だった。エヴァンス自慢のオレンジピールティーをサンディが褒めたくると、夢げだったその表情が笑顔でいっぱいになった。

茶を楽しんでからエヴァンスの家を出ると、さあ本格的な調査の開始だ。まずは報告にあった酒場に向かい、情報の裏を取った。

その次はケパ・オアシスだ。サンデイがご厄介になったという、女店主が経営する宿屋を訪ねた。

「サンデイが世話になった」

「ユリウス様っ?! い、いえっ、ウエルサンデイ様は酒場でも大好評 あ、いえっ、なんでもございませんわっ、オホホホッ!」

店主のリアクションだけで、サンデイがどんなやんちゃをやらかしたかだいたいわかった。

宿娘の仕事が楽しかったと笑う娘と一緒に、その宿でも俺は情報の裏を取り、それが済むと簡単な推測を立てた。

「えっとこの後、どうしよっか……?」

「次のオアシスに移るぞ」

「え、それってどこへ?」

「彼らの最終目的地は行政区だ。この時点でルートはもう決まっている」

「あ、そっか!」

宿の女店主に、ここから行政区やバザー・オアシスの辺りに行くにはどうすればいいかと聞いてみた。

すると、ここから直接繋がるルートはなく、リヤダ、ユス、カノツソといった3つのオアシスを経由する必要があると教わることになった。

俺たちは転移して、探って、また転移して、オアシスからオアシスを巡っては、ロキシスを殺したやつらの足取りを求めて、樹海の

国シヤンバラをさまよった。

・世界最速の調査官、オアシスを巡る  
ー プ  
・ 金貨1枚のコーンス

リヤダではなんの情報も見つからなかった。ユスではカノツソに渡ったという証言だけが得られた。カノツソからは行政区に繋がる街道が整備されている。

だがだいぶ距離があり、この町のどこかで一泊したのではないかと踏んで、辺りの宿をあたってみた。

樹海に埋もれたあのフリドオアシスとは少し異なり、カノツソの町は侵食の爪痕こそまだ残っているが、草木とエルフたちの共存が始まっていた。

「ああ、そのご一行ならうちに泊まったよ」  
「本当っ?!」

「あ、ああ……ちょっと待ってくんな。宿帳にその名前が……ああほら、これだ」

「見てパパッ、ロキシスさんの名前があるっ!!」

彼らは意外なところに泊まっていた。

それは地元住民向けの古いダイニングで、土蔵のこの店も木々の根や宿り木にすっかり浸食されてしまっていた。

「ダン、アイスタン、リヨース、エバート……お前たちの報告通りの名だな」

「へへへ……うちの調査、ムダじゃなかったでしょっ！」

「ああ、よくやってくれた。無茶は感心しないがな」

「あっつ?! もしかしてっ、ウエルサンディ姫っ?! ってこたあっ、お、お前っ、ユリウス様かっつ?!」

「そうよっ、こちら殺人事件を調べてるの! この人たちが泊まったところも見せてくれる?」

「へいつ、喜んで! カーチャン大変だっ、ユリウス様だっ、ユリウス様がいらっしやっただぜえっ!?!」

ダイニングを経営しながら、その傍らで彼らは小さなモーテルを経営していた。

俺たちは店主のカーチャンとやりに案内されて、彼らが泊まった小屋を訪れると、入念に遺留品を求めて調べ上げた。

「はあ……っ」

「これはこれはウエルサンディ様っ、お疲れですかいっ!?!」

結果は空振りだ。何か軽い物でも頼もうと、ダイニングに戻った。

「違うの……。なんにも残ってなかったの……」

「そりゃそうよ、カーチャンが掃除がんばってるからよあっ!」

「コーンスープを2人前頼む」



「へい喜んで！ 大盛りにしておきやす！」  
「いや普通でいい。……それより、このロキシスと一緒に泊まった連中について聞きたい。彼らに何か目立つ特徴はなかったか？」

見れば外はもう夕方だ。木々に遮られた夕日が、オレンジ色の木漏れ日となってサラサラと揺れている。

とてもいいところだが……参ったな。

このまま具体的な情報の一つもなしの手ぶらではとても帰れない。

「カーチャンツ、何か覚えてねーかつ?!」

「アンタ、ちったあ自分で考えなよ。んゝ……そうねゝ。あたいにはあの人たち、体調か何か悪そうに見えたよ？」

「体調？ 今はなんだっていい、その話詳しく教えてくれ」

「あの中の3人くらいかしらね。しきりに頭を手で押さえていたのを見たのよ」

「あつ、俺も見た！ 確かにあいつら、頭の横のところ押さえてたわ！」

妙な情報だが気になった。

たまたま一人が体調不良を起こしているならわかるが、複数人が同時となると不自然だ。

「髪の毛薄いブロンドの男もか？」

「あつ、そいつは平気そうだったぜ！ 頭抱えてたのは他の連中だけだ」

「ブロンドは一人だったかしら。他は黒髪。あ、そうそう、1人は目の上の眉に、目立つ刀傷があったかもしれない」

偶然の一致か、サンディたちを襲った連中も黒髪ばかりだった。しかし焼身自殺されてしまったては、その中に眉に刀傷を持った者がいたかもわからない。

「うづん、うちの覚えてる限りだと、そういう刀傷の人はいなかったと思う……。相手の顔なんて、余裕なくて見てられない状況だったけど……」

さらに気になるところといえば、サンディを襲った連中の数と、ここでロキシスと同行していた連中の数が合わない点だ。

仲間がいたのならば、なぜこの時は一緒に行動していなかったんだ？

「ねえねえ、その人たち何か話してなかった！？ 何でもいいからお願い、思い出して！」

サンディが先ほども同じ質問を投げかけたのだが、彼らは積極的な言葉に心動かされてくれて、もう真剣に一度過去を振り返ってくれた。

その時は思い出せなかったが、後からふと思い出すなんてことはよくあることだ。全くムダな試みだとは言い切れなかった。

「あつ、あいつら仕事の話してたぜ!!」

「本当つ、どんな話!？」

「いや……おぼろげだけどよ……。勤務、予定……報酬。とか、そんな話だったかなあ……?」

「勤務……?」

勤務。その言葉にどうしてか引っかかった。

ロキシスという男は妹をとても大切にしていた。なのに彼は何も言わずに、フリドオアシスから遠く離れたこのカノツソオアシスにやってきている。

そして死体が発見されたのは行政区だ。

ただ単に仕事探しのために遠出するならば、そのことを妹のエヴァンスに伝えるだろう。

だが彼はそうしなかった。そうしなかったというのに『勤務』という堅実な言葉が出てきたことに、どうも違和感がある。

「あの、ユリウス様……。よかつただけど、うちで夕飯を食べていけないかい……?」

「おおそうだっ、そうして下さいよ！ カノツソ代表として歓迎しますぜ！」

サンディはそのお誘いをとても喜び、今にもイスから立ち上がった。同意してしまいそうだった。

もちろん、俺は元気なその肩を上から押さえ付けて、それは少しまずい意思表示した。

「すまん、今日は家で俺たちの帰りを心待ちにしている人がいるんだ」

「あ、そっか……。グラフィママ、うちらのこと待ってるかもね……」

「待っていないわけがないだろ。少し早いかもしれないが、今日のところはここで帰ろう」

「うんっ！ おじさんおばさんありがとう！ うちら凄く助かったよやった！」

その店は根に浸食されて、端っこの方は風穴が開いたり酷い有様だった。

そこでせめてものお詫びに、コーンスープを壺に詰めてもらって、代価に金貨を1枚カウンターに置いた。

そうすればこんなに受け取れませんか返されるのもわかっていた。

だがどうということはない。俺たち転移魔法使いの親子は、そんな彼らに笑顔で返して、最高のコーンスープと一緒に世界の裏側へと姿をくらました。

今回の事件の因果は、シャンバラの樹海化が発端だ。

ロキシスの死をもたらしたのは、古の女王を心変わりさせた俺たちが原因。そう因果の糸を強引に繋がられなくもなかった。

## ・森の国シャンバラの夜

夜。夜は変わった。あんなにも厳しかった砂漠の国の夜は、散歩にもってこいの穏やかな森の国の夜に変わった。

その晩はシエラハと一緒にだった。都市長のところに行くと言うのでそれに同行して、オアシスをいつもとは逆回りにたどって、自宅へとゆつくりと帰宅を惜しむように歩いていた。

「砂漠が恋しいけれど、やっぱり綺麗ね……」

「ああ、綺麗だけれど、やはり砂漠が恋しい気分も残る」

「わかるわ。過酷だけれど、いつだってあの頃のシャンバラは明るくまぶしかったもの……」

拓かれた居住区などをのぞけば、オアシスの周囲にだけ月光が降り注ぐ。

俺たちは時折に星空を見上げ、何もかもが変わってしまったこの世界で、記憶の中に残るあの頃の情景と現在を重ねて見た。

これが都市長たちの悲願。理想郷シャンバラの復活だ。

確かに素晴らしく、美しい世界だったが、砂漠を失った俺たちの胸には常に寂しさが残った。

住み良いが、どこか物足りない。

だがこの感覚は時と共に薄れてゆくだろう。

「どこかで働こうとしていたんじゃないかしら？」

「え……？」

「だから、ロキシスさんの話よ」

「ああ……。だがそれをなぜ妹に何も言わない？ 就職しようとしていたとして、なぜそれが殺されることになる？」

そう問い返すと、世界で最も美しいと認めて止まない俺の嫁さんが、オアシスを背にして立ち止まった。

褐色の肌とブロンドを持つ彼女が月光を背にすると、顔色がうかがえずに髪だけが浮かび上がって見えることがある。それがちょうど今だ。

「ねえ、ユリウス。あなたに選ばれる前、あたしがなんの仕事をしていたか覚えている？」

「そのことを俺が忘れられるわけがないだろう。……スパイだ」

そう口にして、俺は彼女の意図を察した。

それから表情を確かめたくて、彼女のすぐ側面に回る。シエラハは昔に戻ったかのような少し堅い表情でこちらに微笑み返していた。

「その人、どこかに潜り込もうとしていたんじゃないかしら……」

「それは、あり得るな。妹に明かさなかったことにも納得がいく。彼女に届いた莫大な金にもだ」

「ええ。そしてそう考えると、サンディたちは惜しいところまでいっていたのかもしれないわ」

「ああ……。だが、本名でスパイをするやつはいないな」

「あたしたちにもコードネームがあったわ」

「それは初耳だな、なんて名前だったんだ？」

「そ、それは 恥ずかしいから秘密」

まあ、コードネームなんてそんなものだろうな。

必要だから特徴を模した偽名を使うわけで、必要のない日常の世界からすれば、それは変な名前ではない。

「偽名か……。その偽名がわからない」

「ならお手上げね」

おずおずとシエラハが手を差し出すので、その手を握り返してまた帰り道を歩いた。

ただ手を繋いでるだけで、心がこうしてつきつきと浮つく夫婦と  
いうのは、正常な状態なのだろうか。

「ねえ、ユリウス」

「ん……なんだ？」

しかし今はロキシスのことが気になってたまらない。気づくと思慮の世界に意識が飲み込まれていた。

そんな俺の姿にシエラハは不満を覚えたのだろう。

立ち止まって、こちらが振り返るようにながした。

「ユリウス、あなたはもう十分過ぎるほどシャンバラに尽くしたじやない。もっとゆっくりしてもいいのよ」

「そうかもな。なら」

帰り道ではなく森の中にシエラハの手を引いた。

家ではまだ誰かが起きているだろう。特にそれが娘たちだった場合、なかなかこれが難しい。

「ユ、ユリウス……ッ?!」

その日の帰りは遅くなった。月光に照らされた星夜の彼女は、やはり世界で一番美しい女性だった。

昨日あれだけ無茶をして納品を済ませたというのに、昼食の席に緊急の注文票が山ほど届いていたのはなぜか？

答えは『普段の俺の供給よりも需要の方が実際は圧倒的に大きく納品したら全てが1日で消化されていた』からだ。

よって俺はその日も工房で調合をして過ごすことになっていた。まあだが、それは別にいい。それが俺の最近の日常であるし、調査の方も行き詰まっていた。

幸い、考えをまとめる時間だけはたつぷりとある。

オーブに魔力をかけながら、俺はスクルズとウルドに手伝ってもらいながらも、事件へと没頭していった。

「ねえ、サンディちゃんのこと、お父さんに言わなくていいのかな……?」

「うむ、言ったところでどうにもならなかつた。父には仕事、サンディには意地がある」



「で、でも……今回の事件、凄く、危ないのに……」  
「サンディは大丈夫じゃ。サンディを捕まえられるのは、父と憧れのアルヴィンスおじさまだけじゃ。あれはまっこと趣味が悪いのう……」

要点だけピックアップするところだ。

妹のエヴァンスに莫大な金が届いた。

ロキシスはどこかで働くつもりだった。

だがロキシスは死体で見えられた。

加害者と思しき連中が、ロキシスの遺体を見つけたサンディたちを襲った。

彼らの特長は黒髪と頭痛。

うち1人は眉に刀傷。

フリドオアシスからスタートして、行政区を目指すルートで旅をしていた。

そいつらは敗北を悟ると、自らを焼いて自害した。

このことから被害者と加害者は仲間で、どちらも同じ目的を共にするスパイである説も浮上する。

だがわからない。このロキシスという被害者に、そこまでの価値があつたのだろうか……？

「ない。だが加害者側にはあつた」

そう思わずつぶやくと、スクルズのやつに意地の悪い顔で笑われ  
てしまった。

まったくあの子はあの女王アストライアにそっくりだ……。

だがグラフからすれば、それは嬉しいことなのかもしれないがな……。  
……。  
こちらの世界のあの女王は、厳密には彼女の愛した女王ではない。そこに似た性格の娘が生まれたら、特別に思うところも当然あるだろう。

「お父さん、もう休んで？ 後は、私がやっておくから……」

「ウルド、お前は本当にいい子だ……」

「え、ええっ?!」

「メーブルの腹から、こんなかわいい子が産まれたなんて信じられん……。いや、メーブルを悪く言ったわけではない、ただ、性質というものがだな……」

「あはは……。お父さん、いつもお母さんに困らされてるもんね……」

「最近はおとなしくて少し寂しいけれどな」

父である都市長が無理をしているのに、自分たちだけ家で家族の幸せを謳歌するなんて、シエラハとメーブルには出来ないのだろう。グラフもまた仕事に駆り出されていった。欠員が出たので今日は迷宮を下るぞうだ。

俺はウルドの言葉に甘えてオーブを任せて、少しの間だけイスで休ませもらった。

・遺留品が導く捕物帖

「パパツ、大変っ!! これ見てっ!!」

「おわああっつ、いきなり現れるでないっつ、ビックリするじゃろがーっ?!」

ところが一息吐く間もなくサンデイが工房に転移してきた。

彼女は俺を見つけると飛び込んできて、何かを握った手をこちらに突き出していた。

「私っ、遺留品を見つけたのっ!」

「遺留品……? だが、あれだけ調べたのに」

「違うわ、各地のオアシスじゃなくて、あの森に行ったの!」

「……………おい」

つい低く威圧的な声になってしまい、俺は父として取り繕うはめになった。

「そうよ、あの森に行ったの。ロキシスさんが殺され、こちらが襲われた森! あそこになら何か遺留品が残っているかもしれないと、そう思ったの!」

「サンデイ、お前というやつは、どこまで……………はあああ……………っつ」

あの森に行っただと? やつらが残っていて、陰から弓を撃たれるかもしれないの? というのに?

いやその危険は限りなく低いのもかもしれないが、だが断りのない

独断行動に変わりはない……。

「あのね、サンデイが帰ってこなかったら、お父さんに言う約束だったの……。ごめんなさい……。」

「怒らないでくれ、父！ 止めなかったワシらも同罪じゃ！」

サンデイを叱るべきか迷っていると、その妹たちが姉をかばった。保険を残しておいた点だけは評価できる……。

「ほら、これ見てっ！ うちが囿になつて逃げたときに、追いかけてきた敵が落としたやつだと思う！ その人たち、パパと遭遇する前に逃げたみたいなの！」

それが本当ならば お手柄ではないか。

彼女の手にあったのは壊れたボタンか何かで、強い衝撃を受けたのか半分に割れてしまっていた。

「よくこんな小さな物を見つけ出したな……。」

「うん、なんにもなくてダメかと思った。でもね、偶然しげみの中で見つけたの！」

その茶色のボタンを受け取り、オーブを担当していたウルドに手渡した。

「上手くいけば、お前たちを襲った犯人にたどり着ける。こっちの仕事はウルド、お前に任せた」

「わ、私っ、がんばるっ！！」

鍊金釜に駆け寄ってゆく娘たちを見下ろした。

彼女たちの姿を遠く眺めていると、遠い日の自分たちを思い出す。

シャンバラにやってきて間もない頃の俺は、あそこでサンディとウルドの母と一緒に釜を囲んだ。

今でも目をつぶるとありありと思い出せる。目を輝かすシエラハとメープルの横顔を。

それと……若気の至りのあまりに、水浴びをのぞき続けた愚かな自分自身を。

あの頃そこにあつた砂漠はもうどこにもない。

家を少し離れれば、どこまでも果てしない砂の平野が続くあのシャンバラは、もうこの世界には存在しなかった。

だが、これこそが義父シャムシエルの願いだ。

これこそがシエラハの父母が願った世界だ。

そしてこれこそが 箱船で眠る女王シエラハ・ゾーナカーナ・テネスが生み出した夢だ。

彼女こそがシャンバラの揺りかごそのものだった。

彼女亡きこの世界を、俺たちは守り続ける義務があった。

茶色い不思議なヤジロベエを手に、サンディと共にシャンバラの各地を巡った。

三角形を使って絞り込むという発想は斬新だった。

娘たちに感心をしながら各地を巡り、やがて俺とサンディはこのヤジロベエが意外な場所を指し示していることに気づくことになった。

それはシャンバラからの街道が拓かれたオアシス、カノツソだ。ロキシスを殺し、俺の娘を襲った悪党は、街道1本分向こうのオアシスにまだ潜伏していた。

「ふふ……パパのにゃんにゃんロッドも綺麗だけど、このヤジロベエもかわいい」

「ウルドらしいアイテムだな」

それに棒きれを両手に町をうるつくよりはずっと目立たない。

白銀の導き手。あれを生み出した当時は、シエラハと一緒にラクダに乗ることになって……。

あの時は熱中症になりかけたり大変だった。

しかし今ならば認められる。

俺はメーブルが言う通り、今思えばとんだドスケベ野郎だった、と。

「これ、パパが持って歩いてたら頭の変な人ねっ」

「ああ、居てくれてよかったよ、サンディ」

ヤジロベエの導きに従って町を歩いた。

敵はサンディを一度襲っている。ならばサンディの姿を見た時点で、敵は動揺をするだろう。

そついう怪しいやつと、ヤジロベエの方角が一致したときが、その時だ。

「昔のパパって、四六時中ママにずっと見とれてたって本当？」

「うっ？！　そ、その話は、今でなくともいいだろう……」

「ママに夢中だったんだ……？　出会ったその日から？　ママがパパを捕まえたんだよねっ」

「全て肯定する。だから今は仕事をしろ」

「だって退屈なんだもの……」

……ところがその時、ヤジロベエの方角が変わった。

やや右手に折れ曲がり、それが左手の方角にまた戻ってくる。つまり、大きく方角がブレるということは近いということだ。

黒髪のエルフに絞れば、ヤジロベエの方角に4人がいる。  
対応を急がなければならない。緊張が走った。

「サンデイ、見覚えは……？」

「あ、ああ……っ、あ、あいつ……今こっちにきてる右の男……っ  
っ、アイツツツ」

その男がまっすぐにこちらにやってくる。

サンデイではなく俺を真っ直ぐに見ている。

その腰から長いナイフがひらめき、かと思えばまるで暗殺者のようにこちらへ突進した。

「パパツツ……！」

「ユリウスツツ、その命取ったぞっ……！」

俺はそのナイフをかわさなかった。

傷などエリクサーで癒せばどうとでもなる。俺はそれよりも、やつこの腰の荷物袋を聖剣で切り裂いて奪ってやった。

「な、何……？！ お、お前……っ、ウゲツツ?!」

「パラライズ!!」

あまり得意ではないのだが、メーブルの術を模倣した。

俺を刺した冒険が地に崩れ落ち、俺はヤツのナイフを腹から抜いて、娘が差し出すエリクサーをほとんど嚙まずに飲み込んだ。

呼吸すらままならない痛みが、奇跡のように消えていった。

「ユ、ユリウス様が刺されたああーっっ?!」

「け、けど……平気そうだ……っ!？」

「大丈夫ですか、ユリウス様っ！ その男はいつたい!？」

町中でこんなことをすれば、騒ぎになるのも道理だ。

だが俺はどうしてもコイツを生かして捕獲したかった。

だから先にスクロールを奪い、腕の腱を斬るつもりだったが予定を変えて、懐かしの術で標的をしとめた。

ウルドのヤジロベエは、この男の胸のボタンと引かれ合っていた。

「見ての通りかすり傷だ、それより誰か荷馬車か何かに乗せてくれないか？ サンディは都市長に報告を頼む。俺はこの男を行政区に護送する」

「っ、っん……」

「どうした？」



「心臓が止まるかと思った……。パパ、そういうエリクサー頼りの戦い方、止めて……」

「ああ、悪かった。だがこれが確実だと　いや、そんな顔をするな、サンディ、わかった、悪かった……」

「ママに言いつける……。メープルママとグラフママにも今日のこと言つつ!!　パパなんて、ママたちにお説教されちゃえばいいのよつつ!!」

「そ、それは……つつ!?　待て頼むつ、許してくれサンディツ、それだけはダメだつつ!!」

我が身を犠牲にして犯人の一派を捕らえたはずなのに、今の俺は嫁さんたちに恐怖していた。

俺は彼女たちエルフから見れば、はかないセミちゃんだ。

無茶な行動を取ればその分だけ、別の形で我が身に代償が降りかかる。

サンディは説得の間もなく、怒りの密告のために世界の裏側へと姿をくらましていた……。

・遺留品が導く捕物帖（後書き）

もうそろそろ書籍の情報開示ができそうです。

パッケージイラスト、そのデザイン、口絵、非常にハイクオリティになっていきます。

もちろん改稿の方もがつり180時間ほどの苦勞もあって、納得の仕上がりです。

どうか楽しみにしていただけると嬉しいです。

・はかないセミちゃん、あるいは尋問官ユリウス

それから1日が経った昼過ぎ、俺は湖畔の木陰で気だるく重いまぶたを開くことになった。

「お父さん、大丈夫……?」

「おい、悪い冗談はよせ……。お前のせいでこうなったんだろぅが……。メープル」

目の前に水浴びを終えたメープルが立っていた。

彼女は娘のウルドを演じるのを止めると、腰の痛みと眠気に不調そうにしている俺を、隠しめせずに嬉々した目で見下ろした。

ま、コイツは元からこういうやつだ……。

「フフ……。サンディには感謝かな……」

昨晚、娘たちはお泊まりに出た。サンディとウルドは都市長のところで、スクルズは女王アストライアのところだ……。

そして娘たち不在の我が家で何が起きたかだなんて、もはや説明するまでもないだろう……。俺はその晩、たつぷりと、お説教をされた……。

「ユリウス、マジで眠そ……。あ、腰の方はどう……?」  
「痛い」

「ふーん、大変だね……」

「3分の1はお前のせいだったのっつ！ うっつ？！..」

声を上げて木陰から立ち上がるうとすると、鈍い腰の痛みが俺に  
情けなく膝を突かせた。

「メーブルか？ そんな俺を心配するどころか、口元をひきつらせ  
て気分良く見下ろしているよ.....」

「さっきウルドに会ったら.....顔、真っ赤だった.....」  
「だろうな.....。気付いていないのはサンディだけだ」

「うん.....。姉さんに似て、サンディは凄く純情で、純粹だから.....」

「いやそこが心配だ.....。いつか悪い男に騙されたりはしないだろ  
うか.....」

「あ.....それで思い出した.....。兵舎の方、ちょっとこない.....？」  
「やっとなの男が何か口を割ったのかっ！？ うっつ.....?!」

俺は赤子のように潤いのある土の地面をはいずりながら、メーブルの手を借りてどうにか立ち上がった。介護老人になる未来が、その時少しだけ見えた.....。

「私たちの何よりも大切なユリウス。それを刺した悪い男.....」

「違うな、油断させるためにわざと刺されたんだ」

「それ、全然、笑えない.....」

「そのことは昨日何度も謝っただろ。それで、アイツがどうした？」

「東方に伝わる古の尋問術.....ODNの封印を解いても、喋らない.....」

「詳しくは聞かないでおこう。とにかくかなり荒っぽいことをしても、喋らなかつたか?」

平気で焼身自殺をする連中の仲間だ、たった一晩で情報を吐くはずもない。

「うん……。でね、そこで私たちは、考えたの……」

メープルはその言葉に合わせて、その細く小さな人差し指を俺の鼻先に突き付けた。

「俺か……?」

「そう……あの憎い男は、ユリウスを殺そうとした……。だったら、ユリウスにまた合わせれば、うっかりボロを出すかも……」

出来ることなら一緒にこれから昼寝でもしたい気分なのだが、そう言われると途端にこっちも眠気が覚めてきた。

あの男は俺を異常なほどに憎んでいた。俺だって隠された理由が知りたい。

「そう上手くいくだろうか?」

「ん、任せて……。そうなるように仕向けるのが、私たちの仕事……」

「そついやお前も一応スパイだったな」

そう俺が皮肉っぽいことを言うと、メープルは怒るところがとても懐かしそうに笑った。俺だってあの頃が懐かしくなって、その笑顔に微笑み返していた。

「砂漠が恋しい……」

「ああ、あの女王も少しくらい残しておいてくれてもよかったのにな……」

そんなメーブルが木の幹背もたれにして座り込んだ。

「もう少し寝てていいよ……。あいつが完全に憔悴するまで、まだ少しある……」

「そういや、最近是一緒にゆっくりなんてしてられなかったな……」

「うん……。それに疲れ切って判断力が鈍ったところで、憎くてたまらないユリウスを登場させることに、意味がある……」

「……メーブル、もう少しのんびりした話題はないのか？」

メーブルの隣に腰掛けて、2人でかつて砂漠のオアシスだった湖を眺めた。

あそこの栈橋で釣りをしたり、うたた寝をしたり、理由もなく夕涼みをしながらくつついていた頃もあった。

「メーブル、そういえば昔」

懐かしい思い出話を投げかけても、プラチナブロンドの乙女が目を開くことはなかった。

彼女のやすらかな寝息を聞きながら目を閉じれば、俺の目の前には記憶のままの広大な砂漠と、瑞々しいオアシスの香りが確かにそこにあった。

人道に反するとか、もつと他の方法があるのではないだろうか、そんなつまらないことを言う気はない。俺もまたツウィク王国の暗部、宮廷魔術師だったからだ。

代わりにこの陰鬱で心の病みそうな仕事を受け持ってくれた現場の者たちに感謝して、俺はお膳立てされた最高のタイミングで、行政区兵舎の尋問室を訪れた。

「ユリ、ウス……」

「そろそろ俺に会いたくなる頃かと思っただけ、様子を見に来た。しかしたった一晩で、酷くボロボロになったな……」

男は両手両足を鎖でイスにくくり付けられ、口には自害を封じるための布が噛まされていた。どうにかして喋れるようだが、少し言葉を取りにくい状態だ。

そんな絶体絶命の状態の男が、憎悪に目を血走らせて俺を睨んでいた。

「なぜ俺を憎む？」

問いに回答はなかった。だが言葉は、男の怒りをさらに燃え上がらせることになった。

「なぜ俺を殺そうとした？」

俺はこの男を怒らせない。

怒りに我を忘れて失言をするように事前に言葉を組み立ててあつ

た。

しかしバカ正直な挑発ではダメだ。

挑発したいこちらの意図を悟らせずに、彼の神経を逆撫でしたい。

「俺は今日までずっと、シャンバラと、そこで暮らすエルフと、ネコヒト族に、尽くしてきたつもりだ。それがなぜ、仲間であるはずのエルフに、殺されなければならない？」

一句一句、どの部分に男が怒りを示すのか探った。

ネコヒト族はどうでもいいようだ。怒りは『エルフ』という単語と『尽くしてきた』という部分に強く見られた。

「教えてくれ、俺はヒューマンだがエルフの味方だ。俺の人生は、この先も生涯シャンバラに捧げ続けるつもりだ」

少し早い結論を言おう。

お膳立てもあって、俺たちはヤツから冷静さの全てをはぎ取るところに成功した。

その男は、俺がシャンバラに尽くすことがどうしても気に入らない。  
い。

そうとしか思えないような反応を、表情や鼻息、全身の一挙一動から見せてくれた。

「ユリウス…… 貴様は、裏切り者だ……」

「俺が……？ これだけ毎日働いて」

「ユリウス…… ツ、貴様、貴様は…… ツ、貴様はいつか、他の者の手によって殺されるっ！！ お前も、ミーズリルも、生かしてなど



おけるものかつっ!！」

……ミーズリル？ どうやら人名のようだが、聞いたことのない名前だった。

「なぜ俺を憎んでいるかの回答になっていないな」

「……ふんっ」

どうやらここまでのようだ。

男は己の失言に気付き、己の殻の中に閉じこもってしまった。

「ミーズリルというのはなんだ？」

答えはない。これ以上は何をしてもムダだと悟り、俺は彼と尋問室から背中を向けた。

「いつか殺してやる……。貴様も、貴様の妻も、娘たちも、皆殺しにしてやる……」  
「なるほど」

ミーズリル。恐らくは人名。これがやつらの正体を突き止める鍵となりそうだ。

俺は尋問室を離れると、協力してくれた兵舎の人々と喜びを分かち合った。容疑者にして重要参考人が、たった1日で情報を吐いてくれたのだ。

この勝負、元より一方的なアウェイではあるが、俺たちの勝利だった。

・はかないセミちゃん、あるいは尋問官ユリウス（後書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。

おかげさまで書籍版1巻の作業がどうにか終わりました。

素晴らしいパッケージ、その道の人間にはとてもありがたい帯になっています。期待していて下さい！

## ・ミーズリルの正体

夜。寢床にグラフがやってきた。

「う、痛……っ」

「大丈夫か？」

彼女の名誉のために言うが夜這いじゃない。薬を持ってきてくれた。

結局、その後は一緒に同じベッドに入ることもなかったが……。

「大丈夫だ、明日にはもう少しマシになる……」

「ふふっ……。シャンバラを再生させた大錬金術師様も、自分の腰はどうにもならないんだね」

仮にそういう薬を開発したとして、それを彼女たちが知ったらどうなるか？

信じてはいるが、試したくはないな。腰の次は心臓発作かもしれない。

「そう思うならもう少しだけ自重してくれ……」

「うめん……」

彼女にしてはやけに素直な謝罪だった。

「君と一緒にだと、ボクらはなんだか変なんだ……。君が刺されたってサンディから聞いたら、スクルズをもっと増やしたくなった……」

「俺ももう懲りた。次からは別の方法を考えるよ……」

「君はいつかボクらの前から消えてしまう。ボクらはそれが怖いんだ……」

「すまん、もうしない」

「約束だぞ！」

シャンバラの夜は昔と比べてすっかり過ごしやすくなった。揺りかごが失われ、外気が外の世界と混じるようになった。暖炉を使わない夜ばかりが増えた。

「もう寝るか……？　もし眠くないなら、事件の話、してもいいか……？」

「もちろんいいぞ。うっ……」

照れくささに背中を向けて横寝にしていたものを、グラフを正面にする姿勢に変えた。

グラフの白い肌、艶のある青い髪はこんな夜中でも浮かび上がるようによく見えた。

「敵には何か目的があった。だけど君が捕まえた男は、その目的を投げ捨てて、君を殺そうとしてきた」

その美しい素顔が、生真面目で凜とした白百合のグライオフエンのものになった。

「確かにな。目的を優先するならば、逃亡を選んだだろう」

「といっても転移魔法使いの君からは逃げられない。そのことを知っていたから反撃を選んだ。って線もるだろうけどね」

「いや、ヤツは尋問室でも俺への憎悪を剥き出しにしていた」  
「なら つい感情的になった。……あるいは、君の殺害は彼らの目的に適うことだった」

「……俺は裏切り者だそうだからな」

尋問室での話は既にグラフも知っている。

ユリウスを裏切り者とする見解に、グラフは不機嫌そうに難しい顔をした。

「たとえ世界中の人々が君の敵になっても、ボクたちは君の味方だ。君がエルフにしてくれたことを忘れられるはずがない。君がボクにしてくれたこともだ……」

彼女のその言葉に胸の安らぎを覚えた。理由がわからないとはいえ、エルフに恨まれるのは俺も納得がいかなかった。

『これだけ尽くしてきたのになぜ……』と思わずにはいられない。

「そういえば、出会ったばかりの頃のお前は」

「そ、その話は止める……っ。あ、あの頃のボクは……っ、ヒューマンの君がボクを助けてくれるなんて、そんなふうには考えられなかったんだ……」

ごまかしたいのか、それとも甘えたいのか、わからないがグラフはびったりとこちらに張り付いてきた。こんなに凜として綺麗な人に好かれるなんて、俺は幸せ者だった。

「敵はスパイか何かの類かと思う。しかしだとすると、いったいどこの誰の差し金だ？」

「都市長の敵対派閥とか……？」

「あり得るが……。ならば、裏切り者というのはどういうことだ？」  
「きつとそのままだろう。敵からすれば君は裏切り者だった。ただそれだけのことだ」

「俺は何を裏切った？」

「そうだな……。エルフ族が君を恨む理由か……」

グラフは甘い声で甘えていたかと思えば、途端にいつもの涼しい彼女の声に戻っていた。今度の質問は難問だ。彼女もすぐには返答が出てこなかった。

「君は世界を大きく動かしたからな……。逆恨みの理由がないとはいえないが、それでも許せるだけの活躍をしている。エルフが君を恨むわけがない」

「ああ、そうであってほしい」

胸の中でもややもやとする感情から逃げるように、グラフを確かめるように抱き締めた。

「どちらにしろ、敵は何かしらの目的を持っていて、そのために被害者ロキシスを味方に引き込んだ。なんの変哲もない普通の、ただ勤勉で妹煩惱なだけのエルフをだ」

「うん……」

「それと、ミーズリルだな。ミーズリルという人物にも殺意を向けていた」

「実はボク、その名前、どこかで聞いたことある気がするんだ……」

「本当か？」

「気がするっただけだよ。ミーズリルって、独特の響きしか思い出せない……」

それでもどうにかして思い出したいようで、グラフは俺の胸から離れるとベッドから立ち上がった。続いて両手を胸の中で組んで、うろつろつと室内を歩き出した。

俺もベッドサイドに腰掛けて、自分もどこかでその名を聞いていないかと腕を組んだ。いや、ところが

「ふっふっふっ、お楽しみのよう　あ、あれ……？」

「あれ、メープル……？」

ところが扉が鳴り、部屋にメープルがやってきた。えらく扇情的な勝負下着を上下に身に付けてな……。

「なして……？」

「それはこっちのセリフだ……。なしてそんな格好をしているんだ、お前は……」

「だって、抜け駆けかと思って……姉さん、やっと寝かし付けてきたのに……。はあ……しょんぼり……」

「ぬ、抜け駆けなんてしないよ……っ」

嘘だ。メープルはグラフのその場しのぎの嘘に笑った。

それから俺の隣にやってきて、ぴったりと隣に寄り添って座り、同じように腕を組んだ。

付き合ってくれると言うので今の議題を彼女に伝えた。

「あ、私も、聞き覚えある……」

「お前も……?」

「それなら少し絞り込めるな。ボクとメーブルの共通する部分から考えればいいんだ」

「あ、そっか……。グラちゃん、頭いいね……」

体重を全部預けてくるメーブルを支えて、2人の思慮を見守った。当然だが、そうそう簡単に思い出せるものでもなかった。

「あ……」

「何か思い出したかつ!？」

「えと……いつも行くニヤバクラの、ミーちゃんの、本名だっけ……?」

「お前ら、そんなところに通ってたのか……?」

「知らないっ、ボクはそんなかがわしいところ行ってないよ……っつ!？」

人をからかったり手玉に取ることにかけては、メーブルの右に出るやつはいないかもな……。

わかっているよと、グラフに半笑いの笑顔を送った。

「あ、違った……。そだ……都市長の仕事、手伝った時、見た……。名簿に、ミーズリルって、入ってた……わっ!？」

ベッドサイドから跳ね上がると、旦那に体重を預けていたメーブルが布団に倒れた。

俺はそれに一瞥もせず脱いでいたトーガに近付き、素早くそれを袖へと通した。



「ま、待って……っ、そんなの明日の朝にすればいいだろ……っ」

「あーあ……言わなきゃ、よかった……」

「すまん、どうしても気になるのでちょっと確かめてくる」

「待て、ユリウスッ！ ボクと一緒に寝ろっ！！」

「組んず解れっ、希望……」

「それは後でな」

着替えが済むなり、俺はすぐに都市長の書斎へと転移した。

・ミーズリルの正体（後書き）

来週11日に大切な告知を行います。

Twitterなり活動報告なり、よろしければその際にチェックしていただくと嬉しいです。

・被害者ロキシスの正体

「……………何やってんだ？」

「おや、ユリウスさん。ふふ、こんな夜遅くに会いにきて下さるとは嬉しいですね」

老人はまだ起きていた。寝間着姿でござつぱりとしていたが、休まずにこんな時間まで書類仕事を進めていた。

「アンタ、ちゃんと休んでるんだろっな……………？」

「ええ、おかげさまで」

「おい、どつちつかずのごまかしは止める……………」

「無理をしているのはお互い様でしょう」

「この爺さん、どうにかしなきゃ死ぬまでこつこつ生活が続けそっただ……………」

下手に長寿で健康というのも、問題といえは問題だな……………。

「メイプルが例のミーズリルの名をここで見たというんだ」

「ほう……………」

「何かのリストだったらしいんだが、悪いがここにあるやつを見せてはくれないか？」

「喜んでお付き合いしましょう」

ペンを止めて、老人は凝り固まった肩や腰を鳴らした。

腰を痛めている俺がやるのも変かもしれないが、その肩を後ろか

ら軽く揉んでやるととても喜ばれた。

「もう少し人手が欲しいですね……」

「ならメールとグラフがそのうち現れるだろう。向こうに置いてきた」

「でしたらもう少し、孫の顔も増やして欲しいところです」

「サンディたちだけでもあれだけ手が焼けるっていうのに、無理を言うな……」

「ふふ……。その時は、きっとサンディたちが妹たちの面倒を見てくれることでしょう」

「それはあり得る」

都市長が数々のバインダーをかき集め、俺がソファアでそれに目を通した。

やがて一通りがソファアのテーブルに集まると、メールとグラフがこの書齋にやってきた。

「勘違いだったら、私の責任……?」

「違うね。こんな夜中に大騒ぎを始めたのはユリウスだ」  
「ま、そういうことだな」

速読が得意なシェラハがいればはかどったのだが、彼女にも明日がある。寝かし付けられたのを起こすのは酷だろう。

俺たちは可能性を信じて、ミーズリルの名をリストから探していた。

そして ついに見つ出した。

しかしその名は、かなりまずいリストの中に入ってしまった。

「あつた、ミーズリル、いた……！ いたけど……これって……」

俺たちはそのリストとメールを囲んだ。ミーズリルの名を確認して、メールがバインダーを閉じるのを見た。そのバインダーの表紙にはこう記されていた。

【「部外秘」転移門 勤務者リスト】と。

「えと……ミーズリル、3日前から、転移門で働いてるみたいだけど……？」

「て、転移門だつてっ?!」

嫌な予感 いや、直感で危険を感じた。

俺たちは先日、犯人グループの1人を捕らえた。そのことは敵の耳にも届いているはずだ。

仮にやつらの狙いがシャンバラの転移門だったとすると、仲間が情報を吐く前に動き出してもおかしくない。例えば、今夜にでも。

「パパッ、大変大変っつ、うちら見つけたのっ!」

今すぐ無事確かめに行きたいところだったが、そこにサンディのやつが転移してきた。

彼女は右手に割れた銀の紋章を持っていた。

「あのねっ、この紋章の正体がやっとなかったのっ!」

「それは報告にあつた、犯人一派が持っていた紋章ですね……?」

「うんっ！ 先が枝分かれした不思議な角、それはシャンバラにはいない生き物の角だったの！ つまりこの紋章は、シャンバラの外の世界で使われている物なんだって！ シカって生き物の雄なんだって！」

真つ先に都市長がその意味の重大性を察した。

続いてグラフが、俺は転移門を確かめに行きたい一心で少し判断が遅れた。

シカはシャンバラにはいない。

だからシャンバラ国内の本から探っても、紋章は見つからなかった。

ならば、なぜあの連中が、国外勢力の紋章を持っていたのだ……？

「お手柄だ、サンディ！ それで、それがどこの家の紋章かわかったのか!？」

「うん、違うわ。これはスクルズとウルドががんばってくれたからよ。あ、それでね、この紋章は ヒューマンの国の、エダルって家の紋章だったの。……あれ、みんな、どうしたの?」

国外勢力だ、やつらのバックには国外の連中がいた。

シャンバラを守っていた揺りかごは消えてしまった。シャンバラはかつてのように盤石ではなくなっていた。

「情報を整理しよう……」

「お願いします、ユリウスさん」

「被害者の妹に莫大な金が渡った。被害者は殺された。被害者の足取りを追うと、ヒューマンのエダル家の紋章が見つかった。加害者

の1人が漏らした名は、転移門に勤務する人物の名だった」

ピースは足りていないが、それは推測で補完できる。  
敵の背後にいるのはヒューマン。そして

「ロキシスがミーズリルだ!! やつらの狙いは転移門だ!!」

俺が結論を述べる前に、グラフが推理の答えを叫んでいた。

「えーっつっ?!! えっ、何っ、どういうことっ?!?」

ならば俺がこれからやることは一つだ。細かいことは都市長とグラフが上手くやってくれる。これまでだっけとそうだった。俺は無言で、世界の裏側への扉を開いた。

「サンデイ、お前はアルヴィンスを呼びに行け。俺は様子を見てくる」

返答を待たずに俺は姿を消した。

転移門は敵に奪われてはならない。それは侵略の入り口になるところか、まだ解決していない異世界の敵を呼び込むことにもなりかねない。

いやそんなことよりも俺は、箱船で眠るコモンエルフたちをこれ以上危険にさらしたくなかった。

あの箱船を未来へと無事に届けるためにも、あの箱船にある白の棺を、奪われた転移門の代用品にするようなことはしたくない。

俺はグラフから借りパクしたままのあの聖剣を抜き、要塞化させた転移門内部へと降り立った。

・被害者ロキシスの正体（後書き）

本日、本作の書籍版についての大事な告知があります。  
遅れがなければ本日から書籍版の情報公開に入れます。  
魅惑的なパッケージになっていますので、どうか期待して下さ  
い。



## ・揺りかご無き世界

転移門。それぞれのものが1つの要塞だ。

タンタルスからの襲撃を迎え撃つために、常に臨戦態勢に入れるように兵たちが詰めている。

そんな場所の中枢から、果たして白の棺を奪い取れるものなのだろうか。

棺を運び出すにしてもあの大きさと重さでは、多頭立ての馬車が必要になる。どうやって秘密裏にそんなものを外に運び出す？

「ユリウス、様……私、などより、奪われた、棺……」

「それはアルヴィンスが合流してからだ」

だが現実として、転移門の中枢から白の棺が消えた。

あるのは血溜まりと、見張りの死体と、全体の2割にも満たない生き残りだけだ。俺はその2割をまず生かすことを優先した。

「ユリウス様……。貴方は、正しく、我々の救世主だ……っ！」

「大丈夫か？ ゆっくりでいいから、ここで何があつたのか教えてくれ」

敵の誤算はエリクサーだ。口封じに警備兵を皆殺しにつもりだったようだが、奇跡のぶにぶにが死にかけを健康体の情報提供者に変えた。

生き残ったのは2名。もう1人はエリクサーを与えてもダメだった。

「裏切りです……」

「ミーズリルの他に共犯がいたのか……？」

「ミーズリルをご存じなのですか？ 彼はしばらく前から仕事に現れなくなりましたが……」

「その話はいい。それよりも誰が裏切った？ やつらはどうやってあんなでかい物を盗んだんだ？」

「新任のマリク、ゾゾ、アルホースの3人です。マリクが見知らぬ者たちを中へと招き入れて、ゾゾとアルホースが仲間の背中を刺したのです！」

生き残った兵たちは裏切り者に怒りを燃やしていたが、俺の方は疑問の方が勝った。

なぜ、エルフがエルフを裏切るのか。ヒューマンの国に白の棺を奪われることは、自分たちの身を危うくするだけだ。

迷いの砂漠が消えた今、シャンバラはかつてよりもずっと危うい状況にある。裏切る理由がわからなかった。

「外から馬の鳴き声が聞こえました。恐らくは転移門への搬入用のルートを使ったのではないかと……」

「それが本当なら」

搬入ルートの方にも裏切り者がいる。

生き残ってる者がいると信じて、そっちにも薬を持って行かなければ

「おう、バカ弟子。そっちの連中ならこっちでフォローしといたぜ」

「師匠……？ 早いですね……」  
「う、嘘……こっちも、やられちゃってる……」

しかし薬の保管庫を聞こうとする前に、アルヴィンスとサンデイが俺の右隣に転移してきた。当然、転移魔法使いに慣れていない兵たちはそれに驚いていた。

「あっちの生き残りは1人だけだ。ソイツによると、4時間前に馬車が外に飛び出していったそうだ。まさかそれが白の棺だったとはな……」

「なんで……なんで、うちらを裏切るの……？ 同じ、エルフなのに……」

慰めてやれと師匠が目配せするので、まだ小さなサンデイを俺は少し乱暴に抱き寄せた。

クズクズなどとしていられない状況ではあったが、こうなってしまうとは転移魔法の天才であるサンデイの力が必要だ。

「国境を封鎖　でいいんだよな、バカ弟子？」

「ええ、賛成です。シャンバラの広大な国土と、樹海化に助けられましたね」

白の棺は重く巨大だ。これを運搬するには馬車が必要で、馬車は悪路である樹海を抜けられない。つまり、敵は必ず国境を通らなければならぬ。

「俺は南をやる。サンデイは東だ。バカ弟子は北と西の国境に伝令を頼む」

「じゃあ、ジイジのところに戻って書簡　」

「いらねえだろ、このメンツならよ」

そう言いながらアルヴィンスが俺に耳打ちをした。

『報告したから嫁さんところに帰ろうなんて考えんじゃねえぞ。北と西は任せたからな』

それは師匠なりの弟子への愛情だった。

仕事を終わらせたら、弟子であり孫弟子であるサンディを家に帰したいというアルヴィンスのやさしさだった。

「そんなことは言われなくともわかっていますよ。それより、師匠こそ……その格好で行くんですか……？」

「そうよっ、パジャマのままでもいいのっ！？」

「ヒヤハハッ、パリッとした格好で行っても説得力がねーだろ！？」

白の棺はまんまと敵の手により奪われた。

強奪不能と思われるにいたエルフの秘宝は、エルフの裏切りにより実現されてしまった。

俺たちは情報を共有すると、世界の裏側へともぐり込み、北と南と西へとそれぞれが背中を向けて歩き出した。

これはサンディの いや、カサエル三姉妹のお手柄だ。

彼女たちのエヴァンスの願いに応じなければ、白の棺はまんまと国外に運び出され、何かとんでもない使い方をされることになっていた。

転移門は俺たちに栄光をもたらすと同時に、最も脆弱な弱点でも

ある。

たとえ敵が何者であろうとも、白の棺だけは渡せなかった。

転移門による同盟、転移門による迎撃体勢、転移門による流通網は、数に劣るエルフたちがヒューマンと対等に渡り合うために必要だ。

・

「やあ、ずいぶんとお疲れみたいだね。あつ……！？ お、おい……っ？！」

「やっと、きてくれたのか……グラフ」

夜が明けて早朝。指揮官兼伝令として北部から西部に戻ると、コングルで構築された白亜の国境砦に、グラフの爽やかな笑顔があった。

そんな彼女の姿を見たら、俺は泣きつくようにグラフを胸に抱き込んでいた。

「や、止める……っ、人前でそういうのはっ、止める恥ずかしいだろ……っ？！」

「すまん……。だが、きてくれて嬉しい……」

「それはわかったからっ、仕事とプライベートは分けろっ、君らしくもない……っっ」  
「そうだな……」

忘れていた。グラフは外面を気にするタイプだ。

彼女は元々兵士であつたし、その麗しさから男女問わずファンが多い。彼女もそれを当然のものとして受け入れている。

だから旦那とデレデレしている姿を見せて、かわいいファンを失望させたくないのだろう。

「ユリウス、それでは封鎖は？」

「完璧だと思う。だがすぐに増員をして、裏切り者が出ても排除できるようにしておきたい」

「裏切り者か……。ボクは今でも信じられないよ、エルフがエルフをヒューマンに売るなんて、ボクの生涯でも、そんなの数えるほどしかなかった……」

肩を叩いて慰めると、グラフはたくましくも胸を張って凜とした白百合のグライオフェンに戻った。あの女王アストライアが懐刀にしていたのも納得の頼もしさだった。

「ここはボクに任せて君は少し休め」

「だが、事態が急に動くかもしれない。ここで休んだ方が」

「君が帰ればスクールズもウルドも安心する。サンデイも自分だけ仲間外れにされたと、ブーブー文句を言っていたぞ」

「子供がするべき仕事じゃない」

「うん、そうだね……。でも、きっと彼女の才能がそうさせるんだよ」

「それはある。昨晩は俺もアルヴィンスもつい、彼女の才能を頼ってしまった」

サンディは有能だ。だからこそ困る。  
つい子供がするべきではない仕事を任せてしまっ

「ユリウス。君の才能を引き継いだサンディは、この先も誰かに頼られ、その願いにまっすぐに応じて生きてゆくと思う。あの子はそういう子だ。だから帰れ、休む君の姿をサンディに見せるんだ」

家の外だとグラフは男前で、いかにも友人に欲しくなるようないい女だった。

俺は彼女と男同士がするようにハイタッチをして、必要はないのだが別れのために背を向けた。

「いつこっちに帰れる？」

「この問題を君が片付けてくれれば、すぐにでも」

「わかった、どうにかしてみせよう」

互いに笑い返して、俺は世界の裏側に身を投じた。

そして果てしなく続く平面の世界を歩き、やがて己のベッドの前に転移すると、糸が切れたようにそこに倒れて重い眠気に身を任せ

・揺りかご無き世界（後書き）

書籍版1巻、7月29日発売です！

活動報告などでパッケージの紹介もしています。

どうかお財布に余裕があれば、予約なり購入を検討していただけるとありがたいです。

コミカライズの話まだきてないので、

1巻の売り上げがコミカライズ化にも繋がります。



・暇人たち

目を覚まして居間にやってくると、食卓に冷めた食事が並んでいた。

それとマリウスだ。ツワイク人らしい黒髪にくせつ毛をした彼女が、頬杖を突いて俺の姿を気だるげに見上げていた。

「まさかそれ、お前が作ったのか……？」

「まさか。男のために料理を作る趣味なんて俺にはないよ。これはスクールズとウルドだよ」

いつもの席にフォークとスプーンが並んでいる。

俺はそこに腰掛けて、マリウスの目の前で食事を始めた。とても空腹だったからだ。

「それで、用件は……？」

「ない」

「いや、ないってことはないだろ……」

「今は暇なんだ。転移門が止まってしまって、ツワイクのをメンテナンスしに行く予定も崩れてしまった。……だから暇つぶしにきたんだ」

「復旧した後が恐ろしいな」

スクールズとウルドの料理はほどほどだった。調味料がいくつか足りていなかったり、どうも濃かったり薄かったり、まだまだあの子どもたちは子供なんだと実感させられた。

特にこの空豆のスープ。まるで塩水だ。

「このまま転移門が停止したままだと、じきに潰れるような商會が出てくる」

「ま、そうだろうな」

「国境の封鎖も痛手だ。今のシャンバラは、輸入も輸出もできない状態だと思っ**て**いい」

「ああ……白の棺の奪還に夢中で、その問題には気付かなかったな……」

マリウスに問題を突き付けられて、まだ少し寝ぼけていた頭が動き出した。

俺たちは速やかに、国内のどこかに潜伏する盗人から、白の棺を奪還しなくてはならない。

「そうだ、白の棺の搜索に使ったアレあったな。アレを使えば見つかるんじゃないか？」

「それならもうやっている。君がわざわざ動く必要はないよ」

だがあれはそこまで精度がよくない。かなり近くまで接近しないと反応がない。

仮に馬車ごと樹海の中に逃げ込まれたら、何日何週間かかるかもわからない。

そんな話を交えながら、マリウスに見守られながら食事を終えた。するとマリウスが今日の注文票を見せてくれた。しかし、その注文票はいまだかつて見たことがないほどに　真っ白だった。

「俺も暇人の仲間だったわけか……」

「ユリウス、1つだけこの状況に風穴を空ける方法がある」

「わからん、どうしろっていうんだ？」

「以前、ある人から相談を受けた。俺たちのシャンバラを滅ぼしかけた、遺跡の中身についての相談だ」

その話は誰にもしてはいけない話だ。いったい誰がマリウスに漏らしたのだと、俺は真顔になってマリウスを見返した。

「いざとなつたらあの遺跡から発掘するしかない」

「それはダメだ。あの遺跡から白の棺が得られるなんて、そんな事実は存在してはならない」

「なぜだ？ 君は今日まで古の遺産を、自分のいいように使ってきたじゃないか？」

「ダメだ、それだけはダメだ。絶対に、誰にもあの遺跡には触らせない」

転移門は世界を変える。国々のパワーバランス、地政学すらもいともたやすく。

箱船に100を超える白の棺が眠っていると知れば、箱船は箱船としての役割をなさなくなる。

「ユリウス、俺たちが転移門に依存する社会を作ったんだ。どんな理由が君たちにあるうとも、このままではそうもいかないぞ」

あそこで眠る古いエルフたちを未来に届けてやりたい。

それがシャンバラを守り続けてきた女王へのせめてものはなむけだ。

「あの遺跡で何があったんだ？」

「何もなかった」

「なぜ隠す？」

「歴史に残されてはならないものが、あそこにあったからだ」

マリウスを信じてそう伝えると、彼女は深く思慮をしてから、何か納得したようにうなずいた。

存在してはならないものがそこにあった。それだけは伝わっただろう。

「なら、せめて短期間で棺を取り返すしかないな」

ところがその時、玄関がノックされることもなく激しく扉が押し開かれた。

誰かと思えばそれはラウリイだ。せっぱ詰まった様子で、俺にぶち当たるように飛び込んできた。

「す、すみませんっ！」

「いやいい」

「そんなことより大変っ、大変なんですユリウス様っ！！ シャムシエル様がつ！！」

「爺さんの身に何かあったのかっ！？」

「いえそうじゃなくてっ、国境っ、国境に……っっ！！ ヒューマンの軍勢が現れたんですっっ！！」

驚きよりも納得が勝った。

転移門を封じてしまえば同盟国からの援軍はやってこない。シャ

ンバラを叩き潰す好機到来というわけだ。

その軍勢とぶつかれば、国境の封鎖も崩れてしまう。  
あるいは封鎖を維持したまま戦わなければならなくなる。

「シヤムシエル様が呼んでいますっ、急いで市長邸にきてほしいと  
！」

「してやられたな……。どうするんだ、ユリウス？」

敵はヒューマン。それも国家が相手だとこれで確定した。

敵の狙いは白の棺。いや正しくは、白の棺を奪い、転移門からの  
援軍を封じることだった。だとすると……。

「ラウリイ、わざわざありがとう。悪いが少し寄り道をしてゆくと  
伝えておいてくれ」

「えっ、寄り道って、ど、どちらに……。っ?!」

「牢獄だ」

俺は行政区の兵舎、その地下にある牢獄に向けて転移した。

もう一度、俺を刺したあの男と会って確かめたいことがあった。

・暇人たち（後書き）

7月29日、書籍版1巻発売です！

・もうないよ

「な、何者　えっ、ユリウス様!？」

「すまん、少し邪魔をする」

男はボロボロだった。まあそれもそうだろう。

ソイツが白の棺の強奪を狙った仲間なのだから、どうにかして情報を得ようとこの連中も必死だったろう。

「どうした、ユリウス。顔色が悪いぞ……?」

打撲痕だらけだというのに、陰湿で意地の悪い声が男の喉から吐き出されていた。

「転移門が奪われた」

「だからなんだ？　どこにあるのか教えて下さい、とでも言うのか?」

「さらには国境にヒューマンの軍勢まで現れた」

「おお、やっときたか……」

男は安堵したように本音を吐露した。

俺はその言葉を聞いて疑惑をさらに深めた。以前より疑いを持っていた部分に目を向けて、確証はないがそれを掴んでみた。

「痛っつ、何しやがるっ?!」

「……何か変だ」

「離しやがれっ、負け犬！ テメエらはこれから滅ぼされるんだよっ！！」

この耳、何かが変だ。体温は感じられるが、触れてみると少し硬い……。

あのダイニングの夫婦の証言によると、こいつらは頭痛持ちが多かったという。

エルフがエルフをヒューマンに売った。だが、ここまでするか？ エルフには自分の国を滅ぼす理由がない。ロキシスのように金に目がくらんだ者がいたとしても、国を売るようなことだけはしないはずだ。

俺はヤツの耳から手を離し、ヤツが油断したところでその背後へと飛んだ。

狙いは耳の先端だ。聖剣を振り下ろし、耳の先だけを切っ先で切断してやった。

「ユリウス様、何を……っ！？ あ、あれ……？」

男の耳からは血が一滴も流れなかった。

見張りが切断された耳の切っ先を恐る恐る拾い上げると、彼はまた声を上げた。

「これは、作り物……っ！？ ということは、この男……っ！？」

「ああ、コイツはヒューマンだな。まんまと騙された」

複雑なトリックを組んだ犯人というのは、そのトリックが見抜かれるのを心のどこかで期待しているという。事実その男もそうだった。



エルフに化けたヒューマンというなりすましが明るみになったというのに、狂ったように男は笑っていた。

「よく気付いたな、ユリウス・カサエル……」

「確証はなかった。だが、エルフがエルフを裏切るとは、俺には信じられなかった」

「てめえ、エルフがそんなに大事かよ？」

「ああ」

「なんでだ？ こいつらはよ、1000年だって平気で生きる怪物どもだぜ？」

「そう思ったことはない。むしろ羨ましいと思う」

「違うな。生まれ付きの魔法の才能を持っているくせに、ただ滅びを待つだけのお高く止まった負け犬。それがエルフ族だろ？」

俺はそのエルフ族を救った。緩やかに滅び行く種族に、かつての栄光を取り戻させた。生まれ付きの高い魔力を持つ俺には、エルフが自分と同じ存在に見えたからだ。

この男はそれが気に入らない。だから俺を、裏切り者だとなじった。

「アンタ、自分の耳はどうした……？」

「俺の耳？ もうないよ。テメエらを滅ぼせるなら、安いもんだろ……？」

「コ、コイツ、狂っている……っ」

体温を持つ偽物の耳。構造を想像するだけでおぞましい……。

エルフに化けるために耳を切れと命じるコイツのバツクも、コイツ自身も、理解しがたい……。

「なぜロキシスを殺した？」

「裏切ったからだ」

「なぜ裏切った？」

「契約に従ったくせに、仲間を売りたくないとはやき出したんだ。どうしても従わないから、始末することになった」

「だったらロキシスは英雄だな」

「ふんっ、最後だから教えてやるよ、俺はガルツランドの工作員だ。転移門の停止と、強奪を命じられた」

正体不明の軍勢の正体を彼が明かしてくれた。

全てはそのガルツランドの陰謀であり、ロキシスは妹とシャンバラを裏切つてなどいかなかったのだと。

「転移門さえ止めちまえばこっちのものだ。エルフごと滅びろ、裏切り者」

「ヒューマンがエルフの味方をして何が悪い？」

「全部だっ！ テメエはヒューマンを滅ぼすつもりかよっつー！」

そう言われて、『ああ、もう始まっているのか』と思った。

もう1人のシエラハズがああ箱船で見せてくれたあの未来は、もうその序章が始まっているのだと強く実感した。

揺りかごは失われた。揺りかごはあまりに性質の異なる2つの種族を、隔てる意味も持っていたのだろう。

「エルフだからエルフの味方。ヒューマンだからヒューマンの味方。そもそもその考え方が間違いだ。俺は死んでもこのシャンバラを守り抜く、それが俺の人生だ」

ヤツは怒った。

その理性なき罵声を無視して、俺は市長邸ではなく己の錬金術工房へと戻った。

今回の敵ガルツランドには話が通じない。

そんな連中を黙らせるための道具が必要だった。

## ・炎の雨

ロキシスは裏切つてなどいかなかった。

ユリウスを刺したのはエルフに化けたヒューマンだった。

その報告は都市長の書齋にいた全ての者を喜ばせた。

全てはヒューマンの国ガルツランドの陰謀であったとわかると、場の空気は明るく覇気のあるものに変わっていった。

奥の手も見せた。やつらを黙らせるには他にないと説得した。

敵の誤算はシャンバラに奇襲を仕掛ける前に、こちらに気付かれてしまったことだ。こんなに早く国境に兵が集まることになるとは予期していなかったはずだ。

「しかし、いいのですか……？ それをすれば、貴方はますます裏切り者となじられることになります」

「ああ、だが今さら後には退けない。転移門を各国に配備すると決めたあの時から、こうなることが決まっていたんだらう」

国内に入り込まれる前に、ガルツランド軍と接触する。

軍のトップと交渉を取り付けて撤退させる。国内に入り込まれた後ではダメだ。

「わかりました、許可しましょう……。ユリウスさん……。その神の炎で、やつらを脅して下さい」

「了解だ」

席を立つと励ますようにシェラハが手を取ってくれた。メーブル

が昔みたいに飛びついてきて、やや不満そうに人の腹をつねった。

「痛い」

「無理したらしばく……。茨の鞭で」

「い、茨っ?! 冗談に聞こえないやつは止めてくれ……」

「……ダメ?」

「いいよ、なんて言うわけねーだろ……っ」

「あたしたち、ユリウスの帰りを待っているわ」

「待つてる……」

「大げさだ。軽く脅して戻るだけだ」

ともかくこうして許可が下りた。

俺はメープルを引きはがすと、ガルツランド軍が現れたという北の国境の向こうに飛んだ。

まずは斥候の兵士を襲撃した。

転移魔法を使って直接に將軍の天幕に突入する手もあったが、交渉を確実にするために手順を踏むことにした。

斥候から装備を奪って変装し、その格好で敵陣内部に転移で潜り込んだ。

しばらく様子をつかがい、敵將軍が天幕に1人になったところで交渉に入るための都合だった。

宮廷魔術師をしていた頃を否応なく思い出した。

国を勝利に導くために汚い仕事もこなしてきた。そんな俺からすれば、敵本陣に忍び込み、敵將軍の首に盗んだ剣を突きつけるなど容易なことだった。

「ユリウス・カサエルか……？」

「ああ、交渉にきた」

「これのどこが交渉だね」

「脅しも交渉のうちだ。さて、単刀直入に言うが、退いてくれ」

「無理だ、エルフは滅ぼさなければならぬ」

「どちらかが滅びるまで戦い続ける気か？ それこそ不毛だ」

將軍は両手を上げ、背中に剣を突きつけられた体を反転させた。

その男も黒髪で、軍人らしい精悍な体つきをした男だった。全く臆さないとところからして度胸もあった。

「ユリウス・カサエル、君のやっていることはヒューマンの滅亡を招くことになる。その意味をちゃんと理解しているのか？」

落ち着き払った様子で、將軍は諭すように言った。

「大げさに話を盛るやつだな。ツイイクの王は、シャンバラの繁栄は俺が死ぬまでの短い期間のことだと、そう評しているぞ」

「転移門。あれを生み出す前まではそうだっただろう」

「ま、それは一理ある」

「あれはまずい。転移門を持たない国は、転移門を持つ国にどうあ

がいても叶わない。軍事的にも、経済的にも。君は世界のパワーバランスを破壊したのだ」

「だからやられる前に、先制攻撃を仕掛けたとでも言いたいのか？」  
「我が王は聡明だ。君たちがこれ以上肥大化する前に、倒すべきだと判断した。俺もそれが正しいと信じる」

冷静だが、会話が通じないところは俺を刺した男と変わらないな。

「白の棺を返してくれ」

「断る。手に入らないならば、棺を破壊するように命じておいた」

「それは困る。困るが、きつと無理だろう」

「ほう？」

「白の棺はちよつと鈍器で叩いたところで傷一つ付かない。それにそちらの作戦は既に失敗だ、退いてくれ」

彼が納得するわけがなかった。

奇襲はかなわなかったが、犠牲を払えばこのままシャンバラを叩き潰せると将軍は考えていた。

「転移門を失った君たちがどうやってこの軍勢に勝つ？」

「……噂くらいは聞いたことがあるだろう。今でも最初にコイツを使った場所は、観光名所として残されているくらいだ」

彼にメギドジエムを見せた。それと砂粒のように小さな、プチメギドジエムとでも呼べる物も一緒に。

「なんだそれは？」

「この大きい方を起爆すると、この軍勢ごと全てが炎に包まれる。お前たちがシャンバラに襲いかかると言うならば、俺は同族ごと全てを焼き払う」

「嘘だな、ちっぽけな石にそんな力があるはずがない」  
「なら見せよう」

彼の目の前で、俺はプチメギドジエムを起動した。

まさかと思い將軍は後ずさったが、俺はそれを無視して天幕の天井にそれを投げると、マジックブラストで天幕ごとプチメギドジエムを空に撃った。

軍は騒然となった。

上空で赤い大爆発がわき起こり、天から炎の雨が降ってきたからだ。

天幕、食料庫、薪に高温の炎が燃え移り、馬が恐怖に逃げ出した。

將軍は目の前で腰を抜かしている。さっきまでの余裕が消え、人を怪物でも見るように目を見開いて震えだした。

兵たちの少数が俺を困んだが、残りは消火活動に奔走していた。

「シャンバラを蹂躪させるくらいなら、この場でお前たちを焼き払う。頼む、退いてくれ」

「ユリウス……お前は、人類を裏切った魔王だ……」

「好きに言え。それで撤退の大義名分が立つなら、好きなだけ話を盛ればいい」

心変わりをしないようにだめ押しのプチメギドジエムをもう1発、天へとぶっ放すと、俺は炎の雨の世界から離脱した。脅しに応じて



やつらが撤退するかしばらく観察して、ガルツランドという国についてもしばらく考えを巡らせた。

敵はこちらの目論見通り　いや、まるで魔王に恐怖するかのよう  
に逃げ出していった。ヒューマンの多くを敵に回すことになった  
が、これでシャンバラの秩序が守られた。

次に転移門が発掘されたら、彼の国を抱き込むことも候補に入る  
べきだろうか。

いや、あのエルフへの差別意識や恐怖を見る限り、難しいように  
感じられた。

何より、潜入に必要なとはいえ人間の耳を切り落とさせるような連  
中と、組めるとはとても思えなかった。

・炎の雨（後書き）

書籍1巻、6日後の7月29日に発売です！

書籍1巻は、ウェブ版読者さんも楽しめるように意識して、全190時間の全力改稿を施し、本編を昇華させる前日譚と、なろうっじゃちょっとやれないエッチな書き下ろしをご用意しました。

もしよかったら書籍版で、出会ったばかりのユリウスと姉妹の、瑞々しくて初々しい関係をもう一度楽しんで下さい。

小型のメギドジエムを使った恫喝。これはシャンバラの立ち位置を変えるだろう。

閉じた世界からキャラバン隊だけを派遣してくる幻想の国。これがヒューマンから見たかつてのシャンバラだった。

だか今や迷いの砂漠は失われ、転移門を中心とする同盟国の実質的な盟主として世に君臨している。台頭を危惧するガルツランドの言い分もわからなくもなかった。

そして今回、シャンバラは敵対国にメギドジエムという大量破壊兵器で恫喝を行った。

それは畏れを呼び、畏れは不安となり、人々の敵意を奪う一方で、『エルフは排除しなければならぬ』といった思想をさらに深める結果となるだろう。

開戦の危機は去ったが、厄介な現実が浮き彫りになることになった。

ともあれガルツランド軍を撤退させた俺は、その足で行政区で開かれていた議会に出席した。そこでエヴァンスの依頼から始まった今回の顛末と、先ほど触れた懸念事項を報告した。

議会は長引くことになった。

外敵ガルツランドへの今後の対応もあったが、何よりも問題は白の棺だ。シャンバラの白の棺はまだ俺たちの手元には帰ってきていなかった。

敵作業員はこのシャンバラのどこかに潜伏し、現在も命令に従って棺の破壊を試みているだろう。

破壊できるとは思えなかったが、可能な限り急ぎたかった。

急ぎ奪還し、国境の封鎖を解かなければ、さらに面倒な問題が頻出することが見えていたからだ。

・

気付くと夜だった。

どうやって白の棺を奪還したものやら、悩みながら議会からの暗い夜道を歩き、自宅の玄関を開かず、転移魔法で素通りした。

居間を通り抜けてまっすぐに自室へ向かい、そこへと倒れ込もうとした。

ところがベッドが膨らんでいた。

シエラハか、メープルか、グラフか。

誰かは知らないが、俺は帰りを待っていてくれたみたいだ。

よく見ると髪が青白い。ならこれはグラフだ。

そう思い顔を寄せると、それは　なんと娘の方のスクールズだった。

俺は危うく、実の娘にとんでもないことをするとところだった……。非常に焦った……。

「すまん」

きつと心配させてしまったのだろう。

罪悪感に小さなお姫様の頬を撫でて、彼女を起こさないように気を使いながら隣に横たわった。

もうこんなに大きいのに、帰りの遅い父親が心配になってベッドにやってくるだなんて、エルフというのはつくづく見た目と中身が一致しない種族だ。

安らかな寝顔を横目に見ながら俺も目を閉じて、白の棺の奪還策についてまた考え続けた。

議会は民間人を動員してのローラー作戦を提案している。

強引だが他に確実な代案がなければ、明日からこの力ずくの作戦で棺を探すことになるだろう。

「帰ったのなら帰ったと言え。……ん、スクルズ？」

「ただいま、グラフ。そっちこそ、今回はずいぶんと帰りが早いな」

「都市長に作戦の指揮を取って欲しいと頼まれたんだ」

「それは多分、ローラー作戦のことかも　お、おい……」

ところがグラフがベッドに入り込んできた。

ただでさえ右半分を愛しいお姫様に占領されているというのに、グラフはお構いなしに俺を押しして、ベッド左側を占領しようとした。

「さすがに狭いぞ……」

「僕たちが横寝にすれば入る」

「それは、そうなんだが……」

「フ……」

「なんだその笑いは……」

「三児の父だというのに、君はときどき初恋を迎えたばかりの少女のようにウブになるね」

「お前、俺が困惑すると知っていて言っているだろう……」

「正直な感想さ。それに……」

グライオフエンという女性は二面性を持っている。

ナルシストで女好きなところもあれば、乙女のような別の顔を見せるときもある。

「僕らがこうやって寄り添って眠っているところを、起きたスクルズが見たらきつと喜ぶ」

「そうか……？」

「そうだ。だから今日のところは早く寝ろ。君が眠るまで見守つてやる」

「よくもまあ、そんなセリフを恥ずかしげもなく言えるものだな……」

俺たちは息もかからんばかりの至近距離で見つめ合った。

隣にスクルズが眠っている以上、出来ることと言ったらこうして手を繋ぐことくらいだった。

「昔は君みたいな男になんか眼中になかったのにな……」

「娘の隣でそういうことを言うな……。場所や立場が変われば、人だって変わる。ただそれだけのことだろう」

「立場か……。ここが僕の世界じゃないと知ったあの日、何もかもが変わってしまったさ。僕を受け入れてくれた君たちには、本当に感謝しかないよ……」

隣で娘が寝ているというのに、情熱的な女性に唇を奪われた。

「さあ寝よう。きっとどうにかなるさ」

言葉の代わりに手を握り返すと、グラフが静かに目を閉じた。

俺もそれにならってまぶたを下ろすと、急な眠気が意識を奪っていった。

確かに俺は、ヒューマンから見れば裏切り者だ。

だが、俺はこの家族を守りたい。

陽気なネコヒト族と、俺を頼ってくれるエルフ族たちを、守り栄えさせたいと願って何が悪い。

これは都市長と俺が始めた夢の続きだ。

シャンバラを復活させたいという彼の夢に俺は乗り、長い苦勞の果てにこうして悲願を果たした。

俺たちは自分たちの夢を叶えただけだ。俺たちは何も悪くない。

・白の棺奪還の鍵　・白百合のグライオフエン　・（後書き）

1巻発売まであと3日です！

どうか書店に並びましたら手に取って見て下さい。

そしてコミカライズの夢のために買い支えてくれると嬉しいです！



「おお父、すまぬ。起こしてしまったか……？」

ふと目を開けると、窓辺から白い朝日が射し込んでいた。

それとスクルズがベッドから出ていて、髪を整えているところで目が合った。

「いや、起きるにはちょうどいい時間だ」

「ダメじゃ、父はそこで母と一緒に休んでおれ。朝食ならワシが作る」

あの塩辛いやつをか……？

そう口にしかけて止めた。

今朝のスクルズはいやに機嫌がいい。

俺は横寝を止めて、一人分開いたベッドで仰向けになった。

「わかった、お言葉に甘えよう」

「うむっ、母とイチヤイチヤするがよいつー！」

「寝ている相手にそれは無理だな」

「そうじゃが……。とにかく父は母と一緒に寝ていればそれでいいのじゃっ」

「わかった」

そうしてほいほいと言うので、俺は横寝に戻して目を閉じた。

少しすると台所の方が騒がしくなり、ウルドの声が混じるようになった。

サンデイとスクルズを姉妹に持つのは、さぞ大変だろうな……。

目を開けるとそこにグライオフエンの寝顔がある。

青白く美しい髪と、黒ずみ一つない白い肌、同性を魅了する甘いマスクがそこにある。

そういえば昨日、昔の話を少しした。

当時のグラフは、ヒューマンである俺を強く警戒していた。

今みたいな関係ではなく、彼女は常に壁を作って俺と接していた。

それが今ではこうして隣に寄り添って眠ることになるだなんて、人生何が起きるかわからない。

「最初に出会ったときは何事かと思ったな……」

あの日、ゾーナ・カーナ邸跡地に光る柱が現れた。

まさか襲撃かと思いい偵察に向かうと、俺はそこで倒れた彼女を見つけることになった。

敵に奪われてしまった白の棺も、そういえば元々はあの場所の地下に埋もれていたものだったな。……ん？

「いや、待てよ……」

そこまでの日のことを回想すると、とあることに気付いた。

俺はベッドから抜け出し、真っ直ぐに家の厨房に向かった。

「父も母もしょうがない労働中毒者じゃな……。休んでおれと言っ

たであるうつ！」

「すまん、以降気を付ける。だがそれよりもウルド、今すぐ頼みたい仕事がある」

「えっ、わ、わたし……？」

「お前が教本にしている『錬金術初級』の本に、音爆弾というアイテムのレシピがある。ありったけの材料を使って、強力なのを2、3個ほど作ってくれ」

「い、いいけど……お父さんは、手伝って、くれないの……？」

「俺は都市長のところに行く。では頼むぞ」

「父っ、私の朝ご飯を食わずに行く気かっ?!」

「軽いだけ包んでおいてくれ」

話を付けると俺は都市長のところに飛んだ。

外交文章を用意する必要があったからだ。

事情を伝えると、彼はすぐに書簡の用意に入ってくれた。

その間、俺は義兄のスレイに身支度を手伝ってもらった。

これから会う相手のことを考えれば、たとえ近しい間柄だとしてもしつかりとしなければならなかった。

「先日はすみません、私があの子たちに甘い対応をしたがあまりに……」

「だが結果的に今シャンバラが救われている。それに、義兄さんがダメと言ってもサンディがおとなしく引き下がるわけもない」

「そうですね……。きっと貴方とシエラハに似たのでしょう。シエラハも、あれで頑固な面がありますから」

「同感だ。自分たちの業を、こんな形で支払うことになるとは思わなかったよ……」

最後に外交官を証明する勳章を身につければ、これで身支度は完了だ。

「お待たせしました、ユリウスさん。もう少しお待ちいただければ、書簡の他に手土産も持たせられるのですが……」

「それならばもう準備させてある。では、上手く事が運ぶよう祈っていきなれ」

都市長が蜜蝋で書簡に封をすると、それを受け取って俺は一步後ろに跳ねた。

扉が俺を飲み込み、世界から色彩が消えた。

続いて数歩歩いて、俺たちの錬金術工房に転移した。

「あつ、お父さん、できたよ……っ！ お母さんも手伝ってくれたの！」

「音爆弾……。これがあれば、フ、フッフ……」

音爆弾はうちのウルドらしいかわい形状をしていた。

それは手のひらサイズのグレーの球体で、球面に驚いたかのような女の子の顔が描かれていた。

「ウルド、メープルにどんなに頼まれようと、絶対にこれだけは作るなよ？」

「う、うん……。わかってる！ お母さんに持たせたら、大変……っ」

「大丈夫……。ウルドはいい子だから、お母さんの言うことなら、なんだって聞く……」

「ダメだよーっ、お母さん……っっ！」

これではどっちが親かわからないな……。  
子供みたいに跳ねながら、ウルドはメーブルにかわいらしく抗議  
していた。

俺はそんなメーブルから、音爆弾をひよいと3つ立て続けに投げ  
渡された。

「んなつ、ちょっ、あ、危なっつ?!」

「おお、ナイスキャッチ……」

「お前っ、お前これっ、もしここで爆発したらどうなるのかわかっ  
てやってんだろっなっつ?!」

「へへ……。今の、なかなかスリルあつたね……」

「スリルってお前な……は、はああ……。っ。少しだけでいいから、  
もう少し親らしい行動をしてくれ……」

「そういつの、姉さんとグラちんの仕事だから……」

「反面教師にはなっていることは認めるが、その本人が開き直るな  
……」

「昔、ルインタートルを嬉々と爆破しまくってた……ユリウスに言  
われたくない……」

そうやって騒いでいると、そこに家族みんながやってきた。  
グラフにシエラハ、スクールズとサンディだ。この出立をサンディ  
に知られるのは少しまずかった。

「そんなに急いでどこに行くの？」  
「ちよつとその先だ」

「嘘っ、それこの前の外交官の勲章でしょ！　うちも連れてってよっ！」

「ダメだ、お前はこっちで待機だ」

包んでもらった朝食をスクルズから受け取った。

スクルズは賢い子だ。早くも行き先に察しが付いているように見えた。

「ねえユリウス、せめてどこに行くかくらい教えてちょうだい。そんなに急いで、どこに行くというの？」

シエラハの質問に笑顔で返し、俺はスクルズに言ってもいいぞと合図を送った。

今は一刻も惜しい。俺は再度転移魔法を背中後ろに発動して、家族とシャンバラの前から旅立った。

行き先は森エルフの国リーンハイムだ。

これから俺はその地の女王、アストライアに会いに行く。

白の棺奪還の鍵、それは彼女に他ならない。

宣伝

本日7/29! 書籍版1巻発売します!

活動報告でも触れましたが、Kindleを除く主要な配信サイトでも、予約はかないままですが、発売日からの配信が間に合うことになりました!

どうか応援して下さい。

よりよい条件でコミカライズ化を獲得するためにも、皆様のご支援が必要です。

税込み1430円は安い品物とは言えませんが、だからこそそれだけの労力、190時間の改稿と、納得の書き下ろしをご用意しました。

1巻の売り上げが今後の展開に繋がります。応援して下さい! もしよろしければ、購入をご検討下さい!

宣伝失礼しました!

リンハイムに到着すると、懐かしい森の都の姿に目を奪われることになった。

大通りの街路には爽やかに薫るリンゴの木が整然と並び立っていた。

そこにはちょうど掃き仕事をしている清掃員がいて、彼女は突然現れたヒューマンの男の姿に声を上げて驚いていた。

「あつ、えとつ、あのつ、握手して下さいっ!!」

「握手……?　ごうか?」

「ああつ、感激です、ユリウス様!!　あつ……」

「歓迎してくれてありがとう、だが今は急いでいるんだ。ではな」

彼女が俺の名を呼ぶと、往来の注目がこちらに集まることになった。

次々と驚きの声上がり、親しみを込めて俺の名を呼んでくれた。

そんな彼らに手を上げて、また世界の裏側に潜り込んだ。

それから少し歩き、城の正門前に転移すると、そこで門番をするグラフの元部下たちに書簡を見せた。

「すまんが非礼を承知で言う。急いでいると女王陛下に伝えてくれ」

「そういつことならばどうぞ、中へ」

「いいのか?」



「貴方が守って下さった国だ。それに、もう一人のグライオフエン様から、なかなか過激なのろけ話を沢山聞いている。お盛んなようだな」

「な……っ?!」

「ところで、スクルズ様はいらっしゃられないのか？」

「あ、ああ……。今日はいない」

「そうか。陛下が残念がるな……」

グラフは、この国でどんな話をしたんだ……？

警備隊の俺を見る目は尊敬半分、温かな親愛半分で、どんな秘密が彼女の口から漏れているのやら、聞くのが恐ろしかった……。

門番の一人が急ぎ報告に向かい、もう一人の男エルフが城内へと俺を案内してくれた。

「羨ましい限りだ」

「グラフはいったい何を話したんだ……。いやっ、いっつ、聞きたくはない……っ」

「恥じることはないだろう。あれだけ美しい人を隣に置いていれば、当然のことだ」

「い、いや……それは……」

「ヒューマンというのは、とても愛情深いのだな」

「その話はもう止めてくれ、別の話がしたい……」

しばらく彼と話して時間をつぶすと、謁見の間ではなく、直接女王の部屋を訪れることになった。

彼とはそこで別れ、美しい女官に導かれてその女王の部屋を訪ねた。

「あふ……こんな格好ですまぬな、ユリウス」

「へ、陛下……っ、人が来るとは聞いていたが、それがユリウス・カサエルだなんて聞いていませんっっ！」

女王アストライアは半裸だった。

グライオフエンもまた同様だ。グラフと同じ顔、同じ声をしているのに、今ではまるで別人のように見えた。

「ククク、何を恥じらう必要があるのじゃ？ ユリウスはそちの身体など細部まで見慣れておるわ」

「ツツ……?!」

俺は何も悪いことをしていないのに、キツとグライオフエンに睨まれてしまった。

「しかし、そなたがこのリーンハイムを訪ねるとは珍しいのう……。

しかも、急ぎとな？」

「これを女王陛下に」

包みを女官に渡すと、彼女は中身を確認してからそれを女王の傍らに運んでくれた。

なんのことはない。ただのサンドウィッチだ。具は卵サンドと、やけにマスタードが利いたハムチーズサンドだ。

「あのシェラハゾの手作りには不格好じゃな。そうすると、これは、もしか……っっ」

「ああ、貴方の愛しのスクルズの手作りだ。シャンバラのガラス工芸なんかより」

「ああーっつ？！ ずるいですよっ、陛下っつー！！」

説明するなり、ハーフサイズに切られた卵サンドが半分以上消えていた。

「美味いつつ！！」

「ぼ、僕の、スクルズの卵サンドが……」

あまり暴れられると目に毒だ。

俺は背中を向けて、彼女たちの軽食が終わるまで考えをまとめた。これでこちらの要請が確実に通るならば、時間は惜しいが十分な価値がある。

「ククク……純情な男よ」

「恥をさらした……。おい、もうこっちを向いてもいいぞ」

振り返ると衣服を整えた二人がいた。

森エルフの美しい女王と美しい弓戦士。なかなか映える光景だった。

「転移門の停止の話はもう知っているな？」

「うむ、そちらとのやり取りができなくなって、こちらもかなり困らされている」

「作業員に白の棺を盗まれたそうだな……？」

「伝わっているなら話は早い。それを今すぐ取り返したい」

「ほう……わからぬな。ならばなぜここに来たのじゃ？」

グライオフエンを一瞥した。

グラフがツンデレとかいうやつなら、こっちはツンツンだ。鋭く澄ました顔で視線を跳ね返された。

「昔、グラフから聞いたんだ。破滅を迎えたあちらの世界の女王アストライアは、術を使ってグラフをシャンバラへと転送した」

「わらわではないわらわの話か……。ふむ、検証したことはないが、多分できなくもないぞ」

「それを聞いてよかった。あの日グラフは、白の棺が眠っていたゾーナ・カーナ邸に転送された。つまり、貴方には、白の棺がある座標に物を飛ばす能力を持っている。……。そこでだ」

ウルドお手製の音爆弾を取り出した。

軽やかにグライオフエンがベッドから跳ねて、俺からそれを奪い取った。

「ユリウス・カサエル、僕たちは互いに戸惑わずにはいられない関係だな」

「そうだな。アンタはアンタだと、頭ではわかっているんだが……」

「いいさ。これからももう一人の僕のことを頼む」

グライオフエンは俺の前を立ち去り、気だるそうにベッドで身を起こす女王にまた寄り添った。

無意識に羨ましそうな目をしてしまっていたのか、女王アストライアが意地の悪い微笑を浮かべてこちらを見ていた。

「なんじゃ、これは？」

「ウルドが作った音爆弾だ。刺激を与えると辺りにとてつもない爆音が響く」

「そ、そんな危険な物を陛下に近づけるなっつー!!」

「近付けたのはそなたじゃろ？」

「そ、そうだけど……っ。こんな物を渡してどうするつもりだっ？」

「わからぬか？ こやつはわらわに白の棺のある座標にこれを送れと言っているのじゃ。これを至近距離で受ければ、賊はたまったものではなかるっ」

「おお……っ。つまり、音で敵の居場所を特定するのかっ！ いい考えじゃないかっ！」

しかしそれは成功すればの話だ。

残念な事実として、グラフはその失敗の結果、こちらの世界に迷い込むことになった。彼女は元の世界にはもう二度と戻れない。

この音爆弾が同じ結末をたどれば、今回の策は失敗で終わることになる。言わずとも聡明な女王はそのことを既に理解していた。

投稿が遅くなりました。申し訳ありません。

【宣伝】

全国約100の書店で、書籍版の発売元であるトーハン社によるフェアが開催中です。

特に秋葉原の書泉ブックタワーでは、4段を使った特別な展示をして下さっています。

もしよろしければどうかお立ち寄り下さい。

「メディアライン」「スーパーブックス」「山下書店」「あおい書店」「住吉書房」「明屋書店」「イケヤ文楽館」「金龍堂」「ブックファースト」「アミーゴ書店」「アバンティブックセンター」「文真堂書店」「Bookman's Academy」「TIME CLIP」「岩瀬書店」「らくだ書店」「鎌倉文庫」「ブックマルシェ」

などが系列店ですが、具体的にどの店舗でフェアを行っているから説明しきれません。

どうか本作を支えて下さい。書籍版の続きを書きたいです。コミカライズを読みたいです。応援して下さい。

・白の棺奪還の鍵 - でかした、ユリウス・カサエル! -

「その通り、さすがグラフ いや、グライオフエンか。ごつちやになつて困る……」

「言っておくが僕は君の女じゃないぞ。僕が愛するのはアストライア様ただ一人だけだ」

「うむ、悪い気はせぬ」

「……いや、だが今は、スクールズも捨てがたいかな」

「何を言うつ、あれはわらわのものじゃっ!」

おい……。

「ずるいですよっ、陛下! この前だつてスクールズを独占して!

僕だつてスクールズとデートしたかつたのにつ!」

「そなたこそ、わらわに黙つて転移門を使い、わらわのスクールズとニャンニャンカフェに遊びに行つたらしいのう?」

こいつら、大丈夫か……?」

グライオフエンが隠れてシャンバラに来ていたというのは初耳だ。どちらも同一人物なのだから、気付きようがないな。

「安心するがよい、そなたも平等に愛してやる……」

「ならば3人でデートしましょうよ!」

「その会話は、スクールズの父親である俺の前でするべき話か……?」

「うむ、種の質だけは評価しよう」

「でかした、ユリウス・カサエル! あんなかわいい子を産んでく

れて感謝する！」

「産んだのは、もう一人のアンタだ……」

いや、こんなバカなやり取りをしている場合ではなかった。

「一刻も早く転移門を再稼働させたい。早速やってみてくれるか？」

「ふむ……爆弾が3つか。見くびられたものよ」

「保険は大いにこしたことはない」

気位の高い人だ。機嫌を損ねられると困る。

「なぜ、あちらの世界のわらわは失敗をしたのじゃろうか」

「せっぱ詰まった状況だったと聞いている」

「この術は、そなたらツイクの魔法使いの術をまねたものだ。そうじゃ、この機会にわらわに転移魔法を教えよ」

「危険な術だ、貴女のような立場の者が使う術じゃない」

「教えよ」

「わかった……。失礼」

左手で彼女の手を引いて、右手で向こう側への扉を開いた。

向こうに行ったら一歩も動かないでくれ。座標を変えると危険だ。

「ま、待て！ 勝手なことをするな、ユリウ」

言葉はそこで途絶え、世界の裏側に女王アストライアを引きずり込んだ。

彼女は興味深げにあごへと手を置いて、辺りへと目を向けていた。



「わらわの術と、そなたの術を組み合わせれば、えげつない術に変わりそうであるな」

「己が転移するのではなく、何かを送り付ける術か」

「うむ。ではもうよい、帰るとしよう」

「お、おいっ、勝手なことをしないでくれっ!!」

女王は俺の術を模倣し、表側の世界への扉を開いた。

グラフをシャンバラに転送するほどの魔法使いだ。俺はやむを得ず、彼女が開いた扉に飛び込んだ。

元の世界だった。

グライオフェンが主君であるはずの女王に小言を浴びせ、俺までそのとばっちりを受けた。

お説教が終わると、俺の転移魔法とは異なる術を女王が発動させた。

物を吸引する力を持つ、奇妙な転移魔法　いや、転送魔法だった。

「強い衝撃を与えると起爆する。高めの座標に飛ばしてくれ」

「終わったら成果報告を頼む。成功率が知りたいところじゃ」

「わかった。必要に迫られて試みることになったが、これは面白い実験だな」

「うむ、また付き合っがよい」

グライオフェンは蚊帳の外にされて不機嫌になった。

こっちのグラフは女好きで浮気っぽいところもあるが、女王を心

から愛している。

音爆弾が投げ込まれ、転送魔法が閉じられた。

それがもう2回繰り返し返されると彼女の仕事は終わりだ。

「こんなものかの。ちゃんと届いていなかったらまたくるがよい」  
「協力に感謝する」

「なに、礼はグラフをわらわに返してくればそれでよい」  
「返す予定はないな。いつか俺が死んだら引き取ってくれ」

グライオフエンが女王を睨んでいた。

同一人物とはいえ、他の女になびいているのを見て嬉しくなるわけがない。

「そうじゃ、次はスクルズを連れてこい。ウエルサンディでも、あの気弱なウルドでもいいぞ。わらわと森の温泉に行こうと伝えてくれ……」

「そんな顔をするな。大丈夫、僕が見張っておくから大丈夫だ……」  
「フッ」

余計に心配だ。この話は伝えずにもみ潰しておこう。

「では行く。今回は同族が迷惑をかけて悪かったな。ヒューマンを代表して謝っておくよ」

「気張るな。外交問題なぞ我ら王者や議員どもに任せておけ。そなたは錬金術師、術を用いて人々を幸せにするのが仕事である？」

「陛下、貴女は名君だ。……好色なところ以外はな」  
「ククク……」

「君に言われたくはないな、ユリウス・カサエル」

「ずいぶんと情熱的らしいのう……?」

グラフののろけ話はこの2人にまで伝わっていたのか……。

崩れ落ちそうなショックを受けながらも、俺は逃げるように転移魔法を発動させていた。

グラフのやつ、口が緩すぎないか……。

スケベの烙印を押された錬金術師は、ため息を吐きながらシャンバラへと引き返した……。

・白の棺奪還の鍵 - でかした、ユリウス・カサエル！ -  
後書き（

【宣伝】【報告】

遅れていた一部配信サイト

「Kindle、ブックライブ、Honto」での電子配信が8  
08より開始されます。

ご不便をおかけして申し訳ありませんでした。

また書籍版第一巻を買って下さった皆様、ありがとうございます。  
心から皆様に感謝しております。

帰国すると、北部のある地域で大地を揺らす爆音2度轟いたと報告が入っていた。

しかし残り1発は行方不明だ。グラフがそうなってしまったように、どこか別の時系列の世界に届いて、そこで災難を巻き起こしたのかもしれない。

グラフとシエラハ率いる精鋭が北部に急行し、俺の方は夕方前のオアシスの前で休むことになった。

『救援には来るな、休め』と、釘を差すような伝言が残されていたからだ。

「お前は行かなかったんだな」

「まーね……」

「シエラハが心配じゃないのか？」

「ユリウスを任された……。ここに、縛り付けておくのが、私の仕事……」

「なるほ　ンブツツ?!」

昔、とある貴族のお屋敷で人懐っこい犬に歓迎されたことがある。膝を落とすとその犬は顔に飛びついてきて、ヌルツと唇の間を割って客人を歓迎してくれた。

「なっ、なっ、何をするっつ?!」

「その反応が、見たかった……」

「似ているかと言えば、似ている……。」

「娘たちに見られたらどうするんだ……。」

「え……隠す必要、ある……?」

「あるに決まってるだろ……。」

「ない」

「ある……大いにある!」

2人だけで湖畔の棧橋に寄り添っていると何か物足りない。

こういう時、俺たちの隣にはシエラハがいて当たり前だった。もちろんその真ん中は俺ではなくシエラハだ。

しばらく何もせずに休んでいると、だんだん眠くなってきた。

「寝ていいよ……。何もしないから……。」

「何もしないやつは、わざわざそんなこと言わないっての……。」

「寝てもらわないと困る……。どんな手を使ってでも、寝かせるって約束した……。」

目を閉じた。昨日は夜遅くに戻ってきて、朝早くに飛び起きてリンハイムに旅立つことになった。十分過ぎるほどの寝不足だった。

「しめしめ……ぐふふ……。」

メープルのかわいらしく静かな声が、そんな言葉をつぶやいたよ  
うな気もした。

だが俺は眠気に負けて意識を放棄していた。

「あ、お帰り……。ユリウス……。？ ユリウスなら、あそこ……」

メーブルとシエラハの声が聞こえた。

ぼんやりとした明かりがまぶたの向こうから近付いてきて、覚醒しかけていた俺は身を起こした。

「ただいま、ユリウス。全て片付い キャアアアーツツツ?!」

「な、なんだっ、敵かつ!？」

シエラハを迎えようとすると思鳴が上がった。

だが辺りを見回しても、おかしなものはどこにもない。

「フ……」

「お前、何かやっただろ……」

「フ、フフフ……。ぷぷぷぷ……」

「メーブルツ、ビツクリしたじゃないっ!」

なぜそんな物を持っているのかわからないが、夕闇の世界でメーブルが手鏡を俺に差し出してきた。

既に嫌な予感しかない……。

いや、だが、さすがのメーブルも子供っぽいことはしないはずだ。俺はメーブルを信じて手鏡をのぞき込んだ。

ああ、信じた俺がバカだったよ……。

俺の顔面に跳ね上がるようなヒゲが描かれていた。

額には第三の目、頬には頬紅が塗りたくられ、唇は朱色に染められていた……。

「どっ……?」

「どっもどっもねーよっっ!」

手鏡を押し返し、棧橋に膝を突いて湖水で顔を洗いたくった。

「ダメよ、メープル。こういう悪戯はダメッ!」

「ごめんなさい、姉さん……」

「ええ、わかればいいのよ」

「よくなーよっ!」

唇の赤いやつが脂質でなかなか取れない。

こんな顔を娘たちに見られたら……。

「サンディとスクルズには大受けだったのに……。ウルドはドン引きだったけど……」

「それが正常な感性だ……。それで、首尾は……?」

「……ああ、作戦のこと? もちろん成功したわ、こちらの負傷者はゼロよ」

「敵は?」

「全て捕縛したわ。白の棺ももちろん取り返して、今はグラフがこっちに輸送しているところよ」



そうか、これでやっと終わったか。

唇を赤くした締まらない格好で、俺は深く安堵した。

彼らが自害しなかったのは、既に作戦が遂行され、自害する理由がなくなっただからだろうか。

「正体はエルフじゃなかったわ。みんなエルフに化けたヒューマンたちだったわ」

「よかった……。誰も、私たちを裏切つてなかったんだね……」

姉妹は身を寄せて、手を取り合つて笑い合つた。

全ては俺たちを過剰に危険視する連中の陰謀だった。

国境の封鎖も必要なくなった。転移門は近日中に復旧されるだろう。

そこはマリウスのがんばり次第だが……。

「あつ、ママツ!! お帰りつつ!!」

ミトンを手につけたサンデイがやってきた。

シエラハの姿を見ると、母親の胸に飛びついて無事を喜んだ。

悪く言えば子供っぽい。良く言えばとても愛情深い。だがどちらも幸せそうだった。

「サンデイ、お前たち明日の予定は空いているか？」

「え……空いてると思うけど、なんで……？」

「明日ちょっと付き合ってくれ。お前たちには最後の仕事が残っているだろ？」

「あ、エヴァンスさん……」

「そうだ。俺たちで報告に行こう」

「……うんっ、わかった！ ロキシスさんは立派だったって、うちから報告する！」

このことを姉妹に伝えたいのか、サンディは家の方に駆けていった。

俺たちはその後を追って、俺の方は複雑な感情を抱いた。

成長は嬉しい。だが、成長は親離れと同義だ。

特にあのサンディのあの矢のような気質と転移魔法の才能は、彼女を一カ所に留めさせるようなものではない。

「また作ればいい……」

「な、なんの話よ、それっ?!」

「シエラハ、流されるな」

明日、エヴァンスに報告に行こう。

兄を失った彼女が立ち直れるように俺たちなりに支えよう。

積極的に手を握ってくるシエラハに俺は驚き、その期待の眼差しから視線をそらした。

「姉さん、ちよるい……」

「焚き付けるなど言っているだろう……っ」

「ねえ、ユリウス……。今夜」

今夜は逃げられそうもなかった。

・白の棺奪還の鍵 - また作ればいい - (後書き)

【宣伝】

書籍版1巻、発売中です。

嬉しいことなるう公式ブログでもフェアをご紹介いただけました。

大きいところでは

書泉ブックタワー様(秋葉原)

喜久屋書店 漫画館阿倍野店様(大阪) で開催中です。

・エピソード カサエル姉妹の事件簿 1 / 3  
- (前書き) - 調査報告

書籍版1巻、発売中です！

遅れていたKindle、hontoなどでの電子版配信も始まっています。

書籍が売れば、その分だけコミックも良い作画さんが付きます。

どうか応援して下さい！

・サンディ

出発前、こちら姉妹は式典用の白いドレスをママたちに着せられた。

メープルママが髪をとかしてくれて、二人でゆっくりとお喋りをした。

メープルママは特にうちにやさしくしてくれる。

メープルママにとってシエラハママは特別な人だから、その特徴をよく受け継いだサンディがかわいくてたまらないって、そう言っていた。

「パパ、大丈夫……？」

「あ、ああ……な、何も、何も問題ない……。俺は、健康体だ……」

こちら姉妹はパパと同じ馬車に乗った。

スクールズは意地悪な顔でパパを見ていて、ウルドはなんでか顔が赤かった。

「父、ワシらだけで大丈夫じゃ、家で休んでいろー？」

「そういうわけにはいかん……。俺は、都市長の代理のようなものだ……」

「は〜、父は頭が硬いのう〜。ワシらに任せておけばいいものを」

「エヴァンスさん……会うの、緊張するね……」

「良い人だよっ、凄くやさしくてっ、なんか……グラフィママがメチ

ヤクチャ好きそうなタイプだよっ！」

「どういう評価だ……。すまん、出立させてくれ……」

パパが御者さんをお願いをすると、御者さんは明るくこちらに笑って馬車を出発させた。

パパとうちなら転移魔法でひとつ飛びなのに、パパは馬車での移動にこだわった。

でも、その意味が出発すると少しだけわかったかもしれない。

ウルドと一緒に左の窓辺に寄って、緩やかに流れてゆく町並みや木々、木漏れ日の数々を見ていると、ワクワクした気持ちが膨らんでいった。

転移魔法を使えばあつという間。でもそれじゃ何も見れない。

大切な姉妹と、同じ光景を共有することもできない。

今日までちよつともつたいたいことをしてきたなど、そう思った。

「サンデイ、本当に母好みの美人なのか？」

「うんっ！　うちはあの人好き！　好きだから……。なんだか、あのひとが心配なの……」

「そうだな。どうにか俺たちで、彼女に手を差し伸べることが出来ればいいのだが……」

「そうじゃっ、いつそ父の嫁にするかっ!？」

「えっ、えええーっっ?!　な、何言ってるのスクールズちゃんっつ?!」

パパは凄く嫌そうな顔だった……。

パパは愛情深い人だ。いつだってこちらを心配してくれる。

でもパパは浮気をするような人じゃない。  
今だってママたちに夢中だった。

「ありかもしれん……」

「ちよ、パ、パパアツ?!」

「冗談だ」

「わ、笑えない冗談止めてよーっ!!」

「ビツクリ、したあ……」

うちらは馬車にゆっくりと揺られながら旅を楽しんだ。  
これからエヴァンスさんに真実を伝えなきゃいけない。

そう思うと胸がつかえるような、とても苦しい気持ちになるけれど……。

隣には大切な姉妹とパパがいた。

・

エヴァンスさんの家に着いた。

エヴァンスさんはうちの来訪にとても驚いて、でも嬉しそうに杖を突いて家に招いてくれた。

あの美味しいオレンジティーを入れてくれて、はかなくてやさしい微笑みをみんなに送ってくれた。

「うむ、サンディよ。確かにこれは、母のハートにクリティカルヒツトの美女じゃっ!! あいてっ、何をする父イイツ?!」

「お前はもう少し行儀良くしろ……」  
「ふふ……素敵な娘さんたちですね」

エヴァンスさんが笑うと、こちらは心配になった。

大切な人を亡くしたのに、そうやって笑えるほど平気なはずがないから、とても無理しているように見えた……。

こちらはお茶をいただいて、本題を避けるように少しゆっくりして、それから

「ユリウス様……ロキシスのことで、何かあるのですよね……」

エヴァンスさんの方から話を切り出してきた……。

「ああ……。だが俺はただの付き添いだ、依頼を受けたのはこの子たちだからな」

こちら姉妹互いに目を向けて、一緒に席から立ち上がった。

「ロキシスさんを殺した犯人を、犯人たちをパパが捕まえたわ……」  
「そう……よかった……」

でもロキシスさんは戻ってこない。

エヴァンスさんにあったのは犯人が見つかった安心だけで、救いや納得はどこにもなかった。

「みんなエルフじゃなかった……。エルフに化けたヒューマンだったの……」



うちが言葉を詰まらせていると、ウルドが少し嬉しそうな声でそうフォローしてくれた。

「そう！ それにねっ、ロキシスさんっ、みんなを裏切ってたのっ！！」

口にしてすぐにわかった。

それこそがエヴァンスさんが欲しかった答えだったんだって。

エヴァンスさんの綺麗な顔に驚きと、深い安堵と、喜びが複雑に入り混じった。救われたように目を閉じて、うちの言葉を確かめるように何度もうなづいた。

閉じられた瞳から涙が静かなこぼれ落ちると、うちは勇気を出してここにきてよかったと実感した。

「本当、ですか……？ ロキシスは」

「ロキシスは英雄だった」

ただの付き添いって言うてたくせに、パパが重々しい声でそう伝えた。

パパはこのシャンバラのナンバー2だ。

その英雄に英雄だと賞賛されることは、遺族としてもとても嬉しいことだったみたい。

エヴァンスさんは嗚咽を上げながら大粒の涙をこぼして、愛する人の潔白を喜んだ。

「ロキシスは心変わりをした。同族を売るのをためらい、拒み、そ

のせいでやつらに殺されてしまった」

「ロキシスさんが従っていたら、うちらはこの問題に気付けなかった！ 事件が起きたから、パパは敵から転移門を取り返すことが出来たのっ！」

エヴァンスさんの涙はしばらく止まらなかった。

ただただ静かな鳴き声を上げて、もう会えないお兄さんのことを悲しんでいた。

ロキシスさんはエルフを裏切ってはいなかった。

名誉の回復を心より喜んでいた。

「すみません……なんだか、急に、緊張の糸が切れてしまって……。ユリウス様に、お見苦しいところを……」

「つらい気持ち、わかります……。わたしも、もしサンディとスクルズが死んでしまったら、悲しいです……」

気持ちが落ち着くと、エヴァンスさんはまたうちらにやわらかく笑ってくれた。

体は弱いけれど、心の強い人だった。

「一つ聞くんが、エヴァンスはこれからどうするのじゃ……?」

「私ですか……?」

「うんっ、そうだよ！ うちら、エヴァンスさんが心配で……っ」

「わ、わたしも……」

あたしたち姉妹が気持ちを伝えると、また彼女が微笑んでくれた。でも、これだけじゃとても慰めになっている気がしない……。

「兄が残してくれたこのお金で、どこかで治療を受けようかと思えます……。それからリンハイムにも行って、新しい人生を……」  
「治療か」

「はい……」

パパもあたしたちと一緒にになってエヴァンスさんを心配した。

お兄さんがいなくなつて、エヴァンスさん独りぼつちだ。  
これから独りぼつちですつと生きていかなければいけない!

そんなのダメだ……。

そんなの悲しすぎる……。

うちのもつと、この人に何かをしてあげたい!

このままお悔やみ申し上げますとか、当たり障りのないことを言  
つてお別れだなんて、そんなのヤダ!

「父、ワシの案は本当にダメか……?」

「お前は、俺を、なんだと思つているんだ……」

「同時に三人の女を愛せる懐のかい男じゃ! 四人くらいいけよ  
う!」

「ま、まさか、わ、私を……っつ?! そんな恐れ多い……っ」

パパは呆れ果てた様子で顔を手で覆つて、何度も頭を横に振つた。

エヴァンスさんはパパのそんな反応に、なんか意外だけど、かな  
り残念そうな反応だった。

「パパ、本当にダメ……?」

「サ、サンデイちゃんまでっ、何言つてるのーっつ?!」

「サンデイ……。お前にまでそんなふうに思われていただなんて……  
……。シヨックだぞ……」

でもこれって悪くないと思う。

何かが起きるたびに、うちの家では人手不足になる。

シエラハママとメープルママは今でもジイジの大事なサポートだし、グラフィママは頼れる元軍人さんだ。

そう見ると、エヴァンスさんって、なんか……。  
ちようどいい気がする……。

「じゃあ……。んん……。そうだっ！ エヴァンスさんっ、うちのお嫁さんになってっっ!!！」

「それはずるいのじゃサンディツツ、ワシだっってこんなはかなげな美人をはべらせたいのじゃあーっっ!!！」

「ふ、二人とも落ち着いてっ、女の子と女の子が結婚なんてできないよおーっっ?!！」

パパはまたため息を吐いて、エヴァンスさんは嬉しそうに笑っていた。

うちらのお嫁さんになりたいっていうより、こんなに心配してくれて嬉しいって感情が見えた。

「ユリウス様……。でしたら、私からお願いが……」

「娘たちがすまない……。それで、なんだ?」

「私……。やつぱり、リンハイムには行きません……。でももし、もしお許しただけなら……」

「ああ……。よければ、うちにくるか?」

「な、なんじゃとおおーっっ?!！」

スクルズはいつもやかましい……。

「そ、そこまでは言っていないせんっ！ ただ、ただ私は……サンデ

「イちゃんの、隣にいたいんです……」

「パパッ、うちもそうして欲しい！ エヴァンスさんとこのままお別れなんやダッ、病気のことまでパパが面倒見てよっ！」

メチャクチャな要求だけど、パパは静かに顎に手を当てて思慮を始めた。

少しするとエヴァンスさんを見て、エヴァンスさんは緊張した様子でパパを見つめ返した。

「治せる保証はないが、医者が必要とする薬の調合くらいはできるかもしれないな」

「で、ですが、そこまでしていただくわけには……」

「それに……貴女のような人がいれば、娘たちももう少し落ち着くかもしれない……。有事が起きると、こいつらを見張る役割の人間がいなくなるのが、問題なのだろうな……」

パパが認めると、うちはテーブルを回り込んでエヴァンスさんに抱き付いた。

スクールズも遅れてくっついてきて、ウルドはそんなうちにパパと一緒にため息を吐いていた。

「身体は弱いですが……誠心誠意、お仕えいたしますユリウス様。サンデイ様。スクールズ様。ウルド様……」

「様はいらぬっ！ ワシと一緒に水浴びをしてくれたら、それだけで……グフフツツ　痛っ、父いいっ、ワシがバカになったらどうするーっ!？」

これでよし。  
これでハッピーエンド。

探偵の物語のように、取り残された依頼人をそのままにして終わるなんてうちららしくない。

パパとエヴァンスさんの間で細かい話が進んだ。

エヴァンスさんはこれから、市長邸に住居を移してお手伝いをしてくれることになった。

病気で身体が弱くても、彼女なり出来ることをしてもらいながら、少しずつ身体を治してもらえばいい。

それがパパとあたしたちの望みだった。

これでエヴァンスさんとお別れをしなくて住む。  
本当に、本当によかった！

「エヴァンスさん、これからよろしくねっ！」

「はい、サンデイ様……。私、このご恩は一生忘れません……。貴女はなんて心の温かい方なのでしょう……。」

「お、大げさだよっ!？」

パパは一足先に転移魔法を使って仕事に戻った。

こちらはエヴァンスさんと荷物と一緒に馬車に乗って、家への長い旅路を進んでいった。

たった1人の家族を失ったエヴァンスさん。

その心の傷がどうか少しでも早く癒えますようにと、神様に祈って木々に覆われた空を眺めた。

エヴァンスさんをお手伝いさんとして迎えた新しい生活が、うちは今からもう楽しみだった！

・腰痛持ちの錬金術師

そうなることは既に娘たちの間で予期されていた。

「素晴らしいつ、素晴らしい人道的措置だよ、ユリウス！ ああつ、エヴァンス……想像通りの美しい人だ……」

「それは果たして、旦那相手に言うべき言葉なのだろうか……？」

「だって素晴らしいじゃないか彼女はっ！ あの儂げな容姿だけではなく、心までもが美しいとくる……」

「グラフ……。俺は今、エヴァンスに若干の嫉妬の情を覚えているぞ……？」

エヴァンスがやってきて、最も喜んだのはグラフのやつだった。俺を、娘たちを、そしてエヴァンスを褒め讃え、その儂げな乙女の前にひざまづいて手の甲に接吻をしていた。

そういうやつなのは知っていたが、見ると旦那として、グラフを取られた気分になった……。

「フフ……平等に君も愛してあげるよ、ユリウス」

「いや、念のために言うが、これ以上エヴァンスに迷惑をかけるな



よ…………？」

「あの人を守ってあげたい気持ちは君と一緒に…………」

「嘘を吐け…………。俺には下心ありありにしか見えんぞ…………」

「あんなに綺麗な人を相手に、『初めましてよろしく』だなんて退屈なりアクションをしたら、それこそ美人に失礼ってものさ」

「はあ…………まあ、いいか…………。彼女には人との新しい繋がりが必要だ。気休めになるだろう」

「そうだね、そう思うよ、僕も」

「手は出すなよ？」

「…………うん？」

「はいと言ってくれ…………」

まあそんなわけで、グラフのやつはご機嫌もご機嫌だった。

胸くそ悪いバッドエンドで終わった事件簿に、思わぬ選択肢が現れて、舞い上がっているのもあるのだろう。

俺も明日から医者と協力して、彼女の病に効く薬を模索していきたい。

今回の事件のその先も、ハッピーエンドで終わらせるためにだ。

・エピソード カサエル姉妹の事件簿 2 / 3  
ため - (後書き) - 依頼人あら

【宣伝】

書籍版1巻、発売中です。  
どうか本作をこれからも応援して下さい。

こうして事件が落ち着いたその一方で、大きな問題が残った。  
一連の事件は俺たちが世界を変えた代償だ。

転移門を持つ国。魔力を持つ者たちが勝者となり、そうでない者が敗北者となる時代が近付いている。今回の事件はその前触れだ。

あの女王が見せてくれた最悪の未来が、もう目前に迫っているということだった。

これは仮にだが……。  
仮に箱船から白の棺を発掘し、それらを世界中の国々に分け与えたとする。

するとそれは、魔力を持つ者が今以上に重用される世界を生み出すだろう。

やがてそれは、タンタルスの世界に似たディストピアを生み出すかもしれない。

さらには国と国の戦争に転移門が使われることにもなるだろう。そうなればタンタルスを迎撃するどころではなくなってしまう。

世界を転移門で繋いだのは失敗だった。

リンハイムを守り、侵略者タンタルスを迎撃するためにそうするしかなかったとはいえ、歴史的に見ればこれは失敗だった。

だが現状維持を続ければ、シャンバラの女王が俺に見せた破滅の

未来が待っている。

白の棺を分配してもダメ、独占してもダメ。もはや八方塞がりだった。

それでも俺はオアシス　いや、正確には今はただの湖であり森の池だが、とにかく家の前の草刈りをしながら、俺は考えに考えた考えた。

俺たちは今、大いなる力の代償を支払わされている。

敵国ガルツランドの聡い王が、シャンバラを潰さなければ自国に未来はないと決断した結果が、今回の騒動だ。

似たような問題が今後も噴出することになるだろう。

シャンバラの一人勝ちは許さないと、世界中の作業員が迷いの砂漠を失ったこの地に集まり、様々な工作を行うことは既に見えている。

考えても考えても答えが見えなかった。

『外交に納得はない。あるのは妥協だけだ』と、ツウィクの先王がその昔、戦後の演説で言っていた。

まさか彼と似た悩みを抱えることになるとは思わなかった。

「悩んでいるようだな」

「そうだが、お前が俺ならそんなことわかり切っているだろう」

そんな俺の前に、俺が現れた。

「……なら、シャムシエル都市長の道楽に、お前も少し付き合っ

みたらどうだ？」

「道楽……？ それは、いったいどういう意味だ？」

それは機械人形と化した未来の俺だ。

最近見ないと思っていたら、ふらりと突然現れて、言うことだけ言って去っていった。

「都市長の、道楽……？」

彼の夢なら既に俺が叶えた。

砂漠は失われ、樹海の国シャンバラがここに生まれた。

ならば別の道楽という意味だろうか……。

そうなると思うよりも本人に聞いた方が断然早い。俺は作業を止めて都市長の書斎に押し掛けた。

どうにも気になったので、ノックも足音もなしの転移魔法でだ。

「おや、最近はいつになく性急ですね……。どうされましたか、ユリウス？ もしや、また厄介な事件ですか？」

「ああ、グラフがエヴァンスに熱を上げてうっとうしいこと以外は、いたって平和だよ」

「おや、嫉妬されていますか？」

「当然だ。彼女は俺の……、いや、とにかく、浮気されているような気分だ……」

「ふふふ……。それで、用件は？」

「質問だ。都市長、アンタ新しい夢はあるか……？」

「ええ、ありますよ」

「教えてくれ、次は何をするんだ？」

そう俺が問い詰めると、なぜか彼は嬉しそうに微笑んだ。

「……学校です。私は新しい学校を作りたいのです。それもただの学校ではありませんよ、ユリウスさん」

「まあ言うからにはそうだろうな。どんな学校なんだ？」

夢を語り出すと彼はいつだって若々しく見える。

そんな彼の夢に付き合ったのが、俺たちの関係の始まりだった。

また彼と同じ夢を見るのもいいなと思った。

都市長だってそうだろう。また同じ夢に俺が加わってくれれば期待している。目を輝かせている。

「転移門は世界を1つに繋げました」

「ああ……だがそれが今や大きな問題だ」

「ええ。ですから、互いの理解を深めるために、このシャンバラに学校を築き、留学生を募るのです」

「都市長……。アンタ、やはり考えてるんだな……」

「知識と価値観を共有し、同じ学び屋で同じ学問を学べば、今回のような不幸な誤解を抑止出来るかもしれません」

夢見る都市長の姿を観察しながら、俺はその計画について考えた。学校による融和。その発想はなかった。

それから少し遅れてあることに気付いた。

何も学ぶのは、学問や商売だけでなくとも良いと。

「そうか、そういうことか」

なら　魔法使いをもつと増やせばいい。

師匠が俺を俺を拾ってくれたように、世界には魔法の才能を持つが、まだ発掘されていない者がまだまだ埋もれているはずだ。

魔法の学科を作り、そこで理念と思想をもって、次世代の魔法使いを啓蒙してゆけばいいではないか。

「何か、思い付かれましたかな？」

「ああ。効果があるかはまだ定かではないが、やってみる価値はありそうだ」

魔力を持つ者が一方的な勝利を収める世界は、不幸と破滅をまき散らす。

だから魔力を持つ者を保護する。

彼らに教育を施し、魔力は神からの祝福であり、持たざる者を支えるために存在していると教える。

どうあがいても不平等になるならば、強い立場にある者に崇高な使命を与える。

貴族たちがノブレスオブリージュを大切にするように、魔法使いには魔法使いの掟が必要だ。

俺はこの思い付きの発想を都市長に伝えた。

情熱的に、これには価値があるのだと強弁した。

「開き直って、魔法を広める、ですか……」  
「反対か？」

「いえ、とても面白い考えです。敵に塩を送る行為でもありますが……」

「危険ではあるな」

「ですが政治的には間違っておりません」  
「そうなのか？」

「ええ。魔法使いがこれからの繁栄の鍵と流布し、我々がそれを教えると宣言すれば、諸国は我々を潰すのではなく、利用して栄えようとするでしょう」

「なら決まりか？」

「はい、やりましょう。私の夢に、貴方の夢である魔法学科を加えましょう！もちろん、貴方も特別教師として協力してくれるのですよね？」

「当然だ。都市長、アンタならわかってくれると思っていた」

「フフ、夢が膨らみますね……」

俺たちは新しい夢の誕生に笑い合った。

上手くことが運べば、これからたくさん若者がこのシャンバラを訪れるだろう。

しかしその夢を叶えるには、立派で大きな学舎が必要だ。

シャンバラの力を諸国の子女たちに知らしめ、シャンバラと結べば栄えることが出来ると、そう思わせたい。



アルヴィンスが靴磨きや煙突掃除ばかりしていた俺に未来をくれたように、俺も誰かに希望を与えたい。

「また一緒にがんばりましょう、ユリウスさん」

「ああ。俺とアンタの関係は、同じ夢を見ている状態が最も自然なのかもしれない」

「それは愛の告白ですか？」

「そう受け止めてくれてもいい」

彼と握手を交わし、俺たちはその後夜遅くまで計画を語り合った。諸国に誇れる立派な学舎を作ろう。世界中の国々に呼びかけ、魔法使いの才能の発掘をしよう。

俺とシャムシエル都市長はこの日、新しい夢を始めた。

魔法学校。それこそが最悪の未来を回避する鍵だと信じて。

私は幼少よりずっと、ユリウス・カサエルのことを憎んでいた。

人々が彼を英雄だとか、エルフの救世主だとか、転移門で世界を変えた大天才だとか、そう賞賛する傍らで、私は耳を塞いで苛立つ心を抑えていた。

ユリウスは『ヒューマンの裏切り者』だ。

ユリウスは『エルフに籠絡された愚かなスケベ男』だ。

ユリウスは『後先考えずに世界を変革する害悪そのもの』だ。

そう陰口を漏らすような人たちと私は付き合い、彼らの言葉に深い慰めを覚えてきた。

「さあ行け、お前の人生を変えられるのはお前だけだ」

ほんの少し前までは……。

「あ、あの……ありがとうございます……」

「気にすることはない、俺が好きでやっただけのことだ。……と、あの男ならば言うだろうな」

自分が恥ずかしい。

何もかもが自分の都合だった。

私は自分の都合で会ったこともないユリウス・カサエルを恨み、状況が変わると、自分の都合で彼への評価を変えていた。

彼がシャンバラで新しい学校と魔法学科を開くと知ると、私の中の逆恨みが尊敬に変わった。

国籍や種族を問わず、異国の才能のある若者にまで魔法と学びの場を教えようだなんて、凡人にはとても出来ない試みだった。

「行ってきます……！」

「アゼル、お前なら必ず出来る！」

私は少し前まで恨んでいた男が築いた学校、森の園ミスガルズの正門をくぐった。

ここの魔法科に入りたい。入って惨めな人生を変えたい。

ユリウス・カサエルだってどん底からスタートした。だったら、私だって！

私は破滅を迎えた日から今日までを思い返しながらか、ミスガルズの学舎を見上げた。

つい足がすくんでしまうほどに立派できらびやかな建物だった。

自分にふさわしいとは思えない。

だがそれでも、今は自分の才能を信じるしかない。

願書を胸に抱いて、私は絢爛豪華なミスガルズの学舎を訪れた。

私はある富豪の一人息子だった。

父は祖父の代から続く大農園を経営する男で、主な取引先はシャンバラのエルフたちだった。

エルフたちは多少ふっかけても農園の小麦や豚を買ってくれるので、ヒューマンと取引するよりもずっと儲かっていたと聞く。

だけど私が8歳くらいの頃だったろうか。

エルフたちが契約を打ち切ると言ってきた。

父はそれを値段交渉のためのハツタリだと勘違いして、突っぱねた。

エルフたちは農園を去っていった。もう戻ってはこなかった。

錬金術師ユリウス・カサエルと技師マリウスが、リーンハイムとシャンバラを繋ぐ転移門を生み出したと知ったのは、そのだいぶ後のことだった。

これはハツキリと覚えている。10歳の秋、父の農園は破綻した。

「お坊ちゃん、ここが貴方様の新しい家ですよ」

「ま……待って……っ！ レイマン、お前が私を引き取ってくれるって話」

「すみませんねえ、お坊ちゃん……。うちも苦しくて……でも、こ

「このお家なら安心ですよ、お坊ちゃん」

父と母は召使いのレイマンに私を預けて姿を消した。

「レイマン……もしかして、君は……。君は私を……。私を売ったの……？」

「お坊ちゃん、私はただけなかつたお給金の代わりに、たった今いただいただけです」

「ただど召使いのレイマンは私を新しい親へと売りつけた！  
その義父は酒浸りの暴力男で、義母は売春婦の陰湿女だった……。」

最悪だった。その両親は、私が過去出会った人間の中で最悪だった。

「アゼル、今日は稼ぎが少ないねえ。あんた、儲けをちよろまかしてるんじゃないだろうねえ……？」

「違います、お義母さん。今日は冷え込みのせいでお客が……」

「嘘吐くんじゃないよっ！！どこに金を隠したんだい！！」

「なあにいい……。アゼルが金を隠したとお……？おい、こっちこい……」

「い、痛い……。っつ、髪、髪は掴まないで……。っつ！アゲツツ？！……」

最悪の両親は私にお金の稼ぎ方を教えた。

稼ぎが多い日は全部を奪われて、少ない日は髪を掴まれてスラムを引きずり回された。誰も助けてなんてくれなかった。

御曹司のプライドがズタズタに切り刻まれ、私は自分を慰めるために、無関係のユリウス・カサエルを恨んだ。

転移門。転移門さえあの男に生み出されなければ、私は今も御曹司でいられたのに……と。

.

「よう、アデル。あの両親ども、俺らがぶっ殺してやってもいいぜ？」

あれは14歳頃だったろうか。

ギヤングの男に声をかけられた。

「何を言っているのか意味がわからないです……」

「お前、ちよつと不思議な力を使えるんだってな。弟から聞いたぜ？」

「アイツ、あなたに喋ったんですか……？」

「お前のことを思って、俺に教えてくれたんだよ。……な、ちよつだけ、ちよつとだけ俺に見せてくれよ？」

ギヤングの威圧に負けて、指先から小さな炎を出して見せると、彼はとても喜んだ。

私の肩を抱いて、『なんでその力であるクソどもをぶっ殺さなか

「つたんだ？」って言われた……。

それに対して私は「どう使えば人を殺す力になるかわからない」と答えた。

彼は私に大笑いしていた。

・プロローグ ある青年の転機 1 / 2 (後書き)

遅くなって申し訳ありません。

また書籍の宣伝が一段落したので、近々新作を公開する予定です。  
書籍版ともども応援して下さい。



そして今年。

「え……レイマン……？」

15歳になった私の前に、あの裏切り者のレイマンが現れた……。

「お久しぶりです、お坊ちやま。さあ行きましよう、新しいご主人様が決まりましたよ」

「ま、待って……っ、新しいって……何がどういことなの……！？」

「坊ちやまは売られたのですよ、また」

「え……売られ……。え……？」

義父も義母も、レイマンがテーブルに置いた金貨しか見ていなかった。

私には目もくれずに、レイマンに引つ張られてゆく様子を見送った。無表情で見送った。

「少し、驚かれるかもしれませんが」

「そんなに……酷い人なの……？」

「あの2人と暮らすよりはマシでしょう。屈辱かもしれませんが」

レイマンは私をある農園へと連れて行った。

それは私が生まれ育った、父の農園だった……。

「ただ今では所有者が変わっていて、農場長と呼ばれる冷たい目の男が管理していた。」

「私は、生まれ育った農園の、農奴として売り払われた……。」

「さあさあ集まって！ 皆さんのお坊ちゃんまが帰ってきましたよっ！」

「レイマン……ッ、私が君に、何をしたっていうんだ……っ」

「お坊ちゃんまは皆さんと同じ、農奴になりました！ 我々をこき使っていたあの男の息子が、今や惨めな農奴でございますよっ、ハハハハ……！」

農園の者は父を恨んでいた。

慕うような者はなく、だから私にもとても冷たかった。

惨めな生活をする彼らからすれば、落ちぶれた私の姿は、何よりもの娯楽であり慰めでもあった……。

「可哀想に」

「ああはなりたくないねえ……」

「あーあ、苦勞を知らないお坊ちゃんは、手が綺麗でいいわね？」

自分よりも下がいるんだと、私を見て彼らは己の優位を確かめた。涙と、疲勞と、惨めさばかりがつのる日々がそれから続いていた。

深い絶望だけが目の前に広がっていた……。

「ユリウス……？ いや、違うか……」

そんな私の前に転機が訪れた。

とある大物がうちの農園を訪れて、たまたま私はその人の目に止まった。

「アリ殿下、うちのアデルが何か？」

「これは失礼。知り合いに少し雰囲気似ていて、ついな……」

「うちのアデルがお気に召されましたか」

「気に入ったというより、気になるといのが近いな。それより殿下呼びは止めてくれ、嫌な思い出の方が多い……」

アリと呼ばれるその人は、隣国で大農園を経営する超大物だった。

「ア、アデルと申します、アリ様……」

「ユリウスに似てるかと思ったが、性格はまるで真逆か」

「ユリウス……それは、ユリウス・カサエルのことですか……？」

私たちを破滅させた仇だ。

似ていると言われるのは不快だった。

「うむ、どことなくな」

「アリ様、でしたらご提案が。よろしければアデルをお売りしまし  
よ」

ああ、これで3度目の売却か……。  
このアリという男も、きつとレイマンと同じ裏を持っているに決まっている。

天才ユリウスへの叶わぬ願いや妬みを、私にぶつけるんだ、きつと……。

「アデル、俺の農園にくるか？」

「それ……私に聞く意味、あるんですか……？」

「アデル、新しいご主人様に行儀よくしなさい」

「はい、アリ様……私は貴方に従います……」

アリ様の足下にひざまずいた。

プライドはもうない。もう粉々に壊されてしまった。

それにきつと、他の農園に移った方がずっと楽だ……。

見下した目で、坊ちやまと呼ばれるのもう嫌だ……。

「自分で決める、心まで奴隷になり下がるな」

「よろしい、お売りしましょう！　ただしアデルは前の農園主の息子。労働者からすれば、それがちよつとした慰みでしてな」

「色を付けるといふことが。わかった、それでいい」

「話がわかりますな、アリ様は！」

私はまた売られ、買われた。

すぐに湯浴みをさせられ、そのままいつまでも放置された。

アリ様の馬車に乗せてもらったのは、もう日の沈んだ夕方のこと

だった。

「本当に似ている……。卑屈で小さなユリウスといった感じだ……」  
「アリ様、一生懸命働きます。だからどうか、お情けを下さい……。もう、惨めな扱いは……」

「止める止めるっ、なんだか気色が悪くなってきたぞ！」  
「すみません……」

アリ様は暗い馬車の中で、向かいの私の顔を飽きもせずずっと凝視していた。

彼はとても大きな男で、ただ向かい合って座るだけで熊のような威圧感があった。

「そっぴえば」

「は、はい……っ」

「ユリウスのやつが、生徒を探していたな……」

「え……せいと……？」

「小さなユリウスよ、勉強は嫌いか？」

「あの、言っている意味が、よくわからないのですが……」

「勉強したいかどうかと聞いている、答える」

「し……したいに、決まっていますよ……っ」

「よっっ！」

何がそんなに面白いのか、アリ様は豪快に笑った。

これが一国の王子様だったなんて、信じられない……。

「ユリウスのように魔法が使えるなら、ヤツ肝いりの魔法学科に推薦してやったのだから」

「魔法ですか……？ 私、あの……それなら……」

人間不信に陥っていた私は、彼を少しだけ信じてみることにした。ずっと隠してきた魔法の力を使い、手のひらの中に炎を灯して、馬車室を明るく照らして見せた。

アリ様は驚かなかった。

手のひらを叩いて、なんでかわからないけど1人で納得していた。

「アデルよ、一般学科と魔法学科、お前はどっちに入りたい？」

「選ぶ権利が、私にあるんですか……？」

「お前の好きな道を選べ」

もしかしたらと思った。

もしかしたら、この人は今日まで出会ってきた人間とは、種類が違うのかもしれない。

親身になって私を助けようとしてくれているのかもしれない。

ユリウス・カサエルに、雰囲気は少し似ているという理由だけで。

だがお金持ちの気まぐれであろうとも、チャンスはチャンスだ！

私はこれに、すがり付かなきゃ！

「魔法がいいです……」

「ほう。送り出す者として、その理由を聞こう」

「負けたくない……。ユリウス・カサエルに、負けたくないんです……」  
「そうかつ、俺たちは気が合うな、アデルツ!!」

「え……?」

「なら俺の代わりにユリウスに勝ってくれ! あの高慢知己のスケベ男につ、なんだっていいから俺の代わりに一矢報いてくれっ!!」

「あ、あの……2人は、どういうご関係、なのですか……?」  
「聞いてくれるか、アデル……。俺とユリウスは、元々」

彼のとても長い話を私は楽しんで聞いた。

彼の話は面白かった。彼の人生は波瀾万丈だった。

アリ王子が悪い。

でも若き頃のユリウス・カサエルは、確かに優秀ではあったけど、  
凄く嫌味なやつだった。

「おかえりなさい、あなた。あら、その子は あらっ!?!」  
「掘り出し物だ。話してみるととても賢い」

「その子、なんだかユリウス様にそっくりね……」  
「ハハハハッ、お前もそう思うか!」

アリ様の農園では、奥方様と子供たちが私を温かく迎えてくれた。  
つい嫉妬してしまうほどにいい家族で、6歳の長男は人懐っこく

て歪みなかった。

しばらくアリ様のお手伝い兼、ベビーシッターとしてそこで暮らした。

それから試験の日が近付いてきて、その前々日にアリ様が商談ついでに、私をシャンバラへ送り出してくれることになった。

「小さなユリウスよ、もし試験に落ちたらここに帰ってくるといい。俺たちには、子供たちの面倒を見てくれる人が必要だ」

「いつでも大歓迎です。アデルくん、いつてらっしゃい……」

私を破滅させた男が学校を作った。

私はこれからその学校の試験を受ける。

どん底から這い上がり、アリ様の夢を叶えるために。

何かしら分野1つだけでいい。

アリ様の代わりに、私はユリウス・カサエルに勝つ。  
それが私たちの夢だ。



・プロローグ ある青年の転機 2 / 2 (後書き)

書籍1巻、発売中です。

皆様のおかげで今もジワ売れしてくれています。  
心から皆様に感謝いたします。ありがとうございます。

・学校を作ろう、建材編 - サボるー? -

・高慢知己

国境を越えた学校を作ろうというこの計画。いざ始まってみれば、異様なフットワークで物事が次々と決まっていた。

そこにはもちろん、前々から都市長が計画と根回しを進めていたことが大きな理由としてある。

だが皮肉なことに、あの『白の棺強奪事件』もまた、シャンバラ議会や有力者の説得に繋がった。

この計画には多額の国家予算を投入することになる。

それも一回限りではなく、毎年の予算も必要だ。

なぜ他国の子供を、シャンバラの金で教育してやらなければならぬのだと、計画に反対する議員も多かった。

それがひっくり返った。

金で外国との融和が出来るものなら安いものだ、と、反対議員たちは手のひらを返した。

もちろん融和を拒むタカ派もいたが派閥としては小勢力だ。

そうだった連中は、ずいぶんと昔の都市長とシエラハの父との対決で、シャンバラを出て行って久しかった。

そうして予算が確保されたのならば、その次は用地の確保だ。

土地の確保そのものは今のシャンバラからすればなんの苦労もな

い。

開拓不能だった砂の大地は、今は潤いのある樹海へと変わっている。

その樹海をちょっとだけ伐り拓いて、平坦に均しささえすればそれでよかった。

都市長曰く

『各オアシスから労働者を集めることになりました。これで各地の雇用問題が改善し、経済と消費も刺激されます。我々政治家からすれば、あの森は天からの賜り物ですよ』

『木を伐ることに、もう少し抵抗があるのかと思っていたぞ』

『いくらなんでも多過ぎます』

『俺もそう思う』

これは誰でも参加出来る単純な労働、公共事業にもなつて都合がいいそうだ。

材木を輸出するのによし、建材として利用するのもよし。樹海は偉大なる女王からの賜り物だった。

そういったわけで用地の確保、整地は都市長たち政治家と労働者に任せよう。

俺には俺しか出来ないサポートをするべきだ。

そこで真っ先に思いついたのは『建材』だ。

新しい学校を作るのだから、新しい建材を発明したいと思いついた。

コンクル。あの万能建材だけで校舎を建てるのは、少し芸やおもむきがないのではないかと。

せつかくなのだから、何か面白いことをしたかった。

「邪魔だ……」

「へへ……嬉しいくせに……」

エルフとエルフを警戒する人々との融和がかかった巨大プロジェクトは、今1人のエルフにより著しい妨害の憂き目に遭っていた。

具体的に言うと、研究者は膝の上に乗られ、細い両手を首の後ろに回され、非常に窮屈でうっとうしい状態で、錬金術の希書を読むことになっていた。

「それは時と場合による。今は集中させ　痛っ?!」

「つねってみていい……?」

「それはやる前に聞いてくれ……」

「だって、ヤダって言われるし……」

「当たり前だ……」

犯人の名は語るまでもないだろう。

美しい銀髪と褐色の肌、挑発的な瞳の持ち主が、本に目を落とす

こちらを見つめている。飽きたりはしないそうだった。

「何か思い付いた……？　新しい学校……ユリウスのひらめきにか  
かっている……」

「ならなぜ邪魔をする……」

「へへ……。だって、そんなに嫌そうじゃないし……」

メープルはふいに俺の手を取って、自分に触れさせた。  
こっちは突然のことで跳ね上がりそうだった……。

「ひらめいた……？」

「ひらめくかつ！」

手を引っ込めて、本に戻し、ページをめくる。

メープルは何も言わず、ただこちらを見つめてやっと静かにして  
くれた。

しばらくすると考えがまとまった。

本を閉じてテーブルにどかすと、何を勘違いしたのか胸に飛び込  
んできた。

いや、ただ障害物がなくなって、衝動任せにそうしただけなのか  
もしれないが……。

「大地の結晶、今安いんだっけ……？」

「ああ、シャンバラの緑化をする必要がなくなったからな」

「じゃ……今まで通りのが、材料費、安いんじゃない……？」

「それを言われると研究をする意味がなくなる」

大地の結晶は価値が暴落した。  
このシャンバラが世界中から買い占めていたからだ。

砂漠を森に戻すには、大地の結晶が根幹素材として必要不可欠だった。

その需要が突然消えた。

今では大地の結晶の価値は、ピークと比較すると1割にまで落ちたと言われている。

「ねえ、ユリウス……やっぱり、明日にしない……？」  
「しない」

「子供たちも、姉さんも、しばらく帰ってこないよ……？」  
「らしいな」

「だから……一緒に水浴びしない……？」  
「し……しない……」

イスから立ち上がると、メープルを胸に張り付けたまま歩くことになった。

つにスケベ心に負けそうになりながらも、俺は気を強く持って錬金釜の前に立った。

「サボろー？」

「サボらない。離れる、材料ごと釜に押し込むぞ」

「そんなこと言わないで、サボろ……？一緒に、洗いつこしよ……？」

「なっ、何を言い出す……っ。こ、子供たちに聞かれたらどうする……っ！」

メーブルがやっと降りてくれた。

何を考えているのかわからないが、釜の向かいに移って静かな微笑みを浮かべた。

「そういえば……ウルドにね。『お父さんの邪魔をしちゃダメだよ、お母さん』って言われてたんだっ……」

「思い出すのがだいぶ遅かったようだな……」

「何すればいい……？」

「材料を取ってこよう。直感任せで頼む」

「え、レシピは……？」

「今回はレシピなしだ。先人のレシピを頼らずに、新しいコンセプトで新しい建材を作る」

「それ、楽しそう……！」

一緒に行けばいいのにメーブルが跳ねるように倉庫へと駆けていった。

遅れて俺も倉庫に入って、建材になるように堅実な素材をかき集めた。

一足先に釜へ戻り、汲みおきの水を半分、釜へと流し込んだ。試作品を大量に作ってもしょうがなかった。

「持ってきた……！」

「ん、意外と普通の物だな……」

メイプルが持ってきたのはモンスターの骨や、トレントの枝、ただの綿花や砂だった。

「大量生産するなら、自ずと材料も限られる……」

「おお、お前にしては考えているな……」

「どこでも穫れる物を材料にした方が、絶対楽……」

「それもそうだ」

メイプルの杖を借りて、俺たちは1つ1つ試作品を作っていた。



・学校を作ろう、建材編 - サボるー? - (後書き)

遅くなって申し訳ありません。

向こうの話は安定供給できそうです。

ありふれた材料を使った試行錯誤は、数々の失敗作を世に繰り出した。

石ころと魔物の骨を混ぜ合わせた失敗作は、キューブ型の石ころ数個に変わった。

これをコンクリルのように小さな壺に入れて、水と砂を加えてみた。しかしこの試作品は上手く固まってくれなかった。

見た目は石のようであるのに、感触はプルプルとしたゼリーのよ  
うな物体になった。

強く握ると崩れ、だがすぐに1つの塊に戻ってゆく不気味な物に  
なってしまった。

「石ころゼリー……この感触、なんかエロいね……。姉さんのおっ  
ぱ　ムゲウツ?!」  
「没だ、没!」

メーブルの口を塞いで黙らせて、別の壺に試作品2号と水と砂を  
加えた。  
混ぜ合わせるとみるみるうちに溶けてゆき　これも結局固まっ  
てくれなかった。

材料はトレントの枝に庭先の土だ。

「あ、逃げた……」

「逃げる?　何が逃げ　な、ないっ?!」

「だから、逃げた……。足生えて、逃げてった……」

目を離すと壺は空っぽだった。

辺りを見回しても姿は影も見えない。土を隠すなら土の中、見分けなどてんで付かなかった。

「俺をからかっているわけじゃないんだな……？」

「命、宿ったのかも……」

「だとしたら、生きている建材なんて論外だ。次だ、次いくぞ」

空っぽになった壺に、試作品3と他の材料を混ぜ合わせた。

「おっ、これは……。む……？」

「あ……」

「?!」

直接確認したわけではないが、試作品3号は壺ごと爆発した。突破にメーブルを抱き寄せ、転移魔法で世界の裏側に引きずり込まなければ、これは大怪我どころでは済まなかっただろう。

「一步も動くなよ、動くとも元の世界に戻れなくなるかもしれん」

「これが、ユリウスとサンディが見ている世界……？」

「ああ」

「ちよっと綺麗だけど、何も無い……」

「戻るぞ」

「つまり……ここなら、いつでもいけないこと、し放題、ってこと……？」

「シエラハのところに戻れなくなってもいいなら付き合おう」

表側の世界に戻ると、足下には爆散した壺と、黒こげになった何かが散乱していた。

俺たちは掃除をしてから、新しい試作品作りに工房へと戻った。

・

また2人で釜を囲み、モンスター素材と水を基礎にして魔力をかけた。

「いつそ諦めて、素直に大地の結晶を使うか……」

「そだね……。ほいっと……」

「あつこらっ?!」

ところがメーブルの白く小柄な手が釜の上にあり、それが輝く何かを釜の中に落下させていた。

水かさがないのでカチンと硬い音がして、水に融ける氷のように水晶が溶けていった。

「名付けて、クリスタル・コンクル。この方針でいこ……？」

「お前は水晶で学校を作らせるつもりか？」

「ダメ……？」

「成金趣味だ」

「綺麗だと思う……。森に囲まれた水晶の学び屋……絶対、ビビるよ、留学生……。フフ……」

メーブルの発想なんて顔を見るだけでわかった。

『そうだったら、きっと楽しい』とうちの小悪魔が笑っていた。

「まあ……諸国にシャンバラの権威を見せつけることにはなるな」

それに水晶ならばこのシャンバラにも合う。

悪くない気がしてきて、俺は想像を具体的に膨らませて錬金釜に魔力をかけた。

だが水晶だけでは強度が不安だ。

俺が死んだ後の時代まで、学舎が残るようにしたい。

「あ、結局入れた……」

「強度が欲しい。さっきみたいなトロトロの半固形の水晶なんて困るだろ」

「私はアリだと思う……」

「用途は？」

「ん……。じゃ、エッチなことに……」

「なら絶対作らん！」

気が散りそうになった頭を振り払って、俺はイメージをさらに膨らませた。

水晶の学校とまでは言わない。やはりそれでは強度や実用性に乏

しい。

それでもコンクリルのように加工が容易な建材を提供すれば、それを使って建築家が創意工夫してくれるはずだ。

俺は臨界に達した錬金釜の底を杖で突いて、試作品4号を完成させた。

「わああ……っ?!」

それは水晶のように光を屈折させる透き通ったキューブだった。メープルは釜からそれを取り出して、キューブ越しにこちらをのぞき込んだ。

これほど澄んだ水晶は今まで見たことがない。これ単体で見ても、他の宝石に大いに勝る魅力と個性を持っていた。

「砂漠が消えて……シャンバラのガラス工芸……なくなっちゃった……」  
「樹海化で珪砂が取れなくなってしまったからな」

「でも、今日からはユリウスが水晶ガラスを作ってくれる……。職人さん、また仕事に就けるかも……」

「そうか……それは都市長が喜びそうな話だ。実験してみよう!」

「うんっ、いいっ、ユリウスッ!」

キューブを小脇に、メープルは俺の手を引いて外へと連れ出した。それからトトロ口の石が収まった壺を回収した。

「これ、どうするか……」

「姉さんをお願いして、クッションにしてもらおう」

「クッション、だと……?」

「うん、名付けて、姉さんのおつ　あてつ　」

突っ込みを入れて黙らせた。

元が石ということもあつて重量感がある。だがこの素材は非常にやわらかい。

それを布で包めば、確かに個性あるクッションになりそうだった。

「お前、本題を忘れていないか?」

「あ……。待ってて、ちょっと中身、置いてくる!」

メーブルは重い壺を抱えて、工房ではなく家の方に入っていった。正体不明の謎の物体が家に一時保管されることになる。足をひっかけたら、痛くはないが確実に足を取られて転倒するだろうな。

「はあっはあっ……ただいま、ユリウス……ッ」

「お帰り。砂と水も持ってきた、さあ始めよう」

壺に砂を入れ、水晶のキューブを乗せ、その上から水を加えた。薄黄色い砂の色合いが消え、壺の中の物体はさながら水晶のように澄み渡っていった。

「試作に夢中で、用途を考えていなかったな。これ、どうするか……」

「……」  
「ここは、私に任せて……」

性質はあのコンクリに非常に近いように見える。

メーブルは壺の中の輝く液体水晶を、素手でこね始めた。

「ユリウス、台持ってきて……」

「すぐに持ってこよう」

都合のいい台などそこいらに転がっているはずもない。

そこで俺は工房に戻ると、テーブルの上の物を全部下ろして、転移魔法で自分ごと転移させた。

「これでいいか？」

「ユリウス、最高……！ 壺の中身、このテーブルの上にぶちまけて……！」

言われた通りにすると、水晶コンクリは緩いパン生地ほどの硬さになっていた。

メーブルはそれをちぎっては丸い玉にしていた。

「少し時間かかる……。休んでていいよ……」

「上手くいきそうか？」

「うんっ、これ、楽しい……！ キラキラの粘土……！」

都市長に見せる物だ、造形が良いに越したことはない。

俺はオアシスの方に向かい、今日は誰もいなのでそこで身体を清めることにした。



「ユリウス、出来たよ……」

「やっとか。ずいぶんと熱中　な、何をやっているっ？！」

メーブルの静かな声に振り返ると、そこに湖水へと下半身を沈めたメーブルがいた。

「へへへ……なんか、ドキドキするね……」

「服を着ろっ、服を……っ！」

「水浴び、なのに……？」

「お、俺はもう上がる……っ！」

「ユリウスは英雄……でも、ヘタレ……」

「どつとでも言え……っつ」

オアシスをメーブルに譲り、俺は全裸で水の上を走った。

岸辺で水を払っていると、砂漠の国が恋しくなった。

あの熱い日差しと乾いた風が水分を飛ばしてくれていたのに、森となった今ではタオルが欲しかった。

服に袖を通して工房の前に戻ると、そこにメーブルの手並みがあった。

それは水晶のネコヒト象だった。

よく透き通るその性質から造形を掴みにくかったが、見ると細部の毛のうねりまで作り込んである。

触れてみると非常に硬い。

余った水晶コンクリがボールのようにいくつか丸められていたの  
で、俺はそれを叩きつけたり、炎の魔法にかけてみた。

「火にも強く、強度も完璧。水晶の外見と、コンクリの強度をかね  
揃えているな……」

今すぐ都市長をここに呼んでもいいが、こうなると他の宝石で試  
したくなってきた。

俺は工房に戻り、今度は水晶ではなくトパーズを主材料にして、  
同じことが出来ないかと確かめた。

結果は、金色に透けるキューブの完成だ。

「ふう、凄く、気持ちよかった……」

「お帰り、メイプル。これを見て　んなつ、ふつ、服を着ろつ  
つ……」

「着てるよ……？ タオル……」

「タオルは服じゃない……っ！」

「フフ……エッチ……」

メイプルはタオルの下の方をピラピラさせて人を挑発した。  
だがそれは金色のキューブに気付くまでだ。

メイプルはそれに飛び付き、嬉しそうにまるで少女みたいな歓声  
を上げた。

「綺麗つ、他の宝石でも試してくれたのっ!？」

「ああ、水晶で出来るなら他……ほ、ほ、ほか……ふ、服を……服を着てくれ……」

「あ、ごめ……。つい、興奮して……へへへ」

一瞬だけ、一瞬だけのぞき見ると、メープルは黄金のキューブに目を輝かせていた。

そんな姿を見てみると、昔のことを少し思い出す。

初めてこのシャンバラに来たあの日、迷宮で宝石を手に入れたときも彼女はこうだった。

宝石を夕日に掲げて夢中になっていた。

「都市長を呼んでくる。それまでに服を頼む……」  
「おけ……」

気持ちを落ち着かせるのもかねて徒歩で、俺は道を歩いてすぐこの市長邸を訪ねた。

いつもならアポなしで飛び込むところを、段取りを踏んで彼の書斎を訪ねた。

「水晶とトパーズですか……?」

「ああ、こればかりは見た方が早い」

「すみませんがユリウスさん、少しお待ちいただけますか? 都市長には早急に終わらせなければならぬ書類仕事があります」

そう言うので俺は仕事を手伝った。

何、彼の代わりに書類を判断して、サインを入れる書類とそうでない書類を仕分けするだけのことだった。

終わるとスレイ義兄さんも一緒に連れて、工房の前に彼らを案内した。

「強度はコンクリルにやや劣ると思う。だが装飾性が極めて高い」  
「強度のある水晶ということですか？ それは素晴らしい」

「ああ。屈折率の方は本物の宝石が勝るが、砂の分だけこっちはかさ増しされている。ほら、アレだ。あのネコヒト像を」

後ろ歩きで都市長とスレイ義兄さんに解説して歩いた。  
そろそろ見える頃だったので正面を向き、彼方のネコヒト像を指さす。

……いや、そこまではよかった。  
金色に透ける何かが、庭先にそそり立っていた……。

「ユリウスさん、あれはネコヒトにしては丸くありませんか？」

「あ、ああ……」

「気のせいか、どこかで見覚えがあるような気がします……」

「ええ、実は私も。どこかで見た造形なのですが……」

さらに近付くとその正体が白日の物となった。

あれは、例のアレだ……。

「遅かったね、ユリウス……フッフ……」

「お、お前……お前な……。お前……これだけは止めてくれって散々言っただろっつ？！」

「帰ってくるの遅いから……つい……？」

それはあのオーク像だった……。  
メーブルがユリウス像だと言い張って聞かないオーク像の、トパ  
ーズタイプだった……。

オーク像は日の高い夕日に照らされてきらびやかに輝いていた。  
でっぷりとしたビール腹が光を複雑に反射させて、まるで子供で  
も宿っているかのように腹だけ目立って光っていた……。

「なんてことすんだよっ、お前はーっっ?!」

「学校に飾る……？　これが、シャンバラの英雄ユリウスの……真  
の姿ですって……」

「ダメだ、捨ててきなさい……」

「お願い……一生のお願い……。飾らせて……？」

都市長とスレイ義兄さんは何も見なかったことにして、ネコヒト  
像を見て談笑をしていた。

俺は困り果てた嫁さんに頭を抱えて、強度からして破壊不能のユ  
リウス像に深いため息を吐いた……。

「ダメ……？」

「ダメだ……。こんな見たら、子供が泣いて逃げ出すぞ……」

「真の姿なのに……」

「俺はこんなじゃない……っ!」

「でも、ベッドの上ではこんな感じ……」

「捨ててきなさい……」

俺も何も見なかったことにして、都市長たちとの打ち合わせに入  
った……。

・

## 後日談

・ 小さな転移魔法使い

「なーに、メープルママ？」

「うん、ごめんね……こんなところに連れ出して……」

メープルママに招かれて、ライトボールの明かりに照らされなが  
ら森に入った。

「全然いいよ。それで相談って何……？」

「うん、あのね……ユリウス……」

「えっ、パパに嫌われたの……？」

「違う。ユリウスは、私と姉さんに今もぞっこん……」

「はああっ、よかったあ……。え、じゃあ何？」

「まずはこれ……見て……」

もう1人の転移魔法使いの使い手に、私はユリウス像7号トパー  
ズタイプを見せた。

いくつものライトボールで照らして、過去最高傑作を紹介した。

「あっ、これって庭にあるオークの像よね！ あははっ、お腹が前より出てるうーっ！」

「リアルを反映させてみました……」

「リアル……？ それで、これの感想を言えばいいの？ すっごく面白いっ、さすがメーブルママ！」

「へへ……サンディなら、わかってくれると思ってた……。それでね、サンディ……」

「うんうんっ、なーにっ!？」

「この我が家の守護神、またの名を………像7号トパーズタイプを……」

「いいねっ、それっ！ これ見たらみんなビックリすると思うっ、うちも賛成！」

メーブルママは凄く面白い人だ。

うちは我が家の守護神を、新しい学園の庭園にこれを運ぶ約束をした！

だってそうしたらみんな驚くし、学校も守ってもらえそうだから、このオーク像に！

「ありがと、サンディ……」

「いえいえっ、楽しみだね、学校！」

「私は、サンディの制服姿が楽しみ……」

「え……わ、私も通うの……!？」

「外の世界を知るチャンス。通った方がいい……」

パパが作った学校に通う。そういう発想はなかった……。でも考えてみたらそれって楽しそう！

この像が現れて、みんなが驚く姿も隣で見れる！ それって絶対楽しい！

うちはメープルママと約束を交わして、抜け出した家に帰った。

「えー……っつ？！ アレってパパだったのーっつ？！」

「そうだけど、何か……？」

「パパはあんなじゃないよーっつ？！」

メープルママは本当に、本当に独特のセンスを持った人だった……。



・学校を作ろう、建材編 - 再誕 - (後書き)

2022/09/03

申し訳ありません。投稿ストップでした。

本日の夜に書いて明日00時に投稿いたします。

1日だけお休みを下さい。

・錬金術師ユリウスの失敗 - カマカマカマ - (前書き)

投稿が1日遅れとなっており、申し訳ありません。

あの粘土のように固まる宝石は、都市長により「クレイジエム」と名付けられた。

俺は都市長の要請に従ってサファイアにアメジスト、瑠璃や孔雀石などをベースにした試作品を作り、彼はツワイクより招いた建築家にそれを見せた。

するとその建築家は都市長の目の前で、図面を破り捨てたそうだ。

彼は強度の高いコンクリートと鉄鋼を基礎建材にして、その上に瑠璃か孔雀石、あるいは翡翠をベースにしたクレイジエムを塗り込むプランを提案した。

それならば強度も十分だ。

俺と都市長も提案に賛成し、彼が図面を引き直すのを待つことになった。

ちなみになぜツワイク人が学校の建築家として招聘されたかという点、単純に祖国ツワイクの建築学が他国より発達していたからだ。

広大な土地を持つシャンバラと、都に国家の機能を集中させているツワイクでは、建築学発展の土壌そのものに大きな差があった。

俺は今でもツワイク人だ。同胞の活躍が誇らしかった。

「あはやだ、最近渋くなったんじゃない……んふっ  
「出たな、妖怪……」

「んもつつ、やって来たのはそっちでしょ。いらっしやい、ユリウスちゃん」

「こちらへどうぞ。ウィスキーでいいですか？」

いつもの冒険者ギルドに立ち寄ると、カマとカマに左右を囲まれた。

シャンバラのカマと、俺がかつてスカウトしてしまったツワイクのカマだ……。

左右から手を引かれてカウンター席に座らされ、本当にウィスキーの水割りを出された……。

ツワイク出身の彼には、手の甲に無言で手を置かれた……。

「んふふ……それで、本日のご注文は？」

「若返りの薬を試作する」

「まあっ、素敵いつっ！！ また挑戦するのね、ユリウスちゃんっ  
「！！」

「素晴らしい……！ ぜひ私たちもあやかりたいものですね！」

カマとカマは鼻息を鳴らして身を乗り出してきた。

若返り。それは古今東西の錬金術師が試みて、探求の果てに挫折を味わったであろう到達不能の夢だ。

それでも俺はこの薬を探求したい。

色々な意味で、このままでは俺の身体がもたないからだ……。

メモを差し出すとカマとカマは大股になって、ギルドの大倉庫へと飛び込んでいった。

「あれ、受付のカーマスさんは？」

「カーマス……？ ああ、あの男、そういえばそんな名前だったな」

カーマスの代わりにカウンターの内側に回り、やってきた若いエルフの男の前にバインダーを置いた。

「迷宮に行くのか？」

「よ、よく見たら貴方ッ、ユリウス様じゃないですかっ?!」

「そういうアンタはここで見かけない顔だな。もしかして新人か？」

「え、ええ……」

「なら無難な土の迷宮……。いや、あそこにはルインートルがいたか……」

「あの、ユリウス様……カーマスさんたちは……？」

「俺のわがままに付き合ってもらっている。お、今ならマク湖の樹の迷宮が空いているな、懐かしい……」

戸惑う彼と言葉を交わしながら、迷宮参加の手続きをカマの代わりに進めた。

後は受付嬢(?)のサインさえ入れればOKというところで、ようやくくた。

ようやくカマとカマが大倉庫から戻ってきた。

「あらやだごめんなさいっ、あたしたちったらっつい」

「若返れるものなら、若返りたいものですね……。あの頃はヒゲの手入れもいらなくて、それに何より……。男の子がみんな私にちやほやしてくれました……」

「わかるわぁーっ　それに下の毛もつるつる」

「新人がドン引きしてるから、そのへんにしとけ……」

バインダーを突きつけると、カーマスはさらっと見ただけでサインを入れた。

「あの水涸れももう近づきたくない……。懐かしいわ……」  
「そうだな」

だがあそこにはもう近づきたくない……。

あそこには、水浴びをする美しいシエラ八像と、それをのぞく愚か者の像が存在する……。

「それで、探しに行った品物は……？」

「少し見つからない物があったわ。手配しておくから、ユリウスちゃんは今先に帰ってなさい」

「そうか……。ならすまん、手間をかける」

「いいえ、それがあれば我々も若返って……。フッフ、フッフッフ……」

「ええっ、若い子を誘惑し放題ねっ　……あたしね、若い頃は、マジで美少女だったんだからっ」

「カーマス、アンタは今でも十分すぎるくらいのイケメンだ……」  
クラクラしてきたので新人冒険者を捨てて、俺は逃げるように自宅へと引き返した。  
道中、なぜ新人の彼は俺の顔を知っていたのだろうと疑問に思った。

しばらく考え、ふと導き出された答えは　　マク湖だった。

マク湖は今や観光名所だ。

そこで人々は錬金術師ユリウスが、名声の割に親しみがいのあるスケベ男だと知るのだろう……。

メーブルに黙って、メギドジエムを使ってでも破壊しておけばよかった……。

一日の業務を終えて、オアシスで水を浴びると夕方前だった。結局、カーマスは材料集めに難航しているのか、一向にここを訪ねてこなかった。

工房に戻ると、革張りの大きな本を4つ抱えてまたオアシスの前に戻った。

その木陰に腰掛けて、付箋しておいた部分を1つずつ読み返した。

あのカーマスが言う通り、この試みは何度も失敗している。失敗して当たり前前の実験だった。

「ここにいたのね、ユリウスちゃん」

「遅かったな、カマカマ野郎」

「あらやだっ、俺の子猫ちゃんキネイって呼んでつて言ってるでしょ」

「厄介な調達に付き合わせて悪かった。それで、材料は」

「全て手配できたわ。んふふ、これで若い子を食い放題なのね……  
ジュルリッ……」

「そろそろ冗談に聞こえなくなってきたんだが……」

カーマスは屈強なその腕で大型の台車を牽いてきた。俺はその台車に本を載せて、工房へと彼を招いた。

「あら、シエラハゾちゃんたちは？」

「伝えていない」



「やだ、どうしてー？」

「ぬか喜びさせたくないからだ」

カーマスは明日の納品分までまとめて持ってきていた。

彼がうちの倉庫に荷物を納品している間、俺は実験の準備を進めた。

彼らと金のやり取りをしたことは1度もない。

全て都市長と国家が肩代わりしてくれた。

ツワイクのポーション工場に出向させられていた頃から見ると、ここは楽園だった。

「どう、上手くイキそう………？」

「気が散るから妙なイントネーションで喋るな………っ」

「んふっ、ユリウスちゃんが純情でかわいいからいけないのよ………」

「実力で退去させてやってもいいんだぞ。………それ、入れてくれ」

渦巻き模様の奇妙な種、逆巻き草の種をカーマスが釜に流し込んだ。

これは不思議な草で、植えると急成長して花を咲かす。

種子が実り始めるとみるみると縮んでゆき、種だけを残して枯れる。

「これ、手に入れるの大変だったのよ。キャラバン隊に連絡網を送って、世界中から探させたんだから」

「おかげでこうして実験が出来る。冒険者とキャラバン隊は偉大な」

「ねえ、ユリウスちゃん、若くなってどうするの？」

「どうもしない」

「嘘嘘っ、オホホホッ！ あたしわかってるんだから、んふふふっ、好きねえ〜」

「メーブル以上に気が散る助手がこの世にいるとは大発見だ……。」

「ただ長生きしたいんだ。爺さんになって、あいつらに世話をされながら暮らすなんて嫌だ」

「つまり……俺の嫁LOVEってことね」

手元が狂って釜の中の液体が跳ねた。

苦勞して手配してくれたことには感謝するが、心境的には今すぐコイツをここから追い出したい……。

「カマカマ野郎……失敗したらアンタの責任だぞ」

「ウフフツ、そんなに恨みがましい目で見ないのっ さ、次はナニを挿入<sup>いれ</sup>れたらいいのかしらん……？」

「おい、俺の家で下ネタは止めろ……っ！」

「あらごめんなさい、それマジ正論ね……」

ヤツに最後の材料、ウルオイ茸を入れさせた。

「ヌルツとした立派なキノコだったわね……」

無視して錬金釜を仕上げた。  
軽い破裂音と共に釜から蒸気が上がり、若返り薬・試作17号が完成した。

「あら、意外にたくさん出来たわね」

「まあいいだろう。効果が強すぎても困る物だ」

釜の底には乳白色をした楕円形の薬が20粒ほどあった。  
それを小瓶に移そうとしてみると、まるであのエリクサーのようにぶにぶにとしていた。

少し、嫌な予感がした。

「はいはいはーいつ、あたし実験体になるわっ」

「人を実験台にする趣味はない、俺が飲む」

「やああんつつ、ずるいわよ、そんなのっ！ ユリウスちゃんだけ若い子食いまくるつもりじゃないでしょうねっ！？」

「やかましい」

小瓶に移して、小さなぶにぶにを摘まんで口に運んだ。

そんな材料は使っていないのに、まるで練乳のような濃厚な甘みだった。

「ねえ、大丈夫……？」

「何かあったらウルドがどうにかしてくれる」

「いい子よね、ウルドちゃん……。将来男に騙されたりしないか、あたし心配……」

「珍しく気が合うな。ん……」

視界が揺れたかと思っただが、揺れていたのは俺の身体の方だった。

「ユリウスちゃんっ？！」

長身の俺の身体を、カーマスが片手で軽々と抱き支えた。

「気が、遠く……。ウルド、を……」

実験は失敗だ。俺はたくましいイケメンのカマに抱かれて、堪えようとしたがそのまま意識を失っていた。

「大変っ、人工呼吸が必要かしら……。っ！？ ああでもっ、ユリウスちゃん是人様の旦那様……。シエラハゾちゃんたちに断りなく唇を奪うなんて出来ないわっ！」

何か上擦った声や荒い呼吸が聞こえたが、鈍った脳は言葉や音の意味を理解しなかった。

・錬金術師ユリウスの失敗 - 俺はユリウスだ…… -

目覚めるとそこにシエラハがいた。

俺に膝枕をしてくれて、ぼやける視界の向こうで俺を見下ろしていた。

「大丈夫……？ もう、心配させないで……」

「すまん……」

その昔、このやさしさに俺はコロツとやられた。

人間不信になりかけていた当時の俺にとって、包み隠さないメーブルと、慈愛にあふれるシエラハの姿はただそれだけで魅力的だった。

「んふふふっ」

ただ ぼやける視界の向こうの、シエラハだと思っていた物体が、野太い声で笑いながら俺の額に手を置いた。

その手のひらはやわらかだったが、明らかに、女性の手の大きさではなかった……。

目の焦点が戻ると、慈愛の微笑みを浮かべながら、俺に膝枕をするカマカマ野郎の姿がそこにあった！

「うわっ、お、お前っ?! え……っ?!」

俺は二重に驚くことになった。

自分の声が妙に甲高くなっていたからだ。

「ええ、そうでしょうとも。あたしもビックリしたわあ。まさか、ユリウスちゃんがいいたいけな青少年になっちゃうだなんて」

「嘘、その子……本当にユリウスなの……？」

「だから言ったじゃない、自分で自分の若返りの薬を試したって」

カマの膝から脱出し、立ち上がると視点ががんだかのように低い。

シエラハは目を丸くしていて、いつもよりもずっと大きく感じられた。

「成功……いや、だが……この身体は……」

「んふふっ、若返り過ぎたみたいね。ほら触ってごらんさい、お肌スベスベよあ〜っ」

顔面を抱えると、スベスベの感触に驚いて手を引っ込めることになった。

シエラハはまだ俺を疑っている。不思議そうに首を傾げてこちらに寄ってきた。

「ユリウスなの……？」

「だからそう言っている」

あの日、メープルと買った白と金系のローブが証拠だ。

どこもかしこもぶかぶかで、視線を落とすと胸元がはだけていたので急ぎ整え直した。

「顔はユリウスにそっくりね……」

「信じてくれ、俺だ！」

「それは無理な話じゃないかしら。だって、まるで別人のようにかわいいんだものっ、んもぅっ」

カマカマ野郎が人を抱きすくめようとしてきたので、蹴りで迎撃した。

「あぁんっ……美少年に蹴られたわぁ……最高っ」

「シエラハ、まずはこの子供の教育によくはない変質者にお帰りいただくっ」

「ユリウスのまねをしているの？ ふふっ、似ているわ」

「本物だと言っている！」

カーマスの目当ては若返り薬だ。

言われてそろそろお暇しようとしても考えたのか、瓶から薬を摘まんでいた。

「待て、それを使うのは俺の経過を見届けてからにしろ！」

「んふふふっ、若返って誰を誘惑しようかしらん……っ」

カーマスは鍛え上げたたくましいその身体で、あまりに力強いスキップで飛ぶように工房から消えていった。

「坊や、家はどこかしら？」

シエラハは俺が俺であることを信じてくれなかった。

俺より大きな身体で俺の手を引いて、工房から居間の方に俺を連れて行った。

「クッキーは好き？」

「まあまあ好きだ……」

「そう、ユリウスみたいなことを言うのね」

説明を諦めて俺は自分の考えに没頭した。

実験は成功だ。成功したのだが、家族が俺を信じてくれない。

このまま経過を観察し、自分がどうなるか様子を見よう。

魔力は落ちていないようだが、このままでは身体が小さ過ぎる。

「ただいま、ママ！ あれ、その子誰？」

「父の隠し子かー？」

「えっつ？！ お、お父さんは、う、浮気なんてしないよ……た、たぶん……」

ウルド、なぜそこでドモる……。

「父はモテるからのう。で、その小僧、母は誰じゃ？」

「俺はお前の父親ユリウスだ」

「ワハハハハツツ、面白いやつじゃのう！ 気に入ったっ、ワシの弟分にしてやるっ！ ……本当に弟かもしれんがなっ！」

大人の身体だった頃は大らかに受け入れられたが、小さくなると我が娘ながらムカつくやつだ……。

「サンディ、俺だ、ユリウスだ……。お前なら俺を信じてくれるだろ……？」

「パパが若返るなんて悪夢よ！ うちのパパはこんなお肌つるつる



のシヨタっ子じゃないわ!」

「ウ、ウルド……」

「お父さん、なの……?」

ウルドだけが信じてくれた……。

だがローブの肩の部分がまたずれると、悲鳴を上げて顔をおおった。

「まっ、父でも隠し子でもどっちでもよかろうっ!」

「うちのには隠し子の方が面白そうで好きかも! 弟、欲しかったんだあ!」

実験は今のところ大成功だ……。

早急な説得を諦めた俺は、シエラハが運んできた茶を口にして、シエラハが作ったクッキーをかじった。

「どう? ママのクッキー美味しいでしょ?」

「ああ、いつもより美味しい」

子供の身体になると、甘さに対する感覚が鋭くなるのだろうか。

いつも美味しいクッキーは、少しずつ大切に食べたくなるほどに絶品だった。

ついおやつを食べ過ぎてしまった。

無心にクッキーをむさぼり、妙に渋く感じる茶を飲み干していた。

これではますます信じてもらえなくなる。

だというのに我を忘れるほどにそのクッキーは美味しかった。

「あら、もういいの?」

「ごちそうさま。少しカーマスの様子を見てくる」

だがこのままでは後が怖い。

元に戻った後に、互いに気まずい思いをすることになる。俺は席を立った。

「1人は危ないわ。待ってて、厨房を片付けたらあたしと一緒に行きましょ、ユーリ」

だというのにシエラハはたおやかな微笑みを浮かべて、パタパタと厨房へと駆けていった。子供の視点になったからか、ますます彼女の各部位が大きく感じられた。

「あーっ、ユーリったらママのおっぱい見てたーっ!」

「なっ……!?! いや、み、見てなどいないぞっ!」

「うむ、ワシもわかる……。その気落ち、よくわかるのじゃ……。幼き頃は、あれに触り放題じゃった……」

スクールズに肩へと手を置かれた。

父親という地位を失うだけで、まさかここまで立場が変わるとは思わなかった。

「いつもの、お父さんだと思うけど……」

「わはははっ、父は母たちに見とれまくりじゃからのう！」

「じゃあ、本当にパパが小さくなっちゃったの……？ ううん、あり得ない！ うちのパパはこんなにちっちゃくないわ！」

思い出した。少年にとって女の子という存在が、かしましくて付き合い難い隣人であったことを。

「身長が伸び始めたのは宮廷魔術師アルヴィンスの世話になってからだ。ヤツに見出されなければ、俺はちんちくりんのままだったのかもな」

オアシスの前で待つと伝えて、俺はブカブカのトーガを引きずって我が家を出た。

子供たちは後を追ってはこなかった。

トーガを脱ぎ捨てて、もう1度裸になってまた水を浴びた。

肌はまるで少女のようになめらかでムダ毛一つなかった。

「君、何をしているの？ ここはユリウス様のご自宅です、水を浴びるなら、場所を変えてくれませんか？」

「なんだ、ラウリイか」

立場や視点の高さが変わると、何もかもが様変わりする。

いつだって敬愛の目を向けてくれるラウリイが、とがめるような目でこちらを見ていた。

「え……っ、あ、あれ……？　もしかして、ユリウス、様……？」  
「ああそうだ、俺はユリウスだ。それにしてもよくわかったな」

「わっっ！！　は、はだ、はだ……っ、わああーっっ？！！」  
「おっと失礼……。悪い、貧相な姿を見せたな」

ラウリイはうちの娘たちよりずっと乙女心があるな……。  
彼は顔を覆って木陰に隠れてしまった。

「ユリウス様……。ど、どうして、そんなっ、お姿……。に……」  
「若返ってみた。どうやらこれは成功かもしれん」

「お、驚きました……。でも、こんなにかわいらしくなるなんて……。  
あつ、僕としたことがとんだ失礼を……！」  
「その礼儀正しさをサンディたちに教えてやってくれ……。あいつら  
ときたら、もう……」

「いえ、サンディちゃんたちはとてもやさしいですよ。ちょっと、  
元気すぎるだけで……」  
「そうだな……。大人の目から見ると、そうだ」

肌の水滴を飛ばしてからラウリイに寄ると、また悲鳴を上げられた。  
同性相手にそんな反応をしなくてもいいと思うのだが。

「あ、シエラハゾ様……。お、お邪魔しています……」  
「ヒヤッッ……。ちょっと、ユーリッ、なんて格好しているのよっ！  
？」

そこにシエラハが合流した。

彼女はこの貧相な胸板を見て、なんでかわからないが悲鳴を上げて、ラウリイと一緒にになって顔を覆っていた。

「な、何してるのよ……っ。服っ、持ってきたから着替えてっ！」  
「気が利くな」

子供服を受け取って袖を通した。

気のせいかサンデイに昔着せていた物に似ているような気がするが、あえて深くは考えないでおこう。

「いってらっしゃい、ユリウス様、シエラハゾ様」

「ああ、だが用件はいいのか？」

「はい、注文票を届けにきただけなので。工房に置いておきますね」  
「わざわざ来てくれたのに悪いな」

「いえ、凄く良いものを見れ　じゃなくてっ、えとっ、失礼しますっ……！」

ラウリイが工房に駆けて行くのを見送ると、シエラハと俺はギルドのある行政区の方に歩き出した。

「シエラハ」

「なーに、ユーリ？」

「なぜ、人の手を握る……？」

「馬車にぶつかったら危ないわ」

俺は落ち着きのない子供に見えるようだ……。  
大きなシエラハと手を繋いで、俺たちは市長邸の前を横切っ  
った。

「ふふふ、どうしたの？」

「俺はユリウスだ」

「あらそう。あなたがそう言うなら、そうなのかもしれないわね」

俺たちは普段、人前で手も握らない。互いにそういうことが出来る人格をしていないからだ。

こんな機会でもなければ、こうして手を繋ぐことはないだろう。

「ユーリ、どうしてそんなにあたしを見るの？」

「こうして子供の視線になってみると……」

「あら、またユリウスごっこ？」

「いつも以上に魅力的に見える……。何もかもが大きく見えるせいか、頼りがいを感じて……。母性を、感じるというのだろうか？」

シエラハは言葉の意味を飲み込みかねて不思議そうに少年を見ていた。

その顔が温かい微笑みに変わり、機嫌の良い鼻歌に変わっていった。

「ふふふっ、お上手ね。こう見えてあたし、とっても強いなのよ？」

「知っている。コンクル製のユリウス像デビルタイプの指に、ヒビを入れるほどの怪力だ」

俺たちしか知らないであろう懐かしい思い出話だ。  
その言葉を受けて、シエラハはやっとわかつてくれたのか急に立ち止まった。

「ユリウス……？ あなた、本当にユリウスなの……？」  
「何度もそう言っているだろう。そうだ、お前の旦那のユリウスだ。……ん、おい、何をする？」

シエラハの左右の手が少年の頬を包み込んだ。  
彼女が確かめるように顔をのぞき込むと、大きな乳房が視線に入った。かなり強烈だった……。

「ユリウスッ、あなたユリウスじゃないっ！！」

そのことに気付くと、シエラハは俺たちの距離が近すぎることに気付いた。さっきまで手を握ってくれていたのに、距離を取られると寂しかった。

「あつ……？！」

「冒険者ギルドまでもうちよつとだ、さあ行こう」

だからこつちからシエラハの手を握った。  
彼女を引っ張って歩き出した。普段はしないことだが、若いこの身体なら出来た。

「ユリウス……どうして、さっきからそんなにあたしを見るの……？」

「それは気のせいだ」

「そ、そうかしら……？」

「そうだ」

恥ずかしそうにするシエラハの横顔を盗み見ながら歩き、俺たちはギルドの扉を開いた。



・錬金術師ユリウスの失敗 - 何も問題なかった -

「あらんつ、いらっしやい、ユリウスちゃん」

「ようこそギルドへ。何か入り用ですか？」

訪ねてみると、何も問題なかった。

むしろかつてよりはなはだに著しく改善しているとも言える。

美形の受付嬢（ ）×2と触れ合える愉快的なギルドから、可憐な受付嬢（ ）×2が迎えてくれる華やかなギルドになっていたのだから。

「その口調、間違いなくカーマスだな……」

「凄い効果ね……。カーマスさんが、こんなにかわいらしくなるなんて……！ あ、あたしっいたらごめんなさい……」

どこで手配したのやら、2人はひらひらとした少女趣味なドレスを身にまとっていた。

その姿は若返りの薬により少年に戻っており、少女と呼んでも差し支えのない可憐さを持ち合わせていた。

「いいわあ、最高よ、ユリウスちゃん……っ みんなの視線が、あつ、ああつ、快感よ……っ」

「長年の夢が叶いました。ありがとうございます、ユリウス様……」

カーマスのあのクネクネとした動きも、少女がするならばありだ。だがその中身は長身瘦躯のカマカマ野郎だと思えば返すと、難しい

顔をする他になかった。

「1つ聞くが、あの薬をいくつ飲んだらその姿になったんだ？」

「1つよ」

「たった1つでギルドのアイドルになれました」

それは妙だ。

聞いた話によるとカーマスは既に100歳を超えているという。

ならば俺の5、6倍を飲まなければあの姿にはならないのではな  
いか？

「なあに、ユリウスちゃん……スカートの下が気になる……？」

「もちろん、生えていますよ」

シエラハが嫌な顔していた。

いつでも耳を塞げるように腕を上げていた。

「妙だな、それは計算が合わない……」

「そうね、でもいいじゃない！ スベスベのお肌、この高い声、  
毛だつてちよろつとしかないのよっ、オホホホホッ！！」

間違いない。可憐な美少女に見えるが、コイツはあの自然に下品  
なカーマスだ……。

「あら、何かご不満？」

「ああ……。カーマス、アンタは下品過ぎる……」

それに、俺の方は1本も生えていなかった。不公平だ。

しかしこの薬、単純に人を若返らせるのではないのかもしれない。

俺が欲しいのは若い姿ではなく、老いを止めることだ。

「帰る。何か症状が出たら報告してくれ」

シエラハの手を引いてギルドを出た。

俺は出た後も彼女の手を握ったまま離さなかった。

「ありがとう、あたし、どう受け答えたらいいかわからなくて……」

「俺もだ。あいつらとまともにやり取りをしていたら、いずれ発狂する自信がある」

「あ、そうだわ。せっかくだからバザー・オアシスに寄っていきましょ。たまには2人で夕飯の買い物したいわ」

「喜んで付き合おう」

「ふふっ、よかった」

しかしいかな、これは。

この身体だと、ますますシエラハに魅力を感じてクラクラとする……。

肩、脚、胸、手のひら、なにもかもがビッグサイズだ……。これは、危険だ。危険な薬だ……。

「薬の作用さえ把握していれば……」

「していれば？」

「同じ薬をお前に盛っていた。この小さく低い視点からお前を見てみると、刺激が強すぎる……」

「あら、あたしを子供にする気？」

「俺と同じ苦勞を味わってくれ。何もかもが大きく見えて、驚きに満ちている」

バザーオアシスにはネコヒト族が多い。

大きくなったネコヒト族は普段よりかなり強そうに見えた。

俺たちは夕飯の材料を買って、かましい子供たちが待つ我が家へと引き返していった。

夜。ベッドであぐらをかいて本を読みあさっていると、そこに客がきた。

メーブルとグラフだった。

「本当にこの美少年がユリウスなのか……！？」

「うん……毛も生えてない、ツルツルボディだったって、姉さんが……」

いぶかしむ少年を2人の美姫が左右から囲んだ。

特にグラフの様子がおかしい。彼女は先ほど帰ってきたばかりで、少し汗の匂いがした。

「ユリウスユリウス……」

「なんだ？」

「合法シヨタになった気分は、ど……？」

「最悪だ」

「これは、クツ……アリ、だな……」

白百合グライオフエンと呼ばれていた女に、ふいに下顎を撫でられた。

「私は元の方がいいけど……。これはこれで、ま、別腹でアリかも……」

「可憐だ……中身がユリウスだなんて、信じられない……」

俺をユリウスと見分けてくれたことは嬉しい。

だが彼女たちから、歪んだ何かを感じるのは気のせいだろうか……。

「ユリウスユリウス……踊って？」

「お前はいつだって唐突だな……。断る」

「フフフ……僕は決めたよ。今夜はここに泊まる」

女つたらしの女に膝を撫でられた。

激しく困惑する俺を見てメープルも同じことをした。コイツはそういうやつだった。

「白百合のグライオフエン」

「なんだい、かわいい子猫ちゃん……」

「たとえ相手が伴侶あっても、そういうことには合意が必要だと思うのだが……？」

「すまない。だが僕の気持ちも理解してくれ。僕は本来、ユリウスのようなたくましい男は好みではない」

「それは旦那に言う言葉か……？」  
「だけど君への好意は本物だ……。そんな僕の前に、僕の好みの姿をした君が現れたら、フフフッ、いったいどうなると思うかい……？」

今のように興奮するだろうか。  
ピツタリとメープルとグラフに左右を囲まれて、俺はベッドへと仰向けに寝そべった。

「ああ、ユリウス……もし僕のことを思うなら、ずっとその姿でいてくれ……」  
「姉さんも、なんだかんだ……気に入ってた……。オネシヨタ、尊い……」

俺は彼女たちの前ではたくましい俺でいたい。  
だが、今夜の俺は合法だった。

「なんか、犯罪臭い……。けどそれがゾクゾク……」  
「ありがとう、ユリウス……。僕のために合法になってくれて……」

酷い夜になった。とだけ、断っておこう。  
姿が変わると人の態度も変わる。俺はその晩、特にグラフの意外な側面に激しく振り回された。

錬金術師として必要とされる物を必要なだけ作った。

ツワイクから招聘した建築家は名をコルトンといい、無口だがとにかく真面目で注文の多い男だった。

やれ塗り固められる大理石が欲しいだの、やっぱり御影石がいいだの、もう少し速乾性を上げて欲しいだの、彼の要望を叶えながら事業を支えるのは骨が折れた。

だが彼の凶面は、修正を入れるたびにより魅力的になっていった。

この学校を見た入学生たちが腰を抜かすかと思うと、この芸術家肌の建築家にいくらでも付き合う気になれた。

転移門の復旧と、公共事業となる学校作りがシャンバラに小さなバブルをもたらし、ポジションの注文の方も日増しに増えていた。

こうして一ヶ月ほどをそれなりに忙しなく過ごす、計画が次の段階へとステップアップした。

伐採により用地が確保され、平坦に均された土地が形成され、ようやく学校の土台工事が始まった。

「分棟………?」

そんな折、都市長からある提案をされた。

「はい、本校舎の完成はまだまだ先となるでしょう。そこで平行させて、小さな校舎を建てさせることになりました」

「気が早くないか？ それにそれだと、工事がやかましくて勉強どころではないだろう」

「新たに整地を行い、距離を取った場所に建てます」

「そうか、羽振りのいいことだ。……だが、どうせアンタのことだから、何か他に狙いがあるのかもしれないな」

「はい、これは試験運行と、デモンストレーションです。まずは小さな校舎、少数の生徒から始めて、学校が無事に機能していることを示すのです」

「なるほど、現実的な考えだと思う。だが、生徒も教師もまだ集まっていないんだらう？」

生徒や教師にも予定があるだろう。どうやって急ぎ集める？

そう言葉にするのを止めて、俺は別のことを考えた。

「もちろん、貴方にも教師役として時折参加していただきます。伝説の男に師事出来るのですから、生徒たちも喜びましょう」

「それはそのつもりだが、こちらももう1つ思い付いた」

「はて、なんでしょう。……おや、エヴァンス、すみませんね、こんな早い時間に……」

時刻はもう人々が寝静まった深夜だった。

そこにフリドオアシスのエヴァンスがやってきて、寝間着姿でオレンジピールで匂い付けをした水を出してくれた。

「あまり無理をされると明日に響きますよ、お爺さん」

「ほっほっほっ、いい娘を拾ったものです。ご心配下さりありがとうございます」



このシャムシエル都市長という男は、スナック菓子感覚で人を養子に迎える。

よくよく考えれば、たった一人の兄を失い天涯孤独となつてたエヴァンスに、この男が手を差し伸べないはずがなかった。

「お義姉さんの言う通りだ。ほどほどにした方がいい」  
「ユリウス様……その呼び方は、恐れ多くてても慣れません……」

サンデイたちは大喜びしている。  
もちろん、うちの女つたらし代表ことグラフもだ。

一応、俺はアイツの旦那のはずなんだが……  
アイツは俺の前でもエヴァンスに色目を使っていた。

「いいではないですか、私たちは家族なのですから」  
「そうだ、遠慮はいらぬ。それに……グラフのやつがいつも迷惑をかけているからな……」

「い、いえっ、グライオフエン様はやさしい方ですっ！ 私、あの方に救われました……」

エヴァンスが頬を赤く染めた。  
深くは追求しまい。女を3人も困っておいて、全員独占したいだなんて言ったら罰が当たる。

「ところでなんの話でしたか。確か、何かを思い付いたそうですね……？」

「ああ、といつてもただの思い付きかな。問題なければまた、外

交官の肩書きを俺にくれ」

「ほう、国外に行かれるのですか？」

「ふふ、サンデイちゃんが喜びますね……」

「いや、アイツを連れてゆくとは言っていないんだが……。まあ、だが、くっついて来たがるだろうな……」

しかしそれも悪くないかもしれない。

むしろ俺よりもサンデイの方が、若い相手からすると近しい存在だろう。

「国外に生徒のスカウトに行きたい。発掘されていない才能を探り出し、チャンスを与えてやりたい。昔、アルヴィンスが俺を宮廷魔術師にしてくれたようにだ」

都市長はこの提案を喜んだ。

エヴァンスも手のひらを重ねて、とてもいい考えだと笑ってくれた。

「生徒だけと言わず、教師の発掘を下さつても構いませんよ」

「そっちはどうだろうな、そんなに顔は広くない」

こうしてあつという間に話がまとまり、もう夜も遅いのでお開きにして市長邸を離れた。

エヴァンスは杖を突いて、オアシスの前まで俺を送ってくれた。

「最近、とても身体の調子がいいんです……。ユリウス様と皆さんのおかげです……」

「そうか。だが身体が辛い日は、いつでも休んでくれ」

「いえ、お医者様とユリウス様が作って下さったお薬のお陰で、昔よりずっと元気なくらいなんですよ」

彼女の病は治っていない。

生まれた時から身体が弱かったそうさ。

そんな彼女に医者と相談して、かつてランスタ王女に処方したあの薬を薄めて与えた。

ベッドに寝た切りだったあまりに弱々しい姫君を、豪傑に変えたあの薬だ。

身体がよるけるのでまだ杖を使っているが、エヴァンスは人と同じ早さで歩けるようになった。

少しの間ならば杖に頼らずとも立っていられるようになった。

「サンディちゃんを旅行に連れて行ってあげて下さい」

「いや、それは……。どうして誰も彼も、うちのサンディを甘やかすんだらうな……」

「置いていったら、サンディちゃん一人で旅行に行ってしまうですよ？」

「む……。それは、一理ある……」

「一緒に出かけるのが当たり前になれば、サンディちゃんも家出旅行なんてしないと思います」

「確かに、そうかもしれない……。明日、アイツに声をかけてみよう……」

「おやすみなさい、ユリウス様。幸せな生活をありがとう……」

「おやすみ、エヴァンス。これからもフォローを頼む」

「はい」

エヴァンスと別れて、夜のオアシス沿いを歩いて自宅に帰宅した。寝室にはシエラ八がいた。起こしてしまったようで、彼女は俺のベッドから身をもたげた。

「お帰りなさい、ユリウス」

「あ、ああ……」

シャンバラが森になって、ベッドに毛布を足すことになった。その毛布から、むき出しの肩が露出していた。

大きな膨らみが毛布の内側から自己主張をされていて、俺は魅惑的なそれに目を奪われながらも、一步後ずさった。

「ユリウス」

「な、なんだ……？」

「こっちに来て」

毛布の下には何もなかった。何も。

その後は色々あって、すっかり遅い就寝になってしまっていた。

・第一期生 ・ エヴァンスのその後 ・ (後書き)

あらためてとなりますが、7/29より第一巻が発売中です。  
もうそろそろ返本が始まってもおかしくない頃です。  
どうか続巻のために本作を応援して下さい。

翌朝、朝食の席でスカウトの旅に出る予定だと家族に報告した。

「うち、行くっ！！」

「ま、そうなるよね……サンディだし……」

皆がメーブルの言葉に賛同した。

誰もサンディのわがままに反対することはなかった。

ユリウスはサンディ以上に危ういやつだと、家族にそう思われて  
いるからだ。

「父、かわいい子を頼むのじゃ。ブ男は要らぬ」

「その通りだとも。かわいい女の子以外はスカウトしてこなくてい  
いよ」

この親あつてこの娘ありだった。

グラフとスクールズは本当によく似た親子だった。

「ユリウス、サンディを連れて行ってあげて」

「お願いパッ、いい子にするからお願ひ！」

「お父さん……ダメって言っても、サンディはついて行くとと思う……」

みんな同じことを言うんだな。

小さなシャンバラのお姫様を、俺は厳しい態度で見つめ返した。

「わかった、頼りにさせてもらおう」

「やったあーっ！！ それでどこに行くのっ！？」

「そこは都市長の手腕次第だな。以前のように外交官として国を訪れ、許しを得て修学の誘いを行う」

「そう！ 説得ならうち任せで！」

「お前の行動力や社交性の高さは認めるが……。相手の機嫌を損ねないようにな？」

サンディを連れて行くことに決まった。

朝食を済ませた後は、一緒に都市長のところを訪ねて段取りを詰めた。

出発が1週間後に決まり、それまでは錬金術師として品物の納品に努めることになった。

その間に正規の外交官が各国で根回しを行い、段取りを整えてくれるという。

どこの国におもむくかも、政治家である都市長の判断に委ねられた。

融和にも繋がり、才能を持つ若者も支援できる。

これは最高の計画だと思いはじめていたが、俺の計算違いは家族だった……。

「やあ、ユリウス。君の本当の正妻はもしかしたら、シヤムシエル様なのかもしれないな」

「待ってました……うずうず……ハスハス……」

「ユリウス、子供たちはもう寝たわ。もう、寝たの……」

その晩も夜遅くまで、都市長と打ち合わせを行うことになった。

同盟国から半分、それ以外の国から半分、試験による除いて、合計で10人ほど集めたいということになった。

だが昨日のように寝室に戻ると、俺は三步後ずさった。

「ユリウス、君は僕の好みではないが……居ないと居ないで、とても寂しい……」

「ごめんなさい、しばらく帰ってこないと思うと、少しだけわがままを言いたくなるじゃない……」

「姉さんは、昨日お楽しみだったけどね……」

「そ、それは……っ。だ、だって……仲間外れは嫌だもの……」

「そうだ、いつそあの薬を飲ませるといっつのはどうだい？」

「あ、これ……？」

そうそう気付かれることのない棚の奥に封印したはずなのに、メーブルがシレッとあの若返り薬（半日）を取り出すと、俺は冗談抜きで凍り付いた。

「ユリウス、君は贅沢にも3人の女を妻にしたんだ。その意味がわかるよね、わからないはずがない」

「あーんして、ユリウス……」

「ユリウス、飲んでくれても、いいのよ……？」



俺が転移魔法で行方をくらます前に、メーブルがハイドで忍び寄って俺の背後に張り付いた。彼女を連れて転移は出来ない。俺はこの場から逃げられない。

「さあ、飲むんだ、ユリウス！」

「ふへへ……たまりませんな、へへへ……」

「あ、あたし……小さなユーリも、嫌いじゃないわ……」

その日もまた俺は逃げられなかった。

就寝は空がうつすらと青みがかつた早朝になったとだけ、断つておじつ……。

一週間が過ぎ去り、その間に日程と訪問国が決まった。

最初の訪問国は同盟国にあたるオドだ。

シエラハに見送られ、俺とサンディは輸出品と共に転移門に入った。

奔流に流されるような感覚が走り、少しそれに堪えるとオド王国に到着だ。

「ごぶさたしております、錬金術師ユリウス様、ウエルサンディ様」

「ついこの前も会っただろう」

「オド王様、きつと喜ぶね！ 王様、パパのことが大好きだもん！」

オド王の保護者と言っても差し支えのない、あの女官が俺たちを迎えてくれた。

オド王は相変わらず、この女性に精神的に依存しているようだ。

「そろそろ陛下のお世継ぎが欲しいところなのですが……。難しいものです」

彼女に導かれてオドの転移門を出ると、馬車に乗せられて城に運ばれた。

サンディは馬車から首を出して、外の景色に目を輝かせていた。

外から見たら、きっとメチャクチャに目立っていただろう。

城に運ばれ、玉座の間に案内された。

「あ、ユリウスお兄ちゃん……！」

「王が玉座から離れてどうする……」

玉座の間に入るなり、オド王は玉座から飛び上がって目の間に駆けてきた。

彼に自信をもたらすあの魔剣は、玉座の隣に立てかけっぱなしだった。

「いつかは剣を貸してくれてありがとう。おかげでシャンバラが救われた」

「光栄です、ユリウスお兄ちゃん……。貴方が望むなら、オドの全てをお兄ちゃんに……」

「さらっと国を売ろうとしないでくれ……。それで今回の訪問だが……」

「あ……。少し、待って下さいね……」

オド王が内股走りで玉座に戻った。

そしてビクビクと、闇のオーラ（のようなもの）を放つ魔剣を手  
に取った。

「見苦しいところをお見せしました、ユリウス兄上。ウエルサンデ  
イお嬢様もお元気そうで何より」

「あ、ああ……」

「先月ぶりね、王様！ 相変わらずその剣を持つとカッコイイのね  
！」

「ええ、お父上のくれたこの剣が僕を変えてくれたのです」

オド王が剣を振ると、闇のオーラが流れ、残像がとなって剣が何  
本も見えた。

「オドは王家のみならず、多くの人材が討ち死にしました。兄上の  
提案、オドが拒む理由はありません、選りすぐりの若者をご用意し  
ました」

「それだと俺の仕事が終わってしまうのだが……まあいいか」

その選りすぐりとやらをオド王が謁見の間に招き入れた。

「タラと申します。ユリウス様はご存じないかもしれませんが、多  
少の因縁がございます」

まずその口から女の声が出てきたことに驚いた。

あまりに髪を短く切りそろえているので、美形の青年かと勝手に  
こちらが勘違いしていた。

「ビックリした……タラさん、女の子だったのね！」

「貴女がサンディ様ですか」

「ええ、よろしくね、タラさん！」

サンディが握手を求めると、彼女は少しの間を置いてからそれに応じた。

王の手前仕方なしといった様子だった。

「許してやって下さい、兄上。タラからすれば、兄上は父の仇なのです」

「ユリウス様、私の父はあの戦争でツイクの魔術師に暗殺されました。最近、それがユリウス様だとやっと判明したのです」

サンディは戸惑った。

パパがそんなことするはずないと、否定を求めてこちらに振り返った。

「たぶん俺だ。すまん」

「戦場で起きたことです、気にしていません。勉学の機会を下さる嬉しく思います」

どこまで本音がわからない口調の硬さだった。

だが剣の腕はよさそうだ。わざわざ選別されただけあって魔法の素養も感じられる。

「こちらこそ参加してくれて嬉しい。父を殺めたことは  
「気にしていません」

『これ、メチャクチャ根に持つてる反応だよ！』と、サンデイが  
言いたそうだった。

「借りは返す。タラ、どうかシャンバラに来てくれ」

「……その子も、第一期に加わるのですか？」

「うち？ うん、そうだよ、よろしくね！」

二度目の握手をタラは不機嫌そうに受け入れた。

「それでは兄上！ 今日……オ、オドに……滞在、してくれる約  
束ですよ……？」

いきなり魔剣を手放されるとビックリする。

胸を張っていた王は、また気弱な内股の猫背に戻った。

俺たちは今日1日、オドに滞在して人材発掘をする予定だ。

「ああ、光る人材を探して町を歩く。一番大きな学校に入る許可も  
くれ」

「えと……うち、今日はタラと過ごすわ！ うちはいいから、王様  
と一緒に出かけさせてあげて！」

「な……っっ」

サンデイの行動にタラが絶句した。

オド王はすっかりその気だ。

2人で町を歩けるとウキウキとしていた。

「行きましょ、タラ！ だってうちら、もうじきクラスメイトになるんだもの。仲良くしてね！」

「で、ですが、わ、私は……」

「仇の娘は嫌い……？」

「……いや、アンタは無関係。あたいらの親たちが、勝手に殺し合っただけさね」

最初はどことなく不安だったが、タラとサンディは上手くいきそ  
うだった。

俺の方は、まだ内心恨まれているのかもしれないが……。

オドの若者はチャンスに貪欲だった。

シャンバラで教育を受けたいと、積極的に入学を望んでくれた。

だが急なことだ。

これといって飛び抜けた人材も見あたらなかったので、本校舎の  
完成を待つてもらったことになった。

ちなみにオド王は、俺の右手を握って離さなかった。

幸せいっぱいの笑顔で、この思わぬ余暇を喜んでいてくれた。

「僕もお兄ちゃんの生徒になりたい……」

「暇が出来たらシャンバラに来てくれ、いくらでも付き合おう」

「ありがとう、ユリウスお兄ちゃん……」

王という立場上、彼は長く国を離れることは出来ない。  
学校の生徒になるなんて叶わぬ願いだっただ。

こうして一日が終わり、楽しい一晩の後に翌朝となった。  
転移門の前までオド王と女官に見送られた。

次は滞在先はファルクだった。

あの豪快極まりない王と会話しなければならぬと思うと、少し  
気が重かった……。

転移が完了し、ファルク王と謁見した。

あの大臣は相変わらず、豪快なファルク王に振り回されているよ  
うだった。

「おおつ、酒の友よつ、ユリアスツッ！！ 再会を祝って一杯飲も  
うぜー！！」

「それは仕事を終わらせてからにする。久しぶりだ、ファルク王」

「ああ？ 飲みに来たんだろ？ おおつ、サンディツ、もう  
酒は飲めるのかっ！？」

「パパが頭抱えてる……」

「陛下、ユリウス様は学校の入学者を探しにこられたと、今朝あれほど説明したではありませんか……」

「あ？ そうだったか？ ……おおっ、あれかつ、酒に滅法強え若造を取り揃えておいたぜっ！」

この国、大丈夫か……。

頭を抱えて言葉を失っていると、謁見の間に青年が入ってきた。

「叔父貴、コイツがユリウスか！？」

「おうよ、コイツがああのモンスターカクテルと杜氏様よ！」

「パパは錬金術師よ」

ファルク王推薦の人材は、紹介者を考えればまあ納得の人柄だった。

王を叔父貴と呼ぶのだから王族なのだろう。ファルク王に似て毛深い身体をしていた。

「お、かわいいじゃん！ 誰？」

「あたしはウエルサンディ、パパの娘。貴方の同級生よ」

「叔父貴……俺、やっぱ学校行くわーっ！」

「ガハハハッ、ユリアスが怖ええ〜目でテメエを見てるぜ、モゲミア！」

「睨んでなどいない。だが娘に何かしたら、それは外交問題に発展するだろう」

モゲミアはまだ若いのおっさんくさい顔をしている。  
そこが俺は不安だった。



「パパッ、おとなげないことしないで！」

モゲミアにはこれといった魔力を感じなかった。  
だとすると、学があるのか……？ いやそうは見えない。

「娘さんかわいいつすね、お義父さん！」

「モゲミア」

「なんですか、お義父さん？」

「その気になれば俺は、お前を次元の挟間に蹴り落とすことも出来る。もし、サンディに何かしたら、二度とこの世界に戻れないようにしてやる」

威圧にモゲミアの表情から余裕の笑みが消えた。

俺は本気だった。

「ガハハハハッ、ユリアスをマジギレさせるなんて、オメエやるじゃねえかよ！！ まっ、一杯やろうぜ！！」

「アンタも人の話を聞け……」

ファルク王国での成果はボチボチだった。

国家そのものが体育会系というか、勉強や魔法とはほど遠い環境にあった。

夜になると城中を巻き込んだバカ騒ぎの大宴会が始まって、どこもかしこも酔っぱらいだらけになった。

俺とサンディはほどほどにして、与えられた客室で眠った。

翌朝、ファルク王もモゲミアも見送りにこなかった。

探すと玉座にひっくり返っていびきを立てていたので、俺たちは書き置きだけ残して城を出た。

「申し訳ありません、本当に申し訳ありません……」

「城の連中、みんな馬鹿なんです！」

転移門で仕事をしていたまともな連中は、俺たちに平謝りをしてくれた。

ファルク王国はシラフが酔っぱらいに振り回される国だった。

「いや、まあほどほどに楽しかったよ」

「ええ、この国のみんな、明るくてうちは大好きよ！ モゲミアもお猿さんみたいでかわいいもの」

「猿……？ 好みじゃないのか……？」

「え、全然」

安心した。

俺たちは次なる目的地ゲフェン王国に転移した。

ゲフェンで俺たちを待っていたのは、贅を尽くした宴会だった。  
向こうの転移門に着くなり王の宮殿に招かれ、王と王にひれ伏す  
女官たちを目の当たりにした。

「おお、ウエルサンディ姫！ ようこそ朕の宮殿に参った！」

「お久しぶり、王様！ あれつきり頭ツルツルのままなのね！」

女官たちは震え上がった。

ゲフェン王は俺たちに対しては大らかだが、この国においては絶  
対的な君主だ。

「うむ、おかげさまで快適なものだ。水虫も治り、女官たちもユリ  
ウス殿に感謝しておる」

「さすがうちのパパでしょ！」

「うむうむ、ところでウエルサンディ姫や……」

「何、もったいぶって？」

「ますます美しくなったな。よければ朕の妻に」

「ゲフェン王。国際問題にしたいなら、その言葉の続きを言つとい  
い」

「ワハハハハッ、冗談だよ、ユリウス殿！」

「そうですか。ではここは一旦冗談ということしておきましょう」

この国にサンディを連れて来たくなかった。

頭ツルツルの脂ぎったオヤジは、うちのサンディにまだ色目を使っていた。

「おお、それよりもちこう、ちこう寄れ！ サンディとユリウス殿のために、最高の料理と酒を用意した！」

「パパ、がんばってね」

「ファルクのバカ騒ぎの次がこれか……」

遠慮したいがそうもいかない。

俺たちはゲフェン王の足下に用意された席に座った。

ここでは座布団と呼ばれるクッションがイス代わりだった。

「これほど近くに人を寄せて会食するのは、はて何年ぶりだろうか」

「あら、そうなの？」

「あまり近付けさせると、暗殺されてしまうからな！ ハハハハッ

！」

「ふふっ、王様の冗談は独特ね！」

きつとただの体験談だろう……。

俺たちはゲフェン料理に手を付けた。主賓はこの通りだが、料理の方は驚きの美味さだった。

エビを使った甘辛い料理や、揚げた肉と野菜を炒めた物、サンディが喜びそうな甘ったるいゼリーもあった。

「おい、ユリウス殿にお酌をしる！」

「いや、勝手にやるからそうするのは……」

「イエーン、何をやっている！ 親の首をはねさせるぞ！」

勘弁してくれ……。

さすがのサンディも今のセリフにはドン引きだった。

俺の隣にイエーンと呼ばれる髪の長い黒髪の少女がやってきて、酒を注ぎながら気の強い目で俺を値踏みした。

「どうぞご自分でご自分の首をはねて下さいまし、お父様」

「へ……っ?!」

「娘なのか……？ たちの悪い冗談だ……」

イエーンと呼ばれたその娘は、この国の王女だった。

癖のないまっすぐな髪を額と腰で切り揃えた、まるで人形のように美しい少女だった。

見たところの年齢は15歳くらいだろうか……？

「イエーンは朕の11番目の子だ。性格は誰に似たのやら苛烈だが、いつか朕の首を取るかもしれない才女とも呼ばれている」

「ご希望なら今すぐ、その首を斬り落として差し上げますわ」

「わ、わああ……」

どういふ親子だ……。

宮廷を震え上がらせる修羅の子は、修羅ということなのか……？

「ウエルサンディ様、父が大変ご迷惑を」

「あ、それは大丈夫。あたし、王様みたいな渋いおじさん好きだから」

「……そ、そう、ですか？ 汚らしい水虫のハゲ男かと存じますが」「この通りの口の悪い娘でな、近くに置いておくと胃がキリキリと痛む……」

それは自業自得だろう。

「彼女をうちの学校に？」

「え、そうなの！？」

「うむ、女に勉学をさせる趣味はないのだが、イエンがどうしてもと言っのでな」

イエンに目を向けた。

彼女は苛烈な態度を解いて表情を消すと、ただ静かに頭をこちらに下げた。

「イエンさん、苦労してるのね……」

「ゲフェンはそういうお国柄ですので。どうかよろしくお願ひします、サンデイ様、ユリウス先生」

「ええ、よろしく！」

「よろしく、イエン。君のような人にチャンスを与えたくて始めたことだ。喜んで歓迎しよう」

ゲフェン王は眉をしかめていた。

『女に余計な知恵を付けさせる後が面倒だ』と言ひ出しそうな様子だった。

「王よ、俺としては彼女のような向上心のある人間を迎えたい。学びたいという女性が他にいたら、こちらに回してくれ」

「わかった、そうしよう」

その後はゲフェン王と並んで酒を交わした。  
それも異例なことのように、女官たちがギョロギョロとした目で俺を見ていた。

サンデイとイエンが席を離れ、さすがに酔いが回ってクラクラとしてくると、王は人払いをさせた。

「ユリウス」

「なんだ、ゲフェン王？」

「もし朕が暗殺されても、次の王と仲良くしてやってくれ」

「それは構わないが……。アンタ、立場が危ういのか？」

「常に危うい。この国はこういう国だ。民は強者に支配されることに慣れ切っている。この国の者は、独裁者に支配されるのが好きなのだ」

「それは泣き言か？」

「ああ……朕はシャンバラが羨ましい。ファルクのような民と王が近い国に憧れる。ユリウス、朕のようにはなるな。どうか上手く、シャンバラを導くのだぞ……」

独裁者が独裁政治にうんざりしているなんて、女官たちには絶対に聞かせられない話だ。

「そのための学校だ。イエン姫のことは任せてくれ」

「ありがとう、ユリウス。仰々しい歓迎しか出来ぬが、またいつでも来てくれ」

「サンディに色目を使うのを止めてくれたらな」

俺たちはゲフェン王国でイエン姫と出会った。

それから翌日、俺たちは次なる目的地に向かった。



シャンバラの北方のそのまた先に、ボレアスと呼ばれる都市国家連合がある。

少し前までは交易でしか縁のない勢力だったが、今回はそこを訪ねることになった。

ボレアスの議長は話のわかる男で、シャンバラとの政治体制の近さもあつてか、今回の計画に理解的だった。すぐに話がまとまり、生徒を推薦してくれた。

彼の推薦状を手に、俺とサンディは都市国家の1つ1つに転移して、有望な生徒をかき集めた。

魔法の才能を持ちながらも、それを発掘する者が現れず持て余している者は、俺たちが想像しているよりもずっと多かった。

ボレアスでの勧誘には3日がかかった。

全13の都市を巡り、有力者と会い、生徒を発掘するのはとにかく時間がかった。

「パパ、本当に行くつもり……？」

「これで和睦出来ればそれに越したことはない」

「そうだけど、そんなの無理よ……」

「そうだな。だが向こうも融和の姿勢を見せるこちらを突っぱねれば、大義名分を失うはずだ」

最後にとある国に寄る。  
そこにはサンディを連れてゆくわけにはいかない。  
何が起こるか分からない敵地だからだ。

「まあいいわ。パパを捕まえられる人なんて、この世にいるわけないんだもの」

「わかつてくれてありがとう。お前のおかげで、生徒候補たちとも付き合やすかった」

「うん、うち楽しみ！ 学校が始まったら、またタラとイエンとまた会えるのね！」

「……お前は、凄いな」

「え、何が？」

「お前は社交性の塊だ。俺にはない才能だ。では、都市長に報告を頼む」

「気を付けてね、パパ……」

胸にしがみつくサンディを抱き締めた。

満足すると彼女は後ろに跳ねて、颯爽と世界の裏側への扉を開いた。

「あ、おみやげ買わなきゃ！」

金貨を握らせてやると、サンディはまたクルリと跳ねてどこかの土産物屋へと去っていった。

俺も彼女とは反対側に扉を開き、地図を片手に目的地を確かめた。

目指すはガルツランド。転移門強奪事件と強襲未遂を引き起こし

た敵国だ。

俺はそのガルツランド人の生徒が欲しい。

あれは躍進するシャンバラが恐ろしいから起きた事件だ。

エルフを過剰に敵視する理由も、直接この目と耳で知りたかった。

・

ガルツランドは広大な国だった。

王都を高台から見下ろすと、それはいくつもの大教会が立ち並ぶ立派な大都市だった。

整然と区画が整備され、水路が走り、城下町に壁はないが軍の砦が八方を守っていた。

宗教色の強い軍国主義。なかなか付き合いがたい特徴だった。

国土は肥沃だ。高台から別の方向を見下ろすと、青々とした広大な麦畑が広がっている。

一目でわかるほどに豊かな国だった。

こんな豊かな国が、なぜエルフをあんなに敵視するのか、高台からはまるでわからなかった。

城下町に下りてみると何か妙だった。

黒い髪と大柄な体躯を持つツウィク人を、人々は排他的な目を向けていた。

「おじさん、なに人？」

「俺か？ 俺はツワイク人だ」

王城を目指して進んでゆくと住宅街に入った。  
少年に声をかけられたので素直に答えると、親が間に飛び込んで来た。

「悪いことは言わないよ、帰りなよ、外人さん！」

「ばいばーい、おじちゃん！」

子供を抱いて去る親を、あっけに取られて見送ることになった。  
また王城を目指して歩いた。

すると今度は兵隊が集まってきて、俺を取り囲んだ。

転移魔法使いに包囲など意味がない。彼らのしたいようにさせた。

「異国の男よ、ここで何をしている？」

「王の城に向かっている。何か問題があるか？」

「見たところ商人には見えないな。どうやって国境を抜けた？」

「俺は魔術師だ。転移魔法を得意としている」

答えると、彼らの中で動揺混じりの反応があった。

「黒髪、痩せた長身、それに転移魔法に、白のトーガ……まさか」

「俺を知っているのか？」

「貴様、シャンバラのユリウスか……？」

「違う。シャンバラに属してはいるが、俺は今でもツワイク人だ」

単身で敵地に入り込んで来たバカに彼らはどよめいた。

剣を下げる者もいれば、敵意を込めてしつかりと身構える者もいた。

「ど、どうしたものでしょうか、隊長……?」

「わ、わからん……。どうした、ものだろうか……」

「ならアンタたちの上司に会わせてくれ。俺はシャンバラの外交官として、ガルツランドとの融和を試みに来た」

手に余る事態に、彼らは俺を取り囲んで付近の軍施設に案内してくれた。

上司の男は髭の立派な紳士で、だが俺の姿を見て目を白黒とさせた。

彼はそのまた上の人間に取り次ぐと言うので、応接間で休ませてもらった。

若い監視が1人付いたが、そいつは俺を怖がらなかった。だから見張りに採用されたんだろう。

「なんだか調子が狂う。なんなんだ、この国は?」

「外から来た人はみんなそう言いますよ」

「なぜこんなに排他的なんだ?」

「なぜと言われても、僕たちにとってはこれが正常な状態ですから、なんとも言いにくいです」

「……なぜこの国はエルフとシャンバラを敵視する?」

「教皇猊下がエルフは敵だと、そうおっしゃられたからです」

教皇がそう言うから、みんながみんなそう信じるのか?

そう言うてやりたくなかったが、今は彼の機嫌を損ねたくない。ま

ともに話をしてくれるただ1人の人間だった。

「その教皇はそんなに慕われているのか？」

「ええそうです。シャンバラとエルフを倒さない限り、人類に未来はないと予言されました」

「……俺はそうは思わない。シャンバラの連中はみんないいやつらだ。あいつらがヒューマンを滅ぼそうとするわけがないだろう」

少し言い過ぎただろうか。見張りの彼は黙った。

「この国では猊下を疑うことは許されません。そこは少し、言葉に気を付けた方が穏便かと」

「気を付けよう。わざわざ助言ありがとうございます」

彼からもう少し情報を得たかった。

だが応接間に貴族風の男がやってきて、冷たい目で俺を見た。

よく見るとその男は、あの戦で俺が脅し上げて撤退させた將軍だった。

「我々をコケにしているのか、ユリウス……」

「今の俺は外交官だ。シャンバラはガルツランドと友好を深めたい」

「寝言を言うな、裏切り者め!!」

「アンタの意見は聞いていない。国王に会わせてくれ」

「お前をこの場で殺してやりたい。お前のせいで私は臆病者扱いだ……」

「それはアンタに責任を擦り付けたやつが悪いんだ」

不機嫌な彼に外へと導かれた。  
馬車に乗るように言われ、素直に乗り込むと馬が進みだした。

ガルツランドは二通りの考えを認めない国だった。

真実は一つであり、エルフとシャンバラは悪である。

そう教皇が言えば否定することなど許されない。ここはそんな国のようだった。

「融和とな。ただそれだけのために、単騎で敵地に乗り込んできた  
と?」

「教皇の力がなぜこんなに強いのか、王への謁見に挑んでみれば謎  
が解けた。」

「この国の王はまだ8歳の少年だった。」

「大きすぎる玉座に彼はちよこんと小さくなって、物珍しいツワイ  
ク人の俺に無垢な瞳で見っていた。」

「そつだ。シャンバラに報復の意図はない。この対立を終わらせ、  
共に栄える道を歩みたい」

「……それはちと、難しいかもしれぬな」

「皇后陛下も教皇には逆らえないと?」

「さてな。だがもし逆らえば、この子がどうなるかもわからぬ……」

「皇后は子の現在を案じる普通の母親だった。」

「教皇というのはどんな男なんだ?」

「口が上手い。人心を掌握することに長け、政治力も高い。悪を作  
り出し、国民をそれと戦わせることに長けている……」

「つまりペテン師か。」

「急成長していったシャンバラとエルフは、格好の攻撃相手だった  
だろう。」



「そういうやつは俺も苦手だ。出来れば会わずに済ませたいものだ」  
「ユリウスといったか……。留学生が欲しいという話ならば、応じてやってもよい」

「本当か？」

「多くの国がそこに生徒を寄越すのだろうか？ それならば大義名分が立つ。シャンバラの魔法技術を盗むチャンスだ」

「ありがとう、皇后陛下」

「いや、これは断れば、ガルツランドが孤立することになる。上手いことを考えたものなの……」

皇后が俺に手招きをした。

俺は彼女に歩み寄り、耳を寄せた。

「こたびの窃盗、侵略行為、シャンバラの民の殺害、誠に申し訳なく思う。だが、教皇には逆らえぬ……すまぬ」

「非公式の発言として、その言葉をシャムシエル都市長に伝えよう」

「頼む……。この国は、あの男のせいでおかしくなっておるのだ……」

今回の遠征、無理をしてやって来てよかった。

ガルツランド王のあどけない容姿を目にすると、これ以上の無理を皇后に頼むのも気が引けた。

「ありがとう。海外留学したい若者に心当たりはあるか？」

「外の世界に憧れる国民は多い。喜んで」

「ヒューマンの裏切り者ユリウス・カサエル!!」

しかしそこに甲高い男の声が響いた。

後ろを振り返れば、金糸に白のトーガの俺よりも仰々しい格好をした男が、兵隊を引き連れて現れていた。

兵は俺を取り囲み、剣を抜き、皇后に悲鳴を上げさせた。

「アンタが教皇か？」

「いかにも、拙僧こそが北方教会の教皇ゼゼルだ。して皇后よ、何を話していたのですかな？」

第一印象は嫌なやつだ。

人の弱みを探り、ことさらに周囲に喧伝する嫌なやつだと感じた。

「留学生の工面を頼んでいた。世界中の若者が集まる学校だ」

「それは素晴らしい……。エルフの間抜けどもが、我々に魔法技術を授けるといふ話、悪くはありませんな」

「そうは聞こえないが？ むしろ、エルフが融和を持ちかけてきたことが気に入らないように見える」

「まあ、ただのまやかしですな。時間稼ぎと言ってもいいでしょう」

「まやかしでもなんでも結構だ。俺たちは争いたくない」

だがコイツは争いを望んでいる。

大きな仮想敵がいてくれた方が、この男からすると都合がいいの  
だろう。

ツイイクにいた頃は、こういった輩を嫌というほど見てきた。

「ユリウス・カサエル、そちらこそ気付いているのであろう……？ エルフの長い寿命、高い魔力、そしてお前たちが生み出した転移門と魔法銃。恐ろしい物を生み出してくれたものだ……」

「そうだな。だが、俺たちの仲間になれば、ガルツランドもその力を手に入れることが出来るぞ」

教皇は首を横に振った。

ことさらに否定するように手を挙げて、周囲の者を扇動した。

「ユリウス、貴様はヒューマンをエルフの奴隷にする気のようにだ！

！」

「そんなつもりはない」

「だが、このまま世界が進めばいずれそうなる！！ 魔力と転移門を持つエルフが勝者となる世界がくる！！ しかしっ、拙僧がそうはさせないっ！！ ヒューマン同士で力を合わせ、シャンバラを滅ぼさなければならぬのだったっ！！」

コイツ、演説を始めたぞ……。

「拙僧はヒューマンを愛している！ 貴方を、貴方たちを愛しているのだ！ だから、拙僧は血の涙を流してエルフどもを滅するとよう！！ 神が！！ ヒューマンの栄光を望んでおられるのだから！！」

安っぽい演説だ。

だがやつの取り巻きどもは感動し、口々に賛同の声を上げた。

エルフを滅ぼし、ヒューマンの時代を作ろうと、狂ったようなことを叫んだ。

「ゼゼル。ヒューマンがエルフの奴隷になるかもしれない未来があること。それは認めよう」

「おお、やっと気付いたか、ユリウス・カサエル！」

「だがだからこそ、俺は魔力を持つ者全てに教育を施したい。魔力を持つ者は、魔力を持たない者を支える義務がある。魔力を持つ者が思い上がることがないように、高い志を広めてみせる」

「それこそ甘い考えだ！」

「どちらかが滅びるまで殺し合うより現実的だ。それにアンタは、ヒューマンの未来なんてどうでもいいんじゃないか？」

「な、なんだとお……っつ！？」

「アンタはエルフを強大な敵に見立てて、権力を拡大したいだけだ。教えが広まれば広まるほど、国を越えた、多くの信者がアンタにひざまずく。内心、笑いが止まらないだろうな」

教皇から反論の言葉はなかった。

代わりに俺を笑い飛ばした。

『見るよあのバカを』と人を指さし、それに周囲の取り巻きも下品な笑いを上げた。

この男に正論は通じない。

どんな方法を使っても相手を言い負かす。こき下ろす。理性のないゲスの道理で生きていた。

「シャンバラはガルツランドからの留学生をいつでも迎え入れる。時代に取り残されなくなかったら、俺たちの学校に有望な若者を送

つてくるといい。怠れば損をするのはそちらだ」

「こういうやつと同じ土俵に立つ気はない。

こちらの意思を伝え、謁見の間を離れた。

「エルフに媚びるのを止める、この裏切り者！！」

そちらこそ争いを焚き付けるのを止める。

そう返しても子供のケンカじみている。

謁見の間を去ると、皇后の使いの者が俺の後を追ってきた。

「ユリウス様、このたびは大変な失礼を……」

「いや、ヤツの言い分にも一理ある」

だが不毛で未来がない。

地獄のような対立の世界を生み出すことになる。

それはあの女王が俺たちに見せてくれた世界だ。

「皇后様からのお言葉です。こちらで優秀な若者をシャンバラに送る。今回はいらぬ争いがおきる前に、どうかお引き取りを、と」

逃げ帰るようで格好が悪かったが、こう言ってくれるとこちらの顔も立つ。

「そうか……。では、苦しい立場の中、ご助力を下さり感謝している。ご子息の幸福な成長を願う。と伝えてくれ」

「ありがとうございます、皇后陛下も喜びます……あっ?!」

「ではな」

小姓に挨拶だけして、世界の裏側に引っ込むと、やっと人心地がつけた。

ああいう輩が大国に巣くい、権力拡大のためにシャンバラを槍玉に挙げている。

ヤツの詭弁が勝つか、俺たちの融和政策が勝つか。  
この学校事業の成功が試金石だった。

特定の種族を滅ぼせば全てが解決する。  
狂気としか思えない思想だった。

・第一期生 ・ 最悪のペテン師 ・ (後書き)

次回更新、もしかしたら遅れるかもしれませんが。

また新作を始めました。

ラーメンでドラゴンをコロツとするお話です。

もしよろしかったら読みに来て下さい。

・メーブル

ユリウスはサンディの才能を危ぶむけれど、私たちはサンディに転移魔法の才能が目覚めてとてもよかったと思っている。

だってユリウスはああいう人。

今でこそ落ち着いてきているけれど、ユリウスは好き好んで危険に飛び込む悪い性質がある。

サンディはそんなユリウスを監視してくれる。

ぶっちゃ私はサンディの才能は、ユリウスを見張るためにあると思っっている。

ユリウスもサンディも、どっちもどっちなところはあるけれど、2人一緒に居てくれたら私たちは安心だ。

今回の遠征もユリウスがサンディと別れて、勝手にガルツランドに乗り込んで行ったと知ったときは、ドン引きだったけれど……。

やっぱりあの人は、危険を冒すことが大好きなんだろうなと思っ  
た。

さてそれはそうと。

話は変わるけれど、今日でユリウスが帰ってきてからだいたい半月が経った。



学校作りは超順調。  
というかもう完成した。

正式な名前も決まって、【森の園ミズガルズ】と呼ばれるようになった。エルフの古い言葉で、『真ん中の国』って意味らしい。

命名者は都市長。名付けられたのは今から2年前。  
計画の草案段階で、既にもう都市長の中でミズガルズは名前を与えられていた。

第一期生の学舎である分棟は、まるで地面から生えてきたかのような超突貫工事で建てられた。

ちよつと前まで整地と土台作りをしていたかと思つたら、たった3日で立派な分棟がそこに生まれていた。

学校設備の納入の方が遙かに手間がかかったと、建築家のおじさんもおかしそうに笑っていた。

『お噂はかねがね……。しかし素晴らしい造形ですなあ』  
『あ、わかる……？』

もちろん、ユリウス像デビルタイプ・フォーム2も分棟の敷地に置かせてもらった。

『まるで動き出して暴れ回りそうな、この躍動感が素晴らしい……。片手間に作った作品とは思えませんぞ……』  
『へへ……』

『いや素晴らしいオーク像だー!!』

建築家さんはわかってくれたけど、わかってくれなかった……。  
ユリウス像だと説明したら、嘘くさい愛想笑いで褒めてくれた……。

とま……。

こうして分棟が完成し、このシャンバラに入学志望者たちが試験に集まってきた。

募集枠は30名。優秀な成績を残せば第一期生に選ばれる。  
それに漏れても、第二期生への内定のチャンスがある。

面接会場でもある森の園ミズガルズ・分棟の前は、ヒューマンの若者たちでいっぱいになった。

みんなが学舎とユリウス像の威風に目を見開いていた。

学者の外装は、翡翠をベースにしたクレイ・ジェムをコンクリの上に塗ったもので、廊下は落ち着きのある瑠璃、教室は大理石をベースにした物使っていた。

窓はサファイアと、私の指輪と同じ無色のコランダムが使われた。中庭は吹き抜けになっていて、雨天でも楽しめるように、ここにもコランダムの屋根が使われていた。

でも、孔雀石を使ったトイレはちょっと趣味が悪いと思う……。  
便器まで赤いと、なんだか不安になる……。

「あ、ども……。楽しんで。私、堅苦しいの、苦手だから……」  
「よ、よろしくお願ひします！」

その日、私は面接官として、小さな用務員室で生徒の面接を行っていた。

なんで都市長が私にこの仕事を振ったのか、最初の生徒を面接するまではイミフだった。

姉さんの方がずっと人当たりがいいし、ユリウスの方がずっと人気がある。

「じゃあ、最初の質問です。今……」

「は、はい……っ」

「どんなパンツ、履いてるの……？」

「……え？ パ、パンツウツツ?!」

でもやってみたらわかった。

こういうのは、ユリウスにも姉さんにも向かない。

姉さんは人当たりがよすぎるし、ユリウスは不器用だ。

グラちゃんは……うん。

女の子ばかり優遇しそうだからNGかな……。

グラちゃんは、男はみんな不採用にしかねない。

あれは、そういう人……。

グラちゃんは、ユリウス以外の男には見向きもしない。

「じゃ、パンツ見せて……?」

「こ、困ります……。でも、脱がなきゃ、不合格ですか……?」

「うーうん、もう、合格だけど?」

「は……はいーっ?！」

今回の私の仕事は、筆記や魔法の試験を通過した子たちの、本質を見抜くこと。

斜め上の質問をして、どんな反応をしたのかメモをして、その子の性質を先生たちのためにまとめること。

これ、結構面白かった。

・面接官メールと入学志望者たち  
・ユリウス像デビルタイ  
プ・フォーム2 - (後書き)

投稿が遅くなりました。

向こう3話分は安定供給できます。

追記

別作品の投稿をこちらにしてみました。

お騒がせしました。

愉快犯さん、ナナシさん、D祐さんご報告ありがとうございました。

皆様、ごめんなさい！！

・面接官メーブルと入学志望者たち - パンツだよね -

「面接官殿、俺をバカしているのか？」

「あ、気に障った……？」

中には問題児になりそうな子もいた。  
私はただ

『あなたは餓死寸前です。パンを食べますか？ それともドーナツを食べますか？』

と、聞いただけなのに。

なんでか、怒り出す子もいた。

「質問になっていない！」

「で、どっち？ パンとドーナツ、どっちが好き？」

「面接官殿っ、面接官の仕事をしてくれっ……！」

「ごめん……。男の子ならパンツじゃなくて、パンツだよ……。パンツ、見る……？」

「見ない……！」

ユリウスをからかうのが生き甲斐の私は、知らず知らずのうちに面接官の才能に目覚めていた。

「おけ、君、合格……」

「んな……っ?!」

どうでもいいことで怒るキレキャラ系と、メモをまとめてその子も合格にした。

よっぼどじゃなきゃ、一人も落とす気なかったし……。

「面接官殿……。もしや俺の性格を分析するために、わざとこんな質問をしたのか……?」

「うっん、からかっただけ……」

面接官の立場を利用して、若者をからかって遊ぶのは凄く楽しい。戸惑ったり、怒ったり、笑ったりしてくれた。

そんな子たちに最後に合格ですって伝えると、みんながビックリしてくれるから最高の遊びだった。

「アデル・ブラウン、魔法学科志望です。どうかよろしくお願いします」

「あれ……?」

でもその中に、凄く面白い子を見つけた。

第一印象はユリウスにそっくり。でもちょっと小柄。

彼は私が怪訝な顔を見ると、落とされると思ったのか不安そうな顔をした。

「な、何か……?」

「へー……」

資料を見ると、そこに大富豪アリの推薦とあった。なんだか経緯がちょっとだけ読めた。

「もしかして……君、アリさんと、ユリウスの、息子……？」  
「……違います」

卑屈そうな顔をしていたのに、その子は途端に不機嫌になった。  
今のセリフ、何かとか問題あったかな……。

「君、ツワイク人……？」

「いえ、私はただの農民です……。いや、少し前までそれ以下の農奴でした……」

彼の卑屈な一面は、その一言だけでよくわかった。  
私も酷い生まれだったから、手を差し伸べてあげたくなくなった。

日陰の人間は、日向の人間がまぶしい。

日向の人間に胸なんて張れない……。

「だ、だけど、私は……っ」

「うん、なーに……？」

「ここなら……人生を変えられると思って……っ、そう思って志望したんです！ 惨めな農奴が、こんな立派な学校に入学しようだなんて、おかしいですか……っ！？」

私は返事ではなく微笑みで返した。

アリさんがこの子を推薦した理由がわかった。

ユリウスにそっくりな子に魔法の才能があつて、どん底から這い上がるうとしている。

それを見てしまったら、助けてあげなきゃ嘘だった。



「私は元々、スラムのこそ泥だったよ……」  
「あ、貴女が……？　そうは見えない……」

「うん……。でも、今はユリウスとシエムシエル都市長の仕事を手  
伝ってる……。ミスガルズは、生まれも育ちも、関係ない……」  
「よかった……」

「こういう子にチャンスを与えたい。  
それが私とユリウスの望みだ。」

私が都市長に、ユリウスがアルヴィンスさんにチャンスを貰った  
ように、今度は私たちがこの子にチャンスをあげる番。

「この子には、やさしくしてあげなきゃ……」。

「あ、面接の仕事、忘れてた……」

「あ、すみません……。では、どうぞ！」

「おけ……。ではでは、どんな、色の、パンツが好き……？」  
「……………え？」

「女の子のパンツは、何色であるべき……？　黒？　白？　無色？」  
「……………すみません。私はパンツにも女性にも興味がありません。勉  
強さえできればそれで十分です」

「はあ……………つまんない……」

「今更ですけど、面接官、なのですよね、貴女……？」

「でも合格……」

「う、合格っ!? それっ、本当ですかっ!?!」

勤勉、向上心。反面、真面目でつまんない。

ホモの素質あり、寮のルームメイトは俺様系を希望。 b yメープル

これでよし、と……。

「だって、落とす気とか、最初からなかったし……」

「な、なんだ……そうだったんですか……」

「これからよろしくね、小さなユリウス……」

あ……。そういうことか……。

理由はわからないけど、この子はユリウスが凄く嫌いみたい。

私が『小さなユリウス』と呼ぶと、従順でかわいかったその顔が鋭くなった。

ユリウスがやってきたことを思い返せば、残念だけど、どこで恨みを買っていてもおかしくなかった。

「ごめん、今のは失言……。よろしくね、アデル……」

「よろしく願います。チャンスを下さり、感謝しています……」

「いつか必ず、シャンバラにこのご恩を返します!」

「そう言ってくれると、エルフとして嬉しい……」

ユリウスの伴侶であることは言わないでおいた。

どうせいつか知れることだし、黙っておいた方がずっと面白そうだった。

アデルは合格バレバレの幸せな笑顔を浮かべて、この用務員室を出て行った。

そして私は次の面接者にこう質問をする。

「あなたはパンツを履くと死ぬ病気です……。さて、パンツを履きますか？ 履きませんか？」

するとたつぷり1分近く、ヒューマンの女の子は思考を停止させてくれた。

パンツだけは絶対に履くと、答えてくれたので、その子も合格にした。

落とす気なんて、なかったし……。

・森の園ミスガルス - 入学式 -

・錬金術師

あのオアシスで踊り回るシエラハに魅了されてより、かれこれ長い月日が経った。

さすがにもう覗き見はしていない。

もっと刺激的な光景を、別の場所で見れるからだ。

いやむしろ、最近は俺が水浴びをのぞかれる側になっているような、そんな気さえしてくる……。

その日もオアシスで肌を清め終わると、俺は衣服を身に付けて、木陰のシエラハの前に立った。

「えっと、のぞくつもりはなかったのよ……？　ただ、待っていただけで……」

「わかつている。それで、始業式は？」

「無事に終わったわ」

「そうか、よかった」

開校にあたって、ある予告状が都市長の元に届けられた。

『式典を中止にしないと、刺客を送り生徒を殺す』とあった。

「何もなかったとは言っていないわ」

彼女の隣に腰掛けて、同じオアシスを見た。  
ガルツランドのあのペテン師が、いずれなんらかの介入をして  
くことは分かり切っていた。

「狙いは都市長だったわ。グラフが始業式のと真ん中で、スピーチ  
中の都市長を刺客から守ったの」

「黄色い悲鳴が聞こえてきそうな話だな。だが都市長は？」

「傷一つないわ。ふふ、あたしが隣にいたんだもの」

「助かった。……だが、そうだな。迷いの砂漠の喪失は、これから  
も頭の痛い問題になりそうだ……」

シャンバラの国土は広大だ。

今では視界の悪い樹海に囲まれている。この状況で、他国からの  
スパイをブロックするのは相当に難しいことだ。

「実力行使に出るってことは、焦っている証拠よ」

「そうだな、こちらの融和策が利いているようだ」

俺は式典に参加しなかった。

俺は政治家ではなく錬金術師だ。

本校舎の建設のサポートや、資金獲得のためにポーションの製造  
を優先した。

俺ががんばればがんばるほど、学校の運転資金が増える。

それがエルフとヒューマンの橋渡しに繋がる。

『魔力を持つ者には、持たぬ者を支える義務がある』という理念  
も、シャンバラのナンバー1であるシエムシエル都市長の口から出

るからこそ、意味がある。

俺が言っても、魔力に恵まれた者の理想論だと思われただけだ。

「みんな感動してたわ。貴方から生まれた考え方なのに、みんな都市長に感動してたの！ ユリウス、貴方が言えばよかったのに……」  
「錬金術師の領分から出る気はない」

「ふふふつ、ガルツランドに乗り込んでおいてよく言っわね！」

甘えるようにシエラハが体重を預けてきた。

膝の上に置かれた手を握って、出会った日からまるで姿の変わらない彼女に見とれた。彼女は美しかった。いつまでも。

「そうそう、面白い子に会ったのよ？」

「ゲフェンのイエン姫のことか？」

「いいえ、イエンちゃんなら、来国初日に都市長に引き合わされたわ。けどそっちじゃなくて……」

「モゲミアとタラか？」

「違うわ。アデルって子よ」

知らない名前だった。

よっぽど印象がよかったのか、シエラハは微笑みを浮かべて、続きを俺に語りたがった。

「どんなやつだ？」

「それがね、貴方にそっくり！」

「それは、性格がか？」

「うっん、性格は丁寧でいい子よ。卑屈に感じるほどに控えめな子  
」

「そうか」

「ユリウス、アデルに注目してあげて。紹介してくれたメーブルが  
言うには、あの子、少し前まで農奴だったみたいなの……」

よっぽど気になるのか、シエラハは人の膝の上に乗りに出してきた。

けれど自分のやっていることに気付くと、途端に赤くなって、俺  
から身体半分ほどの距離を取った。彼女はそういう人だった。

「魔法の才能もあるのよ……？　まるで、小さい頃のユリウスみた  
いじゃない……」

「シエラハがそう言うなら、間違いなくその通りなのだろうな」

転移魔法の禁忌を冒した日、俺たちの記憶は混線した。

俺は幼少期のシエラハを、シエラハはまだユーリと呼ばれていた  
頃の俺を見た。

それだけあって、その子に思い入れを感じたのかも知れない。

「みんなかわいくてまぶしかったわ。もう少し若かったら、あの中  
に混ざれたのに……」

「それなら手がなくもないぞ」

「あら、どうするの？」

「またあの薬を飲んで若返ればいい。そうすればお前は、娘たちと

同級生になる」

俺は冗談や皮肉のつもりだった。

しかしシエラハは弾むように飛びついてきて、輝くように笑った。

「それ、いいわねっ！」

「あ、ああ……。そうかもな……」

よっぽど第一期生たちがまぶしく見えたのか、シエラハは完全にその気だった。

「そうだわ、ユリウスと一緒に通うのも悪くないわね」

「それは……。それは勘弁してくれ……」

最近の彼女たちは、隙あらばあの薬を俺に飲ませとしてきて不安だった。

俺には臨時講師役があるからと、しつこく食い下がるシエラハの誘いを断った。

「残念……。ユーリと一緒に、あの素敵な学舎を歩けると思ったのに……」

「それはまあ、そうだが……。きっとそれだけじゃ、済まないだろう」

「ふふ……」

「なぜそこで笑う……っ!？」

一瞬、妖艶な笑みが見えた気がするが、それは俺の勘違いだ。



・森の園ミスガルス - 入学式 - (後書き)

更新が滞りがちですみません。

・新生アデル

妙にモミアゲの長い、特徴的な容姿をした人とルームメイトになった。

「俺はモゲミアだ、よろしくな兄ちゃん！」

「あ、はい……。私は」

「アデル・ブラウンだろ！ お前、魔法科の入学試験で準主席だったんだってなあ！」

「え、そうだったんですか……？」

「知らなかったのかよ。ちなみに一番は誰か知りえか？ 知りてえよなあ〜？」

「ええ、まあ……」

その必要があるとは思えないけど、モゲミアに肩を抱かれた。

私は魔法科で、彼は一般学科だ。

別の学科同士がクラスメイトになるように、部屋が割り振られているようだった。

「ウエルサンディちゃんだよ、ウエルサンディちゃんが1番だ……」  
「それって、ユリウス・カサエルの娘の……？」

「そう！ お母さんのシエラハゾさんもたまねえなつ、なあっ！

「あ、おっぱ」  
「下品な話は嫌いです」

「はあっ!?! つつまんねえ〜っ! 隠すなよっ、男なら興奮して当然だろあれはよおっ!?!」

モゲミアと私は性格がまるで合わなかった。

私はそういう話が嫌いだ。

私を虐げていたやつらが、そういう話をよく好んだからだ。

「その夫のユリウス・カサエル、始業式に現れませんでしたね」

「あ? あんなおっさんどうでもいいだろ?」

この男、清々しいほどに女性しか見ていない……。

「いや、魔法科の生徒としては、魔法科の発足にユリウス・カサエルが強い影響を」

「だからどうでもいいだろ、男はよっ。それよりも女子の話をしようぜー、アデルウ〜!」

慣れ慣れしい男だ……。

「でしたらオドのタラ。彼女はいいライバルになりそうですね」

タラは鋭い雰囲気的女子生徒で、魔法科のクラスメイトだ。

なぜだか上手く言えないけれど、彼女には私なりの親近感があった。

「ああいう女は嫌いだ」

「なんでですか?」

「だってよお、噛みつかれそうだから!?」

「女性には興味ないです」

「な、何いいーっつ?!」

女子とか恋愛なんてどうでもいいと答えたつもりなのに、あの面接官と同じように勘違いをされた。

まさか彼女がユリウス・カサエルのもう1人の伴侶、メープル・カサエルだったなんて。

あんな女性を隣に置いて、ユリウス・カサエルは日々平穩に暮らせるのだろうか……。

はなはだ疑問だ……。

「そういう意味ではないです」

「へ、へえ、よかったぜ……。毎日、尻をがちりガードして暮らすことになるかと思っただぜ、へ、へへ……っ、ああよかったあ……」

「はあ……っ」

「俺はウエルサンディちゃん狙いだ！ お互い助け合って行こうぜ」

「はい、ルームメイトとして助け合いましょう」

「お前の本命は……そうだなあ？」

入学するなり本命も何もない。

私は基礎教養を身に付けて、恩人であるアリ様の願いを叶えたい。

なんでもいいから、ユリウス・カサエルを越えたい。あつと驚かせたい。アリニに褒めてもらいたい。

「ユリウスさんの授業なら、3日後の午後だぜ」

「モゲミア。……なぜ、その話を急に私に？」

「お前のさっきの顔付きでピンときたんだ。そうか、お前あのおっさん狙いかつ、がんばれよーっ！」

「もう寝ます、もう話しかけないで下さい……」

「なんでだよあ〜！ 叔父貴たちと別れて俺寂しいんだよあ〜っ、もっと話そうぜ、アデルウ〜！」

ルームメイトのモゲミアは、互いの気質の違いから極めて付き合いがたい男だった……。

後から知ったことだが、こんなお調子者がファルク王国の王族だなんて信じられない……。

そうだと言われても、まるで実感がわかない軽薄さだった。

・

白百合のグライオフエン。彼女もまたユリウスの伴侶だ。

彼女の授業は女子の黄色い悲鳴が絶えなかった。

しかし弓を放てば百発百中。

軍略への理解も深く、尊敬に値する女性だった。

「さあ、僕の手ほどきを受けたい子猫ちゃんはいるか……？」  
「はいはいはいはいーっ、俺受けたいです、グライオフエン先生！ー！」

「ふっ、第一期生は恥ずかしがりが多いな……」

「いますいますっ、このモゲミアに大人の手解きをしてくれよおっ！」

問題があるとすれば、男子が拳手をしても無視を決め込むところだった。

グライオフエン先生は、男子など眼中になかった。

・

その日の午後、ついにユリウス・カサエルとの対面の時がやってきた。

私と父を破滅させた男。

逆恨みとはいえ、会うとなるとどんな態度を取ればいいのかわからなかった。

さっきの授業は野外で一般科と合同、今回の授業は魔法科の教室で行われる。

満足に腹に入らない昼食を終えると、緊張しながら授業の時間を待った。

「肩の力抜きなよ。そんな状態じゃ、夕方までもたないよ」  
「タラさん……。ありがとうございます」

「アンタ、あの男に何をされたんだい？」  
「え、ユリウス様に、ですか……？ いえ、私のはただの、ただの逆恨みで……」

「はっ、そりゃ気が合うねえ。世間のやつらはみんな、あの男を英雄と言っけれど、内心穏やかじゃないよねえ……」  
「タラ、さん……？ あ……」

タラは私の肩に手を置いて、言いたいことだけ言って席に戻っていった。

この学校に集まる人たちは、みんなユリウスに心酔しているのかと思っていたから、彼女の言葉はとても意外だった。

少しぼんやりしていると、教室の扉が鳴った。  
教室のみんなが私語を止めた。

彼を敬愛する者は姿勢を正し、タラは挑発的に悪態混じりの姿勢に変えた。

ウエルサンディ姫は父親の登場が誇らしそうだった。

「遅くなった。俺は錬金術師のユリウス・カサエルだ。錬金術と転移魔法が専門だ。不定期だが、どうかこれからよろしく頼む」

「パパツ、がんばって！」

「サンディ……。学校ではユリウス先生と呼べ……。いや、すまん」

教室が笑いで包まれた。  
タラは笑っていないかった。

それともう1人、笑っていない生徒が混じっていた。

ユリウスは英雄だ。

だが彼を快く思っていない者が少なくともここに3名いた。



ユリウス・カサエルの授業には、他の教師にはない強い熱意があった。

今や事実上の世界の盟主と呼んでも差し支えないシャンバラ、そのナンバー2の地位にあるというのに、彼は驕らず、強い熱意を込めて魔法の基礎を私たちに教えてくれた。

ちやほやとした雰囲気はすぐに吹き飛んだ。

クラスメイトたちは彼から少しでも何かを学ぼうと、熱心に黒板と、手のひらで生み出される魔法を見上げていた。

高度な魔法を身に付けて人生を変えたい。

その願いは、私だけのものではなかった。

ここにいる誰もが私のライバルだった。

ユリウスを睨んでいたクラスメイト、アルデバランという名の青年も、勉学においては非常に真摯だった。

鐘が鳴り、休憩時間が訪れるその時まで、誰もが時間を忘れて打ち込んでいた。

「すまん、もうこんな時間か……」

鐘が鳴ると、ユリウス先生は授業の終わりを惜しんだ。まだ教え足りないという顔だった。

私たちも彼の授業を、このままで昼休みまでぶっ通しで受けたい気分になっていた。

「何か質問があれば、行政区にあるうちの錬金術工房まで訪ねてきてくれ。遠慮はいらない。いや、だが」

「あら、なーに、パパ？」

ユリウス先生が娘のウエルサンディを確認して、やけに重々しく私たちを見回した。

「だがこれだけは覚えておいてくれ。サンディに手を出した男は、退学処分とする。すまんがわかってくれ」

「もぉーっっ！！ せつかくいい雰囲気だったのに、ちっちゃいこと言わないでよ！！」

「俺は本気だ」

「恥ずかしいから止めてって言うてるのーっ！ それにうちは、渋いおじさまが好きなのっ！」

「サンディ、ちょっとこっちにこい……」

娘と一緒にユリウス先生は教室を出て行った。

ウエルサンディの明るい笑顔と、大胆なスキンシップに憧れを覚える男子は多く、彼女の意外な好みに衝撃を受けていたようだった。

ユリウス先生を睨んでいた生徒アルデバランは、やはり彼が気に入らないのか鋭い目でそれを見送っていた。

そのアルデバランと、私は目が合った。

「なんだ、準主席」

「なんでもありません」

「なんでもないって顔ではないだろ。タラとお前は、ずいぶんとあの男が気に入らないみたいだな？」

「ええ、ですが勉強には関係のないことです」

アルデバランは大柄な青年だ。

グレーの髪と浅黒い肌は、サンディたち砂漠エルフに雰囲気が少ないに似ていた。

「やつに何をされた？」

「何も」

何もされていない。

何もされていないのに、ただ逆恨みをしているだけ……。

逆恨みを口にしても、恥となるだけだ。

「アイツ、いつでも訪ねてこいって言ったな。そっだ、何か嫌がらせてやるか」

「退学にされても知りませんよ」

「……それは困る」

「なら止めましょう」

「だったら、本当に工房に押し掛けて……。仕事の邪魔をしてやるというのはどうだ？」

アルデバラン。やや素行の悪そうな男。

彼となれ合う予定はなかった。



「小さいって、いいね……」

人に抱き付き、よじ登り、その首にまたがる。

孤児院時代の子供たちを思い出すような挙動だった。

「降りろ……」

「へへへ、嬉しいくせに……。んっ、当たってる……」

「降りろと言っている!」

「オアシス、一周回って……? そしたら、解放したげる……」

オアシスの一周は結構な距離だ。

普通に歩いても30分以上を労することになるだろう。

「……今日だけだぞ」

「え、いいの……? 嫌がらせのつもりだったのに……ラッキー……」

「ああ、今日は特別だ。散歩に行くでしょう」

孤児院時代の妹たちは、今もツウィクで無事にやっているのだろうか。

俺は羽根のように軽いメーブルを肩車にしたまま、オアシスの外周を気ままに歩いた。

「ん……っ、なんか、癖になる感覚……かも……」

「その姿で言われても全く響かないな」

「そんなこと言わないで、獣欲に身を任せよ……?」

「その姿、その愛らしい格好では、庇護の対象にしかならんな」

「そんな……旦那がロリコンじゃないだなんて、ショック……」  
「突っ込まないぞ」

子供の頃は、孤児院の妹たちとよくこつした。

授業も上手くいって機嫌がよかった俺は、ときおり変な声を上げるお子さまと長い散歩を楽しんだ。

琥珀色の夕日がオアシスを照らす頃、やっと今日の納品が終わった。

商館のラウリイたちが品物を梱包し、その部下たちがラクダ車を引いて、工房を出てゆくのを目で追った。

ラウリイはここに残った。

「あの、よろしければ肩でもお揉みしましょうか……？」  
「ラウリイこそ疲れているだろう」

「いいんです！ で、では、お揉みしますね……」  
「なら後で俺も」

「い、いえっ、それは結構です……っつ！」

褐色の肌をした小柄な彼は、こう見えて30歳を超えている。そんな彼に肩を揉まれながら、風に揺れる湖水をただ静かに眺めた。

「あの……学校はどうでしたか……？」  
「順調だ。みんな熱心に授業を受けてくれた」

「それはよかったですねっ」  
「ああ、一安心だ。かなりいい滑り出しになっていると思う」

「僕もユリウス様の授業を受けられたらよかったですけど……」。

あいにく、仕事が」

「お互い忙しいからな。俺ももっと、毎日あいつらに魔法を教えてやりたい」

足音が聞こえてきて、ラウリイが背中から離れた。

足音の正体はシエラ八だった。

「ユリウス、お客様よ」

「客……？ おおっ、お前たちかっ！」

シエラ八は美しい人だが、夕日を背にするとまるで暁の女神のように見える。

そんなシエラ八の背後に、今日はミズガルズの生徒が3名いた。

タラ、アベル、それに俺を鋭い目で睨んでいたもう1人、アルデ balan という大柄な青年だった。

「ユリウス先生、教えてもらいたいことがあるのだが」

若者にしては低い声で、アルデ balan は前に出た。

向かい合ってみると、その背丈は俺と同じくらいあった。

「もちろんいいぞ、むしろ待っていた。そうだ、シエラ八！」

「ええ、言わなくてもわかってるわ。エヴァンスと一緒に、夕飯のおかずを増やしておくわ」

俺の考えることなんてシエラ八はお見通しだった。

シエラ八は大きな胸を揺らして舞い踊り、自宅の方に軽やかな足取りで駆けていった。



オドのタラは憧れるような目でシェラハの後ろ姿を目で追っていた。

「何を知りたい？」

「お前のようにする方法を知りたい」

アルデバランはガルツランドの出身だ。

あの教皇の息がかかっているかもしれないと、既に都市長に警告されている。

彼の態度はあまりよくない。

だが向上心は本物だ。

「光栄だ、喜んで手を貸そう。それで、タラとアデルは？」

「あたかも基礎を。つい先日まで、自分に魔法の才能があるなんて知らなかったのだ」

「私は魔力の増幅と維持のコツが知りたいです」

「わかった、日が暮れる前に早速始めよう」

つい笑みがこぼれてしまった。

なんて若々しくて貪欲な向上心なのだろうか。

俺は生徒たちをオアシスの前に連れて行き、お手本を見せた。

彼らは一挙一動を注視してくれた。

言葉の1つ1つを真面目に受け止め、理解しようと努力してくれた。

だからこそ俺だって、わかりやすく伝わるように工夫する張り合いがあった。

「あ、ども……ユリウスの隠し子です……」  
「か、隠し子だとっ!? む……その姿、どこかで、見たような気が……」

しかしそこに、我が家のトラブルメーカーが乱入してきた。

「私も見覚えがあるような……。あの、どこかで会いましたでしょうか……?」

「ふ……私は、ただの通りすがりの、隠し子……」

そういえば以前、メープルが面接官の仕事を任されてたと言っていた。

幼少期に若返ってはいるが、見覚えがあってもおかしくない。

「俺の子供にお前のようなやつはいないな」

「そんな……さっきは、あんなにお楽しみだったのに……」

「おい、その冗談はシャレになっていないぞ……」

「アレ、癖になっちゃった……。もっと、して……?」

タラが蔑みの目で俺を見ている……。

アルデバランはニヤニヤと笑い、アデルはメープルを怪しんでいた。

「この、人を徹底的におちよくり倒す感じ……やっぱり、どこかで覚えが……」

「むう、なんだか俺も、無性にイライラしてきたぞ……」

面接官メープルか。

想像するだけでも恐ろしい……。

彼ら試験組のストレスは、想像するに難くない。  
さぞや混乱させられたことだろう。

「シエラハとエヴァンスが厨房に入っている。今夜は席が増える、手伝ってやってくれ」

「あ、そっちも楽しそ……。わかった、姉さんのおっぱい、揉んでくる……！」

「も、揉むうつつ？！……！」

「若者の集中をひっかき回すな。後で散歩でもなんでも付き合おうから、早く行け……！」

「あ……。アレ、またしてくれる……？ グリグリ……！」

深いため息を吐いて見せると、メープルは幸せいっぱい俺の苦悩を喜び、去っていった。

「すまん……。あれはああいう災害みたいなものだと思ってくれ……！」

夕飯の香りを嗅ぎながら、3人の生徒たちに魔法の基礎を教えた。ハプニングはあったが、集中をすると時間が融けていった。

彼らは生徒の中でも特に優秀だったが、中でもアデルの才能が飛び抜けているように感じられた。

だが褒めたりはしない。

褒め言葉が成長の妨げになることは避けたい。

やがて日が沈み、途端に肌寒くなった。

「おお、おぬしらよくきたのう！」  
「い、いらっしやい……。ご飯、できたよ……。？」

彼らの同級生でもあるスクールズとウルドがやってきて、あらためて夕飯にご招待した。

タラの父親は俺が殺している。  
幸せな家庭の食卓が彼女の怒りを買いはしないか、やや心配になった。

だがそれは杞憂で、うちの娘たちと打ち解けていた彼女は、皮肉屋の口元を微笑ませていた。

「あたいはね、チャンスがあればアンタの父親を刺そうと思ってたんだ」

「えっ、パパをつ！？」

「うむうむ、父は刺されてもしょうがないことを山ほどやっとなるからもう！」

「で、でも、お父さんが刺されるのは、困るよ……」

「そうさね、友達は泣かせられないね」

許してくれたのかどうかはわからない。

だがタラもアデルも、体格だけは大人に見えるアルデバランも、暖かな食卓をととても羨ましそうに見ていた。

「今帰ったよ、おお、タラじゃないか！ ボクに会いに来てくれたのかい！？」

「タラに迷惑だぞ、グライオフエン教官」

グラフを面接官にする予定もあったそうだ。

メーブルか、女好きのグラフか。

もっとマシな候補者はいなかったのかと、困惑せざるを得ない。

・森の園ミスガルス - なして? -

その晩

「あ、ども……」

「帰れ」

「え、なして……?」

「その姿は犯罪だ。帰れ、すぐに帰れ」

「妻ですよ……?」

「薬の効果が切れてからまたこい……。それはダメだ……」

「でも、中身は、妻ですよ……? 一応?」

「はぁ……っ。若返りの薬なんて、作るんじゃない……」

その晩起きたことを詳しく説明する気はない。

どうしても帰ろうとしないお子様をベッドに引きずり込んで、抱き枕代わりにしてしばらく目を閉じれば、俺の意識は夢の中だった。獣欲? そんなものここにはない。

・

ミスガルス開校より半月が経ったある日、事件が起きた。

夜に特別棟に何者かが忍び込み、実習室と教室に火を放った。

都市長がその報を届けてくれた。  
その時の都市長の姿は見ていられないほどで胸が痛んだ。

ミスガルズは都市長の新しい夢だ。

その夢に火を放った愚か者に、怒りを覚えない者はこの家になかった。

「都市長、今日はスレイ義兄さんに仕事を全て押し付けて休むといい」

「ですが私は、犯人を探すと、設備の再手配を……」

「それも義兄さんにやらせればいい。シエラハ、メープル、都市長をこの家から出すな」

「おけ……」

「休むいい機会じゃない。あたし、今日はシナモンのクッキーを焼くわー！」

「俺はあちらの様子を見てくる。何かわかったら報告する、その時は相談に乗ってくれ」

錬金術師としての仕事を投げ捨てて、俺は転移魔法を用いて居間から姿を消した。

家族は乱用をとがめるが、今は非常時だった。

「お前がやったんだろっ、アルデバラン……」

「だから、俺はやっていないと言っているだろう……」

特別棟の前に飛んでみると酷い有様だ。

せっかく職人たちが意匠を込めてくれたというのに、ガラス窓の

約半数が出火の熱で割れてしまっていた。

建物の外には生徒がまだ残っており、ガルツランド出身のアルデバランが放火魔扱いされていた。

「スクルズ、状況は？」

「父いいーっ！！ 大変じゃっつ、放火じゃっ、火祭りじゃっ、わしらの教科書が全部燃えてしまったのじゃーっ！」

「ウルド、状況は？」

「きてくれたんだ、お父さん……。みんな、凄くショックを受けてる……。大切なものを燃やされちゃったって」

この半月、ミズガルズは素晴らしいムードだった。

向上心と未来への希望にあふれた理想の学校にすら見えた。

それが今、焼かれてしまった。

怒りの感情が生徒たちの胸にあふれていた。

その場に残っていた教師たちまでもが、アルデバランを内心疑っているようだった。

「ユリウス先生、アルデバランはやっていません」

「アデルの言う通りだぜ。あいつは性格ねじくれてるけどよ、自分の教室に放火するほどバカじゃねえって！ なあ、お義父さん、叔父貴の顔を立てると思って」

だがアルデバランをかばう者もいた。

アデルとモゲミア、それにタラが彼を擁護してくれた。



「入学式だつて、ガルツランドの連中が暗殺者を送りつけてきたんじゃないか！」

「おいモゲミア、冗談はその揉み上げだけにしとけよ！」

「ガルツランド人のコイツ以外に、他に誰がこんなことするんだよっ！」

アルデバランは怒りのあまりに、身を震わせながら息を荒げた。本当に犯人だったらもつとぶてぶてしい態度になったり、あるいは反対にうるたえるだろう。

多くの者が冷静さを欠いていた。

「証拠はあるのか？」

「ねえっスよ、そんなもん！ こいつらは難癖付けてるだけっスよ、お義父さん！」

「モゲミア。サンディに手を出したら次元の狭間に突き落とすと言つたはずだが？」

「なら青髪が綺麗なスクールズちゃ」

「それ以上言つたら、酒臭いファルク王のところにお前を突き返すぞ」

「とにかく証拠はねーんだって！ 叔父貴とモンスターカクテルにかけて言つてもいい！」

「いやお前、未成年だろ……」。

他の学生に睨まれようと、モゲミアは友人のアルデバランをかばっている。

「いいやつだった。」

「ユリウス先生、貴方だつて冤罪を着せられた過去があるはずだ。ツウィクのアリ將軍に、戦犯にされかけた。そうでしょう？」

アデルも同様だ。

タラとイエンもやってきて、見るかに素行の悪いアルデバランをかばった。

半月のうちに親しくなったようだ。

「父の首をかけてかまいませんわ」

「いや、そういう冗談を言われても返し辛い……」

「あら、取れとおっしゃるなら取ってきてますわ」

「あれでもお前の父親だろう……。俺はゲフェン王が気の毒になつてきたぞ……」

憤慨していたアルデバランは次第に落ち着いていった。

立場を犠牲にしてまで守ってくれる友人に、心動かされていなければ嘘だ。

「真犯人を見つけなよ。そしたら、父を殺した罪を赦してあげるよ」

「悪くない条件だ」

生徒たちは多数派と少数派で対立した。

それでもタラたちは引かなかつた。

「パパ、うちらもアルデバランくんを信じる！」

「放火をする顔じゃないからのう。彼ならもつところ、チンピラ臭いことをするはずじゃ！」

「わ、私も、やってないと思う……。この前転んだとき、助けてく

れたよ……」

あまり娘に近づけたいタイプではないが、俺も犯人と断言するには根拠も動機もないと思う。

「わかった、では一週間の休校とする。その間に俺たちの手で、真犯人を見つけ出す。アルデバランの身柄はうちの家で預かるう」

抗議や不安視の言葉が沸き起こったが、信頼を犠牲にしようともここは押し切った。

面接官メーブルが通したんだ。悪党のはずがない。

「俺の脇が甘かったせいだ……。すまない、ユリウス先生……」  
「実は少し疑っていた」

「だが信じてくれた……。ありがとう、先生……」  
「アデルが言っただろ、俺には冤罪を着せられた過去がある。さあ、みんな調査を手伝ってくれ」

シエラ八たちの許可は取っていないが、アルデバランはうちで預かりたい。

担任の先生に頼み、容疑者であるアルデバランをうちの家へと護送するように依頼した。

それが済むと俺たちは煤まみれになった特別棟に入った。  
これから証拠を探し、分析をしよう。

あんなに熱心に俺の授業を受けてくれる彼が、教室を焼くだなんてあり得ない。

結論から言うと、犯人に結びつくような証拠らしい証拠は何も見つからなかった。

まあ当然だろう。

世の中には証拠を隠滅するために、わざわざ放火をするような者がいるくらいだ。

あるのは白い灰と、真っ黒な消し炭と、惨たらしく燃え尽きた私物や教科書ばかりだ。

生徒たちが気持ちよく学習出来るように、都市長が特注で作らせた長机も教壇も何もかもが燃えてしまっていた。

職人たちが込めた意匠の全てが灰燼に帰した姿は、見ているだけで痛ましく、犯人に怒りを覚えずにはいられない。

「ユリウス先生、こちらに」

「アデル？ 何か見つけたか？」

「ここが火元ではないかと」

手分けして灰燼の中を探っていると、アデルが教室後方のロッカーを指さした。

鉄そのままでは無骨過ぎると建築家が言うので、わざわざ錫で銀色にメッキをした物だった。

だが今は出火の熱で美しいメツキがはげ落ちて、暗色に煤けてしまっている。

「これは誰のロッカーだ？」

「アルデバランです」

「……アデル、自分のロッカーを火元にする放火魔がいると思うか？」

「いるわけなからう、父っ！」

「そうだよっ、誰かがアルデバランくんを罪をかぶせようとしてるんだよ！」

スクルズとサンデイはいつになくご立腹だった。

しかし結論を出すには早すぎるので、俺とアデルは慎重に火元を観察した。

炎で変形したロッカーはそう簡単には開かない。

だが何度か蹴りを入れてみると、蝶番が弱っていたのかロッカーの扉はヒステリックに外れ落ちた。

真っ黒になった何かが入っている。

取り出してみると、それはランタンに形状がよく似ていた。

「ユリウス先生、自分のロッカーにランタンを入れる放火魔がいますか？」

「そんなバカいるわけがない……。ユリウス先生、アルデバランはハメられたと見るべきです」

アデルとタラは怒り混じりの強い口調でそう主張した。

タラは俺に対する態度こそ敵対的ではあったが、他者を思いやれ

るいい子だった。

「まあ、そうわたくしたちが深読みするよつに、裏をかいている可能性もありますけれどね」

「イエンはどつちの味方じゃあーっ！」

「客観的事実を述べているまでです。私なら……：そうですね、こんな面倒な手順を踏まないで、ユリウス先生を刺しますわ」

「ええ、その方が手っ取り早いですね」

アデルはイエンの言葉に賛同した。

家族の恨みを捨てきれないタラム、イエンにわざわざ寄って見せて俺に自己主張をしてきた。

「わざわざ油を使ったのも変だろっ！ アルデバランなら教わった魔法を使やいいのによーっ！」

アルデバランは潔白を疑うつもりはない。

大事なのは火元が彼のロッカーで、そこにランプが入れられていた点だ。

床の煤を指ですくって匂いを嗅いでみると、シャンバラでよく使われる鉱物油の匂いがした。

ランプから漏れた油だろうか。

このランプの出所を確かめるべきだろう。

昨晚、誰がランプを持ち歩いていたのか聞き取り調査をすれば、容疑者候補が見つかる可能性もある。

その後も俺たちは痛ましい教室を探したが、やはり焼かれてしま

つては証拠も何も見つかりそうになかった。

「ユリウス様、少しよろしいでしょうか……？」  
「どうした？」

ところがそこに一般科の担任教師がやってきた。

あまりいい報告ではなさそうだ。

表情は暗く、生徒たちの前では言えないのか、廊下側から動かなかった。

彼と共に棟を出て、人目のない建物の陰で詳しい話を聞いた。

「アルデバランの寮から、よく燃える油が見つかったと生徒たちが騒いでいます」

「それは……参ったな……」

「生徒たちをなだめてもらえませんか？ 我々の話はもう耳に届かないように……」

放火犯の目的が『学校を台無しにするという』一点にあるとすれば、今回の工作は大成功と言っていいだろう。

「わかった、すぐに行こう」

「教室からは何か、わかりましたか……？」

「まずいことに彼のロッカーからランプが現れた。同じ油だろうな……」

「そんな、なんてことだ……」

後をサンディたちに任せて、俺は学生寮に転移した。

あちらで何が起きたのかは黙っておいた。



・森の園ミスガルス - 灰燼 - (後書き)

長らく更新が滞り申し訳ありません。

新作が期待ほど人気が出なかつたりと、個人的な事情で執筆のペー  
スが落ちていきます。

この先、更新が不定期になるかもしれません。どうかご容赦下さい。

・森の園ミスガルス - スクールラブですよ、姉さん…… -

それからしばらくして俺は都市長への報告に戻った。

「おお、ユリウスさん……」

「遅くなってすまん。……気分はどうだ？」

「最悪です……。貴方の報告を聞くのも怖ろしい……」

「そんなに状況は悪くない と言いたいのだが、痛いところを突かれてしまった」

都市長はうちのソファアーに寝そべっていた。

付きつきりでシエラハとメープルが彼を見ていてくれて、俺の姿を見ると一緒に駆けてきた。

容疑者はアルデバラン。

火元は彼のロッカーの中に入れられたランプ。

彼の寮から大量の油が出てきて、生徒たちがヒステリーを起こしていると伝えた。

「破壊工作ですか……」

「ああ、その疑いが最も強い。しばらくは授業どころではないだろう」

「可哀想に……」

「ああ。特にアデルのように希望を胸にやってきた生徒からすれば、出鼻をくじかれた形になるな」

都市長は胸を痛めていた。

だがその男はシャンバラを今日まで導いてきた偉大な男だ。

しばらくすると私情を己から切り離し、為政者の顔に戻った。

「許せない……。犯人は、火炙り……」

「それはやり過ぎだけど、どうにかして真犯人を見つけ出したいわ」

シエラハとメーブルも怒っていた。

都市長に心労をかける敵に、シエラハまでいつになく鋭い顔で怒っていた。

「あて……っ」

「きゃ……っ!？」

だがそんな顔をして怒りが怒りを呼ぶだけだ。

都市長だって2人のそんな顔は見たくはないだろう。

だから俺は、2人のおでこを小突いて怒りをこちらに向けさせた。

「怒りに身を任せれば、破壊工作をした犯人の思う壺。と彼は言いたいのでしよう」

「ああ、学校を崩壊させることが敵の狙いだとすれば、平静こそが何よりも反撃だ」

シエラハは片手でおでこを抱えて、同じ仕草をしていたメーブルに微笑んだ。

だがメーブルはまだ怒りがおさまらないようだ。

「お茶を入れてくるわ。メープル、一緒に行きましょう」

「うん……姉さんが言うなら、わかった……。ユリウス……。爪くらは、剥がさせて……」

「怖い冗談を言うな」

姉は妹の背中を押して、厨房へと去っていった。

都市長と俺はいつお茶がきてもいいように、テーブルへと座り直すことにした。

「策はございますか？」

「ああ、案だけはある」

「うかがいましょう。どうやってこの事態を解決して下さりますか？」

「……通常の手段では犯人にたどり着くのは不可能だ。炎が証拠を焼き払ってしまい、アルデバランが犯人だという状況証拠だけが残された」

「彼はやっていませんか」

「動機がない。あんなに熱心に授業を受ける若者が、己の教室を焼くはずがない」

怒りに飲まれそうになると、都市長は俺に微笑んでくれた。

一番頭にきているのは都市長だろう。

この計画のために彼は長い時間をかけてきた。

「犯人へと繋がる遺留品があれば、ウルドにあのヤジロベエを作らせたのだが、それもない」

「では、どういたしますか？」

「注意深く観察する。出来るだけ近いところからだ」

「魔法科の担任でも受け持ちますか？」

「いや、もつと近い場所がいい」

都市長は腕を組み、降参するように白髪頭へと手を置いた。

生徒と教師以上に近い位置から、観察をする方法が俺たちの手元にある。

「ふふつ、あたしたちにはわかったわ！」

「お待たせ……」

厨房から聞き耳を立てていたようだ。

2人はお茶とクッキーとトレイに乗せて、さっきとは一変した楽しげな笑顔を浮かべていた。

「もちろん、ユリウスも手伝ってくれるのよね？」

「グフフ……。ついにアレを使う日がきたんですね、アレを……」

メープルは平常運行だからいいとして、シエラハの期待の目が大きな違和感だ。

彼女はそんなに気に入ったのだろうか……ユーリ少年のことが。

「子供に戻るあの失敗作の薬を薄めて使おう。転入生の立場から学校全体を観察すれば、何か見つかる可能性がある」

要するに内偵だな。

ちようどここには生徒の面接を受け持ったメープルもいる。

「やっぱり！ ふふふっ、ぜひやってみるべきだとあたしは思うわ！」  
「犯人捜しのついでに……スクールラブ、スクールラブですよ、姉さん……」

2人は捜査の傍らに学校生活をエンジョイする気で満々だった。期待の目が俺を見ていて、少し怖かった……。

「楽しむ分には構わないが、趣旨が内偵なのを忘れるなよ？」

都市長から特に反論はなかった。

優雅にお茶を口にして、やさしそうにはしゃぐ娘たちに微笑んでいた。

「そうなる生徒の中に協力者が必要になりますね」

「協力者か。いれば動きやすいな」

候補といえば、素性が確実な イエンとモゲミアあたりか？

イエンは切れ者で、モゲミアはああ見えて社交力が飛び抜けて高い。

「アデルくんがいいんじゃないかしら」

「私は、イエンちゃんが面白いと思う……」

「イエン姫ならば機転が利きますね。ですが問題は、彼女がゲフェンの王族という一点でしょう」

怪我をさせれば外交問題だ。

そうなるもモゲミアもまずいか。一応あれも王族

「その役、俺にやらせてくれ」

そこまでやり取りして、彼をうちで預かることにしていたことを、今さらになって思い出すことになった。

2階から階段を鳴らしてアルデバランが降りてきた。

彼は人に涙を見せられない人種なのだろう。

目元が赤くなっていたが、男のプライドか気丈に振る舞っていた。

「上にいるならいると先に言ってくれ……」

「ごめん、忘れてた……。てつきり、泣き疲れてるのかと……」

「俺は泣いてなどいないっ!!」

「ベッドの上で膝を抱いて、悔し涙にメソメソと鼻を鳴らしてたのに……?」

「ツツ……?!」

ハイドの術を使つてのぞいたな……。

事実だったようで、可哀想にアルデバランは絶句したまま固まってしまった。

「聞かれてしまった以上は他にありませんね。彼に助力を願いますよ」

「それもそうだ。アルデバラン、潜入のバックアップを頼めるか？」

大柄なアルデバラン青年が素直にうなづいた。

悔しさか、感動か、どちらかはわからなかったが彼は激情に胸を熱くしているようだった。

「俺たちの教室をメチャクチャにしたやつを見つけてくれ、先生……! 俺は許せないんだ! 疑われたことよりも、教室を焼かれて

しまったことが！」

涙を流し、鼻水をすすろうとも、彼を笑う者はどこにもいなかった。

「よしよし……。サンディたちには、ここで大泣きしたこと、秘密にしてあげるからね……。あてっ」

いや、1人だけ鬼がいた。

鬼のおでこを小突いて黙らせると、鬼は背伸びをして大きな青年の頭を撫でて慰めていた。



潜入任務はシエラハとメープルが主に受け持つことになった。

3日のうち2日を2人が受け持つて、残りの1日を俺が担当した。

工房の運営という本業がある以上、3日に1日の時間を作るだけで俺には精一杯だった。

少年ユーリの姿では若すぎるので、薬の料を調整し16歳前後に見えるようにした。

一方でシエラハは髪を後ろで縛って、メープルはツインテールにしていた髪を下ろした。

それだけでだいぶ雰囲気が変わる。

娘たちならば気づけるかもしれないが、薬を知らぬ者からすれば、よもや一時的に俺たちが若返っているとは想像すらしないだろう。

「すみません……俺なんかのために」

「気にするな、 balan。 学生生活なんて俺にはなかったからな、これはこれで楽しい」

「シエラハ様とメープル様も同じことを言っている」

「いや、メープルがいつもすまん……」

地道な戦いになった。

生徒に変装して、クラスメイトの立場から隣人を観察することは、元々の人柄を知る必要があった。

知らぬ者に本音を見せる者もないだろう。  
俺たちは慎重に観察を続けた。

アルデバランは守られている。  
学校にはなく、俺たちの自由意思によって。

常に誰かが彼と付き添うようにローテーションを組んだ。

「放火魔!!」

「俺の本返せよ!!」

「卑怯者!!」

あんなに理想的な環境が整っていたのに、学校はいまギスギスとしている。

教室と私物を焼かれた怒りが行き場を失い、アルデバランを責めさせた。

後ろでそうなるように糸を引いている者がいるのではないかと、俺たちは疑っている。

だが生徒たちはいまだにヒステリーが収まっていない。

私情なのか、扇動なのか、なかなかに見分けが付かなかった。

夕方の授業は座学だった。

最後の授業が終わると、俺は間に合わせの長イスに腰掛けて教科書に目を通し、その傍らで生徒たちの様子を観察した。

あれ以降、新たな破壊工作の動きはない。  
扇動めいた動きをする者をマークし、家に戻ったら共有をする。

生徒、用務員、警備、教師、この中の誰かしらが教室を焼いた犯人だ。

アルデバランのロッカーを開けるには鍵が必要で、敷地に入るには関係者である必要があった。

「シエラハ……？」

「あら、それってユリウス様のお嫁さんのことかしら？」

「な、なぜ、ここにいる……」

「来ちゃった……」

クラスメイトたちが皆教室から消えると、なんとシエラハがそこにやってきた。

彼女は白と水色の華やかな学生服でクルリと回って、危うく浮かび上がったスカートを恥ずかしそうに押さえ込む。

彼女は長イスの隣に移動して、密談のために距離を詰めた。

「どっつ？」

「やはり似合う……。俺がロリコンだったら危なかったな……」

「そ、そっちなじゃないわよ……っ、ふふ、嬉しいけれど……」

ざっと焦げ臭い教室を見回した。

この匂いが怒りを増幅するのだろっと思ひ、徹底的に掃除をさせたのだがまだ匂いが残っている。

「やはり疑わしいのは、直接バランを責めるやつよりも裏で陰口を広めるタイプだな……」

「でも、みんなあの夜はアリバイがあるのよね……?」

「皆ルームメイトがいるからな……。お、おい……っ?」

「ふふ、どうしたの、ユーリ?」

シエラハが距離をさらに詰めてきた。

驚いて尻半分だけ逃げると、それも詰められた……。

「目立つ行動はよせ……。そもそも、なぜここに来た……」

「それがね、エヴァンスさんが家事を代わってくれたのよ。ふふっ、見抜かれていたのね」

「な、なぜ、おもむろに俺の手を握る……?」

「あたしね、その姿のユリウスになら積極的にになれるの……。いつもよりちっちゃん見えるからかしら……?」

制服姿のシエラハにピッタリと寄り添われて、手を握られた。流し目で様子を見ると、楽しそうに教室を見回している。

「あたし、学生さんに憧れてたの。ずっと家庭教師さんだったから

……」  
「それはそれで凄いな……」

「でも姿だけ若返っても、心までは無理ね……」

「俺の目にはそうは見ない。この上なく楽しんでいるように見える……」

「楽しいわ。でも。サンデイたちみたいにはなれないわ」

「シエラハは腰を上げた。」

俺の手を引いてくるので、俺もイスから立ち上がってカバンを握った。

「実は……ユリウスを迎えに来たの。一緒に帰りましょ？」

「そういうことか……」

「ところで balan くんは？」

「アベルに任せた」

「そう、彼なら安心ね」

「最初はユリウスに似てると思ったけれど、ユリウスよりも真面目で誠実なもの」

「アイツは人を思いやれるいいやつだ。俺は嫌われているがな……」

「そうかしら？ だけど尊敬もされているはずよ？」

「アルヴィンス師匠と俺の関係をさらに悪くしたような感じが」

「ふふっ、仲良しってことね」

シエラハと手を繋いだまま戸締まりをした。

廊下を進み、職員室に鍵を預けると、また手を繋いで学校を出た。

「あら、ジュードとレアじゃない！ えっ、2人ってそういう関係だったのっ!？」

「あ……っ」

サンデイとウルドと鉢合わせになった。

手を繋いで歩くクラスメイトの姿に、どちらも目を丸くして驚いていた。

シエラハはレア。俺はジュードという偽名で行動している。

レアは俺の手を強く握り、離さなかった。

「ええ。でも他の人には秘密にしてね」

「お、おい……っ」

見られてもシエラハは手を離さない。

それでも俺が強引に逃げようとすると、今度は二の腕にしがみつかれた。

彼女は胸が大きい。それはもう、とても……。

「わああ……いいなあ……。うちもパパみたいに素敵なおじさまとラブラブになりたい……」

「パ、パパ、だと……?」

「うんっ、アルヴィンスおじさまも素敵だけど、うちはパパが一番好きなの!-!」

「サンディちゃん……もう、行く……？　ね……？」

「えー、なんでーっ!？」

「えと、それは……。デ、デートの邪魔かも、しれないよ……」

「あ、そっか。それじゃまたね、2人とも!」

ウルドは俺たちの正体に気づいたようだ。

気を使うように俺たちを見てから、サンディの手をベンチの方へと引っ張っていつてくれた。

「よかったわね、パパ」

「俺は……アルヴィンスよりも、サンディに好かれていたのか……」

「何を当たり前のことを言うのよ？　そうでなきゃ一緒に旅行しないなんて言わないわ」

「そ、そうだったのか……っ」

自制できない喜びに言葉がはねた。

シエラハは俺の二の腕さらにピッタリとくっついて、大きな塊を押し付けた。

普段はあれだけ控えめなのに、なんでこの姿になると彼女はこうなのだろう……。

「手を繋ごう、歩きにくい……」

「ねえ、もう少しこのままじゃ、ダメ……？」

「これではただのバカップルだ……」

制服姿のシエラは、雰囲気が大きく変わって可憐だ。

つついふとももに目が行き、それに気付かれると笑われた……。

「犯人、見つかるかしら……?」

「絞り込めてはいるが、相手が動かない限り難しいかもしれんな……」

「だったら、そう仕向けてみたらどうかしら……?」

制服姿のシエラが腕から離れてくれた。

「凄くもつたいたいことをしたような気になったが、言われて俺も考えた。」

「お祭りとかどうかしら? 外国の大きな学校だと『学園祭』というのをするそうよ」

「今の規模と段階だとどうだろうな……あまり盛り上がらなさそうだが」

「なら、遠足! みんなでピクニックに行つて、仲良しになるのはどうかしら!」

今のギスギスした空気を改善すれば、新たな破壊工作が行われる。なければないでいい。俺たちも手を引ける。

「少し早い気もするが、迷宮での実戦訓練というのはどうだ? 戦友は特別なものだ」

「迷宮……? 危険じゃないかしら……?」

「その分だけ相手も大きく動く。何か起きたら俺たちでカバーすればいい」



シエラハはしばらく考えて、納得したのか微笑んだ。

「そうね……。迷宮がきっかけで、人間関係が変わることは確かにあるわ……。あたしたちだってそうだったもの……」

唇を押さえてシエラハは、あの時のことを思い返したようだった。あの日、迷宮の底で彼女は石化毒に冒された。

俺は彼女を生かすために禁忌を冒し、少し未来の世界に飛んだ。薬を死にかけの彼女に口移しで与え、衝動任せの行動を取った。

「レア、最近になって時々思うのだが……」

「なあに、ユリウス……？」

「今はジュードだ、レア。今になって思うのだが　　ここは、本当に俺たちが属していた世界なのだろうか……？」

転移魔法はあの時、失敗していたのではないかと疑った。

「本当の俺たちの世界では、俺たちは行方不明になっているのではと、考えたことはないか……？」

「……もう、怖い話は止めて。メープルが帰らぬあたしたちを待ち続ける世界なんて、そんなの想像したくないわ……」

俺たちは互いを繋ぎ止めるように手と手を重ね、散歩には長い帰り道を歩いて行った。

あの頃のシャンバラは砂漠だった。

果てしない砂の大地がどこまでも広がっていた。

あの頃の世界は渴いたもつどこにもない。

美しい木々と、みずみずしい香りがありとあらゆる土地に立ちこめていた。

もうあの頃には帰れないのだと思い返し、美しいエルフの美姫の手を引いて帰路についた。

あの砂漠の国が俺たちは恋しい。

・森の園ミスガルス 潜入編 - パパ - (後書き)

先日、書籍版2巻の開発が決まりました！

編集プロダクションさんの変更などのゴタゴタで、2巻の計画が遅れていたそうです。

よりよい第二部になるよう、これからがんばって改稿して参ります。

心苦しいですが、以降のウェブ版は不定期更新とさせていただきます。

プロである以上、チャンスを広げるために新作も作らなくてはいけないので、現在はスケジュール管理が難しくなっています。

また、こんな流れで申し訳ありませんが、本日新作を公開しました！

ストーリー上で滅亡が決まっている勇者の故郷の、パン屋さんの物語です。

どうか応援して下さい。

追記。またご投稿していました。

ぬか喜びさせてしまってすみません。

---

この作品の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n8992gt/>

---

【コミカライズ発売！】ポーション工場に左遷された俺、エルフに拉致され砂漠の国の錬金術師となる～今さら戻れと言われても、美人姉妹（エルフ）が離してくれません～

2024年5月16日02時41分発行